



霜柱立つ日まで



青潟大学附属シリーズ
中学編
第四シーズン 3

舞夜じょんぬ

「姉ちゃん、生理の時ってそんなにいらつくもんか？」

「はあ？ あのねえ貴史、何あんたスケベなこと考えてるの？ そういうことをさ、いくら姉ちゃんでも聞くのはどうかと思うよ」

三歳上の姉は、ぶん殴るでもなくあっさりとなずねてきた。どうやら感性としては古川こずえに近いあけっぴろげ感覚の持ち主らしい。まあ、思春期の弟を前に、平気でパンツと生理用品を丸見えにして持ち歩いているくらいだから平気なんだろうが。

「ちゃうちゃう。美里が修学旅行中ぎゃあぎゃあ騒いでいたから、女子ってそんなもんかって思ったからだけだっけ」

「へえ、美里ちゃんが？ エッチ話、やっぱりしたんだ。ねえねえ、あんたたちどこまで進んだの？ 母さんには話さないから、行ってみな」

興味津々に尋ねてきたのでついでに答えた。

「そんな話じゃねえよ。あいつさあ、初めての生理になっちまってから人格変わっちまってすげえ大変だったんだぞ。姉ちゃんと一緒にさあ。八つ当たりするわわあわあ泣くわでさあ」

「貴史、それは一言余計だよ。技一本かけるから覚悟しな」

技ではなく拳骨だった。ぐりぐり脳天をやられる。もちろん即、叩き落とす。

「姉ちゃんやめろよ。それよかさあ、美里のあれでとぼっち受け捲くった俺の立場も想像してくれよな。結局旅行中、俺がぜーんぶ美里の後始末をすることになっちまってな。五年の時にあいつがしょんべんもらった時と同じってこと。いつまでたっても同じパターンで頭くるよなあ。もう少し学習しろよ。あ、そうだ姉ちゃん、肝心なこと聞くの忘れてたけどさあ、拳骨勘弁な」

「事情によりけり。言ってみな」

それぞれ行動するには事情がある。貴史が一番姉に尋ねたかった点はここだった。

「姉ちゃんが生理の時って、どういう話をすれば元気出るもんか？ 俺、今回のことでいやってほど美里のお守りにほとんど参ったからなあ。食べ物がいいもんか？ それともここいらでびしっと怒鳴ってやる方がいいもんか？ さっすがに俺、女子じゃねえからそこまでわからねえし」

「そっかあ、美里ちゃんデリケートだもんね。美里ちゃんに聞いてみたらってわけいかないよね。だったらさうちの母さんあたりにさ、聞いてみた方が早いんじゃないの。あの人それなりに女の道、歩んできてるからさ。そうだ、私が代わりにあんたの質問、聞いてどうか？」

「やめろよ。女捨ててる母ちゃんの話聞いても役立たねえだろ？」

もちろん、軽口。たいしたことじゃない。ただ、その話が即、一時間後、電話で美里の姉に伝わり自然と家族に広まり、さらに一時間後美里が泣きながら電話をかけてきたのは予定外の出来事だった。

「貴史！ あんたいったい何言ったのよ！ 八つ当たり八つ当たりって！ 私だってそんな、したくてしたんじゃないってわかってるよね！ なんでそんなこと言うのよ！ みんなにばらして

そんなに面白い？」

「いや、ばらしたつもりじゃねえよ」

とは言え、姉に話したということは羽飛家および清坂家に流布すること。それを読まなかったのはまずかったと密かに思う。こちらからするともっと別の意図があったのだが、そちらは全く考えていないようだ。美里はまだまだヒステリックにわめきつづける。

「あんたにはそんなに変なこと言わなかったじゃない！ ひどい！ 変態！ スケベ！ ロリコン！ 鈴蘭優にだったらそんなこと言わないよね。私だからなんでも言っても傷つかないって思ってるでしょ！ ばかにしないでよ！」

ありとあらゆる罵倒文句をぶつけられる。まあ悪かったことは認めるが、そこまで言われるのは正直腹に据えかねる。悪いが売られたけんかは買うのが当世。

「美里、お前、言っていることと悪いことがあるだろうが！ なんにも一人でできねえくせに、ゼーンぶ俺に後始末押し付けて逃げ回ってるくせに、何威張りやがる。まったく、同じこと立村相手に言えるのか？ 言えねえだろ？」

「なによ、なんで立村くんのことが出てくるのよ！」

修学旅行帰りのバス内で、クラス全員の前で恋人宣言してくれた彼氏の立村には、死んで「変態！」などとは言わないだろう。

「俺だから何でも言って許されるなんて思ってやしねえだろうな！ 美里、俺が言ったことのどこが間違ってるんだよ。第一そうだろ？ お前五年の時しょんべんもらった時、後始末全部俺がしただろうが！ 一年の時別の男子と付き合ってた時だって結局お前一人じゃ何にもできなかったから俺が助太刀しただろうが！ この前の修学旅行だってそうだろうが、お前が生理だ生理だってぎゃあぎゃあ騒ぐから、しかたなく俺と古川が面倒みたんだだろうが！ 俺のどこ嘘言ってる？」

「それとこれとは違う！」

「違わねえって言ってるだろ！ 五年のこと思い出してみろ。もしあのまんま教室じゃあじゃあたれっぱなしで座ってたらお前どうなったか考えてみたことねえのか。立村にだって付き合いかける時あいつの性格を分析してやったから付き合えたんだだろうが！ 感謝こそされてもだなあ、スケベなんていわれる筋合いねえよまったく、勘違いもいいかげんにしろ！」

言いたいことは腹に残さず一気にぶつける。それが俺たちのルールだった。

突如、美里が黙った。

「悪かったわね」

理解はしたようだ。当然だ。そう思いきや、

「ふざけないでよ！ 今更五年生のことひっぱり出すようだったら悪いけど私だって言いたいことあるよ」

「ほお、言いたいことあるなら言ってみろ」

悪いがあその時の力関係で完全に貴史は美里を上回った自信がある。以前寝小便が直らなかった頃の自分なら、さすがに言い返せないが、だ。

「あん時、貴史が私に、みんなの前で本当のこと全部言えって言ったから言ったんだよ！ そうしたら結局、私、ずっと女子から馬鹿にされっぱなしだったじゃない！」

「はあ、俺のせいにするのかよ」

「当たり前じゃない！あんたのせいよ！ あんたのせいでずっと私、あの担任とクラスの女子たちに軽蔑されて、修学旅行の時は仲間外れにされて、他の男子たちにはその、あの、しちゃったことみんなにばらされたんだよ！ ばれてなければそんなこと言われなくたってすんだんだよ！

全部貴史のせいじゃない！ 貴史が悪いんだよ！ もう、あんたなんか大嫌い！ 死んじゃえ！ ばか！」

最後は泣き声だった。勢いよく受話器を切られた。耳の鼓膜破れたら即賠償金請求だ。

——ふざけんな。ついに今度は俺の責任かよ。黙って言わせておけば何様のつもりだあの女！ 美里とのぶつかり合いは決して珍しいことではない。言いたいこと言ってすっきりするのがいつものパターンだ。それに今回に限って言えば、貴史は全面的に悪くないと思う。

——第一、三年以上も前のことを蒸し返すなよ。だから俺が青大附属に連れて行ってやっただろうが！

美里の言う通り、確かに一年前、クラスの女子たちから「あらら、結局がまんでできなくてつまらぬ意地を張っておもらししちゃたのね」くらい言われたのは事実だ。貴史もその事情うはいろいろと目にし耳にしてきた。ただし言わせてもらえればその際、無視しなかった一部の女子プラス男子たちを集めてしょっちゅう気晴らしの機会をこさえたのも貴史だ。責任はそれなりに取っている。

——それにだ。あのままだんまりで通したら帰って神経参るだろう？

美里はもともと嘘をつけない性格だということを、貴史はよく存じている。

仮にあの事件が「なかったこと」として終わっていたとしたら、美里の性格上ずとうつつ悩んでいたに違いない。自分の立場がいいかわるいかそれは関係なく、本当のことしか言いたくないとがんばる美里のこと、女子同士の複雑な感情のもつれがあったとはいえ、教室でもらしたことをそのまま隠していくことは、たぶんできないだろう。だから貴史もあえて、いろいろな場所でその時のことをぺらっとしゃべったりしていたのだ。そう、立村にも。

——陰でばれてあとでパニックになるよかいだろう？

そういう事実があったとしても、所詮男子同士は笑い話で終わるし、そんなくだらないことが起こったとしてももう過ぎてしまったこと、価値観が変わるなんてことはない。事実、その話は中学一年の段階で軽くしてあるが立村は何も変わらなかったじゃないか。で今回は、恋人宣言までしてくれたわけだ。

——さらに言うとか、一年の時だってあいつの昔の男のことだ。

あまり大袈裟なものではないにしろ、貴史の目の届かぬところで他小学の男子と付き合っていたというのは事実だ。そこでトラブルがいろいろあったらしいが、立村にばれないようにうまく取り計らったのも貴史だった。立村に無理に話す必要なんてないのでそのことは話さなかった。しかし、もしあのままごたごたしていたら美里は立村に告白なんてできなかっただろうし、今ら

ぶらぶ交際なんて一切できなかつたに決まっている。貴史は偉いのだ。

——その他、俺がいろいろ手を変え品を替えてきて、美里の面倒を見てきたことをずいぶん忘れてやがるしなあ。ったくそれをだ。いきなりすべて俺が悪いと押し付けるのは絶対違うぞ。少しここんとこでお灸据えておかねえと、あいつまたありえねえこと平気で口走りやがるからなあ。

美里と立村をくっつけたのも本当のところは貴史が暗躍したようなものだし、今回の修学旅行においてもそうだ。古川こずえと一緒にいろいろと気を遣ったことも確かだ。本当だったら一日中ゲーセンで遊んでいてもよかったんだが、わざわざ美里のために外へ連れ出して話を聴いてやったじゃないか。全く美里はそういった貴史の思いやりを全く無視するのだから困ったものだ。反省させるしかない。

部屋の向こうで姉と両親がくすくす笑いながら様子を伺っていた。悪いがあいつらに説明する気はさらさらないので、さっさと部屋に戻ることにした。まあ、貴史に一点、難があったとすれば姉の前でわざわざ美里の秘密をしゃべってしまったことだろう。ばれるのは見え見えとはいえ、ただ貴史なりに理由はあったのだ。

——女子でなきやわかんねえし、古川に聞いたらむりやりエロネタにされちゃうし、となったら姉ちゃんが一番話として分かると思ったからだけだなあ。

美里と貴史、姉同士は仲がよいので、そこから伝わったのかもしれない。さらに母同士は少女時代からの親友と来ている。となったら、あつという間に情報が伝わりというのはあったのかもしれない。美里の性格上、三人姉妹の真中ということもあってかなりのはねっかえりである以上しょうがない、叩かれるだろう。かなり怒られたのかもしれない。例の修学旅行中にパニックを起こし、先生から報告があったのかもしれない。

——しかし、俺に八つ当たりするのは絶対に間違ってると思うぞ。

——するんだったら、彼氏たる立村にしろよ。あいつ、困りきった顔して話聞くぞ。

一夜明けた。次の日が日曜だったこともあって朝寝をたっぷりしようと思ったのだが、なぜか目が覚めたのは早朝五時過ぎだった。天気がよすぎるのと、太陽が気持ちよく昇りすぎるせいだ。もちろん両親姉貴みなしっかり寝ているので、家の中は物音ひとつしやしない。

修学旅行で妙に規則正しい生活習慣を叩き込まれたのはいいが、その反動で学校に通っている間はどうしても眠気が取れず居眠りばかりしていた。しょっちゅう先生にたたき起こされたりもしていたのだが、さてのんびりできる休み時間に突入したとたん目が冴えてしまう。

貴史は思いっきり伸びをし、まず腹筋背筋を布団はいだまま行った。

調子はいい。なんかこのまま起きてもよさそうだ。

そうと気付けばあとはやるのみ。ランニング一枚すぐに脱ぎ捨て、替わりに緑のTシャツへ着替えた。ジーンズ一本、昨日脱ぎっぱなしにしたまま床に落っこちている。足の形が残っているのですぐに身支度は整う。腹が空いたのでまずは水を水道から一杯飲み、冷蔵庫をあさって昨日の残りもの、かまぼこを半分せしめる。それで足りるわけがないので、パンを一枚頂戴する。

まあ、全く足りないがこんなものだろう。

正式な朝食が用意されるにはまだまだ時間がかかる。外に出て爽やかな六月の空気を吸いに行こう。どこが爽やかかどうかは見当つかないが。

もうすっかり明るくなった空から白い光が揺らいでいるのを見つけた。あちらこちらで反射している屋根の光だった。まだ夏になりきれないその空からは、水で思いっきり薄めた青がめいっぱい広がっている。「青空」という言葉を思い出し打ち消した。

——金沢が言ってたけど、あの色っていわゆる「青空」じゃあねえよな。

未来の天才画家である同級生の金沢が、熱く語っていた。

——「青い空」なんていっぱい種類があるのに、一言で片づけるのって、変だよな。

難しいことを言うな、とは思うのだが実際空を見上げるとその通りと思う。

朝と昼、夕方近くの「青空」は全く違うものなのだ。

しばらくその辺をうろうろしてみた。さすがに朝っぱらから誰かをたたき起こして野球かサッカーを提案する気はない。ただ、例外としてひとり、そうしても構わない相手がいる。

——ちょっと、起こしてみるか。

あまりとがってなくて、軽そうな石を探した。適度に投げやすく、仮に窓ガラスにぶつかっても割れることのなさそうな重さのものだ。親指程度の白い石を拾い、そのまま目的地へと向かった。

清坂美里の家だ。

美里の家は、自宅から徒歩三分程度の距離にあった。隣同士ではないし、家族との日常生活がどのように営まれているか読み取れないぎりぎりの場所だった。

——しかし、うちの母ちゃんたちってなんで、結婚してからもこんな近くに家建てたりするんだ？

幼い頃からの疑問である。

美里の母と親友同士だった貴史の母は、永遠の友情を誓ったかなんかして結局同じ町に住まうことになったという。さぞお互いの夫となった人たちは驚いただろう。まあその人がいるから今のところ貴史も美里も存在しているわけだ。

しかも二番目とはいえ、自分の娘・息子をそれぞれ年をあわせて計画出産するというすごいことまでやらかしている。これって許されることなんだろうか。第一、その共同業者である互いの夫、つまり父はそれを受け入れたのだろうか。

——受け入れたから、こうなったってわけだよなあ。

このあたりのなれ初め事情について、まだ貴史は詳しいことを教えてもらっていなかった。照れくさい、というのもあるけれどもなんとなくまだ尋ねてはならない裏事情がありそうで少々びびっていたというのもある。姉や美里など、女子たちはなんとなく情報を仕入れているようだが、その辺まだ話としても聞いていない。

どちらにせよ、今の貴史にとってそんな過去の話などどうだっていいことだ。

まずは目の前の出来事をしゃかしゃか処理するのが先決。

——さてと、美里の奴、どんな面して寝ているやらな。

決して早朝、清坂美里宅に向かい、二階の窓辺に小石を投げて合図を送るというのは珍しいことではない。そうし始めた小学校時代と若干異なるのは、貴史なりに的を外さず窓ガラスを割らず、美里以外の誰も起こさずにすむというコントロールを身に付けたことだった。

すんとした二階建ての向かって右端、その窓辺。

美里が窓側に頭を向けて横になっているはずだ。

外れなし。強くもなく、弱くもない。力加減は完璧だった。貴史の投げた小石はまっすぐ窓辺の斜め右端へと向かい、かちんと音を立ててあっさり落ちていった。

そのまま窓辺を見上げていた。カーテンがほんの少し揺れてすぐに閉まった。

雀の騒ぐ声がほんの少しふくらんだ頃、玄関の戸が開く気配に耳をそばだてる。

美里がピンクのショートパンツにたっぷりめのTシャツ姿で顔を出した。

おしゃれのことしか考えていない美里にしては、ずいぶんとラフな格好だった。

すぐに貴史を見つけ、強張った顔のまま近づいてきた。

かなりご機嫌斜めというのは、昨夜の口げんかからしても当然といえば当然だ。

その一方で、すぐに噛み付いたり蹴りを入れたりしないところが、妙に気になったりする。美里の髪はさほど乱れていない。寝癖なんかもない。顔を覗き込めば、やっぱり兎のお目目状態。顔がてかてかしているように見える。

「寝てねえだろ」

「関係ないでしょ」

おはようの一言の前に、まずは小石の投げあい。単なる寝不足とは違う雰囲気だった。

「何しに来たのよ」

「昨日の電話の続きだろが。お前が勝手に言いたい放題言って切っちゃうからだろ」

「私、間違っていないもん」

「そんなの関係ねえだろ！ 人をスケベだとか変態だとか散々馬鹿にしやがって」

「そう言われるだけのことをあんたがしたんじゃないの！」

美里は白いTシャツの裾を手で伸ばしながら貴史を睨みつけた。睨んだつもりだろうが、顔が泣きそうですぐ崩れてしまいそうに見える。無理しているのが見え見えだ。

「なによ、なんでもかんでもみんなしゃべっちゃって！ 貴史が言ったこと、みんなお母さんやお姉ちゃんに聞かれちゃうってこと、どうして気付かないのよ！」

「俺はなんも悪いこと言ってねえだろ？ それ言うならお前の方こそどうなんだよ。何でもかんでも俺のせいにしやがって。感謝しろって言ってどこが悪いんだ？」

本当は違う話をするつもりだったのだが、やっぱり美里の顔を見ると一言びしっとしかりつけたくなる。こういうのもなんだが、貴史は今まで美里に対して、けんかの後自分から頭を下げたことが全くない。折れるのは意外にも美里の方だった。大抵「お母さんとお姉ちゃんが、私が悪って言い張るから」とか「貴史に謝らない限り口利いてくれないって言われるから」とか適

当な理由をつけて「ごめん」と一言呟くだけのことだが。もう少し謝り方を考えろ、と言いたいが、無理にそれ以上謝らせる必要もない。無視しあっている時間がもったいないからそれで終わらせる。

不服そうな美里の顔に、貴史は言い放った。

「言いたいことあるだろ、さっさと言っちゃえ」

「そうよ、どうせ私が悪いのよ、みいんな！」

「わかりゃあいいんだ。それよか美里」

一呼吸おいて、まず空を見上げた。だんだん光がゆったり広がり始めている。薄い空の青がだんだん生々しく満ちてきているのは、日が昇ったせいだろうか。天才少年画家・金沢がこの空を見上げた時どういう色として描くのか、なんとなく興味深かった。

その青を焼き付けた目で、美里に向かう。

「昨日言ってただろ。美里、なんで五年の時のこと、いまだに引きずってるんだ？」

とっくに終わったことだと思っていた。クラス女子とのいざこざがきっかけで、五年の後半から小学卒業までの間、美里の居心地があまりよくなかったことは貴史も承知している。美里が必死に青大附中へ入学するため受験勉強に勤しんだのも、小学校時代の腐った人間関係を断ち切りたかったためだとも聞いている。それにお付き合いして貴史も思い切って青大附中を受験した。もっとも実は互いの両親たちが計って、貴史をその気にさせるためそれなりの策を弄していたらしい。

どちらにしても、青大附中に合格してからはそれなりにごたごたもあつたとはいえ、それなりに楽しく過ごしたはずなのだから、いまさら小学校後半の恨みつらみを語る必要はないように思える。

黙った美里にさらに畳み掛けた。頭にきた後の貴史はしつこい。

「お前変なこと言っただろ。俺が例のことしゃべっちゃまえて言ったからろくでもないことになつたってな」

「言ったよ」

「けど俺がちゃんと、木村や藤野たちのいるグループにお前入れてただろ？」

「わかってる。けどそれとこれとは違うの」

「違わねえだろ」

どうもこのあたりがしっくりこない理由かもしれない。

貴史としては十分過ぎるくらい、例の事件が終わってから美里に対して気を配ってきたつもりだ。それこそ陰でいろいろ他の連中から言われたものだ。いくら幼なじみであっても、ここまでしつこくべたべたするとは相当惚れてるんでないかとかなんとかかんとか。決して面白いことではないし、不本意ではあるけれどもそれでも貴史は美里を仲間に加えつづけたはずだ。美里のことを嫌った女子たちが多かったのは事実だが、それ以上の場所を貴史は用意したはずなのだ。なのに、

「こういっちゃなんだけどな、お前、立村のこと笑えねえだろが」

少々きつい言葉を投げつけてやりたい。

「一緒にしないでよ」

一週間前に恋人宣言してくれた奴の名前を出すと、美里も照れくさいのか俯いて言い返してきた。

「やっちゃったことは消えねえよ、だからしょうがねえだろ。とっくに立村もお前に付き合ってた奴がいること知ってるし、お前がしょんべんたれたことだって聞いているはずだろ。修学旅行のあれだってな、まじであいつ、血便が出たんじゃないかって同情してたからなあ。美里がしでかしたことを立村は知ってるし、それでどうのこうのってことがねえだろ」

あまり表立って話す必要もないから言わないでおいたが、貴史は入学当初から二年にあがるまでの間に、立村へ美里の過去らしきものをかいつまんで話しておいた。しょっちゅう三人で行動することが多いのもあったが、どこかからか美里の失敗談が噂で流れて来て、真実とは異なる情報を聞いて誤解される可能性がないわけではない。それなら早い段階で事実関係だけ伝えておき、噂は聞き流してもらったほうが楽だろう。秘密をばらした、と言われればその通りだ。だがそれは、その後のトラブルを防ぐため。感謝されてもいいくらいだ。

「けど、しゃべってなんて言っていないよ。知らなくたっていいことじゃない！」

美里が言い返してきた。目が潤んで来ている。単なる寝不足だろう。同情はしない。

「じゃあ、昨日のこともそういうことなわけ？ 私のために、みんなにあれのこと、しゃべったってこと？ うちのお姉ちゃんもお母さんも、何にも聞いてなかったんだよ。なのに、貴史がしゃべったからみんなばれちゃったんだよ。そうやって、みんなから笑われて、馬鹿にされて、しまいには貴史に謝ってこなくちゃお小遣いくれない、とか言われて、私がみんな悪いことにされちゃってるんだよ！」

初耳だ。つまり修学旅行の出来事については一切、菱本先生が話していないということか。

「そうよ！ あたりまえじゃない！ あんなこと、言われたくないわよ！ なのに貴史がべらべらしゃべっちゃったせいで、昨日は食べたくないのにお赤飯炊かれちゃったんだよ！ いやらしい目で見られて、笑われて。その後菱本先生にお母さんが電話してみんな聞いて、殿池先生に電話して、また謝らされて。結局みーんな、私が悪いってことになっちゃってるのよ。あんたのせいじゃないって、どうして言える？ あんたが私の、あの、あのこと、しゃべっちゃったから、うち、大騒ぎになっちゃったんだよ！」

ここまで言い放ったとたん、美里の頬が突然光った。滑り落ちた涙の粒が、朝の光に反射しただけだった。次から次へと涙が頬にレールを描いていく。

「五年の時だってそうなのに！ あのこと、話したらみんなわかってくれるからって、味方がいるからって、そう貴史が言ったから私、女子に本当は教室で、だったのって話したのに、私のこと、馬鹿にされちゃったんだもん！ 仲間外れにされて、何かあると男子にも『こいついばってるけど、五年の時に教室でもらしたんだぞ』とか言われるし。うちの人たちにだって、私が、そのしちゃったってことばれたら、思いっきり笑われたんだよ！ うちで誰もそんな失敗したことないのに、よりによって私がするなんてばっかみたいって！ 株上がるのは貴史ばかり、そうだよ、貴史、何にも知らなかったくせに、いばらないでよ！ 立村くと付き合った時だっ

てそうだよ、みんなに馬鹿にされて、しょうがないってわかってたけど、あんな奴と付き合う私の気が知れないって、ひどいこと一杯言われて、お母さんたちには『あの品山の男の子なんかと』とか嫌味言われて、けど貴史の親友だからそれでいいんだって言われて、けど私」

意味不明な言葉が続く中、言葉を喉で詰まらせ、しゃくりあげながらとうとう美里は顔をゆがめたまま激しく泣きじゃくりはじめた。その涙を手の甲でこすりながら、貴史からは目を逸らさずに、ただしつこく恨み言を連ねるだけだった。

「そんなに立村の悪口言われてるなら、なんで俺にもっと早く言わねえんだよ！ あいつは俺の友だちだって、何度も説明しに行ってる。泣く前に美里するべきことあるだろうが」

一区切りついた頃、まず貴史は言い返した。

「五年の時だってそうだろ？ お前、平気な顔してただろ？ 他の奴らにお前のやらかしたことからかわれても平気な顔してただろ？ そんなことしてたら俺が気付くわけねえだろ。立村に言うのと同じ事言うぞ。口で言ってもらわねえとそんなことわかるわけねえだろ？」

「言えるわけじゃない！」

顔面を糊でかてかにしたみたいに光らせて、美里は激しく首を振った。

「今みたいにあんた言うに決まってるじゃない！ それは私の受け取り方が悪いんだって。それ以上求めるのって迷惑なんだって、そう言うに決まってるじゃない！ みんな、私が悪いことになっちゃんだもん！」

「美里、いったいおばさんたちに何言われたんだ？」

修学旅行一週間後、初めての日曜。

今の話を聞く限り、美里は相当親姉妹から怒られたのだろう。

旅行中に初潮を迎えてしまったこと、それを隠していたこと。

周りの人たちに八つ当たりしまくって迷惑をかけたこと。

普段の行いがよろしくないことも相まって、八方攻撃を受けたに違いない。

ただでさえ神経がぴりぴりしている美里にとっては堪えたのだろう。それこそ、泣き明かしてしまうくらい悔しかったのだろう。もっともそれで八つ当たりされるのはたまったものではないが。

まず背を向け、美里が追っかけてくるのを待った。

「話だけは聞いてやる。来い」

「何よその言い草」

「全部俺のせいにするからには、それなりの理由があるだろ。言えよ、言いたいことあるなら全部がまんして聞いてやる。そのかわり、納得いかねかったら叩きのめすからな」

まったく、美里には手がかかる。本当だったらこういうアフターフォローは恋人の立村がすべきところなのに、結局いつも貴史が後始末をするはめになる。

物心ついた頃から、このパターンが代わったことはついぞなかった。

早朝、美里をたたき起こして外に呼び寄せることはよくあることだった。

理由は簡単、周りの雑音が入らないからだ。

貴史はどうでもいいと思っているのだが、美里が後から「清坂家の人々」にやいのやいの言われてふてくされてしまうのを避けたかったからだった。

相変わらずしゃくりあげている美里の面なんて見たくもないので、まずは人気のない場所がかつ、妙な誤解を招かない場所を探した。いつもだったら近所の公園なり学校の教室なりにもぐりこめばいいのだが、いろいろとこれも問題が多い。公園だとまず、早朝ゲートボール練習が行われていて誰かさんのおじいちゃんおばあちゃんと顔を合わせないとも限らない。学校のグラウンドの隅っこでも本当ならいいと思うのだが、元同級生たちに今の泣きっ面を見せて美里が拗ねるのもまた面倒だ。

となると、思いつく場所は限られてくる。

「ここ、まだこのまんま、原っぱなんだね」

声を詰まらせたまま、美里は立ち止まり周りを見渡していた。通り過ぎることはあっても足を留めることはあまりなかった場所だった。青々とした緑が茂っていて、かすかに野菜っぽいにおいのする原っぱは、腰丈まで雑草が伸び放題のまま放置されていた。

「誰かが買うって言ってたけどなあ」

「買ってどうするの」

「家、建てるんだと」

町内会のおじさんたちが話していた情報をかいつまんで説明した。

「けど、ここの土地結構高いから、誰も買わないんだとさ」

「そうなんだ」

たいして興味なさそうな声で美里が答えた。貴史も基本としてはどうだっていいことだった。一番大事なことは、ここが意外と人気のない隠れ場所であって、いったん安座して身をかがめれば完全に身体が隠れて、野原の密室状態となる場所であること。つまり内緒話もここならたっぷりできるというありがたい場所であること。この二点に尽きる。

貴史は足を踏み入れ、そのまま座り込んだ。美里も続こうとしたが、しゃがみこむ前に草を尻の幅程度倒し、ポケットからハンカチを取り出して敷いた。わざわざ敷物を用意するなんて、かつての美里では考えられないことだった。

空がまだ日の出で色づききっていない。見あげて、まずはあぐらをかいた。頭まで隠すことは難しそうだが、美里くらいのちびだったら問題ないだろう。小学生の頃とほとんど変わらない。

——まあ、また姉ちゃんたちと一戦交えたんだろな。

大体想像はつく。しかし予測でもってものを言うと美里がぎゃあぎゃあわめくので、ここんところは少し様子を見たほうがいだろう。貴史が黙っていると、美里は暫く俯いたままTシャツ

の端を摘んでいたが、

「菱本先生も、ひどいよね」

ぼそっと一言呟いた。それがきっかけだった。

「だってさ、酷いんだもん。菱本先生、言わなくたっていいことばかり言うんだもん。そりゃあ私だって、お母さんに話さなかったのはまずかったと思ってるよ。いろいろあったとか、殿池先生にお礼を言わなくちゃとか、いろいろあるのはわかってる。けど、修学旅行終わってからすぐ、南雲くんのおばあちゃんが亡くなってお葬式に参列したりしたでしょ。忙しくて、なかなかそういう話できなかつただけ。それに、今すぐ報告しなくたっていいじゃない。私の問題なんでもん、お母さんたちとは関係ないよ」

予想通り、相当美里は「清坂家の人々」と遣り合ったらしい。

「お姉ちゃんだって尻馬にのっかるみたいに物笑いにするし！ みんな馬鹿にするし！ なんでそんなに笑われなくちゃいけないのよ。いつもそう、私が何か失敗するとすぐ、ここぞとばかりに叩くんだもん。そういう私が馬鹿なんだっていつもいつも笑うのよ！ 他の人のことだとそんなに言わないくせにね。大嫌い！」

「お前がぎゃあぎゃあ普段から騒いでいるからじゃねえのか？ 今に始まったことじゃねえだろ」

素直に思った通りのことを貴史は言う。うそをついてもしょうがない。

予想通り、美里は噛み付いてきた。

「騒いでなんかないもん！ いつも、なんか変だなんてことをはっきり伝えているだけじゃない！ それをいかにも私が馬鹿だからこうやって足をすくわれたんだとか、いつもけんかばかりしてるからいざという時に仇されるんだとか、さんざん言うんだもん。私が悪いって決め付けられるのって、絶対変だよ。頭にくるよね！」

まあ、このあたりは美里が年がら年中「清坂家の人々」に対して抱えている不満なので、なんとも言えない。お互い様でもある。

「で、今回はなんだ？ 菱本さんまたわけわからねえこと、おばさんに言ったのかよ」

「言ったよ！ だってさ、だって」

ここで一度美里は言葉を詰ませた。また大声で泣くんじゃないか。危険信号がちらつく。

「私がしでかしたことはしょうがないって、がまんする。そうだよ、しょうがないってがまんできる。けど、なんで菱本先生、立村くんのことまで話すの？ なんで、そんなことまでお母さんに言うわけ？ 言わなくたっていいじゃない！ 先生だって知ってるはずだよ。うちのお母さんが立村くんのこと嫌ってるってこと！」

「おい、あいつのこと、嫌うってなんだよ」

「この前も話したでしょ！ 嫌ってるってか、なんか変っていつも言うんだよ。礼儀正しすぎるとか、子どもらしくないとか、それから、あの、品山の子だとか」

最後の「品山の子」の部分、美里は俯いたまま発音した。

「おい、なんだよ、また立村のことかよ」

これは意外だった。とっくの昔に美里と立村との交際は家族公認になっているものかと思っていた。シークレットだったのか。確認したくなった。

「去年もなあ、いろいろ立村のことつっこまれたな」

「そうよ。面倒だから私、立村くんのこと話してないよ。去年のクリスマスでもいろいろもめたから、結局付き合ってること言ってないんだよね」

隠し事のきれいな美里がそこまでするのだから、相当、立村アレルギーが酷いのだろう。

正直、貴史もこのあたりはわからないわけではない。貴史の母もやはり「品山の子」という目線でもって立村を認識しているところがあるからだ。もっとも、貴史の場合は奴のことを「親友」として断言しきっているので余計な口出しをされることはない。友だちくらい自分で選んでどこが悪いと言いたい。

「うちの母さん、貴史が話してたことをみなうちのお姉ちゃんから聞いて、すぐに菱本先生に電話かけたんだって。そしたらね、みんなべらべら余計なことまでしゃべっちゃったんだって。

その、あの、例のこととか、あと、立村くんの」

——はいはい、恋人宣言な。

修学旅行最終日のバス内で、立村は美里の手を引きさっさと乗り込み、はっきりと答えた。

菱本先生の質問に、

——単刀直入に聞こう、立村、とうとう恋人宣言か？

——そう考えてもらって結構です。

立村の、これまでの煮え切らない態度を知る貴史としては驚くよりもなによりもあっぱれの一言につきる思いがする。その後いろいろと「羽飛、お前、清坂を立村なんかになんか奪われてショックじゃねえの？」などと聞かれたけれども断言していい、そんな気持ちひとつかけらもない。立村を思いっきりバックアップしてやろうと改めて心に決めたくらいなのだ。美里はともかくとして、立村はいろいろ複雑怪奇な部分があるにせよ、いい奴だ。応援しないでどうするというのだ。

「めでたいことだったのに、それがなんか問題あるのかよ」

「あるに決まってるじゃない！」

声が裏返った。両手を握り締め、身体を震わせる美里が妙にがきっぽく見える。

「だって、うちの母さんたち、立村くんのこと嫌いなんだもん。私と付き合うなんてこと、面白いわけじゃないじゃない。よってたかって嫌味いうんだよ。いいところのお坊ちゃんと私とではレベルが違いすぎるとか、私にはつりあいが取れないとか、それから、その、品山の子だからどうのこうのって」

悪いが大笑いしたいところだ。いったい立村のどこが「いいところのお坊ちゃん」なんだろうか。貴史は知っている。もちろん立村が他の同級生と違って語学習得能力に長けているとか、やたらと文学作品に詳しいとか、少々振る舞いがレディーファースト行き過ぎてきざっぽく見えるとか、そういう部分を持っているのは知っている。たぶん、美里の母もそのように認識している

のだろう。損な奴だ。しかし、貴史からすれば立村も十分思春期のスケベ心満載のお年頃野郎だ。その証明だって人前では言えないにせよ、美里も気付いているはずじゃないのか。

「美里、あいつのどこがおぼっちゃんなんだ？ そうつつこみたくなるわな」

「まあ、ね」

短く、言葉を切る。

「おばさんたち完全に勘違いしてるよな」

「しててもいいの！ そんなの知らない振りしてくれればいいの！」

美里はさらにかぶりを振った。

「それより、なんで貴史！ あんた余計なこと言ったのよ！ あんたが変なこと言わなければ一番よかったのよ！ もう、あんたが悪いんだから！」

——あらら、とうとう振り出しに戻っちゃったぞ。

溜息をつく。これが野郎だったらぶん殴ってやってもいいのだが、事情が事情だけに貴史としても対応に迷う。もちろん美里の言い分は身勝手この上ないことだが、貴史の発言が回り回って美里の母へ届いてしまい、そこから菱本先生を巻き込み最後は立村を回収して着地、といったありさまには同情するより他にない。

「わかった、俺が悪うございました」

謝るのも胸糞悪いが仕方ない。美里を宥めるにはこれしかない。

美里がぼかんとして貴史の顔を見あげた。文句を言うのも忘れたようだった。

「めずらしいね、自分で悪いって認めるなんて」

「でねえと、お前が黙らねえだろ」

あっさり黙った。ざまあみろだ。

こうやって聞いてみればあっさり答えが出てくるわけだ。

——美里、立村のことでヒステリー起こしてるだけか。

いつものことと言えはいつものことだった。美里が立村と付き合いだしたのは去年のちょうど六月、一年前に遡る。入学式で初めて顔を合わせてから美里が立村に想いを寄せるまでさほど時間はかからなかったはずだし、貴史も早い段階で見抜きいろいろからかった覚えがある。

——美里、お前立村に惚れてるだろ。

——何よ！ いきなり訳わからないこと言わないでよ！

最初は懸命に隠そうとしてきた美里だけでも、貴史の千里眼から逃れられるわけがない。もともと立村の「お坊ちゃまタイプ」な性格は美里の好みだというのは、永年側で見てみた貴史からしたら一目瞭然だ。どう考えても美里の性格とは正反対、というのがタイプなようなのだ。

穏やかで、大人しく、そしてやさしい。

今思えば笑ってしまいたくなるくらい立村の実像からは離れている。

レディファーストはきっちりしつけられているから女子たちには気品ありげに見えるが実のところ、単に引っ込み思案の自信喪失野郎なだけだ。大人しいのは人間関係を崩壊させたくなくて気を遣っているだけ。それなりにエッチな本だってめくっているし、なによりも美里と一夜を共

にした時の言動にいたってはごくごく普通の中学三年男子をそのまま表している。可能ならば美里の母にその旨懇切丁寧に説明してやりたい。そんなことしたら今度は別の意味で用心されるかもしれないが。

もっとも立村が男子から観ても心根のやさしい、いい奴であることは、その倍語っておきたい部分だった。貴史が立村を親友として認識しているのにはその性格という部分も大きい。

——美里にだってそれはわかってるだろ。

好きだと言われたかどうかは別としても、いきなり旅行中に情緒不安定に陥った美里に対し、懸命に理解しようと努力し、最後にはきっちり天敵・菱本先生を相手に恋人宣言してしまう強さは相当なものだ。貴史も、仮にアイドル鈴蘭優を相手にするというのなら少しは考えるが、他の女子をとなるとかなり悩みそうな気がする。

自分を押し殺して第三者のことばかり考えている性格には、正直どんなもんかと思わなくもない。漫画もテレビも読まない見ないというのは、ちょっと問題あるんじゃないかと感じなくもない。しかし基本として立村はお坊ちゃんながら人を見下すところがない。素直に凄い奴は凄い、と褒めるし認める。当然、貴史や美里についても、てらうことなく褒めてくれる。かなりこういう性格の男子は珍しいと貴史も思う。

少しだけ考えたが、露骨に「清坂家の事情」について語らせてどつぼに嵌るよりも、別の話で気を逸らせてさっぱりさせる方がいいんじゃないかという判断に達した。

「美里、改めて聞きたいんだがなあ」

「なによいきなり。黙らせたいんでしょ」

「この前の修学旅行四日目、立村の反応どうだった？」

思った通り美里は口を尖らせた。真正面から睨みつけるように、

「なんもなかったよ。こずえにもそう言ったけど。あんたの方はどうなの？ こずえに迫られたりしなかったの？」

下ネタ女王・古川こずえが貴史に寄せる想いに決して気付いていないわけではないのだが、そういう問題でもないだろう。堂々と答える。

「あるわけねえだろ。想像つくか？ 俺ならつかねえ」

「自分でつつこんでどうするの」

にこりともせず美里は答えた。

「なんもなかったけど、ただね、貴史、ちょっと聞いていい？」

「なんだよ」

「やっぱり、ふたりきりだと、なんかしたいと思うのかな」

一週間経つと、やはり落ち着いてくるのだろう。美里なりの質問はそれなりに頷けるものがあった。ちらっと耳にはしていたのだが、立村は修学旅行四日目夜に美里の湯上りタオル巻き姿に完全ノックアウトされて腰を抜かしていたらしい。相当、くるものがあったのだろう。やはり奴も健康な男子なんだからしょうがない。惚れてる女子相手なら尚のことだ。

「鈴蘭優ちゃんなら俺も考える」

「そういう特殊なパターンは聞いてないよ。それより貴史、そういう気持ちになるってことは、やっぱり、嫌いじゃないってことなのかな」

「なんだよその意味、わからねえ」

「だから、その、ね」

美里の口から初めて出た言葉に、貴史は思わず吹きだした。

「手首、しばってくれって言われたの。あの、私が安心するだろって言われて」

——立村の奴、ここまで自分の本音をさらけ出してどうするんだよ、すげえ受けるぜ。

相手が古川こずえだとしたら、当然立村の言動に対する説明をエロティックに、かつリアルに説明してやったことだろう。男としてかなり、これは、「準備が整った」状態であることは確かだろうし、一步間違ったら「お代官様と腰元」の世界に発展してないとも限らない。美里がお手つきにならなかったのは、もしかしたら奇跡だったのかもしれない。

男子にとって、好きな女子と同じ部屋で二人きり過ごすというのは、かなり、くるものがある。相当、きつかったに違いない。計画を立てたひとりである貴史としては立村に同情したくなるところもあるのだが、幸い何事もなくてよかったとも感じる。もしものつぴきならないところで誰かに見つかった停学どころの騒ぎではない。運悪く南雲には見つかってしまったようだが。

「なによ、笑わないでよ」

「美里、その後、あいつの態度はどうだった？ 少しは恋人らしいことしてくれたか？」

「ぜんぜん。今まで通り。あれってなんだったんだろうね。うちの母さんたちはぎゃあぎゃあ騒いでるけど、当の本人はなあんも考えてないみたい。すぐ杉本さんにお土産渡しに行ったりしてるし」

「男として断言するけどな、自信持て。あいつ、美里にぞっこん惚れてるぞ」

「はあ？ そういうもんなの？」

ここはやっぱり熱く語っておかねばなるまい。立村にはさすがに「手首を縛ってもらいたくなるほど」の欲望について直接聞くのはばかられる。しかし、その秘密を報告してくれた美里に免じて、しっかりと男心のレクチャーをやらねばなるまい。

「好きでもなければ、そんなにむらむらしねえよ。ましてや手首を縛ってもらうなんてそんな怪しいことたのまねえよ」

「あやしい、こと？」

「そ。あいつの本音を解読するとだ。好きで好きでなんなくて、ほんとは押し倒したくてなんねえけども、そんなことしたら美里に嫌われるからしないんだってこと。嫌われたくねえんだよ」

「そうなのかなあ」

「あのなあ、俺がお前に嘘言ったことあるか？ よく考えてみろ。んで、さっきの話に戻るけどな。お前がひとりでヒス起こしてる暇あるならもっと立村といちゃつっての。お婆さんたちがなんと言おうとな、お前立村に惚れられてるんだからな。でないと俺の方が困るってわかってるだろ」

「あのねえ、貴史」

表情を変えず美里が尋ねてきた。

「前から思ってたんだけど、なんであんた、私と立村くんをくっつけようとするのかなあ」

意味があるのだろうか。

あるわけない。何度も美里にぶつけられてきた疑問は、あっさり返せばいい。

「お前もわかってるだろ」

貴史はいつものように答えた。

「立村がいるから、俺たちはこうやってしゃべれるわけだろが。もし立村がいないと考えてみる。俺たちの親が何考えるかは想像つくだろ」

「そうね」

合点がいったのか美里は頷いた。

「あんたとくっつけ攻撃されるのが目に見えてるもんね。で、貴史も鈴蘭優のコンサートに行けないというわけね。邪魔されて」

「よくわかってるな。その通りだ」

「当たり前じゃないの。ずーっとやられつづけてたんだもん、ね、貴史」

ふうっと深い息を吐き、美里は草むらから思いっきり身体が飛び出すくらい伸びをした。

「そうだよ。立村くんがいるから、私たち、変に思われたいですんでるんだよね」

釣られて立ち上がり、路の向こう側に目をやった。

二人乗り自転車で通り過ぎていくどこぞの高校生アベックを見かけた。

貴史の知らない制服姿だったから勝手に高校生と決めつけたただけだが。

「どうしたの貴史」

あくびをしながら美里が同じ方向を眺めていた。

「二人乗りしてやがる」

「そうだね」

素直な答えが返ってきた。

「彼氏、彼女なのかな」

「たぶんな」

答えたところで貴史は考えるのをやめた。美里もそれ以上問わなかった。

思い出したものはたぶん一緒だろう。

美里とふたり乗りして通り抜けた五年前の記憶を、美里は貴史と同じくらい鮮やかに残しているのだろうか。抜け出して、ふたり勢いよく走りぬけた夜の路を、どこまで美里は覚えているのだろうか。

——もう少し遊んでようよ。

——なんでだよ。

——おもしろくなくなるから。

——どこがおもしろくねえんだよ。

——どうせ俺としゃべるのやだったんだろ。

——そんなこと、言ってないじゃない。

——さっさと帰れよ。俺、今のこと誰にも言わねえから。

——そんなんじゃないもん。

——じゃあ何がいやなんだ」

——沢口とか、うちのクラスの勘違い連中に決まってるじゃない。ふつうに人が話してるのに、どうして、そんなにひゅうひゅう言われなくちゃいけないの！

——ばか、そんなことかよ。

——私、普通に話しているだけだよ！」

——言いたい奴に言わせとけばいいだろ、関係ねえもん。

——男子は楽だよな。

——楽じゃねえよ。俺だって言われてるんだぞ、知らねえくせになに考えてるんだ、ばーか。

——好きとか嫌いとかひゅうひゅうとか？

四年生の晩夏、学校内でのおとまり会最中に抜け出して、ふたり走り出したあの夜の会話が突然貴史の耳に甦った。すっかり忘れていた闇の語り合いだった。

あの時以来、美里と修復不可能なまでの大喧嘩をしたことはない。

口を利かず縁を切りたいと思ったこともない。

すべては四年生のあの日から始まっていた。

隣でぼけらっとしている美里は全く記憶にない様子で眺めているだけだった。貴史だけが思い出してしまった。

——しょうがねえだろ、美里としゃべってるほうがおもしろいんだからな。一言言えばな大抵の話、済むだろ。すげえ、楽だ。

——そうだよな、それだけだよな。楽だからよね。そんなこともわかんないなんて、沢口もあいつらも、ばかみたい。

修学旅行が終わってから一週間以上も経つと、みな日常に戻っていく一方、処理しなくてはならない雑務が増えて大変な連中もいる。たとえば評議委員の立村とか美里とかがその代表だろう。全く手伝う気なんて貴史にはないが、横目でちらちらとチェックしては、

——ありゃあ、永遠に修学旅行は終わらんわな。

合掌してしまいたくなる部分も正直ある。

主な内容としては

・修学旅行で学んだことに関する論文 原稿用紙十枚程度

・修学旅行の思い出に関する作文 原稿用紙五枚程度

まず上記二点をクラスメイトたちに周知し、期末試験前日までに各自より取り集める。

・クラスメイト全員から、撮影したおのこの写真フィルムを預り、プリントし、アルバムにまとめて回覧。希望者の分をすべて追加注文し、後日おのこの分を分けて渡す。もちろんその際の料金も一緒に徴収する。

この点については当然のことながら立村が菱本先生に異議を唱えた。

「他クラスでは、個人撮影分は撮影者本人がすべて回覧してその上で追加注文するようです。評議委員が担当するのはD組だけのようですが」

当たり前言い分だが、菱本先生の答えはやっぱりD組だけのものだった。

「立村、わからんか。親心が」

「おっしゃる意味がわかりませんが」

「あのなあ、担任としてはだ、本来男女交際なんかを思春期のお前らに許しちゃあまずいんだぞ」

修学旅行直後のロングホームルームで言われた瞬間の立村の顔と言ったら、そりゃあもう見物だった。全身硬直して、半ば口を開きかけていて、見事に無言。

「それをだ、今回はあの最終日のバスの中で、お前が一世一代の大告白をぶちかました勇気を称えて、あえて恋人の清坂と一緒に作業する機会を増やしてやっただけじゃないか。文句を言うな、感謝だろう？ ありがとう、だろう？」

当然、そのお相手たる美里の顔も、さくらんぼかりんごか分からぬほどの紅潮ぶりだったことは言うまでもない。悪いがこれも貴史はあえてかばわなかった。お互い、それが覚悟の上だろうし、菱本先生の言うことはまあ、わからないでもない。

——全くだ。いいチャンスじゃねえか。あんな泣き言言ってる暇あったらこういう時にうまく距離を縮めるとかだなあ。

修学旅行を経て、立村と美里のカップルは正式公認となったはず、だった。

ただ、仕事が煩雑なのは想像できなくもない。

最初の作文と論文……実は修学旅行が終わるまでその実施については生徒たちに知らされていなかった……に関してはまだ時間があるし、いざとなれば適当に百科事典の記事を写したりして

ごまかしが聞く。作文も書くべきところと書けないところ、それぞれの場面があるけれども、公表できるところをうまく選ばばいいだけのことだろう。どちらにしても一ヶ月以上間があるのでその辺は心配していない。

問題は、写真の件だった。

美里の言葉を借りれば、

「だって、あんな面倒なことなんでやんなくっちゃなんないのよ！ みな、カメラで自分の好きなところ撮って、仲良しの友だちと一緒に撮って、ってそれだけじゃない。仲いい子同士の分だけ、みんなで回せばいいのにね。全員分って三十人分よ！ 三十人！ 全部一枚ずつプリント注文してアルバムに挟んで、みんなにチェックしてもらってって、どのくらい時間掛かるかわかってるのかなあ先生」

立村の推理を参考にするならば、

「俺が思うに、生徒がこの五日間どのように行動したかをすべて調べたいんじゃないかって気がするんだ。あの非常識な担任の考え、だいたい読めないわけじゃない。みな、自由行動とかいって好きなところを移動したわけだけど、その写真の内容を一通り見れば、どこを通ったかななどはだいたいわかるだろう。もっとも逃げ道はあるよ。最初から写真なんて撮る気なかったし興味もないし、カメラ自体持っていかなかったって言えばそれですむことだからさ」

そういう立村は実際、カメラを持参はしたようだが最小限の使用に止めたらしい。

苦勞をかけた我が三年D組評議委員カップルには申し訳ないが、汗と涙の結晶である三十冊のアルバムについてはとことん堪能させていただいた。男子連中、あと一部の女子が持ってきたカメラのフィルムにはなぜか貴史の出番が多く、少しでも自分の顔が写っている写真に関してはすべて購入したからだった。

「貴史、あんた何枚買ってるのよ。へたしたらあんた、五十枚以上注文してない？」

より分けている美里に思いっきり嫌味を言われた。

「いいじゃねえの、青春の麗しき思い出だもんなあ。もっとも美里にとっては一番撮ってほしかった場面がねえかもしれねえけどな」

さりげなくにやついて返事すると、後頭部を軽く叩かれた。

ぽこん、程度ですんだところがみそだ。

——思い当たる節があるもんなあ。

貴史は笑って、その場をやり過ごした。

すでに写真の追加注文は一段落したらしく、この日の放課後も立村と美里がふたりで写真の配布作業に取り掛かっているようだった。

菱本先生が言うまでもなく、修学旅行五日目の立村発言についてはクラスメートも熟知している。何事もなく次の日から見守る体勢……なわけもなく、さっそく公認カップルとしての「ひゅーひゅー攻撃」をはじめ、立村限定で男子たちからのからかいの嵐も当然起こったわけだった。貴史としてはかばう気などさらさらない。菱本先生とスタンスは同じだ。この機会にしっかりいちゃつきなさい、とまあそんな感じだ。

——あいつらが暇そうだったら、ちょっと茶々入れてくるか。

美里と早朝語り合ったこともどこかひっかかっていた。

周囲がふたりを守り立てているのは事実だが、それ以上の展開が進んでいるとも思えない。

むしろ照れで避けあっているというのに近い。露骨に交際を認めさせられたようなものなので、それはそれで仕方ないことだろう。お互い憎からず想っているのは見え見えだ。

ただ、ときどきだが、

——美里、とんでもないこと口走って立村を怒らせることあるからなあ。

本人としては女子としてのアドバイスのつもりなのだろうが、余計なお世話と跳ね返す立村に戸惑ってしまい、かえって状況を悪化させてしまう、そういうことも多々ある。

——女子にはその辺の男子の本音がわからねえよな。

例外、自分のみ。やはり立村と貴史自身を重ねることはできない。

となると、うまく空気をかき回すことができる貴史が様子を伺うのも当然のことだった。

貴史は三年D組の教室を覗き込んだ。まだ五人ほど生徒が窓際で喋っている。女子だけだ。男子も三名ほど、それぞればらばらに席につき、それぞれの用事を済ませている。

美里と立村は、扉入り口側の席で向かい合い、なにやら話し込んでいるようすだった。

「よお、おふたりさん、デートの最中にすまねえな」

——貴史！ デートなんて言わないでよ！

美里から手厳しい言葉が返ってくると思いきや、無言でふたり、じっと貴史を睨み据える様子だ。机にはそれぞれより分けが済み、各生徒の名前が記載された封筒も十通以上積まれている。まだ手付かずのスナップ写真もまた多そうだった。

「おいおいどうした？　なんで俺を睨むわけなんだ？」

「悪い」

立村が短く答えた。すぐに美里へと向き直り、正面から言い放つ。

「悪いけど、俺はこの写真だけでいいから」

「けど、立村くん、それって変よ」

「変じゃないよ」

「だって！」

美里が机を平手で叩き首を振った。公認カップルとなった評議委員おふたりさん、なにやら痴話げんかの様子らしい。もっともこのふたりの場合、「痴話」と言い切れない場面も多々あるので要観察だ。

「おいおいおいおい、何が変なんだ？　ほらほら美里、お兄さんに話してみなさい」

「気色悪いこと言うんじゃないの！」

ぴしゃり、跳ね返された。どうやら美里もかなりご機嫌斜めらしい。立村に向かって一枚一枚スナップ写真を五枚横に並べた。みな、お寺や景色の背景写真ばかりだった。

「あのね、立村くん。私、責めてるんじゃないよ。ただ、もったいないって言いたいの！」

「もったいなくないよ。かえって買わない分お金もなくなるしないし」

「そういうこと言ってるんじゃないの！」

次に美里は、一枚ずつ人差し指で写真を指し示した。きらきら白い光が水溜りのように写真へ落ちる。

「立村くん、どうしてこれしか選ばなかったの？ この写真だけって、何か変だよ」

「だから清坂氏には変かもしれないけど、俺にとっては満足なんだよ。それ以上に理由要るか？」

うんざりしきった顔で立村は繰り返す。この様子、かなりいらだっている様子だ。立村の場合露骨に怒鳴ったり手を出したりすることはあまりない。ただ、穏やかな口調の後でバスを飛び降りて脱走したり、いきなり教室から出て行ったりとかなり過激な行動を取ることが多い。過去の立村体験を踏まえて言うと、これから先何をやらかすかはわからない。要観察は続く。

「要るよ！ 当たり前じゃない！」

甲高い声を出す美里。これもまた、要注意のサインだ。

かつて美里は立村を相手にさまざまなトラブルに巻き込まれてきた。もちろん自業自得の部分も強いのだが、主に美里がつかかって立村の繊細なプライドを傷つけて怒らせるケースが非常に多い。もっとも美里は「怒らせた」認識はないだろう。立村も自分から折れてすぐ謝るし、美里自身も自覚は薄いだろう。だが、いつ爆発するかわからないダイナマイトであることをもう少し美里も認識すべきだ、と貴史は思う。とぼっちりが来るのはいつも貴史自身だし、できれば予防はしておきたい。

「美里、何怒ってるんだよ。写真か？ いい写真じゃんこれ」

「いいに決まってるよ。だってこの写真、みんな金沢くんのだもん」

くい、と直角に首を曲げ、美里は貴史を見あげた。かなり拗ねた口調だった。

「そういう問題じゃないの！ ただね、私が言いたいのは、なんで立村くん、自分の写ってる写真を一枚も買わないの？ あんなに、たくさん写ってるのに！」

「おい、ちょっと待った」

ぴんと来た。美里の激怒したポイント発見だ。貴史は写真をそれぞれ一枚ずつ指差した。

「つまり、なんだ。立村、お前これしか写真を買わなかったと、そういうわけかよ」

「悪いか」

端的な答えだった。もちろん、悪くはない。だが美里が怒るのももっともだ。

「それって、もったいなくねえかってことを、美里、お前、言いたいんだろ？」

「もったいないってか、なんていうか、そういうだけじゃあなくって！」

おかつぱの髪を激しく振り乱し美里はトーン高く言い募った。

まだ座ったままなのが救いだ。ここで立ち上がって、指差しながら立村を糾弾しだしたらもう、止まらない。

「立村くんにとって、修学旅行って、たった四枚の写真で終わっちゃうことなわけ？」

——ははあ、そういうことか。

面白いくらい美里の本音が、貴史には伝わってくる。

——自分の混じった写真を一枚も買ってもらえねえもんだから拗ねてるのかよ、ったく。

「立村くん、修学旅行って五日間もあったよね！ いろんなところ行って、いっぱいおしゃべりして、それからいろいろあったよね！ いいことも悪いこともそりゃあったけど、でも、トータルで見れば、楽しかったと思わない？」

「思うよ」

また、単純な答えでストロークを返す立村。もうまともに取り合いたくないというのがありありと顔に浮かんでいる。視線を扉に向け、いつ脱出すべきかを真面目に考えているかのようだ。ついでに美里からも逃亡したいのだろうか。

「で、それでたったの四枚しか、それも風景写真しか、思い出が要らないってどういうこと？ そりゃね、立村くんの写真が最初から少ないんだったらわかるよ。でも、みんなのアルバムにそれぞれ二枚くらいは最低でも入ってたし、私のカメラだって、こずえだって、貴史だってね」

「わかってる。でもそれぞれが保存してくれるからいいかなと思って」

言いかけた立村を遮る。これがまずいとどうして気付こうとしないのか、美里に教育的指導を入れたくなるが、まずは話をさせる。

「私が保存してどうするのよ！ もちろん、写真だもん、捨てたりなんてしないよ。けど、やっぱり立村くんだって自分の写真くらい手元におきたいでしょ？」

「おきたくないから、申し込まなかったんだけど」

わかりやすい答え。しかし美里は追求の手を緩めない。

「自分のアルバムに貼って、何度も見返して、ああ修学旅行って楽しかったなって、思ったりしない？」

「あまり、そういうことしないな。それにクラスの集合写真は学校側から強制的に一枚購入するし」

「のらりくらり交わさないでよ！ なんで立村くんいつもそうなの？ 学校の集合写真って学年全員の分でしょ。そんな豆粒みたいな写真なんて楽しくないじゃない！ そんな写真よりも私たちが盛り上がり、楽しいことしてて、あああんなことしたんだなって思い出せる、そういう写真が欲しいじゃない？」

「ごめん、俺と清坂氏の価値観とは百パーセント違うんだ」

「何が百パーセントよ！」

「思い出を形に残るものでって認識がないんだ。記憶に残っていればそれでいいと思う。それに撮ってある写真で自分の顔見たけど、あんまり見栄えするものじゃなかったし」

「しょうがないじゃない！ 撮っていいって聞いたら立村くんいつも嫌な顔するんだもん！」

否定はできない。あいつはどうも写真が苦手のようなから。見事な仏頂面しか残っていない。

「立村くんが写真嫌いなのはわかるけど、でも今写真買わなかったら絶対後悔するよ。あの時買っておけばよかったって言われても、私、焼き増しなんてしてあげないからね！」

「頼まないし、それはそれでいいよ。もういいだろ。仕事進めようよ」

立村はそれでも、写真のより分け作業を続ける気らしい。あそこまで言われて席についたままというのは、いい根性している。

「あと誰の分だっけ」

しかし視線は合わせずに、まず四枚分の写真をひとつにまとめ、封筒に入れようとする。特に中身を確認しようとしなのはなんでだろう。貴史だったら一枚くらいぱらっと覗いてみたりするのだが。

「立村、あのなあ、お前もう少し大人になれよ」

「個人の好みに口出しするなよ」

怒りを乗り越し無表情な立村が、貴史の顔を見上げた。

「写真がどうのこうのって問題じゃあねえだろ。美里ももう少し言い方ねえのかよ」

「なによ、私の言い方が悪いっていうんでしょ！」

完全に気が立った美里がぱしっと言い返す。またふたりの視線、四つの眼で射し返される。

「そういうんじゃないよ。まったく手間掛けるなよなあ」

貴史はしゃがみこみ、写真の並んだ机にそのまま顎を乗せた。こうすると視線が上から下へと降りて少し圧迫感がなくなる。どういう理由があるにせよ、攻め立てられるのは勘弁してほしい。

「立村、お前がさ、写真嫌いなのは昔からの付き合いだしよく分かってるけどな、たとえば美里の分から一枚くらい選んでやるとかさ」

「なんでそんなことする必要あるんだよ」

腹立ちの気配を消そうとして失敗している様子の立村。溜息の濃度が高い。

「美里もそうだぞ。そんな持って回った言い方するよかもっとはっきりと、『なんで私の写真を一枚も買ってくれないの！』とか『私とツーショットの写真一枚くらい手元に置いてチューしてよ！』くらい言えば、立村だってわかるだろうが」

「貴史、あんた、正気？」

以上、貴史の発言は日常の教室に響く程度の声で行われている。当然、周囲の男子女子若干名の耳にも入っているようだ。別にこの二人は当人同士が認めたカップルなのだから、隠すことはない。むしろ、事情がわかれば他の連中も……すべてとは言わないにしても……協力してくれるはずだろう。

「私、そんなこと言いたいんじゃないよ！」

「うそこけうそこけ、隠したって俺にはわかるんだぞ、ざまあみろ。とにかく、この件は立村が折れて一枚ツーショットを買えば、それで十分じゃねえの」

もう一度立村の顔を見据えてやる。さんざん睨まれてきたのだから、この辺は少しやりかえしてやりたかった。目を三角にしている美里のことなんぞ放っておいて、貴史はにんまりとふたりを見返した。

立村が立ち上がった。静かに椅子を引いた。表情は少し俯いたままだった。片手に鞆をぶら下げた。

「立村、くん？」

不安そうにつぶやく美里の声が響く。

「どうした？」

「悪いけど、天羽たちに連絡すること忘れてた。先に帰る。明日、続きやるから」

全く表情は変わらなかった。怒っているとか泣いているとかそういう感情の動きは全く感じられない。ただ、この場にいるのはたक्सんだ、といったうんざりした気持ちだけが白いシャツとその襟から覗いた喉の動きで伝わってくる。

「ちょっと待てよ、逃げるのかよ」

いくらなんでもそれはないだろう？ 貴史も他人事ながら口出したくなる。なぜそこで立村は逃げ出したりするのだろう。別に奴を責めているわけじゃないのに、ただスナップ写真一枚くらい増やしたってせいぜい四十円程度のものなんだしそんなに財布の負担となることもないだろう。

「お先に」

無言で睨み据える美里に一言残し、立村は席をそのまま向かい合わせにしたまま教室から出て行った。扉も静かに閉じられた。

様子を伺っていた他の男子女子が、興味ありげに机の前へと集まってきた。美里と立村ふたりの世界を邪魔するのは、やはりためらわれたものの、やはり異様な雰囲気にはぴんとくるものがあつたのだろうか。女子の中に「下ネタ女王」の古川こずえはいなかった。それがよかったのかまづかったのかはわからない。美里がふくれつつらで立村の放り出していった写真をもう一度まとめ直していた。

「何かあつたの？」

「ううん、なんでもない。立村くん用事があるんだって」

さらに何か言いたそうな女子を制するように、ひとり男子が貴史の脇に立った。

「どうしたの、金沢くん」

修学旅行中は嵐のような芸術談義の雨を降らされてびしょり状態だった、金沢だ。三年D組の天才画伯と呼ばれ、修学旅行中は彼の敬愛してやまぬ日本画家の先生と対面し繋がりをこしらえ、将来の路を美術へとしっかり方向を固めているといった奴だ。もっともその顔は幼顔で、まだまだその辺でトランプやって遊んでいる奴らと見分けはつかないだろう。

「あの、羽飛、さっきちょっと聞こえたけど、聞いていいか？」

「ああなんだ」

「立村が選んだ俺の写真って、どれ？」

周囲の雑音がぱたと、止んだ。

美里が黙って金沢の前に、立村分の写真を四枚並べて見せた。

山門から緑溢れる階段を見下ろす写真、どこぞの庭園で新緑のあふれる写真、猫が一匹、木から景色を見下ろしている写真、池の鯉と光の混ざり合いが妖しい雰囲気をかもし出している写真、だいたいそんなところだ。

「金沢くんの撮った写真って、お部屋に飾ってもいいよね」

とってつけたように美里が呟いた。聞いてないのか、金沢は貴史に話し掛けた。

「この池の鯉の写真、絵にしたら、いいと思うんだけどさ、羽飛どう思う？」

立村が座っていた席に腰を下ろすと、金沢はどんぐり眼をきらきらさせながら貴史に問い掛けた。この瞬間、貴史は観念した。

——金沢の奴、また芸術を語りたくてうずうずしていたんだな。こりゃあもう、付き合うしかねえな。美里、お前も今日は、俺と一緒に金沢画伯の臨時美術講義に付き合えよ。

修学旅行中つくづく思った。普段より美術の才能に溢れているながらその言葉を絵でしか現すことができず、金沢はストレスが溜まっていたのだと。そのはけ口としてたまたま貴史が選ばれ、立村と行動を別にしていた時間はほとんど金沢の芸術談義に付き合わされたわけだ。語り出したら止まらないのだ。どんなに方向転換したって、無駄なのだ。

「なんで立村、この写真選んだのかなあ。俺もこの光景、帰ってからスケッチに起こそうと思って撮ったんだけど、やっぱり分かってるんだなあって思うよ。今度立村からもその理由、聞いてみたいけど、どう思う？」

「いや、今は、やめとけ」

これが精一杯だった。ただでさえかっかきている立村が、金沢にまた無邪気な芸術攻撃しかけられたら、何しでかすかわからない。貴史にできることは予防策だけだ。

「ねえねえ、金沢くん、よかったらこの写真どうして撮ったか、教えてくれる？」

美里も貴史と金沢の顔を見比べた後、これからどう行動すればよいかを読み取ったらしい。すぐに話の焦点を金沢と写真に向けた。これらの察しのよさがなぜ、立村および他の女子たちとの間には生かされないのか、貴史にはそれも疑問だった。

——とにかく立村とは、改めて事情聴取しねばなんねえな。

金沢の熱い美術へのこだわりを右から左へと聞き流しながら、貴史は次の一手を考えた。

このまま放っておくのはいくらなんでもまずいだろう。それこそ、美里の八つ当たりが激化するは勘弁してほしいものだ。

立村とゆっくり話ができしたのは次の日の放課後だった。

同じクラスでありながらなぜか、なかなかゆったりと語り合う暇がない。

男同士何を気持ち悪く語るのかと問われればそれまでだが。

「立村、これから暇か？」

「一応は」

「じゃあ、学食でなんか食ってかねえか？」

かすかに迷惑そうな顔で俯くのも奴のくせだ。気にしてちゃあ話なんてできやしない。ただでさえ泣く子も黙る青潟大学附属中学評議委員長という肩書がまぶしい立村のこと、そうそう簡単に引き下がってはられない。

「いいけど」

いつのまにか隣には我が三年D組の下ネタ女王・古川こずえが陣取っている。黙っていればいいのに茶々を入れてくる。

「いやあ、どうしたのさ、あんたたちデート？ ねえねえ私も混ぜてよねえ」

「古川さんは羽飛だけが目当てだろう？」

ずいぶん立村も切り返しがうまくなったものだ。立村と美里が学校内の公認カップルであることと同様、古川こずえが貴史にほれ込んでいるというのも隠し切れない事実。もっとも貴史なりに誤解を招く言動は控えるようにはしている。妙に期待させたくはない。なにせ貴史の愛はすべて、我が愛する……。

「鈴蘭優には負けないもんね。あっそうそう、美里も一緒でもいいけどさ」

「悪い、今日は野郎同士で語りたいことが山ほどあるんだ。おなごどもには用がないのだよ」

「おなごとは何よねえ。まあいっか。立村、私が身を引いてやるからさ。貴史に思う存分甘えてきな。どうせ本条先輩とはまだ顔合わせてないんでしょ」

「余計なお世話だ」

かすかな不機嫌が、こずえの言葉でさらに増幅されているようだ。幸い美里は教室にいない。美里に絡まれたらまた面倒だ。さっさと逃げ出した方が得策だ。

「じゃあ行こうぜ、立村、うるせえ女子連中から逃げ出すとするか」

「同意」

だいぶ暑苦しい襟元のボタンをひとつ外し、それでもシャツの裾をきちんとベルトの奥に収めたまま立村は席から離れた。鞆を肩にかけるようなしぐさが妙に似合っていない。悪ぶっているのかそれとも威嚇しているだけなのか。それなりに男子の気迫を見せ付けたいお年頃らしい。もっとも全く効果はなさそうだ。貴史から見たら付け焼刃、単なる、

——おぼっちゃまの背伸び。

でしかない。

いつもなら立村の場合、評議委員会関係で他クラスの男子評議委員たちとつるみ、あれやこれ

やと語り合うのが常だった。委員会という世界に貴史は最初から首をつっこんでいないので、具体的にどういうことを語り合っているのかは美里を通じて伝え聞くしかない。美里も立村と一緒に評議委員を三年務めているわけだし、それなりに貴史も愚痴を聞かされる。その内容から、かなりややこしい展開が繰り広げられているという事実関係だけはだいたいわかる。ただ、立村自身はあまり評議委員会に関する話題を口にすることはなかった。

——本条先輩がいないからだろうな。

一年上の先輩で、前任評議委員長だった本条先輩。別名、立村の本当の恋人……もとい「ホモ疑惑」の相手。いやいや真実は立村の兄貴分なのだが、今年から公立高校へ進学してしまったこともあり、連絡がなかなか難しいらしい。同じ青濤大学附属の高校に進んでくれていればまた事情も違ったのかもしれないが、私立と公立との距離は想像以上に隔たりあるものらしい。立村も口に出すことこそなかったが、かなりしんどそうだった。貴史が気付くくらいなのだから、相当なもんだろう。

いつものように大学の学生食堂へと向かう。

「ああ、腹減ったなあ」

「もうそんなに空いたのか」

「立村、お前消化不良？」

「そんなわけでもないけど」

一階のカフェテリアで注文するのはいつもカツ丼だ。そのくらい腹に収めないと気合が持たない。一方立村といえは飲み物かせいぜいおにぎりくらい。よくもまあ家まで自転車漕いで帰ることができるものだと感心する。

いつもの真四角なテーブルに陣取り、近くで大きなテーブルを占領して騒いでいる大学生たちを横目に見つつ、まずは食った。

「よく食べられるよな」

「お前が食わなすぎるんだよ」

「夜のごはんが食べられなくなるしさ」

グレープスカッシュを紙コップですすりながら立村は鞆を脇の席に置いた。

「それにしても、疲れるよな」

ぼそりと呟いた。

「なんでだ？」

美里のことか？と本当は問いたい。前日の諍いを側で観察していた貴史としては、少々おせっかいしてやりたい気持ちもある。ぎくしゃくしているカップルを眺めるのは他人事だと面白いのだが、貴史の場合美里から多大なる迷惑をかけられるのでできればよりを戻してもらいたいものである。

「評議委員会でさ」

立村は全く別のことを口にした。

「天羽たちと話をしているんだけどさ、なかなか意見が合わないんだ」

奴にしては珍しい。立村はあまり貴史に評議委員会に関する話題を振ったりしない。最初から

話にならないと割り切っているのか、それともあまりにも面倒なことが多くて思い出すのもいやなのかのどちらかだろうと思っていた。

「へえ、天羽がたとか」

もっとも貴史も、先日の修学旅行を通じて複雑な諸事情を知らないわけではない。

いきなり四日目、立村と轟琴音とのデートに関する手伝いをさせられたり、かと思いきや天羽と難波、更科の評議委員三名に取り囲まれて美里との関係について揶揄されたらりと、それなりにかきまわされてはいる。もう一週間以上も経てばそれは過去。すっかり忘れていたのだが、立村にとってはまだ現在進行形らしい。

「羽飛、今の評議委員会と生徒会との関係って、なんかいびつだと思わないか？」

貴史が口の中に箸をつっこんだままでいると、立村はゆっくりと語り出した。

本当にこれは、稀に見る展開だ。美里のことなどどうでもいい。立村評議委員長長の内部事情を直接聞き取るチャンスでもある。

——相当、きてるってことだなあ、立村の奴。

静かな口調で、しばらく立村は囁き続けた。本人は真面目に語っているつもりなのだろうが、貴史からしたらさやさや呟いているだけに聞こえる。もっと腹から声出してもこの場で盗み聞きされる心配はないと思うのだが、立村にもそれなりに考えることがあるのだろう。

「俺が評議委員会に入った時も変だと思ってただけどさ。評議委員会の言い分に生徒会が何も言い返せない状況って、不思議だったんだ。学校の代表としてまず生徒会が存在していて、その内部組織として評議委員会をはじめとする委員会が繋がっている、それが普通の形じゃないかな」

「まあそうだ」

小学校の児童会でもそんな感じだった。委員会がこれだけ威張っている学校はそうそうないだろう。

「でも、青大附属の場合は違う。評議委員会がとにかくトップに立っているいろいろと行事を司っている。それはそれで悪くはないけど、やっぱり不自然だよな。生徒会の仕事を取ってしまったようで、何か違和感があるんだ」

「けどそれでうまく行ってたんだったらそれでいいんじゃないかね」

詳しいことはわからないので適当に相槌を打つ。曲りなりにも立村は評議委員長なのだ。自分で口にしていくらいだから自覚もあるのだろう。自分が生徒会を追い抜いたトップの地位にいるということを、認識はしているだろう。こういっちゃ何だが、自分が一番と人差し指立ててポーズを取ってもいいくらいだ。

「何言ってるんだよ。立村、その自信ない態度なんかしろよなあ。だから天羽らにもやいやい言われるんだぞ。余計なお世話だって言い返せねえじゃあねえだろが。せっかく評議委員会でトップに立ってだ。生意気言ってた新井林を黙らせて、あとは怖いものなしだろが」

気弱なことを言う立村ではあるけれども、それなりに結果は出してきたんじゃないだろうか。傍から見てもまず、一年後輩で高い評価を受けてきたという新井林健吾との勝負をそれなりに決

着つけ、上下関係をしっかりと教え込んだことは立村の成功例としてあげてもいいんじゃないかと思う。また二年の冬から三年春にかけては、評議委員会と生徒会との合同交流会……つい五日くらい前に行われたばかりだが……を行い、一般生徒たちも集めてかなりの盛り上がりを見せたともいう。貴史はたまたま小学校時代の友だちと用事があったので参加しなかったが、立村が提案して始めた企画がそれなりに評価されていることは聞き知っていた。

もっと威張ってもいいのだ。

もっとそっくり返ったって誰も文句を言わないのだ。

——なのになんでだろうな、こいつは。

ずっと本条先輩の弟分だった頃と変わりなしの気の弱さに、一発どやしたくなるのもわかる。美里がぎゃあぎゃあわめくのもほんの少しだが、理解できる。

またこうやってわけのわからないことを言い出したりもする。

「俺が言いたいのはつまり、これから先のことなんだ。評議委員会をこのまま独立した組織のまままで置いておくのは、よくないと思う」

「よくないって何をだよ」

立村はジュースの入った紙コップを机に置いた。相変わらずさやさやささやき声で続ける。

「今まで評議委員会がトップの立場のまままで走ってこれたのは、委員長が結城先輩や本条先輩だったからなんだ。特に本条先輩がやりやすいようなしくみで、周囲がみな納得してしまうような人だったからこそ、うまくいったんじゃないかな」

「まあなあ、本条先輩はすげえよなあ」

確か、ふたり彼女がいてどちらともよろしくやっているという話を美里から聞いている。ひとりでも面倒くさそうなのにずいぶんエネルギーのある先輩だと思う。

「本条先輩だったら、生徒会を押さえ込んで評議委員会が主流でいろいろなイベントを企画できるんだ。先生たちも受け入れるし、全校生徒も盛り上がるし、生徒会側もそれなりに頭下げるしさ。けど、今は違うよ」

「立村、お前だからか？」

「そう、そうだよ」

ひとつ、大きな溜息を吐いて立村は頷いた。

「今までうまく行っているのは、本条先輩が作ってくれた道をそのまま歩いていられるからであって、これから先俺が仕切ることでうまくいくとはどうしても思えないんだ」

「だから、なんでお前こうもぐらぐらしてるんだよ、まったく誰もそんなこと思ってねえだろうが！」

いらいらする。悪いが天羽たちの苛立ちがよくわかる。こんな評議委員長を頭にもっていたら、そりゃあつんつん突つきたくなるのも最もだ。

「だから、俺が考えているのは」

言葉を切った立村が、暫く天井を見上げてネクタイをいきなり締め直し始めた。

かなり蒸している室内で何を考えているのかわからない。

「俺は、そろそろ評議委員会と生徒会が同じ立場で活動する時期に来ていると思う」

「同じ立場ってどういうことだよ」

「つまり、評議委員会が独占していたイベントとか行事とか交流会とか、そういうものを生徒会と一緒に切り盛りしていく時期に来たんじゃないかなってさ」

「とっくにやってるじゃねえかよ」

——この前の水鳥中学との交流会はそうじゃなかったのか？

全くよくわからない話を立村は長々と続け、言い切った。

「そのためには俺の任期の間に、きちんとした『大政奉還』を、評議委員会から生徒会に対して行う必要がある。羽飛、どう思う？」

『大政奉還』

いきなり歴史の重要事項が飛び出したのには驚いた。

立村の口から、テスト後の答え合わせ以外ですべり出てくるとは思わなかった。

「おい、立村、『大政奉還』って徳川幕府から江戸幕府へ最後の将軍徳川慶喜が返したあれのことだろ？」

「そう、ちょうど今の状況って、幕末の混乱時期に物凄く似ている。絶対的な権力を持つ将軍がいなくなって、民衆がみな不安でばたばたしていて、それで黒船とペリーが乗り込んできて、なんかこのままじゃまずいと生徒たちもみな感じているというかさ」

「じゃあ誰だ？ 立村は坂本龍馬にでもなるつもりかよ。それとも西郷隆盛か勝海舟か。青瀧の時代を変えるつもりなのか？ 似あわねえよおめえには。やめとけやめとけ。お前がそんなことしでかすよか、もっと将軍として堂々と立ってろ。朝廷が生徒会とするなら、そのまんまお前が三代将軍立村として君臨すればいいことじゃん。生徒会だって、B組の藤沖、ほら、あの会長、奴もそんなに文句言ってねえようだしいいじゃんいいじゃんいいじゃねえか。泰平の世が一番だぞ。もし血迷って『大政奉還』なんてやらかしてみろ。あっという間に生徒会から身包み剥がれてただの委員会に成り下がっちゃうだけだぞ。そうなったら全然お前いばれねえじゃん。もったいねえなあ」

ばかばかしすぎる。立村が何を考えているのかわからない。美里がいらだつのも最もだ。こんな話を美里はデートの真っ最中にも聞かされているのだろうか。甘い会話もなく、ただ「青大附属評議委員会の先を憂い」などと語っているのだろうか。たまったもんじゃない。

「それにだ、天羽だっておもしろかねえよ。そんなことされてみる。せっかくいろいろビデオ演劇やら交流会やら遊んでこれたのが、全部生徒会に奪われたらたまったもんじゃねえだろ。立村だけじゃねえぞ被害被るのは。それよかもっと他の奴の立場も考えろってんだ。ま、俺としては天羽にひとつ恨みあるんで、奴をかばう気ねえけどな」

理由なんて説明するつもりはない。かつ丼のご飯粒を残さずかきこみ、すんと丼を置いた。満腹満腹、満たされた。

立村は紙コップをつぶし、ゴミ箱に捨てた。立ち上がり腕時計を覗き込んだ。

「そうだな、妙なこと言って悪かった」

「んなこと考えてるよかお前、美里とどうやって仲直りするつもりなんだ？」

本来の第一議題をぶつけてやった。どうやらその言葉はすり抜けたようで返事はなかった。

「羽飛の意見、参考になった、ありがとう」

ちっとも参考になんてなっていないと顔に書いてある。立村にとって満足行く言葉を返すことはできなかったようだった。しかしそんなこと言われても貴史としてはあれが精一杯だ。評議委員会の話なんて、いきなり振られてもどう答えるというのだろう。「大政奉還」なんてこと考えているよりも、もっと足元の問題を考えるべきじゃないかと思う。たとえば相変わらず険悪な菱本先生との関係とか、美里のご機嫌伺いとか、美里の不機嫌の一因である一年後輩の女子の件...
...確か杉本梨南とかいった、性格の悪すぎる女子のことだ.....にもう少し手加減しろとか、いろいろ問題はてんこもりのはずだ。

「それはそうと、お前結局写真、買わなかったのかよ」

背を向ける立村を追いかけて貴史は尋ねた。肩を並べた時立村はぼんやりした表情のまま、あっさり答えた。

「清坂氏の獲った分から追加注文した」

「あ、美里から買ったのか」

「あとが面倒だしさ」

もっともだ。やっぱり立村なりに美里のご機嫌伺いの方法は考えているようだった。

「それ、美里に言ったのか」

「言わないと注文できないだろう」

学食の入り口でふくれあがるざわめきにかき消されて、立村の答えはそれ以上聞き取れなかった。

立村が青大附属中学評議委員長としての意志を貴史に伝えたのはこれが初めてだった。

いや、聞かせてもらったことがあっても記憶してはいなかった。

「大政奉還」の話題も自転車置き場へ向かう間に貴史の頭から霧散した。

——まったく立村の奴、自信喪失してやがるしなあ。黙ってればこのまま評議委員長で卒業できるのに。何いきなりあせってるんだ？

そちらの方が気に掛かるものだった。まあいい、美里とはよりを戻したようでなによりだ。これで貴史も、美里から愚痴の飛礫をぶつけられなくてすむ。お互いまずは「今」の問題を片づけられてなによりだ。

立村と美里との間は相変わらずくっついたり離れたりの繰り返しのようだった。

貴史もべったり様子を伺うわけではないにしても、それなりに状況を把握はしていた。なにせ美里が一方的に貴史を捕まえ、ぺらぺらとまくし立ててくるのだ。受けざるを得ない。

「もう、立村くん何考えてるのかほんっとよくわからない！」

勢いよく夏休みへと突入し、毎年夏恒例で行われる「羽飛家・清坂家合同家族旅行」の企画を立てている時も、暇さえあれば美里が愚痴をこぼし続ける。これが知らない女子だったら無視するのだが、何せ縁を切りたくとも切れない距離にいる貴史だけに、聞き流すこともできないわけだ。

「おいおい美里、そんなことよか早く、行きたい店とか食いたい料理とか選べよ、早くな」

「うんわかった。けどさ、でも聞いてよ！」

いつのまにか貴史と美里が旅行時のスケジュールを決める役割を押し付けられていた。小学校六年あたりから互いの母たちがそういう風に仕向けて来ているようだった。いつものことだし面倒ということもないが、他の連中に言うともたひゅうひゅう勘違いしたことを言われるのでそこらへんがわずらわしいだけだ。

夏休み中だとそんな鬱陶しいことなど気にしないですむので、楽ではある。

美里が貴史の用意した旅行会社パンフレットを両肘で押さえ込むようにして覗き込む。

「だって、変なんだよ、立村くんってば。この前南雲くんと彰子ちゃんが珍しくけんかになっちゃったことあったじゃない？ 彰子ちゃんと私、東堂くんの彼女のこととかちょっと気になったからちょっと話ただけなのに、いきなり私に噛み付いてくるんだよ？ 変じゃない、それ。私はただ、東堂くんの彼女が不良でその、いろいろ悪いことしているし、だったらむしろ私たち先輩がアドバイスした方がいいって」

「だから美里、いいかげん学習しろ。何事にも、アドバイスってのは余計なお世話だってな。立村も何度も言っただろ。かまわれてたくないから放っておいてくれってな。まああまりにも目にあまるようだったら話は別だが、いいかげん人の色恋に口出しするんじゃないよ」

「だってさ、東堂くんの彼女って、いわゆる、あの、ほら、その」

口籠もるなら何も言うなと思う。終わらせるために貴史は答える。

「売春してたんだろ。どこぞの親父様たちとか」

「貴史！」

「お前が言いたいことったらそんなことだろが。あーあ、いいかげん人のこと考える暇があったら、自分の分担分しっかり片づける。お前がこれから地図、書くんだろ」

「わかったってば、けど」

「うるせえ、とにかくやることやれ。話したいならそのあと聞く」

美里はふくれっつらのまま、睨みつけた後即座に旅行予定地の地図とタイムスケジュールを丸っこい文字とカラフルサインペンでもってで一気に仕上げた。こういうイラスト描きが美里は得意なのだ。

——だから人の色恋に口出しする暇あったらなあ、もっと立村とうまくやれよな。

二人の仲が危機一髪に瀕したきっかけは、クラスメートの東堂の彼女の問題だったらしい。「らしい」というのはもともと貴史が東堂と親しく話をすることがないのと、もっというなら東堂の親友である南雲とは天敵同士であるがゆえの意味合いだ。

厳密に言うと、入学当初から南雲と貴史とは気が合わず、ことあるごとにつっかかっていた。それでいて殴りあいのけんかなどでぶつかりあうことはない。あくまでも口げんかの範疇だからこそ、なおのこと引きずりまくっている今日この頃だ。

南雲の親友ということは、価値観も当然合わなくて正解。話をすることも必要最小限のみだった。意外だが立村が南雲と相性合うというのは、正直解せないこともあるのだがそれはそれで人のこと、知ったことじゃない。

どちらにしても、貴史にとって東堂の彼女が不良であろうが大人相手に売春だかなんだかして金を貰っていようが知ったことではなかった。趣味が悪い奴だとせせら笑うだけで十分だ。

なのになんで、美里はそんなことにくちばしを突っ込みたがるのだろう。

何を考えたか美里は東堂に対して、例の彼女を先輩の愛でもって更生させたいなどと思っらしい。しかも、その案に我がクラスの肝っ玉母さんこと奈良岡彰子も載ったらしく、そのあたりで立村たちとドンパチやらかしたというわけだ。

ちなみにその件については、立村本人から一切聞かされていない。

バトルをやらかした、ということすら口には出していない。

むしろ、立村は黙りこくっているだけだ。周囲の女子連中が騒いでいるのと美里の自己申告によって貴史も聞き知っただけだった。

「さ、描き上がったよ。あと注文ある？」

特にない。貴史は美里の描いた地図をそのままひっくり返した。

「約束通り、話、聞いてやる」

「その、聞いてやるって言い方なによ、何様のつもりよ。貴史さあ、私に対していっつも命令口調使うよね。その偉そうな態度ったらなに？」

「お前がそういう風に仕向けるからだろうが。それよか、立村にまたお前噛み付いたのか？」

「私噛み付いてなんかいないよ。筋道通したつもりだよ。なのにね」

——どこが筋道通したってんだよ。

悪いが美里の言い分には全く同意できなかった。

男からしたら人の好みをぐたぐた言われるなんてたまったもんじゃない。

たとえ札付きの不良女子だとしても、惚れてしまったらそれまでだろう。

いや、美里にはそんなこと死んでも言われたかないだろう。

美里の相手のことを考えれば、決して。

なのになぜ想像しようとししないのか、よくわからない。

「東堂のことなんか知ったことじゃねえ。それよか立村、なんて言ったんだ？」

貴史はまず、部屋の窓を開きっぱなしにし、代わりに入り口の戸を締めた。クーラーのない部屋だし当然暑苦しい。本当だったら開けっ放しにしたいところなのだが、美里の口から出てくる内容によっては、やはり家族にばれるとまずいものもある。

「あんたが言ったことと同じ。邪魔するなって。何にもわかってないのにね」

「だろが。俺の言った通りだろ」

もう一度戸を開けた。やっぱりそうだ。立村の考えは間違っていない。男だったら当然関わりたくないと思うはずだろうし、立村自身がそういう経験を山のようにしているのだから、むしろそうでなくてはおかしい。

「けど！」

「けどもくそもねえよ。美里、いかげんぐちぐち言うのはやめろ。無視して気にしなけりゃいいんだ。まったく立村もそうだけどな、お前らどうしてそんなくだらんことばかりにつっかかっているんだろうな。俺にはとんと理解できねえ」

「貴史、人のこと言えるわけ？」

しばらく貴史の言葉を聞いていた美里は、肘の下に敷いていたイラスト地図を抜き取ると、ぐちゃぐちゃに丸めてぶつけてきた。仕方なく受け止める。書き直した。

「あんたさ、鈴蘭優に彼氏ができたって噂流れた時、私にさんざん愚痴りまくったくせに！」

「優ちゃんにあんなアホな俳優なんか似あうわけがねえって言っただけだろが。どこが愚痴ったんだ？ たわけってんだ」

「ふうん、あんたはぜんぜん気付いてないってわけねえ。へーえ」

美里が投げつけてきた地図を伸ばし直した。コピーすれば使えるだろう。

「美里、お前、描き直すか？」

「そんなのどうでもいいじゃない！ どうせ見るのうちの家族だけなんだから」

ふくれっつらをそのままにして美里はオレンジジュースをストローですするす飲んだ。真っ白い袖なしワンピースを、肩出しっぱなしにして着こなす姿はもし鈴蘭優だったらかなりがつつきたくなるものだろう。しかし目の前で行儀悪くジュースをすすっているのはどうみても幼なじみの美里に他ならない。

「貴史もそうだけど立村くん、ほんっとどうでもいいことばかり口突っ込んで来て、本当に話さなくちゃなんないことって全然話してくんないじゃない！」

「俺にとっては、優ちゃんはどうでもいいことじゃねえもん」

「あんたのことはどうでもいいの！」

ストローを引っこ抜き、美里は貴史の顔に拭きつけた。少しだけ水が飛んだ。

「きったねえなあ」

「うるさい！ だってほんと頭くるじゃない！ 立村くんいつも男子連中と評議委員会の話してるけど、女子には何にも話してくれないんだよ。修学旅行でもゆいちゃんが物凄く怒ってた。私たち女子だって一生懸命委員会のためにがんばりたいって思ってるのに、全然活用しようとしてない男子たちの姿勢ってなんなのって！」

「おい、美里、それ明らかに勘違いしてるぞ。ついでに言うと霧島もだ」

全く持って女子の発想にはついていけない。立村の名誉のために言い返すことにする。

「立村はレディーファースト主義だってことお前だって知ってるだろが。あいつはな、美里たちに敬意を表してそうしてるだけだろうが」

「そんなの嬉しいわけじゃない！ お姫様扱いされて嬉しいなんて誰が思うってのよ、そんなことじゃないの。私が言いたいのはね、立村くんは評議委員長でしょ？ けど周りの人たちは立村くんよりも天羽くんを実質的評議委員長だと思い込んでるんだよ。それって変じゃない？ どうしてそう言われてしまうかわかる？」

まあ、確かに、天羽の方が行動目立つのは事実だ。後輩たちがそう感じるのも無理はないだろう。が、ちゃんと立村は評議委員長の座を得ているではないか。何をわけのわからないこと言っているのだろう？

「どうしてだ？」

「それはね、立村くんが委員長として何をしたいか、全然教えてくれないからだよ！」

美里が握りこぶしを作ってテーブルを叩いた時、かすかに風の音が勢いよく天井に響いたような気がした。もちろん、気のせいだろう。

「貴史、あんたにも前話したよね。立村くんが、杉本さんのためにわざわざ交流関係のポストを用意して、あの子が評議委員から外されても活動していけるように手配したってこと」

よくわからんが、いろいろあったことは聞いている。尋ね返すと面倒なので頷いた。

「結局、他の先生たちが杉本さんをE組に引き取ってまるく収まっちゃったけど、立村くんがそうしようとしたこと、私、全然気付かなかったんだもん。全然教えてくれなくて、気がついたらごたごたしてて。大変だったんだよあの時」

——大変だったのは美里の文句を黙って聞くしかねえ俺のほうだがな。

言いかける。身の危険を感じてやめる。また天井でがたと物音がする。風がずいぶん強いものだ。

「私が言いたいのは、立村くんって何事においてもそうなのよ。二年の宿泊研修の時もそうだし、最近だってそうだし、もう、何もかもいろいろ。けど、本当にやろうとしていることを一言も言ってくれないじゃない？ そしていきなりわけのわからないことするじゃない？ こちらだって頭くるじゃない？」

「男はなんも考えてねえよ。そんな暇ねえし」

貴史がまぜっかえすと、美里はぶんぶん首を振った。

「この前の修学旅行で立村くん、いろいろと評議委員会のことで考えてるんだなってことはわかったのよ。それだけは、なんとなくね。けど、具体的にどうするかとかこうするかとか、全然教えてくれないの！ 水鳥中学の人たちとの交流会をしたってだけなら私もわかるよ。けど、なんというか、そのね、あのね」

「なんだその、あのねそのねってのは」

「黙って聞いてよ！ なんかわかんないけど立村くん、何か考えているような気がするんだ」

言葉を切った美里は、ストローの先を加えてそのまま俯いた。指先で伸ばした地図の角を何度

か折った。

「何を考えてるんだ」

「わかんない。けどね、ただなんとなく、誰にも言えないことをまたひとりで計画立ててるんじゃないかなって気がしてなんないの」

「ふうん」

ストローを反対側からまた吹いた。

「何がってわけじゃないんだけど、うまく言えないんだけど」

「お前ら女子に言えねえだけで天羽たちには話してるんじゃないの」

「言っているとすれば本条先輩くらいかな、とは思うんだ」

美里が溜息をつき、ストローをグラスに戻した。また頬杖を突いた。

「どっちでもいいけど、ただね、立村くんが何かを企んでいる時の雰囲気だけは、なんとなくわかるようになったな」

その言い方は非常にうまい。納得する。

「そうだな、立村がやたらと愛想いい時は何か計画してる時だわな」

「でしょ、でしょ？愛想なんてよくないけど、でもなんか考えていそうでしょ？」

「具体的にはどういうとこだよ」

「どういうとこだったって、わかんないけど、ただ、勘なの」

女の勘、なんて当てにはならない。

だが今だけは、ちょっとばかり気に掛かる。

一言、尋ねてみた。

「美里、評議委員会ってどうなんだ。生徒会の奴らとはうまく行ってるのかよ」

「普通に話してるだけだけど。会長の藤沖くんともうまくいってるし」

たいして気もなさそうに美里の答えが返ってきた。

立村が密かに考えていることがあるとすれば、「大政奉還」計画のことだろうか。

ばかばかしすぎて一笑に伏してしまったとはいえ、記憶には残っていた。

そのくらいのことならば美里も知っているかもしれない、そう思ったからだった。

——美里、知らねえのか。

しかしどうでもいいことだからこそ、話してないという気も正直する。

美里は何も言わず、黙って地図を描き直した。もちろんカラーサインペンをふんだんに使用した華やかなイラスト入りのものだった。

——男のロマンをそうやすやすと嗅ぎ取れるような女じゃねえよな美里は。

貴史はもう一度天井を見上げた。さっきから風の音と入り混じるように、どこかの泥棒が散歩しているような音が響くのだが、なんなのだろうか。

夏休みも八月に入ると少しだけ風が強めに空を走る。そんな感じがする。

羽飛家と清坂家との合同家族旅行も、あっさり二泊三日の日程を終えた。あっけないほど何事も起こらなかったし、渋滞にも巻き込まれなかった。美里とも旅行出発前日まではああだこうだと言いつつ言い合ったりしたけれども、旅行が始まってからはすべてがあうんの呼吸で進み、結局けんからしいことも一切せずにすんだ。

——珍しいよなあ。

あれから一週間、美里とは顔を合わせていない。

避けているわけではなく、単純に貴史の遊び日程が詰まっているだけのことだ。

同じことは美里にも言えるだろう。美里の交友関係すべてを貴史が把握しているわけではない。お互い様だ。

ひさびさに腕時計のベルトを穴ひとつほど詰め直し、貴史は旅行中に買ってもらったベースボールユニホームタイプの白いシャツを被って着た。いんちきくさい英語のロゴが刺繍されていて、肩から少しだけ黒い袖が飛び出しているといった代物だ。仲良し母ふたりが

「これ、たあちゃんに似あうわよ」

「そうよねえ、あんた、着る？ 着るんだったら買うわよ」

などと騒いで、あっけに取られた貴史を目の前にさっさとレジに持っていったもの。

まあ嫌いなデザインではないのでありがたく頂戴する。美里の反応はというと、

「貴史、あんた、悪いけど絶対似合わない。着る時はTPOをわきまえなよ」

という反応だが。

「貴史、みさっちゃんと会うの？」

部屋から出て階段を降りると、母が扇風機の首を自分の方に向けながら、

「そろそろ旅行アルバム作る準備、しなくちゃねえ」

これも旅行後毎年恒例のこと。旅行中に撮った写真を貴史と美里が大判のアルバムにコメントをつけつつ張り巡らしていくという作業が残っている。どうして他の家族は参加しようとならないのか、いまひとつ腑に落ちないが作業そのものは苦にならないのでそのまま引き受けている。美里も同じようだった。

「そんなのあとでいいだろ。それよか母ちゃん、俺の靴、どこしまった？」

いつものスニーカーが玄関に見当たらない。

「ほら、今日はこっちを履いて行きなさい。先生のところにお邪魔するんだから、きちっとした格好でいかなきゃ」

母はスーパーの紙袋から、一足千円で購入したらしい白いスニーカーを取り出した。結構かっこよいと思うのだが紐ではなくマジックテープで留めるタイプというのはどういうことだろう。小学生じゃないんだから、そんなガキくさいのはいやだ。

「どこがきちっとだよ、母ちゃん、こんなの履いて行ってみろ、何言われるかわからねえよ」

「あらあら、みさちゃんにチェックされるのが怖いわけ？」

「はあ？ 言ってる意味わからねえ」

「とにかく先生の御宅なんだから、礼儀正しくしとかなくちゃだめよ。妙にかしこまる必要もないけどねえ」

何気なく出た言葉なのだろう。ふと、汚れのない白いスニーカーを見下ろしてみて、その安っぽさと一緒に何かガビリと走ったようだった。

——まあいっか、めんどくせえ。

「じゃあ母ちゃん、俺の靴、洗っといってくれよな。夏だしすぐ乾くだろ」

「なんで洗濯は母さんが全部しなくちゃいけないのよねえ」

話がややこしくなる前に貴史はマジックテープをしっかりとめ直し、外へ出た。戸は開けっ放しだった。こういう夏の日はずっと、昼間だけ羽飛家の戸は開け放たれていた。

——立村も来りゃあいいのにな。

一応誘ったのだ。

——菱本先生も立村連れて来いって言ってたんだからなあ。この機会に険悪な関係解消するってのもいいじゃねえの、なあ。

もちろん立村の性格上、いくら担任の菱本先生から猫なで声で、

「夏休み、いい機会だし、お前らみんな俺のアパートに来いよ。ジュース御馳走してやるからな。一応クーラーついているから、家の中で語るもよし、どっかでバドミントンやるもよしだ。クラスのみんな、三人か四人で組作って来いよ」

とか呼びかけられたとしても、絶対にOKしないであろうことは想像していた。

たまたま美里と古川こずえ、そして貴史の三人の空いている日程がぴたっと合ったこともあり、今日はトリオを組んで、菱本先生宅ご訪問の予定だった。

待ち合わせはいつものように青潟市美術館のエントランスで十一時。

昼ご飯は当然、菱本先生が用意してくれるのだそうだ。昨夜確認の電話を美里が入れたらしく、そのあたりの話についてはいた。今から何を食わされるのかが楽しみだ。

自転車で突っ走り、エントランス前でハンドルを押さえたまま周囲を見渡すと、すでに先客ありの様子。全速力で突っ走ってくる気配、少し髪の毛が首筋まで伸びているせいか、美里と一瞬見分けがつかなくなりそうで焦る。

「はええな」

「あたりまえじゃん、おっはよ」

古川こずえ……三年D組の下ネタ女王様は両頬割れんばかりの笑顔でもって貴史に近づいてきた。おてんとさまに見下ろされてなければ、抱きついてチューのひとつくらいされそうさ。自転車を支える振りして身をよける。女子にもてるのは非常にありがたいことなのだが、こずえに関して言えばできるだけ余計な期待をさせないよう振舞ったほうがいいのではと思うこの頃だ。

「美里はまだ来てないの」

「寝てるんだろ、あいつ」

それはたぶんないと思うが、時間稼ぎにつぶやいた。待ち合わせ時刻にはまだ十分くらいある。さすがにそれまでには来るだろう。

「立村はさすがに、来ないんだね」

「あたりまえだろが。あいつは地球が滅びる最後の日が来ても絶対菱本先生のとこなんか足向けるかって思ってるぞ」

「そこまで嫌うのはちょっとねえ。まあいいけどさ。それよりあんたさ、先生とこにお土産どうするか考えてる？」

手土産のことなんかすっかり忘れていた。

「悪い、全然考えてねえよ。どうする？ その辺で買ってくか」

「いいよ、菱本先生だって気遣うじゃん。むしろ何にも持って行かないほうがいいと思うな。あの先生のことだからさ、私らが来るのを待ち構えるようになんか料理作ってるんじゃないの。それか、お寿司とってたりして」

それはないだろう。気をもたせるのは悪いとはいえ、こずえのこういった会話のうまさにはいつも乗せられてしまう。確かに菱本先生の性格上、その通りだ。手ぶらで行くのがかえって礼儀だ。母が何を考えたのか安いマジックテープタイプのスニーカーに履き替えさせたのとはやっぱり価値観の違いがあるわけだ。

蝉がその辺の木々の葉っぱを破きそうなほど鋭く鳴いている。

「そろそろ夏も終り、だねえ」

「まだまだ夏休みは続くだろが」

ずいぶんしみじみしたことをこずえは呟く。時折思うのだが、こずえは普段からくだらない下ネタをかまして周囲の頭を抱えさせてしまっているのだが、時折 こうやって力ない言葉を発することがある。修学旅行の時もたまたま四日目二人きりの夜を過ごす羽目になったが、一日中スケベなネタ攻撃と思いきや、結構真面目なことも語ったりしていて、貴史も少しだけこずえに対する認識を改めたことがあった。もっとも戻って来てから即、その改定は元に戻ってしまったが、当然のことだ。

「あのさ羽飛」

「なんだよ」

「美里、最近、変じゃない？」

横目で噂の当人がまだ現れないことを確認しつつ、こずえは貴史の自転車ハンドルに手をかけた。

「あいつ、いつも変だろうが」

「あんたら旅行した仲でしょが。本当に気付いてないわけ？」

——気付くも何も。そういう仲ってのはどういう意味なんだ？

貴史は額の汗を手の甲で拭った。垂れてきそうさ。

「聞き方替える。評議委員会での噂、聞いてない？」

「聞いてるも聞いてないも、まあなあ」

少なくとも立村からは最低限のことしか聞いていない。

例の「大政奉還」の件以外は。

もちろん今はまだ口に出すべきことではないだろう。そこんところは女子に悪いが、立村の意志を尊重してやるべきだと思う。

「じゃあ、知らないんだ」

「何がだ？」

こずえは一步横歩きし、貴史の脇にくっついてきた。暑苦しいから離れろと言いたい。

「ほらさ、評議委員会男子連中と、轟さんが夏休み中ずっと大学の学食で話ばかりしてて、美里たち女子を相手にしないって話、聞いてるよねえ？」

「聞いてなくはねえけど、それは男子としちゃあ当然じゃねえのか？」

貴史としても立村の立場上、それは当然だと思う。

まず、立村は評議委員長だ。委員長である以上、それなりに広い視野で判断しなくてはならない立場にある。たとえ恋人宣言しちゃった美里を側におきたくても、自分が「委員長」である以上セルフコントロールしなくてはならない、ごくごく当然のことだ。

たまたまとはいえ、美里を仮に側において委員会関連の行事を行えばそれなりに、

「委員長だからって、彼女はべらしとくなんてやらしいよねえ」

くらいのことは言われる可能性がある。立村のもうひとつの立場からしてもその可能性は非常に高い。だからこそ、美里をあえて遠ざけておき、プライベートタイムでしっかりいちゃつく、というのもひとつの考えとしてあるだろう。

「あっそ、男子ってそうなんだ」

「男には七人の敵がいるんだ。委員会に入ったらそうじゃねえのか」

「古風なことを言うねえ、さっすが羽飛」

どこが「さっすが」なのか理解ができないが、仮にその言葉を鈴蘭優が言ってくれたならまた気分も爽やかでいられたらうに、とも思う。

「お前に褒められても悪いがあんまり感動しねえよ、美里だってな、それなりに奴とデートとかしてるだろうし」

「してるわけないじゃん！」

まだ美里の姿が見えないのをいいことに、こずえは小声で耳に張り付くような格好でもって囁きかけた。耳元が熱くなるのは、なんというか、妙に身体もかっとなるものがある。あんまり気持ちいいものではない。

「夏休み中、評議委員会の集まりはしょっちゅうあるらしいけど、結局ふたりきりで出かけたりなんて全然してないみたいなんだよ。立村もねえ、恋人宣言しておけばあとはもうえさやらなくていいとでも思ってるのかねえ。美里には泣かれるし、かといってあいつ自身には何にも言わないし」

「しゃべってるだろ、電話があるんだからな」

美里も委員会がらみの理由をくっつけて、立村に電話くらいしているだろう。そのくらいのこともできないほど、幼稚じゃないだろうに。

こずえは首を振り肩をすくめた。

「だから、あのねえ。立村とは委員会のことだっけしか話さないの！ それ以外の話すると露骨に嫌な反応するらしいから黙るしかないって。電話口じゃあズボンの下の状態までわからないから反応してないとはいえないかもしれないけど、とにかく美里は思いっきり避けられてるのよ。ちょっとこれって、あんたの幼なじみとして、心配じゃない？ 旅行の時、何も言ってなかった？」

「全然。立村の話なんか出てこねかったよ」

問われて気がつく。美里は家族旅行中一度も、立村の話をしなかった。

——あいつらまた、ごたごたやってるのかよ。まったく世話の焼ける奴だなあこりゃ。

旅行中ははしゃいでいたけれども、青湯に戻ってきたら気が強いくせに泣き虫で愚痴っぽい美里に戻る。そのパターンは確かにないわけではない。

「古川が過保護すぎるんじゃないかねえのか？ 美里もそんな色ボケじゃねえと思うけどなあ」

「あんたさあ、人のこと言えるわけ？」

言葉を継ごうとしたこずえが、耳敏く左側を向いた。すぐに貴史から離れた。

「悪いけど、詳しいこと、あとで言うわ、美里が来たし」

気に入っているのだろう。白の袖なしワンピースに今日は肩からスカーフをセーラー風に巻いて結んでいた。ちょっとした夏の制服風に見える。こずえと顔を合わせて、

「うわあ、美里って白が似合うじゃん！ お嬢さまって感じだよねえ」

「ありがと。雑誌でマリニルックっぽく見せるテクニックって載ってたから真似しただけ。あ、それはそうと貴史、どうでもいいけど」

言われると思った。美里が頭から足までなめまわすように見た後、

「よりによってユニホーム着て先生のところ行くわけ？」

「新品だし礼儀にかなってるだろ」

「あんたねえ」

なんでそこで深く溜息を吐くのかわからない。美里のおめがねに叶わないとしてもそんなことは貴史にとってどうでもいい。とにかくさっさと菱本先生の家に向かって、即、何かを食わせてもらいたいというのが本当のところだった。

「さ、早く行くぞ」

「行く前にちょっと待って！ こずえ、先生のところ行く前にお土産買ってこなくちゃ！」

前もってこずえから話を聞いていたので、答えはちゃんと用意されている。こずえと同じことを貴史は述べた。

「あのなあ、俺たちは生徒なの。生徒だったら先生よりも金がねえの」

「でもお小遣い貰ってるじゃない！」

「それは親からもらったもんだろが。生徒が先生のところへ行く時は、むしろ何にも余計な気遣いせずに、楽しくぎゃあぎゃあやるのが最高の礼儀なんだぞ」

「それ、変よ。こずえ、あんたどう思う？」

話を振られてこずえも即答した。

「羽飛の勝ち。私も、今回は手ぶらで行くべきだと思うんだ。先生が来てほしいって言ったんだからさ、まずは何も持たないで言って、また別の時にびっくりプレゼントするとかさ」

「こずえも変よ！ だって、ちゃんと人のうちに行く時はお土産用意しなくちゃって、みんな言わない？ そういうもんじゃない？」

二対一。勝ち目なしとわかっていても美里は激しく言い張り続け、

「わかった。あんたたちが持っていかなくても、私、買ってく」

「金あるのかよ」

「あるよ、貴史みたいにこの前の旅行で私、こーんな変な服、買ったりしなかったからお遣いまだまだ持ってるんだもん。先に行きたいならひとりで行けば？ こずえ、一緒に買いにいかない？」

当然こずえもついてきてくれるものだという前で言い放ったのだろう。しかし甘い。貴史もこずえの次の返事は決まっていると読んでいた。

「悪いけど私、羽飛と一緒に先生のところ行ってる。美里、いいじゃんそんな意地張らなくたって。何いらいらしてるのよねえ」

「いらいらしてなんかない！ そう、だったら私、後で行くからあんたたちふたりで先に行けばいいじゃない！ もう、知らない！」

——知らないとか言って、それでもさっさと来るつもりかよ。

背を向け、自転車に乗り込み突っ走っていった美里の背を見送った。こずえも頷きながら、
「ま、美里にはあとで三分の一ずつお金返せばいいよね。羽飛、先に行こうよ」

貴史のハンドルを無理やり揺らした。こんなところで自転車ひっくり返されるのもなんだし、まずはさっさと菱本先生宅へ向かうことにした。何度か先生の家には遊びに行ったことがあるので、道が分からなくなる心配はない。美里も同じはずだろう。放っておいても来るだろう。

「わかった、じゃあ行くぞ、古川！ どっちが早く着くか競争するか？」

「やるやる！」

下手な会話で陰気になるよりも、こうやって下ネタ女王様の湿気を太陽で乾かすほうがずっと楽しい。美里もそのことに気付けばいいのだが。貴史は自転車にそのまま乗り込み、こずえを置いていく勢いでギアを替えた。ペダルを踏めば踏むほど、夏のコンクリートに火花散らしそうなほど勢いを増した。

青潟市美術館から菱本先生の住むアパートまでは自転車で約五分。

国道沿いのアパートということもあって、余計な道に迷うことなく到着した。

こぎれいな薄緑色の壁の、一階の部屋だった。

「先生もさ、いいかげん二階の部屋のアパートに引っ越せばいいのにねえ」

余裕でこずえとのスピード競争に勝利し達成感を感じる貴史。

敗者のこずえが息を吐きながら建物を眺め呟いた。

「空き巣に入られやすいのはやっぱり一階だし」

「家賃安いんじゃないの」

「それもあるけど、あっそっか。わかった」

髪の毛を指先で整えながらこずえがこくと頷いた。

「一階だったらねえ、彼女を連れ込んでどったんばったんしても、近所迷惑にならないかもね」

溜息吐きたいのは貴史の方だが、そんなひ弱なことは言えない。片手でばしんとこずえの頭を叩いた。本気はもちろん入れない。

「お前、菱本先生の前では言うなよ。まじであの先生怒るぞ」

「へいへいわかりました！ ったく羽飛ってばあ」

叩かれてもなぜかこずえの表情は変わらず楽しげだった。もう少し強くぶんなぐってやればよかっただろうか。あまり深いことは考えず、一階向かって右側の戸まで向かうことにした。確か101号室と住所録には書いてあったはずだ。

——101 菱本守

小さな文字が青いポストの枠に殴り書きされていた。

「じゃあ、呼び鈴押してよ」

「ああ？ 俺がかよ」

「いいじゃん、男だし」

褒められるとたとえ古川こずえ相手でも嬉しいものだ。手を伸ばそうとした時だった。

「これから子どもたちが来るんだ、後で話すからまず帰っている。あとでこちらから電話する」

「守、何度同じこと言ってるわけ？ そうやって時間延ばししてて、どうするのよ！ 私にはもう時間ないのよ！」

ドアの向こう、窓ガラスの開け放たれたところから響いてくる絶叫に指が硬直した。

こずえが貴史の手首を押さえるような仕種をする。

「ちょっと待った」

ここは当然、待つべき場面だろう。

ふたり、台所の窓から中の様子を伺った。

「ちょっと、人の子どもよりも、あんたの子どものこと考えてよ！」

三年D組の教室で懸命に生徒たちに向かい語っている青年教師の姿と同一ではないように見えた。でもその声は確かに菱本先生のものだった。違うのはその先にもうひとり、一筋縄ではない女性が混じっていることだった。よくわからないが、三年D組における立村上総以上に手ごわい相手らしい。

「羽飛、いたっけ？」

こずえの問いに答えられなかった。

「菱本先生に、子ども、いないよね？」

——いるわけねえだろ。嫁さんいねえんだから。

——修羅場だね。

「だな、クラスの女子みてえだな」

古川こずえの呟きに相槌を打ったら、いきおいよく叩かれた。

「あのさ、この状況、羽飛理解できてる？」

「痴話げんかって奴か？」

「そんな甘いもんじゃないでしょうが」

アパートの一室ではまだ、女性の激しい金切り声が響き渡っていた。

両隣および真上の住人にはおそらく丸聞こえだろう。

「あんたわかってるでしょ。いったいどうしたらいいかってことくらい、気付いてるよね！ 私が何度も電話してもうちにいないし、いたらいたで私が話し合いしようって言っても、結局『子どもたちがくるから今日はだめだ』の繰り返し。毎日毎日『子どもたち』を呼び寄せておいて、私の中の『子ども』は関係ないわけね。ここにいる『子ども』は毎日でも守に会いたって言うてるんだよ！ 今、ずっと、永遠に守といたって！ よその子どものことばかり考えて、あんたが本当に可愛がってあげなくちゃいけない『子ども』のことはどうでもいいわけ？」

これはさすがに聞かれたくない内容だろう。

「菱本先生、まさかか？」

「一目瞭然」

感情なく、こずえが答えた。

「羽飛、どうする？」

「立ち聞きするってのは卑怯だろ。ブザー押すぞ」

今度は拳骨で肩のところをぐりぐりやられた。女子の腕力だからたいして痛くはない。

「羽飛、あんた、どうなると思う？」

「どうなるったって、しょうがねえだろ」

もちろん貴史も気遣いが必要と思わないわけじゃない。どうも菱本先生の彼女がいきなりやってきて、いきなりヒステリーを起こしているのだ。また、菱本先生も学校では先生の面を見せているが、一步校門を出たらあとは一市民だ。当然、彼女だっているだろうし、それなりにいちゃついたりも、けんかもするだろう。

たまたまその場に立ち会ってしまったのは災難だが、逃げ帰るわけにもいかない。

「美里もそろそろ追っかけてくるだろうし、帰るわけにもいかねえだろ」

「あのねえ、羽飛」

こずえは貴史の片腕を無理やり引っ張った。二の腕の中間あたりをつねった。

「痛えなあ！」

「こんなに筋肉ついてるんだからちょっとくらいいいじゃないの。さ、帰るよ」

「帰るたって美里どうするんだよ！」

部屋から響く「守」と呼ばれる誰かを責める声は止まない。なぜかその合間に流れるべき男性の声はなかった。黙っているのか、打ち消されているのかわからないが、この部屋の中に菱本先生は確かにいるはずだ。黙って、一方的な罵声を聞いているはずだった。

無理やり絡む手を振り切って菱本先生宅のブザーを鳴らすほど貴史も反対する気はなかった。こずえの手前なんとなくいきがっては見たけれど、確かにあの場は菱本先生も気まづだろうし、仲良く先生生徒同士で盛り上がるわけにもいかないだろう。ここはやはり、出直してくるのがベストな選択に思えた。

ただ面白くない。

決断を下したのが、こずえということがだ。

アパートから離れ、まずはこずえに一言、

「暑苦しい、離れろ」

腕を振りつつ伝えた。

「いいじゃんちょっとくらい、恋人気分味あわせてよ」

「あれを観た後でお前もよく言えるよな」

悪いがこずえのイメージする「恋人」と、男子連中の考えるそれとは全く異なる。貴史からすれば「恋人」というのはイコール束縛に他ならない。友だち同士の恋愛話を聞かせてもらえればそういう認識は、自然と形作られるもの。甘く幸せなイメージよりも、日々バトルと化す男女それぞれの価値観のぶつかり合いが重苦しそうだ。

仕方なさにこずえは貴史から離れた。自転車の鍵を外し、貴史の隣に並んだ。二人で道を占拠する格好で、時折すれ違う通行人が窮屈そうにすり抜けていく。ハンドルがあっという間に太陽に熱せられて握るだけで手の平が汗で濡れる。

「まず美里が来るのを待とうよ。たぶん、スーパーで買い物してから来るはずだから、同じ道を通ってここまで来るよ」

「違う道を通ってくるかもしれねえぞ」

もちろん美里の性格上そう思わざるを得ないところもある。

ただこずえに言い切られるのがかなり面白くない。

「じゃあ待ってようよ」

言い返すのが面倒で、貴史は黙って自転車を通りすがりのパチンコ屋駐車場に留めた。

腹が鳴る。

「ちくしょう、腹減った」

「ガム、あげようか。ストロベリー味だけど」

「いらねえ。腹持ちのいいもんが食いたいだけだ」

あっそ、とこずえはバックから出しかけたガムをポケットにしまった。一枚だけ手元に残したガムを口に放り込んでいた。口元をくちやくちやくやっている様子を見ていると、さらに空腹感が胃に刺さった。

——だから、苦手なんだわな。

こずえは決して悪い奴ではない。むしろ気心の知れたいい女だとも思う。

三年D組の下ネタ女王であるとともに、敵を作りやすい美里の側でフォローしつづけているその姿は、素直に尊敬できる。いきなり「羽飛、今朝のマヨネーズ どうだった？ よく絞れた？」などとかまされると頭突きしたくなることもある。こういう軽口叩くことのできる女子の存在というのは貴重だし、さりげなく円滑に進むように立ち回ってもらえるのもありがたい。へたしたら美里が一部の女子たちから集中砲火を受けそうになっても、そこをうまく防弾ジョッキの如くくつついてくれているのがこずえだった。

立村に対してもそうだ。「あいつは弟にそっくりだから」はこずえの口癖だが、毎日手間のかかる弟をしっかりと仕込み直そうとやっきになっているのが妙に笑える。たぶん立村に対する性教育の約七割方はこずえが行ったに違いない。

——けどな、やなんだな。

性格がいや、というわけでは決してない。そんな奴と曲りなりにも一夜……誤解を招く表現だが……を過ごすことはできない。同じ部屋で二人きり馬鹿話なんてできやしない。

隠すことなく入学当初から貴史にラブコールを送ってくるのにも、今はもう慣れた。

それでも、なにかがひっかかる。

貴史はこずえに手を出した。

「悪い、やっぱり食うわ。腹干からびそう」

「最初っからそう言えばいいのにねえ！」

してやったり、勝ち誇った表情でもって、こずえはガムをバックから取り出した。

もったいぶって、一枚指先に引っこ抜き、キスをガムのつつみ紙に。

「私の愛と一緒に、めっしあがれ！」

「うわ、重てえな」

笑って流した。口に放り込み奥歯で噛んだ。なんだろう、この激しい苛立ちは。原因なんてどうだっていいが、妙にきりきりする。

「あ、美里来たよ」

気の抜けた声で、こずえが指を指した。

「早く迎えに行っちゃんなよ」

口の中に広がる甘ったるい唾を飲み込み、貴史はこずえの指図通り、自転車を全力で漕いできた美里に手を振った。同時に近づいた。

「あれ、貴史たちここで待ってたの？」

「いや、ちょっとな。のっぴきならねえ事情があつてなあ」

「なあに？ 何か忘れ物したの？ あ、私買ってきたの、冷たいゼリー—なんだけどちゃんとドライアイス入れてもらったからまだ溶けてないよ。たくさん買ってきたから、四人でちゃんと三個ぐらい食べられるよ」

一方的に喋り、途中大きく呼吸してはまたまくし立てる美里の顔を見た。

「あのな、美里」

嘘は言わない。貴史と美里、それが互いの繋がりで。

「菱本先生とこにな、女が乗り込んできてて今、修羅場。ってことで脱出してきたってわけ」
確かに、事実ではある。

「どういうことなの？」

ドライアイスをびっちり詰め、かなり重そうなビニール袋に貴史は手を伸ばした。

「お前買いすぎだろ。こんなに食べねえだろ」

「いいじゃない！ あんたいつも十個くらい一気に食べるじゃない」

言い返した後、首を傾げた。汗だくの額から涙のように一滴流れた。

「修羅場って、何かあったの？」

「そ、今すげえ怒鳴られてる」

詳しく説明してやろうかとも思う。どちらにせよ、こずえの一存で一時退却したのだから、三人揃ったところで今後の行動計画を改めねばならない。

まず改めて菱本先生の家に向かい、そ知らぬ顔して「こんちわー」と叫ぶか。

それとも黙って帰って、あとで言い訳するか。

貴史としては前者の道を選びたい。かえって土壇場のキャンセルの方が、先生だって面白くないだろう。たとえ彼女に乗り込まれていたとしても、だ。

「ねえねえ、何があったの？ 菱本先生に彼女、やっぱりいたんだ？」

「あの歳でいなくちゃなあ。母ちゃんたちも気、もんでただろ」

「でねでね、貴史、彼女ってどんな人？ 可愛かった？ 美人だった？」

重たいビニールの手提げを持ち直した。

「顔はわからねえ、ただ、声だけだ」

「えー、じゃまだ、挨拶してないの？」

こずえが駆け寄ってきた。自転車は置きっぱなしだ。

「美里、ちょっと、説明するから」

ふたりの間に無理やり割り込む格好を取り、こずえは肩を竦めた。

「ねえなあに？ 貴史が言ってた修羅場って？ 先生、どうかしたの？」

「うん、ちょっと用事があったみたいで、まだ彼女さんと話してるみたいなんだ」

こずえはさらさら述べた。

「そうなんだ」

「けど、話し合いが長引きそうだし、私たちは今日、おじゃましちゃいけないと思うんだ」

「ねえねえ、どんな話してたの？」

美里に聞かれてこずえが黙り込む。言えればいいんだ、

「子どもがどうか」

言いかけたところでこずえがきつと睨んだ。

「そんなのわかるわけないじゃん。彼氏と彼女なんだよ。身体の相性の話かもしれないじゃん！」

——子どもがどうのこうの、だろうが。

口には出せなかった。こずえが貴史の持っているドライアイスセットのゼリーを引っ手繰ると素早く取り出し貴史に手渡したからだった。それも三個ばかり。

「さあ、召し上がれ。悪いけど今日はキャンセルしようよ。うちら三人組で夏の遠足しようってことで、いいじゃん」

「おいおい」

「で、私がこれから電話かけるからさ。美里、悪いけどちょっとそこで待ってて。羽飛に先生へごめんメッセージ伝えさせるから」

美里が近づいてくるが、こずえはきっぱり命令した。

「自転車三台あるじゃん。さっき美里、買い物してきてくれたばかりだし、少しここで休んでなよ。私も役得だしね」

そんな言い訳、誰が信じるか。無理やりひっぱられ、片手のゼリー三個分を取り落としそうになりつつ貴史はこずえに連れられていった。赤い電話ボックスだ。

歩きながらこずえは呟いた。

「羽飛、美里の前で、赤ちゃんのことは言っちゃだめだよ」

「なんでだよ」

赤ちゃんのこと？と言われてもぴんとこない。そういえばさっきの女性もやたらと「子ども」を連呼していたが。

こずえの声トーンが落ちた。頬が真っ赤にいつのまにか焼けている。

「美里ってめちゃくちゃ潔癖じゃん。もし本当のこと知ったら、美里、絶対、菱本先生に普通の顔して接することできないよ」

「接するって、なんだよ？」

全く見当がつかない。貴史が尋ねた。

「第一なあ、本当のことったら、なんだ？ 菱本先生のことを『守』って呼ぶ彼女がいるってことだけだろうが」

「あんた何にも話、聞いてなかったのかなあ」

テレホンボックスの前で立ち止まった。

「あの彼女さん、なんでいきなり先生の家に来たかわかる？」

「だから、彼女だからだろ」

「彼女がなぜ、彼氏に『来るな』って言われているにも関わらず来ちゃったの？」

「それはお前の方がよくわかるだろ」

黙ったこずえが無表情のまま目線を貴史にむけた。

「そうだよ、わかるよ」

首を思いっきり振った。

「だってあの彼女、妊娠してるんだよ。教え子の『子どもたち』よりも自分のおなかの中にいる『子ども』って言ったじゃん」

「なんでだよ」

目眩は暑さのせい。足元がふらつく。こずえは畳み掛けてくる。

「それにさ、菱本先生、うちらが三人遊びに来ること知ってるじゃん。ってことは、彼女自慢でもする気なければ、呼ばないよね」

その通りだが、頷くのはいやだ。こずえに頷きたくない。

「なのに、いる。彼女はいるんだよ。どうしてだと思う？」

貴史の返事がないのを了解の合図と取ったのか、こずえは答えを口にした。

「菱本先生、彼女を妊娠させちゃったんだよ。結婚してないのに、先に赤ちゃんできちゃったんだよ。けど、彼女と話し合いがすんでなくて、おっかけられてるんだよ。決着つけろって言われてるんだよ。きっとさ」

「おいおい、古川お前想像力、どこまで広がるんだよ」

「想像力の問題じゃないよ。あの時の彼女の言葉が正しければさ」

こずえは肩越しに美里を覗き込むようなしぐさをした。左側に身体を傾け、すぐに戻した。

「美里の性格、あんたよく知ってるよね。女の子を大切にしないで、妊娠させちゃって、しかも結婚を迫られている担任の先生を、美里が尊敬できると思う？ 百歩譲って、『愛し合ってるから赤ちゃんができた』って言うならまだ納得するかもしれないけどさ。今の菱本先生の状況だと明らかに」

「予定してなかったってことかよ」

「そう。彼女は菱本先生にできちゃった結婚を迫ってる。菱本先生はうちらが遊びに来ることを理由に彼女から逃げようとして時間稼ぎしてる。けど彼女はそれを見抜いて、乗り込んできて、イエスかノーかを答えさせようとしている。そういうことよ。どうする？ そんな深刻な話をしている相手にだよ。ゼリー持ってるのこのこと遊びに行けると思う？」

黙るしかなかった。

「立村と違って美里は菱本先生大好きじゃん。なのに女にだらしなくて妊娠させちゃってパニックになっちゃってる馬鹿な男だってこと知ったら、きっと軽蔑するよ。美里は男子にまだ夢みてるからね。男ってしょせん、結婚なんてしたくないんだってこと、私は知ってるけど美里はそんなこと思ってもみないからね」

「じゃあ聞くがな、古川」

貴史は押し止めるため、尋ねた。

「お前、どうしてそこまで想像できるわけ？」

「当たり前じゃん」

平然としてこずえは答えた。

「うちが、似たような形だったからねえ。見慣れてるんだよね。父さんと母さん、私をおなかに持った時、同じようなやり取りしたんだって。結局父さんが年貢を納めたのは弟ができたからね」

——ああ、んなこと言ってたな。

確かこずえの母は、青湊歓楽街のキャバレーでナンバーワンホステスの座を守りつづけてつ、暖かい家庭を気付いている女性だと。修学旅行の時、こずえの自慢話として聞かされた記憶がある。ちゃんと父もいるという話を聞いた。

——けどそれとこれと、どう繋がるんだ。わっけわからねえ。

「じゃ、私、菱本先生に電話かけてくるから。悪いけど十円貸して」

手を出しおねだりするこずえに、貴史は朦朧とした意識のまま、十円玉を手渡した。

「せんせーごめん！ 美里がさあ、風邪引いちゃって寝込んでるんだよねえ」

手馴れた口調でこずえが受話器に話し掛けている。左手で受話器を、右手で貴史に手のひらを差し出している。十円の要求だ。めずらしく赤電話である。

「ってことで、羽飛と私とふたりで行くのもなんかあれだし、じゃあ明日とかあさってにもっかい行っていいですか？」

側に美里がないのをいいことに、嘘八百並べ立てている。

——あとでどういう風に言い訳するんだろうな。

その場の乗りだし、事情を詳しく説明すれば美里も納得するに違いない。

しかし、機転の利く女子だ。

「じゃあ、来週よろしく！」

それでいて、しっかり相手が受話器を置くのを待ってから電話を切っている。

「やっぱ、マナーじゃん」

別に口に出したわけではないのに、わざわざ説明してくれる。ふたり、蒸し風呂状態の電話ボックスから脱出し、追いかけてきた美里に近づいた。

「私が連絡するつもりだったのに！」

ぶんむくれている。貴史が言い返す。

「全部古川が処理したから、お前もう口出すな」

「何よその言い方。けど、菱本先生、大丈夫なの？」

いくらごまかしたとはいえ、やはり女子の直感でぴんとくるものはあったのだろう。こずえが首を振って、目をきよろきよろさせた。

「腹へたって騒いでいる奴が約一名いるし、まずは食料補給しようよ。美里、そこのファミレス行こうよ。パフェ、食べよう！」

——昼ご飯をお前ら、パフェで済ませるつもりなのかよ。

すでに頭の中では、ハンバーグステーキのセットを食わないことには納まらない貴史。

女子ふたりの発想には正直、ついていけない。

自転車をファミリーレストランの駐車場に付け直し、まずは貴史が先頭で入り口を覗き込んだ。昼ちょうど最も込む時間帯だけあって、入り口まで待ち人が溢れている。空腹状態だけに、みないらだっている様子が伺える。しかたない。並んで待つ。

「ねえねえ、何があったってのよ！ もう、ふたりともわけわかんないことばかり言うし！ 私ばかり仲間外れにしないでよ！」

「してないじゃないの。座ったら話すよ。それよかさ、美里、羽飛んちとの家族旅行、いろいろあったんじゃないの？」

貴史の背で美里とこずえがかしましく語らっている。

「なんも、ないよ。ね、貴史？」

「ああ？」

いきなり振られたので曖昧な返事しかできないが、美里が顔を見ながら何度も頷くので、
「まあな」

あっさり答えておいた。

「そうだよ、なんも旅行中面倒なことなくて。こういうことって珍しいよね」

「あ、そういうことか」

美里の言う通りだ。家族旅行は一切何もトラブルが起こらず、父曰く「旅行じゃないみたいだ」との名言ありの静かな結末に終わった。無事で何よりといえばそれまでだが、本当に何も無いのは、普段の心がけがよいのか、それとも馴れ合いなのかわからない。

「交通渋滞にもね、一度もひっからないし、どこ行ってもすぐに美味しいお店に入ってすぐ座れたし。天気もよかったし。こんな平和な旅行って私、初めてだもん」

「でさ、泊まった部屋はどうだったのよ？ 男女混合？」

やはりこずえのつつこみは下ネタにからむというわけだが、予測済みでもある。

「あほか。俺たちだけじゃねえだろ、父ちゃん母ちゃん姉ちゃんたちもいるんだぞ。できるかそんなの」

「じゃあ、美里だけだったら別だったんだ？」

「こずえ！」

「あのなあ、古川。お前もわかるだろ。親友の彼女に手を出すほど俺も女に不自由しちやいねえよ」

背中をまた叩く。薄いシャツだけだとこずえの手型が見事に残りそうだ。

「いってえなあ」

「親友、ねえ。まいっか。羽飛の操は守られてるってわけよね」

「当たり前だ。俺の愛は優ちゃん一筋だ」

わざとらしい溜息をつき、美里がこずえに話し掛けた。

「あのね、貴史、こういう奴だってわかってるでしょ。行き帰りの車で流れているテープ全部、貴史の鈴蘭優ベストアルバムばかりなんだから。あ、そっか、そのことくらいかな。不満が出てきてたのは」

「なんだよその不満ってのは」

「お姉ちゃんたちが言ってたよ。やっぱり違う曲も聴きたいって。あんたはロリコンだからしょうがないけどさ、女子からするとああいうぶりっこっぽい女の子、むかつくに決まってるじゃない」

「おい、美里、今の発言聞き捨てならねえぞ。もっかい言ったら殴るぞ」

「だから、旅行中誰も発言しなかったのよ。けんかしたくなかったからよ。そのくらいは気、遣ってたんだから。気付かなかった？」

旅行ネタでしばらく立ち話をしているうちに、列がだんだん短くなり、ようやくウエートレスのお姉さんと対話できるところまできた。

「三名さまですね、テーブルにご案内します」

ちょうど家族連れの四人席が空いたようで、すぐに案内された。まだテーブルの上にはお子さまランチの跡と思われる日の丸旗つきの食器が放置されている。ウエートレスがいそいで片づけ、ふきんでテーブルを拭いた後、水とメニューを置き去って行った。

「最初から決まってる。ハンバーグステーキ。もちろんライスでセット。お前らまさか」

「そ、そのまさか。パフェとケーキのデザート尽くしでいくよ。美里もそうするでしょう」

「もう、暑くて、重たいもの食べたくないもん」

どでかそうなフルーツパフェのどこが軽いのかと突っ込みたくなる。こいつらふたりは、甘いものなら平気で平らげる胃袋の持ち主だ。

「誰も迷ってないってのが、すごいよね」

どこがすごいかわからないが、こずえが呟いた。すぐに手を振りウエートレスを呼び寄せ、手際よく注文を済ませた。

「親がいるとき、こういう風にデザートだけ食べられないじゃん。かならずなんか食事しなさいとか言われるしね」

「わかる！ そうなんだよね。こっちは夏ばて気味だから冷たいものだけにしたいのに」

「貧血起こしてぶっ倒れるぞ。それともお前らダイエットしてるのか？」

思わずつつこむと、ふたりとも顔を見合わせて気まずそうな表情を浮かべた。

「羽飛、あんた女子にもてない理由がよくわかったよ」

「なんだそりゃ」

「女子に対して、ダイエットの話題は禁句だって」

美里が隣で頷いている。改めて貴史は美里とこずえを交互に眺めた。もちろん、がりがりとは言わないが、どう見ても太っているとは思えない。美里に関しては一度背負ったことがあるからわかるが、見た目よりはるかに軽い。こずえにしても小柄だし美里よりは細い。

「お前らなあ、これ以上やせてどうするんだよ。俺がダイエット必要だと思うのは奈良岡のねーさんくらいだが、あいつ全然やせようなんてしてねえじゃん」

三年D組の肝っ玉母さんこと奈良岡彰子に関しては、必要性を感じないわけではないが、それでもあれだけのモテモテぶりを見れば体重にそんな拘ることもないんじゃないかと思う。

「彰子ちゃんは別よ。でも、甘いものやめておせんべいにしようって言ってたよ」

「へえ、やっぱりあいつも気になるのか」

「ううん、健康のためだって。お医者さんになるには自分が健康でなくちゃだめだから、管理してなくちゃって」

彼氏の南雲に媚びるためではないというわけか。その点については感心した。

「南雲くんには好かれたいからじゃないのよね」

「まあねえ、南雲の奴、もろ彰子ちゃんにめろめろだから」

女たらしの三年D組規律委員長、南雲秋世の話題についてはむかつく一方なので聞き流した。力づくで話を変えた。

「それよかな、美里、立村に土産、買ったんだろ？」

当然だろう。恋人宣言されてからひと悶着あったらしいがそれはいつものことだ。旅行中もさすがに親の手前聞いたりはしなかったが、当然何かかしら購入しているだろう。なんてたって彼氏なのだから、当然だろう。

美里は首を振った。

斜め向かいのこずえも首を傾げながら問い掛けた。

「美里、あんた立村に土産買わなかったの？」

「だって、言ってないもん」

「旅行のことをかよ。俺話したぞ」

「そう。貴史がしゃべってるなら、私の方から言わなくてもいいかなって」

全く訳がわからない。

「そりゃ変だろうが。あいつもふうんって聞いてたぞ。清坂氏も行くのかってな」

「興味なさそうだもん」

「はあ？」

「それに、お土産買っていったら立村くん、絶対気を遣っちゃうよ。今度何かあったら、なんか変なもの持ってくるし」

「変なもの？ なんだそりゃ」

美里が口籠もる。助け舟を出したのは美里の親友たるこずえだった。

「ほら、羽飛も想像つくじゃん。立村が女子向けに選ぶ土産ったらどんなもんだと思う？ 修学旅行でも見てたじゃん。普通買わないよね。大きな手鏡とか、民芸品の可愛い人形とか、ちりめんの袱紗とか。そんなの、いらないとは言わないけど、ちょっとねえってものあるじゃん？」

だいたい想像がついた。立村の土産選びに関する感性については、貴史も確かに疑問符がついてしまう。あまり貰ってもそれはどうか……と首をひねりたくなるものが多い。奴の育ちもあって日本文化に縁のものを選ぶ傾向があるようだ。しかし永年美里の好みを見据えてきた貴史にはわかるのだ。悪いが、美里の好みは洋物だ。

「そんな凝った物じゃなくたってさ、たとえばちょっとしたお菓子でいいんだよ。お金かけなくていいのにさ、なんかあいつ、勘違いしたものいっつも買ってくるんだよね。杉本さんに対してもそうだしさ」

「杉本って、あああの子か」

ちょうど先にハンバーグステーキが運ばれてきた。ふたりの眼が鋭く光る。

「すごい量だよね。ご飯、大盛りにしたの？」

「当たり前だろ」

「うわあ、貴史、あんたこんなに食べたら、おなか痛くなっちゃうよ」

「お前らの方こそ冷たいもの食って腹壊すじゃねえよ」

待ちに待ったこのジューシーな香りがたまらない。一気にナイフとフォークで肉のみ一気に食いまくり、食欲一本に専念した。

「脂っこいよねえ」

こずえがにやにやしながら貴史の食いつづりを眺めていた。

男はやはり、肉食が常なのだ。アイスなんかじゃ納まらない。

食事中は大抵、余計な口など挟まず女子たちのしゃべりたいようにさせておく。

食うこと以上に最優先すべきことなど何一つないからだ。

貴史がかぶりついている間、女子ふたりは水を半分以上減らしながら立村の噂話に専念していた。まあ、貴史の前だから、というのもあるのだろう。事情通である立場だし、聞き流しつつもポイントは押さえておいた。

「立村くん、夏休み中は親戚の家に泊まりに行くらしいって話、聞いたことあるけど詳しいこと全然教えてくれないの」

「なんで言わないんだろうね」

「私も、聞いちゃまずいかなって思って、聞かないけど。でも一言くらい話してくれたっていいのよね。今回の家族旅行に誘ってみたけど無理だって断られたし」

「え？ この旅行に？」

——じゃあ知ってるってことじゃねえか。

矛盾しているが聞き流す。口に物が入っている間は余計なことを言う気なし。

「どうせ断られるだろうなって思ったけど、けんもほろろって感じ。それに、終業式のあと評議委員会の関係で顔を合わせたりはしてるけど、それっきりだし。あ、でも評議委員会合宿が来週あるから、そこでは会えるかもしれないけど、でも」

また美里はふくれつつらで頷いた。

「無理、絶対無理。立村くん、評議の仲間という時は男子以外と話してくれないもん。いろいろ忙しいことはわかってるし、私も余計なこと言わないようにしてるけど」

——そりゃまあそうだろう。女子の相手なんかしてる暇、奴にはねえだろ。

評議委員会の裏事情を知らずも知った貴史には、立村の立場がよくわかる。

青大附中の「大政奉還」問題を片づけていくにあたって、美里は邪魔だろう。

「だから、私も何も言わないでおくの。旅行のことも言わないし」

「じゃああんたたちデートはしてないわけ？」

「するわけじゃないの。だって立村くん、ずっと」

言葉を切った。俯いた。

「立村くん、ずっと杉本さんのいるところに通ってるもん」

「ちょっと、それ、まじ？」

通っているとは初耳だ。

もちろん貴史も、一年下の元女子評議・杉本梨南の存在を知らないわけではない。

さまざまな人間関係のトラブルを起こし、周囲の輿論を買ったあげく評議委員会から追い出されたという曰くありの女子のことだ。なぜか立村は、杉本梨南が入学以来やたらとまとわりついている。

——けどその間に立村の奴、美里と。

美里と曖昧ながらも交際開始した時期と若干重なる。確か六月の半ばくらいだったはずだ。D組男子連中が全力でサポートし、最終的には立村の密かなる美里への想いを告白させるところまで持っていったはずだ。立村も以前より美里のことを心憎からず想っていたのは、貴史の目から見ても明白だった。美里の気持ちは言うに及ばず。なら、応援するのも自然な流れだろう。D組男子もそのあたりについては反論する奴がひとりもおらず、あっさりカップルを誕生させる方向に進んだ。ひとり、貴史の言うことに反発した野郎がいたのも事実だが、実際結果としては滞りなかったはずだ。

もっともその後続いたさまざまな恋愛トラブルについてはノーコメントとしておく。

むしろ、交際一周年を迎えるだけ続いていることのほうが、凄いことだと思う。

その間に杉本梨南の存在が見え隠れしているらしいが、同じ女子評議だった美里が珍しく大人の対応をしていたようで、女子同士のいがみあいなども全くないようだ。むしろ、妹のように可愛がっていて、こずえも追随している。どこぞの恋愛三角関係などとは全く縁のない、のどかな関係が今はまだ、続いているはずだ。

はずだが、やはり美里の内心は複雑なのだろう。想像はつく。

——だったらさっさとやってやりゃあいいのになあ。立村の彼女は自分だってな。

——こんなとこでうじうじやってるよかな。

美里もいつもだったら言いたいこと言い放って決着つけそうなものだが、立村に関してのみはどうも異なるようだ。

「でも、しょうがないってわかってるよ。私だって。杉本さんの立場、可哀想すぎるもん」

いつまでたってもパフェが届かない。美里の愚痴も終わらない。

「親友ぶりっこしてた佐賀さんが、杉本さんからむりやり評議委員の立場、奪っちゃったし、それにせっかく水鳥中学との交流会準備のグループに参加させようとしたのに、担任の檢山先生からダメ出しくらっちゃったし。杉本さん、ひとりぼっちなんだもん。酷すぎるよね。私だったら、直接文句言っちゃうのに。けどそれも立村くん止められてるの」

「おい美里、それ俺、聞いてねえぞ」

いったい何を止められているというのだろう。全く理解不能だ。

美里は貴史の、半分以上消化された黒い皿に目を留めた。

「もうそんなに食べたんだ」

「質問に答えろよ」

「パフェ、遅すぎる！」

片手のこぶしで軽くテーブルの端を打った。またもやこずえが割り込んで補足説明を行う。

「美里、おなかすいたからって狂暴にならないで。つまりね羽飛、美里が言いたいのは、杉本さんのトラブルについて本当は美里も相談にのってあげたいのに、立村からそんなことするなって止められてるってこと。わかる？」

「そういうことか」

水が足りない。こずえが「おひや、すいませーん！」と手を上げてアピールしている。
「奴もいろいろ考えるところあるんだろ。美里、邪魔すんなってことだろ」
「私、邪魔してない！ いっつもそうだよね！ 立村くん、私が首つつこむとみんな壊れてしま
うみたいなこと言うんだよ！ この前の彰子ちゃんと南雲くんのけんかのことだって！」
「騒ぐな、俺の愛しいハンバーグがまずくなる」
「あんたのハンバーグなんか知ったことじゃないわよ！ もう、何にもみんなわかってくれない
んだから！」

「お前、こんなところでいきなり立村の愚痴並べ立てるのもやめろっての。第一あいつだって今
、死ぬほど忙しいんだってこの前話しただろ」

「貴史に言われなくたってわかってる！ けど私だって、役に立ちたいって思ってるのに。杉本
さんの件だって、本当は男子が割り込むよりも女子が中心になって面倒みたほうがずっとうまく
いくんだよ！ それなのに、立村くんひとりがじたばたしてて」

なんだか女子の発想は理解できそうにない。素直に言えばいいのに。

「お前な、杉本に妬きもち妬いてると認めろよ。それが先だろが」

「そんなんじゃないって！」

こずえがまたもや間に入ろうとするが、美里がハングリーパワーで言い返す。いいかげんパフ
ェなりなんなり美里の前にサブされない限り、この愚痴は止まりそうにない。

「妬いてなんてないよ！ そんな、たまたま私、立村くんと付き合ってるからって、そんな後輩
に嫌がらせするなんて、性格悪くないよ。そりゃ、性格、私、悪いかもしれないけど、でも、そ
んな汚いこと絶対にしない！ いじめたり、馬鹿にしたり、そんなことする奴をやっつけてやり
たいだけなのに、けど」

「ああ分かった。美里の正義感はやーくわかった。立村が心配してるのはそこだろ」

「何よ？ 貴史に何わかるっての？」

幸い、ハンバーグステーキで貴史のエネルギーは満タンだ。割り込むはずのこずえが不意に貴
史へ意味ありげな視線を送ってきた。好意満タン、こういう時なら気持ちよく受け取れる。

「立村が一番めんどくせくねえやり方で片をつけただけだろ。美里に手を出されたら、また他
の連中が騒ぎ出して修羅場になりかねねえだろってな。悪いが男の世界に口は出されてくねえも
んなんだよ。そのくらい気付け」

「けど」

美里のすねた顔よりも、心なしか尊敬の念を込めた視線のこずえに戸惑う。でも続ける。

「さっきだってな、なんで俺たちが菱本先生の玄関前から即、退去したかっていうとだ。ちょう
どタイミング悪く先生の彼女らしき人がいてだなあ」

「そうだよ、デート中だったみたいなんだよね」

いきなり話をぶち切られた。もちろん相手はこずえだ。むかっとくる。違うだろう、修羅場だ
ろう。美里がぼかんとした顔でこずえに向き直る。

「デートなの？ でも、今日私たちが行くってことに決まってたよね」

「うん、そうなんだけどね。ちょっと耳貸して」

なにやらひそひそ囁いた。みるみるうちに美里の眼が見開かれた。

「ええっ？ そうなの？」

「そうなのよ」

貴史に視線で「黙ってな」光線を送ってきた。仕方ない、受け止める。こずえなりに美里への対応を考えているのだろう。

「ちょうど、菱本先生、男になりたかったみたい」

下ネタ女王、いったい何を考えているのだろうか。まさか、その場でどったんばったんやっていたとでも囁いたのだろうか。いや、それだったら美里の顔がもっと引きつっているはずだ。あとで確認しておくべきだろう。

「そんな現場、だったんだ」

「そうよ。プロポーズの真っ最中らしくて、そんな時に私たちが割り込むわけ、行かないよ。美里と一緒に居てもきっとそう思うよ」

——嘘も方便かよ。

つらとした顔でこずえは法螺を吹く。

「だから、私たちは今回ちょっぴりご遠慮したってわけ。さっき貴史が修羅場だとかなんとか言っていたけど、そりゃあそうだよ、彼女の立場からしたらそりゃあ、不安になるに決まってるよ。びっくりするに決まってる。それに、結果もどうなるかわかんないじゃない？ 彼女もいろいろ考えて、結婚しないことにするかもしれないし。結果はどうでもいいじゃん。とにかく今、菱本先生、男として正念場だからね、私たちは見守るだけよ」

——よくもまあ、舌が廻るよなあ。

本来、嘘つきは好きじゃないのだが、美里の性格を踏まえるとこれも仕方ないだろう。

——まさかな、腹ぼっけにさせちまって、責任取れって騒がれてるなんてなあ。言ったらそりゃ、別の意味で修羅場、だよな。

タイミングよく、やっとフルーツパフェとチョコレートパフェが並べられた。

会話は当然、美里とこずえ、ふたりの食欲に断ち切られた。

しばらくもくもくとパフェに取り組むふたり。

こずえの見事な手さばきには感嘆する。

「プロポーズ現場」に遭遇してしまったならやはり、心ある者なら遠慮するだろう。

もちろん決定後にはひゅーひゅー攻撃するのも悪くはない。

しかし万が一、しくじった場合のことも設定し、

「あえて知らん振りをしようね」

と口裏あわせておけば、それはそれで流すことができるというわけだ。

真実命の美里でも、仮にこの場で、

「菱本先生ってスケベで女の敵よね。全然避妊しなくって彼女をはらませちゃって、責任取れってヒステリー起こされちゃって、何も言い返せないでおろおろしてるの。なっさけない男よね！

」

などこずえにまくし立てられたら、どういう顔で今後菱本先生と接するかわからない。

下手したら彼氏の立村と……こいつも打倒！菱本守主義者だ……手と手を取り合い、三年D組最後の反乱を企まないとも限らない。美里としてはもちろん、立村と運命共同体になれば嬉しいだろうし、まあ立村も惚れてる女子に共感してもらえるのはまんざらでもないだろう。ふたりのハッピーエンドのためにはベストかもしれないが、しかし。

——三Dのためには、古川のやり方がベストなんだ。

たぶん美里は、菱本先生の結婚決定報告がはっきりしない限り、口にはしないだろう。そういうことについては堅い性格だ。また菱本先生もまさか、自分の男振りを下げる一幕を生徒たちにも見られていたとは気付いていないだろう。秘密は貴史とこずえのふたりが口を噤んでいれば守られる。もちろん貴史も、ばらすつもりはない。

——けどなあ、なんだこの、脂っこさは。

さすがに油ものを食うと、ちょっぴり胃が重たくなる。

「ってことで、今の話、内緒にしようね！ 貴史、あんたもね」

「あたりまえだが。言っとくが立村にも、時期が来るまで言うなよ」

美里は大きく頷いた。

「当たり前じゃない！ 立村くんは菱本先生の弱み教えたら、二学期以降とことんそこ突こうとするよ。立村くん、本条先輩に全部やりかた教えてもらってるもん」

パフェはまだ残っている。油のねばねばを少し取りたい。貴史は真新しいスプーンを手を取った。まだ残っているのはこずえのチョコレートパフェだが、正直あまったるそうだ。だったらひとりしかいない。

「美里、一口分ける」

「やあだ」

「じゃあ、バナナよこせ」

「自分で注文しなさいよ！」

「さすがに俺もこれ以上食べねえよ」

美里が手でパフェグラスを押さえようとする。上が空いた。隙あり、貴史は素早くスプーンをグラスに刺し込み、見事バナナとアイスとスポンジの三セットを掬い取った。

「羽飛、そんなに食いたいなら、私の分けるのに」

こずえの好意はありがたいが、遠慮した。

一口で十分、口の油がすっきり抜けた。

「じゃ、悪い、先俺帰るわ」

「え？ 貴史、どうしたのよ」

「羽飛、なによいきなりのお暇、どうしてよ。せっかくなんだからもっと語ろうよねえ」

パフェだけで満足してしゃべりまくっている美里とこずえを置いて、貴史はファミリーレストランから出た。

——しかし、暑いな。

別にけんかしたわけでもない。女子相手に語り合うことがどこかの誰かみたいにしんどいわけでもない。美里と一対一だったら二十四時間オールいけるだろう。

ただ、今だけはちょっとしんどかった。

男子ひとりに女子ふたりのバランスも、いつもならばそれなりに楽しめるはずだった。できれば立村あたりが助っ人に入ってもらえればちょうどよかっただろう。この四人でだったら、気楽だったはずだ。

なのに今、妙に居心地が悪い。食べすぎたステーキが今になって胃に響いてくるのと同じだった。あまりいい油使っていないのだろう。食べているうちは至福の時なのだが、その後妙にむかむかしてくるのはなんでだろう。

極楽だったクーラー空間から抜け出して、貴史はひとり自転車を漕いだ。

もちろんそのまま家に帰るつもりなどなかった。

仕切り直しでまた、菱本先生訪問計画を練るのもまた一案だが、どうもそんな気になれないのは太陽がでかすぎるせいなのだろうか。わからない。背中が焼けて、網であぶられた海老のようにひょいと飛びあがってしまいそうだ。

——ゲーセンでも行くか。それとも。

たいてい仲間でボーリングかバッティングセンター、プールかついでに海。とにかく身体を思いっきり動かせる場所に出かけるのが貴史のパターンだった。こんないい天気が続くのに、薄暗いゲーセンで不毛な時を過ごすのは性に合わない。それでも全く行かないわけではなくて、たとえばひとりでこんな時、ふらふらとでかけたくなることもある。

——女子連中を連れて行けるとこじゃねえしな。

貴史は青潟駅に向かおうとして、ふとペダルを漕ぐのをやめた。

——女子なんか連れてかねくてもいい場所というのだ。

思いついたところがある。

今の貴史でないと、行けない場所だ。

——菱本先生のうちだ。

さっき美里たちに押し付けられたゼリーの袋が半分自転車の籠に納まっていた。

炎天下の中出しっぱなしだったので、下手したらもう腐りかけているかもしれないが、まあ大丈夫だろう。冷やせば食えないこともない。手土産にはちょうどいい。

いきなり思いついたわけではない。周りがどう思っているかは知らないが貴史は結構物事の筋道を考えるタイプだった。美里とこずえが菱本先生の彼女事情についていろいろ妄想たくましく語っている間に、貴史は自分なりの意見を形作っていた。時折くちばしを挟みつつも、やっぱりこずえの迫力ある発言に言い返すのも面倒くさくなり、最後は聞き役に回った。大抵立村が混じっている時はその役割を奴が受け持ってくれるので、貴史はいつも攻撃態勢で居られるのだが、どうも今日はそれがうまくいかなかった。いつも鬱々して陰気な面している立村でも、やっぱり居ないと影響大だということを、貴史は身をもって感じた。

——あの怖い彼女、帰ったか？

こずえの一存でいったん引き返したものの、どうもひっかかっているものがある。

直接菱本先生と電話で話をしたのもこずえだし、貴史がまだすっきりしていないせいなのかもしれないが、どうも、消化不良なものが残っている。

——別になあ、彼女と話が終わってから俺たちが行ったっていいじゃねえか。

こずえの一方的な仕切りで話が終了してしまったというのも、やっぱり収まりの悪い原因かもしれない。もちろん菱本先生も、彼女に罵倒されている真っ最中に訪問されるのはおもしろくないだろうし、男としての面子も丸つぶれだろう。だが、それ以上に、

——嘔吐いてまでキャンセルされるほうがもっと、プライドずたずたじゃあねえのか？

少なくとも貴史だったら、そう思うだろう。

美里も、もしこずえに言いくるめられなければ、賛同するに決まっている。

——菱本先生だってな、あのとってつけたような古川の言い訳聞いて、ぴんとくるだろが。まあ立村と違って菱本先生ならそのへんまあいっかって流してくれそうな気もするけどな。

はたして立村と一緒にこの場にいたらどう答えるだろうか。

もちろん菱本先生を蛇蝎の如く嫌っている立村のことだ、辛らつな言葉でもって罵倒するだろう。しかし、こずえの行動をそのまま肯定するだろうか。そのまま知らん振りを通せとばかりに、ファミレスでぎゃあぎゃあ語り合うだろうか。

——どうだろな、あいつの考えてることはわからねえ。

できれば、意見を聞いてみたいと思う。違う意見だったとしてもそれに引きずられることはない自分の意志、しかしそれでも、立村だったらどう考えるかをはっきり本人の口から聞いてみたかった。

どちらにしる、立村はいないわけであり、貴史がひとりでここにいるわけであり。

——とりあえずは挨拶だけしとっか。

電話で「ごめんねー」と伝えたのはこずえだけ。貴史は混じっていない。

二時前、昼下がりに。ヒステリックに叫んでいたかの女性と顔を合わせたら気まずいがしかたない。もう一度アパート一階の戸口に立つ。

台所の窓は開け放たれていた。声はない。テレビの音声だけが洩れてくる。ざわめきと共に流れてくるアナウンスの内容から、おそらく高校野球中継であろうと思われる。ということは、菱

本先生はおそらく、部屋の中で寝転がっているはずだ。

ブザーを押した。

五秒、間があり、静かに開いた。

「おい、羽飛」

戸が開いたとたん、薄墨に似たものがぼやあとかかった菱本先生の顔がのぞいた。すぐに熱血色に明るく燃えた。笑顔で覆われた。学校使用のものに見えた。

「よお、よく来たなあ！ あれ、さっき古川から電話があったが清坂は大丈夫なのか？ お前一人じゃあないよな？ どこ居る？」

テンションが高い。貴史は暫く黙っていた。こずえの説明を真正直に信じているらしいということがよくわかった。てっきり貴史としては、菱本先生も例の一件を目撃されていることに勘付いているのではないかと思ったのだが、さにあらず。全く気にしていないらしい。

「ふたりとも、今日は来ない予定」

「そうなのか？」

「けど、俺は先生に話すことあるから、来たんだけど」

本当は先生なのだから敬語を使うべきなんだろう。立村のように菱本先生にのみわざとらしい敬語を使いつづける奴は別としても、やはり礼儀としては当然のことなのかもしれない。こずえも美里もなんだかんだ言って、丁寧語はうまく取り混ぜている。

「入って、いい？」

「もちろんだよ！ いやあ、嬉しいな。夏風邪ならしょうがねえなあとは思ったんだけどな。やっぱり俺としては、楽しみにしてたんだぞ。ほら、お前ら三人が来るからってアイスクリームケーキ用意してたんだ。一人で食うのもなんだしなあとか思ってたんだが、ほらほら、今日はふたりでゆったり食おう！」

と、いうことは、例の彼女にアイスクリームケーキを食わせず追い返したということなのか。これをどう解釈すればよいものかわからない。だが、アイスクリームというのは全身脂ぎってしまった貴史にとってよだれたらたらなものだ。逃したくはない。

「じゃあ、おじゃまします」

一応、ここだけは丁寧に伝えた。

菱本先生の部屋はこぎれいにまとまっていた。

背の低い本棚と床に積み重なった本が、薄い布で隠されていた。ちょうど雪の積もった山々を眺めたような状況に近い。置き場所がない、というよりも意識的にでこぼこをこしらえてオブジェのように見せている風にも思えた。

埃もなく、極めて清潔。

「すげえ綺麗じゃん」

「あたりまえだろ。お客さん迎えるんだからな」

「俺たち以外に誰か来たのか？」

「ああ、そうだ。おとといはな、奈良岡と水口と南雲が来たぞ」

その組み合わせもずいぶんすさまじいものだ。露骨な三角関係だろう。

「そんなときもアイスクリームケーキだったのか？」

「いや、その時は奈良岡の手造りケーキだったなあ。うまかったぞ」

想像はつく。菱本先生が見るからに嬉しげに顔を緩ませながら、

「あのふたりは受験が控えてるから、夏休みもないし、いろいろ大変だ。宿題どころじゃあないって言ってたぞ」

「そっか、同じ高校目指すんだよな、水口と奈良岡ねーさん」

奈良岡彰子と水口要はいろいろ考えるところあって、どうやら青湊市外の私立高校を受験するらしい。ふたりとも医者の子女ということもあり、将来を医学に見定めているようだ。詳しい事情は知ったことじゃないが、青湊大学附属高校へのすんなりエスカレータを捨てて受験に勤しむというのは、やっぱり凄いような気がする。

「羽飛、今から受験勉強する気、あるか？」

「全然。まだ自由研究も宿題も手、ついてねえもん」

「こら」

軽く叩かれた。溜息を吐きながらも菱本先生は笑いながら続けた。

「ほんとは怒るところなんだろうがなあ。勉強しろよ、少しは」

「言われたくねえよ」

ガラスの器にはひややっこのような巨大アイスクリームケーキが鎮座ましていた。

デザートは別腹と、よく言ったもの。あっという間に腹の中のステーキは消化されてしまったようで、自然と空腹感が増す。

スプーンでアイス突き崩しながら、扇風機の廻る部屋に座って口にアイス運んでいた。最初の二口くらいは素直に冷たさが美味しく感じられたのだが、だんだん回数を重ねるごとに重くなってゆく。やはり昼間、しっかりハンバーグステーキを平らげたのは失敗だったかもしれない。

「どうした、溶けるぞ」

「味わってるんだけど」

高校野球中継が中断されている。どうやら試合中大雨に祟られ、下手したらノーゲームになってしまうかもしれない恐れがあるという。テレビをつけっぱなしなので状況はその折ごとに伝わってくる。しかし、画面を見る限りだと、

「こりゃあ、ノーゲームだよな。流れるな、再試合か明日は」

「まだ四回だったっけか」

「そうなんだよな。まあどっちもゼロゼロだし、仕切り直してとこか」

青湊はまぶしすぎるほどの晴天だというのに、なんで球場は大雨なんだろう。

まあ、涼しくなるからそれはそれで過ごしやすいのかもしれないけれども。

「先生、あのさ、ひとつ聞いていいか」

まず無理やりひとさじ、アイスクリームを飲み込み貴史は尋ねた。

「なんだ。言っとくが宿題の手伝いはしないぞ」

「そんなんじゃねえよ」

ちょうどいい仕切り直した。まず言い切った。

「悪いけど、聞いちゃった」

「はあ？」

「隠し事したくねえから言っちゃおうけど」

ぴんときてないのだろうか。やっぱり菱本先生は単細胞だ。だから説明が楽だ。

「俺と古川、さっき先生と彼女がけんかしてるって、聞いちゃってさ」

菱本先生はスプーンをくわえたまま固まった。テレビからはノーゲームとの審判決定がようやく知らされたようだった。

「そうか、そういうことか」

気まずいことは覚悟の上だが、菱本先生がスプーンを口から放すまでの間は果てしなく長い時間に思えた。もうアイスクリームは半分以上溶けている。そのまますするにしてもなんだか甘ったるすぎて食べきれそうにない。

「驚いただろ」

「俺はびっくりしたけど、古川が落ち着いてた」

「そういう性格だな、古川は」

「せっかく玄関まで来たんだから挨拶してこうとは思ってたんだけど、古川が絶対だめだって言い張って、結局あいつの一方的な判断で中止になっちゃったってわけ。ノーゲーム」

わざと明るく言い放してみた。

「そんあとで美里と合流して、ファミレスで食って、それから俺だけ来たってわけ」

「なんでだ？」

「だってさ、隠し事したくねえもん」

自然と笑いがこぼれる。菱本先生がいきなりパニックを起こしたり怒鳴ったりしたらまた別の反応も生まれるだろうが、一旦凍った後すぐに溶けて、照れ笑いを浮かべるその顔になんとか許されそうな雰囲気を感じた。だったら言いたい放題、言えればいい。

「あ、言っとくけど、美里には言ってねえ。それと、古川もこのことみんなに言いふらすつもりねえって。とにかく俺と古川との秘密にしろって命令されたけど、やっぱりだよ。俺だって口そんな堅くねえもん」

「あまり見られたくないところ見られたな」

「けど、いいじゃん。先生に彼女のひとりかふたりいるかもってこと、わかってるだろ。それに嫁さんもらってもおかしくない歳だって、うちの母ちゃんたちも言ってるし」

「母ちゃん、たち？」

怪訝そうに尋ね返す菱本先生に、貴史は笑い返した。

「あ、そうだ、うちと美里のうちと一緒にこの前家族旅行したんだ。うちの母ちゃんと美里の

母ちゃん子どもの頃から大親友だから、通称母ちゃんずって呼んでる」

「なるほどな、母ちゃんず、か」

声を立てて菱本先生は笑い、膝を叩いた。いつのまにかテレビのブラウン管にはしかめっつらの男性アナウンサーが台風情報を読み上げている姿が映っている。

「俺もまあ、しゃべるつもりはねえけど、どっちにしてもばれるのは時間の問題だろ。先生、覚悟しといたほういいと思うな。ま、結婚式には俺と美里と一緒に生徒代表として参列するからさ。評議委員が行くのが義務だとは思えど、立村がOKするとは思えねえしさ。とにかく、俺としては」

「羽飛」

語ろうとした貴史を菱本先生は遮った。

「お前、わざわざそれ伝えるために来たのか？」

「隠し事したくねえってだけ。俺と先生との仲じゃん」

「古川はどう言ってるんだ？」

かすかに用心している響きを言葉の下に感じる。何かぴりりと反応した。

「古川？ 関係ねえよ。言いたいように言わせとけばいいだろ」

思わずこぼれ出た言葉に、戸惑った。

「だって俺、あいつの考えちょっとついていけねえし」

菱本先生の表情に何か、かりっと何かを噛んだような刺激を見出した。

ツボを押した、という状態に近いのか。

「古川の考えが、か？」

「そ。別に俺は隠し事したくねえけど、知ってることをそのまま知らねえって平気な顔して嘘つくのはどうかって思っただけなんだ。まああいつが女子だからそういうのかまわないのかもしれないねえけどさ、どうも、あいつ、やだな」

「おいおい、あれだけお前気に入られてるのにか？ 古川泣くぞ」

「知るかよ」

軽く茶化すような口調がさらに神経を苛立たせる。菱本先生に対して、ではない。古川こずえに対してだった。

すっかりとけて、かすかに堅い氷のようなものが残っているガラスの器の中を、貴史はかき回した。

——あいつ、やだな。

決して今まで感じたことのなかった感情が湧いた。

古川こずえ、というその女子の存在。

美里の親友で、クラスメートで、何気に貴史のことを好いてくれる奇妙な女子。

姐御肌の性格も、過激な下ネタトークも、決していやなものではない。そう思っていた。

女子の中でも気楽に話すことのできる女子のひとり、そう感じていた。

美里にもいつも言われていた。

「なんで貴史、こずえにあれだけ思われてるのに付き合わないの？」

「俺は優ちゃん命だし！」

しょうもない繰り返して切り返してきたけれど、どうして古川こずえに対してその感情がいまだに芽生えないのか、その理由を考えたことはなかった。

いくら「羽飛かっこいい！」とか「私のダーリンになってほしいのになあ、もう思いっきりサービスしちゃうのにねえ」とかいろいろ言い放たれても、「いい友達」以上に感じることはなかった。単なる「友だち」だからと思っていた。

——いや、違う。

午前中のこずえとのやり取りを通じて、確かに違うものを感じた。

たとえば、ガラスの器の中に凍ったままで残っているアイスの芯のようなもの。

もちろんこずえは菱本先生のこと、および彼女のこと、美里のことも考えた上で判断したのだろう。そのくらいは理解できる。賢い性格は把握している。

ただ顔色変えずに嘘をさらっと吐き、あっさり作り話で菱本先生に訪問中止の電話をし、その後さらに美里に対して事実とは異なる菱本先生恋愛事件をあっさり述べて見せるその面の厚さに、薄ら寒いものを感じてしまっただけだ。

間違っただけをしているわけではない。菱本先生と美里を思いやっただけ。

ただ、貴史は、それが嫌いなだけだ。

そう思いついたことをあっさりやってのけるその態度に嫌悪を感じた、それだけだ。

もし一緒にいたのが美里だったらどうしているだろう？

こずえが心配した通り、きっと大騒ぎしていただろう。

もしかしたら菱本先生も頭を抱えて困り果てていたかもしれない。

それでも、絶対に嘘を吐いてごまかすようなことはしないだろう。

決して、古川こずえと同じ言動は取らないだろう。

「羽飛、アイスのおかわり食うか？ まだ半分残ってるんだ」

さすがにそれはノーサンキューだ。貴史は手でxを作った。菱本先生が立ち上がり台所へ向かうのを、くちくなった腹をさすりながら眺めていた。

——美里、俺がこんなにアイス食ってるってこと聞いたら悔しがるだろな。

だめもとで聞いてみた。

「先生、ドライアイスねえ？ 持って帰っていいかな」

「無理じゃないかそれ」

当たり前だ。いくら昼下がりとはいえこの炎天下、美里の家までアイスケーキが原型留めたままもつわけがない。

夏休みが終わってからしばらく経ち、いよいよ球技大会の準備が始まった。

「ってことで、今年の球技大会だがかなり方向性が変わってだな」

三年D組の教壇に立ち、菱本先生が残暑の重い空気を背負いつつ語り始めた。

「原点に立ちかわり、これからはきっちりと集団競技を大切にしていこうと考えているわけなんだ。わかるな、それは」

「先生、なんっすかそれ」

クラスメートの南雲がまぜっかえすように声をかけた。

「もっとわかりやすく言ってくんさい」

こういう場で話が盛り上がるよう、合いの手を入れるのが青潟大学附属中学流だ。

他クラスだとこういう役割は評議委員らしいのだが、我がクラスの評議委員かつ評議委員長でもある立村上総にそれは求められない。興味なさそうに頬杖ついてそっぽ向いている。

「南雲、去年の男子リレーでの活躍ぶりはまぶしかったぞ」

「先生の髪の毛はまだまぶしくねえんでその点ご理解を」

——け、どこが面白いんだ。

受けている男子女子連中の顔を、貴史はうんざりと見返した。

菱本先生が言いたいことなんて、何も「わかりやすく」しなくたって十分通じるだろうに。

「つまり、先生さ、こういうことだろが」

貴史は手を挙げるのも省略し、立ち上がって説明してやった。

「今回の球技大会では個人競技を全部なくすることにしたんだろ」

ついでに立村にも視線を投げた。菱本先生も単純なのか、あっさり釣られてそこに目をやった。誰もが立村を見やる。

「ってことで、立村、お前何に出るの」

全員爆笑一色に見えたが、美里と立村本人だけはむっすりと黙っていた。

——一応彼女の立場としちゃあ、笑えねえべな。

「足手まといにならないところに出るよ」

不機嫌露わに、立村は貴史に答えた。機嫌は悪そうだが、頭にはきてないようすだ。奴なりに覚悟は決めていたのだろう。菱本先生はあっさり頷いた。

「そうか、立村もそのあたりは理解してくれていたか」

「ないものはしかたないのでしょうがありません」

貴史は席につき、まず菱本先生の顔を覗き込んだ。南雲がまた口をひらきたそうな顔をしているのがむしょうに腹立つ。続けてやった。

「で、出場種目はあれだろ。男子リレー、女子リレー、バスケ、バレー、ソフト、バレー。これだけありゃあいくらでももぐりこめるだろ」

リレーがはたして球技大会にふさわしいのかという疑問を突っ込む気なんて誰もない。

——卓球がなくなったのは、まあ、立村にとっちゃ、痛いわな。

「そうだな、で、もうひとつ問題があるんだが」

「なんすかそれ」

うるさい、どっかの高級犬みたいな髪をしゃらしゃらさせながら、南雲が割り込んだ。

「実はだな、この時期、中体連の陸上大会が迫っているんだ。どういうことか、わかるな」

説明されなくてはそんなのわかるわけがない。

六時間目のロングホームルーム、今回は球技大会における出場メンバーをそれぞれ振りわけるためのものだった。本来なら体育委員がすべて担当すべきところなのだが、熱血教師の菱本先生がどうしても体育大会関連にはこだわりたいらしく、しかたなく権限を譲っている状態だった。

前々から今年の球技大会に関しては、いろいろと新しい試みがなされるのではと噂されていた。そのひとつが今、菱本先生の発した「個人競技の撤廃」だった。

いや、単純に言ってしまうえば「バトミントン、テニス、砲丸投げ、および卓球を競技種目の中からはずす」ことにつきる。この四種目に関しては個人の要素が強すぎるためにクラス一丸になりづらいとの判断から、教師主導で除外決定されたとのことだった。

卓球を自分の指定席に定めていた立村にとって、これはかなり衝撃だったはずだ。

噂そのものは早い段階で耳にしていたらうし、ここで「なんでですか！」と怒鳴らなかったところを見ると立村も覚悟はしていたに違いない。男子バレーだろうが男子バスケットだろうがいくらでも行く種目はあるはずだ。卓球に関しては無敵と言われていて、過去二回の球技大会ではすべて決勝まで残っていた。その決勝試合だって力不足で負けたというよりは、いつまでたっても試合が決着つかないのでわざと手を抜いて終わらせたという雰囲気漂うものだった。卓球部員から何度も部活へ入ることを勧められたが、立村がそれを受け入れるわけもなく今日に至る。

とりたてて目立つわけではないにしても、それなりに運動もこなせるし、さほど他の奴の足をひっぱるとも思えない。立村が普通に行動していれば、別に何も困ることはないだろう。

「今回、めでたいことに我がクラスの陸上部スター、ミスター近衛が選抜出場することになったわけなんだが」

菱本先生は近衛に手をひらひらさせ、立ち上がるよう指示した。

背の高い近衛がへらへらしながら立ち上がり、一礼した。

「この日がなんと、球技大会の真っ只中なんだな、そうだな、近衛」

「はい、すみません」

さすがにこの瞬間はみな、非難の溜息で溢れてしまった。それはそうだろう。去年の男子クラス対抗リレーにおいて、ナンバーワンヒーローは貴史でも南雲でもなく、陸上部在籍の近衛だった。もともと目立つ性格ではないのと、部活動を軽んじられる校風ゆえに高い評価はされていなかった。さらにこれまでは目立った大会での活躍も耳にはいなかった。

それが、何かの拍子で、青潟市内の大きな大会に出場できるだけの力を蓄えていたことが判明し、急遽参加が決定したという。

本来ならば拍手喝采のはずなのだ。

クラス対抗なんていうけち臭いレベルの話じゃないのだから。

だが、しかし。

「近衛がいねえとどうするんだよ、今年のリレーはよ！」

誰かが呟く。律儀に近衛が頭を下げる。

「すまん、俺もまさか、出られると思ってなかったんだ」

「めでてえことだとは思うけどさ」

「そうだよ、素直に喜べばいいじゃない！」

美里が甲高い声で叫んでいる。何もこんなところでいい子ぶらないでもいいだろうにとも思うのだが、誰かが言ってやらないとまずいだろう。貴史も同調した。

「んだんだ、そうだろ、まずは近衛に拍手しろって」

貴史は立ち上がりまず、近衛に近づいた。場の状況をこいつは把握していないようで、なんで喜んでもらえてないのかその理由がわからないらしい。

「いやーすげえぞ近衛！ お前さ、選抜に選ばれたってことはさ、お前がずーっとがんばってグラウンド何十周もしてきたことが認められたってことだろ？ いやーすげえよ。男子リレーの貴重な戦力が失われちゃうのは痛いけどな、こりゃあもう、俺たち拍手で送りだすっきゃあねえよ。いいか近衛、死ぬ気でいい成績出してこいよ！ でねかったら俺たち、泣くにも泣けねえぞ、いいな、三Dの涙を背負って勝負して来い！」

「羽飛、お前、本当にいい奴だなあ」

面長のスポーツ刈り頭、がりがりかきながら近衛はあっけらかんと笑顔を見せた。

こいつ、全く、その後の修羅場がどうなるかを予想していないようだ。

幸いクラスの雰囲気は拍手喝采で、なんとか片がついた。菱本先生と視線を合わせて、何度も頷いておいた。こうでもしなくちゃ、これからの展開が危険すぎる。

近衛が笑顔のまま席につき、お祝いムードがうまく教室内に広がったのを見計らい、菱本先生は話を再開した。

「近衛の選抜出場はめでたいんだが、羽飛がいみじくも今語ってくれたようにだ。今回一番のピンチは男子リレーの代表選びなんだな。そうだろ、羽飛」

「そうそう」

「リレーに出場する選手は希望者ではなく、毎年恒例の陸上クラス内順位をタイムで計って選出することになっている。で、去年は近衛、羽飛、南雲、豊城、須坂の五名で構成されたんだが、今年は頭が抜けてしまった。もちろん近衛には別の舞台で全力投球してもらいたいのので拍手で送り出すつもりだが、さて、こちらはどうすればいいものやらってことなんだ」

「簡単でしょが、タイムで選べばいいじゃん」

古川こずえが茶々を入れた。

「近衛を抜かした上位五名で決まりじゃん」

「となるとだ」

——古川はわかってて言ってるのかよ。おい。

——美里も何も教えてねえのかよ。

どうもこずえの言動がきりきりいらだつ。夏休み以降こずえの言葉にどうも嫌悪じみたものを感じてしまい、面倒なので距離を置いていたりもしたのだが。裏を読んでしまいたくなるのはその後遺症なのだろうか。

「そうだな、タイムで選ぶと、だ」

菱本先生はじろりと立村に、もう一度目線をやった。

背中から溢れるのはだらだらした汗なのかそれとも熱気なのか。

どちらにしても立村が嫌がるエネルギーに違いない。

「どう計算しても、タイム上男子の繰り上げ五位は立村になるんだな」

初めて立村が菱本先生の方へ向き直った。

——あーあ、先生言っちゃったよ。

後ろの席でこずえが美里に向かってなにやら指を当てて合図している。それを無視している様子の美里。そして立村は黙ったまま冷たい視線をぶつけていた。

「ちょうどいいだろう。今回は残念ながらお前の得意分野もないしな。もともと個人競技の卓球がなんで種目の中に加えられていたのかが俺も不思議でしょうがなかったんだ。卓球部員を救済するためといえは聞こえがいいが、部員でもない立村がそこで何かプラスになるわけでもないということだし、むしろ集団でしっかり動くコツを覚える意味で、いいんじゃないか？ だろう？」

立村は答えなかった。すぐに目を逸らして頬杖をつきなおした。ふてくされている、とも言う。

「だがそうなるのだ。これから男子リレーチームとしてはとことん練習をしなねばならないのも事実だな。そうだろ、羽飛？」

全くもってその通りだ。

貴史が一番この件で頭を痛めていたのはそこだ。

「うん、そうだよ、先生」

わざとらしく溜息を吐いてやる。立村にも聞こえるように。

「立村、そういうことだったらとことん、お前のこと、しごくからな！ 人並み以上に努力しねえと、絶対去年みたいに総合優勝なんて狙えねえからな！」

笑い声、いっぱい。

刺もちくちく。

立村がそっぽ向いたまま、聞き流そうとしているのが見え見えだ。

「立村、どうした。羽飛にしごかれるなら本望だろ？ 今までお前はいつも六位で、惜しいところでリレー選手に入れなかったわけだが、卒業間際にしてやっとスターになれたじゃないか。だろ、南雲？ お前も今回しっかりリレーチームの一員だが」

ちゃらちゃら男の南雲が、軽い声で答える。

「ああ、俺いいっすよ。リっちゃん結構足速いし。気にしちゃあいませんぜ。むしろ、心配なのはですねえ、まあ、いっか。悪いこと言ったってしょうがねえし」

いかにも立村をおだてているようなその口調だが、どこことなく南雲もこのメンバーでリレー勝負を行うには不安を感じているような気がしなくもない。

——どっちにしろだ。これから俺、どうあいつの尻ひっぱたいていけばいいかってことだよな。まったく、面倒ったらねえよ。こうなったら立村がどんなに「評議委員会があるから」とかなんとか言って練習さぼろうとした時に、怒鳴ってやらねばならないだろが。まったくなあ、ただでさえ南雲とぎゃあぎゃあやりあうのも面倒だつてのにな。

リレー、とっくに選手決定の貴史にとって、この件は非常に重たいものだった。

三年同じクラスだと生徒それぞれの種目は自然と決まっっていて、昨年通りパズルのように埋め込んでいけばうまく収まるしくみが備わっていた。他のクラスだってそうだろう。たまたま近衛が出場できなくなったとイレギュラーな自体が起きなければ特に問題はなかつただろう。立村だって、風前の灯火状態だった卓球種目がなくなったことを素直に諦め、男子バレーかバスケットにもぐりこめただろう。それはいい。

貴史がいらだっているのはその点だけではなかつた。

ロングホームルームが一段落し、帰りの会をその流れのまま終わらせた後、貴史は立村の席に駆け寄った。他にも何名か男子連中が立村の側にいる。男子がかたまっているとさすがに彼女たる美里は近づけないらしく、こずえと一緒になにやらひそひそ話をしている。

「立村、どうする？ お前本当にリレーに選ばれちゃまっていいわけ？」

「断ちまえよ。冗談じゃねえって。タイムだけだったら別の奴に譲るとかさあ」

なんだか雰囲気としては、立村を下ろしたいという男子連中の本音がうかがえるものだった。予想外の展開であることは明らかだ。

立村がタイム上万年六位に位置していることは承知していた。

だからいつも、リレー選手に選ばれずにすんでいたということも。

奴の性格上、あまり拘りもなかつただろう。

卓球さえ種目に残っていれば、何も問題はなかつたはずなのだ。

「断りたいけどさ」

小声で呟く立村の声が聞こえる。

「その方法が見つからないんだ」

表情は俯き加減で読み取れない。まだ夏服のまま、半そでシャツから出た腕は白すぎた。

夏の陽射しで焼いた名残は全く残っていなかった。

「へえ、お前、断る気でいるわけかよ」

「羽飛」

立村は静かに顔を上げた。貴史の言葉を予想していたかのようなようだった。

「断るたって断れない。タイムがすべてだし」

「ああそうだなあ。そんなら承知してたか」

席の後ろに回り、両手を肩にかけた。

「じゃあ、菱本さんの言う通り、男子リレーに参加する意思是、あるんだよな」

「しかたないし」

「しかたねえじゃあねえだろ！」

背後で「よっ、鬼コーチ！」なる掛け声が飛ぶ。古川こずえの声だった。知ったことか。貴史は立村の左脇にしゃがみこみ、下から覗き込んだ。全くもって夏を越えたとは思えない焼けていない顔が側にあった。

「いいか立村、去年優勝したから言うわけじゃあねえが、少なくとも無様な試合はできねえってこと、承知してるよな」

「去年は羽飛たちががんばったからだろ」

その通りだ。だがその他人事な言い草はないだろう。

「ああ、俺は命賭けて走ったからな。それに鬼のようにそりゃ練習したからな。休み時間、放課後、とにかくどっかの部活と同じくらい走ったぞ。バトンパスの練習だってしたぞ。おかげで二学期の中間テスト、ぼろぼろだ」

言い訳にはならないが、言うておく。

「お前はあん時、評議の学祭がどうか、ビデオ演劇がどうか、本条先輩のパシリだとかでクラスには殆ど顔ださねかったけどな。今回に限ってはそれ、許さねえぞ！」

「許すもなにも」

言いかける立村にさらに噛み付いてやる。

「いいか立村、俺は最初から勝つことだけ考えてるんだ。それをお前のようにいいかげんに流すってことは最初っから問題外なんだ。いいな。お前がリレーに出るんだったらそれは大歓迎だ。けど、練習休むなよ。さぼんなよ。評議委員長だからってそっちばかりにかまけるんじゃねえぞ。とにかく、リレーのことだけ、考えろよ！」

ここまで怒鳴っておかねばならない理由とは。

——立村の奴、また評議委員会に逃げ込むかもしれねえし。

想像はついた。ただでさえ委員会活動があわただしくなる時期、どうしてもクラスの行事が後回しになることはしかたないといえば、しかたない。しかし、だからといってクラスをさておいて適当にリレーバトンパスを行い、はい、終わりというのだけは許したくない。

立村が今、評議委員長としてトップに立っているというのはよくわかる。

一人を好む性格柄卓球のようにひとりで完結することのできる競技を好むのも、三年近く付き合ってくれば理解もできる。

しかし、男子クラスリレーだけは別だ。

どんなことがあったとしても、クラス一丸で勝負する場面を、担任が嫌いだとか評議の仕事が忙しいとかいう身勝手な理由で放りだしてほしくはない。今までそうだったから尚のこと、最後の一年だけは決して立村にそうさせたくなかった。

「わかったな、立村。死ぬ気でやれよ！」

頷くのを待たず、貴史は座ったままの立村の肩をたたき、立ち上がった。

正面の窓辺には南雲が、茶色っぽい犬風の髪を揺らしながらにやけていた。

何をまた、ガンつけてくるんだか。

——どっちにしろあいつも今回また一緒に組まねばならねえんだな。

普段むかつく奴でも、チームメイトとしては別だ。うまくやらねばなるまい。

「羽飛」

小声で立村が貴史に呼びかけた。気がつかず、側の誰かから「立村が呼んでる」と声をかけられた。

「なんだ」

「ベストは尽くす。足は引っ張らないようにする。ただ」

「ただなんだよ」

「うまくいかなかったら、ごめん」

かすかに頬が緩んでいる風に見えた。どことなくばかにしたようにも思えた。

「何だよ、最初から負け戦かよ！」

「違う」

立村は首を振った。

「覚悟はしてた。だから、準備してるから」

——準備、してる？

問い返す前に立村は鞆に手をかけ立ち上がった。

「今日これから評議があるから、また後で」

「おい、待てよ、逃げるなよ！」

貴史が呼び止めようとしたが、立村は振り向きもせずすたすた扉を開けて出て行ってしまった。後を追おうとしたら美里に止められた。いつのまにか腕をひっぱられていた。

「貴史貴史、悪いけど、ほんとうに今日は、評議委員会で大問題発生してるから行かせてあげてよ」

「なんだよそれ、大問題って」

耳に小声で美里は囁いた。周囲に聞こえないようにせざるを得ない内容だった。

「ゆいちゃんの進学のこと、ちょっと大変なことになってきたの」

「はあ？」

C組評議の霧島ゆいのことになにかかかわりがあるのだろうか。美里はそれ以上何も言わず、素早く立村を追っかけていった。

詳しい事情を聞くには、残された古川こずえを捕まえるのがベストだろうが、その気も起きず貴史は、すみっこでへらへらしている問題の張本人・近衛に話し掛けた。

「お前ひとりがいねえせえでこうなっちゃうとはなあ。ほんと偉大だよ。近衛、お前のその俊足がなあ」

「大丈夫大丈夫」

何でもない顔している近衛は、すっとぼけたままさらっと答えた。

「なんかさあ、立村、三年に入ってから陸上のトレーニングしてるなって感じがするんだよ。走るフォームとか、いかにも陸上やってる奴っぽい感じになってるなって思ってさ。大丈夫大丈夫、アンカーに回さねばそれでいけるよ」

「どこがだあ？」

陸上部選抜出場の近衛の言うことには何か意味があるんだろうが、貴史には皆目見当がつかなかった。ま、アンカー争いは南雲との一騎打ちになるだろう。そちら譲る気は貴史もない。

男子対抗リレーは男女問わずクラスの花形が揃うと呼ばれている、らしい。

——まあ、当然の選出だなあ。

などと貴史も脳天気にも思っているのだが、どうも声援の多くが南雲に流れているのがおもしろくない。特に女子が全学年からまんべんなく絶叫しつつ「南雲くーん！」などと甘ったるい声をあげているのは、はっきり言ってみともない。

決して、貴史の応援がほとんどこずえのよく響くアルト「はーとばー！」に打ち消されてしまうからではない。南雲と層は違うにしても、それなりにもてるはずなのだ、自覚はある。

一週間前ともなると放課後みな、それぞれのクラスが居残って練習する姿が見受けられる。その一方で委員会に携わる連中はなんだか言い訳しつつ途中で抜け出していく。特に評議と規律あたりはやたら忙しいらしい。本人たちが真面目にバトンパス練習をしているところを後輩たちが割り込むようにして連れ去っていく。

「悪いな、ちょっとやぶ用で」

貴史が気付かない間にまず、南雲が姿を消していた。

十月の学校祭もさることながら合わせて発行予定の「青大附中ファッションブック秋号」の準備とかで、執筆および撮影作業が大変なのだという。

文句を言われると勘付いたのかさっさと逃げたその姿よ天晴れだ。

残りは評議委員長殿の様子だが、やっぱり腕時計を睨みつつそわそわしているのが丸分かりだった。それでも貴史の目を気遣ってか、真面目にバトンの受け渡し練習を行っている。腰のあたりに手を置き、臨時コーチとなった近衛からバトンをばしりと渡されている。

「立村、練習してたのか？」

「そういうわけじゃないけど」

実際は参加できないのにやたらと笑顔で熱心な近衛は、陸上部員の本領発揮でひとりひとり丁寧にアドバイスを行っている。去年こいつがひっぱっていた男子リレーチームの時はやたらとぴりぴりしていたというのに、チーム参加不参加となるとこうも違うのだろうか。立村も黙って素直に頷いている。近衛とのやり取りが耳に入ってくる。

「いやあ、けどさあ、夏前に比べるとお前、タイムがかなり縮まってねえ？」

「わからないけど」

「なんてっか、フォーム、誰かに教えてもらったりしたのか。こういっちゃなんだけどさ、立村一夏明けて別人みたくスピード出てるよな。今、タイム計りなおしたらとんでもない数字出るんじゃないかねえの？」

——近衛の奴、立村の走るフォームがどうたらこうたらって言うけどな、俺からみたら相変わらずどんくせえけどな。あいつの得意技は卓球だけだろが。

陸上部員の突っ込みを受け流しつつ、立村はまた時計を目に近づけた。

「ごめん、悪いけど、これから委員会があるんだ、終わってから間に合うようならまた練習に参

加するけど」

「おい、そりゃあねえよ」

割り込んだのは貴史だった。必ずこう言うと思っていたのだ。チャンスを見つけて脱走しようと思っていたのだろう。練習が始まってからというもの、立村が走ることに喜びを見出しているとは言い難い。南雲のような忍者的脱出をしないだけまだいい方である。

「お前なあ、評議委員長だからって何もそうせかせかすることねえだろ？ 天羽だって難波だって更科だって、それぞれのクラスで練習してるだろが」

「確かにそうだけど」

やたらと立村は語尾に「けど」を使う。

「お前がいねえったって、評議委員会は無事に運営されてるんだろ？ そういうことだろ？」

「確かにそうだけどさ、でも」

口籠もる立村は、校舎を振り返りつつ、靴のつま先を細かく動かした。

「それなら、三十分くらいで戻ってくるならいいかな」

「何しに行くんだよ」

「取りに行きたいものがあるんだ。頼んでおいたもので」

「なんだそりゃ」

あれやこれや言い訳してなんとかして逃げ出そうとするその魂胆が許せないってものだ。

もちろん理由があれば聞かないわけではないけれども、立村のように普段クラスから距離を置いている奴を、そう簡単に手放すわけにはいかない。実際リレーの練習が始まってから、自然と男子連中も立村に対して一目置くような雰囲気が出来上がっている。それまでは、「一応評議委員長だけど、いろいろ面倒を見なくてはならない弟みたいな奴」という認識でしかなかったのだが、「あれ、結構立村ってば走れるじゃん」といったイメージが少しずつ広がって来ている。貴史の見る限り、女子たちの一部も、見直そうとする動きがあるらしい……と古川こずえは語っている。

——せっかくな、最後になってまっとうに評価されようとしてるんだからな。ここでもう少し男になれやって感じだよな。

滝壺に突き落とす親獅子の気持ちでもって、貴史は再度止めた。

「悪いが、行かせるわけにゃあ、いかねえよ。な、そうだろ？」

近衛が嬉々として頷いた。立村の肘をひっぱり、

「さ、練習練習。バトンはな、死んでも放すなよ」

いやいやバトン受け取りポーズに体勢を戻す立村に、太いバトンを叩くよう渡した。

まだアンカーは決まっていなかった。とにかく南雲がいないのだから、どちらがアンカーでテープを切るかについては先延ばしせざるを得ない。貴史からすると素直にもう一度走ってタイムを計り直した上での結果で決めろ、と言いたい。近衛ではないけれども、一夏明けてからどのくらい走力が高まったかを確認してからでもいいと思うのだ。

立村は第二走者に回した。どの場所に置いてもいいのだろうが、アンカーを任せられるほどで

はないというのが他のみなみなさまのご意見。貴史も異論はない。

「羽飛、もういいかな」

三十分くらいグラウンド周りをぐるぐる走り回った後、立村が根を上げたかのようにしゃがみこみ訴えた。

「三十分くらい、時間もらえると助かる」

「ふざけるんじゃないよ！」

軟弱者と言いたい。貴史からしたらまだまだ練習したりないといっても過言じゃないのだが。これでもかなり手加減したつもりだ。前回優勝したベストメンバーで走れない分どうしても、立村に人一倍努力してもらわないというのに。

「お前さあ、ほんっとにしつこいようだけどな、やる気あるのか？」

「あるよ、だから」

「あるならそれなりに気合入れろよ！」

すごんでみる。もっとも立村に効果がないのは過去の経験上よく理解している。

でも言うしかないのだ。のれんに腕越しだとわかっていても。

立村はやっぱり困った風に唇を噛んでいる。尖らせないので子どもっぽくは見えないのだが、それで騙されたことが何度あることか。苦汁を飲まされたこと過去幾度となくある貴史は、手を抜かない。

「あのなあ、いつもいつもお前がぐだぐだやってるからな、面倒みる俺たちがほんっと迷惑してるんだぞ。少しは考えろよな！ ほら、もう一周走るぞ！」

背中から思いっきり気合入れの手型をつけてやった。もちろんもみじマークが立村の背中に、ポロシャツごしにくっついているかどうかは定かではない。しかたなさそうにふらふら立ち上がった立村を引っ張ろうとした時、余計な奴の声がした。

「りっちゃん！」

意識せずともわかる。奴だ。南雲だ。間違い無し。

わざわざ爽やかな笑顔を演出して走ってくるその姿、誰かに見せびらかすつもりなのだろうか。少なくとも、公式彼女とされている奈良岡彰子に向けてのものではないことを貴史は知っている。

「りっちゃん、さっきから桧山先生が探してたよ」

「ほんとか？」

息を切らしながら立村が問い返した。しっかり走っても全く呼吸が乱れない南雲の表情を、貴史は見ても見ぬ振りした。悪いがファンクラブの女子連中と好みが全く違うのだ。

「俺もさっきまで規律の連中と話、詰めてただけどさ。桧山先生がりっちゃんに頼まれた英語の入試問題集とヒアリングテープを渡したいから職員室に来てくれって」

「ありがとう、今から行く」

さっきまで死にそうな面してふらふらしていた立村がすっと立ち上がり、膝のあたりを払う仕種をした。むかつくくらい丁寧に腕時計番を見つめた。

「もう、かなり時間、経ったよな」

「うん、三十分くらい」

「だよな」

立村はゆっくり貴史を見返した。前髪を手の甲でどかした。

「羽飛、本当に申し訳ない。今から桧山先生のところに用があるんだ。もう、いいだろ」

「いいだろって」

文句はたんまりある。腹が膨れるくらいにだ。余計なことを南雲が割り込みつつ言う。

「桧山先生もなんか、りっちゃんに急いで渡したいみたいだったよ。急いだほういいと思うなあ。今もそうとうりっちゃん、しごかれたあとみたいだし。けど、先生が帰っちゃう前にダッシュしたほういいと、俺は思うよ」

「あのなあ」

なんというのか、南雲には文句を言いたくてもどんどん交わされてしまうような手ごたえのなさを感じていらだつ。これが仮に一発命中させることができ泣くなりわめくなりしてもらえれば、貴史も二本足ふんばって勝負できるだろう。大抵の男子にはそうやって対峙してきた。青大附中に入学してきているいろんな男子と話をしてきたが、南雲ほど捕らえどころのない、わけのわからない男はいなかった。

いや、厳密に言うと立村もそのひとりなのだが、それはまた別の問題だ。

「じゃ、あとはやっつくから、りっちゃん行っちゃえよ」

「ありがとう」

なぜ、南雲に対しては何度も「ありがとう」と礼を言うくせに貴史には謝ってばかりなのだろうか。どうもその差も面白くない。

「明日、来るだろうな！」

「うん、もちろん」

他のリレーメンバーにも片手を挙げて合図をし、立村は全力で校舎へと戻っていた。あのスピード見る限り、体力はもうグラウンド一周くらいしても十分なほど残っていたのではなかろうか。見ているとほんとむかつく。

しばらく気まずい夕暮れ間際の空気が漂った。もうそろそろ本来ならば切り上げねばならない時間という気もするが、貴史の見る限り他クラスの連中は誰も帰ろうとしていない。ということはまだまだ練習したって構わないということだろう。

「さあっさ、もう一丁行くぞ」

声をかけてみるが、今度は南雲が近衛に質問攻めに合っている様子である。

三年D組男子リレーチームにおいて主導権を握っているのが陸上部の近衛である以上逆らえないのが辛いところだ。たとえ出場しなくても、敬意を払わざるを得ない。つまり、近衛が話し終えるまで待たねばならない、そういうことだ。

「立村なんで呼ばれたの？」

「さあ、俺が桧山先生から聞いた限りだと」

知ったかぶりで南雲が説明を繰り返す。

「過去五年間の青大附高の問題集とヒアリング試験用のテープだって。りっちゃん、自分のために使いたいから貸してもらいにいったらしいよ」

——青大附高？

わけがわからない。靴の紐が緩んだのを直す振りして、下から聞く。

「なんでだろなあ。なんで青大附高の試験問題が必要なんだ？ もっかい受けて入学し直そうなんて考えてるわけねえしなあ」

——当たり前だろが！

近衛のひょうたん顔で語るその口調もなんだかいらだたしい。南雲とセットというのが不快感を増させる。さっさと夏か秋かはっきりしろと言いたくなる。

「英語だけだって言ってたよ。興味あるんじゃないのかな。だってりっちゃんさ、英語科進学を狙ってるしさ。あ、もう決まったようなもんか」

——分かりきったこと言うんじゃないよ！ 立村は英語科志望一本だってこと、うちのクラスの連中全員に知れ渡ってることだろうが。

まあ、落ちるとすればふだんの行いだろうが、菱本先生がいきなり立村を叩き落とすようなことはないと思われる。立村が嫌っていようが、熱血菱本先生にとってあいつは手のかかる可愛い生徒なのだ。

「なのに、なんで試験問題必要なんだろうなあ」

「りっちゃんなりに理由あるんだと思うよ。さ、うるさい奴がいるからさっさと俺、走ってくるわ。近衛、一緒に付き合うか？」

——ああ、うるさい奴だな、悪かったな！

貴史の存在を気付いているかいないかわからないようなそのあしらいに、とうとう堪忍袋の緒が切れた。

「南雲、なんだその言い草は！ ちょっと来い！」

「悪いけど、俺もわずかながらトレーニングしなくてはならない身の上なんでね」

言葉を切り、わざとらしくゆるゆるランニングを続けながら近づいてきた。

「明日の体育の時間にさ、アンカーを決めるって話だし、ま、そのためにはひとつ努力せねばね。そんなにやきもち妬かなくてもいいじゃん！」

——てめえ！

振り上げたこぶしを下ろす間もなく、南雲はさっき校舎へ駆け抜けていった立村と同じくらいのスピードでグラウンドめがけて一周し始めた。またどこかの女子たちが、バレーボールの円陣から黄色い声を挙げている。三年C組あたりだろうか。顔しか見ようとしない女子どもには困ったものだと改めて思う。

「おい、近衛、アンカー決めるの明日かよ？」

「しかないじゃん」

のどかな声で、陸上部のエースはにやにや笑いつづけていた。

「冗談じゃねえ！」

——あいつにアンカー取られて、たまるかよ！

貴史は南雲と反対方向からグラウンド脇を一気にダッシュした。百メートルだけ全力疾走した。後ろの体育館出口から、

「はっとばー！」

とおなじみこずえの声が響き渡っていた。今の自分には残念ながらこれが現状だ。

三年D組男子リレー、アンカーの座を争う四百メートル走勝負の前、貴史はめいっぱい柔軟運動を行ったし、エネルギーを蓄えるため母に頼んで焼肉ととんかつのセットを夜食に注文した。さらに一步ライバルと差をつけるために、めったに読まない「保健体育実技教科書」なるものまでひっぱり出して読んだ。こんな、悪いが入学してから五回くらいページをめくったことがあるかないかのどっちかだ。

——フォーム、フォームって言ってたな。

やたらと陸上部エースの近衛が、立村に対して褒めていた言葉が耳に残っている。

——長距離のフォームったらなんだ？ あいつの走りっぷり、そんなにいいのか？

貴史には全くわからない。専門家がどういうかは知らないが、教科書を一ページ眺めただけで放り出した。こんな無駄だ。やっぱり男は身体が勝負だ。筋肉勝負でいくしかない。

——頭なんか使ってる暇、ねえよ。だ一れが南雲になんかまっけるもんか！

アンカー決定の勝負について、女子たちは三年D組以外の他の連中もかなり興味津々らしい。当事者である貴史にすら直接、見知らぬ女子から、

「羽飛先輩、アンカー勝負、がんばってくださいね！ 応援してます！」

とか声かけられるし、二年の時一瞬だけ付き合ったことのある後輩からも、

「先輩が勝つって信じてます」

とか囁かれ、折鶴のようなものを手渡された。ほんとに一回デートしたっきりで実をいうと名前ももう覚えていないのだが、振ってしまったにも関わらず笑顔で接してくれるというのはなかなか嬉しいものだ。もしかしたらとてつもなくもったいないことをしてしまったのかも、とふと思う。

——まあいっか！ 外野はどうでもいいがまずは勝負だ勝負！

体操着に急いで着がえ、短パンのはまり具合をゴムから何から確認する。ちょっとでもずれがあればやっぱりコンマ何秒かの差が出てしまう可能性がある。

あまり神経質なことを考える性格ではないのだが、やっぱりやるべきことはしっかりやりたい。うっかり手を抜いて足元すくわれたくはない。

さりげなく敵陣地の様子を横目で伺う。立村を相手に南雲が軽やかに笑っている。同じ体操着を身に付けているはずなのに、なぜあんなにぴっちりとなまりがよいのかが謎だった。髪型もいかにもといった風にあやつている。ちらっと観たところ、整髪料らしきものを使ったてかりが目立つ。前髪も後ろ髪もご丁寧に巻いているところがいやらしい。

「りっちゃん、生徒会との話し合いはうまく言ってるの」

「ああ、少しずつだけど」

大勝負前なのだからもう少し気合の入った会話をしろと正直言いたくもなるのだが、規律委員

長と評議委員長との対話でもあるのだからしょうがあるまい。

——立村の奴、結局あのわけわからない「大政奉還」の件、いいかげんあきらめたのか？

夏休み前の話題だし、一夏越えれば立村もそれなりに考え直すだろう。今のところ美里経由で新しい情報は入ってきていない。評議委員会がばたついているのは、C組の霧島ゆいにからむなんらかの事情くらいで、何事もなく学祭の準備が始まり、生徒会改選が行われ、最後に卒業式が待ち構えるという展開だろう。

——ま、俺には関係ねえよな。天羽たちがあとは片付けることだしな。

委員会のことばかりにかまけている立村たちの考えとは意を同じくできない。

貴史としたらやっぱり、熱血ティーチャー菱本先生を担ぎ上げた格好での大団円を期待しているし、そちらの方に立村も力を注ぐべきではないかと考えている。そのことについても時間を見つけて立村に談判したいところだった。

別に「この日はアンカー選考ですよ」なんてことは表立って言われているわけではない。

ただ、体育委員や先生たちからそれっぽい話を臭わされているだけのことだった。

しかも選考レースと呼ばれているにも関わらず、貴史と南雲とは同じグループで走らされるわけでもない。適当に並んだ順番で四人ずつ組ませ、タイムだけ計るといったなんとも言えない手抜きの選考に思えた。

「あーあ、まじかよ、がつつりかったるいよな」

整列している列の後ろで、南雲が東堂に話し掛けている。振り向く気もないが会話だけは聞こえてくる。

「じゃんけんで決めちゃったっていいじゃん、なあ、東堂大先生？」

「けどそうは問屋がおろさないでしょうよ、南雲くん」

「熱く燃えるのはできれば本番だけで十分じゃん」

——お前、もう少し黙れよ。

こんな軽い奴に、負けてなるものか。本番だけ熱く燃えて満足できるようないいかげんな奴に、誰が、誰が。

もちろん体育委員がタイムウォッチをもって計測してはいるので、アクシデントさえなければ何事もなく冷酷な数字のもと結果が発表される。

南雲の出番は最終グループの前に、貴史と立村は最終グループだった。出席番号順でいくとどう考えても南雲との一騎打ちになるはずなのだが、あえてずらしたところに何かを感じる。全力で走るしかない。

「今回はなアンカー勝負がかかっているからな！ 気を抜くなよ！」

小声で背中をぶち抜いてくれたのが体育の先生だが、

「先生、俺だけにやってるんじゃないやろ」

「よく見てるなあ羽飛」

これじゃあ気合もするっと抜ける。

とはいえ、やはり目的が……最終的には本番での学年優勝……にセッティングされている以上、そうそう手抜きをする気も起こらない。むしろ、問題なのは隣の立村だ。大外から走る羽目になったのにも関わらず、ろくすっぽ柔軟運動もせずに校舎のほうばかり眺めている。何か珍しいものでも飛んでいるのか、と眺めたが空が青くひん剥いているだけだった。

「UFOでも飛んでるのか？」

皮肉っぽく言ってやると怪訝そうな顔をしつつ、白線の前に立つ。

「いやなんとなく」

「手抜きするんじゃないねえよ。ほら、女子も見てるだろ」

ちょうど南雲たちがグラウンド半周側のゴールにたどり着いたところだった。頭ひとつ抜けている印象はあり、遠めでも勝利したのは南雲だとわかる。さすがにこれは決まりきったことだろう。グラウンドの隅っこでハードルを跳んでいる女子たちの一部が嬌声を上げている。女子たちはタイムで決まることを知らず、とにかく一位で通過すれば無条件でアンカーなんだと思い込んでいるに違いない。

「南雲が勝ったな」

ひとこと、ぼそりと呟いている立村を小突いた。

「あのな、俺への嫌味かよ」

「そういうわけじゃないよ。タイムわからないし」

「俺がアンカーの座、死守するってこと、知っててかよお前」

「悪かった、俺の言い方がまずかった」

「なんで立村そういう卑屈な言い方するんだよ、だからむかつくっての！」

その後の返事を聞く前に、貴史たちの出番が来た。

——絶対、完璧なタイム、出してやる！

順番ではない、タイム勝負なのだ。思い知らせてやる。

スタートした後、全力で飛ばした。四百メートルという距離が中途半端なのだろうか。持久走のように溜めて溜めてそのあと飛ばすという駆け引きもない反面、百メートル走のように勢いだけで持っていけるというわけでもない。ぴんと張った糸をそのまま張りつめたまま、切らないようにつっぱしらねばならない。息の上がり方が半端じゃない。

かすかな歓声が聞こえた。女子の声ならこの瞬間ならばエネルギー変換すぐされる。

「はっとばー！」

喉がつまりそうな息苦しさと共に聞こえてきたのはやはりこずえの声。

「羽飛勝てる！」

「いけるいけるいける！」

「抜けー！そのままそのままそのまま！」

競走馬になり、馬券発売中といった風情のD組女子諸君。ハードルを生真面目に跳んでいる一部の女子を除き、みなかじりつくように応援してくれている。

はっとまた、内臓が逆流しそうな感じがする。喉もとが熱くなる。四百メートル全力疾走とい

うのはいつもこうなりやすい。喉が締め付けられそうだ。隣に誰も負ってくる奴がないのも承知していて、それでも一秒でも、コンマ一秒でも、文句言わせぬタイムを出す、そのことだけ空の真上に突き刺していた。

「たっかしー！ 死ぬ気でいっちなえ！」

甲高い声が響いた。こずえの声ではなかった。自分の中には繋がらないその叫びだった。

——美里、か？

空にしっかり繋がった意識の糸が、振り子のように揺れ一気にゴールの白線へと追いやった、そんな感覚が背中に襲ってきた。誰かが押したわけではない。同時に倒れこんだ。勢いが強すぎて、頬を思い切り地べたに擦った。切り傷ができたことは確かだ。立ち上がれない。女子たちの悲鳴がかすかに聞こえる。右耳から金属音に似たものが響いて止まった。すぐに起こされた。立村だった。

「大丈夫か」

「ゴール、してたよな？」

すぐにしゃがみこみ頭をすぐに持ち上げてくれた。そんなことどうでもいい、タイムウオッチを握り締めたまま駆け寄ってきた体育委員にもう一言尋ねた。

「おい、俺のタイム、南雲に勝ってるか？」

「ごめん、今の勢いで止められなかった」

申し訳なさそうに、それでも顔をにやつかせながら答えた体育委員に貴史は足蹴を食らわせようとした。腰が落ちていてうまく動けない。

「止められなかったってどういうことだよ！ おい、お前、今日アンカーがかかってたってこと承知してただろ！ おい、何分だよ！」

「羽飛、よせ」

立ち上がろうとした貴史を立村が無理やり両肩を押さえつけた。

「お前が倒れたのを見てすぐに駆け寄ってきたんだ。そんなタイムなんて見ている暇ないに決まってるだろ」

「けどお前、今日はリレーのアンカーの」

「そんなのどうでもいいだろ！」

左肩を立村は強く握ってきた。痛かった。他の連中も不安そうに周りを固めている。元気なところを見せなくてはならないのだが、しかし、

「東堂、悪いけど、羽飛を保健室に連れていってくれないか」

「ああ、了解。たくよりによってこんな結末かよなあ」

すぐに保健委員の東堂が顔を出し、貴史は強引に地べたから引き揚げられた。立村が手を軽く振り、背を向けたのを貴史はいらだたく見送った。見損ねたのは南雲の面だけだった。

——なんだよ、よりによってタイム、とってねえのかよ！

お互い仲があまりよろしくないグループ同士ということもあって、東堂とは殆ど口を利かなかった。すぐに保健室へ押し込まれた後、さっさと戻っていった。南雲とのタイム差がどのくらいあるのかなんて計算しようもない。ただ、勢いだけは自分の方が上だったのでは、とも思う。軽く流しておく程度の南雲と……それでもあっさり勝ってしまうのは認めざるを得ない……しゃかりきに突っ走った貴史とを同等に扱ってほしくはない。

「羽飛くん、怪我の薬塗っとくから！ ったく下手なこけかたしたよねえ。小さい傷でも黴菌入ったら大変なことになるからね。もう次の授業の準備もあるし、あんた、すぐに教室へ戻りなさいね」

かなり染みる赤チンを顔の傷に塗ってもらった。養護教師の都築先生がこまこま動きながら薬箱を開けている後ろ姿を眺めながら、

——ほんとにこの先生と更科付き合ってるのかな。

思わず腰から下へと視線を向けてしまった。噂だけだと凄いことになっているらしいが、まあ、ありえないだろう。いくら都築先生が若く美人とはいえ、自分らからすれば二十代というのは「おばさん」の領域に入る。やはり女子は自分より年下で可愛いのが一番だ。

「羽飛」

廊下から教室へ戻ろうとすると、立村が呼びかけてきた。もう身支度を整え、ネクタイを襟元で結び直している。俯いた顔をすぐにあげて、

「大丈夫か？」

「大丈夫なんかじゃねえよ！ なんだよタイム計ってねえだと？」

立村に八つ当たりするのは意味がないと分かっているけど、つい罵声浴びせたくなる。

「リレーのことだけど、やはり、今日はまだアンカー決めないことにしたよ」

「やはりってなんだ？」

タイムが出ていない以上、判断ができないというのだろう。予想できないわけではない。しかし次に飛び出した立村の台詞に貴史はあぶなく、正面頭突きをしでかしそうになった。

「俺が提案したんだけど、アンカー決めるの当日のコンディションで決めるってことでいいんじゃないかってことで、話がまとまっているんだ」

「おい！」

闘牛化した自分を押さえる間がない。思わずネクタイにかじりつきそうになる。すぐに闘牛士立村は交わす。

「南雲もそれで納得してたよ。無理にタイムだけで決めるより、その日一番身体の調子がよい人がアンカーになればいいんじゃないかって」

「けどなあ、練習はどうするんだ！」

「練習は、ふたりともアンカーのつもりでやれば、モチベーションも上がっていいんじゃないかな。へたに今の段階で決まったら、余計な外野の人たちがわいわい騒ぎ出す可能性あるしさ。

羽飛も、集中できないだろ？」

顔色買えずに立村は、それだけ伝えて背を向けた。

体育着を脱いで通常の制服に着替えた立村には、貴史も言い返せないことが多々ある。

わけのわからない、有無を言わせぬ胆力のようなものが、奴には時々見られる瞬間がある。貴史からすればそういう部分をなぜ、リレーの際に利用しないのかが理解できなかった。

——あいつ、俺が保健室で赤チンぬったくられてる間に、そんなくだらんこと決めやがったのかよ！

球技大会当日まで、二分の一の確率で考えられた「南雲への敗北」に対する感情を感じずにすむのはよい。だが、もう一方の可能性「貴史の勝利およびアンカー決定」については当日にならない限り得ることはできない。

——ちくしょう！ 立村の奴何考えてるんだ！ それにあいつ、真面目に走ってたのかよ！

そういえば、立村は四人中何番目で入線したのだろう。

確認するのを忘れていた。

誰も立村を応援する声は飛ばなかったことだけ、記憶していた。

——美里ですらも。

頬の痛みにも思わず傷を手の甲で抑えた。赤チンが少しだけついた。

——あいつもなあ、俺なんかに声かけるよか、立村だろ？ 本当は！

——でなきゃ、俺だってこんなわけわからねえこけ方しねかったぞ。

——たっかしー！ 死ぬ気でいっちなまえ！

今まで青大附属の行事において、美里は貴史ひとりを意識して応援することがあまりなかった。いまさら応援したって効果なんかない、というのが言い分だった。それ以来貴史は「せめて立村くらいは応援しろよ」と言い聞かせておいた。美里にしては意外にも素直に受け入れ、交際前・交際後問わず立村をひいきする ようにしていたはずだった。

——なんで俺の名前、呼ぶんだ？ 美里？ 血迷ったか？

なぜ訳のわからぬことやらかしたんだろう。

笑えるほど軽症だったにも関わらず保健室に運び込まれた貴史はまず、美里にいきなり腕を捕まれてしまった。教室に入る前にだった。待ち構えていたらしい。

「あんた、ちょっと来てよ」

「なんだ、俺を心配してくれるのはありがたいが、そうされて嬉しいのは優ちゃんだけなんだ」
軽くあしらうと思いきり足のすねを蹴られそうになる。

大事な脚になんてことをする。

「やめろよなあ、なんだよおい」

「ふざけてる場合じゃないの。すぐすむからいい？」

半袖のブラウスに、形が少し崩れた超結びリボン。美里がその手元を見ずにいじくっている。

「またやっちゃったよね」

「誰がだよ」

「言わなくたってわかるでしょ」

貴史を見あげたまま美里は大きく溜息を吐いた。

「なんでよりによってあんなこと言っちゃうんだろ」

「俺はただかっこよく走っただけなんだがなあ」

「あんたのことって誰が言ったの？ 主語を考えてよ。私が『言わなくたってわかる』相手ったらひとりしかいないじゃないの」

そうか、立村だ。律儀に保健室へ顔を出して、頼みもしないのに余計な一言残して去ったあいつだ。確かにあいつには放課後何か言い返しておきたい。男と男の勝負を何もいきなり、なかったことにしろとかわけのわからないこと言い出すのはやめろと文句のひとつくらい言ったっていいだろう。

「立村が余計なことやらかしたってことだろ、ああ、わざわざさっき保健室に来たぞ」

「あんたにまで話しに行ったわけ？ もう、ほんっとばか！」

今度は顔を覆って首を振る。泣いてはいない。怒っているだけだ。見たらわかる。

「立村くん、ほんと、何考えてるんだろ？ もう、わかんない！ 暑さで変になっちゃったのかな。もう女子たちから非難ごうごう。大顰蹙。もう私も何度他の子たちから怒られたかって、言ってやりたいよね！ どうせ立村くんはいいよ。私が文句言ったって知ったことないって顔して無視するけど。すぐにふてくされてどっか行っちゃってほとぼり冷めるまで隠れてるし。でも、迷惑かけられた私とかどうするのよ。それに、貴史、あんただってさ」

「おい、なんで俺が出てくる？」

「寝ぼけないでよね。あんた、頭打った拍子にどうかしちゃったんじゃないの」

非常に失礼なことを目の前の幼なじみは言い放つ。どうも女子の場合勘違いした発想をしたがる傾向があるのはわからなくもないのだが、しかしつかみ所が完全に違うような気がする。確認しておいたほうがいい。

「美里、何あせってるんだよ」

「あせってなんかないわよ。次の授業、歴史だってこと、わかってるよね」

「そうだな、それが」

貴史が問い返すと美里は次に貴史の胸元のシャツをつかみ、思いっきり引っ張った。

「菱本先生、何を教えてる先生？」

「……わかった」

永い付き合いだとやはりわかる。美里が何に頭を痛めているのかが、だった。

——修羅場がお待ちかねってことだな。

「ね、でしょ？」

「覚悟だな」

「さっき誰かがね、わざわざ今の話を言いつけに行ったのよ。貴史と南雲くんとのアンカー争奪戦で、立村くんが関係ないのに余計なこと言い出したって。貴史と南雲くんの問題なんだから何も立村くんがでしゃばって、ギリギリまでアンカー決定を延ばそうなんて言い出すなんて勘違いもいいとこだって！ 放課後もう一回一緒に走って勝負つけるって手だってあるのに、なんで立村くんが出てくるんだって、みんな、怒ってるの！」

「おい美里、すげえ勘違いしてるぞ。みんなったら誰だ」

「あんたと私と、あと南雲くん以外。南雲くんはね、別に立村くんの意見でいって顔してるけど。こずえは激怒してるし。もう、私、知らないから！」

勝手に叫んで勝手に怒って、勝手に教室に戻っていこうとし慌ててまた戻ってきた。

「先生の教科書持ってくるの忘れてた！」

そう、美里は社会の授業前に必ず、菱本先生の教科書やら年表やらを運ぶお勤めが待っているのだった。ちなみに立村は社会に関してのお勤めを一切拒絶している。言うまでもない。

「おいおい、どうした？」

呼びかけながら貴史は教室を覗き込んだ。扉は開け放たれたままだった。ということは、さっき美里がヒステリー起こしていた様も丸聞こえだったというわけだ。

「羽飛、ちょうどいいとこ来た。ちょっと、当事者の意見を聞かせてよ！」

三人ばかり男子連中が、その周りに女子たちが五名ほど仁王立ち状態で待ち構えていた。D組の女子は十五人だから女子全体の三分の一が立村の敵として立ち はだかっていることになる。被告扱いの立村はというと、ちんまり席について、ゆっくり貴史の顔を見つめている。何も言葉を口にしないのは、やっぱり問い詰められていたということだろう。立村の性格上決して珍しい光景ではないのだが、今回は自分が関わっているのでもちとやっかいだ。

「また裁判やってるのかよ」

「そういうわけじゃねえけどな」

男子たちが数人顔を見合わせつつ、面倒臭そうに腕をかきむしった。

「女子がうるせえんだよ。口出すなってのにな」

「そうそう、男子が決めたことなんだから女子には関係ねえだろ」

「関係あるって！ 何男子たちいきなり殻に籠るわけ？」

三分の一女子内にこずえは混じっていなかった。まあ、万が一その場で同じ面して立村をねめつけていたらまた、こちらとしても何か言わねばならないだろう。面子を確認した限り、どうやらもともと立村を快く思っていない女子の一味だし、いつものように無視するだけですむだろう。本気だして言い負かす必要はなさそうだ。

「殻なんかねえよ。ひよこじゃねえもんなあ」

誰も笑わない。白けた。

「羽飛、あんたさ、むかつかないの？」

「何をだよ」

美里とは違うとげとげしい言葉の嵐に、思い切りびびってしまう。

「せっかくの男と男の勝負を、羽飛、立村なんか茶々入れられるなんて、たまったもんじゃないじゃないの！」

「はあ？」

確認の意味で呟いただけなのだが、肯定と取られてしまったらしい。勢いづく女子たちにさらに退く。

「そうだよ羽飛。全力であんた勝負したんじゃないの！ タイム計ってなかったのはミスだけど、しょうがないよね。今日の放課後もう一度、きっちり勝負しなおせばいいのになんで、中途半端にぎりぎりまでもたせようなんて言い方するわけ？」

「おいおい、どっちを責めてるんだ？ 俺か？ それとも立村か？」

愚問とすぐに気がつく。女子たちは遠慮しない。はっきり答える。

「もちろん立村に決まってるじゃないの！ 昼行灯のくせに！」

「やめろよ、それは言い過ぎだろ」

貴史が割り込む前に別の男子が言い返した。

「お前ら前から立村のことばかり文句言うけどなあ、そんな自分をご立派と思ってるのかよ。ブスのくせに！ 少しは自覚しろ！」

——ああ、やべえ、それは禁句だぞ。女子に顔のこと言ったら最後、半殺しだぞ！

美里で学習済みの真理を教えてやりたいが間に合わない。あわてて割りこむしかない。これでも比較的貴史は女子受けよいほうなのだ。しかし話は激流状態。こうなったら堤防崩壊までいくしかない。

「ブス？ 不細工のくせに、こっちがクラスのことを思って言ってあげてるのになによ！ 顔のことなんて関係ないじゃない！」

「顔じゃねえよ、お前らなあ、一年の頃からほんっと立村のことばっかしつるし上げてだなあ、むかつくんだよ、弱い者いじめしまくるその態度がな。今までずっと我慢してたがな」

「八つ当たりするんじゃないよ！ 何様のつもり？ 私たち、いつ立村をつるし上げたってのよ。理由がなくてそんなことするわけじゃないの？ 当然原因にはちゃんと理由があるってことよ。一年のことってもしかして杉浦さんのこと？」

「やめろよ、おい」

禁句だ。男子の間でも暗黙の了解で口にはしない、立村の過去を女子は平気な顔して引っ剥が

そうとする。男子同士でももちろん軽いのりで叩くことがないわけではないが、立村に関しては決して触れてはならない一線と認識していた。だが女子にそれは通用しない。ただ激しく、ぶちぎれるだけだ。

立村の反応はない。ただ静かに話をしている者の方を交互に見つめている。

完全に貴史は蚊帳の外だった。女子たちが交互に口にするのは、立村へ向ける言葉の毒矢なり。それがどんな風につきささっているのか想像できない。貴史も、立村がいつも無表情で流す以上、さほど傷ついていないのだろうと推測するしかない。激しく荒れない限りは。

「加奈子ちゃんがさんざん立村に追い掛け回されて、ノイローゼになったんじゃないの！ 可哀想に加奈子ちゃんずたずたになっちゃって、公立に転校する寸前まで追い詰められたんだよ！」

——うわ、完全に誤解のかたまりだこりゃ。

「それだけやって、本当だったら立村の方が追っ払われるはずだったのにあんたら男子たちと清坂さんたちがやたらかばって、それでなんのお礼も言わないわけ？ それになんでいまだにあんた、評議委員でいられるわけ？ なんで評議委員長なわけ？」

——おい、全くもって話がずれてるだろが！

「そうだよ、私も同じく。本当だったら評議だって別の男子に代わったっていいのに、みんな前例通りだからってことで決め付けてさ。なんか変だよ」

「そうそう、本条先輩に取り入ってるだけじゃないのさ。本条先輩がいなくなってその後光で褒めてもらってるだけなのにね。まったく最低。今度は羽飛にやっかんでるわけ？ だからさんざん口出しするわけ？」

——百パーセント、立村のつるし上げのための時間じゃねえか。

男子連中も負けてはいないのだが、口を挟むにはあまりにもスピードが異なりすぎる。ふつうの再生ボタンを押しているにも関わらず、どでかいステレオが倍速タイプの再生を行っているかのようだった。美里相手でも似たような展開になることがないわけではないが、それでもまだ、四倍速になるような言い合いにはなったりしない。

「お前らの方こそばかすぎてしゃべるのもばっかばかしいぞ」

「ばかばかって何様のつもりよ。男子だからって威張るんじゃないよね。私らはただ、真実言ってるだけじゃないの。あんたらの方こそ、女々しいっていうんじゃないのさ！」

もういい、これはもう、公開処刑みたいなもんだ。

「双方、黙れ！」

貴史は強引に立村のまん前に立ちはだかった。奴の顔など見なかった。女子三分の一の顔だけを見据えた。ひとり、またひとり、みな顔を紅潮させ口を尖らせて文句を言い募っている。まだまだ頬袋には文句の種がどっさり詰まっているんだろう。よくわかる。ついでに美里とも修学旅行中いろいろトラブルのあった連中と聞いている。下手に男子として口を挟んだら美里との関係を邪推される可能性有りなので、今までは露骨に言い返すことはしてこなかった。しかし今回は、叩かれる相手が違う。一切言い換えそうとしない立村だ。立村は三年間、同じような場面でも一切反論したりしなかった。大抵貴史や美里、たまにこずえや南雲が割り込んで治めたは

ずだった。同じパターンならばそれでもいいだろう。

「お前らなあ、話、整理しろよ。今、お前ら言いたいのは男子リレーのアンカー勝負のことだろが！ それは男子連中が決めることだぞ。ついでにいうなら、当事者の俺と南雲が白黒つけばいいことだろが！ おい、南雲の奴、なんて言ってたんだ？」

実は密かに気になっていたことだった。

男子のひとりが答えた。

「それ、いいんじゃないのって」

「それだけかよ」

言い捨てた。同時にまた頭の別方向から煙が噴出しそうな気がした。振り返り、まずは立村に振り返った。貴史と目が合うと、すぐに逸らし俯いた。こうやって奴はいつも隠れやがる。

「立村、おい、なんか言うことないのか」

首を振る。言葉もないのかこいつはと言いたくなる。思わず足踏みした。

「こうやってるから女子になめられるんじゃないか！ ったくこの馬鹿が！」

悪いが、男子同士の会話とは言葉だけではない、こういうことだ。

周りが右足を一步退いた。

貴史は、立村の頬を軽く叩いた。もちろん手加減はしたし、「ぶんぐる」ほどではない。しかし、男子も女子も、その行為に言葉をみな飲み込んだ。

——ということで、こいつら、黙るだろ。

黙らせるには、一対一のぶつかり合いで打ち消すのが一番だ。口の達者な女子連中に対し、男子同士の会話に割り込ませない方法といえば、これしかない。

立村は頬に手を当てるでもなく、黙ってそのまま俯いていた。何をやっても、伝わらないのもいつものことだった。

「貴史！ あんた何考えてるのよったく！ 先生来るよ。早く、座りなよ！」

確実に今の修羅場寸前な雰囲気をもくもくと勘付いていたはずの美里が、教科書一式を抱えて呼びかけた。教卓に荷物を置いて自席についた。その荷物がえらく少なく見えた。後からこずえも飛び込んできて慌てて貴史の側へかけよってきた。

「羽飛、とにかく今から、菱本先生の特別授業始まり始まりだから、さっさと座ってな。ほら、みんなもさ」

怪訝な顔で女子たちが「どうしたのこずえ？」と呼びかける。美里とは相性最悪な女子三分の一たちも、なぜかこずえとはうまくやっているようだった。そのおこぼれで美里もうまく守られていることくらい、もちろん貴史は気付いていた。

「さっき、先生に文句言ったじゃん？ そしたらさ、菱本先生が今日の歴史の授業をつぶして臨時のロングホームルームやるって言い出したんだよね。ほら、だから美里は今、年表のどでかいまきもの運んでこなかったじゃん？ そういうことよね、先生本気よ」

「おいおいおいおい、お前もかよ古川」

責めたくなるのをあえて隠さず呼びかけると、へらっとして笑顔を向けてきた。

「だってさ、すっきりしないじゃん！ 羽飛だって、南雲だって、私らだってそうだしさ、それに立村、あんたもだよ。ちょっと羽飛、そこどきな」

いきなり下半身のベルト付近、いわゆる急所近くをタッチする真似をする。実際真似だけで直接そうされたことはない。うまく逃れた。こずえはそのまま立村の机脇にしゃがみこみ、「言いたいことあるんだったら、先生のまん前でとっとと言っちまいな」

それだけ囁き、さっさと席に戻っていった。あっけに取られた男子連中のひとりに、「おい、羽飛、女王様にやられたか？」

にやにやしなながら声をかけられた。斜めから観ると、もろ触られたように見えたのだろう。「大丈夫大丈夫、俺の操は優ちゃんに捧げられてるのさ」

らしくもないきざな台詞でごまかして、貴史も立村を無視して背を向けた。

今のようなやり取りは決して、三年間珍しいものではなかった。

杉浦加奈子を巡る立村の執着心……そこからなる恋愛のややこしい展開……さらに言うならその半分以上が仕組みられたものであったこと……でもその真実を言えない理由があり、男子連中だけはそのことを理解し、水に流したということ。

女子たちには、美里とおそらくこずえを除いて真実を知らない。

いまだ、立村は杉浦加奈子に振られてしつこく付きまとった挙句、いやいや美里と付き合ったという展開に納まっているはずだ。その後立村の、評議委員長としての名誉も過去の汚点を押し流すには至っていない。

その他細かな、立村のしでかしたへまが積み重なり、ことあるごとに女子たちは嘲笑していたものだった。今のように人前で物笑いにするケースはさほどないが、陰口はさぞすさまじいことになっているだろう。貴史と美里が裏で懸命に手を回し、なんとか評議委員から落とされるような羽目にだけはなっていない。しかしいつも、綱渡りのクラス評議改選というのも事実だった。

——なんでお前、言い返せねえんだよ！

——過去は過去だろが。立村、俺はお前の隠したがる過去をみんなお見通しだけどな、ぜんぶ知っててこうやってるんだろが。ばっかじゃねえのかよ。

——違うなら、なぜ違うってかみつかねえんだよ！

立村はいつも黙ったまま俯いていた。

クラスの外で、評議委員長としてマイクの前で発言する時とは違う、幼い表情のままだった。その顔を知っている三年D組のクラスメートたちはどこまで噂として流しているのだろうか。一番見下されている場が、一番学校内で長い時間過ごさねばならない教室だということを、立村はどう感じているのだろう。

——このまま、評議委員連中とだけつるんで逃げまくって、それでいいのかお前？

——しかもクラスでわけのわからないことばかりしやがって！ 株落として何が楽しいんだ？

——だから美里がいつも俺にぎゃあぎゃあ八つ当たりするんだろが！

「みんな、そろっとるな」

とぼけた声で菱本先生が、水色のシャツ姿で現れた。

最近、ファッションセンスが少々都会っぽくなってきたと、女子の間では噂になっているらしい。単純にTシャツやジャージよりも、襟のついた服を着るようになったただけなのに、ずいぶんネタにされやすいものだ。

「静かだな」

「嵐の前の静けさね」

こずえが茶々を入れた。またちらと、貴史の喉元にむずがゆいものが走ったような気がした。菱本先生は形の整った頭をかきながら教壇に昇り、次に教卓の教科書を裏返しにした。

「ということでだ。今日は臨時ホームルームだ。テーマはもちろん、男子リレーのアンカー勝負についてだ。わかるな、立村？」

俯いていた立村が、視線だけ鋭く菱本先生にぶつけているのを貴史は見た。

もちろん、言葉はなかった。

立村が菱本先生のことを入学当時から嫌っていたのは知っていた。

もちろん入学式当日、というわけではないが。ただそんなにぶちぎれることだろうかと首をひねった記憶はある。第一、名前の呼び方の確認をされたただけであんなに恨む必要なんてあるだろうか。わからん。

「人の名前をいやみったらしく確認されたのがな……」

理由を三年近くかけて聞き出した。

「しゃあねえだろ。間違えたらそっちの方が響盛だろうがよ」

「適当に流してくれればいいのになんでわざとらしく繰り返すんだろうな」

あまりつつこんでいくと、立村がだんまりを決め込んでしまうので貴史も深い追求はしなかった。する意味もないと思っていた。

——要はあれだろ。立村が自分の名前を女臭いとかいう理由で嫌ってて、それをたまたま菱本先生が繰り返して読み方確認したのがむかついたんだろ？ たったそんだけかよ。

美里に言わせれば、

「立村くんが自分の名前を好きになれば、すべて解決することじゃないの」

もつともだ。貴史も同意する。しかし肝心の立村が全く気持ちを変えようとしないのだからどうしようもない。

もつとも菱本先生も、立村の性格を把握し損ねた嫌いはあるようだ。

これは前から、貴史も美里と連れ立って菱本先生に相談を持ちかけていたことだった。

「先生あのさ、立村がなんで先生のことそんな嫌がってるかって言うとき」

「なんでだろうなあ。何か地雷を踏んでるんだろうなあ」

自覚はあるようだ。菱本先生も立村とぶつかり合い逃げられるたびにいつも頭を抱えて貴史たちを呼び出し、愚痴っていたものだった。

「あいつは人に自分のことをあまり話すのが好きじゃねえの。俺とか美里とかにも全然言わねえよ。しゃべることったら学校のこととか、委員会の話とかそんなことばっかだぞ。評議委員会のことだったらだだっマシングントークすることもあるけどさ、ほんと、そんだけ。菱本先生だけを嫌ってるんじゃないやねえよ。好きな奴にも全然本音、しゃべんねえよ。そういう奴なんだよ」

正直自分としても立村の何様なんだかといった態度は気に食わない。

本当だったら菱本先生と肩を抱き合い「だよなあ、俺もほんとと奴には頭来るよな！」くらい語り合いたいところだ。そうできないのが生徒と教師との間の壁だし、友だちだからこそ理解しなくちゃならないという面倒くさい繋がりもある。

「羽飛なあ、お前とは十年後に酒盛りだな」

深い溜息を吐きながら菱本先生が苦笑いしていたのが印象に残っている。

「ま、人生長いし、クラスのこととはまあ俺に任せときなさい！」

隣で呆れた顔して首筋にチョップをかました美里には少々むかついたが。

単純に言ってしまうえば、立村と菱本先生の二人とも気が合わないだけなのだろう。

「そうだよ、あんたと南雲くんとが天敵だってのと同じよ」

「わかりやすい説明だがなあ」

三年間近く美里も繰り返したものだっただ。

「もうあんなのほっときなさいよ！ 私たちがいろいろ言っただって立村くん絶対反省なんてしないんだから！ 一緒に評議やった私の立場知ってる？ 私が社会の荷物運び担当になったのも立村くんが菱本先生の顔を一瞬たりとも見たくないからなんだもん！ すっごいわがままだよね！」

「とか言いながら、お前もがまんしてるだろ？」

「してるけど、だってしょうがないじゃない！」

——惚れてる弱みとも言うな。

美里の八つ当たりは別として、どちらにしてもクラスの代表たる評議委員……しかも三年に入ってから「長」がついている……と担任とがぎすぎすやりあっていたら、ただでさえわずらわしい人間関係がさらに面倒くさくなりそうだ。

悪いが貴史は、面倒なのは嫌いだ。さっぱり、分かりやすい方がいい。

立村が物事をやたらとややこやく取る癖を持っているのは承知しているが、それを第三者にまで押し付けるなどやしてやりたい。

どちらにしる、菱本先生との剣呑な関係を貴史なりになんとかせねば、といつも考えている。

さて、菱本先生は教室でまず、閉じた教科書の上に片手を置き、ゆっくりと見渡した。

ざあっと眺めているというよりも、ひとりひとりに話し掛けるように視線を留めている。

——なんだよ、俺、悪いけどその気ねえぞ。

勘違いなぞしないが、そう思いたくなるような視線で、生徒たちひとりひとりに目を留めては頷き、また違う相手を観てはつぶやき、の繰り返しを行っていた。

「まず、さきほど古川からダイジェストで事情を聞いたので、俺なりに情報を整理してみるが、違うんだったらその場で言えよ、羽飛、南雲、立村」

南雲は窓際付近の席で袖を捲り上げながら、「はあい」と脳天気な声を挙げた。

貴史は返事するまでもないと思い、まずは頷いた。

立村はというと、当然、無視。わざとらしく廊下側の壁を眺めていた。

「発端は来週行われる球技大会にプラスαとして行われる、学年別クラスリレー大会のアンカー選出に関して、意見が真っ二つに分かれているということなんだな」

なあ？と貴史に問い掛ける眼差しを向ける菱本先生。事実なので頷いて答える。今だに立村は知らん顔のままだ。

「だが、タイムウオッチの故障もあって羽飛の分、正確なタイムを測れなかったと、そういうことか？」

体育委員が頷いた。後付けで「はい」と答えた。

「単純に壊れたからか？」

「壊れたんじゃないくて、あの、いきなり羽飛がゴール近くでぶっ倒れたからおっぽりでしたら、そのタイムを計り損ねてしまっただけで」

「弁償したくねえよなあ」

誰かが合いの手を入れた。ごもつとも。大受けした。陸上部の近衛が付け加えた。

「あのタイムウオッチ壊したらまじで金かかるぞ」

「落としてねえから大丈夫」

何か勘違いした会話が続いた。そのまま体育備品の価格に関する話題に発展しそうだったのを菱本先生はすぐに軌道修正した。

「お前ら話を逸らすな。とにかくだ、羽飛がこけてタイムがわからなくなり、アンカー選考は振り出しに戻ったと、そういうわけだな？」

南雲に今度は振った。

「そうっすよ。俺はどっちでもいいけど」

「南雲もそうやる気なさそうなこと言うな。アンカーったら陸上の花だぞ。俺だってお前らと同じ立場だったらしゃかりきになって獲りに行ってるぞ」

「俺、そんな無理してまで奪う必要ねえし」

貴史の顔をちらっと見やり、南雲はあっさり答えた。

「だから俺は、立村の提案に大賛成だったんですよ。上位ふたりが俺と羽飛というのは決まっているから、今日はまず予選にしておいて本番ぎりぎりの段階で調子いい方を選べばいいじゃんってことで」

「けど」

どこからか、小声で女子たちが発する不服、異議申し立てが聞こえる。

「意見があるなら言えよ、そこ」

思わず罵ってしまった。聞こえたのか声はすぐに静まった。言いたいことがあるくせに黙ってそ知らぬ顔という態度が姑息だと思ふ。言いたかったら言えればいい。さっきまで立村をなぶりつくしていたように、発言すればいいのだ。でも決して先生の前では積極的に手を挙げないところにすべてが現れている。だから貴史は彼女たちを認めない。たとえ立村側に圧倒的の非があったとしても、納得はできない。

「じゃあ当事者の羽飛、お前は どう思う？ さっきまで保健室で寝てた人」

頬の傷をこれ見よがしに指差しつつ貴史は立ち上がった。もちろん、受け狙いである。

お通夜の雰囲気の中で討論したところで立村が考えを変えるわけがない。

「寝てないけど、まあ、顔面からこけたのは事実なんで」

「お前もドジだなあ」

笑いで、ささくれだっていた空気がほんのり柔らかくなる。貴史はもう一度立村の席に顔を向けるが、やはりポーズは変わらない。いつものことでは、ある。

菱本先生もやんわり話を進めている。

「俺は、まあ、納得いかねえよ」

当然これは、立村に向けて放った言葉だ。

「いくわけねえじゃねえか！　なあ、立村？」

仕方なさそうな顔で立村がやっと、こちらを見た。少しやわらいだ空気は一瞬のうちに凍りついた。九月の残暑で溶ける見込みもなさそうだった。

このままだといつものパターンで、

- 1、菱本先生が立村を教室内で強制尋問し始める。
- 2、立村がすべて無視するか、慇懃無礼な対応をこなそうとする。大抵それは失敗する。
- 3、ぶちぎれた菱本先生が頭に炎を燃やして怒鳴りまくる。
- 4、だんまりを決め込んだ立村が恨みがましく菱本先生を睨み据えた後、後味悪く授業終了の鐘が鳴る。

三年間同じパターンが続いてきただけに考えるだけでも気が重い。

もちろん立村は今日も同じ展開だと思ってすうっと流すつもりなのだろう。

感情を隠しているつもりなのかそれとも、無視しているだけなのか、その辺は分からない。

立村の性格上、そのポーカフェイスは通じていると思っ込んでいるのだろう。

みんなからはばればれだというのに。

菱本先生も、またクラスメートの連中も毎回繰り返されるいがみ合いにはどう対処していけばいいのかわからない様子だった。貴史が夏に菱本先生のアパートへ遊びに行った時も、「具体的に何をすればいいのか」までは話が進まなかった。

——じゃあねえな。俺が戦うしかねえか。

まずは菱本先生が爆発する前に、貴史ひとりでけりをつけられるか試してみる。

「立村、あのな、悪いが俺、アンカーのことを一方的に決められたくねえんだよ。当たり前だろが、男だろ？」

すぐに立村は目線を逸らし俯いた。

「けど、俺が戻って来てからそういう話になったんだったら、納得したかもしれねえな」

さっき追っ払った女子たちがいきなり目を輝かせて頷き出した。

「なんで、俺が帰ってくるまで待てなかったんだよ。当事者がふたり揃ってその上で決めればいいだろうが」

立村は口を閉ざしたままだった。代わりに菱本先生が割って入った。

「羽飛の気持ちはよくわかった。そういうことだ。立村、なんでお前はいきなりアンカー候補の羽飛を差し置いて、勝手にぎりぎりまで決定を延ばそうなどと考えたんだ？　全く間違っているわけじゃあない。ただ羽飛が戻ってこないうちに勝手に決めるのは早すぎるんじゃないのか？

立村、なんでそんなにあせってるんだ？」

——あせってる？

頭の豆電球がぷつと切れたようだった。

——立村なんてあせってねえじゃねえか。

他の連中もかすかにざわめき出した。

「言い方変えると、先走っているんじゃないかということだ」

立村はまた、首を傾けて斜め向かいの壁をじっと見つめていた。お得意の「無視」のポーズで乗り切ろうとしているようだ。菱本先生は手を緩めなかった。そのまま語りかけつづけた。頭の噴火警報はまだ鳴っていない様子だった。

「今日、なぜ授業をつぶしてこんな話をしたのかわかるか？ 立村？」

ゆっくりと顔を挙げた様子だが、表情は堅いままだ。やはり「いつものパターン」だろう。菱本先生は教壇から降り、立村の席脇へと立った。ちょうどさっきまで貴史が立村の側にいたところと同じ位置に当る。

「選抜メンバーのクラス対抗リレー勝負ともなれば、クラスの気合の入り方も違う。俺からするとなぜ、球技大会と銘打っていながら陸上競技をプログラムに入れるのかわからないがな。今回は特に、去年アンカーだった近衛が参加できないハンデもある。その中にいきなり放り込まれたお前の気持ちも、わからないわけじゃないんだ、わかるか？」

——先生、絶対立村、分かってねえよ。

貴史の心の眩きを、斜め前にいる古川こずえが、

「わかってるわけじゃないじゃねえ」

などとほざいている。心が読まれているわけではないだろう。

「どの順番になるかはまたあとで決まるだろうが、プレッシャーはあるよな」

——あいつはどうだっていいって思ってるんだよ、気付けよ先生。

クラス行事なんて関係ない、自分の生きる場は評議委員会だけ。そう思い込んでいるはずだ。「たとえどういう結果になろうとも俺たちはお前を責める気はない。羽飛だって南雲だってそうだろう。クラスのみんな同じ気持ちのはずだ」

——先生、女子は怖いぞ。

言うまでもない。美里が唇を尖らせて何かを言いたそうに口を動かしている。

「だがな、やっぱり、本音は勝ちたいんだ。勝つためにはどうしたらいいか？ それを真剣に考え、その上で一番胆になるアンカーの選出を行おうとあえて、早めに決断しようと決めたわけだ。そのことも、理解してるな？」

——いつのまにか、すごい展開だなこりゃ。

立村には絶対に響かない発言ではあるが、貴史にはずしんと来た。

——そりゃそうだ。俺、勝ちたいもんな。

「そのためには、どうしたらいいのかをみな、考えている。だからこそ一部のクラスメートたちは立村の判断に怒ったんだと思うんだ。一緒に、そうだよ、クラスのみんなと一緒に全力を尽くして、ベストな結果を出したい、その気持ちを一緒に味わいたい。それをひとりだけで決め付け

られたら淋しい、そう淋しいんだな」

——先生、悪いけど、言葉に酔ってるよ。

やたらとしゃべる菱本先生。貴史はふと、夏休み中の修羅場にて、女性の怒鳴り声に黙りこくっていた菱本先生を思い出した。

「だからこそなんだ！ 立村、もう一度考えてみないか？ この機会はお前にとって決してマイナスにはならない。なぜお前が今、自分の言動で人を振り回してしまったのか、その本音の部分だ。お前は、意識してたろう？ クラスの中心としていざとなったら自分で指示を出さねばならないと、勝手に思い込んでいたたろう？」

——先生、ちょっと待った！

まったく読みきれない展開に、貴史はただ口をあぐりするしかなかった。

菱本先生が立村に対して訴える言葉は、明らかに予想外のものだった。

「立村、お前は無理に、クラスの中心として立ち回ろうとしなくてもいいんだ。背伸びするな。無理せずに自分のペースで、困った時は羽飛や南雲たちの手を借りるなりして、いっしょに乗り越えていけばいいんだ。ひとりですべてを抱え込む必要はないんだ。お前がもし判断できずに戸惑っていて焦っていることはよくわかった。だから短絡的な判断しかできなかったのもそうだろう。だが、こういう時こそクラスみんなを信頼し、同時に羽飛の帰ってくるのを待って、その上で改めてアドバイスを貰う、その順番を忘れてはいなかったのか？」

——なんか違うだろ？ 先生、なんか無理やり話を別方向にもっていきこうとしてないか？

あっけにとられたまま、貴史は「永遠の青春野郎」菱本守の熱血講義を脇から聴いていた。

しばらく立村は身動きせぬまま菱本先生のお説教に聞き入っていた。少なくともそのようには見えた。

「先生、一言よろしいですか」

一段落ついたところで、立村は立ち上がった。きちんと整えられた格好で、じっと菱本先生に向かい合った。菱本先生もしっかりと受け止める準備をしているようだった。期待している、といってもいい。悪いがきっと裏切られるだろうと思いつつ貴史も様子を伺った。

「クラス全員がいない場所で判断したことについては謝ります」

「謝るなら、羽飛と南雲と、それから他のクラスメートだろう？」

穏やかに、かつ満足げに菱本先生は促した。

「ただ、手を抜いているわけではありません」

きりきりとひっかかりのあるような声で、立村はさらに続けた。唇の端を不自然に持ち上げる格好だった。

「学校にいる間は委員会活動を優先していますが、きちんと家ではトレーニングしています」

「走りこんでるのか？」

びっくりした風に菱本先生が問い返した。同時に他の女子たちを中心にざわめき起きた。立村がひとりでジョギングに励む姿なんて絶対想像できないに違いない。ただ陸上部の近衛だけが、納得顔で頷いているのが解せなかった。

「少なくとも、足をひっぱるようなことはしないようにします」

「努力はしていると、いうことなんだな」

「はい」

そこまで答えて立村はきっと、貴史を見据えた。

——なんだよ、その言い草。だから俺になんで先に言わないんだよ。

めらめらするものが、自分の指先から燃え上がったように見えた。

近衛が立村の走りについてちらと、気になることを口にしていたのを覚えていた。

なんらかの練習をしているらしいとも。

そのことだろうか。

——けどそれは、まず走る俺たちに報告するのが筋だろうが！

立村は一拍、菱本先生を睨みつけた後ゆっくりと腰を下ろした。

振り返るように様子を伺っていた美里が、貴史に顔を少しゆがめるようにして視線を送ってきた。もちろん、色っぽいものじゃない。

「まずは立村、立ってきちんと謝ってからにしろよ。みんな水に流すだろ？ な？」

促され、肩を叩かれ、しかたなく立村は腰をあげた。教室内を一通り見回し、

「申し訳ありません」

一言だけ小声で告げ、すぐに座り込んだ。いつもだったら「声が小さいと謝っていることにならないぞ！」と怒鳴る菱本先生も、それ以上何も言わなかった。

立村をつるし上げた後のクラスルームでは暫く意見が真っ二つに割れた。

結局南雲の、

「いいじゃん、だったら前日の練習が終わってから決めればさ。先生、もうこんなことで話し合うの疲れるじゃん」

なる軽すぎる言葉によってけりがついた。菱本先生も真面目にぶつかり合うことに疲れ果てていたのだろう。

「目標は遠くにおいて、ぎりぎりまで努力を続けるのも悪くないかもな」

あっさり納得してしまった。なんで菱本先生は立村に対してはやたらと青春熱血教師として接するのに、南雲に対してはあっさりを受け入れるのだろう。かなり面白くないがしょうがない。貴史も早めに切り上げてほしかった。

「羽飛、あんたつっこまないの」

ホームルームが終わり、掃除のため机を下げていると古川こずえに声をかけられた。

「お前もなあ、なんでいきなりそんな話、菱本先生に持ってったんだ？ ったく、面倒なことになっちゃっただろが」

「しょうがないよ。立村にはそのくらいしないとわかってもらえそうにないしさ」

「けどな、女子連中のわけわからねえ言葉の暴力ってのはちょっとねえだろ？」

「だからさ、立村はああいう奴だから」

ああいう立村はと見ると、長いほうきを片手に隅からゆっくり掃いていた。今日は掃除当番だったようだ。廊下越しには他クラス連中のざわめきが溢れている。

こずえも掃除当番からは外れていたようで、すぐに廊下へと貴史を連れ出そうとした。

「なんだよ」

「美里から聞いたでしょが。まあね、立村がリレーのアンカー決定のことで先走ってしまったのはまずかったけどさ。でもまあ、これで先生も問題の本質が見えてきたと思うよ。菱本先生は何にも実をいうとわかってないし」

気になる言葉だ。掃除が終わってから立村をグラウンドへ引っ張り出すという仕事が残っているので、まだ廊下でたむろっていてもよい。首と耳の後ろからじんわり汗が噴き出すのがわかる。美里は先にどこかへ行ってしまったようだ。

「なんだ、問題の本質ってのは？ んなものねえだろ」

「つまりね」

気を持たせるように貴史の腕をぎゅっと握った。筋肉質な我が腕だが、やっぱり肉を捕まれたようでかなり痛い。

「痛てえなあ」

「ごめんねえ鈴蘭優じゃなくて」

下ネタでなかったのがまだまだ。その点だけを認め、貴史はこずえに従い廊下へ出た。立村がちらと貴史たちの方を見やった。無表情のままだった。

「廊下で話してたら誰かに聞かれるかもしれないんだけどね」

ちらちら周囲を伺いつつ、

「もっと近くで話していい？」

「しゃあねえなあ」

ぐっといきなり接近してきた。鈴蘭優相手の距離なら、ぐっときてしまいそうだが目の前にいるのはどう考えても古川こずえだ。

「今回、女子らがぶち切れた原因ってのはね」

背伸びして耳元に囁きかけてくる。

「立村が珍しくクラスの長たる態度を取ったからなのよね」

「おいおい、奴は三年連続評議委員で、かつ、委員長殿なんだが」

「クラスでその肩書通用したとこ、見たことある？」

「ねえけどさ。あいつ、委員長ってとこをひけらかす性格じゃあねえだろ」

思わせぶりにふんふん頷いている。不服らしい。

「ま、修学旅行の最終日にいきなり美里のために一肌脱いだりなんなりしてたよねえ。恋人宣言とかしちゃってたし」

「それとは違うと思うぞ」

いざとなったら開き直る度胸を持っている男だとは思う。が、それと三年D組評議委員としての存在価値とをごっちゃにするのは違うんじゃないか。

こずえはさらに互いのつま先をぶつけてきた。相手が鈴蘭優なら……のポジションを詰めてきた。

「男子連中は納得してたよね」

「俺はやだったけどな」

「でも、うちのクラスの男子たちって意外と立村に刃向かったりしないよね」

「まあなあ」

立村がそれなりに努力していることは貴史をはじめクラスの男子連中、理解はしているつもりだった。そのために陰でいろいろ工作をせざるを得ないところもあるが。

「それが女子たちには不満なのよ。あいつのあだ名知ってるでしょ。美里に言ったら怒るけど」

「『昼行灯』な」

女子たちの目にはそう映っていることも貴史は承知していた。美里が愚痴っているのを聞いていたら、仕方なく耳に張り付いてしまうものだった。

「そうなのよ。『昼行灯』。でも、今思えば立村にはそのポジションがベストだったのよね。評議委員長としては外でがんばってもらえばいいし、クラスでは可もなく不可もなく大人しくクラス委員の仕事してくれればよかったのよね」

「ひでえ言い分だな」

「だって事実じゃないのさ。美里だってそう言ってるよ」

まったく、何を考えているんだろうか。うんざり汗がじんわりにじむ。

「で、さ。話を戻すけど、クラスは今まで評議委員の馬鹿男がぼんやりしているだけですんでたけど、今回のアンカー事件」

「事件じゃねえだろが」

「黙って話、聞きな。当人を目の前にして言うのは照れるけど」

照れてない。いきなり手を肩に伸ばそうとするのはどういう意味だろう。しつこいようだが鈴蘭優ならともかく、古川こずえでは来るものも来ない。教えるべきか、悩む。

「単刀直入に話せ。悪いが俺はまどろっこしい話嫌いなんだよ」

「ごめん、アンカー勝負はさ、三年D組の花形スターふたりの競演ってとこでとことん盛り上がってほしかったのよね。ここだけの話、賭けしてた子がいるって噂も出てるよ。うちのクラスの子じゃないけど」

「俺は馬かよ！」

「そう怒らないでさ、とにかく、あんたと南雲との勝負に固唾を飲んで見守ってた女子たちにとって、立村の事なかれ主義の決断にはみな、あつたまきちゃったってわけ！」

——お前ら勝手に人のことを馬扱いしやがって……。

かなり面白くない展開だったことを初めて聞かされて、貴史としては思いっきり壁を蹴るしかない。

「やめときな、ここの壁、壊したら罰金か弁償だよ」

「人を馬鹿にするなよな」

「それより話を聞きなさいよ。立村がなんで女子たちから袋に遭ったのかってことの説明、短く行くよ」

こぶしを握り、膝を数回叩いた。

「立村はさ、今まで出番をあえて少なめにしてきたところがあったんだろうね。羽飛と南雲がいるし、他にもみな得意技を持ってる連中ばかりだし。ところが今回近衛のピンチヒッターで男子リレーに出る羽目にはなるし、調子こいてせっかくのアンカーの座決定戦を白ける結末にもっていかうとしたり、かなりむかつくってのは、女子としてあるんだよ。これ、私もわかるよ。本来、主役になるべき奴が陰に隠れてて、どうでもいい奴が権限握ってるってのがね」

「おい、今の取り消せ」

「なんでよ」

妙にこずえは強気だった。貴史も接近戦でめげるようなひよろひよろではない。ぐいと一歩出た。恋人同士の距離、唇重ねてもいいくらいのべったり状態だが、相手が古川こずえであることには変わらない。思わずこずえの方が一歩退いた。

「どうしたのよ、なんでいきなりくるわけ。もしや、むらむら、した？」

「ばかじゃねえの。お前にそんなこと感じるかよ。それよか立村に対しての今の言葉、すげえ頭に来るぞ」

実はそんなかりかりきているわけでもない。ただ、立村の親友としてきっちり打ち消しておく

必要はあるように思えた。こずえはやっぱり退かなかった。

「あのね、私は事実を言ってるのよ。女子側の事実」

「他の女子連中はどうでもいいんだ。お前はどうかんだ？ 古川、返事によってはぶったおすぞ」

「やだなあ」

まだ馬鹿にしているような口調、それがさらに癪に障る。

なぜだかこずえの言葉に、どうしようもないただれた感じを覚えるのはなぜなのか。

「取り消すか取り消さないか、どっちだ！」

声を荒げ、片足踏み鳴らし、こずえを見据えた。騒いだつもりはなかったが、通りすぎる幾人かが振り返り噂話をして去って行った。

「ごめんごめん、わかった。私だって立村のこと嫌いじゃないからさ。そう怒らないでよね。まったく男子って友情命なんだから。とにかく！」

次の返事を待たずにこずえは畳み掛けた。

「私が言いたいのはさ、女子を中心にうちのクラス内で、反立村派が動きだしてるってことよ。美里にもそこまで話してないけどさ。もともと杉浦加奈子ちゃんのことも含めて立村を嫌ってる女子が多いのは事実だし、それでも今までは目立たなかったから大目に見てたけど、最近妙に目立ちだしてきてて面白くないって気持ちがゆらゆらしてるのよ」

「目立ってどこが悪いんだ？ 奴は評議委員長だぞ。今までが地味すぎただけだろ？」

「そうだよ。私もそう思うよ。けど、女子たちはそう思っていないんだよ」

「なんでだ？ 立村が『昼行灯』だからか？」

「それもあるけど、一番の理由はね」

さっき貴史の剣幕にびびっていたこずえが、隙を見て耳もとに接近してきた。避ける間もなかった。

「羽飛にトップに立ってほしいってみな、思ってるからに決まってるじゃん！」

——はあ？ 何考えてるんだ？

口から問い返す前にこずえが続けた。

「これって一年の頃からみな、そう思ってたんだよ。たぶん女子だけじゃなくて男子だってそうだよ。立村ががんばってるからみな我慢してきたけど、本音はさ、羽飛にクラスを仕切ってもらいたいってこと」

「おい、ふざけんなよ？ お前らみな、立村をそのまま二年、三年って評議委員に選んできただろが。文句あるなら前期後期に選ぶ段階で異議唱えろよ」

「唱えられるわけじゃないの。推薦してるのが羽飛、あんたなんだよ」

「あ、俺か」

一年初めに評議委員を選ぶ際、貴史が先手を打って美里と立村をセットで推薦した。これは事実だ。それ以来何事もなくすんなり決まっていたはずだ。もともと委員はよほどの事情がない限り変わらないというのが流れだったというのもある。特にその流れを遮るつもりはなかった。

もちろん、立村に対しての不協和音は聞こえなかったわけではない。だが、委員から下ろす程の強いエネルギーではなかったような気がする。

こずえは肩同士を擦り付けるようにして話しつつけた。

「立村が美里と付き合った段階で、しょうがないか、ってことにはなったよね。それに後ろには羽飛だっている。まあ、ライバルの南雲は規律委員でスターだししょうがないかってことで今まで、立村を評議委員で持ち上げることを我慢してたの。女子たちはみなね。けど、最近になってそれって違う、って考えがうるこ雲状態で広がって来てるわけ」

噂の当人、立村がひょっこり扉から顔を出した。

一番聞かねばならないところで、本人に邪魔された。

「羽飛、また時間作ってよ」

背中を叩き、こずえは急ぎ早に階段へ向かい走っていった。

入れ違いに立村が近づいてきた。ほうきは持っていなかった。

「古川さんと、何かしてたのか？」

——こいつ、勘違いしているぞ。まったく能天気だ。

貴史は思いっきり立村の額を叩いた。

「ごめん、変なこと言うつもりはなかったんだ」

「言っとくけどな、俺は優ちゃん以外にいちやつく趣味はねえんだよ！」

慌てて謝りつつ、それでも一步退くところがやっぱり立村だと思った。

「それよか、さっきのことも含めて、今日リレーの練習はどうするんだ？」

「ごめん、羽飛には話しておきたいんだけどさ」

おどおど、びくびく。確かに拳動不審と思われてもしかたない立村の態度。それでも貴史には話をしておきたいという気持ちが、体温と一緒に空気に丸められて届く。たまに立村もこうやって相談を持ちかける時がある。

「なんだよ、水くせえなあ。水って臭くねえけどなんでそんなこと言うんだらうな」

たいして面白くもないつつこみをしてみつつ、貴史は尋ねた。

「実は、今日と明日、知り合いの陸上やってた人と会う予定なんだ」

「へえ、珍しく評議じゃねえのか」

「うん、評議委員会には、大会が終わるまで休みを取ると話しておいた。天羽や難波たちもそれぞれクラスの練習があるみたいだし。あいつに余計なこと言われるまで放っておいたわけじゃないよ」

ずいぶん話がわかる。何も考えていなかったわけではないのだろう。古川こずえはさっきまで、女子たちの立村に対する偏った考え方を披露していたわけだが、直接当の本人と語り合えばそんなもの一気に溶け去るもの。単純な答えが出る。女子と違い男子の方がきれいな答えを出す。

「誰だよ、その『知り合いの陸上やってた奴』って」

立村は口籠もった。でっち上げなのかと疑いたくなった。

「他の学校で、陸上選手だったって友だちがいて、走るコツとかそういうのを教えてもらってるんだ。長距離走ってたらしいから、リレーに役立つかどうかはわからないけど、ほんの少しはタ

イム縮められるんじゃないかなって思ったんだ」

「誰だそいつ」

「だから、他の学校の友だち」

——へえ、品山小学校時代の友だち、それなりにいるのかよ。

いろいろトラブルがあったらしいとは聞いていたけれども、それなりに人間関係はしっかり残っているようだ。さっき立村をしばいた女子連中に言ってやりたい。立村は馬鹿ではないと。ちゃんと過去を清算して生きているんじゃないかと。

「そういうことかあ」

「ごめん、言わなくて申し訳ない」

立村は頭を下げた。

「そういうことなんで、俺もきちんと結果を出せるようにしたい。ちゃんと練習には出るし、羽飛や南雲にも迷惑かけないようにしたいし、近衛の穴埋めにはならないかもしれないけどせめて少しは」

「もう、いい。立村、行けよ」

さらに言い募ろうとする立村に、貴史は首を振った。自然と笑いたくなってきた。

「最初から言えよ。小学校の連中と練習してるってなあ」

立村が息を呑んだ。貴史に責められると思っていたのだろうか。そんな心の狭い男ではないと言い聞かせたい。

「そんな事情だったら、俺も絶対そいつらに教えてもらった方がいいと思う。だってそうだろう！

お前、今までやなことたくさんあったって聞いてるけど、ちゃんとそれを乗り越えようとしてるんだろ？ それ、偉いぞ。絶対にお前、偉いぞ」

「偉い？ 何が？」

戸惑い気味に立村が繰り返した。貴史のことを怖がっていたのだろうか。入学以来の大親友を相手に、そんな必要ないと背中を叩いてやりたかった。

立村は精一杯、自分の過去に立ち向かい、恨みのあるいじめっ子たちに教えを請うことにより、前に進もうとしている。それは誰にでもできることではないだろう。貴史や美里が小学時代の沢口先生と和解するのと同じくらい、ありえないことだと思う。それを、歯を食いしばり、やり遂げようとする立村の強さを貴史だけは認めたいと思う。

「近衛もさ、ちらっと言ってたなあ。お前、走るフォームがすごくよくなったってな。一緒にリレー、優勝してだ、あの馬鹿女子連中を笑ってやって、ついでに美里にちゅーのひとつでももらってだ。とにかく、男を上げてこいよ！」

ついさっきまで立村へ感じていたもやもや感がするっと抜けた。

最初から言ってくればよかったのだ。

最初から立村が貴史にだけ、話を通してくれればあんなにいらいらしなかったのだ。

でも今、きっちり打ち明けてもらった以上、貴史がいらだつことは何もない。

「さ、しっかりタイム縮めてこいよ！ 他の連中にはリレーが終わるまで言わねえから安心しろ。ほら」

肩を叩きつつ、貴史は立村を階段まで押しやった。男の友情とは、努力している友だちを全力で応援することだ。女子なんかにはわかるまい。

「羽飛、あのさ」

「とろとろしてるんじゃねえよ！」

背中を押した。はにかむような表情を浮かべた立村は、振り返りざまに真剣な目で、

「羽飛、ありがとう」

言い残し、そのまま全速力で階段を駆け下りていった。

息を止める。

白線に足をかけ、そのままスタンディングスタートだ。

——負けるわけにはいかない。

隣にはなぜか、水口がスタンバイしている。あくまでも授業の一環だという証拠でもある。

南雲はインコースに腕を軽く振りながらスタート準備に入っている。

四人同時スタートで、改めてタイムを計る。

——悪いが、この前みたいな無様なところはさらさねえぜ。

白黒はっきりつけてやる。

「位置について。よおし」

間抜けな声は体育教師のもの。明日の球技大会……違和感が大有りなのだが、その中でのクラス対抗リレー大会……に向けてのアンカー最終決着勝負だということを知らないわけではないだろうに。グラウンドには下級生の男子たちしかいなかった。同学年の女子たちはみな、体育館に籠ってバレーの練習をしているはずだ。

当然、声援は全くなし。ただ、興味のみ後輩たちが目線を向けてくるのみ。

——あれだけ女子どもぎゃあぎゃあわめいてたくせにな。

肝心要のアンカー本番勝負には顔を出すことすら許されない。なんだか典型的な三年D組の事情に似ている。

遠くを見る。ぬるい風が吹きぬけた。台風が近づいてくる気配がさらりとした空気に混じっている。

「スタート！」

毎日練習はした。立村の事情と陰の努力も理解した。陸上部の近衛もこまめに顔を出しては練習に付き合ってくれた。ただ南雲だけはちんたらふらふら委員会最優先主義でほとんど顔を出さない。それでいて、アンカーの座には拘っているようで、自分から降りようとはしない。

——じゃんけんでもいいとか抜かしてたくせにな。

カーブでスピードを落とす。身を内側に寄せる格好になる。すでに水口は脱落し貴史と南雲との一騎打ちだ。最初からそのつもりだったにも関わらず、横で呼吸ひとつ乱さずにすいすい走る南雲には本気のエネルギーを感じない。むしろ、そのまま曲がらず校門を出て行き、その辺の女子連中といちゃついている方がお似合いにも見える。

——そんな奴に負けてたまるか！

靴の中が燃えるようで、熱い。駆け引きなんか関係ない。貴史は自分の思うまま、先延ばしにされた勝負に決着をつけた。残り百メートル、隣の南雲の姿など振り捨てて勢いで追い抜いた。南雲はついてこれなかったようだった。

——勝ったか？

勝っただろう。勝ったはずだ。白い線を先に踏み越えたのは貴史だった。

南雲がのろのろと、途中でジョギングに切り替えたかのように走りこんできて、「あーあ、こんなもんっしょ？ 当日しくじったらしゃれにならねえし、ねえ」などと、駆け寄ってきた男子連中の一部に話し掛けていた。

「おいおい、南雲おめえ全然本気出してねえじゃねえかよ」

「だってさ、本番、明日だよ。ここでアキレス腱切るよりも、当日かっこよく決めた方がいいじゃん。そうだろ、東堂先生？」

何が同級生を相手に「先生」などとほざくのか。いやなによりも、今の発言聞き捨てならない。体育委員が手を振って、

「な、今日はタイムなしでもいいだろ？」

言い訳がましいことを口走るのを無視し、貴史は南雲に近づいた。おちゃらけていた南雲とその仲間五名ほどが黙った。

「おい南雲、今の話、本当か？」

「本当だよ、それがあ？」

南雲は前髪をかきあげて、額を出して「そうだけど？」また繰り返した。

「巷ではアンカー勝負だ羽飛と俺との勝負だとかわけのわからないことで騒がれてるけどさ。立村にも言われただろ？ そんなのほんとだったらじゃんけんでいいじゃんってな」

「ふざけんなよ！」

火が点いたのは靴の中だけではない。脳天の真中だ。手が思わず南雲の胸倉に飛んでしまう。体育の授業なんて限りなく休み時間に近い。駆け寄ってくるクラスの連中が邪魔くさい。ポロシャツの襟を引っつかんだまま、

「なんとか言えよ！」

怒鳴ったとたん、強引に引き離された。先生にやられたのかと思ったが、南雲本人だった。

——あいつてえ……。

優男とは思えない、自分の手首に残った赤い指跡。

「ほお、本気だししゃあ出せるじゃねえかよ。今までちゃらちゃら逃げ回ってたくせにな」

「失礼だな、何考えてるんだか」

顔をよそ向けたまま、南雲は言い放った。口調は軽薄そのものなのに握りこぶしをこしらえて片手でさすっている。

「あのねえ、俺、前から話してるけど、本番は明日だろ？ 明日やりゃあいいことを、なんで前日で全力投球して疲れはててしまう必要あるわけ？ なあ、そう思うだろ？」

「けど、クラスに対しての義務ってのがあるだろが！ お前、菱本先生だって」

「あのさあ羽飛、なんで自分の価値観は自分で決めちゃあ、だめなわけ？」

動じることなく切り返す南雲。襟元を直すでもなく、

「言っとくけど、俺は勝ちたいよ。そりゃあねえ、勝ったら菱本先生なんかおごってくれるって約束、とある筋から聞いたしさ。なあ、そうだろ？」

南雲の取り巻き連中、代表・東堂に同意を求めている。

気がつくとき、貴史の後ろにそっとくっついて誰かがいる。立村あたりだろうか。金沢が側で貴史の顔を見上げているのに気付く。

「そのために、どの順番で走った方がいいかってことは、性格およびデータでさっさと決まっちゃうもんだと俺、思うわけ。ま、俺と羽飛が三番かアンカーかってのは、決まりになると思うけどさ。立村が二番目で走りこんできた時にかーっとなっちまったお前がバトン受け取るのと、俺がちんたらほげほげといただいてお前に投げ返すのと、どっちがいいと思うかなあ。確率統計的に言っちゃうと、後者の方がいいと、思うんだよなあ」

今までざわめいていた連中が口を閉ざした。

「確率、統計？」

「そう、俺ね、へましでかさないいパターンってどれかって考えた時、羽飛がアンカー取ったほうがいろいろと問題ねえかなとおもったわけなんだよね。第三走者でうまく差を詰めてその上で、つっ走った方がいいんじゃないかねえのかなあって、思ったわけ」

片手を腰にやり、南雲が振り返った。誰かを見つけたらしく手を振った。

「あ、先生、りっちゃん、来た来た」

立村は貴史のうしろにいなかった。なぜか体育の先生とふたり連れ立って現れた。

「なあ、りっちゃん」

馴れ馴れしく「ちゃん」付けで呼ぶのも正直気持ち悪い。天羽もたまに「立村ちゃんそんなこと言うなよ」とかおねえ言葉っぽく使うことがあるが、南雲の態度はそれと全く違う。軽やかに、さりげなく、堂々と話す。

「さっき相談してたことだけど、やっぱ、俺、面倒だし、降りるわ」

「なぐ……」

こいつも「なぐちゃん」とかたまに使っている。気持ち悪いからやめろと、貴史も雷を落としてたりしているのだが聞き流されている。自分の走る順番が次というのを忘れたかのように立村は首を振った。

「降りると言たって明日は」

「データ分析の結果羽飛の方がいいってこと」

「どいつもこいつも、何女々しく言い訳しやがるんだ！」

立村が返事をする前に貴史は地面に脱いだ靴を叩きつけた。先生に、

「羽飛、落ち着け」

肩を叩かれた。

「なあにがデータだ？ 勝つ確率だあ？ ふざけんなよ！ 俺はただ、全力で勝負しろって言うだけだろうが。それを最初っから手抜きするのか？ じゃんけんで決めるのもむかつくけどな、そういう発想でもってクラスのことなんて考えねえで」

「考えてるから分析したんじゃないか、なあ、りっちゃん？」

相槌を打てずに俯く立村に対し、貴史が矛先を向ける前に声が上がった。

「要は立村が一番の戦犯だろ？」

ひとりの声が上がると、またひとり、
「そう言われてみると、そうだよな」
「最初に決める段階でもう一度再対決していればこんなだらだらしたことにはならなかったよな」

「うん、俺もそう思う」

続く続く、止まらない。

今まで女子たちの口からこぼれるだけだった言葉が、今度は男子連中から溢れ出してきていた。立村は南雲に向かい口を開けたが、そのまま首を振りつつ貴史に向き直った。

「羽飛、ごめん、俺が余計なことしたから」

また謝ろうとした。なぜ、こいつは謝ることで逃げ道を作ろうとするのだろうか。貴史には理解できない発想の飛躍だ。これで話をおしまいにして、明日、全力勝負しなおすというわけか。こういう場合貴史は立村を張り倒すしか方法がないのだが、目の前には先生がいる。菱本先生なら仮に貴史が立村を蹴り飛ばしても理由を聞いてくれるだろうが、担任以外にそれを望むようなことはできない。

「立村、いいかげん謝るのはやめろ！ 俺は南雲と話をしてるんだ！」

「いいよ、羽飛。俺が羽飛と南雲のふたりにやり直しを勧めておけばこんなことにはならなかったんだ。とにかく、悪いのは俺なんだから、だから」

——こいつまた、逃げようとしてるのか！

「そうだよな、立村が一番悪いよな」

一通り事情を聞いていたのだろう、体育の先生が納得した風に頷いた。

「それがわかれば、もう話は早い。南雲も露骨に手抜きしたことは素直に反省しろ。羽飛だけが全力投球していた、それは誇ってよいことだ」

ぐると全員の側に近づいて、顔を見ながらひとまわりした。

「今回の勝負は羽飛の本気度、それが決め手だ。仮に南雲が勝利したとしても、羽飛の手を抜かない態度を誰もが受け入れたら？ な？ それに」

また立村を正面から見据えた。菱本先生に対しては冷たくそっぽを向いていた立村が、体育の先生に対しては神妙に目を伏せている。

「菱本先生の言う通り、立村が素直に反省すれば、これでいいんだ」

立村は言い返さなかった。授業が終わるまでその顔を上げなかった。黙って自分の走る順番を待ち、そのまま真面目に走り終えた。タイムは、計っていた近衛によれば、

「ずいぶん縮まったなあ、すげえ」

と、かなりの努力が認められる結果のようだった。

南雲だけがへらへらと、何にも考えていないかのように東堂とふざけあっていた。

——奴の手にはめられたかよ！

貴史は確信した。本当だったらさっき、南雲の襟首つかんだ状態まで時間を巻戻して、足蹴にしたい。

——立村が一番悪い？ ふざけんなよ！

立村なりに考えるところがあってぎりぎりで決めるという話になったはずだ。

納得はいかなくても、立村なりに考えているとわかっていたから、菱本先生とバトルになってもかばわねばならない、そう思っていた。

しかし南雲はその、周囲の立村に対する不満を露骨にぶつけさせるような展開に持っていき、本来話し合うべきアンカー争いの勝負付けから、「立村がもともとは悪い」として本人に反省を促そうとしていたわけだ。

——ちゃん付けで呼んでいながら、そういう狡い真似よくできるわな。

どの方向から見直しても、貴史には南雲の保身工作にしか見えない。

親友面していて結局は突き落とすそのやり方になぜ、立村は気付こうとしないのか？

——南雲、てめえが立村に罪なすりつけたただけだろうが！

——どっちにせよ、明日が終わるまでは、勝つことしか考えたくねえよ。

頭を切り替え、貴史は明日の男子リレーのことだけ考えることにした。

改めて南雲と一対一の勝負をしなくてはならない。

友だちと呼ぶ奴を陥れようとする汚い奴の面を暴いてやりたかった。

——俺の言い分、間違ってるわけねえだろ！

はめられたことに気付いていない、おめでとう立村には一発張ったやりたいが、それもまだ、リレーで決着がつくまではお預けだ。

家族ぐるみで三年D組男子リレー優勝のためサポートさせたこの一週間。

両親はもとより姉までもが、貴史のために一週間肉料理でがまんしてくれた。

「ったく！ ダイエット失敗したらあんたのせいだからね！」

「ほんとは姉ちゃんが食いたくてなんねえくせに！」

軽口を叩きつつもみな、「D組優勝」の四文字にエネルギーを注入してくれたのはありがたかった。羽飛家はいつもそうだった。家族の誰かに一世一代の大勝負がかかった時には、一丸となって全力応援するのが常だった。姉の公立高校入試の時も、父の昇格試験の時も、母の……思い当たる節ないが……時もいつだってそうだった。大抵の場合それで成功を収めるケースが殆どだった。

勝利に勝つべくとんかつをほおばりながら、貴史は家族を前に、熱弁を振るった。

「ってことで、いろいろごたごたしてるけど、結局は勝てば官軍だろ？ どんなにむかつく奴らだって、勝ちたいって気持ちだけは一緒だろ？ だったら俺は南雲みてえなむかつくミーハー男の態度も我慢して、しっかりバトンを握り締め、つっぱしるだけだっただけの。な、そこんところ、女子とは違うんだぞ、姉ちゃん」

「なんで私に話が飛ぶのよ。それとね貴史、あんたすっごく勘違いしてるんだけど」

髪の毛の先をいじりながら姉がつっこんでくる。

「悪いけど、女子がみんな、いやな奴を無視するなんてことするわけないじゃんねえ。ほんっと、その男尊女卑的発想ってなんなのよ。むかつくよね」

「何言ってるんだよ、ばーか。女子なんかみんなああだこうだって悪口陰口言まくって足ひっぱりあってるだろが。あんなの見てたら誰が近づきたくなるかって」

「あのねえ、貴史」

ダイエットダイエットとか文句つけながら、結局とんかつを平らげた姉は、皿の端を箸で叩きながら言い返してきた。

「あんたが見ている女子ってのは、美里ちゃんからみの子ばかりでしょ。言っちゃなんだけど身びいき光線びしびしじゃん」

「なんでそういう話になるんだよ、つまらねえ！」

姉の文句はいつも美里に絡めてくることが多い。いったいどこから美里の話題をひっぱり出してくるのか理解し難い。こういうところが女子のわけわからないところだと思ってしまう。貴史は残りのご飯をかきこんで立ち上がった。

「うるせえなあ。明日本番だっただけなのにどうしてこうやる気萎えること言い出すんだ？ 姉ちゃんは男の意地ってもんわかってねえだろ？」

「どこが男の意地なのよ。ほんとわけわかんない！」

この間、両親は全く口を挟まなかった。単に食うことへ熱中していただけとみた。貴史たちが席を立つのを待っていたかのように、母はすぐ皿を盆に載せ洗い場へ運んでいった。

本番に向けて、さっさとベットにもぐりこんだ。練習が続くとただひたすら眠いだけなのだ。

寝てから九時間弱経っているはずなのに、目覚めると一瞬だ。記憶のないくらい眠り続けた後爽やかな朝を迎えた。まずはポロシャツと短パン、そして重ねてジャージの長ズボンをはく。腹のあたりがもしやもしやして暑苦しいがしかたない。忘れてはならないものといえば赤と白の鉢巻。以上準備OK。朝飯をしっかりと平らげた後自転車にて学校へと向かった。

美里の部屋窓ガラスに向かい、小石を投げる。気付くはずだ。

「ちょっと待ってよ！」

窓は開かず声だけ聞こえた。余裕がないのだろう。

「あんた珍しく早いね」

「あたりめえだろ。さ、行くぞ」

「ちょっと待って」

美里はいつもの制服姿で現れた。男子連中の殆どはもう体育着に着替えるのも面倒なのでそのままポロシャツで向かうのだが、女子は違う。めんどくさいだろうにちゃんと着替えの体育着を抱えて学校へ行く。しかも手提げはふたつばかりと重たそうだ。

「大荷物だな。何使うんだこりゃ」

「あんたたちのためなんだから、感謝、しなさいよ」

美里が小さめの手提げから取り出したものは、肌色のL文字のような巨大なマスコットだった。巨大といっても実際親指と人差し指をピストル型に切り抜いたような形なのでたかがしれているが、やはり目立ちそうなものだ。

「なんだこりゃ？」

「女子たちが男子たちにがんばってもらおうってことで、こしらえたんだから！」

投げるように押し付けた。目を逸らしたまま、美里は自転車の後ろに鞆をくくりつけ、ハンドル前の籠にもうひとつを押し込んだ。

「美里、ひとつ聴きたいことがある」

「なによ」

目をそらしっぱなしで出発準備に勤しむ美里に貴史は尋ねた。

「この怪しいマークはなんか意味があるのかよ？」

「ないよ、こずえが決めたの」

「古川が？」

それは十分怪しいマークの証拠ではないだろうか。美里のハンドルを片手で抑えたまま貴史は尋問した。

「勝利のマークってのがLなのか？ 普通なあ、ビクトリーのVとか、ファイトのFとか、それなら分かるけどなあ、LったらLOVEかよ」

「ああ、そうね、貴史に対してこずえはそうかもね」

女子としては言うてはいけない言葉を美里は呟いた。貴史のつまんでいたフェルトの巨大マスコット「L」を手のひらに載せ、短い棒線を上に、長い棒線を横になるように立てた。

「ほら、こうなるとどう見える？」

「……L、だな」

「そうじゃなくって！ Lっていうよりも、これに見えない？」

美里はこぶしを作って親指を立てた。

「がんばれって応援メッセージに見えない？ ほら、GOOD！っていう感じに」

「そうか、そうきたか！」

改めて美里から「GOOD！」……今この瞬間からマスコットの名をそう決めた……を受け取り指先でなぞってみる。見た感じがわり方も綺麗だし、一步間違うと別の卑猥なものを連想させそうになることもない。いや、貴史が一瞬それを連想したのは事実だが、美里の指先でさっぱりかかったというのなら嫌らしさも感じない。そのまま細長い「L」の文字と、赤い紐で吊るされたそれを眺めながら貴史は指先でつついた。

「サンキュ、こりゃあ受けるぞ」

「受ける……？」

「あたりまえじゃねえか。美里がこんなの作ったなんて立村も気付いてねえだろ？ こりゃああいつ、気合入るだろ？ 燃えるだろ？ な、立村の分もあるんだろ？」

慌てて美里は貴史の自転車を振り切るようにペダルを踏み始めた。なぜ逃げるのかわからない。恥らっているのならまだわかるが、どうもそんな可愛げのある態度じゃない。露骨に振り切る、崖があればためらうことなく突き落とす、そんな感じだ。

「おいおい、逃げるなよ」

「逃げてなんかないってば！」

何もまあ、彼氏のことを突っ込まれたからといって慌てて逃げ出すこともないだろうにと思う。付き合いたてほやほやならばまだしも、もう二年近くの古女房とくれば隠し事なんてないも同然だろう。まあ立村の性格上、露骨にどうのこうのというのは難しそうだが。それでもマスコット「GOOD！」のプレゼントくらいはそりゃ、やるだろう。

「悪いけど、私はあんたに今回渡すことになってるの！」

「じゃあ立村にはやんねえの？」

後ろの荷台を押さえ、逃げられないようにし尋ねると、

「立村くんには、こずえが渡すの。そう決まってるの！」

こりゃ驚いた。彼氏持ちの奴なら大抵その相手に渡すものと思っていたんだが、違うらしい。女子というのはだから理解不可能だ。分かりにくい。それともこずえが何か企んだのだろうか。美里も無理やりそう指示されたのだろうか。

「古川がまた企んだのかよ」

「人聞き悪いこと言わないでよ！ こずえの方が何かといいのよ、立村くんには！」

ますます分からない。貴史は腕時計を覗き込んだ。まだ余裕ありだ。

「またお前ら立村とやりあったのかよ」

「そんなことしてないわよ。ただ、こずえと相談してそれの方がいいかなって思っただけなの！」

いろいろ事情があるのかもしれない。と言うよりも、

——女子同士のややこしい関係には近づかない方がいい。

という保身の意識もあって、貴史はこれ以上突っ込まなかった。

まあいいだろう。古川こずえが立村の面倒を見るというからには、それなりに意味もあるのだろう。美里が余計な妬きもちを妬くことなく、周囲からもやっかまれることなく、リレーに集中してもらえるのならばそれはそれでいいだろうと思う。

「じゃあ、俺は貰っとくからな。尻からぶらさげとっか？」

「邪魔にならないとこの方がいいよね。落としてこけたなんてなったらしゃれになんないもんね」

——こうだよ、また。

相手が立村だったらもう少しじらしく、「私だと思って肌身離さず持ってて」くらい言うかもしれないが、しょせんこれが貴史に対する美里の態度だ。軽く頭を小突くと背中を叩き返された。美里は振り返るとさっぱりした顔で頷いた。

「ってことで、貴史、あんた絶対、一位でぶっとばしてよ！ あんた、アンカーなんだからね！」

あたりきだ。美里に言われなくてもやるべき仕事はしっかりやってみせる。

ふざけあいながら学校に到着し、教室で挨拶を交わした。三十九人のクラスメンバー。ひとり足りないのは例によって中体連の大会で勝負をかけるはずの近衛のみ。みな体調も整っているように見受けられた。

あの、女っつらしの軽薄男・南雲も足首や手首をくるくる回しつつ準備に勤しんでいる。

もうひとり、立村を探すと奴も静かに席についている。

さすがに制服ではこなかったようで、ポロシャツ一枚で足をジャージの上からもむような仕種をしている。やはりこいつも、気合は十分と見た。

「立村、いよいよだな」

背中から近づき、肩に手をかける。

こうやっているのをよく、評議委員の先輩だった本条先輩がしているのを見かけた。

びくりとして振り払おうとする立村。

「なんだよ、その態度ったらねえだろが」

「悪い、羽飛か」

立村はすぐに決まり悪そうに笑った。少し前かがみになり、膝上を叩いた。

「結果、出すぞ、絶対な」

「わかってる」

穏やかな返事だが、貴史の目を見ようとしなかった。

「お前、お守り、貰ったか？」

「お守りって、何？」

顔を上げ、初めて貴史の顔を見た。

「これだよ」

ちらっと「GOOD！」を取り出し立村の頭に乗せている。当然、振り払われる。

「やめろよ」

「女子連中が本日の勝負において、気合入れるためにプレゼントしてくれるんだとよ」

「そうなんだ……」

戸惑った風に立村はそれを手にし、長い縦棒を上、短い縦棒を下に置く形で眺めた。

「L、ってどういう意味なんだろう？」

「違うっての、こうだよ」

暫く吊るした紐を回しながら貴史は、横棒を底辺にしてひっくり返した。

「つまり、GOOD！ってことだろ。親指立ててみるよ。よっく考えるよなあ。お前も気合入れねばなんねえだろ」

「そういうものなのかな」

よく理解をしていないような顔で立村は肌色のフェルトを指先で撫でまわした。

あまり好みのデザインではないのだろうと予想はつく。

「立村くん、ちょっといい？」

不意に声をかけてきたのは美里だった。貴史と立村の間に割って入り、持っていたマスコットをひったくった。強引なやり方だった。少しむっとするかと思いきや立村は特に怒るでもなく黙って突っ立っていた。ただ一言。

「何？」

——お前の彼女に「何？」はねえだろ。

美里はまだ制服姿だった。着替えていない。抑揚なくあっさりと答えた。

「廊下に杉本さんがいるよ。立村くん用事があるみたい」

「杉本が？」

かすかに首を傾げ、すすと立村が扉を開けて出て行った。用事があるとなればもちろん行くのだろうが、どことなく腕とか腹とかがぴくぴくする。まだ古川こずえは来ていないようだ。よりによって球技大会にまで委員会のお仕事が絡んでくるのだろうか。ご苦労なこった。

「評議委員ってのも面倒だよなあ。こんな時まで」

「違うよ、貴史」

ついさっき、立村を相手に冷たい口調で話をしていたのとは打って変わり、美里の目はかすかにうつろに揺らめいた。俯いたのでその色は貴史しか見分けられない。

「あんた、立村くんやる気出してほしいんでしょう」

「当たり前じゃねえか。やる気、あるに」

「もっと、出してほしいんだよね。三年D組がリレーで勝つためにね」

なんで美里は当たり前すぎる言葉を口にするのだろう。しかもそんな、思いつめた目でだ。

「なんだよ、じゃあなんか、お前らしたのかよ？」

「やらしいこと言わないでよ！」

きっと見返す美里の鋭い瞳。これをやられると貴史もすぐには噛み付けない。

「冗談だってわかってるだろが」

「私も、勝ちたい、勝ってほしいよ。だから、したの」

「何をだよ」

——まさか、ちゅーとか？

これ以上口にするると美里に殴られるのは目に見えている。言わない。

美里は一瞬顔を伏せたが、すぐに貴史の肘をつつき、扉向こうにひっぱっていった。まだクラスの中は男子ばかりでうるさ方の女子は殆ど来ていない様子だ。

「ほら」

扉を細く開け、美里は覗き込んだ。廊下で何が行われているかを貴史も見た。

朝の光、窓辺にて。

立村と、杉本梨南……いわくありの後輩女子……が向かい合い、何かを語っていた。

なんと手作りマスコット「GOOD！」のL文字を片手に、なにやら赤いリボンでぐるぐる巻こうとしている。俯いているせいかやたらとブラウスの中ででかいものが揺らいでいるように見える。煩惱が爆発しそうなかわからないが立村が不思議そうにその姿を見つめている。

「おい、あいつら何やってるんだよ、で、ありゃ」

「見ればわかるでしょ。杉本さんからあれをプレゼントさせることにしたの」

「古川が渡すんじゃないのかよ」

一度口を噤み、美里は首を振った。

「こずえに押し付けられるだけだったらやる気出るわけじゃない！ 立村くんの性格、私が一番よく知ってるんだから！」

「じゃあお前が渡せばよかったろうが」

さすがに声は潜めて言い返した。美里は扉を閉め、背を向けた。

「貴史、今のこと、絶対黙ってて。見てない振りしてよ」

「はあ？」

「リレーに、勝ちたいんだったら絶対に」

またきりりとした瞳で美里は唇を結び、言い切った。それ以上何も言わずに、体育着の入った手提げをぶら下げ、教室から出て行った。

開いた拍子に立村が微笑みを浮かべながら入ってきた。美里とはすれ違いだがちらとも目線を交わさなかった。片手には太めの赤いリボンでぐるぐる巻きにされたL字の「GOOD！」マスコットが握り締められていた。思わず貴史も自分の何もついていない肌色フェルトのままのものを握り直した。

「ずいぶん派手だなあ」

「古川さんから頼まれたらしいんだ、俺に渡してほしいって」

ずいぶんにこやかに語る。つい五分前の不機嫌そうな表情はどこへやらだ。艶のある赤いリボンでL文字のフェルトは見事に覆い隠されている。赤いL文字。

「なんでそんなことする必要あるんだ？」

「そのほうがいいかなと思ったみたいなんだ。リボンを巻きつけた方が上品に見えるなあいつが感じたらしいな。そういう趣味だしさ」

優しい眼差しで立村は片手の赤いL文字……いや、赤くまがったソーセージ……のようなものを見下ろした。

「で、がんばってください立村先輩！とか言われたのか？」

「まさか」

立村はかすかに首を振った。L文字をそのまま鞆の奥ポケットにしまいこんだ。指先で丁寧に奥まで押し込んでいた。

美里が着替えて戻ってきた。立村の顔を一瞥もせず自分の席に戻っていった。

——絶対に言わないでよ。リレーに勝ちたいんだったら絶対に！

赤いリボンでぐるぐる巻きのL文字マスコットを差し出す手の持ち主、その違いに意味があるのか、今の貴史にはわからなかった。

——なんで美里、お前が渡そうとしなかったんだ？

——なんで俺には平気な顔して投げてよこせるのに、立村にだけはわけわからねえ態度取るんだ？

答えはまだ、見出せなかった。

美里は言う。

——勝ちたいんでしょ！だったらこれが一番いいのよ。

「勝ちたくねえわけねえだろが」

貴史は両手を腰に当てたまま第二走者の立村が走りこんでくるのを待ち構えていた。

足首をくるくる回しながら、隣のB組最終走者と話す。

「今、何位だ？」

「一位だな」

思いっきり頭を叩いてやる。

「あのな、俺が聞いたのはうちのクラスの順位だったの」

「答えるわけねえだろが」

ふたりで馬鹿っぽいやり取りを繰り返した。今のところ立村は第一走者と同じく三位につけている。いや、三位というのは四クラスしかない中でブービーと言ってもよい。これはかなり次の南雲、そして貴史が足で稼がねばならない。

予想通りの展開だ。

「いくら立村ががんばっても二位に上がるのは難しいよな」

「人のこと言えるのかよ、お前だってなあ」

ちなみにB組の第二走者は難波だった。第三走者が生徒会長の藤沖。あまり力の入った選出メンバーではないような気もする。もともとB組は選りすぐりの秀才クラスなので運動面については期待していないようだ。むしろやたらと応援団がうるさい……特に女子たち……C組メンバーの方が危険なのではないかと貴史は考えていた。

それなりに、予測は立てていた。

「あ、おい」

「どうした？」

目で追っていたのに気付かなかった。バトンパスだ。

「立村とうちの難波と、同時じゃん」

「まじかよ？」

自称・青大附中のシャーロック・ホームズこと難波がどのくらい走力を持っているのかわからないが立村に追いつかれたというのは、かなり、珍しいことではないだろうか。決して立村の足が遅いとは思わないが、練習してきた連中と比較するとやはり落ちる。

「さて、次は南雲と藤沖との勝負だな」

他人事のようにB組走者は呟いている。こいつら勝つ気ないんだらうか。隣のC組、およびA組走者ときたらライン付近でいらただしげになにやら叫んでいる。貴史としては気持ちがよくわかるのだが、ぴりぴり気分に乗せられてエネルギー消耗するのも避けたかった。ありとあらゆる策を講じ、貴史も精一杯気持ちを高めているというわけだ。

つま先立ってライン側でもう一度眺める。脳天気なB組最終走者はおっぼといた。

「読み通りだ」

口に出してみた。貴史なりに考えていたシナリオ通り進んでいる。

南雲とはむかつくのをはまんしつつ、それなりに考えて打ち合わせたのが今朝のことだ。

——ま、あいつなりにD組を愛してるってことはよっくわかった。

周囲の歓声と悲鳴のようなものがさらにヒートアップしているのがわかる。こめかみにきんと響く。時折吹く風にざらついたものが交じり、もう髪の毛は堅く強張っている。

南雲が言い切った言葉。

——俺はりっちゃんの分を二倍取り返して走るよ。だからあとは羽飛、お前に任せるつもり。

ま、俺はこの時だけは全力投球するんであとはよろしく！

その言葉通り、団子状態で寄り集まり走っている連中の地響きが貴史の靴裏にも襲ってきた。一気に水分を吸い上げて貴史の体の中すべての先端に行き渡っていく。

「よっしゃあ、任せろ！」

並んだ三人走者が振り返った。ぴきり、と切れたような音が響いたのは頭の中だけか。

プレッシャーは奴らにかけたのではない、自分への挑戦状を叩きつけた音。

「南雲、来い！」

へその周りにある筋肉をすべてひとつの場所に落とし込み、貴史は呼びかけた。

四人の男子たちが運んでくる熱の塊を背中で、そして足で受け止めた。勝手に助走を始めていた。背中を軽々と押す風に交じり声が響いた。今まで聞こえなかった細い叫びが、耳に刺さった。

「貴史、ぶっちぎれ！」

三学年の生徒たちが揃っているグラウンド内でその名をはっきり呼ぶのは一人しかいなかった。苗字ではなく、名前と呼ぶ女子は、ひとりだけだった。

「絶対いっちゃえいっちゃえいっちゃえ！ 貴史、勝っちゃえ！」

追い抜かれざまに渡された赤いバトン。落とさずにすんだ。隣でバトンミスがあったようだがそんなの見ちゃいられない。貴史は脇でぶっ倒れたらしい南雲の気配だけちらと感じ、あとは何も考えず疾走した。

——今回だけは、南雲も仕事をしたと、いうことだ。

ならば貴史も完璧にやり遂げるほかない。それが答えだ。

何が起こったのかをあえて考える間もなく、息が詰まりそうなことを感じるだけ。

脇にも誰も走者がいなかった。ひとり旅、先頭を切って走るだけ。

——貴史、貴史、ぶっちぎれー！

目の前に赤い紙テープが近づいてくる。

空いっぱいの歓声が降って来るようだ。

その中に細く、はっきり聞こえる声。

——美里、声でけえよ。

紙テープはさっくり切れた。どうやら最初から切れるようにカッターで線を入れていたらしい。破れた後なく、すぱっと斜めに落ちた。

D組連中が貴史の周りに駆け寄ってくる。それを押しのけるようにして菱本先生が貴史を助け起こしてくれた。。

「羽飛、羽飛、しっかりしろ。気がついたか」

「あ、俺また、寝てるわけ」

「ぶっちぎりだぞ。まあ、アクシデントも」

「アクシデント？」

自分でもまた、練習の時と同じようにずぶっとゴール後即倒れこんだのが情けない。

倒れた、ということすら認めたくない。起こされて初めて現実を受け入れた。

膝を派手にすりむいていた。また保健室のお世話になるのか。今度は頭を打ったわけではないので騒ぎにはならないだろう。

貴史が身を起こして立ち上がると同時に、遅れてB組、A組、そしてC組の最終走者が走りこんできた。

まず、その遅すぎるゴール、ありえない。

何かが起こったのは確かだろう。

「先生、てかおい、何かあったのかよ？」

「羽飛、気付いてねえのかよ？」

ゴール板を余裕でまたいだB組最終走者はぼそっと呟いた。

「お前らがバトンパスするのと同時に南雲がぶっ倒れただろ。あん時に接触しそうになっちまってA組と、あとC組がバトン落っこしちまったんだ」

それでもB組は予想以上の二位という着順ということもあり、かなりの盛り上がりで出迎えてもらえたようだった。ひとり、めがねを付け直した難波が万歳三唱しているのが笑えた。

貴史は振り返った。他のリレーメンバーがわらわらと集まってきた。他クラスと違い肩を叩きあい労らう姿がないのは、ひとえに貴史と南雲との関係にあるだろう。女子連中が他クラスも含めぎゃあぎゃあ騒いでいるのは南雲関係からだろうし、その一方で貴史に対しての「よくやったよ、偉い！」と背中をばしばしひっぱたく男子連中もいる。

「立村、お前も」

——ま、予想以上ではなかったにしても。

「よくやったよな」

所在なげに一步退いたところで見つめている立村に貴史は声をかけた。

「羽飛、悪かった」

目を伏せるようにして立村が呟いた。なんでだろう？ そんなに卑屈にならなくてもいい。立村が男子内で六位の足しか持っていないことは誰もが知っていた。そんな中で、かつていじめられた奴に頭を下げ懸命に走る訓練をし、足を引っ張らないよう努力していたことを貴史だけは知

っている。立村は堂々と胸を張ってもいいのだ。ピンチヒッターとしてやるべき仕事はしたのだ。

「なあにお前、びくびくしてるんだよ！ お前がちゃんと持ち場の仕事をしたから勝てたんだろ？ 近衛がいねえのに学年一位だぞ！ 立村、お前クラスの代表として大仕事したんだ、自信持てっての！」

膝の傷がひりひりするのをそのままに、貴史は立村の肩を叩こうとした。すぐに避けられた。立村は代わりに南雲の側に近づいた。

「なんだよおい」

「ちょっとちょっと羽飛」

予想はしていたが勝利のキスを浴びせてきそうな女子ひとりがいる。美里はどこにいったのか、D組喜びの輪にはいなかった。

「古川、美里はどこだ？」

「それよかちょっと話あるんだけど」

「せめておめでとうとかなあ、よくやったとかなあ、労いの言葉ってもんを言えよ」

「あんたさ、あの状況を喜んでいいと思ってるの？ 美里だってこれから大変だよ」

一番ぎゃあぎゃあ貴史に「ったくもうかっこいいったらありゃしないよね！ やっぱりあんたは私のナンバーワンだもんねえ、きゃっ！」くらい言いそうなこずえが、仏頂面で耳元に囁いてきた。そうやって密着したいのかとは問わない。どうだっていい。

「立村が結局二位に上がれないまま南雲にバトンタッチしたよね」

こずえは早口で囁いた。

「南雲もがんばったけど、やっぱり一位のC組には勝てなかったまま飛び込んできたよね」

「ああ、けどな」

「あの後、めったにやらない全力疾走を南雲がしてたよねえ。渡した瞬間ぶっ倒れるなんてパフォーマンス」

——やってたのか？

後ろを振り返る余裕なんてない。貴史はただ走っただけだ。脇にも後ろにも人氣がなかったのだけは覚えているが。

「その勢いがあまって少し先頭走ってたC組がまずバトン落っことしてさらに走ってる途中でB組がA組にぶつかって、結局あんたを除いた全員がバトン落としてしまったってこと」

「玉突き事故みたいな奴か？」

小声で問い返した。こずえは頷いた。

「そ。だから、立村の性格上、それは喜べないでしょ」

「南雲は舞い上がってるぞ」

見ていると南雲は立村に笑顔で何か話し掛けている。立村が憔悴しきった顔で頭を何度も下げているのとは対照的だった。貴史に謝ったのと同じことを懸命に言い訳しているのだろうか。

「なんで立村が謝るんだ？ あいつはそれなりに差を詰めたし」

「本当はあの段階で二位にこないと厳しいって話だったじゃん。美里が言ってたよ。羽飛が真面目な顔してレースシュミレーションしてたってこと、聞ってるよ」

——美里、何、古川にべらべらしゃべってやがるんだ。

確かに貴史は学校の行き帰り、美里にそんなことを話した記憶がある。

あまりにも多すぎていつだったかなんて覚えていない。

「立村はそれで自分を責めてるんだよ。結局南雲が普段の王子様キャラを捨てて意地の一位を守ったようなもんだけど」

「はあ、捨てた？」

王子様キャラというのがどういうものか貴史には理解しかねるが、かなり気取った軽い男を捨てて勝負したのなら、言うことないと思うのだが。

「南雲がさ、まさか走路妨害ぎりぎりのやばいやり方してるとは誰も思ってもみないじゃないのさ。他の子たちは誰も気付いてないからいいけど、私と、美里と、あと立村は気付いてるんだよ。だから、あえて何にも言えないってわけ」

「ちょっと待て！」

こずえと話していても埒が明かない。

貴史は側にくっついてきたがるこずえを振り払った。まだしつこく言い訳がましいこと口にしてる立村を押し除けた。ここは奴の出番じゃない。

南雲が笑顔を残したまま貴史に向き直った。

「おまえさんの言う通り、勝利はもらったじゃん。めでたし、めでたし、な、りっちゃん」

「何がめでたしだ！ おい、南雲聞きたいことがある」

慌ててこずえが割り込もうとする。きっかけ作ったのはお前だろと言いたくなるが我慢する。

「なんでお前スライディングなんかした？」

「野球じゃあるまいしなんだそりゃ」

立村が貴史に向かい無言で首を降る仕種をする。無視だ、冗談じゃない。一瞬でも南雲に対して感謝しようと思った自分がアホすぎる。

「お前も根性見せる奴だと思ってたがな、人の足を引っ張って勝つなんて思っちゃあいねえよ。いくらなんでもそのやり方ってのはねえだろ」

「何それ？」

ぼかんとした顔で南雲が見返す。このちゃらちゃらした態度にはむかつくが、言わずにはいられない。

「羽飛、いいよ、もう」

「よくねえだろお前も！ なんでそんなにへこへこしてるんだよ立村！ お前が一通りやることやってあの結果だったらしょうがねえ！ けどな、わざとこけて他のクラスの奴の」

言いかけたところで隣のこずえが腕をひっぱった。

「やめなよ」

「お前が言ったんだろが！ とにかくだ、こんなやり方をして優勝したって嬉しいか？」

「羽飛、ちょっと」

立村も慌てて貴史に駆け寄る。どうやら立村も事情を薄々感じていたらしく、禁句として貴史の言葉を封じ込めたい様子だ。だが事実を知った以上はこちらだって黙ってられない。

「あれ、もしかしてさ」

次に立村の肩へ手を置いたのは南雲だった。

頬にかすかな擦り傷が残っている。指先には誰が巻いたか知らないがばんそうこう。

「俺がわざとこけたと思ってるわけ？」

軽くおちゃらけた調子の言い方で流している風に見えるが、目は笑っていない。乗ってきたか。それならこちらも受けるのみ。貴史はこぶしを握り締めた。何度かぶつかってきたがいつも貴史側がつかかかのみで流されてしまう。絶対たる善悪が見えない。むかつく、腹立つ、そんなレベルの低いけんかで終わってしまう。惨めさしか残らない。

「りっちゃん、心配してたんだ」

立村にかける声がやたらと女子受けしやすい喋り方だった。

「そっか、りっちゃん、誤解するよなあ」

語尾を延ばし、ちらと貴史に視線を向けたが戻し、立村ひとりに話し掛けた。こずえだけが貴史の腕をしっかりとひつつかんでいる。

「けどさ、りっちゃんちゃんと二着と差なくバトン運んでくれたじゃん！ 俺が普通に走っても取り返せる差だったけどさ、まあ世の中何が起こるかわからないってのはこの一年ほどよくわかってるんで全力投球したまでよ。大丈夫大丈夫。どっかの誰かが変なこと吹き込んでるようだけど、俺にだってプライドってもんがあるしね。りっちゃん、そういうことで、じゃ、行こ」

言葉の裏に潜む嫌味の数々に全身鳥肌が立ちそうだ。ぞっとする。もともと南雲は立村のことを気に入っていたし、修学旅行時のトラブル際も口をつぐんでくれたりした。ひっくり返せば弱みを握られているということだ。一発もこぶし振り上げる前に、ノックアウトとはこのことだ。どこにもついている隙間がない。プライド、と言われればその通り。軽薄男が全力で突っ走ってみてもないところを意識的に見せつける必要なんて、確かにない。

黙るしかない貴史の前で、立村がまた南雲にふかぶかと頭を下げた。

「なぐちゃん」

「だからあ、謝らなくていいんだよってば」

「俺ひとりが勘違いしてた、ごめん」

顔を挙げなかった。繰り返した。

「俺が、よけいなこと言ったから」

「りっちゃん、いいよいいよそんな気にするなよ。それよか学校ひけたらさ、どっか行こうよ。ひさびさに本条さんところに遊びに行こうよ」

——本条さん、ときたかよ。

「りっちゃんもほら、評議のこととかでいろいろあるだろ？ せっかくだからさ、本条さんにハンバーガーおごってもらおうよ」

去年の評議委員長で立村の直属先輩、本条。その名を出されればもう貴史の入る隙間はない。南雲ともともと付き合いはあるらしい。その繋がりで見れば立村と本条先輩の間に割り込む格好で仲良しチームをこしらえている。委員会がらみのコネもあるようだ。

だから入れない。

まわりつく古川こずえを振り払い、貴史は背を向けた。立村の反応を確認するつもりもなかった。同時に戻ってきた美里が貴史に何か話し掛けようとし、すぐ立村へ駆け寄っていった。話の内容は丸きこえだった。

「立村くん、今ね、向こうに杉本さん来てるよ。なんか話あるみたいだよ」

「杉本が？」

恋人同士らしい労いの言葉もなかった。立村は短く答えると貴史の側を足早にすり抜けていった。

「美里、おい！」

「なによ、そのおいてのやめなさいよ！ 私有物じゃないんだから！」

甲高い声で叫んだ美里を、貴史は呼び止めた。南雲がさっさと背を向けたのを見届け、美里を怒鳴りつけた。

「お前いったいどこ行ってたんだ！」

「二年のとこよ！ それが悪い？」

「それと訳わからねえ妄想するんじゃねえ！ お前らもだ！」

これは美里、およびこずえも一緒だ。

「とんでもねえ恥かいたちまったろうが！」

「貴史あんた何切れてるのよ」

美里がこずえと目配せしながら、首をかしげた。ショートパンツから細い足が伸びていた。鉢巻をしている美里はどこか子どもっぽく見える。ちびなせいだろうか。

「優勝したんだから、もっと喜びなさいよ！」

「なあにが喜べだ！」

本来なら嘘情報を報告した古川こずえを怒鳴りつけるべきところなのだろう。

嘘か本当かそれはグレーゾーンにしても、どちらにしても貴史は確認せずにつっかかってしまいのせられてしまった。美里や立村が誤解しているという情報だけで本当のことだと思い込んでしまった。そう思わせた美里の馬鹿さ加減にどう鉄拳振るえばいいのかわからない。

「南雲がわざとこけたとかなんとか余計なこと吹き込みやがって！」

「あ、まさかこずえ、貴史にそんなこと言ったの？」

口を押さえる仕種をし、こずえに詰め寄る美里。どうやらこれは古川こずえが一方向的に美里の言葉を告げ口した形となっらしい。

「ごめん、ついで、立村がぼろぼろに落ち込んでたから、口がすべっちゃって」

「そんなんじゃすまないでしょ！ ばかっ！」

また話が別方向に行きそう。ここで一番悪いのは誰か？ やはり余計なことを考えた美里だ

ろう。こずえも誤解を勝手に膨らませるようなことをしたのはむかつくが、それ以上貴史としてはからみたくない。ということでここは美里ひとりに文句を言うのみだ。

「人のせいにするんじゃないよ！ デマ流してどうするんだ？」

「だって、立村くんだって」

「立村にも吹き込んだのか？」

美里ひとりの勘違いで話が広がっていき、取り返しのつかないことになったらどうするつもりなんだろうか。だから女子は訳がわからないのだ。一方的に怒鳴ってもこれは文句言われなければならない。もっとも周囲に聞かれたらまた尾ひれ背びれつくのは目に見えているので、その辺は配慮している。女々しいかもしれないが、現実だ。

「違うってば！ だって立村くん、心配そうな顔してたし、立村くんの性格だったら、きっとそう思うよねって、ねえ、貴史だってそう思うよね？ 私だけじゃないよね？」

何を必死に訴えているのだろう。耳にひとり響いた声援を甦らせてしまう。

「そんなのどうだっていいだろうが！ 俺が分かるわけねえだろ！ 走ってるの俺なんだからな！ それよか、それよか」

ええと、なんと言えればいいのか。なんだか首が痒くなる。搔きながらわめく。

「それになんで立村に一言、がんばったとかそういうこと言わねえんだよ！ お前それでも」
次の言葉が出てこなかった。美里が正面から貴史を見据えて首を振った。

「私に言われるよりも、もっと言ってほしい人がいるんだからしょうがないじゃない」

「美里、なんだそれ、今朝からお前何、馬鹿なこと言ってるんだ？」

慌てているのかそれとも適切な日本語表現が見つからないだけなのか。

いきなり杉本梨南を引っ張り出してきたりと、どう考えても立村の彼女とは思えない言動の繰り返し。しかも、また今もか。

「美里、お前」

「わかってよ、貴史くらい、分かってくれたって、いいじゃない！」

泣きはしなかった。美里は貴史を食いつきそうなほど睨みつけ、背を向けて走り出した。なぜか南雲たちのたむろっている場に向かっていた。また、美里は何をしようというのだろうか。また何を誤ろうとしているのだろうか。

「羽飛、お疲れ。一番応援してたの私と美里なんだけどねえ、そっちも感謝してよ」

「悪い、お前の声、聞こえなかった。珍しく控えめなんだなと思った」

残された貴史にこずえがいつものように、よいしょ言葉を差し出そうとする。

申し訳ないが、聞こえなかった。それが事実だった。

委員会に関わっている連中はやたらと焦っている。

立村も南雲も、授業以外殆ど教室にすることがなく、鐘が鳴るとともに即飛び出していく。

美里もやはり似たようなものだが、それでも途中古川こずえに引き止められて女子同士のかし
ましい話に盛り上がっていることもあって声はかけやすい。

「おいおい、今日もそんなに急いでどこ行くんだよ」

別に用はないけれど、貴史はあえて呼び止める。遅刻？ そんなの知ったことじゃない。
十月も終わりに近づき、学校祭も一段落し、とりたてて焦るようなことはないはずだ。

「評議委員会に決まってるじゃない！」

またかすかにヒステリーの気配を感じる。美里は髪の毛を緩くひとつにまとめて後ろに垂れ下
げていた。美里にしては珍しい形だった。ちなみに規律委員会からのチェックを受ける形では
ない。

「もう、すごく忙しいんだから！ 貴史なんか用？」

「あるだろあるだろ、あれだって」

口をもごもごさせるのは自分流ではないが、まだ内密にせざるを得ない。

ばらすなら、もう少し様子を見て、伝えるべき相手に伝えてからでないともまずい。

「あれって、何？」

ぼけてるのか、美里は勘付こうとしない。隣でにやついている古川こずえには聞かれたくない
内容なので、まずはひっぺがす。鞆で美里の肩を軽く押して、廊下へと追いやる。

「なあに、ずいぶんいちゃついているねえ」

「そういう柄じゃあねえだろ、悪いが美里借りてく」

「断りを入れるなら立村にしなさいよ」

——その、立村がどっか行っちゃったから話できねえんじゃねえかよ。

その通り、本当は先に、三年D組評議委員の立村へ話を通さねばならないはずなのだ。

それすらする暇の無いわけのわからぬいそがしさ、なんとかならないものか。

「まだ古川には聞かれたくねえからな。まだ、あいつには言ってないだろ」

「言ってない。もちろんだよ、そんなこと」

廊下の窓から見える銀杏が少しずつ黄みを帯びた色に染まりつつある。黄葉にはまだ時間がか
かりそうな緑がたくさんまとわりついている樹だけど、たまに落ちてくる葉の冷たさを感じるこ
とは確かにある。そろそろ、冷えが近づく頃だ。

美里には事情をすべて話してあった。

「菱本先生のことでしょ、あの、赤ちゃんがって」

口籠もる美里が、その窓へ視線を向け、かすかに頷いた。

「まあなあ。結婚式挙げるらしいぞ」

この話を聞いたのは昨日のことだ。もちろん菱本先生が貴史に直接、

「実はな、俺もとうとう年貢の納め時でな」

なんて語るわけもなく、たまたま文化祭後の面談で母がかまをかけてみたところ、一発で白状したというのが本当のところだ。当然仲良しの美里母にもそれは伝わり、ふたりの間で共有の秘密は息子と娘にも自然と流れてきた、そういうわけだ。

「けど、よくそんなこと聞いたよね。信じられない」

唇を尖らせたまま、目を逸らしたまま。美里は呟いた。

「お母さんたちって、たしなみてこと知らないのかな」

「お前に言われたくねえぞそれ」

横向いたまま足だけ蹴りを入れる女子には死んでも言われたくない言葉だと貴史は思う。本気で蹴り返したら美里も嫁にいけなくなるだろうからここではがんばった。

「それなりに噂には聞いてたけどな。菱本先生にうちの母ちゃんが見合い話持ちかけたんだと」

「何考えてるのよいったい！」

「まあ聞け。その時に菱本先生もすねに傷持つ身だから口ごもっちゃって、ああとかうーとか言うもんだから、そこを突いた！」

握りこぶしを作ってぐいと美里の顎に突きつける。いや、脅したわけではない。美里は相変わらずすかした面をしている。

「お好きな方がいらっしゃるの？って？」

「そ、そしたら落ちた」

「ばっかみたい、ほんと菱本先生、先生じゃないみたい。それよかあんたさ、『すねに傷ある』って先生にすっごく失礼じゃない？ まるで彼女に冷たいんでしょとか、そんなこと言ってるようなもんじゃない！」

やっと顔を見て美里は言った。貴史としてはごく自然な意味あいで口にしたつもりだったが、よく考えてみると美里が首をかしげるのもわからなくはないと納得した。

——美里は、あの修羅場見てねえもんな。

つい、一緒にいたのが美里なのではと勘違いして口走ってしまう。違う、隣にいたのはこずえだ。もし美里だったら……別の意味で修羅場だ。

——美里は古川から、菱本先生の彼女が家にいたことくらいしか聞いてねえだろ。

こずえの言い分に嘘がなければ、の話だが。

——彼女が腹ぼっけで責任取れって話になってるなんてこと、聞いてねえだろ。

まだ外の銀杏が葉もぴんぴん緑だった頃の話だ。少しずつ黄色見がかってきている秋の色と一緒に、菱本先生と彼女との間には何らかの話し合いが持たれたのだろう。

「で、赤ちゃん」

「そこまで白状させるとはなあ」

貴史の母が凄いのは、その後だ。根掘り葉掘り菱本先生の婚約者……そう説明したらしい……の年齢と結婚式の予定まで突き詰め、その予定があまりにも早いことに驚き、もしや？と尋ねたらしい。なぜそんなに結婚式を焦るのかと。

「答えはひとつだろ、ってことだろ」

「赤ちゃんが生まれないうちに」

美里は言葉すくなく繰り返した。

「赤ちゃんが生まれちゃったら、大変だもんね」

——結婚式、十一月らしいな。

当然、三年D組評議委員の立村はそのことを知らないはずだ。

「そういうことでだ。このことを、立村に伝えねえとまずいだろ」

「そうね」

ここはふたりで頷いた。

「立村くんまた拗ねるもんね」

「さすが古女房だ」

また足を踏まれるがそんなに指には響かない強さだ。

「いくらあいつと菱本先生とが天敵同士であったとしても、冠婚葬祭は評議委員の役目だろ」

「私もそう思う。先生にお祝いあげなくちゃ」

もっとも立村が喜んでお祝い探しに奔走するとはこれっぽっちも思っていなかった。

よくて「クラスのお祝いしたい意思が固いならつきあうけど、基本的には勝手にすれば」程度の反応しか返ってこないだろう。

「今、評議委員会も忙しいしね。学祭終わってから立村くんも生徒会室に入り浸って大変なの。なんかね、女子たちをおっぴり出してみんな懸命に騒いでるの。なんでかわかんないけど」

ちらと、立村から以前聞いた「大政奉還」の話を思い出したがこれは口にしない。美里のおしゃべりに付き合うことで探りを入れる。

「B組の琴音ちゃんだけがたまに様子探りに行くけど、やっぱりよくわからないって返事みたいで。男子ばかりでかたまってひそひそ話ばかりしてるの！ 十一月になったら生徒会の改選があるからそのあたりもいろいろあるみたいなの」

「へえ、生徒会のことまで評議委員会は頭つっこまねばなんねえのか」

そういう話を全く聞いたことがないとは言わない。ただそこまで活発に動き回るのは、貴史の目から見れば本条先輩クラスの野心家連中向きのものであって、感情控えめな立村には似合わないように見える。

彼氏の現状について美里もさらに語る。

「そうなのよ。なんかかわかんないけど、会長藤沖くんと熱く語ってるわよ。教えてくれないし教えてもらえるほど時間もないし」

白いブラウスがカフスごと飛び出したジャケットの袖口を引っ張りながら、美里は軽く片足を踏み鳴らした。

「女子だってほんっと、大変なんだからね！ 男子にはかわかんないかもしれないけど、ものすごい大事件が起きてるんだから！」

悪いが貴史は男子なので、どんな大事件であってもわからないし理解する気もない。

「わあったわあった。お前がいかにか立村に振り回されてるかってことはよーくわかった。それよ

か菱本先生のことは、三人でじっくり話した方がいいよな。クラスの連中にばれる前に」

「そうね。こずえにばれたらあとは秒速で噂が広まっちゃうもんね」

今のところ菱本先生は相変わらず熱血で、学校祭の合唱コンクール……今年から全学年参加が義務となってしまった。去年までは二年生限定だったのに……では舞い上がり、女性問題のいざこざで頭を抱えている風には見えなかった。だから貴史もすっからかんに忘れていたのだが、展開がここまで早まっている以上は動かないわけにはいかない。

——せっかくだし盛り上がりてえよな。先生も覚悟決めたんだろうしな。

まずは、めでたい。おめでとうございます！

美里と一緒に階段を降りようと一歩足を踏み出した。

いきなり後ろから誰かがぶつかってきた。美里が手摺りにしがみついていた。

「おい、一言謝れよな！」

びっくりしたのか声も出ない美里をちらと見て、先に下りていった男子に声をかけた。そいつが振り返って慌てて頭を下げた。C組の更科だ。

「清坂さんごめん」

美里が首を振る。「大丈夫」のメッセージだろう。更科がそのまま猛スピードで下りていく様を見下ろしていた。

「何焦ってるだよ、珍しいよな更科にしてはな、だろ、美里」

「なんかあったのかな」

首をひねっていた。

「更科くんってあんまりばたばたするタイプじゃないから、ちょっとびっくりしちゃった」

美里の言う通り、三年C組評議委員の更科は、いわゆる愛玩犬タイプの可愛い男子と思われている。実際は陰でいろいろ悪いこと……噂では保健の都築先生に熱を上げているとか……も耳にすることが多いのだが、表向きは愛想のいい優等生面している。一緒に評議委員コンビを組んでいる霧島ゆいが外見アリス系美少女でありながら本質アマゾネスということもあって、うまく手綱を取って動かしているそういう印象がある。

——いばらせておいて、実はこっちが主導権握ってるってわけか。

貴史にはまずがまんでできないパターンの関係だ。

——俺なら間違ってることははっきり言って、その上で主導権取るがな。

美里相手のやり方が、基本として女子に対するパターンだ。

「けど、変ね」

手摺りに手を自然にかけ、美里は降りながら貴史に話し掛けてきた。

「今日、評議委員会で男子たち集まってるはずなのに。女子はこなくていいって立村くんに言われたから私は行ってないけど。更科くん、立村くんたちと一緒にじゃないのかな」

「なんか忘れもんでもしたんじゃないかねえの」

首を振り、

「勘なんだけど、変」

何度も「変」を繰り返し、美里は二階に下りた。職員室に向かい斜めに立ったまま、
「貴史、やっぱり、そう」

小声で呟いた。

「どうした？　なんかあったのかよ。やたらと人たかってるな」

見れば職員室前には男女合わせて二十人くらいの連中ががやがや集まっている。入り口をちょうどふさぐ格好で騒いでいる。定期テスト一週間前の場合は、機密保持の関係で職員室に入ることができないこともあり生徒がこうやってだらつくこともある。しかし今は試験なんて関係ない時期のはずだ。何かめでたいことでもあったのだろうか。

「貴史、ちょっと寄ってっていい？」

もちろん貴史も興味がないわけじゃない。美里と駆け足で職員室へ向かった。男子女子はたくさんいるけれどもその殆どが三年C組の生徒ばかりだった。何があったのかわからないが、みな、早口に「霧島がさ」「ゆいちゃんがさ」「大丈夫」とか囁いている。囁きレベルではない、もうはっきりとした発音として「霧島ゆい」の名が飛び交っている。

「ゆいちゃんがどうかしたの？」

まず美里が女子の一人を捕まえて尋ねた。

「職員室にいるんだけど」

口籠もり、小声でなにやら呟いている。側にいる貴史に聞き取れたのは、

「泣いちゃってる」

「西月さんと一緒」

——何かやらかしたのかよ。

美里も同じく疑問に思ったのだろう。次に男子を捕まえた。

「ゆいちゃんが泣いてるってどうしたの？　C組でけんかかなにかしたの？」

「してねえよ。ただ」

割って貴史も問い詰めた。美里ひとりでは情報が偏りすぎてしまう。男子は女子に半分しか事実を言わないもの、承知している。

「霧島が担任に呼び出されたのか」

「ああ、たぶん学校のことじゃねえの？」

「学校？」

貴史の胸あたりを片手で思いっきり払いのけ、美里が畳み掛けた。かなり貴史としてはダメージを被っているが、耳だけはかっぽじってしっかり聞いている。

「霧島、やっぱり、青大附高には進学できねえみたいなんだよな」

両手を口に当て、美里が足早に職員室の戸口へと向かった。誰も止めようとはしないのが妙だった。追って腕をひつつかんだ。

「何、お前しようってんだよ」

「だって、ゆいちゃんが」

「霧島の問題だろ。お前が口出しすることじゃねえ」

「だって、ゆいちゃん、青大附高にいけなくなっちゃうなんて、そんな、ひどいよ」

首を振りながら、眉間に皺をよせ、叩きつける言葉。貴史は黙って受け止めた。

「ゆいちゃん、本当に、ほんっとにがんばったんだよ！ 中間試験だって実力試験だって、誰よりも一生懸命勉強してたんだよ！ それなのに、なんでゆいちゃんだけ、青大附高にそのまま進学できないの？ それって変！ 何にもしないで威張ってるならざまあみろって思うけど、ゆいちゃんは本当に命がけで勉強してたんだよ！なのに、どうして、成績だけで追い出そうっていうの？ 努力をどうして認めようとししないのよ！」

「美里、落ち着け」

貴史も腕を放さなかった。たぶん、ここは止めるべき場だ。

「お前が騒いだってどうもなんねえよ。学校が決めることだろ？ C組の殿池先生が決めることだろ？ そりゃ、霧島はいい奴だけどそれと学校の進学とは違うだろ！」

「殿池先生だってゆいちゃんを評議委員として三年間応援してきたじゃない！ それなのになんで手のひら返したような態度取るのよ！ おかしいじゃない！ 命がけでゆいちゃんをかばったっていいのに、なんで何にもしようとししないの？」

また後ろから誰かがどんと突いた。

振り返り怒鳴りつけようと思った。

美里が貴史に首を振り、さっき胸板をひっぱたいたその手で口をふさいだ。

「難波くん！」

マントは羽織っていなかったが「青大附中のシャーロック・ホームズ」難波利武が一言も謝らずに職員室へ飛び込んでいった。開け放したドアを誰も閉めようとはしなかった。そのまま、泣き声と叫び声に耳を澄ませた。

「私、何をすればいいんですか？ 私、精一杯努力します。足りないならもっと勉強します」

何度も同じ言葉が飛び交っている。

「この学校を追い出されたら、私もう死ぬしかないんです。この学校にいたから私は生きていたんです。ここ追い出されたら、もう私、行くところどこにもないんです。私、生きている価値がなくなっちゃうんです！ お願いします、私を青大附中にいさせてください！ 生徒じゃダメなら、中卒でアルバイトでもいいです、落第でもいいんです、お願い、ここにいないと私もう、死んでしまうんです、お願いしますお願いしますお願いします……」

——ここまでプライドかなぐり捨ててるってわけかよ。

さすがに美里も動かなかった。その声だけで十分だったはずだ。

「美里、外出るぞ。どうせこれから委員会ねえんだろ。菱本先生の方が俺たちには重大テーマだったの」

美里は素直に頷いた。入り口をバリケード化させた三年C組生徒たちにまかせて、貴史は美里とふたり、一階への階段を降りていった。

「そういえば」

目を潤ませ、時折顔を覆いながら美里が呟いた。

「立村くんはいなかったね」

「ああ、んだな」

理由は考えなかった。難波や更科が駆け込んでくるように、立村は飛び込んでこなかった。そのことだけが事実だった。

気にならないこともなかったが、美里のことは放っておいた。

そりゃあもちろん、女子同士でしかも三年間同じ評議委員だった霧島ゆいがもろもろの事情で別の高校に進学させられるというのは辛いだろう。淋しいだろう。

しかも、それが実質的には「退学勧告」みたいなものだと言われたら、何を言っているかわからないだろう。それが人間というものだ。貴史もその点においてはうんうん頷く。

——けどなあ、どうしようもねえよな。

さすがに貴史も、この件をひっくり返すことができるとは思っていなかった。

「なあ立村」

十月末、ひさびさの放課後。ブレザーを羽織ったままで教壇に腰掛け、今にも倒れこみそうな顔して背中を壁に貼り付けている奴に声をかけた。奴にとっては不幸かもしれないが貴史にとってはラッキーだ。教卓に腰掛けて見下ろしてやった。

「何」

「評議委員会、なんか企んでるんだろ」

「それなりに」

美里が立村と評議委員会でくっついていることは周知の事実……のはずだが、美里から聞く内容だとそういうわけでもなさそうだ。教室でもそうだが立村は事務的な会話しか美里にはしないようだ。もちろん彼氏彼女なのだからそれなりに二人きりの時は甘くときめいたりもするんだろうと思うのだが、どうやらそれもなさそうだ。冷やかしがいが無い。

「でも、なんとか決着つきそうかな」

顔を挙げ、立村はかすかに笑った。

「やることはやったし、あとはこのままうまくいけばいいし」

——例の「大政奉還」のことか？

貴史が思い当たったのは立村の言葉が終わった後だった。すっからかんに忘れていた。

「生徒会と手を握るっていうあれかよ」

「うん、前期のうちには」

——前期っていうと、十一月半ばまでってことかよ。

前期という設定が長すぎる気もするが、青澗大学附属中学では毎年のことだった。

四月から十一月まで、区切りとしては生徒会役員改選が終わった後に改めて各クラスの委員を選び直すのが常だった。もっともよっぽどのがなければ担当委員が変わることもあまりないわけで、単なる形式としてみなされることが多かった。例外は今年の四月、三年A組で女子評議委員が西月から近江にバトンタッチしたことくらいだろうか。後輩連中は騒がしくなにやらやかしているらしいがそれは貴史の知ったことではない。基準は三年D組菱本クラスにすべて置いている。

「何度考えてもわからねえけどなあ。なんでせっかく評議委員会がいろいろ遊べる場所こしら

えたってのに、それを生徒会に返すってのは、もったいねくねえか？」

「本条先輩に言ったら怒られると思う」

「話してねえの？」

貴史は教卓から下りた。立村の隣に腰掛けた。同じ格好で足を伸ばし、壁に寄りかかった。

「当たり前だよ。もっともあまり顔合わせることないけどさ」

「まあ、高校違うとそうだよなあ」

あまり深いことを考えず貴史は答えた。そんなことよりもっと大切なことがたくさん待っているのだ。例えば菱本先生の婚約祝いとか。美里とも相談していたが、なかなかきっかけがつかめなかった。

「けどまだまだいろいろあるよ。本当に」

いきなりトーンが低くなる。立村が膝を抱えて一気に縮んだ。

「物事が片付いたとしても余計なことする人たちもいるしさ」

「例えば誰だよ、美里か？ 天羽か？ それとも俺か？」

「羽飛じゃないよ」

なんとなく思いついた名前を挙げてみただけだった。もちろん自分の名を出したのはしゃれのつもり。本気ではない。

「もっとやらなければならないことがあるのに、かえって傷を広げたらまずいだらうって思うよ」

「おいおい、立村、話が見えねえぞ」

「ごめん、独り言」

察することが貴史は苦手だ。言いたいことがあるのなら、はっきりこれはこうだと言ってもらわないと困るのだ。

「言いかけたことを引っ込めるってのは男の風上にも置けねえなあ」

「別に隠すことじゃないよ。そうだな、霧島さんのこと、聞ってるだろ」

貴史に向けたまっすぐな眼差しは、すでに仲間同士のおちゃらけ合いとは違う、意思のようなものが見え隠れしていた。どうもこういう顔をして語りだされると貴史は正直、逃げたくなる。真剣に語るのも悪くはないが、全身だらんとして転がっている状態の中で、背筋を伸ばして聞かねばならないというのはなかなかきついものがある。

「うちの学校も罪なことするねえ」

「その件についてはもう俺たち生徒のできることはないんだよな」

「もう、霧島が別の学校に行くってのは決まったんだろ？」

「そう。噂は早い段階で聞いてた」

溜息を吐いて立村はまた膝を抱え直した。そろそろ夕暮れが迫っているけれども、窓から見える雲はまだ白い艶を帯びていた。もう少し語っていてもよさそうだ。

「けどさ、清坂氏もな、今あんなことしたって、かえってまずいだらうって、羽飛、そう思うよな？」

——やっぱり美里がらみかよ。

背中を伸ばし、貴史は向き直った。なにせ霧島の件では現場近くにいたわけだし、情報提供くらいならいくらでもできるというわけだ。

霧島ゆいがいわゆる「縁故枠入学者」であり、実際の成績に対して竹馬クラスの高下駄を履かせて入学させられたことは、周知の事実だった。もともと縁故入学者中心のクラスA組に置かれるべきところ、あえてC組に回された理由は不明だが。しかも、クラスで極めて目立つ地位「評議委員」を三年近くもの間保ってきたこの事実。さらに言うならアマゾネス美少女霧島ゆいは、クラスの女子たちをやっかみなくひきつけ、いつしか誰よりもパワフルな存在としてC組を統括していた。

しかし誇り高い霧島が、あの場ではただひたすら、担任の殿池先生にひざまずいて、青大附高への進学を許してくれるよう泣いて頼んだという。響き渡る声で、恥も外聞もなくしがみついたという。

理由は決して品行不方正だからではない。単純に、成績が足りないだけ。

努力をしていないわけではない。だからこそ、みな納得いかずにいる。

真面目でひたむきで、ただ成績がちょっと悪いだけ。それだけの理由でなぜ追い出されねばならないのかと。女子たちの多くが納得いかず、特に近い存在だった評議委員女子たちが署名運動まで始めたのも自然の成り行きかもしれない。

だが、付き合いで署名する生徒がいる一方で、冷めた目で見下ろす男子たちもいる。

貴史も半分はそうだが、立村も同じ価値観なのだろうか。少し意外だ。立村だったらもっと感情移入して手伝いそうな気もするが。そこのところは聞いてみたい。

「……って、俺は思うんだが、立村、どういうことなんだろうなあ」

「霧島さんのことを思えばこそ、あんな署名運動とかそういう行動は控えねばならないんじゃないかって俺は考えてる。だから清坂氏に話をした」

——へえ、それなりに話はしてるんだな。

美里は相変わらず「立村くんなんてずっと委員会のことばっか！ 話す暇なんてあるわけないじゃない！」とふくれていたが、立村なりに接する努力はしていたというわけだ。

「でも通じなかった。想像はしていたし、俺も繰り返さなかった」

——まあ、一回で通じる美里じゃねえよな。頭に火がついてる時は特にだ。

大切な友だちのためにひたすらつっぱしる美里の性格を知るからこそ思う言葉。

立村も貴史と同じくらい美里を近く感じているはずだ。

照れがあるのか冷ややかな口調に聞こえる。

「人前で隠しておきたいことが知れ渡ってしまい、誰とも話をしなくなってしまった状態の相手に傷へ塩をもみこむようなことをどうしてしたがるんだろうな。今はとにかく知らない顔してそっとしてもらえたほうがありがたいのに」

「……と、お前、霧島に聞いたのか？」

ずいぶん女心に詳しい発言ではないか。つい突っ込んでしまった。にこりともせず立村は首

を振った。

「もし俺が霧島さんだとしたら、と想像してみれば答えは簡単だよ」

——いやあ、それって想像してるだけじゃねえのか？

全く貴史にはありえない発想だけに、言葉がそうそう簡単に出てこない。

「ただ、放っておいてほしいだけなのにな。清坂氏はそういうと俺が冷たいとか悪魔だとかそういうこと言って責めるけど、本当にしてほしいことをしてくれてる人がいるんだからその人に任せればいいと思うんだ」

「なんだそりゃ」

「霧島さんには今、毎日、A組の西月さんがくっついてるんだ」

「それが？」

「西月さんは霧島さんの友だちだから、それなりに何をすればいいかもわかっているような感じなんだ。それに、口をきかないから余計なこと言わないで傷つけないですむ」

「なんだそれ、よくわからねえ」

立村なりに何かを考えているのだろうとは思う。貴史も理解できないわけではない。ただどうしてもそこに、美里の言動に関する冷たい批判が加わってしまうと領けなくなってしまう。美里の行動に問題があることは認める。しかし、それを責める立場に立ってはいけないんじゃないのか、立村？

「お前の言ってること半分以上アイトントノーなんだが、まあ霧島については騒ぎが収まるまでそっとしたほうがいいってのは納得だな」

そこまで伝え、貴史は話を切り替えることにした。立村の得意分野である、人間観察に関する話題に付き合うのはちょっとしんどい。まだ明るいんだからもっと楽しい話をしたいものだ。

無理やり話を鈴蘭優の新作ドラマについて持っていったが当然立村は載ってこなかった。しかたない、タイプではないんだろう。

——立村の好みは巨乳だって噂聞いたことあるしな。

どこからそんなアホな噂が流れてきたのかわからないが、それでも納得できないことではない。おそらく、二年でいろいろ取り沙汰される杉本梨南とのからみもあるのだろう。

「ところで立村、ひとつ相談なんだがな」

「なんだよ、いきなり」

話をぶったぎり持ちかけた。

「そろそろ俺たちも卒業まであと半年ってとこなんだけどなあ、それ考えてるか」

「そういえばそうだよな」

はっと目覚めた風に立村は瞬きを繰り返した。

「でだ、クラスとしてもやっぱり何かそろそろやらねばまずいだろ？」

「そうだな。でも悪いけど俺は今、評議委員会の方で手一杯だから」

またも逃げようとする。美里と話したのとやっぱり同じだ。肘で小突いた。

「あのなあ、そうやって逃げを打つのやめろって前から言ってるだろ？ 一応菱本先生からは、

クラスの卒業文集を作ろうかって話が出てるけどなあ。お前と美里には話、行ってねえか？」

かなりのスクープネタなのだが、やはり立村は知らない様子だった。首を振り目を背けた。

「何考えてるんだろうな。この忙しい時に。誰がそんな話持ち出した？」

「俺も裏、取ってねえけど天才画家の金沢に、クラス文集用のイラストを描くようお達しがきたという情報は耳にしてるぜ」

これは本当だった。立村が委員会活動であたふたしている間、貴史は暇をみつけては金沢から美術に関する熱い語りを聞かせてもらっていた。絵を描くというよりも、芸術にからんだ話をしたとたん別人格のような振る舞いを観察するのが面白いからだった。

「なんだよ、本当にあれだけみんながいやだって言っているのに、まだ執念深くやる気かよ」

立村側には一年秋から冬にかけて起こったトラブルの傷がもろに残っているようだった。もっともこの前の男子クラス対抗リレーではきちんと、その当時問題になった男子に話をつけにいき頭を下げたらしいので、それなりにわかってはいるのだろう。

「一年の時は結局班ノートを文集化できなかったから、なおさら根に持ってるんだよ。菱本先生はきつとな。だから最後の最後まで男としていいとこみせてえってのはあるよなあきつと」

——嫁さんに早い段階でかっこつけておきたいんだろうなあ。

これはまだ言わずに置く。

「冗談じゃない。言われたらやるけど、そんなの喜ぶ人がいるなんて思えないよ」

——いやがってるのは立村、悪いがお前だけだ。

菱本先生の結婚話についてもこの場で伝えた方がいいと貴史なりに判断した。

——下手に情報が早くまわっちゃうとまたこいつ拗ねるからな。

美里がいない場で話すのはフライングだと思うが、しかたない。

「あのな、立村、もうひとつ菱本先生がらみで話したいことがあるんだよな」

「あんな奴の話なんか、知ったことかよ」

やはり唇を噛み吐き捨てるように呟いた。

「俺はそんなことよりもいっぱいやることあるのに」

立ち上がり、脇の鞆を拾い上げた。指先でネクタイの結び目をいじった。

「まだやることあったの忘れてた」

なにかやることを無理やり探し出したかのようなようだった。

「羽飛、悪いけどまたあとでいいか」

「いきなりまた逃げるのかよ。ったくお前って奴は」

「違う、さっき、天羽を探してる途中だったんだ。ごめん、これ本当だから」

声の慌てぶりからするとどうやら本当らしい。額に手を当てて「まずい、どうしよう」とかなんとか呟いているのだから。

「じゃあお前なんでここにいた？」

「天羽いるかな、と思ってきたら、羽飛がいたから忘れた」

一気に爆笑。貴史が手を打って「でかした！」そう叫ぶと、
「見事に、すっからかんに、忘れてたんだ。なんでだろう」
これぞさっぱりした夕焼けの話題にふさわしい。
じゃあ、送り出さねば、意味がない。
「わかった立村、またあとでな」

手を振って見送った。あとで気付いた。立村のこの逃げのパターンに何度嵌っているのかと。

貴史はふと、窓を見下ろした。

三階校舎から見えるグラウンド。職員室脇の廊下向こうに自転車置き場。

——あれ、あいつら何やってるんだ？

幻を見たかと思った。目をこするなんてわざとらしいことはしないが、かっぴらいては見た。視線の先はグラウンド側の鉄棒の上。肩くらいの鉄棒に男女がふたり座って語らっているように見えたのだ。しかも、その組み合わせが妙に似合わない。

「天羽？」

男子が天羽なのは遠目でも分かる。大柄ながらも短髪を無理やり伸ばしているといった中途半端な髪型が目立っている。ブレザーなんか脱いで鞆の上にひっかけている。

しかしその隣には、深海魚……のような飛び出た目をした女子がひとり。

小柄、顔かたちが三階の教室から見えるわけがない。ないのだがなぜか、猫背で肩を強張らせている様子にはひとりしか名前が思い浮かばない。

「轟か？」

B組女子評議委員の轟琴音といえば、確か立村に修学旅行告白するため、男子評議委員たちの力を借り、四日目の自由時間をせしめたというツワモノだ。

——天羽と轟、なんでふたり仲良く、鉄棒の上で語り合ってるんだ？

——こういっちゃなんだが、天羽、お前の彼女は近江とかいう女子だろ？ 美里とやたらと仲いい、お笑いマニアの。

声出して笑っている二人の様子は、勝手に決め付けてよければ「カップル」以外の何ものでもない。そこへ駆け寄ってきた人物がひとりいる。立村であることは明白だった。

「あれ？」

思わず声が出た。なぜか自分でもわからなかった。

ただ、変だと感じた。

ひょいと飛び降りた轟が立村に寄り添う姿と同時に、天羽が鉄棒にまだひっかかったまま見下ろしている様子が、貴史の頭の中に掛かっている網に何かを残して過ぎていった。

——天羽、轟、あのふたり、なんなんだ？

すぐに忘れた。覚えておく必要なんてない。なんでそんなこと気にしたのか貴史にもわけがわからなかった。むしろ、美里がヒステリー起こす前に立村に、轟の件について釘を指すことを考えた方がよさそうだ。まったく立村ときたら、二年の杉本に拘るかと思えば、深海魚女子・轟琴

音にまでも愛想を振り撒いているときた。そんな暇があればもう少し美里の子守をすべきだと思うのだが、どうだろうか？

立村が頭を抱えている間にも、美里の「霧島ゆい退学反対運動」は日ごとに迫力を増していった。なんとなく眺めている貴史ですら、

「ちょっとお前、そこまでやったらまずいじゃあねえの？」

そう言いたくなるくらいの熱の入れようだった。

「はあ？ 貴史、なんでよ、なんでそんなこと言うわけ？」

「だってなあ、お前らがいくらがんばっても霧島のことにはもう無理だろ」

「無理じゃないわよ！ あんたこそほんっと、墮落したって感じよね」

「墮落だと？」

聞き捨てならない言葉に気色ばむが、美里にはへでもないらしい。

「そうよ、貴史。あんたがもしよ、すっごく大切な友だちがいたとしてよ、その子が学校の一方的な論理で転校させられちゃうってこと聞いたら、そりゃ怒るよね？」

「まあそりゃそうだけだよ」

美里は髪を雷みたいにぶんぶん振って訴えた。

「でしょ！ でしょ！ ひどいよそれって。だってゆいちゃんは、一生懸命勉強して、必死についていこうって努力してたんだよ！ 努力するってことは、誰にでもできることじゃないもん。そりゃ、ね。ゆいちゃんは他の子よりも成績がいまひとつだったかもしれないけど、いつだってわからないことは一生懸命聞いたり、教えてもらったり、クラスのこと一生懸命まとめたりして、そうやってきたの。なんもしないでいいかげんに過ごしてたわけじゃないの。なのに、なんで？ そういう努力を認めないで、学校側はこうやってすぐに見切りつけちゃうの？」

「じゃあ、美里」

問い掛けてみた。

「どうすりゃ、霧島がこの学校にいられるんだ？ うちの学校の授業についていけないから別の学校に行くってこともあるんだろが」

確か立村から聞いた話や、その他C組経由で流れてくる噂を総括するとそういうことになるらしい。

「そりゃ、成績のことばかり槍玉に挙げるけど、でも！ やっぱり！」

力強く握りこぶしをつくる美里。

「教師なんだから、先生としての仕事をすべきじゃない！」

「なんだそりゃ」

「勉強を一生懸命努力しているゆいちゃんのために、学校側が補習授業を行ったりすればいいのよ！ ちゃんとわかるように教えればいいじゃない！ そのくらい、すればいいじゃない！ そういうことをしないで、いらぬ子はぼいってするなんてうちの学校、ほんと、最低！」

全く、言っている意味、わからない。

立村が頭を悩ませるのも頷ける。

「あのな、美里。しつこいようだがな」

仕方なく貴史は繰り返す。

「お前が霧島のことをなんとかしたいってのはよっくわかるぞ。ああ、人間としちゃあそりゃあな。けどな、俺たちにはどうしようもねえことってのがいっぱいあるんだ。たとえば、こういっちゃんだがな」

言葉を切りつつ、いつぞや立村から聞かされた事情を混ぜて話す。

「霧島ががんばってきたのはとにかく、それを受け止めるだけの能力がねえってのも、事実だろ？」

言い返さない美里。その通りだとは、認めているわけだ。

「どんなに先生がたが特別授業しても、ついていけねえと判断したんだろ？」

返事がない。

「今、美里のしゃべったことを、とっくの昔に先生方はやってたってことじゃねえのか？ それこそ一年、二年の頃からな。けど、それも効果がなかったってのが現実である以上、しょうがねえだろ？ 学校だって、諦めが肝心ってとこなんだ」

「なによその冷たい言い方！ 貴史！ あんたってそんなに友だちがいない奴だった？ 最低よね」

「だからよく聞けよ。もしだ、霧島が無理して青大附高に上がったとするだろ。そうしたら、さらにわけわからねえ授業が増えるし、ただでさえついていけねえ霧島は完璧に落ちこぼれるだろ。けど高校の先生がそこまで面倒みる余裕なんてねえだろうし、さあさあどうするってことになるだろ？」

「それは、高校の先生が手助けすればいいことじゃない！ そんなこともわからないなんてあんたばっかみたい」

「お前、これ以上間抜け扱いするんだったら張っ倒すぞ。とにかくだ。どんなにお前が霧島の進学問題に首つっこんだってどうしようもねえよ。それだけじゃねえ、たぶん今度は霧島が傷つくだろ？ お前のやってることたらな、全校生徒に、霧島が成績どん底のまま生きてきたってことを証明することになるだろうしな。恥をかかせてるのは美里、お前の方だろが」

「そんなこと言わなくたって！」

そこまで言わないとわからないのが美里でもある。手加減はしない。叩きつける。

「いいかげん霧島に恥をかかせるのはやめろよな。女子ってほんと馬鹿だぞ。親友だ友だちだとかいいやがって、かえって相手が惨めになっちゃうようなこと、平気でするんだもんな。お前、常識ねえよ」

美里から返事はなかった。

頭をノートで一発、殴られただけだ。

「もう、貴史！ あんた立村くんに、そう言えってそそのかされたんじゃないの？」

「はあ？ なんで立村が出てくるんだ？」

口を耳まで裂けそうなほどでかく開き、美里が化け物顔で叫ぶ。

「毎日毎日、私の顔見るたび、ゆいちゃんのことを首突っ込むのやめろってしつこく言うどっか

の誰かがあんに、私をいいかげん黙らせろって命令したんじゃないかって言ってるの！」

「あいつに言われなくたってな、常識ある男子なら大抵同じ考えだろが」

事実だ、それは正しいのだ。自信をもって貴史は言い放つ。

「あのな、わかってるか？ 今、迷惑かけられて頭が痛いのは霧島だぞ？ 俺もよくわからねえけど、全校生徒に自分がいかにみじめだったらしいかをマイクで放送されてるようなもんじゃねえのか？ もうどうしようもねえんだったら、まずは残りの青大附中生活を楽しく過ごさせてやろうってことくらい考えねえのかよ。卒業しても青潟にいるんだったら露骨に縁が切れるわけじゃあねえだろ？」

「ほんとに立村くんと同じこと言うわよね、貴史」

握りこぶしが震えている。ノートどころの問題ではない。臨戦体制を取る。

「貴史、いい？ 私が言いたいのは、みんなで仲良く一緒に同じ高校へ進学したいの！ 誰も抜けることなくね。これ、誰だってそう思ってるよ。そりゃ嫌いな子とかもいるかもしれないけど、誰かが抜けてほしくないのよ。なのに、たったひとり、それもあの可南女子高校になんて行かされるなんて、よりもよって酷すぎるよね！」

——まあ、可南ならなあ、露骨に私立の最低ランク高校ではあるな。

つまり、そこしか推薦入学させられないくらいの学力レベルの持ち主、ということだ。

だが、こればかりはしょうがない。学校推薦は生徒がどうのこうのできる問題ではない。

貴史が言いたいのはひとつだけだ。

「美里、これはあくまでも俺の意見だぞ。立村のことは関係ねえぞ」

「さあてどうだか」

かちんとくる切り返しだが、言うべきことはきっちり言う。それが貴史のスタンスだ。

「お前が毎日、手当たり次第生徒玄関に入ってきたやつらに、『三Cの霧島さんを退学させないための署名をお願いします』とか声かけたりしてたら、そりゃみな怒るだろ。それまで霧島のことを知らねえ奴だっていたわけだしな。反対にお前は、評議である以上に評議委員長の彼女なんだから目立つのはしょうがねえだろ。霧島の隠しておきたい恥をなんで知らない奴らに宣伝したがるわけなんだ？ 署名なんて持ってってみろ。俺が霧島だったらお前をぶん殴るぞ。よくも恥をかかせやがってこの馬鹿女ってな」

「あんに殴られたってたかがしれてるわよ。悪いけどこの件にはもう、口出ししないでよ。これは、私と、小春ちゃんがふたりでやってることだから。あんに説教されるいわれなんてないの！」

——あのなあ、もう、終わりだぞこりゃ。

「勝手にしろ！」

貴史の言いたいことはすべて伝えた。それでもどうしようもないのなら、あとは彼氏の立村に改めてがんばってもらうしかない。署名を集めた大学ノートを片手に美里はまた、外へ飛び出していった。いったい今度はどこで、霧島の恥さらしを行うのだろう。

霧島の件については、やはり他所事だ。貴史にはさほど響く話題ではない。

美里の性格上、突っ走らざるを得ないところは理解する。

とことん走らせて衝突事故起こすまでたぶん、気付かないだろう、あの女子は。

立村から何度か細切れに事情を聞きだし、少し美里へお灸をすえた方がいいと貴史なりに判断し、こうやって心からの熱いアドバイスをしたわけなのだが、全く効果なし。

——そういう女子だから、あとはやっぱり彼氏の出番だろう。

本当は菱本先生の件について、どうやって立村に話を持っていくかを相談したかったのだが今日もお流れになってしまった。まだ結婚式の日取りも決まっていならしいと母から情報を貰っている。もう少し後でもいいようだが、

——やっぱりこれは美里と立村を、仲直りさせる機会作らねばな。

——それ以前にあいつら別れるぞ。

喧嘩するほど仲がいい、と言い切れるタイプかどうか、判断がつかない。修学旅行時に立村が恋人宣言をしたのはもう六月のこと。今はもう十一月間近。半年近くも立てば人間関係が崩壊するのだから早い。あと三ヶ月待てば、と考えるのが立村ならば、あと三ヶ月も待てない！と叫ぶのが美里だろう。

——みんなで一緒に高校に進学したいとか言うけどな。

霧島ゆいの件でいがみ合ううちに、今度は立村と美里が犬猿の仲になってしまったら元も子もない。とにかく早いうちに、一度三人で集まって語り合う機会が必要だろう。

「難波、待たせた。わりいわりい」

貴史は教室から降りていき、一階廊下へと走った。待ち合わせがあるのだが美里の関係でかなり長引いてしまった。待たせたことだろう。ま、お互い様だ。

中庭へ廊下窓から声をかけた。

三年B組の難波にとある「ぶつ」を渡す予定だった。

入学してから難波とは結構付き合いがある。評議委員だからというわけではなく、単純に「アイドル好き」の趣味が同じだったからだけのことだ。

貴史が子役アイドル鈴蘭優の熱狂的ファンであるのに対し、難波はアイドルグループ「日本少女宮」の清純派・つぐみちゃんファンと、互いに名乗りあった経緯もある。今思えばアイドル歌手の話で盛り上がるのはかなり周囲から見ると異様なところもあるし、鈴蘭優とつぐみちゃんとはタイプも違う。それでも、「アイドル」を追いかけても恥ずかしいわけではない、と堂々と振舞える土壌は青瀧大学附属にある。

「ずいぶん騒いでたな」

アイドルファンでありつつも「青大附中のシャーロック・ホームズ」を気取る理論派・難波は巨大な石の島に陣取ってあくびをまずした。

「聞こえたかよ」

「清坂がひたすらわめいてたな」

「いつものこと、あんなのにびびってらんねえよ」

貴史は隣の黒い石に腰掛けると、鞆から紙袋を取り出した。

「ほらよ！ マイハニーのつぐみちゃん特集、かなりでっかく載ってたぞ」

一ページまるまるの「つぐみちゃんのオフタイム」特集。愛読している月刊誌「朝のアイドル」12月号のクリスマス特集にしっかり掲載されているものだった。

「ああ、悪い」

言葉少なく難波は呟いた。受け取り、中をさらっと見た後すぐに鞆へ畳み込んだ。

「今回はポスターだ」

難波が取り出したのは、「プリティーシネマ」11月号の付録だった。

「うひゃあ、これは国宝級じゃねえか！」

風が強いが天気はさほど悪くない。雨も降っていない。六折りにしたカラーの分厚いポスターを広げると、そこには白いもこもこケープと帽子をかぶってかわいくピースサインをしている鈴蘭優の姿が映っていた。特大版付録、と聞いている。畳二分の一の大きさだ。迫力、あり。枕もとがいいかそれとも布団の下に挟むか、悩めるところだ。

「このポスターだけのために、買うわけにはいかねえからなあ」

「全くだ。同じ内容の本を二冊買うなんてばかげてるよな」

難波はにこりともせず舌打ちした。

「俺がこの雑誌を買ってる一番の理由は、単につぐみちゃんのポエムが毎回連載されているからだ。まったくこんな雑誌で五百円も取られるなんてな、ぼってるもいとこだ」

「二冊は買えねえなあ」

アイドルファン同士が手を結んだのには訳がある。

一ヶ月につき一冊が限度の芸能雑誌を、互いに交換し必要なところを切り抜いて渡すことにより、二冊分必要な情報を入手できるからだ。もちかけたのは貴史ではなく難波の方だ。こういう話を断るわけもなく、貴史はそれ以来つぐみちゃん情報と鈴蘭優情報を丹念にチェックしては切り抜いて渡している。未成年の知恵である。

用がすめば一段落。難波相手に評議委員事情を聞きだすのも手だろうが、貴史としてはあまり立ち入りたくない話題でもある。難波だけではなく天羽も更科にも共通することだが、男子評議連中は一応に美里の扱いに悩んでいる。貴史からしたら「どこが？」と言いたくなるのだが、どうやら立村との兼ね合いに理由があるらしい。評議委員長にのし上がってしまった奴の彼女として、ある程度気を遣わねばならない、その面倒くささがどっかにあるようだ。

「じゃ、俺、帰るわ。またな」

「待てよ羽飛」

難波はむすりとしたまま呼び止めた。

「なんだよ」

「知ってるか」

鼻の下を手の甲でこすり、ポケットティッシュから一枚引き出す。

「最近、清坂を新井林が狙ってるぞ」

——新井林？

一瞬ぴんとこなかった。

「お前、知らないのか？ 二年の新井林」

「やたらと俺にバスケ部に入れって誘いにくる奴だろ」

めんどくさいので適当にあしらっている。ただ評議委員を務めつつ現在バスケ部の実質キャプテンとして活躍しているという話は聞いていた。立村が下級生がらみのごたごたで一時期対立していたことがあるともちらと耳にしたが、いつもの貴史のくせで聞き流しっぱなし。

「バスケ部の二年だろ」

「じゃねえよ。立村卒業後の次期評議委員長だぞ」

「ああそっか。なんかもめてたな評議」

そのことについて難波は何も言わず、めがねをはずして布で拭き始めた。

「俺の観察する限り、新井林は何かあると清坂にすりよってっては、立村に文句を言っている。俺たち三年からしてこれはねえだろうってことを清坂が口走っても、新井林だけは味方発言びしばししてるし。いやなによりもだな」

思わせぶりに間を取った。尻の石がやたらと痛くなる。

「最近立村が俺たちと評議の関係で集まっている間、先に清坂たちが帰るだろ。その隙を狙って新井林が『一緒に帰りませんか』とかなんとか、話し掛けているのを俺は聞いた」

「おい、ちょっと待てよ。新井林といえば、噂だと」

「佐賀のことだろう、あいつの彼女」

即座に答えが返ってくるということは、もう公認の事実なのだろう。

ホームズ難波は勝ち誇った風に鼻の穴を膨らませた。

「あれは二股狙ってるな。今でこそ立村は新井林とうまくやっているように見えるが、それでもやはりあいつは立村を見下している嫌いがある。さらに言うなら、その彼女たる清坂については、なんであんな男を選んだんだと疑問を持っているようだ」

「あのな、二年だろ？ 年下なんか美里興味ねえぞ」

美里の好みは貴史が一番良く知っている。

顔は純日本のお坊ちゃま風の大人しい奴、成績がよければもちろんいいが拘らない。いわゆる王子さまタイプが美里の理想。悪いがスポーツ万能彫りの深い外国俳優風の男子には全く興味を示さない。外野がどうわめこうと、立村を選んだのは美里の趣味が百パーセント現れていたからに他ならない。

「あいつの好みはとにかく立村オンリーなの。そういう奴だぞ」

「でも別れたらどうする」

いきなり切り出され、息を飲む。鼻の吐息がかすかに白い。石がさらに冷たく痛く迫ってくる。

「新井林のことだ、手を出す時はそれなりに考えて立村にダメージたっぷり与えてその上で、やるだろうな。清坂もなんだかんだ言って一緒に帰ってるしな。ま、お手手はつないでいないようだがな」

そこまで言い切ると、難波は立ち上がり紙袋を改めて鞆に押し込んだ。かすかに紙の裂けた音がした。

「俺もこういっちゃなんだが、評議委員会を無事、元のメンバーで後期まで持っていきたいんだ。男子評議でそのことばかり話しているんだが、清坂が余計な茶々を入れだして邪魔をするもんだからまた空気がごたごたしているんだ。立村も、まあ、惚れた弱みで引導をなかなか渡せねえようだしな。とにかく、ここで新井林が混じってきてわけのわからねえことにはしてほしくないというわけなんだな。羽飛、ま、そういうわけだ」

一方的に訳のわからないことを喋りつづけたホームズ難波は、「じゃあな」の一言だけ残し中庭から出て行った。

——美里が別の男子と付き合うなんて、ありえねえよ、そんなこと。

デマもいいとこだ。美里がとことん立村に惚れぬいているこの現実を、評議連中は誰も気付いていないらしい。そりゃ、新井林とかいう後輩がまとわりついてくることはあるかもしれないが、彼女もちのスポーツマンなんて最初から美里にはお呼びではない。

立ち上がり、大切なポスターを二冊のノートでうまく挟み込み、そっと鞆奥に押し込んだ。

——それにしても、難波、最近つぐみちゃんに飽きたのか？

貴重なはずのつぐみちゃん特集切抜きを扱う指が、今日はずいぶん荒っぽかった。

まあ、そういう日もあるのだろう。男子たるもの、いつもアイドルのことばかり考えているほど暇じゃないのだから。

菱本先生ご婚約の件は、まずPTA関係者に伝わり次に貴史の母へ、そこから自動的に美里の母へと伝言されていった。だいたい想像はついていたが、すでに「おめでた」というのも情報としては把握済み。親同士でやたらと盛り上がっているらしい。

「それにしてもねえ、先生も若いわよねえ」

いつもの長話、母が清坂宅玄関でぺらぺらしゃべっているのが聞こえる。

「おいくつだったっけ、菱本先生って」

「たしか今年で三十あたりじゃあ」

「まあ、それじゃあ不思議ではないかもしれないけれど、でも、もうおめでたなんでしょう」

「そうなのよ、それなら早く結婚してあげればよかったのにねえ」

自分の母親だからなおのこと思うのだが、こうやって噂話している姿を見ていると、美里の母と区別がつかなくなる。しゃべり方が似ているといえればいいのだろうか。女子の相似系として美里を見ている貴史としては、なんだかうっとおしい気持ちになる。

——まったく、女子なんかに夢なんか持ってるなんて勘違いもいいとこだよなあ。

アイドル鈴蘭優を追っかけている自分が人のこと言えないのはよくよくわかっている。

それでもやっぱり、現実の「女子」という奴にはうんざりしてしまう。

——やっぱ、俺は、優ちゃんが一番だ！ ってことでまずかけるか。テープ。

鈴蘭優のLPレコードから即録音したカセットテープをラジカセに押し込み、貴史はイヤホンを片耳にはめた。これ以上女子連中の会話なんぞ聴きたくない。

——どっちにしろ、明日立村を捕まえるしかねえな。

なんだかんだいってのびのびになっていた立村との「菱本先生ご婚約」に関する対話。

もちろん普通に話はしているし、たいして記憶に残らない与太ネタばかり交わしているのが現状だ。女子の話なんかしなくたって一日は過ぎる。そんなくだらんことを語り合っている暇があれば、トランプ持ち出してスピード対決でもしていればいい。たまに金沢や水口が絡んで来て芸術談義に付き合わされたりもするが、それも聞き流していればそれなりに時間が過ぎる。美里の面倒なんて見ている暇なんて、実際はない。

ないのだが、しかし。

——あいつも相当、まいってるよな。

霧島ゆいと一緒に高校へ進学したいという願いが叶えられるはずもなく、集めた署名もC組担任殿池先生に涙ぐまれて受け取られたのみ。そこから何が起こったでもない。

C組から流れてくる情報によれば、かつてのアマゾネス評議委員霧島ゆいは、すっかり風船がしぼんだ状態で言葉少なに「薄幸の美少女」のまま過ごしているという。口の悪い一部男子連中によれば、

「あのまま三年間過ごしていれば、もっといいことあったってのになあ」

すすり泣いてばかりいる方が彼女らしいとの発言は、他方面からも数多く出ている。

「今、二年に霧島さんの弟いるじゃん、すごい美少年、お姉さんそっくりの」

「うんうん知ってる」

「すごい頭よくってさ、すごい美形なんだけど、でもね、なんか変なんだって」

「そうなんだあ、でも男子はやっぱり顔だよな」

——顔じゃねえだろ、ハートだろ。

クラスの女子たちが好き勝手に情報を披露しているが、貴史にはどうでもいいことだった。そんなこだわりのある相手でもないのに、自分と関係のない奴らの噂なんかして、どこが楽しいのか理解に苦しむ。だから女子ってのはうんざりなのだ。

——ま、そんな奴らにからまれちゃあ美里もたまったもんじゃねえよな。

次の日、月曜日の朝、貴史は美里を目で探してみた。

露骨に嫌がらせをされているわけではない。

むしろ美里の言動でとばっちりを受けているのは立村側ではないかと受け止めている

三年D組の女子たちが立村に対して意味もなく陰口攻撃を続けているのには貴史も腹が立つし、あまりにも不当な言い分にはこちらも受けて立ってやったりする。当の本人に宥められて黙るというのも、しゃくに障る。

「しょうがないんだ。俺が悪いから」

その一言ですべて自分で抑えてしまう立村の性格が嫌いではない。

ただ、ぱこんと頭をはたいてやらないと自分自身が落ち着かない。

結局は「羽飛だつてがまんしてるじゃん、立村に対してさ」の一言で終わってしまう。

美里に直接

「清坂さんって何にもできないくせに目立ちたがり屋だよな。殿池先生に談判したって霧島さんが青大附高に進学できるわけないのに。ばっかみたい」

とか

「もともと清坂さんって変な人好きだよな。たとえばほら、立村なんかと今だに付き合ってるんだもんね」

などと言えないものだから、

「清坂さんに好かれてるからっていばるんじゃないよ、そこの昼行灯」

などと事あるごとにつっこまれる。今回だってそうだ。

「立村がしっかりしてないから、霧島さんを傷つけちゃったんじゃないのよ。まったく、男子なんだし、あんたそれ以上に評議委員長でしょ？ もっとしっかりしなさいよ！」

などと因縁つけられるというわけだ。

——まあな、美里は自業自得だししゃあねえけど、せめて立村がもっと宥めるなりちゅーするなりすれば、あいつだつてもっと落ち着くんじゃねえのか？

あえて聞かないでいるが、美里が立村とすれ違っている様子は貴史も見取れる。

そろそろ、時か。

——じゃあねえな。今日の放課後はあいつをとっつかまえて、三者面談でもやっか。

貴史という教師役……もとい、仲裁役がいれば立村も美里もそれなりに言いたいことが言えるだろう。評議委員同士という枠なく話し込めるはずだ。

美里もそうして欲しがっているはずだ。

「なあ、立村」

貴史は教室に戻ってきた立村に声をかけた。

鞆は机に置きっぱなしだったが、最近は授業開始ぎりぎり一分前まで戻ってこないことが多い。何してるんだか。

「今日の放課後、お前、暇？」

「評議委員会があってその後なら」

「悪いんだが、さしいってお前と美里に相談してえことあるんだわ」

首をかしげるように立村は美里を見やった。貴史の見間違いでなければ、今朝はまだふたりとも話をしていないはずだ。おかつ髪をふるふるさせながら美里が古川こずえ、奈良岡彰子となにやら内緒話をしているのが見えた。

「なんだろうそれ」

「お前さんが大嫌いな奴のことなんで、ちょいとな」

「あいつかよ」

担任教師を「あいつ」と言い切ってしまうところに立村の本心が伺われる。

「ここだけの話だがな」

耳元で囁く。かすかに香水くさい匂いがする。十五歳の男子とは思えない匂いだ。

「菱本先生、嫁もらうんだと」

さすがに立村も面食らったようだ。顔を一度しかめて、

「羽飛もう一度言ってくれ」

小声で問いただした。

「結婚式は来月、なぜなら嫁さん腹ぼっけ。ガキが生まれる前に大至急式を挙げねえと腹から出てきちゃうってこと。以上、うちの母ちゃん通信より得た情報だ。感謝しろよ」

ここまで伝えたところで新郎予定者、菱本先生が教室に入ってきたので中断せざるを得なかった。立村の返事はなかった。ぼんやり座ったまま、目を宙に泳がせていた。

「おい、立村どうした？ 号令かけないのか？」

促されるまで立村は「起立、礼、着席」をすっかり忘れていたようだった。

天敵に先を越されたショック、ではないだろうが。

——まあ、それなりにがつんと来たんだろうなあ。

号令をかけ終えて後、立村は貴史に向かい、ひとつこくと頷いて見せた。

つまり、放課後、OK、そういうことだ。

次の休み時間を待って美里にも伝えておいた。

「あ、そう、わかった。いって言った？」

立村がOKしたのならば美里にも異存はない、というところだろう。

古川につっこまれるのだけは勘弁してほしいと願っていた。

「大丈夫、今日はこずえ、これから図書館当番だって言ってたから」

美里に確認した。口が堅い女子とは思っていないが、それでも貴史の思惑くらいは理解しているはずだ。

「お母さんから聞いたけど、来月が結婚式なんだよね。早いよね」

事情については、とりあえず綺麗な部分だけ聞かされているようだ。

菱本先生のいかにも「男」たる逃げの部分は伝わっていないようだ。

放課後、他の連中が教室からいなくなるまでまずは廊下の階段踊り場まで下りていった。二階の二年教室が並ぶ場所よりもまだ秘密が保たれそうな場所だった。

「急がねえとまずいってことだろ」

「生まれちゃったら大変だもんね」

母から聞いた話だと、結婚そのものが決まったのは九月の初旬だったらしい。その頃に彼女の妊娠が判明し、即、菱本先生はプロポーズしたという。どこまで本当かはわからないが、貴史がこずえと一緒に見た修羅場の延長上で決まったと判断してよさそうだ。

ただ、隠し通してきたということに、菱本先生のなんとも言えないやりきれなさを感じたりもする。その点、母ふたりは全く気付いていなかったらしい。とにかくおめでたいこととだけ、幸せな発想で片づけていた。

たぶん、美里もそうだろう。

こずえが懸念していた通り、美里は菱本先生の結婚に関してきれいで可愛いものだけで埋め尽くしたいようだ。簡単なことだ。事実を伝えなければいいわけだから。

——まずはだ、来月の結婚式に誰が出るかってことだわな。

「うーんとね、先生が結婚する場合、クラスからは評議委員が出るのが普通らしいよ」

「お前どうしてそんなこと知ってるんだ？」

「うん、常識だよ、先輩たちが話してたもん」

どうも美里は、菱本先生に彼女がいると聞いた段階でいろいろと情報を集めていたらしい。

「だからたぶん、私と立村くんが出ることになるよね」

「あいつが、そんなの、出たがると思うか？」

「思わない、絶対、ないよね」

首を髪の毛乱すほど振った。

「立村くんはどんなことがあっても休むよ。仮病使うのあの人が平気だもん」

「まあ、あすこまで憎まなくてもなあ」

時計を覗きこんだ。ひさびさに天気もよくて汗ばんで来ている。

「それだったら貴史が代わりに出ればいいよ。私、それの方がいいと思う」

「はあ、俺がかよ。そりゃまずいだろ」

美里はまた、小ぶりに頭を揺らしてじっと見た。

「まずくないよ。立村くんがまた何かしでかさないうちに予防するのも、評議委員の義務だもん」

酷い言い方だ。これでもこいつは立村の彼女なのだ。男子としては少々辛い。

「美里、お前なあ、立村聞いたら泣くぞ。否定しねえけど」

「間違っていないでしょ！ 立村くん、絶対に自分がいやなことはしない人だもん。納得しないことは何でもしないし、好きじゃない人のことは全然やさしくしないし、反対に大好きな人のことはめっちゃくちゃ命がけで守ろうとするし」

すごいのろけ発言だった。笑ってしまう。

「なによ、貴史、なんで笑うのよ！」

「お前守られてるじゃねえの」

「そんなことないよ！ 私言いたいことって違うの！ 立村くんは何が何でも自分のしたいことしかしない人だって、わかってるじゃない！ 大嫌いな菱本先生の結婚式なんて、たぶん黒ネクタイ用意して出るんじゃないかって気するよ。わざとらしくお祝い袋にお花料とか書きそうじゃない！」

「そりゃあ常識なしって言ってるもおなじだろが！」

美里の弾丸攻撃、死ぬほど笑える。実際立村が「喪」に服する格好で現れそうな気がしてしまうから怖い。三年近く立村の性格を観察していると、美里の発言がまんざら嘘でもないと思えてしまう。

「でしょ！ 笑い事じゃないって。だから、そのことなんだけどね、立村くんじゃなくって、貴史が出るように話を持ってった方がいいと思う。私ね、そのこと話してみようかって思うんだ」

「俺評議じゃねえけどな」

「そんなの関係ないじゃない。みんな貴史が出れば納得するよ。菱本先生だって喜ぶと思うよ。仏頂面した立村くんが結婚式のスピーチなんてやれなんて言われたら最後、何を言い出すしかわかんないよ。立村くんって、そういう人でしょ？」

「まあそうだな。否定できねえな。けどあいつだってもしかしたら出たいかもしれねえぞ」

「大丈夫よ。たぶん立村くん、十一月の始めは生徒会改選で藤沖くんたちの手伝いしてて忙しいはずだから。生徒会の関係ですごく忙しいからって、今日だって朝早くきて天羽くんたちとしゃべってて、さっきもまた男子評議たちだけで相談してるの。私たち女子評議が一生懸命ゆいちゃんのこと」

「美里、黙れ、もういいかげんやめろ」

びしりと制した。美里が口を閉じた。

「これ以上お前が霧島のことでごたごたやらかしたら、立村から縁切られるぞ。あいつそのくらい平気でやらかす奴だってわかってるだろ。今お前が言ったこと全部思い出してみろ」

口を尖らせ、目をそらせ、襟元のリボンを片手で弄っている。

「さしあたりお前、もうちょっと別のことで立村に尽くせよ。お前がばたばた騒いでいるから、なんかこう、クラスの連中にぎゃあぎゃあ言われるんだぞ」

「そんなの私、気にならないもん。あんたにはわかんないでしょ」

堂々めぐりになりそうなので察してやめる。廊下を上り下りする人影が減ったようだ。今、階段二階踊り場には誰もいない。

「もうそろそろ教室に戻ろうよ。立村くん、来てるかもしれないし」

「そだな」

窓辺の太陽が右の首筋をちりちり焼いた。秋の陽射しは夏の太陽に近い。日焼けしそうだった。

教室でだべる連中は面子が決まっていて、三年D組の場合で言えば古川こずえがいる時に限り他のうるさい女子連中が固まっていることが多い。話が合うのだろう。反対に美里だけの時は、一対一でこずえがくっついている。たまに奈良岡彰子も混じっているが保健室の天使だけに即、誰かかしらが呼び出しをかけてくる。となると、古川こずえが図書館に捕まった状態の教室は、確実にからっぽだろう。

「変な理屈だよな」

「俺なりの判断だ」

扉を開け、帰りの掃除が終わったばかりの教室に入る。鞆と体操着を机の上に載せ、ふたりそれぞれの机に座った。椅子なんてかったるくて腰掛けてられない。

美里が足をぶらつかせながら大きく溜息を吐いた。

「ねえねえ、貴史、菱本先生の結婚式、どんな風にするのかな」

「さあ、なあ」

言葉を濁した。裏事情を飲み込んでいる貴史にとって、とてもだが菱本先生の満面の笑みは想像できなかった。ふだんの先生が相変わらず熱血最前線を突っ走っているだけになおのことだった。もしあれが演技だとしたら.....相当疲れるはずだ。

「やっぱりドレスかなあ」

「知るかよ」

「お嫁さんどんな人かなあ」

「直接聞けよ」

真実を隠すのはかなりしんどい。ポケットからミントガムを取り出した。規律委員に見つかったら即没収だがそんな野暮なことは言っこなしだ。美里に呼びかけた。

「おーい、ガムやるぞ」

「ちょうだい」

ブーメラン風に投げた。うまく美里も片手で受け止めた。毎度のことだ慣れている。

「ブーケトス、やるかなあ」

「お前なあ、なんでそんなことまで考えてるんだ？」

「だってブーケトスって、次にお嫁さんになる人へ投げるんだよ」

結婚式の細かなイベントなんて知ったことじゃない。第一、ブーケとはなんぞや？

「そんなことも知らないの？ ばっかみたい」

美里は勝ち誇った風に笑った。

「結婚式でね、次に結婚する人にブーケを投げるの。それをみんなで取り合うの」
「なんだかおぞましい光景が眼に浮かんだ。雀にパンくず投げるようなもんじゃないか。」
「女子ってのはそんなことで盛り上がるのかよ」
「だって、花、受け取れたら幸せな結婚できるんだよ！」
「結婚なんてどこがいいんだよ。俺はやだね」

美里にしても、また姉にしても女子というのはどうして結婚に憧れるのだろう。

正直、貴史は菱本先生の本音に共感したい。

あんな、「おなかの子とクラスの子とどっちが大事なの！」とか言うような押しの強い女子と付き合うのもいやだし、ましてや一緒に暮らすなんて地獄へいらっしやいの世界に思える。でも、女子にとってそれは幸せの究極点らしい。

「あんたには鈴蘭優しかいないからどうでもいいけど」

「お前には立村しかいねえからどうでもいいがな」

美里はまた机に座り直した。返事をしなかった。

「けど、本当に好きな子には違うよ。ほんと、そう思うよ」

足をぶらぶらさせながら、少し考え呟いた。

「ほら、たとえば、二年の新井林くん、いるじゃない？」

——難波が言っていたあいつか。

美里の方から振ってくるとは思わなかった。最近美里と一緒にいちゃついているらしいという二年の男子評議で、一時期は立村と評議委員長の座を奪い合ったという因縁の相手だ。貴史には何度か「羽飛先輩、お願いします、青大附中のバスケ部を守るためにぜひ、協力してください！」といった趣旨で話を持ちかけられていたが、全く興味がないので無視していた。

「バスケ部のあいつな。最近美里、あいつと話してるのかよ」

知らん顔で聞いてみた。やはり美里は大慌てで首やら手やらばたばた動かして全否定した。

「当たり前よ。評議の後輩だよ？ 話しちゃいけない？ 変なこと、考えてない？ 貴史、知らないかもしれないけど、新井林くんにはすっごく有名な公認の彼女がいるんだよ。話したら長くなるから言わないけど」

「らしいな。知ったことじゃねえけどよ。美里、そんなことで立村に妬かせようとしてるんだったら、そりゃあ女の浅知恵だぞ」

「何勘違いしてるのよ！ 私がそんなことする分けないじゃない！」

「とある情報筋から流れてきたぞ。最近美里は二年の新井林と一緒に帰ってるってな」

きょとんとした後、今度は机の端を叩きながら身体を揺らした。「違う」その意味だけだ。

「あのねえ、私がそんなことできると思う？ 立村くんが私に妬いたりするわけ絶対ないの！ 私が新井林くんと話してるのは、女子の気持ちとかそういうのについて、直接彼女には聞けないことについて、相談にのってあげてるだけ。ほんっと、それだけなんだから！」

「で、立村はなんて言ってるんだ？」

さらに言葉を重ねた。

「だから！ 立村くんが私にそこまで興味持ってるわけないの」

美里の返事はどこかずれていた。

「それより貴史、どうせだったら結婚式の後に、クラスのお祝いパーティーをやろうよ！ それだったら立村くんだって黙って参加するし。ね、貴史、計画立てようよ！」

——立村の奴、妬こうって気、ねえのか？

難波から見て目に余る行為だったのだろうが、美里本人は全く何も考えていないようだし、浮気の心配はなさそうだった。今日は無理にしても立村には、

「おい、もう少し、やきもち妬いたほうがいいんじゃないか？ 新井林ったら公私共にお前の超ライバルだろが？ そいつに美里とられちゃったらどうするんだ？」

くらい言ってやってもよさそうだ。

とりあえずは、美里の気持ちが立村から離れているのではないということが確認できたわけだから。ガムをかみながら貴史は大きく息を吐ききった。

「そうだな、じゃあ先走ってまずは計画立ててくか！」

大きくこっくり頷いた美里に、貴史は思いっきり両手を広げて見せた。

「まずはでっかいポスターで『菱本先生ご結婚&おめでたおめでとうございます！』の準備だな。金沢あたりに手伝わせて超・超・ゴージャスなもん作るか！」

「うん、それいい！ 今から準備しなくちゃね！」

ひょこっと机から降り、美里は貴史の座っている机に乗っかり座った。尻と尻が直角に当たる場所で美里は、肩だけぶつけて貴史の顔を覗き込んできた。

「で、貴史、どんな風にする？」

まだ立村の来る気配はなかった。

立村が教室に到着したのはそれから十五分ほど後だった。

すでに日はだいぶ斜めに傾ぎ、室内の温みもまただんだん消えてゆくようだった。

美里が側で膝に鞆を乗せた時に身体を震わせていたのを貴史は見ている。

「立村くん！」

つい十秒前まで貴史とテレビ番組の話で盛り上がっていたくせに、彼氏を見つけた瞬間声が変わるのだから現金なものだ。手を挙げて何度も呼び込むような仕種をした。

「遅い！ もう、早くおいでよ」

貴史の隣にちょこんと座り、いかにも待ちくたびれたポーズをとっている。

そんなこと知ったことじゃないとばかり、立村はいつものポーカーフェイスで答える。

「悪い、評議の連中に断ってきた」

「何を？」

「いや、今日の話し合い出られないってさ」

「ふうん、でもこっちだって三D評議専用のの仕事だよ。ね、貴史」

なるほど、さすがに今日は貴史たちを優先したというわけだ。

——相当奴も菱本先生ご婚約でショック受けてるよな。

笑いたくなる。こういうところがやっぱり立村は単純な奴だと思うのだ。

さて、これから三人喋って行くうちに何が飛び出すだろう。

美里の前で立村がどんな様子を見せるのか、どんなへまをやらかすのか、それを観察するのが貴史としてはたまらなく面白い。

「あたりまえだろうが。な、立村、早く美里を黙らせてくれよな。さっきからずっと俺、こいつのエキサイティングトークに付き合わされててな、半分喉が死にそう」

「悪かった、それでは始めるか」

立村は前列の普段から使用している席に座った。さすがに貴史たちもふたりで机の上にちんまり納まっているわけにもいかず、適当に離れて座り直した。美里はこずえの席だった。あまり考えずに貴史も座ったが、よく見るとそこは南雲の席じゃないか。しくじった。

「さて、本日のお題だが、立村よくわかってるよな」

黙って頷いていた。美里がちらっと立村をみやり、すぐに貴史へと満面の笑顔を向けた。

「ね、すごいことだよな！ 菱本先生」

「それにしてもなあ、俺たち、年取ったもんだよなあ」

しみじみと呟きつつ、貴史は意識してテンション高めに言い放った。

「あの単純熱血教師の菱本ティーチャーにも、春が来たってわけか」

「なんだか信じられないよねえ、貴史、想像できる？ 菱本先生の結婚式の格好！」

「緊張してちんちんだろうなあ、笑えるぜ。嫁さんのドレスの裾踏んで思いっきりこけるかもしんねえぞ」

「まあね。それありがち」

美里が拘っているのはやはり衣裳のことだった。はっきり言ってウィディングドレスのどこがいいのか貴史には理解不能だが、おしゃれ命の美里にはやはり興味津々なのだろう。

——俺からすると、そこで思いっきり裾踏んでつぶしてこけて大拍手の菱本先生を見たいがな。

「でも踏んだらだめよ！ だってお嫁さん、あれなんでしょう、ほら、あれ」

「こけたら、まずいのか？ 赤ん坊」

「おなかにいるんだよ！ まずいに決まってるじゃない！ おなか冷やしちゃだめだとか、いっぱい布巻いたりとか、いろいろするんだもん。赤ちゃんが死んじゃったら大変だよ。菱本先生、ちゃんと気づけて歩いてくれるのかな」

やはり、腹の中に赤ん坊がいるというのは、女子の美里にとって複雑なものがあるようだ。全く貴史には予想つかないことだが、見知らぬ菱本先生の婚約者にそこまで思える美里の性格には恐れ入る。まあ貴史からしたら修羅場の彼女だ、堂々と胸はって「私の守は誰にも渡さないわ！

だってちゃんここに証拠があるんだもの」くらい言い放ちそうな気がする。

立村が貴史と美里を交互に見て、小さくひとつ溜息を吐いた。

いかにも、うんざりといった風にだ。

美里の求めている反応でないことだけははっきりしている。

「立村くんどうしたの」

かすかに笑っている。ばかにしているようにも見える。

「いや、なんでもない」

あっさり流され、美里も二の句が告げない。立村の逃げ口上への対処方法が今だに見つからないようだ。恋人同士でこういうのはなんとかしろ。貴史はそこまで過保護じゃない。

「あっそ。それでね貴史、式はいつだって言ってたっけ」

「噂によると、来月の頭だとよ」

「えー、それって早すぎるよ！ だって、結婚が決まったのって、先月なんでしょ？」

確かに早すぎる。急がなくてはならない事情があるというだけのことだ。

「早くしねえと赤ん坊が腹から出てきちゃうだろ」

「それはそうだけど、え、だとすると、お嫁さん、おなかがぐんと出たドレス着なくちゃいけないのね。かわいそう」

こういう話で時間をつぶすために今日、立村を呼び出したわけではない。

何か考えているようでもあり、単につまらないだけなのかもしれないが、ここでまずはひとつ、きっかけをつくってみよう。

「そいじゃな、まずは我が三年D組の熱血ティーチャーに生徒ができることってなんだろうな」

「うん、そうだよ。やっぱりね、あれじゃない？」

貴史の思惑、即座に美里は受け取ってくれた。さすが幼なじみ、伊達じゃない。

「二年半お世話になった私たち三年D組一同として、何か菱本先生にプレゼントしたくなるのは当然じゃなあい？ 立村くん」

——そうだよ、そうこなくちゃ嘘だろ、美里。

一テンポ遅れて立村が目をぱちくりしながら謝った。

「ごめん、ぼおっとしてた」

「しっかり聞いてよね」

美里の髪の毛をひょいと摘んで黙らせた。これもいつも通りのお約束。よく見ると美里の髪の毛には細くお下げが編み込まれている。ひっぱるにはちょうどよい。

「怒るな怒るな。なあ立村、美里の言いたいことはつまりだな。三年D組一同でひとつ、『祝・菱本先生ご婚約&ご出産』のパーティーをやろうじゃねえかってことなんだ。体よく言えば、早めのお楽しみ会ともいうな」

「そうよ。ほら、ロングホームルームの時間あるじゃなあい？ いつも私たちが司会やるじゃなあい？ 議題は私たちふたりで決められるでしょう。菱本先生には内緒でね、議題を先生の知らないうちに決めましたってことで、教室に飾り付けして、一時間パーティーにしちゃうの。菱本先生が道德授業するつもりで教室に入ってきたら、もうパーティー用の飾り付けされていて、黒板にはいろんな色のチョークで『菱本先生、ご結婚おめでとうございます！』って書き込んであって。で、みんなで結婚のお祝いの歌を歌ったり、誰かに漫才やってもらったり、とにかくのりのりで盛り上がるの！ どうか、これ、きっと菱本先生、喜んでくれると思うんだけどなあ。立村くん、どうか」

身振り、手振り、ぱっと広げて美里が思う存分イメージを広げてみせた。

貴史ともこのことについては少しだけ企画を立ててみたけれども、美里のように具体的な予定を組むようなことはしていなかった。やはりこのあたり、評議委員として場慣れしている美里の本領発揮というところだろうか。目を輝かせて語る美里。いまひとつ乗ってこない立村に全力で訴えている。

立村は暫く黙って考えている様子だった。おもむろに答えた。

「清坂氏、ごめん、俺はやはり賛成できない」

——おい、立村、またごねるのかよ、たたくてめえはよ。

「その理由を述べよ、となるわな、立村」

貴史と一緒に美里が、膝に手を置いて詰め寄らんばかりの顔でもって視線をはずさずに見た。

一呼吸置いて立村は冷ややかに言い放った。

「まず、あの担任の結婚についてだけど、しょせんあれはプライベートのことだろう」

身じろぎせずにきっぱりと。

「冠婚葬祭は俺たち生徒にはそれほど関係ないと思うんだ」

さらに続けようとしたところを美里に遮られた。

「ちょっと待ってよ、この前南雲くんのおばあちゃんが亡くなった時、お葬式に行かなくちゃって言ったの立村くんじゃない」

もったもだ。これは美里の言い分が正しい。思わず同意を表し頷いた。それに気づいたのか立村は美里から視線を逸らし、貴史に向けて話を進め出した。

「生徒同士のことだったら、それぞれ付き合いがあることだし、それはそれでいいと思うんだ。先生たちについても、不幸については同じ考えでいいと思う。けど、今回の場合は結婚決まったのがいきなりだし、来月結婚式なんてまず普通、ないことだと思うんだ。そうせざるを得ない状況だったというのがあるのはわかっているけれどさ」

「結婚と葬式と、どうして違うんだあ？ 立村、説得力ねえぞ」

「俺も噂でしか聞いていないからなんとも言えないけど」

珍しく言葉を切らずに立村は続けた。他人事のような、いやまさしくその通りなのだが。

「結婚相手には子どもがいるんだよな」

どこかの大学教授みたいに……大学教授と話なんてしたことないが……偉そうに言葉にする。美里がそのものズバリを言い切る。

「そうよ、いわゆる『できちゃった結婚』よ」

「はっきり言って、嬉しいことかって俺は疑問に思うんだ」

友だち相手でなければかなりむかつくような、上から人を見下ろすような言い方が鼻につく。立村には内面はさておいて第三者にそう思わせるような口の利き方をすることがたまにある。

「疑問？ そりゃあ、順番間違えたってのはあるかもしれねえけどさ、菱本ティーチャー、あれでも来年は三十路を迎えるいい年の大人だろが。きっちりと落とし前をつけて、愛するわがハニーとベイベーを守る決意をする、なんてカッコいいじゃねえか」

「そうせざるを得なかったという、可能性だってあるだろう」

「そりゃ、たとえばな、本条先輩とかが、同級生を妊娠させたとか、そういう話だったらご愁傷様とか言うぜ。だけど今回は、教師だぞ、大人だぞ。まっとうな人間だぞ」

いきなり目つきが変わった。今度は貴史も自分が地雷を踏んだことにすぐ気付いている。思わず本条先輩を例に出してしまったし悪意なんてさらさらないのだが、

——やべえな。立村にとって本条先輩は神さまだもんな。

慌てて修正に勤しんだ。いったん立村がへそを曲げてしまったら、そう簡単にご機嫌は直らない。美里とどっこいどっこいだ。

「まあなあ、立村、お前と菱本先生、最悪の相性だもんな」

「相性なんてもんじゃない、あいつの考え方が根本的に許せないだけだ」

——やれやれ。

一安心したのもつかの間、今度は美里が余計な茶々を入れてきてしまった。

さっきから美里が不満そうに指先をもぞもぞさせているのに気付いてはいたのだ。

これも貴史からしたら決して他意はない。そうしたほうがいいかなとなんとなく思っただけなんだが、どうも女子にはむかつくらしい。

「立村くん、ちょっといい？ 私、やっぱりそれっておかしいと思うよ」

椅子を鳴らして立ち上がり、立村を上から正視した。

——何お前、ちょっとよくなんかねえぞ。まったく今度また俺が後始末するのかよ！

立村は何も感じていない顔でもって美里に向き直った。受けて立つ気持ちはあるようだ。

「いつも思っていたんだけど、立村くん、菱本先生のことを色眼鏡で見すぎだと思う。立村くん、菱本先生のことを嫌いだからいつも、何かあると菱本先生は悪いんだとか、いやなこと考えてそうしているんだとか、勝手に決め付けるくせがあると思うんだ」

「実際そういうことが多いんだからしょうがないだろう」

奴も早く切り上げたいんだろう。そっぽを向こうとしている。即座に美里は打ち返した

「立村くん、そうやって目をそらすの、失礼だと思うよ」

「ごめん、悪かった」

溜息をかすかについて、立村はわざとらしくゆっくり美里に向かい合った。

美里もきちんと対称になるような格好で座り直した。

ゆっくり、噛んで含めるように言い聞かせようとする。

「あのね、菱本先生の結婚のことだけど、もちろん難しいことはわかんないよ。そうだよ、こんなに早く結婚式が決まっちゃうって珍しいってうちの母さんたちも言ってたよ。たぶん、赤ちゃんが生まれてしまう前にしたいんだねって」

「かえてこの時期に式を挙げる方が大変だってこと、考えないのかな」

答えた瞬間立村が口を拭うそぶりをした。

「きっとね、お嫁さん、どうしてもウエディングドレス着たいんじゃないかなって思うんだ。だから菱本先生も、その夢叶えてあげたくて急いで式を挙げる決意したんじゃないかなあ。わかんないけど、菱本先生の性格だったら考えられると思うんだ。私も貴史も、立村くんと違って菱本先生のこと好きだから、そう考えてるのよ。ほら、違うでしょ。好き嫌いだけで、こんなに事実って捉え方違っちゃうんだよ」

「俺はただ、知っている事実をそのまま解釈しただけだって」

「違うよ、すっごく立村くん、物の見方が偏ってると思う。ずっと前からそう思ってたんだ」

あれこれやりあっていく間にもどんどん時間は過ぎていく。教室はだんだん温度が下がっていく。立村と美里は大してきにも止めていないんだろうが、しばらく黙っている貴史だけだんだん首筋、頬、耳、と少しずつ冷えていくのを感じている。

——だ一か一ら、結論から言っちゃえよ。美里、立村に言いたいことあるんだったらもっと別の時選べよな。とりあえず俺たちとしては菱本先生に対してどうすかってことだけだろが。

それでも美里の言いたい放題にさせているのは、まんざらその言葉が嘘と言い切れないからでもある。そりゃあ、菱本先生の彼女に関する事情を知っているのだから美里の勘違いを否定できない後ろめたさはある。できちゃった結婚で実はしかたなく押し切られているんじゃないかという読みもある。でも、美里が言う通り、

「好き嫌いだけで事実はこんなに違う」

のも確かだと思う。

立村は菱本先生の件に限らず、公正な目で物事を判断することが、意外と少ない。

知り合った最初の頃は沈着冷静な性格と貴史も勘違いしていたが、とにかく自分のいったん信じたことは絶対に曲げようとしない。

嫌われ者の下級生・杉本梨南をとことんかばい続けることも、いったん付き合った美里に対してはとことん尽くす覚悟を持っていることも……修学旅行の件でよく理解した……、よい場面に出ることもある。信念を持っているのはよいことかもしれないが、菱本先生に対してのみそれは何か間違っていると貴史は断言したい。

——たまたま名前読み間違えただけで恨むってのはなんか違うだろ、おい。

美里の意見は恐ろしく貴史の考えとぴたっと合っていた。

今回に限り、美里の肩を持つかもしれない。そう思った。

「本当のことは私もわかんないよ。だけど、立村くんの考えは菱本先生のことを侮辱しすぎてると思うんだ。もちろんいろいろあったからしょうがないよね。でも、菱本先生のすることをなんでもかんでも悪いって決め付けるのはよくないよ」

「決め付けてなんかないさ。俺が言いたいのはそんなことじゃない。つまり」

「つまり、何？」

貴史は美里の隣に立った。

両手を腰に当てた。

「俺もその辺、聞きたいとこだな、立村、言いたいことあるなら言ってみろ」

四つの眼で見下ろした。

立村は暫く考え込んでいたが、顎あたりで気合を入れるように頷き貴史を見上げた。

美里に対してはやはりお留守だった。

「うちの恥さらすようだけど、俺の両親もいわゆる、順番を間違えた結婚だったんだ」

美里と顔を見合わせ、思わずつぶやいた。

「初耳」

——なるほどな。つまり、菱本先生を父親に持つ子の立場ってことだな。

立村の母には何度か顔を合わせたことがあるが、同じ歳の奴の「母親」にしてはあまりにも若すぎると感じていた。化粧が濃すぎることを除けば、仮に立村の姉貴として紹介されても違和感を感じなかったんじゃないかと思う。

父親にはまだ会ったことがないのでそのバランスがどうかはわからない。

母親年齢マイナス十五歳、として計算すると、下手したら恐ろしい結果が出てくるかもしれない。貴史はまず頭で計算してみた。結婚は確か男子十八歳から可能はず。ということは……

。

ぞっとする。話を進めて時間稼ぎする。

「それで立村、お前が先に生まれたとか」

「そう、しかも式を挙げたのは九月十三日だった」

今度は自分の話をしているくせに、また他人事のような口ぶり。腹は立たない。そりゃ、照れるだろう。恥ずかしいだろう。

「もちろんうちの担任と同じ状況だということは、わかるよな」

わかる、わかる。頷いた。また美里がくちばしを挟んできた。

「立村くんの誕生日、九月十四日だったよね？」

「ということは、どういうことか、大体想像つくだろ」

「.....その場で、生まれたとか」

思わず手で美里のお下げ髪に手を伸ばすところだった。立村の他人行儀な口調に押さえ込まれた。

「一応、生まれたのは病院だった。母子手帳に病院名書いてあった」

「でも、そんなぎりぎりになんで結婚式なんて挙げたの？」

「本当は十一月が出産予定日だったという話だけど、式の影響で早まったんだって話なんだ。俺もそんな昔のこと覚えているわけないからわからないけどさ。とにかく、式を無理やり挙げたのが影響したのは確かだよな」

「そうなんだ.....」

「うちの場合は、いろいろあって親がふたりとも二十歳そこそこで結婚せざるを得なかったし、あの担任と事情が違うと思う。だけど、やはり、本当はこういう形でやりたくなかったんじゃないかなって気がしてならないんだ」

立村が美里から貴史に顔を向けた。結婚、恥ずかしい話だろう、この辺は大目に見てやる。話せ、話せ。

「もしかしたら俺の親も、そんなに早く結婚したくなかったんじゃないかって思うしさ」

——菱本先生もたぶん、結婚したくねえだろうな。そうだ、そうだ。

「俺が生まれてなかったらもっと違う人生送っていたんじゃないかって思うこともあるしさ、本当は産みたくなかったんじゃないかなって思うことも多々あるしさ」

また立村のいじけ癖が出てきた。どうもこいつの嫌なところは何かあると、「どうせ俺は馬鹿だから」「俺は何もできないから」最近では「俺は足が遅いから リレーでは迷惑かけるから」と拗ねるところだろうか。女子でかわゆい子ならまだ妥協できなくもないのだが、いい年こいた男子に同じことされても張っ倒すしか方法が見つからない。

言い分はよくわかった。立村がなぜ菱本先生に対してむかついているのか、それが私怨以外のところからきているのかも理解した。さて、次だ。

「立村、お前の出生秘密はよおくわかった。で、何を言いたい？」

いじけ虫成分を押しつぶすのは貴史の勤めだ。

立村はすぐ結論に入った。

「つまり、あの担任にとってこの結婚は、あまり嬉しいことじゃないかもしれないって可能性を忘れちゃいけないってことなんだ。俺がああ担任の悪いところばかり見ているのは承知の上で言うけど、もしもそれがサプライズだった場合、生徒におめでとうって言われても、絶対に嬉しくないと思う。俺がああ担任の立場だとしたら、きっとそう考えると思う。顔ではありがとうとか感謝の言葉を口走るかもしれないけれど、本当はきっと面白くないんじゃないかな。もちろんこれは想像だし、俺の見方が偏りすぎているかもしれない。だけど、そういう可能性がほんのわずかでも残っているのだったら、むしろそっとしておいてやるのが親切じゃないかという気がする。俺の言いたいことはそれだけ」

全力疾走、ご苦労様。まずは立村の言い分を受け止めた。

——ま、これからだ。これから美里の攻撃受けやがれ。

貴史は頷いた。後ろで口をもごもごさせている美里に喋るよう合図した。

「あのね、立村くん。しつこいようだけど、やっぱりそれ、偏見だよ」

「なんでそう決め付けられる？」

「そう言いたいのは私たちの方」

席に戻り、腕組みをして聞き入ることにした。

立村の複雑な気持ちはわからないけれども、とにかく自分の立場と重ね合わせてどうしても菱本先生を受け入れられない要因は理解したつもりだ。公私分けると普通なら怒るところだが、そこまで立村が自分の隠していた過去をさらけ出したことが、なんとなく嬉しくもある。美里も単にヒステリーを起こしているのではなく、そこから本音で語ろうと糸口を探っているようにも見える。

——きっとこの調子だと、あいつら言いたいことぶつけ合えるんじゃないか。

最近評議委員関連でいろいろとごたついていたようだし、あえて三人しかいない場所で腹の底から打ち明けあうのも、今に限ってはよいことだろう。

「立村くんのお父さんとお母さんが、ぎりぎり結婚して、式の影響で立村くんが予定日より早く生まれちゃったというのは、わかった。それは大変だったと思うよ。でもね、それと菱本先生のことと、どう関係あるの？ それに立村くんのご両親って、生まれてきてほしくないってあからさまに言ったの？」

「だいたいそんなニュアンスのことは言われてたかと」

「けど、それは冗談っぽくでしょ」

口籠もっている。おそらくストライクゾーンに突き刺さったんだろう。

注意してやるべきところだが、美里がすぐに自己修正していたので黙った。

子どもに言い聞かせるように、ゆっくりと。

「あのね、立村くん。私ずっと思ってたけど、立村くんは人のことを思いやっているふりして、本当は勝手に決め付けてるだけのような気がするんだ」

「どういうことだよ」

かえってかちんときたのか、立村が腰を浮かしかけ、すぐに座り直した。

美里は冷静だった。こういう場面になると彼女というよりも姉貴の貫禄だ。

「つまりね、立村くんは自分が生まれてきたから迷惑をかけたんだとか、もし自分が生まれてなければこんなことにはならなかったんだとか、勝手に思っているでしょ。だけど立村くんのお父さんお母さんはぜんぜんそんなこと考えてなかったかもしれないでしょ。それと同じよ。菱本先生だって、喜んでいるのかもしれないし迷惑がっているかもしれないけど、そんなの私たちにわかるわけじゃない。私たちがわかるのって、目に見えていることだけだもん。私の見た限りだと、菱本先生、浮かれてるよ」

「人前でそんな暗い顔するわけいかないって、自分の身に置き換えてみたら」

貴史の読みが甘かったのか、立村が再びバリアを張りはじめている。さあどう出るか。手首をねじって前かがみに様子見する。

「立村くんの基準と菱本先生の基準が違うくらい、わからないわけ？」

「んだな、立村。それは美里の言う通りだ」

よく言った。ぽろっと本音。当然だ。立村が唇を噛み締めている。

いつか貴史も立村に真正面から本音ボールをぶつけてやりたかった言葉だから。

「できちゃった結婚だから、ほんとはもう少し結婚先にしたかったのにとか思ってるかもしれないよ。それは菱本先生の事情でしょ。私たち生徒が勝手に陰気な想像して決めつけること自体が失礼だと、私、思うよ。それより、素直に、菱本先生の赤ちゃんが生まれることをおめでとうってお祝いしたいよ。だって三年間一緒だった先生だよ！ 家族が増えて嬉しくないわけじゃないじゃない！ 先生だって、喜ばないわけ、ないじゃない！」

「生まれてほしくない親だっているはずだよ。すべての親が喜ぶわけじゃ」

「立村くんの基準と一緒にしないでよ！ なんでそう暗い考え方をするのか。なんか立村くんの考え方っておかしいよ。そんなこと言われたら、私もきっとそう思われてるのかなって泣きたくなるよ。私がこうやって言ってることも、立村くんには『いじめ』だって思われてるのかなって、悲しくなっちゃうよ」

背中に夕陽が暖かくさしてきた。教室の温度が下がっている代わりに窓から射す光が鋭く当たる。立村は座ったまま美里を見上げていた。美里も立村を見下ろしていた。

やはり、恋人同士の会話なんだろうか。

南雲の席で貴史は、ふたりが影絵に見えるのに戸惑った。

——そろそろ、締めだな。

立ち上がり、仲裁に入った。

「ま、俺もそう思うところはあるわな」

近づけばふたりは影絵ではなく、輪郭のととのったいつもの立村と美里に映る。

あくまでも軽く、いいかげんに声をかけた。

「立村、ここんところはさ、明るくいこうぜ。なあに、菱本さんのこった。多少俺たちがはめはずしたっておおいに結構毛だらけ猫灰だらけって、感謝のちゅーくらいしてくれるかもしれんしな。だろ、美里？」

「そんなのしてほしくないけど、でも、絶対菱本先生は喜ぶと思うよ。人を喜ばせて楽しく盛り上がるのが、どうして立村くん、いやなわけ？」

立村だけが黒くバリアを張ったままだった。立ち上がり、鞆を抱え天井を見上げた。口を軽く開け、冷たい口調で答えた。

「わかった。それならこの件は、清坂氏と羽飛に任せるよ」

光で翳った立村の表情は読み取れない。ただ声だけはくぐもり冷え切ったままだった。

「俺の性格上、やはりこういうイベントは苦手だしさ」

——おいおい、お前、また逃げるのかよ！

喉もとまで出かけた台詞を飲み込んだのは、さらに爆弾を吐き出そうとする主がひとりいるからだった。

「ちょっと待ってよ、立村くん、逃げるの」

食ってかかる美里を止めるのも、幼なじみの仕事だった。

「まあまあ、ちょいと落ち着けや」

貴史は美里の前髪にかかるお下げをひっぱった。思いっきり叩かれた。ただでさえ機嫌悪いのをさらに加速させたかのようだった。

「やめなよ、貴史。あんた小学校の時とまったく成長してないよね。お下げ見たらひっぱるものって刷り込みされてない？」

「しょうがねえだろ、ほんとは優ちゃんの髪の毛ひっぱりてえとこだけど、しかたねえから美里で妥協してるんだ」

「最低よね、妥協ときたもんね、あんたの方こそ欲求不満、別のところで早く解消しなさいよ！」

軽くせねば。

とにかく、これは貴史がなんとかせねばならない場面だ。

寒いのではなく、熱いのだ。

立村がいったん心を開いて語ってくれたように見えたから、貴史は今まで黙っていた。

自分の過去を今まで剥き出しにすることが少なくて、すでに露見している事実ですらも隠したがる立村が、親しみを現してくれたように見えた。だからつい、読みが甘くなった。

——まずいぞこりゃあ！

本条先輩のことを口にしてしまった貴史が言える立場じゃないが、美里が言いたい放題ぶつけた言葉は完全に立村をひねらせてしまっただけだ。いったん開きかけたドアが閉ざされ、その後はどんなに叩いても開かれないまま。また、修学旅行前のふたりに戻ってしまったかのようだった。

——美里、まったく、お前言い過ぎ、何考えてるんだよ！

代わりに言い放ってくれたことについてはあえて考えず、貴史は三枚目でこの場を押し切るしかない。

「立村くん、待ってよ。今日は一緒に帰るでしょう？」

背を向け、外へ出ようとする立村に、美里がすぐるように訴えた。

同じく説得したって無駄だ。あくまでも軽く、いいかげんに、そしてあっさり。

「そうそう、そういうこと、立村逃げんなよ」

貴史は即、切り替えて呼びかけた。

長い時間。いや、ほんの一、二秒だったろうか。

立村は美里を静かに見つめていた。

また、いつもの諦めた顔で吐息をひとつ、その後、

「わかった、一緒に帰ろうか」

また一步、貴史たちの下に戻ってきた。

貴史は美里に鞆を渡した。もうこれ以上状況を悪化させる必要はない。

「じゃあな、立村。お前さんのご希望通り、今回菱本先生の結婚おめでとうパーティーについては俺と美里が組んでやるってことにするから、そこんところだけ断っとくな」

「いいよ、それの方が俺も助かる」

ほっとしているところみると、そちらの答えが本音なのだろう。

なら、貴史主体でやるということであまく回していこうと決めた。

「清坂氏、さっきはごめん」

いつのまにか「恋人同士」の会話に戻っている立村の口調に貴史は思わず吹き出した。

さっきまでのわやわやとした冷たいざわめきは、やはり気のせいなのだ。そう思わずにいられなかった。ひとまず、人間関係は崩壊せずにすんだ。

——俺の手の打ち方は、間違っただけのことよな。まったく立村も美里も、ほんと手が掛かるよなあ。

いきり立った口調とは打って変わって優しく接してくる立村に、美里も、

「いいよ、わかってくれるんだったらそれでいいの！」

ずいぶんあっさり許している。そこが恋の故、たるものだろう。

——あとでこのネタで、思いっきりひっぱるぞ。美里覚悟しとけよ。

幸せならその分しっかり、からかうことでバランスを保つ。これも貴史の処世術だった。

高校への内部進学内定日は十一月半ばと聞いている。さすがに親も顔を出して騒ぎ立てることの多いこの頃、貴史はのんびりと進路面談を受けていた。

三十人学級で放課後一日五人ずつ。すでに親を含めた三者面談は終わっているし、実質進学先は決まっているようなものなのでいたって気楽なものだ。

「羽飛、の、今の成績では」

咳払いをわざとらしくし、おどけつつ菱本先生は成績書類を指差しつつ話し掛ける。

「まあまあかなというところか」

「普通科なら問題ないって話だけど」

「こら、その言い方まずいぞ。公立高校試験で面接ある学校だったら、お前の喋り方一発で落とされるぞ」

「俺、青大附属から出る気ねえし」

ばかっぽく語ってられるのもひとえに、貴史の成績が全く問題なく青大附高に進学できるレベルへ達していたからだった。別に勉強をしゃかりきにやるわけでもないし、得意科目があるわけでもない。ただ、赤点……平均点の三分の二がボーダーライン……を獲ったことは一度もないし、成績不振による呼び出しも食らったことはない。

単に容量がいいと言われればそれまでだが、もともとの実力がにじみ出ているだけだと貴史は思う。こういっちゃなんだが、立村や南雲には一度も総合順位で越されたことがない。

「しかしまあ、問題ないからなあ。あえて言えばもっと何か、熱く燃えるものがないのかってくらいだな」

「俺、冷えてる？ 冷たい？」

今度はがしっと頭を捕まれぐりぐりされた。

「全く、お前と話していると真面目な話もどっか言っちゃまうなあ」

「俺と先生の仲じゃん」

くそ真面目な話などする気はなかった。

——さあてと、どのあたりで切り出すか、だな。

四時半過ぎ、最後の面接生徒。始まる前に蛍光灯を全部つけた。

「とりあえずだ。高校進学内定については何度も言うが十一月に出るから、それまでは大人しくしてろよ。あ、大人しくするのは卒業するまでだ。羽飛、あんまり馬鹿やらかすなよ」

「すげえ失礼だよなあ」

菱本先生なりに教師の威厳を保ちたいのだろう。もっとも例の彼女のどたばたをしっかりと観察してしまった貴史からすると、何やっても無駄だと言ってやりたい。

——菱本先生のお祝いの会なんだがさてさてどうする。

今のところ、ご婚約および結婚式情報は母を中心に聞いているだけだ。

もうばればれだというのに、なぜか菱本先生は生徒たちへかたくなに口を閉ざしているようだ。立村に貴史たちが話をした段階でもう噂解禁にしたこともあり、あっという間に情報は駆け巡

った。貴史が知る限り、菱本先生ファンだった下級生が大泣きしたとか、他クラスの女子に熱い告白の手紙を渡されたとか、いかにも色男っぽい話が駆け巡っているが果たしてどこまで本当なのかはわからない。

「先生、ところでさ」

「悪い、今日は俺の話の先に始めていいか？」

遮られ、貴史は黙った。普段は薄くベージュがかかった教室の天井が真っ白く映る。蛍光灯のせいだ。かすかな窓辺の明るさが溶け込んでいて、テレビの中にいるようなまぶしさだ。

「はあ」

「羽飛、お前ずっと三年間部活動しなかったのはなんでなんだ？ これなあ、前から不思議に思っていたことなんだ」

「もしかして思い悩んでいたとか、そんなことでか？」

他の連中から問われる言葉のひとつだった。菱本先生は忘れているようだが、貴史の記憶では宿泊研修、修学旅行、その他いろいろな場面で同じ質問を投げかけてくる。答えは単純なのでさほど困らない。

「だってさ、優ちゃん追っかけられねえし」

「優ちゃん？」

「鈴蘭優ちゃん。すげえ可愛いだろ。この前の夏もコンサート行ったんだ」

菱本先生は暫く額に手を当てていた。

「言ってたな。羽飛、修学旅行でも似たようなことをな」

「前々から同じこと言ってるじゃねえかよ」

貴史は笑い飛ばした。何度もしつこく聞かれるのは確かに面倒だが一番納得してもらえる答えでもあるし、むしろ模範解答のQ & Aを引っ張り出したに過ぎない。

「鈴蘭優以外に何か理由ないのか？」

「あとはさあ、やっぱし、上下関係面倒だし。好きな奴らと好きなように球追っかけるなら燃えるけど、なんとか部に入って先輩連中に怒鳴られて、後輩に威張りちらしてってのはどうかと正直思うし」

菱本先生はさらに首をひねっていた。

「お前運動好きだろ？」

「好きだけど封建制度は嫌い。だから、委員会もやだったしな」

立村みたいにはなれない。これも変わらない。先輩にべったりくっついてからかわれたりしている姿を見るにつけ、死んでも男の沽券に関わる行為はするものかと決意したものだった。もちろん美里には言わない……わけもなく言いたい放題ばかりにしまくり鬨聲買ったのだが。

「けど空いてる時間あるからいろんなところ行くしな。たとえば金沢とこの前美術館ツアーに引っ張りまわされたし、この前は小学校の連中と朝から夜までオールサッカーやったし、先月は祭りがあったから神輿とかいろいろ町内会のおっさんたちと練習したし」

「……当然、その中に勉強という選択肢は入ってないわけなんだな？」

「もちろん。そんな暇ねえし」

今度は正真正銘頭を叩かれた。

「ったく、ほんと羽飛、お前がこんなにすくすく育った理由はどこにあるんだろうなあ」
「いいもん食ってるからじゃないかなあ」

しばらくくだらない話をやりとりしていた。

たぶん菱本先生とは卒業するまでこんな調子で語るのだろう。

考えてみれば、問題児として小学校から送り込まれてきた貴史が、青大附属中学に入ってから殆どトラブルを起こさずにきたこと自体奇跡に値する。

敵がいけないわけではないし、むかついたり殴り合いしたりすることも皆無ではないけれども、それ以上に居心地が良すぎる。言いたいことを言えばちゃんとまともな返事が返ってくるし、教師連中もほとんどが大人のくせに話のわかる人間ばかり。

小学校時代の友だちにそう話すと、まったくもってありえないというような顔をする。

一発二発ぶっとばしてこそ男の本懐、そうのたまう奴もいるくらいだ。

——羽飛はすっかり、牙抜かれたな。

勘違いしたことを抜かすアホもいる。そういう奴にはたっぶり鉄拳をお見舞いしてやり黙らせる。

牙なんか、抜く必要のない奴になんか、抜かなくたっていいのだ。

牙、そんなもの、どこに。

「羽飛、ひとつ、相談がある」

「何？」

言葉は飾らないけれども足は組まない。きちっと椅子に腰を据えてがっちり足を踏ん張り答えた。

「最後の半年なんだが、三年D組の団結を完璧なものにするために、羽飛、協力してくれないか」

「なんだよいきなりマジでさ」

からっと返事するが、菱本先生は姿勢をただし、両手を机の上に置き、前のめりで貴史に顔を近づけてきた。

「本当は三年に上がった段階で話すつもりだったんだ。そろそろ、お前も本気を出す時期なんじゃないのかと、俺も思っていたんだ。まあその、いろいろあったようだが、ちょうど今がその時かと判断したというわけだ」

「ちょい、先生、待った」

手で遮るポーズを取りつつ、貴史はゆっくり言葉を切りつつ確認した。

「一応、うちのクラスには、評議委員長がいるってこと忘れてるわけじゃあ」

「それは承知だ。立村のことも含めて、だ」

「それちょっとまずいだろ？ いくらなんでも立村の立場がねえよ」

何度か似たような勧められ方を経験している。クラスメートを始め他クラスの奴らにも。

しかし、それはありえないことだと断ってきた。

——第一、俺が立村を評議に推薦したんだぞ？ あいつが仕切ってなんぼだろが！

「まず聞け、つまりだな」

菱本先生は暗くなりつつある窓の向こうに目もくれず語り始めた。蛍光灯が外の明るさにあっさり勝ちをおさめている室内で、貴史はしかたなく本気で聞いた。

「お前には夏にも話したけどな。クラスがまとまっているようで実はみなばらばらなのが三年D組の現状なんだ」

「そんなこと聞いてねえけど」

覚えてないだけだろ、そう先生は軽く流した。

「いろいろ目立たないところでトラブルも起こっていたんだろうとは思っていたし、わざと見逃していたこともないわけじゃあない。たとえば修学旅行の時みたいにな」

——非常に、思い当たる節あるな。

怖いのでどういうことかは確認しないでおく。

「ただ、どうも修学旅行が終わってから妙にみな、落ち着かないとは思わなかったか？ 羽飛、正直なところ、どう思う」

問われて答える。条件反射。

「まあ、いろいろあるんだろうなあ」

「例えばだ、清坂のことだが」

——美里？

「どうも女子たちの間で、いろいろあるらしいな。男の俺にはわからないが、永年の幼なじみの羽飛にはどう見えるんだ？」

——ははあ、そこか。

菱本先生の目は節穴じゃない。てっきり立村のだらしない態度にぶち切れたのかと思ったのだが、女子たちの陰険なやり口もちゃあんと見抜いていたというわけだ。

「先生、鋭い」

貴史は頷き、同じく鼻を付き合わせた。

「けどありゃあ、一年の頃からずるずるきたってことだけだなあ。どうして早めに手を打たねかったわけ？ 先生？」

そうだ、美里がクラスの女子たちと距離を持っていたことをどうして菱本先生は早く気付かなかったのだろう。クラスの評議委員だし、それなりに目立つ立場だしというのもあったのか。そこのところは聞きたかった。

「一、二年の頃はそれでも古川とか、奈良岡とか、それなりに仲良しもいただろう。それにお前もべったり張り付いて」

「張り付いてなんかねえけどなあ。先生こそ誤解してるぞ」

「まあ話を聞け。清坂のことならお前が一番よく知ってるってのが両家ご家族の認識だろ？」

「誰そんなこと言った？」

「お前のお母さんだ」

——母ちゃん何考えてるんだよったく！

今度は貴史が頭を抱えた。脳天気な家族を持つとこちらが参ってしまう。

「清坂の性格上、そのまますんなり話し合っただけで仲良くなるとは考えられないだろ。かといってこのまま放っておいて、ずたずたハートのまま卒業するのも違うだろう？ 羽飛が陸上大会の時に懸命に男子をまとめようとしていたが、ああいう奴が今のところ女子にはいないんだ、あ、いるか」

自分であわてて確認している。

「今のところは女子たちも表立ってわあわあ騒いでいないし、男子連中もまあ大人の対応をしつづけているが、なんかなあ。正直なところ、俺の理想としている三年D組の信頼関係とはほど遠いんだ」

「青春ドラマは遠い日の物語って奴よ」

はたかれるかと思ったが、手は飛んでこなかった。

「そうだな、お前らにからかわれるくらい熱かったけどな。誇りをもってやっていることだ。勝手に言えよ」

「先生大人なんだから拗ねるなよ」

小声で呟いた。

「けど、先生の言う通り美里が女子連中とあんましうまくいってないのは事実だし、それにひっぱられるように立村もいろいろ嫌がらせされまくってるし。俺もこりゃあなんとかせねばとは思ってたんだ」

「一肌脱ぐ、覚悟はあるか？」

「そんな寒いことしたくねえけど、ただ俺としてはクラスをまとめて明るく卒業したいってことに関しては大賛成」

けどさ、そう付け加えた。

「けどうちのクラスのトップは立村だろ。あいつを無視して俺が先頭に立つってのはやっぱしまじいと思うんだ」

菱本先生は返事をしなかった。ただ貴史の目をじっと覗き込んでいた。顔が黄色く見えた。

「立村が最終的には評議委員としてまとめるのが先だろ」

「羽飛、違う」

首をかすかに、しかしはっきり振った。

「今、この時期に舵取りするのはお前、羽飛が適任なんだ」

「けどさ、先生それ言っちゃあおしまいじゃあ」

「本気で言っているんだ」

小声ながらも荒い口調で菱本先生は畳み掛けた。

「社会に出ると強いリーダーシップを持っている奴、影響力を持っている奴、サポーターとして力を発揮する奴、いろいろな個性の持ち主と出会うんだ。それでわかるのは、自分自身に適した

役割や職業につけないと、その人は事実よりも低い評価しか得られないものなんだ。たとえばお前が今だに部活動やら委員会やらに参加しないままでは、はっきり言ってそれはもったいない。もう三年の半分終わっている今言うは遅すぎると承知しているが、羽飛、お前には人を動かしていくだけの器量がある。どんなに隠していたくてもそれは周囲からはまる見えなんだ。そうだろう？ なぜお前は一年最初の評議委員選出の際に立村を推したんだ？」

「そりゃあ」

言いかけた。言葉を飲み込んだ。言えなかった。

「清坂と立村を両思いにしたかった、それだけだろう？」

「ああ？ 先生、それなんか妄想広がりすぎ」

「俺が言ったんじゃない。他の奴らおよび学内の先生たちが共通で感じた意見だ。もちろん俺もだ」

「だからなんでそういう発想になるんだよ、先生、やべえよちょっと。なんか精神的にしんどいことがあったんじゃないの？」

頭に来るよりも、菱本先生のわけわからぬ発想についていけない。さらに菱本先生は言葉を繋ぎ、貴史を押し。

「ついでに言うなら、部活関係者からの激しいアタックにも関わらず部活動も委員会もやらなかったのは、単純に清坂の側で見張る必然性を感じていたからだろう？ これはご家族のみなさまも含めて同じ意見だ」

——母ちゃんたち、帰ったらおぼえてろよ！

おそらく菱本先生の妄想ウイルスは、羽飛・清坂両家の母からもたらされたものだ。

「なんで俺が美里のこと見張ってねばなんねえの？ 女子なんか見てて、どこ面白いんだよ。あんなうっとおしい連中」

「羽飛、俺はな」

菱本先生の眼差しは揺らがない。

「人間関係の修羅場をどっさり経験しているんだよ。恋愛関係もな。おかげで人間を観る目は磨かれた。生徒たちの個性や能力などを把握できるようになるもんだよ。羽飛もよく知ってるように、俺はほんっと、女子関係では手を焼いてきたからなあ。わかるだろ？」

にやりと笑った。目を逸らせず、一瞬の催眠術にかかったかのよう。

頭の角っこで何かが走る。

「羽飛。お前が清坂を守るためにいろいろな立場を無意識のうちに避けてきているなんて言われても、まあわからないだろうしわからなくたっていいんだ。俺もお前と同じ時には感じられなかった。だが、このまま目立たないままずるずる卒業していくのだけは、なんとしても避けたい」

「先生、本当に、なんか具合悪いんじゃないの？」

自分の言葉に酔っているようにしか思えない。もし相手が南雲のようなむかつく相手だったら一発張り倒して席を立てているだろう。しかし菱本先生の殺気じみた様子がどうもひっかかる。恋愛問題の修羅場だとかなんとか言うけれど、無事嫁を貰う形になったのだから、一応はおめでとうといえるのではないだろうか？

「立村を評議から下ろすってんだったら俺は断る」

「もちろんだ、そんなことは考えてない。立村も俺にとっては大切な生徒だ。あいつは自分の限界まで本当によくがんばっている。お前に言われなくてもわかっている。ただ、これは資質の問題なんだ」

ゆっくりと留めを刺した。

「立村は助けられながらその力をばねに進むタイプだが、羽飛、お前は自分から人を巻き込んでひっぱっていけるタイプだよ。評議委員会では立村の個性もうまく生かされているようだが、三年D組というクラスをまとめていく力は羽飛の方が上だ。クラスの連中が立村に八つ当たりしているのは、あいつのやり方がまずいからじゃない。本来トップに立つべきお前が自分の仕事をしていないからみないらだつんだ」

「仕事してねえだと？」

「このままだと、小学校の頃と同じく清坂はひとりぼっちになるぞ。羽飛しか味方のいない一人ぼっちにしたくないだろ？ 羽飛、俺の言いたい意味が今すぐわからなくてもいい。ただ、お前の力をまず、クラス再生のために貸してもらいたいんだ！」

——先生、例の彼女の件までネタにするくらいだから、相当、結婚すんの、いやなんだなあ。わけのわからないことを熱血菱本先生が叫んでいるのを貴史は聞き流していた。

必要のあるところだけ、記憶させた。

「クラスまとめにはもちろん、俺協力するよ。ただ、先生さあ」

貴史は立ち上がり、菱本先生の肩に手を置いた。

「どっかでラーメンとかうまいもん食いに行ってストレス解消したほうがいいんじゃないの？俺もそんぐらいだったら付き合うよ」

「いいかげんにしろよたく！ 俺の友だちをこれ以上馬鹿にするんじゃない！」

貴史は部屋に閉じこもりひっかけ式の鍵を戸口にかけた。自分で中学一年の頃にこしらえたものだ。なんとか機能している代物だ。父の腕力では開けられるかもしれないが、母と姉ならたぶん壊せないだろう。絶対に中になんか入れるものか。

なにが頭にきたと言って親友を罵倒されるほどぶちぎれたくなることはそうそうない。

そりゃあ母も驚くだろう。貴史がここまで爆発するとは思っていなかったのだろう。泣きそうな顔で舌もつれさせ言い訳するくらいだから。見た感じ自分の発言を省みて反省する気はゼロのようだし貴史もこれ以上しゃべる気はない。ただ父に張り倒された時はさすがに答えた。やりきれない顔で無言だった父に言葉が出ず、捨て台詞だけ残して部屋に籠った。「謝れよな！」

これ以上母も追ってきて泣き落としをかけることはなかった。もうひとり、絡まれば面倒な姉も、今回ばかりは雲行き怪しげと感じたの自部屋に避難している。

貴史が壁を一旦蹴った時にエコーの如く叩き返されたきりだ。

——立村をあいつら、なんだと思ってるんだってが！

気付かないわけではなかった。一年の頃から立村が貴史の家に遊びに来るたび母は様子を伺いつつ嫌味な視線であいつを眺めていた。

帰った後でもっともらしい顔でもって、

「あの品山の男の子、なんか育ち良すぎる感じよねえ」

「貴史みたいながさつな子とはあわないんじゃないの。なんか、こう、上品過ぎるといふかねえ」

時にはぶちぎれ時には無視してきた。今に始まったことではないのだ。

我慢してもよかったはずだ。

ただ、この言葉だけはどうしても許すことが出来ない。

破く。紙を手当たり次第。

鳴らす。ヘッドホンで激しくレコードを。

——絶対、許さねえ。

「みさっちゃんはきっと貴史のことが好きなんだよ。それをあんたが邪険にしてるから、あんな品山の変な親御さんの子にふらふらしちゃうんだよ。菱本先生も話してたけどね、貴史は変なところで譲ってしまうくせあるから困ったもんだわ。もっと男らしく、自信持って、なんかできないのかしらね。先生もはがゆがっていたわよ。本当はもっとできるはずなのに人に花を持たせてしまうってね」

——ふざけるな。

ヘッドホンの音量を上げすぎて耳が痛くなる。鼓膜が破けそうなほど震えるのがわかる。

母は今まで立村のことを、陰では「あの品山の男の子」と呼び習わしていた。他の男子連中に対してはちゃんと苗字で話しているのだが、どうも立村に対してだけは名前の記憶ができないらしい。美里の母ともこそこそ噂話しているのは知っていた。美里からも聞かされていた。

ベッドにもぐりこみ、布団に頭を突っ込んだ。

——菱本先生と母ちゃんがわけわからねえこと話してるのはしゃあねえけど、なんでそこで立村がさんざん着にされねばなんねえんだよ？ なあにが「品山の子」だ？ 要するにあいつのことが目障りなんだろが？ 俺が立村と話をしちゃあいけないってわけか？ なんで俺が自信ないとか花を持たせるとか勘違いしたことしゃべくるわけだ？

ああ、そうか、と合点する。

——立村のことが、ゴキブリみたいに嫌いってわけかよ！

——だから、美里のこともやたらと口出しするってわけか。

修学旅行終了直後、美里が精神的に不安定になり貴史へ八つ当たりしてきたことがあった。

その時は美里を無理やり早朝連れ出し、腹割って話すだけ話し、なんとか落ち着かせることができた。あまり覚えてなかったが、美里はあの時も、

「やたらとうちのお母さんたち立村くんのこと口出ししてくるの！」

とか、

「立村くんと付き合っていること言ったらまた騒ぎになっちゃう」

とか今更ながら意味不明のことを話していた。まあ、二年も付き合っているのだからばれても当然だとは思うのだが、どうやら母親の口出しは相当酷いものだったようだ。共犯者が貴史の母だというのも、認めねばなるまい。

——こんなこと言われたら美里もたまったもんじゃねえよ。

口先だけではなく、腹の底からそう思った。

美里と無理やりカップル扱いされるのは慣れている。恋愛沙汰とは違う繋がりなのだからそれは平気で流せる。しかし、間に入る立村のことをそこまで毛嫌いされた上での話ならばどうしても貴史は許すことができない。

——馬鹿だけど、あいついい奴じゃねえか。だろ、美里？

布団の中で両足をばたつかせてみた。闇の中を泳ぎきってみる。メタルのきんきんした音がヘッドホンから溢れ出してくる。

部屋の戸が無理やりこじ開けられたことに気付かなかった。

「貴史、電話だ」

父だった。片手で貴史の取り付けた細い針金鍵を引き抜いた。

「奈良岡さんからだ」

ヘッドホンを外し、さっきひっぱたかれた頬をさすった。

父の様子はぶっきらぼうだったが、余計なことを言いはしなかった。

用件だけ伝えて階段を降りていった。玄関で誰かがばたばた出て行く様子。母だろう。また美里の家に行って愚痴りに行くのだろう。ということは美里も明日、貴史にいろいろ聞いてくるだろう。うっとおしいったらない。

階段を降り、放置してある黒い受話器を拾った。

「もしもーし」

わざとのどかに呼びかけてみた。奈良岡彰子、いったい夜の八時半過ぎに何の用だろう？

「羽飛くん？」

奈良岡彰子。三年D組保健委員。人読んで三Dのおっかさんであり、あんまん姫とも言う。

学内では何よりも「南雲秋世の彼女」として名が知られているのは言うまでもない。

あのちゃらちゃら軽薄の代表たる南雲の公認彼女としてはまず、お似合いとは決して言えないご面相だが貴史からすると、なぜ性格的不一致にも関わらず付き合いを続けているのかが謎である。男から見て、話しやすい女子の一人だけに尚のこと、勿体無いと思う。

「よお、奈良岡どうした？」

「今、時間、大丈夫？」

声をひそめるようにして奈良岡が囁いた。

周囲を見渡す。父は今で煙草を吸っている。母はいない。OKだ。

「ああ、いいけど」

「実はね、今日菱本先生に面談の時言われたんだけど」

言葉を区切り、ゆっくりと、

「来年の卒業式にあわせて三年D組の文集を作りたいから協力してほしいって言われたんだ」

「へえ、懲りもせずかよ」

文集作りというのは、一年秋に一度「班ノート」を元にして菱本先生が企画したことがあった。しかし立村がらみの諸事情で結局お流れとなった。正確に言うと美里が「流した」。それ以来理由をつけて「クラス文集」という菱本先生の提案からは身をよけるようにしているはずだった。

「加奈子ちゃんのことだって今まではずっと避けてきてたんだけど」

なるほど、奈良岡からしたら立村の件、という認識ではないわけだ。

「やはり最後だし、形に残ることしたいよねってことで、今から準備しようよって話になったの。それで、羽飛くんや美里ちゃん、こずえちゃんにも協力してもらおうかなと思ったんだけど」

「美里は反対しただろ」

立村の彼女で、かつ文集作りを奴のプライド守るために流し続けている美里のことだ。決してうんとは言わないだろう。奈良岡も予想通り答えた。

「うん、やはり、立村くんのことがあるみたいだね。こずえちゃんも同じだったな」

こずえの場合は、「できの悪い弟ほど可愛い」という認識でやはり反対したことだろう。

「まあ俺も、面倒な作文書くのはかったるいな」

「けど、やっぱり、最後だし何か作りたいって先生の気持ちもわかるんだ。私も、たぶん、これが青潟でできる最後のことになるし、記念にみんなの書いたもの持っていければ、嬉しいから」
——ああそうか。

噂に聞いていて確認し忘れていたことを、今思い出した。

「奈良岡ねえさん、ちょいといいか」

「うん？」

「お前さ、受験勉強とか、やってんの？」

「覚えててくれたんだね。ありがとう」

なぜか嬉しそうに礼を言う。

「うん、すいくんと同じ学校に受かるよう、がんばってるんだ。みんな私を応援してくれるんだ。嬉しいよ。羽飛くんも、ありがとう！」

別に応援したわけではないが、まあ、クラスから出て行くことがすでに決まっている奈良岡彰子にはそのくらい励ましたくなるのが人情というものだ。

高校進学先は、すでに別の学校へとほぼ決まっていた。

奈良岡彰子は、医学部に進むため有利とされる青潟市外の私立高校へ進学することがほぼ内定していた。学校側では入学試験を受けるということで周知しているようだが、奈良岡や同じ学校に進む予定の水口から聞いたところによると、もう願書提出の段階で合格は約束されたようなものらしい。その辺は色々事情があるのだろう。

「この際だから聞いていいか？」

「うん！」

「なんで奈良岡、医者になりたいって思ったんだ？ 水口が医者にならねばなんねえってのは分かるんだ。あいつんち、水口病院やってるから、跡継ぎになんねば患者さん大変だしってのもわからねえわけじゃねえ。けどさ、せっかく青大附属に苦労して入って、すぐに出て行っちゃまって、すげえもったいなくねえか？ せめてさ、高校までは青潟にいて、そこから大学受験って方法もあったんじゃないか？」

水を差すわけではない。前々から美里が淋しがっていたのを知っていたから聞いたかった、それだけだった。

「お前の母ちゃん、確か眼医者さんだろ」

「うん、そうだよ。それ見てたからなおさらってのもあるし、それにお父さんのこともあったしね。早く私が一人前のお医者さんになって、お父さんの病氣楽にしてあげたいなってのもあったし」

「あっそっか。大変だったよな」

修学旅行途中で奈良岡は、父急病のため帰宅せざるを得なかった。迎えに来たのが何でも曰くつきの強面親子だったこともあり、かなり噂にはなった。もっとも父親の様態は落ち着いたらしく、貴史たちが修学旅行を終えて学校に戻った時にはみんなを向かえるため笑顔で待ち構えていた。修学旅行を満喫できなかった恨みなどは一言もこぼさなかった。

いろいろ裏事情があるらしいが、あまり興味がなかったのもそれ以上聞き出さなかった。奈良

岡もいつもにこやかに明るい話しかしないので、いつのまにか立ち消えになったものと思っていた。

「羽飛くん、やさしいね。ありがとう」

また奈良岡は礼を言った。何度も「ありがとう」を繰り返す。

「いろいろあったけど、やっぱり、私の身の回りにいる人ってみんないい人ばかり！ 羽飛くんも、美里ちゃん、こずえちゃんも、秋世くんもすいくんも……ね」

「俺っていい奴だろ、そっか、わかってたか」

けらけら笑い声が響いた。なんとなくほっとした。さっきまでのささくれだった気持ちが和むのがわかる。

「うちの父さんが病気になって、小学校時代からの友だちも協力してくれて、いろいろ考えたんだ。お医者さんになりたいってことは、うちのお母さん見てて小さい頃から憧れてたけど、やはりたくさんの人になるには一刻も早く試験受けて合格しなくちゃいけないなって真剣に考えるようになったの。そしたらね」

くく、と笑う。

「たまたまうちの母さんとすいくんのお父さん、水口病院の院長先生がね、もし本気でお医者さんになる気あるならいい学校あるから、すいくんと一緒に行かないかって誘われて。最初、ほんとびっくりしたよ！ だってお金かかる学校だし、うちもお父さんの病気のことあったしすぐには無理だなって思ったから。高校入ったら医学部行くためにアルバイトしようって決めてたもの。うち近くのスーパーで、早いうちからアルバイトしますって約束してたんだよ」

八百屋のおかみさんやっている方が、白衣の医者になるより似合っているような気がする。もちろん口には出さない。

「でも、水口先生がね。すいくんとふたごの妹ちゃんたちの家庭教師をやることでそのお給料を学費に回してあげるって言ってくれたの。もう、びっくりしちゃう。でもね、水口先生が言ってくれたの。たくさんの人に助けられているからお医者さんは反対にたくさんの人を救えるんだって。だからその感謝の分を次の世代に回すんだって。そのひとりが私なんだって。すいくんのお父さん、すごい人だなって思ったの。ほんと、だからすいくんもあんなに素直な性格なんだね」

「ぎゃあぎゃあ泣いて騒いでいるクラスの赤ん坊としか俺にゃ思えねえが、そうなんだな」

もっと言うなら、水口病院は青澗市内でも有数の大型病院だが、実はやぶ医者なのではと噂されている困ったところでもある。奈良岡もそのことは知らないわけではないと思うのだが、どうやらいとこしか目に入らないらしい。

「試験は二月だし、あまりにも試験結果が悪いとまずいけど、でも水口先生が推薦してくれたおかげでなんとか合格できそうなんだ。ほんと、私の周りの人ってみんないい人ばかりなんだよね。恵まれてるなって思うよ」

——奈良岡がいい奴だっても分かるがな、もうちょっと、男を選ぶ目、身につけたほうがいいと思うぞ。俺としてはだ。

しばらく奈良岡は楽しそうにクラスの話や文集作りの予定などを語っていた。用件としてはひ

とつ、貴史に、

「羽飛くん、もしお願いできるなら、一緒に文集作り手伝ってほしいんだ。私、国語あまり得意じゃないし、男子たちがどういうことしたいのかわからないから。羽飛くんだったらみんなに呼びかけて、やる気起こさせることできる人だから、頼りになるし」

「おだてたってなんも出ないぞ」

「おだててなんかないよ。本気で言ってるんだよ。そうだ、金沢くんにもまたみんなの似顔絵を描いてもらうってのはどうかな。きっと、記念になるし、私も青澗出てからみんなのこと思い出せるし。ね、そうしようよ」

結局、貴史は奈良岡の極めて楽天的なのりに乗せられて、

「おうよ、わかった！　じゃあやるか！」

「ありがとう！　羽飛くんと一緒に何かできるってすごくうれしいよ！」

あっさりOKしてしまったのは言うまでもなかった。

「ただ、ひとつだけ今のうちに言っとくけどな」

「なあに？」

「立村にはあまりその、なんというか、文集については触れないほうがいいぞ」

「……美里ちゃんにも、こずえちゃんにも言われたよ」

言葉をくぐもらせ、奈良岡は呟いた。

「私も、そうだね、立村くんには気を遣ったほういいかなとは思ってる」

「わかってるならいいや。俺も様子見ながら話とく」

唯一、奈良岡のトーンが下がった部分だった。すべていい人ばかり、が口癖の奈良岡彰子も、立村に対してだけはどうも勝手が違うらしかった。

——奈良岡のねーさんは話のわかる奴だとは、思うんだ。けどなあ。

気持ち軽やかに受話器を置き、顔を洗って再び部屋にこもりながら貴史は思う。

——みんないい奴ばかりって言ってもな、二股かけられているあの現状どうよ？　あいつをそれでもまだ、信じてるってわけかよ。

男子連中はみな知っている。奈良岡の公認彼氏とされている南雲秋世。規律委員長でかつ学内知らぬものなしのアイドル的存在の男子。奈良岡とはどう考えても外見からして不釣り合いと囁かれている。南雲の方からベタぼれされて交際しているはずだが、その一方で一年上の先輩女子とかなり深い付き合いをしているらしいとの情報がちらほら入ってきている。

このあたりの事情を、奈良岡は把握しているのだろうか？

それとも、ぽっちゃりあんまん姫を受け入れてくれる「とってもいい人」だから多少の浮気は許してやろうとでも、思っているのか？

あまり人の恋愛沙汰に口出す気はないが、それでも「みんないい人」の価値観には時々ついていけないものを感じる、それも確かだった。

——俺の腕を見込んでの頼みとあったら、そりゃあやらねばなんねえな。

玄関で母の戻ってきた気配がする。知らん振りをもちろんするが、鍵を付け直すことはあえてしなかった。明日の朝の食卓に貴史の好物がちゃんと並んでいたら、今回ばかりは許してやる。そう決めた。

——立村にはしばらく、内密に進めたほうがいいな。ま、美里から情報流れるだろうし、そうしたらこっちから話をしてやってもいいしな。

軽く、軽く考えた。決めたらすとなんとすべて忘れて眠っていた。

文集作りの計画については、奈良岡彰子とこっそり練ることにした。

もちろん立村のこともある。奴は相変わらず評議委員会やら次期生徒会改選の準備に駆けずり回っているし、ほとんど教室で話すこともなくなった。また金沢に早い段階で文集用に肖像画を描いてもらうために話を通す都合もあった。なにせ三十名分の顔だ。いくら天才少年画家金沢の腕でもすぐには用意できないだろう。こだわりもあるだろう。

奈良岡にその点を説明するとすぐに飲み込んだのか、

「そうだね。今度金沢くんと三人で相談しようね。まだ卒業なんて先だし、今からそんなこと心配しているなんてって他の子にも思われたくないし！」

内緒話に関しては納得してくれた。やはりこのあたり美里でなくてよかったと思う。

別の意味で面倒だ。

しかし、奈良岡も現在彼氏持ちの身。

人の恋路にくちばしはさむ気はしないがそれでも、奈良岡のあったかい性格を知れば知るほど、どうも理解しがたい。

――ほんとに、奈良岡のねーさん、知らないのかよ？

――本当に、南雲が何やってるのか、知らんのか？

興味なんか一センチもない貴史でも、南雲の女遊び伝説はいやというほど流れてくる。

――この前は水菜先輩と一緒に駅の裏通りを歩いてたらしいぞ。

――裏通りってしてっか？ いわゆる街合ってとこだって聞いているぞ。

もちろん、噂に留まっているから南雲は現在、規律委員長の座を守っていられるのだが。南雲が一応奈良岡彰子にベタ惚れしてアプローチし、自分の彼女にした後の展開についてはみな驚くばかりだった。むしろ現在の遊び人全開の姿が自然に思えてならないのが本音だ。

「ほら、羽飛くん、これ食べる？」

放課後、玄関のロビーで呼び止められ、いきなりクッキーを差し出された。

食べ物はどうな時でもありがたい。もちろん食う。三枚つかんだ。

「しかしさ、ねーさんこれうめえな。どうしたんだよ」

「うん、昨日たくさん作ったから余っちゃったんだ。食べてくれたらうれしいなって思って」

だったら他の奴、たとえば女子たちに配ればいいもんだと思うのだが。口に入るとバターのくつきり利いた適度なしょっぱさが心地よい。あまったるいだけがクッキーではないというつぼをうまく抑えていると思う。もちろん追加でかじる。

「お前さ、医者になるよりケーキ屋目指した方が、才能開花すると思うぞ」

「おいしい？」

うれしそうに、ゆらゆらする頬を抑える奈良岡。

「ま、そういうこと」

「よかった！」

相当感激したのか、奈良岡は何度も頷いてお礼を口にした。

「ありがと。羽飛くんにそう言ってもらえるからうれしいな」

「おだてられたら俺まじで全部食っちゃうぞ」

「いいよ、羽飛くんにあげるよ」

そのまま箱ごと差し出された。真っ赤な紙箱にレース風のナフキンがかかり、その中に大きくまん丸いクッキーがたっぷり詰め込まれている。形は崩れていない。少し湿気っているがかえってケーキを食べているような感触があってなめらかだ。もらっていいのならそりゃあもう喜んでいただくが、そこでふと尋ねた。

「他の連中には食わせたのか？ あとで俺が恨まれるのはやだぞ」

「うん、みんな一個ずつ。でもこんなにいくつも食べてくれたのは羽飛くんだけだよ」

またにっこり微笑む奈良岡。思わず貴史は手元のクッキーを見下ろした。

奴らの舌がおかしくなければ、それはやっぱり遠慮したとしか思えない。

――まさかとは思うがな、奈良岡、本当はあいつに持ってくつもりだったんじゃないかねえのか？

その「あいつ」の名を出すにはやはりためらいがある。

男子たちの間でも、奈良岡彰子の外見にそぐわぬ愛らしさを守りたい気持ちが、クラスメートの一存としてどこかにあった。

「ううん、いいよ。私、喜んでもらえる人に食べてもらいたいから！」

奈良岡彰子はもう一度大きく手を広げて、貴史の手元に差し出した。

「おうちで食べてね。みんなで分けてもいいし！ 美里ちゃんと一緒にでもいいし！」

腕時計を覗き込み背中を丸くし、

「これから保健室当番なんだ。じゃ、またね」

ころころ転がるように駆け出して行った。

放課後はやたらと腹が空く。持ち帰るなんてもったいないことはしない。一気に食いまくった後貴史は入れ物をそのままくずかごに捨てた。

――まじで奈良岡、うまいもんこしらえるよなあ。

美里からも聞いたことがあった。

奈良岡彰子は見た目大福のまんまる姫にも関わらず、男子たちの引きが途絶えることないという。女子たちが頼るのはわからないでもないが、一部ではファンクラブが存在するという噂には驚いたものだった。後日、これも南雲がらみの噂で、

――奈良岡さんを我が物にするがために、南雲はライバルである他中学の不良野郎に頭を下げたらしい。

とかなんとか。どこまで本当かわからないし鵜呑みにするほど貴史も馬鹿ではない。しかし、女子イコールやはりお菓子作りのようなかわいらしい趣味を持っていてほしいというのはどこかで本音でもある。美里ではまず考えられない言動を奈良岡彰子はためらうことなく愛らしく振る舞ってみせ、それが男心をそそる、というのもわからなくはない。

――まったく、よくわからねえけど、しっかしだな。

不釣り合いにせよ一時は惚れ抜いた女子を今は堂々と忘れたかのように浮気して平気な南雲の態度を、理解したくない一方でわからないわけでもないとも思う。

――けど、やっぱりな。ありゃあねえだろ。

街合、とは古い言葉だけど、その意図することは理解しているつもりだ。

――やることやってて、それで教室では彼女扱いかよ。いいかげん奈良岡もあのたくましい腕で一発ぶん殴ってやれってな。

断言しよう。ひよわな南雲はぶっ倒れることだろう。そのくらいしなくては、おそらく南雲は目が覚めない。せっかくこしらえてくれたおいしいクッキーを無視されて、しかたなくクラスメートの貴史に渡して喜んでいる、いじらしい奈良岡にはそのくらいしてもいい権利がある。

クッキー一箱と言ってもずいぶんボリュームがあるものだ。

帰宅部の貴史だからそのまま家に帰ってもよかったのだが、なんだか腹が重たくなると動くのが面倒になってくる。誰かかしたら暇を持て余している奴がどこかにいるはずだ。委員会なり部活動なり、そういう奴を見つけてしゃべるのが貴史の放課後ライフだった。

たまには混ぜてもらうこともあるが、たいていは勝手にその辺へ座ってなにかかしらっこんでいるだけだ。決して主役に立つことはないが、それでもいつのまにか和やかに時は過ぎる。

立村と美里が戻ってくるまでその辺をうろついていてもいい。職員室で仲のいい先生をナンパしてしゃべっていてもいい。ひとりで物思いに耽る以外だったら結構すごし方もいろいろあるものだ。

「菱本先生、あのさ、文集のことだけど」

話す目的は持っているの、職員室に向かい菱本先生を捕まえた。

教科書と地図、その他よくわからない書類を大量に広げて頭を抱えているところに声をかけた。もろ、妨害である。

「羽飛か」

「先生もずいぶん悩んでますねえ」

さすがに他の先生たちがうろついている中、軽く声はかけられない。

最低限の敬語は使う。適当に椅子を借りて座った。

「お前も職員室好きだなあ」

「時間つぶし。それよか、奈良岡から聞いたけど、文集のことだけど」

「ああ、あれな」

三者面談のことを忘れてはいないが、とりあえずは知らんぷりをしておいた。

「奈良岡が羽飛と組みたいと話してたからな。お前もいいだろ？」

「はい、問題なし。で、奈良岡にも話したけど」

「いきなり、さん、付けか」

「でねば、先生あとで怒られるだろ？ まわりの先生たちに、どういうしつけしてるんですかって。生徒としてこれでも気、遣ってるつもり」

にやっと笑い顔を小突かれた。

「全員の顔の似顔絵を金沢に描かせようと思ってるんだけど、それいいですか」

「ありがちなアイデアだが、いいアイデアであることは確かだな」

金沢といえば絵。パターンではあるがそれに乗っかりたくなるだけの才能はあるのだからしかたない。貴史は頷いた。

「で、担任命令で悪いんだが羽飛」

「なんですか」

菱本先生は顔を緩ませたままあっさり告げた。

「文集についてはお前が全部指揮をとれよ」

「はあ？」

「言葉通り、そういうことだ。原稿をまとめるのは奈良岡がちゃっちゃとやってくれるだろうしそういうこまいことは無理するな。それよりも羽飛に頼みたいのは、三年D組の奴らが本気でぶつける気持ちをそのまま文集に載せられるよう、工夫してもらいたいんだ」

「なんですかそれ」

菱本先生はもしかして、結婚からの逃避願望が強いんじゃないだろうか。

やたらとこの前から貴史をけしかける。

クラスを中心に立てとか立村を補佐に回せとか。やけっぱちで暴れたい気分としか思えない。

「つまり、文集なんだ」

小声で囁いた。ざわめきで包まれていて、防音状態完璧だ。

「本当は一年の段階で一度文集を作りたかったんだ。だが運悪くいろいろなことがあって果たせなかったわけなんだが、それはしかたない。あの段階では誰かが犠牲になってしまう可能性が高かったから俺も諦めた。だが今はもう、みなある程度耐性がついているから多少辛い気持ちが目覚めても立ち上げられる。それを指揮するのは羽飛、お前だけだ」

――先生、本当に頭大丈夫かよ。

職員室の奥に見覚えある顔がちらついている。殿池先生の脇に美里がうろうろして何かまくし立てている。気になるが今のところは無視する。菱本先生も気づいていないようだ。

「今回の目的はクラスの記念で、奈良岡とか水口とか、とにかく青大附属を出て行く連中のためにもってことだろ？」

そう奈良岡も話していた。疑っていない様子だった。

「奈良岡にはそう話してある。実際嘘でもないからな」

「でもほんとは、この恨み晴らさでおくべきかってことか？」

もう地が出てしまう。いたしかたなし。菱本先生もいやがらなかった。

「羽飛、忠臣蔵なんて知ってるのか」

「常識じゃん」

くすりと笑う。

「俺は浅野内匠頭じゃないが、言われてみればそうだな」

「関係ねえけど、一年の評議委員会クラス演劇、立村が浅野内匠頭で松の廊下やったの覚えてたってのもあるけど」

ふたり爆笑した。先生もしっかりあのビデオはチェックしていたようだ。

「ナイスキャストだなあ。評議委員会もあのまま演劇部にスライドすればいいのになあ。去年の奇岩城もよかったぞ。ほら、二年の新井林がイジドール少年で怪盗ルパンがA組の天羽、それでレイモンドが清坂で、きわめつけがホームズが」

「先生、それもうちわかってるから、いいって！」

かならず評議委員会作成のビデオ演劇は、何かの形で全学年に放映される。一年の時は確か給食時間で、予想していなかったのか立村が顔を真っ赤にして教室を出ていったのを覚えている。二年の時は自習時間に視聴覚教室でいきなり放映された。この時はいろいろ事情があったことも関係して、流れている間お通夜状態だった。シャーロック・ホームズ立村も、レイモンド清坂美里も、一言も口を利かなかった。

と、菱本先生が不意に口をつぐんだ。

「浅野内匠頭とホームズか」

「えれえマニアックな役だよなあ」

「羽飛」

いきなり堅い声にあわてて背を伸ばす。

「はい」

答えると、菱本先生は小声で囁いた。

相変わらずざわめきやまない状態だが、身体を屈めるように手で指示をし、耳を近づけた。

「これから一ヶ月くらい、しばらく立村の様子に気を配ってくれないか」

「はあ？」

「羽飛にしか頼めないんだ」

何を言い出すのだろうか。保護者でもあるまいし。第一、同級生にそんな気なんて配られたらむかつくしかないだろうに。貴史が言い返す準備をしている間に菱本先生が説明を始めた。

「お前は立村の親友だと言い切っただろ。だから頼むんだ。お前の目から見て立村の様子が明らかにおかしいと感じたら、即、俺に教えてもらいたいんだ」

「あいつもともと変わってるじゃん、そんなこと言ってたら」

菱本先生は首を振った。ちらと、殿池先生と語り合っている美里に目を向けた。

「もちろん男同士プライドもあるだろうし、大人に言いたくないこともあるだろ。野暮なことを言うつもりはないが、今回だけは立村を少しだけ注意して見ていてほしいんだ。たとえば、そうだな」

目を背けずに首を傾げた。

「これから先、評議委員会関係かそれとも生徒会関係か、なんらかの形でトラブルが起こった時、立村がやたらと落ち込んでいるとかつかかかるとか、そういう状態だった場合に、俺にこっそり教えてもらいたいってことなんだ。言葉は悪いがスパイだな」

――自分で言っちゃまってどうすんの。

関係ないところで思わず笑った。こういう裏表のない菱本先生の性格が好きだった。

「そんなことねえと思うけど。でなければ年がら年中あの調子か」

「悪い、言い方を変える。たとえば立村が清坂とけんか別れしたとか、評議委員長から外されたとか、そういうようなとんでもないことが起こったときに、少し気を配ってやってくれってことなんだ」

「先生、それありえねえよ。どっちも」

なんだかほっとした。そんな絶対にありえない展開を想像していたならば、それは間違いだと思う。まだ殿池先生と真剣に語り合っている美里をちらっと見て貴史は笑いかけた。

「ここだけの話だけどさ、立村、美里に最近いろいろデートの誘いかけてるらしいし、評議委員会だってなんか毎年恒例のしゃんしゃんしゃんで委員長決まっちゃまいそうだし、生徒会とは会長の藤沖と仲良しこよしだし、なんかうまくいくんじゃないかねえの？ むしろ、立村が後期委員長にな

っちまってからの方が大変そうな気、するけどな。ま、先生が心配することねえよ。大丈夫大丈夫、中学生のことは、現役中学生がよくわかってるの。安心しなさい」
事実だった。

美里に最近立村が積極的に声をかけて、何やら空いている日を懸命に確認している姿を、ここ数日見ることが多かった。もちろん美里も予定を確認して囁いている様子だが、今のところなかなか空きがないらしい。デートの予定調節とっていいだろう。

評議委員会の件についても、例の「大政奉還」問題も少しずつ片付いてきているらしいときいている。立村と藤沖との関係も問題なし。難しいことはわからないがおそらく問題なく片がつくだろう。

第一、評議委員長から滑るなんてこと、あるわけないだろうに！

貴史たちが入学してから一度も、評議委員長リコールなんてとんでもない展開が起こったことなんてないしこれからまずないだろう。去年の今頃、確かに後輩の新井林と評議委員長の座を奪い合ったようだが、無事立村が勝利を収めて年功序列の意義を守った。

今年はそんなライバルもいるとは思えない。なら問題はないだろう。

――菱本先生、まじで、ぼろぼろに疲れてるんじゃないか。

――取り越し苦労って奴じゃあねえの？

改めて思う。結婚するってことは、心身ともに疲れ果てる行為なんだろう。

女子どもが幸せの象徴として認識していることは、実をいうと男子にとって地獄の始まりなんじゃないだろうか。悪いが貴史は結婚なんてノーサンキューだ。改めて思った。

「取り越し苦労なら本当にいいんだがな」

菱本先生は弱々しく笑った。

職員室を出て、ロビーに向かった。生徒玄関そばのゴミ箱をあさっている男がひとりいる。誰かと思ったら南雲だった。何かを拾って広げていた。

――南雲か？

嫌な奴に会ってしまったが、仕方がないので無視して通り過ぎるつもりだった。

いやおうなしに覗き込む。

赤い紙箱とその中のレース紙ナフキンをつまんでいた。

――自分の彼女だって自覚はあるんだな。

さっき貴史が捨てたゴミだった。奈良岡彰子から受け取ったクッキーの空き箱を拾っているところみると、それがどういうものなのか、それは理解しているのだろう。横顔を覗き見ると無表情なまま。珍しく真面目な面である。

「あのな、これ、奈良岡からもらったクッキーの入れもんだってこと、わかってるんだろな」
思わず口に出た言葉。ひっこめられなかった。

「なに？」

南雲は貴史をじっと見た。目だけがやたらと脂っこく見えた。

「さっき、誰も食ってくれなかったからって俺に全部クッキーくれたんだ」

「なんだと？」

かすかではない。かなり動揺している。その証拠はがたついた目つき。喉仏が動いている。

「人のことなんか知ったことじゃねえが、せっかく作ってくれたもん、喜んで食ってやれよな」
すっきりした。貴史は背を向けて三階へと戻ることにした。南雲からけんかを売られることもなかったし、ただそのまま通りすぎて終わった。

――せっかく彼女が作ってくれたってのに、いらねえって断っておいて、あとで別の奴の口に入ったと思ったとたんむかついてるんだもんな。ひでえ奴だ。

どっかの彼女といちゃついている間に、本命とされている彼女は懸命にクッキーを焼いてくれた。あんな真っ赤な箱に入れる相手ったらやっぱり南雲だろう。それをあっさり拒否されてしまい、行き場をなくしたクッキーはいたしかたなく貴史のもとへきたということだろう。こういう場合はやはり、誰かがはっきり言ってやるべきだろう。もともと天敵同士の南雲相手なら貴史も遠慮はしない。露骨にはっきり伝えるに限る。

美里がはりきって菱本先生のお祝い企画を進行させはじめたのは、ちょうど生徒会役員改選の行われる一週間前からのことだった。

すでに古川こずえや奈良岡彰子のふたりにも協力依頼を済ませ、当然貴史も手伝ってくれるものと決めつけたかのように、

「じゃあ、貴史、急いで計画立てるからね！ わかってる？」

あごでこき使おうとする気配を感じたので即、反論しておいた。

「悪いが俺が計画立てるって言ってるだろが！ お前がなにかやらかしたらまた尻拭いするの俺だぞ」

「なによ、いきなりいばんないでよ！」

「いばりちらしてるのは美里の方だろうが！」

もちろん貴史も菱本先生のお祝いをするのには何も抵抗などない。もう少し美里が女子らしく、

「ね、貴史、あんたの力がなくてうまくいかないんだ。だから手伝ってくれるとうれしいな」
くらいリップサービスしてくれれば、もう少し気分よく協力してやれたものを。

――それに、妙だぞ、美里。

うまく言えないし、どこがどうというわけでもない。美里をよく知らない奴なら気づかない程度のことだろう。

疾風のごとく走り回る美里の性格は今に始まったことではない。だがしかし、今回に限って言えばやたらと行動が早すぎる。

「だから貴史、聞いている？」

いらいらしながら机の側で囁く美里。大声でしゃべりたいんだろうが、それができるのは立村がいない時だけだ。

「先生の結婚式、十一月末だって聞いたけど、私たち呼んでももらえないみたいね」

「しゃあねえだろ。まあ、なあ」

密かに呼んでもらえることを期待していたのは貴史も同様なのでそこは頷く。

美里は頷きを返しつつ続ける。

「だから、お祝いを渡すのはやっぱり、教室にしようと思うんだ」

「帰りの会にでもやるのかよ」

「ううん、違う違う。ロングホームルーム」

いきなり囁き声のみ。聞き取れない。

「わりいがお前しゃべってるの聞こえねえよ」

「じゃあいいよ、筆談しよ。いつものパターンだよ」

教室で内緒話をするというのが根本的に間違っている。教室には幸い、美里の彼氏でもある立村の姿がないのでやっかまれずにはすんでいるものの、やはり休み時間女子とふたりで真剣に語り合うというのは、男子としての珍現象とも思う。

美里はノートを取り出した。大学ノートの新しいものをちょうど持っていたらしい。すぐにくっつけて貴史のキャンケースからシャープを取り出した。

――そろそろ委員の改選があるよね？

あると思うが、事実上は前任者の再任だ。たいしたことじゃない。

美里は首を振り、また小さく書き込んだ。

――その時のロングホームルームの時までに、プレゼントをこしらえて、寄せ書き集めて、それから渡すの。

「寄せ書きかあ？」

こくこく頷いて美里はさらに下の段へ書き記した。

――真ん中に菱本先生の似顔絵書いて、太陽みたいに線を引いて、みんなにおめでとうメッセージ書いてもらうの。

「俺も寄せ書きがどんなものかぐらいわかるぞ」

――あと、彰子ちゃんがクッキー焼いてくれるって。

「賛成だ、奈良岡に全部任せろよ。美里、余計な手入れるなよ」

「すっごい失礼！」

とか言いつつも肝心のことはすべて書き込んで行く。ばたばたしているようにも見えるが、文章で読めばすでに美里は計画を着々と進めているようだ。奈良岡へクッキーの件を相談したのもそうだし、事情通のこずえにも話を通しておいたところみると、もう半分以上は片付いているのではないか。何も貴史が手伝う必要なんてなさそうなくらいにだ。少々そのあたりはむかつく。

――女子たちにはみんなでマスコット作ること決定してる。本当は男子たちにも何かしてほしいんだけど、いいのが思いつかない。

「針と糸は勘弁な」

――それをお願いなんだけど。

ここで美里はノートを閉じ、貴史の顔を見つめた。

「貴史には、男子たちが一斉にお祝いメッセージを送るような演出を考えてほしいなって思うんだ」

「なんだそりゃ」

「ほら、たとえば誰かがひとりひとり立ち上がって、ハッピーバースデーの歌を合唱したり、お祝いの言葉を読み上げたりとか、いろいろあるでしょ。そういうのっていいなって思って」

「だせえやり方だよなあそれ」

だいたい美里の言いたいことは理解した。つまり美里としては、男子連中の単純にまとまってしまう性格を活用して、合唱とか踊りとかいろいろなイベントを行ってほしいと言いたいのだろう。女子たちにその「一丸となって」という行動を求めることは難しい。それも貴史はよく理解しているつもりだ。そこで美里なりに頭をひねったのが、「動は男子、静は女子」の役割分担ということだろう。

「けど、それが一番いいと思うんだ。みんなで何か一緒にお祝いの言葉を言えば、盛り上がると思うし。歌ってもいいよ。鈴蘭優はなしにして」

最後の一言は余計だが、美里の案には乗るのが正解だ。縫い物させられるよりはました。
「わかった、じゃあ、考えておくか！」

どうもみなばたばたしている。今に始まったことではない。評議委員長の立村をはじめとし、委員会にからんでいる連中が走り回るのは珍しいことでもなんでもない。休み時間に立村の姿が見えないのもまた、いつものことだ。

「清坂さん、ほら」

美里が女子たちから陰口を叩かれるのも、また日常茶飯事だ。そのきっかけが立村の言動であることも一日一回はかならず伝わってくるものだ。

「立村が二年の子とまたべたべたしてたよ」

「ああ、杉本さんのことでしょ。今、いろいろ大変なの。だから」

あっさり流しつつ美里は無視を決め込んでいる。

「評議委員の女子たちはみんな杉本さんのことを心配してるの。だから、立村くんも同じよ。それより今私、ものすごく忙しいの！」

――なるほど、忙しい、な。

附属高校への進学も決まり――安心といったところか。みなそれぞれ何も考えず好きなことばかりやって過ごしているようにも見える。

貴史もそのひとりだった。

美里の手伝いを除けば別段何か準備をしなくてはならないこともない。勉強はかったるいが適当にやっておけば赤点は取らずにすむ。金沢のお誘いで金のかからないギャラリーに連れていかれたり、奈良岡からはなにかかしら文集作りの手伝いでカロリーたっぷりのクッキーを差し入れされたりと、それなりに忙しくはある。あるのだが、立村や美里のように目を血走らせて走り回っているわけではない。

――しかし、八つ当たりしまくってるな美里。ありゃあ立村がぶち切れても知らねえぞ。

とにかく美里の突っ走りぶりで一番被害を被っているのは立村だと思う、断言する。

顔を観る度、美里の言葉はひとつ、

「私、ものすごく忙しいの。だから話は後にしてね！」

実際わさわさと動き回っているのだから否定はできない。立村も半ば諦め顔で頷いている。慣れているのか、それとも立村自身が猛烈に忙しいのかのどちらかだろう。

せっかくの菱本先生お祝い行事を、評議委員の立村外して話すのも正直どうかと思うので声をかけてみても、

「ごめん、俺も今、行くところあるんだ。また埋め合わせする」

の一言で走り去っていく。美里にその旨伝えたら、

「いいのよ、立村くんはどうせ、ああいう人なんだし、事後承諾でいいよ！」

とまあ、彼氏相手とは思えない発言をかます。

――暇な奴って、もしかして、俺だけなのかよ？

暇とは言われたくない。むしろ、時間に余裕があるだけ、ゆとりがあるだけ、そのどこが悪い。

のんびり過ごしているうちに台風が青潟を直撃するとの気候情報が流れ始めていた。

登下校時間に当たれば臨時休校になるのではと微かに期待したが、青大附属はたくましい学校だった。

まったく変更なしとのこと。もっとも午前中は雨模様で傘がチューリップ化する程度の風が吹いているだけ。もし直撃されたらその時は下校時間を繰り上げるはずだったのに、とうとう放課後まで問題なく台風が足踏みしてしまった。残念ながら授業はぴったり出ることになってしまった。

――で、雨の中、ずぶぬれになって俺は帰るってわけかよ。

生徒の安全を実はあまり大切に考えていない学校なんじゃないだろうか。思わずそういう疑惑を感じてしまった。

くわばらくわばら。さっさと貴史は帰りの会が終わってから即、家に直行した。さすがに台風の真っ只中水浴びして喜ぶような気分にはなれない。

最後ののんびりした一日だった。

――そう、最後の。

電話がかかってきたのは夜十時頃の、もうすでに部屋へこもって漫画片手にひっくりがえっている時間帯にだった。

「誰からだよ」

せっかく毎週連載作品のおもしろいところまできたところなのに邪魔されてしまい、かなりダメージを受けている。

「古川さんからよ」

相変わらず何も考えていなさそうな母に告げられ、受話器を渡される。

――なんで古川なんだよ。

思いっきりぶっきらぼうに返事をした。

「ああ、何だ？」

――羽飛、悪いんだけど。

こずえもやはり、申し訳ないという気持ちはあるらしい。しおらしく謝るところから入ってきた。

「ちょうど今、『砂のマレイ』外伝読んでる真っ最中なんだけどなあ」

「砂のマレイ」と言えば、こずえもわかってくれるだろうと思ったのだがさにあらず。

――ああ、じゃあ暇ってことね。悪いけど、私の話を優先してよ。今回に限っては。

「おいおいなんだよ、本読んでいるだけなら暇人かよ」

――緊急の用事。単刀直入に言うと、立村の一大事。

「立村の？」

あいつの父さんが事故か病気で緊急入院したのだろうか。それともあいつ自身が何かしくじったのだろうか。

もしそうだとすれば連絡があってしかるべきだが、なぜこずえからなのか。

――あなた、まだ今日の放課後のこと、何も聞いてないよね。

こずえが念押しした。

「放課後なんて台風に巻き込まれないうちに、さっさと帰ったしな」

――じゃあ、まったく知らないね。

かなりおもしろくないがイエスの答えを返す。

こずえは笑わなかった。いつぞやの、夏の日と同じ口調だった。

――今日、生徒会役員立候補の締切り日だたんだよ。

「そんなこと知るかよ、藤沖の後任が誰になるかとかだろ。ほら、霧島の弟が」

――違う！黙って聞きな！

こずえの声がトーン高く聞こえた。耳障りだ。

――生徒会長に立候補したのは、二年の佐賀さん。新井林の彼女。

聞きなれない名前だ。黙っていると畳み掛ける古川こずえの声。受話器の外にもれそうなほどでかい。

――ゆいちゃんの弟は副会長どまり。それより問題はそのとばっちりで立村がね。

「立村とどう関係あるんだ？」

まったく話が見えない。二年生から会長、一年から副会長が出るのならそれは自然なことだろう。会長が女子というところだけは少々男としてわびしいところもあるが、それはそれでまた別の話だろう。なんで直接関係のない話をこずえは持ち出そうとするのだろうか。

「単刀直入じゃあねえだろ、はっきり言っちゃえ」

――だから言うよ。立村の過去が、他の人の前で、明るみに出ちゃったんだよ。結論はそういうこと。

「なんだそりゃ」

――だから補足説明、必要でしょうよ。つまり、立村が小学校時代にやらかした事件の裏事情を、たくさんいる前でばらされちゃったってこと。

「裏事情というと、まさかあの」

言いかけた言葉を取り、古川こずえは即答えた。

――時間の問題、と言えばそうだけどね。今までばれていなかった方が不自然だったのかもね。

知らないわけではない。

立村が小学校卒業間際に起こしたと噂される、ある事件。

クラスメートとのぶつかり合いで傷を負わせてしまったとは聞いている。

その後トラブルが尾を引きさまざまな出来事に影響した。そのことのひとつには、貴史や美里

も巻き込まれている。

今でも、その事実についてクラスメートたちが噂しあっていることも知っている。

それでも立村は、あいつなりに苦しみつつも、怪我をさせてしまった奴と友情を培おうと努力しているはずだ。

男子クラス対抗リレーで、少しでも足を早くするためにプライドを捨て、その男浜野に対して、教えを請いに行ったはずだ。

それだけ立村は、自分の罪を悔い改めようと努力している。

貴史からするとその事件は、不可抗力だったろうしすでにクラスの連中も男子に限っては許しているような気がしている。「許す」なんて偉そうなことは言えない。立村の精一杯の努力と反撃を受け入れたい、そういう気持ちの奴が多いのではないかとも思う。

ただしそれは、クラスのみ限定条件だ。

仮に詳しい事情を知らずに、その事件そのものを説明された場合、十中八九、立村を加害者とジャッジするだろう。

「で、誰だ？ まさか杉浦か？」

――違う、二年の女子。立村と同じ小学校に通ってたんだって。その子がさ、事実関係をぜんぶしゃべっちゃったんだよ。私たちが知ってること以上の話をさ。みな、びっくりだよ。藤沖なんてぶち切れちゃってさ、立村に絶交宣言しちゃうし、杉本さんには愛想つかされちゃうしですたずた。

「ちょっと待て。つまり立村が、その二年女子に昔のことをべらべーらと暴露されちゃって、他の連中に嫌われたってことかよ！」

――単純に言っちゃえばそういうこと。立村、相当ショックが大きかったみたいで、側で観ていた私たちのこと気づかないまま、すーっとどっかへいなくなっちゃったしね。美里が止めようとしたけど、聞こえなかったみたいでさ。

「美里がいたのか？ その現場に！」

――そりゃいるよ。最初に言ったでしょ。生徒会改選そりゃ気になるよ。たとえ今日、台風がきてたととしても、美里は気になるにきまってる。

「そういう意味じゃねえ！ 美里が、そのことを全部聞いてたのか？」

こずえが黙った。かすかに受話器を指で叩くような音が聞こえた。

「美里は何も言わなかったのかよ！」

――言えるわけないじゃん。

――呼吸置くとこずえは、声を低めて続けた。

――立村が杉本さんのことしか見てないってことが、あの場で証明されたんだよ。杉本さんのためなら何でもするって、たくさん人が集まっている生徒会室の前で、あいつ叫んだんだよ。それを、彼女の美里が見てて、冷静でいられるわけないじゃん。

貴史は受話器を置いた。

こずえに謝ることも忘れていた。

「どうしたの貴史、あんたこんな遅くどこ行くのよ！ 台風でその辺水浸しだしそれに夜遅すぎるよ！」

母の呼び止める声のはるか遠くのエコーと同じく聞こえる。どうでもいい響きだった。

考えの言葉が頭に走っていない。自分の体も頭もからっぽのまま、ただ身体だけが前に進もうとしているようだった。

「すぐ帰る」

一言だけ残し、貴史は外に出た。踏み出して駆け出した。ポケットに水に濡れた小石を詰め込んだ。自転車をひっぱり出すのもかったるく、そのまま駆け出した。足元に水浸しが多くぬかるんでいるのは靴の感触ですぐにわかった。

清坂家の前に立っていた。

小石をふたつ握り締めた。

音が二回、重なってぶつかるように二階の窓辺目指して投げた。

――あいつは気づくはずだ。

ふたりだけの秘密の合図、窓が開いたのを確認し、貴史はぐいと顔をあげた。

美里らしき影が揺らぎ、同時に小さなものを投げ落とす気配を感じた。

拾いに向かい、手で何度か地面を触れると布の財布らしきものに指先が触れた。

開いて、中を確認した。

素早い返答だった。

――車庫。

美里の家は車庫が大きい。家の中から出入りできる。

今までここで遊んだことはない。

貴史は清坂家の車庫のシャッター前で立ちすくんだ。

音を立てずに入ることは不可能だろう。

小学校の頃だったら、ためらうことなく正面玄関から美里の部屋に突入していったはず。何かがあればすぐふたりきりで相談できたはず。

それが許されない今、ふたりきりでまじりけのない事実を美里に語らせるには、危険を冒すより他にない。

――どうやって入れってんだよ、美里。

見つかるリスクはともかく、今夜は帰る気などなかった。絶対うまく行く、そう信じていた。

車庫のシャッターがちょうど貴史のしゃがんだ頭分の高さへ上がった。

少し音が響いたような気がする。

美里の声はしない。ただ貴史は潜り込む。

――ばれたら血祭りだな。

やましいことをしているわけではない、とは言いきれない。

夜遅く、親たちの許可も得ずに人の家へ勝手に忍び入っているのだから。

小学生の頃だったら多少怒鳴られてもさらりと流せばそれですむ。

でも今は。

――たく、面倒くせえったらねえよ。

いくら女子たちの色っぽい話に興味のない貴史であっても、現実を知ってはいる。

――じゃあねえか。

車のライトに頭をぶつけてしりもちをついた。同時にゆっくりとシャッターが下りあたりは真っ暗闇、視界閉鎖状態に陥る。

――美里早く電気つけるよな。

とは、言えない。声を出せない。車のボンネットに触れながら立ち上がるしかない。

同時に車の後ろドアが開く気配を感じた。助手席や運転席だと、わりとがっしりした音がするものだが、後ろ側はゆっくり開くせいかさほど響くことがない。

「貴史、こっち」

初めて美里らしき声が聞こえた。手探りで進み、ひょいと空気をつかんでつつぷした。ガソリンと皮の匂い。車専用の芳香剤ではまったく消臭効果がない。

「閉めて」

隣でシャンプーの残り香をぷんぷんさせた美里が指示を出す。そりゃ閉めるしかないだろう。寒いのだ。

闇の中、服を通じて体温が伝わってくる。心臓がばさばさ音を立てるようで、貴史はまずゆっくり座り直した。

「お父さんたちに気づかれたらまずいし、電気、つけないからね」

「そりゃそうだろ」

シャッターの下から微かに光が白線を引いている。それだけだった。

「貴史、聞きたいんだけど」

「俺の方が先だろ」

「立村くんには連絡したの？」

いきなり方向の違う質問に戸惑った。そんなことするわけがないだろうが。こずえのかけてきた一本の電話をきっかけにここまで飛び出してきたというわけだ。立村まで手が回るわけがない

「するわけねえだろ」

「変だね、それ」

「どこがだよ」

唇を膨らませてみる。文句を言ってやる。美里が続けた。

「だって、親友でしょ。貴史と立村くん。親友のことを最初に考えなかったの」

「ばあか、何考えてるんだ。女子じゃねえんだぞ、そんなべたべたいたいちゃいちゃなんてしねえぞ男同士普通はな」

事実そのものを貴史は答えた。

「奴は放っというてほしいに決まってるだろが。男の沽券って言葉知らんのかよ」

「ばっかみたい。男子は変なとこにこだわるよね」

同時に膝へ暖かいものが触れた。美里が片手で何かを膝に置いたようだ。まるっこいもの。飴だった。

「台風の子できつと誰も気づいてないから」

最初言われた意味が理解できなかったが、シャッターの物音のことだとなんとか把握した。

「貴史、もう、杉本さんのこと、聞いたでしょ」

美里は声だけふつうのまま、語り出した。

貴史は黙ったまま、飴の包み紙を闇でひねりつつ、中身を取り出して口に放り込んだ。

「私ね、立村くんに嫌われたかもしれないんだ」

――嫌われた？

「おいおい、どうしたんだよいったい。お前、最近あいつといちゃつくこと多くせになに勘違いしてるんだ？ 幸せ過ぎてわけわからなくなってるだけじゃあねえのかよ」

混ぜっ返してみる。嘘ではない。美里がやたらとはしゃぎまくっていることと、立村に八つ当たりしているところとか、やはり「甘え」でなくてはできないことだろう。「公認彼女」としての甘えともいう。立村もきっと、そのあたりで許しているのだろう。そう思っていると貴史は信じていた。

「やっぱり、気づかなかったんだ」

「はあ？」

「気づかれないようにしてたからね。よかった。誰も知らないんだ」

美里がしつこく念押しするようにつぶやいた。

「この前ね、立村くん、私に言ったんだ。『つきあい』を終わりにしようって」

「まじかよ」

驚くと、気持ちがだんだんこもらない声が変わっていく。自分でもなぜそんな冷えた声が出たのかわからない。

「理由は聞いてねえのか」

「教えてくれないし、私の方でわかってることだから驚かなかったよ」

いったん声がかぐもり、また息を大きく吸って語る美里に貴史は合わせた。

「だって立村くんは、私よりも杉本さんの方が気になるんだもの。しょうがないよ」

――杉本、ってあの二年の女子か。

前から美里がずっと気にしていた女子のことだろう。

でも美里はその杉本梨南という女子を他の女子評議委員たちと一緒に面倒を見つつ守ってきたはずだ。

抜けがけされたのか？ いや、そんなことされて黙っている美里ではない。仮に誰かが理不尽なやり方で立村にアプローチしたら最後、美里はとことんどんなやり方を使ってでも対抗するだろう。納得行かないことに泣き寝入りするような奴ではない。

「お前な、敵に塩送るようなことしてたのか？」

「そんなことするわけじゃない！ 私はただ、杉本さんの一生懸命なとことか男子たちに負けたくないってがんばってるのとことか、かわいいなって思って、みんなで守ろうとしてたの。いい子だから」

「で、立村をとられたってわけか、ざまあねえぞ」

うまく言えないのだが、気持ちが全然こもらない。自分にとって立村もそうだが美里も友だちとしては最高ランクにいる存在だ。そのふたりが付き合い、うまくやっているのはそれでめでたいことだと思っていた。だが、そのふたりが「別れた」となるともっと叫びたくなくても不思議はない。外で隙間から水を流し込んでくる雨嵐に対抗して「お前らいったい何やらかした！」くらい怒鳴ってもいいのに、そうできないのはなぜだろう。場所の問題ではない。

「そんなんじゃない！」

やたらと香水くさい匂いが広がった。美里が首を激しく振っているのがシルエットで判る。

「私も、ちょっとはね、驚いたけど。杉本さんなら、しょうがないなって思ったんだ」

「なんでだよ」

「杉本さんを応援したくなる、立村くんの気持ちがわかるから」

「はあ？ まったく理解できねえよったく！」

指先で飴玉の包み紙を潰して開いて裂いた。

「美里、お前な、もう少し怒れよ。なんであいつに文句言わねえんだ？ 理由くらい聞くだろ普通！」

「見え見えだよ、立村くんが杉本さんのこと、好きで好きでしょうがないんだってこと、みんなわかってる」

美里が運転席のヘッドに抱きつくような仕草をした。

「暇さえあればE組に潜り込んで杉本さんに話しかけてるし、最近は休み時間ほとんど付ききりだったし、杉本さんがいやがってるのに帰り道一緒に帰ろうとしたりしてるんだもん。立村くんが新井林くんとうまくやっていこうって決めたのも、杉本さんが新井林くんと犬猿の仲だから取り持ってやらなくちゃって男気だしたからに決まってるもん。杉本さんが二年以降評議に選ばれなくなってしまっただけからは尚更立村くん、ずっと杉本さんのことばかり考えてるんだよ。そうだ、知ってる？ 立村くん、修学旅行で杉本さんに、豪華な手鏡持って帰ったんだよ！」

「ちょっと待った！ これだけ証拠揃っていて、お前なんで奴を絞り上げなかったんだ？」

——いつもの美里なら、もっと激しく立村を攻め立てたはずだ。仮にも彼氏彼女の関係なの
にだ。なんでだろう。美里らしくない。

貴史の知っている美里ならば、それだけ浮気の証拠が上がっているのなら手加減はしない。と
ことん怒鳴るなり締め上げるなりするだろう。

もちろんその後は、反省しているであろう立村にお灸をすえたのち、めでたく鼻天下の道を歩
むだろう。

「できるわけじゃない」

美里は答えた。ようやく目が慣れてきたのか、隣で美里が何かを抱きしめている様子が伺えた
。

「もしそんなことしたら、立村くんは一生私を許さないよ。立村くんにとって杉本さんは特別な
存在なんだなってこと、付き合う前から気づいてたもん」

「付き合う前って、おい、二年の頃からか？」

「そうだよ、六月頃」

時期まできっちり答えた。

「あの頃、立村くん、杉本さんのことで一生懸命走り回っていて、なんとかして他の男子やクラ
ス担任の松山先生から守ろうともものすごい努力してたもの。あの立村くんがだよ？ 新井林くん
に文句言ったりいろいろしてるんだよ。信じられないよね。何かあると私よりも杉本さんばかり
手元に置いてところ構わず褒め称えるの。だから、私、立村くんと付き合ったの」

「はあ？」

何度目の「はあ？」だろうか。

話が飛びすぎるのはいつものことだが、意外過ぎる。

「このままだったら、立村くん、杉本さんとくつつくなって思って。だったら私も後悔したくな
いなって思ったの」

「なるほどな」

納得した。美里がなぜ予告もなく立村とくつつこうとしたのか、謎が解けた。先手必勝、これ
が美里のやり方ならあっぱれだ。

「けど、やっぱりだめだった」

また美里が髪の毛を貴史の頬にぶつけてきた。

「立村くんは、どんなことしても、やっぱり杉本さんのことが好きなの。もう、止められない
んだ」

それでも泣いてはいなかった。

「今日も、それで」

「何があったんだ？」

本当はそれを最初に聞いたかったのに、美里の一方的な会話展開によってあさっての方向に飛

んでいってしまった。

「生徒会長に杉本さんが立候補しようとしたんだって」

「二年だったらそれでいいんじゃないか？ 投票されるかどうかわからねえけど」

「それを、立村くん、全力で止めようとしたの」

――止める？

「生徒会の奴らが迷惑がって、立村に泥かぶってもらうよう頼んだんじゃないか？ 藤沖あたりが」

「そんなこと知らない！ 杉本さんだってがんばって、なんとか認められようとして、生徒会でやりなおそうとしてたから、私も、ゆいちゃんも、小春ちゃんも応援してたの」

「またかよ、その応援とやら」

「黙ってよ！ 立村くん、私たちにそれをやめさせようとして、なんとかして杉本さんに生徒会役員選挙に立候補させないようにしようとしてたの。でも、そうしたらそうしたで、大変なことになっちゃった」

「さっき、古川から聞いた」

話を取った。いい加減今度は貴史が話したい。

「あいつの過去が暴露されたんだろ」

「そっか、こずえが話をしたんだ」

納得した風に美里が頷いた。

「話、早いね」

美里からの話で大体流れがつかめてきた。

――立村は二年の害虫と称されている杉本に惚れていた。

――美里はそのことを付き合いかける前から知っていた。

――その後いろいろあったが今日まですべてかくしてきた。

――なのに生徒会役員選挙を巡るごたごたですべてが暴露されてしまった。

外から吹きすさぶ風がだいぶおさまりつつある。微かに叩くガレージのシャッター音に守られながら美里はまだ言葉をつなぐ。

「私、その現場見てないからわからないし、他の子たちが教えてくれたことしか聞いてないからわかんないよ。でも、聞いて、しょうがないなって思った」

「ずいぶん冷たい言い分だなあ」

「冷たくないよ。そうだったら私さっさと立村くんと別れてるよ。杉本さんのことが死ぬほど心配で、明日からきつとみんなから軽蔑されることわかってて、それでしたことなんだからしょうがないよ。それに私も、杉本さん守りたいって気持ちは、わかるし」

「あのなあ、美里」

思わず口を挟みたくなった。

「こういっちゃんなんだがな美里。お前異様なほどその杉本って女子のことにこだわってねえか？

」
「そりゃこだわるよ。だって杉本さん、一生懸命でかわいくて」

「そこになんでお前こだわるんだ？」

「杉本さんには、今、本当に好きな人がいるんだもん」

美里は言い切った。

「他の学校の男子なんだけど、その人に好かれるため一生懸命おめかししたり話し方を練習したり、葉牡丹の花を鉢ごと抱えて持っていったり、とにかく健気なの。あの子を嫌う男子には理解できないと思うけど」

――ははあ、そういうことな。

美里が冷静に話をしている理由がだんだん見えてきた。

要は立村の失恋が確定している以上、どうあがいたってしょうがなかろうとお釈迦様のごとく微笑んでいるだけということだ。

一瞬でも美里の精神状態を心配した貴史が馬鹿だった。

こいつがそんなやわな女じゃないことは、百も承知だ。

――どっちにせよ、浮気したアホな立村を美里は尻にしくため我慢してると、そういうわけか。

「じゃあ立村は、自分が振られてるってこと知ってるのかよ」

「承知してるみたいだよ。だって立村くん、その男子と交流会で仲良しだもん」

美里の口からはさらにわけの判らない言葉が飛び出す。

「この前のリレーで立村くん、走る特訓をするためその男子に連絡取って、協力してもらったみたいだよ。私が聞いたわけじゃないけど、なんとなくそういう噂聞いてた。その男子、元陸上部で長距離走ってて、一回新井林くんと勝負して勝ったことあるくらいなの。だから、立村くん、何とかしてトレーニングしなくちゃと思ってその男子に」

頭の中に白い光が入って、今までのどうでもいい恋愛話が消去されたようだ。

フィルムが消されたかのよう。

「おい、今、なんて言った」

「だから杉本さんの好きな男子と立村くんが仲良くて」

「そんなことじゃねえ！ あいつがリレーの特訓した相手が、その杉本の片思いの相手ってことか？」

返事は返らないが頷く気配は感じた。空気がぬるく動いた。

「あいつ、そんな奴とこそこそ走ってたのかよ！ どっかで練習してるとか言ってたのはそれかよ！」

てっきり、過去の因縁を水に流すべく、懸命に頭を下げているものだと思っていたのに裏を返せば、自分の惚れた女子の片思い相手になぜか近寄っていたとは。奴の発想は今に始まったことではないが、よく理解できない。なぜ、それを言わなかったのか、なぜ、そう伝えようとしなか

ったのか。膝に力が入る。思わずくしゃみを二回する。

「静かに！ 聞こえるから」

「けど、なんだよ」

「とにかく立村くんは、杉本さんが喜ぶことなら何でもしてるの。そこでその男子と話をしたら、その話題を杉本さんに持っていくし。チャンスがあれば取り持ってあげたいと思っているみたいよ」

「わけわからねえ、いったい何やってるんだお前ら？ お互い惚れてるのか嫌われてるのかわからねえのかよ。それで互いに、ライバルはいい奴だからって褒めあって、結局近づこうとしないってわけかよ。イエスかノーかはっきりしろよ」

本当は貴史も別の意味で文句をたらたら言いたかった。

結局、立村は何も解決しないままここにいるということになる。

罵倒されて、過去が暴露されてしまい、身動きがとれずにいる。

自業自得と言えればそれまでだ。

だが。

車がまたふたりでがたんごとん揺れる。

肩が触れ合うほど側にいるのに、言葉だけが水平に行き来するだけ。

美里も泣いてない。貴史も怒鳴ってない。

闇の中、時折感じるぬくんだ空気を求めつつ、ふたりはふれるぎりぎりまで側にいた。

小学生の頃だったら決してめずらしくなかったふたりきりの語り合いが、夜許されなくなっから何年経つのだろう。

時が経つのを忘れて語り合うところまでは同じだけれども、こんなに心が封鎖されたまま言葉を交わす夜は今までなかった。

うちあけ話のはずなのに現れるストーリーは似非物語。

少なくとも貴史には、そう見えた。

決してそんな似非物語を好む美里ではないのに、なぜか立村に引き込まれる恰好で登場人物の一人に紛れ込んでいる。

隣でしばし黙っている美里は、貴史の知らないところでものを思う女子のひとりに変貌しようとしていた。

――美里、なんとか言えよ。言うことあるだろ！

こんな似合わない芝居に立ち会わされるはめになった貴史も、たまったものじゃない。

すべてが嘘で塗り固められているなんて、ありえない。

立村を捕まえて、これは一度、首根っこ抑え込んで強制尋問せねばなるまい。

そうでもしないと、貴史が今度は許せない。

「美里、とりあえず明日、どうするかだ」

「うん、明日以降、だね」

「立村をどんな顔して迎えるつもりだ？」

「何事もなかったって顔で」

「できるのかよ」

「できるよ、それくらい。二年間がまんしてたんだもん、そのくらい平気だもん」

美里がそこまで言い切った時だった。

いきなりシャッターの開きかける音がけたたましく響いた。

斜めに刺さった街灯の光が、白線から長方形に広がった。

「貴史、あんた、潜って」

美里に促され、貴史は大急ぎでしゃがみこんだ。美里ひとりが外に出た。そこで気がついた。美里はピンク色のネグリジェに白い手編み風のカーディガンを羽織っていた。もろ、寝間着、湯上がり姿だったというわけだ。立村がこの場にいたらどれだけ鼻血噴いていただろうか。想像する前に現実へと引き戻され、貴史は改めて背中を丸めだんご虫ポーズに徹した。

――密会かよ。

そんなわけないのに、第三者が混じった瞬間それは別の意味となる。それだけは全力で避けたかった。

風の音がはたと止む瞬間に紛れて、誰かが車庫のドアを開けようとしている。

美里の足元に隠れる恰好でうずくまったまま。

「大丈夫、たぶんお姉ちゃんだから」

「なんでわかる」

「黙ってて。足音の感じでわかるじゃない」

——けど見られたらやっばしまずいだろ。

聡子姉ちゃんのことを言っているのだろう。美里とは三つ違いで貴史の姉とは同い年。

「きっとどっか行くのよ」

「行くってこんな夜にかよ」

人のこと言えた義理じゃないが。

美里は答えずに車から降りた。外から冷えた空気が車内に流れた。

——またドンパチやるのかよあのきょうだい。

三人姉妹の真ん中で上から下からつつかれることの多い美里が歳の近い姉とうまくやれるわけがない。貴史の知る限り、聡子さんと美里が肩を寄せ合って恋愛話なんぞしているところなんてみたことがない。基本として美里はプライベートな話を家の中では避けるようにしているらしかった。学校のことも必要最小限のことしか報告せず、当然立村との交際も菱本先生経由の情報のみでごまかしているはずだ。

——ま、暗いから見えねえとは思うがな。

万が一、美里の両親だったらまた話は違うかもしれない。さすがに夜遅く車庫でたむろっているなんて気づかれたら大目玉喰らうだろう。もちろん避けたい。美里の言うことによれば聡子さんはおんもへ出かけるらしいのでうまく通りすぎてくれればいいのだが。

息を殺して耳の穴だけ大きく広げて様子を伺うことにする。

「あれ、どうしたのよ美里、またここでいじけてたってわけ？」

聡子さんの声はちょっとしゃがれていてそこがまた大人っぽい。貴史の姉と比較してみてもやはりどこか色っぽい。彼氏がいても不思議ではない。実際いるのだろう。美里からも聞いている。

「いじけてなんかないけど、さっさと行けば」

「へえめずらしいわねえ。つかかってこないなんて、あんたがね」

——やっばし、修羅場かよ。

清坂家姉妹げんかのすさまじさを直接見ることは、さすがに最近少なくなった。小学時代はとにかく取っ組み合いが多かったけれども、美里がスカートを好んではくようになってからは意識して避けているようだ。その代わり舌戦は激しい。貴史もたまに「ここまで言っているのか？」と仲裁に入りたくなる時がある。

車のボンネットによっかかっているのだろうか。少しだけ座席が揺れる感じがする。

「たまにはひとりになって考えたいのよ。邪魔しないでよ」

「何考えてるんだか。例の彼氏のこと？」

——ま、家族にばれちゃってことか、立村とのことも。

こつこつ、車を指先で叩くような音が聞こえる。

「そんなの関係ないでしょ！ お姉ちゃんみたいに二十四時間そんなことばっかし考えてるわけじゃないんだから。私だって忙しいの。学校のこととかいろいろあるんだから、頭脳労働大変なのよ」

——頭脳労働かよ。

聡子さんの通っている公立高校は成績が中より下程度の生徒が集まる学校だ。そこを狙った嫌味と取られてもしょうがない。決して美里は意識しているわけではないのだろうが、こういった神経をさかなでしやすい発言をたまにする。三年D組の女子たちがぶち切れやすいのはそのあたりにあるのかもしれない。

「頭脳労働ねえ、何様のつもりよねえ。することはしてるくせにねえ、ずいぶん見下した態度取るじゃない？」

「別に見下してなんかないわよ。ほら、えーさん待ってるんでしょ。黙っててあげるから、行きなさいよ」

「誰が最初からえーくんのところに行くって言ってるのよ。たまたま気になって降りてきただけじゃないのよ。ねえ」

またボンネットを叩くような音がした。たぶん爪の当たった感じからして、聡子さんの指だろう。そういえば聡子さんは今年の夏休み家族旅行中真っ赤なマニキュアをしていた。闇の中で思い出した。

清坂姉妹の戦いは、火ぶたを切られたばかり、のようだ。長期戦覚悟せねばなるまい。

「部屋が三人分ちゃんと区切られてればこんなところにこなくたっていいのよ。なんで私ばかり、カーテンなんかで区切られてなくちゃいけないのよ」

「だったら彼氏のところに行くなりたーちゃんのところに行くなりしたらいいじゃないの」

「私、お姉ちゃんと違うから」

——わあ、これはこれはもう火に油注ぎまくってるぞ美里！

普段なら即、割って入るべき場面だ。貴史もなんとなく頃合いを見計らって空気をかき回しなあなあにするのがいつものことだった。

しかしながら今夜ばかりはそうもいかない。黙って成り行きを見守るしかない。

「私、お姉ちゃんみたいに夜、泊まり込むなんてこと、する気ないから」

「ま、うちの親は絶対許さないだろうけどね」

美里の発言は聞こえない。黙っているようだ。聡子さんの勝ちパターンに持ち込まれたようだ。

「品山になんて泊まりにいかれたら、みな発狂するだろうなあ」

「行かないわよ。お姉ちゃんなんかと違って、変なこと考えてないもん」

「生理始まったばかりじゃあ、そうよね。避妊のタイミングなんて読めないもんね」

突然、金切り声が飛んだ。風の音が止んだような気がした。きっと美里の激怒に恐怖したんだろう。わかる、わかる。

「何よ！ そんないやらしいことばかり考えてるから、お姉ちゃんの顔だんだん老けてきてるんだよ！ 顔、シミできてくるくせに！」

――美里、それ、ちょっとまずいぞ。それに顔のシミって、うちの母ちゃんに言ったらぶっとばされるぞ。

女子の実態を知らないわけではないにしろ、美里の罵倒には縮み上がりそうになる。

いやほんと、女子同士の世界には入っていきたくないものだと、改めて思う。

いつものバトルなのかその辺はわからないが、ただ清坂姉妹の罵り合いに関しては腹の中に何にもないことがよく伝わってきた。

聡子さんとも長い付き合いなのでその辺は貴史もわかる。仲良しこよしではないにしろ、彼のあだ名が「えーさん」だということを知っているということは、すなわちそれなりに会話が成り立っていたからだろう。美里の彼氏が品山に住んでいることも、菱本先生経由で広まったわけだがそれなりの事情は把握されてもしかたないと思っているのだろう。美里も聡子さんもそのあたり下手に隠すことなく本音でどなりあっている。

――そこがうちのクラス女子と違うところか。

「ちょっと、こっち向きなさいよ。なあにがシミ、よ。あんたなんて顔ににきび増えてるじゃないの。毎日にきびの薬べったり塗りすぎて臭っているくせに」

「ないわよ！ ちゃんと治ったもん」

「あれだけ抗生物質使ったらねえ。歳取ってから影響でるんだからね。覚悟しときなさいよ。それにしても誰に見せたくて毎日鏡見てるんだか。うちの母さんと同じ遺伝子持って生まれてるんだから、努力したって限界あると思うのに、よくがんばるわよねえ」

「遺伝子だったらお姉ちゃんだって同じじゃない！」

「それにさ、あんたの彼氏この前ちらっと見たけど、何あれ、なんだかろくに食べ物食べてないようなかかしみみたいな男。悪いけど、やめといたほういいよ。まだぺちゃパイの美里にはわかんないかもしれないけどね、男として、あるべきものがないんじゃないかって感じじゃんね」

――うわあ、聡子さん、立村の顔見てるのかよ！ ろくに食べ物食ってねえって妙に受けるぜ。

笑いたい。笑えない。喉がひくつくのを必死にこらえた。

「友だちを馬鹿にするのはやめてよ。つきあってるかどうかは別として、人間として大切な友達なんだから！」

「ふうん、友達、ねえ。偽善者っぽい言い方だよねえ。あんたたち、二年も付き合ってた、お友達でごまかしてるってわけなの？ ま、中学生だからしょうがないって言ったらそれまでだけど、ずいぶん優等生であらせられますこと！」

――美里、やめとけ。聡子さんに成績がらみのことで突っ込むのは。

はらはらしつつも、貴史は密かに美里へ指令を送った。もちろんテレパシーだが、その素質が貴史にはなかったようで姉妹げんかを止めるまでにはいたらなかった。

「私だって、努力してるんだからね！ がんばってるんだから！ お姉ちゃんとは違うんだから！」

「勉強なんてしなくたっていくらでもいい男見つかるのに、あんたってばっかよね。よりによって品山の男子なんかとさ」

「しつこい！ なんで品山品山ってこだわるわけ？ 人の住んでいるところを馬鹿にするなんて、それ、差別だよ。お姉ちゃん人を差別しちゃいけないって学校で習ってないわけ？ 民主主義の教育、お姉ちゃんの高校では行われてないわけ？」

すごいっこみだ。もちろんいくらでもひっくりがえせるが。

「悪いけど青大附属の賢いお方と違って私はおばかさんだからわかんないわよ。けど、男子とのお付き合いの仕方とかそういうのはあんたよりずっと上手にやってるけどね。成績なんかよかそっちの力を身につける方が将来役に立つと思うけど」

「なによ、そっちの力って！」

またボンネットを叩く音。今度は平手なのか、ばさばさゆれる。

「本当にあんたのことを好きな彼氏だったらね、プレゼントにあんな陰気臭いハンカチなんか用意しないわよ。それに下級生と浮気なんてしないし、誕生日だって忘れてたりしない。何よりも、あんたにキスひとつしないなんて、ほんと、男として大丈夫？ そう言いたくなるよねえ」

「お姉ちゃんなんかと違うんだから！」

何度目の「お姉ちゃんとは違う！」発言なんだろうか。貴史なりにそのあたりの事情をたぐって思い当たるのは、かつて美里を露骨に嫌っていた女子たちと聡子さんとの性格がかなり似通っているというところだった。潔癖すぎる美里の性格が鼻につく、というのも確かにわからないではない。女子たちからすれば美里の性格がひりひりしすぎてうっとうしいと感じる部分があるのかもしれない。同じことを聡子さんも、妹故に重たく思うのかもしれない。

「私、お姉ちゃんと違って、すぐに男子と変な付き合いなんてする気ないし。第一、絶対変よ！」

すぐに付き合ったらえーさんのところに泊まるなんて。そんなことしたら大変なことになっちゃうかもしれないのに！」

「あんた勉強たくさんしてて、避妊のしくみも知らないの？ ばっかねえ。ちゃんとカレンダーで計算してつけるものつければ大丈夫に決まってるじゃないの。そんなことも知らないでびくびくしてるなんてそっちの方が頭悪そうに見えるわよ。それに」

足音が響く。

「あんたさ、なんで母さんたちがあの品山の男の子のこと嫌ってるか考えたことある？」

「その品山の子って言い方、やめてよ！」

「品山であんたが生まれる前、誘拐事件が起こったってことも知らないでしょ」

「それとどう、関係あるのよ！」

聡子さんがハスキーボイスでささくれた言葉をつぶやく。

「たくさんの小さな子がね、品山付近で誘拐されてそのままほとんど戻ってこなかったのよ。犯人は捕まったけど、すべてではない。しかも、その犯人はすべて、品山の住人だったってこと。そういうことよ、わかるでしょ」

――聞き飽きたことだけだなあ。

あくびが出そうになるこの話題。貴史も母から耳にたこができるくらい聞かされていた。

品山地区で貴史たちが生まれる前に起こったという大規模な集団誘拐事件。しかもほとんどの子どもたちが戻ってこなかったことと、とらえられた犯人のほとんどが品山出身者であったこと。貴史からすると

「たまたまなんじゃねえの？」

くらいしか思わないのだが、母たちからすると「品山」＝「誘拐犯人の巣窟」と勘違いしてしまっているようだ。単細胞すぎるその発想には、美里と一緒に呆れ返るしかない。しかも無関係な立村までも、犯罪者扱いされるというのは何か間違っているんじゃないだろうか。

美里が何か言い張っている。聞き流している聡子さん。風に吹かれてまだまだ続ける。

「美里、あんたはいつもさ、私や母さんたちが人の悪口ばっかし言ってるとか、レベルの低い話ばかりしてるとか、ぎゃあぎゃあ言ってるけど、私からしたらあんたの方がずっと差別主義者に見えるよ。前からあんた言ってたよね。私みたいに頭のよくない学校にしかいけないなんていやだからとかさ。成績が悪くてことで見下してるのはあんたの方だよ。それに品山の子と付き合ってることをずーっと隠してきてて、ばれたらばれたでぎゃあぎゃあ泣き喚くってのはどうなのよ。そんなに彼氏に自信あるならもっと堂々と振る舞ったらどうなのよ。そのくせ、キープにたあちゃん押さえておいてって、ずいぶんあんた保身の術使うのうまいよねって思うのよね。そういうところが私、大嫌い」

「お姉ちゃんみたいに将来のこと、何にも考えないでふらふらしている方がずっと私、大嫌い！」

美里が叫ぶ。風がシャッターを叩く。

「それに、何よ、貴史をキープ？　そういう発想しかできないお姉ちゃんたちってばかみたい！」

――いつものパターンだしそうおこなよ、美里。

貴史はため息をつくだけに止めた。男子にはあるまじきことかもしれないが、「たあちゃんをキープ」発言に似たことを数限りなくされてきているので、もう慣れっこ、ぶちぎれる必要もない。

「かたっぽで品山の彼氏と清く正しいお付き合いしておいて、もうかたっぽではたあちゃんといちゃいちゃしてて。欲しいものみんな独り占めしてるくせに、威張ってるんだもんね。そりゃみんなあんたのこと嫌うよね。賢い美里のことを好きになる男子なんてそうそういないよね。あんたの品山の彼氏が浮気してるって聞いたけど、当たり前だよ。たあちゃんにはかなわないって思ってるだろうしね。あ、そうそう、いい機会だから言っとくけど、たあちゃんと美里がくっ

つくんだったらうちの家族も羽飛さんちも大歓迎。みんなそう言ってるけどあんたがわけのわかんないことばかりしてすねるから、混乱してるだけじゃないのよね」

年の功なのか、聡子さんの冷静な口調は美里をあっさり叩きのめしているとみゆる。

ただ一言、反論したいのを貴史はこらえる。

——聡子姉ちゃん、悪いけど俺の最愛の彼女は、鈴蘭優ちゃんなんだ。

「お姉ちゃんのばか！」

美里の声がか細く響いた。さっきとは違い、くぐもった響きがする。

「そういういやらしいことばかり考えてるから、私、お姉ちゃんのこと、大嫌いなんだから！

何よ！ 何が、貴史とくっつけて言うのよ！ なんでもかんでも付き合うことにまとめようとする色眼鏡な見方って最低！ お姉ちゃんからしたら男子との付き合いはそういうべたべたしたことしかしないかもしれないけど、そんなエッチなことばかりしないでもいくらでも楽しいことあるのに！ お姉ちゃんの方が本当に馬鹿よ！」

「はいはいわかりました、バーズンには刺激がお強うございましたわね」

——刺激が強いのは俺の方だわ。

想像はついていたが、どう考えても貴史の姉よりはるかに大人だ。

「悪いけど、今夜別にえーくんとここに泊まるわけじゃないのよね、なんでもかんでも決めつけるってのもなんだけど」

車の助手席を思い切りばしりとひっぱたき、聡子さんは言い放った。

「さっき、窓に誰かが石投げたような気がしたんだけど、気のせいかなって思っただけ」

——おいおい、まさかばれてるのかよ！

聡子さんはそのまま家の中に戻っていった。

——やべえ、どうする？ 父ちゃん母ちゃんにまたぶん殴られるぞ！

足音が遠くなったのを確かめ、貴史は座席にしっかりと座り直した。全身縮こまったままでいると足がみしみしして痛い。まずは足首とふくらはぎをもんだ。

窓から覗く前に美里がそのまま車に乗り込んできた。顔は能面のままだった。まだ微かにしめっている美里の髪の毛が冷たい。

「やべえな、そろそろ俺、行くわ」

「貴史、あのね」

「うちの親にばれたらぶん殴られるだろ」

「大丈夫だよ。お姉ちゃん、私が弱み握ってるから。それより貴史」

何度も美里は、貴史の名を呼んだ。

「貴史、私」

不意にしめった髪の毛が貴史の喉元に迫ってきた。同時に全身そのままぶつかると、美里がむしゃぶりついてくる。

「おい、美里どうした」

「私、違うよ」

「あ？ 何がだ？」

言葉を発するのも喉がつまってうまく言えない。膝と腕、腹、胸、すべてに絡みつく美里の全身が重たく、やわらかい。

「お姉ちゃんみたいなこと、絶対しないのに、なんで、どうして、私だけ、あんなこと言われなくちゃなんないの？」

そこまではまだ平らな言葉だった。もう一度、貴史を呼んだ。

「だからなんだよ」

「貴史、私、どうすればいい？」

両腕、しっかりと貴史の背中に絡みついた。この体勢を「抱き合う」と指し示すことは承知している。

「おいおい、美里、お前あかんぼじゃねえだろが」

しゃくりあげ出した美里の背を貴史は撫でた。そうせざるを得なかった。

――たく、世話の焼ける奴だぜ。幼稚園の頃からまったく変わっちゃあいねえ。

美里が泣きじゃくりながら貴史に抱きついてくることは、幼児の頃なら毎日よくあったことだった。

小学校時代だって真夜中二人きりで語り合うことは珍しくなかった。

肩を寄せ合っているの間にか眠っていたこともあった。

決して、やましいことじゃない。

ただ違うのはひとつだけ。

――しかし、もういい年なんだから美里、そう、恥じらいっつうものを持てよ。俺が立村じゃなくてよかったよな。あいつなら百パーセント鼻血出してぶっ倒れてるぞ。

しっかりと感じるでこぼこの感触が、貴史の全身に広がっていた。落ち着かせるためにだけくっつきあっているだけなのに、なめらかに流れることなく、ごつごつしたものが肌に伝わってきていた。幼い日、悔し泣きしている美里をなだめるために抱きしめたあの頃とは違うものだった。

。

何年ぶりだろう。ふたりきりで、暗い中密着して過ごした夜は。

青大附中に入学してから、そういえばもう、一度もなかった。

もう誰も降りてこなかった。

風が収まりつつある中、美里のすすり泣きが収まるまで、貴史はしばらくその体勢を崩さずにいた。

冷えた身体が自然と温もり熱くなる寸前、貴史の腕を押すようにして美里は顔を上げた。

「ごめん」

目を伏せたまま、両手で目を擦った。だいぶ落ち着いたように見えた。貴史も少し身体を離すように座り直した。

「聡子姉ちゃん、ばらすかなあ」

「さっきも言ったでしょ。大丈夫だよ。それよか」

ひとしきり泣いた後はすっきりしたのか、美里は大きく息を吸い込み、

「立村くんのことだけど」

鼻水をすすり上げた。手探りで何かを探している。たぶんティッシュだろう。バックミラー側のものを手渡した。今度は礼も言わずにしゅっしゅと引き出した。

「今日のことは、言わないでおいてくれる？」

「言うわけねえだろ」

言い切って迷った。つまり、この場でふたり話をしたことか、それとも。美里が答えを続けた

。

「私も、立村くんに、今日のこと見たってこと言わないでおくつもりだから」

「そっちのことかよ」

どうやら美里は、昼間の修羅場について話しているらしかった。

「うん、たぶん立村くんは、杉本さんのことばかり考えていて気づいていないと思うんだ」

いったん鼻をかんで、美里は数回咳払いをした。

「明日の朝、そんなことあったっけって顔して通すつもり」

「おいおいそりゃまずくねえか？ 立村が気づいてなくてもなあ、他の奴がお前いたこと見ているかもしれねえだろが」

「そっか、そうだよね」

貴史の言葉にあっさり美里は頷いた。

「どちらにしても、居心地悪くなることは確かだよな。立村くん。明日から、うちのクラスで何言われるだろ。今日のこと知ってる人絶対いるだろうし」

「古川は知ってたな」

「こずえは私が黙らせるから大丈夫。それより、クラスの女子たちが立村くんに関心言ったりしないかなって、そのことが心配。たぶん男子たちはあまり気にしてないと思うしそのことに不安はないんだけど」

いったん話し始めると止まらない美里に、貴史もしばらく相槌を打つのを忘れていた。

「たぶんね、立村くん、何も考えてないと思う。杉本さんのことで頭いっぱいなはずだから、自分がどう言われようがそんなの気にしてないよ。でも、うちのクラスでまたいろいろと問題が起きてしまったらどうしよう。後期評議委員に選んでももらえないかもしれないし。評議委員長に決まってるのに、その前にクラスで選んでももらえなかったらお話にならないよ」

「ああ？ ちょっと待て。美里、お前なんで振られた相手にそうもこだわるんだ？ ま、立村もどういうつもりか知らねえけどよ」

貴史はたしなめた。もちろん立村が自分の親友であることに変わりはないが、だからといって美里もそう鷹揚な対応ができる心境じゃないはずだ。長年付き合ってきた彼氏に露骨な形で裏切りを見せつけられてしまい、はたしてそこまでマリアさまのような気持ちでいられるものか。

「振った振られたは関係ないの！ 貴史、あんたならわかるでしょ！」

「説明されねばわからねえよ」

「じゃあ言うからちゃんと聞いて！」

美里が金切り声をあげた。同時に軽い箱のようなものが顔にぶつかった。さっき美里に手渡したティッシュケースだった。

「あのね、仮に私と立村くんが付き合うのやめても、三年D組のクラスメートでいることにはかわりないよね？」

ティッシュケースを膝に置いたまま貴史は頷いた。

「そりゃまあそうだ」

「でしょ？ それに立村くんが評議委員でいることにもかわりないよね？」

「選ばれればな」

「選ばれなくちゃいけないの！ もちろん後釜になる奴なんていないと思うし、よっぽどのことがなければそんなことないと思うけど、でもね、女子たちの中には貴史、あんたになってほしいって言う子もいるのよ」

「はあ？」

露骨に美里が嫌がるのは目に見えている。

「私、何度も何度も言われて耳にたこできてるの！ でも、立村くんによっぱり最後まで評議でいてほしいよね？ 男子たちは少なくともそうでしょ？」

まあ、これ以上面倒は起こしたくないだろう。立村評議委員長で最後まで通してほしいことに変わりはない。

「私もそうなの。そりゃ、もちろん、いろいろあるのはわかるけど、でも立村くんがどんなにがんばっても杉本さんはなびいたりしないから片思いのままのはずなの！」

美里が話していたことを思い出した。その杉本という女子の想い人は他校の男子だと。

「むくわれねえということな。あれだけ騒ぎを起こしておいたにも関わらず、どうしようもねえと」

「そうなの！ だから、立村くんはどちらにしてもひとりぼっちなの。私がもし別れることOKしたら、たぶん立村くんはクラスでも孤立しちゃうよ！ 男子たちはみな気にしてないし貴史も南雲くんもいるし、それに評議のみんなもいる。けど、女子の嫌がらせで学校休んじったりしたら大変だよ。それに」

口ごもった。

「なんだよ」

「菱本先生のことだってあるし。菱本先生はきっと立村くんをなんとかしてクラスの仲間に溶け込ませて卒業させたいと思ってるよ。だからあんなに嫌われても一生懸命声かけてるんだろうな。無視し続ける立村くんにも問題があるけど。でもどっちにしても私、立村くんにはクラスのみんなと仲良く、先生とも笑顔で話ができるようになってほしいの。卒業式ではみんなひとりも欠けることなく、参列してほしいの」

美里が息巻いている間、貴史はぽつりとつぶやいた。たぶん聞き取れなかったのだろう。美里の返事はなかった。

「美里、お前さ、勝ち目のない戦いはしねえんだな」

——つまり立村が振られることを知ってて、その上で待つといった魂胆かよ。

もちろん美里の言い分は正論だ。そのことに不足はない。

クラス女子たちが何かかしら立村を攻撃していることも、そのとぼっちりで貴史もしょっちゅう評議委員を勤めろという圧力を受けていることも。

公私ともにパートナーとされてきた美里も、そのことを心配するのは当然のことだろう。

だが、露骨に振られた挙句、別の女子に熱を上げている立村をかばうにはやはり無理がありすぎる。

となるとひとつ理由が浮かんでくる。

すなわち。

——立村は杉本に振られて、あっさり美里の元へ戻ってくる。

それを見越しての保護者的振る舞い。そう考えれば筋が通る。

「D組男子代表としては、美里がそういう大人のやり方してくれるのは助かるけどな」

「でしょ、でしょ！ 立村くんだけじゃない、他のみんなにもプラスになると思うの！」

「けど、立村には知らんぷりで通せると思うか？ あいつだって馬鹿じゃねえよ。よくわからねえけど生徒会役員改選に伴うごたごたで大立ち回りしちまったわけだろ？ ばれてねえとは誰も思わねえんじゃねえの？ 特に美里、お前がなーんも知らねってのは通じねえぞ。あとでばれたらさらにあいつへそまげるだろ」

「そうなんだよね、そう」

美里は小声でつぶやいた。空気の塊が揺れた。貴史の頬にぶつかる。

「わかってる。私だって、きちんと話さなくちゃって思ってる」

「じゃあどうするんだよ」

「話して、その後で、ちゃんとけじめつけるつもりではいるよ」

「けじめ？」

言いかけて気づいた。お付き合いしている同士のふたりが使う「けじめ」とはひとつしかない

「別れるってこと。しかたないよ。それは、仕方ないけど、でもね」

美里が低くつぶやいた。微かな言葉が貴史の耳元に流れ込んだ。肩をぶつけてくるのがわかる。

「卒業するまでは、私が彼女でいた方が絶対いいの！ 立村くんも、それに杉本さんにとってもね」

「ああ？」

なんと美里は、浮気相手の女子にまで思いやりを持って接したらしい。信じられない話だ。こういう心理を下ネタ女王の古川こずえはどう分析するのだろうか？

「杉本さんは立村くんと付き合いたいなんてこれっぽっちも思ってないの。大好きな人のことばかり思って毎日写真を見つめているような一途な子なの。立村くんが一方的に杉本さんへ片思いしているのかもしれないけど、もし強引なことをしたら今度こそ居場所がなくなっちゃうよ。あの非常識な評議委員長の立村くんは女子なら誰でもいいと考えてる最低の女たらしだって」

「非常識な評議委員長って、その言い方ねえだろうよ」

髪をぶんぶん振っている。ぬくもりも一緒にぶつかる。

「一年の頃からいろいろあったから、立村くんがいじめられっ子になっちゃう可能性は今、ゼロじゃないはず。杉本さんとの間でまたごたごたあったら今度こそ総スキャン食っちゃうよ。立村くんだけじゃない、きっと杉本さんも同じく嫌われ度増してしまうよ。そうしたら、ふたりとも悲劇だし」

恋のライバルをそこまで心配する余裕があるとは思えない。謎だ。

「けど、もし私が今まで通り付き合っていたら、そんな噂は気の迷いなんだよってことでごまかせるじゃあない？ 結局は私と付き合ってるんだから、杉本さんとのことはたいしたことじゃないんだって言えちゃうでしょ。立村くんがどう言うかわからないけど、私とつながってさえいれば、少なくともひとりぼっちにはならないよ。卒業して、高校に進んで、クラスが別々になったらそれはその時考えればいいし。貴史、私の考えてること、間違ってるかな？」

間違っているも何も、貴史にはまったく理解できない思考回路だ。

だから女子ってややこしい。

――けど、ま、美里の言う通りではあるよな。

目が闇にすっかり慣れ、今では美里の見せる細かな表情も伺える。

第一報をこずえから聞いた時と比べると貴史もだいぶ落ち着いた。

聡子姉ちゃんに見つかったことは仰天ものだが、美里が言う通りお互い後ろ暗いところがあるらしいし、なんとかごまかしはきくだろう。あとは家に戻った時どう言い訳するのだが、見つからなければなんとかなる。

――美里はどっちにせよ立村と別れるつもりねえってことか。

それさえわかればあとは楽勝だ。立村の「浮気」とも言える行動を許す太っ腹なところを見せて余裕を持たせ、その上で来年三月の卒業式まで持たせる。その間に美里なりの努力を行い、そ

の上でなんとか立村の気持ちを取り戻すつもりだろう。美里の性格上、そう決めたからにはとことんベストを尽くすに違いない。

成功するかどうかは立村の反応しただが、あの優柔不断野郎が美里の想いをあっさりはねのけるとは思えない。もちろんそれなりの……修学旅行で一夜を明かした仲である以上の……感情は動くはずだし、なによりも美里の言う通り、

――卒業までは絶対に波風立てる気ねえだろ、立村も。

恋愛云々ではなく、評議委員長としての野心として、決してそんなことはしないだろう。

男子ならば当然だ。せっかく手に入れたトップの座、もっというならクラス内での代表としての誇り。

貴史からしたらどうだっていいことだが、いじめられっ子の過去をもつ立村にとっては決して手放したくないものに違いない。美里の言い方を借りれば「居場所」をこしらえたというわけだ。

いじめられることのない、もう戦う必要のない「居場所」。

美里の友としては難しいところもあるが、立村の立場を慮ればしがみつきたくなる気持ちもわからなくはない。多少の問題は別として、なんとか守ってやりたい気もするのが貴史の本音だった。

――うちのクラスで卒業ぎりぎりになってわけのわからねえいじめ問題なんか起こしたかあねえよな！

「貴史、あんたどう思う？」

一通り話し終えた美里の呼びかけに貴史は簡潔に答えた。

「お前がその覚悟なら、協力するっきゃねえだろ」

「よかった」

「やっぱし、みんなで卒業してえだろ」

「そうだよな。あんたならわかってくれるよね、貴史」

「あとな、美里」

そろそろ脱出の時刻。そっと音を立てぬよう車の後部座席ドアを開け、貴史は尋ねた。

「最近お前と新井林とができてるって噂聞くけど、ガセだよな」

何気なく口にしたつもりだった。一瞬間が空いたが、いつもどおり美里のあっさりした声が聞こえてきた。

「まさか！ 誰そんなこと言ったの？ そんなこと言ったら私何人の男子と付き合ってるのよ。立村くんと、あんたと、それに新井林くん？ そんなに私だって暇持て余してなんかないわよ！

どっかのお姉ちゃんと違うんだから」

――立村くんと、あんたと、それに新井林くん？

笑い飛ばす美里には曇りなどない。

――当たり前だ。なんだよガセネタ流してるの、シャーロック・ホームズ、てめえだろが、ほれ難波。

難波のわけあり口調で伝えられた「美里と新井林との交際疑惑」なんてあっさり却下だ。滑るように車から降りた。風は完全に収まった。今のうちに駆け出そう。

美里が翌日から勢いよくすっ飛ばしたことは誰の目にも明らかだった。

婚約時代がバラ色なのかそうでないのかあえて問わないが、菱本先生も寝不足の顔でもって、「おいおい、清坂、あと立村はいないのか？ あさっばらから駆け落ちか？」

単なるさぼりなのを茶化していた。

「駆け落ちなんかじゃないでしょ、きっと別れ話よ」

「そうそう、清坂さんも愛想つかしたんじゃないの？」

「どう考えたって遅いと思うけどねえ」

「失われた三年間は戻ってこないよねえ」

一部の女子たちが声をひそめるふりして実はおおっぴらに囁いている。

女子連中の噂話、広まるのはおっそろしいほど早い。

「まあまあ、そっとしてやんなよ。男と女の仲は一筋縄ではいかないんだから」

たしなめているのは当然、こずえだった。

「お互いさまじゃないのよ」

「でもさ、もともと清坂さん、どっかおかしかったよねえ」

「なにがよなにが」

「あんななよなよした奴とどこがよくって」

まただ。立村を露骨に揶揄するその物言い、男子としては黙っているわけにはいかない。

「ちいと黙れよ。うるせえぞ」

むっとした顔で発言主はそっぽを向いた。先生がしゃべっている間だけに言い返せないだろう。ざまみろだ。貴史がついでに睨みを周囲ほぼ一円に効かせた結果、女子連中の緩んだ口はぴったり閉じられたようだった。

――美里なりになんとかしようってことだよな。

貴史が想像していたよりも早く、立村を巡る噂は全校生徒の間に広まりつつある。

断言してしまえるのはひとえに、貴史への問い合わせが休み時間中殺到したためだった。

立村に対してはみな、軽蔑の眼差しを投げるだけに留まっている。もともと何を言われても黙っている性格だし、それ以前に教室から即脱出してしまい他人の話しかける隙を与えようとしない。貴史もなんとか一声かけようとしたのだが、「起立、礼、着席」の号令が終わるや否やさっと走り去ってしまうのだ。いい方法が見つからない。

一時間目をしっかりさぼり、その後知らん顔して戻ってきた美里だけはなんとか捕まえることができた。「いい、あんたにはあとで相談したいことあるから、うちに帰ってからにする」

なにやら決意を新たにしたような堅い顔で言い放たれ、それはそれで終わりとなる。

どちらにしても、三年D組評議委員カップルの今後は今のところ不透明なままだった。

色恋沙汰には口を出さないが、友だちとしてのつながりを保つためにはもちろん努力を惜しまない。

貴史なりに、気がかりなままではある。

もちろん、頼みもしないのに情報を運んでくる相手もいる。

「羽飛、あんた昨日なんでいきなり電話を切ったのさ」

こずえにからまれると厄介なので、適当にごまかした。

「せっかくこっちが真剣に話をしている最中なのに、切られちゃ頭にくるじゃん？」

「悪い、俺もやぶ用があったんだ」

「なによそのやぶ用って。落語じゃないんだからさ、それよりちゃんとあんた、あの後のこと考えてくれてるわけ？」

もちろん考えているから、昨夜はこずえからの電話をがっちり切ったのだ。

それ以上伝える必要はない。

「立村とは俺なりに話すから、女子連中は口出しするんじゃないよ。面倒になっちゃう」

「もう遅いよ。もうお見事ってくらいぱーって話が広まってるよ」

――そりゃ、放課後ともなりゃあな。

当の本人ふたりがさっさと姿を消している状況下、部外者の貴史が口出しできる状態にはない。

「ま、古川にはこれから美里が泣きつくだろ。慰めてやってくれよな」

「ご冗談。そんなわけないじゃんよ」

意外にもこずえは笑い飛ばした。ということは、美里もあまり立村の件について口外していないということだろうか。それならそれで納得だ。一番詳しくしているのは貴史一人ということになる。

「私は評議から離れてるからね。本当に詳しい事情を知ってるわけじゃないよ。噂話クラスの情報が入るけどさ。たいがい美里へのやっかみと立村のこき下ろしだけよ。どう考えたって公平じゃあないよね」

「女子は短絡的だからなあ」

言いかけたが机の足にキックされたのであえて黙った。

「羽飛、あんた女子に対してずいぶん、男尊女卑的思想を持っているんだってこと、自覚したほうがいいんじゃないの。美里相手だったらぶんなぐられてたよきっと。なよついてるけど立村の方が、こういっちゃあなんだけど女性への敬意みたいなもの、ちゃーんと持ってるよ」

「あいつはアマゾネスな女子に囲まれてびびってるだけだろが」

だからなんで、と言いたくなる。人の気持ちを逆撫でしたいのだろうか。男尊女卑とかわけのわからないことを言われたって貴史としては困る。立村と比較されるのもむかつくが、奴の優柔不断な性格をいきなり讃えられてもこちらとしてはたまったものじゃない。

「ああわかったわかった。俺が悪うござんした！　じゃ、もう俺には用ねえだろ。じゃあな」

「ちょっと待ってよ、まだ話が終わってないのに。あんたそんなに急いでちゃあ、あっちの方も早いつて思われちゃうよ」

――なんだよそのあっちってな。

かまってられないのでそのまま流すと、こずえはブレザーの肘をつまむようにして貴史に擦り寄ってきた。

いやらしくはないのだが、かなり接近してきている。

「なんだようるせえな」

「美里が動いてるのはね、ほら、評議委員の改選が近いからよ。あんただってそのくらいわかるでしょが：

「評議委員のことかよ。どうせあいつがあっさり」

言いかけて黙った。

美里も、何かあるにつけてそのこと、しゃべっていたような気がした。

――やたらとあいつらこだわってるな。

話を聴き直す準備に切り替えた。

「結論だけさっさと見えよ。悪いが俺、すげえ忙しいんだ」

「つまりさ、立村が評議から下ろされる可能性を美里はすごく心配してるのよ」

命令された通りこずえは結論をさっさと伝えてきた。

「今までも羽飛にお鉢がまわりそうだったのを無理やり立村にすり替えてきたようなところ、あるからね。前からだよ、ずーっと前から。美里が裏でこそこそ根回ししてたことくらい、羽飛も知ってるでしょが」

知らないわけじゃない。認めることは親友を貶めることになる。だから黙る。

「今回の一件で立村は最大のピンチに立たされたってわけよ。ま、あいつのことだからどうせ下ろされたら下ろされたで開き直るだろうけど、どっちにしても美里としては絶対やだよ。だから、評議の子たちに相談したりいろいろ走り回ったりと、まあ、忙しいのよ」

――追い詰められてるってわけかよ。

だからいきなり大泣きしたりしたわけだ。

「そうなのよ。だからさ、午前中美里が立村とさしで話し合いしたのは、その覚悟を問い詰めるためってことみたいなんだ。あんた、下ろされても平気なの？ 評議から下ろされたら、委員長になることすらできないんだよって」

「そりゃ、無理だわな」

「もっともあと半年もないのに、いきなり下ろすなんてこともしないとは思うけど、女子たちははっきり行って浮気した男を絶対に許さないからね。ほんとのとこどうだかわからないけど、立村は堂々と杉本さんに浮気したようなものだから。美里という彼女がいるにもかかわらず」

――もっとも勝算ありで美里は開き直ってるがな。古川、そのこと知らんのか。

やはり、すべてを伝えているわけではなさそうだ。貴史ひとりに、本当のことを話しているだけだ。

「じゃあ、どうすれって言うんだ？ こればかりは来週の委員改選を待つっきゃあねえだろ」

「方法は、あるよ」

こずえは両腕を組んだ。腕に襟元のリボンが触れ、揺れた。

「なんだそりゃ」

「選択の余地なしってことでさっさと機械的に片付ければそれでOKってこと」

目が笑っていない。まっすぐ、貴史を見上げた。一応背が高いのは自分の方だと意識してしまった。

「何を機械的にするんだ？」

「委員改選は来週のロングホームルーム。これは決定事項。はて、評議委員に立村はふさわしいのかなんて一瞬でも考えさせることなく、無条件で決めさせるようにする。これしかないよ」

――またこいつ、わけわからねえこと言い出したぞ？

貴史の疑問符を認識したのか、こずえは椅子に座り直した。

「つまり、考えさせる時間をなくするのが一番いいわけよ。前期はだれそれが委員でした。後期はもうこのままいっちゃってもいいですよ、いいでしょ？ はい終わり、さ、次って感じで話を進めていけばいいのよ。女子たちは立村を軽蔑しているかもしれないけど、無理やり引きずり下ろすなんてことをおおっぴらにしたいとは思ってないよ。自分に火の粉かかるのやだもん。けどさ悪口や噂話でいつのまにか悪印象が沸いて、いつのまにか美里が愛想つかすのを楽しみにしているところはあるんだよね。女子は」

――お前も女子の一人だろう。

他人事のようにこずえはつぶやく。

「幸い、美里は開き直っちゃってるし、立村以外の奴と評議やりたいとは思ってないよ。だったら勢いで決めちゃって何も言わせないように進めるのが一番だと思うんだ。羽飛、そういうわけで、来週の後期委員改選、よろしくね。先走り汁、出さないように！」

――またあいつに先手取られたのかよ！

じゃあね、そう言いながらこずえは教室を出て行った。

――そりゃな、筋道は通ってるがな。

さっきこずえの蹴った机の足をひっくりがえしたくなった。

むかつくくらい空の明るい太陽が黄色く窓辺に差し込んできている。十一月、初冬だなんて信じられない天気だ。頭の中がこのくらい明るければこのまま帰って近所の仲間とバッティングセンターにでも行くんだが、すべてがこずえの言葉で台風直前の暗黒雲に包まれてしまった。

いや、こずえの言い分は間違っていない。

仮に立村からの提案ならば協力を無条件で申し出るだろう。

美里も、浮気されようが何しようが立村と一緒に評議委員として卒業したい気持ちは強いだろう。

でなければ、美里は立村をクラスの一員として守りたいなどと言わないに決まっている。

だからもちろん、美里をサポートすることに意義はない。ないのだがしかし。

――なんで古川なんだ！

いつもそうだ。貴史のことを追いかけてラブアピールに専念するだけの女子ならそれはそれで

対応のしかたもある。鈴蘭夕命を宣言しておけば自然と諦めるだろうし、友達として付き合うだけでいいとも思う。

しかし、古川こずえという女子は。

――それ以上のことを勝手にしやがる！

なんで古川こずえは先に

「羽飛、困ってるんだけどどうしようかなあ。立村が評議のまま卒業できるようにしたいんだけど、お知恵拝借していいかなあ」

の一言がないのだろう。もちろん相談してくれることもないわけではない。どこのファーストフードで食おうとかかどうでもいいことは持ちかけてくることもあるだろう。しかし、クラスの根本を揺るがすような出来事については勝手に話を進めて、「じゃあ羽飛、どう思う？」とくる。

――ちくしょう、意地でも認めねえからな！

却下することもできない。貴史の認識では、こずえの提案万々歳、認めざるをえない。賢いやり方なのだ。

それでも受け入れたくないのは、なんでだろう。

理由が見つからない。ただはっきりと、空気をずたずたにしたくなるような衝動にかられる。

美里にとっては親友、嫌うべき相手ではない、のだが。

教室を出て、まだ残っている他クラスの連中をあしらいながら……聞かれることの大半は立村と生徒会がらみの一件ばかりなので適当に答えておけばいい……なんとか玄関にたどり着いた。

――ほんとうやってみると、あいつ相当なことをやらかしたってことだわな。

立村が評議委員長どころか学年評議でいることすら危ういという現実を実感する。

もちろん美里にこんこんと説教されて反省するという落ちならばいいが、どうもそうは考えられまい。

「羽飛、おい」

靴を履き替えていると、またもや好奇心の塊・青大附属のシャーロック・ホームズに呼び止められた。

「悪いが立村がらみのことならもう耳にたこだからな、答えねえよ。優ちゃんの切り抜きだったら話聞くけど」

「相当しつこく追っかけられたみたいだな」

「まあな。しっかしなあ、難波」

スニーカーの紐を締めなおし、目を向けずに貴史は尋ねた。

「立村が評議委員になれねかったら、いったい誰が委員長やるんだ？」

――やれそうな奴、いねえよな。

いないからこんなに騒いでいるのだ。

「誰がって、つまりどういうことだ」

「いやさあ、俺にしつこく聞いてくるんだよ。立村の奴、自分の立場分かってるのかとか、あん

な奴評議委員長なんて勤まるのかとかな。ま、自業自得といっ ちゃあそれまでだけど、評議委員長として他に誰か後釜いるのかよ。ああ、新井林か。けどあいつ後輩だし、立場からしたら三年選んで当然だよな？ 誰もいねえだろどうせ、代わりになるやつなんかなあ？」

難波が無言で貴史を見下ろした。革靴だからするっと履くことができる。どうも最近こいつの趣味はダンディな足元に凝ることらしい。紐をいじっている貴史より早めに履き替えられる。

「ああ？ なんかしたかよ、さてはお前今日も寝不足かよ。ホームズ殿」

ひとつ前の質問に返答してきた。一瞬どの質問につながる答えかわからなかった。

「今の段階では、立村が委員長になるはずだ。代わりがいなければな」

「よくわからねえなあ、何かもこもこした言い方だなあ」

「代わりがいなければ、だ」

しゃちほこばった口調で難波は繰り返した。貴史に挨拶するのも忘れたのか、すっと外へ出て行った。

――なんだあいつ、頭が変なところ行ってるんじゃないか？

すのこから立ち上がり難波の背を見送った。あいつも同じ青大附高に進学するはずだ。勉強のしすぎでぼーっとしてしまったということはまず、ないだろう。

――また「日本少女宮」のビデオ見すぎて、トリップしちゃったんじゃないか？

とりあえず貴史が思いつくのはそのあたりの理由だけだった。

「おばさん、美里が帰ってきたら絶対電話よこせて言っというて」

先に帰った貴史は、まず清坂家に立ち寄り言伝しておいた。

やはり当事者である美里から話を聞かないことには何も始まらない。

すでに始まっているのかもしれないが、それこそ「霧の中」。道德の授業で読まされたドイツかどこかの詩人の一文が身に染みてよくわかる。真っ白で本当に何も見えない。他人事だから「闇」ではない。ただ何が何だか分からないというそれだけだ。

結局、貴史は委員会に関わっていないのでどうしても霧の中から抜け出せないままだ。

今までは三年D組の中で起こる出来事として、立村および美里との「友達」として首を突っ込んできたけれども、一步教室を出るとそこからは異世界だった。

――結局なんもわからねえまじゃねえかよ。

評議委員会がきわめてややこしい組織であることくらいは聞き知っているし、暗躍する奴らとも話をよくする。たとえば天羽、難波あたりなど。

でも最初から「友達」としてつながっているからこそ、語ることができるもの。

――立村もあの調子じゃあがんとして口割らねえな。

奴の性格が一筋縄ではいかないことを、貴史はいやというほど思い知らされている。

生徒会改選がらみの騒ぎで立村がどん底に落ちたまま這い上がれずにいることくらいは見えるが、はたしてそこから貴史がどう関わっていけばいいのかがわからない。かかわりたいとは思っている。でも、どうやって？

「貴史、うちに来たんだって？」

三十分も経たないうちに、今度は美里が家に飛んできた。息切らしている。走ってきたのだろう。

「わけわからねえだろ、お前に聞かねえと明日からどうすりゃあいいんだよ。修羅場だぞ、まじで」

「そう、そのことで話があったんだ。外、行こう」

うちの中で話せることではない。それはそうだ。だいぶ暗くなってきていたが、とにかくふたりきりでしゃべることのできる場所を見つけるしかない。朝っぱらではないし草むらに隠れてどうのこうのというわけにもいかない。外は猛烈に寒いので屋根のある場所を探すしかない。

「じゃ、デパート行こうよ。あそこなら夜七時くらいまで開いてるし、あまりうちの学校の人こないし」

「こそこそする必要もねえと思うがなあ」

「あんたはよくても私が困るの！」

もやっとするものが腹にたまる感触あり。返事をせず貴史は外に出た。制服のままで茶色のコートに羽織っている美里、その横顔をちらっと見た。

――相当、何かどんぱちやらかしたな。

繁華街は不良の溜まり場と言うけれど、貴史にとっては金のかからない打ち合わせ場所に過ぎない。

意外とデパートには学生が少なく、しかも何時間座っていても追い出されない。階段踊り場のトイレ前椅子が一番ベストだ。その辺は美里も心得ていて、即席を発見してくれた。

「取り急ぎね、あんたに協力してもらいたいこと、言うね」

コートを着たまま美里は座るや否や切り出した。

「来週、生徒会役員改選で結果が出たら、すぐクラス内の後期委員選びをロングホームルームでやるよね？ その時、菱本先生のお祝いをやりたいの」

「いきなりかよ？ 早くねえかよ。びびるぞ先生」

「うん、予定では二学期の終業式にみんなでお祝いの会を開こうと思ってたけど、今回は特別。びっくりさせたいの」

てっきり立村のことで、委員選出の根回しを頼まれるのかと思っていたのに、調子が狂う。

「けど、委員選びが先だろ？ あっという間にたんたかたーんたんたかたーんのお祝いが終わっちゃうのはもったいねえよ。もっとな、派手にぱーっと」

「もちろん正式にはあとでもっと楽しく時間とってやるつもり。でも、どうしても来週でないとだめなの」

「なんでだよ」

「立村くんの」

美里は言葉を切った。指をぽきぽき折っている。指が太くなるぞとつっこみたいがそんな雰囲気ではない。

「選択肢を選ばせたくないの。立村くんがそのまま評議のままでいるためには、それしかないの」

――古川に入れ知恵されたな。

放課後、古川こずえのささやきにかき乱された何かが、ふっと浮かんだ。

「古川も言ってたな。立村を無条件で評議に選出するにゃあそれっきゃねえと」

「そう。こずえの提案なんだけど、でも、そのままだと無理。わかるよね」

わかるわけないが、頷いておく。

「これで決まりです、終わり、って風にあっさり進めばそれでいいけど、中にはいやだって子もいるよ。立村くんの存在自体が許せないって言ってる人だっているし。それに藤堂くんも立村くんの態度にむかついたみたいで、友達としても縁を切るとか言ってるし。だんだん味方がいなくなってるよ。もし私が無理やりロングホームルームで委員選びを進めたら、きっと誰かが怒ると思うんだ。だから、そのために」

「話が全然見えねえんだけど、つまりこういうことかよ」

わかるようでわからない。貴史なりにまとめてみた。

「普段なら一時間みっちり委員選別に使うところを、今回は菱本先生ご婚約おめでとうパーティーに回して、残りの時間でちゃっちゃと終わらせるって企みかよ」

「そう。あんたの言う通り」

――哀れだよなあ、菱本先生、だしに使われてるじゃねえの。

笑いがこみ上げるが美里がふくれそうなので黙っていた。

「こずえの案を半分もらって、できるだけきばき決めるように進めていくつもりなの。今回、立村くん以外に誰かが委員として入れ替わるってことはないはずだから、たぶん大丈夫だと思うの。で、なんでそうしなくちゃいけないのか、その理由が必要なの」

「菱本先生、おめでとうございますの時間にまわすということかあ」

「そう。菱本先生へのお祝いはどちらにしても私たち三年D組一同で何かする予定だったものね。立村くんだけは死んでも参加しないと思うけど、来週サプライズでいきなり始めたら、いやおうなしにその場になくちゃあいけないじゃあない？ 立村くんだって、逃げるわけいかないよ。形だけかもしれないけど、クラスメートとして全員がお祝いするって形には持っていけると思うの」

前もって準備をするのではなく、びっくりさせるといった寸法か。

「悪くはねえけどな、けどあと一週間だろ、何ができるんだ？ お祝いプレゼントとかなんか作るのか？ 食べ物出すのか？ 余興はなんかやるのか？」

「まさか！ 貴史あんたなんかやりたいんだったら二学期の終業式までに仕込んどいてよ。今のところ考えてるのは彰子ちゃんの手作りクッキーと、女子みんなで作りの安産マスコットを作ることくらいなんだけど。女子たちには私じゃなくてこずえと彰子ちゃんたちから協力をお願いすることにしてもらえばたぶん、大丈夫だと思うんだ。あとは、そうだそうなの、貴史、あんたに頼みたいことってそこなの！」

両手を膝の上で握り締め、美里はまっすぐ貴史の顔を見据えた。今にもぴよこんと跳ねそうなるさぎのような眼差しだ。

「女子はなんとかするけど、男子全員で何かできないかなって思ったの。たとえば、あんたの大好きな鈴蘭優の歌を合唱するんでもいいし、その場で全員阿波踊りしてもいいし、とにかくお祝いしてますって雰囲気何か、やれないかなって」

「お前俺が何を考えてると思ってるんだ？」

「もちろん、お祭り。悪いけど獅子頭は無理だからね」

きっぱり美里は言い放った。反射的に貴史も美里の頭をはたいた。間髪入れずに足で蹴り返された。

「三十分くらいは先生へのお祝いで時間を潰したいの。そうすれば残り二十分から十五分くらいで委員決めることになるでしょ？ なんでそんなに急いでいるのかって言われたら、菱本先生のお祝いですって言えばすむじゃない？ 理由が必要なの。一瞬でも立村くん以外の人の評議委員になるって可能性を感じさせたくないの。そのためには、考える時間を短くしなくちゃいけないの！」

膝に一枚、ガムを載せた。いわゆる賄賂という奴か。貴史はすぐに口へ放り込んだ。

こずえからあらましを聞かされた時はかなりむかついたが、こうやって美里から新しい提案を受けるとなるほどと頷けるところもある。

実際、菱本先生の結婚祝いについてはなんらかの形で派手にやりたい気持ちは持っている。

もし、きっかけ作りの一端とするならば、それはそれでいいのかもしれないとも思う。

「しかし、手回し早すぎるんじゃないかねえのか？ そりゃ、まあ、奈良岡お手製クッキーはすげえうめえけど」

「でしょ？ さっき彰子ちゃんにはいいよって返事もらってきたよ。こずえにも話したし。あとは男子だけなんだ。私があんまりでしゃばると、また関係ない人たちがあだこうだって騒ぐからめんどうなの。貴史たちがやってくれば、問題なく事が進むと思うんだ」

「まあなあ、立村のことを考えると、やるっきゃあねえだろって気もするけどな、ただ」

貴史はひとつ、気になることを聞いてみた。

「万が一、立村が評議委員長にならないとしたら、代わりに誰になるんだ？ ま、そんなことねえと思うけどな」

「たぶん、新井林くん。去年も候補に上がっていたし、新井林くんが本気で委員長になるって思っているんだったら厳しいと思う。それに、生徒会改選の結果にもよるけどもし佐賀さんが生徒会長に当選したら、その時は新井林くん、がむしゃらになって委員長になりたいって思うんじゃないかな」

「男の面子って奴かよ」

「うん」

美里は大きく頷いた。目を伏せた。

「去年立村くんが委員長に指名してもらえたのは、本条先輩が後ろ盾についてたからよ。本当は立村くん、先輩たちからも頼りないって言われていたし、できれば天羽くんあたりに委員長をつて話が出てたらしいもの。けど、本条先輩が反対を押し切って決めちゃったの」

ちょっと待った、今、美里は「天羽くんあたり」と言わなかったか？

何か小石がどこかの血管につまったようだ。もろ、ひっかかる。

「美里、ちょい待て。最初、天羽が委員長候補だったのは本当なのかよ」

「そうだよ。特に二学年上の結城先輩がお気に入りにしてたの。私たち女子評議もなんとなく、次は天羽くんかなって思ってたし。けど、本条先輩がずっと立村くんをひいきしてたから、いつのまにか忘れてたけど。あ、でもね、天羽くん、立村くんのことを応援してくれてるしやっかんでなんかないと思うよ。男子評議って気持ち悪いくらい仲がいいもん、私なんかおっぴり出されてる」

――気のせいだよ。

そうだ、たぶん、気のせいだ。

なんでひっかったのか自分でも見当がつかない。

立村が評議委員として頭角を現してきたらしいという噂を耳にしたのは、確か一年の後半あた

りだったと思う。

評議委員会は別名「青大附中の演劇部」と評されていて、年に一回、主に冬休みを使って「ビデオ演劇」と称する作品をこしらえるのが常だった。

一言で片付けるならば、「下手な演技を台本通りに演じて、それを家庭用ビデオカメラでそのまま撮影する」だけのもので実に退屈な代物だ。

ただ、誰も「ビデオ演劇」を作品とはみなしておらず、評議委員の誰その変貌した姿をネタにしておもちゃにするのが目的のもの。

一年冬の「ビデオ演劇」で、なぜか……当時評議委員長だった結城先輩の趣味で……忠臣蔵を題材として取り扱った際、立村の役割が浅野内匠頭だったことが、ひとつのきっかけだったのではとも噂されている。貴史もあまり覚えていないが、その際美里が本条先輩と組まされて「落人」のお軽だったこと、他の同期男子たちが四十七士にあっさり組み込まれていただけだったことを考えると、大抜擢だったのではとも思う。

ばりばりぶっちぎり野郎の本条先輩がどうして立村を気に入ったのか、その辺は今だに謎だ。本条先輩の後ろ盾あつての立村評議委員長。

とすると、やはり。

――かなり、やばいってことだわな。

美里の不安がる気持ちは確かに、わからなくもない。

――けど気づいてねえよな。美里の奴。

「けどね、大丈夫。いったん委員になればみんな、あっさり立村くんに協力してくれるよ。立村くん自身はやる気全然ないけど、他の男子たちはなんとかして委員長のままで卒業させようって気持ちあるみたいだし。難波くんだって、更科くんだって、天羽くんだって。みな、裏で手を回してなんとかしようとしてくれてるよ。立村くんには腹立つけど、しょうがないよね！」

――本当に分かってねえな。美里。

今の美里は目の前の出来事しか考えていない。貴史からするとこれから先一番の難関は評議委員長に再選されてからのちのことだろうと思うし、立村もその覚悟はしているはずだ。もちろん立村は評議委員長として生徒会と評議委員会との間で「大政奉還」かなにかを企んでいるのだろうし、まだまだやりたいこともあるだろう。しかし、美里たちにかばわれるようなみっともない真似をはたしてしてほしいと思うだろうか。貴史だったらごめん被りたい。それこそ「男の沽券」に関わる。

――止めるべきか。

珍しく貴史は迷っていた。

早口で勢いよく計画を並べ立てる美里に対して、どう答えたらいいのかわからない。

実際、立村はそういう風に面倒を見なくてはならないタイプの奴だから、仕方ないと思えるところも正直あるのだ。

委員長向きではない、むしろ誰かの引き立てがなくては動けない、そういう奴にも思える。

美里の考えは間違っていない。ただ、男子としてはむかつく。

「美里、万が一だぞ」

念を押してみた。もちろん美里には感づかれないように、何気なく。

「もしな、立村が評議委員長になれなかったとしたら、どうなる？」

「何言ってるの」

振り切るように、しゃべるスピードをさらに上げて美里は答えた。

「新井林くんが立候補すればまずいけど、天羽くんたちがうまく何かしてくれるよ。いつもそうだったもん。立村くんの陰でいろいろごまかしてくれたのは天羽くんたちだし。むしろうちのクラスで選ばれるかどうかが一番の難関よ。委員会まで行っちゃえば、あとは、三年同士でなんとかする。評議男子って、ゆいちゃんのことについてはすっごく冷たかったけど、男子同士のことならもう気持ち悪いくらい支え合うから大丈夫」

――ま、そういうもんか。よくわからねえけど。

最後に美里は、怖い顔で貴史に張り付き確認をしてきた。

「今のことだけど、絶対に、立村くんには内緒だからね！ それと絶対、立村くんには例の事件のこと、聞かないでね。落ち着くまで、知らん顔通すから。そんなことあったのって顔しててちょうだい！」

「いつまで黙ってりゃあいんだよ！」

「私がいいって言うまで！」

――ってことは卒業までかよ。めんどくせえの。

一段落したところで貴史は家に戻り、即、クラス男子の一部に電話をかけた。

すでに菱本先生ご婚約の件はある程度知られてきているようなので、話はあっさり通じた。

約十五分間かけて、いくつかのイベントが決定した。

1、天才画家・金沢による祝・結婚の絵画。題材は本人に任せる。

2、男子一同の余興は単純に全員立ち上がり「おめでとうございます」の合唱と拍手のみ。それだけでも迫力あり。

3、プレゼントは女子に任せ、あとは当日ぎりぎりまで秘密を保つため、少人数で予定を組み立てる。もちろん立村には内緒。

――そんな美里が深刻がるほど、面倒なことでもねえだろが。

本来立村のすべきことなのだろうが、貴史が代わりに片付けてもまったく問題なさそうなことばかりだった。

自分で事を進めた方が早い。実感した。

水面下で動き出した「菱本先生ご結婚おめでとうびっくり企画」は、貴史主導のもと動き出した。

一応立村にも伝えておこうかと思ったのだが、美里に固く禁じられた。

「悪いけど立村くんそれどころじゃないよ。しばらくいないことにしようよ」

――すげえ言い方だよな。

恋人への態度とはどうも思えない。これが美里の愛情でもある、と考えるしかない。

「女子たちにはお祝いグッズを作ってもらってるけど、先生にばれないようにするのって大変だよな」

次の日から美里はまた駆けずりまわりはじめた。

主な協力者は古川こずえと奈良岡彰子らしく、美里は教室を飛び出す前になにやらふたりへ指示を出して去っていく。評議委員会がらみの後始末もあるのだろうし、立村の様子伺いもしているのだろう。

――けどな、たいしてあいつ、いつもと変わらねえじゃん。

生徒達のがやがやしているのとは裏腹に、立村はいつも通り無言で通していた。

もちろん同じ教室にいるのだからまったく会話をしないわけにはいかないし、英語の訳ノートなども回してもらっている。

ただ、姿を消すスピードが確実に早まったことは確かだ。

「立村、今日これから暇か？」

何気なく声をかけて遊びの誘いをかけてみるが、あっさり断られる。

「ごめん、これから用があるんだ」

「じゃあまたな」

誘うのも今では貴史一人だけだった。他の男子連中も、ほとんどが生徒会がらみの事件を知っているからどう対応していいのか判断に苦しんでいる状態と聞く。

かばんを抱えて教室から出て行く立村を見送りながら、隣で金沢がつぶやいた。

「そんなに、立村、性格悪い女子が好きなのかなあ」

とにかく菱本先生にばれてはまずい。

「金沢、悪いがなあ、俺のうちに話、しねえか？」

「いいけど」

「例の絵の相談なんだけどな。噂になっちゃったらびっくり企画にならねえだろ。だからふたりでだなあ」

放課後、他の女子たちがスカートをおっぴろげてしゃべっている姿を背に、貴史は話しかけた。背中を丸めて画伯は大きめのスケッチブックを取り出した。

「せっかくだったら、『聖家族』のパロディみたいに描こうかなって思ってるんだ。羽飛、『聖

家族』って知ってるよね」

美術の授業で聞くだけは聞いた。聖書の一場面だったか。イメージは湧くがかなりブラックの効いた内容なんじゃないだろうか。

「おい、やめろ、お前ここでスケッチブック開くのはまずい！」

「スケッチ描いたんだけど」

今にも見せたくてならないきらきらした眼差しを向けられて、あわてて金沢の両手を押さえた。

「ロングホームルームで一気には一っを見せて驚かせたいだろが！ 先生の腰抜かす様見たいだろが！」

「じゃあどこで見せる？」

とにかく金沢は自作のスケッチを見せないことには動きそうにない。いつぞやのように泣かれたらどうしよう。こいつの性格も修学旅行以来つくづく感じているが、自分の意志は泣いて通す、そのくらいの頑固者だ。

「じゃあな、とにかく俺の家に行くか」

貴史が金沢をなだめようとした時、背からたぷっとした暖かい空気が流れ込んできた。

「あ、羽飛くん、金沢くん、どうしたの？」

貴史のことを「くん」づけで呼ぶのは今のところ、奈良岡彰子くらいしかいないはずだった。振り返ると奈良岡がはちきれそうな上着をゆらしながら立っていた。

「もしかして、菱本先生のあのこと？」

「あのこと、っちゃあまあそうだ。美里から聞いてるだろ？」

二重あごをゆらしつつ奈良岡は頷いた。

「美里ちゃんからも、準備しようってことになってるんだけど、もしよかったらうちに来てみんなで相談したらどうかなって思ったんだ」

「誰の家だよ」

「私のうち。誰もいないから、ゆっくり話を進められるんじゃないかな？ ね、金沢くん、一緒においでよ。私もこずえちゃん含めて来週のこと、計画立てたかったし。羽飛くんとこよりもうち近いよ」

どうやら奈良岡は貴史たちのやりとりを聞いて口を挟んだらしい。思わず金沢と顔を見合わせた。

「いや、まあ急ぎじゃねえし」

「急ぎだよ！ 来週のことだもん。こずえちゃんがあとから来るから男女比2：2で特に問題もないんじゃないかな」

言葉はゆったりと流れるのだが、いかんせん凄みを感じるのはなぜだろう。

もう金沢も言葉を失い、頷くだけ。貴史も断る必要性をさほど感じない。

「奈良岡が構わないって言うんだったらま、それもいいか。けどなあ古川も来るのかよ」

「だって女子は私とこずえちゃんと、美里ちゃんが中心なんだから。男子は羽飛くんだって教えてもらってたし、それなら一度ゆっくり話し合っ、菱本先生を驚かせたいよね、って思った

んだ」

にここに大福姫の笑顔に、貴史は射すくめられた。悪意など微塵もないことは承知しているのだが、それでも語る口の開き方に不思議なほど重たいものを感じてしまう。それがどこから来ているのかは貴史も見当がつかないのだが、とにかく、怖い。

「ね、じゃあ、こずえちゃん来てから一緒においでよ。こずえちゃん私の家知ってるから」

「おいおい、そう勝手に決めるな。第一、野郎ふたりを引きずり込んじゃあお前、いろいろ言われねえのかよ」

女子たちの目がちくりと刺さる。会話はさすがの奈良岡も聞かれないよう心配りしているようだが、接近の仕方がどうも熱い。腹に顔をぶつけそうだ。

「大丈夫だよ。いつもうちには男子の友達遊びに来てるんだ。男子と一対一にならなければいつでも出入りしてもらっていいってお父さんお母さんには言われてるし。大丈夫、待ってるね！

クッキーあつためておくからね」

――あの、ケーキっぽい分厚いクッキーかあ！

貴史は食い気に負けた。

「奈良岡のねーさんが焼くクッキーはめちゃくちゃうめえよな」

結局、古川こずえが教室に戻ってきたのを合図に自転車で向かうことにした。こずえも対して展開には驚いていないようで、

「きゃあーラッキー！ 彰子ちゃんありがとう！ キス百発くらいしたいくらい！」

相変わらずのラブラブ発言を繰り返している。

――ま、今は金沢がいるし、古川にもつっこまれねえだろ。

立村がらみの件ではその後の情報を持っているはずだし、聞きたい気持ちはある。美里はこずえにすべて話していないと説明していた。視点が変わればそれなりに違う発想が出てくるだろう。とにかく、立村の件を内密にして今は菱本先生のハッピーニュースに燃えるよう持っていこう。

「じゃ、羽飛、一緒に行こう？ ラブラブ逃避行！」

「悪い、一緒にいる金沢はなんなんだ」

「あーらごめん、あんたを無視したわけじゃないよ。金沢、あんたにはこれから大仕事があるんだもんね！」

気を悪くしたでもなく、古川は金沢に話しかけた。その方が助かった。金沢も自転車置き場につくまで自分の熱く燃え盛る絵画への情熱をこずえに語る事ができてかなりすっきりしたようだった。そうとう、溜まっているのだろういろいろと。

貴史はひとりでさっさと自転車の鍵をはずした。奈良岡の家に向かう道順はこずえしか知らないはずだ。先頭に行かせることにした。

「わかったよ、私が先頭ね。それにしてもさ羽飛、あんた私になんか恨みでもあんの？」

「別にねえよ、なんだあいきなり？」

ペダルを踏む一瞬隣り合った時、こずえは一言言い捨てた。

「いるだけでむかつくって顔、するじゃないのさ」

返事する前にこずえの自転車は先頭へ向けて大きく弓なりにカーブを描いて進んでいった。

――もうちょっとぶりっ子するとかだなあ、そうでもしとけば。

いや、違う。

こずえの軽いやみが何を意味しているのか、わかるようでわからない。

実際、否定できないところではあるのだ。

――いるだけでむかつく。

厳密に言うと、

――話をするだけでむかつく。

そう感じてしまうのは事実だ。

ただその半面、裏表のない性格のこずえは男子感覚でぼろくそ言い合える相手なので、楽と言えば楽だ。

だからこそ、なんでそばに近寄られるだけでいらいらしてしまうのかがわからない。

理性では「エロ話好きのあけっぴろげな奴」と笑ってられるが、その奥にもっと別のじりじりした感情が埋もれている。

しゃべった後で、思わずがっつとわめき散らしたくなるような苛立ちに襲われる。

美里には感じたことのない何かが、そこにある。

空はだいぶ曇ってきている。雨が降りそうな予感がする。こういう時に限って傘を持ってきていない。準備のよい立村が一緒ならば大抵一本予備の分を貸してもらえるのだが、相手は金沢、期待はできない。

五分くらい漕いだところで、二階建ての上品な家に到着した。こずえが自転車を留め、またがったまま

「しょーこちゃん！」

絶叫した。もしやこの家、玄関ブザーがないんだろうか。アホな想像を一瞬してしまった。

「おいおい、これでいつも呼び出してんのかよ」

つつこむ前にまんまるお月さまが二階の窓から顔を出した。

「鍵開いてるよ！ 早くおいでよ！」

――まさかそんな、不用心な家だったのかよ！

同じく自転車をつけた金沢は、また貴史に囁いた。

「クッキー、出てくるよね。焼きたてだよ」

ここにも食い気に負けた男子が一人。奈良岡クッキーの威力恐るべし。

やたらとごてごて飾り立てた柱やらフランス人形やら、一言で片付けると「ベルサイユ宮殿」のまねっことしか思えない屋内にしばし絶句した後、どう考えても惣菜屋の一人娘としか思えない奈良岡彰子の笑顔に迎え入れられた。二階の部屋はまさに、

「彰子ちゃん、『赤毛のアン』好きだよな」

古川こずえの言葉以外何も付け足すことはない。こういう部屋のことをどう表現すればいいのか。

「奈良岡の部屋って、乙女チックだよなあ」

金沢の正しい表現に大きく頷いてしまう。

「うん、かわいい雰囲気が好きなんだ。うちのお母さんがね、そういうの好きなんだよ」

「だからなんだ、南雲とのデートで超ぶりっこの恰好で行ったって話聞いたけど」

言い終わる前にこずえが金沢の宝・スケッチブックをひったくりぶん殴った。

「あのさ、超ぶりっこってのは失礼だよ。かわいって言いなよ」

「悪口なんて言ってないよ。俺、あのデザイナーの描いた画集持ってるし」

「あ、そっちの話なのね」

肩をすくめてこずえはスケッチブックをあっさり返した。大して腹を立てた様子もなく、金沢は嬉々として貴史にくっついてきてスケッチブックの紐を解いた。

「ほら、これ、『聖家族』パロディ」

「パロディになってないでしょうが」

即、こずえがつっこみを入れた。指でつつこうとするのを避けようとすぐに手元に置こうとする金沢。

「なんかさあ、金沢、絵がうまいのはわかるんだけどさ。この聖母マリアの微笑みがさ、なんというか勝ち誇ったって顔しててさ。すごくむかつくんだよね。それに何気にここでヨゼフががんばってるのはわかるんだけどさなんかさあ」

やたらとケチをつけたがるその口調に苛立ち、さっさと割って入った。相手は奈良岡だ。

「ねーさん、このクッキー、まず食っていいか？ 俺、はらぺこなんだ」

笑顔満面に、乙女チックな部屋のおたふく姫は黄色く焼きあがったクッキーを大皿ごと差し出した。

当然金沢も続いて手を出し、結局こずえの絵画批評は尻切れとんぼに終わった。ざまみろ、である。

皿の底が見える程度クッキーが減った段階で、こずえが仕切り直しに入った。

「では今日の本題なんだけど、ほら、羽飛、いい加減食うのやめなよ」

「うるせえな。菱本先生びっくらぎょうてん企画だろ。俺だって考えてるぞとっくの昔にな」

「ったく、美里に頼まれたらすぐに動くんだもんねえ。私だって美里に負けないくらい働いてるんだからさ、ほら、感謝の気持ちとかなんかないの」

「わりいが俺はへそ曲がりなんで、感謝しろって言われたらその気もなくしちまうんだ」

隣で金沢がこくこく頷いている。

「あっそ。ほんとむかつくよね。とにかく羽飛、菱本先生のお祝いのことだけどさ」

「だからもう俺が計画立ててるっての！」

またがんが腹が立ってくる。貴史なりに気を遣って言ったつもりだが、こずえには通じない

らしい。割り込まれたら面倒だしさっさと話を進めた。視界には入れないことにした。

「まず、男子連中にはおっといに連絡網でびっくりおめでとう企画をやるってことを伝えてある。あるんだけどな、一週間もねえだろ？ ねえならしゃあねえ、簡単なことしかできねえだろ？ 簡単なことったら、大声で全員立ち上がって、小学校の卒業式みたいなので『先生、ご結婚おめでとうございます！』って唱えりゃあいいだろ？ 美里から聞いた話だと、女子どもにはみな話がすんでるみたいだし、奈良岡印オリジナルのバタークッキーもプレゼントされるって聞いているぞ。先生にはあとで俺たちにもおすそ分けが来るだろうしそうになったらしゃれになんねえから、奈良岡ね一さんにはクッキー作りに頑張ってもらわねばなんねえけど、それはそれで話がつくんじゃねえか？ な、そうだろ、奈良岡？」

あえてこずえではなく奈良岡に振る。全身大の字に見えそうな仕草で両手を広げ、大きく頷いた。

「そうだね、私、大賛成！ 今からちゃんとバターと小麦粉といっぱい用意して、作るつもりなんだ！ 前の日にはこずえちゃんと美里ちゃんも泊まりに来てくれるって言ってくれてるしね。それならもう鬼に金棒だもんね！」

――まあ、別の意味で鬼に金棒だな。

奈良岡の他、美里とこずえが揃ったらどういう話を徹してするんだろうか。立村に関する愚痴をだらだら並べ立てるのだろうか。

――ま、抱きつきはしねえだろな。

あの夜、車の中、感じた体温のぬくもりが不意に蘇り、貴史は思わず身震いした。

「あ、羽飛くん寒い？ ストープの温度上げようか？」

あわてて首を振った。奈良岡ひとりでペチカ並のぬくもりが部屋中に広がっているのだ、これ以上暑くなったら熱帯になってしまう。

話が一段落するのは早かった。貴史があっさりとして現在の状況を説明してほぼ三分間で片付いた。

「じゃあ、おしゃべりしようよ。なんか飲みたいものある？」

奈良岡が立ち上がり、ふと貴史に小首を傾げた。そうすると首が見えなくなる。

「羽飛くん、運ぶの手伝ってくれる？ 冷たい飲み物の方がいいよね。コーラあるんだ。びんごと持ってきたいんだ」

「ああ、オッケー」

貴史にとっても好都合だった。こずえとはどうも今、不協和音が鳴り響いている真っ最中、いくら金沢が間に入っていたとしても簡単に気持ちがあほぐれるものでもない。ふたりになったらなつたで例の立村問題について語り合わねばならないのも気が重い。何にも考えていない奈良岡がそのまんまるな笑顔で空気を和ませてくれるのならば、それはそれでまたいいような気もする。

階段を降りていき台所に入る一歩手前で、いきなり奈良岡が話しかけてきた。

「けど、すごいなって思ったな。今ね」

「さすがねーさん、いい男を見る目は鋭いな」

「うん、そう思うよ。私のまわりにいる人たちってみんないい人だもん」

いつもの決めゼリフの後、続けた。貴史を見つめる目が見えなくなり、顔に埋もれた。

「いつもだともこういう時、なかなかまとまらなくて苦労してたよね。もしこの話を、ロングホームルームで話し合いしたらきっと時間かかったと思うんだ。いろいろ意見がでて、まとめて、それから決めてって感じで。ものすごく時間かかると思うんだ」

「まあなあ、確かに。みなだらだら喋りたがるしな」

「なのに、羽飛くん、美里ちゃんから話を聞いてすぐ、連絡網に流したんでしょ？ 男子全員ができることはこういうことだってどこまで決めて、簡単な話にして、さっさと伝えて。それってほんっとすっごいよ！」

——簡単な話じゃあねえけどな。

おそらく美里は奈良岡に、立村がらみの事情については説明していないだろう。

「私ね、うちのお父さんお母さんにもしょっちゅう言われてるんだ。話は長いより短い方がみんな聞いてくれるしうまくいくって。決めるなら悩むよりも早くぱっぱと決めて動いたほうがいいんだって。それに背を押されて、私も受験すること決めただけだね」

いきなり自分の受験話に持って行ってしまう。黙るしかない。

「男子たちはみんな納得してくれたよね。秋世くんもそう言ってたし。みんなきっと、羽飛くんのことだからすぐに一緒にやろうって思ったんだよ。もしこれが」

「あ？」

空間が軽く揺らいだような気がする。言葉を発してそれを留めた。

「立村くんがまとめることだとしたら、ものすごく時間がかかったんじゃないかな」

「ああ、あいつは最初からそういうおめでとう企画自体絶対思いつかねえな」

「個人的な好き嫌いとは別に、きっと全員の話聞いて、それからまとめて、じっくり考えてってやり方をするような気がするんだ。それが悪いとは思わないけど、ただ、今、羽飛くんみたいにわかりやすくぱっぱと片付けてくれるほうが、私は好きかな」

「好きかな」のところだけ、いきなり小声でつぶやいた奈良岡を、貴史は両手で握手に持っていった。

「どうもどうも、サンクスサンクス、やっぱなあー俺のすごさをねーさんはよく分かってくれてるよな！ 俺も立村のやり方に、いい加減片付けろって怒鳴りたくなるときあるもんなあ。ま、あいつはあいつなりに頑張っていることは承知してるけどな。さんざん古川や美里に俺、けちょんけちょんに言われてるからさあ、こうやって褒めてもらえると勇気りんりん、これから明るく生きていけるような気になるんだわな。美里に爪の垢煎じて飲ませてやりてえや」

「じゃ、これ、持ってくね」

いきなり背を向けて冷蔵庫から四本、どでかいコーラ瓶サイダー瓶を取り出した奈良岡は、うつむき加減で早口につぶやき、勢いよく階段を駆け上がっていった。

「おい、俺持つぞ」

「ううん、いいよ、このくらい大丈夫！」

いったいなんのために降りてきたのかよくわからない。まあいいか。貴史はゆっくりと後を追って登った。

――ほーら見ろ、立村、奈良岡のねーさんが言う通り、お前だらだらしすぎなんだぞ！ もっとだな、てきぱきさっさと話を進めて終わらせればなんでもうまくいくってわかっただろが！ なんでもかんでもお前、ややこしく考えすぎてどつぼにはまってるしな。少しは俺を見習えよな！

どちらにせよ、生徒会役員改選の後にはてきぱき、あっという間に話を進めねばならないのだ。いつもの立村みたいにだらだらしては、奴の評議員としての座もさらにはクラス内での居場所もやばいってのに、なんでほたほた逃げまわってるんだ？ ったく頭くるよな！ 全部片付いたら問答無用でいったん奴と差しで話するぞ。でねえと卒業まですっきりしやしねえ！

こずえに似たようなことで褒められたことがある。脳みそのどこかで覚えていた。

そんなのはるかに越える快感。男は褒め言葉とおいしいクッキーが一番の褒め言葉なのだ。

――ねーさんも、あんな奴を好きにならなくてもなあ。せめて水口がもう少し男になってくれりゃ、応援するんだがなあ。

恋愛なんか知ったことでない貴史であっても、やっぱり奈良岡彰子の今後には幸いあれと祈らずにいられない。

「あんたさ、評議委員長なんでしょ、だったらそのくらいきちんとやりなさいよ！」

美里の声ではない。

貴史が教室に入ると、いきなり三名の女子たちがそそくさと席に戻った。どうやら貴史が現れたタイミングがまずかったらしい。席でまだぶつくさ文句を言っている。

「だよねえ、ほんっと、枚数くらいきちんと数えなさいよって言いたいよね！」

「ほんと。三枚目ったら一番大事なとこじゃん！ それを抜いて渡すことないじゃんねえ」

よくわけがわからない。貴史は立村の席に向かった。無言で机の上のプリント資料をより分けている。机が狭いのに十種類も並べてそこでまとめようとしているのだから、無理がある。

——他の机使えよな。

「ほら、よこせ」

背中から声をかけ、貴史は立村の持っているプリント束を取り上げた。

「おい、そこの机、わりいけど貸してくれ」

隣の席にいる奴に声をかけた。立村も口がないわけじゃないんだから頼めばいいのに。なんで黙って自分の机だけで完結させようとするのだろう。

「あ、ごめん」

「ったく、誰かに手伝わせろよ。美里、いねえの？ おい、金沢、わりいけど手伝ってくれよな。手、足りねえ」

教室に戻ってきた金沢を手招きし、もう一ヶ所机を確保した。三個所あれば十分まとめる余地ありだ。ついでにホチキスもあれば完璧だ。

「おい、誰かホチキスあるか？」

「ほいな」

金沢が東堂からホチキスを受け取った。

「じゃあ、いいや、留めちまえ。立村、まず全部まとめちまおう。閉じればそれで十分だろ」

いったいどういう内容のものか分からないので、一枚だけ手に取って眺めてみた。

どうやら高校進学に向けての資料のようなものらしい。中には英語の長文がずらっと並んでいるものも混じっている。三枚くらい、英語でびっちりというのは確かにより分けしづらいうらう。

「おい、立村、これなんだ？」

「高校進学前の自習用資料」

目を伏せたまま立村は手を動かし答えた。

「十枚もあるけどどうした？これ？」

「来週までこれ目を通しておいて、簡単なテストをやるらしいって言われた」

かすれた声で答えた。

「つうことはこれ、英語の資料かよ？」

「違う、国語と英語のミックスらしい」

「らしいってなんだ？ よっくわからねえ」

立村は手を止めた。肩で息をひとつして、

「英語と国語の先生たちが同じテーマで勉強できるようにって、合同で特別なプリントを作ったらしいんだ。テストには関係ないけど、これから先勉強するためには国語も英語も両方の知識が必要だからって」

簡単に説明してくれた。金沢がぼかんとして指差しながらつぶやいた。

「え、テストに出ないんだ」

「そう」

「なあんだ、それならたいしたことないや」

貴史も同感だった。何もそんなに目くじら立てなく立っていいだろうに。

ついさっき、女子が立村にいちゃもんをつけていたのは、一枚資料が抜けていたら試験に不利になるだろうと思ったからではないだろうか？

だったら、テストに出ない、関係ないと言ってやればよかったわけだ。

立村ひとりで書類を綴じるということ自体がまず無理なことなのだ。いつもなら美里がぱっぱと処理をしているからぼろは見せずにすんでいる。しかし最近の状況を考えるとなかなか仲良くクラス内の仕事をするという雰囲気ではないのだろう。

――誰かに頼めよな。お前ひとりで仕事なんてできねえんだからさ。

不器用な立村がひとりでクラスの数分、順番をまとめて渡そうとしたものの、中の数枚がぼろっと抜けたものが混じってしまったのだろう。

女子連中は立村に対して非常に厳しい奴が多いので、どつかれたんだろう。

「おいおい、このプリント、試験と関係ねえんだってよ。ま、一枚くらいなくたっていいだろ」

貴史が聞こえるように金沢へ話しかけた時だった。

「ちょっと！ 立村、あんたそんなことひとつこともいわなかったじゃないの！」

ついさっきいきり立っていた女子が、プリントの束をぐしゃぐしゃのまま握り締めて再び近づいてきた。

「あんたさ、さっき私に渡す時、言ったよね。『先生が絶対やるようにって言った』ってさ」

こっくり頷く立村。顔には血の気がない。手もとがぶらんとしている。

「それより先に言うことあるじゃん！ 試験に関係ないってなんで先に言わないのよ！」

「おい、試験とプリントとどう関係あるんだ？」

「羽飛は黙っててよだってさ、頭来るじゃん？ 試験と関係ないなら私らだってそんな中の紙が一枚抜けたくらいで腹立てるわけないよ。試験にもし関係あったら大変だから、それできちんと筋道立てて抗議しただけじゃん？ それをだよ？ 今、そんなすぐに試験と関係ある内容じゃないって後出しじゃんけんみたいに言われたら、まるで怒った私の方が悪者になっちゃうじゃないの？ ふざけないでよ！ 人を悪役にして、自分ばかり被害者の顔して、どっちがどっちのよ！」

いわゆる、逆恨みのパターンだ。

立村にはこうされるパターンが、非常に多い。

立村なりに「こうすればいいんじゃないか」と判断して行動したことが、後日相手を激怒させいつのまにか悪の張本人とされていることが。

「おい、玉城、なんでお前立村にそうつかかるんだあ？ 何もお前が勝手に思い込んだだけだろうが。立村にも言い分あるだろ？ それをまず確認してから文句言えよ」

見かねて貴史も割って入ろうとする。まったく効果なし。

「羽飛が言わなかったら、私たちこのプリントを死に物狂いで勉強して、次のテストに向けて準備しなくちゃいけないって大変な思いしなくちゃならなかったんだから！ すぐに、試験に出るわけじゃないってことをまず先に言ってもらえれば、私だってあとから抜けてた分をもらいにいこうとか、そういうふうにできたじゃない！それをさ、いきなり渡されて、大切なことだからとか言われたら、そりゃ誰だってこれから試験に出るって思うじゃない！」

「ごめん、悪かった」

「こうやって逃げるんだよねえ、あんた。よくあんた評議委員長なんてやってられたよね！ こんなミスばかりして、伝えるべきこと全然伝えないで、余計なばかりして、それに、クラスに協力しようとしなないし！ 何考えてるのかわかんないよね。ま、いいけど」

玉城がまくし立てたのち、貴史にちらっと目を向けて髪の毛をいじりながら、

「だけど、私、クラスのために思って言ってあげてるんだからね！ そのくらい理解してよね」

感情抑えめに、ちょっとだけ甘えるような口調で言い捨てた。差が露骨すぎる。啞然として見送るしかなかった。

「言ってること、変だよなあ。女子って」

そばでつぶやく金沢を放っておき、貴史は立村をせかしつつプリントを重ねつづけた。あっという間にホチキスで綴じられた束が完成した。

「美里がいりゃあな、こんなのあっという間にできたのにな。少しは愛想振りまいとけよ。あいつ怒ったら怖いぞ」

立村にしか聞こえない程度の声で囁いておいた。無言で目を伏せたまま、立村はプリントを受け取ろうと手を伸ばした。

「俺がやっとくから、お前さっさと座れ」

半分金沢に渡し、男子連中に配るよう指示をした。残りは貴史が女子のうるさ型連中に配布することにした。

頭から角を出していた天然パーマ女子の玉城の分も交換しておいた。

「頭来る気持ちもわかるがな。ま、俺も立村のもたもたしたやり方にはいらつくけどなあ」

ぶつかりあってしまっは、今のところまずい。貴史なりに本日限りは気を使わねばならない。

「ごめんね、羽飛。あんまり言いたくないんだけどさ。誰かが言わないとあいつわからないじゃん？ クラスのために、誰かがね」

——美里も苦労してるよなあ。

身をもって感じた。玉城タイプの女子連中がまとまっていろいろ工作してくるんだったら、そ

れはしんどいだろう。

――しかも、クラスのための発言なんだもんな。たまったもんじゃねえよな。

男子世界では絶対に通用しない価値観。貴史は配り終わった後時間割に目を留めた。まだ間がある。

――明日まではなんとかせねばな。

今日は生徒会役員改選投票日。立会演説会は六時間目。

美里が教室に見当たらないのも、立会演説会の準備をはじめいろいろと慌しいからだった。

立村が珍しく教室で、苦手な書類整理を担当していたのも、今までの事件のからみから言って自然なことだった。

詳しいことは貴史も聞いていないが、もう評議委員会において立村の位置は危ういものになりかけているらしい。

どうしようもないといえばどうしようもないことだが、最低でも三年二組の評議委員としてこのまま送り込むことだけは完璧にやり遂げたい。

――たぶん、大丈夫だろ？

たいしたことじゃない。今まで通り何事もなく終わり、何事もなく片がつくはずだ。

「お前なあ、誰かに頼めよちょっとくらいな。そんなくらいなんやしねえんだよ」

机の上がさらになり、立村が改めて席につくのを待って貴史は一声かけた。

「美里がいねえからお前がやらねばなんねえのはわかるけどな。せめて机を借りるとかしろよ。だからほら、女子連中が余計なこと言って騒ぐんだろが」

「ごめん、悪かった」

言葉少なに答える立村に、貴史はもう一言添えた。

「お前な、美里に少しは感謝しろよ。ああいう女子だからうるせえのはわかるけどよ、あいつなりに結構陰で苦労してるんだぞ。女子連中が噛みついてくる場合大抵美里がせき止めてるみたいだぞ」

「わかってるよ」

顔を上げ、少し苛立った風に立村は答えた。いかにもうるさそうな顔で横を向いた。

青大附中の立会演説会はわりとおとなしめなものだった。

他の学校行事が公立の小学校と比較して派手な演出を行うことが多いからその静けさは目立つ。

一年の頃はそれでも候補者および応援者の演説が続き、それなりに盛り上がったのだ。

しかし次の年、なぜか応援演説というものが廃止され、候補者ひとりの熱い語りによって時間を費やされることになってしまった。

なんでも、本条先輩が評議委員長の際に、わざわざ提言したのだとか。

――応援演説というのは第三者の思いを伝えるだけであって、かえって投票者が判断するのに

邪魔になる。

むしろ候補者の語りたことに時間を多く取った方が、正しい判断ができる。

貴史からすると「ほんとかよ？」と突っ込みたくなるのだが、本条先輩崇拝者である立村の前では怖くてそんなこと言えはしない。

「本条先輩は、ひとりひとりのことを考えてそう提案したんだと思うんだ。すごいよな」

どこがすごいのか、貴史には今だにわからない。ただありがたいのは、応援演説がカットされることによって立会演説会で拘束される時間が大幅に減った。

今までは二時間分かったものが、なんと一時間で終了する。

本条先輩の真意はおそらく、「そんなくだらんことに時間なんか使ってられねえよかったらい」なのではないかと思うのだが。

どちらにしても、一時間で立会演説会は終了する。特に今年はほぼ対抗馬なしの信任投票で、ほとんど見たことのある連中ばかりが立候補する。

あえて言えば生徒会長候補の佐賀はるみ、および副会長候補の霧島真に関心が集中しているようだが、貴史にとってはこちらもどうでもいいことだった。

――霧島ったらあの、霧島の弟だろ？ アマゾネスの弟だろ？

――学校を追い出されちゃうかっこうの姉ちゃんと、それと入れ違いの弟ってのは立場ねえよなあ。

霧島ゆいの弟が、できそこないの姉の代わりに果たして受け入れられるかどうか、これは確かに見ものである。

そして。

――立村は立場ねえよなあ。

椅子をそれぞれ整列して持ち込み、みな座っている。背の高い貴史は後ろの方で、先頭には立村と美里が座っている。評議委員お約束の場所だ。

評議委員である以上、先頭に立つのは義務でもある。

「羽飛、どう思う？」

いきなり隣から話しかけてきたこずえ。一緒に奈良岡彰子も微笑んだ。むかつく話だが貴史の前には南雲が座っている。自然と隣り合う恰好だった。南雲は面倒くさそうにそっぽを向いている。決して規律委員長たるもの風紀を乱すまいとする態度ではない。

「なにがだよ」

「このまんま、あっさり信任投票で決まると思う？」

「当たり前だろ、面倒なことしたくねえだろ」

「私、そうは思わないんだよね」

「なんでだ？」

一緒に南雲も不思議そうに答えた。

「なんで？」

奈良岡彰子と顔を見合わせ、穏やかに笑っている。貴史だけが仏頂面のままだった。

ギャラリーが若干なりとも増えて満足したのかこずえは続けた。

「だってさ、あれだけ騒ぎがでかくなったんだもんねえ。佐賀さんが生徒会長になるかもなんて、一か月前なら誰も想像してない展開だったと思うよ」

「ふむふむ」

相槌を打っているのは南雲だ。ばかにしているのかよくわからない。

「佐賀さんって、彼氏があの新井林でしょ。新井林はバスケット部のキャプテンだし、それに立村が卒業したら次の評議委員長でしょ。そんな彼氏がいてさ、やっかまれないわけないじゃん！ 女子としては絶対佐賀さんみたいな子、受け入れたくないと思うんだよね。それに杉本さんと親友だったくせに平気で蹴落としたりするんだよ！ほんとこれってむかつくよ。普通の女子なら頭に来ると思うんだ」

——普通の女子、な。

改めて思う。古川こずえを普通の基準として見たくない。

穏やかに相槌を打ち合う南雲と奈良岡。貴史は黙っているだけだった。

「で、問題。この会場に女子はどのくらいいるでしょう？」

「半分ね」

即答したのは奈良岡だ。

「だよねえ。で、開票して過半数を取らないと信任投票ってアウトじゃん？」

「んだねえ」

合わせる南雲の口調がうっとおしい。もちろん無視だ。

「女子たちの反感を買っちゃったら、佐賀さん過半数なんて取れないよ。演説でいくらおりこうさんのことをつぶやかれたってさ、知ったことじゃないって。学校内には杉本さんに同情してる子だってたくさんいるしね。もしかしたら今回、信任投票がひっくりがえる可能性あるかもよ」

「また選挙のやり直しはかんべんしてほしいなあ」

とぼけた口調で南雲がつぶやき、三人楽しげに笑っていた。貴史だけは無視していた。

——どういう事情か知らんが、面倒なことしたがらねえだろ？ 普通。

悪いが体育館内には男子も半分いて、ほとんどはやっかいごとをしたがらない人種だということこそずえは気づいていない。

「これから、立会演説会を始めます。全員、静粛に願います」

放送委員のマイクから流れる声に一瞬だけ静まったものの、また言葉が溢れ出す。静粛が消されてしまう。

「開票して明日すぐ、発表なんだよね。大変だよみんな」

まったくピントのはずれたところを心配している奈良岡彰子に、南雲がやさしげな言葉をかけていた。

「大丈夫大丈夫、明日土曜日、あさって日曜日、ひとがんばりすりゃあもう自由の身！」

「でも、選挙委員のみんな大変だなんて思うよ。あとでみんなにクッキー持っていこうかな。多

めに作ってきたんだけどね」

笑顔でぼよぼよした頬を揺らしつつ話す奈良岡に、南雲はとろんとした声で訴えた。

「彰子さん、そんなクッキー余ってるんだったら、俺に全部ちょうだい」

とたん隣の列にいる女子たちが冷たい視線をぶつけてきた。貴史でもわかるその眼差しのきつさ、立村にプリントの件で噛みついた玉城の目に近いものを感じた。気づこうとしないのか目の前の公認カップルはのどかに語らっている。

「彰子ちゃん、月曜のクッキーの準備で、用意してきたんだよ。南雲、あんたもいっつも彰子ちゃんに甘ったれてるんじゃないよ。見苦しいったらありゃあしない。ねえ羽飛？」

貴史はこずえの言葉に答えなかった。I

――なあにが、別のところで二股かけてるくせによく言うよな。奈良岡、悪いことは言わん。お前のために、水口に切り替える。幸せな医者になれ。

「立会演説会を始めます。まずはじめに、藤沖生徒会長から今期における生徒会活動の総括と今後の課題について発表していただきます」

始まった始まった。一時間やり過ごすか寝ておくか。貴史は椅子の背にもたれかけながら目を閉じた。

今、最大の問題は改選が終わってから中二日置いたのち、月曜日六時間目の一コマなのだからそれまでエネルギーを蓄えて置かねばならないのだ。

先頭でおそらく目をしっかり開けて聞き入っているであろう立村と、美里のために。

「次は、副会長候補、一年B組、霧島真くんの演説です。みなさん、静かにしてください！」
——無駄だろうが。

貴史がいのすの背もたれにひっついて居眠りしている間、立会演説会で私語が絶えることなど一瞬たりともなかった。

なにせ隣の女子がうるさい。

「あのさあ羽飛、もっと生徒会に関心持ちなよ」

似合わない台詞だ。こずえを横目でにらんでおいた。知ったことか。

「政治といっしょじゃん、選挙権あるんだからさあ」

——なあにいきなりくそまじめになりやがってるんだ。

貴史の知る限り生徒会改選に関して熱く語りたがる奴はひとりもいなかった。

もともとD組の連中が生徒会よりも委員会に命をかけていたから当然のことだ。いきなり盛り上がれと言われたってしょうがない。

「それにしてもさあ、南雲、あんたどう思う？ 規律委員長様として、今回の改選なんだけどさ」

ずっと無視を決め込んでおいたのでこずえもあきらめたらしい。南雲へ方向転換したようだ。貴史は目を閉じたままでいた。

「そうっすねえ、今のところ順当に決まるんでないのかなっ」と

「順当？ ほお、それは聞き捨てならないねえ」

「だって、信任投票に逆らう必要なんて今のところ全然ないし、そうだよ、彰子さん」

奈良岡彰子の相槌打つ声は聞こえない。黙っているのだろうか。

「得なことなんかあるって、まあ損得計算でいけば、何にもしないでいい方選ぶでしょうよ、ね、彰子さん」

無視こかれているのは南雲も同じようだ。

さすがに霧島ゆいの弟ということは知っている。言葉の流れる通路だけは耳に用意しておいた。

意地でも目を開ける気はなかった。

「みなさん、ごきげんよう。一年B組、霧島真です」

——なんだこいつ？

思わず腰がひっこんだ。薄目を開けて覗き込むと、壇上にはやたらと気取った面の男子がひとり貴史たちを見下ろしている。

顔を知らないわけではないが、こうやって見上げる格好になるのは面白くない。

——何様のつもりなんだあいつ。

「ほら、ゆいちゃんの弟」

「ほお」

周囲のざわめきは主に女子方面からふきだしてくるのだが、時折やじが混じったりもする。当然だ。爆竹鳴らしてやりたくなる。

なんなのだ、あの生白い顔ととんがった鼻、欧米からの転校生として乗り込んでくればまだ対応のしかたもあるのだろうが。

背丈もそんなに高くないのに、態度だけがでかい。

「世の中、南雲みたいなタイプがもてるんだねえ。よくわからんけど」

「ありがたいことで」

貴史が隣にいることを全く気にせずこずえが南雲とつっこみまくっている。

「今の時代には合わない、損なタイプだよねえ、霧島ってねえ」

「へ、ああいうタイプがひそかに好み？」

「まさか！ 男の匂い、しないじゃん」

——なんだその男の匂いっつうのは。

こずえの下ネタトークは立会演説会の真っ最中でもとどまることを知らなかった。

「やっぱり、女子を牝にさせてしまう何かがないとき、いくら外見かっこよくてもアウトだよ。だって観てみ？ 霧島を見てたらどう考えたって弟だよ！ うちの弟とおんなじ！」

力強く訴えている。南雲の反応はわからない。

「男として感じるもんないじゃん！ 立村とおんなじ匂いだよね。頭なでて、髪の毛整えてやって、鼻つまんでチューしてやるくらいしかないじゃん」

「鼻つまんで、チューってなんですか、姐さんそれっていったい。まさかりっちゃん相手にやってるの？」

「さすがに、それは美里に縁切りされるよねえ」

——ったく、くだらねえ。

きわどい話題を続けていても、誰一人注意する先生方はいない。

まだまだかわいいほうなのだ。

三年ならずすでに半年を切った中学生活、生徒会改選なんてさほど影響はない。もともと生徒会自体に存在感なんてないのだから、勝手にすればいいだけのことだ。

二年生たちの気持ちとしてはやっぱり、霧島真という男子、面白くないものがあるだろう。

あとで直属の男子連中に絞られるんじゃないかという気もするが、貴史にとってはどうだっていい。

霧島真の全く途切れることない甲高い声は、やじや罵倒にめげず隅から隅まで広がっていった。

「僕は青澗大学附属中学に入学してから、先生たちに何度も委員会活動へ参加を勧められました。しかし、実情を知るにつけて全く興味が湧かず、今までは傍観者の立場でおりました」

——ああそうかい、こうやって挑発して何が楽しい？

「理由はさまざまございますが、一言で片付けるならばそれは」

言葉を切り、ざわめきにつばを吐きかけるがごとく、

「あまりにも委員会活動というものがレベル低すぎると感じたからです。挑発しているとお思いでしょうが、その通り、僕は先輩たちを思いっきり挑発させていただいております」

ものを投げ込んだ奴がいるらしい。先生たちがふたり、二年生席にかけより男子をひとり、連れ出した。知らない奴だった。

「どうやら、銀球鉄砲みたいよ」

こずえの解説が聞こえる。

「そりゃあまずい。目にあたったら失明の恐れありじゃん」

「どう？ 規律委員長としてあれは」

「取り締まるっきゃあないですねえ。俺たちの卒業式のことを考えるとなおのことね」

「狙われるかもねえ、南雲、あんたさうとう今まで悪さしてきたからねえ」

「すねに傷のある身ですもんで」

軽口叩き合う側で奈良岡彰子の声は聞こえない。にこやかに頷いているのかわからない。

貴史としてはいいかげん、南雲に愛想を尽かしてほしいものだと思う。霧島のむかつく演説は延々と続いているが、もうここまで聞けば十分だ。

「信任投票、決まると思う？」

「でしょ？ むかつくよりも面倒くさくないほうがいいに決まってるし、でしょ？ 彰子さん？」

——別の女子と付き合ってるくせによく言うぜ。

突っ込みをするのも面倒くさい。だから黙っている。そこんところだけは南雲の言い分が当たっている。

だいたい、「生徒会役員になってから何をやりたいのか」という部分は誰も似たようなことを言うだけだ。

「生徒ひとりひとりが笑顔でいられる学校作りをしたい」

「本音を伝えられる環境を作りたい」

「生徒会は生徒ひとりひとりものであることを伝えたい」

多かれ少なかれ、実際達成されたとしてもたいして生徒たちにはどうだっていいことばかりだ。

貴史も決して生徒会の盛り上がりを否定しようとは思わない。が、自分たちと関係ないことには面倒くさくてかわりたくないのも本音だ。

立村のように真剣な顔をして取り組もうとする奴もいないわけではないが、貴史としてはまず、足元であるクラスをなんとかすべきではないかと思う。

霧島の強烈な挑発演説が終わり、しばらく険悪な雰囲気の流れの中、貴史はもう一度目を閉じた。自然と興味のないことは耳から断ち切られてしまうものだった。

ノンストップでどんどん進んでいく立会演説会。

ワイドショー感覚で解説を続ける古川こずえとつっこみを入れる南雲との会話は、決して心地

よいものではなかった。

誰かもうひとり混じっていればまた、貴史も自分なりの意見を堂々と言い放つことができただろう。

クラスの中ではいくらでも自己主張できるくせに、なぜか体育館では何もできずにいる。——くだらなすぎてやる気ねえだけだって。

強がってみても、列に挟み込まれている「委員会」の匂いはどうしてもなじむことができない。

——あの弱っちい立村だって、評議委員長になっちゃったとたん、あだもんな。

おごり高ぶる性格ではない立村ですら、体育館で先頭の席に座ったとたん、果てしなく遠い奴に感じられてしまう。

ましてや、

——美里ですらも。

今まで感じたことはなかった、かゆみを覚える。

目を閉じて聞きたくない言葉をさらに耳から流していく。

「さあさあ次だよ次。どうなるだろうねえ、生徒会長もやっぱし信任で一発？ それとも二発め来る？」

「そりゃ信任でしょう、俺ももう面倒なことしたくないもん」

こずえの声トーンが一段と高くなる。

「なんてったってああた、あれだけ騒ぎ起こしておいて、全生徒の約半分を占める女子たちから総すかんって可能性あるよね」

「それ以前に女子って政治に関心ないっしょ、ねえ彰子さん」

相槌を求めているが、真面目な奈良岡彰子の返事はない。

「でもでも、女子としてはやはり、親友を裏切ってつらっとした顔で開き直す子ってむかつくよ」

「そういうもんですかい？」

「もちろんだよ！ 女子はね、面子とかそんなもんじゃないのよ大切なのは。いったん信じたことをあっさり裏切ったら最後、絶対、一生許さないんだからね」

「ひょえーそれは怖い怖い」

——まじで怖いな。立村やめとけ。美里振っちゃうのは。

知らず知らずのうちに心で相槌を打ってしまう。

「では次に、生徒会長候補、二年B組、佐賀はるみさんの演説です」

アナウンスを無視してこずえはしゃべりまくっている。止まらない。

「佐賀さんがしたことはね、小学校時代の親友である杉本さんを裏切って男を選んだっていう、女子として死んでも許されないことなんだよ！ 女子だったら同じ男子を好きだとしたら、まあ相手にもよるけど身を引くよ。友情を選ぶのがあたりまえじゃん！ それをさ。友だちより男子の方が大事だって選んでさ、杉本さんがずたずたに傷ついたので支えようとしないでさ。そんな

子を女子が応援するわけ、絶対にないじゃん！」

それまで生徒担当だった放送が、いきなり先生のどら声に変わる。

「その三年、静粛に！」

ピンポイント攻撃で、さすがにこずえは黙った。

同時に他のざわめき組もなだらかに静まっていった。

——さあてと居眠りタイム続行だ、さてさて。

「生徒のみなさん、はじめまして。二年B組、佐賀はるみです」

貴史は再び目を閉じた。

マイクから雑音のまじりなく、凜とした女子の声が体育館いっぱいに広がった。

「私は今まで生徒会に関心を持つ機会がなかったのですが」

いったん言葉を切った。まだまだ女子中心のおしゃべりは収まらない。

「このたび思うところあって、生徒会長に立候補させていただきました」

ゆっくり、途切れ途切れに続いた佐賀はるみの言葉が突如、ぴんと引き締まったように聞こえた。

貴史の耳に、しゅっと刺さった。

「私は、誰もが自分自身でいることができるように、そして自分自身に価値があるということをみんなに伝えられるような、そんな学校生活を私はサポートする立場に立ちたいと思い、このたび立候補しました」

貴史は目を見開いた。何か興味を持ったわけでは決してなかった。いくら無関心を装おうとしても、瞼が何かにひっぱられてしまったようだった。

——畜生、眠れねえ！

初めてまじまじと観察した佐賀はるみの顔にはかすかな笑みが浮かんでいた。

確かに、笑っていた。

髪の毛をくるくる耳の上に載せ、背をぴんと伸ばし、語り口調はやわらかい。

鈴蘭優がたまにしている髪型だった。

——優ちゃんに似てるかもなあ。

全体としてなんとなく似ていた。少なくとも立村おきに似るの杉本梨南よりは好みの顔だった。

。

貴史は椅子に尻を直角に合わせて座り直した。

「私は小学校時代ずっと、自分はひとりで何もできない人間だとずっと思い込んできました。誰かに助けてもらわないと何一つ満足に出来ず、困った時は泣いてばかりいたそんな小学生でした。でも、青大附中に入学して以来、私の中で何かが変わりました」

また言葉を切り、耳元に片手を当てた。ふうっと誰かのため息が聞こえた。

「今まで私は、自分自身これは間違っているんじゃないか、これはいじめなんじゃないか、これは私にとっていやなことじゃないか、そういう気持ちを無視してきました。何も感じないように

してきました。私がすべて間違っているんだと思ってきました。でも、ある時、どうしても納得いかないと思ったことをはっきり相手に伝えた瞬間、私の身の回りの人たちからとっても感謝されたんです。本当はずっと言いたくてならなかったのに、私と同じく自分が間違っているのかと感じ、どうしても伝えられなかったことがたくさんあるんだと、その時初めて知りました」

隣で南雲に話し掛けているこずえ、しかし返事は返ってこない。どうやら南雲もうるさがっているらしい。

「具体的な例は当事者の人を傷つけるので言えません。でも、同じことを何度も繰り返していくうちに、私の周りの人たちが少しずつ自信を持って自己主張し始めてくることに気付きました。私は決して成績もよくないし、こんな風に曖昧な言い方しかできません。でも、もしかしたら、私は周りの人たちがずっと言いたくても言えなかったことを伝える力があるんじゃないかって思ったのです」

間を置いた。

「いい子ぶっちゃってねえ」

「うるせえ、黙れ」

貴史はこずえに一言刺した。その言葉すら体育館に響くようだった。

佐賀はるみは呼吸を整え続けた。

「私には、何かができるということを知りました。今まで何もできなかったのは、自分にその力がなくて押さえつけられていると思い込んでいただけだったのです。私には、同じように自分に価値がないと思い込んでいる人たちを助ける力があるんじゃないか、って思うようになったのです。そのために、私は今からひとつ、はっきりとした公約をさせていただきます」

——公約？

ざわめいた。今までどの候補者も、「公約」という言葉を使わなかった。

「私は、今まで口に出すことができなかった疑問を、みなさんと一緒に考えていきます。たとえば、どうして青大附中の部活動は委員会活動と比較して関心を持ってもらいづらいのかとか、ずっと不思議に思ってきました。公立中学に進学した友だちに聞くと、誰も委員会活動の話などせず、サッカー部や野球部の活躍 自慢ばかり出てきます。もちろん委員会活動が大切なことは私も理解しています。でも、同じくらい部活動に参加している人たちももっと誇りを持つことができるように雰囲気を変えていく必要があるのではないのでしょうか。委員会に参加できる人たちはクラス三十名中十名程度です。残りの二十名は取り残されたままです。私はその、何か違うと感じている人たちの気持ちをひとつひとつ拾い上げていきたいのです。その上で、もっともよい道を見出すためのきっかけ作りをしていきたいと思っています」

——何か、違うと、感じている人たち。

南雲が軽く咳をした。それすら誰から発したものかわかるほどに響く。

——委員会に参加できる人はクラス三十名中十名程度。

——言いたくても言えなかったことを伝える力。

生々しく頭皮に言葉の針が刺さってくる。

ちくちく、貴史をつついてくる。

なんでだろう。全く関係のない生徒会立会演説会の世界なのに。

「ここまで私の話を聞いていただきまして、ありがとうございます。どのような結果が出たとしても、この場で私の考えを聞いていただけたことが嬉しいです。ありがとうございます」

佐賀はるみは一度びたっと動きをとめ、ぐるりと見渡した。また言葉を詰まらせ、ひとこと、「ありがとうございます」

丁寧に礼をした後、静かに壇上を降りていった。

「ずいぶん敵を作る話したよねえ」

「どこがだよ」

拍手がぎこちなく聞こえたのは、満場一致のものではないからだろう。貴史はこずえのぼやきをさえぎり立ち上がった。

「委員会にとっては結構痛いなあ、そう思うよね、彰子さん」

脳天気にも南雲が奈良岡に話し掛けている。立会演説会が終わったとたんにつこりと微笑み話を聞いている。

——立村と美里は果たしてどう思ったんだろうなあ。

振り返って誰かこの立会演説会の内容について語りたかった。ただ、誰でもいいわけではなかった。たぶん評議委員長の立村はそれなりに思うところがあるだろう。美里も頭に来ることがあるだろう。そのことを一緒に分かち合うには、列先頭までの距離が長すぎた。貴史の言葉が口に出す前に消えるまでの温度がどんどん冷めていく。入学してからいつもそうだった。立村と貴史との言葉の熱は、いつも同じ目盛に留まることがなかった。

——まあいっか。それよか次だ次！

立村を後期評議委員に押し出すこと。最終目標はそこだ。

結論を思い出したとたん、立会演説会で刺された頭の針は即、抜き取られた。

即日開票、発表はすでに土曜の朝に生徒玄関口ビー柱まわりにて行われていた。

結果は火を見るよりも明らか。一人残らず信任投票で決定していた。

ここで不信任なんて面倒なことをする奴などいるわけない。南雲が言い張っていたけれども、その点だけは真実と認めねばなるまい。

「あっさり決まったね」

「だな」

顔を合わせた古川こずえにあっさり相槌を打った。

「女子がもう少し反発するんじゃないかなって思ったんだけどねえ。やっぱりめんどくさいことは、しないってね。保守的だねえみんな」

「知るかなこと」

あの、佐賀はるみが訴えた強烈なメッセージを聞けば、まあこいつにやらせて見るかくらいの気持ちは湧くだろう。いろいろ裏事情があるにせよ、無理やり下ろしてやるなんてせせこましいこ

とは考えないに違いない。

肩に手が触れてくる。払いのけた。

「やめろよ」

「敏感だねえ。もしかして感じてる？」

「くだらねえこと言ってるより、どうなんだ、進んでるのかよ、あの菱本先生の」

「壁に耳あり障子に目あり。少し黙んな」

いきなり小声になる。

「女子たちはきっちり準備進めてるよ。彰子ちゃんのはりきってクッキー作りに燃えてるしね。男子たちにもおすそ分けあるかもよ。男子はどうなのさ。なーんもしてないみたいだけど」

「電話一本で終わるような内容だろ。女子みたいに面倒なこと、してねえよ」

「あっそ。とにかく、月曜の六時間目、抜かるんじゃないよ！」

「ああまかせとけ！」

苦味が喉の奥からせり上がってくる。貴史は首を降ってとなりのこずえを追い払った。

「あとはあさってのことだろ。さっさと教室行けよ」

まだまだ、開票結果をじっくり覗き込みたい気持ちはあるのだ。しゃべっている暇はない。

——ってことで、投票結果だが。

全員が信任投票というのは分かりきったことなのだが、若干票の割れている候補者が見受けられる。

最初にチェックした相手はもちろん佐賀はるみ生徒会長だった。こずえがぶつくさ言うほど、反対者はいないようだ。しかしその一方で書記候補の渋谷名美子と副会長候補の霧島真の支持者が危うく過半数をわりそうな票数というのはどういうことだろうか。霧島については、三年C組アマゾネス霧島ゆいの弟という部分と、人を馬鹿にしたような口調の演説がマイナスに働いたこともあるだろうが、渋谷に関しては現役の生徒会役員のスライドだ。面倒くさがる投票者がなぜ支持をためらったのだろうか？ このあたりは少し貴史も質問してみたいところだ。相当内部でいろいろと問題が山積みだったのか？

対抗馬のいない生徒会役員改選だが、それなりに歪みがあるのかもしれない。

——どっちにせよ、めんどくせえ世界だなあ。俺は関わりたくねえな。

こそこそと陰で足をひっぱり合うグループなど、知ったことじゃない。

とはいえその一方で貴史も、月曜六時限目は特定のだれかさんの前でこそこそしなくてはならないわけだ。

——めでたいことなんだし、ま、こういったびっくりイベントも悪かねえけどなあ。

生徒玄関から教室に向かいつつ、廊下で立村を探した。

——こういうイベントにあいつが混じってねえのは、いろいろあるけどもったいねえなあ。

「羽飛、立村どこにいるか知らないか？」

貴史が知りたいことを背中から問われた。振り返るとB組の難波が分厚いコートを羽織りポケッ

トに手を突っ込んでいた。めずらしい恰好だ。この時期にジャンパーではなくコートというのは、立村以外そういないのではないか。めがねをかけたまま指でごしごし拭いている。

「俺も探してるとこなんだ」

「ライバルって奴か」

軽口に和んで笑った。難波はすぐに頬をひきしめた。

「いいかげん二年の教室でうろうろするのはやめろって伝えておいてくれ。変質者と思われるぞ」

「はあ？ なんだそりゃ」

見当つかないわけではないが、コートの下にかなりの情報をかくしていると思われる難波にはかまを掛けたい。

「この一週間、みっともねえくらい二年B組の教室前で立ち尽くしてるんだとき。天羽や俺が何度か引き戻しに行ったけどな、全然効果なし。まったく反応しやしねえ。恋患いもあそこまできたらな。学校の迷惑だろう」

生真面目に言い放つ難波に、貴史はまたまぬけな質問を投げかけて見た。

「引き戻すってなんだあ？ たとえば、誰かを追いかけてまわしているとか、そういうことかよ」

「ま、そんなところだ。あいつの面子もあるから露骨にはやらない。用事ある振りして声をかけて、三年教室に向かう階段までずいと引っ張っていくんだが、次の日の朝見るとまた同じことなんだ。さすがに何度も同じネタで呼び止めるのはわざとらしいしな。天羽、俺、更科と立村当番を行ったわけだが、もう評議男子は手が足りない。女子にやらせるわけにはいかない」
——美里にはさせられねえな。そりゃあ。

別の意味で修羅場になる。貴史の腹ん中も若干修羅場だ。

「じゃああいつ、今も二年の教室で突っ立ってるってわけか」

「たぶんな」

「わかった、じゃあな」

返事より早く体が動き出していた。回れ後ろして即、階段を駆け下りた。

立村の顔から様子から、リアルにその「恋煩い」状況が浮かび上がるのも、正直気色悪い。美里の件とは別に、情けない評議委員長としての姿は大っぴらにさせたくない。

立村にとって女子とは鬼門なのだ。

——あすこまでな——んもねえとこで嫌われるってのはどういうことだよな。

三年間同じクラスで過ごしてきたが、物好きな美里に惚れられただけであとはもろに無視されている状況。もちろん女子に嫌われている男子は他にも大勢いるが、立村のように評議委員長という肩書きを持っているのにまったくその威光が役立たない奴はそうそういない。

二年A組からD組まですべての戸が開いている。B組の前に立ち尽くしていると聞いたが、

——ちょっと勘違いしてるんじゃないかねえのか？ 確か立村が熱をあげているとかいう女子は、一階の僻地に追いやられているんじゃないかねえか？ 前の教師研修室だったか。あすこだろ？

難波と話をしている時は気づかなかった。失敗した。ふと足を留めた。

——ん？ やっぱり、立村かよあれは。

難波は嘘をついていなかった。間違えてもいなかった。

立村がとんびのコートを羽織ったままずっと、二年B組の教室扉脇に張り付いていた。

季節外れの蛾、そのものだった。

——ちょっと待てよ。いねえだろそこにや。

ネタがもっと共感できるものならば、どつき漫才のツッコミを担当したい。

声をかけるには一クラス分の距離、遠すぎる。

通り過ぎる女子生徒たちが、三年D組の女子たちと同じく唇を曲げて悪口を言い合っている。

「うっわー、あの馬鹿また来てるよ」

「天羽先輩たちが連れ戻しに来てるのにね、しつこい、やらしいよねえ」

——立場なんてねえじゃん。ばればれじゃん。

難波たちの心遣いをあっさり一蹴する女子の眼差し恐るべし。

また別の女子たちも、貴史のそばで同じくつぶやいている。

「いるわけないじゃん杉本さん、B組に戻ってくるわけないじゃん。もうあの人幽霊になってるのにさ」

「そうそう、成績いいから退学すぐにさせられなくて、卒業するまで待っているって話でしょ」

「でもまあ、可哀想だよね。あれでしょ？ 新井林に振られて佐賀さんを逆恨みして小学校の頃からいじめぬいてたんでしょ？ この前B組の子から聞いた」

「でもさ、立会演説会の時に佐賀さんが言ってたとおり、はっきりやめてって言ってから、だんだんクラスの立場がなくなってたんでしょ。私もそんなことちっとも知らなかったから、佐賀さんが一方的に親友を切ったんだと思ってたけどね」

「違うって。いじめにあってて、杉本さんの手下にされてたけど、ひとりで立ち向かったんだって。あとで本当のこと聞いてびっくりしたよね。B組の女子たち、本当のこと知らなかったから佐賀さんをずっといじめてきてたって、みな反省して泣いてたって。男子もみな、女子たちのこと怒って、もう二度とクラスでいじめなんてさせないんだって、約束させたんだって」

「うわー、それなに、何様？」

「しかもよ。しかも！ 佐賀さんってさすごいんだよ。いじめられて当然の杉本さんをかばったんだよ！ ふつう、いじめられたらやりかえすよね？ 私の小学校六年間を返せって言いたくなるよね？ 露骨に叩かなくても、無視するよね？ それをだよ？ 杉本さんを許すからB組に帰してあげてほしいって桧山先生にお願いしたんだよ？ できる？ そんなこと？ 私だったら血祭りにするよ絶対！」

——立村、よりによってそんな最低な女子を追っかけてるのかよ？

噂話が猛スピードで進んでいる。あふれんばかりの情報が耳元を駆け抜ける。女子たちが……特にこずえ……

短時間でとてつもない裏ネタを仕入れてくるのには、このあたりに理由があるのだろう。

「でさ、でさ。私もあの人単なるぶりっ子だと思ってたんだけど、生徒会経由の話聞いてやっぱりこれはって思ったんだよね。ほら、生徒会書記の渋谷さんっているでしょが。あの人、噂だと生徒会長に立候補しようとしてたんだけど、藤沖生徒会長が絶対にそうさせたくないって言ってけんかになってたんだって。悪いけど渋谷さんって気取ってるってイメージだよね。本当は一年のほら、あの、おばかな先輩の弟」

霧島ゆいが哀れである。

「霧島？」

「そう、あの美形にさせようとしたんだけど、後輩に生徒会長は絶対させたくないって渋谷さんがごねたんだって。そこで藤沖先輩は佐賀さんをスカウトしたんだって。いろいろ調べて、人間ができてるって判断して。藤沖先輩って男尊女卑っぽって話聞いてたけど、佐賀さんのことはすっごく買って太鼓判押したんだって」

「ふうん。だから覚悟を決めて、なんだね」

「その後、何を血迷ったか杉本さんが立候補しようとして、あの馬鹿が」

言葉を切って立村をちらっと見て、またマシンガントークに戻った。

「止めようとしてかえって火に油注いで大変だったんだから。ずっと悩んでいた佐賀さんが、このままではいけないと覚悟を決めて、生徒会長に立候補したんだって。言ってたよ。これ以上杉本さんに惨めな思いをさせたくないから、ってね」

立会演説会の二つに丸めたおだんごヘアーはまだまぶたに残っている。

後ろ姿は鈴蘭優、これだけですべてが許されるような気がする。

——古川がさんざん悪口言ってたけどなあ、女子同士でこんなに受けがいいんだったら本物なんじゃねえの。ま、会長ってのは可哀想って気もするがなあ。

佐賀はるみ、ではなく鈴蘭優の似姿への共感と言えなくもないが、貴史の本音は根本そこから立っている。

以前はかなり女子たちから総すかんを買っていたとも聞く。

古川こずえの説明で「親友を裏切り彼氏を取った女子」のイメージが強かったのだが、さにあらず。

いじめに遭っていたにもかかわらず、一人で乗り越えて結果、すべてを水に流し次のステージに向かったという、なかなか骨のある女子じゃないか。

——悪いが古川は思いっきり人を見る目がねえってことなんだな。ったく、ばっかだな。

事実は学年を越えて確認してみないとわからないものだとつくづく思った。

——んなこと考えてる場合じゃねえだろ！ まずは立村連れもどさねえと、ばかまるだしだろが！

難波たちが気遣いしても無駄だった以上、貴史がさっさと三年D組に連れ戻さねばならない。

それが義務だ。事実から目を背けている以上、にっちもさっちもいかない。
貴史は一步踏み出そうとした。その時だった。

「立村先輩、梨南ちゃんはここに来ていません。それと」

二年B組の前扉から、見覚えのある二つおだんごヘアーが現れた。もちろん鈴蘭優ではない。
佐賀はるみ生徒会長だ。

はっきりと、貴史にも聞こえるくらいの声で、

「これ以上、梨南ちゃんをしつこく追わないであげてください。今、梨南ちゃんがE組にもB組にもいられなくなったのは、先輩が恥をかかせたからではないですか」

怒鳴りはしない。

ただ、周囲に響き渡る、張りのある鐘の音に似ていた。

「今の梨南ちゃんの傷を、これ以上大きくしないであげてください。お願いします」

おだんごヘアーが深々と下に下がっていく。

立村の返事は聞こえなかった。

返礼もせず、そのままD組方面の階段に向かい歩き去った。

その姿が消えるまで、見送るおだんごヘアーの生徒会長。

その頭がぐるっと反対側を向いた。すなわち、貴史の顔を直撃する方向へ。

——やべっ！ まじいだろこりゃあ。

無視するのもなんだし、とりあえず二本指のこめかみポーズだけ決め、貴史はそそくさとA組方面の上り階段を駆け上がった。完全に脳内では、佐賀はるみの全身像が鈴蘭優に入れ替わっていた。うちに帰ったら部屋で最新ヒットアルバムを聞こうと決めた。

月曜日の六時間目にかかるまでの約七時間半。

貴史は男子ひとりひとりに、「菱本先生のお祝いコール」に関する指導を口頭にて行っていた

。

たいしたことではないけれども、諸事情がからむ以上しくじるわけにはいかない。

それに、こういっちゃ美里が激怒するかもしれないが、

——めでたいことの方が楽しいじゃん。

本心でもある。

もちろん立村をめぐる評議委員にまつわる問題も面倒くさそうな話だが、とりあえずD組の連中がそこでうるさく騒いで引き下ろそうとすることもなさそう。美里はかなり心配している様子だが、貴史の知る限り対抗馬として立ち上がる奴は見当たらない。いたとしてもそれぞれ他の委員会に振り分けられている。たとえば、南雲あたりなら女子たちの圧倒的票を集めて当選しないとも限らない。だが南雲はすでに規律委員長だ。無理やり評議委員に引きずり込むようなことをしたら、それこそ全校生徒のどひんしゆくを買わないわけがない。

「いいな、てなわけだ。水口。みんなと一緒に立てよ！」

「それだけ？」

「ああ、それだけだ」

どうせあとは美里とこずえがうまくやることだろう。

一通り段取りをひとりひとりにつけたのち、貴史は金沢に声をかけた。

「金沢、例の絵はどうなんだ？ できてっか？」

「ごめん、形はできてるんだけど」

口ごもり、不揃いな前髪をごしゃごしゃかき回している金沢に、貴史はぐいと頭を押しさえた。

「まにあわねえってか？」

「俺の中で、満足できてないっていうか、もっと手を入れたらいいものになると思うんだけど、もう少し時間がほしいかな」

「どれ、見せてみる」

金沢は首を振った。手提げに押し込んだスケッチブックをがっしり押しさえた。

「未完成の絵をさらしたくないんだ」

「けどなあ、お前の絵がねえと形つかねえぞ」

いらだってしまう。D組といえば金沢、金沢といえば天才画伯。きわめて文化的イベントの際にはかかすことのできない存在だと誰もが認識している。

「なんだよおいおい、こんなところで予定変更かよ？」

「羽飛、ごめん。それで代替りの案なんだけど、さっき古川と相談したことなんだけど」

「古川あ？」

かなり苛立ち度が高まっているのに、目の前の金沢は気づいていないらしい。

「この色紙、納期遅れ代として俺が支払います」

いきなりぴんと背を伸ばし、机の中から一枚の封筒を取り出した。

「これで、クラスの全員分、サインで埋めてください」

そこには、金箔銀箔をたっぷりあしらった、手書きの青大附中校舎の光景が描かれていた。

「おい、これ、金沢が書いたんだよなあ？」

「絵の具だから重ねて書き込んでもらえれば大丈夫だよ」

すでに女子連中のひとり一言は空いた部分に書き込まれていた。しかし残りの男子分を埋め込むのにはどうしても、金箔部分に文字を載せないときつい。

「いいのか、それで」

「いいよ、古川にもそれでいって言うておいたし、それに」

何事もないかのように金沢は続けた。

「立村は書き込まないって話だから一人分余裕があるって言うてたよ」

——ああ、そういうことか。

貴史は片手で色紙を受け取り、まずはど真ん中直角にしっかりマジックで「祝・ご結婚！」と書き込んだ。

「金沢、これからこういう話は、まず、俺に言え」

釘を刺しておくことは忘れなかった。

どうも貴史の進めようとするのを、一步先んじる形でつっぱしっているのがござえの存在だった。

ありがたいといえばそうなんだろうが、今の金沢色紙の件と同じようにまったく気づかないところで話が進んでいるのを知るのはおもしろくない。

——金沢もなんでだよ。俺に一言、絵がまにあわねえから色紙にするって言えばいいのになあ。

主導権を握られているのがむかつく、と言ってしまえばそれまでだ。

男子だから女子だから、といったこだわりがからんでいてもそれはまた別。

得体のしれない不快感が漂い、無視することが難しすぎる。どこから湧いてくるのだろう。

——立村を最初から色紙に参加させないって決め付けるのもどうかよ？

もちろんそれもわからなくはない。立村の性格上決して「菱本先生おめでとうございます」などと無難なお祝い言葉を残すとは思えない。だが、金沢にまでその計画を伝えてしまうというのはどうなのか？ 古川ござえが実質、三年D組を牛耳っている事実を突きつけられたようなものだ。またそれに、素直にしたがってしまう男子連中というのもどんなものなんだろうか。誰か反発するような骨のある奴はいないのか？

考えていると気持ちがむしゃくしゃしてくる。貴史は即、席に戻った。立村がまだ教室にもどってきていない理由はわかっている。無理に引き戻さなくてもまわりの冷たい視線で即、我に返

るだろう。

そんなこんなで時間が過ぎ去った。いつのまにか立村は教室に戻ってきていて、英語の授業以外ではまったく存在感を感じさせずにいる。美里は女子たちになんやかんや話しかけているがその話題が菱本先生がらみなのかどうかはわからない。クラスの連中も特段、委員改選に関心を持っている奴を見かけない。

——なんとかなるだろ。

ようやく六時間目の鐘がなり、みながめずらしく全員席についていた。

理由はひとつ。貴史の厳命だ。

——ちゃんともまとまってるじゃあねえの。

もちろん南雲一派には無視しておいたが、そいつらもあっさりOKしているようすだ。

たいしたことじゃない。

貴史は美里に目を向けた。土曜日以降、例の件については一切打ち合わせなどしていない。

——うまくやれよ。

目が合ったとき、美里が生真面目な顔で頷いたのを、確かに貴史は受け取った。

うまくいかないわけがない。

本日主役予定……ただし本人は気づいていない……の菱本先生が意気揚々と教室に戻ってきた

。

この人はいつも、六時間目まで元気エネルギーが続いている。

教室隅の指定席、パイプ椅子に大股広げて座り、

「じゃあ、評議にまかす、さ、はじめろや」

ロングホームルーム開会宣言を無意識にしてくれた。

美里も同時に立ち上がり、

「はい、じゃ、はじめます」

貴史にまず頷き、その後こずえ、奈良岡彰子にも合図を送っていた。最後に立村へ

「じゃ、やろっか。それでは、本日は後期委員選出です」

促した。立村も一テンポ遅れて立ち上がり、うつむき加減のまま教壇にあがり、

——後期委員選

と書き込んだ。続けて「評議・規律・音楽・体育」と箇条書きに空白をあけて書き込み続けた

。

美里は教壇下からその様子を見守っていたが、すぐ黒板に背をむけた。

「ええっと、今日はこれから、後期委員を選出するんですけど、ちょっと菱本先生いいですか？」

」

「おお、どうしたんだ？ 清坂」

ふわあとあくびをしながら菱本先生が答えた。元気がなくせに突然ぼーっとしているのも、やはり結婚式の準備か何かの疲れが出ているのか。立村が振り返り美里に目を向けた。美里は無視し

たまま菱本先生に説明した。

「あのう、後期の委員についてなんですけど。もうあと半年しかいないですし、たぶんこの状態だと新しく立候補する人もいないんじゃないかなって思うんです。だから、ここで立候補者だけ募ってみて、いなかったらそれで全員再選ってことでどうでしょうか」

立村のチョークを持つ指が止まった。

クラス全員の呼吸も止まっている。

——美里、始めたな。

貴史だけが本来のホイッスルを聞き取った。美里の勝負はここからだ。

——しくじるんじゃないぞ。

今のところ貴史の激励眼差しも無視されているようだ。

「いやあ、でもなあ。清坂。最後の半年だから、悔いのないように新しい委員へチャレンジしたいって奴も、いるかもしれないぞ。最初から決め付けるのは、やっぱりよくないぞ」

担任としたら当然の言葉だが、現実問題、まずありえないシュチュエーションだ。

美里はきっと、そのあたりを読んでいる。

「じゃあ、聞いて見ます。それからでいいですか」

「まずはみんなにだな、立候補したい奴、いつもどおり聞いてみる」

「わかりました」

菱本先生は黒板に向かって上総の方へ呼びかけた。

「立村、お前、立候補者を募る時ぐらい、前を向け」

無視している。ガキ丸出しだ。ため息がもれる。菱本先生は重ねて厳しく告げた。

「立村、もう一度言う、ちゃんと前を見ろ」

「はい」

——お前のためにまわりがいかにも振り回されているか、もう少し考えろよな。

不承不承振り返った立村は、露骨にそっぽを向いた。遠くを見つめ直した。

それにしても。美里はすごかった。

——まじであいつ、本気出してるじゃあねえの。

通常ならば、のんびりと各委員ごとに候補者を募り進めていくのが常だが、

「じゃあ、この中で、立候補したい人、いますか？」

「いたらすぐに手を挙げてください！」

「いませんか、いませんね！」

「では、居ないようですので、今回三年D組の委員は全員、再選ということになります」

「異議有る人、いませんね！」

なんと一括で候補者の問いかけを行ってしまった。

こずえが話していたとおり「考える余裕を持たせない」という作戦は見事当たったとしか言いようがない。

菱本先生が見かねて口を出すがまったく意に介さない。

「おいおい、誰か真剣に手を挙げ損ねて悩んでいるのがいるかもしれないぞ。清坂、何そんなに慌ててるんだ？」

立村もなにか言いたそうな顔で教壇から降り、注意しようとしている。当然無視されているようだ。

美里は赤チョークで「後期委員選出」の文字上に大きく花丸を書いた。

「それでは、今日の本当の議題なんですが、時間がないのでさっさといきますね。それでは貴史、こずえ、彰子ちゃん、準備OK？」

名指しされた。クラスの男子、女子たちが貴史を一斉に見た。

すべてを打ち合わせしたわけではない。美里とは何をきっかけにして動き出すか、細かく約束したわけではなかった。ただ、どうすればこの場の空気を入れ替わるかはわかっている。

――よっしゃあ、じゃあいくか！

「三年D組一同、全員起立！」

これしかなかった。

全員がぴたっと揃った形で始めるには。

教室内に貴史の号令が響き渡り、かすかに残っていた私語もさっと消えた。

なんと菱本先生も腰を浮かせて立ち上がっている。

美里が唇に深い堀をこしらえて微笑んでいる。

「貴史、男前！」

微かに聞こえた。

菱本先生がわけのわからなさそうな顔で貴史に問いかけてきた。

「おまえら、どうした？ いきなりなんだ、このびしっと決まった姿はなんだ？」

「それはこれからのお楽しみってことで」

まず奈良岡彰子が机の下からどでかい紙袋を引っ張りだし、上にどすんと載せた。

どうやら例のめちゃくちゃうまいクッキーだろう。古川こずえが手伝い始めた。

しかしよく見ると袋の中から出てきたものは、お見舞いか葬式の時に使うような緑色の籠だった。クッキーではなく、ひらひらした白いものを巻きつけたフェルト細工のようだった。球技大会前に配られた「L」の文字に似ている。うずたかく盛り込まれている。

――おい、クッキーはどこだクッキーは！

心配する必要はなかった。もうひとふくろ、またどでかい透明ビニール袋には手のひら大の巨大クッキーが山のように詰め込まれていた。どう考えてもひとりで作るのは無理だろう。女子チームもやればできるもんだ。素直に感心した。

美里はその巨大荷物を一人で受け取った。貴史にクッキーをそのまま渡した。

「貴史、持って」

「どうするんだ」

「いい、私が渡すから」

小声でやりとりしたのち、美里は貴史と並んだまま先生に差し出した。勢いよく言い放った。「菱本先生、ご結婚とおめでた、おめでとうございます！ これ、三年D組一同からの、びっくりプレゼントです！ ってことでこれからの時間は、菱本先生へのお祝いインタビューと、三年D組一同からの色紙贈呈です！」

――なるほど、こうやって残りの時間を消化すると、そういうわけだ。

目を白黒させている菱本先生はまだ無言のままだった。

間髪入れずにこずえが色紙を恭しく差し出した。余計な一言まで添えて。

「先生、あんまり腰動かしてぎっくり腰になったらだめだよ。いい？」

「お前なあ……」

相当下準備に時間がかかったのだろう。女子たちがプレゼント準備に命をかけてくれたおかげで男子一同もう出番がない。本来ならあまりおもしろくないパターンだが、目的が異なる以上しかたない。いつのまにか隣によりそってきた古川こずえの褒め言葉も、まずは素直に受け取ることができた。

「なっかなか、やるじゃんねえ」

「まあな」

みな安心したように口笛ひゅーひゅー攻撃やら女子たちの拍手やら、やじやらなんやらが飛び交っている。貴史はふと、立村の所在無い様子に気がついた。

「おい、立村には色紙、書かせたのか？」

先生に聞こえぬようこずえに尋ねると、予想どおりの答えがこずえから帰ってきた。

「なわけ、ないじゃん」

菱本先生の相手をしているのはもっぱら美里だった。うつむきつつ、菱本先生がマスコット人形をつまみ、

「お前ら、なんだかなあ、驚かせるなよなあ。よく作ったよなあ。こんなたくさん」

つぶやくと、

「これ、クラスの女子たちが一人一体ずつこしらえたんです。女の子ばかり集まっちゃったけど、男の子でも別にお人形さん、いいよね、ちっちゃいうちは。あと、このクッキー、彰子ちゃんが今朝、焼いてくれたのをそのまま持ってきたんです。彰子ちゃんのクッキーは有名なんですよ、先生。彼女と一緒に、仲良く召し上がってくださいね！ 両思いがずうっと続きますよ、ねえ、そうだよね！」

丁寧に説明し、時折クラスの連中……ずっと立ったままだ……に頷くよう合図を送った。頷いているだけなので無反応のまま。しょうがないので貴史は手を叩いた。まずは一発気合を入れた。

「よおっ！ 菱本っちゃん、男出したな、さっすが俺らの担任じゃん！」

即、こずえがのってきた。

「彼女泣かせるんじゃないよ！」

「これで年貢の納め時！ 浮気するんじゃねえぞ！」

他の連中も乗りに乗ってわめき始めた。貴史ももう一步踏み込んで何か言おうとしたが、教壇脇の扉に張り付いたまま、ひとり仲間外れの立村と目が合った。

——いいかげんこっちに来いよ。まったくお前何いじけてるんだよな。

このばかばかしいイベントのきっかけが、実は立村ひとりのために仕組まれたものなんだと。

三年D組には誰一人、立村を評議委員から引きずり下ろそうとするものなどいなかった。でもそれは立村を信頼しているからではない。ひとえに「面倒くさいから」それだけのはずだ。

二年の教室前で軽蔑されきったまま、しつこく杉本梨南を追いかけ続ける立村の姿がどんなにみっともないものだったか、貴史はまだ誰にも言っていない。

おそらくだが、難波が貴史にそのことを伝えてきた理由は、同じく見るに見かねてという友情からくるものだろう。

きっと立村は自ずと本能で動いてしまっているから、自覚なんてないんだろう。

この情けない姿が仮に三年D組の連中に知られていたら、どういう評価をされていたのだろう

。

こずえや美里の言うとおりの「考えさせた」ら終わりだ。評議委員、ましてや評議委員長に立村がふさわしいなんて、誰も思わなくなってしまう。すべては一年の入学当初、勢いで立村を評議に推薦し、そのままつっぱしらせてこれたから今があるのだと。

——あと半年、もう少し自分でもなんとかしろよな。

天羽や難波、美里やこずえ、そして菱本先生が心底心配するように、立村にはもしかしたら評議としての素質にかけていたんじゃないだろうか？

——俺が、間違ってたなんて、言わせるんじゃねえぞ！

「もう堅苦しいことはやめやめ！ ね、みんな、彰子ちゃんの持ってきてくれたクッキー食べようよ、ね。先生、今日だけは、飲食物持込禁止なんて野暮なこと、言わないでよね！」

美里がどんどん仕切っている。どうやらクッキーにありつけそうだ。完璧な手回しだ。

奈良岡のクッキーで腹を満たされたら、もう誰も面倒なことなんか首を突っ込まなくなる。

たとえ、ひとりいじけている奴がいたとしても、だ。

「お前ら、なんだよ、おい、ありがとな、みんな、こんな俺についてきてくれてな」

菱本先生がいきなり顔を覆い号泣しだした。大の男がこんなに顔をぐっちゃぐちゃにして涙をこぼすなんてそうそうないことだ。

「先生、おいおい、泣いてるんでやんの。ほらほら、食べよ。おい、そこで突っ立ってる奴、こっちに来い。みんなでスクラム組んで校歌でも合唱しようぜ」

ハンカチを用意するのは奈良岡彰子、貴史は菱本先生の肩をがっしり組み、その隣に金沢を呼んだ。と同時に女子の何名かが「結婚行進曲」を「たたたたーん、たたたたーん！」と歌い出した。

完璧に準備万端だ。

貴史はずっこけたふりをして腰を落とし、

「とりあえず、食えばみーんな平和になるってことよ！」

天に人差し指を立てて、叫んだ。叫ばずにはいられなかった。

——夏休みの美りんちとの旅行と同じパターンだな。

予定どおり、なにひとつ、狂わずまとまった。

——ここさえうまくのりきりゃあ、あとはなんとか、なるだろ？

「美里、俺んところにもクッキープリーズ」

呼びかけると美里は後ろ手で勢いよくクッキーを一枚、ブーメランのごとく投げつけてきた。

「ナイスシュート！」

狙い、狂いなく、そこもきっちり貴史の手に収まった。

計画成功はあたりまえのことだ。貴史が美里と一緒に組み立てた計画で、失敗したことなんてほとんどない。

朝なのにどしゃぶりの天気、自転車が使えない。外は真っ暗だ。もう七時半近いというのに灯りをつけないと朝ご飯を食った気しないというのはどういうことなんだろう。

「母ちゃん、今日はもう夜ってことで学校休みたいんですが、そこんとこどう？」

無言で額をはたかれた。

「なに寝ぼけたこと言ってるの！ 今日バスが混むからとっとと学校行きなさい！」

「えー？ まだ七時半過ぎたばかりだっただけなのに」

「こういう日はね、どこもみな車使って会社に行くから、道路が渋滞するもんなの！ さあさそんなくだぐだしてないで！」

たまったもんじゃない。とはいえ母の言い分も間違っていない。雪であろうが雨であろうが大抵貴史は自転車で学校に向かうのだが、年に二～三回程度どうしてもバスを使わねばならない日というのがある。台風に当たったり、猛吹雪で自転車ごと吹き飛ばされる可能性が大な時とか、そういう程度なのだが、明らかに今日は「年に二～三回」のその日に当たる。

「せめてタクシー使ってもいいとかさあ」

「稼ぎもないくせに何バカ言ってるの！ さっさと行きなさい！」

朝食もそこそこにスニーカーで外に出た。鉛色の空からぼたぼた降り注ぐ雨と同時に穴の開きそうな音が傘の骨にも響く。

——たまったもんじゃあねえよなあ。

美里に声かけてから行こうかとも思ったが、あえてそれはよしておいた。

——あいつも、疲れてるだろうしな。

月曜日六時間目の表向き「菱本先生ご結婚おめでとうピクニックパーティー」裏は「立村を後期評議委員に無理やり押し込むための秘策大会」、このイベントを片付けて貴史なりに満足感を味わっていた。

美里と組んで計画を立て、途中こずえに茶々を入れられたとはいえ自分の思ったとおりに事が運んだ。

ぴたりとパズルの最後一ピースまで収まったすっきり気分は、やっぱりいつ味わっても気持ちいい。

深いことを考えすぎずに、どんどん進めて行くことができるのは楽だった。

目標の最低ライン「立村をとりあえず後期評議委員」として収めておき、卒業式まで無事に過ごすことができればそれでよい。

もちろん最後の「評議委員長選出」がどのような展開になるかはわからないが、少なくとも三年連中が立村の評議委員長就任に異議を唱えていないのならばほぼ問題ないだろう。天羽や難波がそれなりに対処するだろうし、基本として人間はみな「めんどうくさがり」だ。改めて面倒なことなんてやらかさないだろう。

——けどな。

あつという間にスニーカーの中がぐしょ濡れになる。さっき一歩踏み出した時に泥の水たまりに足を突っ込んでしまったせいだ。

学校にいたらストーブの前に靴下干して乾かそう。

やっぱり早めに行った方がいいということだ。

——一段落したら、やっぱし奴に文句言っとかねばなあ。

あえて今のところは知らんぷりしていたけれども、立村と美里との間のいざこざについては放っておくわけにはいかない。

ましてや後輩たちの物笑いの種になっている現実から目を背けている立村の頬を一発はたいておかないと気がすまない。

——そりゃ、まあ、なんだ。美里がしつこいとかうるせえとかそういうのはわからねえでもねえけどな。ただ、あのまんま二年の女子追っかけてて、評議委員長としてもそうだし、何よりもうちのクラスで浮きまくっちゃうってのはいったいどんなもんだろな。あいつに少し、周り見ろって言っとかねえとまずいだろ。

菱本先生のご結婚びっくり会でも、結局立村は一人ぼっちのままだった。

祝う気持ちもないんだろうしそれはそれでいいとしても、卒業式まであの孤独ロード一直線というのは、見ている貴史の方がなんか嫌だ。

——菱本先生だって、やっぱし、いらっとくるだろ？

——やっぱなあ、もう少し、気、遣えよ。

立村の評議委員としての面子は立てた。あとは、三月までに少しでもクラスの一員としての位置づけを考えろ。そう言いたい。

——やっべえ、今度はなんだあ？

思ったよりも水のたまっていた穴ぼこに足を突っ込んでしまった。膝まで来る。もうこうなったらジャージに着替えるしかなさそうだ。

バス停でも、車内でも美里を見かけなかった。

きっと父親の車に乗せてもらって送ってもらうのだろう。

今更ながらこっそり様子を見にいけばよかったと後悔の気持ちありだ。

——小学校の頃はよく乗っけてもらったしなあ。

バスの進み具合も、母の予言した通りのったりのったりと渋滞まっしぐら。途中でバスを降りる高校生が乱暴に椅子側へ人を押しのけていく。満員電車で痴漢に遭うとかいうけれど、貴史の身の回りにはほとんど学生服姿の野郎しかいない。ただむさ苦しいだけだ。

小銭をジャンバーのポケットから握り出し、学校内のバスロータリーに降り立った時には全身霧吹きされた洗濯物状態と化していた。すなわち、湿気だらけのよれよれ状態ときた。数人降り立つ奴もいたが、顔も知らない連中ばかりなので会話もしなかった。もっとも、降りれば後は楽だ。ダッシュで校門まで駆け抜ければよい。八時前。余裕過ぎるくらい余裕の到着だ。

傘を振って水気を払い、生徒玄関を見渡した。

悪天候の中、それでもめげずに朝練に参加している奴らがいる。ご苦労さんといきようがない。

その一方でどうやら貴史と同じように家を追い出され、しゅしゅ早く到着した奴もいる。ご愁傷様だ。

まあ遅刻しなかつただけでした。顔見知りの奴らに挨拶をし、ずぶ濡れの靴下を脱ぎ、素足のまま教室に向かった。もちろん、ストーブで靴下だけでも干すためだ。

ぐしょぐしょの靴下を軽く絞り扉を開くと、先着者がふたりいた。

——なんでだよ、こいつが。

「羽飛か、ナイスタイミングだな」

菱本先生がもうひとりの生徒と向かい合う恰好でストーブ前に立っていた。

「あ、おはようっす」

目も合わせずそっぽを向いたまま、つぶやく奴。どしゃぶりの影響まったくなくさわやかな髪型が決まったままの奴。

「ああ、おはよ」

貴史は突っ立ったまま、まず朝の挨拶だけ軽くした。

——最悪のタイミングじゃねえかよ。

別に菱本先生がいても問題はない。ただおもしろくない奴と一緒にいるなら、無理に教室に入る気にもなれない。ただそれだけのことだ。

「じゃ、またあとで」

背を向けようとする、呼び止められた。

「羽飛、ちょっと待て」

「はあ？」

「ちょうどふたりいるから、話が一度ですむ」

昨日、わんわん感動のあまり泣きじゃくっていた菱本先生とは思えない、毅然とした態度だった。

——なんかやべえことしたか？ してねえだろ？

仕方ない。扉を締め、ついでにストーブ前に靴下を一足ずつ伸ばした。取り立てて文句は言われなかった。

「何か？」

「ああ、あ、昨日はありがとな」

ピントが外れたところで礼を言いつつ菱本先生はうつむいた。

「まさか、嫁さんが女子プレゼントのあれでジェラシーとか、じゃねえよな」

冷やかな眼差しを向けたのは南雲の方だった。奴もいつものへらへらした態度ではないのが伝わってくる。いわば、「委員長仕様」といった真面目モードか。

「悪い、で、先生、俺に話して何？」

「お前、聞いてないのか？」

また、どこかずれた質問で菱本先生が返す。

——やっぱし嫁さんとなんかあったかな？

まったく想像つかなかった。

南雲の言葉までは。

「りっちゃんが評議委員長選挙で落選したこと、清坂さんから聞いてねえのかってことっしょ、先生？」

——ちょっと待てよ！

意味は即、把握できる。できないわけがない。

ただ、その言葉が伝わってこない。

「立村が、落ちたのか？」

それだけまず口にするのがやっとだった。足の裏がじんわりと冷えた。

菱本先生が頷いた。

「昨夜の段階で、委員長選の結果だけは聞いていた。もちろん選挙だから当落は付き物だし、それで人間性を否定するとかそういうことはない」

「そりゃ当たり前だろ」

いきなりまっとう過ぎることを口にする菱本先生に苛立ってしまう。普段の熱血ぶりとは異なる、どことなくじめりとした感触はさっき握り締めていた靴下のそれと同じだ。

「けどなんで、てか、誰が評議委員長になったんだ？ あの二年の、新井林か？」

「A組の天羽ちゃん」

また、南雲がつぶやいた。まったく態度を変えていないのはこいつだけかもしれない。

「天羽？ なんでだ？」

「三年評議でクーデターが起こったらしいよ。俺も詳しいことわからんけど」

「クーデターって？」

「だから、それ、清坂さんから、聞いてねえの？」

南雲は繰り返し美里の名字を口にした。

「分かるわけねえだろ！ なんだ？ 美里から聞いてねえのがおかしいのかよ！」

まったく動じず南雲が続けた。

「菱本先生が俺のところに電話くれて、そいで、改めて今話をしてことでここにいたんだけどね。俺も変だなって思ったの。だって、りっちゃんの親友って羽飛なのになんでいきなり俺にそのことで連絡くれたのかなって」

思わず菱本先生の顔を覗き込む。慌てて首を振っている。

「南雲、思いつきで説明するのはよせ。俺もまず先に、羽飛に電話したんだ。ただ話し中だったんだ」

「姉ちゃんが三時間長電話してただけだったの！」

事実だ。毎晩女友達とだらだら話を続けていて、父が雷を落としていたのを覚えている。

「とにかく、ふたりにまず立村を取り囲む現在の状況について、一刻も早く聞きたかったんだ。他の奴ならそう簡単にめげたりしないし、あとでゆっくり話し合ってもいい。ただ、立村だけは別なんだ。あいつだけは、人一倍早く事情を聞き出さないとまずいんだ。わかるだろ、羽飛？」

菱本先生は貴史の前に向き直った。

「今は時間がないんで、今日の放課後改めてお前たちの意見を聞きたいんだ。残念ながら、俺は、立村から信頼を得ているとはいえない。それはよくわかっている。俺が一方的になんやかや口を出しても跳ね返すだけだと思う。でも、だからといって一人ぼっちで放っておくわけにはいかないんだ」

「いいんじゃないっすか？ 先生、そのまま知らんぷりしてたほうがりっちゃん、ほっとすると思いますよ」

あっさり南雲が答えた。

「俺も正直、評議委員会って何考えてるのかな、くらいは思いましたけどね。でも天羽だってそれなりに考えるところあってのことでしょうし、少なくともりっちゃんを引きずり下ろしてざまあみろってことではなさそうですし。かえって同情されたらやりきれなくてたまったもんじゃないと思いますよ。少なくとも俺だったら、知らん顔して、洋楽の話でもして気楽に過ごしていればそれがベストじゃないかなって気がしますよ。知らんぷりが一番」

「南雲、もちろん他の奴ならそれでもいい。それだけ強い奴なら」

うつむいて首を降り、菱本先生はまたぐるりと一回転した。貴史に向けた。

「だが、立村の場合は別なんだ。以前からあいつが評議委員長という立場に置かれるかもしれないという話を聞いてから、この日が来た場合のことをいつも考えていたんだ。たぶんどこかでほころびが出た場合、どうやって支えていけばいいのかをな」

「ちょい待て、先生！ この日ってどういうことだよ！」

初めて菱本先生の言葉にひっかかった。貴史はぐいと菱本先生の鼻の穴を覗き込むよう見上げた。背はほとんど変わらないのに、なぜか今だけは威圧感がある。

「先生、まさか立村が最初から、評議委員長から落っこちるって思ってたってことかよ？ あいつが評議になったのって一年の時からだろ？ そんなときから、まさかあいつが上に立った後落っこちるとか」

「あのさ、勘違いするなよ」

冷やかな声は南雲からのものだった。

「先生はりっちゃんを評議向きじゃないって思ってたってことだろ。委員長以前として」

「なんだと！ お前友だちに対してよくそんなこと言えるな！ 俺に言うならともかく立村のことを」

「違う違う、俺は菱本先生の言いたいことを短くしてるだけ」

つらっとしたまま南雲は受けた。

「そういうことっしょ、先生？ とにかく俺の考えは以上です。てなこと」

一礼し、南雲はかばんだけ自分の机に置き、そそくさと教室を出て行った。

かなり気まずい沈黙が流れた。貴史が教室に足を踏み入れてからまだ五分も経っていない。

「先生、どういうことだよ。俺、全然話なんて聞いてねえよ。美里からもなんも」

「そうか」

一呼吸おいて、菱本先生はゆっくり貴史に語りかけた。

「あとでお前とはじっくり話すつもりだったんだ。南雲の意見としては、とにかく放っておいたほうがいいとのことなんだが、俺はそう思えなかった」

言葉を切って、また貴史を見た。答えが欲しそうだった。

「なんで放っておいたらまずいんだよ。例えば俺とかだったらどうなん？俺だったらなんとかなるかとか思って無視こいとく？」

「ああ、お前とならゆっくり話し合えれば大丈夫と思えるからな」

「話し合い、できるかどうかってことかあ」

あのキザ野郎が余計なことを言うから貴史も混乱してしまったようなものだ。だいぶ落ち着いた。自分のかばんを濡れたまま机に置いた。外の雨はまだ止みそうにない。窓ガラスが揺れている。

「本当なら担任としてすぐに立村と話し合いを持ちたいが、たぶん今の状態では無理だろう。だから、一番近いとされる羽飛に話を聞いたかったんだ。友だちとして、お前は立村をどう思う？今回のような屈辱を味わって、冷静でいられると思うか？」

「わからんけど、冷静なふりはすると思うよ」

「ふりか」

頷いて菱本先生を見つめ返した。声の裏側に焦りのようなものが感じられた。もしかしたら菱本先生も普段の熱血キャラクターを押し出すことにより、本心の猛烈な疲れをかくしているのかもしれない、そんな気がした。貴史が想像しているよりもはるかに菱本先生は立村のことを深く観察し、その上で連絡しようとしてくれたのかもしれない。直接尋ねてみるに限る。

「先生、もしかしてさ、立村が自殺するんじゃないかとか、そこまで心配してたりする？」

軽く投げかけてみたその言葉、ストライクゾーンのように鼻の真ん中に収まったようだった。

「そんなぐらい、あいつが、落ち込んでるって思ったから俺に電話してきたんだろ？ま、姉ちゃんのせいで受け取れねかったけど」

「俺の見方が間違っていればいいが、少なくとも立村は、自分ひとりでこもってしまいひとりで決断してしまう傾向がある。それは入学した頃から感じていたが後ろに羽飛がついているなら大丈夫だろうと考えていた」

「なんで俺が？」

「羽飛、まず今日の段階でお前なら立村にどう接したほうがいいと思う？南雲の言う通りそっとしたほうがいいのか、それともこちらからもっと近づいて直接話をしたほうがいいか？俺は一旦きっちりと話をして、とことん本音を聞きたいと思う。でもお前はそう思わないか？」

——どうする？

外の雨が止む気配はなかった。アメーバみたいに水滴が広がり窓辺から転がり落ちる。

ストーブから湯気が立っているのは、さっき乾かすためにかけた自分の靴下からだ。

——なんで天羽が委員長になっちゃったんだ？ それにクーデター？

途切れ途切れの情報しか自分の耳に入ってきていない。何よりも、

——なんで美里、俺にそれ連絡しなかったんだ？

姉の長電話とはいってもたかが三時間くらいのこと。真夜中でも、それこそ今朝、窓辺に石を投げて合図したって構わなかったはずだ。なのに美里は一切連絡をよこさなかった。ほぼ委員長確定とされていた立村が、予想もしない展開で落とされたのだ。美里がショックを受けぬわけがない。受けたら誰かに抱きつかずにはいかないはずだ。今まではその相手が貴史か古川こずえかのどちらかだったはず。仮にこずえが相手とすれば、当然のごとく貴史にこずえ経由の連絡が入っただろう。それが一切なく、いきなり菱本先生と南雲から告げられたというこの事実は、なんなのだ。何を意味するのだ？

——美里がもっと早く、連絡よこせば！

南雲に嫌味たらしく二回も「清坂さんから聞いてないのか？」などと告げられずにすんだはずだ。

——あいつ、何とっちらかしてるんだよ！ こういう時になぜボケかますんだよお前は！

目の前で問う菱本先生よりも先に、貴史が問い詰める相手がいるはずだった。

——美里、お前なんで、どうして俺に先に言わねえんだよ！

膝の濡れた部分が冷えてしみた。

「先生、ひとまず俺、何が起こったのかを確認したいんだ」

ゆっくり、一言ずつ、言葉をつなげた。袖口で口を拭った。

「今の段階だと、立村が引きずり下ろされたのかそれとも自分から降りたのかすらわからねえし、後釜の天羽がなんで評議委員長に選ばれたのかその展開もまったく分かってねえし。俺、立村がなんでわけわからねえことばっかやらかすのかは正直わからねえけど、一通り事情をつかんでその上で話をすれば、聞く耳もたねえってことは絶対ねえと思うんだ。少なくとも、すぐに豆腐の角に頭ぶつけて死んでしまうなんてことはねえよ。ただ、このまんまあいつを、腫れ物触るみたいな扱いでもって様子見するってのは俺も反対。できるだけ早くきっかけを見つけて、差しで話をするにはしてえと思うんだ。俺も、あいつと真っ正面から今まで話をしたことって、実はあんまりねえし。あいつが露骨に嫌がるから斜め、斜めって感じで付き合ってきたし。けど、もう卒業まで時間がねえのは俺もよくわかってる。先生、悪いけど、まず一日情報収集のための時間、くれよ。まず俺なりに天羽や評議の連中と話してみても、何が起こったか確認してみる」

「羽飛、でもな」

遮った。大人が入ることのできない場を作らねば、立村は決して心を開かない。

「先生、俺を信用してほしいんだ。俺は、三年D組みんな卒業したいしそのためになんとかしたいって、前から思ってた。そのために立村と一度はきっちり話をしねばって思ってたんだ。もちろん俺だけで手に余すようだったら、その時は菱本先生や狩野先生に相談するから。絶対。けど、まず今だけは俺に任せてほしいんだ。まだ、ここまでは、大人に入ってきてほしくねえ

んだ」

「お前、先生を信用できないのか？」

「してねえんじゃねえよ。菱本先生、信用してないなら俺、ここまで話すわけねえじゃん。南雲みたいに無視こくやりかたで本当はいいのかもしれないねえよ。立村だって本当はそっちのほうが楽かもしれないけど、そんなことしたら今度は俺たちがみじめだろ？ 先生、三年間立村に無視されつづけて、うちの組のことをほっとかれて、頭きただろ？ 俺、卒業式までなんとかして立村を三年D組のひとりとして、先生と話ができるようにさせたいんだ。でなかったらあいつ、ずっとひとりぼっちのままだよ。先生だってそれ、心配してるよな？ だから、少しだけあいつの親友として時間がほしいんだ」

今まで、菱本先生を大人の教師として見たつもりはなかった。

いわば兄貴分のような存在。それでいて熱血ぶりにこちらのほうがお世話したくなってしまうようなキャラクター。

それでも「教師」であり「担任」である以上、見えない壁のようなものは確かに存在していた。

大人としての確かな、垣根のようなものだった。

それが夏休みの彼女罵倒事件目撃をきっかけに、貴史の中でその垣根が壊れた。

尊敬とか思慕とかそういうものとは違う、何か、同じ地面であがきあっている同士のような感情が細く長く続いていた。

ただそれを伝える機会はまったくなかった。あくまでも教師と生徒としてのつながりだった。

もし、教師のままで菱本先生と接するのならば、貴史は何も言わずに立村と差しの勝負に出ただろう。それが十五歳のやり方だ。大人なんて入れたくない。綺麗事で片付けられてしまうのがおち。南雲と同じ価値観のふりをして黙らせておき、陰でぶつかろうとしただろう。

——いや、菱本先生には、絶対話せばわかる。わかるはずだ。

認めさせたかった。確認させたかった。上下ではなく、横につながった本気を伝えたかった。

——対等に、話したい。

「わかった。羽飛もそう思っているんだったら、まず今日は様子を見ようか。ただひとつだけ約束してほしいんだ」

「何？」

「できるだけその事情を、俺にも話してくれないか。俺はどうしても立村の中に入れない。でも羽飛なら入って行って救うことができるはずなんだ。そのために、どうしたらいいかを腹割って俺に話してほしいんだ」

菱本先生は腕時計を覗き込み早口に語りかけてきた。

「俺は教師だ、で、担任だ。大人としてやらねばならないことがある」

「そりゃわかるけどさ」

「でも、友だちでなくてはできない領域があることも、よくわかっているつもりだ」

肩に手を置き、もう一度告げた。

「今日は職員会議がある。明日の放課後に話し合おう。ここんところは、お前が大将だ」

最後にわけのわからないことをつぶやき、菱本先生は素早く姿を消した。荷物を持っていなかったところみると、職員室に寄ってから教室に来たのだろう。貴史はストーブの上にのせっぱなしの靴下に触れてみた。熱くはなっているがまだまだ水にぬれたままだった。朝の会が行われるまで、まだ乾きそうにない。

——美里をまず捕まえることだ。

現場にいるのはまず美里だ。あいつから状況を聞き出すことが先決だろう。

立村がどんな顔で教室に現れるかはわからないが、とりあえず知らんぷりで通すと決めた以上こちらからは現段階では何も言うまい。

——ただ、やっぱり、誰かが言い出すのは時間の問題だよなあ。

立村を軽蔑しきっている女子チームが聞きつけたり、もしくは他の組経由で情報を聞き出したら……もちろん評議委員長という座は青大附中にとって特別なものなのでとっくの昔に全校生徒が知っている可能性が高い……面と向かって嫌がらせしないとも限らない。が、それはそれ、これはこれ。事が起こってから対処しても間に合うはずだ。まずは美里を捕まえてから話をせねばなるまい。

貴史は靴下を裏表にひっくり返してストーブのへりに載せ直した。素足がだんだんかゆくなってきた。じわじわくる怪しい感覚で、どうしようもなく足の指がちぎれそうだった。扉を開け放ったまま貴史は生徒玄関に向かい走り出した。

美里を捕まえる前にまず、三年A組へと向かった。菱本先生が職員室に戻ってから数分でクラスの連中がうごめき出したようで、へたなことは喋ることができそうにない。なによりも張本人の立村と美里と接する前には下準備が必要だ。

——第一、俺になんにも言わねえってところが、なんだかな。

立村はともかく、いつもびいびい泣きついてくるはずの美里がひたすら連絡よこさないというところからして変だ。

向こうがそういうつもりなら、こちらとて別のやり方があるというものだ。

——まずは、天羽だ。

「天羽、いるかあ？」

まだ八時十五分になるかならないか。A組の連中はどちらかいうとのんびりとおぼりした奴が多くて、ぎりぎりの八時十九分五十五秒くらいにならないと顔が揃わない。当然天羽もそのひとりのはずなのだが、

「よお、羽飛、おはようさん」

脳天気に関節をかきながら現れた。自分の方から廊下に出て話をしようとする寸法らしい。

「悪いがちょいと」

「ああ、あのことだろ」

すれ違う男子女子、それぞれが「そういえば評議委員長が」などと、明らかに「評議委員長」のところだけ強調しつつ通りすぎていく。

それなりに情報は流れているということなのだろう。天羽は顔をあげてちらと目を泳がせたのち、

「立村から、聞いたのかい」

江戸っ子風……がどんなもんなのか貴史もわからないが……に軽く尋ねてきた。時代劇によく出てくる「遊び人の」なんとかさんみたいな感じだ。

「聞いてねえ」

「じゃ、清坂ちゃん？」

「わからんからお前んどこに来たんだろが」

もう少し神妙な態度かとおもいきやこのいい加減さ。舌打ちしたくなる。菱本先生と南雲から仕入れた情報を急いでまとめる。

「評議委員長選挙で何があったかってことを確認したかったんだよ。俺だってこれから立村に何言えればいいんだっての」

「誰もわからねえよ、そんなこと」

初めて天羽はため息らしきものをついた。「吹いた」といった方が正しい。唇を尖らせ息をふうと洩らす。

「詳しいことはあとで話すが、一言でいっちゃうと、難波のクーデターだ」

「難波が？ あの似非ホームズ何考えてるんだ？」

「俺もわからねえ」

天羽は肩をすくめた。言葉少なに貴史をじんわり見つめてきた。

——難波が、なんでだ？

「わからねえだろ。俺も何度考えてもわかんねえよ。どちらにしろ、俺は後期評議委員長になっちゃった」

「お前がなったっつうことは、立村が落ちたってことだよな。けど新井林が対抗馬だって聞いてたけどなんでお前が立候補した？ そこんところがわからねえ」

「作戦」

天羽は小声でつぶやいた。

「俺なりに立村を委員長に持っていくつもりでいたんだがな。足元を掬われちゃったってことだ。あの馬鹿野郎が」

珍しく天羽は難波を口汚く罵った。

「どちらにせよ、俺も立村のことは考えてる。羽飛、知恵貸してくれるよな？ :

それだけつぶやくと素早く教室に戻り扉を後ろ手で閉めた。すっとんきょうないいつもの声で受け答えする天羽、廊下にも響き渡った。

——いやー、なんだろなあ、俺もまったくわからねえー！ あ、近江ちゃん！ おっはよー！

次にB組へ向かうつもりだったが、すでに時計は二十分を回るところだった。

——難波か。

天羽と難波との間にいざこざがある、とは聞いたことがない。少なくとも女子の好みは露骨に異なるし特別に何かトラブルを起こしたこともないはずだ。それを言うならむしろ立村との方がけんかのひとつふたつはさんでいそうな気もするが、そんな気配もない。

難波のクーデター、と天羽は確かに口にしていた。

わからねえ、と繰り返していた。あの口調を嘘とは思いたくない。

——けど、なんで難波がそんなことする必要あるんだ？ それに天羽も作戦とか言ってたけどなんで評議委員長に立候補する必要があったんだ？

万が一立村が落ちるとしたら、新井林との対決で票を稼げなかった場合に限られると聞いていた。そして、三年男子評議の結束は固いとも聞いていた。もちろん美里は不安がっていたけれども、男子連中の足並みが揃っていれば問題なく立村評議委員長でおさまるはずとも。

それが、なぜ、こけたのか？

なぜ、難波がクーデターなんぞ起こしたのか？ いやなによりも、

——奴がクーデターを起こすとしたら、まず自分が委員長を狙うだろ？ 男としたらそれが当然だろ。

天羽を委員長に推すためになぜ難波が意味不明な行動を取ったのか。そこのところが貴史には理解できなかった。

教室に足を踏み入れ直すと同時に、二十分の鐘が鳴った。

「おーい、美里いるか？」

呼びかけてみたが、まだ来ていない。代わりにわらわらと女子たちが貴史のもとへ駆け寄ってくる。かもめに餌付けしているわけでもないのに、勢いがよい。

「おいおい、お前らなんだよいきなりファンクラブ化してるぞ」

軽口で迎えてみるが、女子たちの目は本気だ。冗談で交わせそうにない。助けを求めたいところだがそうできる相手はせいぜい金沢か水口のみ。当てには出来ない。立村なんて問題外。第一まだ教室に来ていない。

「羽飛、聞いた？」

「なんだよ」

「立村が評議委員長から落とされたってこと」

女子チームの中には当然美里も古川も混じっていない。そこから情報がもれたわけではなさそう。ということは、すでに全校的に広まっている事実ということなのだろう。貴史は首を傾げつつ答えた。

「それがどうした？」

「じゃあ、ほんとなんだね？」

「やっぱりそうなんだー！」

「やっば、見ている人はわかるんだよね」

「歴史が動いたよね」

——はあ？ こいつら何、盛り上がってるんだ？

奇妙な和気藹々ぶりに立ち尽くすだけの貴史。

女子五人が手と手を取り合い熱く語っている。

それこそ「歴史の立会人」みたいな気分のようなのだ。

ひとりが貴史に向かい早口に語りかけてきた。

「今まで、ずっとずっとずーっと、何か違うって思ってきたのに、一方的に決まってきたってところあったじゃん？ 昨日の委員決めだってなんか清坂さんがひとりであせって無理やり押しきってただけだったし！ けど、無理なことってやっぱり通じないんだよ。そうだよ、そういうことなんだよね！」

「お前ら、立村が落選して、すげえ喜んでたりする？」

「違うよ、そういう意味じゃなくって」

別の女子が、また勢いづいてしゃべり続ける。

「政治と一緒にことだよ！ 今までおかしいことがまかり通ってきたのに、やっと本当のことが言えるようになったって！ フランス革命とか明治維新とかあるじゃん？ それと一緒にだよ！」

——それは違うだろ。

まったくもって女子たちの意見には賛同できない。いや、それ以前の問題だ。

——なんで政治の話にまで持っていっちゃうんだ？

「お前らなあ、ちょっと待てよ。立村のことそこまでコケにして楽しいか？」

誰も聞いてはいなかった。次の瞬間、後ろ扉が開いた。

——立村、か。

みな、静まり返った。

敗北者が身を半分はさめるようにして、扉の陰に立っていた。

大抵の沈黙は一秒程度で崩れて即ざわめきの波にあふれるはずだった。

なのに、今は違う。

誰一人、本当に何も口にしようとしなない。

男女みな、ストップモーション状態だ。何かを動かそうとすらせずにじっと立村だけを見据えている。

——やべ、あいつ入ってこれねえぞ。

「立村、おはよ」

急いで挨拶の言葉をぶつけてみる。しかし誰一人それに受け答えしようとしなない。

囁き声すらない。

——なんなんだ？ こいつら？

男子連中が立村を迎えようとして混乱しているのはわからなくもない。

金沢も、水口も、何か言葉が見つからないようで呆然としているだけだ。

南雲が静かに見守っている様子も伺えた。

しかし、女子たちの不自然過ぎる沈黙、これは何なのだろう？

貴史に詰め寄るようにして「歴史が変わったよね！」などと話しかけてきた女子とは違う、冷たい視線であふれている。

「おいおい、お前ら何やってるんだよ、まったくわけわからねえの」

「いいのそれで」

また、わけの分からないことを告げる別の女子がいる。

しばらく無言のまま女子約五名ほどは立村の半身を睨みつけていたが、

「もどろ」

一言で即、自分の席についた。同時に言葉も少しずつ男子たち中心ににじみ出してきたが、女子たち一群は奇妙なほど統一された行動を取っていた。

美里も、こずえもいなかった。

「立村、ほらあんた何ふんずまりしてるの！ とつとつ入った！ あのさああんた、そうそういじいじしてたら生きていけないって私、何年言ってるのさ。いつまで経ってもそんな赤ちゃんみたいなこと言ってたら、誰もお婿にもらってくれないよ。ほらほらほらほら！ :

修復できないざらついた空気をなめらかにしたのは、やはり下ネタ女王さまのお言葉だった。

ずっと入り込めないまま突っ立っている立村を、半ば強引に押し込み、コートを脱がせようとする。もちろん露骨にそれは拒否している立村、手を振り払うように押しのけあっている。あっさり引いてさらに続けるこずえの言葉は教室にもろ響き渡った。

「あのね、たかが一度か二度の選挙で滑ったからって人生お先真っ暗な顔してたら、平均寿命七十年のこの時代、何度死んでたらいいのさ。あんたねえ、よく考えてみなよ。普通の委員会なんて、半年任期終わったらすぐに委員長代わるんだよ。うちのがっこみたいに一年の時から純粹培養なんて普通やんないの。いいじゃん、あんたも身軽になったんだしさ。それにやることやりとげたんだからあとは大威張りで天羽に後片付け任せとけばいいじゃん！　　ったくあんたねえ、そのぐずぐず泣きそうな顔してるのやめなさいよ。なんてっかその、陰気臭いというかこの教室だけ幼稚園になっちゃうみたいな状態、悪いけど私、パスだからね！」

さすがにこれは貴史の出番だ。もそもそコートを脱ぎロッカーにしまおうとしている立村を押しつけ、こずえに立ち向かった。

「お前なあ、もう少し喋るのやめろ」

「あーら、ごめんなさいね、羽飛に怒られちゃうなんて思わなかったわね！　あ、それとどうでもいいんだけどあの靴下誰のよ。くっさいったらないじゃん！」

——あ、俺のだ。

ストーブにかけっぱなしの汚れた靴下を慌ててポケットに突っ込んだ。とたん、爆笑が起こった。

「やんや、あれ、羽飛のかよ！　　きったねえー」

「じゃ、お前まだ裸足なの？」

金沢に不思議そうな眼差しで問われ、戻った貴史は靴を脱ぎ椅子の上に置いて見せた。

「くっせー、水虫になるよなあ」

笑いだけですべてが被われる。いつの間にかコートを片付けた立村が席につき、無言のまま教科書を取り出していた。前の扉を開ける気配がし、同時に微かなせっけんの香りが漂ってきた。菱本先生を先導する恰好で、美里が教科書と年表の巻物を抱えたまま入ってきた。

無感情、無表情。立村のお株をすべて奪っていた。

「よっしゃー、みんな昨日はあんがとな。じゃあ出欠取るぞ！」

今朝の思いつめた表情とは打って変わり、菱本先生のテンションはいつもの熱血教師そのものだった。

貴史と目が合った時だけ、ふっと息を止めていたように見えた。

「はとばー、最後はりつむら、いるか？」

立村は返事をしなかった。ただ顔だけ上げていた。

いつもの無視ポーズで反抗しているだけにも見えた。

奥に何か隠しているのか、現段階では見出せなかった。

いつものように授業が始まり、特段何かが起こるでもなく一時間目が終了した。

——菱本先生何かやるのかと思ってたのになあ。

今朝の状況を考えると菱本先生なりに、立村へのフォローを準備しているのではとも思っていた。

同時にえげつなく立村がはねつけるであろうことも予想できた。

しかし、何事もなく菱本先生は職員室に戻っていった。

貴史はすぐ教室を出て、次のターゲットであるB組へと向かった。

難波とは休み時間十分あればある程度の話はできるだろう。

教室にさっさと入っていき、両腕組んでボールペンをくわえている難波を見つけた。

「よ、タバコはうまいかよ」

「タバコじゃない、パイプだ」

アホだと思う。貴史はすぐにそれを引っこ抜いた。

「悪いが昨日のことについて少々聞きたいんだがな、ホームズさん」

「なんだ」

機嫌はお世辞にもよくなさそうだが、殴りかかってはこないところみるとまともな対話はできそうだった。

ふたり、まずは廊下に出ようとしたが難波が立ち止まり自席に戻り、貴史を手招きした。

「外だとD組に聞かれるだろ」

「中だとB組に筒抜けだぞ」

「どっちもどっちだ、あいつがいないだけでした」

立村に聞かれるのを恐れたのだろう。もっともだ。貴史は一足早く難波の席を陣取った。

「おい、俺の席に座るんじゃない」

「時間ねえから、早く聞かせろ。昨日のクーデター、ありゃあなんだ」

小声で囁いた。「クーデター」の響きにかちんときたようだ。腕を組み直している。そっぽを向こうとするのを貴史は両手で向き直させた。

「あのな、俺の現在の立場わかるか？ D組、えらいことになってるんだぞ。予定通り立村が委員長におさまんなかったもんだから、野郎連中は腫れ物に触るように様子伺ってるし、女子は女子で勝ち誇って立村を無視してるし、もう居心地悪いったらねえぞ。ま、卒業するまでの間だからしゃあねえったらしょうがねえけどな。あいつの面倒をこれから見る俺の立場も考えろよな」

「ああ、そうだな。羽飛だな」

頷き、難波はさっき取り上げられたボールペンをもう一度くわえなおした。何がホームズ気取りなんだか。あほらしい。

「立村は何か言ってたか」

「言える状態じゃあねえだろ。べそかいてたぞ」

「やはりな」

またこくこく頷き、

「天羽は？」

「難波、お前天羽になんか恨みでもあんのか？ 激怒してたぞ奴も」

「しょうがないだろう。覚悟はしていた」

微妙な響きの返事が帰ってきた。しゃがみ込み、貴史の肩に頭を合わせた。

人に聞かれないように囁いた。

「羽飛、お前覚えてるか」

「何をだ？」

「いつだったか、お前が言ったんだぞ。なんで立村が評議委員長にならねばならないのかって。もしあいつが評議委員長に選ばれなかったら何か困ることあるのかってな。覚えてないだろうが、言ったんだ」

「はあ？」

思い出せない。そんな血迷ったこと、口走った記憶がない。難波は唇を歪めて続けた。

「そうだな。お前は立村の親友だから、ただ言っただけだよな」

「あのなあ、何が言いたい」

眼鏡のふちを拭き、難波は膝を替えてしゃがみ直した。

「つまり、立村が必ずしも評議委員長に選ばれなくてもよい、という選択肢があるってことだ」

「今更だからか？ クーデター起こしたのは俺がなんか言ったからってことか！」

「そうだ。羽飛、お前がきっかけだ」

難波は深く、重く、つぶやいた。

——俺のせいだよ！ 天羽もわけわからねえが、難波、こいつもとんでもねえ！

貴史の憤りなんて知ったことじゃないとばかりに、難波のホームズトークは続いた。

「俺は、すべてを疑うのを忘れていた。お前の疑問で一度、すべてを洗い直してみたら、確かに見えてきたものがあったんだ」

「はあ？ なんだそれ」

「今まで起こった出来事が仮に、別の委員長だった場合、どう進行していったかをシュミレーションしてみた。いくつかのパターンを見つけてみた。その結果、どの方向から見ても、天羽が評議委員長として動く方がうまくいくという結論に達した」

「そりゃお前の頭の頭の中ではだろ！ 現実は違うだろうが！」

がまんできなかつた。立ち上がり、難波を見下ろした。椅子ががらりと鳴った。

「そういうのを机上の空論って言うんだらうが！ よくわからねえけど！」

「羽飛、お前だって気付けよ。今まで麻痺し過ぎていたんだ。立村も、天羽も、すべてあるべきものを見ずに通してきたことに気づいてなかったんだ。それに、俺から見たらお前だってそうぞ。お前も本当は」

「俺のことなんてどうでもいいだろが！ この似非ホームズが！」

貴史は難波の胸ぐらをつかもうとした。ネクタイがしゅるりと手からすり抜けた。

「あのな、シュミレーションなんて推理小説で十分だろ！ 俺が聞いてえのはなぜ、今までずっとお前らが支えてきた立村を、見殺しにしちまうことしたんだってことだ！ 天羽はお前のクーデターだと言ってたし、他の連中は立村をざまみろ扱いしてるわけだ。そりゃ俺は、評議委員会なんて知ったことじゃねえし上になるのが誰だかどうだっていいが、そこで今度やってかねばならない俺たちD組連中と、それとあいつ、立村はどうなるんだ？ 立村はただでさえ見下されて

るってのに、このままだとどん底に突き落とされるんだぞ。まあそうだな、お前らなら、自業自得って言うんだろうがそこまで俺も人間くさっちゃいねえよ」

「羽飛、落ち着け。一度、ゆっくり説明する。天羽も含めてゆっくり話し合いたい」

不意に横を深海魚……ではなく轟琴音が通りがかった。歩くだけでわかってしまうのはその雰囲気からか。

「難波くん、そろそろ時間だよ。羽飛くん、悪いんだけど教えてもらえると助かる」

「評議委員のことなら美里に聞けばいいだろ」

飛び出た目で見まとう轟。隣で難波が「トドさん、評議のことは俺が」とくちばしをはさむが無視された。

「単刀直入に聞くけど、立村くんに向いている仕事ってなんだと思う？」

「わかるわけねえだろ。ま、あいつ、英語が出来ることくらいと、あと字か」

「字？」

いきなり方向の異なる話題を振られ、貴史も慌てて答えるしかなかった。いったい轟も何を考えているのだろうか？

——そういえば轟といえば、確か立村を。

絶対このご面相だと美里のライバルにはなるわけないということで、すっかり忘れていた。

轟は難波に話しかけた。

「そうだね、立村くんは字が綺麗だよ。そういうことだよ、難波くん」

「あ？ ああ」

すっかりかき回されてしまったのか、難波はぽかんとしたまま立ち上がって、貴史を促した。

「次の授業が始まるから、立てよ羽飛。それと、さっきの件は天羽と更科含めて、きちんと説明する。明日まで待て」

——難波の野郎、何をしたかったのかわからねえよ。

結局、難波ひとりの計画で始まったことらしいということは理解したつもりだ。

そのきっかけをこしらえてしまったのが、どうやら貴史らしいということも。

だがそんなことで責任問題にされても、貴史としてはたまったものじゃない。

懸命に美里たちと協力し、立村を評議委員に押し込みあとは自動的な改選を待つのみだったし、それをつぶす気などさらさらなかった。

なのになぜ、一番味方のはずだった三年男子評議たちが寝返ったのだろうか。

——シュミレーションで結局、天羽が委員長になるのがベストってどういうことだよ？

——立村を今まで持ち上げてきてその上でいきなり、手を離すのか？ そりゃ卑怯だろうが！

その事実が正しければ、立村の衝撃は半端なものではないだろう。

美里が下手な慰めをかけられる状態では決してないだろう。

評議委員長から引きずり下ろされただけではない。

——親友から裏切られたんだ。親友「たち」からな。そりゃ、地獄だろ。

たぶん立村は教室から飛び出して別のところで時間つぶしし、また戻ってくるのだろう。何か言わなくては、貴史が自分ではないような気がした。鐘の鳴るぎりぎりまで貴史は廊下で立村を待っていた。

予想通り立村は戻ってきた。一階の階段を登り終えうつむいたままD組の後ろ扉に手をかけようとした。

「立村、あのな」

——むかつくことあるんだったら、話くらいは聞くぞ。

そう言おうとした。とたん、割れんばかりの瞳で睨み返された。頬に穴が空きそうなほど歯を食いしばっていた。端正な顔立ちが福笑いの失敗作のように崩れていたかに見えた。慌ててすぐに目を逸らした。

「ごめん、俺が悪かった」

いつもの口癖を残し、立村は素早く教室へ入っていった。

——なんも俺、言ってないだろうがよ。

仕方なく貴史は前扉から入り直すことにした。裸足の指先がむずむずしてきた。

菱本先生には放課後話をするつもりでいたが、まずは当事者たちにもう少し膝詰でやりあわないとまずい。

「先生、悪いんだけど、今朝のこと」

「ああ、どうした」

「ちょっと気になることあるんで、明日にしてもらえねえかな」

確か職員会議がどうたらこうたらと聞いていたので、問題はないとは予想していた。

「立村のことか」

「そ。俺なりに考えあるし」

「無理するなよ」

親指立てて頷き、貴史は素早く教室を出た。どしゃぶりの雨はすっかり上がっていた。水たまりだけやたらと深い。雪も積もりかけていたものが半分解けているようで、歩く場合はつま先でいったんつついて確認してから踏み出さないとまずい。

外の風は雪降った後としては少し温めだった。ただ、靴の中が生湯き状態のため、乾かした靴下が妙にしんなりするのを感じる。気持ち悪い。

——まずは、美里探さねばな。

「当事者」とはすなわち、美里しかいない。

天羽や難波から聞き出した情報でもって、だいたいの流れをつかむことはできた。

——すなわち、難波の寝返りが発端か？ それと天羽の小細工か？

鉄壁と思われていた三年男子評議委員四人の間で何か、トラブルが存在したのだろうか。

あまり貴史も評議委員事情を知る方ではないが、

——立村が言い出した「大政奉還」とかいうあれが、まずかったんじゃないか？

そのくらいの想像はつく。

立村が生徒会と評議委員会との融合対策を練っていて、元生徒会長の藤沖と単独で話し合いを進めていたことは聞いている。

せっかく得た評議委員長としての権力をさっさと手放したがる立村の行動に天羽たちが共感していたとは、考えにくい。

——けど、それでもやっぱり三年一緒にやってきただろ？

とりあえず立村を評議委員長に推しその上で、もう一度話し合いをするという方法だってあったはずだ。

少なくとも天羽の口ぶりからは、立村を引きずり下ろそうとする意向は感じられなかった。

——となると、やっぱりありゃあ、難波のスタンドプレーかよ。

難波は貴史を無理やり共犯に仕立てようとしているきらいがある。きっかけがたまたま貴史の発言にあったのかもしれないが、そういうところからいきなり立村を下ろそうとするやり方はやはり、汚いと感じる。背中からわっと驚かせて前のめりに倒すような卑劣さすら覚える。

——けど、待てよ。

天羽が評議委員長に立候補したとしても、票の流れがきちんと読めていれば問題はなかったのじゃないだろうか？

いきなり思い立って手をあげて、やる気出したふりをして、今までの立村の活動内容をよくよく見ていけばいきなり手のひら返したような票の入れ方はしないはずだ。かねてより確執が噂されていた二年の新井林健吾に票を奪われる方がまだしっくりくる。同じ負けだとしても、

——新井林は評議委員としての活動をそれなりに見せつけてるわけだし、立村よりもそっちの方がいいってことなら、そりゃ票も流れるわ。

——けど、天羽がいきなり立候補して、そこで決まっちゃうってのはどういうことだよ。

——それも今まで、ずっと立村を応援しようとして手回していた三年がだぞ？ 評議の連中ってそこんどこ、考えねえのか？

天羽の計算が甘く、本来なら立村が得るはずの票が流出してしまったということになる。

難波が天羽に票を入れたとして、それでもたかが一票。かなり大量の立村への票が失われた結論となる。

——さすがに美里はな。

美里がまさか、天羽に入れるとは思えない。

三年評議たちの票がいきなり天羽に回ってしまい、結果立村は落選するはめになったということだ。

どうも、もやもやして腹の中が落ち着かない。

——やっぱりこりゃ、美里と直接話をしねえと、どうしようもねえな。

実際その場にいたのは美里だ。天羽と難波の野郎チームに聞いたところで行き着くところは一緒。評議には女子だったのだから、そいつらの考えがどうなのかを確認する必要があるが確かにある。

自転車置き場に向かおうとし、すぐ思い出した。

——今日、バスで来たんだよなあ。

習慣というのは恐ろしいものだ。さすがに今日、自転車で通学した奴はいなかったらしく、自転車置き場は小型車一台がすっぽり収まるくらいのスペースが区切られて空いていた。いつもなら立村も自転車で来ているはずだ。隣に付けているはずなのだがもちろん、ない。帰ったかどうかもわからない。

バスターミナルに向かい、これから帰ろうとする生徒たちを目検分した。まだ美里も立村もいない。

——先に帰っちゃったかな。

できれば学校にいる間に捕まえたかったのだが。

「おいおい、おーいおいおい！」

呼び止められた。バス停長蛇の列、三分の一ほどの位置で靴をぐつぐつ鳴らしていたところだった。

「天羽？」

まず声の主に挨拶をしようとし、隣に寄り添う女子を見て絶句した。

「あれ、あの、お前さあ」

「さっきはどうもね、羽飛くんこれからバスで帰るの？」

——こいつの彼女って確か、髪の毛くりくり丸めたあの、確か。

なんで天羽の隣に、B組女子評議の轟琴音がいるのだろう。一度見たら忘れない強烈な顔立ちの持ち主で、まず見間違うことはない。目が深海魚っぽく飛び出っていて、歯並びもでこぼこ。まあ、悪い奴ではないと思うが、恋愛対象にはまず、なり辛い存在だろう。少なくとも美の基準が鈴蘭優の貴史としては。

「せっかくの天気ですし旦那、ちょっと付き合ってもらえねえかねえ」

笑顔満開で、時折他の生徒たちの挨拶にも答えている。すでに天羽が評議委員長として動き出した証でもある。

「ああ、かまわねえけど、けど？」

隣の轟は大きく頷いた。天羽に向かい「よっし、これでいいよ」と囁いた。

「ちょうど良かったよ。できるだけ早く、羽飛くんと話せたらなって天羽くんと言ってたんだ」

「はあ？」

評議委員同士、基本として仲良しだということも、以前より立村からは聞いていたがそれでもこの乗りはなんだろう。妙に楽しげだ。

「例の件でな、ちょっと。できれば人のいねえところでしっぽりと」

答える代わりに貴史は天羽のおでこを軽くひっぱたいた。

「悪いが、俺は鈴蘭優ちゃん以外になびく気なんかねえからな。気色悪い奴」

「俺も今は、近江ちゃん一筋なんでね、ご心配なく」

笑って返す天羽の軽さに押されて貴史も質問を繰り返した。もちろん歩きながら。三人並んで。

「その彼女、今日はいねえなあ。お前ベタ惚れのくせに」

もちろん「なんでよりによって轟などと一緒に？」とは聞かない。

「ああ、今日は近江ちゃん、おデートなの」

泣く真似をした。

「相手は清坂ちゃん。近江ちゃんにとって俺は二番手なの。うわあん」

笑いながら、泣きまねしても説得力がない。轟がすぐ助け船を出してくれた。

「近江さんは美里ちゃんと今日、お茶して帰るんだって。だからってことよ」

「ははーん」

道理で美里が見つからないわけだ。時間有効活用、感謝である。

話によるとふたりともバスは利用していないらしく、やたらと学校近辺の情報を詳しく知っていた。

「とりあえず食うもん食うか」

天羽が自ら財布を取り出し、肉屋でコロッケを六枚ほど購入した。揚げたての匂いに誘われて、貴史は一気にかぶりついた。

「言っとくけど、今日はおごりだからな。委員長就任の、俺なりのな」

「いつもごめんねえ」

特にためらうでもなくお礼を言う轟。三人それぞれ腹を満たしたのち、足の向いた先はお稲荷さんの祭られた神社だった。

「ここなら、そうそう来ねえだろ」

「お稲荷さんだからね」

小さな祠に轟がちらと目を向け、

「けど、商業の神様だし、お店の人がお参りにくるかもよ。鳥居の前でも大丈夫じゃないの？」

「ああ、そうか」

よくわけわからないなりにまずは、巨大な銀杏の木に寄りかかり息を大きく吐いた。天羽もコロッケの入っていた包み紙を轟に渡して大きなあくびをした。轟だけがちょこまかと動き回って周囲を伺っていた。

「で、話、先に言えよ。例の件ってな」

「ああ、そこなんだけどさっき羽飛くんが難波くんと話してた時、立村くんの得意分野って文字を書くことだって言ってたでしょ。そこのところをもう少し詳しく聞きたいなって思ったわけ」

天羽が口を開く代わりに轟が早口に尋ねてきた。かなり寒い時期なのに薄いコートというのがかなり哀れだ。

「あ、そんなこと言ったか？」

「言った言った。ほら、天羽くん」

促されて天羽も補足説明しようとしはじめた。

「つまり、その、あれだ。立村が評議委員長から降りたってことはすなわち、役なしになっちゃったってことだろ？」

「そりゃそうだろ」

当たり前過ぎることを繰り返すのが、天羽の衝撃度を表しているのかもしれない。「老人の繰り言」……これはちょっと違うか。頭で打ち消した。

「で、評議委員会ってのは、結城先輩の頃から副委員長ってのを置いてねえんだな。ついでに言うとう書記もいねえんだ」

「そういうもんじゃあねえのか？」

「今までは伝統的に通してきたけどな、今回思い切ってその役職を復活させちまおうかと、考え中なのだよ」

――なるほどなあ。

ぴんときた。確かにこのあたりの点は立村や美里から聞かされる度、不思議には思っていた。小学校の学級会でも級長というのがいて、ついでに副級長というものも、また書記もいた。生徒

会だってそうだ。生徒会長、副会長、会計、書記。それぞれ分担されている。評議委員会だけはその「長」ひとりに集約されていて、手伝ってくれる副にあたる奴がないとも聞いていた。ただ、そういうもんなんだろうと思うだけでそれ以上は考えなかったが。

轟が頷きながら言葉をはさむ。

「今までは評議委員長ひとりがいればそれでよかったし、あとはみんなが盛り立てていけばよかったんだよ。前期後期すべて同じ委員長だったらかえって副とかいろんな役付がいてもやり辛いだけだってね。特に本条先輩がその傾向強くなってそれに合わせてたんだよ。立村くんも基本は本条先輩路線を進むつもりでいたよ ーだし」

「けど、この状況考えてみるよな。羽飛、わかるか、俺の置かれたとんでもねえ状況を！」
——自業自得だろ。

つつこみたいが、話を聞きたい気持ちが勝ったので黙る。

「難波の奴がわけわからねえことしちまって今、後始末で俺ぱにくってるんだぞ！ ーなあ、わかるだろ？」

「あいつと話はしたのかよ」

黙る天羽に、補足説明はやはり轟だ。合の手お見事。

「一度きちんと評議全員で話そうって言ってるんだけど、天羽くんだけが意地張っちゃってるのよ。あんたももう少しおおらかになりなよ」

「うるせえなあ！ あいつ裏切ったんだぞ！ ー俺たち評議委員の絆をだぞ！」

怒りを溜めてはいるのだろうが、顔だけがにやついているので真意をつかむのが難しい。

「ま、明日にでももう一度話し合いをしよってことで、難波くんには伝えてあるよ。ただ、立村くんがね。羽飛くん、立村くんの様子、相変わらずだったかな？」

「美里から聞いてねえのかよ」

「だから、美里ちゃんは近江さんに相談乗ってもらってるみたい。私は私で別に動いてるの。そうだよな、天羽くん」

なんといえればいいのか、このふたり結構馬が合うようだ。ある意味天羽のベタ惚れな近江よりもはるかに、漫才のポケツッコミ担当がきちんと分かれていて話もわかりやすい。同時に美里がこの乗りを好むかどうかが微妙なところだとも感じた。

——ま、関係ねえか。

天羽が近江を好きなように、轟は。

——修学旅行四日目で美里に頭を下げてまでして、立村を貸してもらったくらいあいつが好きなんだ。

「立村は、めげてるぞ」

短くまずは伝えた。

「全然教室でしゃべんねえし、それに面倒な女子どもになぶられちまってるし」

「女子たちになぶられるって、まさか杉本さんのことで？」

「よっくわからねえけど、もともと立村は女子受け最低だったしな。美里だけが例外って奴。だからあいつが評議委員長から落っこちたらただの陰気野郎で片付けられちまう。ま、いろいろあ

るけどな」

ふむふむ頷く天羽を横目で見ながら、轟に尋ねた。

「役職を復活させるってことは、つまり立村を副委員長かどっかに押し込むってことか？」

「そう、なんだけどねえ、簡単に行かないのよそこんところが」

轟はため息をついて天羽を見やった。

「そこんところは天羽くん、続きよろしく」

「おうさトドさん」

天羽は天に向かって両手を伸ばし、ぐるんと腕を回した。

「順番としては立村を副委員長に置いて、ついでに次期評議になるであろう新井林を脇に置こうってのが俺の案だったんだわよ」

「ふんふん」

「ところがそこんところで顧問からクレームが出ちゃったってわけ」

誰が顧問だったかは覚えていないので突っ込まず聞き流した。

「つまりな、うちの顧問はどうも立村の力量だったか？に今ひとつ納得できてねえみたいでな。できれば新井林を副委員長にした方が自然じゃねえのかって言い出したんだ」

「おい、待て。こういうことこそ選挙で決めるってのが民主主義じゃあねえのかよ？」

天羽と轟はふたり同時に首を振った。

「もともと役職がねえんだから、決めようがねえよ。ただ次の委員会までに俺をやさしくサポートしてくれるシートベルトみたいな誰かを置きたいってことで話を進めたんだよ。今日な」

早く動いたというわけだ。轟が続けた。

「つまり、立村くん自体に役職をやるだけの力がないんじゃないかってはっきり言われたんでしょ？むしろ二年生中心で委員会活動を進めた方が学ぶものいっぱいあるしいんじゃないのと。そういうことよ」

「ひでえ話だな」

このあたりはまったくわけがわからない。ただ、卒業してしまう三年よりも来年引き継ぐ二年に仕事を任せた方が楽だろうという気は、確かにする。あまり上がつかえているとかえって鬱陶しい。

「で、そこで問題。このまま顧問の言う通り立村くんを平のまんまにしといていいのかってこと。羽飛くん、どう思う？」

「立村はまじで泣くなあきっと」

自然と本音がもれた。

「でしょ？せめて副委員長には入れないって思ってたけど、先生たちの力って強いんだよね。本条先輩なら口八丁手八丁でいくらでも押せたけど、天羽くんだと、なんってっかその、あれなのよ」

「なんだそのあれって」

「民主主義の賜物ってことでな」

天羽が頭をかきながら答えた。

「今まで評議委員会は裏ですべて物事を片付けてきているきらいがある。けど、今回の委員長改選ではみんながノーをつきつけた。ということは根本的に裏でこそこそ動くよりもきちんと日の当たるところですべてを進められるようにしたほうがいいんじゃないかと、ま、先生のお言葉ですわな」

言っていることがわかるようでわからないが、委員長育成制度のようなものに批判が集まっていたのは確かのようにだ。

「ま、先生としちゃあ、どういう形にしても大人に話を通してから進めると、ただそう言いたいだけみたいだけどねえ」

轟の言葉が一番わかりやすかった。

——副委員長にもなれないってわけか。そりゃひでえわ。

貴史なりに頭の中を整理して考えた。銀杏の木にもたれようとしたが、木々の凹みに雨水がたまっていて今度は背中がびしょ濡れになってしまった。

——先生がたとしては、新井林を副においてってことで考えてるってわけか。

「で、立村はどうすりゃいいんだ？」

改めて問うと、天羽は立ち止まった。

「そこなんだよ、問題は。俺としてはせめて前期委員長だった立村を脇に置きたい。せっかく貴重なノウハウ手帳ももらったけど、肝心要の奴がいなくちゃあわけわからねえだろ」

カバンから取り出したのは、黒い手帳だった。使いこまれているのか角がすれていた。

「立村くんがね、昨日天羽くんに渡したの。もう自分には必要ないからって」

——立村はもう、完全に諦めてたってことかよ。

本条先輩にべったりくっついてあれやこれや教えてもらっていた立村が。

自分より出来のいい後輩を押しよける形で無事委員長に選ばれるまで、黒い手帳はずっとそばにいたろう。

その手帳を手放したということは、つまり。

「で、羽飛、あいつの売りになるポイントはどのあたりだろうなあ」

天羽は手帳をしまいこみ、ジャンバーのポケットに手をつっこみ尋ねた。

「トドさんの言う通り、やっぱり文字の綺麗さかねえ。男子のひとりとしちゃあ、そんなとこ褒められたってたいしてうれしくもねえだろ？ けど、そうしたら書記に回すことができるんだよ。うちの顧問に、同情じゃなくて立村の文字が綺麗だから書記にしたいんだけどってことで進めたいんだよ」

「つまり、立村に役をつけさせるためにどうすりゃいいのかってことか！」

「当たり前！」

天羽と轟が手を取り合いふざけたように万歳をした。

——そうだな。立村のノートは基本としてすげえ綺麗だわな。

貴史だけではなく、美里も同じことを話していた。英語関連の問題集答え合わせをする時も立村のノートだけはどこかのお姫様が羽ペンもってすらすら書くような上品さを讃えていた。男子としては珍しいお嬢様文字とからかったりもしたものだ。

——ただ、綺麗なんだけど、それだけなんだよな。

異様なほど細かくノートに書き込まれてはいるし、読み取りやすいことは確かだった。立村にとっての天敵ともいえる数学ですら、答えはそのまま丸写し。

「俺も、立村を書記に回す方がいいと思う。けど、顧問につっこまれそうなところあるから言っとくな」

言葉を選びながら貴史は足を組み替えた。ずぶりと水たまりに足を突っ込みそうになった。

「そんな時に、判断する仕事は一切させないって風に強調しといたほうがいいと思う」

「うちの顧問にか？」

「そ。もちろん天羽が立村にいろいろ聞くのは自由だし、むしろそうした方があいつだって救われるだろ？ けどさ、立村を落としたっつうことはつまり、あいつに上からものを言われたくねえよって意思表示なわけだろ？ だったらしょうがねえよ。立村を役につけるかわりに、これは単なる筆記係なんですよって風に先生に強調しとけば他の連中も文句言わねえだろ。もちろん立村にはちゃんと話通しておけよ」

さっきまでへらへらしていた天羽が、いきなり貴史の顔を真顔で見た。

「けどそりゃあ」

「しゃあねえだろ。うちの組の女子連中が立村のまん前で露骨に喜んでるのは、あいつにこれ以上頭押さえつけられないですむと思ってるからなんだよ」

轟が首を振り何かを口にしようとした。すぐに閉じてまた別の言葉を発した。

「立村くんをこれ以上傷つけないためにはこうするしかないかな。そうだよな。変えてほしいってのが評議委員全体の意志だったら、今の段階ではそれにしたがうしかないよね」

男子からしたら「傷つけないために」なんて甘いと言われること自体が屈辱だろう。しかし、立村というのはそういう奴なのでしかたない。

「とにかく、表向きはこれ以上騒ぎにならないように、立村くんが叩かれないように持って行って、先生たちの目につかないところで立村くんの知恵を借りるって方向で進めた方がいいよ。天羽くん。羽飛くんの言う通り、たぶん立村くんを積極的に推してったら難波くんも腹立てるよ。難波くんは、天羽くんの力を認めて、その上であんなことしたんだから。感謝しなくちゃだめだよ」

「トドさんは長年のパートナーに甘いすな」

「美里よりましよ」

沈黙した。貴史が尋ねた。

「おい、難波は結局なんであんなことしたんだ？ 轟はどう解釈してる？」

「美里ちゃんから聞いてない？」

繰り返したのち、はっきりと答えた。

「難波くんは前から委員長に天羽くんを推してたのよ。でも本条先輩の後ろ盾ありの立村くんを無理に引きずり下ろすこともないと思ってたのよ。でも、彼なりに考えて適材適所、立村くんは評議委員長向きではないむしろ天羽くんの方が上だと判断したようよ。つまり、正しい民主主義のもと、難波くんは自分の意志で出来レースをぶっこわしたってわけ。そのとばっちりが立村くんに飛んじゃったのは辛いところだけど。ただ天羽くんが立候補した段階で票が流れたのは事実よ。天羽くんは選ばれたのよ。評議委員長として適任者だって、はっきり評議のみんなが選んだのよ」

本当に轟は立村のことが好きだったのだろうか？ 今の発言を聞いている限りそうとは思えない。こきおろし、といっても差し支えない。

「だから、いい加減自信を持ったら？ 羽飛くんに聞いたかったのは、立村くんの一番向いているポジションがどこなのかを確認したかったということ。天羽くんはなんとしても立村くんを副委員長にするつもりだったし私もそれがいいかなとも思ってたけど、そうだよ。天羽くん。ふたりも委員長はいらないよ。委員長はひとりで、立つべきなんだよ」

貴史に話しかけているはずなのに、その言葉は目の前の天羽に向かってるように聞こえた。水っぽい銀杏が頬に落ちて張り付いた。

問われるまでは貴史も意識していなかった。

天羽の言う通り、副委員長に立村を置くことがベストだと、友だちとしてならはっきり言いきれただろう。

——でも、それは許されねえな。

さまざまな情報を集めた結果、出した結論だった。

お情けで立村がこれから先、天羽の側に座っているよりも完全に割りきらせた方が楽だ。

手帳を渡した段階で立村も覚悟を決めたことだろう。

難波も、轟の話聞く限り軽い気持ちで行動したことではなさそう。貴史が疑問に思っていた点……どのくらい天羽に票が流れたのか……も、どうやら他の評議委員たちからのものらしいし、概ね立村の指導力に疑問を感じて出した結果というのは納得した。

つまり、天羽を評議委員長として選んだということだ。

——それはやっぱし、尊重しねえとまずいだろ。俺と立村が友だちだからってこと以前にだ。

評議委員会の内部事情については、これ以上情でもって踏み込むべきではない。

踏み込める場所があるとすれば、そこは一ヶ所だけだ。

——美里と話さないとやばいな。

「悪いけどな、俺も聞いてえことあるんで、天羽、教えてもらいたいんだけどな」

まだ近江とのお茶会は終わっていないだろう。その間に貴史も、美里がどのような行動をしたのかを完璧把握しておきたかった。すべてを聞き出しその上で、美里をとっつかまえたかった。その上でしっかり、

——なぜ、俺にいちばん最初に報告しなかったんだ。

そのことを、確認したかった。

——女子の長話ったらとんでもねえよな。

美里が帰ってくるのを待つつもりだった。できれば玄関に入る前にとっ捕まえるつもりだった。

でないと、家の時間に飲み込まれてしまう。

青大附中校舎からつながった出来事の道が途切れてしまう。

二時間、つかず離れず、清坂家と羽飛家の間をゆっくり歩き、靴の中は完全に水浸し、水虫が怖い。

——美里の奴何考えてるんだろなあ、あいつ。

結局まだ、美里とは面と向かって話をしていない。周囲から得た情報は評議委員会からまたはクラスから担任から溢れんばかりに流れてくるが、肝心要の立村と美里からは何一つ聞き出してはいない。「伝聞」と「推測」「憶測」でしかまだ、貴史の頭には届いていない「評議委員長選挙の顛末」物語。ドラマじゃないのだから、これはきちんとノンフィクションとして、当事者の美里から聞き出したい。

——まったく、おっせーよな。

一台、バスが通り過ぎ、手前の停留所で止まった。ひとり降りてきたのが見える。

——そっか、美里も今日はバスで帰ったのか。

黒い姿しか見えず、誰なのかはっきりと確認こそできないが、バス停よりもぐっと小さめの背丈といい、降りた瞬間から早歩きするくせといい、美里以外の何者でもない。貴史には見えた。

「美里か」

呼びかけた。早歩きなら貴史の方が二倍、いや三倍速い。

返事はなく、黒い女子の影は立ち止まっただけだった。

向かい合う。大きな水たまりを間にはさむ。

完全に闇の中だが、目の前でまっすぐ貴史を見据える視線は強い。光っているかのようだ。

「何？」

「来い」

手を伸ばせば届く距離。貴史は美里の腕を片手でつかんだ。荷物なんてとっくに家へ置いてきた。向かい合う美里は両手にかばんと紙袋、さらに手提げと大荷物。動きようがなさそうだった。

「やだ、あぶないって！」

思わず一步踏み出した。水たまりにふたりびちゃんと足を突っ込んでしまったようだ。足首から靴下まで一気に水が染み込む。泥水の跳ねる音が響く。そばには誰もいなかった。

「やめなさいよ！ もう、靴濡れちゃうでしょが！」

「こんくれえでびいびい言うなよな。お前があん時たれた小便こんくらい広がったんだぞ！ 覚えてねえのかよ！」

「ばか！ そんな、私、そんなにしてない！ 変なこと言わないでよ！」

絶対に腕は話さない。指がちぎれても。貴史は美里を強引に自分の方へ引きつけた。美里が片方の手で持っていたかばんを取り落とした。拾おうとするがバランスをうまくとれないまま動けずにいる。拾ってなんかやるものか。つまんだ足から脳天まで泥水が植物状態で吸い上げられていくようだ。汚水のまま言葉をぶつけた。

「お前な、なあにがデートだあ？ 腐っても彼氏の立村が地獄に突き落とされたってのに、平気な顔してお買い物三昧クッキー食いまくりのやりたい放題かよ！ ったく現実逃避もいいとこだよな。今朝だって菱本先生が俺にいろいろあいつのこと聞いてきて青ざめてたし、天羽だって難波だって轟だって奴のばかさかげんを心配していろいろ泣きつかれるわで偉いことになってんだぞ！ なのになにか？ お前ひとり、ちゃらちゃらと近江と無駄話してたってわけかよ？ あれだけ、クラス全体を巻き込んでいろいろやらかしておいて、結局だめだったらこうやって逃げるのかよ！ なあにが立村のことを考えてだ？ 結局お前、何にもできなかったからあんなつまっただけだろが。まったくどいつもこいつも何考えてるんだ？ いい加減にしろよこのボケ！」

「なんであんにそんなこと言われなくちゃいけないのよ、離してよ！」

美里が何度も腕を払おうとする。いつもだったら適当なところで手を緩めるところだが、そんな甘っちょろいこと言ってもらえない。暴れる美里の両足をそのまま、水たまりの中に押し込んだまま貴史は揺さぶった。

「菱本先生だってな、評議委員長改選のことがわかってからすぐ、俺の家に電話よこしたらしいぞ。姉ちゃんが電話占領してたから結局取れねかったけど、それでもやっぱし大変なことになったってわかったら普通知らせるだろが！ 連絡つかねかったから結局朝、俺がくるの待ってて話、してくれたんだぞ？ それが普通だろが！」

「普通、ってそんなこと私わかんない！」

足をばたつかせる美里を、絶対に放さなかった。

「いいか！ なあんも知らないまま俺は今朝学校に行ったわけだ。立村が無事委員長に選ばれてめでたしめでたし。さ、次こそあいつとさしで話せねばなって思ってたところにだぞ？ こんな大どんでん返しが起こっちゃったって知らないままで話しかけてたらいったいどうなってたと思うんだ？ お前だってそんくらいわかるだろが！ 奴の性格考えれば俺がうっかり委員長おめだとさんなんて言っちゃったもんなら、その場で窓から飛び降りねえとも限らないだろ？ そういうことをなぜ、お前先に教えようとしねえんだよ！ 評議委員会終わったの、どんな遅くたって五時前だろが！ うちに電話かけるくらい余裕で出来るだろが！ それでねくてもうちにだったら直接用事つけて来るとか、夜中でも合図するとか、いろいろできるだろ！」

腕を揺さぶり、もう片方の手で肩を押さえつけた。本当なら一発ひっぱたきたい。突き飛ばしたい。公共の歩道だからせいぜい水たまりでばしゃばしゃぶつかり合うことしかできないけれど、小学校の頃と同じように本当なら、つかみ合いのけんかに持っていきたい。そのくらいのエネルギーが溢れている。何度も足に力を入れ、踏ん張った、叫んだ、わめいた。やはり人はいなかった。

「やめてよ！ 何勝手なこと言ってるのよ！ 見てないくせにそんな、遊んでるなんて勝手に決めつけないでよ！ 私だって評議なんだから、やらなくちゃいけないこといっぱいあるんだから！ それに何よそのデートって！ デートなんてしてない！ 近江さんと話してただけなのに何わけのわからないこと言うのよ！ 離しなさいよ！ その手、なんとかしなさいよ！ 痛いんだから、ほんとにもう、止めてよ、あんた何考えてるのよ、貴史、貴史あんた」

わめき散らしていた美里の言葉が、ふと、途切れた。

「言いたいことはそれだけかよ」

「離してよ」

力ない声で美里は答えた。数秒前、威勢よく文句をつけていた姿と、一瞬のうちに切り替わった。つかんだ指先にかすかなゆるみを感じた。それが何なのかはわからない。ただどうしようもなく美里が弱く見えた。

「冷たい、から」

「はあ？」

「足、濡れちゃうじゃない」

「それがどうしたってか。あん時だってお前、靴ぐしょぐしょにしちまっただろうが」

「なんで、あんたそんなこと言うのよ、貴史、何でそんな」

首を振りながら美里は両手で顔を被った。

「もう、やめてよ」

いきなり、激しくしゃくりあげた後、声を張り上げて泣き出した美里をそれでも貴史は放さなかった。

水たまりから、連れ出した。

——まったく、教室でちびったところを保健委員よろしく俺が連れ出してるみたいじゃねえの。

あの出来事の起こった五年生の秋、五時間目。机に座ったまま動けずに硬直していた美里を貴史は水をかぶせて正気に戻した。

貴史が担任の沢口先生にぶん殴られている間に美里は気づかれることなく水たまりの始末をしたはずだった。

奇跡としか言いようがないのだが、机の面積いっぱいの水たまりをこしらえておきながら、誰にも知られずにすんだはずだ。

でももしあの時、貴史が動かなかったら？

——もしお前がこの場でちびったら、始末するの俺だぞ。

ぎりぎりの瞬間、貴史が美里に囁いた一言を思い出した。ずっとずっと忘れていたその言葉は、今果たさざるを得なかった。

真っ黒い水たまりにひとり立ちすくんでいる美里を、他の連中が遠巻きに見ている中、引っ張り出すことができるのは五年生でも中学三年でも、やはり貴史だけのはずだった。

もう何も聞き出す気持ちになれなかった。

——当事者の話だったって、よっく考えたら俺が集めてきた情報だけで十分通るじゃねえか。逃げられそうで、美里の腕をコートの上から素手で握ったままでいた。

しばらく声をあげて泣きじゃくっていた美里には何も言えず、ただ考えていた。

——実際、天羽、難波、轟の三人は評議委員会でもって立村の居場所を確保するよう動いているしなあ。あれでいいじゃん。

もし貴史が動かねばならないとすれば、立村が家出してしまうくらいの出来事があればの話だろう。平であれ三年D組の評議委員としては認められているのだ。認めていない女子が一部存在する点については目をつぶるとしても、まずあと三カ月程度は立村も座っていられるはずだ。

——むしろ、あいつが一番めげちまうのは、難波のやらかしたことだろうが。

難波が立村を見放したように聞いたので、最初思わずかっとなってしまった。しかし難波なりに考えた結論ということならば、男子として何も言うことはない。

極めつけは、立村自身が「黒い手帳」を手渡したという事実だ。

たかが手帳と言うなかれ。立村は暇があると黒い大判の手帳を握り締めて本条先輩にひつつき

、

「先輩、メモしていいですか、今、なんって」

などと必死に書き留めていたものだった。主に評議委員会関連のことではそうだった。何気なく、

「立村、いったい何そんな必死こいて書いてるんだあ？」

尋ねてみると、真面目な顔して、

「本条先輩の言うことを全部頭に入れたいんだ。評議とか、いろいろなこととか」

言い切っていたものだった。その中には本条先輩お得意の恋愛講座が入っているかどうかわからない。ただ、立村が黒い手帳に注ぎ込んでいた情熱は、端から見ていた貴史ですらすさまじいものに見えた。たぶん、執念か怨念か何かがこもっているのだろう。

それを天羽に手渡した。

評議委員長としての貴重な情報を、天羽に委ねた。

——つまり立村は、天羽を信じた、認めたってことだわな。

一区切りついた、そう感じた。誰かに引きずられてしかたなくではない。立村が自ら、きちんと結論を出し降りた。その行動を否定することこそ、貴史にとっては立村上総という男を侮辱することに思えてならなかった。

——つまり、もう、終わったことなんだなあ。んじゃ、あとはこちらでやりたいようにやりゃあいいじゃん。菱本先生もいろいろ思うところあっかもしれねえけど、それはそれで別の問題だろ。

さっき言いたいことをすべて美里にぶつけたせいか、全身がすっきり清々しかった。もちろん手は冷たいし足はぐちゃぐちゃ。さっさと家に帰って暖まりたいのは山々だが、今握り締めている美里のぬくもりだけでとりあえず歩いてはいけそうだった。

「もう、終わってっからな」

美里の家に明かりが灯っているのが見えた。一言も口を利かない美里に貴史はつぶやいた。横から覗き込む。美里の頬が妙にぎらぎら光っていた。鼻をすすってハンカチを口に当てていた。立ち止まり、自然と道の端によれた。そのまま顔を挙げた。

「何がよ」

「天羽と話、した。とりあえず、立村の居場所は決まった」

「え？」

わけが分からないという風に首を傾げた。

「全部話は天羽から聞いた。お前が全然言わねえからしゃあねえだろ。天羽も棚ぼたで委員長になっちゃったせいかばにばにしてたけどな。すぐになんとかせねばってことで奴なりに準備整えてたぞ。まず、立村を書記に回して仕事をさせようってことに決めて、それで通すって話だぞ」

あえて轟琴音が混じっていた点については触れなかった。いなくても十分話が通るなら、余計なことなど言わなくていい。

「立村くんを、書記に？」

「あたりめえだ！ ま、二年を副評議委員長にするのは当然のことだしあのなんだ、バスケ部の新井林、あいつで決めて、それから書記を」

「なんでそんなことになってるのよ。もともと評議委員会には副委員長とか書記とかなかったのに」

意外だ。美里は知らなかったらしい。喉をつまらせながら美里がつぶやいた。

「だから立村の居場所作りだろが！ 難波が寝返ってとんでもねえことになっちゃったけどな、結局天羽が委員長になってまん丸く収まったってことじゃねえのか？ ま、俺も最初はやべえと思ったけどな。なんとかなるだろ、天羽があれだけ動いたら。あとはうちの女子連中がうるせえったらねえが、それは美里、お前がなんとかしろよ。黙らせることくれえできるだろ。古川だっているしな。今朝古川があっさり暴露しちゃったし、あれ以上つつこむ奴はそうそういないだろよ」

美里は黙っていた。何度か口をハンカチで押さえては放し、目頭を押さえていた。

「ただな、立村がこれ以上目立ちまうのはやべえ。天羽にも言っといたけどな。立村にはとことん書記だけやらせとけ。中途半端に目立ってど響盛ってのは悲惨だろ。ただでせえな、立村が全校生徒に袋に遭ってるんだから、ここでひっそりさせておくのがベストじゃねえかって俺は思うんだ。んだろ、美里、そう思うだろ」

「貴史」

かばんと紙袋と手提げを握り締め、美里は首を振り、名を呼んだ。

「ほんとに、うまくいくと思う？」

「当たり前じゃねえか」

「ほんとに、ほんとに、ほんとに？」

うつむいてまたかぶりを振った。

「貴史、いつもそうだよね。絶対うまくいくって言うよね」

「今までうまくいったたるが」

「それって、私と貴史とだったらって、ことだよな？」

「何言ってるんだお前？」

「私と、貴史とだけだったら、いつもうまくいったよ。けど、私と貴史と、立村くんとどううまくいったことなんて一度もないじゃない！」

「なんだと？」

気色ばむ。顔を正面向かせた。そのまま見据える。見返された。真っ赤な頬が闇に浮かんだ。「覚えてる？ 一年の時、班ノートのことでごたごたしたことあったでしょ。あの時のこと、まだ今でも尾を引いてるんだってこと」

いきなりすっかり忘れていた時のことを言い出す美里。わけがわからない。

「ま、そりゃ」

「それに貴史だって、いつもう俺に任せるとかわけわかんないこと言うくせに、結局泥沼にしちゃったことあったじゃない、あったんだよ！」

だんだん言っていることが混沌としてきていることに美里自身気づいていないらしい。思わず揺さぶった。そんな大嘘誰が認めるか。

「じゃあ言ってみろ！ 俺が、いつ、そんな責任逃れなことしたんだよ！」

「だってあの時」

叫び、再びその顔が歪み、瞳からこぼれていくのを見つめた。

「美里」

「あの時」だけで表すことのできる場面が、くっきりと浮かび上がるのを感じた。

数え切れないふたりの「あの時」の思い出よりもなによりも、一瞬のうちに黒く染めたあの事件。

青大附中に入学してからは五年秋から六年卒業までの小学時代をあえてふたり、封印してきた。

話題にのぼることは所詮軽い、思い出話。同窓会も参加したことのないふたりだ。仲間内で会うことはあってもあの頃の記憶は一切巻き戻さずに過ごしてきた。

思わず水たまりに足を突っ込んでしまったのと同じことだった。

すっかり忘れていた。

怒鳴っていた。

「だから俺は青大附属受けたんだろが！」

ゆっくり、しゅるしゅる、小学六年秋の記憶が蘇ってくる。

目の前の美里が息を止めたままじっと貴史を見返してきた。いったいどこまで涙が残っているのだろう。また、目をうるませはじめていた。美里が自分の前ではこんな泣き虫だということ、貴史は幼稚園の頃から知っているから驚きはしない。ただ、黙って放っておけばいいだけのことだ。

— 気仙いろいろあったわな。

一言で片付ければ、「あの時」の粗相がきっかけで美里を巡る周囲の目線が変わってしまった、それだけのことだ。

おてんば娘のしでかしてしまったいくつかの出来事、そして貴史がそのことをおおっぴらにするように勧めたこと。

あくまでもそれは、よかれと思ってしたアドバイスだったはずだ。

しかし、思わぬ方向に美里の居場所はずれていった。貴史はそれを側で見守っていたはずだ。少なくとも美里を「守る」方向で動いたはずだ。

それでもどんどん居場所がなくなっていく美里の立場を本当の意味で理解できたわけではなかった。男子と女子の違いといえばそれまでだ。

女子たちの中で浮き上がり、このまま小学時代の友だちと同じ中学に進みたくないと思うようになった美里が、その場から逃げ出すために青大附中受験を志した、それが本当のところだった。成績優秀という理由で勧められたこともまったくないわけではないだろう。しかし、もしクラスの女子たちと滞りなくうまくやっていたら、誰が反対しても公立中学に進学しただろうと思う。そして貴史も。

金のかかる私立中学、しかもお坊っちゃんまにお嬢さまの巣窟と謳われる……実際はとんでもない大ボラだったことが明らかになるが……青潟大学附属中学受験を決めた時、単純に貴史は「美里の鼻を明かせればおもしろい」程度にしか考えていなかった。少なくともあの頃は好奇心しかなかった。受かっても落ちて、ただ美里との遊びの延長上に受験というものが存在していただけだった。

今なら違う、そう思える。

——俺は責任とっただけだ。

美里を一年半の間、自分の判断により苦しめてしまった償いを、自らの身体で行った。それが、青大附中受験であり、進学だったこと。

「あの時」のしくじりの、貴史が背負った部分は、受験できっちり落とし前つけたはずだ。

補足説明なんてしたくない。美里にはそれだけ伝えれば十分だ。そう思いたい。

「そういうことだ、責任取るってことは」

美里の腕から手を放した。

背を向けた。もう、言うことはない。

美里は声をかけてこなかった。

——ちっくしょう！ 礼ひとつ言いやしねえあいつ！

すっかり冷えきった手に息を吐きかけ振り返ろうとした時だった。

——なんだ？

水音。足元の水たまりに何か弾ける音がした。

街灯の黄色い丸が月の顔して映っている。またひとつ、足元に転がってきてぽちゃりと落ちた。

振り返った。

——美里？

教室の前扉、後ろ扉分の距離しか離れていなかった。美里がゆるく、逸らすように小石を投げつけてきた。

いったん貴史と向かい合い、物言わずにまた石を拾い、足元目指してソフトボール投手のように下から投げる。

一個、二個、三個。

——なあにどんくせえことやってるんだよ、ばーか。

美里の表情ははっきり見えなかった。ただ、きっちり、ぽったり、貴史の足元に落ちるように放ってくる。

「みーさと、見ろ！」

適当な小石を拾い上げた。貴史は振りかぶり、マウンドのエースよろしく勢いよく全力で投げ込んだ。まっすぐ、美里の横をすり抜けるようにコントロールをきっちり効かせることを忘れない。もちろん逸れて、美里の脇に立ち並ぶ塀に当たった。

向かい合ったまま、美里が背を向けて自宅玄関へ入っていくまで、貴史はそのまま街灯のにせもの月を足元に置いたままそこにいた。

羽飛貴史宛の年賀状は元旦、三通しか来なかった。

――めんどくせえなあ。

日頃より年賀状はもらってから二日以降にのんびり返信するものと決めている。

小学校の頃からその方針で通してきたので、自然と出してくる奴も減る。

もっとも小学時代の友達については、年賀状なんか面倒くさいもの出さなくてもすぐに顔を合わせて「あけましておめでとう！」の挨拶を交わすのが常だったし、大して不便などない。たまに、お年玉年賀ハガキ目当ての同級生から嫌味を言われたりもするがそんなのは知ったことじゃない。自慢じゃないが、生まれてから一度も美里宛の年賀状なんぞ書いたことはない。

貴史は母から三枚白地の年賀ハガキを分けてもらい、さっそく黒々と筆ペンで書きなぐった。

「賀正 今年もヨロシク！」

この一言で十分お釣りがくる。

三人分、約三分で完成だ。

次にもらった年賀状をひっくりかえし、住所を確認する。ひとりは原色使いの版画形式でたっぷりハートマークが描かれているもの、もうひとりは黒で印刷済みだが一言がやたらと長くみっちりつづられているもの。そしてもう一人は、

――あのなあ、立村。

人のことは言えない。貴史と同じパターンと言えばそれまでだ。やたらと高級そうな和紙に金のラメみたいなのを貼り付けた私製ハガキに、どこかの和歌を嗜む平安貴族雰囲気のかずし字で送りつけてくるというのはどんなものだろうか。

「謹賀新年 去年は誠にお世話になりました。本年も何卒宜しくお願い申し上げます」

どう考えても、同い年の男子中学生が自ら出したがるような内容の年賀状ではない。

去年も、一昨年も同じような内容だったので問いただした。母親か誰かに書かせているのかと疑ったからだ。

「立村、お前ほんつとに、こんな風に書いてるのかよ？ なんじゃありゃ」

答えの代わりに立村は、ノートヘサインペンでもって手早く、同じ文字を再現してみせた。

疑うところなし、あれは立村上総、本人の直筆だ。

正月三が日が過ぎ、テレビで放映されている大学駅伝中継も一段落したところで貴史は葉書を持って外に出た。

年末にようやく雪が根付き、中途半端なべったり感もなく、さくさく歩いていける路が広がっていた。大抵、家の前は綺麗に雪が慣らされているかもしくは削られているかしている。毎年恒例、町内会の獅子頭手伝いでくっついて歩いたりし、結局年賀状なんてしち面倒なことは後回

しにしてしまう。腹にたっぷりおせち料理と雑煮を押し込んで腰が重くなったとも言える。また清坂家と合同で初詣に行ったりその流れで夜遅くまでしゃべったりなんかしていると、十五日以降の準備などはどうでもよくなる。

青潟の冬休みは成人の日で一段落する。それまではしばらく、仲間ともそうそう会う機会がない。

美里を除いては。

青大附中に入学してから三年目、正月はほとんど学校の連中と遊ぶことがなくなった。

――美里、暇もて余してるかもな。

なんとなくそんな気がした。元旦に顔を合わせた時はさすがに親兄弟姉妹の前、あまり立ち入ったことは話せなかった。

どうしても諸事情を隠さねばならない状況だと知ってからはなおのことだった。

今だに美里は、家族に立村との交際についていい顔をされていないと聞くし、清坂姉妹とも最近はあまりうまく行っていないようだ。

さすがにそんなことを美里の両親および姉妹は臭わせることなどしないけれども。

――ちょっくら、誘ってやっか。

太陽が少しずつ黄色く染まり出した空を見上げた。一月四日、もう通りにはおめかしした初詣客も見かけなくなった。

小石を拾い、清坂家の二階窓に投げつけた。もちろん加減して、こつんと音がする程度に放った。

ふたりの、いつもの合図だ。

「ちょうど大学駅伝終わったよね」

テレビにかじりついていたのはどこも一緒だ。ジーンズに白いフード付きコートを羽織り、腰のちらちらした金ベルトをやんわり縛った美里が飛び出してきた。

「すっげえデットヒートだったよなあ。もろ鼻の差じゃねえか」

「けど、こんなに寒いのに走らなくちゃなんないなんて大変よね」

美里はピンクの手袋をはめて、指先をつまみ伸ばした。貴史と隣り合い歩き出した。

「青潟大学が駅伝に出ることなんてないと思うけど、もし出られたら旗もって応援に行きたいよね」

「そりゃあもう中学・高校・大学全校総出の大騒ぎになるだろ、すっげえ楽しいなあ」

笑い合い、同時にくしゃみした。

「どっか行く？ 言っとくけどバッテリーセンターはやだからね！」

「俺もスーパーでお前の服の買い物なんかにつき合いたくねえぞ！」

お互いさまである。お年玉で懐はそれなりに暖かいけれど、実はそれほど使いたいという気持ちもない。野郎連中と遊べばそれなりにゲームセンターでたむろったり、漫画本を大量に買い漁ったりそのくらいはするのだろうが、今日は美里が相手だ。ただでも十分時間を潰すことがで

きる。つまり、しゃべる。それだけでいい。ただ暖かい場所を見つけないことには落ち着かない。互いの家では学校事情について話すこともままならない。となるとひとつ。

「そうだ、貴史、今日五百円くらい持ってる？」

「持ってるけど」

「じゃあ、美術館行こっか！ もうお正月から開いてるって新聞に出てたよ。入場料五百円だって」

――まあいっか。

青潟市立美術館、学生料金がまだまだ通用する。今はなんだか有名な外国の絵画がずらっと並び展覧会らしい。

「金沢くんあたり来てるかもね」

「そうだな、じゃあ行くか！」

美里に誘われるというのもなんだかしゃくだが、嫌なところに行くわけではない。

屋根のある場所に入ることができて、できれば家族や他の友達と顔を合わせないですみそうなところであればベストだ。

自転車ならすぐにたどり着くはず場所だが、いったんもどって引っ張り出すのもめんどくさく結局たらたらと歩くはめとなった。

しばらくは大学駅伝の話を変わしつつ、美里の様子を揺さぶってみた。

「美里、お前うちでずっと正月の間こもってたなんて言わねえよな？ 誰かかしらいねかったのか？」

首を傾げつつ、美里はかぶりを振った。

「みんな、高校受験だもん。遊んでくれるわけじゃないじゃない！ それにうちの学校の人だってみんな田舎に帰ったりしてるし。こずえは弟の面倒みなくちゃいけないからってずっとうちにいるんだって。遊びに行ってもいいかなって思うけど、やっぱり、ちょっとね」

「そっか、受験だもんなあ」

すっかり青大附中に浸かっていると自分がすでに高校受験を考えなくてもよい立場というのを忘れてしまう。合否うんぬん以前に、もう決まったこと。

「三年前、私たちがいっぱい勉強しておいたから、今楽できるってことよね」

「そりゃまあそうだ」

「けど、遊ぶ友達のいない楽、って気持ち、寂しいよね」

「そういうもんか？」

美里は頷きつつ、手袋をはめた手を握り締めて頬に置いた。

「去年から今年、誰とも遊ばなかったな。貴史は？」

「もう年末年始遊びまくり」

「男子って楽でいいよね」

寂しげにつぶやいた。

――相当まいてるな、こいつ。

美里がこの年末年始、静かに家でおこもりしていたことは知っている。

なんだかんだ言って貴史は美里の顔を毎日覗きに行っていたが、必ず会えたというのがその答えだろう。

とにかく、誰とも遊ぼうとしない。

「あ、そうだ。近江さんと喫茶店でケーキ食べたりもしたけどね。それだけかな」

「ああ、天羽の彼女な」

少し深めの雪を探してスニーカーで踏み潰す。美里もそれに倣った。足首までの柔らかそうな茶の皮ブーツを履いていた。

「でもおもしろいの、近江さんと天羽くん、いつも寄席の会があると一緒にチケット買って出かけるんだって！」

「寄席？ 落語かよ」

「そうなの。近江さん、天羽くんに落語の会へ誘われて、そのセンスが気に入ったんだって。その後近江さんも自分でいろいろ勉強して今では、若手お笑い芸人の卵を見つけて情報集めることが趣味になっちゃったんだって！」

あの、たわし頭の気取った女子がお笑い芸人に夢中とは誰も想像できないだろう。

「なんか、天羽がベタ惚れする気持ちが少々分かるような気がしてきたぞ。俺も優ちゃんが」

「はいはいそのロリコン、静かにしなさい」

はっさはたかれ、しかたなく黙った。美里は手を叩いて喉で笑った。

――だんだん美里も、調子取り戻してるってことか。

――立村がいなくても。

すでに周囲では、「立村上総と清坂美里との交際は、評議委員長選挙のどたばたにより、結局自然消滅した」とする見方がほとんどになりつつあった。

三年D組の連中もほとんどはそちらに与しているだろう。

実際は何事も起こらず、今まで通りの静かな流れだと聞いているが、実際は美里も最低限の会話しか立村とは交わさないようにしているしそう思われても不思議はないような言動を続けている。立村も露骨に避けるわけではないが、できれば静かな方を望むような顔をするので自然とカップルめいた行動は減っている。

――今年はやらねえみたいだもんな、例のビデオ演劇も。

立村が去年、一昨年と頭を抱えていた「評議委員会製作オリジナルビデオ演劇」も同じく自然消滅と相成ったようだ。

もともと二年上の先輩が持ち出した企画を育てていって受け取っただけのもの。詳しいことは知らないが、目立つことがいやな立村にとっては苦行だったと考えるのは正しいと思える。決めたのはもちろん、現評議委員長である天羽忠文だろうが。

――そうだ、天羽が決めたんだわな、全部。

評議委員会で立村がどんな苦渋を舐めているのかはわからない。貴史もあえて首を突っ込もうとはしなかった。

したことといえばひとつ、菱本先生に確固たるアドバイスをを行っただけ。

「先生さ、悪いけど、立村はしばらくほっといたほう絶対いいぞ。あいつ半端でなく落ち込んじゃってるだろ？ 天羽たちもなんとか立村の立場守ってやろうってしてるけど、そこで余計なこと言ったらこの世から消えなくなっちゃうもん。俺なら平気だけど立村なら絶対再起不能になっちゃうよ。ま、だからしばらくそおとしておいて、少し元気になってからしゃべったほうが絶対絶対いいって！」

菱本先生は最初口をへの字に曲げていたが、最後は納得してくれた。

「羽飛がそう言うなら、まあいいだろ。それなら羽飛、あとはお前が責任もって面倒みてくれよな」

「へ、責任？」

「そうだ、うちのクラスについて少し、面倒をってとこだ、だろ？」

別に面倒を見るなんてことをしたくはないが、そのことを伝えて以来貴史は菱本先生からしょっちゅう呼び出されて、

「羽飛、実はな、文集のことなんだがな」

「羽飛、実はな、水口のことなんだがな」

「羽飛、実はな、奈良岡の受験のことなんだがな」

さまざまな相談を持ちかけられるはめとなってしまった。期待されるのは結構うれしいので苦にはならないのだが、ひとつ疑問なのは、

「先生、こういう相談、今まで立村相手に持ちかけたことねえの？」

これである。本来、クラスのよしなごとに関しては評議委員たる……委員長ではないが……立村が対応すべき問題のはずだ。

菱本先生の返事はあっさりしていた。

「あまり、ないなあ」

——あっさり無視されちゃうもんな。

「貴史、あんた、ポッケからなんか落ちたよ。はい、これ」

美里がいったん後ろに駆けていき、拾って持ってきてくれた。出していない年賀ハガキだった。

「あんた、まだ返事書いてなかったってわけ？」

「おお、サンキュ」

「私なんかちゃんと一日につくよう出したもん」

「俺にはよこさねえくせに」

「ばっかじゃないの？ お正月一番に顔合わせるあんたになんで書かなくちゃいけないのよ！」

まったくもってもっともな理由を語り合い、笑い合った。手渡しして受け取ろうとすると美里が首を振った。

「どうせ出すんだったら、そのポストに入れてってあげる。そうしたら出すの忘れなくていいでしょ！」

「やってくれるんなら手間省けてありがたいけどな、じゃあよろしく！」

見られて困る私信ではない。美里はすぐ脇のポストに投函した。

「あのさ、貴史」

再び貴史の隣に並び、ちらりと見やった。

「あんた、いつもあんなシンプルすぎる年賀状書いてるの？ ちらっと見たの悪かったけど、あまりにも寂しすぎるじゃないあれじゃ」

「あれ以外何書けばいいんだ？」

「みんな、年賀状には工夫してるんだよ？ 家族写真載せたり、かわいいキャラクター入りのもの使ったりしてるんだから。それを何？ あれ？ もろ有名人のサインですって雰囲気じゃない。一般人があんなことするとわびしいよ」

「いいじゃねえか、俺、スターだもん」

「だったらもっと年賀状に気を遣いなさいって言ってるの！ そういうところが喜ばれるんだから。絵くらいサインペンでさらさらっと描けるでしょ。それにさ、あんた」

さらっと言っただけの美里。

「せっかく筆ペン使ってるなら、芸術的な文字書けばいいのに。あんた得意じゃん、そういうのちっちゃいころから」

「はあ？ 俺、書道はあまり興味ないかなって」

「ばーか。よく小学校の書き初め大会で賞取ってたじゃない！」

「そんなことあったっけか」

素手を見つめ思い出した。確かに何度か賞はもらったことがある。廊下に張り出されたこともある。太い筆で大きく「初日の出」とか「謹賀新年」とか書いてかっこよく決めることは嫌いではない。ただ、年賀状なんぞにそんな真面目なこと書いて何が楽しいかとも思う。たとえば、

「あのな、美里、それ立村みたいな奴ならとにかく俺がやってどうするんだって」

雪が細かくちらついてきた。空がだんだん雲で薄暗い色に整えられていく。早く美術館に走った方がよさそうだ。

美里が黙ってそっぽを向いた。

「あいつの年賀状、見ただろ？ 毎年恒例のあのどっかのお公家さんがなよなよチックに細い筆で和歌書いているような世界じゃなかよ。あれってどうよ。悪いが俺も本気で年賀状、書道勝負で書いたら勝つ自信あるけどな。けど、こんなくだらんことに力出したくねえよな。やるならたとえばドッジボールとかだな」

もちろん、受け狙いだ。笑ってもらうのが目的だった。

美里は笑わなかった。

「そうだね、立村くんの年賀状、三年連続見たけど」

空を見上げ、唇を噛んだ後続けた。

「女子でもあんな綺麗な文字書くことできる人、そうそういないよね。お母さんにちっちゃい頃

からああいう風を書くようになって言われてたんだって。だから小学校の頃からずっと、あんな年賀状を送ってたんだって。変だよね。あんな年賀状送られたら、綺麗かもしれないけどびっくりして逃げられちゃうよ。それに名前がまずいもん。女子からきた手紙だって、思われちゃうよきっと」

――まあ、りつむらかずさという女子がいてもおかしくはないな。

吹き出しそうになり、白い息を思いっきり吐き出す。よく立村が「俺の名前を勘違いして、よくダイレクトメールが届くんだ。化粧品とかのがさ」などと愚痴っていたことを思いだした。中性雰囲気の名前ならばそれはさだめだ。

「美里、立村から年賀状来たのかよ」

「来ないと思ってたけど、届いたよ」

「返事書いたのか？」

貴史がさらに畳みかけると美里は首を振った。

「私だって、ちゃんと一月一日に届くよう年賀状出したもん」

「じゃあ返事か」

「ううん、立村くんちゃんと、元旦に送ってくれた」

――と、いうことは。

「年賀状書くだけのつながりはあるってことだよ、きっと」

美里はうつむいたままつぶやいた。貴史も頷いた。

雪を踏みしめつつ、滑らないように厚みのある路を選んで歩いた。

うっかりつるつる光ったところに足を載せると尻もちついてしまいそうになる。

「あのさ、美里」

「なあに」

「結局立村とはどうなんだ？」

怪訝な顔で美里が立ち止まった。驚くのも無理ないと思う。貴史はしばらく美里から立村との交際について話を聞いていなかった。様子を観察することにより、すっかり縁が切れた＝別れた、わけではないと判断してはいたが美里自身からは聞き出していなかったからだ。美里も評議委員長改選以降、腫れ物に触るようには接しているしそれは貴史や菱本先生その他一部の男子連中もそうしている。付き合い云々はとにかくとして、これから先の交際についてはあやふやなままにつないでいきたいようだった。

「どうもしないよ。今まで通り」

「年賀状よこすくらいだもんな」

「あのさ、嫌いになったら絶対年賀状出さないよ。そういう人だって知ってるじゃない」

美里は言い切った。

「でも、どうでもいい人だから出したってことも、あるよね」

「はあ？」

「少なくとも私たち、立村くんがあんな品のありすぎる年賀状を送りつけてきても、こいつ馬

鹿じゃないのとか思って無視したりはしないよね。そういう相手だってこと分かってるから送ってくるんじゃないの。悪いけど立村くんみたいな年賀状なら、普通の女子、縁切りたくなると思うよ」

「ひえ、そこまで言うかよ、こええなあ」

「怖いから言ってるんじゃないの！ とにかく立村くんは変なの！」

断言した後美里は黙った。そのまま真っすぐ歩き続けた。雪が本降りになる寸前、無事美術館のエントランスへたどり着いた。肩と腕の雪を払い、さっそく中へと入っていった。思ったよりも人が入っているのに驚いた。見上げると巨大な奴隷が天井からぶらぶらぶら下がっていた。

「あれ、あそこにいるの、小春ちゃんじゃない？」

奴隷に手が届くかどうか、無理を承知で手を伸ばしていたら美里に尻をはたかれた。

「あんた何やってるの、猫じゃないんだから」

「ああ？ 誰かいるのか？」

聞いていなかったので尋ね返した。

「ほら、A組の西月小春ちゃん。評議委員会で一緒だったけど。あれ？」

言葉をひそめるように美里は、貴史の耳元に囁いた。

「A組の、片岡くんじゃない？ 隣の男子」

ちょうど第一展示室の奥の戸から出ていこうとする四人組に目が留まった。観察しなくてもすぐにそれと気がついた。

コート姿の男ふたり、女ふたり。

――そうだそうだ、A組の片岡だ。それと西月かあ。

三年前期までは女子評議委員だった西月小春。しかし天羽への想いを露骨に拒絶され、その弾みで言葉が発することができなくなったと聞く。

A組の女子たちは天羽に全責任があると訴えるが、ほぼすべての男子たちは「あそこまでしつこくアピールされたら、男は大抵逃げる」と口を揃える。

その、ある意味「お荷物」だった西月小春を引き取る格好となったのが、クラスメートの片岡司だと聞く。

いろいろ訳ありの、しかし天羽からすると「性格のいい」奴らしい。貴史も直接しゃべったことはないのでノーコメントとしておく。

なお、もうひとりやたらと背が高く、エントランスの奴隷をもしかしたら引きちぎれそうな女子については顔を見た記憶があるだけで、何者なのかはわからない。これも知らないことにしておく。

「小春ちゃん、可哀想」

美里がつぶやくのを聞いた。返事はしなかった。

「だって、ひどいよね。天羽くんもひどすぎるよ。いくら小春ちゃんのこと嫌いだからといって、下着ドロした男子に押し付けるなんて。許せないよね」

小柄であどけない眼差しの片岡は、貴史たちに背中を向けるようにして、西月小春の側に寄り添っていた。その側には一回りもあるい長髪の男性が、スーツ姿でいろいろ話しかけている。三人で仲良く美術鑑賞を楽しんでいる様子に見えた。

「別に、楽しんでるんじゃないの？」

貴史が答えると即座に否定された。

「楽しめるわけじゃない！好きな人に嫌われて、好きでもない人に好かれたって何もうれしくないに決まってるじゃない！」

前の三人を五メートル後ろからじっと睨み据え、美里は貴史に告げた。

「小春ちゃんたちに気づかれないよう、少し離れて見ようよ」

「面倒なことになるのはごめんだもんな」

貴史も異存はなかった。のんびり、ゆっくり、途中休みながらしゃべることにした。混み合っている館内、うまく距離を取れば気づかれずにすみそうだった。

美術展そのものは古典の作品中心でちょっと退屈だった。それでもミュージアムショップでは、お年玉のゆとりでもって怒涛のごとく買い物した。

普段買えないようなものばかりだった。

「貴史、あんたね」

隣で美里が呆れ果てたようにつぶやく。

「もっと形に残るものにしたらいじゃない。なんでこんなペーパークラフトとか水鉄砲とか万華鏡とかに手を出すの？」

「形だろが！」

「私が言いたいのは、たとえばほら、あれ」

美里が指差したのはジグソーパズルの箱の山だった。奥には完成された絵がずらっと張り巡らされている。

「パズルだったら出来上がった後、飾っておけるじゃない」

「お前よく考えてみる。あんなあっさりした景色だとか不細工な女の顔とかそんなもんこしらえてうれしいか？」

「ああわかったわかった、あんたは鈴蘭優の顔が最優先主義なんだもんね。勝手にしなさいよ」

「普段美里の買い物に付き合ってるんだから、今日ぐらいは譲歩しろ」

貴史の言葉に美里は黙った。事実を認めたということだろう。

「わかった、じゃああんた、勝手に買い物に燃えてなさい。私、その辺座ってるから」

珍しく美里は貴史に張り付かず、さっさとショップから出て行った。

――なに一人で文句言ってるんだか。レジ行くぞ。

戦利品の山を抱え、即、会計を済ませた。

「すみません、早く」

その他特に知り合いと顔を合わせることもなかった。入り口のところで後ろ姿を見かけた三年A組関係者もいなかった。

別に見られて困るわけではないけれども、面倒を避けられたことはよかったと思う。

――それにしても美里、どこにいるんだ？

ショップを出てしばらく、エントランスに向かい開いている椅子を眺めたが見当たらなかった。「その辺座ってるから」ということは、どこかで休憩しているのだろうか。それでもどこにいるのか見当がつかない。混み合っているといても人がびっちりひしめいているわけでもない。

ビニール袋をぶら下げ、あちらこちら見渡してみる。

天井の巨大な凧が睨んでいる。いったん目線を上げてみたらチラシ置き場の前で誰かと話している美里を見つけた。

背中を向けているからわからなかつただけじゃなかった。

――あいつ、誰なんだ？

片手を上げかけて、やめた。ジーンズとジャンパーで普段着っぽく装った男性が美里に話しかけていた。

――高校生じゃあねえか。

かなりがっちりした体格の持ち主のようだ。背中を丸めて美里に屈み込んでいる。

――大学生か？

様子を伺うのではなく、ただ黙って見つめた。そいつの横顔が振り返りぎわにちらりと覗いた。いかにも野球かサッカーやっていたような面をしていた。冬なのに顔が浅黒い。あれはどうみてもスポーツ焼けが冬になっても残っている証拠だ。

しばらく美里はそいつと話をしているようだったが、突然頭を下げて背を向けた。すぐに貴史に気づいたらしい。普通で近づく速度で近づいてきた。

「何してるんだよ」

「何でもない。知らない人」

短く返事をして、美里は貴史の手元を覗き込んだ。

「結局、こんなに買ったってわけね」

「いつ来ることできるか、もう、わかんねえだろ」

今日はたまたまお年玉が残っていたから入館料五百円の美術館へ足が向いたのだ。いわゆる「晴れの場」だ。用事でもなければこんなところにくるわけがない。

「行けばいいじゃない。いつも金沢くんといろんなところ行ってるんでしょ？ 美術展とか誘われて」

「ありゃあ、まあそうだけだなあ」

美里には説明していなかったが、確かに金沢とは夏休み以来美術関連の催し物にしょっちゅう足を運んでいた。たまには汽車を使って出かけることもあった。しかしそれは、金沢がいつも無料招待券を用意して誘ってくれるからだった。誰も金がかかるんだったら自分から行くわけがない。

そのことを説明すると美里は驚いた風に口へ両手を合わせた。拝む恰好に近かった。

「なんで金沢くんそんなに招待券持ってるの？」

「絵の先生とかその他もろもろから回ってくるんだと。行く奴いないからって、結構もらえるんだぞ」

「そうなんだ、いいな」

美里は小声でつぶやき、腕時計を覗き込んだ。

「あんたの買い物付き合ったなら、私だって、いいよね」

「洋服はお断りだからな」

「違うよ、ちょっと待ってて」

ふたたび美里は電話コーナーに向かい走っていった。五台ほど仕切りつきの公衆電話ブースが左脇の壁に並んでいた。

忙しい奴である。

今度は貴史が一服する番だった。

――宿題、どうすっか。

ほとんど手つかず状態の宿題プリント処理、頭が痛い。

英語に関しては主に長文読解ということもあり、立村が用意してくれるであろう模範回答を丸写しすればいい。

数学と国語についてはさほど面倒なこともない。できれば誰か、情報を流してくれる奴がいるとありがたい。

実は大して心配していなかった。

――ああ、けど、立村、見せてくれっかなあ。

別の問題を発見した。

――あいつそこまで復活してるかってだな。

毎年長期休暇中の宿題は、英語に限り立村が面倒を見てくれることに決まっていた。代わりに誰かかしらが立村のために数学の答えを渡すといったパターンだ。

今まで通りならそうなのだが、今の立村ではどうだろう。

――はっきり言って、干からびてるよな。

やる気のない立村が果たして今まで通りの行動をするかどうか、先が読めない。

「ごめん、じゃあ行こうか！」

すぐに戻ってきた美里は座っている貴史を見下ろすように声をかけた。

「おいおいどうしたよ」

「うちに電話かけたの」

つまらなそうな顔のまま、美里が天井を見上げた。エントランスにかかっている巨大な風の天狗が威張っている。

「今夜遅くなるからって連絡しといたの」

「なんでだ？」

遊び呆けて怒鳴られることを先回りして避けたのか。美里にしては珍しい。

「うるさく言われるのいやだもん。当たり前じゃない。お母さんに言っただけ。夕方遅くなってからの方がスーパーのお惣菜とか安くなるでしょ。だから私が帰りにスーパー寄って買って買物してくって話したの」

「スーパーかよ、正月の買い物がか！」

凧見て声出して笑った。美里は笑わなかった。

「夜遅くなるといういろいろ聞かれるから、今日は貴史と一緒にだから大丈夫でしょって言っただけ！ さ、行くよ行くよ！」

――なんだよ勝手に文句言って勝手に移動かよ！

お腹のどこかに笑い皺が残っているに違いない。まず外に出ることにした。美里の歩き方は早いったらない。走らないと追いつけそうにない。

外に出るともう真っ暗だった。そんなに長い時間居座っていたとも思わなかったし、まだ閉館時間まで余裕があるというのに信じられない闇だ。

「お前どこで買ってくの」

「寄り道してからにするから」

さらに美里はずんずん歩いていく。美術館がぽつんと遠ざかっていくのを横目に、貴史は美里の背を追った。

「どっち行くんだよ。うちと方向違うだろ」

「駅前に行くんだから、黙っててよ」

車だけが勢いよくじゃらじゃら音を鳴らしながら走り抜けていく。足元も時々滑りそうになる。とけかけた雪が凍る直前の危なっかしい足取りで、美里が歩いていく。

「駅前で何買うんだ？」

「なんでもいいでしょ！」

なんとか追いついて隣り合う。貴史は美里の横顔を覗き込んだ。こういう時の美里が何を考えているのか、以前だったらすぐに感づくことができたのになぜか今は遠く届かない。苛立ちを隠せないだけ、とも思えない。家でまた姉妹げんかやらかして帰りたくないだけなのかもしれない。やはり立村とのことがいろいろとしこりになっている、これが一番可能性高い。

美術館から青潟駅まではさほど遠くなかった。バスを使えば五分程度で到着することはわかっている。ただ今日は祝日ダイヤのため、もう早いうちに最終バスが出ているはずだった。

蒼さ残る空と微かな街灯の明かりがふたりの影を鮮やかに映し出している。やはり、美里の頭ひとつぶん貴史の方が背が高い。

「福袋買いに行くのか？」

確か青潟のデパートではお正月シーズン福袋がいろいろな店で販売されているはずだった。貴史の母が嬉々として大量の紙袋を抱えていたことを思い出した。

美里が首を傾げた。

「だって余り物ばかりだって言ってたし、そんなの手出さない」

「じゃあなんで駅前なんか行くんだ？」

目的が「スーパーの値引き惣菜」購入ならばそんな遠くへ行く必要などないではないか。家から徒歩数分の場所にスーパーもある、コンビニもある。

なのになぜ駅前へ？

口ごもる様子だが、美里は答えた。

「肝試しみたいなものよ」

「季節間違えてるだろそれ！ 冬じゃあねえだろそれ！」

吹き出してしまった。言っている意味が分からない。肝試しといえば真夏のイベント。こんなに冷え込む一月の、しかもめでたい正月に幽霊と挨拶したい奴なんて、まずいないはずだ。何よりも美里は心霊ものの映画に興味がないはずだ。

「いい、貴史？」

「なんだよ」

ようやく比較的車の往来が激しい十字路に出た。こまかい雪が少しずつ降り始めた。

「今から、ひとりであの道往復してくるから、少しだけ待ってて」

吹雪いてはいない。髪にまとわりつく雪も溶けない。美里はひとつ、大きく息を吸い込んだ。

「すぐ戻るから」

――あいつまた走ってやがる。

貴史が返事をする前に、美里はまた駆け出した。その道だけなぜか綺麗にコンクリートが顔を出していた。

――また面倒なもん、買うつもりなのかよ、ったくなんだってな。

貴史だってせっかく駅前繁華街までたどり着いたのだからそれなりに遊びたい気持ちはあった。まず、レコード店に立ち寄った。正月の記念企画としてアルバムのテープ版を購入すると、おまけに好きなポスターをもらえるという張り紙を見つけ即、鈴蘭優のものを購入した。レコードは揃えていたがカセットテープまで手が出なかったのだ。これも懐暖かいゆえにできること。その他、「砂のマレイ」映画版サウンドトラックの購入に頭をひねったりして結局買わなかったりもした。

おまけにもらった鈴蘭優ポスターは全身版だ。もう何も言うことはない。

――天井だな、こりゃ。

自分の部屋へ張り巡らされたポスターを一枚、剥がさねばならない。場所つくらねばならない。

店から出て、美里を探した。買い物に熱をあげていればたぶん、時間の感覚なんかなくなるに違いない。

いつものパターンからして美里がすぐに戻るわけなんぞないのだ。

いそうな店は見当がつく。まずは女子好みのファンシーな文房具が並んでいる店か、もしくはアイドルの生写真やプロマイドがたくさん揃っている店かのどちらかだ。

美里は基本として芸能人にさほど興味を示さない……すなわち立村ひとすじ……のだが、女子同士の付き合いもあってよく足を運ぶようだ。

道を往復して、開いている店を覗き込もうとしたが、なぜかほとんどが休業中の札ばかり。

正月休み中は特に専門店が開いていないらしい。あほくさい。

――ははあ、美里どこ行ったんだ？ まだうろうろしてるのかよ。

振り返った。背中越しに赤い提灯がぼつぼつ照らし出されていた。完全に夜の匂いだった。

――あいつどこいったんだよ！

店で油を売っているわけでないとなれば、どこにいるか想像つかなかった。

――まったく、寒いぞもう帰るぞ！

夜遅くなっていいなんてわけのわからない電話をなぜする必要があったのか、貴史には理解できない。

――正月は雑煮とおせち食ってりゃあいだろ！

無理して夜のタイムサービスを利用して値下げ品を買い集める必要なんてないはずだ。

平日と比べて思ったよりも人がいない。デパート以外はシャッターが降りている店がほとんどだ。

なぜこんなところに来たのかその理由がつかめない。

――美里、どこにいるんだ？

もう一度、十字路に立ち三百六十度見渡した。

――美里？

背を向けたまま、美里が反対側の小路真ん中に突っ立っていた。

貴史の右手側、車がなんとか通ることができる程度で、道の奥にはカラオケボックスやラブホテルのライトがみみちく光っていた。

立ち尽くしているのは美里だけではなく、他にも同年代から高校生くらいの男女も混じっていた。みっちり詰まった小さな店の間にはなぜか、控えめに人が滑り込んでいるようだった。大通りでは見かけないいかにも危なっかしい雰囲気のお店ばかりだった。喫茶店に入っても出されたお冷が温そうなイメージの街通りだった。

――立村がいたら、言うんだろうな。本条先輩がいっぱいだとか。

美里や立村には似合わず、本条先輩やあえていえば南雲あたりがうろうろしそうな、生温かい空気が小ぶりの雪に溶け込んでいる。

――そんな道のど真ん中にいちゃあ、邪魔だろが。

仕方ない。貴史はすぐ駆け寄った。

「美里、行くぞ、何ぼけっとしてんだよ」

髪に降り注いだ雪が、自然と白く塊を作っている。美里は払わずそのまま振り返った。貴史の顔を静かに見つめた。驚きはなかったようだった。

「これで、五人め」

「はあ？」

「あんたは別よ、数に入れてない」

疲れたように美里がつぶやいた。顔を近づけてみて気づいた。不自然に美里の顔には赤い紅が施されていた。美術館にいた時にはつけていなかった。十字路で駆け出した時にはなかったような記憶がある。

「何の数だよ？」

「声かけてきた人たち」

平たい声の答えが返ってきた。

「美術館でひとり、この通りで立っていたら四人。私、何にもしてないのにね」

「なんかの勧誘だろ、どうせ」

「違うもん！」

妙に生白い美里の表情がかちっと動いた。いつもの眼差しに戻っていた。

「近江さんが言ったの。私が夜の街を歩いたら必ず誰かが声かけてきてデートに誘うに決まってるって。だからひとりで歩いたらだめよって」

「世の中勘違い野郎も多いってことで」

「うるさい！ だから、試してみたの」

「何を試したんだよ？」

「だから、そうよ」

今度は美里がぐるりと見渡した。夜、唯一賑わいの残る小路に立ち尽くしたまま。

「ディスコに行こうかとか、その辺でお茶しないとか言われたよ。でも、断った。当たり前じゃない」

「おい、美里、何考えて」

「こんな風にして付き合うなんて最低よね。お姉ちゃん何考えてるんだらう。黙って立って声かけられるの待って、相手が好みのタイプならついていけばいいんだって。そんな出会いのどこがいいの？ じっくり話もしないで、名前も知らないまま変なところに行って！ 気持ち悪すぎる！」

「あ、ああそのことかよ」

姉さんのことならしょうがない。相当恋愛関係が派手なお方なのは承知している。さては美里、相当ひどい姉妹げんかやらかしてきたのか。

「けどそれとお前が今こうやって突っ立っている意味がわからねえよな」

「わからなくたっていい！」

「じゃあ、帰るぞ。早くスーパー行くんだろが。ったく美里の言うことわけわからねえ」

手で美里の頭を軽く小突いた。もちろんやわらかく、雪が落ちない程度にだ。

「寒いね」

意外にも美里は素直に歩き出した。貴史と肩を並べた。まだパウダースノーという言葉通りの雪が、街灯に照らされて交差しつつ飛び交っている。ネオンと一緒に見知らぬ男性集団がふらつきながら近づいてきた。ただすれ違っただけだった。やたらとトーンの高いしゃべり声で街のBGMが打ち消されそうだった。遮るのは風の走る音のみ。美里は真っ正面向いて能面のまま歩いてゆく。目の前には仲間内で有名な、ヨーロッパの城を思わせるある建物が立ち並んでいた。本条先輩御用達、噂では遊び人の女子たちがここでデート相手を探すとされている喫茶店も発見した。

すれ違う男性の一人が、ちらと美里の顔を見下ろした。

「これから、お楽しみ？ 相手いなかったら僕とどう？」

美里は返事をしなかった。聞こえなかったようだった。耳にしたのは貴史だけだった。

――世の中物好きが多いとは思うがなあ、けどしょうがねえ。こいつも外見は女子だ。

真っ黒に染まった空とネオンでかすれる残光を見上げた。はっきりと浮かび上がるオリオン座の姿を探した。見えづらかったけれども確かに輝いていた。

「美里、急ぐぞ」

貴史は美里の手を取った。握り締めた。一步前に出た。

「何よ」

「こんなとこでたらたらしてたら、今度は補導員に捕まっちゃうだろが。卒業前にそんな危ない橋なんか渡る気ねえよ！」

そのまままっすぐ、綱を引くように歩き続けた。手袋で遮断された固い手に、艶かしいものなどなかった。すれ違っていくたくさんの男たちが美里をちらちら見やるのを感じるたび貴史は、無機質なその手を握り締めた。血の通った指先を感じていいのは、美里自身だけのはずだ。

「放してよ、痛いから」

「どこが痛いんだよ、ったくわけわからねえことばっか言いやがって！」

「違うんだってば、貴史、ほら、落としてる」

手を振り払い、美里は豪華絢爛な白い城の前でしゃがみ込んだ。

「ほら、ポスター。また鈴蘭優の、買ったんでしょ」

雪の上にはビニールで被われた筒が転がっていた。貴史のもう片方の手でぶら下げていたビニール袋から滑り落ちたらしい。

「うちに着くまで持ってくよ。あんた、そのままだったら袋破くでしょ。珍しいね貴史、鈴蘭優のポスター持っている時は両手で抱きしめてるくせに」

貴史は即、美里の手からまるまったポスターの筒をひったくりそれで思いっきりぶん殴った。

「そんなふざけたこと言ってる暇あったら、早く歩けよ！ おお、俺の愛しい優ちゃん、寒かったよなあ、ごめんごめん」

「その優ちゃんポスターで私を殴るくらいだから、相当あんたも疲れてるのね」

返す美里の言葉を見無視し、貴史は先頭切って走り出した。さっきは美里の背を見送るしかできなかった。今度はあいつが自分を見つめればいい。

――美里、なんか、正月に毒きのこかなんか食ったんじゃないか？ ったくなあに考えてるんだか。モテモテ肝試しなんかやって相手が硬直していることくらいいい加減気づけよな！

振り返り、もう一度叫んだ。また美里が誰かに呼び止められている。世の中不思議な好みの男もずいぶんいるもんだ。

「美里、置いてくぞ！ 早く来い！」

相手をあしらって走り出した美里を貴史は立ち尽くしたまま待った。

握り締めている鈴蘭優のポスター筒が少し歪んだことに気がついたのは帰宅してからだった。

年に三度、立村が人気者になる日がやってきた。

「よ、おっはよ！」

貴史が教室に入りまずは立村の席を探した。始業式の朝はたいてい、立村が男女問わずクラスメートに囲まれていて、わいわいきゃあきゃあ言われているのが常だったから。理由がわかりきっているだけに誰もやっかまない。それもお約束のことだった。

「ああ」

小声でかすかに微笑み、立村はすぐ目を手元のノートに戻した。すでに脇には十冊ほどのノートが積み上げられている。

「毎年のお仕事ご苦労さん」

「そんなでもないよ」

貴史は上から立村の机を覗き込んだ。すでに他の連中……男子しかいない……が取り囲み好き勝手なことを言っておる。

「なんだよ、それって間違いなのかよ、おいおい」

「自信作だったんだけどなあ、この訳」

「ちっ、カンファレンスとコンフージョン間違えてちゃ世話ねえわ」

鉛筆でさらさらと注意事項をメモしてゆき、ぱらぱらとめくりなおしてノート主に渡す。

「サンキュ、これで英語もオール5だ！」

「じゃあ次、よろしく」

なんと順番は南雲に回ってきたようだ。一言も貴史とは挨拶なんて交わさない。立村は大してかまうでもなくすぐにノートを一頁ずつチェックしはじめた。それにしても早い。一秒で即ペー지를繰っていく。ひっかかったらしいところで何かを書き入れ矢印を引いていく。約一分で見直し完了。即、南雲に手渡した。

「よっしゃ、助かった！ ありがとりっちゃん！」

返事もそこそこに立村の冬休み英語宿題ノート最終チェックは続いていた。

なぜ貴史がそこに混じらないかというの一週間前に立村からノートのコピーをもらっていたからだ。

確認してはいないが、おそらく美里の手元にも届いているだろう。

わざわざ自分のノートをまるごとコピーして、郵送で送りつけてくるくらいなのだから。

特にメッセージらしきものは添えられていない。中身観れば分かるだろ、といった俺様な態度丸出しだった。

――ま、あいつのやりそうなことだわな。

せめて一言、「新学期また会おうぜ」くらいあってもいいんでないかとも思うが、所詮男子同士、細かいことは抜き。

実入りこそ大切なのだ。

とりあえず貴史は自分のノートを手元に置き、女子連中の様子を伺った。

――今日は女子ども、誰にたかってるんだ？

予想通りというかなんというか、立村の側に女子は一人も寄り付いてこなかった。昨年からの展開を考えれば決して不思議なことでもなんでもないので、

――じゃあ、誰に英語の宿題、チェックしてもらうんだ？

冬休み中の英語宿題ときたらとんでもない分量の長文読解から始まり、文法の訳分からぬ問題集もセットされていて、しかもノートに問題からなにからすべて書き込まねばならないというややこしいものだった。文法の問題はなんとか機械的な処理で片がつくのだが、問題は長文だ。今年はずいぶんフィッシュジェラルドの「華麗なるギャツビー」ときた。正直、貴史はまったく長文なんか読んでいない。あらずじ目を通しただけで頭痛がした。ただ立村からしたらごくごく簡単な文章らしくあっさり読みきって丁寧な訳文とストーリーへの感想文も認めていたようだ。少なくとも立村レベルの認識をしている連中は三年D組内には思えない。

「はーとーば！」

脳天気な声で断ち切られた。朝から元気な下ネタ女王様の登場だ。

「よお」

「あんた、英語のノート見せたげようか？」

「いらね。もう立村からもらってるしな」

古川こずえは年末年始まったく変わらぬショートヘアのままだった。しっかり整っているところが人工的に見えた。

「あっそっか。でもそうだよ。羽飛ならそうだよ。私もさ、昨日立村んところに電話して、分からないところ確認したし、たぶん間違いないと思ったから、羽飛がもしもチェックしてなかったら見せたげようかなって思ってただけ」

「いらん。俺も決める時は決めるんだ」

相変わらず騒がしい女子だった。しばらく休み中離れていたこともあってか、今の声はそんなにざわざわとうるさく聞こえない。毎年思うのだが、なんでこずえのおしゃべりは各学期が進むにしたがって耐えがたいものになるのだろう。耳に新鮮味がなくなりマンネリ化するのか、それとももともと苦手感覚なのか、見当つかない。今はまだ、あっさり流すことができる。

「しかしなんだな、立村も毎年お勤めご苦労さんだよなあ」

「今年は少ない方じゃないの？ 女子がひとりもないし」

貴史が思ったことをこずえも突っ込んできた。

「だからかな、私のノートをみんなが奪い合いしてるのよねえ」

「はあ？」

「だから、三学期は私がさ、ほら、英語科に行くこと、みんなにばれてるじゃん？」

――そういうことか！

こずえに頷くと、滔々と語り出す。

「要するに私のノートを丸写ししても問題ないってことがわかったってことよ。今までは立村が語学のマイスターだったからしょうがなくへいこらしてたけど、今年は私がいるからまあいっか

ってこと。英語の天才ここにもいたりってね」

「自分で天才というかよ、価値落とす奴だなあ」

「大丈夫。さっきも言ったでしょが。私、ちゃんともイスタのチェックお墨付きだからさ、信頼度高いよ」

――マイスタ、なあ。

立村の、クラスメイト……男性限定……英語宿題ノートチェックはまだまだ続いている様子だった。受け取った男子たちが自分の机で消しゴムごしごししながら、指摘された部分の手直しを行っているのが妙に笑えた。

「羽飛、本当にいいの？」

「いいに決まってるだろ」

毎度恒例の光景を眺めつつ、貴史は顎が外れそうなくらいのあくびをたっぷりした。ひさびさの定時起きにまだ身体が慣れていなかった。

「よし！ 全員揃ってるな！」

相変わらずテンションの高い菱本先生は、三学期始業式仕様の背広姿で現れた。

ふだんは適当な恰好でうろうろしているけれども、やっぱり教師、決めるべき時は決めるのだ

。ネクタイがっちり締めて、ぴっと張った紺色のスーツ姿で教壇に立たれると、やはりかっこよく見える。

「先生、おっとこ前！ 昨日の夜はさぞやたっぷり？」

朝にはやはりこずえの下ネタが炸裂するのがお約束だろう。誰も驚かなくなっていることが、「慣れ」だった。

「古川、頼むから卒業前にはもっと、女子らしいこと喋るようにしてくれよな。男子たち、そりゃ引くぞ」

「あーら、ごめんあそばせ」

どう考えても担任と生徒とは思えないやりとりを二、三したのち、全員すぐに体育館での始業式へと整列した。毎度のことだが先頭は美里と立村。評議委員である以上これも変わらない。たとえ、立村が委員長から滑り落ちたとしても「評議委員」である以上決して順番が変わることはない。

――決して。

美里のことはあえて何も知らないふりをしていた。教室に入ってからまだ挨拶もしていなかった。無視したわけではないのだが、なんとなく話をするきっかけをつかめずにいた。美術館から駅前の小路をふたり手つなぎしてさまよった夕暮れ時、互いの家の前で無言のまま別れてからまだ一度も口を利いていなかった。

話せば必ず、触れたくない一点に手が伸びてしまうだろう。

できれば、目を逸らしたままでいたいその場所に。

真ん中が折れ曲がった鈴蘭優の全身ポスターを天井に貼り付けながら、貴史はあえて美里の真っ白い顔を打ち消すよう目を慣らしていた。鈴蘭優だけのんびり眺めていれば、雪の中での美里の不思議な振る舞いをあっさり埋め尽くすことができたから。単純にどうでもいいこととして片付けられたから。

――なんであいつ、五人の男連中にナンパされたがったんだろか。

そんなどうでもいいこと、知らなくてもいいことだから。

始業式式典が終わり、みな手をすり合わせつつ教室に戻ってきた。広い体育館にストーブはしっかり設置されているけれども、全員の身の回りをくるむ空気はまだまだ冷たいままだった。教室こそ極楽。三年D組こそ。

「天国！」

思わずつぶやくと隣でこずえが振り返った。

「なあによ、天国って、羽飛、まさか、あの場でいっちゃったの？」

「は？」

どうも古川こずえの言葉を自然な日本語として受け取れなくなってしまったようだ。すべてがエロ言語に翻訳されてしまう。

「おまえなあ、もう少し、女らしくするとかなあ」

「色っぽくさせてよ、もう」

――だからお前なんか勘違いしてないか？

これ以上つつこみ合うのもばかばかしくて、貴史はすぐ席に戻った。すれ違いに美里と目が合った。自然に笑いかけてきた。なんだ、なんでもないじゃないか。余計なことを考えなくても美里は自然のまま、そこにいる。

「宿題回収するぞ、それとだ、忘れないうちに言っとくが」

しばらく学期始めに関して菱本先生のお言葉が続いた後、締めに、

「三学期のメインはまず、文集作りだ。D組の三年間を凝縮したすっごい本を作るからな！ 具体的にはこれから少しずつ煮詰めていくから、みんな覚悟しろよ！ 文章だけじゃなくて写真も入れることできるなら入れるからな！」

力のない拍手がぱらぱら鳴るだけ。拍子抜けしたのか菱本先生も頼りない声で、

「なんだよ、お前らまだ休みボケか？」

つぶやいていた。

――そっか、文集ってのがあったよなあ。

実は貴史も去年の段階で、菱本先生直々のご指名でもって準備係に任命されていたはずだった。大っぴらにはされていないけれども女子担当の奈良岡彰子を中心に編集準備をしているはずだった。ただ、どたばたしてきてまったく年末年始、忘れていた事実。これから奈良岡も受験を控えている身、そろそろ貴史も動かないとまずいだろうとは思っていた。

「あのさ、ねーさんねーさん」

帰りの礼が終わり、みながばらばら去っていった中、貴史は奈良岡を捕まえた。相変わらずふくよかな大福もちパワーで女子たちと語り合っている様子だった。

「あ、羽飛くん、どうしたの？」

「文集のことだけだな」

貴史が近づくとなぜか女子たちが散らばっていく。別に、何もいちゃもんつける気はないのだが。去年の一喝が相当利いたのか。

「ねーさんそろそろ受験でくそ忙しいだろ？ 俺たちが準備するから、なんかやんねばなんねえっことあるなら言えよな。受験日、いつだ？」

「来月だけど、でも、羽飛くん、大丈夫だよ！ 私、最初から全部手伝いするつもりでいたからね！ そのくらいで受験がうまく行かないんだったら、最初から私は受けるなってことなんだって思うから、気にしないで一緒にやろうよ！」

――いいのか本当に？

すでにある程度合格の目安はついているという噂だが、それでもやはり心配と言えれば心配だ。落っこちても責任取れない。

「ねーさんのその根性はすげえと思うけどな、でもなあ」

言いかけるとおさげ髪の奈良岡は何度も髪をぶんぶん振った。

「ううん、いいよ。私、羽飛くんと一緒に最後のD組の仕事、できることがほんとううれしいんだから！」

――俺ってもてるかも？

悪い気はしない。こうやって褒めてくれりゃあ、いくらでも貴史はいろいろと応援したり手伝ったりするのになんで美里はいつもアホ扱いしやがるのだろう。

――だから美里、もう少し俺に対する態度を改めろってんだ。

説教してやりたいが、肝心要の美里はすでに教室を出て行っていた。

なんだかいるようでいない、存在感のない美里のようだった。

「あ、そうだ、羽飛くん。今から菱本先生のところに行って、文集のこともう一度相談しない？」

いきなり奈良岡が高らかに提案してきた。

「私も女子のみんなに原稿を書いてもらっているところなんだけど、やはり、改めて書くとなんとか照れくさいって人が多いみたいなんだよね。なんだかそれわかる」

「まあなあ」

修羅場なんでもありの三年間だった。思い出したくないことだってあるだろう。わかる、わかる。

貴史が思いを馳せると奈良岡は勢いづいて続けた。

「でしょでしょう。私もそれ思ってね、思いついたんだけど」

にっこり、ほっこり笑顔で、

「一年の時、班ノート、書いていたでしょ。あれを使ったらどうかなって思ったんだ」

—おい、ねーさん、なんと言った？

貴史の頭が一瞬硬直した。

忘れかけていた単語だった。

「ほら、班ノート。一年で終わってしまったけど、あれって楽しかったよね！ みんなのいろいろな面が見えておもしろくて、友達になりたい気持ちになったし。どうして二年になってからやらなくなったんだろうって思うともったいなくて。私、本当だったらもう一度やろうって提案したかったんだけど、なんとなくそれができない雰囲気だったから諦めたんだ。でもね、やっぱり、あの一年書いたノート、すごい宝物だと思う。二年のことはまだ思い出せるけど、一年の頃ってもうはるかな過去になっちゃって、あの頃の私が何考えてたんだろうってことと思うと、やっぱり懐かしいんだよね」

まくし立てる奈良岡彰子。なぜか熱い口調に貴史は思わず一步退いた。

「菱本先生もノートは保存してるって言ってたんだ。それを使って文集に仕立てたらどうかなって思うんだ。菱本先生も班ノートをつくったきっかけが、前の卒業生を送り出すためのプレゼントにしたいってことだったって！ それ、しようよ！ 私たちが私たちのプレゼント作っちゃうの。それってどう？」

—班ノートかよ……。

奈良岡彰子はどこまで気づいているのだろう。

同じD組メンバーだ。まったく知らないわけでもないだろう。

立村を巡る、学校間を飛び越えたどうしようもない出来事を。

貴史も、そして美里も知らず知らずのうちに覗き込んだ立村の忘れたい過去。

絡みついたいくつかの出来事と、今につながる因縁も。

いや、奈良岡にとっては立村よりもむしろ、クラスメートである杉浦加奈子とのからみの方が強烈なのではないだろうか。

美里以外の他女子にとってはそれが普通だ。

班ノートの他に「裏・班ノート」が存在していてそこで「本心」という名の虚構を作り上げようとし失敗し、未だその罪でずぶずぶに溺れかけている立村の存在。

奈良岡彰子は知らないのだろうか。

「けどなあ、それ、忘れたい過去かもしれねえぞ」

ためらいがちに一言つぶやいてみる。

「そりゃあな、ねーさんみたいに一年から三年まで満足してきた奴ならいいけどな、こっぴどかしい過去暴露で立ち直れぬ奴だっていないとも限らねえぞ」

「そうかなあ。隠すことが一番みっともないって思うけどなあ」

奈良岡はにっこり笑顔でかなりどす黒いことを言う。

「こちらからしたらたいしたことないのに、必死に隠して色をつけたりするから、結局恥ずかし

さが倍になるだけのような気がするんだ。羽飛くん、そんなに知られたくない過去を隠したいタイプ？ 私も、ほんとはこーんな体格だけど、それを隠したら贅肉ぶよぶよなところが丸見えだから今は、思いっきり見せちゃったりもするんだ。観たくなかったらごめんね」

「おい、見せるって？」

「たとえばね。体育の水泳の時とか」

いきなり夏の話に飛ぶ。しつこいようだが女子の話はいきなり季節を飛び越える。

「水着なんて女子としては着たくないけど、そんなこと言ってたらせっかく気持ちよく泳ぐチャンスなくしちゃうでしょ。だったら、どーんとおなかたぶたぶささせて、泳いだ方が楽しいもん。見たくないならごめんなさい、って謝っちゃうけど、でも、隠していじいじしているよりは何百倍も楽しいよ」

――それは、まあ、それとしてだ。

あえてコメントを控える部分もないわけではないが、奈良岡がなぜそこまで班ノートにこだわるのかはつかめてきた。

「だから、この機会にみんな、さらけ出してしまっただけで気持ちよくそんなことどうだっていいじゃない！って言えるチャンスを作りたいなって思ったんだ。羽飛くん、それってどうかなあ」

まったく裏のない暖かい笑顔。そこには刃なんて見当たらない。もちもちしたほっぺたと細い目と全身からほとばしるふわふわ温風。

――まあ、そりゃあそうなんだがな。

――けど、んなことしたら確実に約一名、大怪我しちまう奴がいる。低温火傷、おそらくあいつは火脹れで転がり苦しむことだろう。

「ねーさん、その案ってな、まだ誰にも言ってねえよな」

貴史は念を押した。

「うん、まだクラスの人にはね。けど」

安心したのもつかの間、奈良岡の口からは決定打が飛び出した。

「菱本先生にはお正月に手紙書いてそのこと伝えてあるんだ」

――まじかよ、おい。

実は奈良岡彰子こそ、我がクラスのジャンヌ・ダルクなんじゃないか。めまいする頭の中で貴史はひたすら考えた。

菱本先生が、そんなおいしい案に乗らないわけが絶対ない！

しかも愛しい生徒たちの中からの提案ともなればもうヒューズはとんだ。黙っていてもどういう行動取るかは手に取るようにわかる。

提案ではない。もう、D組にとっては「決定事項」。

――まあ、奈良岡の言うこともわからねえわけじゃあねえんだ。

隠し事なんてなく、気持ちよく卒業するきっかけを作りたい。その気持ちはわかる。

貴史もそう考えていたことが、つい最近まであったから。

あの、評議委員長選挙以降の展開さえなければ。たぶん素直にOKを出すことができただろう

。

しかし。

――立村、あいつあのままだとどうなる？

あと二ヶ月ちょっと。立村も静かに三学期を過ごせばそのまま卒業。その後は英語科へ直行。奴の痛み混じる過去を暴露する必要なんてない。

――けどとっくの昔にばれちゃったことでもあるんだよなあ。

それも全校生徒の前で。

「ま、俺もとにかく準備するつもりではいるんだ。全然準備できてねえけど。とにかく、俺なりにがんばるからな。ねーさんも受験終わるまではまず集中しろや。班ノートについてはそれからでも間に合うぞ。どーせ、原稿そのまんまコピーして製本するだけでいいんだろ？」

貴史の言葉に奈良岡はまたふくよかに微笑んだ。菩薩のごとく、華やかに。

三年D組卒業文集作成会議、参加者三名、ただいま討議中。

まんまるな雪がぼたぼた落ちてくる窓辺の景色をよそに、ひたすら貴史は古いノートをめくっていた。

三人が机を合わせたその真ん中に、お約束の分厚いクッキーがセットされている。

もうすでに、半分以上消化されている。ほとんど食べたのは貴史だ。しょうがない、食欲だ。

青潟大学附属中学の三学期は公立中学と比較して、かなりゆるいらしい。

「なんかさあ、付き合い悪くなっちゃうよねえ」

こずえが奈良岡彰子とふたりで、山のようなノートをめくりつつだべっている。

「私としたりさ、できるだけ小学時代の友達とも仲良くしたいわけよ。だから電話もするし誕生日にはプレゼントするし、いろいろ誘いをかけたりするんだけどね」

「うん、わかるわかる」

「みーんななしのつぶてなのよねえ。今、忙しいからの一言でがちゃん。小学校卒業してたった三年しか経ってないのにねえ。別に外でしゃべろうとまでは言わないけど、せめて家へ遊びに行くくらい許してくれたっていいじゃんねえ」

「こずえちゃんもたいへんなんだねえ」

相槌を打つ奈良岡は、しばらくこずえの愚痴に付き合っていた。丸っこい指をノートの端で留めて、じっくりこずえの顔を見つめて頷く。

「彰子ちゃんはどうなん？ 小学校の友達いっぱいいて、今でも付き合い続いでるって言ってたけどさ」

「うん、今はみんな忙しいから連絡、こちらからはしないよ」

同感しつつ、続ける。

「うちのお父さん、学校の先生しているでしょう。だから、毎日遊びに来るの。相談したいことがあるようなんだけど、いつのまにか私も仲間に入って話をして、いつのまにか一件落着いて帰っていくの」

――なんだ、全然共感してねえじゃねえか。

実は意味のかみ合わない会話だということを、古川こずえは気づいているのだろうか。

あと二ヶ月、まだ二ヶ月。

卒業までの時間はまだまだ長い。

「羽飛くん、美里ちゃんはこれから来るのかな」

いきなり貴史に話を振られた。奈良岡が自分の頬をつねりながら尋ねてきた。

「来ねえんじゃねえの？ これから評議委員会のなんたらかんたらあるとか言ってたし」

「ああ、そうだよねえ。あっちはあっちで今、すごく大変らしいしねえ」

――付き合い悪くなっちゃったのはあいつらの方だろ。

貴史はぼんやりつぶやきそうになり、慌てて留めた。

「天羽が委員長就任してから、もうしっちゃんかめっちゃんかみたいだよねえ。羽飛、聞いている？」
「評議委員会のことなんか俺に聞かれたってわかるわきゃねえだろが。古川の方こそ、美里から何にも聞いてねえのか？」

興味深そうに貴史とこずえを交互に見やる奈良岡。愛想よし。ノートを開いたまま、首を傾げている。

こずえは首を振り受け持ちのノートを閉じた。

「美里は美里であいつの子守しなくちゃなんないからねえ」

――子守、と来たかよ。

かなり失礼な言い草とは思いますが事実だから仕方ない。

「立村くんの？」

さすがに遠慮がちな声で奈良岡が尋ねた。

「そうなのよー、もう聞いてよ彰子ちゃん！ 評議委員会で委員長交代のごたごたがあったじゃん！ 天羽が委員長で、副委員長が二年の新井林でしょ、本当だったらそれだけでいいんだけど、あまりにも元評議委員長の立村がいじましいんでしかたなく書記に置いたんだって！ 顧問の先生たちもなんだそれはってあきれたらしいけど、天羽が長年の付き合いっていうか、立村の扱い方をよく知っていたこともあって押し通したんだって。ふつうないよね？ ふつうだったら書記は二年から選ぶでしょうよ。慣らしておいて、次期につなげるとか考えるでしょうよ。もう、面倒ったらないよね」

「そうしないと、いけなかったのかな」

考え込むように奈良岡がつぶやいた。

「保健委員会でも、そう、二年のみんなに受け持ってもらったほうがいいと考えていたし。みんなそうだと思っていたよ」

「そうに決まってるじゃない！ とにかく評議のみなさまは、元委員長の顔色伺いに徹して疲れ果てているとみたね。まあ立村はなーんも言わないしとりたてて文句をぶーたれるわけではないけど、なんてか、美里に言わせると存在そのものが圧力なわけよねえ。大変みたいよ」

「天羽がそんなことでせせこましいことする奴じゃあねえだろ」

適当に言い返した。こずえだから遮っただけで、内容が間違っているわけではないから否定できない。

「だからさ、難波あたりが立村を押しえつける形で進めようとしているらしいんだけど、そこらへんでまたやばい風が吹いているらしいってこと。立村もさあもう十五才なんだからもう、一人前の男子としてやることはできるんだから、もっちょっと大人になりなよって思うよねえ。羽飛、どう思う？」

――なんだその、「一人前の男子としてやることはできる」ってのは。

下ネタに反応してほしいんだろうが、貴史も三年目にしてこずえの会話対応術を心得ている。単純に無視すればよい。隣の奈良岡にはまず、根本的に伝わっていないから考えなくてよい。

「ま、あと二ヶ月だし、いいんじゃないかねえの？」

「もう二ヶ月しかないんだね」

奈良岡はノートのページをめくり、目を落とした。

「班ノートを書いていた頃って、卒業が永遠に来ないものだって思っていたんだけどな」

「どこ読んでるの？」

「一年の十月頃。みんな仲良く、友達でいられるものだと思っていたんだけど、あと二ヶ月なんだよね。ここにいられるの」

貴史は頷いた。奈良岡に対してだけだ。

「そうだな。ねーさん、あと二ヶ月だもんな」

奈良岡彰子がすでに外部高校の受験をすませ、明日の合格発表待ちということを知っていた。

この笑顔を見る限り手応えありと判断していいのだろうか。

クラスの連中が曲がりなりにも持ち上がりで附属高校に進学を決めている中で、数少ない他高校進学者。

もっとも奈良岡だけではなく水口も同じ高校に進学予定というのが妙に受ける。

「けど、美里も言ってたけど、天羽と生徒会との間でいろいろ面倒なことが起こっているみたいだよ」

初めて聞く話だ。

「なんだそれ。天羽と藤沖がか？」

「違う違う、佐賀生徒会長とよ」

生徒会長といえば、佐賀はるみ。まだ貴史の脳内では佐賀はるみイコール凜としたお姫さまイメージしか思い浮かばない。

天羽と真面目にやりとりしているという姿が思い浮かばない。

それ以前に、佐賀はるみと接したことがまったくといってない貴史には判断できない。

「ほら、これも結局は立村がらみの問題よ。立村が杉本さんをかばってやらかした一連の問題、あれをどうしてもご破算にできないんだって」

「ご破算？ なんだそりゃ。そろばんかよ」

「違うって。つまり、立村が評議委員長時代にへまやらかしたために、天羽の代に移ってからも生徒会に頭が上がらなくなってしまったってこと」

――へま、か？

首をひねりたいところだ。直接立村が貴史に話をしたところによれば、奴も今後の評議委員会の行く道を思い選んだはずだが。

「せっかく本条先輩からもらった絶対権力をなぜ手放す必要あるのよねえ。自分に自信がないならそりゃそれで個性だけども、周りの連中が迷惑するってこと もっと考えられないのかねえ。結局天羽は、今になって生徒会側と交渉中。前期委員長が譲った部分をもうちょっと返してほしいとお願いしているんだって」

「それで、生徒会側はどう言ってるんだ？」

「譲りたがったのは評議委員会側なのになんでまた元に戻せなんてわけわからないこと言うんで

すか？って即、お断り。当たり前だよ。冗談じゃあないよね」

「そりゃそうだ」

予想通りの展開と言えればそれまでだが、尻拭いする天羽の立場には密かに同情した。

――たなぼたの評議委員長殿、がんばれよ。

貴史は一枚クッキーを頬張った。腹持ちがいいのにまだ食いたくなる魔性の味だ。

こういう話を本当は立村本人から聞いたかったというのが正直なところだった。

――いくらでも聞いてやるからしゃべれよなあ。

せめて美里からでも。

一切当事者からはコメントがもらえず、ワンクッション置いてこずえから情報をもらうというのがどうも貴史には解せない。

「ねーさんはどうなんだよ、保健委員三年続けてきてやり残したことなんてねえの？」

つつい奈良岡一人に話題を振りたくなくなってしまうのは、無意識からか。貴史が頭を片手で支えて頬杖をつくとき、斜め前のこずえも鏡のようなポーズを取った。

「うーんと、委員会では、ないよ」

「じゃあ青大附中卒業を前に、何か、ああこれやるときゃあなあとかそういうのはねえの？」

考え込み、またノートに目を落としていた。指で何度か○を書いた。

「あれ、彰子ちゃん、何か後悔したことあるの？ 気になるなあ、何、それ」

「後悔はしてないんだけどね。ただ、そうだね、あるかも」

少し口ごもりつつ、それでもやわらかく、

「卒業式までに、しておきたいことは確かにあるな。羽飛くんは？」

見事に隣のこずえを無視して返球してきている。お見事、お見事。貴史も答えざるを得ない。

「ま、めんどくせえことは卒業前に片付けておきてえよな。たとえばこの班ノートとかだ」

ざっと十冊ほど。山積みになるかと思ったがそうでもなかった。菱本先生の許可を得て借りてきた一年時の班ノートだが、書き込み分量が多いわりには冊数が少なかった。先生もその後いろいろ思うところあったのか、二年以降生徒たちに書き込みを強制しなくなった。たぶん、奈良岡が物好きなことを思いつかねばお蔵入り状態だったろう。それがよかったのか悪かったのか、貴史にはわからない。

「ねーさんが言ってた通り、白黒はっきりつけるってことで文集に班ノートのネタを載せるのも、ま、ひとつの方法だろな」

「そうだよね。ずっと隠し事してきてもいつかははっきりばれてしまうんだから、卒業前にスッキリさせたいよね」

「そりゃそうだけど、でも人によっちゃあ、んなことしたくねえぜってこともあるぞ」

――あ、そうだ、本日の俺のお題はこれじゃねえか。

すっかり忘れていた。あえて今、文集係として奈良岡を呼び出したのには訳がある。

不思議そうに、ほっこり笑顔で見つめ返してくるまんまるお姫さまに貴史は姿勢を正した。

「文集に載せると言う前提で一通り読み返したんだけどな。載せていいとことまづいところがあると正直思ったんだ」

「どこ？」

「単刀直入に言っちゃうと、特に十月から十一月のそこ。ああ、ねーさんの手元のノート。それだ」

奈良岡が返事をする前に、ひったくったのは隣のこずえだった。

「あ、これねえ。美里が書いた猫のイラストつき。エグザンプルとか書いてるよ」

「古川は黙ってる。ま、それなんだよな、ねーさん」

奈良岡には話してもらいたかったが、黙ってほしい奴がしゃべり出した。

「え、ああ、そういうことかあ。羽飛、立村と加奈子ちゃんとのドンパチについて言ってる？」

「だから、お前がしゃべんなって言ってるだろが！」

察しのよすぎる女子はだから面倒だ。しかたなくクッキーを求めて手を伸ばすがすでに空だった。

「つまり、羽飛としては立村の立場があまりにも悲惨なこの状況において、傷に塩をもみ込むようなことはやめた方がいいんでないのってこと、言いたいわけ？」

あっさり一文にまとめられてしまうと言葉も空気を囓むようでうまく出てこない。

「ま、結論としたらそういうことなんだ。ねーさん、この前話していた通り、確かに俺も、卒業前に本音をぶちまけてすっきりしたほうがいいんでないかってのは賛成なんだよなあ。正直、ストレスたまってるしなあ。だから俺の文章を暴露してもらうのはおおいに結構。なんだけどな」

ここで言葉を切った。ちらと立村の机に目をやった。

「ただ、どうしても班ノートを書いていた一年の秋から冬ってのは、一部の人間にとっては地獄だったのも事実かなと」

「ああそうだよな。立村と加奈子ちゃんにとってはね」

奈良岡は黙っていた。頷かず神妙に聞き入っていた。

「どっちにしてもまずは、文集にのっける許可をもらわねえとまづいだろ」

「そうだけど」

困った風に奈良岡が答える。貴史は畳み掛けた。

「けど、中には思い出したくねえ奴もいる。古川が言う通り、杉浦と立村あたりは、あと」

「美里も、思い出したくないだろうねえ」

今度は貴史が口ごもった。そうなのだ。言わないでよいと判断したから飛ばした。なのにこずえが余計なことをしやがった。

「羽飛、つまりこういうこと？ 立村が今のところ存在感ゼロ状態でふらふらしているところにいきなり過去の話を引っ張り出されてパニックになったら、ろくなことにならないよって言いたいわけ？」

——だから、お前にんなこと言われてくねーんだよ！

そうなのだ。

こずえの言う通り、奈良岡に伝えたいことはその一文ですべて完了するのだ。

単純明快、これが一番、それもわかる。

理解できても、止まってしまうのはなぜなのか。

「羽飛くん、すごいな」

蛍光灯がしっかりと教室を照らしている。隅から隅まで、掃除し忘れた綿ぼこりまで浮き上がらせる。

全く予想外の言葉にがっかり見返すと、奈良岡はやんわりとした笑みを浮かべて貴史に頷いていた。

「立村くんのことを心配しているんだね」

「んなわけじゃあねえけどな、余計なごたごたに巻き込まれてくねえし」

「そんなことないよ。羽飛くんは友達思いなんだよね」

奈良岡のいきなり褒め褒め攻撃には慣れているつもりだったが、やはり不意を突かれるときよっとする。

「私も、できればみんな仲良く卒業したいと思ってるんだ。こずえちゃんも、羽飛くんもみんなそう思っているでしょう？」

「人間関係が崩壊したままってのはそりゃ避けたいよね」

こずえも素直に答えている。奈良岡は次に首を振った。

「でもね、このままだと今度は美里ちゃんが大変なことになると思うんだ」

「美里が？」

貴史とこずえの声が露骨に重なった。ずらしたい。言葉を畳み掛けた。

「なんでだよ。美里は別に」

「二年の半ばくらいから今までずっと、美里ちゃん、なんとなく孤立しちゃっているように見えるんだ」

「美里のどこがだよ」

しらばっくれつつ貴史は問い続けた。こずえが黙って首をひねっている。

「美里ちゃんは真面目で一生懸命だし、男子たちとは仲良くしていただけるからいいけど、どうも誤解されてしまっているみたいなんだよね」

「うーん、いきなり美里のことでちょっと私も頭混乱してるんだけど、どういうこと？」

「うまく言えないんだけど」

奈良岡は貴史に向かい、微笑みをひっこめて呼びかけた。

「羽飛くんは立村くんよりも美里ちゃんがこれからどうなってしまうかを考えた方がいいと思うんだ。このまま何もしないでいると、美里ちゃんだけが全部背負い込むことになっちゃいそうなんだよね。それがすごく気になる」

「あのさねーさん、それと班ノートの件とどうつながるんだ？」

「わかりづらくってごめんね。説明下手なんだ。私、美里ちゃんがどうしても、自分らしくいら

れなくなっちゃってるんじゃないかなって、そればかり気になっちゃうんだよね」

——自分らしく？ あいついつも通りぎゃあぎゃあやってるじゃあねえか。

「特に、修学旅行終わってから、美里ちゃんすべてのことを飲み込んでがまんしているように見えるな。立村くんのお付き合いのことだけじゃなくって、いろいろなこと。評議委員会のこととか、クラスのこととか。一生懸命伝えようとしてくれてるんだけど、空回りしているような感じ」

「空回りってのは、鋭いね」

こずえが褒めた。

「美里はそういうところあるよね。ひとりでいつも突っ走って結局怒られてるんだよなあ」

「そう、いつも損ばかりしているように、私には見える。こずえちゃんもそう思った？」

——損したいんだからじゃあねえだろ、あいつの選択だ。

「でも、みんなが誤解していたことを少しでも解くことができれば、きっと仲良く卒業式を迎えることができるって私は信じてる。そのきっかけを作りたいんだけど、そうなるとうちでも立村くんとのことに触れなくちゃいけないなって」

「たとえば？」

「美里ちゃんと加奈子ちゃんが仲悪くなってしまった理由と、できたら仲直り。できたらいいな」

さすがにこればかりはこずえと目を合わさざるを得なかった。

「ん、ん？ つまり彰子ちゃんは美里と加奈子ちゃんを前みたいに仲良くさせたいってこと？ それは無理だよいくらなんでも」

「俺もそう思う」

どこが班ノートの件とつながるのかわけがわからなかったが、まずは共通の意見を奈良岡に伝えるしかない。

「そうかなあ？ 少なくとも加奈子ちゃんは美里ちゃんと元の友達に戻りたがっているよ。きっと美里ちゃんは立村くんをかばっていざこざが起きちゃったんだろうけど、もう本当のことがはっきりしてしまったら無理に意地を張る必要もないと思うんだ。今、女子のみんなが美里ちゃんから距離を取っている理由は加奈子ちゃんとの大喧嘩がきっかけだと思う。加奈子ちゃんとい関係に戻ることができれば、きっと、大丈夫」

またふくよかな笑みを浮かべる奈良岡彰子に、貴史は返す言葉を失った。

——事実関係、知らねえんだよな。クラスの連中はみな立村が杉浦に横恋慕して振られて逆恨みただけだと思ってるだろうし、美里が見るに見かねて付き合いかけたって思い込んでいるだろうしな。そうさせることでうまくやってきたってのもまあ事実だしな。けど、んなこと今更ばれたらどうすんだ？

「ねーさん、そのこと、まさかと思うが菱本先生には言ってないよなあ」

もし伝わっていたらアウトだ。祈るのみ。奈良岡彰子は首を振った。

「これから羽飛く人と一緒に話にいこうと思っていたところ！」

—やばかった。首はつながった。

まずは奈良岡がどこまで事実関係を知っているかを確認してから、話を進めた方がよさそうだ

。

幸か不幸かそばには美里の数少ない友人のこずえもいる。

美里に直接話をする時間を稼ぐことにした。

貴史はひとつ、提案した。

「ねーさん、俺もよくわからねえんだけどさ、女子は美里のことをどんな奴だと思ってるんだろな。あいつの性格からして絶対にやりたくないことはしねえよ。もしあいつが杉浦と仲直りなんぞしたくねえって言うんだったら俺は放っておくけど」

「美里ちゃんは絶対に自分からは言わないと思うよ。だから、そのきっかけを文集で作りたいの」

堂々巡り。まだ続きそう。どうしよう。

文集作りのため菱本先生から呼び出され、

「羽飛、知っての通りだ。文集編集委員会開くぞ！」

職員室に入るやいなや、即机の前まで引っ張ってこられた。周囲にはぞろぞろ生徒がうごめいている中だというのに、全く気にしない。人のことなんかかまっちゃあいられないとばかり、通路ど真ん中を歩くよう言われた。

「けど、奈良岡は？」

「ああ、奈良岡は受験があるから終わってから本格始動してもらおうとして、まずはお前らが引っ張ってもらおう形になるが、覚悟はいいな？ 鈴蘭優のコンサートの予定なんかないよな？ ないな？」

「ねえけど」

菱本先生は高らかに笑い転げた。何をそう舞い上がっているのだろう。

「じゃあ、はじめろ。このままだと奈良岡がラストスパートおっぽり出して文集作りに熱中してしまうからなあ。それはまずい」

——言いたいことはわかるけどな。

三年D組の隠れたジャンヌ・ダルク、奈良岡彰子。

密かに貴史は「超注意人物」と赤丸つけている女子だ。

——いい奴なんだけどなあ。

いい奴同士がうまくいくとは限らない。貴史にとってのもうひとり「いい奴」とはそりが合わない可能性だって、多大にある。

「まあ、こっち座れ」

菱本先生の机まわりには社会科の教科書「歴史」「地理」および図書館で借りてきたであろう大量の歴史書が堆く積み重ねられていた。「フランス革命」「ワーテルローの戦い」「マリー・アントワネット」などなど名前は知っているが歴史のテスト問題に答えとして書き込む程度の興味しかない内容だった。

パイプ椅子を先生の真っ正面に引き寄せ、まずは座るよう指示する。言われた通り腰かける。

「奈良岡にも話したんだがな。過去の班ノートから自分たちの話をプリントアウトし、その上で全員に現在の自分がそれを読んでどう思うかを作文で書いてもらう。これを今、考えているんだ。おもしろいだろう？」

「こっぱずかしいったらねえ」

舌打ちしながら貴史は答えた。とりあえずはイエスの答えをせねばならないだろうとは思っている。

奈良岡彰子から今回の文集企画についての概要を聞いてからというものの、毎日立村の顔を見て挨拶するのがしんどかった。

——まだ俺が詳しいこと聞かされてるわけじゃあねえし、奴に話すこともねえよな。

「俺はかまわねえけど、他の奴は怒るんじゃあねえかなあ」

やんわりと話を持ち出してみる。

「一年の頃なんて、悪いけど思い出したくねえって奴もたくさんいるし。ま、うちの組は退学者とかいないしその点はよかったのかもしれないねえけどさ。やっぱり若気の至りってのかなあ、なんか忘れたい過去ってものを突きつけられるのも、なあ。俺は一年から現在までずっと優ちゃんのファンだってことはかわりねえけど」

くっくと笑ってみる。菱本先生もつられて笑っている。

「お前はほんと、成長しないというかなんというか、変わらないなあ。裏表ない」

「けど、やっぱり中には、あの頃の自分なんか二度と思い出したくないって奴もいると思うんだ」

話を切り替えてみる。

「たとえばさ、勘違いして誰かをいじめていた奴がさ、あとでうわあってパニックになっちゃって反省しているってパターンだってあるかもしれないし、前付き合っていた彼女の話ばかり書いていた奴が実は気持ちおもいきり冷めていたとかさ。いろいろあるぞ、三年間。だから先生、俺としたらそれは開けてびっくり玉手箱状態のどひんしゆく買いそうな気がするんだよなあ」

以上の二例、すべて実際起きた出来事である。はたして菱本先生がそこまで認識しているかどうかは謎である。

椅子の後ろを通りすぎる狩野先生がちらりと貴史を見やり、去った。

菱本先生は珍しく黙って話を聞いていた。手元のコンパクト歴史辞典のようなものを指先でいじりながら、それでも貴史から目を離さなかった。

他の先生たちがうろついている机まわりから、菱本先生の席は孤立しているように見えた。誰も寄ってこない。職員室には二十人以上人がうろついているのに、貴史と菱本先生との個人面談状態でプライバシーは完全保たれてしまっている状態だ。盗み聞き、不可。

「羽飛。なぜあえて俺が、一年の班ノートなんかひっぱり出したのかわかるか？」

「唯一残っている歴史資料だからだろ？」

少なくとも貴史の記憶する限り、D組連中で二年以降文集、ましてや班ノートなんかこしらえたことはない。

「一年の時に班ノート巡っていろいろごたごたあったし、それでやめたんだろ？」

「そうだ。あの時はそうせざるを得なかったんだ」

「そうせざるを得なかった」を菱本先生はやたらとアクセント強くつぶやいた。

「お前なら当時の状況をよく理解しているだろう？ 宿泊研修やら学校祭やらいろいろイベントが始まるたびにかならず何かかしらトラブルが起こったことをな」

「ドラマチックD組だよなあ。俺は好きだぜ」

ちょっと気取って言ってみる。菱本先生は無視しやがった。

「もちろんいろいろあってこそその青春だ。俺も人のことは言えない。ガキの頃はかなりやんちゃ

やらかしたもんだ。でもな、一步間違うといじめの温床になる可能性がないとも限らない。そういった地雷みたいなものは羽飛、どうだ、あつただろ？」

「地雷だらけ。今だってそうじゃねえか」

――立村にしる奈良岡にしる、美里にしる。

「あと二ヶ月ちょっとでこの賑やかなD組ともおさらばとなるわけだが、正直、みな、いろいろ腹にたまっているものがあるんじゃないのか？　そういう気がどうもするんだよなあ。特に最近のお前ら見ているとそう思うぞ」

「お前らって、俺？」

自分の鼻を指差してみる。ちょこっとだけ、凶星だ。

「そうだよ、羽飛、毎日ご苦労さん。鈴蘭優の歌聞いてエネルギー補充するだけでは間に合わんだろ、ほんとに」

「人生そりゃあいろいろあるけどさ、先生、それと文集とどう関係あるわけなんだ？　俺にはちっともわからねえ」

気づかないふりをするのも大義だが仕方ない。

――まあな。世話の焼ける友達ばっか持ってたならそりゃあやつれるだろ。

立村にしてもしかり、美里にしてもしかり。

要はあの二人が仲良くしてくれりゃあ、すべては丸くおさまるはずなのだ。

現に今もこうやって貴史が孤軍奮闘し、菱本先生と交渉しているのだから。

――お前のせいだぞ、立村。あとでカツ丼おごれよ。

「班ノートが残っていた時期がお前ら一年の頃というのはその通りだがな。ただお前も考えてみる。つい最近の情けない思い出振り返ってため息つくよか、二年前の出来事を懐かしく思い返した方が冷静になれないか？」

「俺は冷静すぎるほど冷静だけだな：

「羽飛みたいに一本筋の通った奴ならともかくとして、当時の子どもじみた言動ばかりしていた奴がいつのまにかいっばしの先輩ヅラするようになり、やがて卒業を迎えるというわけだ。そりゃあみな、成長してるぞ。大人になってるぞ。いや、妙な意味じゃなくてな。いろいろ自分たちでものごとを考えられるようになったし、さらに言うなら責任をきっちり取ることができるようになった。これは大きい。他の中学の生徒たちから比べてもお前らはほんと大人に見えるぞ」

――そりゃ、先生の例の恋愛沙汰見せつけられたら、いやでも生徒は大人になるわな。

突っ込みたいが、自分に酔っている菱本先生にそれはできない。もちろん素面でも無理だ。

「でもな、そこまで大人になれたのはどうしてだろう？　わかるか？　羽飛？」

「わからねえ」

「みっともない、なっさけない、そんな自分が土台にいたからだよ。わかるか？」

「わからねえなあ」

菱本先生が珍しく「教師」の仮面で語り出す。完全にトリップしている。こういう時は黙っているに限る。幸せなんだ。

「きっとお前らはあの頃の青臭い自分なんて死んじゃったっていい、忘れてくれって思っているだろうな。もちろんその気持ちは本音だろう。でもな」

また「でもな」を繰り返す。

「試行錯誤してきた道のりは決して恥じるものじゃないんだ。間違いは人間誰でもある。特にお前らみたいな思春期を突っ走っている連中は間違えなければならぬ理由がたくさんあるんだ。そりゃひどく傷ついたことだってあるだろうがそれはそれで男の勲章、あ、女も勲章だな。むしろ本当に恥じるべきは過去の傷に目を背けたまま知らない振りをしつづけてきて、後でひどいしっぺ返しを受けた時のことだ。そうだろう？」

「そう、かあ？」

おぼろげに菱本先生の言いたいことは伝わってきた。

いや、これはもろ、露骨にそれだろう。

――てか先生、これって、もろ立村のことじゃあねえのか？

やっぱり立村を吊るし上げるための文集企画と誤解されても文句は言えないだろう。

これはまずい。

菱本先生の口ぶりからすると悪意なんてみじんもないが、例のごとく「善意の悪意」ほどたまったもんじゃないとは立村の本音でもある。

最後の最後の最後までこれでは先が思いやられる。

貴史もこのままだと、今はまだふさふさしている脳天の髪の毛が抜けてしまいそうだ。

「先生、あのさあ、単刀直入に聞くけど、それ立村のことだろ？」

一呼吸置きまた語り出そうとする菱本先生を遮り、貴史は尋ねた。

「まだ誰のこととも言ってないぞ」

「わかりきってるっこと言うなよなあ。まあいいけど」

貴史はしばらく様子を伺いつつ、周囲に聞き耳立てている奴がいないことだけ確かめ、声を低めた。特に狩野先生がいないことを最重点に確認した。

「はっきり言って立村の過去は真っ黒だっただけ俺もわかってるし、奴が今いろんなところからしっぺ返しを受けていることも知ってる。先生ももちろん気づいてねえわけねえだろうし。あ、そっかあ。先生前言ってたよな。あいつの立場がひっくり返るかもしれないとかなんとかさ。聞き流してたけどもしかして先生さ、あの評議委員長選挙の大どんでん返しについて、結構早い段階で情報もらってたとか？ 超千里眼だよなあ」

まずは言いたいことを一気に述べた。次に、

「先生の言う通り、立村も早い段階で過去さっさと振り返っちまえば肝心要のところまで一年の女子なんかには暴露されることもなかっただろうしなあ。どっちにしても俺たち高校も同じ青淵附属

だから、似たようなことが繰り返されねえとも限らねえし。ほら、歴史はまた繰り返すっていうじゃん」

「フランス革命」の本を指差した。

「だから先生がさっさと清算しちゃった方がいいと言うのは俺も賛成なんだ。俺もどっちにしろ立村とは差しで話をするつもりだし」

「お前、そうか、その覚悟は」

「あるよ。あたりまえじゃん」

菱本先生は目をまん丸くして貴史を見た。前に身を乗り出した。

「そうか、やはりそう考えてたか」

「けど、文集を通してってのは悪いけど俺は反対なんだ」

「なんでだ？」

「まず、一年の頃の班ノートについてだけど、立村以外の女子たちとの間でいろいろ面倒なことがあってさ。先生は知らんかもしれねえけど、なんというかややこしいことがたくさんあったんだよな。今のところは立村が杉浦を横恋慕してしつこく追っかけ回してそれでトラブルになっちゃまったってことになってるけど」

「ああ、そんなことあったな」

鼻で微かに笑っている。どうも菱本先生はあの事件を勘違いしたままでいるらしい。貴史は強調すべく続けた。

「俺たちの間ではある程度真実が行き渡っているし立村も無事評議委員のままでいられたけどな、でも実際あの時何が起こったのか真相を追求なんてしちゃったら、立村以外の女子たちが犠牲になるっていうのもあるんだ。俺もこれ以上は言えんけどな」

「清坂、か？」

貴史は首を振った。

「美里だったらこんなかばわねえよ。あいつ、放っといても大丈夫だし。それよか他の女子連中に火の粉が飛んだらそりゃもう大変なことになるぞ。高校にエスカレーターで行っちゃう俺たちのことだし、これからどうなるかわからねえしさ。立村はどっちにせよ英語科に行っちゃうからいいけど、普通科でまたわけのわからねえトラブルに巻き込まれたらもう、負の遺産じゃあねえ？」

一気にまくし立てた。

「だからさ、俺の意見としてはまず、文集委員が班ノートの記事の中からよさげなものを改めて選び出して、それを本にまとめると。やはりやばい内容ってのもたくさんあるしそこらへんをうまく選んでいって、あとで寄せ書き形式で、菱本先生のいう過去の反省っぽいことを書き込んでいくってのはどうかって思うんだ」

「寄せ書きか？」

そこだ。貴史は畳み掛けた。三日間考え尽くした結果の提案だ。さあどうだ！

「そりゃ作文書けと言われてたら書くけど俺たちそんなことで本音吐いたりしねえよ。悪いけどそ

こんとこは先生もわかってるだろ。立村は日本語よりも英語で書く方が好きかもしれないし、金沢は文章よりも絵を書きたいだろうし、ひとそれぞれ思い出語りするにはそれなりのスタイルがあると思うんだ。だらだらかしこまったことを書くよりも、むしろ本人の書きたいことを見開き二頁くらいになんでもありで書いてもらい、『懐かしの思い出コーナー』のところに班ノートをとところどころ切り貼りして、それで書いた奴に今の心境を一言二言で書いてもらう、これの方がおもしろえと思うよ。どうかな先生」

班ノートを使わないという選択肢はまずない。

一年の過去を無理やり振り返るといふ、立村にとってはほとんどリンチに近いやり方をできるだけやんわりしたものに切り替えるにはおそらくこれがベストだろう。

やたらとはりきっている奈良岡彰子が受験のためしばらく席を空けるのなら、今、もうひとりの代表である貴史がぶちぎるしかない。

少なくとも、最悪の事態は避けられるはずだ。

菱本先生は唇を少しふるわせながら貴史の話をじっと聞いていた。

「羽飛、その案、自分で考えたのか？」

「当たり前だろ」

「もうほぼ完璧なスケジューリングじゃないか」

「そりゃあ、そんならできなくちゃあ、卒業なんてできねえだろ？」

「もったいないな」

――はあ？ また言うのかよ。いい加減鈴蘭優に熱あげるのはやめて勉強しろってか？

頷き菱本先生は貴史の手を軽く握った。

「そこまで言うなら承知した。羽飛、お前のやりたいやり方で文集、作り上げてみる。文集作りの具体的な作業については相談に乗るからな。今回はお前が編集長として三年D組の花道を飾ってくれ！」

――やたらと大げさだよなあ。まあいっか。なんとかこれで丸め込めたかってとこで、さあ次だ！

まずは文集計画最大の難関・菱本先生の熱冷ましを成功させることができたというわけだ。

次は仲間を固めて、編集方向を完璧貴史メインに持っていく、ここだ。

――奈良岡が離れるのはかなりラッキーだ。あとは美里と金沢あたりを引き込むか。

気心知れた連中なら、まかり間違っても「裏班ノート事件」に関わる場所を文集内にぶち込むことはないだろう。

特に美里なら、決して。

文集準備は万端のはずだったが予定変更が多すぎた。まず、奈良岡彰子の出番の件だが、菱本先生との話ではてっきり受験終了までひっこんでいてもらうはずと聞いていた。

貴史もそのつもりで予定を組んでいた。しかし、
「羽飛くん、心配してくれたんだね、ありがと！ でも、文集作りの手伝いができないほど追い詰められてないから大丈夫だよ！」

——そうしてもらおうと困るなんて言えねえしなあ。

目を輝かせてふっくらほっぺとお腹をふるわせて微笑む奈良岡に、貴史も感謝するふりをするしかなかった。

もともとは立村の関わっている一件を闇に葬るための計画だけに、本当だったら奈良岡の受験勉強期間中に形を拵えておきたかったのだ。

原稿をさっさと片付けたのちに、製本作業だけ奈良岡に手伝わせればそれで完了とも思っていた。

「班ノートのことだけど、先生もぜひ使おうよって話に乗ってたんだ！ だから、とことん凝ろうよ。そうだ、今度私のうちでみんなで編集会議やらない？ 美里ちゃんやこずえちゃんもいっしょに」

「いや、おめーさんの受験勉強の邪魔になっちゃうだろ」

なんとかその場は逃れた。バターのくっきり効いたクッキーに食指は動くが、男の矜持たるものいかによってとこだ。

もうひとつ予定外だったのは、古川こずえが不参加ということだった。

あの性格のこずえが自分から身を引くわけがない。菱本先生からの命令だ。

「あーあ。私だって羽飛と一緒に文集作りしたいよー！」

聞こえよがしに叫ばれてしまった。仕方ないので理由を尋ねると、

「だってあんた、この前さ、菱本先生に呼ばれて、文集作りなどのイベントに今回参加禁止とか言われちゃったんだもんね。ふざけんなって感じだよ」

菱本先生にしては珍しい。生徒の自主性を伸ばしたい発想の教師じゃなかったか？ そうっこみたい。

「だよねだよね！ 私だってそう思うよ。けどさ、頭来るじゃん！ 英語科進学予定の生徒の中で私が最低点なんだってさ」

「最低点だろうがお前、受かっただろが」

貴史が首をひねると、こずえも大きく頷いた。

「入っちゃえばこっちのもんじゃんねえ。けどさ、菱本先生が言うには、高校に上がってから苦勞する前に今の段階で力をつけておかないとだめだとかおっさん臭く説教すんのよ！ 英語の先生に頼んで特別にドリルどっさり渡されてさ、これを毎週解けとか言われるんだよ！ しかも」

言葉を切った。

「あんまりすごい量だったんでね、立村捕まえて半分やらせて提出したのよね。ずるいとか思ってるだろうけど、ほんと、ありえない分量なんだからね。大学ノート半分使うんだよ。そしてたら即、その場で私ひとり残されて確認の小テストやらされたってわけ。たった一人でなんでって思うよね」

「まあなあ」

英語科進学の中にもいろいろ苦労があるのだろう。まあ貴史の場合、ひとり突き抜けた語学の秀才を基準として考えているのだから、その他の生徒たちがどういう状況下に置かれているかは想像できない。立村は涼しい顔してそれらの教材を片付けているんだろう。

「立村と比較してどうするってのさ！ あいつは大学で今でも特別授業受けてるじゃん！ 私らはなーんもそんなことして来なかったんだよ！ それがいきなり特別ワンツーマンレッスン受けるはめになってもう大変！ ワンツーマンで初体験手取り足取りって感じじゃん？ 相手がもっとうっふんあっはんする相手だったらまだいいけどさ、中年のおっさん先生に心なんかときめかないってさ！」

完全に勘違いしている気がするが、こずえの言葉はあっさり流すが勝ちだ。

――奈良岡の相手をしてもらえれば助かったんだがなあ、まあしゃあねえか。

ただこのあたりはまだなんとか貴史がふんばってやりくりできそうな範疇の問題だった。

男子代表、徹底してリーダーシップを意識し、とことんひっぱって行ってこっちの勝ちに持っていく。そのくらいならなんとかかなりそうだ。しかし。

一番の予定外とは。

――立村とまだ話、できてねえし。

A組の教室で美里とふたり、立村のしょんぼりした姿を見下ろした日からだいぶ立つが、なかなか差しで話をするタイミングがつかめなかった。

――まあああいうことありゃあ、避けられるのもしかたねえわな。

美里が延々と立村を叱りつけていたあの日以来、休み時間に奴を見かけることがとんとなくなった。

もちろん学校には来ている。授業も出ている。ただ、フリータイムというところで捕まらないのだ。

体育の着替えとか技術の授業とかそれなりに男子同士でつるむ場面もないわけではないのだが、その時はしっかり貴史が話すことを失念している。

そんなこんなの繰り返しでもうすでに一ヶ月以上経ちつつある三学期の冬だった。

変わっているようで変わっていない。雪は膝下くらいまでつもり雪かきの必要な朝が続くこの頃だけど、貴史も立村も自転車での通学を諦めていない。やたらときしむ音と滑りやすい道が危なっかしいが、卒業式までこのペースを変える気はさらさらなかった。

雪崩は突然襲ってきた。節分終わってすぐの昼休みだった。

「羽飛くん！」

本当にこいつは受験生なのかとつっこみたくなるような軽いのりで、奈良岡彰子が声をかけてきた。

「今日の放課後なんだけど、一気に文集をまとめようと思うんだ。羽飛くんも一緒にいいかな？」

「――おい、ちょっと待てよ。俺たちまだなんもやっちゃあいねえだろ！ 準備段階だろが！ 文句を言おうとした貴史をまんまる笑顔で押さえ込みつつ、奈良岡は自分の手提げ袋を軽く叩いた。

「先生から班ノート預かってきたんだ！ 全部昨日の夜のうちに読みきったんだ。ある程度この内容を使いたいなってことがまとまったんで、一刻も早く羽飛ぶくんにも利いてもらいたかったんだ」

「俺、に？」

ようやく一言返すと奈良岡は頷いた。

「うん。私も最初、全員の思い出話とかそういう内容でいいかなと思ったんだけど、やっぱりこれはきっちりとまとめないとまずいよねって結論に達しちゃった。きっと羽飛くんならわかってくれるんじゃないかな」

ずいぶん回りくどい言い方である。

「悪い、ねーさん、結論から言ってくれねえか」

「この前話したことと同じなんだけどね」

ふんわり笑顔で、奈良岡彰子は留めを刺した。

「立村くんと加奈子ちゃんのことをこの機会にきっちりけりつけたいんだ」

――それだけはやめろって言ってただろが。

とうとう来た。貴史の苦手な根回しをしまくり、うまく自分が引っ張りまわせる状態に持ち込んだはずなのに、いとも簡単に奈良岡は突き破ってくる。

「この前言ってたよなあ」

とぼけてみる。

「そう、ちょっと、生徒玄関のところで話していい？」

それには賛成だ。立村はもちろん美里にも聞かれたくはない。

手首をがっちり握られ、奈良岡は貴史を廊下へ引きずって行った。本人はきっと「連れていった」程度の認識しかないのだろうが、その握力たるや、本当に手錠としか言いようがない。すれ違う他クラスの連中が奇妙な顔でふたりを覗き込む。ラブラブカップルとは誰も思っていないだろうしそれが救いではある。ただ、露骨に南雲とすれ違い、

「あきよくーん！」

などと呼びかけるのはちょっとどうかと思う。いったいこのふたりはどういうつながりなのだろう。仮面の熱々カップルなのかそれとも別の何かなのか。

「あれから美里ちゃんともじっくり考えたんだけどね」

いつから「あれから」なのかはわからないが、ポケットに手を突っ込んだまま話を聞いた。

「美里とか」

「うん、文集の話が出てから美里ちゃんにも相談してたんだけどね」

——おいおいなんだよ。美里に話してねえって言ってなかったかよ。

「やっぱり私は、ここで白黒はっきりつけたほうがいいと思ったんだ」

「何をだよ」

「つまり、立村さんと加奈子ちゃんとのけんかが原因でクラスの中がおかしくなっちゃったってことを、きちんと整理したほうがいいなって思ったんだ」「美里はなんて言ってた？」

まだ計画段階だし美里にはまだ伝えていなかった。それがまずかったのだろう。先手、打たれまくりだ。

「美里ちゃんは立村くんが誤解されたままだっていつも言ってるんだよね。それはそうなのかもしれないけど、私たちは事情説明されてないから全然わからないんだ。てか、うーん、誤解じゃないと思うところもあるんだよね」

「なんだそりゃあ？」

わざと軽く鼻で笑って見る。

「そりゃ、立村くんはいい人だし真面目だしクラスのために一生懸命だったと思う。それは認めるよ。でも、実際やったきたことを考えると、クラスの子たちが立村くんを嫌ってしまう理由もわかるんだよね」

「嫌いって、お前もか？」

奈良岡はあっさり答えた。

「嫌いじゃなくて、苦手なんだ。話をしている、どうしてもつながらなくなる人だよね」

——お互い様つつうことだよな。

表に出ない天敵なわけだ。

そこまで奈良岡はほわほわした笑顔で続けた。

「羽飛くんもわかっていると思うけど、うちのクラスの子たちはどうしても立村くんを評議委員として認めたくないって気持ちが強いんだよね。これ、一年の頃からものすごく強くて、美里ちゃんとかずえちゃんだけが一生懸命かばってきたんだ。けど、かえってそれが。ほら、この前話した通りなんだけど」

「悪い、もっかい言ってくれ」

「美里ちゃん、嫌われちゃってるところがあるんだよね。立村くんの影響でいつのまにか、仲間外れにされることが多くて、心配なんだ」

貴史はロビーの椅子に目を向けた。雪の混じった風が生徒玄関の三和土に吹き込み煙をたてている。猛吹雪の時間帯に当たったらしい。

「あいつがかよ」

「そうなんだ。美里ちゃん、体育の時も、家庭科の時も、男子たちがいない時は私とかずえちゃんと一緒にいるんだ。けど」

頬が真っ赤に染まっている。りんご状態。そうとう寒いにも関わらず言葉は熱い。

「こずえちゃんはみんなと仲いいからどうしてもあちこちでひっぱりだこ。私も、いつも美里ちゃんのそばにいるわけにはいなくて、気がつくと端っこでひとりぼっちで立ってるんだ。女子同士の時だけなんだけど」

「それっていわゆるいじめって奴だろ、けど美里はなんも言わねえぞ」

「評議委員のみんながいた頃はよかったけど、今、小春ちゃんもゆいちゃんもああいう状態だし、轟さんは、あまり美里ちゃんと仲良くないし」

そりゃあそうだろう。自分の彼氏にちょっかいかけた女子なんだ。ライバル意識めらめらだろう。奈良岡はそのことを知っているのだろうか。

初めて聞く話ではない。だがあえて今頃持ち出す話でもないような気がする。

「私、はじめにこの話を立村くんのために考えたつもりだったんだよね。立村くんがこのまま誤解されたまま卒業してしまうんだったらどうなのかなとか思ったから。でも、男子の場合かえって迷惑になっちゃうんだってあきよくんとかにも言われたし、何もしないでおいたほうがいいのかなって思ってたんだ」

「それでいいじゃねえの」

気がない風に答えた。いきなり両肩をがっちり押さえつけられた。膝ががっくりきそう。両足踏ん張る。重たい。

大福姫のほっぺたが目の前に接近してくる。

「けどね、美里ちゃんがこのまま誤解されて卒業することだけはいやだって思ったんだ。美里ちゃんは立村ちゃんと仲良く、でも私たちにはどうして一緒にいたいのかわからない。立村くんだって二年の子を加奈子ちゃんの時みたいに追いかけている状態だし、みんな早く別れればいいのにと思っているところがあるんだ。」

否定できないので黙る。ものすごい圧迫感。しかも妙な匂いがする。

「この前も話したけど、やっぱり私、美里ちゃんのために何かをしなくちゃいけないなって思ったんだ。こずえちゃんは放っておけばいいって言ってるけど、だめだよみんな仲良く卒業しなくちゃ！」

「わかった、わかったからちょっと、手、外してもらえねえか」

――状況最悪じゃあねえかよ。予定変更どころの騒ぎじゃあねえ！

確かに美里が仲間外れ状態というのは、少し前に奈良岡からも聞いた。

驚かなかったとは言わない。

ただ、当の本人が平気な顔して流しているから何とかやっていくだろうと思っていた。

男子の目が届かない場所での状況は一層悪化していたということだろうか。

こずえや奈良岡がこまめにフォローをしていたとしても、それでも面倒見きれないこともあるということか。

「けどなあ、それと文集とは違うだろ」

「だから、この機会を生かしたいんだよね！ 羽飛くん、協力してほしいんだ！」

「ああ？」

再び、今度は手だけではなく指先にまでがっちり力込めて肩を押しえられた。もう動けない。「菱本先生は今回の文集作りを羽飛くんに任せるって言ってたんだ。私は受験勉強に専念してからでいいって。でも、この一瞬にも美里ちゃんはひとりで苦しんでいるんだよね。美里ちゃんのせいじゃなくて、たまたま立村くんと付き合っているからって理由で」

「いやそれだけじゃあねえだろ」

ぶんぶん首を振る奈良岡、そのおさげ髪が貴史のほおをピンタする。

「立村くんが誤解されてるきっかけって、一年の秋に加奈子ちゃんを追いかけて回したことがきっかけだよね？」

「ああでも、あれはほんっとの誤解であって」

言いかけた言葉をまたおさげ髪で叩き落とされた。

「男子のみんなはわかっていることかもしれないけど、女子のみんなにはちっとも伝わってないよ。ううん、もちろん羽飛くんやあきよくんが一生懸命フォローしてたことは知ってるよ。でも、友だちだからかばっているだけだってみんな思ってる。だから信じてないんだよ！」

「そりゃあまあそうだな」

そんなわかりきったことをなぜ奈良岡はつっこみ続けるのだろうか。とにかく重い、痛い、臭すぎる。

「問題の根っこはきっと、あの事件にあると私、確信したんだ！ 班ノート一気に読み直してやっとわかったよ。立村くんは加奈子ちゃんのことを好きになったのはいいけれども、その時に自分がいじめられていたことを知ってごまかそうとして嘘で塗り固めて、でもそれがばれちゃって、みんなに軽蔑されちゃったって。一言で言えばそういうことだよな？」

「それ美里から聞いたのか？」

「ちょびっとだけ。でも、加奈子ちゃんからも詳しい話を聞いたし、たぶんそれが本当だと思う」

——オーマイゴット！

もう打つ手はなし。頭を抱えて叫びたい。

まったくもって事実では、あるのだ。

「立村が杉浦加奈子に横恋慕した」ところだけは嘘だが、それ以外は事実なのだから。しかもそれがあっさりばれてしまったという顛末まで、なぜか奈良岡は見破っている。「事実なんだからそれはそれでいいだろ。今更ひっぱり出さねくたって」

「いや、だからこそもう一度はつきりさせるべきなんだって私、思うんだ！」

完全に奈良岡の指はホールド状態。誰も助けてくれやしない。完全硬直状態の貴史はただ見据えるだけだ。

「だから羽飛くん、協力してほしいんだ。私、美里ちゃんのために、立村くんがかつてしてきたことを反省して、先生にもみんなにも謝って、それから再出発を 図ってもらうことが一番だと思

うんだ。A組の片岡くんのように。そうすれば、まず立村くんのことをきちんと水に流すことができるし、その後で美里ちゃんも前に進んでいけるよ。美里ちゃんきっと、立村くんをかばわなくちゃって気持ちでいっぱいだから、あんなにひどいことされても我慢してられるんだよ！

でも、きっと美里ちゃんがきっちり現実を見つめていけば、きっと、ちゃんと」

「別れるだろって、言いたいんかよ」

言葉を止めた。さすがに迷ったらしいが、

「でも、きっと、今まで通りの笑顔がいっぱいの美里ちゃんに戻ることができるはずなんだよ！

羽飛くんだって美里ちゃんになってももらいたいよね？ 幼なじみなんだから当然だよな！」

「あのなあねーさん、熱く語るのありがたいんだけどな、それ美里に言ったのかよ。あいつなら絶対、そんなことさせないって言い切るだろうが」

貴史はようやく反撃しようとした。美里がそんなに哀れまれたがるわけがない。

甘かった。首を振ったのは奈良岡だった。承知しているとばかりに。

「美里ちゃんに言ったら止められるから、だから、だから、だから！ 羽飛くんを協力してほしいんだ私！」

「俺が何しろっていうんだよ」

「立村くんに今までのことをきちんとクラスメートの前で話をするように説得してほしいんだ。そこはやはり、男子の羽飛くんしかできないよ、女子の言うことには耳を貸さなくても親友の羽飛くんの言葉ならきっとくれるよ。美里ちゃんのためにも、そうしてほしいよ」

こんな展開なんて求めていなかった。

女子がからむとろくなことにはならない。

貴史が男子同士の話し合いでけりをつけるつもりだった一件を、奈良岡は「美里のために」という正義でもって掘り起こそうとしている。

しかも、貴史が美里の幼なじみという事実すら突きつけるわけだ。

「無視したいんだったら無視させときゃいいだろ！ 立村だってそうしてほしいだろうが」

「立村くんはそれでいいかもしれないけれど、美里ちゃんが」

「美里だっかがきじゃあねえんだから、自分のことはきっちりするだろ！ ねーさんお前過保護過ぎだぞ、そんなことに首つつこんでる暇があるんだったら自分の勉強しろよ、受験まであと何日なんだ？」

「美里ちゃんのためだったら落ちてもいいよ。このままぎくしゃくしたまま美里ちゃんが卒業しなくちゃいけなくなるよりはそれの方がずっといいよ！」

――嗚呼麗しき友情なんかくそったれ！

貴史は肩から手を振り払った。

「悪いが俺はその話、乗れねえよ。立村だっがあいつなりに覚悟してやったことなんだ。ただでさえあいつの今がどん底だっつことくらいねーさんお前もわかるだろ？ 評議委員長から引きずり下ろされて、いるかいないか状態でうろうろしていて、休み時間なんか全然顔なんか見やしねえ。そんな状態のあいつをこれ以上たたきのめして何が楽しいっていうんだ？」

「羽飛くんだってわかってるはずだよ。立村くんは、羽飛くんを親友だって思っていないってこと。みんな、女子の目には丸わかりなんだよ」

奈良岡は食い下がった。

「余計なお世話だっつうの！」

再び両手を押さえつけられた。

――相撲かよ。

「つまり立村くんは、美里ちゃんのこと、羽飛くんのこと、信じてないんだってこと、外から見てたらわかるよ。もし友だちだったら辛い時こそ羽飛くんに相談したはずだよ。でも、顔見たくないって、二年E組に駆け込んでいるだけでしょう？　ずっと、二年のあの子に張り付いているだけでしょう？」

「野郎同士ではべたべた友情ごっこなんかやらねえんだよ！」

「ううん、違うよ、逃げてるのは羽飛くんだよ！　羽飛くんは立村くんからずっと無視されているのに無理やり親友にして、それで仲間に入れてあげてるだけだよ。本当はそれこそ小学校時代のようにいじめられている可能性があるからってことでかばってるんだよね？　これも美里ちゃんと一緒にだよ。でも美里ちゃんとおなじく羽飛ぶくんはいろんなチャンスをなくしてる」

「はあ？　なんだそりゃ。言い方によったらぶんぐるぞ！」

「羽飛くんになら殴られたっていいよ。本当は評議委員になるべき人は羽飛くんだったとか、本当はずっと目立ってよかったのに立村くんに合わせて結局帰宅部だったとか。私たちみな、女子たちみな、わかってるんだよ。立村くんのしでかしたことの後始末をずっと羽飛くんと美里ちゃんがしつづけていて、それがとうとうほころんできているんだってことをね。みんなおかしいおかしい、けどどうしたらいいかわからないって。だから」

「うっせえ！　黙れ！　もう近づくんじゃねえ！」

全力で手を払った。殴らなかったのは貴史なりのレディーファーストそれだけだ。野郎だったらその場で一発お見舞いしてやっている。

――何が？　何が、俺が無視されてる？

休み時間終了の鐘が鳴った。同時に後ろの扉から三年D組の教室に入ろうとする立村を見かけた。

前の扉に手をかけた貴史と目が合った。無視された。

――俺と美里が立村の尻拭いばかりしているとだと？　勝手に決めつけるんじゃあねえ！

心で叫んだ。心臓に届かず、喉ですっと溶けたようだった。

——超昔のこと引っ張り出すんじゃないよ。

高校進学に向けてのプリントをめくる手も重たい。周囲で女子たちがけたたましく笑っているのを、貴史は聞き流しながらシャープの芯をつつき続けた。

——結局あれは杉浦側の仕掛けだろが。ったく、奈良岡何考えてるんだかなあ。

少し奈良岡彰子にはきつく言い過ぎた。あとで「すまねえ」の一言くらいは伝えるつもりだ。たぶん奈良岡もあの性格だったらさらっと流すだろう。そのあたりは心配していなかった。

気がかりなのは、その後だ。

——どっちにせよもう班ノートを何とかせにゃあなんねえしな。

立村がぼつんと背を向けて、ひたすらプリントと格闘している。少なくとも数学ではないからうなってはいいだろう。古典の和歌がつつらと並んでいるだけだから。

まずは斜め後ろの奈良岡彰子に振り返り、さっきメモした紙くずをそのまま渡した。

さすがに気まずそうだったが、受け取って開いた瞬間笑顔全開で返してくれた。

「悪い、後でな」

「ありがとう」

——やっぱ、早く謝るべきところは謝っておかねばなあ。

反面教師たる立村を見やりながら、貴史は改めてプリントに向かった。

杉浦加奈子のからんだある事件とは。中学一年秋から冬にかけての出来事だった。

あの頃はまだ、貴史と美里、そして立村がのどかにクラスで生息していたはずだった。特段何かバトルが繰り広げられたわけでもない。同級生同士の自然な友達付き合いであり、まだ美里も立村に対して恋愛感情をあらわにすることはなかったような気がする。

それでもやはり、一緒にすごしていればそれなりに感じるところもある。

特に美里に対しては、ふつうと違う振る舞いや口調などがびんびんと伝わってくることもある。たぶんこの頃から貴史は、美里が立村に対して特別な感情を持っていたんでないかと認識していたと思う。もともと入学当初の段階で、貴史は立村を評議委員として即、推薦し美里とセットでひな壇に並べようと策を弄していたのだ。無意識とはいえ、やはり立村と美里はそれなりに相性が合うと判断していたのだろう。

結果、六月に美里の方から行動を起こし現在に至る。

よかったのか悪かったのか、正直判断に苦しむところもないわけじゃあない。

ただ、ふたりがいわゆる「恋人同士」として見られるようになり、貴史も自然にそれと合ったつながりでもって接するようになった。立村に対しては「親友」として、美里に対しては「世話の焼ける妹」として。

そこから先のさまざまな出来事は、ぶっ千切れることも多々あったとはいえ、それなりになん

とか乗り切ってきたつもりだった。思わず手が出てしまい立村を張っ倒したこともある。いきなり縁を切られたこともある。さっきのように同じ教室にいながら即、無視されたこともある、思い出せば数限りない記憶が溢れてくる。

——けど、その前からかよ。問題ってのは。

奈良岡とはすぐに仲直りできた。紙くずの中に「ごめん。許してくんろ」の一言を忍ばせるだけであっさり片付いた。しかし、立村はどうだろう。文字だけで反応するだろうか。

——あいつが俺のことを最初から親友だと思ってなかった、だと？

わからない。少なくとも立村の振る舞いは、貴史にとって「親しい友達」以上の何者でもなかったし、美里に対してもそれは同じだった。奈良岡の言うような「心を開いていない」ところはなんとなく感じるにしても、男子だったらそれは普通だろうとも思う。そうぐちゃぐちゃ女子みたいに恋愛話に対してかじりついたりしないものなのだ。

ふと、杉浦加奈子の姿を探してみる。

クラスの男子連中からは一切存在を無視されている存在だった。

理由はわかっている。杉浦が中学一年秋から冬にかけて、立村の過去を捏造して吹きまくり、名誉をずたずたにした挙句女子からの評判を落とさせたという卑劣極まりない行動をしたからだだった。

この点貴史もかかわっているので即、断言可能な内容だ。

もっとも起因は立村側にあり、奴のやらかした小学校卒業時決闘事件の相手がたまたま杉浦加奈子の交際相手だったという究極の偶然がもたらしたものとも言える。見かけによらずいぶんませた小学生同士とも思うが、貴史にそれをとやかく言う資格などない。

偶然同じクラスに因縁の相手がいて、うらまれてもしょうがないことを立村がやらかし、憤った杉浦加奈子が嘔み付いて謝罪を要求した。これだけならまだ杉浦側に肩入れできる。しかしその後が問題だった。立村がその出来事自体を覆い隠すために行った小細工があからさまとなり、結局は貴史と美里との手助けでもって事なきを得たというわけだった。

——事なきを得た、のか？

立村が死に物狂いで隠そうとした「小学校卒業式後の決闘事件」は杉浦加奈子経由で美里に伝わった。貴史が推測するに、杉浦は美里を慕っていたからこそ、あえて馬鹿野郎の立村とくっついてほしくない一心での助言だったのではと思う。もっとも美里はすでに立村の過去をしっかりと把握し、しかも覚悟もしっかり持っていたため即、その助言を却下した。もしかしたら一発二発びんた食らわせたかもしれない。その後美里と杉浦との間には氷河が形成され今に至る。友達としての交流は一切ないはずだ。

もっともここまでなら男子連中が無視するところまでは行き着かない。女子同士の小競り合いなんて誰がかかわるもんかと思いきり無視でよろしい。

——事実だけじゃあねえもんな。俺たちがぶちぎれたのはな。

ふわふわした髪がかわいらしいと、一部の男子が目をつけていたとも聞いた。外見は霧島ゆい

ほどではないにしろ、「幼げ」「ロリコン好み」な雰囲気ではあるだろう。おちょぼ口にふんわりした空気をまとっている。足首がきゅっと締まっている。何も知らなければひとりかふたり、熱を上げていても不思議はない女子だった。

——立村が杉浦を追い掛け回しているなんて噂立てられたからな。

杉浦との関係が決裂してから一週間くらい経った後、いきなり立村が菱本先生に呼び出された。詳しいことはよくわからない。立村も口を堅く閉ざしていた。ただし情報は本人ではなく他クラス方面……主にC組ライン……から怒涛のごとく流れ出した。

「あのさ、立村が秋頃から加奈子ちゃんを追い掛け回しているんだって？」

一言でまとめるとそんな感じだ。つまり立村が杉浦加奈子に横恋慕してしつこく交際を迫ったらしいとの噂が全クラスに広まった。たまたま一年だったため立村も評議委員以外の肩書きがなかった、それが幸いだった。立村の顔を学年すべての生徒が覚えるわけもなく、いつのまにか立ち消えになったはずだった。

実際は全くそんなことなどない。これも時間経過によって証明されていった。一番わかりやすい結論が、中学二年の段階で美里と交際開始したことだろう。貴史もかなり細かく立村の言動を観察したつもりだが、杉浦加奈子を捕まえて口説き落とそうなどとした形跡は一切なかった。第一、美里がそんなことあろうもんならすぐ気がついて、貴史に泣きつくはずだ。もちろんそんなことはない。

ただ、立村の天敵・菱本先生が余計な手回しをしていろいろと世話を焼いたのがかえって混乱を生じたいらしい。おそらく事情聴取程度の内容だとは思っているのだが、「担任に恋愛沙汰の件で職員室に呼び出され詰問された」内容がずらずらと流出すると、「それは事実なのでは？」と一発判子が押されてしまう。「大人」がかかると「子ども」の押すことできない証明印が残されてしまうわけだった。

なぜそんな噂が流れたのか？

なぜ、立村が否定しているのにその噂が今だ女子の間で消えないのか？

男子たちには早い段階で貴史なりに「んなわけねーだろ。あいつ、しゃべれる女子何人いる？せいぜい美里か古川だろ。無理無理、そんな度胸ねーよ」の一言で誤解を解いておいたが、どうも女子には通じなかったようだ。もちろんクラスの男子たちも最初は半信半疑だったが、やはり同性、互いの性格や言動は見聞きしているのだから「まーありえないだろ」とあっさり納得した。しかし女子については、美里もかなりがんばって火消しに回ったけれどもくすぶりは収まらないままだったらしい。その件を境に立村のイメージががた落ちし、「昼行灯の癖にスケベ」だとかなんとか陰口をたたかれるようになったわけだった。今だに美里に対しても「立村なんかと付き合うなんてよっぽど清坂さん趣味悪いのね」とつつこまれているのは、その後遺症なんだろう。

——野郎連中はあいつの性格を三年間見てきているから、疑うことなんてないわけだわな。けど女子は。

貴史はもう一度立村の背に目を向けた。プリントの端を三角に追って塗りつぶしてみた。

——奈良岡のねーさんも、まだあいつを疑っているんだわな。

美里がかなりつらい思いをしていると、奈良岡は確かに言った。

——裏・班ノートに関して、事情を把握してないんだなきっと。

立村がクラスで生き延びようとして作り上げた幻の過去。しかし、杉浦加奈子によって「真実」を突きつけられてしまい、結果として女子たちからの軽蔑を向けられるはめとなってしまった。失ったものは多い。だがその代わり、全力で味方になろうとする友達とも出会えたはずだ。たとえば自分、貴史とか。美里とか、評議連中の野郎どもとか、本条先輩とか、いやクラスメートたちも男子のほぼすべて、立村を嫌っていないんじゃないかと思う。女子だって所詮半分しかいないのだ。その辺切り捨てておいても別に不都合はないだろう。

——そうだよねーさん、そういうことだよ。

無理に班ノートの過去をひっぱりだして、クラスメートのまん前で立村に土下座させる必要が正直貴史には感じられない。そりゃあ、美里はしんどいだろう。さんざん振り回され、二年E組にまわされた杉浦へのジェラシーにひくひくしているのだから。女子たちからは男子の趣味を疑われたり、立村のしでかしたへまを尻拭いたりとにかく動き回らざるを得ない。でもそれは、美里が好んでしていることなのだ。彼氏彼女でなかったとしても、その下に敷き詰められている「友情」というものをあつためる形でするする動いているだけだ。美里は純粹に、やりたくてやっているだけなのだ。

それ以上貴史は考えなかった。とにかく、今すべきことは奈良岡彰子の過激活動を全力で阻止すること以外ない。奴と話をするのはその後だ。

——あいつが俺のことを友達でないなんて、だあれが。

「ねえねえ、羽飛、やっぱし私も混ぜてもらえないわけ？」

鐘が鳴り半分しか手をつけていないプリントを提出した。立村と美里がそれぞれ回収していた。評議心たりが教室を出た段階でこずえが話しかけてきた。

「何にだよ」

「そりゃあさ、クラス文集委員によ」

「菱本先生のお許しがあればな、勝手にすりゃあいいのに」

すでにこの件については貴史も菱本先生から聞いている。古川こずえがなんとしてもクラス文集委員にもぐりこみたがっていることを知らないわけではないのだ。

「だってさ、ずるいじゃん。あと一ヶ月しかないんだよ。三年D組の貴重な共同作業になんで私が混ぜてもらえないのさ」

「んで、菱本先生なんか言ってただろ」

「あー、あつたま来るよね。あんた知ってるじゃん」

で、机の下から股間に手を伸ばそうとする。避けられずぎよっとする。

「悪い、お前ここはさすがに聖なる教室なんだわ、エロチックタイムはべつんところでやれや」

「どうせ私は英語科進学するから死に物狂いで英語の補習受けなつていうんだよね。ああむかつ

くよね。そりゃあさ、私はぎりぎりだったみたいだよ。よくぞめぐりこめた奇跡だ奇跡だって、内部進学決まった時は菱本先生からサイダーで乾杯されたもんね。けどさ、それとこれとは別じゃん！ 本当は彰子ちゃんの方が休むべきじゃん？」

「俺もそれはそう思う。古川、お前止めてやってくれ」

「だーれが止めますかって！ あんたさ、私のこと思いっきり避けたがってない？ うっさい私が寄り付かなくて死ぬほどラッキーとか思ってるでしょが。ああやだやだ。私と美里がいれば男子のやる仕事なんてほとんどなくなって楽できちゃうのにねえ」

「誰も女子に仕事押し付けてらくちんなんかしたかあねえよ」

「やあだねえ、ちんちんしなよ、ほーらちんちん！」

二度目は避ける。再度伸びてきた手を今度は筆箱ではたいてやる。

「あのな古川、お前にはもっとやることあるだろう。たとえばほら、クラスの女子どものご機嫌を取って無事に一日を終わらせるとか、美里がぎゃあぎゃあヒステリーかますのを黙って聞いてやるとかな」

「ああ悪いけどそれ、私の方でとっくにやってることだし。それでも余裕で時間あるからお手伝いさせてよねえ。美里もそのあたり、話してくれないのかなあ」

美里が親友の古川と一緒に引きずり込みたい気持ちなしというのは少し考えづらい。

せっかくなので聞いてみた。

「で、美里は何ってってるんだ？」

「美里？ あの子はねえ、高校でまた会える私よりも、今生の別れとなるやもしれぬ彰子ちゃんと一緒に仕事したいんだってさ。軽く見られたもんよねえ。ったく！」

美里も結構きついことを言うものだ。あれだけ古川にべったり甘えていたくせに、いきなり奈良岡に切り替えるとは。いや、たまたまだろう。立村から聞いたところによると英語科は想像以上にハードな環境らしいとのことだから、これも一種の思いやりではないだろうか。

「けどさ、文集っていったい何やるつもりなん？」

「トップシークレットっての」

今のところ「班ノート」を利用する案についてはこずえに話す気がない。状況によってはこずえの手を借りねばならない可能性もゼロではないが、できればまるく収めたい。貴史なりに今は、古川よりも奈良岡の暴走を止めるほうが先決だと考えていた。

それに、

——古川ももしかしたら、立村と杉浦の一件を誤解しっぱなしって可能性も大だし。

一応は美里の親友なのだから、細かい内容は聞いているだろう。しかしこいつも女子だし、なによりも「噂」レベルの内容だから確証もって違うとは言い切れないだろう。立村を軽蔑していないだけで、「困った弟のやらかした過去」程度の認識を持っている可能性は高い。

「ふうん、金沢が燃えてたけどね。クラス全員の顔写生するって、めちゃくちゃ熱心に修学旅行の写真かき集めてたけど」

「まあ、それはD組の義務だろ」

このくらいならばれても問題ないだろう。本当は菱本先生のお祝い時に用意する予定のものだ

ったのだから。

「作文の案内するんだったら早めにしてよね。ネタ集めるの大変なんだからさ」

「集めるってか、ネタだらけだし選ぶのが、だろが」

「さっすが羽飛、話が早いわ」

正直、こずえに付き合っている暇は全くないのだ。このままだと奈良岡は本気で立村をつるし上げる可能性がある。美里を守り、杉浦加奈子の名誉を回復し、立村を「立ち直らせる」ためという正論でもってだが、断言してもいい。立村の性格上絶対にそれはありえない。卒業までE組に逃げ込んで戻ってこないんじゃないかとすら思う。

こずえを追っ払った後、貴史は美里を呼び止めた。プリントを国語の先生に届けた後、美里だけが戻ってきていた。当然立村はどこにもいない。

「あのな美里」

「なによ」

「今日の放課後、文集委員会やるぞ。お前残るだろ」

周囲で聞き耳立てているような気がして振り返った。奈良岡が笑顔満点でうなづいていた。美里も気づいたのかうなづき返した後、

「うん、いいよ。けどさ」

「ああ？」

小声でささやきかけてきた。

「あれ、使うんだよね」

「元ネタのことか」

露骨に「班ノート」とは言わなかった。

「いろいろとまずくない？」

「しゃあねえだろ」

貴史はうなづいたあとで首を振りなおした。

「何とかするしかねえし」

「そうだね。あんた、覚悟あるんだね」

——はあ？ 覚悟？

唇をきゅっと結び、もう一度美里は「覚悟」とだけ繰り返した。ブレザーのカフスをひょいとつまんで教室隅に引っ張り込んだ。

「おいおいなんだよお前さ」

「まだ、話してないよね、元ネタのこと。あの人に」

同時に後ろの扉から立村が戻ってきた。貴史と美里にちらりと目を向けたがすぐに自分の席へと戻った。南雲とカセットテープを交換しあっていて、貴史と美里の会話には関心もっていなさそうだった。

「彰子ちゃんのこともそうなんだけど、これから修羅場になるかもね」

「はあ、なんだそりゃ」

耳元につま先立ちし、美里が耳に吹き込んだ言葉。

「貴史、納得いかなかったらとことん言いたいこと言いなよ。けど、急所狙いと拳固だけは絶対にやめてよ。それさえなければ、私、あんたのやりたいようにやらせるから」

「何様だよ、そのやらせるってなあ」

美里は表情をこわばらせたまま、片手を振って自分の席に戻った。

——ってことはだ。美里も、奈良岡のたくらみを把握してるつつうことか。

急所と拳固だけは避ける。つまり手は出すな。そういうことだろう。

拳固を振り上げる相手が誰かとなると、ひとりしかいない。

——けどなあ、美里はどこまでわかっているんだよ。

本当はそこを確認すべきだった。美里なりに奈良岡が立村に対して怒りをもっていることはわかっているのだろう。だが美里の性格上、「立村のために自分が大損している」とかそういう話を受け入れられるだろうか。美里は立村を……仮に別れたとしても……縁を切る気はさらさらはないはずだ。とことんほれ抜いていることは承知している。

さらに言うなら、杉浦加奈子と仲直りなどといった寝ぼけた言葉も美里が受け入れるとは思えない。いったい何を持って美里は「やりたいようにやらせる」と言い切ったのだろうか。わからない。

次の授業は数学だった。狩野先生が他の先生たちと同じく大量のプリントを抱えてきた。起立、礼の後立村がプリントを配り始めた。自分の机を飛ばして五枚ずつ机の上に乗せた。立村の机には狩野先生が別のプリントを直接おいていた。

「わあ、また誰でもわかる問題渡してるんだよ。ひいきだよな」

さすがに狩野先生には気づかれないように声を低めて、女子たちがささやいている。

美里は一切制することなどなかった。

——まずは放課後だな。なんてったって、ひゃー。霧の中な一んも見えねえよ。

道徳の時間に読んだ「霧の中」の一節を思わずネタにしていまいたくなかった。ドイツの作家さん、ごめんなさいとだけ言っておいた。

ぐだぐだしているうちになんとか五時間目も終了した。放課後の始まりだ。菱本先生もしっかり声をかけて職員室へ向かった。

「それじゃこれから文集会議やるか。奈良岡、お前は適当なところで帰れよ」

「はい」

手揚げからよしよしとノートを取り出し始めた奈良岡を、貴史は呼び止めた。

「ねーさんちょっと、いいか」

「どうしたの」

「ちょいと」

改めて謝っておいたほうがよさそうだ。貴史は無理やり奈良岡彰子を廊下に余に出した。

「美里、お前机を少し整えとけ。すぐ始められるようにな」

「わかったやっつく」

あっさりとしてOKし、美里はひとりで机を向かい合わせにくっつけ始めた。

廊下は少しひんやりしていた。改めて頭を下げた。

「わりいな、少し俺も言い過ぎた」

「ううんいいよ。羽飛くんならわかってくれると思ってたんだ」

明らかに勘違いしている様子だった。奈良岡はおそらく貴史が全面協力の上、立村の説得に立ち合ってくれるもんだと思っているに違いない。

「いや、それとこれとはちょっと違うけどな。ただまあ、俺も説明すればよかったよな」

奈良岡は力瘤を片手で作るようなかっこうをし、。

「でも、羽飛くんが反対しても、私はするつもりなんだ」

「何をだよ」

とぼけてみた。まずは相手の出方を知りたかった。

「立村くんに、話すこと。きっと立村くんも、美里ちゃんのことを思えばわかってくれると思うんだ。さっきの羽飛くんみたいにね」

自信まんまんに言い放つ奈良岡彰子に、貴史は少しぞっとするものを感じた。

今まで接していてあまり思ったことがなかったので戸惑いもある。

「ねーさん、どういうことだよそれ」

すれ違う誰も邪魔してこない。みなただ自然にすれ違うだけだ。

「だって美里ちゃん、あのままだとずっと他の子たちにばかにされっぱなしで、つらそうだよ。立村くんも、きっとあんな美里ちゃん見るのつらいと思うんだ」

「あのさ、ねーさん、ひとつ聞きたいんだがな」

まずは探りを入れてみた。

「美里はどう言ってるんだよ。あいつの性格からして絶対に、立村売るようなことしねえよ」

あまり「売る」なんていい表現じゃないが、使ってはみた。

「うーん、そうだよねえ。美里ちゃんは立村くんを大切に思っているからそうだよね。私もそこまでデリカシーのないこと言いたくないよ。さっき話したのはね、羽飛くんだからなんだ。美里ちゃんをもっともっと大切にしているから、あえてね」

顔いっぱいの微笑みを浮かべて奈良岡は続けた。

「美里ちゃんには、立村くんにもう一度クラスのみんなど仲良くするチャンスを作りたいって思ったって伝えたんだ。迷ってたみたいだけど、最後には賛成してくれたよ。やはり大切な人だよね」

ここの下りがどうも、わざとらしく聞こえたのは気のせいかな。もともと奈良岡は立村のことを「苦手」と言い放っていたのではないかな。美里には似合わないし貴史のことを親友ともきって思っていないんじゃないかとまで、名誉毀損っぽいこと口走っていたんじゃないかな。あやまりはしておいたが、やはりひっかかりは捨てられない。

「ってことはだ。美里にはあいつと杉浦のことを暴露しろとは伝えてないのか」

当然、といった風に奈良岡はうなづいた。立ち止まり、お下げを揺らした。

「そうだよ。美里ちゃんきつと、加奈子ちゃんと仲直りしたいけど自分から言うつもりなさそうでもん。でもそれをしなかったらきつと、他の子たちは許せないと思うし、かならず通らなくちゃいけないとこだと思うんだよね。たぶん話の流れで加奈子ちゃんのことにも触れると思うし、美里ちゃんもつらいと思うけど、でもね、羽飛くん」

ここでいきなり奈良岡は貴史の両肩に手をかけた。えらく分厚い。熱さを感じる。

「だからこそ私、羽飛くんをお願いしたかったんだ！ 美里ちゃんと加奈子ちゃんのことを仲裁できるのって、羽飛だけだもん。こずえちゃんもいるけど、今は英語の補習があるしそちらを優先させてあげたいし」

「お前さんも受験最優先にした方がいいんじゃないかねえの」

またぶんぶんとお下げを振った。

「私のことはどうでもいいんだ！ もう、美里ちゃんを悪役にして卒業させたくないんだもん。立村くんもそれさえ理解してくれれば、きつと、耐えてくれるはずだよ」

——んなわけ、ねえよ。ああもうこりゃだめだ。

この時点で貴史は奈良岡の説得をあきらめた。勝ち目はない。

奈良岡がここまで頑固だとは思っていなかった。

女子として数少ない「話のわかる奴」とは思っていたが、しかしここまで自分の意思を押し通そうとするとは想像すらしていなかった。いったい女子たちは奈良岡の性格をどこまで理解しているのだろうか。いつものあんまん姫と思っ込んでいるのだろうか。

——美里も、いや南雲も。

本当ならば貴史は奈良岡に班ノートの件についてなんとか立村をからめることはやめてほしいと頼み込むつもりだった。しかしもう無駄だ。奈良岡の原動力には「美里を救いたい」という天使のような思い込みがあり、誰も正論を覆せない。しかも貴史はその美里すら気づいていない「

杉浦加奈子との友情回復」をもお おせつかっているというわけだ。

事実を知ってしまえば、奈良岡もそこまで残酷なことは言わないだろうと思う。

杉浦加奈子が立村を変態扱いして信用を貶めたという事実を否定はできない。

男子たちもそのことは了承済みなのだ。

よって、立村が頭を下げて仲間に入れてもらいたがるなんてことは絶対にありえない。むしろ何で謝りたがるか、というところ一点で立ち止まるだろう。

——けど、それじゃあなぜ美里は、あんなこと言ったんだ？

戸を開ける寸前に貴史は奈良岡をもう一度呼び止めた。

「ねーさん、悪い、ひとつ頼みなんだけどな」

にっこり微笑んだ奈良岡に、貴史は小声でささやきかけた。

「できれば俺の方から切り出したいんだが、どうだ？」

「羽飛くん！」

「けど俺も、やること優先順位がそれなりにあるからなあ。立村がもしいて、話を聞いてくれそうだったらそんなときに声かけようや」

「うん、わかった！」

いきなり奈良岡は貴史の手を両手で包み握り締めた。指がやはりふっくらして、がっちり手錠をかけられたような感触があった。

「ありがとう！ がんばろうね！」

——これでなんとか、あいつがさっさと消えてくれれば、なんとか。

教室に戻ると立村はまだ教室にいた。

——さっさと帰れっての！

かばんに教科書を詰めているのだが、どうもこずえにつかまって身動き取れないらしい。こちらにも声が聞こえてくる。

「さあさ、早く始めようよ」

すでに班ノートが机いっぱい広がっていた。美里と奈良岡がぱさぱさとページをめくり始めている。

「そっか、班ノートだよね。抜粋だよね。そうだよ」

心なしか美里の声は棒読みに聞こえる。

「一年の時、ほんと楽しかったよねえ。ね、玉城さん？」

「うん、そうだね、一番楽しかったかも」

いつのまにか文集とは関係のない女子たちが奈良岡を囲んで思い出話に盛り上がっている。

「ほら、初めての遠足の時、みんなでグスベリ摘んで食べまくったよね」

「うん、洗わないで食べてたよね。よくおなかこわさなかったよなって思うよ」

「それから合唱コンクール、ほんと燃えたよね。羽飛がひとりでおっきな声出してて思いっきり調子外れてやんの、笑っちゃった！」

非常に失礼なことを言われているので言い返してやる。

「ざけんなよ、俺だってクラス優勝狙ってたんだ」

「とうとう優勝できなかったうちのクラス、寂しいよねえ。あ、そうだからこれだこれだ」

美里は蚊帳の外、ひたすら班ノートのページをめくり続けていた。自分の班は「エグザンプル」といういわゆる「手本」を意味する名前だった。結局どこが手本なのか謎なままの一年で、班ノートの使命も一年こっきりだったが、今読み返すと結構笑えるものが多い。

「あ、これさ、私描いたんだよね」

「どーら」

美里から手渡され、ぱらぱら見返す。

「違う、表紙だよ、この猫」

「イラスト専門だもんなお前」

ちくり、と音がするようだ。

「中読んだか」

「まあね」

「じゃあとりあえず、何を載せるか選ぶとするか」

「そうだね。この日付以外だったらどれでもいいよ」

奈良岡彰子の目を盗み、美里は静かに貴史の下へメモをよこした。

「……そういうことな」

——十一月十四日前後の日記はすべて排除。

◇

十一月十四日 班ノート 立村 上総

誰にも言いたくない過去はあるだろう。いじめで自殺した中学生の話を聞きながら、いろいろ考えたことがある。

僕の経験したことに多少似ていたからだ。

理由はわからないが僕はずっと「いじめられっこ」といわれる人間だったと思う。そんなに人より目立つようなことはしなかったし、むしろ引っ込み思案だったんじゃないだろうか。でも、されたことは、例の中学生とほとんど変わらなかった。

特に四年生の頃は、何度も死のうと思った。

五年生の時は、学校に毎日、出刃包丁を持っていった。

六年生の時は、あぶなく人を殺しそうになった。

追い詰められると、何をしでかすかわからないと、その時感じた。

でも僕はまだ救われていた。中学は青大附中に行くことになっていたし、過去のことを気にしないで友達になってくれる同級生がたくさんいた。

過去を振り捨てることができたと思う。

でも自殺した中学生の場合、小学校から高校までずっと、加害者の同級生と顔をあわせていなくてはいけぬ。十二年間いじめられ続けるくらいなら、死を選ぶ彼の気持が、僕には痛いほど

、よくわかる。

ただ、彼には自分を殺すよりも、相手を殺してほしかったと思う。罪になったとしても、生きている方がはるかに幸せだったと思う。

本当はこういうことを書くつもりではなかった。永遠に忘れてしまいたかった。でも、このクラスの人、きっとそういう僕の過去をも受け入れてくれるだろうと、信じている。

◇

「あいつまだ帰らねえのかよ」

ちらっと振り返ったが、相変わらず立村とこずえは椅子にへばりついたままだった。

「じゃあ他のハッピーな思い出探るとするかね。例えば入学後の平和な日々とか」

「ああそっか、そうだよね」

美里に十一月十四日の日記が含まれた班ノートを返し、貴史はさらにページをめくり続けた。めくり始めるといつのまにか記憶がどんどんよみがえってくる。一学期半ば頃の歴史授業で「氏」で呼ぶ習慣がいつのまにか女子に対して用いられたきっかけとか、初めての委員選出時の状況とか、外の雪を無視する形でどん どん桜や若葉が生い茂ってくるようだった。

「はまるなこりゃ」

「まあね」

ふたり顔を見合わせて笑った。

目の前で盛り上がっている奈良岡の……それでもお気に入りの日記をチェックはしているらしく、丁寧にメモを取っていつかはいる……一年D組時代の青春譜談義が繰り広げられている。聞くとともにしに聞いていた。

当時の自分の班ノートを開いて指差し語っている。

「そうそう、これ覚えてる？ 初めての宿泊研修のこと。あの時みんな私のクッキーを食べてくれてすごくうれしくて」

「彰子ちゃんのクッキーはもう、芸術ものだもんねえ」

「だからこれ、ページいっぱい感謝って書いちゃったんだよね」

こずえはこずえで前の席にて立村にえんえんと愚痴を垂れ流している。

「だってさあ、菱本さん言うんだよ。私がさ、英語科に進めるのは、神さまのプレゼントみたいなもんだから、この三学期必死こいて勉強しろってさ。まあね、あんたみたいに語学馬鹿ならいいけどさ、私はねえ、確かに奇跡の大逆転だったと思うよ、けどさあ、わざわざ私のためにだけ英語の補習あてがわなくたっていいと思わない？ 立村、これってどう考えたって陰謀だよねえ」

「なんで陰謀なんだよ」

「いやね、なんかこれ、羽飛が私を引き離したがるからなのかな、ってさ」

——妄想激しい奴だよなあ。

さっき貴史に話したことと同じ内容を繰り返すってことは、相当文集仲間に入りたらしい。

事情が許せば入れてやれなくもないのだが、こればかりはがまんせざるを得ない。貴史も美里と顔をあわせ、さらに無視を決めこんだ。

立村もなだめているようだ。いきなり声が小さくなり、聞き取れなくなった。盗み聞きするつもりなど毛頭ない。しばらくこずえは立村に八つ当たりしていたようだが、やがて荷物を抱えて、

「あんたもまだまだやることあるんでしょうが、ま、童貞早くなくせとまでは言わないけどね、せめてファーストキスくらいは狙いなさいってね」

やはりメはいつもの下ネタ女王様らしく決めて教室を出て行った。立村もすばやく荷物をまとめて立ち上がろうとし、ふと振り返った。貴史と目が合った。ちょうど貴史と美里が並び合っ

てノートを整えている真っ最中だった。

——ありゃー、こっち見たぞ、来るなよ来るな！ とにかく早く帰っちまえ！

ここで変にかかわってこないでほしい。

切なる貴史の祈りである。

奈良岡がひたすら女子たちと一年時代のほほえましき思い出に浸っている間に、立村が教室を出て行ってくればあとはなんとかごまかせるのだ。これしか方法がない。

——さっき奈良岡に、俺から切り出すって話したんだからな。

美里にも伝えていない。奈良岡は貴史から例の件を切り出し、立村を説得してくれるもんだと信じている。だから自分から動こうとはしない。しかしもし、今ひたすら語り合っているうちに立村そのものがいなくなれば、そもそも声自体が掛けられない。すなわち、切り出しようがない。その間に貴史と美里は、十一月十四日付近の日記をすっからかんになかったことにして文集をまとめればいい。あとで奈良岡に「なんで？ 立村くんに話してくれなかったの」と聞かれたら、「ごめん悪い、俺、すっかりノスタルジー気分

これしかない。

「どうしたの、貴史」

「ああ、もう、一年の班ノートこのあたりを使うってことでいいだろ？」

「そうだね、あんたの鈴蘭優への愛の内容は全部載っけるからね」

美里は棒読みで答えた。

「そこらへんをまとめて、あとで後日談っぽく手書きでなんか書き込んでもらうの。一年の思い出はそんな感じでいいよね。面白いと思うよ。彰子ちゃん、一通りまとめたから、これから先生に頼んでコピー室でコピーさせてもらっちゃおうか。ページのデザインさっさとまとめておけばあとはすっごく楽だよ」

立村はすぐに背を向け、本を改めて片付け始めた。いったいどのくらい教科書持っているのだろうか。とにかく遅い。こずえがいればおせっかいにも手伝ってくれるだろうが、やはりひとりだ。ちらちらちらを見ながらも、背だけはぴっと伸ばして片付けしている。

——たったと帰ろっての！

「羽飛くん、どうしたの」

タイミング最悪だ。笑顔のあんまん姫が、仲間たちと共に貴史のそばに座り込んだ。

「あ、今、ちょうど終わったなって」

適当に言いつくろう。あんまん姫は美里にもノートを指差し、

「読み終わったんだね」

微笑つつ問いかける。

「うん、使えそうなページ整理したよ。あとで貴史と一緒にコピー室に持って行ってページレイアウト作るつもりだから。彰子ちゃん、受験勉強したほういいんじゃないかな」

細い声で返事をする美里に、奈良岡はさっとメモを拾い上げた。

「どーれどーれ、どうかな。あれこれ、日付でメモ入ってるの？」

「うん、そうだよ。すべてのページ載せるなんてやっぱり無理なもの。ほら、貴史の鈴蘭優伝説のそこはぜーんぶ載せたよ」

貴史に目配せしながら頷く美里。

「そっか。ありがとうね美里ちゃん。でも私も、昨日ざっと目を通して使いたい日記チェックしといたんだ。私も一緒にお運び手伝うよ」

——全く、同時ねえよこの女。

奈良岡彰子に「この女」と感じたのは今回が初めてだった。とにかく立村の腰の重さにただいらだつ。話が片付く前とにかく教室から消えれば、少なくとも今日は乗り切れるはずなのだ。頼む、頼むから、神様仏様立村様。

しばらく奈良岡彰子はメモと、いつのまにか用意した自分用のノートを取り出して日付を合わせ始めた。

「あれ、彰子ちゃん、どうしたのそれ」

「うーんとね、ちょっと気になるんだけどいいかなあ」

しばらく首をかしげ、「ちょっと見てくれるかなあ」と後ろに立っている玉城にノートを指差し、

「玉城さん、十一月ってこんなに少なかったっけ？」

「うん、ちょっとこの班の十一月って少な過ぎるよね」

しばらく頷き合っていた。すぐに美里へ向き直り、

「ううんとね。美里ちゃん、ちょっと気になったんだけど、『エグザンプル』の班なんだけど、十一月って三日分しか日記選んでないよね。八月とか三月とか、休み中ならわかるんだけど他の月が十日以上選んであるのに、少し変かなって思ったんだ」

「中学一年の、十一月？」

美里が声を抑えてたずね返した。立村の姿を意識していることは確かと見た。

「うん、そうなんだ。こんなに行事少ない月だとか思わなかったし、私もこれ、使いたいページが結構あったなって記憶あるんだ。ほら」

奈良岡彰子のノートにはしっかりと、「十一月十四日」「十一月十五日」その前後の日記が細かに綴られていた。

「私ね、覚えているんだけど、この時って確か、菱本先生がいじめで自殺した中学生の話をしてくれて、その感想をみな班ノートに書いたような記憶があるんだ。そうじゃなかった？」

「ごめん、覚えてないかも。あんまり楽しくないしそんなこと」

美里はひとりで流そうとしている。しつこすぎる奈良岡の反論。

「そうだよ、楽しくないよね。でも、私、このこと大切なことだと思って、すべての班の人たちの日記を残しておこうって思ったんだ。だからメモに残したんだけど、なんでないのかなって。美里ちゃん、残していいよね」

「うん、でもうちの班、ページ多すぎるし」

懸命に「十一月十四日」ラインを死守しようとする美里だが、劣勢間違いなし。貴史も助太刀に入ることにした。

「ちょっとそりゃページ泥棒って言われるだろ奈良岡ねーさん、俺も正直、思い出の中になあ、自殺だとか暗い話持ち込みたかあねえよ」

「ううん、羽飛くん、それ違うって思うよ」

かたくなにかじりつく奈良岡彰子。もうここで貴史は、心の中の声で「この女」を奈良岡限定で思いっきり解禁することにした。もう、ハブだわ、この女。

「今だからこそ、これ、覚えておかなくちゃいけないことだと思うんだ。いじめによってつらい思いをしている人は、きっと今だっている。そりゃ、私の周りの人たちはみないいい人だけど、いつのまにか傷つけてしまっていることだってあるよね？ それを忘れないようにするためにも、私、この話は全員の意見をまとめておいてもいいんじゃないかって思うよ。ほんっとに残念だけど、そのためだったら、羽飛くんの鈴蘭優伝説はあきらめるから！」

美里が眉を思いっきり下げて貴史に振り返る。

「どうしょっか、貴史」

「じゃあねえな」

「いい？ いいよね？ いいよね！」

奈良岡はほっこり笑顔をこぼしながら、そばにいた玉城含め女子たちに頷いた。

「ああすっきりした！じゃあえーっと、一年はとりあえずこれで完了ってとこでどう？」

棒読みの美里がメモに「十一月十四日」と書き直し、ゆっくりと筆記用具を置いた。

「そうね、これでいいんじゃない」

まだ動こうとしない立村の気配にいらだちながら、貴史なりの時間稼ぎをたくらんでみた。とにかく早く動け、動け、動け。

「いろいろあったけどなあ。菱本さんのリクエストでは、できる限り真実を書くようにとのご沙汰なんだが、俺、真実ってわからねえからなあ

不意に美里が貴史の目をじっと見つめ、話の続きを奪った。

「D組の三年間を、ってことだったらそうだよ。二年のことだったらいろいろな話があるし、書けるんだけどね」

一年から二年に話題をそらそうとしているに違いない。うまく奈良岡が載って来てくれることを祈りつつ、貴史は首が折れんばかりに頷いた。美里も調子付いて続けた。

「そうそう、二年だと宿泊研修のことだよな！」

明るく言い切ったはずだった。

突然、奈良岡がまじめな顔に戻った。ゆっくりと女子たちに視線を向け、考えるような表情を見せた。

——どうした、なんかまずいことやらかしたか？

どうしたねーさん、と呼びかけるのはばかられる。

美里も同様だった。

椅子と机ががらりとずれる音がした。思わず目を音のした方向に向けた。

貴史も、美里も、そして奈良岡以下女子連中も。

一斉にたくさんの瞳がひとりに刺さった。

立村が立ち上がり、背を向けたまま教室を出て行こうとしていた。

小声で奈良岡がささやいた。

「羽飛くん」

——一か八かだ！

もうここから先は逃れられはしない。

奈良岡に確かに約束してしまったのだ。

立村を捕まえて、美里のために、クラスのために説得するのだと。

どう考えても無理だと承知はしている。

全力で避けることを祈ったが、肝心要の立村がぐだぐだしているから結局自分で首を絞めるはめとなってしまったわけだ。貴史や美里が「十一月十四日ライン」を守ろうとしたが、想像以上に手ごわい奈良岡彰子の笑顔ですべて台無しにされてしまった。

残された手はひとつ、なんとしても奈良岡を介在させず、立村と貴史ふたりだけで話を完結させることしかない。誰よりも立村と近い関係で、例の「十一月十四日」を境におきた例の出来事も、貴史ならなんとか片をつけられそうな気がする。いざとなったら美里もいる。奈良岡にとどめをさされる前に、何かベストな方法があるはずだ。後は流れに任せるしかない。

「おい、待てよ立村」

貴史は立ち上がり呼び止めた。立村は扉の前で振り返り、微かな笑みを浮かべた。それが作り笑いだということくらい、貴史は三年間の付き合いでよくわかっていた。

——俺と立村との勝負だ。

できるだけ険悪な雰囲気を漂わせないようにしようとは思っていた。

「俺な、立村」

——ちょっとお前と一対一で話がしたいんだがな。時間あるか。

本当はそういうつもりでいた。

「あのね立村くん」

——この女め！

ああ、もう戻れない。完全に貴史にとって奈良岡彰子は期間限定の天敵と化してしまった。いったいなんなんだろうこの女は。貴史がまるくおさめようとすればするほど、先読みしてどんどん退路をふさいでいく。しかもほんわか笑顔のままです。どうやったら黙らせられるんだろうか。奈良岡は悪意など微塵もないといった表情で、

「これ前から、美里ちゃんたちと相談していたんだけどね」

さっそく切り出した。余裕なんて全くなしだ。

「立村くん、宿泊研修のことで、本当は言いたいこと、あったんじゃないのかなって思ったんだよね。私。他の男子たちにもいろいろ聞いたんだけど、今回の文集をきっかけに立村くん、本当の気持ちを話した方がいいんじゃないかって思うんだ」

立村は穏やかに答えた。お得意のポーカークフェイスだ。もっともそれも見た目だけというのは貴史の付き合い上承知している。

「いや、俺文集にはかかわってないから、じゃあ先に」

——先に帰したいのはやまやまなんだが、もうこりゃだめだ。

もしそんなことしたら一巻の終わりだ。あんまん姫からハブ姫と名前を変えた……貴史限定……奈良岡彰子が手を緩めるわけがない。ここはもう、貴史がひとりでなんとか片をつけるしか他にない。そうだ、できれば奈良岡が納得する形で、ある程度の譲歩は引き出してだ。

「待ってってるだろ！」

きつく呼び止めた。やはりポーカークフェイスは崩れずに立村が貴史に向き直った。

「あのなあ、立村。お前、ずうっとあれから逃げまくってるだろ？俺に対しても、美里に対しても、菱本さんに対しても。いろいろ事情があるとはあん時菱本さんにも言われたし、内緒にしろって言われたからなんも言わなかったけどな。でもお前、あのまま誤解されてて、ほんっとにいいのか？」

「誤解じゃないよ、本当のことだからしょうがない」

——ひらきなおってやんの。

本来なら貴史は立村をそのまま逃がすつもりだった。少なくとも二年の宿泊研修バス脱出事件においてはまだ、学内の出来事に過ぎない。立村がとち狂ってバスから飛び出したあの事件は

まだ、誰も犠牲者を出していない。厳密に言えば美里はかなり傷ついたはずだしその後貴史もかなりドンパチやらかした。もっとも菱本先生の肝っ玉をひやひやさせて若干の寿命を縮めた程度のことにはすぎない。

できれば、一年の時の、あの事件にだけは触れさせたくない。

——どうか、それだけでも開き直って頭下げて、すたこらさっさと逃げろや逃げろ。

奈良岡の言葉が果てしなく続く。立村は不思議そうに見つめつつ、それでも動かずにいた。

「私も羽飛くんの言うことに賛成なんだ。そうだよ、立村くん、このままだと誤解されたまま卒業になっちゃうんだよ。みんな心配してるしね。立村くんは気付いていないかもしれないけど、みんな立村くんが嫌われたまま卒業させたくないよって思ってるんだよ」

「嫌われた？」

「ま、そういうこと。ねーさんの言う通り、お前もこの辺で言いたいこと言っちゃえばいいんじゃないかねえの」

じりじりしながら様子を伺った。できるだけ穏便に済ませたい。もちろんあとで徹底的に白を切るようならタイムマン勝負も覚悟はしている。いつかはやらねばならない。しかし、奈良岡をはじめとする女子たちの前でそんな禁句をずらずら並べて立村をたきつけるようなことは、絶対にしなくなかった。その場にいてかまわないのは百歩譲って美里だけだ。

——ここでさ、ほんとさ、さらっと流せよ。演技できるだろ元評議委員長、奇岩城のシャーロック・ホームズ、浅野の殿様、松の廊下！

それとも、ここで思いっきり奈良岡を叩きのめすのも手だ。まあ、南雲とは次の日険悪な関係になるだろうがそんなの知ったことではない。だんだんどちらに加勢しているのか自分でもわからなくなってきた。奈良岡が穏やかにたたきつけている言葉にうそはないけれど、それを自分以外の誰かに発せられるのだけはやめてほしかった。

貴史のそばで美里は黙って立村を見つめていた。奈良岡を止めるでも、もちろん支えるでもない、ただ感情のないまなざしだった。美里にしては珍しく凍った瞳だった。

「美里？」

小さく首を振った。貴史に目を向けずに、ただ教室から出て行こうとする立村だけに顔を向けていた。立村は一切美里を見ようとしなかった。ただ静かに礼を述べるだけだった。

「気遣ってくれてありがとう、それなら先に帰るから」

「だめだよ、そんなに逃げたりしたら。みんな、立村くんのこと、心配してるんだよ」

ハブはしつこい。もうだめだこりゃ。

「立村くん、もっとみんなに心を開いたほうがいいよ。美里ちゃんだって、ほら、羽飛くんだってものすごく心配してるんだよ」

とうとう巻き込まれた。最悪の展開だ。

立村の目はゆっくりと貴史、そして美里を向き、突然能面のようなのっぺらぼうな顔つきで奈良岡を見返した。

この表情を何度か貴史は見たことがあった。いつだったろう。主に菱本先生が絡んでくる場面

でだった。宿泊研修もそうだし修学旅行も、数え切れない場面で見かけた。

ただ、その表情を貴史たちに向けたことはほとんどなかったはずだ。

——俺のことを、親友と思ったことなんて一度もない、か。

不意に、奈良岡が口走った言葉が頭によぎった。

——羽飛くんだってわかってるはずだよ。立村くんは、羽飛くんを親友だって思ってないってこと。

違う、今、見切られた。

——立村は一瞬で俺を切ったんだ。

奈良岡はひたすら、「クラスの女子たちも同意見」と訴えてくるけれども、あの瞬間までは一度だって無視されたと感じたことはなかった。ぶつかりあいもあったしぶんなくったりもしたけれど、試行錯誤の上元の友だちとして戻ることができた。

だが今、立村は、菱本先生と同じ人間として貴史たちを見た。

奈良岡などどうでもよかった。

立村の次の言葉にすべてを賭けた。

完全に凍りついたまなざしで、軽蔑しきった表情で立村は奈良岡に答えていた。

「それはありがたいと思っているけど、俺には俺の考えがあるから。それに終わったことだから」

「終わってないんだよ。立村くんひとりで決め付けるのはよくないと思うなあ。いいかなあ。去年の宿泊研修以来、女子たちは立村くんがどうしてあんなことをしたのかわからなくて、みんな信頼できないなあって気持ちになってしまったみたいなんだよ。もちろん嫌うってことはしないけど、やはり、もやもやしたものが残っているのは私もクラスの女子見ていて、そう思うよ。もちろん立村くんのように、言いたいことを無理に言わないでもいい、と思っているんだったらしょうがないけど、やはりクラスのみんなは落ち着かないんだよね。三年間、気持ちよく友だち同士として卒業したいでしょう。一緒にいろいろなことがあって、おしゃべりして、けんかして、もちろん思い出したくないことだってあるかもしれないけどね。でも、うちのクラスでいじめが起こったことが一度もないってことだけは、誇っていいと思うよ。だからね、最後の最後でみんなすっきりしないことは、きちんと終わらせておきたいんだ」

奈良岡のお題目など聞こえてはいなかった。

——立村、俺とほとんどしゃべってねえくせに。

——ちくしょう、なんだよその、目は。

とってつけるように奈良岡はふたりを指しながら、静かに告げた。

「あ、これね、羽飛くんや美里ちゃんが言い出したことじゃないよ。私が思ったこと、ふたりに

話ただけだからね」

もちろんそんなことを信じる玉じゃない。立村の冷ややかさがどんなものか、いったん恨んだら最後、決して人を許さない、謝ることなんてもってのほか、そんなことを貴史はよく知っていたはずだ。

そんな立村の弱さも含めて、貴史は友達として接してきたつもりだった。

——こいつはもう二度と俺たちとつきあう気なんてねえな。

本当に、ほんつとに、それでいいのか立村！

少なくとも立村を理解しよう、つながろう、貴史も美里も同じことを思っているはずだ。

あの浜野という番長も同じことを考えていたんじゃないだろうか。二年前の出来事でも貴史はそう読んでいた。

菱本先生は言うにおよばない。どんなに邪険にされても、担任教師以上のあったかきで立村にぶつかろうとしていた。

だれもが手を伸ばそうとして、なんどもアクションを起こして、結局あの冷ややかなまなざしで拒絶され、どんなに訴えても弾き飛ばされていたんじゃないだろうか。

あんなことしていたらずっとひとりぼっちに決まっている。

今はまだ、クラスの女子たちに昼行灯扱いされるだけかもしれない。

一年の頃から男子連中の信頼は勝ち得てきたし、これからもそれがひっくり返るとは思えない。だがこの繰り返しが続けば次はそれすら失うだろう。貴史だってあっさりシカトしたっていいのだ。美里だって嫌ったっていいのだ。でも。

——こいつを何とかしない限り話は終わらねえ！

「わかった。そうしたいならそれでいいから。ただ俺はもう話すことなにもない。だから文集委員のみなさんで、話の内容をこしらえてくれないかな。それでいいだろう」

「それは意味ないと思うよ。当事者は立村くんだもの。立村くんのためにきちんと」

「俺はそれ、本当のところ、望んでないし」

立村は静かに話を終わらせた。手を扉にかけようとした。貴史は駆け寄った。

「立村、ちょっと待てよ」

立ち止まった立村の顔を、真正面から睨み据えた。

「その言い方ねえだろうが」

喉にたんがひっかかったようで声がかすれる。すぐに目を逸らすのは予想していた通りだ。声と息が奴のこめかみにかかるようにすごんでみた。

「俺たち、ずっと今日の今日までお前の望み通り放っといってきただろう。ほんとは言いたいこと腐るほどあっても、やっばしませういだらなってことで、俺も、美里も、クラスの連中もみんな黙ってたんだぞ」

そのまま、うつむき加減で立村は小声で答えた。

「わかってる、悪い」

——悪い？

「悪いと思ってんのか、この！」

反射的に片手が動いた。危うく頬にパンチ食らわせそうになるのを理性で抑えた。ここはだめだ。女子の前でやらかしたら別の騒ぎになる。代わりに腕をがっちり押さえた。相手が振りほどこうとするのを五本の指でがっちりホールドした。もう一度顔を覗き込んだ。伏せ目ときよる目のにらみ合い。低く、声を響かせた。

「けどな、それがこの状況だってのが、お前わかってねえだろうが！」

「この状況って、でも」

「俺も、美里も、菱本さんもだ。お前のことに口出ししなければ無事仲良しD組で卒業していけるだろうってことで、何も言わないで来たんだ。それ、わかるか？」

きっと立村が睨み返した。火が付いた時の目だった。氷ではない。なぜかふっと息がもれたような気がした。なんでかわからない。ただ、貴史にもその熱でなにかが融けたような感覚があった。

——そうだ。こいつがしようとしてたこと、あれだけはまだばれてないんだ。

——裏・班ノートのからくりだけは、まだばれてない。

背中から熱い、竜のようなものがよじ登ってきているようだ。貴史はすべてをそのうねりに任せた。相手が氷神なら、こちらは竜神だ。とことん、滝登りのあとで一気に流し切ってやる。全身を覆った氷の鎧を溶かす、最後の切り札だ。

「宿泊研修のことだけじゃねえ！ 一年時の班ノート、お前結局何にも気付いてねかったようだけどな、もう全員あのことはばればれなんだぞ」

貴史の言葉だけが教室いっぱいに響いている。

「あのことってなんだよ」

戸惑ったように立村が答える。手ごたえあり。思わず鼻で笑いたくなかった。美里に振り返ると、堅い顔で貴史を見返していた。

「美里、一年時のあのノート、取ってくれ」

即、投げてよこした。「エグザンプル」だ。九月十四日のあの日記だ。

「お前なあ、ここ、改めて読み返してみろ」

立村が黙って受け取り読み返す間、貴史は一瞬たりとも目を放さなかった。表情が変わるかどうか、白い頬が赤らむか、瞳が揺れるかぬれるか、氷が溶ける瞬間を見逃したくなかった。

立村はノートに目を通したまま動かなかった。能面のまま、崩れる気配はなかった。ただ動かないだけだった。揺らしたい、釘打ちたい。背中の中うねる竜が貴史を促すようだった。

「な、これ、お前が書いたってこと、覚えてるよな」

誰も声を発しない。三年D組の教室にいる誰もが自分らを見据えているはずだ。

この「裏ノート」を知らない奴ら、ほとんどが。

「これを嘘っぱちだってことで俺たち、『裏ノート』って奴をこしらえようとしたよな」

ゆっくり、誰にも聞こえるように言い放った。

一切動かずそのままノートを見つめている立村に貴史は畳み掛けた。

「あれもうちにあるけどな、俺はそんなの持ち出す気ねえよ。あっちの方が嘘八百なんだからしょうがねえだろ」

——そうだ、証拠物件は、俺ん家にある。

わけのわからぬざわめきが広がっていく。貴史の背中には火の竜以外にも、不穏な三年D組クラスメートたちの疑問符がつぎつぎと突き刺さっていく。びんびん感じる。画鋏のようななにかを、貴史はすべて立村に放った。

「お前、素直に認めればよかったんだ。あんときに」

——俺がしくじったんだ。本当はこいつを。

「そうすりゃ、今になってわけわからん二年の女に噛みつかれなくてもよかつただろ。俺も同罪だ。お前にそう言ってやんなかったんだからな。隠すことを手伝っちゃったからな。

今さらながら気づいたエラーだった。

「本当だったら全部、事実関係を立村、お前に白状させて、その浜野って奴に土下座する手伝いでもして、すっきりさせて二年に上がればよかったんだな」

立村をかばおうとした結果が、卒業間際でほころんだだけだった。杉浦加奈子は正しかった。あの時杉浦が立村を「脅迫」したことに気づいた時点で、貴史たちが「勧め」ればよかった。どんなに立村が怖がっても、絶対に友達であることを誓ってやり、場合によっては付き添ってやり、すべてを告白させる機会を作るべきだった。たとえ立村が「裏班ノート」で保身を図る小心者とばれて女子はもとより男子連中からも軽蔑されたとしても、かならず挽回できるチャンスが来ると励まし、支えるのが本当の友達としてすべきことだったんじゃないのか。事実は事実と認めても青大附属の世界で生きていけるし、決して死なせることなんてしない。全力で守ると訴えて、なぜそれを受け入れられないのか。

「俺もガキだったしそんなことまで頭がまわらなかったのはほんっと馬鹿だよ。いくら逃げたって、結局は帳尻が合っちゃうんだ。俺も馬鹿だけど、立村、お前もほんっとボケだ。なんでこの段階で、きっちりけりつけようとしなかったんだよ！」

氷は融けなかった。

「羽飛には関係ないだろう」

一言だけしか返ってこなかった。

「そいで今は、こんな風にすべてが裏目に出てるってわけなんだぞ。立村、あと二ヶ月しかねえんだぞ！」

「ああないよな、二ヶ月だよな」

何度も荒れた言葉をぶつけてみる。何度も立村をゆすってみる。発すれば発するほど立村は一本調子の返事しか返さない。まるで二年のE組にまわされたというあの杉本という女子のようだった。

「だったら今しかねえってお前にもわかるだろ！ ねーさんじゃねえけどな。お前このままふ抜

けたままでD組終わらせていいのかよ！ 三年間評議やったお前のプライド、そんなもんなのかよ」

立村が反応しそうな言葉を手当たりしだいわめいただけだった。ふと、動いた。立村がゆっくりと貴史を見据え、微かに笑った。ほんの少しだけ頬を緩めただけだけれども。

「羽飛、本当はお前が評議委員やるべきだったんだ」

あたりが静まり返った。女子たちの「そうだよ」の声が小さく聞こえる。様子を確認するつもりはなく、ただ立村がゆっくり語る言葉だけが教室中に行き渡って行った。

続けた。

「最初から、俺は評議委員なんかやるべきじゃなかったんだ。それ、わかっている俺が悪いんだ。与えられた義務は果たす。けど、クラスの本来経つべき奴は、羽飛、お前だってわかっているだろう」

ちらと教室を見渡した後、立村は扉を開いて出て行った。誰も止めようとはしなかった。貴史もすぐには動けなかった。身体が熱い以上に、頭の上を揺らいでいるような「だよね、だよね」の響きが重すぎた。

何度も立村には言われていた。

——俺の方が評議向きだって、言ってたよな。

そのたび思いっきりどやしてやったっけ。

——なあに肝っ玉ちっちゃえこと言ってるんだっての、なあ、立村、お前が評議向きでなかったらな、だーれが評議委員長になんて選んでやるっての。なあ美里？

いろいろな問題が絡まって弱音を吐きたくなっただけだとあの頃は気にも留めていなかった。菱本先生にも似たようなことを言われたけれども、単に貴史のことを買ってくれているだけだと受け取って、いい気分になっていただけだった。

しかし、今は違う。

——三年間、俺とのつながりを、ぶっちぎったんだあいつは。

一年のクラス委員選出で、あえて貴史が美里の相棒として立村を選んだことがすべての間違いとするならばこの三年間のさまざまな思い出も「間違い」になる。立村に恋した美里の気持ちも、立村の痛みを一緒に分かち合おうとした貴史の心意気も、評議委員会でおきたさまざまな出来事を奴なりに解決しようとしたことも、すべてが「あってはならない」ことになる。それでもいいのか。本当にそれでもいいのか。

——ふざけんなって、あのばっきやあろう！

どのくらい時間が経ったかはわからない。気が付けば貴史は廊下に飛び出していた。

立村は教室の後ろ扉前を通るところだった。

「ばっかやろう、逃げるな、こっち向けよ！」

呼び止めようとしても無駄だとわかっていた。駆け寄ろうとした。とたん、振り向かずに立村が駆け出した。すれ違う連中にぶつかりそうになり頭を下げつつ階段を目指していた。

「立村、待て！ 逃げんじゃあねえ立村、立村待て！」

廊下を全力でつっぱしって規律委員の南雲あたりに違反カード百枚切られたって知ったことじゃない。他の組の男子にまた立村がぶつかりそうになり、律儀にも頭を下げている。そんな礼儀を保つ余裕があれば立ち止まれるはずだ。貴史とさしで話ができるはずだ。なのに逃げる。

「いいかげん逃げたって逃げられねえんだぞ、もう、いいかげん、こっち向けての、立村！」

三度目に立村がB組の女子にぶつかりそうになった時、貴史は右手で相手の肩をしっかりと押さえた。思い切り振り払おうとした。反対側の手で奴の頭を押さえた。奴より背が高いのでそのあたりは余裕だ。きっと見返したその目を読み取ろうとはしなかった。自分の答えだけをしっかりと叩き込みたかっただけだった。

久々に放った右拳のストレート感覚は、妙に冷たかった。

相手が瞬時に廊下という名のリングに沈むのを貴史は見下ろした。

自分の中のタイムウォッチがいつかのアンカー選考授業の時に似て、ぱたっと壊れたようだった。

目の前でひっくり返った立村はその直後、全く動かなかった。ぶつかりそうになったB組の女子が駆け寄り、恐る恐るひざまずいて「立村くん、大丈夫？」と声をかけているのを見た。そいつがいわくつきの女子、轟琴音であることに気づくのも遅かった。階段へ向かう流れが突然貴史と立村を円陣作ってまとまった。教室で感じたのとは違う別の疑問符が貴史を全身刺しまくった。

「ちょっと、男子同士でけんかしてるよ」

「まじ？ あ、D組の奴か」

「立村と羽飛？ なんでさ」

「ちょっと待て。おい、動かねえぞ」

轟がすぐそこにいたC組の更科に耳打ちをし、すぐその場を離れた。更科が改めて立村に「おい、お前起きれるか」などと声をかけている。同時に立村は頭だけなんとか動かそうとして、腰から上を斜めに持ち上げようとしている。しかし動かない。立てない。小さくうめく声が聞こえた。

——立村？ おい、立村？

思わずかがむと更科が小声でささやいてきた。

「意識はあるみたいだけど」

そこまで口にした後、再度頭を支えようとした。別の女子が更科のそばに寄ってきた。冷静に更科が指示を出す。

「阿木さん、悪いけど、保健室に立村運ぶから、卒業式の件あとにするね。できればさ、保健室にベット開いてるか都築先生に確認してもらえると助かるなあ」

「うん、わかった」

阿木と呼ばれた女子はすぐに階段を駆け下りて行った。

「どうしたんだよ羽飛。立村、まじで立てないのかなあ」

目を閉じたままそれでも動こうとはしている。

「まじで頭打っちゃった？ それってやばいよね」

更科が話しかけるのを立村は首振ろうとして果たせない。顔はただ白く、少しでも動く痛みが走るらしい。何度か顔をゆがめた。貴史が手を伸ばそうとするのを更科は制した。

「立村、今から保健室連れて行くよ。だから、無理しないでいいからさ」

話しかけた後、更科は子犬っぽい表情を剥製化して貴史に告げた。

「今、トドさんが菱本先生呼びに行ってるんだ。大丈夫だと思うけどね、頭打ってたら、今俺が動かすのもまずいと思うんだ。だから、さ」

貴史はひざを付いたまま動けなかった。

——立村、お前、まじかよ、まさか。

渾身のストレートパンチだった。それは認める。

全身が滝登りする竜神のパワーに満ちていた。それも確かだ。

ただ決して、決して。

「立村、わかるか、俺だよ」

さっき殴りつけたばかりの相手に対して口走る言葉ではなかった。

「大丈夫か、おい、起きること、できないのか？」

「やめろよ、無理させたら大変だ」

厳しく更科に制された。同時にD組の連中が円陣の内側へと固まった。美里が脇に立ち尽くし、貴史を見下ろし叫んだ。

「貴史、急所と拳固だけはやめなさいって言ったじゃないの！ ばか！」

そばですぐ、美里を奈良岡が支えるように肩を抱いた。

「美里ちゃん、大丈夫だよ。今から私も付き添っていくからね。羽飛くんも」

同時に美里を貴史に押しやると、更科に声をかけていた。

「更科くんさすがだね。ありがとう。菱本先生や都築先生に声かけてくれたんだね」

「そりゃ、まあその」

頭をかく余裕がある更科。

「とにかく、保健室、行かなきゃね。立村くん、意識、あるよね。あるなら返事してほしいな。自分で、動ける？」

奈良岡の言葉がすごんでいるように聞こえたのは気のせいだろうか。

「大丈夫だよ、立村くん、羽飛くん、今、泣きそうになってみているよ。あやまってるよ。気づいているなら、答えてほしいな」

「奈良岡さんやめなよ。今、あいつ、きっと頭が痛いんだよ。そろそろ菱本先生来るからさ、それまでこのままにしとこうよ」

「うん、でも、このままだと羽飛くんだけが悪いことになっちゃうよ。さっき私も話を聞いてたけど、立村くんの方にもまずいことがあったんだよ、だからそのこと言わなくちゃ」

「そんなことどうでもいいだろ。今は立村、そんなことできる状態じゃないんだよ」

「でも、意識はあるよね。立村くん、返事できるよね、羽飛くん、手加減してくれたよね」

更科が奈良岡を止めようとする、しかし奈良岡は保健委員の盾でもって動こうとしない。

貴史は立村の脇で閉じられたまぶたを見つめた。かすかに動き、ぱちりと開いた。意識はあるが、貴史を認めたとたんすぐに目を閉じた。

「立村、おい、立村」

知らず知らずのうちに声が揺らぐ。

——頭、打ったなんてまさかだよな。立村。

何度も立ち上がろうとするものの動けない様子。

「大丈夫だったら羽飛くんに、大丈夫って言ってあげてほしいな」

「黙れ奈良岡！」

とうとう貴史は怒鳴った。立村の頬に顔を近づけ何度もその名を呼んだ。

「立村、大丈夫か、おい、こっち見ろよ、死ぬなよ、なあ、俺が悪かったから、頼むから起きろよ！」

——立村がどんなに俺たちを無視しようとも、俺はお前のことを見捨てたりするもんか！ああ、最初からお前が俺のことを友達だなんて思ってなくたって、たとえお前が美里のことたいして好きじゃなかったとしたって、俺はお前のことを入学式の時からいい奴だって見破ってたんだ。どんなに嫌われようとしたって、殴っちまったとしたって、わかるだろ？ な、立村、俺は絶対にお前の友だちなんだって、気づけよ、な、おい、立村頼むからもう一度返事しろよ、なぜ口きかねえんだよ、おい、立村、立村。

何度か身体を動かそうとしたがとうとう立村は果てた。目を閉じたまま動かなくなった。

「やばいよ、ね、羽飛、まずいよ。都築先生も言ってたけど、頭打ってたらかえって悪化するかもしれないって！」

「黙ってる、俺が運ぶ」

「それってもっとまずいよ、羽飛くん。更科くんの言うとおりにだよ。先生たちが来るのを待とうよ」

更科と奈良岡が交互に止めた。身体が震えて涙が止まらない。声をかけ続けた。立村の背中を起こし背負った。少しずつ人がはけていき、階段に続く通路を広げてくれた。階段を一段ずつ降りながら貴史は左肩に立村の顔と手がしがみついているのを感じた。

美里だけは何も言わなかった。隣で神妙な顔をしたまま、歩幅をあわせ貴史に付き従った。立村の肩に触れようとしてすぐに手を引っ込めた。

立村を保健室まで運び、まずは片手に触れてみた。

「大丈夫か、立村？」

肩越しに目を閉じたままかすかに頷くようなそぶりを見せた。意識はしっかりしている様子だった。扉を更科に開けてもらい、立村を背負ったまま一礼した。

「さっき轟さんきたと思うけど、こういうことなんで」

貴史の代わりに即、更科が状況説明をしようとした。さくっとさえぎられた。

「どうせまたけんかでしょ？ ほら、立村くん寝たふりしないで。こっちのベッドに寝せてちょうだいね羽飛くん。あ、それと更科くん、菱本先生には連絡した？」

「あ、たぶん轟さんやってくれてるはず」

都築先生は貴史の肩越しに立村を一目見るなり、あっさり笑顔を浮かべた。たいしたことないと判断したかのように見えた。貴史の目からすると全く目を開けないところに不安をびしばし感じるのだが。まずは白いシーツに立村を座らせ、そのまま横たえた。自分から寝返りをうつ気配はない。

「気絶してるのかしら？」

「いえ、さっきちょこっと反応してて」

貴史が説明しようとしたのをまた更科がさえぎった。

「確かに最初は立村立とうとしたけど、途中でばたんとなっちゃったから、もしかしたら頭打ったんでないかなとか思ったんだけど、先生」

「頭、って後頭部？」

更科が大きく頷いた。都築先生のお気楽仮面が不意に翳った。

「そっか、ちょっと見せてもらおうわね。立村くん、頭は痛くない？ 他のところは大丈夫？」

一応は確認をするらしく、額に手を当てたり何か尋ねたりしている様子ではあった。貴史の隣で美里が無言のまま立ち尽くしている。やり取りしているのは都築先生と立村本人、そして更科のみだった。ただ立村からの答えはなかった。完全に気を失っているようにも見える。不安げに更科が立村を覗き込み、交互に都築先生を見やっている。チワワな笑顔は封印されたままだ。

「そうね、たぶん大丈夫だと思うんだけど……」

「たぶんって、やはり断言、できないんだ」

いきなり友達言葉になる更科の口調に、都築先生との禁断の噂を裏付ける何かを感じる。ただそんなことをかまっている暇がないのが、今日の前で寝ている立村、というわけだ。

近づいてそっと見下ろしてみた。立村は再び目を閉じたまま身動きせずにいる。

「先生、やっぱり立村、病院で観てもらったほういいんじゃないかな。まじでまずいよこれ」

更科は貴史と都築先生を交互に見ながら病院送りを主張し続けている。

——けど、こいつ、反応したぞさっき。意識はあると思うぞ。

気を失ったふりをしているのか、単に眠ってしまったのか、どちらかだろうと貴史は踏んでいる。なんでもないならせめて反応しろ、そう叫びたい。でも立村のまぶたは全く動かない。

白衣姿の都築先生はしばらく黙っていたが、

「私は大丈夫だと思うんだけどね。まずは菱本先生と相談するわね。ということで悪いけど更科くん、清坂さん、羽飛くん、ちょっと部屋から出てもらえる？」

決断を下すのに迷いがあるらしい。思わずかじりつきたくなった。

「都築先生、立村の様子、ほんっとに大丈夫ですか」

隣の美里はやはり無言だった。

「私は大丈夫だと思うけど、やはり、担任の先生と相談しないとね。あ、立村くん頭が痛いならはっきり言ってもいいのよ。立村くん、立村くん？」

再度問いかけるがやはり返事はなかった。答えを確認できないまま、美里と更科、その他の生徒たちは保健室から出て行こうとした。

「貴史、あんたも早く」

初めて美里が貴史に呼びかけた。

「いや、こいつが目覚めるまで俺ここにいるわ」

迷惑そうに都築先生が顔をしかめたが、動く気なんてさらさらなかった。

もう一度枕元にしゃがみこみ、真っ白いシーツの上で眠りこけている立村の顔をじっとみやった。さっきぶんぐった向かって右の頬が微かに赤らんでいるようだった。正真正銘のストレートパンチはまさか、脳天まで響き渡ったのだろうか。

——立村、ごめん、痛かったよな、わかってる。

のどに謝り言葉のモチがつまり、苦しくなる。首を絞められたかのように涙がぎゅうとにじんできくる。歯を食いしばり、立ち上がり、そのまま上から見下ろした。

——俺、まだお前と話すこと、話したいこと、いっぱいあるんだ。なのに、なんでだよ。

張っ倒した瞬間はこんな大事になるなんて思っていなかったのだ。ただ追いかけて、一発食らわせれば奴も正気に戻ると信じていた。何かがあるたびいつも逃げ出す立村の雁首をしっかりと押さえて、ふたりきりのところでとことん語りたかった。再起不能になるまで叩きのめすつもりなんてなかった。あれだけ手を出すな、急所を狙うなと注意されてきたのになぜあんなことをやらかしてしまったのだろう。

「あ、先生」

都築先生の声に戻ると、菱本先生が勢いよく扉を開けて飛び込んできた。

「すみません遅くなって。おい、羽飛、立村」

「あの、立村が」

またのどが詰まる。首を振るのがやっとだった。

「大丈夫か」

肩に手を置かれた。最初の「大丈夫か」は貴史宛に、次の「大丈夫か」は立村に。最後に「意識はありますか」の問いは都築先生に。

「さっき見た限りですと、意識はあります。一応大事をとって病院に連れて行ったほうがいいかもしれないのですが、ほら、立村くん、寝たふりしないでほら起きてみて」

返事はなかった。

「そうですか、まず羽飛、廊下で待ってろ。まず詳しい話を聞かせてもらうからそれまで待機しろ。それで都築先生」

いらだった表情だが、それでも貴史には柔らかに指示を出した。都築先生を捕まえてなにやら小声で質問をしているようだった。貴史が出て行く時にはまだ、立村の意識は戻っていないかのようだった。どうみても「寝たふり」しているようには見えなかった。

廊下には三年D組の生徒たちをはじめ、一部の下級生たちもそれぞれ細かな団子状態でたむろしていた。グループといったまとまりではなく、三人程度で固まってはひそひそ話をしているような状態なのだろうか。美里が貴史を手招きした。そばには奈良岡もずでんと居座っている。思わず目を逸らした。今はできるだけ視界に入れたくない奴だった。

「羽飛くん、立村くんの様子は？」

一応保健委員の義務もあるのだろう。問いかけてきた奈良岡に、必要最小限のことだけまずは答えた。

「寝てる、気を失ってる、そのどっちか」

「気を失ってるって、そんな」

思わず息を呑む奈良岡と、その周辺の女子たちと。こいつらのせいと言っても過言ではないと思うものの、結局手を出してしまった自分の罪が軽くなるわけでもない。美里は貴史の顔を覗き込みささやいた。

「大丈夫よ、だって都築先生言ってたじゃない。寝てるふりしてるだけだって。きっとね、ちょっとぼーっとなっちゃってるだけよ。たいしたこと、ないんだから」

「お前ほんとにそう思ってるのかよ」

言い返した。美里の目つきにはまだきりきりしたものが混じっている。貴史だってもちろんそう信じたい。ただ、あいつが意地張って俺のことを無視しているだけなんだと。でも、結論が出ていない以上何も言い返せない。

「大丈夫だよ、羽飛くん。私、ちゃんと説明するからね」

「説明、ってなんだよ奈良岡」

あんまん姫はきわめて冷静に答えた。

「菱本先生に、何があったかを説明すれば、きっとわかってくれるはずだから。私、あの時、羽飛くんがああせざるを得なかった気持ち、すごくわかるよ。だから、きっと」

「うっせえ！ お前に何がわかるっての」

声を荒げて思い切り足踏みした。がきっばいとわかっている。でもどうしようもない。貴史の背中にはさっきまで背負っていた立村の温かみと重さが残っている。目を閉じたまま身動きしない真っ白い顔とがまぶたに焼き付いている。

「羽飛くんはね、やるべきことをやったんだよ。たまたまそれで」

ぶちぎれそうな言葉をすべて聴く前に、保健室の扉が開いた。扉側に立っていた女子数人がドアにはさまれそうになり、半分跳ね返された。菱本先生だった。顔は明らかに土色に染まり、目が赤らんでいた。

「先生、立村くんは？」

美里が飛びつこうとするのを制し、奈良岡が割って入った。

「先生、今回のけんか、私たちみんな見ていたんです。あれは絶対に羽飛くんが悪いんじゃないんです。羽飛くんはただ、立村くにわかってほしかったからああいうことになっちゃっただけなんです。D組の教室で文集作っていた私たちみんなが証言します」

「余計なこと言うんじゃない！」

割り込んでも無駄だった。貴史がわめこうとするのを今度は更科が肩に手をかけて止めに来た。美里だったら振り切るが、他クラスの評議委員となれば邪険にもできない、因果だ。

「私、立村くんが過去のことをきちんと整理して、もう一度クラスのみんなになじんでほしかったから羽飛くんと協力してぶつかったんです。でも、立村くんには無視されて、みんな怒っちゃって、でも羽飛くんだけはなんとかして立村くんと真剣に話をしようとしたんですよ！本当なんです」

「そうか、そうか」

軽くあしらうように見える菱本先生の言葉だった。その目は奈良岡から貴史に向けられ、また奈良岡に戻された。ばつが悪い。

「でも、立村くんは馬鹿にしたような言い方で羽飛くんを無視したんです。大げさじゃないんです。それで羽飛くんはかあとなっちゃって立村くんを追いかけて、ってことなんです。誰だって、真心こもった言葉を無視されたら羽飛くんみたいに怒っちゃっても不思議はないと私、思うんです。本当です先生。立村くんの言い方がもう少し思いやりがあれば、羽飛くんもこんなに怒らないですんだと思うんです。もちろん暴力は悪いことだと思うんです。でも、羽飛くんがそうしたくなかった気持ちも、私はわかるつもりです」

最後のほうはしゃくりあげながら言い切った奈良岡に、菱本先生はもう一度大きく頷いて見せた。

「わかった、奈良岡、ありがとう。詳しいことはこれから確認するが、まずは羽飛、ちょっと来い。まずお前からの事情聴取だ。職員室にまず来い、そこからだ」

当然貴史は大きく頷いた。菱本先生からの事情聴取は望むところだった。

「それとここでたむろっている生徒は至急、下校するように！」

拍手を叩くように菱本先生は他の生徒たちにも呼びかけ、最後に貴史の肩を抱くようにして廊下をつぎついで行った。いつのまにか他の先生たちが現れて残りの後始末をしてくれている。なんだか奈良岡の言葉からうまく救い出されたような感じがして、貴史は思わず大きなため息をついた。

「先生、立村の様子はどうなんですか」

「意識はある、ただ、万が一ってこともあるからな。まずは親御さんに連絡する。それから羽飛」

一瞬立ち止まり、まっすぐ貴史を見下ろした。

「今回の件は奈良岡の言う通りお前なりに正当な理由があるということはわかる。だがな、暴力

はそれを丸ごと打ち消してしまうことにもなるってことは、わかるよな？」

頷くしかなかった。青大附中の原則として暴力は軽くても親呼び出し、下手したら退学に値しないようなものなのだから。今まで奇跡的に大立ち回りをやらかさないですんだのは、たまたま運がよかっただけだろう。今更ながら菱本先生の言いたいことが飲み込めた。

「うん、親呼び出しは覚悟してます」

「そうだな。わかってるな。立村の様子そのものは、俺が観た限りたぶんたいしたことはないと思う。ただ頭を打っている可能性もゼロではないから場合によっては病院で検査してもらうことになるだろうな。やはり原則は守られないとな。覚悟はあるということで、いいか」

——母ちゃん、悪い、まじごめん。

卒業間際になりとうとうやらかしてしまった親呼び出しの顛末。覚悟しているとは言ったがやはり、痛いものは痛い。右手の拳を作り直してもう一度立村に触れた瞬間を感じ直した。あいつの頬はやはり滑らかなままだった。

職員室に入り、貴史は菱本先生の机前で待機していた。

「立村上総くんの、お母様であらせられますか、あの私、青瀉大学附属中学三年D組担任の、菱本守と申します。ただいまお時間よろしいでしょうか……」

しゃちほこばった言葉でもってまず立村の母に電話をかけている。その姿を直立不動のまま貴史は見つめた。さすがに貴史の姿が目に入るとためられるようで、すぐに席から離れるよう菱本先生が手を左右に動かした。言われた通りにもちろんした。そこから先の言葉は聞き取れなかった。

頭を何度も下げて受話器を置いた後、次にまたダイヤルを回しなおした。

おそらく、自分の家あてだろう。

——母ちゃん、いるかなあ。姉ちゃんだけかもな。また美里の母ちゃんと一緒にくっちゃべってるだろな。

ちらと菱本先生が貴史に目を向け、また受話器に何度も頭を下げているのが見えた。

——俺が悪いのは承知してる。けど、やっぱり今回は立村とのかかわりもあるよな。どう説明すればいいかだよなあ。俺、やっぱり立村の母ちゃんに土下座すべきだろうな。あのすっげえべっぴんな人、俺のことすっげえ怒鳴るかもしれないよな。

一度だけ会った、あの目がぎらぎらしている、歳のちょっとだけ離れたお姉さんのような雰囲気、立村の母親。二年前に顔を合わせたただだが、決して忘れることのないタイプの雰囲気だった。わりとおっとりしている息子の立村に比べて、烈火のごとき激しさでもって周囲を焼き尽くしそうな母親のイメージが忘れられない。話を聞いている限りでは立村を超スパルタ教育しているらしいがやはり自分の息子を傷つけられたら冷静でいられるわけがない。

それに加えて今回は貴史の母にも頭を下げさせなければならない。

——母ちゃん、まじ、どうしよう。

ただでさえ陰で、「品山の男の子」とかばかにしている母が、そのふたりに自分の息子のやらかした罪でもって土下座しなければならないとは想像だにしていけないだろう。貴史からしたら自

分だけの問題として飲み込めばいい話だが、青大附属の生徒である以上親に全責任がかぶさってくるのは当然のことだ。もう一生の負い目になりそうな予感がある。自分の息子が暴力沙汰をやらかしただけではなく、その相手が母の軽蔑する地域に住む、あまり感じのよろしくないお坊ちゃまというところに、だ。

電話が一通り終わったらしい。菱本先生は貴史を手招きして耳元にささやいた。

「お前のお母さんに話をした。これからすぐいらっしゃるとのことなんだが、あの、清坂のお母さんも一緒に来るとい話なんだが」

「ああ、美里の母ちゃん？」

「なんでなんだ？」

いきなり不思議そうな顔で貴史に問いかけてくる。

「いや、たぶんいつも、俺たちのことでバトルが起きると、うちのかあちゃんズはふたり一緒に行動するところあるから、たぶん、それなんじゃあないかなと思う」

「清坂も、それ承知しているのか？」

「たぶん、いつものことだし。けど母ちゃん、怒ってなかったか？」

「ここは職員室だから、まずは敬語使えよ。怒ってませんでしたか、程度でいいからな。まずは詳しい事情を一通りお前の方から聞かせてもらう。生徒相談室に行こう。まだ少し時間があるから、その段階でまた今後について相談することにするからな」

早口に伝えた後、菱本先生はもう一度貴史の肩を抱いてささやいた。

「大丈夫だ。立村も、お前の本当に本当の気持ちはわかってくれるはずだ。そのことはきっちり俺もお前の母さんと、それから立村のお母さんに伝えるからな」

生徒相談室の扉を開き、まず菱本先生は暖房用の電源を入れた。目の前には雪いっぱい覆われた窓枠が光っているのが見えた。青色がかかった暗みの広がる中、蛍光灯をすべて付けると一気に部屋が明るくなった。向かい合ったソファにいつもなら自分から座るのだが、そんな気分にはもちろんなれない。貴史が立ちすくんだままているのを、菱本先生は冷蔵庫から缶ジュースを取り出し片手に持たせた。

「まずは少し頭を冷やせ。急いで事情聴取と行くぞ。羽飛、まあ座れ」

言われた通り、入り口側のソファに腰を下ろした。先生も最初は正面に向かい合おうとしたが、なぜか貴史の隣に回ってきた。顔を見合う形ではなかった。

「まず、何がきっかけだったんだ？ 文集のことがきっかけだったのか？」

「それもああるけど、一応は」

言葉をつむぐのにしばらく迷う。自分をかばう言葉になりそうだった。菱本先生は入学当初から貴史のことをかってくれていて、ひいきぎりぎりのことをしてくれている。なんとなくそんな気はしていた。さらに菱本先生の結婚事情も、他の生徒たちが知らないところまで把握している。将来は酒を酌み交わせる関係になりそうな予感もある。しかし、今はやはり三年D組の担任と生徒の関係に過ぎない。子どもっぽい言い方しかできないのが歯がゆかった。

「先生、ごめん」

まずは頭を下げた。

「どうしたんだ、いったい」

ふたりきりなら敬語なしでもいいと判断し、貴史は口を切った。

「俺、先生に、立村のことについては俺がなんとかするってたんか切ったけど、結局は親とか先生とかに助けてもらわねえとどうしようもねえとこまできちまったなって」

「ああ？」

忘れていいのか菱本先生は首をひねった。貴史も缶ジュース……オレンジだった……を一気に飲み干したのち、缶を両手でつぶした。

「俺なりに立村ときっちり話をして、場合によってはぶん殴る覚悟も正直あったんだ。けどそれは学校の中じゃなくて、例えばあいつの家とか、そういうところでのつもりだったんだ」

「ああ、そうか」

ゆっくり、ゆっくり相槌を打ってくれる菱本先生。事情聴取にしては、穏やかだった。

「けど、奈良岡から、やっぱりこのままじゃあまずいってことで、直接卒業式前にクラスみんなの前でけりをつけるよう提案されちまって、それで」

「奈良岡がか」

「そういうこと」

菱本先生は大きくため息を吐いた。

「俺なりに立村と話す段取りは組み立てていたし、奴の性格を考えるとまずは無事に卒業してからじゃねえかってことも考えてた。先生はあいつをクラスになじませたいってずっと言ってたけど、あいつのいじけっぷりはそう簡単になにかできるもんじゃない。だから、俺はあいつと高校に行ってもずっとしっかり付き合っ行って行きたいって思ってたんだ。だから、そのために、時期見計らってって思ってた。けど、奈良岡にせかされてつい、俺もかっとなったっていうか、そんな感じ」

そこまで一気に言い切り、貴史は一呼吸置いた。

「先生、立村が小学校の頃いじめられてたってこと、知ってるよな。あいつが班ノートに書く前から」

菱本先生は答えず、横でじっと貴史を見つめるだけだった。さらにたたみかけるしかなかった。

「それ恨んだ挙句、あいつが当時のクラス番長と決闘やらかして、相手に大怪我させて、そいでダッシュで逃げて、その後相手に後遺症残っちまって、ってことも知ってるよな」

知らないわけがない、そう思った。噂程度でも聞いているはずだ。

まだ菱本先生は何も答えず唇をかんでいた。

「その後、そのことを直接聞いた杉浦が、立村に被害者へ謝るよう要求して、奴、露骨に断ちまって、それで美里と古川のぞく女子たちに総すかん食っちまってってことも、知ってるよな」

「杉浦がか？」

初めて菱本先生は反応を示した。ということは、まさか知らなかったのか。

「そうだよ、だから、立村は女子たちに嫌われちゃったんだよ。杉浦のこと横恋慕して追っかけまわして大ひんしゆく買ったとかいろいろ噂あったけど、あんなの全部、大嘘だって俺たちD組男子はみんな納得してるんだ。あいつには言ったことないけど、それが本当のことだったからって言っても、俺はあいつのこと嫌うわけなんかねえし、他の連中も、美里も、古川も、みんなそうだ。けど、あいつそれを信じようとしねえんだ」

「羽飛、ちょっと待ってくれ。今の話、確認だが」

話の腰を折られた。

「一年の時の話だろう？ 立村が、杉浦に一生懸命アプローチしすぎて嫌われてしまったという話は、あれはもしかして、全くのうそだとお前ら解釈しているのか？」

「先生知らなかったのかよ。当たり前じゃねえの。そんなのとっくに一年終了の段階で片付いている問題だったの！」

——ちょい待て、菱本先生、まさか今の今まで、あの杉浦経由の噂を信じてたってことかよ！

もう自分の口も頭も抑えられない。手足だけはがっちりホールドしたまま貴史は勢いに乗って続けた。

「そうなんだよ、先生。立村はあの事件で思いっきり女子たちに誤解されちゃったんだ。俺も美里も、火消しはしたしそれなりに黙らせたつもりだけど、でもうちの女子たちだけには通じなかったんだ。そりゃそうだよ、杉浦がずっと言いふらし続けてたんだからな。けど、杉浦も被害者の友達だったんだから、そりゃ謝らせたっていうのも今ならわかるんだ。だから本当は俺が、あいつの首根っこひっぱってって、例の被害者んとこに連れてって謝らせて、その上で改めて友達になろうってはっきり言えばよかったんだ。けど、俺はそれしなかったんだ。あいつに気づかれないようにってそれなりに連絡網浸かっていわゆる『緘口令』っての？ひいたよ。先生たちにも気づかれないようにってな。けど、それは信じたくない奴には通じないんだよな。ちゃんとした、事実ってか、証拠ってのが必要だったんだよな。だからあいつが一生懸命クラスの連中に尽くしまくっても、がんばって評議委員長になっても、ばかにされっぱなしだったんだ。それ、あいつもわかってるから、ずっといじけ虫モード全開でうじうじしちまってたし。結局あいつは評議委員長からも落っこちてしまっただけで、今みたいにいるかいらないかわからない状態だろ？ 奈良岡、きっとあいつのことを何とかしたかったんだと思うんだ。だから俺のことせつついたんだ。班ノートのことをきっかけに立村に、俺がずーっと思ってたこと気づかせたかったんだ。でも、それ、ほんとは俺がずーっと前にやるべきことだったんだ。俺が、早く、あいつに本当のことを白状させて、すっきりさせて、それから親友づきあいすればよかったんだ」

「それを、立村に言ったんだな」

貴史の背中をさすってくれた。

「そう、先生の言う通り。ぜーんぶ言った。ぜーんぶ怒鳴った。けど無駄だった。あいつ、また俺から逃げようとしたんだ。ほんとはあそこで俺も、仕切り直してさあ次って持ってこうとすればよかったんだろうけどさ、けど、やっぱし、だめだった」

ガラスの机に両手を突いた。指紋がばりばりについた。

「どうすりゃいいんだって、もう俺わからねえよ」

「そういうことか」

菱本先生は肩をがっちり抱いてくれた。

「今までずっとひっかかっていたもんが、お前の話で全部謎が解けた。長かったな、三年近くもかかったってわけか。ったく、担任として俺は失格だなあ」

「何がだよ、先生、失格なんかじゃあねえよ」

「いや、お前らがクラスメートのために懸命にぶつかっていたことを俺はずっと知らん振りしてきたってわけだもんな。俺なりに立村のことを考えてきたつもりだったけれども、それよりも何倍も、何十倍も、あいつのことを仲間として受け入れてきていたんだな。よくがんばった。殴ったことはやっぱり校則違反だし土下座する必要はあると思うが、お前の心意気だけは絶対に伝える。いや、これからなんとかしてあいつに伝える必要があるんだ。羽飛、三年間、ほんとによくがんばった！」

貴史は首を振った。背中に回ったぬくもりの温度は、ついさっき立村を背負ったものは違う肌さわりのものだった。

「先生、けど、もう俺、遅すぎるかもしれねえよ」

「いや、遅いなんてことはない。あと二ヶ月あるんだぞ卒業まで！」

がしがし背中をたたいてきた。

「いいか羽飛。お前は立村に全身全霊で伝えた。それはよっくわかった。ただその伝え方が間違っていただけなんだ。これからお前のお母さんと、立村のお母さんがいらっしゃる。その時に今、俺に言ったことをそのまま、伝えてくれ。もちろん怪我の状況にもよるから許されないことも覚悟はしとけ。ただ、お前が立村のことをどれだけ大好きで、大親友だと思っていて、あいつのことを三年間大切に思っていたことはお墨付きだってことを俺が援護射撃で伝える。暴力さえなければ、羽飛、お前のしたことは決して間違っていないんだ。これからだぞ、正念場は」

ノックが響いた。菱本先生はすぐ立ち上がり、貴史のつぶしたジュースの缶をくずかごに捨てた後、「はい？」と返事をした。

「都築です」

「どうぞ」

扉を開くとそこには白衣姿の都築先生と、美里が並んで待っていた。

「立村くんの様子についてと、あと、清坂さんが」

美里は一礼し、すぐに中に入って都築先生を招き、その上で閉めた。

「私もあの現場にいました。羽飛くんだけではなく、私からも話を聞いていただけますか」

菱本先生は貴史をちらりと見て、すぐに美里へ答えた。

「ちょうどよかったよ清坂、羽飛の隣にまずは座れ」

都築先生のみを廊下に連れ出し、菱本先生が扉を閉めなおした後、美里は貴史の隣に回りこん

で座った。ちょうど菱本先生が貴史の話を聞いていた位置と同じ場所だった。貴史の顔をじっとのぞきこみ、まず一言だけ発した。

「立村くん、目が覚めたみたいだよ」

菱本先生は美里の分、ジュースの缶を冷蔵庫から取り出した。都築先生は入って来ず、三つ巴の事情聴取を改めて仕切りなおす形となった。

「まあ、心配だよなあ、清坂」

「慣れてます。大丈夫だと、思います」

妙なところで句点を入れるようなしゃべりかたを美里はした。

「長いつきあいだもんなあ。だいたいわかるか、あいつのことが」

「わかりませんが、ただ、私からすると立村くん、単に寝ちゃっただけだと思います」

——何お前のんきなことほざいてやんの、いざとなったら泣き喚くの美里だろが！

見えない手で貴史なりに美里の頭をはたいてやる。もちろん超能力なんてありゃしないので美里はちっとも答えない。

「都築先生も念のため確認したみたいですけど大丈夫だって、そんな感じで」

「まあ、頭だからな、念には念を入れてってとこだがな」

ふたりの会話から推測するに、立村が病院送りになる可能性が低くなったと考えていいのだろう。もちろんそうであってほしい。ただ親を呼び出すほどの大事であることも事実だ。背負った時に微かな反応こそあったけれども、貴史が呼びかけた時はずっと目を閉じていた。そのことがまだひっかかっている。

「いただきます」

缶を受け取り、美里は静かにガラスのテーブルに置いた。開けようとはしなかった。

「どうせなら清坂、お前もここにいるか」

「もちろんです」

あっさり答えた美里は貴史の顔を覗き込んだ。

「ってことは、親呼び出しということになるんですか」

「ああ、そうだな。立村のお母さんもいらっしゃる。理由はともあれ、この学校での暴力は校則違反で、それなりの処罰が必要になるからな。羽飛にも説明していたところなんだ」

「でも、それじゃ、附属高の内定は」

言いかけた美里に、菱本先生は置いたままのジュースを片手に取り、口をあけて手渡した。

「安心しろ。そういう罰じゃない。まあ飲め」

「酒勧めてるんじゃねえんだから」

思わずつぶやくと、菱本先生の手が軽く貴史の頭に飛んできた。痛くはなかった。

「つつこみできるようだ、もう少し事情聴取してもよさそうだな。羽飛、さっきの続き話せよ。いいな」

美里が来る前にある程度口走ったけれども、それは理路整然としたものではなかった。

ただ、どうしようもなくのどが詰まってあふれ出しそうでならなかっただけの言葉のみ。

今、美里が隣で見ている前でそんなこっぴどかしいことを繰り返すのは、なんとなく抵抗が

ある。うまい言葉が見つからずガラスのテーブルを見下ろし、透ける自分の靴の先を見つめていた。

「あ、そうか、もう聞いたもんな。それはそうと清坂、お前は羽飛と立村とのやりあいを教室で見ているということなんだがな、正直どう思った？」

意外と切り替え早く、菱本先生は美里に話を持ち出した。

やはり口をつけずに美里はまたテーブルにジュースを置いた。ちろと貴史を見やり、「ずっと、私たちが話し続けてきたことだし、どっちがどっちとも言えないと思います」「話し続けてきた？」

大きく頷き、美里は言い切った。

「喧嘩両成敗だと、私、思ってます」

何度か美里は貴史を横目で見ながら、話を続けた。

「卒業文集のことでもめるだろうってことは、先生が企画した時から私、覚悟してました。立村くんの性格から考えて嫌がるだろうってこともわかっていたつもりです。でも、立村くんのわがままを通すわけにもいかないし、三年D組のみんながまとまって卒業する方が優先かなと思って、そのまま進めていたんです」

菱本先生は何も言わずに美里に頷いていた。貴史に対しての姿勢とほとんど同じだった。正直、珍しかった。

「班ノートって一年の時のものしかなかったと思うんですけど、その中で立村くんが思い出したくなかった部分があって、本当はそれを省くつもりでいたんです。私も、貴史……羽飛くんもその時のこと覚えていたし、立村くんがいやな思いするのもつらいだらなって。でも、彰子ちゃん……奈良岡さんがそういう部分こそ本当は出すべきなんじゃないかって言い張って」

「奈良岡がか、そうか」

すでに貴史の中では苦手女子に分類されてしまった奈良岡彰子の顔が浮かんだ。決して悪い奴ではない、文集の話が出てくるまでは南雲にはあまりにももったいないお嬢だと見込んでいたのだが、もうそれは過去の話になりつつある。

「彰子ちゃんもきっと、立村くんがひとりぼっちになってしまうのをなんとか食い止めたかっただけなんだと思うんです。私も、一年前だったら彰子ちゃんとおんなじことしていたんじゃないかなって。けど、もう二ヶ月しかないし」

「二ヶ月か、お前らにとってそんなに短いのか？ 二ヶ月という期間は」

「短いに決まっています！」

思わずふたりで声がそろった。もちろん「短い」の部分だけだったが。

「いやあお前ら意外と悲観的な考えしてるよなあ。老けてるぞそれじゃあ」

菱本先生がひざをもみながら、さらに美里に問いかける。

「卒業まで、確かに二ヶ月を切っていることは確かだし、卒業したらみんなばらばらになってしまうのもその通りだがな。でも立村との間をなんとかするためには十分な期間だと思うがな、ふたりともそう思わないのか？」

「先生、俺たち三年時間かけてるんだぞ」

割り込んでやった。本能だ。菱本先生は首を振り、貴史にも顔を向けた。心なしかさっきふたりっきりで話をしている時よりは日差しがほんわかと顔にさしているような感じがした。窓辺に日が差したのかとちらと思うも、相変わらずの白い雪模様には幻と気づいた。

「まだ時間がありそうだし、話しとくか。羽飛、清坂。お前たちふたりが一生懸命立村のために尽くしてきたことはよくわかるんだ。あの不器用な立村をなんとかクラスになじませようとして、ある時は評議委員に押し込んだり、ある時は仲間内で噂を封じ込めようとしたり、大人から見てみずいぶん手の込んだやり方を考えているじゃないか。正直俺も、最近気がついたことばかりなんだがここまですごいとは思わなかったぞ。このまま社会に出たらお前ら、企業小説の主人公ばりに活躍できそうなイメージだけだなあ」

「何それ、企業小説って」

今度は貴史の方から美里を覗き込んだ。まだ手つかずのジュースをくすねようと手を伸ばすも、即座にはたかれた。やはり、もらったものは飲む気なのだ。肝据わっている。

「ただな、タイムリミットお前らの言う『二ヶ月』を切った段階でもうひとつ気づかねばならないことがあったと、そういうわけなんだよ、わかるか羽飛、清坂？」

同時に首を振った。それしかない。

「立村じゃない、お前らふたりの気持ちだよ」

——何言ってるんだ菱本さん？

美里も貴史に足で軽くけりを入れてきた。どつく意味のものではなく、「なんだろ？」の単語をつま先に詰め込んだだけの、あっさりしたものだった。

「気持ちって何ですか？」

声を低くして美里が問い返した。本当にわからないのだろう。貴史からするとなんとなくだがつかめてくるものがある。たぶんそれは美里自身の問題だ。断じて貴史のものではない。

「その前にまず清坂、ジュース飲め。飲みこれないなら羽飛とはんぶんこしろ。お母さんたちがいらっしゃる前に缶を片付けておきたいんだよ実は」

だんだん暖房が効いて来たせいか、のども渴いてくる。貴史は即座にテーブルのジュース缶を引ったくり半分飲み、美里に渡した。

「とりあえず、義務果たさねえとな」

「貴史、あんた、こういう時でも飲むもんは飲むのね」

珍しく怒鳴らなかつた。美里はわざとらしくため息をつく、受け取って一気に飲み干した。

「あーあ、おいしかった！ ごちそうさまでした！」

缶を菱本先生に渡し、再度水入りとなる。

——けど、菱本先生は今まで立村が杉浦を追い掛け回していたことを信じ込んでたんだなあ。

まだ美里はそのことに気づいていない。てっきり貴史も立村の横恋慕事件が一部の杉浦応援女子たちによるガセネタであることをすべての連中が気づいているものだという前提でここまできた。それでも無視する女子たちに対してずいぶんむかつく奴とあきれたりもしていた。しかし、肝心要の菱本先生が勘違いしていたとなると、ここから先はどう動いたらいいのだろう。

二本目の缶をくずかごに入れた後、菱本先生は椅子に座り直しひざを軽く開けた。同時に今度はふたりに視線をやりながら両手をテーブルに置いた。

「なぜ、今になって奈良岡がそんなことを言い出したか、わかるか？」

「なんとなく」

「いやいや、清坂、たぶん違うと思うぞ」

美里に対しすぐに牽制をかけると、菱本先生はさらに続けた。

「奈良岡はな、素敵な三年D組の思い出作りのために言い出したんじゃないな。そう俺は思う。むしろ清坂、お前のことを心底心配していたんだというように見えるぞ。もちろん奈良岡本人から口で聞いたわけじゃないがな、あの子の性格から考えるときっとそうだろう」

——そうきたかよ。

何回目だろう。美里と顔を見合わせるのには、わからない振りをするが、なんとなく奈良岡と話をしていた時にそんなふうな言葉を耳にしたような記憶がある。

「羽飛はどう思う？」

「まあなんとなく」

「貴史！」

びっくり眼の美里に貴史は向き直った。そうするしかない。

「美里が立村と付き合ってるってことでずいぶん女子からの風当たり強いんじゃないかあねえのってことは、まあ、ねーさん言ってたよな」

「うそ、そんなこと私、知らない！」

「古川も似たようなこと言ってなかったのかよ。あいつならもう少し下ネタくっつけて何か言いそうだけどなあ」

黙って首を振った美里は、すぐに菱本先生に噛み付いた。

「私、そんなことないのになんで彰子ちゃんが」

「いや、奈良岡の勘違いじゃない。本当は俺も、かなり早い段階でそんなのがあるんじゃないかな、と思っていたんだ。実は、なんだがな。ほれ、二ヶ月前ってのもなんだけどな」

ずいぶん菱本先生は「二ヶ月」という言葉にこだわる。

「まず清坂についてはこれがひとつなんだ。それと羽飛、幼馴染の心配ばかりするんじゃないかと、お前もだぞ」

「はあ？」

「お前にも、女子たちから風当たり強くなかったか？」

「例えば？」

「なんで羽飛は評議委員にならなかったのかってな、そういうことは」

「言われた」

いらいらするくらい何度も言われ続けた言葉だ。つい三十分くらい前にも、保健室で寝ているあいつからも。

「立村からも、耳たこ」

「やはりな」

「けど、これも俺が何度もそんなことねえって、何度も、ほんつとに何度も三年間」

「わかった。そういうことなんだ」

強引に菱本先生は話を終わらせた。うっすらと笑顔がにじんでいた。立村の様態がどうなのかはっきりしないというのに、ずいぶんと脳天気な態度だ。

「まず優先順位をつけることにしような。まずはさっきの張っ倒し事件。あれはどう考えても手を出した羽飛が悪い。ということでまずは謝れ。反省ももちろん」

「してるよもちろん」

急にせり上がってくるのだ元の塊。忘れてはいけないのに、つい美里交えて話しているうちにお気楽になってしまった自分をののしりたい。

「だがそれとは全く別の問題が残っているんだ。ちょうど清坂もいるし立村もじきに元気になるだろうし、それからでも遅くはないと俺はD組の担任としてそう信じている。二ヶ月あれば十分お釣りが来る内容だとな。今まで班ノートだとか文集だとかまどろっこしいことばかり試してきたんだか、まずは羽飛の土下座から始めるとするか。いいな、きっちりとさっき俺に言ったことをマイルドにして、その上できっちり謝れ。まずはそこからだ」

「先生、それなんですか。ほんつとに私、わからないんです。彰子ちゃんが私のことかばってくれたことと、二ヶ月で片付くってこととそのことがぜんぜん」

まだまだ美里は言い募っている。わかりたくないのだろうか、それとも本気でわからないのだろうか。窓辺の雪ががっちり外の景色を消してすりガラス状態に張り付いているのと同じように、美里の中にもあのようなフィルターがかかっているのだろうか。菱本先生が立村の過去について誤解していたような、レースのようなものが。

「美里、やめとけ。あとでどうせわかるだろ。どっちにしても」

「だって、変だよそれ」

「まずは立村だっつの、立村、あいつ、ほんつとに大丈夫なのかよ！ 先生、さっき都築先生が立村意識あるって話、していたけど、それってただ気がついたってだけじゃなくて、まじで動けるってことなのかよ、それはっきりしねえと俺だってどうしようもねえよ」

声が震える。そうなのだ。一番知りたところは実はそれなのだ。

「だから私も言ってるでしょが！ 大丈夫だって！」

「お前医者じゃあねえだろ！」

怒鳴りはしないが苛立ちだけは伝えたい。声にため息セットで混ぜて美里に答えた。美里の顔がまたぶんむくれ出すのを菱本先生も勘づいたのだろう。両膝をたたいて立ち上がった。

「羽飛、わかった。そりゃ心配だわな。俺も直接立村の様子をのぞいてくるから、まず安心しろ。ちょっと待ってろ。保健室行って来るよ」

それでもやはり、蛍光灯に照らされた菱本先生の顔にはほんのり笑っているようなところが見られた。先生が出て行くや否や、美里はまた貴史に尻ひとつぶん張り付き、

「あんた、ほんつとに私のこと信用してないでしょ」

「そういう問題じゃねえよ。親呼び出したぞ、親が来るってことはどうなるって」

「だから、何回説明したらわかるのよ。立村くんは大丈夫だから。いつものことよ。またいつも

のようにひっくり返って寝た振りして、私たちと口利かないようにしようって決めているだけよ。他の人たちは立村くんのいつものパターンにだまされてるだけ。私絶対そう思ってるから」
そこまで一気に言い放った。

「へえ、そこまで言うなら証拠なんぞあるんかよ」

「勘よ。あんたと一緒に、三年間立村くんとぶつかってきた経験からに決まってるでしょ」
なんでこうものんきなかわからなかった。本当なら大泣きしていいはずなのだ。美里はもともと立村の彼女なのだから。いくら貴史と親友だとしても、文句ひとつ言ってもいいはずなのに、なぜこうも落ち着いているのかが見当つかない。むしろ、保健室でも都築先生にはりついて細かく言い募っていた更科の方がずっと普通の反応に思える。

「更科くんねえ。あんなにぴりぴりしてたところ、初めて見たよ。それとあんたもだけど」
伝えると美里も頷いた。すぐ貴史へと矢印が向いた。

「打ち所悪かったら今頃救急車で運ばれてるに決まってるじゃないの。都築先生だって保健室の先生なんだから、変だったらすぐに気づくわよ。立村くんがいじけるかもしれないからただ気を遣っているだけよ。たぶん、すぐ起きてくるわよ」

もうしゃべるのも疲れた。貴史は無視して大きく深呼吸をひとつした。

——顔、見るまで安心できるわけねえじゃねえの。まったく、女子って都合のいいことばっか信じちまうんだらうな。

拳の痛みは消えている。でもすぐに蘇る。グーパーグーパー、何度も繰り返した。

「羽飛くん、一応立村くんの状況だけど簡単に説明するね」

現れたのはふたたび都築先生だった。菱本先生も一緒だった。足早に向かいのソファに腰を下ろした。菱本先生はどっかりと、隣の都築先生は比較的浅く。白衣のままだった。

「立村くんは意識あるわよ。それどころかすぐに起き上がれるみたい。本当に軽い脳震盪を起こしていたらしいけど、すぐに元に戻ったし特に打撲もなかったわ」

そこまで説明した後に、断言した。

「悪いけど、ご家族呼ぶほどでもないわよ、あの程度なら。菱本先生には申し訳ないんですけど、ちょっとぶつかって腰抜かして動けなくなっただけ、と判断していいんじゃないでしょうか。たぶんあまり立村くんはそういったぶつかり合いの経験が少なくて大げさにこけてしまった可能性があります」

他人事なので当然だが、ずいぶんこの人もあっさりし過ぎている。

「ほら、わかっただろ。保健の先生がそこまで言うならまず大丈夫だろ。ということで、都築先生、大丈夫そうならこの場に立村も連れてきてもらえますか」

「ええ、いいですよ。お母様がいらしてからの方がよろしいですか？ それなら、連絡もらえればすぐに連れていきますよ。今、三年の男子生徒が側で様子見てますから」

——様子見ているってことは、つまりそういうことだろが。

「わかりました。それでは僕もこれから行きますんで」

美里はあっさり納得している。菱本先生も問題ないと判断しているかのようだ。しかし目の前

に立村がひょっこり現れない限り、どうしても信じたくないと心で叫んでしまう。顔を出されたからといって、自分のすることはひとつ「悪かった！ごめん！」しかない。その言葉を発して果たしてあの氷の眼差しがころころと溶けて転がるだろうか。それは考えられない。むしろころころ転がったものがガラスの破片みたいに散らばってさらなる大惨事を起こしそうな気がする。子ども頃読んだアンデルセンの童話を思い出した。あの話はなんだっただろう。確か「雪の女王」だったろうか。

「それじゃ、まずお前らのお母さんたちを迎えに行ってくる。それからだ。都築先生の話通り立村はすぐに戻って来れそうだから、ここに連れてくる。それの方が羽飛も落ち着くだろ？ もう少し待っているよ」

そそくさと菱本先生、都築先生は部屋を飛び出していった。ふたりとも特に隠し事をしているような気配はなく、むしろあきれかえっているかのようにも聞こえた。もっとも相手が誰かはわからない。

美里の勝ち誇ったような「ほーらね」視線が痛かった。心配症って決め付けているかのようだ。本当ならもちろん安心したい。けど、それが少しだけ許せないだけだ。

「やべえよ、立村、ほんと、まじで」

口に出してみた。びりり、としびれるような言葉だった。

大きくため息をつき、美里は貴史の肩をたたいた。菱本先生とは違った感覚だった。立村を背負った時のか弱い指とも異なっていた。

「そんなあんたがあせることないわよ。もっとしゃきっとしなさいよ、しゃきっと」

「美里、お前なあ」

「小学校の頃なんていつもだったじゃないの。大丈夫よどうせ、うちの母さんも一緒にくっついてくるわよ」

「そっか、そうだよなあ」

しょうがない。ゆっくり頭に手を当ててみた。後頭部をたたいてみた。ここを打てばどのくらい脳に影響が出るのか予想つかない。今は大丈夫でも、後で、と都築先生か更科かどちらかがしゃべっていなかっただろうか。記憶をたどってみるがあいまいすぎてわからない。代わりに美里の機嫌悪げな……当たり前だが……表情に何かをぶつけてやりたくなった。

「お前さあ、一応あいつの彼女だろ。もう少し、俺に文句言うとか、けんかをやめてとか、普通言うだろうよ」

あの時、美里も言いたいことはあったはずだ。貴史の目から見てそれは明白だった。ただ、奈良岡を黙らせることが二人の目的になってしまった以上頭が回らなかったのも当然といえば当然だ。もし言い合いの途中で美里がぶちぎれていたらどうなっていただろう。それこそ三つ巴のバトルに発展していただろうか。可能性がゼロとは言い切れない。それとも抱きついて「お願い、もうやめようよ」とばかりお涙頂戴パターンで乗り切ろうとしたらどうか。美里は何一つしなかった。ただ黙って班ノートをチェックするだけだった。

「私はそんな甘くないの。おかしいことはおかしいってはっきり言うの。彼氏であってもなくて

もよ」

ということは、美里なりに貴史のやり方を受け入れていたということか。それなら納得だ。ふと肩をこちらから組みたくなった。そんな雰囲気ではないのももちろんやめた。菱本先生相手とは違う。曲がりなりにも美里は女子なのだから。

いや、女子だけど、やはり女子っぽくない。それが美里だ。

「けどなあ、いくらなんでも『急所だけははずせて言ったでしょう』はねえだろ？」

「事実じゃない。あんた、ちゃんとそれは守ったみたいだけどさ」

「かわいくねえなあ」

「鈴蘭優とは違うからね」

ぽんぽん会話が続けていく。美里はいきなり話を切り替えた。

「あのさ、『砂のマレイ』の作者失踪事件あったじゃなあい？ 半年間連絡つかないから、スタッフさんたち『砂のマレイ』の続編映画できなくて困ってるんだって！ 貴史、あんたその後の話、知ってた？」

——俺たちも三年間、立村と連絡つかない状態みたいなもんだよな。ったく。

一瞬そんな思惟がよぎって消えた。すぐ忘れた。

立村への不安も『砂のマレイ』作者失踪事件半年後の現実を美里と語っている間は忘れていられた。しゃべり続ける美里に、貴史はひっぱられていく。美里は貴史を『砂のマレイ』ネタでもって包み込もうとしているようだった。

部屋正面の窓はすでに雪の白さで二重、三重に覆われていた。

「砂のマレイ」の原作者が失踪した事件については、ワイドショーでも「アガサ・クリスティの失踪事件を彷彿とさせる」とかなんとかいろいろ取りざたされていた。もちろん貴史も美里たちとその話題について熱く語っていたけれども、すでに旬を過ぎた内容でもあった。繰り返しになるものばかりを、それでも今は語りたかった。

一通り報道されている情報をだらだらしゃべっていたが原因について触れた時、

「さあ、けどいろいろあるみたいだぞ。金の問題だとか、愛の逃避行だとか」

「なによそれ、愛の逃避行って笑える」

「『週刊アントワネット』によればだ、アシスタントと作家との間で男の奪い合いとなり、結果、作家の方が逃げ出したと」

さらっとひっかかりのあるキーワードが滑り出し、あせった。「週刊アントワネット」とは地元中心にシェアを持つ青澗の経済情報誌で、挟み込まれたグラビアも過激なものが多かった。貴史も男子の端くれゆえもちろん知らないわけではない。というよりもむしろ、立村の父が編集に携わっている雑誌という方が記憶にずぶとく残っている。

美里は何も感じないといった風に流していた。釣り針投げたつもりではないけれど、食いつかれなくてほっとする。

「どうでもいいけどあんた、ファンでありながら作者の名前言えないってのはどうかと思うなあ」

「そんなのわかりきってること言わねえでもいいだろ。それにしてもなあ、原作とはぜんぜん違う話に持ってくんだろ？ あの最終回以降どうやって話、つなげるつもりなんだろな」

「知りたいよねえ。私も、想像つかないよ」

しばらく美里を相手に、貴史は「砂のマレイ」映画版のオリジナルストーリーをつむぎだすことに専念した。そうやっていけば忘れていられた。」本当は「週刊アントワネット」なんてキーワードを口走らなければよかったのに。悔いてもしかたない。乗ってきた美里にまかせてふたり、語りつくした。

ノックが響いた。ふたりで顔を見合わせた。

「来たのかな」

「たぶんな」

返事もせずにまずはそのまま振り返る。同時に我が家の母、および美里の母、いわゆる「母ちゃんズ」がよそいきの格好で立ち尽くしているのを見た。エスコートしているのはもう少しで新郎となる菱本先生、なんて軽いことは言えなかった。美里がひじでつつく。つられて立ち上がり、一緒に頭を下げた。もちろん菱本先生に対してだった。

「たあちゃん、どうもね」

まず美里の母がすまなそうな顔で声をかけてきてくれた。それに答えようとする前に母が大股で飛び込んできた。隣の美里にはまず、

「みさっちゃん、ついていてくれてありがとうね」

頭をなでながらまずはねぎらい、次に貴史の顔をじっとにらんだ。顔を背けたが遅かった。

「それにしても、貴史、ほら、こっち向きなさい」

あっという間に後ろに回り、思いっきり貴史の尻を張り飛ばした。全力投球、としか言いようのない迫力だった。つんのめりそうになり、「おととと」とバランスを取ってこらえた。別に受けを狙ったわけじゃない。なのに身体が笑いを求めてしまったようだ。ぶん殴られることは覚悟していたけれど、何も尻ってことはないだろう。さすっても簡単に痛みは消えない。

「いってえ」

「人様に手を出すなっていつも言ってるでしょうが！」

「ごめん」

どちらにしても今回は貴史が悪いのだからしかたがない。尻をかきながら様子を伺ってみた。思ったよりも母ふたりの様子は落ち着いているように見える。もし立村に万が一のことがあればそんな流暢なお尻ぺんぺんではすまないだろう。美里の「たいしたことないのよ」発言も、信じていいのかもしれない。

菱本先生もさすがに笑わずに母の言動を見つめていたが、一段落したと見てとったのか、

「とにかく、ふたりともそれぞれのお母さんの隣に行きなさい」

まずはそれぞれの母の隣に腰を下ろした。ため息をついてまた何か説教しようとする母をさえぎり、今度は美里の母が娘に対して質問攻めにしている。

「美里、それにしても女の子なんだから、あんた止めようとしなかったわけ？」

「女の子であってもなくてもすべきことはいっしょでしょ」

「事情はさっき職員室で聞いたけどね、あんた、なんて言ったのよ。ねえ、たあちゃん」

やはりある程度の説明はもう受けているようだった。美里の母だって、貴史が傷害事件やらかした後に大事だとわかっていたらこんな質問投げかけてこないだろう。つい、ぽろっと軽く答えてしまった。

「あの、急所狙うのはやめろって」

隣で母が吹き出した。「みさっちゃん、鋭い！」とか言いながら今度はけらけら笑い出す。いったい何なんだろうこの母ふたり。全くもって、学校に呼び出された現状を理解していないかのようだ。本当に信じていいのだろうか、立村がたいしたことないということ。

「清坂、よく、知ってるなあ。急所、狙ったことあるのか」

「女子は体力的に劣ってるのはしょうがないし、身を守るためにはしょうがないです。もっとも、青大附中でそんな心配ないですけどね。紳士であれって言ってるし」

言い放つ美里に菱本先生は笑いをかみ殺すことに失敗し、とうとう声を立てて笑い出した。ひとり頭を抱えているのは美里の母だけ。下ネタに免疫なさそうなタイプだということは貴史もなんとなく感じていた。娘がまさかそんなことさらっと言い放つなんて思いたくないんだろう。わかるわかる。しかし、この幻想は早いうちに断ち切ってもらった方が今後のためだとも、貴史は思う。心底真実味をこめて言い放ってやった。

「うそつけ」

——男の急所なんて肉体的にも精神的にもどっちも狙いたいんだろが、お前は！
さすがに、菱本先生および美里の冷ややかな視線にこれ以上の突っ込みは差し控えた。

詳しい事情はようやく菱本先生によって教えてもらえた。

「先ほど職員室でもお話した内容の繰り返しになりますが……」

まずは立村と貴史との小競り合いについて簡単にまとめた。ものすごくかんたん、である。一言も「班ノート」とか「文集」とか「いじめ」とかそんなキーワードは出てこない。単なる「口げんか」、なんと四文字でまとめてしまっている。

「貴史くんからもきちんと確認を取りましたが、要するに以前から立村くんいろいろなアドバイスをしたいことがあって、それを伝えようとしたところ口論になってしまっただけなんですね。つまりは、ただ、やはり年頃の男子ですからかっとなると見境なくなってしまう時もやはりあるわけでした」

だろ？といった風に菱本先生が貴史の顔を見ながら頷く。もちろん頷き返す。

「廊下でもう一度話し合いをしようと思いましたが、なかなかそれもうまくいかなくてつい、手が出てしまった、といった状況のようです。そうだな」

また問われる。大きく頷く。

「この件については他の同級生たちからも状況を確認しましたが、貴史くんが立村くんに言いたかったこと自体は特に問題のあることでもなかったようです。むしろ、貴史くんは立村くんと友達でいたいという気持ちから出てきた発言だったようです。ただ、こういうことは相手がありますから、準備ができていないとなかなか受け止められずらいところももちろん出てきます」

かなりかいつまんだ形での説明を行った後、菱本先生は締めに入ろうとした

「つまり、今回は、子ども同士のけんかで勇み足、というところなんですよ。ですから本来でしたらおふたりにいらしていただく必要はないと、相手方のお母さんもおっしゃっているのですが」

せっかく一番確認したい「相手方のお母さん」のところで美里の母が割り込んだ。

「要するにあれでしょうか？ たあちゃんとその、立村さんのお子さんとが口げんかして、その拍子で一発お見舞い」

美里に脇で「黙っててよ！」と制止されている。ナイスプレイと言いたいところだが、この「母ちゃんズ」はいわゆる「アンとダイアナ」的心の友……美里談……なので妙に結束が固い。子どもたちの頼みなんか長年の友情には歯が立たない。

改めて菱本先生は立村の状況を語りだした。ありがたい。

「いや、実際は小突いた程度でしょうね。ただ、その際打ち所がわるいんでないかという倒れ方をしたので、僕もつい、先走ってしまった次第で」

「で、その立村くんというお子さんは」

「大丈夫です。さっき保健室で確認したところ、まったく問題がないようです」

「でもやはり、私どもの息子がしでかしたことですからきちんと謝らないと」

——それだけはっきり言ってくれよ先生。

突然身体が震え出す。寒いからではない。膝がかくかくする。足が母にぶつかると同時に今度は貴史の母が菱本先生に食いついた。顔を覗き込むとどうも真剣な表情で頭を下げようとしている。さっきまで美里の「急所発言」に盛り上がっていた同一人物とは思えなかった。急に我に帰った。こんなふざけたこと、してられない。

「俺も、立村にきっちり謝ります。あいつ、大丈夫なんですかほんとに」

念を押した。本当に知りたいことを結局まだ、聞けていないのだ。菱本先生は膝を開き、ぽんと打ち、にやっと笑った。

「ああ大丈夫だ。たまたま腰を抜かしたただけだと言ってたぞ」

美里も確認するかのよう、繰り返した。

「腰を、抜かす？」

「要はバランスを崩してしりもちついて、ぱたっと転がっただけだってことだ。打撲もなければ特に何かあったわけでもない。すぐに羽飛が保健室に運んだし、特に問題はないぞ。安心したか」

「別にそんなわけじゃないですけど」

——嘘だ。お前さっきまであんなにクールに振舞ってたくせになんだその顔は！ おい、「砂のマレイ」の作者愛の失踪事件なんて夢中でしゃべくっていたくせに、なんだよおい。

どうみても美里の顔は、嘘まったくない、全身脱力状態にしか見えなかった。こいつもやはり、立村の本当の状況がわかっているように見えていなかったのだろう。結局大人たちしか本当のことがわからず、ずっと子どもの貴史や美里だけが右往左往してただけなのかもしれない。

「ですので、子どもたちがちょっとだけやんちゃし過ぎただけというのは、立村くんの親御さんもよく理解してくださってるようです。ただ、念のためこれからこちらにいらっしゃるそうですので、もしすっきりしないようでしたら、その時にでも」

「ではその時に、お詫びをさせていただきますが、やはり何か、その、ねえ、そうですねえ、やはり、程度がどうにせようちの馬鹿息子が手を出したことは事実、きちんと謝りたいものですね」

母が背筋を正し、頭を下げている。そうだ、謝ること、もちろんそれは許されようがしまいが、きっちりする。親に言い訳されなくても、もちろんだ。

——立村の母ちゃんが来るのかよ。

貴史が思い出すのは、中学二年の秋に起きた立村との小競り合いだった。

単純に言ってしまうと、立村が美里と別れようとかわけのわからないことを言い出し、その一方で貴史にも今に近いような距離を置こうとしたことがきっかけだった。

美里のかつての親友だった藤野詩子、立村の母がかかわっているという日本舞踊関係のイベント、発表会会場にて立村を引っつかみ、軽くパンチを食らわせたといったものだった。いわば、今回のリハーサルといってもよい。貴史なりにあの時は、立村の扱いに迷った挙句、自分から積極的にフォローしていくことで何とか収めたはずだ。立村もあの時に限っては了承した。つい

でに言うのと美里もそれなりに立村の機嫌を取り結び、現在に至るまで「公認の恋人」を守り続けている。

その時にたまたま顔をあわせたのが、立村の母だった。

厳密に言うとその前にも一度、「どうみても姉さんだろ」とつつこみたくなるような立村の母を見かけたことがある。家庭事情もあって立村は母のことを隠したくてならないようだが、いかんせん自分の母、美里の母、その他同級生の母と違う異様な若さと派手なスーツに目がくらくらしてしまい、永遠に忘れられない領域に記憶が刷り込まれてしまった。かなり、厳しい人だということは立村本人から聞いている。

今話を確認する限り、立村の母は貴史をののしったり責めたりする気はなさそうだ。親を呼ばなくてもいいといった発言は恐らく、貴史を前にして菱本先生が職員室で電話をかけた時に出てきたものではないだろうか。それを押し切って貴史の母プラス美里の母がここに鎮座ましているのは、ひとえに菱本先生の「校則違反」を正す為、に他ならない。

——そりゃ、怒られねえほうがいいけどさ、けどな。

貴史が立村の母と二度目の顔合わせをした時、結構愛想良くお弁当をくれて、笑顔で見送ってくれたはずだ。本当だったら立村の親友として印象よく残っているはずと信じたい。少なくとも自分の息子をぶん殴った相手を、親友と認めないなどといったことは言い出さないと信じたい。それだけは勘弁してくれと願いたい。

——すっげえべっぴんさんだったよな。母ちゃんじゃなくて、姉ちゃんだぞありゃあ。

いきなり美里の母がすっとんきょうな声で身を乗り出した。美里の目はまんまるだ。止めようにも止められそうにないようだ。

「あのう、失礼ですけれど、その立村さんの奥さんは、お若い方なんですか？」

「母さん！」

「黙ってなさい！ とにかくあの、お若い方という話をうちの娘から聞いていたものですから、かえって私どもの話し方だと不愉快になられるかしら、なんて心配になりました」

「失礼よ、お母さん黙ってよ！」

「うるさいのはあんたの方、とにかく黙って！」

「こう言ったら失礼ですけれど、お仕事されてらっしゃってかなり先進的な方と伺っております」

「そんなこと言ってないじゃない！」

——ちょっと待てよ、おい、おばさんこんなところで自分の娘の彼氏情報を根掘り葉掘り聞くのはやめろって！

そうだ、前から美里がぐじぐじ言っていた通りだ。立村のことを「品山のお坊ちゃん」だとかなんとか言っていて、美里と付き合っているらしいということをかぎつけつつも暗に反対めいたことを匂わせてという、あれだ。美里もそれに気づかないほどアホじゃない。懸命にテーブルの下で足をけりつけている。残念ながらガラスのテーブルなのでつま先の攻防は丸見えだ。これはまずい。助太刀するしかない。身を乗り出し美里の母に声をかけた。

「あの、立村の母さん俺会ったことあるけど、そんな怖い感じじゃ。いや、ちょっと、怖い感じかも」

「だけどいい人だ、そう続けたかった。まあ「怖い」と思われなくもない人ではあるから訂正したいところ。息子の立村は心底震え上がっているのが現実だ。」

母ふたり、顔を見合わせた。美里の母はもう、好奇心スイッチが入ってしまい作動停止不可能ということがよくわかった。助太刀大失敗、面目なし。

「そうなの、たあちゃん、その立村くんて子は、厳しいしつけされてらっしゃるってことだものねえ」

美里の母は身を乗り出すように貴史へ頷きかけてきた。この人がなぜ、親友の息子がしでかした大ポカにこんな熱心になることができるのか不思議だ。いや、娘が「品山のお坊ちゃん」に手をつけられたということが許せないのかもしれない。実際は全く手もなんもついていないのに。聡子姉さんをはじめとして、立村に対する評判が清坂家であり芳しくないとは承知している。だから美里は一切立村への想いを自分の中に封印している。かといって菱本先生をはじめとして全く情報が漏れないわけもなく、ただ立村自体の性格が把握できなくて、今回ラッキーとばかりにくっついてきたというわけだろうか。

用心深く貴史は答えた。立村は自分の親友であって、余計な文句は言わせたくない。

「うん、まあそうらしいし」

今度は貴史の母が顔を覗き込み、唇を少し尖らせるようにしてつぶやいた。もちろんトーンは落としたままだ。加害者の母だから。

「いいところのお子さんだから、うちのがさつな息子と話が合うわけないとは思うのですけれどもねえ。みさっちゃんもねえ、うちの貴史じゃあ、やっぱり、困るわよねえ」

「母ちゃん、余計なこと言うんじゃないねえ」

貴史はそれだけ言い返して口をつぐんだ。何度も家で大喧嘩した内容をここで再現させる気なんてなかった。立村が「品山のお坊ちゃん」で、貴史には不釣り合いな友達だということを懸命に刷り込もうとするその態度が気に食わない。ぶちぎれて怒鳴り散らし、父にぶん殴られて部屋にこもったことだってある。立村は、今こそ縁を切られる寸前だが貴史としては絶対に繋ぎ止めた相手だ。いじけぐせがあるし、自信なんてからっきしもってないし、おどおどしているし、いきなり友達である自分たちから逃げ出そうとするところもある。はっきり言って何発でもぶん殴りたい。それでも、あいつが自分で貴史や美里に好かれたくて一生懸命努力している姿を三年間見つめてきた。今更誰がそんな奴を捨てられるというのか。たとえあいつが逃げ出したって、とことん貴史は追っかけてやる。わかるまでとことん、話したい。それが立村上総という奴なのだから。

母ちゃんズがしつこく貴史に話しかけてくるのをすべて無視しているうちに、突然ノックの音が響いた。母ふたりが現れた時とは違う、もっとかっちりした音だった。

菱本先生が姿勢を正した。つられて貴史および美里、母ちゃんズも両手を膝に乗せて余所行き顔をした。

「はい、どうぞ……立村くんのお母さまです。どうぞ、お入りください」

菱本先生の返事前に扉が開いた。あわてて立ち上がった菱本先生を優雅に見つめたその主はやはり、立村が日々恐怖し振り回されているベっぴんさんそのものだった。

背はめちゃくちゃ高い。しかもハイヒール履いている。長い髪をひとつにまとめ、さらりと流している。しかもその髪の毛が蛍光灯の光に反射してつやつやし過ぎている。シャンプーのコマーシャルに出てくるお姉さんのようだ。

顔はもちろん、真っ赤な口紅で決めている。どうみても自分の息子が友達に殴られて駆けつけてきた母親の顔には見えなかった。母ふたり、ぽかんと見つめている中まずはすべきことをしなくては。美里に向かい顎をあげてみた。気づいたら立つだろう。

全員丁寧に頭を下げた。立村の母らしきベっぴんさんもまた頭を下げ返した。菱本先生にまた女王陛下……見たことないが……のごとく頷き返し、次に美里へ視線を向けた。美里に向かってまた微笑み返し、耳元に何かをささやきかけた。同時にまた礼をする。美里もぴくんと身体を震わせて、挨拶らしきことをした。

次に、ベっぴんさんは菱本先生をふくめそこにいる全員を見渡し、すっと背を伸ばした。片手には黒い小ぶりのバックと紙袋がぶら下がっていた。

「この度はうちの上総がみなさまにご迷惑をおかけしたそうで、誠に申し訳ございません」

最敬礼、九十度。立場逆転としか思えない。どうみても被害者が加害者にする礼ではない。

硬直していた貴史の母が、いきなり片手で頭を押さえつけようとした。

「いえ、あの、うちの息子の方が、ほら、貴史頭下げなさい」

急いで下げると立村の母はすぐに貴史の母に近づき、両手で紙袋を差し出した。

「いいえ、私のしつけがいたらなかったせいです。申し訳ございません。どうか、みなさまで召し上がっていただけますよう」

どっちが悪いのかわからなくなるようなその振る舞い。ぞわりとする。頭を上げると今度はベっぴんさん、貴史にゆっくり頷き微笑んだ。どう考えても自分のかわいい息子を殴りつけた奴に対する扱いとは思えない。恐ろしい。何が怖いのか一瞬のうちに理解した。あの目だ。息子の立村に共通する氷を詰め込んだような、あの眼差しだ。

「立村さん、あの、それはそういうわけでは」

状況を把握するのに時間かかったのか、菱本先生がようやく割り込んできた。しかし甘い。立村が日ごろより震え上がっている母の威力を貴史は目の前でじっくり見せ付けられることとなった。ベっぴんさんは改めて菱本先生にぴしりと言いつつ放った。

「先生、どうかこの場は、私に免じて、お詫びさせていただければと存じます」

とどめの最敬礼を菱本先生に向けて行った後、ベっぴんさんこと立村の母は菱本先生にエスコートされて上座……いわゆるお誕生席……に腰を下ろした。あれだけ丁寧に頭を下げたにもかかわらず、上座に案内されることには抵抗がないらしい。

——まじ、この人、怖いかもしんないぞこりゃ。

紙袋の押し付け合いが立村、および貴史の母の間で続いていた。

気がつかなかったのだが、貴史の母もちゃんと近所の和菓子屋で菓子折りを用意してきたらしい。箱は想像以上にでかい。立村の母が持ち出した菓子折りらしき袋もこれまたやはりでかすぎる。こちら包装紙からするとかなり有名でめっちゃうちゃ甘くてうまい和菓子屋の奴だと予想はつくのだが、もちろん受け取りたくない気持ちもわかる。第一反対だろう。受け取るべきは立村の母だろう。

かたくなに断り続ける立村の母は、さらに信じがたい言葉を連ねた。

「私の方こそ、うちの馬鹿息子が貴史くんによくしていただいているのに失礼なことばかりしているようで申し訳ございません。今からみなさまに、お願いがございしますが、よろしいでしょうか？」

他の連中がみなあっけにとられている。立村の母が何を言い出すのか、もう予想がつかない。頭を下げればいい話ではなくなっている。それどころか、貴史の正義が認められそうな予感すらする。いったいどうすればいいのだろう。美里の様子を伺う余裕すらない。

展開についていけない菱本先生が懸命に軌道修正しようとしている。無駄な努力だった。

「立村さん、息子さんの方ですが特に打ち所がわるいわけではなくて、少し子どものけんかが」

「ええ、よく存じております。この件はすべて、うちの上総の問題です」

——ちょい待て、やはりこれって立村が悪いことに、なるのか？ まさかだろ？

まだ話を続けようとする立村の母に、さっと割り込んだのは美里の母だった。

「うちの娘がお世話になっているようで、恐れ入ります」

申し訳なさそうに頭を下げてはいるけれど、その眼差したるや実に怖い。別の意味で腹の探り合いをしているように見える。例の「品山の坊ちゃん」の親がここにいる、どういう教育をしてきたのかをじっくり観察するチャンスがきたわけなのだから当然といえば当然だろう。隣の美里が顔を真っ赤にしたままうつむいている。さすがにここで親に蹴りを入れるほど腹は座っていないらしい。

「いえ、美里ちゃんのおかげでどれだけあの馬鹿息子が人間らしく成長したか、そう考えると涙が出てくるほどです。本当に、ありがとうございます」

「こんなおてんば娘が、お宅の礼儀正しいお坊ちゃんに何か失礼でも」

「いいえ、あの馬鹿息子をきちんと一対一で話のできるような人間に育ててくださったのは、美里ちゃん、貴史くんをはじめとする青大附中のみなさまのおかげ。本当にありがたく思っております。それで、先生、お願いがございしますが」

穏やかに、丁寧に。しかし菱本先生に向き直った瞬間声のトーンが一オクターブ低くなる。凄みが底に流れるかのような声だった。

——立村、お前がどれだけおっかさんにびびってたのか、なんかわかるような気がするぞ。仲直りしたらそのこともしゃべりてえよ、な、立村。

お誕生席に座りなおし、立村の母は言葉を選びつつゆっくり話し始めた。。

「うちの息子のことですが、菱本先生もご存知の通り、内向的と申しますか人嫌いと申しますか、いろいろとコミュニケーション能力が欠けているようです。この点については私も反省すべきところがございますし、何よりもあの子の側から離れざるを得なかったという事情がございますので何も言い訳できないところなのですけれども。ただ、青大附中のみなさまのおかげで少しずつですがあの馬鹿息子も大人になってきているようです。今までは一切、何を言われても泣いていじけることしかできなかつた息子が、まがりなりにせよ自己主張できるようになり、一対一で友だちと喧嘩できるようになり、恋もできるようになり、本当にここまで育てていただいた先生には感謝の気持ちしかございません。ですので、今回の件に関しましては、感謝の気持ちこそあれ、誰ひとり責めるつもりなど一切ございません。その点だけ、ご承知のほどを」

——まじかよ、この人、正気かよ、ってか、なんだこりゃ。

もう、一言もない。母が隣でまだ「加害者の母」として割り込もうとするが、
「いえ、ですからその件とはまた別として」

あっさり無視された。演説は続く。菱本先生のあったかいお説教なんてもう勝ち目などない。本当だったら立村を目の前にして語りかけるための原稿を頭の中にこさえていたんじゃないだろうか。立村がなぜ、ここまで菱本先生を嫌うのかほんの少しわかったような気がした。こんなおそろしい母に十二歳までしつけられていて、現在も定期的に教育的指導を行ってきたのだから、拒否反応ばりばりでも当然だ。

——うちの母ちゃんのところ、生まれてきてよかった。まじで。

「今回あえてこのような席を設けていただいたのは、ひとえに私の、教育的事情に過ぎません。うちの息子には、残念ながらまだ、身勝手と申しますか、いじけた根性が染み付いているようです。先生もご存知でしょうが、自分が変われば世界が一気に変わっていく、その現実を受け入れられず他人が変わるのを指くわえて待っていると申しますか、そういった甘えがまだあります。本来でしたらそういう意識を矯正するのが親ですし、私が全身全霊で正すべきなのですが、ご存知の状況ゆえにそれもままなりません。もちろんあの子の父親にあたる人とも連携を取っておりますけれども、こういう目に見える形できっちり学ばせるのは至難の業でもあります。ですから、今回、申し訳ないのですけれども」

いきなり菱本先生に向き直った。桃太郎が家来の犬に命令するがごとく。

「はっ、はい」

完全にポチと相成った菱本先生。硬直している。

「今からあの子に、親として伝えるべきメッセージを全力で伝えます。おそらく親と子、母と子、ふたりきりのところでは甘えもでるでしょうし、私も感情的になる恐れがございます。ここでしたらあの子の信頼しているお友達がいて、上総のことを本当の意味で心配してくださる大人たちがそろっております。あの馬鹿息子も逃げ場がないまま、もしかしたらわがままな本性をさらけ出すかもしれませんが、それでも決して嫌われることなんてないのだという事実を受け入れることができるかもしれません。簡単なことではありませんし、この一度きりですべてが変わると思っております。ですが、まったく何もしないよりはましだと認識しております。どうか

、今、この場で、親としての言葉を伝えることをお許しいただけますか？」

立村の母は再度ゆっくりと面々の顔を見つめ、最後に菱本先生へ問いかけるような眼差しを向けた。はっきりとした口調で、間違っているとらえる余地のない言葉と凜とした響きに生徒相談室は包み込まれた。呼吸すら許されないような気がしてきた。

——許せないなんて、誰が言えるってかよ。

発言すらできないこの空気をあっさり破ったのは更科の甘ったれた声だった。

「先生、立村くん連れてきました」

扉が開いた。立村がうつむいたまま立ち尽くしていた。後ろに更科らしき奴がちょろちょろしていたがすぐに見えなくなった。

「上総、早くこっちに回ってきなさい」

べっぴんさん……立村の母は自分の息子に呼びかけた。

声音が完全に変わった。今まで発していたものとは違う、凄みのある声だった。

見ものだったのは立村だけではない。貴史と美里の母ちゃんズの視線たるやもうすごかった。隣にいる母がまずじっと様子を伺うようにして見上げ、美里の母も礼儀なんかどうでもいいといった風にまずは「観察」している。まるで動物園の珍獣公開状態だ。立村自身はただぶっきらぼうに突っ立っているだけなのだ。

——まじ、大丈夫そうだな。

母ちゃんズの様子に目が行く、ということは、立村も特段怪我をしているというわけではなさそうだった。初めてさっき飲んだジュースの味が蘇ってきた。甘い。

「ほら、貴史」

つついてくる母。何度か立村も貴史の家へ遊びに来たことがあるし、全く面識がないわけではない。ただ中学二年以降は奴の委員会関連にかこつけてご無沙汰しているのも事実だった。見た目は大して変わっていないと思うのだが、母ちゃんズからしたらそうでもないのだろう。

立村はしばらく立ちすくみ、まず自分の親を見据えた。ガンつけたという感じだ。その後表情を少し緩めて……もちろん自分の母親比でだが……美里と貴史の母をそれぞれ見つめた。さすがに立村観察会もまずいと思ったのか、母ちゃんズはそれぞれ静かに礼をした。ただ座ったままというのはいかなるものか。しかも目を逸らさないというのは。

——あーあ、やばいぞやばいぞ、どうしよう俺。

歩いてこれてしかも後遺症もなさそう、安心したとたんチャンネルが切り替わり、貴史の頭は今後の友達付き合い対処法を考えることに専念していた。

まずはやるべきことをやるしかない。けじめだけじめ。先頭切るのは自分の役目。

立ち上がった。きょうつけのポーズで、直角に頭を下げた。最敬礼。

「たあちゃん」

美里の母が何かを言っているが無視だ。

「立村、さっきはごめん！」

顔を見ることはできなかった。とたん、頭の上を誰かがぎゅっと押さえ込んだ。誰かはわかっている。母の手だ。

「うちの貴史が、もう、ごめんなさいね」

やめろと言いたいもうスイッチの入った母を抑えることは無理だ。一応加害者側の親なのだから。貴史は身動きせずにいる。いきなり今度は美里の母が割り込んでくる。こういう場だと母ちゃんズの団結力たるやすごい。母の手を握り締めているじゃないか。これがクラスの女子同士ならまだよくあることだと流せるが、自分の親となるとどうしようもなくこっぴどかしい。

「なんで由布子まで……由布子、ほら、落ち着いて、そんなあんた」

どうやら美里も業を煮やしたらしく、今度は自分の親に張り付いて引っぺがしを計っている。

「黙っててよ！ 貴史が真剣に謝ってるのになんで母さんたちがじゃまするのよ。こっちにもどってよ！」

「あんたの方がうるさいのよ！」

——あややもう、手に負えねえぞ美里。

心ではあきれつつ、やはり目の前の立村の様子を伺うのが正直怖かった。奴がどんな顔をして貴史を見下ろしているのか想像がつかない。あの氷の眼差しは一切溶けていないのか。少しは元に戻ったのか。

「あ、僕は大丈夫です」

はっと身を起こした。立村の声が確かに聞こえた。黙って顔を見上げると立村はとまどったように母ちゃんズおよび美里を含めた三人に声をかけている。怒っているわけでもなさそうだ、ただ、どうしていいかわからないという風にちらりと貴史に目をやりすぐに逸らした。よく美里に攻撃されて硬直しきった時、立村は貴史に救いを求めるような瞳でこちらを見ることがある。当然無理だ。

しばらく貴史以外の面々を様子伺いしていたようだが、立村は下を向いたままソファの後ろを通り、自分の母親が腰掛けている最奥の席へと向かった。ちょうどその脇が空いていたのと、それぞれが親とペアで座っているので自然と判断したのだろう。つつたまま貴史はその様子を伺っていた。

——こっち向けよ。

念を送ってみるが反応なし。ちなみに立村は自分の母親にも目を向けなかった。菱本先生だけがいたわるように「立村、大丈夫か」と声をかけているものの、そっちも見事に無視なのはいつものパターンだ。

突然、立村の母親がさっと顔を貴史に向けた。

「羽飛くん、もう頭を挙げてちょうだいな」

同時に手を差し出して、そっと椅子をたたくようなそぶりをした。

——え、何？ 何言いたいんだ？

思いっきり戸惑う。母もぽかんとしている。めったに遭遇しないタイプの女性だとは認識しているらしい。少なくとも今まで父母会で顔をあわせて帰り道びーちくぱーちくおしゃべりするタイプの相手じゃなさそうだ。

えらくべっぴんな立村の母親は背をぴっと伸ばし、威圧するかのようには菱本先生に視線を合わせた。稲妻走ったかのように菱本先生も両手を膝に乗せる。

「本日私が参りましたのは、うちの馬鹿息子に謝っていただきたいということではないのですから、先ほど申し上げましたように……羽飛くん、利き腕どちら？」

突然話を振られた。反射的に答えるしかなかった。拳の握りやすい方を答えた。

「右です」

「ありがとう」

何でお礼を言われるかわからない。立村に問いかけてみたかった。見てみるが無視こいてやる。その一方で親に呼びかけられている。

「それと上総」

それだけだった。次の瞬間、鋭い音と一緒に立村がソファにひっくり返っているのを貴史は見た。

向かって左の頬をやられたようだ。

——左手でひっぱたくのかよ、あいつのおっかさん……。

「立村、おい大丈夫か！」

「立村くん！」

菱本先生、美里、当然親ふたりもぼかんと口を開けたまま、身動きひとつできないままでいた。母ちゃんズは立村親子を見やりつつも「どうしよう……」とささやきあうばかり。美里は立村に呼びかけた後、ただ凍りついている。当然だ。全く想像できない展開だった。

手を出した貴史が立村の母に罵倒され土下座させられることは覚悟していた。

あっさり許されて、立村自身と握手無理やりさせられるかもしれないとも思っていた。

奴が無視したら頭をこづくくらいはするかもしれない。せいぜいこのくらいだった。

——立村、どうすんだ、いったい。

菱本先生のまん前での屈辱をそのまま許すような立村ではない。たとえ親であろうがここでぶちぎれてわめき散らしても不思議はない。なのに、すぐに身を起こして自分の母親を睨みするだけだった。同時にべっぴんさん……立村の母親も奇襲作戦を切り替えて真正面からマシンガントークをぶちかまし始めた。

貴史には未知の言葉がてんこ盛りすぎて、ただ聞き流すしかなかったけれども。

「あんた、うちにセールス電話がかかってきた時、くどい話をそのまま聞いて、受け入れてあげる？ それともさっさと切る？ 普通は切るわよね。時間がもったいないし、迷惑だし、話を聞いてあげる義務なんてないものね。もしそのセールスマンが、電話切られたからといって傷ついた、悲しい、お前のせいだとか言ってあんたを訴えたらどうする？ 自業自得って言うわよね、普通。上総、あんたがしてほしがってるのはね、そのセールスマンと同じことよ。断られて当然なのに、断った相手が悪かって逆恨みして、無理やり自分の売り物を押し売りしようとしているだけの、勘違い野郎よ。いいかげん気付きなさい」

「あの、お母さん、今ここでは」

教師の義務か、菱本先生は必死に割り込もうとしている。隣の立村を引き寄せて、肩を抱こうとしている。無理だって言ってやりたいが気持ちはわかる。当然ぴしゃっとはねつけられた。立村本人からも、同時に母親からも。

「少し黙っていただけですか。見苦しいところをお見せするようですよけれども、これも母親の義務ですから」

さっきまでの穏やかさは蒸発してしまったのか、厳しくはねつけた。

「今、こちらで全部聞かせていただいたけれども、ここで間違っている人間はあんただけだってことがよくわかったわよ。もちろんそれはあんたを育てた私と和也くんの責任でもあるし、あんた自身にもどうしようもなかったところがあるのは理解しているつもりよ」

——和也って誰だよ？

父親のことを「和也君」と呼んでいるのか、この人は。つつこみしないで立村もただ頬を真っ

赤にしたまま睨み続けている。ってことは、慣れっかか。

美里の様子を伺うと、何か言葉を発しようとしてタイミングを探しているようだ。ちらちら貴史に視線を送ってきている。こりゃまずい。ウインク一発送ってやる。日本人なんで下手だが意味くらいはわかるだろう。

「でもね。上総、あんたはいつも、周りが何もしてくれない、理解してくれない、だから当然こういうことをしているんだってことばかり言ってるでしょう。菱本先生に対してもそう、羽飛くんや美里ちゃんに対してもそう、すべて出会う人に。あんたがいわゆる普通の同年代の子とは違って、神経質だってところは重々承知しているし、有る意味それは仕方ないことだわ。でも、それを他の全く関係ない人に押し付けたり要求したりする権利は、上総、あんたには一切ないのよ。他の人たちにとっては、あんたの繊細な感受性ってのはね、どうだっていいわけよ。いい？ 上総、あんたは自分をもっと尊重してほしい、こんな傷つきやすいぼくちゃんを真綿で包むように扱ってほしい、高級品なんだとばかりに威張りくさっているように見えるわけよ。親である私にもそれはびんびんと伝わるわ。その証明をするために、『いじめられっこ』だとか『運の悪い評議委員長』だとかいろいろな肩書を集めて、『こんなに努力しているのにどうして周りばかりはわかってくれないんだ』って一生懸命アピールしようとしているのが丸見えなわけ。わかる？ だけど周りの人たちからしたら、そんなのちゃんちゃらおかしくて相手にする暇なんてないのよ。いい？ 他の人たちはあんたに普通以上の関心を払う義務なんてないわけだし、迷惑を掛けられる筋合いもない。あんたの一方的にやらかす迷惑行為から身を守る権利だってあるわけよ。そうでしょう、羽飛くん」

——なんでいきなりここで振るんだよ。

とにかく、立村の母親が自分の息子の言動に普段からむかつ腹立てていたことは理解した。ある意味、貴史も共感しないとは言いきれない。ただ、まあこれをこの面々の前で並べられたてたら立ち直れないことも貴史なりに承知している。そういう「繊細な感受性」の持ち主である立村が今この状態で机持ち上げて投げ出すことくらい考えてもいいんじゃないかと思う。二次災害起こったらどう責任取るつもりなんだろうこの人は。

とりあえずダッシュで首を振った。ささいなこと。すぐに立村の母が送る壮絶な息子罵倒劇場は再開された。もう、誰も止められない。

「『どうして自分を受け入れてくれないんだ、それは親が、社会が、学校が』とかなんとか一方的に叫んでいるようだけど、あんた以外の誰もあんた以上に大切にしたいなんて思っていないわよ。いいえ、そうね、少なくともここにいる人たちは精一杯上総のことを、尊重しよう、理解しよう、なんとか受け入れようと努力しているわけよ。わがままいっぱいのお坊ちゃまを、なんとかして仲間に入れよう、受け入れようね。あんたはそれを、白々しいお仕着せだと思い込んでるでしょうね。そう感じる自分が正しいとか思い込んでいるでしょうね」

時々菱本先生が貴史をちらと見て反応を伺っている。あれはまずいと誰もが思っているはずだ。母ちゃんズもまたはらはらしながら見守っているのがよくわかる。

——ものすっごくいいこと、言ってもらってるのはわかるんだけどよ。

何もこんなところでやらかすことはないだろう。

「そうやって上総、あんたはたくさんの人を傷つけてきたわけよ。羽飛くんの立場にもし私が立っていたとしたら、たぶんあんたを半殺しにしていたでしょうね。友だちとして精一杯の善意を仇で返されたようなものだものね」

半殺し、ときた。美里と目が合った。いや、ぶん殴った自分が言うのも変だがそこまでひどいことを考えてはいないつもりだ。今ここにいるのは、立村にとどめを刺すためではなく、とにかく話し合いのテーブルについてもう一度さしで語り合いたいだけだ。その前に仲直りもできたらしたい、ただそれだけのはずだ。

美里はどう思っているのだろう。観察するがうつむいているだけだ。まじめに聞き入っているところ見ると何か思うところでもあるのだろうか。将来のお姑さんになる可能性も全くないわけではないだろうし、別の心配をしているかもしれない。

「上総、でもそれをあんたは絶対に認めようとしな。あんたがね精一杯自分が自分がと訴えていけば、ずっと被害者でいられるからね。傷つけた羽飛くんが悪い、理解しようとしな。菱本先生が悪い、ずかずかと心の中に入り込んでこようとする他の人間たちがすべて悪い。繊細で傷つきやすいぼくちゃんをきちんと取り扱ってくれない社会が悪いってね」

ここでいったん、立村の母親は一呼吸置いた。舌打ち程度の空気あり。

「上総、あんたがずっと前、なんで『きらわれて』いたのかわかる？ そうよ、あんたは『いじめられて』いたんじゃないの。『きらわれて』いたのよ」

思わず立村の顔を見つめた。親にひっぱたかれた瞬間からその表情は変わっていない。反応したのはたぶん貴史ひとりだけだ。

——きらわれて、いた？ あいつが？

アキレス腱はそこだ。ただどこがひっかかったのかがわからない。初めて貴史は本気で耳を傾けた。

——いじめられたんじゃないくて、きらわれた、かよ？

「まずそこから考え直しなさい。あんたはねずっと、周りから迷惑がられてきたわけよ。自分を誰も面倒みてくれない、わかってくれないってすねて、他の子たちが一生懸命なじませようとしても殻から出てこなかった。ずっと殻に籠っているもんだから、他の子たちもどう接していいかわからなくてばたばたしている間にあんたは『いじめられた』と思い込んで恨みがましい目で見つづけたってわけ。あんたはひとりで被害者ぶっていたようだけど、他の子たちがどのくらい傷ついたか一度でも考えたことがある？ どうすればいいんだろう、どうすれば上総を仲間に入れて仲良くやっていけるんだろうって考えていた子たちの気持ちを、あんたは真剣に考えたことがある？ 自分のことばかり考えて、一瞬でも他の子たちの気持ちを受け入れようと努力したことがないから、何もうまくいかないわけよ」

確かに立村はクラスの女子受けが異常なほど悪い。

男子たちとはふつうにやり取りしているし、本条先輩を代表とする評議委員関係者にはとこと

んかわいがられている。それでありながらなぜか、女子に嫌悪されるその理由が貴史にはつかめていなかった。ただ自分にとっていい奴だから、それだけだから、そう流してきた。わからんちんな女子など無視すりゃあいい、そう思っていた。

いや違う、そう声がする。

——女子連中も、そう思ってたってことかよ。

美里、こずえ、このふたり以外の立村に対する感じ方は、まさかこの鬼母がぶつけまくる弾丸と同じものなのか？

「あんたが普通の子よりも何倍もハンデがあるのはわかっているしそれは私と和也くんができる限りのことをするわ。それが親の勤めだから。でもね、ここにいる菱本先生も羽飛くんも美里ちゃんもその他の子たちも、あんたにそれ以上のことをしなくてはならない義務なんて全くないの。そうよ、理解する義務なんてさらさらないのよ。理解しなくたっていいし、本当だったら無視したっていい。それを上総、あんたは『理解することがあんたらの義務だ』とばかりに要求を吊り上げていったのね。ここだったら自分がしてほしいこと全部してくれるものだと思込んでね。だから菱本先生に嫌がらせして、他の子たちの気持ちをずたずたに傷つけて、『もっと自分を丁重に扱ってくれ！』とか言ってるわけよ。そんなことずっとされつづけて、怒らないですむとしたらそれは神さまよね。上総、あんたは何様のつもり？」

目の前でわめき散らしているべっぴんさんこと立村の母親。この人の言葉を思いっきり無視して加勢してやりたい気持ちももちろんある。立村が許してくれればの話だが。

その一方で、思いっきり頷きたいところも多分に含まれている。

今まで貴史が立村に向けて放った言葉を、あっさりと跳ね除けられたことが多々ある以上、怒らないですむわけがない。神様じゃない、人間だ。だから殴ったそれだけだ。

でも三年間培ってきた親友という絆を、そんなことだけで断ち切る気なんてさらさらない。美里だって、菱本先生だってそれは同じだろう。怒っても、それでもつながりたい、その気持ちを伝えたい、本当にそれだけなのになぜこの人は延々といやみを言い放つのだろう。

「『理解してほしい』ってのはね、最大のわがままなのよ。あんたのすべきことはね、その人たちと同じくらいのレベルで理解をするよう努力することなのよ」

——そりゃそうだけどな、今のあいつにそれ求めるって酷だぜ。

なんとかせねばならない。最悪のシナリオが完成しそうだ。完全に母ふたりは観劇客として同化していて行動何一つしようとしなない。美里は唇をかみ締めて立村を見つめている。貴史も本来なら何か言ってやりたい、どんな言葉を用意すればいいのかそれがどうしても見つからない。

いきなり立村が顔を上げた。横目で再度にらみなおすと母親に対峙した。

「これ以上なにしろって言うんだよ！」

——よっし、立村いけ、このまま反撃だ！ ストレートパンチ食らわせてやれ！

拳を握り締めた。もちろん右手だ。

——さすがにこりゃお前、親に反抗してもいい内容だぞ、俺もいざとなったら手伝うぞ、さ

あ行っちゃまえ行っちゃまえ叩きのめしちまえ！

完全なるスポーツ試合の観客と化した貴史の心中応援もむなしく、さらにパワーアップした立村の美しき母親はさらに弾丸を詰め直して一斉発砲し始めた。もう無駄だ。

「さっき言ったでしょ。あんたのしていることは、失礼千番なセールスマンが、断られた人たちを逆恨みしているのと一緒にだって。あんたには、水掛けられたって電話をがちゃりと切られたって相手を恨む権利なんてないのよ。でもね、そういうセールスマンにだってちゃんと逃げ場はあるのよ。理解してくれる場所はあるの。たとえば電話セールスだったらコールセンターという場所があってその上司や同僚たちが『なぜ断られたのか』とか『今度はいいお客さんに会えるといいね』とか言い合って、支えあうものなのよ。彼ら彼女らは断られた痛みを知っているし、さらにセールスの方法をレベルアップしていこうと応援することもできるのよ。それは彼ら彼女らが互いを受け入れあっているからなの。決して、断ったお客さんをうらむのではなくて、『どうして嫌われたのか』その理由を自分の中から見つけ出すためのよ」

「正当な恨みも許されないってわけか」

「正当？ 勘違いするのもいいかげんになさい。上総、あんたはね、いつも自分のことしか見ていないし、自分自身を変えようなんて一度も思ってないわけ。どうしてあんたは自分自身に目を向けようとしさないわけ？ 理解できないって言うのなら、どうして彼ら彼女らがそういうことを訴えようとするか、考えようとしさないわけ？」

「考えてるさ、だからって」

「あんたの都合のいいように考えてるってことよね。あんたの考えていることはだいたい手に取るようにわかるわ。『人のことを深く考えようとしさない勘違いした人たちが、僕たちみたいな繊細で傷つきやすくてけなげな奴を勝手に決め付けようとしているんだから、当然相手が悪い』ってことでしょう。あんたは一度も、『自分ひとりを被害者に仕立て上げて、相手の精一杯の好意をつっぱねて、相手を傷つけてもそれから目をそらしっぱなし』って思ったことないのよね。そりゃあ、みんなあんたが百パーセント満足できることをしてあげられるとは限らないわ。親である私だってあんたがしてほしがってることを理解できるわけじゃないし、してやることだってできないわよ。でもそれはお互い様。理解できないからこそ、いい方法を考えようとするわけよ。さっきのセールスマンと同じ。大クレームの後どうやってこれから自分のセールストークをレベルアップしていけばいいのか、どういう風にアプローチしていけばいいのかを、自分自身の中で考えていくだけのことよ」

ちらりと立村の母上……もう話の後半からは敬意を持ってそう呼びたくなかった……は美里を見つめた。美里も落ち着いた表情で見返した。嫁姑の訓練だろうか。

「上総、あんたは人が受け入れてくれることを当然のように要求しているわけだけど、要求する権利なんてもともとないの。あんたを受け入れられるのは、上総、あんたひとりだけだってこと、いいかげん元服の歳を過ぎてるんだから気付きなさい！」

元服、と来た。やっと話の突っ込みができそうと見たのか隣の母が美里の母に

「十五歳だともう、そうなのよね」

「そうよねえ、この前元服式町内会でやったけどねえ」

全く関係ない話題で話を和らげようとする。もちろん効果はない。

——あーあ、もう立村、立ち直れねえぞあいつ。こんな生活ずっとしてきたのかよ。

親の教育方針など知ったことじゃあない。なによりも三年間同じクラスで過ごしてきた貴史にとって、どう考えたって立村が穴ごもりして永遠に出てきそうにない言葉の羅列としか思えない。菱本先生も熱血でかなりぶちかましてきたけれど、全くのれんに腕押し状態。まさか十五歳の息子にその効果がないということを感じて、それでもぶつけてきたということだろうか。立村が反抗したくなるのもよくわかる。菱本先生も手を出しようないだろう。

言うことは正論なのだ。立村が自分の内気さ不器用さを隠したくて懸命に努力してきて、それを貴史をはじめとする連中が受け入れようとする。ただそれは立村の求めてきた方法ではなく、再度心を閉ざしてしまう。それにぶちぎれてつい貴史が全力でパンチを食らわせてしまう。もしくは菱本先生に説教かまされる。再度それでまた穴倉にこもってしまう。その繰り返しに憤った母がぶちかました。よくあるパターンと言えればそれまでだ。

ただ貴史はその穴倉から立村を引っ張り出したい。その方法が母上殿……もう「殿」までつたくなる……の一方的な罵倒では効果ないんじゃないかという気もしている。その別の方法を貴史はこれから探りたい。そのために今、土下座準備万端に整えて待っていたわけなのだが。

——頼む、美里、なんとか黙らせろ。悪いが俺加害者だしやっぱ無理だわ。

望みの綱は美里だけだ。片手で小さく、手をひらひらさせてみた。下から上へあおるように何度か動かした。ちらと美里は目を走らせたが、即、無視しやがった。

ありがたいことに言葉の弾丸がそろそろ底を尽きかけてきたようだった。言葉の流れがゆったりと、品よく落ち着いてきた。貴史だけではなく、隣の母も腰を浮かせて座りなおし、いただいた菓子の手提げを足元に近づけて置いた。

「上総、理解されないからいじけるくせをいいかげん直せってことよ。人間、親子であっても夫婦であっても理解できないのが当然なの。百パーセント受け入れられるなんてそれはわがまま。七十パーセントでも五十パーセントでも、受け入れられるところを探して自分でその器をこしらえていくそれが大切なの。あんたは自分が傷つきやすいからといって百パーセント受け入れろって叫んでいるけど、そんなのとんだ迷惑なの。一割でも二割でも受け入れてもらえたことを感謝する以外、あんたは他人に何も要求できないということを知りなさい。自分の面倒は自分でみなさい。あんたに言いたいのはそれだけよ、上総」

最後は静かに息子の名を呼び、同時にその腕をねじり挙げた、もとい、引っ張り挙げた。振り払おうとする立村だが母上殿は一切その手を離そうとしない。すぐにあきらめたのか横を向いて片手でコートとかばんを抱えている。

すっと立ち上がり、立村の母上殿は菱本先生に対しまず軽く一礼を、次に貴史の母、美里の母、それぞれに頭を下げた。全員起立せざるを得なかった。

「本日はご迷惑をおかけして申し訳ございませんでした」

あの強烈なマシンガントークはどこへやら、薬の切れ方がはんぱじゃない。穏やかに微笑んで、次に貴史を見た。自分の息子を片腕で抑えているのはそのままに、

「羽飛くん」

と呼びかけた。

「さっき言ったように、君が罪悪感を感じる必要は全くないの。この馬鹿息子はね、実際そこまでできないと理解できないの。辛い思いさせて、ごめんなさいね」

「あ、いやその」

完全に立場が逆転している。もうどちらが加害者なのかわからなくなってくる。とにかく頭を振って立村の顔を覗こうとするが、当然こちらを見ようとするわけがない。

次に母上殿は貴史の母に向かい、申し訳なさそうな口調で続けた。

「子ども同士のいさかいに親が口を出す格好になってしまいました。本来は私が加害者の母として謝るべきところです。申し訳ございません」

「いえ、こちらこそ、うちの息子が、あの」

貴史の頭を押さえ込もうとしたが母もすっかり動揺している。その質は貴史が同級生に怪我をさせたこととは別の意味に摩り替わっているはずだ。いつのまにか「助けようとしたにもかかわらずやり返されてしまい傷ついたかわいそうな男の子」扱いされている。貴史も絶対本意じゃあない。

さらに挨拶は清坂親子に向かった。親同士丁寧に頭を下げた後、最後に美里へ真正面に向いた。やはり未来の嫁、姑対決なるのか。ゴングが鳴ったような気がした。もちろん気のせいだ。スポーツモードに切り替わる頭。美里が救いを求めるような目でちらっと見たが、相手がどう出るか読めない以上手は出せない。あきらめる美里、とりあえず一番勝負として受けて立て。

「美里ちゃん」

「あ、はい、私」

「あれの親としてではなく、女性として一言伝えておくわ」

「じょ、せい？」

どもりっぷりがいつもの美里ではない。初対面なのか、完全に押されっぱなしだ。しかも「ちゃん」付けで呼んでいる。立村の性格上どう考えても積極的に「俺の彼女よろしく」的な紹介をするとは思えない。なんで知っているのだろう。付き合っていることは菱本先生あたりから聞いたのだろうか。いや、とすぐに貴史は打ち消した。あの「母上殿」だ。普通のやり方をする人じゃあなさそう。手ごわいぞあの人は。

予想通り、奇奇怪怪なその言葉。誰もが凍り付いていた。

「上総みたいな優柔不断な男に惚れたら、美里ちゃん、あなたの本当のよさが見えなくなるわよ。親としてではないの、女の先輩として。早い段階で見切りをつけたほうがいいわ」

——おい、もうどうするんだよ、まったく、知らねえぞ！

哀れすぎて立村の様子を伺うのも気が引ける。奴は顔を真っ赤にしたまま、それでも美里の様子を伺っている。貴史とも目が合った。とたん乱暴に自分の母親の腕を引っ張り小声で怒鳴った

。同時に扉まで引っ張っていかうとした。

「いいかげんにしろよ！」

「お黙り」

一緒に数歩歩き、扉の前で立ち止まった。扉を片手で開けようとした。本人からの挨拶はなしだった。頭に血が昇っているのは予想がつくので貴史も腹は立たない。菱本先生がすぐに立ち上がり、最後の挨拶をしようとした。

「あの、お言葉ですが」

「先生には本当にいつもご迷惑をおかけしております。このことはどうぞ決して、大事になさいませんようよろしくお願いいたします。本当に、この件は上総以外の誰も悪い人などいないのですから。まかり間違っても貴史くんが悪者になるような扱いはなさいませぬようよろしくお願いいたします」

「いえ、それとこれとはまた別です、上総くんは」

——先生、早く解放してやれよ。もうありゃあ家庭内リンチだぞ。これから俺がなんとかするけどな、けど立村もう立ち直れないかもしれねえぞ。あーあどうするんだこりゃあ。立村、待ってろよ。もうお前のごと責める気ねえよ。俺がなんとかするから、学校明日平気な顔して来い。そんときに改めてきっちり詫び入れるからな。場合によってはあの怖い母ちゃん対策も練ってやってもいいんだからな、明日、絶対来いよ、来てくれよ！

扉しまりかけの言葉がかすかに聞こえた。

「女の目から見てあんたがタイプじゃないとしてもね、上総、いやおうなしに一番愛しい男になるのが、自分の息子というものなのよ」

——嘘こけ、自家用サンドバックだろうが。アーメン。

今はただ、ぼろぼろに朽ち果てたであろう立村に対し、祈るのみだった。

席に着きなおい、しばらく菱本先生から今後の処置について説明を受けていた。

「立村くんのお母様があのようにおっしゃいますので」

暴力沙汰はなかったことにすること、怪我もないので子ども同士のちょっとした小競り合いに過ぎないといった扱いにすること、貴史も今回はお咎めなしということ、当然停学や附属高校への内定取り消しもないといった事務的な案内がなされた。

「ただ、お母様にはどうしてもお伝えしたいことがあります。まず今回の件を問わず、貴史くんは入学当初から懸命に立村くんのよい友達であろうとしてきました。それは三年間同じだったのですが、たまたまお互いの価値観がぶつかってしまいあわや怪我かといった話になりましたが、立村くんのお母様はあの通り非常に貴史くんのことを理解していただいています。お母様のご心配されてらしたのは、今回の件をきっかけに遠慮が出てしまい、友情にひびがはいってしまうのではという点でした」

「あ、それない。大丈夫」

即、答えた。

「お前は今黙ってる！」

素に戻った菱本先生は笑いをかみ殺しつつ、すぐに母への言葉を続けた。

「もちろん暴力沙汰であったことは事実ですし、その点については貴史くんにも反省してもらうところはあります。ですが今ご覧いただいた通り立村くんという生徒は非常に内気で、繊細な部分があり、貴史くんをはじめとする思いやりのある生徒たちに支えられているところが、担任の目からみても強く感じられるものがあります。そこで、お母様にはどうか、このふたりの友情を今までどおり暖かく見守っていただきたいんです」

——先生、たまにはまっとうなこと言うじゃん。

思わず照れくささで笑みが漏れる。美里が黙って貴史を見つめている。拳を握り締めている。

「あのう、ひとつお伺いしてもよろしいですか？」

遠慮がちに、美里の母が問いかけた。

「立村くんのお母さま、ですけれども、品山の方でいらっしゃいますか？」

美里が自分の母親をすごい勢いで睨み返した。菱本先生も一瞬戸惑ったようだがすぐに、

「仰るとおりです」

無難な受け答えをした。すぐに美里の母は質問を続けた。

「私も不案内でよくわからないのですが、品山方面にお住まいの方ですと、お子様に独特の教育を行ってらっしゃると伺ったことがございます。やはり、あのお母様もそのようでございますか？ いえ、うちの娘とも親しくさせていただいていると伺っておりますが、かえってその、私どもで失礼なことをしてしまっているのではと心配だったものですから。貴史くんのお母さんとは私も子どもの頃から親しくさせておりました、その、気兼ねなくいろいろ相談しあえるところもあるのですが、うっかりその調子で私や娘が何かしてしまっているのではと思いますと、心配なところもございますので」

「その心配はありませんよ、清坂さんのお母さん」

すぐに言葉の裏を感じ取ったのか、菱本先生は安心させるような口調で返事をした。

「家庭ごとに教育方針が異なるのはよくあることですし、何も立村くんの自宅が品山だからといって極端に常識が違うということはないかと思われま。子ども同士の性格の違いとか、むしろその辺でいろいろぶつかり合うこともあるでしょうが、むしろ中学時代にいろいろな個性の持ち主と触れ合って視野を広げていくというのも、大切なことではないかと僕は思います。むしろ美里さんも貴史くんも、クラスでは立村くんを含むよい友達に恵まれ、一歩ずつ大人に近づいているといった印象を持っています。その点については大丈夫ですよ。立村くんのお母さんも、三人がよい友達にいることに、心から感謝していると何度もおっしゃってましたからね」

——たぶんほんとだろうな。

強烈な母親ではあるが、裏表はなさそうな人だとは感じた。立村には悪いが、貴史はあの「母上殿」が今だに嫌いになれない。一回腹かちわって立村上総論について、奴を追っ払った場所で語ってみたい気が正直する。

「ただ、今ご覧いただいたように、立村さんのお子さんに対する教育方針については独特なものをお持ちですので戸惑われるのも無理はないかと思えます。もし今後、ご不安などお持ちであれば僕のできる限り協力させていただきます。僕としては、美里さん貴史くんふたりの友達思いの

気持ちを信じたい気持ちでいっぱいです。きっと今回の一件も、立村くんを含め友情を深めるための試金石だったと、僕は考えています」

——なんじゃその試金石って。

相変わらず熱い情熱の滾るお言葉で締めた。全員菱本先生に職員玄関まで見送られ、羽飛家清坂家ともに一礼し、本日の幕は下りた。靴を生徒玄関から持ってきて美里と一緒に外へ出た時、スパイクの足跡やら車の跳ね返しやらで汚れた雪が積もっていた。

「貴史、これからどうする？」

外に出るや否やぺちやくちゃしゃべり始める母ちゃんズを前に、美里は思いつめた風に問いかけた。すっかり唇が荒れている。

「帰るっきゃあねえだろ。もう五時過ぎだぞ。俺確実に今夜父ちゃんに殴られる予定入ってるんだからな」

「そういうんじゃないくて、これからだよ、これから」

寄り道誘ったわけではなさそうだった。貴史はポケットに手を突っ込み、だいぶ軽くなったかばんを片手で振った。

「文集の編集とか、評議委員会とか、それから」

「奴が学校に来るか、だよなあ」

最初に思いついたことをつぶやいた。美里が口を覆って貴史に頷き返した。

「そこ、だよね。ほんと、どうしよう。文集作るの中止できないかな」

「あいつが来ねえと先、進めねえよ」

青みが消えた夜空から雪がまた縦の点線を描くように降り注いだ。踏めば踏むほど靴底が沈む。二メートル前でけたたましく母たちの笑い声が響いた。

——絶対来いよ、立村。

親たちに邪魔されない場所でなくては、謝ることも怒鳴ることも助けることもできやしない。

中学時代最後の暴力沙汰になるところを、結局は笑い話に変えてしまった羽飛家の一族。当の本人もこれでいいのかと思うような内容だったが、

「まあそうだ。男同士ならこういうこともよくあるな」

の父発言によりすべて丸く収まった。鉄拳四、五発くらいは食らうことを覚悟していた貴史だが、母と姉の脳天気な発言、

「まあねえ、相手のお子さんのお母さんがねえ、とにかくすごくて」

「そうなんだあ、美里ちゃんとなんかいろいろあるんでしょ、その品山の子って」

「品山の方ってやはりいろいろあるのよねえ。子どもさんの教育も独特なものがあるみたいで、とってまだけどこちらの方が恐縮しちゃったわよ」

とかなんとかで、立村の母からもらった高級な和菓子を食いまくるのみで終わってしまった。

「しかしこれ、日持ちしねえだろ」

言葉を挟むのもなんだかはばかられ、貴史は梅の花をかたちどったお上品な生和菓子をそのまま手で持ちくらくいついた。あんこが甘ったるくなくておいしいのだが、貴史があまり味わったことのない舌ざわりであることには間違いなかった。

「本当ねえ」

「まあいいっていいって、おいしいってことは世界共通、悪いことないって。ねえ、それよかさあ貴史、あんた明日どうすんのよ。その立村くんって子にどう謝るわけ？逃げられたんでしょ。今の話だとしっかり土下座したみたいだけど。後腐れないわけ？」

桜の花びらをどでかくかたちどった残りの和菓子を姉は小皿に取り、フォークで細かく切って口に運んだ。

「ねえよ、あいついい奴だし、話せばわかる」

「だったらいいけど、美里ちゃんも絡んでいるから大変だよな。あーでも、美里ちゃん、あんたに急所狙うなってすごいこと言ったんだって？ うわあ、さっすがだよな」

「どっから聞いたんだよ、んなこと」

おそらく明日以降、怒涛の逆風が立村めがけて吹きまくるのは覚悟していた。今回の出来事は一応貴史が加害者、立村が被害者ではあるけれど、すでにその関係は逆転扱いされている。なにせ立村の母からそのような申し出があったくらいなのだ。救いなのは立村の公開折檻の場面を目の当たりにしたのがごくごく少数の人間のみということだった。そこにいた奴……貴史、美里、そして母ちゃんズと菱本先生……が口をつぐんでいればなんとかばれずにすむ。少なくとも貴史は立村をこれ以上つるし上げる気はない。

——けどなあ、やばいだろありゃ。

——やっぱ、文集作るのやめようぜ奈良岡のねーさん。

「あれ、このちっちゃい板切れなあに？」

「あんた恥ずかしいこと言うんでないの！ 黒文字って知らないの？」

すっかりからになった和菓子の箱……木でできている……を指でさすりながらまた母と姉が語

り合っている。父がその「黒文字」なる板切れを手に取り、しみじみと、
「老舗はさすが、こういうところが細かいなあ」
よくわけのわからないため息をついていた。

これから何をせねばならないのかは貴史もよくわかっていた。

——とにかく立村ときっちり話をしねばな。

あいつが逃げまくることは承知している。立村の性格上、さらりと流すこともできないだろうし、向こうから手を伸ばしてくることは考えられない。それなら貴史が徹底して話しかけるしかないとも思う。たぶんはねつけられるだろうがそんなことでめげたりはしない。謝るべきことは謝るが、ここから先クラスで立村がいじけたままでいいとは全く思っていないのだ。たとえ美里との関係がややこしいものであろうとも、貴史にとって立村は無二の親友だ。たったひとりで卒業式ぽつんと放置するつもりなんて、一切ない。

——ただなあ、奈良岡のねーさんは文集こだわってるからなあ。美里もやめさせたいだろしな。

一番痛いのは、文集委員の中に緩和剤となるべき古川こずえが混じっていないことだった。苦手な女子ではあるけれど、やはり頼りになる愛すべき下ネタ女王でもある。もしあの場でこずえがいたとしたら立村をなだめる上でもう少しなんとかなったのではないかとも思う。極端な話、あと二ヶ月を切った中学生活。菱本先生は十分時間があるとか言うけれども、貴史からしたらあまりにも短すぎる。

——かくなる上は古川に頼るかだなあ。美里のこともあるしな。

立村との関係を少しでもよい方向に持っていくには、貴史側でまず文集作成中止を持ちかけるのがベストではないかと考えている。しかし奈良岡をはじめとする女子たちがどう思うか、いやかわいそうなのはクラス全員の似顔絵を懸命に描いている金沢という説もある。難しいところだ。

——俺、単に立村と今まで通りくだらん話したり、LPのライナーノートの訳やってもらったりとかしたいだけなんだけどなあ。なんでこうも面倒になっちゃったんだろ。まったく、あの野郎、明日こねばゆるさねえぞ！

一夜明け、いつものように家を出た。道は完全に昨夜の雪でコーティングされており、スパイク履いた足も下手したら滑りそうになる。さすがに今日は自転車を使う気になれずバスに乗り込んだ。美里も混じっているかと確認したがいなかった。

湿気の高く無駄に暑苦しい車内で、運よく運転手裏の席を陣取った。乗り込んでくるのはほとんどが青湊市内の高校生なので、お年寄りのために席を譲るといった気遣いをする必要もさほどない。もちろん誰か来ればすぐに立ち上がる準備はしている。貴史は窓を手袋でこすって外を眺めた。

——結構、混んでるよなあ。ま、時間あるし間に合うか。

バス利用で学校に向かう時は通常よりも早く家を出るので余裕はそれなりにある。朝七時過ぎ

に乗っていけば問題なしだ。到着が早めであってもたいてい教室は暖まっている。問題は眠たい、それだけだ。

「羽飛、羽飛でしょ？」

頭の後ろで声がした。停留所で女子の集団がわらわらと乗り込んできたことだけは気づいていたけれど、こっちはただまぶたが落ちているだけ。貴史は振り返って相手を確認した。

「あ、玉城か、おっはよ」

「バスなんてあんためずらしいね」

「さすがに今日はチャリに乗れねえしな」

同じクラスの女子で、最近はいろいろと頭の痛い出来事にさりげなく混じっている玉城怜巳（れみ）の顔と挨拶した。そういえば昨日もしっかり登場人物の中に納まっていた。女子の間で最近はやりの、首全体に髪の毛をべったりはりつけるようなショートカットで決めている。みな同じ髪型に見える。

「ちょうどよかった、羽飛、昨日のことなんだけど大丈夫だった？」

「あ、ああ？」

寝ぼけているせいか反応が自分でも鈍すぎた。

「立村とのことなら、おまえさんも知ってるだろ、大丈夫だってな。あいつなんでもなかったみたいだし。俺もまあ、絞られたけどしゃあねえよ」

「あいつのことなんかどうだっていいって。わざと気を失った振りして同情引こうとした馬鹿なんかさ。それよか羽飛、本当に、大丈夫？」

ずいぶんしつこい。もちろん玉城が以前から立村を毛嫌いしていたことは知っている。女子受けの救いようなないほど悪い立村が、玉城にことあるごとにいやみ言われたりしていることも重々承知している。

「何もわざとじゃねえだろ。ま、よくあるこった。俺も悪かった」

「羽飛、あんたちっとも悪くないじゃん！」

いきなり後頭部をぽかんとやられた。玉城も手袋をはめていたらしくさほど痛くはなかったが、もさっとした感覚が脳天に残る。

「あのなあ、朝っぱらからなあ。公共機関の中でってのやべえだろ」

「やばくないよ。それよりあんた、ちゃんと高校進学できるんだよね？」

「あ、そっちは大丈夫そうだって言われた」

なかなかいい奴だ。玉城を見直した。単純に貴史が進学内定取り消しされたのではと心配してくれただけらしい。青大附属の校則において暴力沙汰が厳しい処分となることは、在学生代表なら誰もが知っているわけで、玉城がそれを踏まえて質問しただけのことだ。

「よかったよお、みんなうちのクラスの子、そのことばかり心配してたよ。あの馬鹿のせいで羽飛ばかりとぼっち食っちゃうなんて大変だよって。ああよかったよ、それ聞いてみんな喜ぶよ」

「喜んでいられねえんだけどなあ」

貴史は頭をさすりながらつぶやいた。

正直、昨日立村を殴りつけた段階で内定取り消しの処分に震え上がっていたのも嘘ではないし、親呼び出しを食らったのも自分としてはしんどいことだった。結果が加害者と被害者逆転扱いの展開だったのには面食らったにせよ、どん底に落ちた心持ちだったことは否めない。立村には悪いがほっとしているところは確かにある。

玉城が手袋を脱いで、貴史の耳にささやくように張り付いた。

「ちょうどよかったから相談なんだけどね、羽飛に頼みたいことあるんだ」

「なんだよ、金ならねえよ、俺の愛は優ちゃんに」

まぜっかえすとまた叩かれた。今度は素手だった。

「まじな話なんだからちゃんと聞いてよね。今日の五時間目って社会だったっけ」

「ああ、歴史だな」

教科書は持ってきている。

「六時間目がロングホームルームだよね」

「ああそうだな」

「それならば、だいたい二時間あるってことだよね」

言われた意味がつかめない。まだ眠気が漂っているようだ。

「ああ？」

「この二時間をさ、悪いけど私らに、ちょうだい？」

——ちょうだい？

玉城の言葉がつかめない。振り返って改めて顔を覗き込んだ。

「お前何言いたい？ わりいけどよくわからねえ」

「だからさ、菱本さんの授業を臨時ホームルームにして、そのまま休み時間はさんで延長戦にしたいんだけど、どうかな。どうせ社会だったってほとんど話終わってるし、せいぜいやるとしたら公民じゃん？ 歴史だったらたぶん菱本さんまた人生論について熱く語りだすし、雑談に使うんだったら私たちにちょこっとだけ時間わけてほしいんだ」

「なんでだよ」

頭の片隅が少し溶けてきた。つまり玉城の提案で、菱本先生担当の五時間目社会・歴史と六時間目のロングホームルームを丸ごとくっつけて、何かクラスの連中と語り合いというわけだろう。だが貴史に話を持ちかけるのはお門違いじゃないかという気もする。決めるのは菱本先生であって、貴史ではない。相談ベースで持ちかけるのは評議委員の立村が建前だが、まさかそんなことを飲むとは考えられない。そもそもあいつは今日、学校に来るのか？ それが一番心配な部分でもある。

「何話し合うんだよ、まさか俺の弾劾裁判かよ」

「んなわけないじゃん。あんたをつるし上げたい奴どこにいるっての」

「立村相手だったら断るぞ」

「まさか、あんな馬鹿今更吊るしてどうするのさ」

一呼吸置いて、貴史は尋ねた。

「じゃあ何やりたいんだ、俺には全くわっからねえ」

にきびで顔が赤くはれ上がっているように見える玉城の額。わざと出しているのだろうか、ずいぶん目立つ。それでも顔かたちはそれなりに整っているし眉毛もきっちり細長く伸びている。女子としては決してまずくはない。近くで観察してみて気づいた。ただ目つきがどうも重たい。なぜといわれると迷うのだが、どこことなく背中と頭がねとっとする。

「俺通すよか、菱本さんに直接話せよ。俺、ご存知の通り脛に傷あり、しかも作ったばかりだぞ。立場ねえよ」

「いやだからだよ。今日、これから菱本さんところ行って、一緒に頼みに行ってくれると助かるんだけどな」

「美里通すってのはどうなんだ。女子同士ならそっちが筋だろが」

玉城は黙った。重たい眼差しがいったん閉じられ、また開いた。

「清坂さんに関係してることだからさ、パスなんだ絶対」

——美里と関係してる？

息をごっくり飲み込んだ。玉城は目を逸らした。

「あんたが清坂さんと仲いいのは知ってるから悪いと思うけど、ここできっちりしとかなないと、いろいろまずいと思うんだよね」

「古川經由じゃあだめなんか？」

「ああこずえちゃんね」

女子同士のつながりもいろいろ面倒らしい。美里が女子たちとそりが合わないのは今に始まったことではないし、あと二ヶ月で片付く問題でもない。ただこずえがうまく入り込んでくれるので今まで表面化せずにすんだところもある。こずえ相手ならなんとかかなりそうな気がする。

「こずえちゃんも清坂さんとの立場あるからねえ。とにかく、この件を片付けないと私たちも気持ちよく三年D組から卒業できないような気がするんだ。あんたも同じこと考えてたんじゃないかなって、昨日のこと見てて思ったんだ」

しみじみ、目を逸らしたままつぶやく玉城に貴史は問いかけた。小声だがたぶん前の運転手には聞こえているだろう。

「お前とおんなじことかよ」

「そうだよ、納得できないまま卒業したくなっただなあって。羽飛さ、ずっと立村のこと一生懸命面倒みて、へまやらかしそうな時にはカバーしてたなってこと私からしたらはっきり見えてたんだよね。それでもあんなひどいしっぺ返し食らわされて、悔しかったんだらうなって」

「まあ、当たってるとこもあれば外れてるとこもあるがな」

最初にほめられたのでついつい、甘くなる。

「彰子ちゃんもそれは考えていたと思うし、結果相手がどうしようもない馬鹿だったからあきらめるしかないってのもわかるけどさ、私たちも似たような問題抱えてるからなんとかしたいんだよね」

「似たようになって、なんかあるのかよ」

「菱本さんのところ行ったら話す。さすがここ公共機関のど真ん中だし、誰に聞かれてるかもわからないしさ」

それきり玉城は黙りこくったまま自分の席に腰を据えたまま窓を眺めていた。貴史も同じく倣った。窓辺の曇りガラスは結露で少し溶けている。車の数は先ほどよりもだいぶ減っている。想像以上に早く到着しそうだった。

バスから降りるとすでに雪かきも終わっていて、通路が歩きやすく整えられていた。青大附属高校の生徒や、中には大学生も混じっていた。

「さあさ、誰もいないね。よかったよ」

ゆっくりと坂を昇りながら、玉城は黄色い手袋をはめなおした。

「あんまり見られたくないからね、羽飛と歩いてるってのはね」

「ひえ、嫌われてるじゃん」

「反対だよ。あんたのファンがたくさんいるってのに敵作りたくないじゃんよ」

「もっともだ」

凍った空気に思いっきり熱い息で笑った。

「けど、ほんとに何が目的なんだ？ まあ立村つるし上げじゃねえなら俺も協力するけどな、美里がなんかへまやらかしたのか？ ま、お前も知っての通りあいつと俺とはいろいろ腐れ縁だからなあ、気にならねえってことはねえんだ」

「まあそうだよな。別に私も清坂さんに文句言う気はないよ」

あいまいにぼかそうとする雰囲気あり。言葉と本音がひっくり返っている恐れあり。玉城は手巻きのマフラーを巻きなおした。よく見ると手袋と同色の毛糸で編みである代物だった。ぴたっとくっついた襟足の髪が黄色く包まれているようで妙に目立った。

「でも、言っておくべきだったんだろうなと思うな、今思えばなんだけど」

「女子はめんどくさそうだな」

「あんたにもそう見えた？」

返事を待たずに玉城は続けた。足元の白い雪が薄くかすれていた。

「成り行きまかせでずっと三年間過ごしてきたけど、誰かが本気で動かそうと思えば動くもんなんだよね。この半年ですごく感じたよ」

「なんだそりゃ」

女子特有の訳わからない言葉は聞き流すに限る。

「評議委員長だっていったん指名されればもう変えられないなんて、それ思い込みだったんだよね。クラスの委員はよっぽどのがない限り立候補できないなんて、幻想だったんだよね。女子が生徒会長になったってよかったんだよね」

「あのなあ、悪いけどな、それ立村の前では絶対言うなよ。俺ほんと、あいつのお守するのめっちゃくちゃ大変なんだわ」

そのことには返事せず、玉城はさらに話し続けた。

「おかしい、そう思ったら声を上げればよかったんだよね。私、それずっと気づかなかったんだ。陰でなんとかすればいいって思ってたんだよね」

「玉城、お前何言いたいんだ？ しつこいようだけどな、立村のことだったら俺は即、この場から消えるからな。さすがに俺の親友にそんなことされようもんなら、切れたっておかしかねえだろ？」

もちろん軽い調子で伝えた。もちろん本音だ。もちろん確認だけだ。

「羽飛、清坂さんについてはそう思わないの？」

逆に問いかけられた。マフラーを巻きなおし、かちっと音のなりそうな眼差しで。

「まあ、美里かあ、あいつ根性だけはあるからな。多少なんかあっても大丈夫だろ」

「そうか、わかったよ。羽飛、これから私が菱本先生に話すことだけど、誰かを責めたいとかいじめたいとかそういうつもりでするんじゃないんだよ。ただ、このままだとひとり、傷ついたままで卒業してしまう人が出てしまうから、なんとかしたいだけなんだ」

「そいつ誰？ 女子か？」

玉城は頷いた。坂の向こうの校舎を見据えた。

「山は、動くんだよ。絶対に」

それだけつぶやき、しっかりと足を踏みしめ坂を登り始めた。

——美里をなんか吊るしたいようにしか聞こえねえけど、なあ。

貴史からすると、玉城たちのグループが美里を嫌っているのは確かに見え見えだった。言いたいことを何でも言って、納得いかないことはとことんつつこみ、男子たちとも平気でおしゃべりするような美里は他の女子連中からしたら違和感ありありだっただろう。成績もそれなりだし、見た目もこういったら何だが、やたらめかしこむくせもあるせいか、それなりにはとも思う。一年上の先輩から告白されたとか、立村以外の男子とも付き合ったことがあるらしい……もっとも小学校の時だが……とか、いろいろ色めいた話は聞いていなくもない。まあ現在の相手がまがりなりにも立村ということで、多少は同情のようなものもあるのだろう。それでうまく言っているといえばそれまでだ。

ただ、そういう風にてきぱきわめきまくる美里を、あまり好きになれない連中も主に女子中心にはいる。世の中いろいろあるのだ。こずえがたまに美里の融通きかない有様にぐちったりするのもさもありなんと思う。

ただ、幼馴染だからという理由で一方的に美里をかばうのも貴史としては間違っていると考えている。貴史なりに美里の許容範囲というのはつかめているつもりだし、ある程度だったらきちんとけりもつけるだろう。その一方であまりにもあんまりという場合だけ手を出せばいいというのが貴史の見解でもある。

となると、今、玉城の計画しているらしい「けりをつけたい」内容も、多少美里にとっては不利な内容かもしれないが見守るほうがベストではないだろうか。一方的に反対したところで玉城たちが納得するとも思えない。ならばやりたいようにやらせてやり、ある程度めどがついたところで水入りに持っていくのがよさそうだ。

生徒玄関に着いた。すでに運動部の連中がこの寒空の下グラウンドを掛け声かけて走っているのが見える。ご苦労なことだ。

「羽飛、あんたなんでバスケット部入らないのよ」

「ああ、上下関係めんどくせえ」

よくある質問に決まりきった答えで返す。

「ふうん、そうか。じゃあ悪いけど、職員室まで付き合ってもらえる？」

「そのつもりだぞ最初っから」

数人、すれ違うたびに挨拶を交わした後、貴史は玉城に付きしたが職員室へと向かった。校内は思ったよりも暖かく、コートを脱いでもよさそうだったが荷物になるのもなんだしそのまま移動した。玉城は黄色いマフラーと手袋だけはずした。

「菱本先生、朝早いかなあ」

「まだまだ新婚ムード残ってたら遅いんじゃないかねえの？」

突っ込みながらまずは職員室の扉をノックし、覗き込んだ。いるいる。新婚ムードとは程遠い顔して、菱本先生がコートをロッカーにひっかけている。

「いるぞ、行くか？」

頷いて玉城が先に入った。「おはようございます」と、まずはすでにいる先生たちに声をかけて、貴史が入るのを待っていた。

まだ八時十分前、十分早い。菱本先生はロッカーを閉めながら振り返った。貴史を見るやまずまじめに、玉城に目をやりひょうきんに、それぞれ表情を使い分けた。

「おいおい、ずいぶん早いなお前ら。お、玉城と羽飛か。珍しい組み合わせで、どうした？」

先手を取って貴史は頭を下げた。

「先生、昨日はほんと、申し訳ありません！」

「まあいい、そのことはまたあとでな。それにしてもどうした、玉城？」

玉城はコートを着たまま、まずはぴよこんと礼をした。

「先生、今日早く来たのは理由があるんです」

「そりゃそうだよな。言ってみろ」

女子向けの明るい笑顔で迎え入れる菱本先生。パイプ椅子と隣の先生の椅子をそれぞれ一脚ずつひっぱりだして玉城を座らせた。当然貴史はパイプ椅子を選んだ。

「菱本先生、今日の五時間目と六時間目なんですけど」

言葉をいったん切って貴史にちらりと目を走らせた。

「お願いします。杉浦さんのことでどうしてもクラスみんなに聞いてもらいたいことがあるんです。歴史の授業を臨時のロングホームルームにしてもらえませんか」

——杉浦？

頭が凍った。意味がわからない。杉浦加奈子のことか？

「杉浦？ どうしたんだ玉城、いきなり何があったんだ？」

ぽかんと口を開けた後、すぐ菱本先生の問いが始まった。

「そりゃ五時間目は俺の授業だが、一応やることだってあるんだぞ。授業にはな、カリキュラムってのがあってそうそうかんたんに変えられるもんじゃあないんだぞ」

「先生、それはわかってます。承知してるけどどうしても今、聞いてもらわなくちゃいけないことがあるんです。私、女子のほとんどの昨日の夜、許可をもらってそれでこうやって話、してるんです」

「女子のほとんどって、おいおい全く話が見えないぞ？」

貴史も同じく話が見えない。窓ガラスの結露ごしに観察しているかのようだ。もっと詳しく聞いておくべきだと反省しても後の祭り。玉城は両手を膝にのせ、ぎゅっと握り締めたまま言葉を継いだ。

「私たちが卒業するまであと二ヶ月もないんです。このままだとずっと、杉浦さんは傷ついたまままでこのクラスを出て行ってしまいます。昨日の羽飛くんのこともありましたし、絶対今がタイミングとしていい時だと思うんです！ 先生、私、今までこんな風に頼み込んだことありましたっけ？」

いきなり問われてまた息を呑む菱本先生。貴史もやはり釣られて呼吸を止める。隣で熱く説得し続ける玉城の顔は真っ赤だった。触れたらはじけそうだった。

「いや、なあ、玉城、まず話を整理させてもらえないか。俺も今学校に来たばかりで頭の中が大混乱しているんだ。それに六時間目ももともとロングホームルームだしそちらで片をつけることはできないのか？」

「たぶん、時間なくなっちゃいます。私、今までこのクラスでとことん本音でぶつけ合って話し合いをする機会ってぜんぜんなかったと思うんです。理由わかってますけど。時間が足りなかったとか、誰かが特定の方向にひっぱろうとして操作してて気づかなかっただけとか、いろいろあります。でも、今なら本当にほんっとのこと言って、クラスをまとめるチャンスだと思うんです」

話の途中で教頭先生が「おお、元気にやってるねえ」と声をかけて通り過ぎていった。いつの間にか狩野先生が現れ、茶色いコートを脱いでいるのが見えた。そういえば隣は狩野先生の席じゃないだろうか。このまま座っていいのか玉城よ。

「玉城、女子に確認取ったと言っていたが、清坂には話したのか？」

黙った。不意を突かれたのだろう。

「清坂さんにだけは話してません」

「どうしてなんだ？」

狩野先生が机に荷物を置いて、「おはようございます」と菱本先生へ声をかけた。すぐに職員室から出て行った。気兼ねしたんだろうか。

玉城はうつむき、また貴史に視線をやった。女子にしては太い声で答えた。

「杉浦さんと清坂さんとの間がこじれたことがきっかけなんです、このことは。もし清坂さんにこのことを話して協力をもとめようとしたら、絶対に握りつぶされます。今までもこんなことがいっぱいあったんです。だから私も、今回だけはどうしても、きっちりと全員の前で話をしたいんです。清坂さんに邪魔されることなく、杉浦さんの言い分をすべて聞いてあげてほしいんです。特に、男子全員に」

倒置法をやたらと使いながら、玉城は語り終えた。さすがに二度目、狩野先生が自分の席を恨めしそうに覗き込んだことに気が付いたのだろう。立ち上がり、菱本先生をぐいと見つめた。

「そうか、そうだな」

貴史と玉城を交互に見やりながら、菱本先生はすぐ結論を出した。

「わかった。杉浦のことについては俺も、いつかはきちんと話をする必要があると思っていたんだ。だがこ、今だからこそ言い方を気をつけないとさらに傷つく奴が出てくるぞ。覚悟あるか？」

玉城は頷いた。にきびだらけの頬がまた赤らんだ。

「私もそれ、覚悟したからこうして話、してるんです」

「わかった。それなら今日の五時間目だが、俺からまず話をしようか。その後、玉城に話をしてもらおうということでもいいか？ 場合によっては六時間目を使おう。ただし、今日の歴史でやる予定のところは、あとでたんまりプリントで出すぞ、覚悟しとけよ」

顔を見合わせ、玉城はようやく貴史に笑顔を見せた。同時に菱本先生にも大きく頷いた。

「先生、ありがとうございます！ 私、やるべきこと、ちゃんとやり遂げます！ わがまま聞いてくれて、先生、ほんっとにありがとうございます！」

——こうやってにこにこしてたらこいつも、もう少し野郎連中からも人気もらえていただろうになあ。

全く関係ないことを貴史は考えつつ、一礼してパイプ椅子をたたみなおした。職員室から出ようとすると同時に、狩野先生が菱本先生に何かを話しかけていた。貴史や玉城にはのどかな笑顔を見せていた菱本先生だが、狩野先生に対してはどこか堅い眼差しでうつむき加減の語り合いをしていた。

——杉浦と、美里か。

黙っているつもりでいた。口をはさむつもりはなかった。

ただ予想外すぎた。

「玉城、お前、杉浦と美里のことかよ！」

「それ言ったら羽飛絶対止めるだろうなって思ったんだ。だから言わなかったんだ。ごめん」

手首に黄色いマフラーをぐるぐる巻きつけながら、玉城は頭を下げた。

「そりゃお前、嘘は言ってねえだろうけど、話の内容からしたらどう考えても立村がからむだろう？ 美里だけじゃねえだろ、俺ももしかしたら」

「なんで？ 私が言いたいのは、加奈子ちゃんのことを男子たちが露骨に無視していることがおかしいってことだけなんだよ」

「玉城、すっげえ誤解しているかもしれねえけど、それには理由がちゃんとあるんだ」

女子連中の誤解を貴史自身は確かに解く努力をしていなかった。男子連中は把握しているし、それで十分だと思っていた。しかし、女子たちは立村が横恋慕野郎であることをまだ信じ込んでいる。美里だけでは非力だった。

「知ってる。聞いたことあるしね」

短く玉城は答え、首をくいと一回振った。

「でも、加奈子ちゃんが悪いとか立村が理解不能だとかそういう話をしたいんじゃないんだ。私のしたいことは、そんなんじゃない」

「じゃあなんでだよ。個人のつるし上げじゃねえのかよ。なあ玉城、立村とは昨日のどたばたでかなりやばい状態だし、あいつをこれ以上ぶんなぐるようなことはできれば避けてもらいたいんだけどな、それだけはだめか？」

「羽飛、違うんだよ、私がしたいのは、立村や清坂さんをいじめたいわけじゃないんだよ。それを全部説明したいから、今、五時間目の歴史の時間をもらいにきたんだからね！」

職員室を出て、三階に向かう階段をのぼりながら玉城は手袋を握り締めた。

「このこと、羽飛にだけは前もって話しておきたかったんだ。だから、今日会えてよかった。無理につき合わせてごめんね。できたら今のこと、内緒にしてもらえるかな」

「聞かれない限り、俺、しゃべる気ねえよ。安心しろ」

「清坂さんにも？」

「ああ」

迷いはあるが、頷くしかない。事実はひとつなのだから美里が不利になることはないと思じたかった。同時に玉城の「山を動かしたい」気持ちにどこか同化するところもあった。何かをしようとしている、何かを変えようとしている。もし美里がそのとぼっちを受けたとしても、真実である限り決してめげたりはしない。いざとなれば貴史が割り込む覚悟もあるのだから。

「ありがと。じゃあ、五時間目。よろしく」

玉城は片手を振って三年D組の教室へ駆け出していった。八時をちょうど過ぎたところだった。そろそろ朝練の終わった連中が集まり出すころだ。貴史は職員玄関のロビーに向かうことにした。ロビーには椅子がある。誰かが来るのをまずは待つことにした。

——玉城が何考えてるかよくわからねえけど、立村の奴、へたしたらまじで立ち直れねえかもしれねえぞ。どうするんだいったい。美里はともかく、立村、どうすればいいんだ？

教室に戻ってからは玉城と一切話をしなかった。すでにこずえを始めとする女子連中がたむろっていたこともあったし、貴史も他の男子連中にとっ捕まったりでそれぞれ暇がなかった。美里が入ってきたことすら気づかなかった。

「羽飛、まじでお前、高校行けるんかよ？」

質問はしぼりこんでこのひとつのみ。玉城と同じことだ。

「たぶん、大丈夫じゃねえかって、菱本さん言った」

「じゃあ立村は生きてるってことか？」

「あいつ死ぬわけねえだろが。ま、親呼び出し食らったけどな」

詳しいことは相手があることなのであえてぼかした。自分のことはいくらでも話すことができるが、立村の事情はとてつだが第三者にばらすことなんてできはしない。姉貴と呼んでも不思議のない母親に平手打ち食らわされている現場を見たなんて、友情を重んじる貴史にはとてつだもというところだ。

「まじかよ、やっぱし」

「立村の親にぶん殴られなかったか？」

普通はそう思うだろう。心配するのも無理はない。貴史も自分がその立場におかれるまではおんなじだった。その結末のすさまじさを語るなんて今はできそうにない。

「話はしたぞ。けど、たぶん、大丈夫だと思うんだ、けどなあ」

「けど？」

金沢、水口、その他大勢が貴史を取り囲み顔を覗き込んだ。もちろんその中に立村はいない。確認してから貴史は扉を見やり、首を振った」

「あいつとはまともにしゃべってねえからなあ。しばらく、俺が動くまであいつに余計なこと言うなよ。今までの例からして、立村が何しでかすかわからねえから」

「確かに」

みな、納得するように頷いた。そうなのだ。貴史が言うまでもなく三年D組の男子たちは立村の言動が自分たちの予測をはるかに超えていることを実体験で理解しているはず、わかりきっていることだった。

席に着き、まず扉付近の席の人影を確認した。座っていなかった。

——やっぱりかよ。

覚悟はしていたが、やはり休みやがったか。

立村があれだけ母親に罵倒されて平気でいられるような性格だったら、この三年間起きた出来事の九割方はまああるく片付いていたはずだった。予想通りではある。

「起立、礼、着席」

菱本先生が入ってきて、美里の号令が飛んだ後も同様だった。どう考えても遅刻ではない。貴史はまず菱本先生の顔を見た後、美里に目を向けた。美里も立村の席をちらちら見てはいたけれ

どそれ以上何もしなかった。

「よっしゃ、おはようグッモーニング！ 今日とは、出席取るまでもないか、立村が欠席か」
珍しく菱本先生はひとりひとりの出席を取らなかった。

朝のホームルームもとりたてて何かお言葉の準備があるわけでもなさそうだった。昨日と同じ、ごくごく普通の一日の始まりに過ぎなかった。

「羽飛くん、羽飛くん」

声ですぐ奈良岡だとわかる。昨日はひたすら「あの女」扱いしてしまった女子だが、一夜明ければ気のいい「ねーさん」として受け入れられる。

「なんだよ」

「昨日はごめんね。言い過ぎちゃったみたいで。でもあのあと、大丈夫だったんだよね」

「あ、立村なら大丈夫だった。俺もなあ、ちょこっと母ちゃんに尻ぺんぺんされたけどまあ、無事に終わったなあ。ねーさんもまああまり、気にすんなよ」

本当は少しくらい気にしてほしいのだが、それは又別の時に言えばいいことだ。

相変わらずのぼちゃぼちゃもち肌ほっぺたを震わせながら、奈良岡は神妙に貴史の顔を見つめ返してきた。

「私の切り出し方がやはりまずかったのかなあ」

「それは残念ながら否定できねえなあ。ねーさんよ」

軽く、返してみた。凶星と答えないのだがやはりまずい。

「そうだよ。立村くんには何言っても伝わらなかったんだよね」

「しゃあねえよ。ま、あいつとは中学卒業してからでもいくらでも話、できるしなあ」

——玉城もたくらんでいてこと、もう聞いているのかよ、こいつも。

そういえば玉城は昨日の段階で、美里を除外した女子たちに話をつけたとか言ってなかったろうか。五時間目と六時間目をドッキングさせて、とことん杉浦のことについて熱く語りたがっていることも承知しているんじゃないだろうか。聞いてみたいが玉城と内緒の約束をした以上口には出せない。確認したいだけでもやはりまずいだろう。

「そっか、そうだよ」

あっさり奈良岡は引き下がり、また両手を合わせて「ごめんね」ポーズを取ってみせた。

——やっぱり奈良岡も、わかってねえなあ。

文集企画を何とかして中止しない限り、立村が学校に戻ってくることは卒業までまず難しそうだ。まずはそのあたりをなんとか整理しないとならない。貴史なりにそのことは考えていた。奈良岡といったんふたりっきりで相談し、立村の事情を……ある程度明らかになっていることも踏まえて説明しなおい……頭を下げる必要がありそう。ただそうすると立村が聞きつけてかえっていじけてしまうことも想像がつく。そんなこんなのどたばたを片付けるには、今日立村が休んでくれたのはラッキーだったのかもしれない。

——いや、ラッキーじゃあねえだろ。

あわてて打ち消した。親友が大泣きして学校を休んでいる状況を「ラッキー」なんて言っちゃ

あいけない。

一時間目の授業が終わり、まずすることひとつめ。

「おい羽飛、ちょっと聞きたいんだけど」

金沢のしがみついたような表情にいったん待ったをかけ、貴史は教室を出た。

二段ずつ階段を降り、もう一度職員室に向かう。菱本先生が戻ってきているようであればまず捕まえるつもりだった。聞くことはひとつだけ。立村の欠席理由のみだ。一分も必要ない。

「羽飛、羽飛」

職員室の扉を開くとすぐに声がかかった。菱本先生が机に書類を積み上げた状態で手招きしていた。すぐに向かった。隣の席に狩野先生はいなかった。

「あ、先生、あの」

「立村のことか？」

察しがよすぎる。頷いた。

「立村、今日休んだの、やっぱり昨日のことでめげてるんかな」

一応は職員室なので小声で尋ねた。菱本先生も同じく霧がかった声で答えた。

「風邪引いただけのようだぞ。今朝お母さんから連絡があったしな」

「あの……」

べっぴんさんか？そう尋ねようとしてさすがに口を閉じた。

「本当かなあ」

「お母さんが連絡してきたということは、本当なんだ。そうだよな」

なぜか問いかけるような答えを返したのち、菱本先生は貴史を立たせたままじっと様子を伺うようにして、

「心配なんだろう」

片手を机の上に乗せ、まじめな目でもって貴史を見つめた。

「あの人、てか、立村の母さん、やっぱり怒ってるんじゃないかなあ、先生」

「ああ？ それはないと思うぞ。普通の調子で電話がかかってきたぞ」

「いや、俺立村からあの母ちゃんの話聞いたことあるけど、めちゃくちゃスパルタで、すっげえ怖い人だって聞いたことあるんだ。だからたぶんあいつ家に帰ってから、またばしばし怒鳴ったり殴ったりなんかして、それであいついじけちまったんじゃないかなって思うんだ」

「想像力たくましすぎるぞ羽飛。ま、確かに言いたいことはわかるがな。昨日はさすがにしんどかったら？」

大きく頷き貴史はさらに続けた。

「俺思うんだけど、立村きつとあいつの母ちゃんにぎゃんぎゃん怒られて、もう戻るにも戻れない状態なんじゃねえかなって思うんだよ、先生。もちろん昨日の話、すべてが嘘だってわけじゃないけどさ、立村をあそこまで怒ることない内容なんじゃないかって気するんだ。俺、あいつの性格知ってるからわかるけど、あんなやり方されても絶対反省なんかしねえよ。それどころか家に閉じこもってしまって、話なんか聞かねえよ。俺、ずーっとあいつにそうされてたからわか

るんだ」

「羽飛、じゃあどうしたらいいと思う？」

両膝に手を置き前かがみになり、また菱本先生が問う。

「今、どうしても俺、立村と一対一で話したいんだ。できればあの母ちゃん混ぜないでさ。今度こそ手は出さないし、俺も大人になって話したいけど、ただあいつの怖い母ちゃんが怒鳴っている以上、立村は俺にも絶対会おうとなんて思わないよ。それどころか、学校にこのままだと絶対来ねえよ」

菱本先生が目を閉じ、何度か頷くのを見下ろして、

「俺、立村の母ちゃんに直接話させてもらって、今回のことはあいつと俺との一対一の話し合いであって、手を出した俺がまずは根本的に悪いんだってこと、まず伝えたいんだ。それってまずいかなあ。それから、できたら、謝ってもらえたらなあって」

「謝る？」

薄めを開けるようにして菱本先生が首をかしげた。

「立村の母ちゃんに、あいつにごめんって言ってもらえれば、少なくともなああいつ、俺たちとは話するところまで復活すると思うんだ。だめかな先生」

思わず笑いがこみ上げたらしく、菱本先生は唇をかみ締めるようにして吹き出した。

「あのお母さんがそういうことすると思うか？ 羽飛、お前もずいぶんすごい発想するよなあ、ったく」

——なんだよ、俺まじめに言ったんだぞ。

親友がうずくまってしまった状態だというのに、そんなに軽く提案できないようではないのだ。心外だった。反撃しようとした。

「貴史、あんたすっごく甘いよ」

背中が声がした。気がつかなかった。美里がいつのまにか貴史の背後に立っていた。

「お前くの一かよ」

「職員室でふざけるんじゃないの。先生、あの、いいですか？」

いったいどこから湧いて出てきたのだろう。さっさと美里が貴史の前に突き進み、菱本先生のまん前に立ちはだかった。

「ほんとに忍者だな清坂。んでなんだ。お前も、立村のことか？」

貴史の顔を最初にちらっと見て、すぐに真正面から菱本先生に向き直った。

「はい、立村くん、やはり」

ここで言葉を切った後、こくっと頷いた。自分に気合を入れるように見えた。

「あんなことがあって平気でいられるタイプじゃないんだということはわかります。けど、羽飛くんの言うようにあの、お母さんに謝らせるというのは無理です！」

「おいなんだよいきなりなあ」

「あんたは黙ってよ。それに、立村くんのお母さんが話されたことって、決して間違っていることじゃないんだって、私思います。だからそのことが間違っているって私とか羽飛くんがくちば

し挟むのって、間違ってます」

「あのなあ美里、お前人のせっかく」

言いかけた貴史のつま先を、美里は即、かかとで踏みつけた。ちょうど真後ろに貴史が立っている形となるため、美里の踏みつけ攻撃も先生にはほとんど気づかれないですむ。結構悪党だ。

「わかったわかった、それで清坂はどうしたい？ 代わりになる案はあるのか？」

「はい、お願いなんですけど」

用意していたかのように美里は言い切った。

「卒業文集作りを中止させてください。それが立村くんにとってもクラスにとっても一番いい解決策なんです」

貴史の脳みそに隠した案を無理やり掘り取ったかのような発言だった。

菱本先生もぱっと目を見開いた。

「立村にとっても、クラスにとっても、か？」

菱本先生のクラス文集作りに対する熱い情熱を美里も知らぬわけがない。覚悟の上での発言だろう。美里は再度頷いた。はっきりとした口調で続けた。

「はい、先生が私たちに素敵な思い出を作りたくって一生懸命文集作りに力を入れていただていることは、すごく感じてます。私もふだんだったらD組のみんなの思い出を文集にまとめて永遠に忘れない約束をしたくらいです」

「わかっているなら、なんでだ？ 文集に載せる内容が立村にとって辛い内容だからか？」

「それもあります」

「それ以外に何かあるのか？」

「はい、私、立村くん、これ以上」

美里の肩が後ろから見てかすかに上がった。深呼吸ひとつしている証拠だ。

「評議委員長から落選してから、貴史……羽飛くんに思いっきり怒られて、お母さんにも叱られて、さらに文集なんて作ったらもう立ち直れなくなっちゃいます。私、立村くんと三年間話し続けてきているからわかるんです。もしかしたら、立村くん、最悪のことしてしまうかもしれません。あと二ヶ月しかないのに、こんなにいっぱい苦しいことが詰め込まれたら、もう学校に戻って来れなくなっちゃうかもしれません」

そこまで一気に美里が話しまくったところで、鐘の音が聞こえた。隣の狩野先生は姿を見せないままだった。ぞろぞろ授業を控えた先生たちが職員室から出て行く。各科目の道具を抱えた生徒たちもこちらを怪訝そうに覗き込みながら足早に走りゆく。いつのまにか残されているのは菱本先生と貴史、そして美里のみになった。

両膝をたたいて菱本先生は勢い良く立ち上がった。貴史から美里の瞳を上から覗き込んだ。いわゆる「上から目線」の眼差しだが、いやな感じはしなかった。

「わかった、清坂。クラス文集のことだが、立村の問題も関係しているから少し考えることにしようか。まあな、立村の性格を一番理解しているのはお前たちふたりだもんな」

次に貴史の肩を叩いた。

「だがなあ、清坂」

そのまま手を置いたまま、美里に話しかけた。

「クラス文集に入れ込んでいる奈良岡や、その他にも楽しみにしている連中がたくさんいるってことも、お前わかってるよな？」

「はい、だからこそ」

言いかけた美里を今度は菱本先生が手でさえぎった。

「だからこういうことは、クラスできっちりと話し合いをした上で決を取るべきなんだ。わかるだろ、清坂。立村が今日は休みだから本当は避けたいところなんだが、もう作るかどうか決めるなら時間もないしな。まずは、今日のロングホームルームで話し合うことにしよう。それだったらどうだ？」

「六時間目にですか？」

戸惑った風に美里が横目でにらむ。もちろん、貴史に対してだ。

「それの方が後腐れなくすむし、みんなも納得して別のこと考えられるんじゃないかと、俺は思うんだ。な、羽飛、どう思う？」

——これは、あれだなたぶん、玉城のこともまとめて片付けるつもりなんだな。

菱本先生の計算が読めたような気がした。手が肩にかかったままだ。重たい。がっかりしている。指先が少し動いているような感じがする。念のため菱本先生の目に本気なものが隠れているかを読み取ってみようとした。無念、男子ゆえにお人よしムードしか感じられない。裏なんかわからない。

「いいんじゃないねえの？ 俺も文集はできりゃやめたほういいんじゃないかねえかって気するしな」

「あんたもそう思うよね！」

拳を作って軽く振ってみる。OKの意だ。すぐ伝わった。

「わかりました。それなら今日、ホームルームで私、話をします。よろしくお願いします。あ、授業始まるので失礼します！」

——俺もお前とおんなじ授業出るんだけどなあ。そんなあせるなよ。

律儀に扉前で一礼した美里は、勢い良く飛び出して戻っていった。廊下をばたばた走る気配はなかった。急いでないのがばればれだった。

菱本先生は手はずした。大きくひとつため息をつき、

「お前もずいぶんモテモテだなあ」

机の上の教科書を抱えなおした。歴史の教科書とノートだった。

「玉城や清坂や、とにかくいろんな女子の面倒見ないとなんないというわけか」

「そんなんじゃあねえけど。あ、朝の玉城とのことは、ありゃ別。たまたまバスで相談に乗っただけだって。美里には何も言ってねえし」

「だと思ったぞ。だから、今なあんも言わなかったというわけだ」

にやり、ひとつ、下手なウインク。

「先生日本人なんだからウインク無理無理、やめとけよな」

まずはたしなめた後、

「けど、先生のやりたいことはだいたい読めたよ」

これだけまずは伝えておいた。

「玉城の持ち出した美里と杉浦との小ぜりあいと、文集をやるかやらねえか、両方まとめて片づけたいんだろ？ 俺もたぶん、先生の立場だったらそう思うしな」

はっとした表情で菱本先生は、持ちかけたノートをもう一度机に置いた。

「俺も正直、立村がこれ以上びくつくの見るのいやだし、できれば文集やめたいって気がしてる。それは美里と同じ意見。けど、班ノートのことになると今度は杉浦と美里とのことも絡んでくるし、それだったら立村のいねえ間にぜーんぶおっぴろげにしたほうがいいんじゃないかな。あいつがいたらやはりみんな、遠慮するし。それ片付いてから、立村と直接話をするんだったらすっきりするし、文集やるもやらないもどっちにしても、納得させられるんじゃないかなって思うんだ」

一年担任の先生がふたり戻ってきて自席に着いた。授業がない先生がこういう風に過ごしているのかと少しびっくりした。いきなりお茶を飲み出した。

「羽飛、お前、なんで評議委員に立候補しなかったんだって、何度聞いてるんだってことだよなあ」

ひとりごとなのか、それとも尋ねているのかわからない。貴史は数えるふりをした。

「少なくとも五回以上は聞いている。耳たこ」

「わかった、よし、じゃ、五時間目、玉城にまずは話を振るからその流れであとはお前がし切ってくれないか？ 清坂には文集について六時間目に丸々使うような説明を今しているから、五時間目使おうとしても別になんとも思わないだろ。まあ五時間目に玉城の杉浦に関する話、六時間目に文集問題、この切り分けでやってみるつもりだが、話が入り組んでいるととんでもない方向にいくかもしれないぞ。仕切りの自信はどうだ？」

「たぶん、大丈夫」

親指をぐいと突き上げ、「GOOD！」のサインを見せた。

「今までの例だとさ、俺と美里が組んで何かやらかしたことで失敗したことってぜんぜんねえよ。だから今回も大丈夫だよ。玉城が何考えてるかってとこだけ心配なとこなんだけどな。たぶんうまくいくって」

「名コンビだなあ」

二時間目、次の授業は国語の古文だった。

担任に呼び止められて話をしていたとはいえ、とっくに授業が始まっているはずだ。

「じゃ、俺教室に戻ります」

「走るなよ」

もう一度「GOOD！」で決め、貴史は廊下を全力疾走した。誰が「ろうかを走らない」なんて下らん規則守ることできるかって言いたかった。

——文集を中止させて、立村と杉浦との下らん噂が大嘘だってことを証明できればあいつがびくびくすることなんてなくなるはずだろ？ それさえできれば、あとはあいつのうちに直接行って直談判したっていい。俺はただ、立村と、おっかさんすつとばしてあいつとだけ話がしたいだけなんだ！

昼休みが終わるまで貴史が浴びせられた怒涛の質問は、立村復活後にQ & Aとしてそれぞれ「文集」化して渡したくらいだった。

曰く、

・なぜ立村は保健室でひたすら死んだふりをし続けたのか？ さっさと目を覚まして「大丈夫です」と伝えようとしなかったのか？

・なぜ文集作りに対して貴史と美里は中途半端な対応をし続けたのか？ 素直に奈良岡のやり方をなぞっておけば丸く収まったはずなのに？

・立村が隠したがっている過去はすでにばれればれのはずだが、なぜ今更になって取り上げようとするのか？ 第一、全校生徒が知っていることではないのか？

・そもそもなぜそんなあくどいことをやらかして立村は青潟大学附属中学に正々堂々入学できたのか？

・なぜ貴史は立村を無理やり評議委員に推薦したのか？ この学校が特殊な委員会制度を保っていることに気づかなかっただけなのか？ 黙っていればそのまま部活動状態で持ち上げられる環境下ということを知らなかったからなのか？

質問の内容はほとんどこの五点に絞られていた。言葉こそ違え、貴史に尋ねる女子たちの多くはこの問題をしつこいくらい突っ込んでくる。さすがに玉城は言葉をつぐんでいたが、その他の女子たちは美里のいない隙を突いて同じ事を繰り返す。

「まあまあ、いろいろ事情があるんだってな。あんまりあいつのこといじめんなよ」

さらりと今は流すしかない。五時間目が控えているのだから。

「まあいいけどねえ、やっぱり立村はどうしようもない奴だってことよね。なんで三年間あんな奴が評議委員だったんだらうって、ほんっと昨日みんな思ってたよ」

——あのな、みんなって一部の女子だけだろが。

そう言い返したくとも、やはり鐘が鳴るまでは何も口にできやしない。

こずえがほいほいとそいつらを席に着くよう追いやり、貴史の耳元にささやいた。

「なんかたくらんでるんだよね、あんたさ」

——やっぱり気づいてやがるんかよ。

腹が立ちそうになる。こちらは別に五時間目が始まるまで待たなくてもよい。どすを利かせて言い返してやる。

「るっせえな、黙ってろっての」

「美里も何か覚悟しているみたいだしね。それに、玉城ちゃんも」

いきなりあの玉城を「ちゃん」付けする。

「はあ？」

「しょうがないよね、とにかくあんたが何考えてるかわかんないけど、私は羽飛を全力でサポートさせてもらうからね。鈴蘭優にはかなわないだろうけどさ」

あまりにもわかりきった言葉を発した後、さっさと自席に着いたこずえ。いつもどおりさらっと他の男子女子たちと、全く関係のない話に盛り上がっている。そういえばこずえは昨日の今日でありながら、ほとんど立村の様子について確認しようとしなかった。美里が全く話をしなかったということはないだろう。美里が立村の件について一肌脱ごうとしていることも承知しているはずだ。

ただ、なんで、玉城の名前を出したのか？

——やっぱりなんかたくらんでるのかよ、こいつも。

この三年間、こずえの前科を知る貴史にはどうもひっかかる場所がある。美里の親友だからというわけではない。ただ、どうもいつも貴史の考えの前を横切りさっさとレールを引いていくような行動が多すぎる。目に見えなければいいのだが、露骨に、自分の顔が見えるような格好でやらすものだから、貴史もついかちんとくる。

——んなこと考えてる暇ねえな。何はともあれまずはまずってとこだ。

本当に立村という奴は、何から何まで手のかかる奴だ。

玉城のテーマ「杉浦加奈子に関しての清算」と美里のテーマ「文集作成の中止可否」。

菱本先生の考えだとまずは五時間目に玉城を、六時間目に美里を、それぞれ持ち時間を与えて行うつもりなのだろう。とはいうものの話の内容は立村を巡るごたごたなのだから、つながらないわけがない。しかも昨日の今日だ。被害者立村は休みだし、加害者である貴史はこうやって席にいる。となると当然貴史も割り込まねばならないはめになる。

なかなか菱本先生が現れない。美里もまだ荷物を取りに行ったのか戻ってこない。

当然教室はしゃべくりの嵐だった。聞こえてくる女子連中は相変わらず立村のつるし上げであり、今ここにいない美里への悪口である。それをこずえも気づいているはずなのに、さっさと無視して「大人のレッスン」なんぞ小冊子を広げて近隣の連中にレクチャーを試みている。勝手にしろだ。

——菱本先生はまず、臨時ホームルームということでさっさと玉城にしゃべらせる。その後でどう話が進むかだよなあ。わっからねえ。

ウルフカットの頭を探してみる。

立村の悪口を叩き合うグループでなにやら盛り上がっている。女子連中には話をつけていると聞いているのだが、下準備をするつもりないのだろうか。美里だったらさっさとこずえを捕まえて何かかしら行動しているはずなのだが。それとも、忘れてるなんてことはないだろうか。正直玉城がホームルームのような場所で、何かを発言しようとしたことは貴史の記憶する中全く思

い出せない。相手が美里であり、また大嫌いな立村であればそれも仕方ないのかもしれないが。いきなりの反旗翻し計画には一体何が隠れているのか、貴史も想像がどうしても付きかねる。

——美里も黙っちゃあいねえだろうしな。

空席を見やる。立村の席もついでに目をやる。

これでも三年D組公認のカップルだったはずなんだが。

「待たせたな、みなの人」

なんだか天羽を思わせるような口調で扉を開けるなり叫んだ菱本先生。後ろに美里がつき従い、黙って教科書を置いた。巻物の年表は持ってこなかった。ちらっと他の女子たちの顔を見て、すぐに自分の席に着いた。

「先生、どうしたのいきなりさかりついたみたいにさ！」

調子よくこずえが掛け声をかける。こういう時のお約束だった。菱本先生も答える。

「若者なんだよ、俺もな、古川、よっく覚えとけ」

いきなり二本指で敬礼ポーズを取る菱本先生、相当気合が入っていると見た。この先生が妙に芝居がかった行動をする時は、クラスのための臨時ミーティングが控えていることが結構多いのだ。もしかしたら気づいている奴がいるかもしれない。

「先生、もしかしてこれから自習？」

「ばあか、んなわけないだろ。号令よろしくな清坂。それからだ。歴史ってのは奥が深いんだぞ」

全く意味不明の言葉の羅列に貴史も先が読めない。いったい何をやらかすつもりなのだろうこの先生は。玉城の方を覗いてみると、おしゃべりをぱたっとやめて、きっちりと背を伸ばしている。どうやら、覚悟はあるみたいだ。

「起立、礼、着席」

美里がいつも通り号令をかけた。いつもなら立村の担当だった。

「さーとだ。お前らが期待していた自習ではないんだが」

さっそく菱本先生は切り出した。教科書を左手でまず持ち、投げるようにして片手で受け取った。改めて教卓にたたきつけた。

「歴史ってのは、何も戦国とか安土桃山とかそんなもんだけじゃないんだ。今こうやって生きている俺たちも、歴史に残る一人なんだ。さらに言うとか。歴史ってのは何世紀とか、俺たちが生まれてない時代のことを差すんじゃないんだ。ま、言ってみると、一年、二年、三年前の出来事も十分歴史であるんだな。それはわかるだろ、羽飛？」

いきなり指を差される。大きく頷く。それしかない。

「ということで、この時間はいわゆるD組の歴史を語り合うために使わせてもらうことにする。いいか、これは授業だからな。忘れるなよ。てなこと歴史の語り部を指名させてもらうとするか。玉城、さあ立て。語れ」

——すげえ無理くりつなげてるよなあ。

菱本先生も一応は社会科の教師だ。授業を無条件でロングホームルームに組み込みたくはなか

ったのだろう。その辺ややこしい事情が潜んでいるのかもしれないが。言われてみれば確かに「歴史」とだけ銘打たれているのであれば、三年D組のたどってきた日々も「歴史」のひとつではある。

玉城が立ち上がった。男子たちのざわめきが広がった。女子たちのささめき声も混じった。美里が戸惑ったように玉城を見上げている。てっきり自分が指されると思っていたのだろうか。こればかりは約束した以上、見守るしかない。

教卓の脇に立ち。玉城はじっと全員を見渡した。ほんの少しの間があり、一声を放った。

「今日はどうしてもみんなに聞いてほしいことがあるんです。だから少しだけ、時間ください」

「何だよいきなり、おいおいおいおい」

妙な掛け声をかけるのは水口だ。声をかけたくてならないのか、それとも単純に状況が理解できていないのか。奈良岡彰子と一緒に高校に合格が決まっているせいで頭が春なのか、そのどちらかだろう。

「ふざけないで聞いてください！ 私、ずっと前からなんでみんな言いたいこと言わなかったんだらうって思っていました。それ、私も一緒です。私も、つい、ほんっとについて最近まで言いたいことをずっと我慢していました。だから、今ちゃんと言います」

「回りくどいんだよ、早く言っちゃえよ」

男子のひとりが野次を飛ばす。軽いジョーク程度ののりだ。爆弾なんて思っていやしないのだろう。せいぜい菱本先生をおちょくるイベントが控えているのではという程度の予想しかないだろう。誰もがまさか、あのことを。

「私、杉浦加奈子ちゃんをずっと、ずうっとひとりぼっちにしてみました。加奈子ちゃん、ごめんなさい！ ごめんね、許して、ごめんなさい」

一瞬静まり返り、同時に誰もが同じ「！」を口にした。

——ああ？

「杉浦？ 何言ってるんだ玉城？」

「なんで？ わっけわからねえ」

「話読めねえよ」

意味ある言葉を発するのはほとんどが男子だった。それぞれ周りの席でくるくる誰かかしの顔を探し合い、「？」を確認しあっている。反対に女子たちは一番側にいる友達に頷くような合図を送っている。名指しされた杉浦が最初にぼかんとした顔で見上げた後、すぐにうつむいて二つ訳の髪の毛をいじり始めたのも見た。美里だけがあちらへきよろきよろこちらへきよろきよろとそれぞれの顔を見合っている。貴史の方も向いて、「ねえあんたなんなのこれ」と言いたげに首をかしげた。反応しようがないので貴史もこずえの顔を覗き込み視線を逸らした。こずえは飲み込んでいたのか大きく頷き、すぐ玉城に顔を向けるよう顎をあげるようなしぐさをした。

両手をぽんぽん打ち鳴らし、すぐに割って入ったのは菱本先生だった。

「先走るな玉城、まずはだ。ここでだ。仕切りを決めるとするか」

一呼吸おいた後、教卓から貴史に指を差した。二回目だった。

「羽飛、司会、お前な」

言い切った。すぐに「ええ？」と男子中心の不協和音が流れる。貴史も同様に、

「あ、俺が？」

今朝の話し合いで覚悟はしていた。

ただ、心のストレッチタイムがまだまだだった。

口が思いっきりぽっかり開いた。

——おい、ちょい待て。まだ玉城、ほとんどしゃべってねえだろ？ 俺がいきなり割り込んでいいのかよおい？ 菱本先生まじで先走りすぎなんじゃねえの？

いつもよりも芝居がかりすぎていた菱本先生の言動に、もう少し早く気づけばよかった。

もうとっくの昔に、三年D組菱本組劇場の幕は開いていることに。

「司会って、何やんの？ 俺、何すんの？ もしかして、評議みたいなこと、すんの？」

てっきり玉城との話がこじれはじめ、美里がかっとなった頃を見計らって水入りにする行事軍配の役割だと思っていたのだが、菱本先生の考えていたことは全く違っていったようだ。ざわめきが収まらぬ中、美里が立ち上がるると同時に、まっすぐ菱本先生に、。

「あの、ロングホームルームだったら私、司会しますけど？ これ、評議の役割だし」

そう声をかけた。菱本先生は首を振り、ちらりと玉城に向かって目で合図をしていた。硬直したまま玉城が顔を上げ、じっと美里をにらみつけている。

「違う違う。清坂、あのな、これはロングホームルームじゃない、歴史の授業の一環なんだ」

またなだめるように玉城に笑いかけ、美里にかんで言い含めるように続けた。

「ってことは司会者も評議じゃなくていいってことなんだ。お前の出番は用意するから、そこんどこ頼む。座ってくれ」

不承不承に美里が座った。顔は見えないがたぶんふくれつつらだろう。玉城の険悪な眼差しからして美里を叩きのめす準備中というのは十分予想がつく。

菱本先生はもう一度、貴史に三度目の指差しをした。

「ということでだ、羽飛、お前が立つんだ、頼んだぞ」

——おいおい、ほんとなんだよこの展開。俺もうどうなったって知らねえぞ？ だから俺は評議なんてめんどくせえ委員になんて立候補する気なんてなかったんだ。こういう時最初に仕切るのは立村だろ？ それで手に負えなくなったら俺の出番だろ？ そういうパターンだったろうが、ったく！

もう逃れられない。美里は一切振り向こうとしない。玉城がじっと貴史に熱い視線を投げかけてくる。今朝の相談事という秘密があるだけに目を逸らせない。後ろからも前から横からもみな、ひそひそと貴史が立ち上がるのを待ちかねている、そんな空気ではしゃいだ。、

「羽飛、ご指名かよ？ すげえ」

「立村いないんじゃあなあ」

「とうとう来たってことよね」

「来るべき時だよね」

「動いたね」

男女問わずささやきが溢れてくる。何かのどに詰まったようなものがあり、飲み込めない。

「勝手に決めていいんかよ？」

つぶやきをすぐに切り返された。玉城経由で即だった。

「玉城、司会が羽飛で不服か？」

「羽飛くんなら、私、本望です」

改めて指を差しなおし、

「し切ってやってください。よろしく」

しっかり首を振った。唇を結び、次にうつむいている杉浦加奈子へ頷いた。もちろん見ているわけがない。側で奈良岡彰子が

「怜巳ちゃん、がんばって」

などと声援を送っている。やはり貴史としては奈良岡彰子へのかつての好感はよみがえりそうにないをつくづく思った。

——じゃあねえ、のるかそるか、いっしょうやったるか！

菱本先生と玉城、ふたり、二本の指に突き刺されたかのようにだった。

貴史は腰を上げた。

こずえの顔をまずは覗いた。口を結んだまま、親指を立てて返してきた。次に美里を見た。完全に予想外の展開で立ち直れていないのか振り向く気配すらなかった。

——しっちゃんめっちゃかだな、ったく。わあったよ、俺行くよ。これきりな、絶対これで終わりだからな。こんな評議委員みたいなこと、二度とごめんだぞ。

ロングホームルームではない、「歴史」の授業のご指名だ。立村のおはこをぶんどった訳ではない。美里を無視したわけではない。腹にずしんとくるものがある。貴史は菱本先生の立つ教壇に上がった。先生の背を軽く片手で押した。

「んじゃ、先生、まずは指定席にどうぞ。後は任せろ！」

「ああ頼んだぞ」

にやりと笑い、菱本先生は指定席……窓辺のパイプ椅子をひっぱりだし、ゆったりと足を組んだ。立村相手の時もそうだった。

教壇から見下ろす光景は見慣れぬものだった。数学の授業などで黒板に問題集の答えを書き込む時も、あまり上から座っている奴がどんな顔をしているのかじっくり観察する機会など一切なかった。

まず、ひとつ、大きく深呼吸をした。ラジオ体操の動作みたいにやってみた。

すぐに爆笑が続いた。

美里の様子をまず確認した。泣いてはいない。予想通りのふくれつつらというだけだ。たまた

ま玉城の席に近いこともあって、その点だけがめんどくさそうだった。

次に、右隣にいる玉城の頭をのぞきこんだ。こいつは女子の中でも後ろから二番目くらいに背が高いので、思ったよりも貴史と位置が近い。微笑んできた。にきびと愛想さえそろえばもう少しこいつにも明るい未来がくるんじゃないかとかちらと思った。

奥の席にはつまらなそうに南雲が足を組んでいる。規律委員長のプライドなんて捨てているも同然だ。そういえば南雲も立村の事情についてどこまで把握しているのか正直想像がつかない。こっそり立村から相談受けているなんてことはないだろうか。勘ぐりたくなる。水口、金沢、その他大勢の男子連中は興味しんしんといったようすで実を乗り出している。奈良岡彰子も同様に、小さな声で水口をなだめている。

——今回のスペシャルゲストは、っと。

杉浦加奈子をじっと見た。

男子連中からは、「クラスの引っ込み思案男子をろくでもない噂でもって再起不能寸前にした最低女子」との烙印を押されていて、せっかくのかわいさも無視されている。玉城の言う通り、いじめと言われれば逃げ場はない。ただ、その男子の立場を一番よく理解しているのも貴史なのだし、ここはなんとかいい方法で手打ちをしたいところでもある。

うつむいている。ふたつ縛りの髪の毛を今度は左手で握り締めまた深く頭を下げた。表情は観察不可能だった。

——立村の奴、いつもこんな風に見下ろしてたんだ。三年間もそんなことやってたら、クラスの連中が奴の様子も全部お見通しってことかよ。まったく、あいつちっとも言わねえからわからねえよ。

頭を切り替えた。まずは玉城に思う存分語らせてやるしかない。まずはそこからだ。

「ではでは、ご指名にお答えしてやったるかってことだ。玉城、とりあえず俺も事情全く把握できてないんで、まず言いたいこと全部しゃべれよ」

「ありがと」

あっさり答え、玉城は一人語りをすぐに再開しようとした。まずい、まず手で押さえるふりをして、貴史はクラス全員に呼びかけた。

「あのな、今回玉城は俺たちの前で、青年の主張みたいな演説するのに慣れてねえんだ。そこんとこ立村とかの委員会経験野郎とは違う。だから、話に時間かかるかもしれねえから、まず、茶々とか野次とか入れずにひとまず聞こう、な？ 内容が入り組んでいたら俺がちゃんと確認しながら進めるから、そこんとこ、ひとまず頼むわ」

ささやき声が完璧に静まった。美里が両手を机に乗せて、今にもとびかかりそうな目で貴史を見上げている。もしかしたらその眼差しが菱本先生にとっては立村に近いものだったのかもしれない、ふとそんなことを思った。

「じゃあ、まずだ。玉城」

貴史はまず、教卓に両方の肘から下をぺたんとして玉城に問いかけた。自然と腰が曲がる格好になる。

「あやまりたいことって何、から説明してもらえねえ？」

「うん」

大きく息を吸い込み、貴史に頷くと玉城はじっとそれぞれの連中を見渡した。やじ飛ばし禁止令も瞬時に行き渡ったようだ。不機嫌そうな南雲を除いては。そんな見たくないものが見えてしまうのが教壇のめんどくささでもある。

「一年のちょうど今くらいのこと、みんな覚えてますか。私、詳しいことはよくわからなかったんだけど加奈子ちゃんが元気なくしてて、同時になんとなくクラスの一部分から無視されてたこと。じゃなくって、主に男子たちからいきなりシカトされ始めたこと、みんな気づいてましたか。てか、みんなやってたことすら気づいてなかったかもしれないけど」

——やっぱそのことだな。

貴史は頷いた。玉城に向けた腰に無理かかるポーズは変えなかった。

「同時にあの、今いないからまずいかもしれないけど、立村くんが」

ここで一応「くん」をつけたことが玉城なりの気遣いなのだろう。言葉をここでいったん切った。つばを飲み込むようにして、

「いろいろ原因だったんじゃないかって話聞いてて、でもなんでかわからないけど表に出てこなくって、みんなどうしていいかわからなくって」

「玉城、ちょい待て」

貴史はここでいったん声をかけた。本能だ。

「言い方変えたほういいんでないか？ みんなじゃねくてさ、『自分』って』言い直したほうがいいじゃあねえ？」

はっとした風に玉城が貴史を覗き込んだ。

「いや、くちばし挟んで悪いけどな。誤解されちまうだろ。今ここにいる奴らはお前の話をまず聞こうとしているわけだし、文句言いたいこと我慢しているかもしれないだろ。でも、お前の話、ってことだったらまずは聞きたいと思うんじゃないかなあ」

「ええ？」

クラスメートたちに貴史から呼びかけた。

「な、お前らをののしっているわけじゃあねえんだ。玉城は。玉城なりにまず杉浦のことを思いやっているあまり口走ってるだけだから、まず、ここで落ちついて聞こうな」

もう一度「な？」と玉城に言い聞かせ、貴史は先を促した。細かく頷き直した。玉城もうつむくようにして微かに笑みを浮かべた。意外だった。文句言われるかと思った。菱本先生の方にちらと視線をやると、こぶしを軽く握って穏やかなグーサインを送ってきた。

「ごめんなさい。私、みんなを責めるつもりじゃなくって」

玉城はもう一度深呼吸して続けた。

「私が言いたいのは、加奈子ちゃんがなんで三年間、辛い思いをしてきたのに助けてあげられなかったんだらうってことなんです。私だって友達として、いろいろ話をしたかったけど、ええとなんってっか、あえてしゃべらないようにしてたところもあって」

そこまで玉城は後ろでうつむいている杉浦を見つめて声をかけた。声を詰まらせたように聞こえた。

「加奈子ちゃん、いきなりこんなこと言っちゃってごめん。びっくりしてるよね。私、今の今まで何にも言わなかったからね」

ずっと杉浦加奈子が顔を上げ、肩をすぼめたまま見つめた。頬が赤らみ涙ぐんでいるように遠めには見受けられた。周囲の連中も男子は興味ありげに、女子は心配そうに観察しているのみ。美里は表情を一切変えずに玉城と貴史だけに視線を向けていた。

「私、この組が好き。大好きなんです。三年間このクラスにいられて本当によかったと思ってるし、菱本先生も面白いし。だから嫌いな奴は本当はいないと思って卒業したかったんです。けど、そういうことがどうしても言えないことあって、どうしても許せなくって」

どうもまどろっこしい言い方で貴史も進行に悩む。女子が時折訳わからないことを言い出すのはわかるのだが、それ以上に玉城という奴の行き着きたい先がまったく見えない。覚悟は伝わってくるし、杉浦をかばいたいというのも理解できる。ただ、まっすぐ走ればいいのに寄り道ばかりしているというか、舗装されている道を右の木に衝突し、左の鹿に激突するようなしゃべりかたばかりしているように聞こえる。話によれば女子たちには根回ししているらしいのだが、男子からしたら寝耳に水だ。ただでさえ立村がらみの問題で頭がいっぱいだというのに、他のネタが混じりこんでくるとなると反発以前に、みな寝るに決まっている。

——じゃあねえ。ちょっと口挟むか。

ここも本能で勝負することにした。

「悪い、玉城、何度も口出しするようだけどな」

できるだけ穏やかに、ある意味立村を見習うような口調を使ってみた。

「やっば、お前の話し方だと誤解の嵐になっちゃうわ。責めてるんじゃないやねえよ。だからまず、俺にまるごとしゃべってもらえねえかな」

「私これでも一生懸命話してるよ」

当然言い返されるのは承知だ。声を低め、腰にきわめてやさしくないポーズを取り直した。教卓の後ろは思い切りへっぴり腰だ。

「うん、よっくそれはわかってるんだ。だから、妙な話に持っていきたかねえんだよ。だからこうしねえ？ まず、俺に一对一で話すようなしかたにして、それを俺が鸚鵡返しするように伝える。それなら、まず、いいんでないかなと思うんだ」

「怜巳ちゃんそうしたほういいよ」

いきなり同意の声が飛んだ。予想はしていた。奈良岡だった。同時に男子連中もざわめき始める。こずえの声も入る。

「そうだよ玉城さん、ここは羽飛を信じようよ。極端な話もうこういうチャンスめったにないんだし。羽飛が思いっきり仕切るなんて、うちのクラスじゃあめったに見られないじゃん？ 立村帰ってきたらこういうこともないんだよ。ここはさ、私の羽飛愛に免じて、ね、お願い！」

全く質の異なる空気で思わずむせた。爆笑、手を打つ奴もいる。ただ後ろで黙っている南雲だけはにこりともしなかった。足を組み直そうともしなかった。

「古川、お前の羽飛愛は本物だなあ」

よせばいいのに菱本先生も茶々を入れる。あれだけ今朝は大真面目に語っていたくせにいったいなんなんだろうこの差は。まず話を進める前に、お笑い展開を始末しないとならなくなった。

「みな、少し黙れっての。あのなあ、普段なら俺も乗るけどな。こんな時にそんなことできねえだろ？ 古川、後で責任取れよ。それはそうとして、まず玉城、さっきの話の続きだけどな」

無理やり軌道に戻した。まだなごみの空気が残った中、玉城は貴史に立ったまま向かい合い、少しずつ語り始めた。

「最初に変だなって思ったのが二年の六月頃なんだ」

自然な口調に戻っていた。やはりこいつはクラスメートのまん前で演説するのに向いていない。妙にパニック起こしてしまうくせがあるようだ。

「それまで普通に話しかけていた男子たちがいきなり加奈子ちゃんがないような感じで流そうとして、女子からみても、えっと私から見ても、だよ、変だなって思ったんだ」

どうやら玉城は敬語が苦手なんだろう。読みは当たった。頷きながら促す。

「たとえばどんなだ」

「ううんと、例えば班でみんなで理科の実験したりするじゃん？ その時とかみんなでアルコールランプに火をつけたり、ビーカーに水入れたりするじゃん？ その時に男子が誰も加奈子ちゃんに声かけないっていうか」

「それが変か？ 実験の時にひとりひとりに聞くもんか？」

「今のはたとえだよ！ 加奈子ちゃんが答えても『あっそ』で終わらせちゃって、他の女子に対しては『なーに言ってるんだよばーか』とか返すんだ。最初は加奈子ちゃんがおとなし過ぎるからかなって思ってたんだけどね。毎日、毎日続くんだよそれが！」

クラスメート席から「何だよそりゃ」「ざけんな」と、予想通りのささやきが響く。静かなので特定は可能だ。貴史はすぐにそいつらをにらんで首を振り黙らせた。立村がよくやっていたように、だった。

「玉城、それでクラスの男子が、杉浦をいじめているって結論に達したっつうわけ？」

「うまく言えないんだけど、いっぱい、ほんといっぱいあったんだよ！ いじめって雰囲気じゃあないよ。確かにね。物を隠すとか悪口言うとかそういうことはないんだけどね。ただ違うんだよ。なんとなく加奈子ちゃんだけ人間として存在しないような扱いしているって感じなんだよ。男子たちだけだったし、私たち女子はそんなこと関係ないと思ってきたけど、ずうっと変わらないんだよ。クラスの男子たちの態度が全くね」

紅潮した頬を膨らませ、貴史に訴える玉城。

ただじっと貴史は話に聞き入るだけだった。

それしかこの瞬間を乗り切ることができなさそうだった。

——二年の六月、二年の六月。

——立村と美里が付き合い始めたころじゃねえかよ！

立村と美里のなり染めもクラスではかなりの大事件として扱われたけれど、女子たちのクールな視線は後見役の貴史も感じていた。その前に例の杉浦加奈子を巡るガセネタが飛び交っていたこともあり、貴史なりに火消しを勤めたつもりではいた。しかし、立村が最初から美里以外意識していない……実際は下級生の杉本梨南が優勢だったらしいが……ことを証明するまでは男子連中も半信半疑だったのではないだろうか。「ほーらな、俺の言った通りだろうが！」とばかり、貴史はD組評議カップル誕生に周囲を巻き込み応援する方向に動いた。

——立村のどこが女たらしなんだか。あいつはな、最初から美里しか目がないんだよ。ほらわかったか！ 目覚めろってのお前ら。

男子らは素直に納得してくれたし、立村本人があっけなく白状してくれたのでその時は滞りなく計画成功した。もっともその後の立村は別の意味でいろいろやらかしてくれたので、なんとも言えないところは確かにある。たとえばいわゆる宿泊研修のあれとか、杉本梨南関係のあれとか

。

ただ、玉城の言う杉浦加奈子との一件とは直結しないはずだ。貴史にはそう見える。

——じゃあどうするか。

やっぱり本能に任せて進むことにする。誘導だ。

「玉城、つまり俺たち二年の六月頃からなんとなーく、杉浦をシカトする動きが見えてきたってことだよな？ そうだろ？ けど女子連中はうまくその辺フォローしてきたけれど、んでなんだ？」

「そうだよ、それでずっと今まで来たんだ。加奈子ちゃんもまじめだし、何かあったわけじゃないし、突き飛ばしたり怪我させたりってことしたわけじゃないし。そのまま私たちも気にせずに過ごしていけばいいよねって思った。けどね」

ここでちらっと斜め左奥の席に目を走らせた。

「最近になって、その考え方が、変わっちゃったんだ。きっかけは去年のあれ」

「あれってなんだ？」

いきなり「初体験？」などとアホな声がかかる。こずえではなく水口だ。あいつを黙らせる奈良岡と叫びたいが無視した。

「その」

今度は同じく斜め左前方を見やった。

「生徒会役員改選」

玉城は顔をまっすぐ上げ、貴史ではなく席についた全員に向かい言い放った。

「去年の十一月。あれから、山が動いたの」

「十一月ってあれかよ」

「まじか、やっぱりそうかよ！」

「おい、まさかあの」

男子連中ははっきりと名詞を発しない。ただわやわやささやくだけだ。

「そうよね」

「そうこなくっちゃ！」

「言っちゃいな怜巳ちゃん！」

女子連中は一部を除き歓声を挙げる。

なんなんだろうこの差は。

——ちょっと待てよ、この展開なんだよ？

貴史も仕切りを忘れた。美里の顔を思わず捜した。すでに美里はきつとした眼差しで貴史をにらみついている。下手に声かけたらぶっ殺される。その隙を突いて玉城は貴史からクラスのみなを見渡して両手を握り締め、太い声で語り出した。とめどもなくその言葉は溢れ、教室中を満たす。女子たちの顔にはそれぞれはっきりした言葉が書いてあるようで、意味もなく居眠りしている奴はひとりもない。男子のぽかんとしたまぬけ面とは大違いだった。現状を理解していないのか、それともこれが玉城の「仕込み」なのか。

「そうなんだよ、だから今こうやってしゃべってるんだ。私ね、今までずっと、加奈子ちゃんかわいそうだと思ってた。何にも悪くないのに無視されてひどいなって思ってた。けど女子たちが仲良くしていればそれでいいと思ってたんだ。けど、それって逃げだよな？ 私たち女子だって加奈子ちゃんの気持ちを全く考えないで無視してきたこととおんなじだよな？ 私、気づかなかったんだずっとあの時まで。去年の十一月の、生徒会役員選挙の立会演説会で、ほら、あの今の二年の女子が立候補するまではね」

——そういうことか！

くるくる巻き戻しテープが頭の中でまき戻る。忘れていなかった。確かあの生徒会役員改選では立村の大暴走劇でかすんでいたけれども、女子が青大附中生徒会開闢以来の女子生徒会長という快挙を成し遂げた。その生徒会長は二年評議の新井林が溺愛している女子で、立村とは折り合いがあまりよくないらしいとも聞いている。生徒会には全く興味がないから貴史も深く考えたことはない。ただ立会演説会の時にその女子……佐賀はるみが……語った言葉は、わけわからぬなりに心に残ってはいた。

「私ね、みんな」

玉城は止まらなかった。パーマが軽くかかったようなウルフカットを何度も縦に振るようにして続けた。

「それまであの、佐賀さんって子がただのぶりっ子だとしか思ってなかったんだ。一緒にいる、ほら、杉本さんっていうE組送りになった子いるよね。立村がやたらとかわいがっている子。あの子の方が正しいと思ってたんだ。けど、違ったんだよ。いろいろ嫌がらせされてて、我慢して

、それでも絶対めげない、負けな いうて立ち上がって、今度はもっと大きいことしようって決めて立候補したんだよ？ これってすごいよ。私、生徒会なんて全然興味なかったけど、あの演説聴いた時何かが変わったんだ。女子だから、いじめられてたから、きらわれてたから、誰も助けてくれなくなつてめげないで周りの人たちを変えていけるんだって、やっと今頃になって気づいたんだよ！」

声が詰まっている様子だ。貴史は再度腰を痛めるポーズで教壇に両腕を乗せ促した。

「けど私ひとりで感動してたってしょうがないよね。あの直後はそうだった。けどその後、A組の天羽が評議委員長になったじゃん？ 先輩に指名された評議委員長は絶対に引きずりおろせないって決まっていたのに、実際ちゃんと公平な選挙で決まったって聞いた時、佐賀さんの動かした山はどんどんどミノになってってるんだって、ほんとに、私、思ったんだ！ ひとりが立ち上がったことが、今まで絶対だって思ってたことをどんどん変えていってるんだよ。生徒会長は男子でなくちゃいけないとか、クラスで絶対評議委員を変えたらいけないなんてこと、全然なかったんだよね？ みんな、わかるよね？ これ、男子も女子も関係ないよね？」

貴史の杞憂もなんのその、玉城はいつのまにか男子にも、女子にも、同じ魂でもって語りかけていた。その声は決して澄んでいないしそれどころか言葉もとつとつだけど、ただ伝えたいものは隣の貴史にはっきり届いている。それでも男子たちはぴんとこない表情で「何かっこつけてんの」「熱いなあ玉城」などとからかう言葉をかすかにつぶやいている。やじ禁止令に触れない程度の声でしかないけれども。

杉浦加奈子の様子を伺った。

顔を覆い、ふたたびふわふわした髪の毛の一束ぶんを押さえるようにして身動きひとつしない でいた。

美里の姿を黙視した。

全く変わらない。他の女子たちに見られる頬の赤らみもなくただ唇を噛んでいるだけ。

——立村のこと言われてるもんなあ。頭来るよなそりゃ。けど今は、玉城の言いたいように言わせてやれよな。

テレパシーがあればそう伝えたいが、やはり超能力保有者でない貴史には無理だった。

「私、ずーっと考えてきてて、でも馬鹿だからまとまらなくて、それで彰子ちゃんやこずえちゃんたちにもいろいろ相談してきたんだよ。菱本先生にも話したりしてたけど、なんかちくってるみたいでほんとはいやだった。このクラスは、最初にも言ったけど大好きだし、それ男子も女子もおんなじだよ。大嫌いな奴もいるけどそれとは別だよ。みんな仲良く卒業したいって彰子ちゃんたちも応援してくれた。だから、ずっと今日までいい方法ないかなって考えてたら、昨日」

また言葉を切った。今度はいきなり貴史に向き直った。思わず貴史もきょうつけの姿勢で迎えた。

「なんだよいきなり」

「羽飛には悪いけど、やっぱし言わなくちゃ話、進まないんだよね」

次に菱本先生に、回れ右した。先生もやはり貴史と同じきょうつけのポーズを取った。自然

と笑いが教室に漏れすぐに消えた。

「先生、これからどうしても個人批判みたいなこと、言っちゃうことになるけど、許してください。そうしないと絶対にこの話、終わらないんです」

「個人批判か？」

「はい、許可、ください」

頭を掻きながら菱本先生は首を振った。

「個人批判はまずいぞ。玉城が熱くクラスのことを思ってくれているのはよっくわかったし、これから杉浦のことも含めて話し合いたい気持ちはあるんだ。ただ、なんでここでまた槍玉に挙げないとならないんだ？ ええと」

「立村くんのことです」

ここで玉城は「くん」付けで立村を呼んだ。

——おい、なんだと？ 立村だと？

五時間目始まって初の「喧騒」だった。寝ていたとしか言えない男子たちがそれぞれに「ちょい待て、なんであいつを」

「昨日の今日だぞ？」「しかもいねえぞ」

「欠席裁判じゃんかよ、まじかよ」

「こんなことされたらどうするんだ自殺されちまうぞ」

「てか目的間違えてるだろ絶対玉城」

「いい加減やめろよこんなの」

完全に目覚めてしまった。騒ぎ出したのは水口だけではない、国枝や近衛、東堂など立村とは学校内でしかしゃべらないような奴らも含めてだった。唯一、南雲だけが黙って足を組み直しただけだった。

貴史も言葉がすぐには出てこなかった。むしろ女子たちの生き生きした瞳と、

「待ってました！」

「怜巳ちゃんにすべては任せた！」

「これが代表よね！」

どう考えてもいじめに加担するのを楽しんでいるとしか思えない言動にひいてしまった。

どう考えても止めるしかないだろう。玉城には悪いが水入りさせていただく。

「玉城、あのな、お前が」

言葉を挟もうとしたとたん、菱本先生が手で制した。首を貴史に振って、中腰で両膝に手をやった。自然と玉城を見上げるような格好になる。

「今日、たまたま立村くんは休んでますけど、もしここにいっても私は全部しゃべるつもりでした。そこで全部決着つけるつもりでした。けど、欠席裁判みたくなっちゃうのでたぶん、個人批判になっちゃうかもしれません。それに羽飛くんにもひどいこと言っちゃうかもしれません。私、きつと嫌われると思います」

「立村か」

菱本先生は黙ったまま拳固で手の平をばしばし叩いた。

「お前も知っているだろうが、立村の立場は今非常にデリケートなんだ。俺としては賛成しない。羽飛にとってもほら、あいつは親友だ。親友を叩かれるのは気持ちいいことじゃない」

玉城はうつむいたまま小声で、また響く声で訴えた。

「それはわかっています。でも、もともとの発端が立村くんであった以上、私は決して許すことができません。それと、羽飛くんにもずっと言いたいことがあるんです。これは責めるんじゃないんです。ただ伝えたいことだけなんです。その流れで話すと、どうしても立村くんを責めることになります。加奈子ちゃんのことも含めて、文句言うしかなくなります」

「なら、責任は取れるか？」

短く尋ね、菱本先生は背を伸ばし腰に手をやった。

「もし立村がこの場でつるし上げにかかったことを知ったら、たぶん、死ぬほどショックを受けるだろうな。まあ俺もあいつに言いたいことがあるのはわからなくないが、ただ今ではないだろうか？ また別の時に時間をとって、できればいったん少人数で話し合いするとかして」

言いかけた菱本先生を玉城はつまり声でさえぎった。

「そんなことしてられないんです！ 今こうやっている間にも加奈子ちゃんが無視されっぱなしの状況は変わらないし、私たちに残されてる時間だってもうほとんどないんです。もしこのままで卒業したら、私はこのクラスをどうしても好きになれなくなります。だからこそなんとか、ほんとになんとかしたいんです」

「いや、悪いが俺は反対だ。先走るな玉城。まず今離したことを材料にして少しみんなと相談してみないか？ 俺も杉浦がこのまま辛い思いをしたままで卒業させたくはない。もちろんそれはわかっているんだ、だがな」

堂々巡りが続く。その間にも限られた「五時間目歴史」の時間は切り刻まれていく。

「なんだ、結局立村叩きしたいだけかよ！」

「杉浦かばうくせに立村をぼこぼこにするのは平気かよ。け、どっちがいじめなんだか」

「杉浦、なんとか言ってみろよ、立村に濡れ衣かけたのお前のほうだろうが！」

まずい、感情制御できないくせに声変わりしちまった水口が杉浦にすごんでいる。あわてて奈良岡が止めに入っているが無駄だ。うつむく杉浦はもう顔など上げられず、とうとう机に突っ伏してしまった。女子のほとんどが杉浦の席に駆け寄ってしゃがみこみ、水口に対して「何よ、中学生の癖におねしょ直らなかつたくせに！」などとののしりあっている。

——やべえ、これは俺の出番だ！

司会者としての意識をなんとか取り戻し、貴史は両手を叩いた。

「おい、お前ら少し黙れ、シャラップ！」

効果なし。今度は国枝が立ち上がった。怒鳴った。

「羽飛、お前知ってるだろ？ 立村がどれだけ俺たちを助けてくれたかってこと覚えてねえなんて言わせねえぞ！」

近衛も座ったまま頷いた。のほほん顔を崩さずに、

「そうだよな。あいつ責任感強い奴だよ。なんで女子たちが露骨に嫌うのか俺、全然わかんね」
東堂が南雲に話しかけているのも聞こえる。

「なあ、なんかクラスの弾劾裁判やってどうすんだよなあ、南雲」

南雲がどう反応しているかは聞くんもりもなかった。貴史が叫べどもいったん火のついてしまった三年D組を押さえることなどできはしない。いや、こんなに燃え盛ったことなんて今まで一度もない。いろいろあったD組だけど、担任の目の前で大議論に発展したことは貴史の記憶する限り全くなかった。

——どうするんだよ、おい、立村……。

いたらいたで対処のしようがないだろう。貴史はただ空に向かって怒鳴るだけ。それしかできない。玉城はとにかく立村に文句を言いたくてならない。その気持ちは前の日に貴史がたんまり抱えてきたものだ。それをぶつけていまだ傷が癒えないというのに、また二段目のびんたを食らわせようとする玉城をどうなだめればいいのか。

いきなり立ち上がったのは美里だった。他の女子たちが杉浦の側に固まっていたが美里だけは自分の席に座ったままだった。こずえが水口の頭を拳固でぐりぐりやりながら冗談に持っていこうとしている。取り残されていた美里がいた。

「清坂、お前の彼氏だろ、かばえよ、今ならのろけても許す！」

水口がアホな発言をして、ふたたびこずえに叩かれている。美里も当然無視した。そのまま菱本先生の側に近づき、ちらっと玉城を見据えた。貴史には目をやらずに菱本先生へ話しかけた。

「玉城さんに言いたいことすべて言わせてあげてください。私、それが一番いい方法だと思います。それと、これから私も司会に入っているんですか？ たぶん私が今日話したかったことともすごく関係していることだと思うんです」

「清坂、でもな」

戸惑う菱本先生に首を振り制した。

「杉浦さんと立村くんのこともそうです。昨日羽飛くんのことも、私が関係してます。評議のことも、生徒会のことも、私は全部わかってるつもりです」

「だが個人批判はまずいだろう」

「いえ、立村くんがここにいたら絶対に傷ついて立ち直れなくなります。友達として三年間付き合ってきましたからわかっています」

——じゃねえだろ、彼女だろ。

突っ込めない。ただ我慢するだけ。

「玉城さんにひとつだけお願いがあります。それとクラスのものにも」

菱本先生と貴史にはさまれる格好で美里は玉城に向き直った。ぶっこわれた眼差しのままだった。

「今日この場で決着がついたら、他の組の人たちに死んでも絶対言わないで。それと、今の立村くんにも、現段階では言わないで。その代わりに、今だけは私も、何言われてもいい。聞かれたことは全部話す覚悟はあるよ。立村くんが文句あるってことは、私にも言いたいこと、いっぱいあ

るよね？」

玉城の返事を待たずに美里は教壇に昇り、貴史の尻を思い切り引っぱたいた。小声でささやいた。

「何やってんの！ これからだからね！」

「あいつってえ！ 今まで黙ってたくせに何考えてんだ」

「今から私とあんたは」

まだ静まらない教室だからこそ口にできる言葉。美里はさらっと言い切った。

「運命共同体だからね、覚悟して」

あたふたしている間に美里は、

「それじゃ、まず、玉城さん」

呼びかけた。玉城も状況をよく飲み込めていなかったらしく、ひたすら貴史の顔を見上げていたが、美里に無言で頷いた。

「それとみんな、少し黙ってもらえる？ 水口くんもちょっとだけ我慢して」

同時にこずえが思いっきり水口の頭をはたいた。

「ほーらこっち来いって。もう最後まであんたは手を焼かせるんだからあ。彰子ちゃんちょっと手伝って」

急に笑いが湧く。空気が抜けたようだった。こずえは貴史と美里ふたりに頷いてから、

「ほら、あんたたちも一緒だよ、ひさびさのロングホームルームだからね、せっかくだから言いたいこと言おうよ。まずは順番だよ順番」

立ち上がって呼びかけた。お見事としか言いようがない。アイロンかけたみたいに教室はぴんと平たく静まった。

「ほら、怜巳ちゃん。立村のアホなことは私たちもよっくわかってるから。誰も止めないよ。菱本先生も、ここは美里と羽飛に免じてほら、あの、治外法権でいこうよ。ただ約束だけどみんな、今日この教室でしゃべったことはゼーんぶ内緒だから！」

——なんだよあいつ、あつというまかよ。

貴史が言葉を出せない間にもこずえは明るく声を響かせて続けた。

「てなわけで、あとは羽飛、よろしくね、ピース！」

「あ、ああ」

つられてピースサインを返してしまった。不覚だ。まったく。

「古川、羽飛、お前もか。。今、古川や清坂が言った通り、今この場でとことん言い合った後は水に流すことが本当にできるか？ それ、守れるか？ 清坂、そこまで信じられるか？ それとお前ら本当に、絶対に、立村を傷つけないと約束できるか？」

貴史はじっと全員の顔を見渡した。できるのか？できるわけなさそうだ。

どう考えても男女とも無理だろう。

信用するしないの問題ではなく、自分自身が、無理だ。堪えられるわけがない。

——できねえよ、んなこと。やるのかよ、そんな立村欠席裁判みたいなことできるかよ。俺はあいつをつるし上げないって約束で玉城と話したんだろが。

玉城はじっと貴史を見上げていた。苦しそうに唇を噛んでいた。

「なあ玉城、別の方法でできねえのか？ 俺もさすがにあいつのことが絡んできたら」

「わかってる。羽飛をだましちゃったよね。でも、その話をしないとどうしても本当のこと伝えられないんだ。ごめん」

小声だけど、教室中に広がる。こずえがアイロンかけた布に霧吹きかけたみたいに。

次に美里へ呼びかけた。

「清坂さんにも話したいことあるから、それも覚悟してる」

美里は目を逸らさなかった。無表情で答えた。

「貴史あんたは黙ってて。これは女子中心の話だから逃げる気ないよ。さっき言ったでしょ。全部受けるつもり。ただ何度も言うようだけどひとつだけ約束して」

一呼吸置き、さっき伝えた言葉を繰り返した。

「立村くんに今の段階では、絶対に言わないで」

——美里、まじ、本気だ。

教壇から見下ろし、美里は玉城の答えを待っていた。肩越しに覗くが、美里の顔はのっぺらぼう。紙そのものにしか見えなかった。

「わかった。言わない。絶対に」

「それならそうしましょう」

美里は事務的に答えると、再度菱本先生に向かった。貴史の肩に手を置いた。

「先生、お願いします。今、玉城さんが約束したこと、ここにいるみんなが証人です。もし破ったら、その時は私も許さないけど、そんな人じゃないでしょ。この三年D組の人たちは！」

くいと今度はクラスメイト全員を見渡した。貴史の背中をまた押し、正面に向ける。

「じゃあ、みんな、今はとにかく黙ってて。玉城さんが、立村くんに言いたいことを全部聞いていて。必要に応じて私も答えるし」

両手をばしんと教卓に置いた。たたきつけるわけではなかったが音はした。首だけ菱本先生に向けて、最後の確認をした。

「先生、いいですね」

しばらく菱本先生は黙っていた。立ち上がったまま全員顔を追いつつ、

「本当に大丈夫なのか？ お前らしようとしているのはつるし上げだぞ。立村が知ったらお前ら本当に」

言いかけた菱本先生を即、美里がさえぎった。首を一度だけ振った。

「友達として、私は立村くんを守ります。どんな結果になっても。ただ玉城さんが話したいことを片付けない限り、絶対に私たちは前に進めません。立村くんが今この場にいたら絶対に話せないことだってきっとあるはずです。先生、私たち三年D組のメンバーを信じてください、お願いします！」

圧された。完全に美里の能面パワーにやられた。

いつも泣いたり笑ったり表情のころころ変わる美里が、すべての心のゆれを封じて対している。こんなことはめったになかった。貴史の知る限り、一度も見たことがなかった。

怖い、その言葉すら甘く感じる。

——美里、お前そこまで。

もう一度教室の隅から隅までクラスメイトを眺め直してみた。そこにはみな、美里の覚悟を受け入れそうな真摯な眼差しが宿っているように見えた。男子も女子も、迫りに飲まれたのかそれ

とも、思考停止しているだけなのか。

席の奥、南雲に視線が止まった。

もう足を組んでいなかった。

——立村は俺の親友だ。美里だけに任せるわけにはいかねえ。

腹が据わった。貴史は菱本先生に呼びかけた。

「先生、やっぱ俺も美里と同じ考えなんだ。俺に司会任せてくれるって言ったよな。だったら絶対に俺も立村を奈落に落とすことはしないから、ここから先は俺に全部仕切らせてくれよ。もちろんやばくなったら俺が全部責任取る。あの母ちゃんにも謝りに行く。けど、やっぱり玉城をはじめ、杉浦のこととかも含めて話し合わないと美里の言う通り、先に進めないってよっくわかった。だから、頼む、頼みます！」

頭を九十度近く、がくっと下げた。

静まった後、拍手が起こった。たちたと、席の奥から。

「菱本先生、いいんじゃないですか」

拍手しながら立ち上がったのは南雲だった。

「俺も、今回に関しては賛成です。立村がいないからこそ、何でも言いたい放題できるってのは確かにみなさんあると思いまっせ。本当に約束ができれば、ですけどね」

ここで言葉を切った。南雲は髪の毛を振り、腰に手をやりいつものきざなポーズを決めた。さすがにひゅーひゅー言う奴は女子にもいない。

「ただ、一応俺も規律委員の端くれとして言わせていただきますと」

突然表情をくそまじめに切り替えた。ネクタイを直すようなしぐさをして、

「冷静に問題点を挙げていって解決することは賛成なんですけど、その後どっかの委員会のように弾劾裁判ごっこなんてそれだけはやめてほしいわけなんですよ。それをしっかり、目の前のおふたりが仕切ってくれるんだったら、俺は今、やっていいと思います。それと、もしここでおきたことをどこかの誰かにばらしまくるような奴がもしいたら、俺はそれなりの手続きをとってもう一度ロングホームルーム要求しますんで。この件は卒業してからも有効ってことでどうですか。ありがたいことに俺、高校に進学できそうだしできればまた規律委員の座狙ってますんで、もし何かしでかした奴がいたらその時は堂々と締め上げさせていただきます。そういうことでいかがですか、先生？」

いやみたっぷりに、援護射撃。

——あの野郎！

思わず隣の美里を押しやって教卓を投げつけてやりたい衝動に駆られた。そのくらいの腕力、たぶんある。すぐに腕を押さえられた。

「あんた、くだらないことでエキサイトするんじゃないの！」

美里に制されている。全く教卓の裏というのは面倒だ。菱本先生が南雲に尋ね返しているのを聞くしかなかった。

「南雲、お前もか？」

「今言った通りです。以上」

にやりと笑い返した南雲を見ながら菱本先生は大きくため息を吐いた。

「そうか、お前ら本当に覚悟あるのか。人をずたずたにするかもしれないんだぞ」

「さっきの拍手が答えだと、俺は思ってます。な、そうだろ、みなさん」

手を打って南雲が煽る。ふたたび拍手が沸いた。広げた布を何度も波打たせたような穏やかな響きだった。

「わかった。お前たちを信じる。三年D組を信じる」

菱本先生は静かに告げ、脱力したかのようにパイプ椅子に座り直した。

「じゃあ、準備OKね。玉城さんよろしく」

「玉城、ほら」

存在感なしなのもむかつく。一声だけでも入れる。玉城は美里をちらと見て、すぐ貴史に力強く頷いた。小声で、

「羽飛、約束破ってごめん」

謝ったあと、語りを開始した。

「加奈子ちゃんが男子たちに無視っぽいことされているって気づいた時、そういえばって思ったのが立村のことなんだ。そういえば立村は一年の三学期あたりに加奈子ちゃんを妙に追いかけてまわしているって噂あって。私もこういってたらなんだけど、なんとなくそんな感じあるかなとは思ってた。もちろんそんな人のことなんてどうだっていいし、人の好みっていろいろあるってわかってたけど、でも加奈子ちゃんがすっかり落ち込んでしまうくらい追っかけるってなんか違うよね？ 私もだけど、他の子たちも、他のクラスの子たちもなんとなくその雰囲気感じてたの」

「だからあれはガセだと」

くちばし挟もうとする男子のひとりを手で制し、美里が続けさせた。礼ひとつ言わない玉城。夢中なのだろう。

「加奈子ちゃん、最初は何も言わなかった。ほんとにひとりで黙ってた。加奈子ちゃんからは何にも言わなかったんだよ。それでいろいろ調べてたら、他のクラスの子たちから、立村が一年の秋くらいに加奈子ちゃんのことをつまわして、いろいろとちょっかい出しているって話が出てきたんだ。私、ほんとびっくりしたよ。あのいるかいないかわからないような立村がなぜ、加奈子ちゃんのいるところに遠くから追っかけていくなんてって。知らないかもしれないけど」

——止められねえんだよなあこれが。

貴史からしたらそのことがすべて大嘘だと承知している。ただ玉城の憤りも事実なのだから止められない。

「はっきり言っちゃうけど、あんなことされたらふつうの女子はみんな怖がると思う。私も、そんなこと絶対されないってわかってても、追っかけられたら怖いもん。けどクラスメイトだし、三年間変わらないし、絶対そんなこと言えないよね？ 相談できないよね？ しかも相手は評議

委員なんだよ？ 普通悩むよね？」

「何度も言うけどありゃ嘘だろ」

またしつこく口を挟む奴がいる。誰かと思ったら東堂だった。南雲に今度は制されている。

「そうだよ、男子みんな立村の味方だもんね。男子ってそうだよ！ 私、なんで立村があんなに男子たちから人望あるんだろってすごく不思議だったんだ。あとで殴ってもいいよ。けど本当なんだよ。女子からしたら変だよ。絶対におかしいよ。ふつう女子の嫌がることをして、嫌われたらそれであきらめるよね？ あきらめないでなんで何ヶ月も加奈子ちゃんを苦しめたんだろうって。そんな奴がなぜクラスの評議委員で、それだけじゃなくって評議委員長なんだろうって。私、どうしてもわからなかったんだ」

そこまで一気に言い切った後、玉城は目をぬぐった。

「私、男子たちから輦蹙買ってること承知してたけど、調べれば調べるほど立村がなんでかばわれているのかわからなくていらいらしてたんだ。気がついたら加奈子ちゃんが傷ついたことなんて忘れられたかのように立村は評議委員長に指名されてるし、いつのまにか加奈子ちゃんは男子たちに無視されてるし。なんでなのこれって、ふつうだったら言いたくなるよね？ 私、間違っただこと言ってる？ 私って変？」

「だから何度も言うけど、誤解もいいところなの」

三度目の正直、貴史も入った。

「東堂、黙れよ、さっき俺が言ったこと聞いてねえのかよ。しゃべらせろって」

不承不承東堂は黙った。恐らく貴史よりも後ろで肩をもみもみしてきた南雲の言うことを聞いたのだろう。玉城も貴史に頷き小さく礼をし、さらに続けた。

「もちろん男子たちが正しい情報もらってないからだってことは頭でわかってる。けど、加奈子ちゃんがいじめられていいってことには絶対ならないよ。ううん、いじめられてないのかもしれないけど、加奈子ちゃんが男子たちにさらっと無視されてることを認めていいってことには絶対にならないよ。加奈子ちゃん、今まで私たちにそんなこと一言も言わなかったし、今だってきつとびっくりしてるよね？ 私たちが変なこと言い出したって思ってるよね？ でも、ここできつちりと加奈子ちゃんがいじめられてきたんだってことはっきり認めないと、さっき清坂さんたちが言った通り、私たち、先に進めないよね？」

みな、静まった。物音ひとつなし。

玉城は美里に呼びかけた。

「清坂さんに聞きたいの。なんで清坂さん、立村をあんなにかばってるの？ 私、ずっと気になってたんだけど、どうして加奈子ちゃんにあんな冷たい態度取るの？ それも私聞きたかったんだ。なんで、男子たちの流したデマを信じて加奈子ちゃんを無視したの？ 私、女子の中で清坂さんだけがなんで加奈子ちゃんを嫌うのかわからなかったんだ。いじめてはなかったけど、でも、その態度」

額を両手でオールバックにするようにして、また顔を上げた。

「男子たちと同じに見えて、どうしてもやだったんだ。その理由、聞かせてほしいんだ」

隣で美里が息を呑むのを感じた。貴史のブレザー裾にその手が触れている。玉城が畳み掛ける

。

「わかっていていじめたの、それとも、勘違いしていじめたの、どっちなの？」

「いじめてなんかいいけど、そう思われたのだったら、そうかもしれない」

美里はそれだけまず答えた。納得したのか玉城の言葉はよどみなく続けられた。

「みんなも気づいていたかもしれないけど、清坂さんと加奈子ちゃん、仲良くなかったよね？男子たちは知らない人がいたかもしれないけど、女子たちの間では有名だったもん。加奈子ちゃんはそのこと、何も言わなかったけど、清坂さんの態度、あまりもひどかったと私、思った。清坂さん、加奈子ちゃんと最初仲良かったのに突然冷たくなったのがなんでだか最初わからなかったんだけど、よくよく調べてみると立村が加奈子ちゃんのことを追いかけ始めた時期とちょうど重なってるんだよ。それにあと、このみんな知ってることだから言っちゃうけど、六月ってそういえば」

また美里を涙ぐんだ目で見据えた。

「清坂さん、その頃からだよ、立村と付き合い始めたの。タイミングぴったり合ってるんだよ。加奈子ちゃんがいじめられるようになったのも、ちょうどこのあたりからだよ。私覚えてるもん。立村が清坂さんと付き合ってるって、教室で宣言したの見てたよ」

誰も声を挙げない。しっかり玉城に言い含められているのか、展開が速すぎてわけがわからないだけなのか。貴史にはまだ判断しかねた。はっきりしているのは、玉城の言動が完全に杉浦かわいさあまりの勘違いからきているということと、友を想う気持ちだけは間違っていないでも本物だという二点のみだった。

——話をひっくり返すことは余裕でできそうだよな。こりゃ。

貴史なりに考えてはいた。玉城には本当にかわいそうだと思うがしかたない、ここは貴史の知る限り立村の濡れ衣を晴らしてやるしかないしそれであっさり片付きそうな気がした。玉城の言う通り、立村が杉浦に誤解を招くような行動をしてしまったのは事実だ。ただ目的が色恋沙汰ではないことは明白。他の男子たちが杉浦の嘘情報にかちんと来てそれ以来慇懃無礼な態度を取るようになったのはむしろ当然とも思える。杉浦加奈子の自業自得だ。ただ、やりすぎでいじめのように思われてしまったのだったら、それは謝る必要があるだろう。貴史だけではなく、美里も含めてだが。

——けどなあ。立村の過去をここでばらしてもいいもんか？ 迷うよな。

この辺は時間があれば美里と打ち合わせたかった。しかし教壇の上ではたとえ隣り合っていてもほとんど意思の疎通が図れない。近すぎて遠くなるのが教壇。複雑だ。

——もし、品山の番長との対決を俺がばらしたらたぶんあいつ、俺を一生許さねえだろうな。杉浦との一件を片付けるんだったらしゃべらねえとまずいだろうし、けどそんなことしたら藪へびになっちゃうかもしれないしなあ。どうする、美里。

ある程度、生徒会がらみの大騒ぎで明るみにはされている立村の過去だが、クラスの連中が全員その事実を耳にしているとは思えない。小学時代大喧嘩して怪我させてそれからどうしたこう

した程度であれば、もうみな承知していることだ。ただ立村がその後で、過去を隠したいあまり貴史に「裏・班ノート」なる物を作ってクラスの連中をだまそうとしていたとか、それを見抜いた杉浦が立村を脅迫したとか、その理由が杉浦の彼氏だったとか、ややこしい人間関係までばらして果たしていいのだろうか？

抱えている事情が三年間で膨れ上がりすぎて、もう手に負えない。

玉城も美里に矛先を向けているけれども、このままだとまずは「男子連中が立村の杉浦宛横恋慕を見るに見かねてかばい、美里とくっつけようと応援し、敵役となった杉浦を無視するよう仕掛けた」という話に落ち着いてしまいそうだ。ある程度は正しいのだが根本的に間違っている。消しゴムでゴシゴシやりたいがどう持っていこう？

——ま、杉浦を無視したまま卒業させたくねえっていう菱本さんの気持ちもわからねえわけじゃねえけど、この流れだと喧嘩両成敗もむずかしいんじゃないか？ どう考えたって悪いのは杉浦だろ？

杉浦が机につっぱしたまま泣きじゃくるのがかすかに聞こえてきた。

女子をいじめるのは貴史の流儀じゃないが、しょうがない。

「玉城、言いたいこと、とりあえずこれだけか」

できるだけ静かに話しかけ、頷くの待った。

「話整理すると、俺たち男子連中プラス美里が、杉浦を誤解して無視こいてしまったってことを言いたいんだろ？ その原因が、立村の杉浦に対する横恋慕で、見かねた俺たちがあいつをかばって、そのとばっちりでってお前、思ってるんだろ？」

玉城はしゃがみこみ、両手で顔を覆い泣きじゃくった。想像してない展開だった。

「……そうだよ」

「わかったわかった、お前よくがんばった、もういい、席着けよ」

貴史が壇上から降りて同じ高さにしゃがみこみ声をかけると、覆いかぶさるように菱本先生が近づいてきた。さすが担任、割り込むタイミングは絶妙だ。

「そうだ、玉城、言いたいこと言ってすっきりしただろ。ここから先はお前も話を聞く番だぞ。もちろん文句あるならちゃんと時間は用意するから、まずは席にもどれ」

奈良岡彰子が駆け寄ってきて「怜巳ちゃん、ほら、座ろうね」と背中をさすりながら席まで連れていった。三年連続保健委員の仕事完璧だ。この意味なきチームワーク。玉城が席について再びしゃくりあげるのを美里がひとり、壇上で静かに見据えていた。まだ玉城の激しい問いに答えてはいなかった。まだ涙で溶ける気配もなかった。

——美里？ どう答えるつもりなんだあいつ。

教壇から降りたまま貴史は美里の立ち姿をまじまじと見つめた。

「私が一年の秋から杉浦さん……加奈子ちゃんを無視したのはほんとうです。その点は謝ります」

美里の口から発せられたのは貴史の予想していない言葉だった。

「今から、その理由をすべて話します。その後で言いたいことあったら、全部ぶつけてください。ただ、何度も言うようですけど」

氷のまま美里は言い放った。

「これから話すことは、他のクラスの人にも、それから、立村くんにも永遠に言わないでください。その時は、私もしかるべき方法でちゃんと対決しますから」

「永遠」という響きが大げさすぎる。美里がなぜそんな言葉を選んだのかが貴史にはつかみかねた。いつもなら突っ込む場面なのだけど、今、隣ですくと立ったままクラス全員を見下ろしている美里にそんなことしたら何されるか想像がつかない。殴られるとかそういうものではなく、貴史の記憶する美里の行動パターンが読めない。

運命共同体とか言っても、銀河地平へ飛ばされそうなくらいの未知感覚がある。

——美里、どう持ってくつもりなんだ？

仕方ない。まずは出方を待つことにする。美里と組んだ勝負事で負けたことは一度もないのだから。

能面のまま美里はひとりひとりを見下ろした。

「中学一年秋頃です。たぶん菱本先生の持っている班ノートを見れば日付も特定できます。興味ある人は言ってください。とにかくその頃に私と加奈子ちゃんとの間でちょっとしたトラブルがありました。玉城さんが言っているのは、そのことでしょ？」

まずはいったん玉城に向かい確認をしている。ただ泣きじゃくっている玉城には伝わらない。現在涙が玉城と杉浦ふたりの瞳から流れている様子は伺い知れたが、美里の話を聞いているかどうかまではわからない。美里は無視して続けた。

「すごく前のことなんで忘れてる人も多いかもしれないけど、あの時道徳の時間で、いじめ問題がきっかけで自殺したどっかの生徒の話を取り上げたことがありました。菱本先生も覚えてますか？」

「あ、ああ？　すごい前の話だなあ」

美里の気迫とは裏腹に菱本先生は頭を必死に掻いている。記憶力を三十路男と十代のやわらか脳みそと比較してはいけない。貴史なりに同情した。美里もさっさと切り捨てて進んだ。

「私もその時はあまりぴんどこなかったけど、でもやっぱりかわいそうだなくらいは思った記憶があります。ただやっぱり他人事だったのですぐ忘れてしまいました。他のみんなもきっとそうだと思います。でも立村くんだけは違いました」

言葉を切った。唇を少しだけゆるゆると動かして、迷うそぶりをした。

「立村くんがその時書いた班ノートを見ればわかります。立村くんは本気でそのことに対してショックを受けていたんです」

思わず美里の顔を横から覗き込んだ。声が出そうになるのを必死にこらえる。

まだ他の連中はぴんどこない表情のうちに、美里の目的を探りたい。読みきれない。

「立村くんは、自分が小学校の頃いじめられていたことと、自殺した生徒には共感する一方で相手を刺し殺してほしかったと、そんなことを書いてました。もうみんな誰もが知っていることかもしれないけど、立村くんが私たちにかつていじめられていたことを話したのは、これが本当に最初だったんです」

さざめきが止んだ。すすり泣きも止まった。玉城、杉浦、ともに顔を上げた。

まだ止めるタイミングではなさそうだった。

「最近になっていろいろと立村くんの過去がばれてきてますが、私とか羽飛くんとかは早い段階でその話を知っていました。ただ、立村くん自身が話したことは一度もありません。いろいろと噂や、それから足で」

「足？」

すっとんきょうな声で尋ねるのはなぜか金沢だ。貴史なりに手をひらつかせて黙らせた。

「刑事じゃないですけどいろいろと知る機会があったんです。きっと隠したかったんだろうし、きっと私たちに知られたらまた嫌われるんじゃないかってびくびくしてたんだろうなって、だいたいのところ想像はつきました。だから私なりに考えていたのは、そのことをほとんど知らないことにして、クラスになじんでもらう方法でした」

美里は次に菱本先生へ頷いてみせた。先生も同じく頷き返した。

「小学校時代の失敗とか誰でもいろいろあると思うし、ここでばらされたら恥ずかしくて穴に入りたくなることっていっぱいありますよね？ 私もほんっとにいっぱいありすぎるくらいあるし。でも、もしばれたとしてもその相手が今の段階でいい友達だったら嫌いになんてなれないと思います。私は少なくともそう信じてます。だからこそ、立村くんがかつて辛い思いしてきたことを知らない振りして受け入れて、同級生として楽に過ごしてほしいと、それだけ考えて接してきました。評議委員として、ですけど」

さすがに付き合っていることについては触れなかった。一応はロングホームルームだ。

「話が飛んでごめんなさい。でも、私としては班ノートでいじめられていた過去を告白した立村くんをそのことで又辛い思いさせることはしたくなかったんです。そういうことがあったんだな、で終わらせられればここから先の出来事はなんも起こらなかったはずですよ」

——こいつ、裏・班ノートのこともばらす気かよ！

教卓の裏で美里のつま先を軽く踏んでみた。ブレーキになるか？ ならないか？」

——いくら立村が目の前にいないからって、どうすんだお前？

美里は一切動じる気配を見せなかった。ブレーキは壊れていた。アクセルでもなくスピードは変わらない。

「私が選んだ方法が正しかったのかそれとも間違ってるのかわかりません。ただ立村くんには何度も、友達として嫌ったりなんかしないから安心してほしいと伝えつつもりでした。私だけじゃなくて羽飛くんも含めてですけど。ただそれが伝わってないんだなってのも、なんとなくだけどわかって。でもクラスでは評議委員として問題なく選んでもらえていたし、これ以上何かが起こるなんて私、思ってませんでした」

隣の貴史に「ね」と相槌を求める目線を向ける。小さく頷く。

「でも、立村くん自身はそう思っていませんでした。私が聞いたわけじゃないけれど、自分の小学校時代の出来事でみんなに嫌われて、またひとりぼっちになるんじゃないかって真剣に悩んで

いたようです。だから、きっと、一年の秋にあの班ノートを書いた後、あれが嘘だったんだって信じてほしいと私や羽飛くんに言ったんじゃないかなって思います」

「嘘？何それ」

女子から小さな声が飛ぶ。あちらこちらぱらぱら。美里は交わした。

「立村くんは、はっきり言って馬鹿です。ほんっとに変、なんでそんなこと隠さなくちゃならないんだらうって最初私も思っていました。でも、立村くんは一度自分のしでかしたことがばれたらもうこの学校にいられないんじゃないかって不安だったんです。どんなに評議として評価されても、どんなに先輩たちにかわいがられても、友達がたくさんできて、いつか悪いことばかりしてきたことがばれて、すべてなくしちゃうんじゃないかって、それが怖くてしかたなかったんじゃないかって。それわかっていたから私はあえて知らん振りをしたんです。知ってても嫌わないよって言ってあげれば一番よかったのかもしれないけど、あの時の判断を私は決して、後悔しません」

ここまで一気に話した後、美里は杉浦加奈子にじっと目を置いた。

「私は隠すことを選んだけど、加奈子ちゃんは立村くんに反省してほしいって、そう思ったんだよね？　そういうことよね？」

両手を教壇について、話しかけた。

杉浦加奈子は唇をかみ締めたまま身動きひとつしなかった。

「立村くんのしてきたことには決着のついていないこともありました。詳しいことは当事者じゃないからわかんないから言いませんけど。それで被害者がいたことも事実です」

どうやら美里は「小学卒業式の自転車決闘事件」についても触れる気らしい。胃がぎりぎりする。顔を覗き込むのもしんどい。貴史は片手だけ教壇に置き、男子連中の様子を伺った。主に南雲中心で見渡した。腕を組みつつ、目を閉じている。奴には珍しくどっしりしたポーズだ。

「私たちは所詮部外者です。何も知らないままで友達でいればそれですむことかもしれません。でも、被害者がいて立村くんが加害者だった以上、反省しないで流すこともできないってこと、これも私、承知してます。その被害者の人と友達の加奈子ちゃんはそういう臆病な立村くんの態度に怒ったんじゃないかなって。そういうこと、だよね？」

「だよね」の響きが心なしか柔らかかった。

「私と加奈子ちゃんの考えが対立するのも、実は当然のことなんです。加奈子ちゃんは被害者の人たちのことを思いやってそれで立村くんを抗議したし、私は友達としての立村くんを大切にしたいからこそ知らん振りをしたわけだし。本当だったら私、もっと冷静に加奈子ちゃんと話をして、もっといい方法がないかって探せばよかったと反省、ちょっとだけしてます。でも、今考えてもわかりません。あれ以外何をすればよかったのかなんて、あの頃にタイムスリップしたとしても何にもできなかったんじゃないかって。何言ってるかわからないけど、どうしようもないんです」

「質問！」

いきなり南雲の声が響いた。挙手と同時に立ち上がった。美里がわれに返った風に顔を上げ、
「南雲くん？」

呼びかけた。

「清坂さん、悪いんだけどさ、立村のやらかした過去って具体的に何なのかわからないんだけど俺なりに確認してよいっすか？」

「え、でも、今私話を」

どもりつつ答えようとする美里を南雲は即さえぎった。

「つまりですね、こういうこと？」

顔つきがまるっきり一時間前の足組んで優雅に寝ていた時とは違っている。美里の脇に近づきささやいてみる。

「おい、なんだありゃ」

「わかんない！」

肘でくいと押された。

全員の視線が南雲に集まる。シャギーに切りそろえたおしゃれな髪型を整えるようなしぐさをしネクタイにちょいと指をかけた。すぐに離して一本指を天井に向けた。

「立村は小学校時代からあの性格だったもんでクラスの野郎連中にからかわれてたと。悪気があってそいつらもやったわけじゃないんだけど結果として立村本人にとっては辛いものだったと。青大附中に受かってから立村なりに決着をつけるべく、クラス番長っての？一番腕っ節強い奴に決闘状を突きつけて勝負したと。その結果、勝っちゃったと。まずはこれでしょ？」

美里に問いかける。完全放心状態の美里に反応するよう貴史も肘でつつき返して促す。頷くのみ。南雲も満足げに頷き目を閉じつつ語り続ける。

「ところが運悪く相手の打ち所が悪くてちょいと騒ぎになった、と。ただ附中の合格取り消しにならなかったところを見ると無事に片付いたということ。相手さんも結構人間の器が大きいようでお前もがんばれよ、と送り出した。それでちゃんちゃん、でしょ？」

——ちゃんちゃん、じゃあねえだろ。

言い返したいのを耐える。悔しいがよくまとまっている。

「ただ立村の性格よく考えればわかるだろうけど、そうとうしんどかったと思うよ。俺たちはその話聞いても、あーりっちゃんよくがんばったなあ、まあ飲もうよ、ってだけで終わるけどね。今の清坂さんの話を聞いてても普通はそうでしょうよ。まあ、俺たちにはきれいなところだけ見せて信じてほしいっていう気持ちも、なんかわかるような気するし。ここは男の情けってことでふんふん頷いて終わりでもいいんじゃない？って俺は思うんですがいかがですかみなさん」

貴史としては一言言い返したい。

——ふんふんで終わってりゃあ、こんなことやってねーだろ、このあんぽんたんがあっ！

今までは美里の演説にただ聞き入っているだけの皆の衆だが、南雲の問題まとめ発言をきっかけにふたたび反応し始めた。化学反応に近いものだろうか。

「まあそうだよな、みんな知ってるわなそんなこと」

「今更何をって感じだし」

「なんでいきなりネタになるわけ？」

以上は男子の発言なり。

「被害者いるんだよね？ それをなかったことにできるってわけ？ ばっかじゃない？」

「責任取らないで逃げた奴をかばうって狂ってるよ」

以上は女子の発言なり。

美里は黙ってその喧騒を眺めていた。貴史にささやいてきた。

「よく見ておいてよ、今の状況」

「はあ？」

「わかった？ じゃあ続けるよ」

良くわからない反応だ。美里がこの時間を使って何か目的を達しようとしていることは理解できる。ただそれが、「立村をかばいたい」ことなのかそれとも「杉浦と玉城を叩きのめす」ことなのか、それとも別の目的なのか、全く予想ができない。本来なら卒業文集の中止を提案するためだったはずだが、そこまで持っていく気持ちはあるのだろうか。このままだと脱線脱線また脱線の嵐になるだけで、収集つかなくなりそうだ。

「続けるってお前どうするつもりなん？」

「黙ってて。運命共同体、覚悟だよ」

能面、紙一枚の顔。美里は冷静さを保ったまま発言を再開した。

「南雲くんまとめてくれてありがと。そう、今まで私が知らん振りしようとしていた立村くんの過去ってたかがその程度のものなの。ばれたって誰もびっくりなんてしないし、南雲くんの言う通りよくがんばったんねの一言で片付くことだよな？ 立村くんが無理に小細工なんかしなくたって、一年の段階で終わっちゃったことだよな。でも、今誰かが言った通り、このことは被害者がいるの」

丁寧語は捨てたらしい。

「それが加奈子ちゃんの友達だったことから話がこじれた、それだけなの。加奈子ちゃんは友達が傷ついたことをかばおうとして立村くんに謝るよう話をした。立村くんは拒絶した。それを聞きつけた私としては、いじめていた相手に何があっても謝るなんていやな立村くんの気持ちもわかるから、加奈子ちゃんに抗議した。それだけ。二年前の私はおばかさんだったから、加奈子ちゃんに対して無視するっていう幼稚なことしかできなかったんだ。間違ってたと思う。それは私が悪いの。でも言わせてほしいの」

美里は片手を握り締め、とんと教壇を叩いた。

「今の私なら、立村くんの首根っこ捕まえて、一発ひっぱたくかなんかして、加奈子ちゃんとその友達に謝ってくるよう怒鳴りつけたと思う。冷静に考えたらやっぱり怪我させた相手にあやまらず逃げ出すなんて卑怯だもんね。加奈子ちゃんの気持ちが少しだけわかるような気がしてるの。ここまでは私が全面的に悪いと思ってるの」

誰かが小声で「どうした清坂弱気だぞ」「別に悪くなんかねえじゃん」とかささやいている。

誰かは聞き取れないが男子であることは確かだ。先ほどまとめ発言を終わらせた南雲はさっさと席に着き、また目を閉じ腕組みをしている。

「でもね、これだけは許せない。人間としてどうしても納得できない」

前置きをした後、美里は杉浦加奈子にもう一度、「加奈子ちゃん」と呼びかけた。

「立村くんが謝らなかったからといって、なぜ、C組の子たち使って立村くんが加奈子ちゃんを追っかけまわしているなんてデマを流したの？ 覚えてるよね？ 一年の一月から二月にかけて、変な噂流れてきて私びっくりしたよ？ なんで立村くんが加奈子ちゃんが嫌がるのを追いかけて付き合いかけてる話になるんだろうって。そんなことあった？ 悪いけど時期的に評議委員会ビデオ演劇を撮影していたし、加奈子ちゃんを追いかけるなんてことがあれば私だってわかったよ。立村くん、評議委員会の先輩たちにこき使われて大変そうだったの側で見てたし。みんな覚えてるでしょ？ 私たち一年の時のビデオ演劇は忠臣蔵だったって！ あの時立村くん、浅野内匠頭やらされて本条先輩たちにすっごくしごかれてたし、ひまな時間は全部っていいくらい本条先輩に張り付いていたんだもん。みんなも見たよね？ 給食時間流れたし。忠臣蔵。そんな時にもし加奈子ちゃんを追っかけてたら、私を含む評議委員関係者がみんな気づいてたはずだよ！ 最近だってそれほどじゃないのにみんな、立村くんが二年の杉本さんを追いかけてるとかわけのわかんないこと言ってるけどあの程度だってみんな気づくのにも！」

全くもって美里の言葉には裏付けがなさ過ぎる。言っていることに間違いはない。ただし立村を無罪とする根拠が「私が知らなかったから」というのはいくらなんでもないだろう。立村だってもし本気で杉浦に惚れていたのなら、美里に気づかれないように言い繕って追いかけていたかもしれない。もちろん絶対にありえないことだと貴史も承知しているけれども、あまりにも自己中心過ぎる。

「加奈子ちゃん、ここで聞きたいんだけど、本当に立村くんは加奈子ちゃんをしつこく追い回したの？ 菱本先生にC組の子たちが告げ口に行くくらい、ひどかったの？ 玉城さんにも聞きたいんだけどさっき、立村くんが加奈子ちゃんを追いかけていることに気づいていたって言ってたけど、どういうところ見てそう思ったの？ 二年前のことで覚えてなければしょうがないけど、具体的にどういうことだったのか聞きたいの。もしその通りだったら私が百パーセント間違っているってことになるから。ここできちんと謝ります。でも、どう考えてもそのことが正しいって裏づけが私には見つからないの」

杉浦はうつむいたまま、一言も発しなかった。

側で女子の数人が「加奈子ちゃん、言っちゃいなよ」「加奈子ちゃんの名誉を守るチャンスなんだよ」などと励ましている。一方で「清坂さんなに偉そうなこと言ってるんだろう？ 立村好きすぎてどうかしちゃったんだよね」「あとで後悔するよ絶対」とかささやく声も女子でちらほら聞こえる。

玉城は頬の涙を押さえるようにして立ち上がった。

「具体的って言われると、私も何も言えない。ただ、加奈子ちゃんを追っかけて話をしようとしてたところは結構見た、と思う」

「それいつ？」

「覚えてない、けど、なんとなく」

「なんとなくってことは、その時本当に立村くんが張り付いてて加奈子ちゃんを口説いていたなんてとこ、見てないんだよね？ 他のみんなにも聞きたいんだけど、加奈子ちゃんを立村くんが追いかけて、変なこと言ってたところ見た人ここにいる？ 私が覚えている限り、立村くんあの頃女子と話すことってほとんどなくて、あえていえば私とこずえ、あと評議の人たちだけ。まだ杉本さんも入学してなかったし！」

美里は何度も問いかけている。玉城が悔しげに俯いている。

「そうだよ。誰も立村くんがそういうことしてたってこと証明する人いないんだよね。あくまでも雰囲気、だけだよ。男子たちはどうなの？」

男子連中はみな同様に首を振っている。南雲だけが動かない。

「そっか、そうだよ。私もあの時変だなんて思ってたの。女子たちだけでなんで立村くんが悪者にされてるんだろうって思ったから。その後もっとわけがわからないのは、菱本先生！」

突然美里の矛先は、パイプ椅子で悩み切っていた菱本先生に向いた。

「先生も、その頃立村くんを呼び出してお説教してませんでしたか？ 私が直接聞いたわけじゃないですけど、他のクラスの男子たちがみんな心配してましたよ。立村くん、誤解されてるみたいだって」

「誤解、か、ああ」

歯切れ悪く菱本先生も俯いた。みな顔を上げようとしなれないのはなぜだ。

「確かに一度、清坂の話していた一件で立村と膝を付き合わせたことはあったが、あいつは素直に謝っていたな」

「それ、信じたんですか？ 立村くんがごめんなさいしたってことだけで！ 立村くんの性格知ってますよね先生。面倒なことはみんな自分が悪いことにして、『ごめん、俺が悪かった』の一言で片付けるんです！ いっつも私たちもそうされてきたからだいたい読めてますよあの人の行動パターンって！ ね、貴史、そうだよ！」

いきなり振られた。頷くしかない。事実だから。

「逃げの一手ではあるわな」

「でしょでしょ？ 今、確認している限り立村くんが加奈子ちゃんに言い寄ったって事実は探しようがないんです。あとは加奈子ちゃん自身がどう思っているかであって、その内容によっては考え直さなくちゃならないこともあるかもしれません。だけど、あの時、立村くんを先生が誤解して呼び出したことによって、その出来事が事実だって認められることになっちゃったんです。もしかしたら加奈子ちゃんにだけ告白かなにかしてたかもしれないし、それは私の知ったことじゃないです。でも、少なくとも、人前で大騒ぎになるようなことは立村くん全然してないってことはみんなが認めているんじゃないでしょうか？」

ここまで美里は息もつかせず言い切った。超特急お見事だ。

——美里、こうきたか。

天晴れだ。ほめて遣わす。

てっきり貴史は美里が杉浦加奈子の彼氏……今はどうだか知らないが……の浜野についてだらだらしゃべりまくり、さらに立村の姑息な「裏・班ノート」の秘密まで暴露して、その上で叩きのめすつもりだと読んでいた。それじゃ勝ち目ないし後から戻ってきた立村に即刻縁を切られるだろう。負ける戦をしない美里のポリシーを捨てられるのかとひやひやもんだった。

いや違う。美里はここでとことん立村の無実を打ち出す作戦に出たということか。

杉浦加奈子が男子連中に無視されるようになったきっかけのひとつが、いわゆる「立村に横恋慕野郎の濡れ衣をかけた」ことへの反発だった。貴史自身も立村をとっくり観察してきたが、美里のことをやたらと意識していたり、その他はこずえ以外の女子に話しかけることなどほとんどなかったりとか、そういうところばかり見ている。美里の言う通り二年に上がってからは例の杉本梨南登場により別の方面でおっかけ疑惑が生じてきたが、そちらは事実なのではない。美里も何度も杉本の名を出している。苗字が似ていて紛らわしいがもし相手が杉本だったら、貴史も当然かばえないだろう。立村にこれこそ、首根っこ捕まえて反省させるしかないと言い切るだろう。「本」と「浦」の違い。これは想像以上にでかいのだ。

もちろん、貴史も立村の言動を二十四時間監視していたわけではないので、百パーセント無実と言い切れないところもなくはない。ただ、ふつうに友達づきあいでいて杉本の話は出てくるけれども杉浦のネタは……例の裏・班ノートの件を除いて……特段情報はない。確かに裏・班ノートの時期に立村が杉浦を意識しているのではという噂が流れたことはある。しかしそれは美里が最初に説明した通り、「杉浦の恋人に立村が詫びを入れること」を要求していたに過ぎず、杉浦と立村との間に色恋沙汰が発生するものではない。むしろ拒絶した後に、立村が横恋慕して杉浦加奈子を口説こうとしたのだったらもっと派手に目撃情報が流れてもいいはずだ。

今までは美里も、立村に関する噂についてはさらりと流していた。杉浦加奈子の件については「無視」で通してきたはずだ。たとえ自分が「出来損ない評議委員長の彼女でかわいそう、趣味が悪いわね」と笑われたとしても立村一筋を貫いてきた。しかし、ここで美里は賭けに出ている。立村が百パーセント無実であることを証明するチャンスを最大限に生かそうとしている。三年間のくそめんどくさい出来事をすべてまっさらにしようとしている。

——わかった美里、とことん暴れろ突っ走れ！

セコンドとして、貴史も腹が座った。

「しつもん！」

また後ろで拳手する奴がいる。再びざわめく。波が打つ。

「なんだ南雲」

美里が答える前に貴史が先手を打って指した。

「申し訳ないんですが、ひとつ聞いていいですか？ 杉浦さん」

はっとした風に杉浦加奈子が南雲に振り返った。身体を両手で抱きしめるような格好で、恐る恐る見上げている。南雲もきりりと顔を引き締めつつ、片手を腰に当て、もう片手は握りこぶしを作り小さく振りながら、

「結局、立村に告白かなんか、されたの？ それをはっきりこの場で言っちゃえば一瞬のうちに

この話は片付くような気がするんですが」

またきざったらしく首を回し、視線を貴史に向けた。どこかで見たようないらただしげな眼差しだった。美里相手ではなかった。

「もし、それが事実だったら俺がA級戦犯なんで謝ります。清坂さんよか前に」

「南雲くん、なんで？」

また毒を抜かれた顔で美里が問い返す。なぜ南雲に対してだけ、そうなんだろう。

「野郎連中に杉浦さんを見殺しするよう呼びかけたの、実は俺だから」

南雲はさらりと答えた。

——やべえ、こりゃえらいことになるぞ！

当然沸き起こるのは悲鳴に似た女子たちの驚きの声だった。

「南雲くんがって？」

「いじめたって何？」

「まさか、よね？」

男子たちのつぶやきは意味不明に途切れている。もちろん声は聞こえるが、女子たちのように何らかの意味が伝わるものではない、「ええ？」「はあ？」といった擬音のみ。経験上これは、どうすればいいかわからないなんとかしろ、とのメッセージだと貴史は読んだ。反応を覚悟していたかのように、それでいて全く反省の色なしの表情で教室内をねめまわしている南雲、その落ち着きっぷりには対応しようがない。貴史の隣にいる美里も半ば口を空けかけたまま凍りついている。

「みさ、どうする、どうする？」

「ちょっと待って、考えるから黙ってて！」

小声で返された。指先で教卓を叩いている様子だ。

貴史も南雲から美里、それからクラスメート全員に目を向けた。まずは尋ねるつもりだった。

——なんでそんなこと言い出すんだお前？ 南雲、何したいんだいったい？

口中でもごもごしたものは、脇で金属がぶっこわれるような音によって寸止めされた。

「南雲！」

菱本先生が椅子をひっくり返していた。

「お前今、なんて言ったんだ！」

叫びながら南雲のいる後ろの席に突っ走り、奴の机脇に立ちはだかった。勢いで通路脇の机がかなりずれて被害を蒙っている。

「南雲、お前ともあろうものが、なんでだ？ そんな汚い真似していたというのか！」 突っ立ったまま、さすがに顔を引きつらせつつ南雲が答えている。

「だから、あやまるつもりですが」

さえぎった。手で南雲のネクタイをひっぱり出し、前にぐいと引いた。当然前につんのめる南雲の肩を押さえるようにして、どすの利いた声で怒鳴った。

「あやまれ！ 今すぐ、土下座してあやまるんだ！」

殴りはしない。菱本先生はもともと手を出すタイプではない。ただ南雲の態度によってはまずい、本気でぶっ千切れる。

「貴史、行こ」

美里がささやき、同時に教壇から降りた。他の連中が席から動かさず騒いでいるのを尻目に菱本先生に駆け寄った。脇からすると菱本先生の前に入り込んだ。

「先生、落ち着いてください！」

どう考えても生徒が教師に言う台詞じゃない。貴史も続いた。逆に回りこんだ。

「美里、左回れ、俺が右に行く」

「了解！」

両腕を押さえる作戦に出ることにした。「あ・うん」の呼吸は美里相手ならではのものだ。それぞれが菱本先生の片手を両手で押さえ込む作戦に出た。

「先生、気持ちわかるけど落ち着けよ！」

ひとり、またひとりと立ち上がり、みな円陣を組むように南雲と菱本先生、貴史と美里を囲む気配がする。一部の生徒せのみだ。杉浦加奈子を含むほとんどの女子たち……は身動きできず固まっている。

「昨日言ってただろ、暴力では何もかたづかねえって！」

「そうだよ先生、羽飛たちの言う通りだってば！ ほら、ネクタイから手、離して、それからだってば！」

見かねたのかこずえが美里を押しやるようにして正面から菱本先生に語りかけてきた。貴史の顔をちらと見て、

「昨日の今日じゃん。クラス全員で話をしようよ、まずはさ！」

両手を腰にやり、片足をとんと踏んだ。

唐突に全員から拍手が沸いた。場違いすぎるが菱本先生をクールダウンさせるには十分だったらしい。我に返り握り拳を下ろした。

「悪かった。もう離していい。羽飛、清坂、ほら」

両腕を軽く振るようにした。ふたりが手を離すと同時に肩で大きく息をした。

「南雲、驚いたかもしれないが、今の俺の、正直な気持ちだ。お前の発言で俺は、たまらなく悔しくて悲しかったんだ。それだけはわかってくれ。それとだ」。

「ほら、座れ、続きだ続き」

貴史は一声立ちっ放しの連中に指示を出し、まずは席に着いてもらうことにした。こずえも手を打ち鳴らし、

「ほらほら、続き続き、はじまりはじまり！」

わけのわからない掛け声で全員を席に戻している。貴史の指示よりも効果があるというのが面白くないところだが、そんなことに拘っている暇はない。美里もこずえに両手を合わせて拝むしぐさをした後、無言で教壇に昇り、じっと菱本先生の背中を見下ろした。貴史も続いた。見下ろすと菱本先生の背中がすっかり丸まっているのが丸見えだった。

「どうする？」

「南雲くんから理由聞こうよ。それしかないじゃない」

ただ菱本先生が席に戻らないと、生徒としてはどうしようもない。

菱本先生にどつかれた時はさすがにおろおろしていたようだが、南雲もまた静かに対峙している。欠席している元評議委員長のごとく憎しみ込めてにらみはしていない。

落ち着いたまま、きっちりと頭を下げた。直角の礼だった。

「先生。この点は俺が全面的に悪いと思ってます。あやまります。ただ」

「ただ、の前にまずあやまるんだ。南雲、話はすべてそこから始まるんだ」

言い訳しようとする南雲を菱本先生は制した。肩に手を置いた。

「お前がなぜ、ひとりの女子を苦しめるような行為を指示したのか、なんで規律委員長を勤めるような人望のある奴がそんな卑劣なことを平気でできたのか、もちろん理由があるのは俺も想像がつく。もちろんこれから話は聞く。だがな、南雲。どんな理由があったとしても、人を苦しめるようなことは決して許されることではないんだ。まずはすべて、心から反省するところから始めてほしいんだ」

——理由、聞かねえのかよ。

てっきり菱本先生のことだから、南雲に言いたい放題しゃべらせた上で杉浦の悪行三昧を暴露させるつもりではと推測していた。美里が一方的に立村弁護説を語り続けていた時も菱本先生はほとんど言葉を挟まなかった。ただ、南雲が平気な面して杉浦加奈子に対するいじめの張本人であることを白状するとまでは想像していなかったのだろう。貴史ももちろん、今だに動悸が止まらない。

教壇に立ち、美里に小声で話しかけてみる。

「どうするんだよこれ、理由どころの話じゃねえぞ」

「しょうがないでしょ、成り行きに任せるしかないよ」

美里は相変わらず能面かぶったままだった。

——何様のつもりだ南雲、あんじゃろう何考えてるんだ？ 指示出してただと？ んなこと俺知るか。立村の親友面してわけわからねえことしたのかよ？

最初は身動きできなかった。ある程度事情を知っていた貴史ですら言葉が出なかった。もちろん貴史も立村の一件では他の男子連中に「ありゃガセだ」と伝えていたし、南雲と同じ行為をしでかしていたかもしれない。結果として杉浦を遠目で見るようなかっこうになったことも、正直否定はできない。だが誓ってもいい。杉浦をいじめろとか無視しろとかそんな露骨な「いじめ」行為をしたことはない。美里との間にブリザードが吹き荒れていたことは承知しているが、他の女子たちと同様に接してきたつもりではある。もっとも気を遣ったわけではなく立村のあれやこれやに振り回されっぱなしで女子連中の仲裁なんて手を出す気なぞない。

南雲は動こうとしない菱本先生に対し、しっかりと頭を下げた。九十度、かっちりと。

「申し訳ありません。あやまります」

「あやまるのは杉浦に対してだろ？」

菱本先生が静かに促す。南雲も顎で頷き、今度は杉浦のいる方向に身体を向けた。また九十度の礼をした。

「杉浦さん、申し訳ありませんでした」

言い終わった後、再度念入りな礼をした。ぽかんとした顔で振り返る杉浦加奈子は言葉を発しなかった。むしろ身体をこわばらせるように、机にしがみつく格好で南雲の顔を見上げている。

教壇側の貴史にはその表情が確認できなかった。

「菱本先生、いいですか」

まだ騒然としている教室で菱本先生が南雲にまた近づき、何か語りかけようとしている。しかしさえぎったのは美里だった。

「先生、今日は治外法権だって言ってましたよね？ 私、思うんですけど南雲くんのこと今も今時間限りですべてD組の秘密にするってことでいいですか？」

「清坂、いきなり何を」

今の美里には誰も逆らえない。今度は教卓をぶったたたいた。

「菱本先生、そうでなくちゃ、本当のことを誰も話してくれないと思います。南雲くんがなぜいきなりそんなことを言い出したのか、私はまったく訳がわかりません。いきなり一方的にあやまれって言われても、対応しようがないです。私、まず、南雲くんになぜそんなことを言い出したのかを全部さらけ出してほしいんです。あやまる理由がわからないと、杉浦さんも困るだけだし」

「いや違う、清坂聞いてくれ」

ためらうことなく菱本先生は反論した。

「もちろん理由がないとは思っていない。今から語ろうそれはな。ただそれと実際、杉浦が受けた傷とは別なんだ。南雲は理由がなんであれ、杉浦を他の男子たちから無視させるように指示をした、それが事実ならばいかなる理由があっても肯定できないことなんだ」

美里に向かいそこまで伝えた後、菱本先生はもう一度南雲に語りかけた。

「そのことは、わかるな」

「はい」

まじめなんだか無視しているんだかわからないが、いかにも反省しているような表情をこしらえている。貴史の目にはそう見えた。教師だましに関しては南雲も相当のプロであることを、一応クラスメートとして貴史は知っているつもりだった。

「わかったか。それなら、お前も言いたいことがあるだろう。なぜ、そんなことをしてしまったのかを心の底からざんげしてみろ。清坂が言った通り、ここで話したことは一生、決してみな外の奴には話さない、そう約束してくれるからな」

——いや、鐘がなったら一瞬で噂が広がると思うけどなあ。

機密事項なんて無理だ無理。菱本先生の楽天主義にため息をつきつつ、貴史は南雲が口を開くのを待ちわびた。ここまで大混乱の渦に巻き込んだ責任を取らせたい。いや何よりもあいつは反省なんぞこれっぽっちもしていないだろう。何かをたくらんでいる。目的あつての爆弾発言に違いない。

自席から動かず、南雲はぐるっとクラスの連中を見回した。手は腰におかず、代わりに椅子にかけた。

「じゃあ全部しゃべることにしますわ。きっかけは五月くらいですか」

——五月？

意外とずれた時期に戸惑った。やっとしゃべり声が止み、聞こえるのは南雲のひとりがたりのみとなる。美里の横顔を伺いながら、貴史はまず南雲の言葉をとっくり聞かせてもらうことにした。

「ちょうどその頃から俺と立村とは規律と評議のそれぞれ委員長候補として話をするようになってました。それまではいわゆる同級生程度の話しかしてません。これは委員会経験者だったら誰もがわかると思うんですが、誰かがなんかへまやらかした場合、すぐに上級生へ噂が広がり、場合によってはいろいろと取調べや弾劾裁判やら始まるんですが。俺がいわゆるその、今まであまり人間関係でよい噂がなかったとかそういうことも、知らないうちに先輩が把握していたようなんです。当然立村についても情報は流れまくっていますし、何せ評議委員長候補ですから、横のつながりで規律委員会の先輩方も聞き耳立てているわけです。保健委員会もそうだろうか？ 東堂？」

大親友の東堂に話しかけて同意を求める南雲。まじめに話しているつもりなのだろうが、ちょっと反省の色を感じない。たくらみのにおいがする。東堂も困った顔で返事できずにいる。南雲は気にせずに語り続けた。

「さっきの立村の横恋慕事件ですが、別に校則違反して違反カードの嵐になったとかそういう話じゃないでしょう。俺の聞き知る限りではもっとやばい事件が起きた時でも、穏便にことがすまされていたみたいですし。ただ、清坂さんが言ったように先生呼び出しがからんでしまっていて、明らかにそれが事実だというように情報が流れてしまったのは確かですよ。俺も規律の先輩たちにいろいろ聞かれましたし。『お前のクラスの立村は果たして女子のケツを追っかけてノイローゼ状態にしたのか？ そんな奴を評議委員長にしているのか？ やばくないか？』と感じてですね」

語り口調は軽やかだ。いじめ問題の張本人として申し開きしているようには全く見えない。貴史は美里を肘でつつきながら、それでも黙って聞き入った。

「これも委員会関係者ならご存知でしょうが、規律と評議とのつながりはすげえ濃いです。いわゆる『クラス演劇』の衣装提供や和服の着付けとかから始まり、校則に関する情報の意見交換とか、その他まあ見えないところでいろいろあります。俺も早い段階で委員長候補だったんで、少しは自分の立場を楽にしたいという本音も、ちょこっとありました。それで、改めて評議委員長候補の立村がどんな奴かをとっくり観察したわけです」

誰も何も言わない。貴史の腹の底だけがじくじくと煮立っている。

「この段階で俺は立村の性格を細かく知ってたわけじゃないし、もともとクラスでは別グループのつながりでしたから、かなり冷酷に観察してたはずですよ。どうしても友達だと見る目甘くなっちゃまうところありますけど、立村に対してはそれ、全然なくて。そうですね、俺としては、杉浦さんのことを横恋慕する可能性もゼロではないだろうなくらいは考えて様子見してたわけです」

なぜか誰も反応しない。美里がしゃべっている間はこそこそひそひそ話す奴もいたというのに。南雲の話術に酔わされているのか。

——絶対に落ちねえぞ、俺は！

「ただ、どう考えても立村については叩いてもほこりが出てこないんですわ。いや、さっき清坂さんの話した小学校時代のしんどそうな過去については聞いてましたよ。ただ、入学後の行動とか、クラスで何したかとか、そういう話を探ってみても単純にすげえいい奴だってことしか出てこないんですよ。ほんっと、まじで。だよな？　そう思うだろ？　男子さんたち」

男子さんたち、と呼ばかけられて頷く連中が大多数の男子たち。女子たちが顔をしかめているのとは対照的だ。

「杉浦さんのおっかけ疑惑についても同様です。俺もそれなりに先輩たちのつながりありますからいろいろ聞いてみましたが、ぜんっぜんないんですよ。清坂さんの言う通りで噂が立った当初はクラスの『ビデオ演劇』真っ最中だし、第一その話って最初C組で流れてませんでしたか？

俺が最初聞いたのはC組の規律委員経由でしたよ。それからD組で話が出てきて、最後に立村が菱本先生に呼び出されて言い訳しなかったと。後で聞いたことだと、立村は杉浦さんと別の話し合いこそしていたけれども、しつこいラブラブパッションを撒き散らしたわけではないのかなってとこで終わってますがそれは確認したわけじゃあないです。ほんとのところは藪の中って奴です」

すでに南雲のワンマンショーと化した教室内。この雰囲気はかつて南雲が全校集会で、規律委員長として偉そうに演説したときの体育館内とほぼ同じだった。見た目いい加減な女っただけでありながら、語り出した瞬間静まり女子たち中心に陶醉の眼差しと変わるあの雰囲気だ。男子の貴史はそのマジックにかからずけっと眺めていたが、今は教室内が南雲に酔わされているようだ。美里も……横で見る限り少しずつやわらかに頬が緩んでいるようだ。ぶんなぐって正気に戻したいががまんする。

「一通り立村と付き合ってみて判断した結果、どう考えてもありゃガセだろうという判断に至った俺ですが、気がつけばいつのまにか全校の女子のみなさんに嫌われているし、そのひとつが例のあれという結果なんですね。次の段階で考えたのは、なんとかして立村の濡れ衣を晴らしてやりたいと、そういうとこです。これは規律委員としてではなく個人的に、ってとこですよ」

——俺だって、美里だって、古川だってそうだが。

奴よりはるか前に、貴史たちは立村をかばおうとしたつもりだ。何も手柄話みたいに語ることもないだろうに。むかつく。腹のフライパンがたちたち言う。

「いかにも女子たちから毛虫みたいに嫌われちまい、そのきっかけが杉浦さんのおっかけ事件ときたら、まずはそれを打ち消すのが最善、と当時チャイルド思考の俺はつっぱしってしまいました。このあたりはまったくもって俺が馬鹿だったからなので、反省してます。何度も頭を下げても足りないことだし、これからどんな展開があったとしても俺は土下座して謝るつもりです。杉浦さん、ごめんなさい！」

土下座せず、自分の机に両手を突いてしゃがみこむポーズを取った。すぐ顔を上げた。

「立村としゃべったことある奴ならみなわかると思いますが、あいつはほんと、自分のことを悪いと決め付けられてもがまんしてしまうタイプです。清坂さんとこのあたりはおんなじ意見ですよ、ほんとに。たぶんあのままだんまり通していたら、確実にあいつのこと知らない奴でも誤解しますのは目に見えています。さあどうする、どうすると俺のプアな脳みそで考えた結果、地

道にあれは嘘だったと伝えるしかないのではという結論に達した次第です。清坂さんとそこんところは全く一緒の発想でしたね」

——だからお前がやる前に俺たちがとっくの昔にやってることだろうが！

だんだん南雲が何を言いたいのかわけわからなくなってきた。美里と同じ発想で立村の面倒を見ようと思ったのなら、それはそれでいいことだろう。立村が杉浦横恋慕疑惑を否定しない以上は勝手に噂が広がる。ただそれが嘘だったということは貴史もことあるごとに説明している。理由こそ伝えてはいないが、「立村があんなことできるわけねえだろ？ 女子とろくすっぽしゃべれねえだろあいつ」の一言で片がつく。南雲も大げさに「いじめ」とか言って独演会するよりも単純に美里へ賛同すればいいだけのことだ。

「ただ、今の俺だったらってことで言うと」

南雲は唇の端を上げた。いったん口を手の甲でぬぐった。

「もし一年前の五月あたりに戻ることができればですが、俺は杉浦さんにロングホームルーム使って、尋ねてましたね。絶対に」

「何をだ？ 南雲？」

声深く、菱本先生が問う。また手がネクタイに伸びそうだ。

「さっき言った通り、杉浦さんは本当に十一月から十二月にかけて立村に告白されて、断っても断っても追い回されていたのかってことですよ。俺がどんなにありとあらゆるネットワークを使って調べても立村がシロという判定結果しか出ない以上、あとは当人同士に聞くしかないかなと思って。そうですね。それが一番よかったですよ。今思えば俺はせっかく規律委員やってたわけなんですから、正々堂々とロングホームルームの議題に出して、こうやって思う存分語り合っただけで、それでさっさと片付ければよかったですわ。そうしとけば俺もわざわざ体育後の男子更衣室なんかで、ひとりひとり捕まえて杉浦さんが大嘘吐いていたとか噂を撒き散らさないですんだんです。明確な証拠がないのに、単純に立村を叩いて埃がでないというあいまいな理由で判断したんですから、それは土下座しても当然です。俺なりに正義の味方として行動したんですが、結果としてそれは杉浦さんに対する濡れ衣だった可能性があるわけですし。だから、お願いなんですけど杉浦さん」

ぞわりとした。美里が隣からつついてきた。言葉はなく目線も南雲に注がれたままだった。貴史は腰を低くしたまま、南雲の次の言葉を待った。

「本当に、立村は杉浦さんのことを追いかけてたんですか？ 本当に、立村はしつこく追い回してC組の女子たちが言うように、つきあいかけてたんでしょうか？ さっき清坂さんの聞いていたことと一緒になんですけど、ここできっぱり答えてもらえれば俺は自分が完全に馬鹿だったことが判明するわけですから。そこんところ、お願いします！」

背をすくと伸ばし、ちらと美里と貴史、そして菱本先生を見た。次にゆっくりと杉浦の下に近づいた。誰も催眠術……かけられたことないけど……にかかったかのように硬直している。うつむいたまま顔を覆っている杉浦加奈子を見下ろし、南雲はもう一度繰り返した。

「お願いします、杉浦さん」

穏やかだが、誰も跳ね返すことなどできそうにない力がこもっていた。

顔を上げようとせず、杉浦は机に突っ伏した。ふたたびすすり泣く声が教室に響く。ひとりくらい南雲を制止してもいいのに、なぜ立ち上がろうとしないのか。当然美里も見守るだけ。こずえも動かない。南雲は薄笑いらしきものを浮かべている。固唾を呑むの意味がなんとなく腑に落ちたような気がした貴史ひとり。

——お前、そういうことか。最初からそのつもりだったんかよ！

南雲は最初から謝るつもりなんてさらさらなかったのだ。

菱本先生の激昂すら平気のへいぎで交わし、いかにもいじめの張本人面して自分の持ち時間を確保し、結局は美里の言葉を裏づけし直すことで杉浦加奈子に留めを刺そうとしただけだ。今の話を一通り聞いた限り、南雲が杉浦の悪口を言ったことは事実かもしれないが、そこから集団無視に対する指示を出したとは思えない。むしろ間違っただけで認識してしまっただけであってそのことは謝罪するにしても、まず事実を知りたがっているように見せかけている。南雲が正義の味方としてうそつき女子を成敗するといった図が、今の演説で教室中に描かれている。クラス連中の頭には天才画伯金沢ばりの見事な事件のスケッチが浮かんでいることだろう。南雲のカリスマ性でもって一気に立村の無実が判明し、ロングホームルームは次に杉浦加奈子の弾劾裁判に進むだろう。

——どう答えるだ、杉浦？

ちらと玉城のほうも伺った。せっかく勇気出してかばおうとした玉城が少しだけ哀れに思えた。悩んで立ち上がって自分の考えを訴えようとした玉城には、話の内容に同意できなくても人として共感してやりたかった。

——答えによってはまじ泥沼だぞ。どうすればいいんだ？

不意に誰かが立ち上がる音が女子席からした。

「彰子、さん？」

南雲が硬直した声で呼びかけている。貴史も、美里も、全員がその名の主に視線を集中させた。すぐに奈良岡彰子が南雲に優しい表情で頷き、杉浦加奈子に駆け寄った。菱本先生も付き従って奈良岡に、

「奈良岡、どうした？」

問いかけつつ杉浦加奈子の側に立ち尽くした。南雲、菱本先生の男子ふたりがでくのぼう状態の中で、奈良岡彰子だけしゃがみこみ、そっと杉浦加奈子の背中をさすりはじめた。

「加奈子ちゃん、もういいよ。本当のこと言っているんだよ」

小声だが、静か過ぎてすべて聞き取れてしまう。奈良岡彰子はあんまん姫の笑顔でささやき続けた。

「みんな、大好きな友だちのことを守りたくてこうなっちゃっただけなんだよね。加奈子ちゃんはおきよくんとおんなじように、仲良しの友だちを心配して、みんなと行き違いになっちゃっただけなんだよね。わかってる。加奈子ちゃんもおきよくんも美里ちゃんも、みんな本当は、仲良しになりたいって気持ちが洪水になっちゃっただけなんだよね」

いったん顔を南雲に向けた。

「あきよくんが立村くんを大切に思って味方になろうとしたことはよくわかったよ。本当にやさしいだね。それもよくわかってる。でも、おんなじ気持ちが加奈子ちゃんにもあったことをちょびっとだけわかってほしいな。あきよくんのあったかな性格を私、よく知ってるから、きっと加奈子ちゃんの思いも伝わると思うんだ。それと」

美里にもしゃがんだまま呼びかけた。

「美里ちゃんも立村くんを大切な友達だと思ってきたんだよね。だから文集作る時も一生懸命立村くんが傷つかないようにしてきたんだよね。それも今ならわかるよ。でも、加奈子ちゃんが美里ちゃんに伝えたいことも、きっと同じことなんだよ。それ、聞いてあげてほしいな。お願い」

ハブ姫、いやあんまん姫。やはり強烈な破壊力だった。

奈良岡彰子のふっくらした笑顔には、南雲のカリスマ性もかなわない。

「うん、わかった。彰子ちゃん」

美里が答えると、女子たちから拍手がこぼれた。男子たちは誰も手を打たない。

「さっすが彰子ちゃん！」

「そうだよねそうだよね！ 言い分あるよね加奈子ちゃんだって！」

「立村が嫌われてるのは噂だけじゃないよ、実際観てるからだよ！」

南雲は俯き、唇をかみ締め、やがて一言だけつぶやいた。

「みんな、いい人だから、だもんな」

菱本先生が南雲の肩を抱くようにしてそっと席に着かせるのが見えた。貴史は美里とともに教壇の上でもう一度「固唾を呑む」の言葉をかみ締めた。

奈良岡彰子だけがずっと杉浦加奈子の背をなでつつ、小声でささやき続けている。

周囲が静まり返っているのでどんなに声を潜めても響き渡ってしまう。

「大丈夫だよ、みんな、加奈子ちゃんの味方だからね」

貴史は美里の顔を覗き込んだ。相変わらずの能面であることには変わらない。意識して言葉を飲み込んでいるようにも見える。

本当はここで南雲により止めを刺されるはずだったにもかかわらず、思わぬ伏兵に足をすくわれてしまうとは想像だにしていなかった。もちろん、肉を切らせて骨を断つ的な勝負の仕方を見つつ、どこかの誰かを連想したりしてむかっときたのも否定しない。ただ、目的がひとつである以上、しかたないことかと割り切ろうとした矢先だった。

——なんか肝心要のところがかかわってくるな、ねーさんは。

われらがあんまん姫の手業をゆっくり観察するしかなさそうだ。

「奈良岡ねーさん、悪いんだけど俺も状況把握できてねえんだ。悪いんだけど俺たちにもっとわかりやすく説明してくれねえか」

菱本先生がパイプ椅子に座り直すのを待ち、貴史はしゃがみこんだままの奈良岡へ呼びかけた。とりあえずは貴史が部外者の顔して仕切るしかなさそうだ。

「ごめん、羽飛くん、あのね」

立ち上がり、奈良岡彰子は片手を杉浦の肩に置いたままそれに答えた。

「今の話、全部聞いていたよ。それと、あきよくんや美里ちゃんたちの真剣な言葉もずしっと胸に響いたし。みんな、D組のことが大好きで、友だちが大好きなんだなって。だから私も何かみんなのためにしなくちゃって思ったんだよね」

奈良岡彰子親衛隊の一員である水口が大きく頷いている。教壇から見下ろしていると水口の頷きぶりが妙に笑えてしまう。こらえるのが辛い。

「それに、昨日の立村くんのこと、私が羽飛くんにけしかけてしまったところがあったからかも、って、ものすごく責任感じてるところがあるんだ。ごめんね羽飛くん」

「あ、うん、またあとでその話は」

視線が貴史に集中する。首を振って奈良岡に話を促したい。

「私ね、ここまで全部話を聞いていて、今まで自分が聞いてたこととは違っていることがたくさんあって、びっくりしちゃったんだ。特に立村くんについては怜巳ちゃんが言う通りちょっと変わった人だくらいしか認識なかったし。こんなに、特に男子に好かれている人なんだなってこと聞いてほんとに驚いたんだよね。これ、悪口と思われてしまうかもしれないけど、私はずっと、加奈子ちゃんが被害者だったと思ってたから」

——やっぱしとかまじかよ。

南雲が席で首筋を掻いている。恐らくだがこのベストカップルはこれで完全に消滅するだろう

。「だけど、あきよくんや美里ちゃんたちの言う通り、私も立村くんが加奈子ちゃんを追いかけまわしている現場を見てないんだ。他のクラスの子たちの噂とか、そちらを信じてしまっていたのかもしれないって、ほんとそれは思った。それでも立村くんは言い訳しなかったし、それ以上にクラスみんなに一生懸命仲良く やっていかうとしていたことくらいは気づいていたよ。美里ちゃんや羽飛くんが支えていたところも知っていたし。過去にいろいろあっても今がよければいいのかな、って、思ってたんだ」

男子一同がタイミングをそれぞれずらして頷くのが丸見えだ。

「ただね、私が気になったのは、立村くんの味方をしている美里ちゃんがどうしてうちのクラスの女子のみんなから浮いてしまってるのかな、ってとこだったなあ。美里ちゃん、一生懸命評議委員としてがんばってるのに、なんとなくだけどぴんどこない扱いされてしまってたかわいそうだなあって、ずっと思ってたんだよ。怜巳ちゃんも、加奈子ちゃんのことがかわいそうだって言ってるって同感だったんだけど、同じくらい美里ちゃんも誤解されてて辛いんだろうなって思ってた」

「辛くなんてないよ」

小声で美里がつぶやくのが聞こえる。貴史にだけしか聞こえなかったのかもしれない、誰も反応がない。奈良岡もしゃべり続ける。

「今、ここで美里ちゃんが話したように、立村くんの事情がはっきりしたとしても、本当の問題は片付くのかなって、どうしても思うんだ。あきよくんも一生懸命立村くんのことをかばって話をしていたけど、もしここで立村くんの潔白が証明されたとして、ここから先、また新しい問題が生まれてしまうんじゃないかな あって、どうしても心配になってしまうんだよね」

「ちょいまって、ねーさん、つまり何か？ お前さん、立村のいわゆる追っかけまわし事件はなかったものだって認識、してるのか？」

奈良岡の立ち位置が把握できていない。限りなく黒に近いグレーである、とまでは話が進んでいるけれども、まだ決定打が出ていない。第一、杉浦加奈子は泣き伏すだけで事実を認めていないではないか。

「わかんないよ。それはね。でも、誤解はあったのかもしれないなって気はしたんだ」

すぐに穏やかな表情で奈良岡は答えた。

「事件ではなくて、私たちの中でどうしても立村くんを悪者にしたくてならなかったから、勝手に誤解してしまったところがあったのかもしれないなって。そう 思ったんだ。変な言い方だけど、私、加奈子ちゃんから立村くんがしつこくアプローチしていたって話を直接聞いたことはなかったんだよね。これ、立村くんが そうしていることを美里ちゃんやあきよくんが見てないってところと一緒にんだけど。もしかして、お互いにそんなことがあったなんて一言も口にしてないにもかかわらず、勝手に私たちがおはなしを作り出しちゃって、いつのまにかここまできちゃったんじゃないかなって、思ったんだ」

「ちょい待て」

援護射撃が貴史より前に、南雲の親友たる東堂より発せられた。

「ねーさん、ってことはだ。もともとそんなことはなくて、勝手に噂だけがつっぱってしまったってことか？ 俺もかなり早い段階で立村の哀れな話を保健委員会で聞いたりしてたけどなあ」

「うん、そうだよ東堂くん」

保健委員の相棒に奈良岡は頷き返した。やはり柔らかな表情だった。

「けど、否定はできただろ？ 立村も杉浦も、口があるんだから。ま、立村の性格上。言い返せるとは思わねえけど」

「同じことは加奈子ちゃんにも言えるよ。すっごく、勇気がいると思う。頷くことと首を振ることは、同じくらい重たいよ。怖いもの」

「じゃあどっちもどっちかよ。結局、この問題って、立村と杉浦がお互いに否定しておけば丸く収まったってことかよ。ったくなんだよいったい。すげえかんたんな結末じゃあねえの」

東堂の、作ったような脳天気な口調に笑いが湧いた。教壇の貴史と美里のみ取り残されているかのようにだった。美里は全く動じていないし貴史もどこが笑いのつぼなのかつかみかねている。南雲の親友たる東堂としてはなんとか不毛なクラス議論を片付けたかったのだろう。もともと何もなかったことを、たまたま立村と杉浦が否定をしないままなあなあ状態で流していたことが発端ならば誰も悪くない。当事者同士の自己責任に過ぎない。同時に勘違いした周りの連中も、噂を鵜呑みにしただけなのだから単にアホだっただけ。東堂の言う通り確かに丸く収まりはする。

——ねーさん、どう出るんだ？

玉城や美里のように、一気に突っ走るタイプならある程度の読みはできる。ただ奈良岡彰子だけはさすが大福姫だ。つかみ所がない。

息を詰めすぎて呼吸困難になりそうだ。ちらっと菱本先生を覗き込んでみた。腕を組んでこちらも考え込んでいる。頼りになりそうにない。

「じゃあ今の話をまとめるとだ。もともと噂でしかなかった話を、当事者の立村と杉浦がだんまり通してきたからそうなっちゃっただけってことか？」

まとめてみた。菱本先生も頷いた。

「さっき美里言った通り、たまたま立村と杉浦との間に全く別のめんどくさい問題勃発で話し合いをしていた時に、余計な噂が他のクラスから立ってしまったと。互いに真実を訴える機会があったにもかかわらず否定も肯定もしなかったもんだから話がこじれたと。で、菱本先生も立村を呼び出しなんぞしたもんだから、話が杉浦寄りになっちゃったと。そういうことだろ？ 互いにあんまり自己主張しない性格の人間同士がかかわっためんどくさい一件ってことでまとめていいのかこれは」

「そうだな、俺が悪かった」

いきなり菱本先生がぐっと頭を下げた。またざわめいた。

「先生、どうしたんですか？」

「さっき清坂に直撃された時もかなりずしーんときたんだが、羽飛の連打でまじめげた」

大爆笑の嵐。笑いどころではないのになぜか笑うクラスの連中。

「確かに俺は、噂が流れた時に立村を呼び出して説教したんだ。全くお前らふたりの言う通りなんだが、ただ、今だから言えるが」

言葉を切った。少し考え込むように首を傾け、

「俺の発言も治外法権ってことでいいな？」

「もちろんっすよ」

飛んできたのは南雲の声だ。

「俺なりに立村のことがいろいろと心配だったってのもあってな。たまたま噂は渡りに船ということできっかけにすぎなかったんだ。お前らもわかっているだろうが、普通のやり方だとあいつ話、聞いてくれないだろうと思ってたんだが、今考えると教師失格だな」

「で、立村は否定しなかったんだろ？ ですか？」

一応はロングホームルームだ。丁寧語が妙な形で入ってしまった。

「これも俺の反省点なんだが、言い訳ひとつしなかったしやっぱりだんまりだったし最後は謝ったから、そういうもんなんだと俺も思い込んでしまった。奴には本当に悪いことをしたよ。ただ、それはそれでほほえましいとも思ってしまったりしてなあ。やっぱり、若いなあ、青春だな、夕日に向かって走りたいなあとか」

笑いを取ろうとする発言なのだろうが、今度は誰も笑わない。見事滑った。

「ただその一件が、クラスの不協和音のきっかけとなっていたのなら、これは完全に俺が悪い。もっと別の切り分けをすべきだったんだ。申し訳ない。杉浦、本当に悪かった。お前も言い出しづらかっただろうし。奈良岡の言う通り否定も肯定もなかなかしんどいことだよな」

立ち上がり、杉浦に近づき、菱本先生は九十度丁寧に礼をした。

「杉浦、申し訳なかった」

顔をあげ、おびえるように首を振る杉浦加奈子に対し、菱本先生はもう一度頭を下げた。

「なんでこんなことになってるのよ」

なんとなく話が緩やか流れていてクラスの連中もみな、納得顔でささやき出している。奈良岡彰子の発言を境に、まんまるく収まりそうな気配がしている。貴史は美里に問い返した。もちろん他の奴らに気づかないように、だ。

「悪役いないってことにしたいんだろ」

「それ、違うよ。貴史、あんただって知っているよね？」

「ああ？」

目の前では杉浦加奈子が首を振りながら菱本先生に答えている。一部の女子と奈良岡彰子が再度杉浦加奈子に近づきつつ、「よかったね」と声を掛け合っている。

「だって嘘だよ全部。立村くんが言い訳しなかったからってことになるんだよね、すべて」

「奴だけじゃあねえ、杉浦だって同罪だろ」

「違うって、違うの」

不満があふれ返っているけれども、言い返す言葉が見つからないらしい。

「じゃあ、ひとつめの問題はこれで一件落着つつうことでいいか？」

軌道修正するほうがよさそうだ。何はともあれ立村が無実であり、杉浦側にも不必要な傷がつかなくてすんだのはまずはめでたいことだと思う。下手したらいじめ問題が勃発してしまい、今度は「立村を陥れた悪女杉浦加奈子」のレッテルが貼られる寸前だったのだ。立村の親友である貴史としては、ありえない噂を打ち消すためにそれもありだとは思っていた。しかし持ち出したのが南雲だというのを考えるとはっきり言い切るのはちょっと避けたい気持ちもある。それなら最終的に締めた菱本先生のおとなパワーに敬意を表するのでもいいかもしれない。美里がもの言いたげなのを、教卓の後ろで足踏み直し黙らせた。

「先生、いいだろ？」

パイプ椅子に戻った菱本先生に親指でグーマーク送った後、貴史は呼びかけることにした。できれば次は美里の抱える課題、「文集中止」に持っていきたい。どう考えても悪夢の出来事しか思えない一年秋の「班ノート」を利用して永遠……かどうかは別として……に刻み込むというのは、虐待にしかならないような気がする。そう持っていけばたぶん、奈良岡も納得するのではないのか。立村だけではなくて杉浦自身の傷を考えても。

「羽飛くん、ごめんね、もうひとつだけいいかな」

慰めあう女子たちが席に戻る中、まだ杉浦の側から離れない奈良岡がいる。相変わらずのふっくらした表情だがまだ笑みは浮かんでいない。

「みんなも気づいていると思うけど、加奈子ちゃんの本当の気持ちはまだ誰も聞いてないと思うんだ。これ、わかるよね？」

のどかな雰囲気が一瞬のうちに凍りついた。奈良岡彰子はかわらない。

「ここが、私、問題なんだと思うんだよね。あきよくんは勘違いしてしまっただけだし、女子のみんなも立村くんのことを先入観持ってみてしまっただけだし。だからさっきの、誤解の話はもうこれでいいんだ。でも、もっと大切なことがあるよ」

今度は玉城の席に向かった。何も言えずに唇を噛んでいる玉城の肩に手を置いた。

「怜巳ちゃん。加奈子ちゃんがなんで言い訳しなかったのか、わかる？」

「え？」

「D組の女子のみんなのことが大好きだったんだよ」

——ありえねえ発想の飛躍だあ！

貴史だけではなく、当の本人の玉城も口をまん丸く開けている。他の連中ももちろん続いている。まさに言葉が出ない。必死に貴史も付いていこうとするが頭が追いつかない。

「男子たちのことはわからないよ。いろいろあったし。でも、加奈子ちゃんのことをD組女子のみんなは一生懸命助けようとしてくれたし、味方になろうとしてくれた。たとえそれが誤解だったとしても、だけどね。それに嘘なんて全然なかったって加奈子ちゃんは思っていたし。もちろん立村くんはとぼっちりを受けてしまったのは確かだし、それによって男子のみんなが加奈子ちゃんを誤解してしまったところもあると思う。でも、そうされちゃってもしかたないって感じるくらい、加奈子ちゃんは怜巳ちゃんをはじめとするたくさんの女子のことが大好きだったん

だよ」

玉城だけではない、他の女子たちが顔を上げ、何度もぱくぱく口を動かしている。

言葉も混じる。霧に過ぎないその言葉を掬い取るように、奈良岡は発する女子たちの顔をそれぞれ見た。

「そうなんだよ。だから、私、加奈子ちゃんがはっきり言えなかったことをどうしても責められない。立村くんに罪をかぶせてしまったことは申し訳ないけれど、これは全力で加奈子ちゃんの味方になる必要があると思うんだ」

すすり泣きが聞こえた。やはり杉浦加奈子の席からだった。

「ちょっとちょっと、おいおいおいおい」

今度は須崎と国枝の二人が同時に叫んだ。男子連中を代表するかのようだった。こいつらはもともとロングホームルームでしゃべる性格ではない。それなのになぜいきなり立ち上がったのかが貴史にはわからない。

「須崎くん、国枝くん、言いたいことある？」

美里が声をかけると、

「あるあるある！」

同時に声をそろえる。他の男子たちも拍手するが南雲だけは動かなかった。

「女子の言うこと絶対変だと俺は思います！」

「言いたいことあるのか？」

パイプ椅子から問いかけるのは菱本先生だった。少し気の抜けた顔をしていたくせに、野郎ふたりが立ち上がるやいなやぴくっと身体を固まらせた。

「はい！ 悪いけど俺たち男子にも時間もraitたいんですけど」

国枝がどすの利いた声で要求した。刈り上げの頭を大きく振った。大きく頷いたのは須崎だ。同様に東堂も、水口も、その他大勢も。女子はいない。

「お前らがそんなこと言い出すのはめずらしいなあ。よし、いい機会だ。言いたい放題言ってみろ！ えっと、清坂、五時間目あとどのくらい時間あるんだ？」

「思ったより経ってませんけど。あと十五分はあります」

「よっしわかった！」

菱本先生はいきなり手を打ち、立ち上がった。

「じゃあいったんここで十分休み時間にしよう」

腕時計を覗き込み、壁時計を眺めた。

「最初に言った通り、今日は歴史の時間をつぶしてこのままロングホームルームに流れ込む予定なんだ。ただ百分ぶっ続けってのはなあ。途中トイレに行きたい奴だっているだろうし、話自体がもうどこに行くかわからん状態だろう。だったらここでいったん、水入りにして頭を冷やすというのはどうだ？」

「けどまだあと十五分が」

美里が言い募るのを菱本先生は手で止めた。

「その十五分がみそなんだ。今はいわゆる治外法権のD組限定議論を続けている。ふつうの十分休憩だと他のクラスの奴と話をすることがあるかもしれない。話がまとまった後ならいいが、まだ生煮えの状態で嘘か本当かわからないまましゃべってしまったらことだ。余計な問題が起きないとも限らないし、何よりも今ここにいない立村が傷つくことも考えられる。そうだろ？
清坂？」

「はい」

納得はしているようだ。

「それなら、他のクラス連中がいないうちにさっさと休憩を取っておいて、少しリフレッシュした状態でここから先のクラス討論を進めよう。俺も正直、お前たちがこんなに真剣にクラスのことや友だちを思いやっていることがわかって、心底感動しているんだ。ただ熱くなり過ぎるのも人生経験上まずいとも思うんだ。そこんところわかってくれるんだったら、十分休憩、即入れ！」

菱本先生の号令に、まず南雲が立ち上がり教室を飛び出した。引き続いて東堂が。次に水口や金沢が、ぞろぞろと男子連中が走り出してゆく。男子たちがほとんどいなくなるのを見極めたように玉城たちが杉浦の席にかたまり、ゆっくりと集団で扉を押し去っていった。てっきり美里の慰め役かと思っていたこずえが、一緒にくっついていったのは意外だった。

美里はもの言わず、前の扉から出て行こうとした。ひとりでだった。

「おい、美里」

「何でもないよ」

小声で答え、二階に向かう階段を下りようとした。

「トイレか？」

頷いたが、すぐに首を振った。

「貴史、悪いけど男子トイレに誰がいるかだけ確認してもらえる？ 話、きっとしてるよね」

「してねえと思うけど」

さっさと済ませてさっさと教室に戻るのが男子のポリシーだ。こんな寒い中、何話すというのか。

「違うよ、きっと作戦会議してるよ」

「ああ？ じゃあお前の方こそなんで二階に行くんだ？ 混んでるからか？ そんなにせっぱつまっているのか？」

瞬時に脳天をひっぱたかれた。静かな廊下ゆえに何も言葉を発することができない。さすがに他のクラスは授業中だ。

「女子はきっと、あそこで加奈子ちゃんを守る井戸端会議してるよ。私が入ったらきっと黙るし。でも男子は違うでしょ。男子は立村くんの味方でいてくれるんだよね？」

「まあ、たぶん」

「だったら、そこ確認してよ。私も今から頭、整理してくるから」

階段を下りてゆく美里を見送りながら、貴史は言われた通り男子トイレに向かった。美里が玉城たちを中心とするグループと危機一髪なのはよく理解したつもりだ。噂話の花が咲く場所に顔

出たくない気持ちもなんとなくだが見える。ただ男子連中がいくらなんでもそんな女子っぽいことをやらかすとは、正直思っていなかった。トイレの戸を開けるまでは。

——美里の言う通りだったぜおい……。

南雲、東堂を覗いて見事3D男子が終結しているとは思わなかった。

貴史が入ってくるのを待ち受けていたかのごとくだった。用を済ませるのもなんだか雰囲気として間抜けなほどだ。まずはさっさと朝顔前に位置し、他の連中たちの叫びを聞いた。

「おい羽飛、あのままでいいのかよ！」

わざわざ横から顔を出そうとするのは国枝だ。覗き込まれそうだ。

「俺もちょっとなあ、あの展開は変だと思うよなあ」

のんびりながらも反対側から近衛が露骨に覗き込もうとする。

「俺たちもいじめに参加したことになっちゃったのは悪いかもしれねえけどな、ただ変だろ？ どう考えても立村は悪くないだろ？ 女子たちが立村を嫌ってるから自分たちがやってることを正当化したいだけだろ？ 女子は泣けば許されると思ってやがる」

須崎がわめく。こいつと立村との設定は、確かクラス対抗リレーの時くらいだったはずだがなぜそんなに味方になりたがるのかがわからない。

「悪い、お前ら立村を守りたいのはすげえありがたいが、頼むから覗くなよ。縮まっちゃうだろが」

「羽飛のもんなど見慣れてるわ！」

しょうもない下ネタで場を和ますのがなぜか水口だ。こいつも金沢とふたり連れ立って、何か文句を言い合っている。

「ねーさんは本当のこと気づいてないんだ。だまされてるだろ、杉浦に」

「やはりそうだよな？ 杉浦、何にも言ってねえよな？ 謝ってねえよな？ 白とも黒とも言ってねえよな？」

誰かが割り込みまた貴史の真後ろから覗き込む。

「菱本さんも完全に女子たちのペースに飲み込まれてるよな。お前は清坂の味方だからまあいいとして、このままだと俺たちが無実の相手をいじめた悪党に決め付けられちゃう。これでいいのかよ！」

南雲の流した嘘情報がきっかけで、杉浦加奈子を見捨てる流れとなった。この事実については南雲も頭を下げている。立村も本来であれば自分が何もしていないことを訴えるべきだった。杉浦もなんらかのアクションを起こすべきだった。この件については貴史なりに終結宣言したほうがよさそうだ。しまうものをさっさとチャックに収めて貴史はまず答えた。

「話、整理しようや。まずな、最初の立村横恋慕事件は別にしよう。あれは奴も悪かった」

「はあ？」

「そういうことにしとけよ。あいつが菱本先生にくっついてかかればなんとかなったかもしれねえけど、奴の性格上しかたねえと思うよ。俺からしたらな。ぶんなぐりたくなるもんな」

昨日の事件をみな知っている。全員頷いている。貴史は朝顔を背に方向を変えた。男子トイレ

に終結している連中がみな貴史だけを見つめている。いつのまにか円陣だ。

「ただ、それと立村が今に至るまで無視こかれたり嫌われたりしていることについては、このままじゃあまずいんじゃないか、とは思ってる。これも、わかるよな」

「同感」

金沢がつぶやいた。

「女子連中の目的は、俺たちが杉浦を無視したことを全員雁首そろえて謝罪しろってことだ。まあ、嘘を信じちまったんならごめんとあやまるしかねえよ。けど、それだったら誤解されたまんまの立村に女子連中も謝るべきじゃねえかって思うんだが、それ変か？」

「確かにな」

須崎が再度頷く。

「俺はこれから、美里と一緒に立村の名誉回復に向かって突っ走る。もともとあの事件がなかったもんだってことなら、しゃあねえ、俺と一緒にみんな謝ろうな。けど同様に立村に対してもおなじく謝るよう俺としては要求するつもりだ。あいつが参ってしまったのはまあ自業自得っぽいところもあるけど、このままじゃあ卒業式まで来ないかもしれねえぞ。俺もちゃんと品山のあいつん家まで言って土下座してごめんなさいするつもりではいるけどな。ただ、その手土産に女子連中がお前にひどいことした許してほしいって言ってた、くらいのことは持って行きたいんだ。んで奴を連れ戻して最終的にはクラス全員で卒業式に出たい。ってことでどうだ？」

息もつかずに言い切った。やっと言えたぞすっきりだ。

「よっしゃ。羽飛、まかせた。けど頼むから俺に最初にしゃべらせろよな」

国枝が貴史の肩をどんと叩いた。

「俺は立村に借りがあるからな。他の奴も何かかしら、あるだろ？ 英語のノート以外にもな」
見ると全員が複雑な顔で頷いている。水口も俯いている。想像はつく。宿泊研修のあれだろう

。

「羽飛の言う通り、例の件については全員で謝る。了解だ。けどそこからだな、頼むぞ」

「OK！」

「よっしゃあ！」

連なるみなが声をそろえて叫んだ時、誰かがトイレの扉から顔を出して覗き込んだ。

「みなさん、エイエイオーの途中でしようが、そろそろ休憩終わりっすよ」

南雲が一声かけて、すぐに首を引っ込めた。

全員が席についたところでタイミングよく鐘が鳴った。もちろん、五時間目終了のものだ。三年D組のみここでは六時間目開始、ロングホームルーム突入となる。そんなこと知らない他のクラスではわやわやと騒がしくしゃべりあい笑い合い、時々扉を開けようとする気配もする。菱本先生が無視を決め込むと、相手もなんとなく違和感を感じるようですぐに退散する。追っ払わなくとも普段とは異なるムードが伝わっているようだった。

「じゃあ始めるか。てなこと、さっきの続きなんだけど」

ゴングを鳴らすのは、やはり貴史の役目だった。

「国枝と須崎が特別発言を求めているんで、まずはそっちからでいいか？」

男子たちが頷くものの、女子たちは不満げなうめきを示す。隣の美里が教壇で呼びかける。

「もちろん二人の話が終わったら女子の発言も入るってことになるから、いいよね？」

「本当に？」

こずえが問いかける。今の段階で美里の味方なのかもあいまいだ。

「もちろんよ。でないと公平じゃないもん」

「そっか、じゃあそういうことでまず時を待とうよ、ね！」

ありがたくこずえの援護を受け取り、貴史は片手でまず、国枝に合図をした。男子トイレでの打ち合わせ通り、間髪入れずに国枝が立ち上がった。菱本先生もパイプ椅子で両手を組み合わせ膝に置き、前かがみで頷いた。

「えっと、なんで俺がこうしてるかって言うと」

やはり慣れないのか声が上ずっている国枝。視線が集まるのが苦手なようだ。

「さっき玉城が疑問に思ってたっていう、『なんで立村が男子たちに受けいいのか』つつう謎について、言いたいことあったからなんだ。俺、事例持ってるしな」

「事例？」

こずえがすぐに相槌を打つ。他の連中はふむふむ頷くだけ。

「他の奴もみんな何かしらあると思うんだ。あー、えーと、立村の場合男子限定で受けがいいのは理由があるってことで」

「聞きたいなあ、それって一年のこと？ それとも二年の時のこと？ 私が思うにたぶん一年の一学期あたりかなあって思うんだけど、凶星？」

うまく進めていくこずえの突っ込みが、貴史からみてもうまいと思う。

「あ、ああ。そう」

ここでいったん国枝は言葉を切り、菱本先生の方を見た。

「今、俺が話すことも、時効つつうか、治外法権でいい、です、か？」

妙なところで句読点を入れて確認をしてきた。様子伺いの気配ありありだった。

「なんか悪さでもしてかしたのか？ そんなにおいぶんぶんするなあ。ま、警察沙汰でなければ

大目にも見るがな」

「警察沙汰じゃあねえけど、まあ、法律には触れてるかも、なあ」

頭を掻きながら、それでも覚悟したのか、背を反り返らせ国枝は続けた。

「一年最初の学年新歓合宿の時なんだけどさ、俺、非常にやばいことをやらかしたんだ。そのこと一部の奴は知ってるし、すげえ迷惑をかけてしまって、もう土下座しかないんだけど」

「ああそっか、国枝新歓合宿の時にぶっ倒れたもんな」

思わず頷き声をかけた。貴史も覚えていた。つい後ろの南雲にも目が行く。奴もこくこく頷いている。

「そうそう、あれ、表向きは旅館で急に具合悪くなって布団の上にげろげろやっちまって、病院に連れ込まれたってことになっているけど、あれ、今思えば全部自業自得なんだ」

菱本先生の方を伺いながら、それでもがんばって続ける国枝。

「種明かしすると、あん時夕食が終わって風呂入って、その後でまあなんというか、タバコをこっそり吸ってたという、もろ校則違反、青大附中で言えば停学、下手したら退学間違いなしのとなんでもないことをやらかしたと、そういうわけ、です」

また妙な句読点を打つ。

——ああやっぱりな。

貴史は驚かない。だいたいこの一件はD組の連中をはじめほとんどの奴が承知している内容だろう。同時に立村の陰での働きも評価されたきっかけでも、確かにある。ただ国枝自身にはおとがめなしで、代わりに裏で立ち回った立村が菱本先生にこっぴどく叱られていたことだけが強烈な印象として残っている。あいつのいじけっぷりは、さすがにまだ全開ではなかったのだが。

「もう、時効でいいよな、このこと」

小声で男子連中がささやいている。さすがに青大附中の校則をすべて把握している以上、国枝の告白は附属高校進学にも影響がないとは言えないと覚悟している。とはいえ多分大丈夫ではないか、とも貴史は甘く見積もっている。

「俺にはかまわず、ほら続けろ、国枝、言いたいことまだまだあるだろ？」

やはり菱本先生は驚かずに促した。やっぱりそうだ。気づかないのか国枝は、額を片手でぬぐいながら話を進めていた。

「んで、あの時は入学したばっかだったし、まあなんてかその、大パニックになっちまってえらいことになったってあせってたわけ。俺は死にそうになってあえいでるし、周りにいた連中も、なあ、もうどうしたらいいかわからねえって顔してたし。あんときはほんと悪いことしちまったなあって、反省するしかねえんだけど。そんな時たまたま立村が」

つばを飲み込むようにして、一呼吸入れている。

「えと、立村がなんだけど、風呂から上がって戻ってきたらしいんだ。俺ものた打ち回っていたわけで実際何があったかはあれなんだけど、とにかくあいつひとりで全部後片付けしてくれたってことだけは聞いている。そこにあった吸いかけのタバコとまだ手つけていないタバコも含めて全部処理してくれたし、単純に俺が具合悪くなってぶっ倒れただけなんだってことに持って行って、なんとかこのクラスに三年間居座ることができたと、こういうわけなんだ」

男子連中もみな承知しているあの事件。こういうことでもなければつまびらかにされることもなかっただろう。ただ、女子たちが全く気づかずにいたというのが正直貴史には信じがたい。美里も、この話をするまでは全く詳細を知らずにいたようだったし男子経由の情報網は機密性高すぎたのかもしれない。

ま、治外法権、本日限りの告白会ならこれもよし。

「俺はそれでありがたく救われたわけなんだけど、とぼっちり受けたのはかわいそうな立村なわけであって。あの後確か立村、菱本先生にすげえ怒られてたって話聞いて、うわあやべえ、まじまずいって思ったんだ。もちろんあいつには後でこっそり謝ったよ。けどあいつ全然気にしないって顔して、『誰にでもあることだから、大丈夫だから』ってあっさり流してくれた。現場にいた奴はもちろん知ってることだけど、俺が今の今まで校則違反で捕まらずにすんだのははっきり言って奇跡だよ。もしあん時に、証拠品として吸いかけのタバコとか、箱とか、ヤニとか発見されていたら俺、絶対この学校にいなかったよ。いやほんとマジで」

国枝はここまで言い切った後、改めて菱本先生に向かって、机に手をついたまま深く頭を下げた。

「先生、今の件、まじで、ごめんなさい。反省してます」

「国枝、わかった、頭上げろ。そんなの最初からお見通しだからな、立村が活躍しなくても部屋の中のおいでとっくにばれてる。気にするな」

菱本先生はやはりあっさりと答え、ゆっくりと立ち上がった。そのまま国枝の席に向かった。窓際の中列で、女子を間に一人挟む格好になる。ぽかんとした顔で立ち尽くす国枝の頭に手を置いて、担任らしき言葉を語った。

「大人をなめちゃあいけない。あの時お前が倒れたと聞いて部屋に飛び込んだ時、すぐに俺の鼻はニコチンタールをかぎつけた。俺は結構においに敏感なんだぞ。お前ら気づかなかつたらうがな」

「え、でも先生、あの時立村をすげえ怒鳴ってなかったっけ？」

貴史が思ったのと同じ疑問を国枝がつぶやく。即答する菱本先生。

「ああ、そうだった。はんぱなく怒鳴ったな。覚えてる覚えてる」

「けど俺にはなんにも」

言葉をくぐもらせるように国枝が俯く。この辺は貴史も同感だ。国枝の病院送り事件で立村ひとりだけが、「ひとりでなんでも処理しようとした」という一点でもって叱られていたことを貴史は知っている。いや、クラスメート全員知らないわけないだろう。一方で国枝は停学にもならずきれいな履歴のままでいる。貴史の記憶する限り、国枝は最初の頃こそ南雲グループとつるんでいたが、現在はわりとどの男子チームにもなじんでいてさほど目立つことをやらかしていないはずだ。

「立村ばかり怒られてて、けど言い訳したら自分が退学になるかもしれないって思ってたし、ほんとのこのことは俺にとって、ええっと、秘密の中でもめちゃくちゃ重たい秘密のひとつだったわけ。だけどあんまりにも、立村の扱いがむちゃくちゃだし、今俺がしてもらえたことを他の奴だってたくさん経験してるはずだし、それに、こんなに女子たちにワラジムシ扱いされるよう

なことねえと思うし。それで、今、俺なりにずっと考えてこういうこと言ってみただけど、やっぱりあいつ、それでもそんなに最低野郎か？ 評議委員に選ばれる価値ない奴か？ 今俺が白状したような校則ばりばり違反ネタ以外にもあいつがクラスの連中のために一生懸命やったこと、どっさりあるだろ？ 俺にはわからねえよ」

頭に手を置いたまま、菱本先生は国枝の訴えを聴いていた。全く動かず、その目を見つめていた。一段落したところで今度はその手を肩に置いた。

「約束通り今日は無礼講だからな。ただ、確認しとくが、国枝。それから是一切、タバコなんぞに手を出してないだろうな？ そこんところは確認だ」

大きく国枝は首を振った。

「わかった。俺が見逃したのは正解だったってことだな。基本的にタバコは子どもの身体によくないから禁止されているってことをよくよく理解していれば、それで十分だ」

今度はクラス全員にまた向き直った。全員が菱本先生を食い入るように見つめた。もちろん貴史も、隣の美里も。

「まず、一年の新歓合宿での、いわゆる国枝病院送り事件だが」

菱本先生は考えながら語り始めた。

「今言った通り、お前たちのやんちゃは大人目から見たら丸見えだったんだ。確かに現場には証拠品もなかったし、あるのは妙なニコチンタールのにおいだけだし。俺もうろ覚えなんだが全員白切ってなかったか？ あの場では本来ならば、国枝を一週間くらい停学にするのが筋だが、疑わしきは罰せずとせざるを得なかった。俺としても、あれだけひどい目に遭ってさらに喫煙者に戻るなんてことはまずないだろうと思っていたからな。やけどしないとわからないってことも世の中にはある。他の先生たちには気づかれなかったこともあってなんとかごまかした」

——菱本先生、そっか、他の先生には言わなかったんだな。

さすがに他クラス担任たちにばれたら学校に報告せざるを得ず、国枝にお咎めなしというわけにはいかなかっただろう。

「ただな、立村にはきつく言っておく必要があったんだ」

ここで菱本先生はぐるりと全員を見渡した。目を留めたのは扉側の空席だった。

「確かに国枝からしたら、さっさとトイレに吸殻を全部流して部屋の空気を入れ替え、悪いことは全部自分で背負ってしまってさっさとかばってしまう立村はヒーローだろう。手際はよかったからな。あれはさすがだと感心した。けどな、よく考えてみる。原因わからずああいう風に国枝がひっくりかえっていて、一刻を争う状態だったとしたらどうする？ お前らまだ若いから気づかないかもしれないが、たとえば心筋梗塞とかだとすぐに心臓マッサージとか緊急手術とかさまざまな手を尽くさねばならない。その点わかるよな、奈良岡、水口？」

医者娘と息子は大きく頷いた。

「たとえそこに隠さねばならないものがてんこもりだったとしても、一番大切なものは命だろ？」

もちろんあの時立村は自分の判断で精一杯のことをしたはずだ。クラスの友だちが校則違反で罰せられるなんていやだし、ここはなんとかしなくちゃならないときっと身体が動いたんだろ

うな。立村は小学校の頃保健委員を六年間ずっとやらされていたらしいし、その手の知識はそれなりにあったんだろう。ただ、あれは決して褒められることではないんだ。国枝がぶっ倒れてみながおろおろしていた時、即、行うべきことは信頼できる大人に報告して指示を仰ぐことなんだ。まあ、入学したてでどうしていいかわからないのも、よくわかる。だが何はともあれ教師という大人がいるんだからそちらに頼るといのが、本当のところだろ？ 俺だと頼りなかったかもしれんが」

全員言葉もないまま黙りこくる。

「俺があの時立村を捕まえて一方的に怒鳴りつけたのは、今思えば失敗だったのかもしれない。もっと別の形で話をするべきだったんだろうな。だが、どうしてもわかってほしかったんだ。もしかしたら国枝は停学食らったかも知れないし持ち物検査がこれからはえらく厳しくなり面倒くさくなるかもしれない。でも、俺は担任としてお前たちを見捨てたりしないし一緒にこれからどうしたらいいかを考えて行きたい。校則違反しました、じゃあ出て行ってください、さようならなんかで終わらせるつもりなんではない。これは俺だけじゃない。青大附中の先生たち全員が全力で思っていることなんだ。もろ宗教と言ってもいいくらいにな」

うむ。ぐうの音が出ない。

——菱本先生はもろ正論できたかよ。

捨て身の国枝攻撃に貴史も奴を見直したところはある。

ただ、やはり大人には勝てない現実を突きつけられている。

立村がやらかした初期の事件簿に残っている、非常に目立たない一件ではあるけれども当事者にとってはそりゃ大事だろう。国枝もちゃんと立村に詫びを入れていたらしいし、立村の性格から考えてそれを恩に着せるようなことはしないに違いない。男子連中が立村の手際に感動すら覚え、それ以来一目置くようになったところも確かにある。

ただ、菱本先生の言う通りそれは「正しい」ことではない。

「先生、じゃあさあ、この一件はすべて立村が悪いってことなのか？ それじゃああんまりじゃん」

場の空気を変えたい。貴史なりの声かけをした。

「いや、そうじゃないよ羽飛。立村は間違っただけをしたけれども、気持ちは通じただろ？」

今、国枝が墓場に持っていてもいい秘密をクラスメートの前で告白したのも、あいつの思いやりが男子連中に伝わったからじゃないのか？ よいか悪いかは大人の判断だが、立村の行動からにじみ出たやさしさはお前たち自身で受け取ればいいんだ」

国枝は無言で席についた。少なくとも休憩時間中に思い描いたであろう着地点ではなかったようだ。貴史に向かって発言要求をした時の激しい眼差しは消えていた。ただ俯くだけだった。隣の席にいる女子がしらじらしく国枝に目をやり、ずっと前の席の女子に話しかけているのが丸見えだった。

菱本先生がパイプ椅子に腰掛けるのを待ち、今度は美里が呼びかけた。

「須崎くんも、話したいことあるって言ってなかった？」

「俺、しゃべっていいの？」

国枝ショックにしばらく男子連中は麻痺しているのがありありと伺えた。ガス抜きされてしまった中、それでも須崎は立ち上がった。

「一応、言っとくけど俺、こう見えて放送委員だからそっちの立場からもな」

——あっそっか。こいつ放送委員だったもんな。

青大附中では目立たない放送委員の立場。公立中学の友だちから聞いた限りだと、学級委員以上に高い評価がなされるのは放送委員に他ならないとのこと。青大附中の放送委員は単なる給食時間中の放送局、もしくは校内放送のための役割に過ぎない。少なくとも一、二年の頃はそうだった。最近はだいぶ変わってきているようだが委員会に疎い貴史はよくわからない。オールバックに決めた須崎はめがねをかけ直して語り出した。さすがアクセント、発音、聞き取りやすいよい声だ。

「うちの組の男子ならみな、立村の英語リーダーの訳にお世話になっているだろうし、今国枝が言ったようなこともそれなりにしてもらっているのはあるよ。でもそれは菱本先生からしたら、『間違い』なのかもしれない。それはわかっているんだ。立村の英語訳に頼りすぎて俺たちが自習全然やってないのも事実だからなあ」

男子大爆笑。場が和む。女子は笑わない。当たり前だ。

「立村はいい奴だってことをここで繰り返しても正直意味ないと思う。俺が話せるのは放送委員の副委員長としてなんだけど」

すっかり忘れていた。委員長ばかり重視されるD組においてこいつは放送副委員長だったのか。全然覚えていない。それだけ存在感薄いだけかもしれないが。足だけは速いのでクラス対抗リレーにはいつも選ばれていたというそれだけの存在だと思っていた。

「まず、立村が評議委員長に内定されてからなんだけど、放送委員会ではえらく仕事が増えたんだ。みんなも知っていると思うけど、俺たちが一、二年の頃って放送委員の存在感なかっただろ？俺もそれまではほとんどラジオドラマ作りのために存在している委員会だと思ってたしな。実際、放送ドラマ部門ではうちの学校けっこう全国大会まで行って賞もらったりしているんだけど、どのくらいの人それ覚えてる？」

「ごめん覚えてないわ、悪いけど」

つっこみはこずえの役割。もう任せるしかない。

「ひでえなあ。まあいいや。とにかく、陰では結構楽しく盛り上がっているんだけど校内では地味な存在に徹していた我が放送委員会なんだけどさ。二年の二学期後半あたりからなんとなく雰囲気が変わってきたんだ。一言で片付けると、今まで評議委員会が担当してきたマイクを使う仕事全部、うちに回ってきたんだよ」

「それまじかよ？」

思わず確認する。誰がマイクを握り締めているかなんてさほど気にしてはいなかったが、そういえば一年あたり、みな評議委員が担当していたはずだった。立村もかなり苦手になっていたようだがしょっちゅう司会担当をしていた記憶がある。

須崎は女子放送委員と視線で合図を送りあった。こんなに印象が薄いのは、須崎以外の女子放送委員がしょっちゅう入れ替わっていたからに他ならない。

「正式に立村が評議委員長就任してからは、他の委員会の仕事もどんどん入ってきた。南雲、東堂、そうだろ？ 今まで全部自分らの委員会でもかかってきたことこっちに流してるだろ？」

名指しされたふたりもこっくり頷いた。南雲も先ほどの杉浦加奈子に対してのバトル後遺症が残っているようで言葉はなかった。東堂が代わりに答えた。

「そうだなあ。確かにマイク持たなくなったよ。イベントやる時も今までだったらマイク運びとかいろいろやったけど、三年になってからは全部放送委員会で片付けてくれるから楽だよなあ」

果たして保健委員会にイベントなんぞあるのかと突っ込みたいが我慢する。東堂は説明してくれた。

「うちの保健委員会なんだけど、結構目立たないところで偉い先生呼んだりして講習会やってるんだよ。たとえば人が倒れたりした時に人工呼吸どうすればいいかとか、怪我した時にはまずどの薬塗るかとか。すげえ偉い先生呼ぶことあるんだよ。その時に司会担当するんだけど今までは全部俺たち保健委員が担当しねばならなくてなあ。俺たち、人工呼吸の練習するためのマネキンとか道具とか運ぶのもやらねばならないし、とにかくてんでこまいなんだよ毎回このあたり。なあ姐さん」

奈良岡に声をかける。奈良岡がひきとって続ける。

「そうそう東堂くん。ほんっと大変だったよね。それでマイクを使うとうわあって感じで声が広がってしまっただけ。でも、今年に入ってからは、そういうイベントがある時放送委員の人たちが手伝ってくれるようになってすごく助かってる。この場でお礼言うね。ありがとう須崎くん。みんなにも伝えてね」

全く場違いの拍手で教室満たされる。奈良岡彰子のパワーは健在だ。

「んで、どうなんだ須崎？ 立村が前期評議委員長になってからなのかそれ？」

話を軌道に戻すため貴史の仕事ももちろんする。

「ああそうそう。俺言いたいのもそれなんだ。最初顧問経由でしか確認できなかったけど、あとで評議の連中に聞いたらさ、教えてくれたんだ。全部立村の意見だったって」

「立村の？」

「そう、今まで評議委員会は結城先輩の頃から全部細かいことは委員会の中で準備片付けすべてするって決まりになってたみたいだけど、立村からしたらそれが納得いかなかったみたいなんだ。せっかく放送委員会というマイク命声命の連中が巣食っている場所があるというのに有効利用しないでどうするんだ、とか思っていたみたいだよ。もっとも俺も、このことうちの委員長から聞いているだけだから、立村本人に確認したわけじゃないけどね」

美里の反応を伺うと、まっすぐ須崎を見据えて目立たぬように頷いている。思い当たる節はあると見た。

「一応、評議委員会がらみのイベントというと、六月に行われた水鳥中学との交流会。あれは全委員会大活躍だったろ？ あの時に司会進行音響含めて手伝ったんだ。放送委員会として。あれではじめて立村が何をしていたのかがわかったんだよ。出た奴知ってるだろ？ あの時をきっ

かけに放送委員会でいろいろと動きがあって、細かいことはすつとばすけど、来年から放送局として生まれ変わることに先ごろ、決まったんだよ！」

須崎が声を張り上げた。突然数人の女子が泣きそうな顔でつぶやき出した。

「そんな、今更なんでよ……」

「悔しい……」

そいつらが須崎の相棒として放送委員を務めていた女子だったことに気づくまでしばらく時間がかかった。

「はっきり言って、俺もほんとびっくりしたんだよ！ だってさ、この学校でなぜ放送委員会がしょっちゅう入れ替わるのかその理由って、満足に校内のイベント参加できないからとところがあったら？ それがだよ、三年になっていっぱい仕事に来るようになり、俺たちも中途半端なやり方ではまずいだろうってことになってきててな。俺たち三年放送委員がみな一丸になって、なんとか図書館みたいな扱いにしてもらえないかって頼み込んだんだ。今まではアウトだったけど、現在のあれよあれよっていう活躍ぶりに先生たちもやっとOK出してくれて、念願の局だよ。ほんとううれしいよ。俺たちは卒業だからその恩恵に蒙れないけど、委員会から局にかかわることによってもっと放送のレベルは上がるよ。三年間じっくりテーマに取り組んでドラマ作りすることもできる。うれしいよこれ。まじで」

——あまりつつこみたくないけどな須崎。お前の相棒がしょっちゅう代わったのは、やたらと折り合い悪かっただけだろが。まったく何か勘違いしてねえか。

さまざまな情報を知るに本来なら貴史は暴露してやりたい。だが今は違う。テーマは異なるのだ、しょうがない。

「とにかく、これを成しえたのは、立村が評議委員長として各委員会から放送の仕事を分けて扱うと決めたところによると思う。さすがに評議委員長最強主義の中で、うちのような弱小委員会だけが声を挙げてあんまり効果なかったよ。てっぺんが動かないと進むことができないというのも確かにあるし。このことだけでも俺は立村を評議委員長として評価したいよ。本当にさ」

そろそろ締めに入るのか、須崎は声を整えるように咳払いをした。

「俺がここで言いたいのは、立村が評議委員として有能だってことなんだ。クラスでさんざんこけにされているのを見ていると、まるであいつが能無しみたいに思われていて正直むかついてた。これ、委員会関係者ならみな知ってることだと思ってたけどうちのクラスの女子たちには全然伝わってなかったんだな。俺たちが立村を評議として推薦しているのは成り行きやだまされたとかそういうんじゃないんだよ。あいつはそれだけの力量があるから、それだけなんだよ。性格がいいとか、思いやりがあるとか、そういうこと言ったってどうせ女子たちには伝わらないだろ？ 仕事ができる奴は評議に選ばれて当然、文句あるか。俺が言いたいのはそれだけなんだ」

聞き間違えようのない明確な日本語でもって、須崎は見事に立村有能論を語りつくした。

拍手は男子のみ。南雲が満足げに手を叩いているのが教壇からよく見えた。

「聞かせたいよね、今のこと」

小声で美里がささやいた。

「立村くん、知らないんだよ。今ふたりが言ってくれたこと。全然気づいてないんだよ」
貴史が答える前に、菱本先生へ発言を促した。

「先生、今の須崎くんの発言ですけどどう思いますか？」

「うん、素晴らしい。須崎、だが一番伝えたいのはそこじゃない」

また菱本先生は須崎の席……教壇真正面から二列目……に近づいて握手を求めた。

「おめでとう。須崎、お前たち放送委員が懸命に積み重ねてきたことが結果に結びついたんだ。決して、立村が委員長になったからだけではない。もちろん立村の方針も関係していたとは思いますが、そこから動いた放送委員たちのがんばりに俺はまず、拍手したいんだ。放送委員会が入れ替わり激しいことはずっと気になっていたし先生たちもなんとかいい方法はないかと頭を悩ませていたよ。それが須崎たち三年放送委員たちの意識が高くなったことによってようやく動いたんだ。これを、山が動いた、と言うんだ。誇ってくれ。自分たちの力でやり遂げたことなんだ」

両手で須崎の手を握り締めた。何度も振った。戸惑う須崎に何度も「おめでとう、よくやった」繰り返し伝えていた。自然と拍手が立ち昇ってゆく。明らかにその向かう先は須崎を含む放送委員たちへのものだった。決して、須崎が訴えたかった立村有能説に届くものではない。その証拠に、女子たち、玉城や杉浦も手を叩いている。

——なんか菱本先生、意地でも立村を肯定したくねえんじゃねえ？

国枝、須崎が目的とする立村弁護もなぜかそれぞれ別の地点に着地させられているような気がしてならない。杉浦を攻め立てる南雲の攻撃に対してもそうだ。どこか目的地にたどり着けないように、あえてずらしているような気配がする。

「なあ美里」

「黙ってて。次は私が行く」

短く答え、美里が菱本先生に声をかけた。

「先生、今の須崎くんのことに追加したい話があるんです。それが終わったら次は女子たちにも意見を求めますから、ちょこっとだけ話させてもらっていいですか？」

拍手の余韻が覚めやらぬ中、菱本先生はわれに帰ったようにすぐOKを出した。

「あ、ああ。わかった。だがそろそろ女子たちにも意見を言ってもらわないとな。そこんところがわかっているなら大丈夫だ。よし、清坂言ってみろ！」

美里の出方が読めない。いったい二階女子トイレで美里はどんな作戦を練ってきたのだろう。貴史からするとどんなに立村をかばっても、菱本先生の力技でとんでもないところへ着地させられるような気がしてならない。そこでうまくパラシュートが開くのか？

——美里、しくじんなよ、頼んだぞ。

大きく深呼吸し、美里は三人目の立村弁論に突入した。

話別小説情報

意を決した美里に逆らうものはいそうでない。これもいつものパターンだった。貴史はまず、南雲の様子を伺った。すましてやがる。次に玉城、杉浦にも目をやった。玉城は憎憎しげに美里をにらんでいるし、杉浦も顔を上げずにいる。最後に、

——古川は？

どういう位置づけで古川が美里を見守っているのか、貴史にはまだ把握できていない。

親友であることは間違いないけれど、いろいろな意味でスタンスが違う。

いきなり貴史と目が合い、ピースサインをちらと送ってきた。やっぱり謎だ。

「今、国枝くん、須崎くんが立村くんのいいところについて一気に話をしてくれたけど、たぶんみんな、ひいきの引き倒しにしか聞こえないって思っているんじゃないかって思う。私ももし、立村くんのこと知らなかったらふーんで流していると思うし。ただ、私は三年間このクラスで評議委員を務めてきて、立村くんと一緒にコンビを組んできていて、いわゆる『評議委員会』の中のことであれば客観的に評価できるんじゃないかって思ってるの。今から話すことは、あくまでも『評議委員会』で立村くんがどういうことをしようとして、結果成し遂げてきたかってことだから、まずは一通り聞いてほしいんだ。私も、できるだけ感情入れないで説明していくから」

——評議委員会ネタかあ。

国枝がD組内の事件を、須崎が放送委員会関係への影響として、それぞれ立村に対する応援演説をやったのけたのだから、美里としてはやはりお膝元である評議委員会について語る必要を感じたのだろう。

いったんD組メンバーを見下ろし、美里は真正面のロッカーを見据えるようにして語り始めた。さすがに誰も私語やらかす奴などいなかった。

「みんなも知ってると思うけど、私たちが一年から二年にかけて、青大附中評議委員会は本条先輩っていうものすごくやり手の人が仕切っていたの。さっきちょこっと話にも出た『評議委員会ビデオ演劇』もそうだし、学校祭の時になぜか評議委員会がしきってお茶席担当したり、それからもうたくさんありすぎて言い切れないくらい、ものすごいことをした人がいたの。ふつう委員会って、委員長、副委員長、書記って分かれていて指名される仕組みになっているけど、評議委員会だけは違うって有名だよ。本条先輩の前の代、結城委員長の頃からまず委員長以外の役職がなくなっちゃったの。権力を一括するすることによって、どんどん決断しやすくして、いろいろなイベントを進め易くするためにね」

美里はそこで言葉を切り、考え込むように俯いた。すぐに始めた。

「もちろんそのおかげで私たち評議委員は楽しい経験いっぱいしたし、盛り上がったし、たぶん学校内の行事は問題なく進んだと思うんだ。公立の子たちに話を聞いても、こんな自由にやりたいことをやらせてもらえて、しかもそれがすべて成功するなんてこと、めったにないんだって聞いてびっくりしたくらい。でもふつう、そうだよ。私も青大附中にいるからこうやって普通になっているけど、外から見たら変だなんて思うだろうな」

——まあそりゃそうだよな。給食時間中いきなり「松の廊下」放映するなんてアホなこと普通しねえだろ。委員会の合宿でホテル取ったりなんなりしねえだろ。

確かに普通でないことは認める。

「私も委員会のど真ん中にいたし、それで楽しければいいじゃないって思ったよ。でも、評議委員会が本条委員長のもとでどんどん盛り上がれば盛り上がるほど権力が集中しちゃって、どんどん仕事が他のところから回ってきてしまうってのも、確かにあったの。須崎くんが言ってたよね？ 放送委員会なのになぜか、イベントの司会は全部評議委員会だったって。私からしたらそうとは言い切れないんじゃないかって思うけど、目立つところを本条先輩が持っていってればそう見られてもしょうがないかもしれないなって気はする」

——まあな、それはあるな。

貴史は頷いた。須崎の発言には正直なところ、大げさなところもあるんじゃないかと感じていた。放送委員会の仕事が全くないような扱いではなく、目立ち根性バリバリ連中の本条先輩、そして最近だと天羽あたりの出番が多すぎただけではないかと思う。美里は流されずに分析している。冷静に話を進めている。

「他の委員会でも、きっとそういう風に思ってた人、いっぱいいると思うし、確かに評議委員会はやることいっぱいあったなって、今考えるとなんかそんな気がする。私はそれでいいと思ってたの。他の評議委員の子たちも。ううん、立村くん以外は全員！」

力をこめて言い切った。

「私たちが二年の半ばあたりに立村くんが評議委員長に指名されて、その頃からいろいろ準備してたんじゃないかなって気がするんだけど、立村くんがまず最初に当時の本条委員長に提案したのが『他中学との交流会』だったの。最初は偶然だったよ。学校祭の時、水鳥中学の生徒会の人たちが訪問してくれて、顧問の先生同士が盛り上がって交流しようよって、それだけだったはず。たぶんあの話だけだったら、生徒会の人たちが水鳥中学に行って挨拶してとか、せいぜい評議委員長だけがお迎えしてとか、そんな話で終わったんじゃないかなって気がする。でも、立村くんは本条先輩に、この機会を使って学校内でのイベントを何かできないかって提案したの。そうだよ、あれ、立村くんの提案だったんだから！」

——修学旅行後になんかやったな。全校生徒参加自由の交流会な。

立村と美里がやたらと走り回っていた頃の話だ。もっとも貴史が聞く限り、立村のかわいがっている後輩をその中心人物として押し込むための小細工だったはずだが。しかも失敗して『E組』の誕生きっかけにもなってしまい立村はかなりいじけていた。だが、美里の話だとかなり前から考えてきたことらしい。

「立村くんは心底本条先輩を尊敬していて、そのやり方とかいろいろお手本にはしていたと思う。話、してれば一発でわかるよ。でも、本条先輩の『学校内だけで盛り上がる』とか『評議委員会の部活化で一切一般の生徒たちが参加できないイベントが増えるのはおかしい』とか『生徒会と評議委員会とが協力できていないのはもったいない』とか、納得できないところもいっぱいあったみたいなんだ。特にこの交流会、二年の冬に私も水鳥中学に訪問したけど、生徒会の人たちと直接話すのが評議委員会という形はやっぱりもったいないって思ったんだ。楽しかったから

なおのことなんだけど。いっぱい委員会があるんだから生徒会主導で他の委員会の人たちも混ぜて、いろんな企画とか立てられたら楽しいんじゃないかって、そう立村くんは考えていたみたいなんだ」

疲れたのか美里ののどは少し嚙れていた。

「きっかけはあるの。少し話がそれちゃうけど、二年の評議で新井林くんっているじゃない？評議とバスケット部のキャプテンやってる子。青大附中の体育系部活動が全く盛り上がらないからって業を煮やして、自分ひとりでまず、壁新聞作り始めたの。『青大附中スポーツ壁新聞』ってもう、今は体育委員会で作ってるはずだけど、きっかけは新井林くんなんだよ。一年下なのにすごいって思っちゃった。そういうのを立村くんも見ている、きっと刺激を受けたんだと思う。これだけ自分でどんどんやりたがっている人たちが委員会に集まっているのに、ずっと飼育殺しにしてしまうのって変だよって、思ったらしいんだ。想像じゃないよ、これ、私も立村くんから直接、なんどもなんども聞かされてる。そんなの考えすぎじゃない？って私は思ったけど知ったことじゃないよね。本条先輩の作り上げた評議委員会のみで盛り上がってれば、委員会部として楽しいことひとりじめにできたし、生徒会より上の扱いしてもらえたし、いい事尽くめなんだよ。そりゃ仕事がいっぱいだと大変だけど、やりがいもあるのも確かだもん。本当だったら放送委員会に仕事返さなくたっていいじゃないって人たちも、たくさんいたと思うよ」

小声で「ひえー」とつぶやくのは須崎だ。

「その後立村くんが三年で正式に評議委員長就任してからはもう、本当に、やりたい放題だったんだ。いい意味でだよもちろん。本条先輩がいた頃はやはり尊敬しているから気を遣っていたけど卒業式は違ったなあ。さっき須崎くんが言ったイベント協力のお願いだけど、あれはそう、立村くんの判断。その他先生たちと交渉して美化委員会とか体育委員会とか、交流会やってなかった？ 私は評議のことしか知らないけど、みんな修学旅行終わってから夏休み以降いろんな委員会が交流会に燃えてたような記憶あるんだけど」

委員会関係者がみな顔を見合わせて頷きあう。思い当たるふしはあるようだ。

「でも、あまりおおっぴらにはしてなかったから気づかれてないだけかもしれないね。たぶんクラスでそういうこと知ってる人ほとんどいないよね。でも動いてるんだよ。山が動くって言った人いるけど、とっくの昔に動いてる。きっかけは修学旅行後の水鳥中学交流会だけだったかもしれないけど、あれをきっかけに少しずつ波が広がっていったってこと、私も感じてたの。立村くんは自分がやり遂げたことをでかでかと言い放つ人じゃないから黙っているけど、ここまでの流れはぜーんぶ、立村くん主導で行ったことなんだよ」

菱本先生が「ちょっといいか、清坂」と声をかけた。

「なんですか」

「俺が聞き間違えていたら申し訳ないんだが、あの水鳥中学との交流会、仕切ったのは実質、A組の天羽だと聞いてたんだが、あれ、立村主導だったのか？」

「ばっかみたいなこと言わないでください！」

あきれ果てた声で美里が言い放った。ここでちょこっと、能面が外れた。

「それも全部、立村くんの計算です。あれだけ目立つこと嫌う人が自分で喜んで仕切りたがるわ

けないでしょ？ 天羽くんは最初あまり乗り気じゃなかったんです。本条先輩というより結城先輩派だったから立村くんのやり方に百パーセント賛成してたわけじゃないんです。もちろん、立村くんとは仲良しだったから協力はしてたけど。私、企画から全部手伝いましたけど、仕切り役おもてなし役全部得意な人に振ってやってもらってました。ここだけの話ですけど、C組の霧島さんには頭下げて、お茶出す役をお願いしてました。どういうことか、わかりますよね？」

「ああ、納得した。そうか、あいつやるな」

——どこがどういうことなんだかわからねえ。

貴史が首をひねる間に美里は能面かぶり直し再開していた。

「とにかく、立村くんは評議委員長としてまず、今まで権力が集中していた部分をそれぞれ得意な委員会に分割しようって考えていたんです。それ、決断できるのって評議委員長だけだから、当然です。それが一段落してから、最後の仕事をしようとしていた矢先にああいうことになっちゃったので中途半端な終わり方でしたけど」

「何それ、あいつの最後の仕事って」

こずえが質問してくる。知らないのだろうか、こいつも。そんなわけないだろう。さくらだきと。

「評議委員会に集中していた権力を、生徒会に一部返すってこと」

短く「青大附中『大政奉還』」についてまとめて答えた美里。

「これも今、ごたごたしていてクラスのみんなどは誤解しているところ、あると思うんで長くなるけど言いますね。ちょっとだけがまんしててください。立村くんが評議委員長になってからやりたかったことって、本当はこれだったんじゃないかって、今になって思います。立村くんはずっと、生徒会の人たちが先生たちの御用機関で言いなり扱いされていることが申し訳ないって思っていたみたいです。その理由が、結城先輩本条先輩の作り上げた評議委員会への権力集中であって、それにより他中学の交流も、また学校の楽しいイベントも、評議委員会が全部仕切るようになってしまい、生徒会は影が薄くなっているってところは、なんとなくわかるよね？ 生徒会改選よりも評議委員長選のほうが大事件なんて、この学校にいたら自然だけど公立にいたら変だと感じると思うんだ。でも冷静に考えれば、委員会はいったん選挙で選ばれば一年間任期あるし、転校でもしない限りはじっくりやりたいことに取り組める環境だよ。一方評議委員会をはじめとする委員会は、前期後期と一応は改選があるし、そのタイミングによっては別の人が選ばれてしまう可能性もあるってこと。せっかく途中までやりかけたことを、別の委員会に入ったりもしくは落とされちゃったりなんかして、できなくなっちゃうことって結構あると思うんだ。不安定な場所だって、これ、委員会に入っていたら誰もが感じることだよ。今だって、評議委員長が天羽くんになってるから、立村くんの思っていなかった方向に進んでいるんじゃないかって感じることは正直あるし。どうしても、半年だけだとそうっちゃう。今までは暗黙の了解で、いったんなった委員会には卒業まで参加できるようなしくみになっていたけど、それじゃいやだって人もいること、わかってる。そうなんだよね、特に女子のみんなどはそう感じていたんだよね？」

誰も何も言わない。言える奴はいない。

「立村くんが生徒会になんで評議委員会の持つ権利権力を返したかったかっていうと、その問題を解決したかったからなの。今の立村くんのように、なんとかして最後までやりとげたかったことを、委員長からはずれることによって成し遂げられないっていうことを、できるだけ避けなかったの。もし立場が逆転していて、評議委員会が御用機関で生徒会がやりたい放題だったとしたら、どう動いてたと思う？ 私が生徒会長だったらまず、評議委員会に少しずつ何かやってもらうための権利を譲るよ。クラスみんなを集めて、手伝ってもらったっていいしね。でも先生たちや偉い人に交渉しなくちゃいけない時は生徒会長の出番だよ。じっくり相談しなくちゃいけないもん。交流会だって、まずは生徒会のみんなが出て行って、それで盛り上がったら次に評議、他の委員会、そして全校生徒って流れで広げていくよ。時間かかる内容は生徒会に、短期集中するイベントは評議委員会に、そう分けていって盛り上がれば自然とクラスにもいい影響出てくるし。もっと長く三年間かけてやりたいことがあれば、今度はそうだよ、須崎くんみたいに放送局にしちゃえばいいの。立村くんも同じだったんだ。私、最近になってやっとわかったけど立村くんは、そうすれば今うちのクラスみんなが頭に来ている問題も片付くんじゃなかったって感じていたんだよ」

「何それ」

どこからか声がする。誰かはわからない。ひとりふたりではなかった。

「女子のみんなが思ってること。なんで青大附中はいったん委員を選んだら簡単に三年間入れ替わりできないのかってこと。文句、みんな立村くん承知してたよ。自分がたまたま入学した時に評議委員に選ばれちゃって、惰性でそのまま流されていること知ってたし、みんなが不満たらたらでいい加減降りればいいの なんて思ってたこと、よくわかった。私にも、貴史にも、いつも言ってたよ。申し訳ないって、そればかり」

静まり返った。

——あいつ、そんなことばかり言ってたよなあ、ぐちぐちぐちぐち。

菱本先生を覗き込んでみる。こくこく頷いている。

女子たちも俯いて考え込んでいる様子だ。

「でも、対抗馬が出るわけでもなかったし、立村くんも評議委員会でやりたいこといっぱいあったし、三年間このままできたわけ。誰とは言わないけど別の奴に代わってくれとかささやかれても、正面から声上げる人もいなかったしね。それはしょうがないよ。でも、立村くんは普通の人よりずっと神経使う性格だから、死ぬほど辛かったと思う。だから、せめて自分の代で委員会が部活動化して身動き取れなくなる環境を変えたかったんだよ。立村くんがいろんなところで話をしているの聞いて、まとめるとそういうことになるんだ。そのために、委員会で長期でやらなくちゃ話になんないことを生徒会にゆだねて、委員会では主に任期で収まる内容に絞っていけば委員がころころ代わってもやっていけるんじゃないかって。そういう風土になれば、D組のみんなが立村くんをリコールして落としても平気な顔で入られるんじゃないかって。結局そういうこと。立村くんは自分が評議委員としてD組のみんなに評価されてないことくらい、十分わか

りきってたの！」

——美里、泣いてるんじゃないの？

貴史は美里の側に立ち、頬に目を留めた。涙は流れていない。声だけがかすれるだけだ。

「ううん、もちろん国枝くんや須崎くんをはじめ、ちゃんと立村くんはやることとしていたってこと理解している人だっているのはわかってるよ。でも、きっと、そう思っていない人の方が圧倒的に多いよね。特に女子。私もたぶん、評議じゃなかったらそう感じてたと思う。さっさと隣のどっかの鈴蘭優ファン男子に引導渡すよう言ってたかもしれないね」

ちらと貴史に目をくれた。乾いた表情だった。

「もちろん立村くんのやろうとしていたことは、評議委員会満場一致なわけなくって、裏ではいろいろ意見も分かれたけどね。でも、最後は評議委員長の立村くんが説得して、なんとか一年間かけて話を持っていこうとしていたの。元生徒会長の藤沖くんとも話、煮詰めていて評議委員会ともよい関係を保つ形で共同でやってこうねって話にまとまりかけてたの。このまま立村くんが評議委員長で後期もいられたら、生徒会が丸ごと権力分捕ってしまおうなんてこと、絶対無かったよ。天羽くんももちろんがんばってくれてるけど、立村くんの目指した方向じゃないってことだけははっきりしてる。やりたいことは全部生徒会の丸儲けじゃないの、協力しようねって、それを立村くんは成し遂げたかったの。そうしやすい環境を作れば、今までは評議委員会をはじめとする委員会が全部ひとりじめしてきたものも、一般の生徒たちも参加しやすくなるし、部活じゃなくてもサークルとして盛り上げられるかもしれないし。それに、先生たちだって変にいばらなくて興味あるサークルに参加すれば趣味だって楽しめちゃうかもしれないし。菱本先生、もし規律委員会が手芸交流会やることになったら、赤ちゃんに何かかわいいぬいぐるみ作りたくなりませんか？」

「俺？ ああ、確かに、でも針と糸、苦手なんだよなあ」

誰も笑わない。笑えない。なぜ、ここで菱本先生に突っ込む必要があるのか貴史にはわからない。

「私が今ここで言いたいのは、立村くんが三年間ただ黙ってクラスのみんなから昼行灯扱いされたままでのほほんと評議委員やってたわけじゃないってことなんです！ 確かに言葉が足りなさすぎるし、自信なさ過ぎるし、ろくに紙数えられないし、男子としてどうかって言いたい気持ちはわかります。でも、評議委員会で立村くんがトップに立ったからこそ成し遂げられたことってこんなにあるんです。私もそれに気づいたのはつい最近だし人のことは言えませんが、これだけは言っておきたかったんです」

美里は呼吸を整えた。しばらく黙りこくるクラス全員を見渡していた。目を閉じて、少しだけ空白を作った。何かを続けようとした。

「清坂、お見事だ！」

拍手して空気をかき乱す奴がやはりパイプ椅子から立ち上がった。明らかに迷惑顔で美里が横

を見る。連れられて貴史もその主に目を向けた。

「初めて知ることが多くて腰抜かすかと思ったなあ。そうか。俺も六月の他中学交流会をきっかけにいろいろと渉外活動への興味が全校生徒たちに湧いてきたんじゃないかって気はしていたんだ。この前も美化委員会が主導で、近所の老人会に華道展示会の手伝いに行き、そこで花の生け方をみっちり学んだとか、体育委員会が保健委員会と組んで病院見学に行っ、ボランティア活動を継続して続ける話が出てきているとか、いろいろ聞いてはいた。そのきっかけが立村の案だったわけなんだな」

「そうです、その通りです」

堅い口調で美里が答えた。用心しているようだ。

「その他あいつがそれなりに計画していたことをひと通り聞いて思ったんだが、清坂、やっぱりお前はいい女房役だなあ。さすがだよ」

「え？」

思わず美里と顔を見合わせる。仮面なんてない。ぼかんとしたまぬけ面で返してくる。動揺しているのがありありとわかる。

「確かにだ。立村が評議委員会で取り組んできたことは素晴らしいし、みんなが気づかないうちに土台を作って学校内の委員会活動を活発化させようとしていたことは評価するよ。こりゃ大人顔負けだな。だがな清坂。これは立村ひとりでやり遂げたことではない、というのもわかるよな？」

「え、どういうことですか？」

きつく言い返す美里。やはり、きたと思っているようだ。

「もちろん長という名のつくもとでしかできないこともある。いわゆる『決断』だな。それをきっちり行った上で適材適所に仕事を振り分け、長い目でみてプラスになるように種まきをする、これはたいていプライドが邪魔してできないことだと俺は思うよ。男としてもな。それをあえてやり遂げようとした立村は偉い。ただ、それを受け入れられるだけの器のある奴が、あいつの周りに集まっていたことも否定はできないと、わかるな？」

かみ締めるように話しかける菱本先生。貴史にもゆっくり頷いてみせた。

「その一人が清坂だし、A組の天羽もそうだし、他の評議委員たちもそうだ。さらに言うなら立村の通常考えにくい案を受け入れようと努力したB組の藤沖はじめとした生徒会役員たち。もっと言ってみるか。その情熱にのっかってさらに自分たちでその波を広げようとした生徒たちみな、すべてが素晴らしいんだ。決して立村ひとりががんばったからではない。もちろんきっかけを作ったのは確かだがな」

「先生、立村くんを否定するんですか？」

あえてがまんしているのが見え見え。美里は怒鳴り声をつぼめて問いかけた。

「そういうわけじゃない。誤解するな。清坂、お前は立村と評議委員でコンビを組んで三年間、見事なフォローをし続けてきた。その上で今回あえて、立村の弁護をするためにこういう裏話をしてくれたんだろう？ もちろんそれはわかるんだ。だが、本当に俺からしたら申し訳ないんだが、こういう時間のかかるやり方を裏で手を回して行うよりもっと手早い方法がもっとあつ

たんじゃないかという気がしてならないんだ。清坂、今の話だと立村が思い立ったのは二年の半ばあたりだったんだろ？」

「はい、たぶん」

「それならなおのことだな。もし立村が考えた案をもっと別の、リーダーシップの取れる奴に渡してそいつの手で実行させたとしたらどうなっていたと思う？」

「え？ それってどういうことですか？」

貴史とまた顔を見合わせ尋ね返す。美里も、貴史も一緒に。

「誰でもいい。立村ひとりでその計画を抱え込まず、たとえばA組の天羽や、ほら清坂お前とか、それとも直接生徒会の奴らに提案するとか、いろいろあるだろ。先生たちに相談するとか、もっと立村よりも手際よく、誰の目にも見えるようなやり方でやり遂げることもできたんじゃないのか？ 去年の六月に初めて水鳥中学との交流会が行われた。これはすごいことだ。だが、別の奴が手がけていたらもっと早く、それこそ二年の段階で行われていた可能性も高いんじゃないのか？」

「先生でもそれは、別の委員長が担当していたし」

言いかける美里を制し、菱本先生は続けた。

「だからそこで立村の出番になるんだ。トップが反対しているなら、別の実行力ある人間に案を手渡してうまく口利きしてもらう方法だってあったはずなんだ。立村の計画および努力は認める。それこそ千パーセントな。だが、やり方はまずかった。あいつが懸命に努力していることを、現にここにいるD組の連中はじめ全校生徒はほとんど気づいていないんだ。それどころか、昼行灯か、そんな扱ひまでされている。評議委員にしがみついている役立たずと思っている奴も、そりゃいるかもしれない。こんな惨めな思いを立村はひとり耐えていたわけだろうが、それをもっと早く別の奴にゆだねていれば、なんらかの形で救うことができたはずなんだ。ずたずたに傷ついて、卒業まで間もないこの時期まで引きずらなくても、もっといい形で立村をクラスの一員として存在させることができたはずなんだ。遅すぎるとは言わないが、あまりにも時間がかかり過ぎたんだ。あいつにはきつい言い方かもしれないが、自分ですべてを抱え込もうとした立村は評議委員長としてベストではなかった、そう思わざるを得ないんだ」

じんわりと空気がやわらいだような気がした。男子たちの黙りこくった中、女子たちの小声でのささやき声が響く。

「わかってるじゃんひしもっちゃん」

「ざまみろってとこじゃん」

ひどい呼び名だが、菱本先生は怒りもしなかった。

「だが、まさに天才参謀だな立村は」

何かを言いかけたがすぐに切り替え、パイプ椅子に座った。菱本先生はもう一度美里に声をかけた。

「立村側の応援演説が続いたから、次は反対側の意見も聞くんだぞ」

悔しげに唇を噛んでいる美里の腕を、貴史は外から見えないように軽く指で叩いてやった。菱本先生の盾は見た目よりも堅かった。

不意に女子のとっぴょうしない声が響き渡った。

「先生！ 時間が限られてるし、ここで中立派の私がまとめに入っちゃっていいですか？ 大丈夫、公平な判断するから安心してよお、ね！ ひしもっちゃーん！」

遠慮がちな爆笑が教室内にじわじわ響く。湿った笑いを背中にしよった格好で立ち上がったのは、予想通りあの女子だった。

——古川、いったいお前何考えてるんだあ？

こずえの発言を女子連中は美里以外誰も驚いていない様子だった。さては予定通りの読みだったか。美里を見ると、少しだけ口が開いていたがすぐに気を取り直したらしく、

「そっか、いいよこずえ。あんたが言いたいなら任せるから」

あっさりを受け入れた。

「おい、お前いいのかよ？」

「覚悟してるよそれくらい」

美里ははっきり言い切った。こずえがいきなり割り込んでくるのだから、自分の味方だと勘違いしているのだろうか。貴史からするとどうも胡散臭いにおいがする。三階女子トイレでかたまって何を相談していた可能性がありそうだ。これは止める必要があるんじゃないだろうか。一瞬迷った。

「よし、それなら古川、お前に任せたぞ。ただ忘れるなよ。公平にな」

「わかってますって、しつこいと奥さんにパンチされちゃうぞ」

軽く流し、こずえはその場に立ったままじっくりとクラスメート全員を眺めやった。

「まず、一通り意見が出揃ったよね。まずきっかけは加奈子ちゃんの男子連中無視に関しての問題だし、そのきっかけとしての美里とのいがみあいだし、その間に挟まる形での立村のアホっぷりだし、それでいて実は結構仕事はきちりしてたりしてと、話がだんだんわけわからない方向に突き進んできてるじゃん？　なんかこのままだとせっかくの二時間ぶっちぎり大討論も結論出ないままになりそうじゃん？　まあ私も話聞いてて、すぐに片付く問題じゃないと思うし、それ以上に当の立村がいないしね。でも、ある程度の形は作っとかないとまずいよ。明日以降立村が学校にひょっこり出てきたら卒倒するよ。逃げ出してもう二度と出てこないかもしれないよ。それじゃまずいよね、菱本先生？」

無言で頷いた。目を真ん丸くしている。ギャグっぽく演じているように見えた。

「だから、ある程度の答えは出したんだよ。まず、加奈子ちゃんのことなんだけど、さっき怜巳ちゃんが言ったように男子連中がスルーしていたことは確かだと思うよ。第三者的に見ててもあっちゃあーこりゃあないよねって思ってたし。ただね、私も立村としゃべることも多くてあいつにもそれぞれ事情があったんだってことはうすうす感じてて、まあどうしようもないよねって思ってたんだ。そうだよ、美里？」

問いかけられて美里もふと、凍ったように頷いた。

「今初めて聞いたことと、なんとなくそういうことかなあってこととが入り混じってて私も考えまとまってないんだけどね。でも南雲の勇気あるごめんなさい宣言や彰子ちゃんのナイスフォローなんかあって、私なりに思うこともあるんだ」

こずえはいきなり貴史に目を向け、すぐに逸らした。

「まずね、ここはすごく大切なことだから加奈子ちゃん、聞いていい？　今日何回目の確認かわかんないけど今のことは絶対に外にもらさないから。結局立村は加奈子ちゃんに言い寄らなか

ったってことでよかったんだよね？ 単純に、私たちが勝手に想像して勘違いしてただけってことでいいんだよね？」

——やっぱり杉浦寄りの結論に持っていかうとしてるなあいつ。

菱本先生も、玉城も、基本として女子連中はみな、杉浦を守ろうとしている。その背にのっかり、最後は美里とその他男子一同を追い詰める戦略か。割り込むべきか、迷う。その間にもこずえは語り続ける。

「それと、美里も言ってたけど単純に小学時代の友達とあいつがもめてて、そのことでいろいろあったみたいだよ。でも、それはとっくの昔に話がついたことって考えていいんだよね？ 私から見ると今重要な点じゃないと思うんだ。むしろそれよか、加奈子ちゃんがいろいろあっても、なんで自分から訴えなかったのかってこと、それを知りたかったんだよね」

静まり返る。こずえの言葉には貴史も威圧されそうになる。今まで何度もこずえに先手を打たれてむかついたことがあるが、まさにそれだ。貴史なりにやりたいことはあっても、まるで透かすように準備して片付けてしまう。杉浦加奈子がぼかんとしたまま答えられずにいるのをこずえはあえて、何も言わせないように進めている。

「立村とさしで話し合いするくらいだもん、美里の理不尽たらたらなやり方に抗議しても絶対に私たち文句言わなかったよ。男子たちもずいぶんひどいことやらかしてみたいだけ、それが誤解から来ることだってきっと加奈子ちゃんもわかってたはずだし、そのことをはっきり言い切ればよかったと思うよ。少なくともね、加奈子ちゃんが立村に対して頭にきた事は私もおおむね同意だもん。立場が違っていたら数発は絶対ぶん殴ってたね」

——おいおい、やっぱりこう来るかよ。

とにかく立村が路を踏み外したのは、下手に例の事件をひたかくしにしようとしたこと一点にある。そんなこと隠さないで開き直ればこんな面倒くさいことにならなかったのにと、貴史もあいつを思いっきり張り飛ばしたい。

「でもさ、加奈子ちゃん。さっき彰子ちゃんが話してたことなんだけど、もしこのことすべてべらべらしゃべっちゃったら、もう美里と一生仲直りできなくなっちゃうんじゃないかって思ってたんじゃないかな？」

隣の美里が、はっとした表情でこずえを見つめている。能面が少しだけ外れたように見えた。

「ううん、これさ、私の勝手な妄想だよ。美里にあんな露骨な無視されてたにもかかわらず、加奈子ちゃん全然悪口言わなかったよね？ まあ私も美里側についていたからそうだったのかもとも思ったけど、怜巳ちゃんの話だとみんなに対してもそうだったみたいだしね。彰子ちゃんも言ってた通り、この話の焦点は加奈子ちゃんと立村の付き合いがありかなしかってことじゃなくて、加奈子ちゃんと美里のことがメインなんじゃないかなって私は思うんだけど、どう思う？ 怜巳ちゃん？」

玉城が頷いた。言葉が出ない様子だった。

「やっぱそっか。でさ、男子連中も聞いてほしいんだけど、まずここでは立村のことは一切無視して話を進めさせてほしいんだよね。どうもあいつの話になるとさ、意見が男女真っ二つに分かれちゃって面倒なことになりそうだからさ。あとで第二部、ちゃんと片付けるからその点も安心

されますよーに」

——まあ確かにな。立村のことは別になるわな。

まずはこずえが闇雲に美里の敵に回るつもりはなさそうで安心した。女子の友情の面倒くささはいやというほど感じている貴史としては、くわばらくわばら状態なのだ。

「加奈子ちゃん、なんであの時、立村との変な噂が流れたり、無視されたりしても何も言わなかったのか。それはやはり、美里と友だちでいたかったからだよね？」

また泣き出しそうな顔で、それでも顔をすっと上げて杉浦加奈子は頷いた。肩に二つ分けした髪が少し揺れていた。もともとふわふわさせていた髪のせいかな、ゆれっぱなしに見える。

「じゃあさ、美里とけんかになった例の立村との件だけど、あれ、美里になんで立村の過去のことを話したのかな。きっかけはそこだよな。私も加奈子ちゃんや美里と一緒にの班にいたからなんとなく覚えてるんだけど、それまではみんなで地図探しやったりおしゃべりしたり楽しかったよね。でも、一年の冬あたりから急にお互い無視し出したから変だなとは思ってたんだけど。美里もさ、確か立村のことでいろいろと刑事ごっこして情報得たのってその頃だよな。話のつじつまが合うんだよそうすると。それで加奈子ちゃんと最後の詰めを行って決裂したって落ちなのかな。私も当時はあんまり深く突っ込まなかったから、あさって行きそうな記憶追いかけてる状態なんだけど」

美里は詰まりながら答えた。

「そう、そうだよ」

「そうか。じゃあさここで古川流の推理を展開させていただくけど、みんなしばらく黙っててもらえるとうれしいなあ。男子諸君も今だけはホームズかポワロか明智小五郎か、とにかくイメージして私のこと見ててよね」

「ミス・パープルってのもあるよ」

わけのわからない突っ込みが水口から入った。拳振り上げる振りをし、こずえはさっそく推理披露へと移った。なぜか拍手が男女ともにまばらに沸いた。

「まず、加奈子ちゃんさ、どう考えても立村なんか美里はつりあわないって思ってなかった？」

今答えなくていいよ。けど私だったらそう思っちゃうよね。どう考えても美里みたいにびしびし言いたいこと言う女子と、立村みたいにおどおどびくびくして過去の記憶に襲われて悲鳴上げてる奴とじゃ、ちょっと、ねえ」

いくら弟扱いしててもそこまで言うか、と突っ込みたい内容をこずえは続ける。

「だからそんな奴よりもっと別な、ほら、隣にいる鈴蘭優マニアのそいつみたいなタイプが向いてるよとか、そういう気持ちがあったのかなってね。けど美里の立場からしたらさ、そんな人の勝手じゃんとか思っちゃったんじゃない？ あ、あんたもしゃべらなくていいって。ここは友情の話だけで進めるからね」

かなりきわどい内容だがこずえなりに気遣っているようだ。さすがに男女交際的话题に奥深く入ってしまうのは、担任教師の前でも抵抗があるだろう。美里も唇を噛んでいるものの何も言わない。ただ、さっきまでの能面はずれ、ふだんの戸惑い顔をこずえに振り向けている。

「どんな話し合いが行われたかはどうでもいいけど、話し合い決裂。でも加奈子ちゃんは美里を嫌いで嫌がらせの話をしたわけじゃない。ただ友だちとして、ふさわしくない奴とは付き合っ
てほしくないよってことを伝えたかっただけなんだよね。美里を嫌ったわけじゃないし、あの後い
ろいろ加奈子ちゃんと話をしても美里のことをちゃんと認めるような言い方してたからさ。美里
は悪くないって、一生懸命訴えてたよね。なんかそのあたりで私も妙だなんて気づけばよかつ
たんだけどごめんね。うらんでなかったんだよ、美里。加奈子ちゃんは、美里と友だちでいたか
ったんだよ。ただそれだけなんだよ。それが行き違いになっちゃって、でもどう話を持ってけば
いいかわからなくて、ずっと黙ってるしかなかったんだよ。そうだよ、加奈子ちゃん？」

いきなり玉城が立ち上がった。そっと駆け寄り、杉浦の顔をじっと見つめる。腕を掴みやさ
しく、

「清坂さんのこと嫌ったって誰も文句言わなかったのに！ そんな辛い思いするなんてひどいよ
。どうして私たちに何にも言ってくれなかったの？ 私たち、いくらでも受け入れたよ、ううん
、今からだってちゃんと加奈子ちゃんのこと受け入れるよ。わかってる、今ずーとこずえちゃ
んや他の人たちの話聞いててわかったけど、たとえもし、加奈子ちゃんが叩かれてた事実がほん
とのことだったとしても、私、加奈子ちゃんのこと嫌わないし、友だちでずっといるよ。間違
いなんで、誰にでもあるじゃん！ 許すに決まってるよ！ どうして？」

また涙ぐみながら、懸命にささやきかけた。

——ってことは、玉城、立村の無実は受け入れたってことか。

実はかなりでかい出来事のはずだが誰も反応はしない。誰か騒ぎそうなものなのにみな黙った
ままでいる。こずえパワーは偉大だ。同時に正義は勝つ、これも実感せざるを得ない。貴史なり
に南雲には、今回に限り助演男優賞を送っておくことにした。

「あの、ごめんなさい」

かすれた声で立ち上がったのは杉浦加奈子だった。初めての発言だった。腕にからむ玉城の手
をそっとはずした。

「私が悪かったんです。今までのことは」

「え？」

玉城が戸惑いながらも一度手を伸ばす。

「南雲くんと、清坂さんの言う通りです。私に立村くんが付き合いをかけてきたことは一度も、
まったく、ありませんでした」

細く、甘く、かわいらしい声が初めて響いた。

男子たちのせせら笑いが沸き起ころうとするのをこずえがたしなめる。全く効果なし。

「ちょっと待ちなあんたら。私の邪魔しないでまずは聞きな！」

「そうでお前ら、ここはまず黙れ。古川の話聞いてやれ」

やっと貴史の出番だ。急いで声をかける。隣の美里がふたたび能面に戻りそうだったのでまず
はでしゃばることにした。

「じゃあなんで、早く言わなかったんだっての！ あんまりだろ今まで、立村ばかりが叩かれ

まくってたってのに！」

「そうだ、やっぱり俺たちの方が正しかったんじゃないかよ！」

「南雲、お前は正しいぞ！」

今までの展開がぐちゃぐちゃ過ぎて男子たちのがまんも限界に達してたらしい。簡単には黙らない。もちろん貴史も立場が教壇ではなく自分の席だったら同じことをわめいていたかもしれないが今は今だ。とにかく黙らせることに専念した。

「まずだ、まず優先順位は杉浦、よく勇気出して言ってくれたよな。それは認める。そうそう、今ちょうどスタートに立ったばかりなんだからな。とにかくみな黙れっての！」

「羽飛そりゃねえだろ？ さっきから俺たち男子さんざん間違ってるのかいじめの張本人とか文句言われたけど、結局はそういうことがあった、ってことだろ？」

收拾つかず。パイプ椅子から菱本先生も立ち上がる。

「こらお前ら、さっき古川に言われただろが！ 全部話を聞いてからにしろって！ 杉浦も辛かったろうが、まずは少し落ち着け。さあどうする、清坂？」

美里に振った。貴史を飛ばし、何かを決めさせたそうにじっと見やる。もう美里の勝ちが決まっていて、どう考えても立村はとぼっちりを受けただけで、結局南雲の得た情報は間違っていない、というこの展開。他の女子たちの叫び、

「でも、加奈子ちゃんは言わなかっただけであって、勘違いしたのはあんたらじゃん！」

「文句言うんだったら立村がさっさといえばよかったんじゃないの？ 口ないわけじゃあないんだし。こうやって言い訳しなかったのが問題なんだよ結局あいつが馬鹿なだけ。加奈子ちゃんかとぼっちり受けたんじゃないの！」

「噂まわしたのC組の子たちだよ！加奈子ちゃんはただ誤解されただけ、悪くないんだってば！」

話を無理やり捻じ曲げている。こんなんでは話収まるんだろうか。

「美里どうする？」

「まかせて」

短く貴史の問いに答えると、美里はまずこずえに呼びかけた。

「こずえ、悪いけどここは私と加奈子ちゃんと話させて」

「わかった、いいよ」

こずえがあっさりを受け入れて座るのを待ち、ざわめく教室にいつそう響くよう美里はその名を呼んだ。

「加奈子ちゃん」

「え？」

「その噂が流れた時、全く否定しなかったことは事実だよな？」

真正面から杉浦は美里を見つめ、ゆっくり頷いた。ずっと泣き伏していた時のあどけなさはなく、すでに涙も引っ込んでいる。何かを決心したかのようだった。

「私、あの時もし、立村くんと噂を否定してくれてたら、加奈子ちゃんのこと、許せてたかもしれない。どうして黙ってたの？ それ、知りたいの」

「だからそれは美里のことを」

「そう、美里ちゃんそうだよ」

「清坂さんあんたいい加減気づきなさいよ！」

こずえ、奈良岡、玉城それぞれの意見が飛ぶ。美里は無視して、首を振った。

「私、あの時ずっと立村くんのありもしない噂の火消しし続けてきたけど、加奈子ちゃんがそんなのいないって顔しているからてっきり陥れようとしているんだって思ってたの」

杉浦はこっくり頷いた。

「そう。清坂さんの言う通り。こずえちゃんの言う通り」

その後、唇をまっすぐに引き絞るようにし、大きな声で叫んだ。B組、もしくはC組に聞こえそうなくらいの大きさだった。

「だって、立村くんみたいな人、絶対清坂さんにふさわしくないもの！」

今まで杉浦加奈子が感情を露にしたのを見たことがない。もともと存在を意識したことのない女子だったといえばそれまでだが、そこまででかい声を出して叫ぶ女子とも思っていなかった。美里、こずえ、菱本先生でもおさまらなかつた私語の嵐がぶつと止んだ。

目をぎらつかせて、杉浦加奈子は少し恥ずかしげに顔を俯け、ゆっくりと美里を見つめた。潤んでいるようにも見えたが、先ほどまではかなげな姿ではない。むしろ、美里をなんとかして掴みたい、そういった眼差しに見えた。

「ずっとみんな、立村くんのことを一生懸命にかばってて、きっとそれは正しいんだと思います。私が黙っていたことは間違っていたんだと、今は思います。でも、やっぱり私、許せないんです。人を傷つけて平気である人と、清坂さんみたいな人が友だちでいるのは間違っているとしか思えないんです」

「おいちょいと待て、お前だって人傷つけて平気であるんじゃ」

余計な茶々を入れる男子をこずえが軽く蹴り入れて黙らせた。

「清坂さん、私のこと、嫌いなのはわかってます。嘘つく人、嫌いなのは私も、清坂さんのこと知ってるから、平気。でも、私は清坂さんと仲良しにいつかなりたかったんです。こずえちゃんや怜巳ちゃんが代わりに言ってくれたことと、みな同じ。だって清坂さんは私のこと、大嫌いでも……ちゃんと私のことみんなと同じように守ろうとしてくれたもの」

「私が、守る？」

美里が戸惑ったようにつぶやいた。思いつかないのかなんなのか。

「二年の、宿泊研修の時、私がバスの中で大変なことになった時、清坂さん、一生懸命私のこと、助けようとしてくれたんだもの。私のことなんか無視したってよかったのに、私のことかばってくれて、あんなことまでしてくれて。嫌いな子にもやさしくしようとしてくれる清坂さんのこと、私絶対に、絶対に」、嫌いになんてなれないもの」

——ああ、あのことがよ。んなことあったな。

思い出した。宿泊研修二日目、黄葉山バスツアーの際突然催した杉浦加奈子を美里が落ち着かせようとして大活躍した一件、確かにあった。菱本先生は全く役立たずで、最終的には事なきを

得たらしいが、その辺はあえてノーコメントにしておく。ただあの時は杉浦だけではなくて他の女子もばたついていたらしいのでみなあつという間に忘れてしまった。むしろ次の日の立村バス脱出事件の方がはるかにインパクトが強かったので貴史の頭からは全くもって抜け落ちていた。男子たちも思い出したらしく、こそこそささやき出す。

女子は黙っている。

美里が突然かくっと首だけ下げて、教卓を見つめた。

「どうした美里」

「そう思ってたんだ」

「はあ？」

小声で他の奴らには聞こえなかつただろう。貴史にしか聞こえなかつたはずだ。

不意にこずえの声が飛んだ。

「美里、どうする？」

顔を上げた美里は、唇をゆがめるようにしてこずえに何かを言おうとした。そのまま五秒ほど動かず、もう一度手を教卓に着き直した。ふっと息を止めるようにし、自分に頷きかけるように頭を動かした。教卓から降りた。そのまま杉浦加奈子のもとに進んだ。

「清坂？」

「清坂さん？」

美里を呼びかける声がかすれて聞こえる。貴史だけが教壇に残されたまま、目の前の女子二人を見つめていた。美里はすっと背を伸ばし、そっと杉浦加奈子に手を差し伸べた。

「加奈子ちゃん、ごめんなさい。私がひどいことしたから。あの時に気づけばよかった」

「そんなことない、だって清坂さんは」

「気づかなくて、ごめんなさい。私が無神経だったから」

泣かず、ただ真摯なだけ、貴史に見えたものはその姿だけだった。

美里が両手で杉浦加奈子の手を握り締め、ゆっくりと頭を下げるのを息を止めたまま様子を伺った。なぜ美里が考え方を百八十度変えて杉浦の下へ向かったのか、なぜ美里が勝ちを見極めたのにあっさり頭を下げたのか、その理由が想像つかない。クラスの全員が固唾を呑んで見守る中、菱本先生とこずえ、奈良岡彰子だけがぽんぽんとリズムのよい拍手を送っていた。なぜそれにつられてクラスの連中が手を打つのかも、手を叩かなかつたのが自分だけなのかなぜなのか、探ることすらできなかった。

——美里、何が起きたんだ？ お前、杉浦になぜ謝る？

こずえが知ったか顔で頷くのを、貴史はひりひりした思いでちらと見た。

——本気で考えているのかわっからねえ。

「じゃあ、古川、とりあえず時間もやばいからどんどん進めてくぞ」

杉浦加奈子との「和解」らしきものが成立してから三十秒経過。時計を見ながら一応は進めている。あと二十分を切っているこの状況無事に片がつくのか貴史にも不安がよぎっている。

「じゃあ美里、加奈子ちゃん、定位置に戻って。残りのもいっこ片付けるからさ」

「いいよ、けど私ももうひとつ言いたいことあるからその分時間残しといて」

「オッケー」

仕込みとは考えづらいのだが、古川も手馴れたもの。美里が教壇に上がるのを待って、さっそく仕切りを開始した。なんとなくクラスのムードが和らぎ、がちがちの冷凍肉まんに箸を突き刺そうとしていたのが電子レンジでチンして難なく突っ込めるようになったような気がした。腹がちよこっと空いてきたせいだ。

「で、なんだけどさ。私が思うにこの件は根が深すぎるよ。男子たちは懸命に立村のがんばってきたことを説明してくれたし、私からしてもあいつ意外とやるよねえとか思うし。まあ一言言わせていただければね、図書館にももう少しなんか権限、ほしかったんだけどねえ、ま、あいつが戻ってきてからそれは言うわ」

忘れていた。一応古川は図書館員だった。似あわなすぎる。

「もちろんっそれは認めるし、立村が青大附中の評議委員、あと評議委員長としてやりたいことをきっちりやってきていたのはわかるような気がするよ。でも、ね。ここからが本題なんだけど、率直に言って私らそれを望んでた？」

——望む、ってなんだよそれ。

思わず声を上げそうになる。前かがみで、教壇乗り越えて貴史も問いかける。

「おい、なんだそれ。望むったってなあ、一応前期後期改選やってらろが」

「そうよねえ、一応、ね」

こずえは貴史にウインクを一発送ってきた。状況把握してるのかこいつは。

「これ、入学してからずーっとなんでかなあって思ってたんだけど、一年の時誰もなんもわかんない時に委員がみんな決められてって、その後みなさまご存知の青大附中委員会部活動主義に突入してって、そう簡単に委員の入れ替えができない現実ってあるよね。まあ一部の委員会はそんでもないかもしれないけど、一応はクラスの代表でもある評議委員があれだけ強固に団結してしまったとしたら、そうそうかんたんに頭の挿げ替えなんてできないと思うんだよね。立村と美里で三年間突っ走ってきてしまったわけなんだけどさ。単刀直入に言うよ。それで、よかった？」

一瞬にして教室は急速冷凍、当然だ。

美里が片手を握り締めて、無言のままこずえを見据えている。

たぶん、貴史と同じ直感なんだと思う。

——あいつ、また蒸し返す気かよ？

「おい、古川、それ今更聞いたってなあ」

「羽飛、ここは古川の時間だ、黙ってる」

菱本先生が制した。こういう時、担任が大人だと面倒だ。

「先生サクス。これ、下手なこと言ったら、羽飛や美里がかみついてくるからD組の中でも禁句になってたと思うんだけどね。本当は早い段階で立村を評議から下ろしたくてなんなかったって本音、あるんじゃないかな」

「あのさあ、古川、これ今更なんだって」

「貴史あんた黙りな」

びしりと、今度は隣の美里に叱られる。裏で足を蹴ってやる。

「これさ、怜巳ちゃんも言ってたし、美里もそういう動きがあったことさっきの話でちらっと認めてたし、何よりも立村本人が危機感持ってたってこと本人の行動で証明してたじゃん？ さっきの『大政奉還』も、評議委員長としての立村が、委員会メンバーの固定化による弊害っての？

それをなんとか打破したくってたくらんだことだって判断したんだけど、それ私、間違ってたりする？」

「間違っていないよ」

美里が短く答えた。他の連中の様子はえらく真剣だ。貴史が見ている限り、みなが頷きたくてならない風に、首をかすかに動かしている。さすがに男子連中は口をへの字にしているけれども女子は押しなべてみな、納得顔だ。立村にこの光景は見せたくない、つくづく思った。

「そうだよ。で、さらに突っ込んでみるとなんで女子たちは立村を評議にしなくなかったんだと思う？ 男子の意見からしたら、立村はやるべきこときっちりやってるし結構面倒見もいいし目的を達成するためにはありとあらゆる手を尽くしてるし。男からしたら仕事しっかりしてるじゃんってとこだよね」

「あたりまえだろ」

東堂をはじめ男子の一部……貴史とはつながらない連中……から同意の声が上がる。

「そうそう、そうなんだけどさ。けどさ、はっきり言って女子からするとそんなこと、どーだっていいんだよね。そうじゃない？ 怜巳ちゃん？」

美里と杉浦加奈子との和解劇で涙ぐんでいた玉城が頷く。

「そう、こずえちゃんあんた偉いよ。代わりに言ってよ」

「もちろん！ つまりそういうことなんだよ。女子たちの本音を代表して言っちゃうけど、あ、美里は例外にしとくから怒らないでね、つまり」

古川こずえの結論は簡潔だった。

「女子の本音は、立村が生理的に受け付けなかったってそれだけなんだよ」

——おいおいそこまでお前言うかよ！ ったくお前に任せとけばなんだこれ、もうど修羅だろがおいおいおいおい！

せっかく今まで必死に押さえてきた展開をひっくり返されてしまった。男子連中が黙るわけが

ない。あと十五分を切っているロングホームルーム、ちゃぶ台ひっくり返されてさらにどうやって片付ければいいのか。

「古川そりゃねえだろ？ 女子そこまでアホなのかよ」

「ったくだから女子は馬鹿なんだ、仕事してくれる相手をもとめねえでどうするんだよ」

「あーあ、これじゃあ立村学校逃げたくなるわ」

「なんだか俺、立村に食べ物おごりたくなるわこれじゃ」

手をぱんぱん叩きながら、こずえはさらに呼びかけた。ちっともあわててない。女子たちの、声を出せずに顔だけ上げて共感露にしているさまを眺めながら、

「ちょい待ち、まだ私の話は終わってないんだってば！ でね、聞いてよ。これはもう本能なんだよ、しかたないの。男子だってもしさ、好きにもなれない女子から迫られたら断りたくなるじゃん？ やらせてもらえるかどうかにもよるかもしれないけどさ」

「古川、下ネタは封印してそのまま続けてくれ」

止めるべきは担任の方からだと思うのだが、勘違いした突込みを入れる菱本先生。

「ごめんなさいねえ、つい先走り汁出ちゃって。とにかく、女子たちの多くは立村と深く語り合うことなんて全くないし、どんなにあいつががんばっていたとしても知ったことじゃないのよ。評議委員としてクラスの外では手腕お見事だったと思うよ。でも、私たち女子からしたら、クラスの中での言動で判断するしかないじゃん？ クラスのほら、ロングホームルームで文集作りましょとか合唱コンクールの準備しましょとか、その他いろいろなイベントに対してがんばりましょとか、そういう時の仕切りの技術っぽいところで判断しちゃうわけよ。いい例がさ、男子クラス対抗リレーの時、立村が一生懸命アンカー勝負のぐたぐたを仕切ろうとして、女子たちからど響き買ったことあったじゃん？ あの時もし別の奴が片付けてたとしたら私ら女子も冷静に受け入れてたかもしれないし。立村の考えていたこともあとでいろいろ聞いたから、理論上はわからなくもないよ。けど、それ以上に、あいつが上からものを言われてなぜ言うこと聞かなくちゃあならないの？ って気持ちですごく女子の中にはあるんだよ。ろくにクラスをまとめようともせず、肝心要のことは羽飛や南雲にまかせっきり、なんかわかんないけど教室の外ではべた褒めされているようだけど全然クラスには還元っての？ されてないじゃんって気がどうしてもするんだよ。そういう相手、信頼したいと思える？ いや、まあ男子からしたらちゃんとがんばっているところよく知ってるから受け入れられるかもしれないけど、女子からするとそれは目の前で見せてもらえないとわかんないんだよ。美里がかばって羽飛がフォローしてたからまあ、がまんして受け入れてたところもあるけれど、結局は最初っから最後まで立村を評議委員にしとくって言う展開が三年間耐えられなかったってところが、いろんな問題につながってきてると思うんだよね」

こずえがひとしきり語り尽くす中、隣のパイプ椅子で大きく頷く菱本先生の姿が視界に入った。驚きはない。前から菱本先生は同じことを貴史に語りかけてきたのだから。ただこの場で滔々と述べられている中、目に見える形で共感してほしくなかった。立村がもう教室に戻ってこないのならしかたない。しかし、明日、登校してきた時に立村自身が突きつけられる現実に、果たして耐えられるのかそれを想像してほしかった。

——古川、あとでなんかかんか、絞めてやりたいところだが、なあ、嘘とも言い切れねえんだよ。どうすりゃいいんだか。しかし美里、全然泣こうとしやしねえの、なんとか言えよ。

「さあここでクライマックスだよ。私が言いたいのは女子が目の前しか見えないとか男子が視野が広いとかそういうことじゃないんだよ。女子としても反省なんだけど、もう少し立村がやってきたことを冷静に判断する必要あったと思うんだ。何も「忠臣蔵」の松の廊下で結城先輩に切りかかってるだけじゃあない、男子らが評価しているならそれがどこからくるのかくらい考えてもよかったんじゃないかとは思ってる。でも、女子ならわかってくれると思うんだけどさ、ぞわっとくる相手ってどうしようもないんだよ。私は立村そんな嫌いじゃないからそう思わないけど、理屈じゃないサムイボ立っちゃう相手っているじゃん？ もしそいつが評議委員だったらどうしても受け付けられないってところはあるし、大多数のその対象が立村だったとしたら奴にはかわいそうだけどしょうがないんじゃないかってね、思うんだ」

反論を封じ込めるためか、こずえは勢いつけて早口に発砲し続ける。貴史もなんとか隙間を縫って反撃したいのだが、これができない。

「今さ、みんな、もう卒業まで一ヶ月しかない、もう遅すぎるって思ってるところあるんじゃないかな。まあ時間経ち過ぎだよ。本当だったらもっと早く、立村を別の委員に回すとか、もしくは英語の研究会でも作らせてクラスの語学苦手連中のために協力してもらおうとか、なんとかあいつが活躍できる場に行ってもらおうようたくらむのが筋だったんだよね。でも、そりゃあもう無理。だけどさ、三年D組をまとめて全員笑顔で卒業したい、納得させて卒業させたい、それだったら今からでも十分行けると思うんだ。言いたいことわかるよね？」

「おい、やめろよ」

無言で美里につま先を踏まれた。かなり本気の強度だ。

言いたいことはわかる。だから黙れと言いたい。のになぜだか、口から言葉が出ない。

こずえはじっと貴史を見据えた。笑ってない。女子ではない、男子のひとりに見える。

「ここから先、卒業まで羽飛が三年D組の指揮を執る、これしか今の状況を変換できる方法ないよ。菱本先生、どう思います？」

あと十分。完全に崩壊状態だった。

教室全員、そして貴史の中も。

「古川いい加減黙れ！ そんなことなんで今議論する必要あるんだよ！ あのな、今話し合わねばなんないのはそんなくっだらねえことじゃあねえだろが！」

「くだらないってば！ あのねえ、これ、あんたの鼻真目で言ってるわけじゃあないんだよ。それとまだ続きあるんだからさ、私がメガホン用意しなくてもいい声でしゃべらせてよねえ、ちょい黙りな！」

さすがにここでは止まらない。男子たちがとうとう立ち上がった。ひとりふたりではなく、座っている奴がひとりしかいない。その一方で女子たちが全力で拍手している。まるで仕込まれたかのように、タンバリン打ち鳴らすかのように、わざとらしく手を打っている。奈良岡がこずえ

に向かい、

「よく、言ってくれたね、こずえちゃん、ありがとう！」

両手を握り締めているし、玉城も駆け寄り、

「ありがとうそうだよ、私の言いたかったこと、全部そうなんだよ。こずえちゃん、ありがとう」

側にいる杉浦加奈子の肩を抱きながら、熱く語っている。

「お前なあもう少し話わかる奴だと思ってたが結局立村の叩き落としか？ 今からあいつ突き落としてどうするんだよ。三年間評議やってたことを全部なかったことにして、そいで相手を羽飛かよ？ それは話、違うだろうが！」

発言した男子たち、今まで発言控えていた男子連中、みなが詰め寄る。交通整理が必要な状況だ。菱本先生は立ち上がらない。静かに貴史に向かい、こずえに指を指した。何も言わない。肝心要の美里も同じように貴史を見据えている。

「お前なんとかしろよ」

「ここはあんたが鎮める番だよ。いっちゃいな」

背中を拳骨でぐりっとやられた。無表情だが、壊れてはいなかった。

「結論は出ちゃったんだから、ここはあんたがまとめるべきだよ。こずえのためにもね。立村くんのためにも、あんたが動きなよ」

——美里、お前とうとうあいつを見限ったのか……？

わからない。だがこれはもう、賽は投げられた。

「おめえら、黙れったら黙れ！ 俺にしゃべらせろ！」

腹から絶叫した。一瞬静まり返った。

「よっし、ご指名どうもってとこでまず、お前ら席につけよ。それと古川、俺この三年間いやってほど言われ続けてきたことをよりによって今の今になって持ち出す理由が全くわからねえんだ。なんで俺が、あと一ヶ月クラスの指揮とんねばなんねえの？ それをまず聞かせろよ」

「待ってました！」

今まで笑顔を封印して語り続けていたこずえだが、貴史の声にほっとしたような表情を見せた。親指を立てて「GOOD！」を一発。

「そうそうそれ説明してる途中じゃん！ みんな座った？ 時間ないから一気にいくよ。あのさ、まず一年入学当初なんだけど覚えてる？ 評議に羽飛が立村を押しした時のこと。この学校が委員会部活動主義だとは聞いてたけど、正直、なぜにって感じだったじゃん？ 私は正直、羽飛と美里で決まりだと思ってたけど、こいつがなぜか立村推薦して、みなあっけにとられている間にそうなっちゃったでしょ。その後、なんか下ろしちゃまずいよねムードが広がっちゃってさ。それでなあなあで来たってことよ。でもなんで、立村で決まっちゃったかわかる？ それはさ、羽飛が『推薦』したからなんだよ。これすっごいポイントなんだけど、立村の名前が出たからじゃあない、羽飛が推した奴だったからなんだよ。だって私たち、立村がどんな奴かなんてあの時知らないじゃん」

まずここまでこずえは言い切った。貴史なりに一応褒められてはいるので喜びたいところなんだが、もちろんそんな気持ちにはなれない。

「次に一年後期、だいたい委員会最優先主義がこんなものかなって思えてきた頃。どんな奴かもだいたいわかってきた頃。この段階でなんとなくだけ好き嫌いってのは出てきたよね。本当だったらここで、羽飛にバトンタッチしてもおかしくなかったんだよ。けど、それもできなかったのはなぜだかわかる？ 羽飛が後ろ盾になって立村推したからなんだよ。ここもすごく重要。羽飛が『推薦』したからであって立村が評価されたからじゃあない。もちろんあいつもクラスの外では本条先輩の弟分だったしいろいろ評価はされてみたいけどそんなのクラスでは知らないよね。加奈子ちゃんとの誤解もあって女子の中での評価は最低だったけど、それでも『羽飛がここまで言うんだからまあいっか』なムードはあったのよ」

「俺すげえ褒められてるけど、悪いがあんまりうれしかねえな」

「喜ばれると話、進まないから先いくよ。そいで二年、今度は立村が本条先輩から評議委員長の指名を受けるかもしれないという情報が流れてきたというわけよ。ただまだ平だし、二年の新井林も入ってきたしそっちに指名変更されるかもしれない、女子からの評価ぼろぼろ。それでも立村をそのまま指名したのはずっと羽飛、あと規律だった南雲、あんたたちがしっかり立村を推してたからなんだよ。クラスの総意じゃあないんだよ。男子たちはOKだったかもしんないけど、女子からは納得言っていないまま、流れで進んじゃったんだよ。それが間違っているとは思わない。けど、クラスがまとまる最後のチャンスを逃したことは確かだよ。結局ここでもう評議委員から立村を解放するチャンスがなくなってしまい、とうとう今日まできちゃったわけ。不満は積もる、本当は羽飛の仕切りなら納得できてすぐ終わることが、立村だと延々と続いてしまい勘違いした展開になってしまう。なおも悪いことに、羽飛、立村がいない間しっかりクラスの面倒見てくれてたしさ。立村がクラス外の活動に燃えてた時、羽飛の実力が見事に発揮されていることを見ちゃって、女子たちとしては、なんで立村が評議委員になっちゃってるわけ？と疑問の嵐に吹きまくられたというわけ」

——やべえ、完璧古川にのっとられてる。

下手に切り込んだらウインク一発でがたがたにされる。どうすべきか迷う。

「で、現在。立村に罪がないことはわかった。それなりにがんばってくれてたこともわかった。けど、もやっとしたものは消えない。本来トップになるべき羽飛が影武者状態だったから、正直気持ち悪いんだよ。本当にクラスの貢献者であるはずの羽飛が平の生徒のまんまで、ろくすっぽクラスの面倒を見なかった立村が大きな顔して評議委員で卒業しちゃうのが女子としては納得いかないんだよ。男子にはほんっと申し訳ないんだけどそれが女子としての本音。だからこそ、女子たちからの希望としては、羽飛で残りの一ヶ月をしっかりと仕切ってもらって、すっきりさわやかなお通じでもって卒業させていただきたいわけ」

「あのな、古川。よく考えてみろよ。評議委員代えれってことか？ そりゃ無理だ」

「いや違うってよく聞きな。何も今さら評議委員を挿げ替えろとかそういうこと言ってるんじゃないよ。そんなことしたら、本来立村が活躍している『クラスの外』の方に大迷惑かけるからね。立村は評議委員会で全力尽くしてもらえればいいの。私が言いたいのはこのクラスの中ってこ

とよ。あいつはこういったらなんだけど、クラスのことについては全く無関心だったと言って過言じゃないよ。美里がいつも面倒見てて、しつこいようだけど羽飛が全部フォローしてたからね。だったらこれを影武者フォローじゃなくって、羽飛が完璧に担当者化してもらって、こういうロングホームルームの時は羽飛が、外では立村がって方式に切り替えれば一番いいんじゃないかってことよ。前からそうなたようなものだけど、こういっちゃなんだけどねえ、正式ではないでしょ。せっかくこういう場があるんだから、正式にクラスの中の切り盛りは羽飛で文句言わせない、かわりに外での評議委員会活動は全部立村が持っていく、そう決めちゃえばいいんだよ」

「お前、今自分でどんなおっそろしいこと言ってるかわかってるか？ それ、立村に言えるか？」

「言えるよ。もちろん」

「下手したらあいつ死ぬぞ。お前もあいつの性格知らないわけじゃあねえだろ？」

切り返し、瞬時だ。丁々発止。

「大丈夫だよ。立村はすべて承知してるよ。美里だって言ってたでしょ。自分はクラスで評価されてない、ただ流れで選ばれているだけ。だからそれを改善するために努力してるって。それなら話し合えばわかるよ。卒業式はもちろん立村が先頭で入ってもらうことになるけれどそんなのはどうだっていいんだよ。私たちが求めているのは、クラスのことをちゃあんと面倒見てくれて、納得する形で収めてくれるそういう奴だから。しつこいようだけど評議委員だからどうのってことじゃないんだよ。クラスでしっかりまとめ役に立ってくれる奴を羽飛にしてほしいってだけ。立村は渉外でいいの。そっちの方が断然力出せるじゃん？ あいつのためなんだよ」

小声で「そうだよ、そうだよ」と女子たちのささやきが響く。ひとり、ふたり、そして数限りなく。

「話、戻すようだけど、美里と加奈子ちゃんの一件だってもし羽飛が評議でこの事実を聞いていたとしたら、もっと手際よくぱっぱと片付けられたたんじゃない？ 羽飛、どうしてた？ 一年の冬、立村と加奈子ちゃんが誤解されていた時、あんただったらどういう風に切り盛りした？」

「えーと、取り合えず話し合いはさせただろうな」

「でしょ？ そうだよ。美里も含めて、何かさせたよね？ それから？」

いきなり問われても困る。本能で答えるしかない。

「あの件はどう考えても、立村が悪いってところもあるし、謝らせるかなんかしたろうなあ。終わっちゃったこと言ってどうするんだよ」

「女子は過去が大切なの！ それからこのことは暴露する、どうする？」

「暴露させちまうだろうなあ。だってたいしたことねえもん」

考える間もなく勢いで答えてしまう。そうだ、もしあの時自分が評議に回っていたら、すぐ立村と杉浦をつき合わせて話を聞いて、もしかしたら立村を一発くらい張ったおして、なんとかしていたんじゃないかと思う。

「じゃあ美里にはどうしてた？ こんなひどい状態になる前に、どうしてた？」

ちらと美里を眺めやる。

「いいよ、本音言っちゃいな。もう終わったことなんだから」

小声でささやかれる。それなら延髄で答えるしかない。

「女子のことはどうだっていいけどな、まあ、杉浦を無視はしなかつたらあ。事情ある程度わかってたら他の女子にも頼んで、立村も悪気があってやったんじゃないし、まあそこところはうまくやってくれるよう頼むかもしれねえけど、そんなときになんないとわからないぞ」

その時、玉城が立ち上がった。

「そうだよ、羽飛がそれ、説明してくれてたら、こんなに長い間誰もが苦しまないですんだんだよ。加奈子ちゃんも、清坂さんも、他の女子たちも。たぶん平のままだったら、立村に対しても私たちは、空気扱い程度ですんで嫌ったりすることもほとんどなかったと思うんだ。羽飛が評議としてそこにいたら、今まで起きたことの半分は、片付いていたよ」

また漣攻撃「そうだよ、そうだよ」女子声の響きが走る。

男子連中はぶつくさ文句のみ。漣の強さにはかなわない。

「三年の時の、ほら、男子リレーアンカーを決める時も、何も考えずに羽飛がまとめていたらよかったんだよ。立村はそれなりに仕事をしてくれたんだから、あいつがトップになんていなかったら素直にすごいと思って、それで終わりだったんだ。そうだよそうだよ、すべての発端そこなんだよ！ 私、それ、言いたかったんだよ。なんで羽飛、最初っから評議にならなかったのかって！ 羽飛だったら、これ以上嫌われ者作らなくてもすんだんだよ。そうだよ、羽飛が評議やってたら、立村はここまで女子にゴキブリ扱いされなくてすんだんだよ！ だっていたっていなくたっていい存在だったら、それだけじゃん？」

「おい、玉城、お前完全に頭に血、昇ってないか？ 落ち着けて」

なだめて見るが無理だ。こずえもぽかんと口を開けたまま、玉城の顔を見つめている。

「すべては羽飛が評議委員にならなかったことから、すべてが狂っちゃったんだよ。羽飛、責任とってよ。今まで私たち、何言たって変わりっこないと思ってたしあきらめてたから何も言わなかったけど、今なら叫べるよ。羽飛、クラスをまとめるのはあんただけしかいないんだよ！

責任取りなよ！」

間髪入れず菱本先生が手を打った。誰かが文句を言う間もなかった。

「よし、ここまでだ。あと十分。少し俺にもしゃべらせろ」

右手で平らに上下し玉城に座るよう指示した。次にこずえにも。

ゆっくり貴史に近づき、肩に手をかけた。

「ここから先は、D組の担任として語る義務がある。まずはほら、お前も、清坂も席に着いてくれないか」

三年D組全員が着席した状態で、菱本先生はまず、両手を教卓の上に着いた。

いつもの「お説教タイム」が始まる合図だ。

じっと生徒たちを見下ろしてから、

「ここまでとことん本音で語り合ってもらったわけなんだが、よく考えるとこれは三年間このメンバーと過ごしてきて、初めてのこともかもしれないな」

まず切り出した。

「俺は今まで顔あわせてきた生徒全員に対して、『本音で語ってくれ』と命令してきた。一度も言われなかった奴は、たぶん、ゼロじゃないかというくらいにだ」

——俺は言われなかったなあ。

貴史はひとりごちた。言いたいことが分かるのでその辺は飛ばす。

「それが伝わった奴もいればそうでない奴もいた。だが、俺が担任した生徒たちには、表を繕った話を一切してほしくない、そう思っていたんだ。もちろん人間だから嘘をついてしまうこともあれば、ついごまかしてしまいたくなる時もある。それでもやはり、最後はみなすっぱだかの気持ちですべてを打ち明けてほしかった。なぜかという、人と人がわかりあう究極の方法とはすなわち、本音のぶつかり合いに他ならないというのが俺の持論だからだ。それはわかるよな？」

——うーん、先生、悪いが例外いるぞ。

つつこみを続けつつ、貴史は両腕を机に載せて、がっちり両手を組んだ。

「今ここでありとあらゆる意見が飛び出した。今の段階では事実として断言しきれないことも多々あるがそりゃしょうがない。全員が揃っているわけでもない。ただ、三年D組の現在において、最新の本音をぶつけ合えたのもまた事実じゃないか」

誰も何も反論しない。本音、それは確かにぶつけ合えたのだから。

菱本先生は真正面からそのまま語る。

「これから整理していく必要のあることもたくさん出てきている。問題そのものはこれから片付けなくてはならない。だが、その前に俺は言いたい。よくぞ、本当によくぞ、お前ら真剣に、まるのままの本音をさらけ出してくれた！ よくやった！」

褒め言葉にも反応がない。貴史ももちろん何も言わない。

——あまりにもなあ、先生、軽くねえか。

たぶんみな、同じことを考えているんじゃないかと思う。菱本先生が何を語り掛けたいのかうすうす分かっているような気は、貴史もする。何度も立村を「お前はなんで本音でぶつかりやしないんだ！」と叱咤してきたことを考えると、その真理こそ正しいと自信を持って言い放てたことがうれしくてならないのかもしれない。

「もちろん俺なりに思うところはある。お前らの判断が間違っているのではというところも正直感じている。大人として、青大附中の教師として許していいのか、と問いたくなることもある。だがな、お前たちがこの二時間熱く語った言葉そのものは事実関係がどうであろうと現段階での真実だ。それをさらけらせれば、ここから先はどんな展開が待ち受けていたとしても、必ず路は

開けるはずだ。俺は絶対にその真理を譲らない！」

熱血菱本先生の道もまた、卒業まで同じスピードで進んでいく。

叫んでその後、菱本先生は息継ぎをした。

本音かどうかはともかく、全員が固唾を呑んでいる状態ということだけは確かだ。

貴史は美里に目を向けた。やはり、同じだ。無言で菱本先生を見据えている。

「ではここでだ。俺なりの本音を改めてぶつけない。うっとおしいと思われるのも承知だが、どうせこのクラスはあと二ヶ月でおさらばだと思えば、少しはがまんできるだろ？」

自嘲気味につぶやいた後、

「まず問題の根っこがどこにあるのか。そこから行こう。古川や玉城が言い切った通り、俺もこの件は一年入学時の評議委員選出がすべての発端だと思う」

じりりと、貴史を見据えた。にらんだ。打ち据えた。

言葉が出なかった。

「まず、立村がなぜ評議委員に選ばれて『しまった』のか。まずはここだ」

菱本先生はゆっくりと『しまった』の部分を発音した。

「事実だけ整理すると、一年最初の評議委員選出で、羽飛が立村を推薦して自動的に決まった。それだけだ。この辺は古川が言う通り、まだ入学したばかりなので誰がふさわしいかなんてわかりっこない。新歓合宿からの選出になるのは、せめてある程度互いの性格を理解しあうための時間がほしいからなんだ。仮に入学式当日に選んでみる、たぶんほとんどの場合、出席番号男女各一番の奴に決まるだろ。選びようないからな」

——確かに、それはあるな。

貴史は頷いた。ちらと見咎めるような表情をする菱本先生。

「俺の本音を言わせてもらおうと、男子は十中八九、羽飛か南雲のどちらかが選出されるだろうと読んでいたんだ。理由はたいしたことじゃない。とにかくよく目立つ奴が通常は選ばれることが多い。性格云々ではなく、クラスで目立つ奴、なんだ。羽飛も南雲も、胸に手を置いてじっくり考えてみる。どう見てもやりたい放題してたら」

「俺そんな目立ってましたか？」

不思議そうに南雲が発言する。まじめに語りつくそうとしている菱本先生の、話の腰を思い切り折っている。

「過去のことは覚えてられないかもしれないがな、少なくとも入学後三日目でお前の名前を知らない奴はいなかったと思うぞ」

あっさり流した後、

「ところが蓋を開けると、その目立つ奴の一人である羽飛がなぜか立村を推薦した。この流れには俺も驚いたんだ。正直なところ、俺は立村を別の視点から観察する必要はあると思っていたが、評議委員に選ばれるとは想像すらしていなかった。まず、クラスであいつが目立っていたとはどう考えても思えない。立村の特出した能力といえば語学だが、それもまだ入学一週間で認識されることもまずはない。英語なんてお前ら、最初はかんたんすぎて成績すごくよかっただろ」

思い当たる節がある。入学当初はアルファベットの書き方とか筆記体の練習とかでほとんど成績は百点満点を取っていた。しかしだんだん難しくなるにしたがって一切ついていけなくなってしまいうのもまた現実でもある。いまだに満点を平気の平左で取っている立村の化け物ぶりには脱帽するしかない。

「ノーマークの生徒が評議委員に選出される場合は、何かのきっかけがあったのではないかとたいていは推理するもんだ。そこで出てくるのが国枝の事件となるわけだ」

国枝は口を尖らせている。すべてが自分の目的からひっぺがえされているのだから当然だ。「夕の字のつくなんとやらを口に含んで悶絶したという問題を立村が懸命に解決『しようとした』。ここなんだが、俺は国枝にはっきりと、立村の判断は間違っていると断言した。あいつのやさしい気持ちが間違っているわけではない、その行動を選んだことが間違っている、ということなんだ。なぜあの時大人に助けを求めて適切な処置をしなかったのか、同じことが今起きたとしても俺は立村にそう問いたすだろうな。ただ、この時に男子たちの多くは立村がクラスの評議委員として選ばれても不思議ではない、そう判断した可能性がある。わかるか？」

——わかるようで、わからねえよ。

頭がぐるぐるする。結局立村を全否定して、どうしたいのだろうか。そこが分からない。「羽飛が立村を推薦した理由は単に気が合っただけだろう。細かいことはあえて無視するからな。ただその時、目立っていた羽飛が推薦したということからなら納得だし、しかも国枝に対して一生懸命解決しようとしていたあいつならまあいいか、といった空気がなかったらどうか、と思うんだ」

あまりにも昔のことで思い出せやしない。

貴史が立村を評議委員に選んだのは単純に、美里とのコンビを見てみたかっただけだ。厳密に言うと、立村を相手に添わせた際の美里のあわてぶりを観察したかったという悪趣味な部分も否定できない。

菱本先生の鬼気迫る眼差しに、文句あっても言い返せないムードが漂い出している。

「もし、国枝がああの段階で真実を白状して説教されていれば、少なくともその間違いは防げたはずだ。それ以前に肺がニコチンだらけになるようなもん吸うなよとか思うところもあるがな、今は足を洗っているということを信用するとして。さらに早い段階で立村の行動が具体的にどのようなものだったかを誰かが先生たちに教えてくれていれば、俺も立村にその行動は間違っていると指導ができただろう。もちろん思いやりは立村のよい部分でもあるけれど、それは別の形で表すべきだと話しただろう。それをするきっかけが得られなかったのがそもそもの問題なんだ」

そこまで話したところで、貴史は手を挙げた。

「羽飛、悪いが話終わるまで待っててくれないか。お前にもとことんしゃべる時間やる」

「ひとつだけ聞きたいんですけど、先生は結局立村が評議にふさわしい人間じゃないと言い切りただけなのですか」

妙なていねい語を使って質問だけし、座った。ふだんなら誰か笑ってくれるはずなのだが、た

め息が漏れただけで誰も反応しようとしな。しくじった。

「厳密に言うと違う」

菱本先生は首を振った。

「立村のやり方はトップに立つ人間がやるべきことではない。それだけは伝えたかったんだ。陰でこそこそ立ち回って相手の罪を隠すよりも表に出してきっちり裁きをつけてから、ゆっくりと相手を受け入れる。本来はこうしてほしかったんだ。もし立村がここで自分の出番を探すとすれば、間違っていたことはその通りと受け止めた上でその相手を丸ごと受け止めようと努力する。時間をじっくりかけていく、こちらの方が立村にとっては得意な部分だろうし、きっと誰もが満足いく結果になったと思う」

誰も何も言わない。言えない。賛成しているのかいないのかすら全く見えない。

「さらにこの問題は、清坂と杉浦が語った、一年冬の問題にもつながっている。最終的には清坂と杉浦の大喧嘩だろうが、そのきっかけとなった事件はやはり立村の行動とつながっている。立村が自分のいじめられていたという過去を隠そうとしてさまざまな手を尽くしていたことを、もう少し早く俺が気づいていたら、もっと別の対応ができたはずだった。その前にも立村の態度については納得いかないところが正直あったし、俺なりに厳しい指導はしてきたつもりなんだ。だが、それは伝わらなかった。もしも立村の行動が大人に伝わっていたら、過去を隠して逃げ回るよりももっとよい方法があるのではと助言することができたのでは、と思えてならないんだ。もちろんかばおうとした清坂、事実を明らかにしようとした杉浦、それぞれに言い分はあるだろう。だが、お前たちが本当にすべきことだったのは、まず清坂が立村の間違った行動を俺たち教師に相談するか、もしくは大人を挟む形での話し合いを持つことだった。杉浦であれば、立村が間違っているということを理由を含めてはっきり伝え、拒否された段階で先生たちに相談すべきだったんだ。杉浦も誤解されてしまったことについてはかわいそうなところもある。だが、結果として立村は女子のしつこい追っかけ魔として名誉を傷つけられる羽目になった。自業自得といえそれまでだが、男子にとって屈辱的な扱いを受けるほどのことではないと、俺は思う。杉浦もこの点については反省が必要だよ」

やっとここで、杉浦を厳しく刺す言葉が出てきた。少しだけ胸のつかえが取れた。

——要するに、先生にもっとちくってほしかったっていう、わびしい結論に持って行きたいんだろうか。無理だぞ無理、男子女子関係なく、ちくるなんて文化、受け入れられるわけねえよ。先生も、外にされちまって寂しいのはわかるけどな、無理だって。ま、今は菱本先生の本音白状しまくりタイムと割り切れればいいのか。

美里の様子を再度伺う。全く持って、能面だ。

「そこで次、立村のプライドがぼろぼろになった状態で二年を迎えたわけだが、ここでどうすればあいつを救えたと思うか考えてみよう。南雲が言う通り、全くもってのガセネタでの情報が流れていたわけなので救いたいと思う気持ちもわかる。そのやり方は絶対に間違っているが、親友を助けたいという純粋な思いだけは汲み取りたい。ここで本来南雲がすべきことがなんだったかという、傷ついている立村の事情を確認するなりして、大人が間に入った状態のもと、事実

関係を証明するチャンスを与えることだった。これも同じ話になるけれども、杉浦を無視するような相談をするのではなく、まずそのことが事実だったのか、それをきっちりと検証すべきだった。規律委員としてはその方が自然だろう？ 今までの話の流れからするとそのことは比較的簡単だったんじゃないだろうか。杉浦にしても、清坂にしても、本音で事実を語ってくれればもっと立村の苦しみが少なく澄んだだろうしこれからまだ続く展開もある程度は押さえられたんじゃないだろうかと思えてならないんだ。」

——しつこいようだけど無理だよ先生。

何度目のつつこみか。大人には子どもたちの持つ鉄則「子どもの世界に大人を入れない」を知らないのだろうか。菱本先生のこと自体は嫌いじゃないだけに、あまりにも残念だ。

「それともうひとつ。これは古川の意見にすべて同意なんだが、どうしてこのままエレベーター式に立村が評議委員に選出されるのを黙って見上げていたのかということなんだ。これはしかたない部分もある。青大附中の委員会システムが独特すぎるとか、立村が評議委員長候補に挙げられていたとか、さまざまな理由もある。ただ、しつこいようだが評議委員を変えてはいけないという決まりはない。つまり、立村を別の委員に推薦するか、もしくは落選させるといった選択肢もあったはずなんだ。ひどい噂に包まれた状態の立村をなぜ選んだのか、と言えば答えは古川の言う『羽飛が推薦し続けたから』と、『別の委員選ぶのかったるいから』あたりだろう。ただ玉城が言う通り女子たちとの間で立村は評判が悪すぎた。本来であれば女子たちのリコール要求も可能だったはずだ。そうしないでひたすら立村を評議委員として役立たずと責め続けるのはある意味残酷だ。本人は自分の持つ器の中で精一杯の努力をしている。これは俺も十分理解している。ただ、その器が本来与えられるべき場所にふさわしくなかったとしたら、それは大きすぎる服に無理やり自分の身体を合わせてだぼだぼの状態歩いているのと同じで、そうとうみっともないし、着ている本人も惨めだ。着ているうちにお前たちの制服と同様身体に合ってくる可能性もある。だが、俺の観る限り最後まで立村の評議委員という制服は、袖丈が足りなかった」

頷こうともしない、文句も言わない。水を張ったような静けさとはこのことか。

「もし時間を巻き戻せるのなら、俺はまず、二年の段階で立村を評議から下ろす。残酷かもしれないが、直接呼び出した上で本来向いているのがどのような委員なのかをじっくり話し合う。その上で、立村が一番輝ける場所を探すだろう。場合によっては、俺は特別な役をクラス内で立村のために作ってもいいと思っていた。例えば各クラスの委員たちをつなぐような仕事ができれば、というところにもなるがな」

「先生質問です。なんですかそれ、どういう委員になるんですかそれ」

南雲が能天気な声で尋ねる。

「委員というよりも、委員たちの愚痴やら悩みやらを受け入れるための、アドバイザー的な役割だろうな。実際思い浮かばないんだが、例えば評議委員できついことを言わなくてはならないと覚悟した時、たとえば国枝には悪いがあの事件な。評議委員としては本来、きっちりと先生たちに白状するよう薦めるのが義務だ。だがそれは評議にとって荷が重い。やらなくてはならないがしんどい、これはわかる。その時に辛い思いを立村のような性格の奴が受け止めて、力になってくれると言ってくれたらやはりうれしいだろ？ 相手にきつい言葉を浴びせた後で、それは違う

とそっとフォローに回ってくれるような縁の下の力持ち的存在だな。本来は目立たない。クラスにいわゆる役職も見当たらない。ただ、社会に出ればわかるがこういう仕事をする人が必ず必要なんだ。もしその担当になったなら、立村はこれ以上精神的に追い詰められることもなかっただろうし、それ以上に委員たちからは感謝されただろう。できることを精一杯している立村をこれ以上罵倒する奴もいないだろう。何よりも立村本人に本当の意味での自信を与えられたんじゃないかと、俺は思えてならないんだ。ここから先の展開は俺も繰り返さないが、結局立村は逃げることすら許されずに追い詰められていったんじゃないか。玉城が言う通り女子たちから総すかんを食うのも当然だ。自分にとって苦手すぎることを背伸びして行っているんだから手間がかかるのも当たり前のこと」

「菱本先生」

貴史は手を挙げず立ち上がった。

「それじゃ、やっぱり俺が一番の戦犯ですか」

菱本先生は無言で貴史を見つめた。頷きも首を振りもしなかった。

「俺が、立村をずっと評議に推薦し続けていたからですか」

何も言わない。やはり黙り続けている。息が詰まりそうだ。美里が貴史に振り返り、首を振って何かを合図している。気づかない振りをした。

「俺が、あいつの性格の悪さを見抜いてたくせに先生にちくらなかつたのがまずかつたってことですか。評議委員長から落とされたのもあいつが無能だからってことですか」

「違う羽飛、わかってるはずだ、お前がすべきだったことは」

声が震えた。足を踏ん張った。

「俺が評議委員に立候補しなかつたからってことですか！」

「そうだ。それだよ羽飛」

菱本先生は長すぎる演説のまとめに入った。貴史を正面から見下ろしたままだった。

「本当は羽飛、お前から立村に引導を渡してやってほしかったんだ。三年に挙がって評議委員長から引き摺り下ろすといった残酷な目にあわせる前に、立村をいったん自由にしてやってほしかったんだよ。その上で、俺や清坂やその他立村のことを大切に思っている仲間たちとで、あいつにふさわしい場所がどこかを探る手伝いをしてやってほしかったんだ。立村は評議委員という役割に縛られてしまい、誰よりも人の弱さや辛さを感じ取ろうとする長所を生かせる場所を見つけられずにきたわけなんだ。その結果、自分には価値がない役立たずと思い込んで、今に至る。そういうわけなんだ」

貴史は立ち上がったまま、ただただ菱本先生の口元だけ見つめていた。

——ちょっと待てよ、先生、おい。

何か言いたいのに言葉が即座に出て来ない。

さっきまで何を考えていたのかすら覚えていない。

手を挙げたのはひとえに本能だった。ぐいと椅子の下から手が出てびっくり箱状態で飛び上がったようなもの。言葉も口からこぼれる瞬間まで考えてもいないことばかりだった。

——俺が、評議をやらなかったのが、すべての原因かよって、なんだよそれ。

周囲の女子たちがささやき声で「そうだよ、そうだよ」つぶやくのすら、貴史の耳には「言葉」として届かない。今までいやというほど言われていたことだとわかっていても、認識がうまくできない。

——俺が、立村を追い詰めたのか。んなばかな。

菱本先生はしばらく貴史の様子を伺っている様子だったが、すぐに話を続けた。クラス連中の顔は貴史の見える範囲においてみなまじめすぎるものだった。

「ショックなのは分かっている。このあたりの舵取りは本来なら担任として、教師として、いや大人として俺がすべて行うべきことだったんだ。羽飛が悪いわけじゃない。それどころか俺の気づかないところで誰もが自分のベストを尽くしてきていたことは今この場所で証明されている。誰もが一生懸命だったんだ。だからみな、うまく行っていると思いついてしまったんだ。誰も、責める権利なんてないし責められる義務もない」

俯き、じり、じりとおつぶやく。また顔を上げる。

「さらに俺の読み違いは改めてここで証明されたことになるんだ。いいか、俺は確かに立村にとって評議委員という立場は荷が重過ぎると思っていた。それは今も考えを変える気などない。ただ、立村が自分の限界を超えようとしてあがいたことにより、俺が予想していた以上の結果を出していた、これも事実なんだ」

不満そうなおつぶやき。これはさすがに貴史の耳にも届いた。女子たちからだ。

「女房役だった清坂が話した通り、立村は自分の立場と現状の評議委員会を比較しながら、なんとかして立村自身のように追い詰められた生徒たちが呼吸しやすい場所を作ることはできないかを模索していたようだ。本人は意識していないかもしれないが、遠くから見ている限り俺にはそう感じられるんだ。その、なんだ、「大政奉還」か。典型的だろう。読み解けばそれは、ひとつの組織ではがんじがらめになるのを、他の組織と協力し合うことにより誰もが幸せになれる場所を作ろうとしていたからだろう。評議委員会をはじめとする現在の組織は、正直、いびつに見える。一部の委員特権を持った者だけではなく、一般生徒にももっとメリットのある方法を探し当てて行動した立村の判断は、十分意味があると思う。もっとも、清坂はこの件が立村の思った方向に進んでいないように見えたようだが、第三者からすると少しずつベストな形に動いてきていると思う。今の委員長がA組の天羽だよな？ 天羽および生徒会に全権を任せただけによって

、立村が考えている以上の成果を挙げていることは理解したほうが俺はいいと思う」

半分以上関係者でないと分からない内容を熱く語る菱本先生。申し訳ないが貴史には半分以上意味不明だ。美里からあとで聞きださねばならない。

「その他、立村が全力で取り組んできた評議委員長としての功績は、決して否定されるものではない。また須崎や国枝、南雲や清坂が語ってきた立村のクラス内における努力も、受け入れられるものではなかったにせよ、本人のためには決して無駄ではなかった。あくまでも、『本人のため』だがな」

「先生、なんですかそれ、『本人のため』以外になんかあるっすか」

またねじ一本抜けたような南雲の声が飛ぶ。真後ろを見やりにらみつけてやる。そ知らぬふりしてやがる。何をしたいのかこいつの考えが、貴史には最後までわかりそうになかった。

「南雲、鋭いつっこみだ。つまり今まで立村が努力してきたことは、立村本人のためにはもちろんプラスになる。高校に進学してからもきっと支えになるとは思う。だが、今まで二時間語り続けてきたことをまとめると、D組のためには決してそうではなかったことも確かなんだ。覆水盆に返らずとはこのことだが、もしこのことを二年前に見通していたら、俺は委員会という組織について教師間でももう少し議論してクラス外の渉外委員を作るなどの対応をしていただろう。つまり、評議委員は羽飛において、立村はその渉外に置くといった形だ」

「しょうがい？なんすかそれ」

また突っ込む南雲。よっぽど真正面からぶったたいてやろうかと思うが、今の貴史はただ突っ立ったまま菱本先生の顔を見据えるしかない。

「つまりだ、クラスの中をまとめて代表としてもって行くのが評議とするならば、渉外は外に出た委員たちの情報をそれぞれつないでいく仕事だ。その情報をつなぐのはもちろん教師への情報も含まれる。たとえば評議はこの教室の中だが、廊下を歩いているのは渉外だ。中のことに口出しはしないが、隣のクラスに出来上がった紙を運ぶのが渉外といえればいいか」

「要するに営業とか、セールスマンのことですか？」

「そうだ南雲。それに近い。商品自体は完成しているが、それを売り込んだり説明したりするのは営業の仕事だ。ついでに言うならそこから新しいビジネスを作り出すというのもあるが、まあそれは話が全く別になる。さっき俺は清坂の話を一通り聞いて、もしかしたらクラスとは直結しない形で立村を動かしたら、もっと高く評価されたのかもしれないと思ったんだ。そして同じような適正を持つ奴は他のクラスにいくらでもいるはずだ。クラスメイトとはなかなかうまく行かないが、外に出すと水を得た魚のように泳ぎまわるタイプの奴がな。もしかしたらそこで、立村だけではなく同じくクラスでくすぶっているタイプの人間を救えたんじゃないだろうか、そう思わずにいられないんだ」

菱本先生は腕時計を覗き込んだ。時刻を確認している。

「もうそろそろ制限時間もいっぱいだ。俺が言いたいのは過去のことではないんだよ。あと一ヶ月とかお前ら口癖のように言うが、まだ一ヶ月あるんだぞ。まだあと一ヶ月も、あるんだぞ。そう考えれば何かが絶対にできるはずなんだ。こうやって噴出してきた違和感をこのままにして、卒業させるわけには行かない。もちろん俺はこれから立村と改めて向かい合っていくし、ここで

出た残酷だが辛い事実を伝えたい。同時にクラス全員がぎりぎりまで納得した形で卒業できるよう最後まで手を尽くしたい。そのためにあえてここでお前らに頼みたい。改めてこの一ヶ月、古川が提案した通り、羽飛でこのクラスを持っていく方向で進めたいんだが、どうだろう、認めてくれないか」

ゆっくり、教壇を降り、貴史に近づいてきた。一步一步、重たく足を運んでいる。

いつものからからとした軽い感じではない。そのくらい伝わる。

「羽飛、受けてくれるな」

目と目の高さをあわせるように腰をかがめ、唇をかみ締めながら菱本先生が語りかけてきた。逃げられなかった。

——どうすりゃいいんだよ。

また女子たち中心で「ほら、OKしちゃいなよ」「早く帰りたいんだから」「もう、早く終わってよ」摺り寄せるような声がする。

——美里、どうしてるんだよ。まったく何とか言えよお前。結局お前が大演説したことがここにつながちまってらんだろが。お前の彼氏だろあいつ、あいつを守るつもりだとか言ってたくせに、結局ここに行き着くってなんか間違ってるだろ、絶対に。

横目で美里の様子を伺う。他の女子たちに混じって黙って貴史の様子を伺っているようだった。能面のままであることには変わらない。ずっと立ち上がるのが見えた。

「美里？」

こずえがびっくりした風につぶやく。すぐに奈良岡も「美里ちゃん？」と、男子たちも「清坂？」それぞれが美里の名を呼んだ。無視して美里は貴史に近づいてきた。これは追い詰められそうだ。貴史の答えを待つ暇がない。

「菱本先生、ワンマン過ぎます。先生の言い分はわかったけど、クラスの総意とんなきゃ、だめでしょ」

美里はまず貴史を一瞥した。変わらぬ顔でもって貴史の前に立ちはだかった。菱本先生の間には挟まる具のような形になる。そのまま菱本先生になだめるよう語りかけた。

「クラスをまとめるのが評議なら、今日ここにいる評議は私だけです。先生の言い分はわかりましたし、従う覚悟は私もあります。けど、クラスのみんなから決を取る必要、ありますよね？最終確認取ります。先生、まず座ってください。えっとそれと」

振り向き、貴史と真正面に向かい合った。黙って左の肘を握った。有無を言わずに貴史を教壇に引きずりあげた。「ひゃーこええ」「清坂怖すぎ」とつぶやくのは男子の主だった連中で、金沢と水口も顔を見合わせて震え上がっているのが見え見えだった。

「これ終わったら今日のロングホームルームは終わりです。帰っていいんで、これだけクラスの決を採らせてください。今の菱本先生の案ですけど、要するに立村くんではあと一ヶ月のクラス運営は無理があるから、貴史、ええとあんた苗字なんだっけ」

貴史は黙って美里の手を振り払った。

「えっと、羽飛、羽飛くんに任せたいとの判断です。私たちは生徒ですから義務として従う必要はあります。けどほんとにいいですか？ 急ぎですけど多数決で行きます。一票でも超えていれば、それで結果出します」

また無理やり貴史の腕を引き寄せ、さっきまで自分が立っていた教卓の真ん中に立たせた。その手を教卓の上に置かせた。

「おい、なんだよその無理くり加減はよ」

「黙りな、覚悟決めな」

貴史にだけ聞こえる蓮っ葉な口調で美里はささやき、もう一度大声でクラスメートに呼びかけた。

「それでは、挙手一発で決めます。では菱本先生の案通り、これから一ヶ月、羽飛くんに評議委員の仕事任せたい人、手を挙げてください」

その声と同時に授業終了の鐘が鳴った。はじかれるかのように、女子全員の手がひらひらと上がるのを貴史は見た。こずえが、奈良岡が、玉城が、その他男子が数人。南雲はその中に入っていなかった。

「これで決定です。鐘も鳴りましたし、明日改めて話し合いを行いたいと思ってます。みんな長い時間ありがとうございました。たぶん明日、立村くんも来るだろうし、その時に全員でもっかい、話し合いする機会作ります。先生、私の言いたかったことは間に合わなかったのですが、その時にもっかいいいですか？」

美里は声を張り上げた。手を打ち鳴らし、号令を教卓からかけた。

「起立、礼、着席」

今まで押さえつけてきたものが瞬時にあふれ出たようだった。菱本先生はただ呆然としているようだった。美里の号令に思わずふかぶか礼をしてしまうくらいだから、相当なものだろう。貴史も教卓に手を付いたまま、口をあわあわさせているだけ。男子連中は生徒も先生もぼかんとするのみ、女子たちが一部は外に駆け出し、また一部は貴史のいる教壇に駆け寄ってくる。一部...男子も恐る恐る寄ってくる。美里はまだ教壇で貴史を見つめたままだ。能面ではなく、少しほっとした風に緩んでいるのは見えた。

「美里、お前なあ、何考えてるんだよ！」

「女子全員、それと男子が三人。多数決、成立してるよね」

怒鳴る貴史に、美里はあっさりとは答え、周囲にかたまった女子連中へまずは声をかけた。

「お疲れ様。これでみんなの望む形になったと思うけど」

少しだけ唇を噛んでいる。そのまま又見渡した。

「こずえ、彰子ちゃん、ありがとう。それと」

玉城を探しているようだった。すぐ後ろに、杉浦加奈子と共にいた。

「玉城さん、これでいい話し合いになったでしょう」

あえて杉浦加奈子の存在は無視したかのようにだった。すぐにこずえが割り込んだ。貴史には触れないがごとく、

「菱本先生も言ってたけど、これで一步、前に進めたと思うよ。美里もよくがんばったね。えらい子えらい子」

教壇に乗り、美里の頭を軽く叩いた。ふだんなら軽くいなしあうのが美里だが、今はそんな気分でもないらしい。首を振った。

「まだ全然終わってないよ。まだこいつとの話し合い終わってないし、文集のことも終わってないし。まだやることいっぱいあるもん。それにね」

奈良岡に呼びかけた。

「文集委員楽しみにしてた彰子ちゃんには本当に申し訳ないけど、こういう事実がある以上、私、どうしても文集に班ノートを利用することは賛成できないの。はっきり言えばよかったね。ごめん」

「ううん、わかったよ。美里ちゃんが全部話をしてくれたからね。それだけで私はうれしいよ」

この修羅場二時間にも関わらず最後まであんなの微笑みは崩れなかった姫・奈良岡彰子は美里を軽く抱くようにした。身動きしない美里に語りかけた。

「加奈子ちゃんとの間の誤解が解けて、本当によかった。加奈子ちゃんもね」

その言葉を聞くと、美里は首を振った。今度はおずおずと様子を伺う杉浦加奈子に近づいた。表情は硬かった。

「加奈子ちゃん」

一声かけ、しばらく黙った。女子たちがみな、遠くからも観察しているのが伺える。

「あのことは、私が悪かったと思ってる。けど今はまだ、私の心狭いから、すぐに元通り仲良くできるとは思えないの。時間がほしい。ごめんね」

「清坂さん」

小声で返事をしたのは杉浦だった。小さく頷いていた。玉城がいまいましげに美里を見つめている。

「まだ、七年あるはずだから、待ってる、待ちます」

「ごめんね」

もう一度謝った後、美里は貴史にようやく向き直った、

「ということでなんだけど、貴史、あんたとはこれから詳しい話詰めるからね。今日これから時間ある？」

いつのまにか菱本先生が顔を出していた。貴史に何か言いたげに口を開いている。声は出ていない。

「あのな、羽飛、いきなりで驚いたかもしれないがな」

「悪いけど先生、今私が話しているんだから割り込まないでください！」

きつと美里は言い返した。もう一度片腕を取り、もう一方の手を教卓に置いた。今、そこにいる全員が見守っていた。

——やべえ、なんだよ美里。人間の顔に戻ったら、今度は俺を攻め立てるのかよおい。

「美里、この展開俺思いつきついていけてねえんだけどな」

貴史も片手で菱本先生に「黙ってる」の合図を示した。ここは美里との対話にならざるを得

ない。

「ひととおり話は聞いた、お前の言いたいことや先生や他の奴の言い分もよっく分かった。けど、肝心の俺の意見、全然聞いてねえだろ。それに張本人の」

「わかってる。あんたの言いたいことはよっくわかってるよ。納得いかないよね。そりゃそうよ」

あっさりとして美里は認めた。扉を誰かが開き、こちらを覗いている。まだ先生もいる教室で、あきらめて通り過ぎたようだった。

「でも、クラスの意見半数以上はあんたを評議で動かしたいと思ってる。これは事実なんだから、それは認めなさいよ。数字、なんだよ」

ひと呼吸置き、貴史は首を振った。

「よっくわからねえ。ここで俺が評議の代わりになっちまったとして、現段階での立村はどのようになるんだよ。学校休んでる間に気が付けば俺に席分捕られているなんて夢にすら見てないぞ」

「わかってる。あんたの言いたいことはよくわかってるって。だからこずえも言ってたじゃないの。首を挿げ替えるんじゃないくて、クラスの中だけはきっちりあんたに切り盛りしてもらい、立村くんは渉外の役割に徹してもらおうのが一番だって。それだけよ。それとねもうひとつ、大切なことがあるんだけど」

美里は教室の窓ガラスを眺めた。いつのまにか吹雪いている。風が窓を揺らしている。菱本先生が「これは積もるな」ぼそっとつぶやいた。

「あんたがどういう立場になったとしても、まず立村くんとさしで緊急、話し合う必要があるよ。あの人がどんなに逃げたって、とっ捕まえて昨日のことは謝るとか、それが終わったあとでこれからのこととか、いろいろあるよ。このままだと今日ここにいて話し合いをした人たちは納得しているかもしれないけど、立村くんはひとり取り残されたままなの。立村くんが露骨に嫌がっても、私たちはとことん話し合っ、ずっと友だちでいたいって伝える必要あるの。その時にあんた、ただのけんかしてぶん殴った友達ってだけじゃない、クラスの代表としてみんなの意見を背負ってきたんだってことを伝えるのとは、立村くんも耳の傾け方が違うと思う。私、絶対そう思うんだ」

いつのまにかギャラリーはクラスメートほぼ全員揃っていた。早く帰りたがっている奴がかなりの数いたはずなのにどういう風の吹き回しなのだろう。右手の握りこぶしを軽く振り、昨日張り倒した時の感覚を蘇らせた。確かにあれは本当だった。

「お前言えるか？ 昨日の今日だぞ」

「だから、言わなくちゃいけないの。今の話でわかったでしょ。立村くんがどれだけ努力してきたか、でもクラスでは女子から人望なくてぜんぜん伝わらなかつたんだってこと。友だちとしてはあと七年間、高校と、うまく行けば大学までつながっていけるよ。でもクラスとしてはあと一ヶ月なんだから。先生がまだ一ヶ月って言ったけど、『まだ』にするためには一番ベストな形にまとめていく必要があるの。立村くんじゃ、今のD組の全員を納得させることはできない。ほんっと、私、そう思ってる。立村くんなら『もう一ヶ月』になっちゃうの」

「じゃあ俺なら、『まだ』になるってのか」

「なるよ、絶対に」

美里は即答した。

「友だちとしてではなくって、ただの評議同士相手だったら、もっと早い段階で私はそう判断してたよ。悔しいけど、玉城さんや菱本先生の言い分に納得できちゃうところあるもの。あんたと同じく私もA級戦犯だから。クラスよりも友だちとしての付き合いを優先してきたところは、確かにあるもん。それは謝らなくちゃいけないよね。ごめんね」

貴史に対して謝ったわけではなさそうだった。目を伏せていた。

「たぶんあんたと評議委員やってたら、今まで起こったことの半分は何もなかったかもね。小学校の時から、あんたと組んでしくじったことってほんのちょびっとだよ。そう考えれば立村くんとしてきたことの半分は怒らなかった可能性、確率的に高いよ。それなら今こそ、その確率利用しようよ！」

「確率？ サイコロじゃあるめえし」

「ばか！ 冗談で言ってるんじゃないんだからちゃんと聞きなさいよ！」

同時に机を思いっきりたたきつけた。痛みを顔に見せてはいないが声のとがってきた。

「立村くんのことだけじゃないんだから！ これから私たちがやんなくちゃなんないのは卒業文集のことだってあるし、卒業式の時の代表としての一発芸とか、その他いっぱいあるんだよ。たぶん、今の状態だったら立村くに責任持ってやらせるのは絶対無理。だったらあんたがそれを仕切れればいいよ。みんながあんた だったら受け入れるって言ってるんだから。その代わりクラスに関係ない、たとえば生徒会と評議委員会との交渉とかそういうのは立村くに任せればいい。居心地悪いクラスのこと面倒見なくてもいいんだったらもっと立村くんだって楽になるよ。本当はそれじゃだめだってことわかってるけど、そこが『あと一ヶ月』なの。そういう環境にするために、そう、『まだ一ヶ月』にするためには、貴史、あんたがクラスをまとめる必要があるの！ あんたしかできないの！」

——まじ、美里、怖い。

貴史よりはるかに背の低い美里が、一步貴史に向かって踏み出した時の、わけのわからぬ圧迫感で息が詰まりそうだ。上から見下ろされているような、そんなわけないのに押しつぶされそうなほどの、美里の身体にまとわりつく空気。美里は吹雪を背負って貴史に迫ってくる。窓ガラスをカーテン代わりに白く埋めている。誰かが蛍光灯をつけた。

——お前、本気で言ってるのかよ？ 立村を下ろして、本気で俺を？

「そうだよ、あんたしかいない、あんたならできる！」

心の声が聞こえたわけでもないのに、美里の口からは答えがもれる。

「あんたなら、クラスのみなを納得させられて最高の三年D組に仕立てられる！ 立村くんともちゃんと仲直りできるし、あと七年間絶対楽しく友だちでいられるよ！ 嫌われ者でなくちゃんとクラスメートとして、立村くんと卒業式に出られる！ 信じてないなんていわないよね？ いい？ 生まれた時から知ってる私が言ってるんだよ！ 信じなさいよ！」

いつのまにかギャラリーは教室外にも増えていた。美里の絶叫じみた言葉は全校生徒に響き渡

っているかもしれない。美里も気づいていないわけではないのに、貴史だけを見据えて訴え続けている。受け取るしかないのか、それとも。

「それとも、私が言うんだったら信じられない？ 鈴蘭優でなくちゃだめ？」

——どうした美里、お前。

火が点いた。何かが動いた。貴史の中の「山」が確かに動いた。

——お前の言うこと、信じられねえわけ、ねえだろ。

——ちびの頃から、当たり前だろ。

「美里、もう黙れ。わめかねくてもよくわかったから」

机を叩いた美里の手に目を向けた。赤かった。もう片方の手がまだ貴史の腕にしがみついていたので、それをはずした。

「俺は立村の友だちだし、評議を奪うとかそういうことはしたくねえよ」

さっぱり、あっさり、伝えるつもりだった。

「けど、あいつが戻ってこれない3Dにもしたくない。みんな最高気分で卒業したいのは当然だわな」

菱本先生に一步近づいた。見上げた。菱本先生の背中也吹雪が背景に見えた。

「明日、あいつがきたらちゃんと話し合います。俺なりに昨日のことについて謝るつもりでもともといたし。けどこのままじゃまずいってことは俺もよっくわかってるから、俺と美里とできっちり話はする。先生をはさんだらあいつがいじけるのもいつものパターンだし、できれば最初だけでも俺たち三人で話、したいんだけどそこまでは、いいですか」

慣れない敬語で舌をかみそうになる。頷いてくれている。美里も貴史から目を離さないでいる。

「三学期に入ってから俺も仕切る機会増えてたし、その延長って形でよければたぶんあいつも納得してくれると思う。もちろん外では立村が評議であるというところは譲らせないけど。でも、今日二時間話し合ったことまとめて、俺の意見も含めて、まずは全部明日ぶつける。もしそれでうまくいかないようなら、もっかいロングホームルームの時間もらうか放課後一時間もらうかなんかするかもしれねえけど」

「羽飛、そうか」

「けど、これだけは譲れないんだ」

ギャラリー全員に呼びかけた。

「俺は、立村と友だちでずっと続けたいから、これからのことを引き受けたってこと。これは絶対に変わらねえ。その延長でいいクラスにしてみんな笑顔でいられるようにしたい、そのためにこれから動く。それでもいいんだったら」

「いいに決まってるじゃん！」

明るい声が飛んだ。今まで黙っていたこずえだった。一緒に奈良岡も満面の笑みで頷いている。

「あんたひとりでがんばるわけじゃないんだよ。美里だっているじゃん。それに私だってさ、ね」

投げキッス、一気に場がいつもの下ネタモードいや代わり。あわてて菱本先生が呼びかける。

「おっと、ここまでだ。古川、だいぶ暗いがまだ午後だぞ。下ネタはお断りだぞ」

「あーら残念！」

午後、初めての、腹の底からの大爆笑が沸き起こった。遠く廊下からもその笑いは響いていた。貴史はそっと美里に振り返った。頬を確認した。やはり、片手で目をこすっていた。思ったとおりだった。これがいつもの美里だった。

——美里と組んでしくじったことなんか、ほとんどねえだろ。だったら大丈夫だ。俺も、美里も、それと立村も、絶対にうまく行く。

突如、飛び込んできたのは教頭先生だった。

「菱本先生、少々よろしいですか」

あまり騒ぎ過ぎてご機嫌損ねたのだろうか。青大附中は校長先生、教頭先生ともに悪役ではない。ただの先生の延長上にあるだけ。こんな時に青筋立てて飛び込んでくるような立場ではない。多少の騒ぎは大目に見てくれるはずだった。

「どうしたんだろ」

「さあ？」

まだ帰ろうとしないクラスメートをよそに、菱本先生は廊下に出た。耳元に何かをささやいている教頭先生が、生徒たちをぐるりと見渡し、やりきれなさそうに俯き、そのまま廊下に駆け出していく。緊急の用らしかった。

「先生、どうしたの」

水口が脳天気尋ねる。みな、今度は菱本先生の周りに集まった。

「まさか今日のことでお説教？」

「謝るよ、それなら」

「今から校長先生のところに私たち付き合うよ」

明らかにみな勘違いした問いかけをしている。貴史も美里と顔を見合わせた。

「先生に何か事件が起きたのかな。たとえば家族とか」

「まさか」

やがて菱本先生は教室に戻り、扉を閉めた。放課後なのでもちろん突っ立ったままみな、先生の言葉を待っていた。

「緊急の職員会議なんだ。感動をもっと俺も味わいたいんだが、続きは明日にしような。羽飛、清坂」

教壇に上がり、菱本先生はまず美里に大きく頷いた。続いて貴史に向き直り、

「引き受けてくれてありがとう。俺も清坂と同意見だ。お前でしかこの難局を乗り切ることができない。立村のことは、俺も一緒に考えよう。とにかく、明日ゆっくり話し合おうな。ちゃんと

時間は用意する」

両手を肩に置き、もう一度、軽く揺らした。

「合言葉は、『あと二ヶ月』だからな」

それだけ言い残し、菱本先生は脱兎のごとく教室から駆け出していった。

長い長いロングホームルームが終わり、貴史は美里にひきずられるように生徒玄関へ向かった。さすがに誰も止めるものはいなかった。

「とりあえず、これからどっかで細かいこと話そうね。学食行こっか」

能面をやっと取り外したのか、美里がかすかに笑みを浮かべながらささやいた。貴史も異存はない。というよりも、そうしないとまずい。

すばやく靴を履いて外に出る。下校ラッシュが一段落したのか玄関にはほとんど人がいない。部活動の生徒も見当たらない。三年ならともかく下級生たちがうろついていないのが解せない。

「先生たちも大変だよな。菱本先生、臨時の職員会議とかいろいろあるみたいだし、赤ちゃんの面倒見ている暇ないよね」

「そうはいかねえだろ。帰ったら赤ん坊泣いてるんだぞ。哺乳瓶くらいはくわえさせるだろ」

風が強い。空も真っ白、横殴りの雪が吹いている。

「うわあ、これ大変だよ。帰り、バスものすごく混みそう」

「そうだなあ。少し止んでからにすっか」

たとえ路が見えなくなるほどの猛吹雪であっても、二時間ぶっ続けのロングホームルーム総括をしないまま家路に着くというのは貴史としても納得がいかない。ずっと教壇でふたり並びあっていたにもかかわらず、美里とはほとんど会話をしていなかった。最後の最後で怒涛の説得をされてしまったけれども、実際膝を突き合わせて話し合ったとは言えない。一対一でないと、分からないことも多い。

「あのな、美里」

「なによ」

毛糸の帽子……貴史の母が清坂三姉妹と姉との四人にプレゼントした白いもの……を耳にかぶせるようにかぶり直し、美里は答えた。

「とりあえずお前が言う通りにするけどよ、まじでどうするつもりだよ」

「それを今から考えるんじゃない」

寒さで口が動かないのか、美里は言葉が少なかった。珍しい。何も考えていないだけかもしれない。まずは何かあったかいものでも飲もう。食おう。それからだ。

四時十五分前。大学生たちの数も高校生も、もちろん中学生も少ない。

珍しく奥の広々としたテーブルを占拠できた。たいていのテーブルはノートとかいろいろなもので押さえられていて、座るのに気が引ける雰囲気なのだが。

「ここなら誰もいないしね」

貴史は缶コーヒーの熱いのを、美里は紅茶を紙コップで、それぞれ用意した。コートを脱いで脇に置き、まずは一口啜った。

「あーあ、喉渴いたよね」

「全くだなこりゃ」

帽子もすっかり雪でぬれている。手袋も重ねて置く。すっかり水浸しだが気にしない。窓辺から見える木々は白く覆われ、全く止む気配が感じられなかった。

「貴史、あんた怒ってるんじゃない？」

落ち着いたところで美里が問いかけた。いつも通りのさっぱりした口調だった。

「私がいきなりわけわかんないことしたとか言って」

「当たり前だろが。ったく、予告しろよな」

「できるわけないじゃん。でもまあいっか。まずは第一段階突破だよな」

「俺もまずお前に聞きたいことあるんだがな。先に聞くぞ」

美里はすぐに頷いた。

「いいよ、あんたに話、ほとんど振ってなかったもんね。それは悪かったわ」

「お前さ、なんで杉浦に謝った？」

ぴくん、と美里が身体をこわばらせる。紙コップを置いた。首をかしげた。

「なんでそんなこと聞くのよ」

「俺が一番謎だと思ったところだもんなあ。どう考えたってあそこはお前が折れるところじゃあねえだろ。杉浦がガセネタ流していたってことあれだけきっちり証明できてたんだから、容赦なく叩きのめすのが美里のやり方だろ」

正直、立村の今後やクラスの女子連中のまとめ方とかそれはなんとかなるという気がなんとなくしている。根拠がないにしてもそれなりの自信はある。単純に男としての気合でしかないが、あることはある。ただ美里がなぜ、完全勝利を目前にしていた杉浦加奈子との決着をなあなあにしまったのかだけが、どうしてもつかめなかった。

「しょうがないことよ。私なりに判断したことだし」

「答えになってねえぞ。よっく考えてみる。杉浦が一方的に立村に関する噂を流しまくってC組の女子連中通じて菱本先生にガセネタ伝えて、そこから立村怒鳴られていじけてってめちゃくちゃな展開なんだからな。立村が下手打ったとしても、結局は犯人が杉浦だってもってってどこいけなかったんだ？」

貴史も今更とは思っている。菱本先生が意図的に杉浦への反感を抑えようとしていたのはうすうす感じていた。クラスが再度分裂するのを避けるためだったのだろう。だがどうしても美里がなぜ、あの場で謝ったのかだけがつかめないままだった。

「しょうがないって言ってるでしょ。菱本先生は立村くんのことを中心に考えた結果、ああいう流れにしようって決めたんだから、乗っかるしかないもん」

「乗っかるってなんだよ」

「つまりね」

美里は指を立てて説明し出した。雪が降り続く中、一部の席で勉強している大学生数人を除いて、ほとんど誰かの来る気配はない。

「目的はひとつよ。全員仲良く卒業したいってことだけ。本当はそのまま知らん顔して通せればよかったけど、玉城さんがあんなこと言い出して、にっちもさっちもいなくなってしまった状

態じゃない？ あんたもわざわざ目立つところであんなことしちゃって責任取らねばならない立場じゃない？ 菱本先生としては どちらも両方片付けたかったのよ」

「それがこれか？ 俺が立村の代わりになれってか？ まあ決まっちゃったことだしぐだぐだ言いたくねえけどな」

「あんたにやってもらいたいのは、とにかくクラスの玉城さんたち代表のめんどくさい人たちを黙らせてほしいってだけよ。それとクラス文集のこと。結局時間 オーバーでそこまで進まなかったけど、あれで彰子ちゃんも納得したと思うし、班ノートを使うなんてことはしないって方向に持ってけると思うんだ。下手に別の奴が立ち上がったら、菱本先生のことだからまた言いくるめてしまうかもしれないじゃない？ あんたならその点納得でしょ」

「お前もたまには頭働くな。そうだな、そうだよ」

美里は不満そうだが、実際その通りなのだからしょうがない。

「クラスっていうか、菱本先生のなだめ役って言ったほうがいいと思う」

「あ、そっか」

鋭いところをついてくるものだ。美里は完全に復活している。これなら楽に話を進められる。ロングホームルーム中の美里は明らかに自分の感情を凍りつかせたまま仕切っていた。

「菱本先生なりに立村くんをなんとかしたいってのは伝わってきたし、クラスのみみんなも言いたいこと言い切ったみたいで少しは落ち着くんじゃない？ 本音 言っちゃえばもう少しなんだかなってところもあるけどそこはがまんするよ。それよか、明日以降のことなんだけど、立村くんが学校に来た時どうするかってこと、考えなくちゃ」

「んだんだ、そうそう、それだな」

もっともだ。美里冴えすぎている。

「立村くんはこんな話し合いで盛り上がっているなんてこと全然知らないままだよ。あんたのこと逆恨みしてるかもしれないし、あのお母さんに怒鳴られている かもしれないし。でもここは私たちが謝ったり話し合ったりすればなんとかなるところだよ。できればね、国枝くんとか須崎くんが話してくれた、立村くんを評価する男子たちの声を直接伝える機会がほしいなって思うんだ」

「それはあるな」

確かに、一理ある。立村のいじけっぷりが半端でない以上しょうがないところもあるが、クラスの評議として、評議委員長としてそれなりの実績を挙げてきたことは証明された。菱本先生や女子たちが首を傾げていたとしても、今、この段階でやり遂げたことは確かなのだから、それを伝える必要はやはりあるんじゃないかと思う。

「なんとかならねえかな」

「まずは、立村くんに学校来てもらなわいと。もし明日来なかったら、私、手紙書く」

美里はまっすぐ、口をいったん結び、貴史に告げた。

「立村くんとはなかなか話し合いうまくいかないかもしれないけど、手紙だったら伝わるかもしれないし。あんたの性格上そういうまどろっこしいのやだってのはわかるけど、私はそっちでやってみようと思うんだ」

「めんどくせえよ、手紙なんてそんなかったるいの。はっきり言っちゃまうほうがいいだろが」
でもまあ、美里の話も間違っているわけではない。女子らしい心遣いなんだろう。

貴史は立ち上がり、腹持ちよさそうなものを探すことにした。とりあえずはカフェテリアの
コロッケ二枚くらいは食いたい。

「今食べたら、夕ご飯たべられなくなっちゃうよ」

「帰るまでに十分空くにきまってるだろが」

美里の制止を振り捨てて、貴史はカフェテリアへトレイを持って向かった。青瀬大学学生食堂
では、カフェテリアで組み合わせて自分好みの定食をこしらえることができるのだ。今日はまず
揚げたてのコロッケ三枚を小皿に載せて、百五十円支払った。

水を汲んでいる時だった。

「ちょー大変、今、中学で大事件勃発！」

「ん？ どうしたのよ。あんた遅かったね」

カフェテリアの厨房で、入れ替わりに入ってきた男子学生……学生アルバイトらしい……が別の
アルバイトに大声で話している。貴史にも丸聞こえだ。ただ美里のいる席には届かない。い
つものように席が隅っこだったらまた別かもしれないが。

「いやな、中学の先生とこに用事あってちょこっと寄ってきたんだ。したらな、たまたま職員会
議にぶつかっちゃまって話できねえの。しゃあねえから帰ろうとしたら、たまたま保護者かなんか
が駆け込んできたんだよ。どっかのおばさん。血相変えてさ、俺に聞くんだよ。数学科の先生が
いるかどうかまじめな顔してさ」

「数学科？ 誰だろそれ」

「俺の卒業した時にはいなかったんじゃないかねえかな。わからねえし事務室に連れてったら、まあ大
変なの。そこで保護者まだいてさ、土下座してんの。で、その俺が連れてったおばさんがすっげ
え勢いで怒鳴りちらしてんの。お前の娘が人殺ししようとしたんだぞって」

——人殺し？

貴史は耳を澄ませた。ぶっそうだ。昨日同じくの親呼び出しをやらかした貴史だが、さすが
に「人殺し」とののしられはしなかった。

話を聞いているアルバイトの女子学生も、プラスチックのお盆をふきんでふき取りながら声を
潜める。

「うわ、生徒同士のけんかって感じじゃないよね」

「俺もよくわからねえけど、職員玄関で靴ゆっくり履き替えながら様子伺ったんだ。どうも女子
同士の喧嘩で、ひとりがかっとなって傘振り回したらしいんだよ。当たり所が悪かったのかど
うかわからねえけど、職員会議やってるってことは相当の大事じゃねえ？ 俺たちの頃も結構ば
たついてたけど、さすがに殺しはねえよ」

「そうだよねえ、でもさ、中学生同士のけんかってよくあることじゃん！ 女子同士だともしか
して、好きな男子の取り合いだったりして」

「うわあ、それまじかよ。でもありがちだよな。職員会議沙汰になる恋愛なんてたまったものじゃあねえよなあ」

笑い声が聞こえる。水を流しながら話はいつのまにか、知り合いの恋愛沙汰ネタに移り変わっていく。他人事どうだっていい。ということで貴史はコロッケをつまみながら席に戻った。

「貴史あんた、だらしない！ちゃんと座ってから食べなさい！」

「何お前母ちゃんみたいなこと言い出すんだよ。ほら、お前も食うか」

むっつりしていた美里も、揚げたての匂いにほだされたのか、黙って手を伸ばした。

「あったかいね。おいしい」

「ちょうど揚げたところだったんだろ」

ごたごたあった後でも、こうやって腹を満たすとだいぶ気分が落ち着いてくる。飲み物だけだとやはりいらつくものがある。貴史は二枚目のコロッケに食いつきながら、

「そうそう、さっきな、また俺たちみたいな騒ぎやらかした奴いるんだと」

話を持っていった。

「私たちみたいなのって、なにに、それ？」

「男を巡る三角関係みたいだぞ。なんでも、女子同士で取っ組み合いのけんかになり、ひとりが傘振り回して大騒ぎ、結局親呼び出しで土下座状態。なんだよ、まじで昨日の俺とおんなじじゃねえの」

「あんた笑い話にできるって幸せな頭してるね」

あきれた顔で美里はやっとコロッケを半分かじった。

「誰だろうねそれ。うちの学年？」

「さあな。名前は聞いてねえし詳しいことわからんけど」

「もし本当だったらそれ、大事件だよ。ねえ、学校戻って様子見てみようか？」

美里の提案ももつともだ。貴史も興味がないわけではない。普段なら即、乗っかりたいところだ。しかし目を窓辺に向けてみる。雪、全く止もうとする気配なし。下手したら帰りは膝くらいまで雪がくるんじゃないだろうか。バス、走るのかという心配すら出てくる。第一、大学から中学校舎に戻るとなるとまた時間がかかる。できればこのままバスロータリーに向かいたいところだ。

「別に後でいいだろそんなの。どうせ俺たちの知ってる奴じゃねえよ」

「いやそういうんじゃないかって！　そういえば、菱本先生を教頭先生が呼びに来た時、なんか変だったよね？　もしかしてそのことが関係してたのかなあ」

「そういやあ、そうだ。臨時職員会議とか言ってたな」

すっかり自分らのことばかりで頭がお留守になっていたが、話をつなげてみるとたしかに見えてくる。究極の恋愛大騒動がきっかけで大騒ぎになり、学校サイドが割って入ったの仲裁をせねばならないとしたら、それは職員会議もやむをえないだろう。

「はっきりしてるのは、うちのクラスは関係ないってことだよな。ほとんどあの場に全員いたもん」

「部外者は楽だよな」

「当事者は昨日でおしまいにしたいよね」

ため息を思わず同時に吐いた。

学食を出たのはそれからまもなくだった。バスがそろそろ渋滞し出すかもしれないという心配を美里がしだしたからだった。新しい雪がぴんと張ったまま重なっていくところを見ると、学食に足を運んでいる生徒自体がほとんどいないということとみた。

「明日、雪かき大変だね。雪下ろしも。貴史、あんたも手伝うの？」

「ああそうだなあ、俺もやるっきゃあねえか」

早起きして父と一緒に屋根に登らねばならないかもしれない。眠くて寒くてなんないのにたまったもんじゃない。

「じゃあ、明日なんだけど少し早く行かない？ 自転車？ バス？ どれで行く？」

「できればチャリだけどな。道凍ったらまじ怖いしな」

「ね、バスで行かない？ そこで少し話まとめようよ。私も今夜、どうしたらいいかもっと考えるから」

悪くはない、とちらと思ったがすぐ打ち消した。

「いや、やめとけ」

「なんでよ」

美里が鼻をすすりながら尋ねる。

「あのバス、玉城が乗ってるんだ。今朝、顔合わせたんだ」

「え？」

言っているのかどうか迷うところだが、どうせばれることだ、伝えた方が楽だ。

「あんた全然そんなこと言ってなかったじゃない！ どうして教えてくれなかったのよ！ まさか、今日玉城さんが何か言い出すってこと、前もって知ってたなんていわないよね」

「悪い、そんな通り。この点は嘘ついた。悪かった」

いきなり美里は脇に積もった新しい雪を一抱えして貴史に投げつけた。ふわりんとぼらついた。雪球とは違う感覚だ。振り払い、貴史は美里の帽子めがけて軽く張り手を入れた。

「もう、なんなのよ！ あったま来る！ じゃあ何？ 最初から今日の展開全部お見通しだったってこと？」

「それは違う、俺は単純に、玉城が言いたい放題したいて言い出したからまあいいんでねえのと思っただけなんだわな。朝だったし、立村来ると思ってたから、ま、それで片付くんでないかと軽く思ってたんだが、甘かったわな」

「なあにが甘かったよ！ もう！ 私どんなに昨日切り出し方法考えてたかわかってる？ 文集やめさせて、立村くんひねさせないようにするにはどうしたらいいんだらうって真剣に悩んでたんだよ！ もう、みんな信じられない！」

「怒るなよ美里、もし俺が玉城の話を教えてたらもっとぐたぐたになってただろ？ お前も理性失っちゃうし、玉城もエキサイトするしで二時間で終わらなかつたかもしれねえぞ」

「私だって二時間もロングホームルーム仕切るつもりなかったもん！」

本気で殴られてかまわない内容だとは思っていたけれど、想像しているほど美里は激昂しなかった。ふわりとした雪の固まり程度で終わるのならまだよしだ。美里がコートのポケットに手を突っ込みながら、

「いつもだったらぼこぼこにしてやりたいところけど、吹雪に免じて今回に限り、許してあげる」

偉そうなことを言い放った。

「なあにが許してあげる、だあ？」

「結果オーライってこと。とりあえず、クラスのことはいあなたに任せておけるってことだから。あとは、評議委員会の方よ。こっちは私がなんとか片をつける。がんばる」

もう一度美里は、しゃがみこんで雪を掬い取り、顔に擦り付けるようなしぐさをした。貴史に振り返った。

「立村くんのごことは、絶対に守るから。ここから先も共同戦線よろしくね」

結局美里は、何故杉浦加奈子を許したのか、その理由を口にはしなかった。

——ほんとに、お前らしくねえぞ。美里。なんでそんなことしたんだ？ まあどうでもいいけどな。

本当は立村宛に電話をかけようと思っていた。美里にも帰り道そんなことを言ってみた。

——よしなよ。あの人がただでさえ大混乱しているんだよ。あんた、自分の立場忘れた？ ちゃんと理由はあるけど一応加害者なんだよ。もう少し様子みようよ。

美里の言うのももっともなので、貴史は黙って受け入れた。雪がようやく止んだ次の日、呼吸を整えて貴史は自転車を用意し学校に向かい、一目散に三年D組の教室に飛び込んだ。朝ぴっかりの天気はあてにならないというけれど、前の日のすさまじい猛吹雪とは打って変わって穏やかな冬の朝だった。

「羽飛、てーへんだてーへんだ！」

誰かがどこかの時代劇のような言葉を発して貴史を手招きしている。まだ八時五分過ぎ。クラスメートが全員揃うには間がありそうな時刻だった。男子も女子もまだ三人程度。部活を終わらせてよっころしょ組程度だろうか。その一人、陸上部の大スターと相成った近衛を捕まえる。

「どうしたよ、おい」

「さっき、朝練出ようとして部室行ったら、すっげえ騒ぎだったよ」

「何だがよ。まさかあのことがもうばれてたのかよ！」

昨日の立村欠席裁判もとい二時間ぶっ続けのロングホームルームの内容がすでに外にばれているのか。可能性はある。世の中口だってある、電話だってある。いくら菱本先生や貴史や美里が緘口令だしたとしても無駄だ。人間は弱いのだ。

「ん？ ちゃうちゃう。あのことはもうとっくの昔に帰り道でばれてるだろ。まだまだあんなのちゃちいよ」

別の男子が手でないないポーズを取る。

「じゃあなんだ？」

女子たちが貴史たちを見据えてひそひそ話を始める。無視して、一番まともに話してもらえそうな近衛に問いかけた。

「近衛、朝練の部室で何聞いてきたんだよ。立村がらみのことじゃねえんだよな」

「それだったら俺も驚かないよ。違うって、刃傷沙汰らしいぞ」

「お前ら時代劇観すぎじゃあねえの？ とっくに『忠臣蔵』の時期は過ぎたぞ。松の廊下でもあるまいしなあ」

まぜっかえしてみても、反応を見ようと思った。背の高い近衛は両肩をこわばらせて周りにはいる男子たちをかかえるようにし、しゃがみこんだ。貴史も混じった。

「まだ噂なんだけどな」

含みを持たせるようにして近衛がささやく。もともとこうやって芝居がかったことをやらかす奴ではない。天羽や難波のように意味不明な気取り屋ではない。普通ではない。

「早く言えよ、すっきり出しちまえ」

貴史が突っ込むと、近衛は大きくため息をついた。芝居ではない。

「A組の評議の女子いるだろ？ あいつがさ、西月と取っ組み合いの大喧嘩して、それが当たり所悪くて今、入院してるらしいんだ」

「A組の評議ったら、あのたわしみたいな頭した女子か。名前すぐ出てこねえけど」

美里に聞けば早いだろう。やたらと美里お気に入りにしていたボーイッシュっぽい女子だとは覚えている。女子でもこの歳にして取っ組み合いとはやるなど言いたいが、「刃傷沙汰」と呼ぶからにはそれなりの理由もあるはずだ。急いで記憶をまさぐる。そういえば学食でもそんなことをちらっと聞いたような気がする。

「すげえな、取っ組み合いでかよ。俺の後に続くとは、ずいぶん連鎖してんな」

「茶化すなよ。羽飛はまだ怪我させてないだろ。昨日、いきなり教頭先生が飛び込んできて菱本先生ひっぱってたのはそれが理由らしいんだ。緊急の職員会議でもう大騒ぎだったらしいよ。それで、今日の朝練も臨時で中止」

「朝練とのつながりがあるのかよ」

陸上部もずいぶんといい加減なことをするものだ。近衛は首を振り、女子たちの目を恐れるようなそぶりですらに続けてささやいた。

「どうも、天羽の奪い合いだったらしいぞ。究極の三角関係が暴走した結果らしい。それで親を呼び出して、即、西月の退学が決定したって聞いた」

「ちょい待て、話の展開異常に早すぎやしねえか？」

思わずでかい声が出る。女子たちがおそろおそろといった風に貴史たちに近づいてくる。興味はあるのだろう。情報がないのだろう。そりゃそうだ。こういうことは女子から情報を得てみるのが手だ。

「お前ら、今の話、聞いてただろ、知ってたか？」

「ううん、噂だけ」

女子たちも顔を見合わせている。よく観るとこの連中も運動部関係者だ。

「私たちが知ってるのは、西月さんと近江さんが大喧嘩して、近江さんが怪我して、それで狩野先生が一方的に退学させようとしているらしいって噂だけ」

「んなこと言ったら俺どうするんだよ。即退学じゃねえの」

「違う、私も聞いたけど」

別の女子も近衛と同じ高さにしゃがんでささやいた。

「西月さんのお母さんが転校させることにしたって言ってたけど」

「しつこいようだが、昨日の今日で決めることかよ？ 卒業式まであと一ヶ月どうするんだよ」

「わかんないけど、今はっきりしてるのは、もう西月さん、学校には来ないってこと。それだけは決まってるって」

——そりゃありえねえだろ？ よくわけわからねえ。

A組とD組との距離は果てしなく遠い。情報は錯綜し、どれがどう正しいのかまったく分からなくなっている。この点は女子であると同時に近江……やっとな名前思い出した……と仲のよい美里をとっつかまえて確認するのが一番まともな情報が入手できそう。もっとも入手したからといって、好奇心が満たされるのみ、今D組で起きている壮絶な状況を完全できるものではない

とも思える。

——天羽も色男ぶり発揮しすぎたんだろ。女子に取り合いされちゃうなんてモテモテじゃんなんて、からかってられねえな。まあ、自業自得って奴か。けどな、いくらなんでもな、刃傷沙汰ってのはねえだろ。退学ってのはないだろ、いくらなんでも。

美里が教室に入ってくるのを待ち、貴史は手で合図した。男子チームの塊からいったん離れて、廊下に出るよう合図した。コートを脱いでロッカーにかけた美里は、頷いてすぐについてきた。やはり、何か把握しているのだろう。真剣な顔をしている。手袋をポケットに詰めて、貴史の顔を見た。

「やはり、あんたも聞いたのね」

「ああ今朝な。お前は」

「私は昨日、近江さんから連絡もらったの」

被害者、近江からか。それなら一番生々しい話が聞かせてもらえそうだな。廊下の窓辺に向かうよう指で合図した。見えるのは真っ白い雪の結晶がきらきら光り、同時に何滴か水滴になっている景色だった。光だけがきつく反射している。

「私たちがロングホームルームで延々と立村くん分析を行っている間は何でもなかったみたい。他のクラスの子たち、時間より早く終わったらしくて、A組もそうだったんだって。それで近江さん、たまたま生徒会室でおしゃべりしてたらいきなり、小春ちゃんが言いがかりつけてきたらしいの」

「口、きけねえのにか」

矛盾は突っ込んでおく。

「そう来ると思った。メモ使って筆談に決まってるじゃないの。内容はわかんないけど、ありもしない言いがかりだってことは話してた。それで突然小春ちゃんがか一っとなっちゃって、追いかけてきて、天羽くんたちがいる視聴覚教室に助け求めて逃げ込んだんだって」

ここまで美里は、落ち着いて話している。近江とはかなり仲良しだったはずなのになぜだろうか。違和感がある。昨日の杉浦加奈子の件とも一緒のものだった。

「たまたまそこに天羽くんと難波くんがいて、小春ちゃんが傘持って襲い掛かってきて、それを天羽くんが必死に止めてくれて、誰かが職員室にいた狩野先生を呼んでくれて、それでってことみたい」

「おい、傘、か？」

折りたたみではなさそうだ。美里は肯定の頷きを返した。

「そうなの。私も、まだ信じられないんだけど、近江さんが言うには小春ちゃん、本気で刺そうとしていたみたいなの。それで、止められて」

美里がそこまで話した後、ふうっとため息をついた。窓辺に目を向け、廊下に流れていく生徒たちをぼんやり眺めていた。

「いろんな噂が流れているみたいだけど、たぶん、みんなの言ってる通りになるじゃないかって

近江さん予想しているよね」

「みんなの言ってることったら何か？ 退学か？ なんか話聞いとええことになってるぞ。でも一日も経ってねえのに退学なんてあるのかよ」

別に西月に同情しているわけではない。ただ、一発張ったおしただけで退学ならば、貴史も十分その資格を満たしているはずだ。そうではないと、ということなのか。

「あとで詳しく話すけど、貴史、知ってるよね」

教室に戻るそぶりを見せた美里は、耳元にささやいた。

「近江さん、狩野先生の義理の妹だって。青大附中は、裏でいろいろなことしてるらしいもの。まったくありえない話ではないはずよ」

美里の表情には、悲しみも悔しさもなにもなかった。感覚が麻痺しているような感じがした。昨日のロングホームルームでエネルギーを使い果たしたのかもしれない。

菱本先生が現れた。昨日の今日、とはいえいつもの熱血教師ぶりは健在だった。

「ええと、おい、全員揃ってるか？ 揃ってないか」

また廊下寄りの先頭席が空いていることを確認した。

「そうか、まあいい、とりあえず今日の連絡事項いくぞ。みんな、メモ取れよ」

立村が今日も休みという現実の方が貴史には現実味ある問題だった。A組はあまりにも遠い。美里と仲よし女子が被害に遭ったとしても同じこと。貴史としては、なぜ二日連続で立村が休んでいるのかその理由を突き詰める方が先決だ。

「昨日はほんと、みんな、長い時間ご苦労だった。貴重な二時間だったな。ほんと、よくがんばった！ あらためてみんなに感謝だ。ありがとうな！」

すでに昨日の激しい熱も止んでいるようで、みなわちゃわちゃと私語にいそしんでいる。菱本先生も無理に止めようとはしなかった。

「今日もまだ、立村は休みだ。体調がまだ本調子でないようだ。明日も休むようなら、心配なんで俺も様子を見に行くつもりなんだが、昨日のことについては絶対に他クラスの奴にはもらさないようにする。これは約束だからな」

——先生、無理無理、もうばればれだよ。

貴史が断言するのは、登校途中の女子軍団が昨日の話を肴にして派手に盛り上がっているのを耳にしたからだ。しかもそいつらがC組の女子ときた。C組といえば、杉浦加奈子がらみの問題で大活躍した影の軍団である。こいつらが情報を把握しているとすれば、立村にとことん不利な方向へ噂が流れるのは定めだろうし、止める方法もない。

「昨日決めた通り、羽飛、今日からはお前が号令役だ」

「え、俺が？」

確かに立村の代わりにクラスまとめの大任を仰せ付かったが、号令をやるとは思ってなかった。評議としては美里だっているだろうし。

「いや、まずは形からでも入れ。それから、今日の放課後、職員室に來い。仕事たんまりあるからな」

にやっと笑って貴史に合図してきた。

「もうさっそくかよ、まったく。まあ、立村帰ってきたら手伝わせるけどいいですか」

「ああ、お前がそうしたいなら、そうしろよ。それとだ、昨日もうひとつ議題が残っていて、文集作りのことなんだが、清坂どうする」

美里が立ち上がった。すでに奈良岡相手には説得が終わっているようだったし、無理に蒸し返さなくてもなんとかかなりそうな気がする。

「はい、私個人の意見ですが、昨日の話もありますので班ノートを使用しない代わりに、みんなで好きな思い出話を書いて、それでまとめて終わりでいいんじゃないでしょうか。それと、これ、前から頼んでいることなんですけど、金沢くんにクラスのみんな全員の顔を写生画で残してもらおうと思っています。ね、金沢くん、いいよね？」

あっさり金沢も手を挙げて頷いた。こいつに絵画のことで企画持ち出したら何でも受け入れるに決まっているではないか。美里もその点はよく把握しているようだ。菱本先生も頷いた。

「そうかそうか、もう手はずは整っているんだな。まあ、俺としてはせっかくの機会だから本音をさらけ出すいい機会とも思っていたいんだがな」

「先生、女々しい！ そんなこと言ってたらお嫁さんとかわいいベイビーに全力で逃げられるよ！ ねえ」

即、跳ね返すのがこずえの役目だ。この動きが起きているということはもう、三年D組ももとの空気に戻りつつあるということだと思う。少しほっとした。

——この調子だと、立村戻ってくる前にはなんか落ち着きそうだな。あとは俺と美里とがひとがんばりして、あいつの機嫌を直すよう努力すりゃあ、一ヶ月もしないうちにハッピーエンドになりそうな気がするけどな。ああ、けど立村があのままいじけてなければなってところもあるんだが、まあなんとかなるだろ。美里も色仕掛けでなんかやれよ。

授業はのんびんたらりと続いた。卒業間際の三年生に対しての授業は、高校に入ってから授業のさわりと聞いているが正直どこからかわからない。公立行っている奴に聞けば区切りがどこからかはめどもつくのだろうが、それやってどうするという気もするのであえて気にしないことにしている。はっきりしているのは、自分たちの受けている授業が公立の学校よりもはるかに進んでいるということくらいだった。

三年D組の教室も、表面上はごく普通ののりに見えた。なんとなく玉城が笑顔で貴史に声をかけてきて、

「羽飛、あんたにすべてがかかっているんだから、期待してるよ」

気合を入れてくるところとか、

「なんで南雲が立候補しなかったんだよ、お前だって立村と仲良かっただろ？ りっちゃんりっちゃんって声かけてただろ」

などと南雲派閥の連中が文句を言っているところとか、

「立村の功績って、気になって調べてみたら他にも結構あるんだよなあ」

とか、よく分からない情報を仕入れてくる男子連中……主に運動部……とか。

多少の動きはあるにしても、取り立てて劇的に変わったということはない。貴史からしたら現段階での変化は、号令をかけざるを得なくなったことだけだ。たいしたことじゃあない。

四時間目が終わり給食を流し込むと、貴史は教室を出て言われた通り菱本先生の下へ急いだ。たぶん昨日のことだろう。職員室に一礼して入った。

「おお、羽飛か」

「先生呼んだじゃん」

いつもの敬語なし口調で先生に近づくと、菱本先生はすぐに席を用意してくれた。いつものように狩野先生の席を無断借用した。机を見ると何も荷物が置かれていない。休みなのだろうか。そういえば今日の数学は自習だった。

「狩野先生、今日休みなんだ」

「まあそうだ。ともかく話だ」

あっさり流して菱本先生は貴史をさらに自分の側に近づけ、声を低めた。

「まず二つある。ひとつめは立村のことなんだが」

ひとつで十分な議題だ。貴史は身を乗り出した。

「あいつまだ休んでいるけど、ほんつとに風邪ですか」

「わからんが、親御さんから連絡があった」

頭を抱えるようにして菱本先生はため息をついた。

「お前も知っているだろうが、立村の性格上学校に来づらくなる前に手を打ちたい。とりあえず今日は俺も授業があって身動きできないが、明日も休むようなら家庭訪問するつもりなんだ。その時の様子を見たうえでお前に相談しようと思っている」

「明日まで待つんですか」

長い。本当だったら今すぐでも早退して品山のあいつのうちに突撃したい。菱本先生は首を振って制止した。

「そうだ。ふつうの風邪なら誰か集団で見舞いに行かせるのも手だが、ああいうことがあった以上は少し様子を見たほうがいい。清坂あたりもかなりあせっているようだが、そこはお前が幼馴染のパワーで止めろよ」

「んなパワーなんてねえけど。でも、あいつもわかってるよ」

あっさりと答えてやった。

「それならいいんだがな。それと、お前が心配していた文集の件だが、清坂に丸投げしていいか？」

「ああ、それなら問題なし。金沢の絵が入るだけでぐっと文集も締まるし、奈良岡も仕事がなくなるからいいですむしでみんな大満足だろうし」

要は班ノートが消えればそれでいい。それだけで立村は救われる。

「じゃあこの件はあっという間に終わりだ。それともうひとつの件なんだがな」

もしかして、これは、例の件だろうか。

壮絶な女子同士の喧嘩、刃傷沙汰、女子版松の廊下。貴史は身体を硬くした。

「お前、C組の霧島と話をすることあるか？」

まったく関係のない話を、手を組んだかっこうで菱本先生は振ってきた。

「C組の霧島なら、ああ知ってるけど、そんなしゃべるってほどでもねえし。むしろ美里の方が評議委員同士だし話わかるんじゃないかあねえの？」

「そうか、知らないか。わかった。それならほとんど誰も気づいてないんだな」

菱本先生がひとりごちた後、さらに声を低めてささやいた。他の教師たちにも聞こえないようにしたい様子だった。

「もしこれから、C組の霧島について心ない噂が飛び交うようであれば、羽飛、できるだけそれを押さえてもらえないか？ まだ今は問題ないようだが」

「なんで霧島の話が出てくるわけ？ なんかあったのか？ 俺知らないけど」

「知らないならそれでいいんだ。それが一番いい。ただ、これから先のことなんだがな。なければそれでいい」

どうやら菱本先生は、貴史に霧島ゆいのことを話したのを後悔しているようだった。あわてて隠そうとしているのが見え見えだった。そんなことされれば誰だって知りたくなる。

「先生、そんなに知りたいんだったら、評議連中に聞いたほうが早いんじゃないかあねえの」

わざとかまをかけてみた。

「例えば天羽とか、難波とか、相棒の更科とか。立村が復活してればあいつも入るけど、まずはあのあたりだろ。特に難波とはしょっちゅうなんかやりあってたし、喧嘩沙汰であればあいつあたりに聞けば、詳しいことわかるんじゃないかあねえの」

難波の霧島ゆいに対する熱い想いは、男子なら誰でも読み取れるもの。肝心要の霧島ゆいにはうざったく思われているようだが。

「難波か、わかった。そうだな」

とっくにわかっているような口調で、菱本先生は再度頷いた。

「他のクラスのことまで気を遣うのはたいへんだが、青大附中の生徒みんなひっくるめてまとめて面倒みたいんだ。そこんところもお前なりに、まとめてくれると助かるぞ。頼んだぞ、羽飛」

——クラスまとめてこんなめんどくせえことなのかよ。

ひそかに貴史は肩こりを覚えた。肩をぐるぐる回したくなった。

一人欠席しているくらいでクラスがぐらぐらすることもそうない。昨日の今日、おとといの今日、いろいろあったにせよ三年D組の教室は表面上平穏だった。

「あのさあ、羽飛、これどうだろう？」

金沢が張り付いてきて、完成直前のスケッチブックを見せてきたりしてそれなりに和んでいる。文集作成チームも、班ノートの面倒ないざこざがなくなったこともあって、みな好き勝手に切り盛りしている。まとめ方としては金沢に芸術風味高い絵画だけではなく、さまざまな詰め草的イラストもたんまり描かせて、そこでつつこみコメントをみんなに書かせるようなスタイルに持っていくことになったわけだが、誰も反対者はいなかった。

「金沢、お前ずいぶん軽い絵も描けるんだな」

覗きこみ、ギャグマンが風のイラストの多さにびっくりする。ふだんの金沢なら決して手を出さないタイプの絵に見えた。スケッチブックをさらにめくると、四コマ漫画なども多い。元ネタがわからないものもたくさんあるのだがそこはつつこまないでおいた。

「女子たちのリクエストが多いんだよ。全員の顔スケッチは終わったけど、それだけじゃページ埋まらないから、なんか笑えるもの描いてこいって」

なかなかナイスなりクエストだ。貴史は金沢の肩を叩き、親指を立てて見せた。

「じゃあ今回の文集作成のボスはお前だな。がんばれよ」

「ありがと。それにしてもさあ、立村、大丈夫なのかな」

スケッチブックを閉じながら、金沢は前方扉側の空席を見やりつぶやいた。

「もう、班ノートのことなんか心配しなくてもいいって誰か教えてやればいいのになあ」

——班ノートのことだけじゃねえだろ、あいつの問題は。

バームクーヘン状態の問題てんこ盛りだということ、意外とクラスの連中は気づいていない。実際立村と密接につながる機会のある奴は、かなり少ないはずだ。貴史、美里、こずえあたりか。あとはせいぜい南雲。評議委員連中ならまた話も別なはずだが、あまり詳しく聞く気にはなれない。特に今は、

——A組のやばい事件あるしなあ。ありやまじいわ。

さまざまな情報が飛び交っている中、当事者である天羽を捕まえて聞く勇気はさすがの貴史も、今はない。

だったら他の評議連中を捕まえるという手もなくはないが、

——霧島のことには気遣ってなんで俺が？

菱本先生の謎の依頼も気にかかる。C組の霧島ゆいについてわざわざ、D組の貴史に頼み込むこと自体が異例だ。はたして菱本先生は立村に対しても同様の行動をしたかどうかは気になるところだが、どちらにしても普通ではない。また霧島がC組の女子評議委員ということであれば、関連するのは当然男子評議の更科であり、更科とつるんでいろいろとやらかしているのがB組男子評議の難波でもある。このふたりに今絡むのもなんだかまずいような気がする。

どちらにしても立村に関してはD組の連中でなんとか話をつけるしかない。昨日の段階で女子たちの反立村派……別に過激派ってわけでもないが……とは手打ちができたわけだし、あとは貴史なりに直接、「友だち」として語り合うしかないような気がする。

しかし、当の本人が来ないことには、何もできやしない。今は足踏みするしかない。

あっという間に放課後に突入した。昨日しゃべりすぎたのか、無理に話を蒸し返す奴もいない。唯一、南雲を中心とする集団がうさんくさそうに貴史を見ていたりする程度でそんなのはいつものことだ。無理にけんか沙汰にする気もない。ただ、南雲本人はやたらと静かに腕組みして考え込んでいるのが目立っている。そりゃそうだろう。昨日自分が杉浦加奈子をいじめた張本人だとか発言しやがったのだから。普通だったら当然はじかれるだろう。しかし貴史の観た感じだと、クラスで南雲が叩かれるような気配はない。むしろあれも、馬鹿評議の立村をかばうための演技だと思われているくらいがある。南雲のような奴は、顔だけで軽々世の中渡っていけるお手本のような気がする。

「美里、今日どうする」

こずえとふたりで机にかたまりしゃべりあっている美里を、捕まえてみることにする。

「そうだね、どうしようか」

「立村のこと？」

こずえも声を潜めた。他の女子たちに聞き耳立てられないように場所を返ることを促してくる。つまりわざわざ背中を押して、廊下に押し出そうとすることだ。

「菱本先生は明日来なかったら家庭訪問するってたけどな、俺たちも何にもしないわけいかねえだろ」

「ううん、今は黙ってたほういいよ」

こずえと一緒に美里も頷く。この辺は意見がぴたりとあっていたようだ。

「さっきも言ってたじゃん。今の立村はかなりやばい状態だって。あんたのこともあるしその他いろいろなことあったみたいだしさ。それならばばらく、様子見でいいよ。あいつだって出席日数のこと考えたら、このままとんずらすわけないじゃん」

「まあなあ、そうだけどな、けど、まあ、文集のことは無事丸く収まったってことくらいは伝えていいんじゃないかねえの」

「ばっかみたい、あんたよっく考えてみなさいよ」

今度は美里がたしなめるように言う。

「あんたと立村くんが大喧嘩やらかしたきっかけって、その文集じゃないの。それを持ち出して過去の傷に塩もみこんだら今度こそ立村くん学校に出てこなくなっちゃうよ。言い方考えなくちゃ」

「ったく、面倒くせえ奴だよなあいつ」

「そういうの分かってて友達なんだからしょうがないじゃないの」

三人で同時にため息をついた。窓辺からか、それぞれ白くふわりと浮かんで消え思わず笑いあった。なんだか笑えたのが久々のような気がした。

「あれ、どうしたんだろ。更科くんじゃないの」

美里が不意に、教室の後ろ扉に目をやりささやいた。

「珍しいねえ、あの組み合わせ。南雲と話、してるよ」

C組男子評議の更科が、チワワ顔を曇らせて南雲と言葉を交し合っている。

男子連中からしても、更科が直接D組に来るなんてことはあまりないことだった。たとえば同じ評議でもA組の天羽なら分かる。B組の難波もまだぎりぎり理解できる。ただ更科の場合だと隣の組でありながら意外とD組との接点が薄い。これは更科のキャラクターから来るものではなく、C組自体のカラーの問題ではないかと貴史は考えている。女子中心でやたらと盛り上がり男子たちがひそひそおとなしいC組と、男女比較的例外ありにしても仲がよく、それなりに協力しあうタイプのD組とは雰囲気が違う。また、更科も三年男子評議同士で固まっていることこそ多いが単品で行動することは非常に少ない。

「ちょっと、行ってみるわ」

女子ふたりに断ってから、貴史は更科に声をかけてみた。南雲が目の前にいるようだが知ったことじゃない。こちらは一応、立村がらみの代表権を持っているのだ。

「あ、羽飛よかった、いたんだ」

「お前めずらしいなあ。どうしたんだよ」

貴史が近づくやいなや、軽く手を振りさっさと教室から出て行った南雲を見送りつつ、更科は相変わらずの愛玩犬顔を満開にした。

「更科来るったら、たいてい誰か連れがいるだろうな」

「ああ、そうかもね。あのさ羽飛、聞きたいだけどいいかなあ」

今度は更科がC組側に貴史をひっぱって行こうとする。自然と美里、こずえの前を通り過ぎることになる。片手を上げて謝しておく。

「立村、まだ戻ってきてないんだよね」

さらに声を潜めて、更科が問いかける。C組エリアに切り替わったとたん表情は一気に暗く重くなる。

「ああ、風邪引いたってことにはなってる」

「頭、打って、ってことじゃないよね」

そういえば更科は、貴史と立村との対峙場面に立会い、さらに保健室まで付き添ったという奴だった。やたらと都築先生相手に立村の体調を気遣っていたのを思い出した。

「たぶんそれはないと思う、思いたいけどな。あの後あいつ本人が俺たちのとこ来たし、ちゃんと歩いてたから」

「そうか、それならよかった」

ほっとしたのか、改めて更科はほわりとした笑顔を見せた。

「頭打って入院してたら、ただ事じゃないなって思ってたけど、そうか、そうじゃないんだね」

「お前さ、あの時もずいぶんそのことばかり考えてたみたいだけど、どうしたんだ？」

前から気になっていたことを尋ねてみた。

「ほら、交通事故の後遺症とか、ちょっとした弾みで怪我してそれで寝たきりになるとか、よく新聞に載ってるから、それでなんだけどな。でも立村がなんでもなかったらそれでいいんだ。よかったよかった」

話をごまかそうとする気配をびしびしと感じる。少しひっかかる。もう少し捕まえてみる。

「それだけであんなに騒ぐかよ」

突っ込んで見ると更科はぶんぶん首を振って見せた。

「なんでもないってば。それよか、立村がまだいないってことは電話連絡しか方法ないってことだよな」

「いや、まだやめとけ。ってか、俺がそう菱本先生に言われてる」

やはり何か匂うものがある。貴史は肩を寄せて更科に問うた。

「やっぱな、俺もあいつをぶんなくっちまった以上きちんと筋を通したいんだけどな。今のところ菱本先生に止められてるって展開が実はあってなあ」

「そうかあ、まあそうだよね、当然かあ。でも、立村は頭を打ってるわけじゃないし、ただの風邪だったら話はできるってことだよな」

ずいぶんすがりつくものだ。貴史はわざと首をゆっくり振ってやった。

「本当のと言っちゃまうと、立村の奴相当めげているようで、俺たちもどうしたらいいのかわからねえ状態なんだわな。俺がいっちゃん悪いのは承知してるしなあ、なんとかしたいんだけどなあ。今悩んでるところなんだわ」

「そうか、そうだよなあ」

困りきった顔でもって更科は大きくため息を吐いた。

「それで一応、俺が立村のいない間、評議も含め代行することになっちゃったんだけど、もしよかったら菱本先生経由でも、でなければ俺自身でなんかうまくルート作って連絡することもできるけど、何かあったのか」

「羽飛がか？」

仰天顔まん丸眼で更科が貴史に顔を向ける。相当驚いている。口がぱっかり開いている。

「そうなんだよ。俺が責任取れってことになっちゃって、悩みどころなんだよなあ」

まだ貴史がD組の実質クラスまとめ役に相成ったことは、一部の連中しか知らないはずだ。どこまで他の連中がばらしているかはわからないが、現段階ではまだ評議委員会代行出席とかそういうところまでは進んでいない。貴史も本当であれば口にするつもりはなかった。ただ、今の更科を見ているとなんとなく、緊急事態を思わせる様子が伺える。A組がらみの問題もあるのだろうし、同時に霧島ゆいのことに関係しているのだろう。評議同士でないと解決できない問題がぱっかり浮かんでいそうだった。ついでに言うと、同じ評議でも女子の美里では話にならない可能性もありそうだ。

「そっか、それなら羽飛に話したほうが早いよね。悪いんだけど、ちょっとどっか人のいないところに行きたいんだけど、どっかないかなあ」

「そんなにやばいことなのか？」

更科はそれ以上何も言わず、貴史に荷物を持って外へ出るよう目で促した。

——なんか疾風怒濤でまじかよって感じだわな。

まさか更科とふたりで学校を出て、人気のない神社に連れ込まれるとは思っても見なかった。神社といえば初詣で手を合わせて拝むための場所であり、たいていの場合は大混雑だったはず。更科が貴史をひっぱってきたのは、神殿の真後ろに並んでるお稲荷さんの側だった。時折誰かが手を合わせに来る以外はほとんど人もいない場所だった。

「ずいぶん陰気な場所だよなあ」

「ここなら青大附中関係者も近づかないから大丈夫だよ」

ずっと黙りこくっていた更科が、ようやくほっとした表情で笑顔を見せた。

「学校でうっかり誰かの耳に入ると、また根も葉もない噂が立っちゃうし、先生たちに聞かれたらもっとまずいことになっちゃうしさ」

更科は短めのスタジアムジャンパーをがっちり着込んだまま、花のない藤棚に手をかけた。昨日からの雪が積もっていて、少しだけ水が垂れている。

「天羽たちの話は、もう噂聞いているだろ」

「まあ、一応な。嘘か本当かわからねえけど」

あいまいな返事のみにしておく。更科は頷いた。

「俺も現場にいたわけじゃないし、あくまでも難波の様子を観察してただけなんだけどな。ただこれは本当だったら立村に出てきてもらうべき話なんだよ」

「なんであいつが出てこないとなんないんだ？」

「だってさ、立村以外、まとめられそうな奴がいないんだよ。今の状況考えるとさ」

手袋に白い息を吹きかけ、更科はゆっくり語り出した。貴史も近くにあった巨大な石に腰掛けて話を聞くことにした。尻が冷たかった。

「西月が視聴覚教室にいた近江を追いかけて傘で刺し殺そうとしたとか、それを天羽が全力で止めようとしたとか、そこで先生たちが西月を取り押さえて大騒ぎになったとか、いろいろ情報はあるけれど本当のところ、俺もよくわからないんだ。俺が知ってるのはその前の段階で、現場にホームズ、難波がいたってことと、その事件が起こる前に現場からあいつが逃走したってこと」

「難波もいたのかよ」

不思議はない。もともと天羽と難波は評議委員同士だ。

「そうなんだ。俺が聞いた限りだと、最初その場にいたのが天羽と難波だったんだ。その後突然近江が駆け込んできて天羽に助けを求めて、その後を追って西月が傘を持ってって展開。それは間違いはないんだ。そのことは、もうどうだっていいんだ」

片手をポケットに入れて更科は俯いた。言葉を選ぶのに苦慮している様子がうかがい知れた。

「ただその騒ぎの後、西月が先生たちにしよっぱかれる直前に、難波に何か手紙らしきものを渡したんだ。俺も野次馬根性でその場に行ったのがその時だったから、直接見たよ」

「ああ？ お前さ、現場にいなかったって言ってなかったか？」

何気なく矛盾をつっこむ。そうしないと辛気臭くて聞いてられやしない。

「たまたま保健室にいたんだ。都築先生が呼び出されて俺もついてっただけ。まさか評議連中がずらっと勢ぞろいしてるなんて思ってなかったよ」

——やっぱりあの伝説本当だったのか。

保健室の都築先生とできているという噂は、これだけ証拠が並んでいると本当だと思わざるを得ない。ここはどうでもいいことなので流して話を聞き続ける。

「その時、ぽっかーんとしているホームズに何かを渡しているのを俺、確かに見たんだ。そしてその後、すごい勢いでかっ飛ばしてっただけ。本当は現場にいた証人として残ってなくちゃいけなかったのにさ。俺、急いで難波を追っかけて何あったのか聞いたんだ。そしたらあいつ、俺にその手紙を渡して、殿池先生にそのまま見せるようにって言って、脱兎のごとく飛び出しちまったんだ」

「手紙って、なんだそりゃ」

「なんだそりゃって思うよねそりゃあ。俺だって同じだったよ。手紙ってか、紙切れぐっちゃぐちゃだったから開いて読んだんだ。そしたら」

更科の顔が初めてゆがんだ。子犬じゃない。むしろブルドックのしわに似ていた。

「もう、急いで殿池先生探したよ。あんなに必死にあの先生探したの生まれて初めてかもしれないってくらいにさ。でもあの騒ぎで緊急職員会議とか始まってるとし、生徒はさっさと帰るように命令されてるし。しょうがないから、俺、職員会議に踏み込んでって、先生にその手紙渡して、さっさと帰ったんだ」

「あの、なんだその手紙って。西月が遺書でも残したのかよ」

まったく話のつじつまが合わない。なぜ西月が手紙を渡したのか、その手紙がなんなのか、なぜよりによって難波なのか、貴史にはまったく意味がつかめない。立村だったらわかるのか、そういうことが。それが評議同士のつながりなのか。

「そう、遺書だよ」

力なく更科がつぶやいた。

「あの手紙、キリコが西月に書いたものだったんだ」

続ける言葉も、詰まっていた。

「スーパーの屋上駐車場から飛び降りる約束、してたんだよあの二人。西月が到着するのを待って、一緒に死のうって、そのつもりだったんだよ」

「まじかよ」

言葉が出てこない。あまりにも軽くいい加減な反応しかできなかった。

霧島ゆいの愛らしい姿かたちと似合わぬ手厳しい口調、それとつながらない。

「キリコ、あいつほんつとに頭悪いよ。だってあの駐車場、すごく高い柵張ってるから飛び降りれるわけなんてないのにさ。ホームズもそのくらい分かってるはずなのにさ。急いで駆け出さなくたって絶対大丈夫なはずなのにさ」

ここまで感情が高ぶった更科を見たのは初めてだった。涙こそ流さないが、身体を震わせ、貴史に背を向け、足をぎこぎこ動かしている。

——更科、お前もそのこと全部分かっているはずなのに、職員会議に割り込んだのかよ。確かに、ここは立村が必要な場面だった。

雪が止んだと思えばまた降りしきる。足跡をしっかりと残してもまた覆うように降り積もる。

——そっか、そうなんだね。

更科との会話を電話で美里に伝えた時の反応がそれだった。

——さっき近江さんところ行ったけどなんとなくそれは聞いてたんだ。

「近江はって、ダメージ結構でかかったんでねえの」

——思ったより平気そうだったよ。むしろ、家族の人たちが一方的に大騒ぎしてて、めんどくさいって言ってた。一方的に文句つけられただけなのにねって。

「けどさあ、停学沙汰だろ。霧島のことだってあるだろしな」

——ゆいちゃんのことはどうなってるかわかんないけどね。難波くんはともかく、更科くんこれから大変だろうな。C組ほとんどひとりで切り盛りしなくちゃいけないでしょ。あーあ、なんでこんなこと続くんだろね。明日、その点についてももう少し話し合わなくちゃね。先生たちとも。

双方の両親が聞き耳を立てていることを鑑みて、話はここで終えた。続きはまた明日ということだ。

更科としばらく話をし、「とりあえずは内緒にしておくか」で終わり、今のところは雪が静かに覆い隠してくれるのを待つのみだった。

——こういうことが起きるたび、こんな風に評議連中は集まって相談してたのかよ。信じられねえな。

立村が評議委員長だった頃も事件頻発していたような気がする。呼び出されたりいろいろ騒いだりしていたけれども、同期連中がかなり目立つ奴だったので立村自身がいろいろ言われることは少なかった。いや、「役立たず」とは揶揄されていたが。

今回のA組事件およびC組事件……と、言ってもいいものか迷うが……は、生徒たちが起こしたのものには違いないが、生徒だけで片付けられるものとも言い切れない。ふたつとも同様にA組に関して言えば、下手したら警察介入しても不思議はないのではないかな。さらにC組の件も、未遂に終わったとはいえ中学生の自殺といったら地元新聞の一面に扱われてもおかしくはない。特に霧島は青湊市でそれなりに知られた老舗の娘である。別の面で話題になる可能性だってある。

貴史はぼんやりベッドの上から鈴蘭優の巨大ポスターを眺めていた。

今年の正月に、美里と出かけた時手に入れたものだった。

季節外れの半そでワンピースで微笑んでいるが見るからに寒そうだ。

——どうするんだろな。人の生き死にに関係する内容だからなあ。俺たちD組の話とはまったく違うよな。

他人事のように思う。もちろん同じ歳の連中が引き起こしていることだしショックがないわけではない。自分自身も似たようなことをつい最近やらかしてきて、幸いお咎めなしで終わっている現状もある。ただどこか現実味がない。天羽はえらいことになっているだろう、更科は頭を抱

えているだろう、難波はもう想像するも恐ろしい。それでもやはり、貴史にとっては、

——明日、立村来るのかなあ。どう話すりゃいいんだよ。こんなすさまじい状況でさ。それ以前に俺と話、する気あるのかってとこなんだよ。逃げても捕まえねばならないし、捕まえたらずこで話聞いてもらわねばなんねえし。逃げ道をふさぐってのもなんだけど、もうしっかと押さえて話すしかねえんだよ、こりゃ。

立村と対話ができるかどうか、以上にでかいことは今のところなさそうだった。

次の日は朝から晴れ間が覗いていた。雪が溶けるほどではないにしても、積もった雪がきらきら光り、どこかの高級な羊羹を思わせるようだった。別に貴史は和菓子に詳しいわけではなく、たまたま昨日夜食で食った羊羹がこういう「淡雪」タイプのものであったから記憶に残っていたに過ぎない。うまかったことは確かだ。

自転車の轆もくっきり引かれている。安心して突っ込んで走ればそれほどあぶなくもない。いつものように学校に到着した。

「先生、どうも」

「あのな、おはようだろ、ったくもうなんだ」

軽くやりあいながらまずは職員室に向かう。例のロングホームルーム以来、貴史としてやるべきことは「早起きして学校」と「ついたらとりあえず職員室で菱本先生とデート」くらいしか思いつかなかった。立村の代行となればまた別なのだろうが、あいつが今まで一切しようとしなかった「菱本先生との積極的交流」だけは力を入れておかないといけないような気がしていた。

職員室にはそれぞれ先生たちが授業の準備をしたりコートをかけたり、ストーブで手をあぶったりなんなりしている。貴史の顔も知られているせいかそれなりに「やあ、羽飛がんばってるなあ」と激励していく先生もいる。どうでもいいが教頭先生まで声をかけてくるのにはいつもながら驚く。

「先生、俺別に、教頭先生に覚えられるようなことしてねえよな」

「してるしてる。まあ座れよ」

菱本先生はすぐに自分の席へ貴史を呼び寄せた。やはり隣には狩野先生がいる。軽く頭を下げ、パイプ椅子を引っ張り出して座った。

「今日、立村が来たらお前どうする？」

「何度も言ってるけど、しゃべるしかないだろって感じ」

「そうだな。それしかないよな」

隣の狩野先生を警戒しているようで、菱本先生は貴史にもう少し側へ寄るよう招きよせた。机にはまだ何も置いていなかった。

「文集のことだが、清坂も金沢もそれと奈良岡もやる気まんまんだからもう任せておいていいな。お前正直なところ、どう思う？」

「班ノートが絡まないなら立村もなんも言わないと思うよ」

もう終わったことだった。あっさり答える。でも続ける。

「それよかあと一ヶ月なんだけど、評議がらみのことでいろいろ起きてるみたいで、あいつが帰

ってきた時にうまく対応できるのかって気は正直するけど」

「小さい声で言え、ほらほら」

やはり周囲に気を遣うのだろう。さらに密着させられる。悪いが貴史はそちらの趣味はない。「ま、お前の言いたいことはわかる。本当はお前にもそっちの切り盛りもさせたいんだがやっぱり無理だろうなあ」

「あたりまえだろ。相手は評議委員長経験者だつての。そんな俺がいきなり手を出せる内容じゃあねえし。そっちは立村がやってくれると思う。もどってくれば、だけど」

「そうだな、もどってくれば、だな」

ため息を吐いて菱本先生はノートを引っ張り出した。歴史の授業用のものだった。「女子たちも、一応この前の話し合いでわだかまりがなくなったと思いたいんだが、なかなか難しいかもしれないなあ。お前どう思う？」

「なくなんないと思う」

その辺ははっきり言い切った。当たり前なことだ。

「女子は執念深いしそれは無理。けどそれなりになんとかなると思う」

「なんでだ？」

「顔、立ててやればいいんだよ」

貴史はもう一度声を潜めて菱本先生にささやいた。

「玉城たちと美里たちのグループが対立している以上、それぞれのグループの面子を保ってやればいいよ。特に玉城。あいつもがんばったけど、やっぱし場馴れしてないから苦労したと思うんだ。その点しょっちゅう教壇に上がり慣れてる美里の方が有利だよな。その点、先生悪いけど、玉城と杉浦の面倒をちょっと見てもらえねえかな」

「それ俺が言うべきことだと思うが、まあいいか。そうだな」

にやにやししながら菱本先生は頷いた。

「女子同士では古川がちょこちょこ動き回ってうまく面倒見ているようだけどやっぱあいつも美里の機嫌取らないと大変だろうし。そこんとこ先生も手伝ってほしいってとこ。俺は俺で、なんとしても立村とさしの勝負し直す必要あるからとことん話し合う」

「しつこいようだが、手は出すなよ」

貴史も大きく頷き返した。もちろんだ。学習能力ないわけじゃない。立村には言葉でしか通じない。

しばらくクラス運営のよしなについて語り合った後、貴史は教室に戻った。まだ八時十分過ぎ、教室前には週番の規律委員たちが並んで朝礼している。たまたま南雲がいるのに気がついたが無視して通り過ぎた。

——実は男子連中もまだまだわだかまりあるんだわな。

自分でもこの辺は、なんとかしたくないところだった。女子たちの件についてはめんどくさいところもなくはないので先生の手を借りるのも手だとは思う。古川こずえにエロ女王以外の面で活躍してもらう必要がある。しかし、

——男子連中の派閥も、まあこんなもんだろうな。ありがたいことに立村の件では一枚板の結束でなんとかあったし。南雲の関係者たちについても、正直どうだっていいや。

本当はこちらを何とかしないとイケないのかもしれない。立村もそれほど気にはしていないようだったし、貴史と南雲両方のグループと調子よく仲良くしていた。それが今回、女子たちの冷たい視線を跳ね返せた理由といえはそうなのだが、クラスの団結力を高めて卒業させるというところには至らないような気がしていた。菱本先生の「まだ一ヶ月」精神でつぶしてもそこまでは無理だろう。水と油の南雲と貴史、これをいきなり握手しあう仲になれと言われても、そりゃ不可能だ。

「羽飛くん、おはよ」

三年D組の教室で一番に声をかけてきたのは奈良岡彰子だった。相変わらずふくよかなあんまん姫は、さわやかな微笑みを持って近づいてきた。

「あ、おっはよ」

あっさり流す。例のロングホームルームをきっかけに、少し距離をおきたいタイプの女子と認識された奈良岡彰子だが、当の本人はまったく意に介していない様子だった。貴史もかなりきつく振り払ったり罵倒したりしたはずなのだが、そんなのどうでもいいという顔してにこやかに語りかけてくる。

「美里たちとも盛り上がってるみたいだよな、よかったよかった」

「うん、羽飛くんが身体を張ってくれたおかげだよ。ありがとう」

「ねーさんもかなり身体張ってたじゃあねえの」

心にもないことを言いたくはない。事実だけ伝える。

「なんかね、本当にこれでみんなうまくいきそうな気がするんだ。私ねやっとな、三年D組がクラスらしくなってきたなってきたなって感じがするのね」

——そうなんだろな、奈良岡にとってはな。

貴史からしたら、文集がらみの出来事を通じて改めて奈良岡彰子の恐ろしさを実感したような気がする。心の中であんまん姫ならぬ「ハブ姫」とつぶやいたことを今だ忘れてはいない。心あたかきほわほわあんまん笑顔、バターのくっきり利いたクッキーはうまい、確かにそれはそうなのだが、受ける相手からするとそれは凶器にしか見えない。それも改めて感じている。

「まだまだだぞ、それ甘えよ」

かばんから教科書とノートを入れて、貴史は目を向けずに話し続けた。

「まだ立村が戻ってきてねえもん。話はそこからだって。俺もあいつの代わりになれるとは思ってねえけど、まずは話し合わないとな」

「羽飛くん、なぜ立村くんに拘るんだろう。この前の話でもまとまったけど、クラスのまとめ役は羽飛くん皆大賛成だったよ」

「けどあいつはまだ知らないんだ。俺も電話かけてねえし。青天の霹靂状態だろ」

「あっそっか」

奈良岡ははっと気がついたかのように天井を見上げ、またふっくら笑顔で答えた。

「でも、もう大丈夫だって気がするんだ。羽飛くんが覚悟を決めてくれたおかげで、多少何かがあってもあっさり乗り切って行けるよ。美里ちゃんだって、もう、元気一杯に文集作りとかしているし、加奈子ちゃんとも普通に話をしているし、怜巳ちゃんも少しずつ自分のやりたいことに向かっているし」

「玉城がか？　なんだあいつのやりたいことって」

まだ玉城怜巳は教室にいなかった。奈良岡が身体を小さくして貴史に内緒話をする。

「怜巳ちゃんも今回のことで、自分を取り戻せたひとりなんだよ」

女子たちにも聞かれたらまずいようなのだろう。貴史も耳を澄ませた。

「怜巳ちゃんはいままでずっとこの学校のやり方がおかしい、って真剣に考えていたけど、ずっと流されたままだったんだって。けど、去年の秋あたりからいろいろあって、自分で動こうと決意してて、高校に入ったらすぐに他の学校と共同で行うイベントサークルに入って活動しようって決めただって。ボランティアかそれともイベントなのかわからないけど、とにかく組織の中心核になって活躍できる場所に入ろうってやっとな決心ついたんだって。これ、羽飛くんがきっかけだったんだよ」

そこまでささやいた後、奈良岡は耳元で手を振りまた自分の席に戻っていった。他の友だちが奈良岡を探して「彰子ちゃん彰子ちゃん」と呼びかけていたからだった。

——玉城がかよ。あいつそんなに思いつめてたんかよ。

ようやく現れた玉城に声をかけてみる。

「玉城、おっはよ」

「羽飛、どうしたの、いきなり話しかけてくるなんてさ」

それでもうれしそうに玉城はウルフカットの頭をぐるりと回し笑いかけてきた。確かにおとこの出来事以来こういう振る舞いはなかったはずだった。後から入ってきた美里を無視する形になるがあえてそうした。玉城を手で呼び寄せ、小声で尋ねた。

「お前さ、あのあと、いろいろしんどくなかったか？　いやな、俺も玉城をたきつけたようなもんだし、あの後の仕切りもなんてっかこう、お前のことをないがしろにしちまったような気もしてな。ちょっと確認したかったんだ」

美里とは後でいろいろしゃべったし電話連絡もしていたけれども、玉城にはフォローを何も行っていなかった。片手落ちだとは思っていた。A組事件も関係してつい後回しになっていた。一応クラスのとめ役を請け負った以上は責任がある。

玉城は大きくかぶりを振った。満面の笑みだった。

「なーに言ってるの羽飛。私もあんたにお礼言うの忘れてたね。ありがと」

「礼、言われるようなことも、できてたっかなあ」

「もしかして、彰子ちゃんから聞いた？」

にきび面の赤らんだ顔はまったく見た目変わっていない。なのにかもし出す雰囲気だけがまるっきり違う。ほわほわとした、ここちよいもの、たとえるなら焼きたてのケーキみたいな匂いだろうか。今まで玉城と接した時には感じないものだった。

「あんたには伝えとくね。絶対誰にも言わないでよ。清坂さんにもね」

「ああ、けどなんだ」

「あのあと、私、すぐ申し込みしてきたんだよ」

きりりとまっすぐ、貴史を見つめた。嘘はない。

「青潟にある『青潟こどもホットライン』のボランティアに参加するってこと」

「なんだそりゃ？」

青潟にそんなものがあるとは聞いたことがない。初耳だ。

「加奈子ちゃんのこともあって前から気にはなっていたんだ。いろいろ新聞や雑誌で調べて、学校の先生たちが役に立たないんだったら力を借りることも出来る組織があるって聞いててね。そこで私もいろいろ問い合わせしてたら、生徒同士で力をあわせて活動する組織が近々出来るってこと、教えてもらったんだ」

ということは、杉浦加奈子の件がきっかけということか。心臓が少しだけびびる。

「でも私、あまりそういうの得意じゃないなって思ってて。でも、羽飛が仕切ってくれたあのロングホームルームで自信がついたんだ。中学生だって立ち上げれば今までのものをひっくり返すことができるって。私も、何かができるかもしれないってね」

「けどなんでそんな外の組織なんかに入るんだ？ せっかく青大附中にお前いるだろが」

発想が突拍子ない。もう少し考えてからでもいいような気がするのだが。学校の委員会では間に合わないのだろうか。

玉城は唇を結び、貴史を見上げた。拳を作り胸に当てた。

「あの時思ったけど、みんな視野狭すぎて思った。先生も私たちも男子たちも。男子たちは立村を全員で守っているし、女子たちは加奈子ちゃん派と清坂さん派に分かれているし。でも、私、その『青潟こどもホットライン』の人たちと話をしてみても気づいたんだけど、いろんな見方があるのかもしれないなあって。ほら、お金の有るなしとか、授業のレベルの違いとか、この学校はひとつの階級に固まっちゃってるから、みな同じ発想でしか物事考えられないのかもしれないって気がしてきたんだ」

「そうでもねえけどなあ」

お金のない奴は結構いるんじゃないかと、貴史は思う。

「だからそれをフラットに考えられる場所に行くって、そう決断できたんだ。羽飛があのロングホームルームを仕切ってくれて、私を励ましてくれて、話をさせてくれたから、覚悟ができたんだよ。羽飛、あれはあんたじゃなかったらできなかったんだよ。絶対に立村なんかじゃ、無理だったんだよ。あれだけ言いたいこと引き出せるの羽飛だけだったんだよ」

菱本先生が扉を開けて入ってきた。すぐに玉城も自分の席に戻った。黙って席に着いた貴史を菱本先生はいったんじっと見つめ、次に扉脇の空席に目をやった。出席簿を開いた。出席を取り出した。

「ええと、出席だが、今日は立村が風邪のため休みと連絡があった。それと三時間目の歴史の授業なんだが、自習になるんでお前らさぼんなよ。この前のロングホームルームでつぶれた分、た

んまりプリント作ってあるからな。全部やれよわかったな」

美里が貴史を振り返った。顔いてきた。

——やっぱりそうか。

臨時家庭訪問に3Dの歴史授業時間を当てるつもりなのだろう。菱本先生は。

三時間目の歴史の授業が自習なのは、誰もがなんとなく理由を読んでいたようだった。

「ねえねえ、やっぱり立村の家に行ったのかなあ」

わざわざ机の側に近づいてきてこずえが問う。

「さあ、わからねえけどその可能性はあるんじゃないの」

特に菱本先生が公表してから出かけたわけじゃない。このあたりはごまかしておく。

「あーあそっか。でもそれだとかえって悪化しそうな気、するんだけどねえ」

小声ながらも露骨につぶやくこずえ。

「しゃあねえだろ。そればかりは俺だって面倒見切れねえよ」

「まあねえ、しょうがないか。でも、三日も学校休んでるんだったら手に負えなくなるのも仕方ないか。なんとかしてくれればいいんだけど、立村も想像以上に頑固だし、あとはここから先のカタストロフィが起きないことを祈るのみだわね」

——なんだよカタストロフィって。これ以上崩壊することあるのかよ。

貴史は金沢、水口をつついてまったく関係のないテレビ話に興じていた。はっきり言って本当にどうだっていいことだった。最初はテレビドラマの話だったのに気がつけばいつのまにか金沢の暴走により、日曜放送の美術館番組についてのエキサイティングトークと変わってしまっているが、それも軌道修正する気なんてなかった。しゃべりたいだけ、しゃべらせておけばいい。

——あんまり休んじゃうとかえってこじらせてしまうかもなあ。菱本先生が帰ってきてからでもとっ捕まえて、作戦練るか。

あえて話しかける奴はいないにせよ、あちらこちらで立村に関する噂は流れてくる。

いや、情報漏えいした、といった方が正しいだろうか。

貴史の読み通り、「絶対に内密」だったはずの話題はいつのまにかばればれになってしまい、下手したら全校生徒に知れ渡ってしまっている可能性が高い。もっとも加害者が貴史で被害者が立村という、事の発端については開き直るしかない内容だ。問題なのはその後で判明した立村の暗い過去と一緒に、杉浦加奈子を巡る人間関係のからみ、次いでに言うと三年D組でひそかに行われていたいじめ問題、極めつけが「立村は女子にとことん嫌われていた」故の現実の発表と相成るわけだ。ひとつひとつは決して立村不利の内容ではないのだが、まとめて見ると奴の性格がいじけすぎていることに原因があるというところに行き着き、結局立村の丸損となる。現に、加害者だったはずの貴史は、気づかないうちに女子たちからの株が上昇しつつある。

——これじゃあ、あいつが戻ってきた時えらいことになるわな。

美里が全力で「私が立村くんを守ります！」と叫んだとしても、思いっきり無駄なような気がしてくる。振りほどくのが立村の性格なのだ。

さらにあの、菱本先生からしてもそうだ。思いっきり貴史は心で両手を組んで祈った。

——菱本先生、へますんなよ。ここでへぐったら、絶対立村ぶちぎれるからな。

無理してでも貴史が割り込んでいって、公欠取ってくっついていくべきだったのではとすら

思う。あいつの菱本先生に対する憎しみたるや、尋常ならざるものがある。理屈では通じない未知のルートでその感情はつながっている。貴史には理解できない。

平和に時は流れている。給食時間も無事終了し昼休み教室を飛び出すと、廊下で誰かが呼び止める。振り向くとそこには難波が不機嫌そうに突っ立っていた。

「よお、どうした」

できるだけいつも通りの顔をして呼びかける。難波の右手には封筒あり。

「いつもの交換分、やるつもりなんだがな」

「あ、もしかして優ちゃん？」

ここもからからっと能天気を装う。そうでもしないと難波の目つきがやたら怖いのを避けられない。定期的に鈴蘭優の切り抜きと、「日本少女宮」のつぐみちゃん関連のスクラップを交換するのが習慣なのだが、難波の抱えている事情を思うとそんな軽いことが出来るとは思えない。いいのだろうか。欲しいことは欲しい。

「けどなあ、俺まだつぐみちゃんの持ってきてねえしなあ。あとでいいぞ」

「いや、まあ、とりあえず中庭行こうか」

ずいぶん煮え切らない言い方だ。天羽あたりが言うのなら分かるが、難波のほうからこういう誘い方をするのは珍しい。アイドルファン同士の会話を他の連中に聞かれないというのならまだわかるが、難波のつぐみちゃん命は女子たちにも知られている。幸い、馬鹿にはされていない。上には上、結城先輩と言うキングがいる。

「ああいいけど、どうした」

それ以上何も言わず、難波はくるっと背を向けた。階段を降り、すれ違った他クラスの女子がつぶやいた言葉に、ようやくぴんときた。

——結局霧島さん、死ねなかったのね。

「突然なんだが、羽飛」

中庭に上靴のまま降り、足跡だらけの雪を踏みしめながら難波が尋ねてきた。

予想通りだった。

「お前がD組の評議を立村の代わりにやるってのはまじなのか」

「あ、ああ、そういう風に伝わってっか」

やはりそうだ。噂が流れないわけがない。むしろ難波が聞いてきたのは遅すぎるくらいだ。本当は「クラスのまとめ役」と「評議委員」をそれぞれ分割するという流れのはずなのにいつのまにか一緒にされてしまっているようだ。

「違う違う。今の話なんだがな、要は立村の負担が今まであまりにも重たすぎるから、クラスの中を俺が受け持って、そいで立村には評議の方に専念してもらおうってだけなんだ。別に立村から役職奪うなんてめっそもねえよ」

「俺が聞いた話だと全然違うがな」

封筒の口を握り締めたまま、難波は振り返った。めがねの奥が曇っている。いったんめがねを

はずし指でぬぐい、かけなおした。

「おとといのロングホームルームを二時間使って、立村を評議から下ろし、それから羽飛を正式に立てたって話なんだがな」

「誤解招く内容なのはわかってるんだが違うんだそこがな」

貴史は首を降った。冷える腕をさすりながら、白い息とともに説明した。

「俺と立村がその前にいったんやりあっちゃまって、それでちょいともめてるんだ。ま、俺が一方的に悪いんでそこんところはあとであいつと話すけどな。けど周りの連中がそれきっかけに、女子中心に立村が悪いとかなんとか騒ぎ出しちまって、それでいろいろぴーちくぱーちくやって、それで、まあ、そうなったっつうわけ」

「じゃあ俺が最初言った通りじゃないか」

「違う、だからよく話、聞けって。確かにな、菱本先生と女子連中はやたらと俺が代わりになることを進めてきたしそれは認める。けどな、よく考えてみろよ、あと二ヶ月しかねえのになんでいきなりわけもわからない評議委員なんて出来るか？俺からしたら、クラスのことなら三年間D組在籍してきたしそりゃなんとかなるかもしれねえけど、評議は無茶だぞ。お前らだって冗談じゃねえって思うだろ？俺もそうだよ」

「よりによってこの時期に評議が変わるなんて、相当なへまやらかしたんじゃないかねえかって思ってたんだが、そういうことかよ」

「そう、そうなんだよ、難波」

雪合戦に燃える一年連中を横目に、貴史は頷いた。

「立村がこのまま学校に来なかったら、どうなるんだ」

「まあ、そうなると、しゃあねえ、俺が身代わりにならざるを得ないかもしれねえけど、あ、それは多分大丈夫だと思う。来るよ来週にでもな」

「来ない可能性だってあるだろ」

——まあ、確かに。

あまり考えないようにはしていたが、難波に問い詰められると否定はできない。

「もし来なかったと仮定してだ。このままだとD組の評議は代行誰がでるんだ」

「まあ俺になるだろうな」

「で、今の話からすると、羽飛、お前まったく評議委員会のこと知らないって言ってただろ。知らないままで顔出す気じゃねえだろうな」

「美里がいるしな、少しは確認できるだろ」

「女子と男子じゃあ話が違うのはお前だってわかってるだろ！」

声を荒立てた難波に、雪合戦チームのひとりがぴり顔で振り返った。

「やめろよ、一年坊主びびってるぞ」

「どうでもいいだろ、とにかくだ。お前、何にも知らない顔してこれから評議委員会に出てどうするんだって言いたいんだ」

「だから立村がじきに来るって」

「来なかったらどうするんだって言ってるんだ！」

こっちの方がぶち切れそうになる。普段なら正面切って怒鳴ってやるところだ。ただ更科から聞いた諸事象を考えるとつい遠慮してしまわざるを得ない。多少のことならまだしも、それは人の生死が絡んでいる。

「つまりだな、俺が言いたいのは、現在の評議委員会事情をある程度頭に入れて、それから乗り込んでこいと、そういうわけだ。何もお前が向いてないとは俺は一言も言っていない。はっきり言うが、最初から羽飛が評議だったら俺は何も言う気がない。ただ、いきなりわけがわからない顔でだんまり座ってられたとしても、戦力にならない無駄玉なのはたまったもんじゃないと言いたいだけだ」

「無駄玉だと？ おい、評議委員会たってもう、あと、二ヶ月で終わりだろ？ まだなんかやることあるのかよ」

美里には詳しい話を聞いていなかった。貴史は問い返した。難波が唇をゆがめ、小声で「ちくしょう」と吐き捨てた。

「あるぞ、天王山だ。今こそ本当は評議が一丸になって生徒会を迎え打たねばならねえのに、よりによってあんなことになっちゃったとはな。ぬかったぜ」

「なんかお前、やらかしたのか」

できるだけさりげなく尋ねて見る。霧島ゆいとの因縁については今のところ知らない振りをしていたほうがよさそうだ。難波もそ知らぬ顔で続けた。

「俺じゃねえ。天羽だ、今、大ピンチなのは」

「天羽？」

「最近の噂はさすがに知ってるだろ。天羽と西月と近江の件は、あれだけ噂だ、十分承知してるだろ」

このあたりは頷いてもよさそうだ。難波と直結しないところだけ頷くことにする。

「西月はすでに評議から降りているがそれでも元・評議であることには変わらない。その人間関係のごたごたはすべて評議委員の中で始まっている。評議委員とは何ぞや、と問われればどう答えるべきかわかるか、羽飛」

「わからねえよ、そんな難しいこと言われちゃっても」

「クラスの代表。青大附中で言えば選ばれし者」

——そんな大げさなもんじゃねえだろ。

突っ込みたいのをこらえる。難波も気取った口調で何かをごまかそうとしているのが見え見えだ。

「要するに、エリートってことか」

難波は否定しなかった。いい根性している。

「だが、その選ばせし評議委員たちのやらかした最近の言動はありゃなんだということに、先生たちも業を煮やしている。今に始まったことではないと俺たちも承知している。身から出た錆と言えればそれまでだ」

——霧島のこともあるしなあ。

なんだか背筋がむずがゆい。こういう時こそ身体動かして、一発雪球をお見舞いしてやりたい

のだが、そういうことも出来なさそうなムードではある。

「で、今何が起こってるんだ？ 難波、評議委員会ってそんなに危機一髪状態なのかよ。まじで俺、立村から全然聞かせてもらってねえしな。生徒会がらみの話ならちょこっと聞いたけどな、その、『大政奉還』ってあれか？」

「そうだ、羽飛」

重々しく難波が頷いた。

「立村の考えていた、評議委員会から生徒会への『大政奉還』はあくまでも、互いに協力するためのものだった。少なくとも立村はそう主張していた。俺たちもまゆつばもんだとは思っていたが、奴の真剣な顔に仕方なく従ったところはある。だがな、よく考えてみろ、生徒会側からしたら本当は全部、うまい部分もらいたいよな。今までは評議委員会が鉄壁の守りを誇っていたからそのままなんとかあったが、この体たらく。教師側もあららってことでかばう気にもなれないだろう。さらに出来のいい生徒会連中たちの、きっちりした要望提出書をいろいろ読んでいたら、当然、肩入れするのは言うまでもない」

「つまりなんだ？ 結局評議委員会が身包み権利を持ってかれちまうってことかよ？ 立村の想定以上にか？」

難波は人差し指を貴史に向けた。真正面で「犯人はこいつだ」のポーズを取った。

「お見事。そういうわけだ」

同時に昼休み終了の鐘が聞こえた。ぐだぐだしていた一年男子連中が手袋を叩きながら反対側の中庭出口に走っていく。貴史も難波についていく格好で来たところに戻り、上靴にひつついた雪を払った。

「けどな、それだと本当は立村復活を待った方がいいんじゃないかねえの」

すれ違う他クラスの連中に聞かれないよう、できるだけ難波に張り付き貴史は質問を投げかけた。一瞬ホームズ顔に戻った難波は、

「今のあいつに、それできると思うか」

それだけ言い放ち、三年の教室まで階段を駆け上がっていった。

——えれえことになっちまってるんだな。評議委員会も。

難波の説明だけで把握できたとは到底思えない。ただ、おととい起きたA組がらみの大立ち回りが突破口になり、今まで守ってきた評議委員会の権利らしきものを全部生徒会に譲らせようとする動きが出てくるのは当然のような気もする。最初話を持ち出した時、生徒会長は藤沖だったし、立村も当時は仲良く接していた。うまくもって行くつもりだったのだろう。それが予定とは異なる出来事が起きてしまい、生徒会長もあの賢くかわいい佐賀はるみ……鈴蘭優の髪型と同じなら基本的にどの女子もかわいい……ときたら、もう勝ち目はないだろう。立村がいたらどういいう切り込みをしていくのか聞きたい気もするが、いきなり貴史に「さあどうする」と差し出されたとしても、何も言いようがない。

——まあしょうがねえんじゃないかねえの。難波の前では言わねかったけどな、A組事件に加えて、霧島アマゾネスの自殺未遂ってのも関係してくるだろ。全部現役評議、元評議、五人関わって

るじゃあねえの。あ、更科入れれば六人か。

立村が聞けばまたいろいろ心痛めるかもしれないが、貴史はまだまだ部外者だ。クラスの問題にはこれから教室戻ってとことん取り組みたい。菱本先生とも、美里たちとも約束したことだ。覚悟はある。ただどう考えても評議関係のいざごさは、貴史には遠すぎる。

——まあ女子のこともあるし、美里に放課後、聞いてみるか。

近江の様子は意外と普通だったという美里の言葉を信じたかった。そこまで貴史は背負い込めない。親友でもない連中に対してはとってのほかだ。

五時間目の授業がゆるゆる進み、あっさり授業終了の鐘が鳴った。

——さてと、菱本先生を捕まえてみるとすっか。

難波にとっ捕まったせいで、「立村邸訪問記」を聞かせてもらえなかった。帰りのホームルームにはいくらなんでも来るだろう。貴史は机を指ではじきながら待った。

「みんな、ちょっと待ってくれ！」

扉を開けるやいなや、菱本先生が飛びこんできた。背広を着ている。男前だがそんなこと知ったことじゃない。全員ざわめいた。

「待ってますけど、どうしたんですか」

きわめて冷静に美里が問いかけた。

「清坂、お前も待ってくれ。それと羽飛。お前はいるな」

「何あせってるの先生」

ぞわりと、首筋中心にざわめく感触あり。貴史の声に菱本先生は頷き、教卓に両手をどっしり置いた。音が響いた。痛そうだ。

「いいか、今、立村が学校に来ているんだ」

一気にまくし立てた。つつこむ暇もない。言葉が出ない。

「実は三四時間目使ってあいつの家に行ってきた。お前たちの想いも含めてすべて伝えてきた。そうしたら、立村のほうから学校に行く決断をしてくれた」

「え、まじで？ それほんとかよ」

貴史の代わりに他の奴らがざわめき出す。

「いや、すぐではない。その後、学校に連絡が来て、これから学校に連れていくとご家族の方から連絡があった。それで今、みんなに頼みたいことがあるんだ」

全身が情熱の火玉と化した菱本先生の声が教室中に響いた。

「今、教師研修室にいる。これからクラス全員であいつを迎えにいこう、行くぞ！」

——おい、先生、まじかよそれ。

答えを待つでもなく、最初に美里が立ち上がった。クラスメートたちの顔を一切見ることなく扉を開けた。同時に他の連中も釣られるように美里の後を追った。南雲がちらと貴史をみやり、教室を出たのが嫌味に思えた。貴史も菱本先生に駆け寄った。何かを言わねばならなかった。

「先生、何あいつに言ったんだよ？ まじであいつ、動いたのかよ」

「あとで話す、お前が本当は先頭で行くべきだ。早く、一刻も早く行ってやれ」

首を振り、貴史の背を押すようにして菱本先生も外へ出た。廊下では他クラスの生徒たちがとまどい気味でD組連中の集団移動を見つめている。さすがにここで理由を説明する物好きはいないようだった。階段を下りるところでD組先頭集団に追いつき、菱本先生と美里の三人で並んで一階まで駆け下りた。まっすぐ、そのまま、教師研修室へ駆け出した。

——三年D組になんで来ねえんだよ、立村のばかやろう！

ちらと美里の横顔を見た。唇を引き締め、ただひとつのことしか考えていないようなまっすぐな瞳のままだった。それが、いつもの美里だと貴史は知っていた。

教師研修室の後ろ扉にたどり着くところで、菱本先生が立ち止まった。

前扉が開いた。

ひとりが出てきた。

「立村くん！」

美里が叫ぶ。青大附中ではひとりしか着ていないとんびのマントを羽織った男子生徒といえは、奴しかいない。誰かを片手で押さえて、引っ張り出そうとしている。いったん立ち止まった。こちらを見た。美里を見た、貴史に目を向け、三年D組のクラスメート全員を見つめた。

「どうしてうちの教室に来ないのよ！」

後ろで一部の女子たちが、

「みんな心配してたんだよ」

と、まったく心の籠っていない言葉を発している。貴史も何かを言わなくてはならないことが分かっている。口が動かないなりに、呼びかけた。

「なんで立村、三日も休んでいる？」

——間抜けすぎるぞ、なんだよ俺、もうちっと何か言えよ！

なのに動けない。自分に鞭打って、前に進もうとする。美里も駆け寄ろうとして、途中で止まった。菱本先生が貴史たちを制するようにして、一歩ずつ前へと進み、立村に立ちはだかった。

「立村、来る勇気を出してくれたのか？」

——やめろよ先生、そんなことあいつの顔に違うって書いてるだろうが！

口を動かすだけ。呼びかけられない。三年来立村と付き合ってきてよくわかった、どう考えても菱本先生は立村の地雷を踏んだとしか思えない。もし納得して帰ってきたのなら、立村も観念して三年D組の教室に来たかもしれない。いったいどういう話を立村の家でしたのかはわからないが、あの冷ややかな眼差しには三年D組の想いを受け入れようなんて気持ちはまったくない。先生のお説教だけではどうしようもない。貴史が、美里が、とっ捕まえてとことん語らなくてはならない、それなのだ。

——待てよ、立村逃げるなよ！

叫べない。ふと気がついた。後ろで引っ張っている女子の肩に白いショールらしきものが巻いてあったことを。少しふっくらした感じのポニーテールの女子を認めた。

——あの女子が、確か。

名前が出てこなかった。美里なら知っているはずだ。立村が選んだ、あの女子だ。

「先に帰ります。失礼します」

立村は菱本先生と、もうひとり誰か後ろにいるらしい相手に二度頭を下げた。そのまま、女子の手首をしっかりと握り締めたまま背を向けてそのまま歩き去った。男女みな、ただ見守るしかなかった。

「ははん、ありゃあ、告白したっぽいですねえ」

南雲と東堂がにやにやしながら盛り上がっている。男子連中もみなぼかんとしたまま立ちすくんでいたが、ふたりの会話に興味津々とばかりに乗ってきている。

「そうだなあ、思えばそろそろバレンタインデーも近いってことだしなあ」

「そりゃあ逃げざるを得ないわな、そう思わん？」

男子連中の脳天気な話題が背中でみしみしと響き渡る。

「あのなあ、南雲」

「だってあの状態じゃあ、引きとめられませんよ、なあみなさん？」

にっこり、いつものアイドルスマイルで南雲が他の三年D組男子連中に呼びかけた。

「俺が思うに、りっちゃんめげてたけど、もうひとつの愛で立ち直れそうじゃん？ クラスにはまだ来てないにしても、復活は近いし、ちゃんちゃんでいいじゃん？」

「あのなあ、南雲、お前何考えてるんだ？ あいつが逃げたの、お前見てただろうが！」

火が付く。菱本先生が慌てて貴史と南雲の間に割り込む。

「お前ら、こんなところでまた小競り合いするじゃない！」

「けど、先生ありゃあねえだろ？ 立村、あいつ、うちのクラスに来ないであのまま帰していいのかよ！」

次に菱本先生に食ってかかった。そうだ、もともとは菱本先生が悪いのだ。菱本先生がまたわけのわからない地雷言葉をぶつけて立村をぶち切れさせたに違いない。もうあいつの心は永久凍土になってしまう可能性大だ。それを避けたくて貴史はありとあらゆる手を尽くしてきたのだ、なのに、なぜ。

「落ち着いてくれ羽飛。俺も、今日話をして、すぐに立村が来るとは思ってなかったんだ。きっと、あいつなりに悩んで、一歩足を踏み入れたんだろう。でも、きっと怖かったんだ」

女子たちのあきれた声が混じる。男子たちがどっちを信じればいいのか分からず戸惑い顔で南雲と東堂コンビを覗き込んでいる。

「まだ、心の準備が出来ていないんだろうな。だから、心を許せるこの教室に最初来たんだろう。それから、D組にと考えていたんだろう。これは俺が先走ってしまった。だが、今、一歩、確かに進んだんだ。清坂、見ただろ」

美里は無言で頷いた。言葉はなかった。

「立村はクラスに戻ってくる。少なくともその意思はある。ただ、時間がかかるかもしれない。いいかみんな、もう少しだけあいつに時間をやってくれないか」

後ろでまだ南雲がつぶやいている。

「だから、単に杉本さんに告白して照れてるだけだと思うんですけどねえ。からかうのは控えたいとは、思いますよ。なあ東堂大先生？」

放課後の流れとしてそのまま全員下校と相成った。空は明るく、真っ白い雪だけが輝いていた。教室に戻りそのまま荷物をまとめ、それぞれが教室を出る中美里をすぐに捕まえた。

「美里、行くぞ」

「そうね」

素直に美里は従った。「なによ、自分のものみたいな扱いするんじゃあないってば！」とか突っかかってこないところみると、相当参っているのだろうと伺えた。どっちにしろこれから先どうするかは歩いて話してみないとわからないってことでもある。

「それとだ、南雲」

もうひとつ、片付けておきたいことがある。同じくかばんをぶら下げてのほほんと出て行こうとする南雲を呼び止めた。一緒にいる東堂も立ち止まった。

「さっきのあれ、何考えてるんだ？」

「だって、そうじゃん、なあ？」

軽く、何も考えていない風に南雲は答えた。東堂のいきり立ちそうな様子を肩動かして止めるようなしぐさをする。まだ教室には男女ともに数人が残っている。

「なあにが『告白したんじゃねえの』だ？ 立村が廊下に突っ立ってただけだってのに勝手な妄想して話を無理やり終わらせてどうするっていうんだ」

「だってさあ、そういう雰囲気だったよなあ？ どう見ても。俺のささやかな人間関係の経験からしてもそうだよなあ」

貴史よりも東堂メインで話しかけているのがさらにむかつく。近づいて、真正面から睨みすえてやる。美里が追いかけてきて、

「やめなよ、つかかるの。南雲くんが悪気ないんだから」

「お前は黙ってる。俺は南雲としゃべってるんだ」

「あっそ」

あっさり美里も引いた。幸い古川こずえはいない。邪魔する奴はいない。

「俺が言いたいのは、なんで追っかけなかったってことなんだ！ わかるか、立村の奴、わざわざ学校に来ておきながらなぜかE組にこもっちまい、そのまま逃げ出したってそういうわけだ。もちろんそのきっかけ作ったのは俺だし、俺が悪いってのは承知してる。けど、なんでお前らあのまま、脳天気な結論で収めようとした？」

「どうすればよかったってやつで」

南雲が無言のまま見返してくる。返事をしたのは東堂だった。からかい口調。

「あたりめえだろ！ 誰かひとりおっかけてあいつをとっ捕まえて、一対一で話をしろってそう言うべきだったろ？」

「じゃあなんで、羽飛行かなかったんだ？」

「行くつもりだったぞ！ お前らがわっけわからねえこと言い出すまでは！」

その通りだった。

いくら菱本先生に制されていたとしても、貴史は突っ走るつもりだった。

言葉が出なくても、美里が叫んでも、誰がなんと言っても本当だったらあそこで人掻き分けて立村をとっ捕まえるべきだった。なぜ足が動かなかったのか、なんで意味不明なつぶやきしかなかったのか、自分でもわけがわからない。ただ一番よいことというのは教室に戻って初めて気づくこと。どんなことがあっても、

——立村を三年D組の教室に連れてくる。

これだけだったはずだった。

「あのさ、羽飛」

ブレザーのポケットに片手を突っ込み、上目遣いで軽蔑視線を送ってくる南雲に身構えた。まったくもって南雲は貴史に本気でかかってくる気がなさそう。三年間、ほとんどそうだった。貴史が正論でもって勝負をかけても、へらへらした顔で流されるだけだった。こいつとの勝負をつける必要は感じてきたけれども、タイミングを失っていたとしかいいようがない。

「りっちゃん捕まえてどうするの」

「この前二時間語っただろうが！」

「語った結果、もしかして忘れたの。トップシークレットだってこと、忘れたのかなあ」

さらりと、きっぱり言い放つ南雲。

「俺が思うに、清坂さんも言ってた。『立村くんには絶対に言わない』ってことをさ」

美里に視線を向ける。当の本人も馬鹿正直に頷いている。満足げに南雲は貴史に視線を戻した

。「つまりそういうこと。今この場でりっちゃんが教室に戻ってきてみなよ。仰天するよ。いつのまにか二時間も延々と自分の個とネタにされて議論されて、しかも自分の隠したいことを全部暴露されていて、極め付けがさ、自分はずっと女子に嫌われていた現実を目の当たりにするだよ、自分がもしそうされたと考えてみたら、答えってあっさりであるんじゃないのかな」

「だけどな、あいつ戻ってきたら？ 菱本先生が何言ったかわかんねえけど、とりあえずは反応したら？ そこからなんとかしないとまずいだろが！」

「あのさあ、先生の話、聞いてた？」

あきれた風に南雲は言い返す。

「りっちゃんは戻ってくるけど、時間が必要だってこと。そりゃあそうだと思うよ。いくら羽飛が土下座しようが他の連中が生暖かい微笑みで迎えたって、はい そうですかと受け入れられるとは、俺、思えないんだよね。それこそ、ゆっくり様子見が必要なのは、ごくごくあたり前のことだと思うんだわ」

言い返せないことを南雲ばびしばしと続ける。

「それにさ、こういっちゃんだけど、俺たちもまだ心の準備ってもん、できてないと思うんだ。まだ一週間も経ってないのにどうすりゃいいって感じだよ。俺ももちろんりっちゃんには戻ってきてほしいよ。けど、向こうがまだ落ち着いてないのにいきなり引っ張り出すってのは人間と

してどういふもんかなと、まあ、つい、そう思うわけ。どう思います、東堂大先生？」

貴史ではない、東堂に再び問う。

「もちろん同意でさあ」

「だったら話は早い、ってことで悪いけど俺も東堂もそれぞれ委員会ってのがありますんで、お先に！」

女子殺しのさわやかな笑顔を野郎連中にも見せ付けて、南雲は腰巾着の東堂を連れさっさと教室を出て行った。委員会が葵の御紋、勝手にしろって言うんだ。

しばらくざわついていた教室も、これ以上関わりたくないとみな判断したのか人があっさりいなくなった。南雲ではないが、まだ二月だと委員会関係のイベントもいろいろ忙しいらしい。難波が話していた通り評議委員会と生徒会との話し合いもまだついていないようだし、帰宅部の貴史にはまったく割って入れない内容ではあった。

さっきまでずっと黙ったままの美里が声をかけてきた。

「貴史、気がすんだ？ 行こうよ」

「お前、評議委員会どうするんだよ」

「そっちなんだけど、今日は私、抜けさせてもらうことにしたんだ。先生たちからも許可得てるんだけど」

美里は襟元のマフラーを肩にかけ、毛糸の帽子をしっかりとかぶり直した。

「これから、近江さんのうちに行くの」

「近江って、あのA組の評議の、例の」

言葉が詰まる。ちょうど話題最高潮とも言える、「青大附中視聴覚室傷害事件」の被害者、近江紡のことを言っているに違いない。美里は頷いて、そのまま廊下に出た。

「生徒会のことは天羽くんたちががんばってるし、女子はご存知の通りこのざまだし。だったら同じ評議仲間の近江さんのフォローをしてもいいかなと思って、昼休みに狩野先生へお伺い立ててきたの」

そんなの気づかなかった。

「そしたら、『お友だちとしてぜひ、紡ちゃんのところに来てもらえるとうれしいですよ』だって。お嫁さんの妹なんだもんね。ちゃん付けで呼んでるね。かわいがってるんだよ」

「あの狩野先生が、『ちゃん』付けで呼ぶのかよ」

意外だ。公私混同とはまったく縁のなさそうな狩野先生だが、正直その言葉を発する場面が想像つかない。

「そう、私もびっくりしちゃったんだけどね。だから、ちょっと待ってて。これからまっすぐ行くから、うちに電話入れておかないとお母さんたちまた心配するし。貴史も悪いけど、そういう事情があるから今日私は遅くなるんだっておばさんにも伝えてね」

「なんで俺が母ちゃんに言う必要あるんだあ？」

美里はあっさり答えた。

「当たり前じゃないの。うちの母さんがまた私のことを不良化の兆しじゃないかって心配してあ

んたのお母さんに連絡するのは目に見えているでしょ？ 私もそれ避けるために電話かけるけど、娘の言うこと信じない可能性だってあるじゃなあい？ だから貴史の方からもちゃんと言ってもらえれば、あとは余計な心配しなくてももらえるしね」

確かにそうではある。互いの娘・息子のことを心配するあまり、親友同士の母ちゃんズは想像をたくましくしすぎてとんでもない発想をしでかすことがある。経験者としては当然の行動とも思える。

「けど今日は、ちゃんと近江ん家に行くって話にしてあるんだろ？ 別にお前不良化の兆しのプリントみたいな格好してディスコで踊るとかそういうつもりじゃねえし、それならな、むしろ、近江の家の電話番号伝えといてそこにかければ絶対いるって言うておきゃ、すべて丸く納まるだろ？」

生徒手帳から美里はテレホンカードを取り出した。ロビーの緑電話に向かいながら、
「そうだね、それが一番いいかも。連絡してくるようなことなんて、ほとんどないと思うんだけどね。ほんと、中学になってからうちの親たちなんでよけいな心配したがるんだろうね」
肩をすくめ、背を向けた。

美里が電話をかけている間、貴史はその脇にあるベンチに腰掛け、両手を組んで目を閉じた。話し声が聞こえる。

「お母さん？ 私。あのね、今日私、近江さんっていう友だちのうちにこれから遊びに行くんだけど、遅くなるかもしれないの。それでね、貴史にも伝えてあるんだけど、ちゃんとその子のうちにいるから、もしなんか連絡があったら、近江さんのうちに電話ちょうだいな。ええっと、電話番号なんだけど」

生徒手帳を取り出し、番号を読み上げている。

「市外局番？ そんなのないよ。市内だもん。それじゃあね、あ、今側に貴史いるけど、心配だったら確認する？ いいっか。わかった、じゃあ」

意外とあっさり終わったようだった。

「市外局番なんて聞かれたのかよ」

「なんでだろ、ばっかみたい。そんな遠くの友だちなんていないのにね。品山だって市外局番変わらないよね」

触れた。いつか触れざるを得ない一点に。

「変わらねえだろ」

ぼそっと答えてやった。

「そうだよ。そんな遠くないよね。けど、大丈夫かな」

「ああ？」

「杉本さん、無理やり立村くんにつっ張られてたけど、すごく困った顔してたね」

そんなの見てないから知ったことじゃない。貴史は首を振った。

「たぶんなんだけど、立村くん、杉本さんに会うためにだけ、学校に来たような気がするんだ」
小声で、貴史にしか聞こえないようにつぶやく美里を、横目で見ると、

「立村くん、私たちになんて会いたくなかったのかもね」

「そんなこたあねえだろ。いきなり俺たちが襲ってきつたからあいつのことだ、おじけづいただけに決まってるだろ」

「違うよ、きっと」

美里はすっと真正面を見た。一年の教室廊下が続くその奥を見据えていた。

「今の立村くんには、杉本さんしか信じられる人がいないんだよ。私じゃないし、うちのクラスの誰かでもない。味方、あんなにたくさんいるんだよってこと、どうやったら伝えられるだろうね。あんただって、南雲くんだって、こずえだって、それに」

「お前もな」

「うん」

そのまま美里は立ち上がった。貴史に振り返り、無理に作った笑顔で招いた。

「じゃあいこっか！ あと一ヶ月あるんだもん、なんとかなるよね！」

美里が無理をしているのは見え見えだ。南雲のど響聲としか思えない発言でもって、一応は現行の恋人であるはずの美里の立場がひっくり返ってしまったわけだから。立村が杉本とかいう二年生の女子に告白をかましたとしたら当然美里は振られる立場となる。別れた彼氏彼女といったつながりを、これまでのいざこざをそのままひっくりめたまま続けていくのは非常に無理がある。

——けど、ありゃあ南雲の一方的妄想だろ？

証拠なんてひとつもない。

生徒玄関で靴を履き替え、美里と一緒に外へ出た。真っ白い雪が、硬く光り輝いている。まったく溶ける気配がなかった。

「近江の家ってどの辺なんだ？ お前、知ってるのか？」

肝心なことを確認するのを忘れていた。とりあえずは「市外局番」の異なる地域ではない、それだけはわかっているのだが、実際どのあたりに住んでいるかは聞いていない。

「ううん、行ったことないんだ。いつも近江さんと会う時は喫茶店ばかりだったから」

「金持ちだなあ。じゃあどうやって待ち合わせするんだ？」

「たぶん、駅前。電話してみるね。狩野先生も前もって私が行くってこと連絡してくれるって話してたけど、忘れてるかもしれないもんね。学校で気づけばよかった」

「いったん戻るか？」

貴史がそこまで話を進めた時だった。左手の職員用駐車場入り口に紫色の小型車が留まり、クラクションを鳴らしているのが聞こえた。

「あれ、どうしたんだろ」

美里も立ち止まり、その車を見据える。

「私たちへの合図？」

「たぶんな」

もう一度鳴ったのを合図に、美里が小走りに近づいていく。この道沿いにいるのは今のところ美里と貴史しかいない。合図が必要とすれば自分らしかいない。紫色のど派手な車を乗りまわす大人との付き合いは今のところない。

「貴史、ごめん、このまま私、あの車に乗ってくね」

「どうした？」

紫色の車助手席の相手と話をし、そのまますぐに戻ってきた美里は、少しだけ笑顔を見せてささやいた。

「怪しい人じゃあなかったよ。あの中にね、近江さんがいたの。迎えに来てくれたんだって！」

「近江、まさか無免許運転してたのか？」

頭を叩かれた。

「アホなこと言ってるんじゃないの！ 近江さんのお姉さんがわざわざ車出してくれて、おしゃべりするならいらっしゃって案内してくれるんだって！」

「近江の姉さんって、つまり、あれか？ 狩野先生の？」

「そういうこと。近江さんも一緒にいるけど、すっごく元気そうだったんで安心したよ。しばらく学校休むことになるので狩野先生のうちに居候するんだって。タイミングいいよね。私もちょっと、行って見るから」

誰もいないのを確かめるように、さらに美里が貴史の耳元に近寄る。誤解招く格好だ。キスシーンに見えそうでぞくっとする。

「狩野先生は立村くんのこと、目をかけてたから、ちょっと私も何気なく話題に出して見る。もしかしたら菱本先生よりも、立村くん力になってもらえるかもしれないしね」

——そこまで考えてたのかよ。

言葉が出ないまま、貴史は美里を見送った。後部座席に座り、反対側の出口から出て行くのを見守りつつ、貴史はひとり青空を眺めやった。

「

長すぎる一週間だった。

いろいろなことがあり過ぎた。

それでもまだまだ卒業式まであと二ヶ月。

——そうだよなあ、あと二ヶ月もあるんだよなあ。

次の日、貴史は早めに学校へと向かった。雪はまだまだ残っていたけれども、無理すれば十分自転車で走り抜けられる程度の道だった。美里には声をかけずに突っ走った。遅刻はするわけもないが、やはり先生と打ち合わせをする場合には気合つけて起きないとまずい。八時前に到着し、急いで職員室前に向かう。菱本先生は季節感関係なく早起き野郎なので、捕まえるにはベストな時間帯でもある。

「先生、おっばよ」

「ああ、羽飛か」

とはいえ眠そうな顔をしている菱本先生でもある。肩を並べて職員室に入る。意外にも中は暖かかった。先客がいるかと思いきや珍しく狩野先生が席について書類を眺めていた。

「狩野先生おはようございます」

「おはようございます、あの、よろしいですか」

遠慮がちに、静かに、狩野先生が菱本先生の元に近寄った。隣にいる貴史に軽く会釈をし、また狩野先生へ、

「お伝えしたいことがあるのですが、少しだけお時間よろしいですか」

いかにもお人払いを、と言わんばかりの目で貴史を見つめた。どうもこの先生は貴史にとって相性があまりよくない。好き嫌いの問題ではなく、波長が合わないと言ったほうが近いのかもしれない。授業が分かりづらいとかそういうのでもない。むしろ、かんたん過ぎて物足りないとか、あっさりし過ぎていて深みがないとか、そういったイメージだ。一方で立村が極端に懐いているのは、感覚が正反対だからだろう。あそこまで菱本先生を毛嫌いするのだから、違う価値観を持っていそうな狩野先生を評価するのは当たり前のことかもしれない。

「じゃ、先生、あとで教室で、失礼します」

こういう大人の話に無理な割り込みはしないが勝ちだ。さっさと職員室を出ることにする。すれ違いで教頭先生が現れ、

「やあ羽飛くん、おはよう！」

と張り切った声で挨拶をしてくれた。ずいぶんと有名になってしまったものだ。

「教頭先生おはようございます！」

もちろん、ため口は叩かずに挨拶しておいた。

三年D組の教室にはかばんだけが置いてあり、人気はまったくなかった。

たぶん部活の朝練だろう。いまだに三年生が必要とされる場もそれなりにあるということか。

とうとう三年間部活動とは縁のなかった貴史にとっては、理解できるようでできないところもある。まずはジャンパーを後ろのロッカーにかけて、それからストーブにぬれた手袋をかけて干した。

——それにしてもなあ、今日、あいつ来るのか。

かばんを机の上に置き、その上に座り、しばし考える。

——美里の前であんなことやらかしてたら、ただでさえ女子から総すかん買ってるのに止め刺されてしまうじゃねえか。どうするんだあいつ。俺ももうかばいきれねえぞ。

立村の謎の態度がどうも解せない。南雲の言う「杉本さんに告白していた」という説がガセネタだということくらいはわかっている。あれは南雲なりに、立村が教室へ戻ってきやすくするためのはったりだったのだろうと思う。貴史からするとあれば、そんな色恋沙汰がきっかけではない。ただひたすら、三年D組から逃げ出したい、拒絶した目つきそのものだった。拒絶された中には自分もいるし、もちろん美里も含まれている。今まで立村に対して多少なりとも好感を持っていた相手も含めてとなったら、このままだとクラスすべてを敵に回してしまう可能性もなくなる。

貴史自身はかまわない。ああいう奴なのだ、ああいう行動しか取れない奴だ、だからこちらで受け入れる覚悟はある。おそらく美里も同じだろう。しかし、クラスの連中はどうなのだろう。いくら立村が懸命にクラスのために尽くしてきたと認めても、全力で本人から拒否されたら、そりゃ面白くないに決まっている。

——なんとかあいつが戻ってきやすいようにしとかねばな。ちっくしょー、それにしてもな、狩野先生が割り込んでこなければなあ、俺なりにいくつか提案とか作っと思ったんだぞ。寝ないで考えたんだぞ。あーあ、立村、卒業式終わったらとことんお前と白黒勝負つけるからな。それまでは生き延びろよ。

教室の後ろ扉が開いた。振り返った。

「よ、おっはよ」

呼びかけてみて凍りついた。クラスメートではない。異形の……いや、それは女子に失礼な台詞かもしれない……雰囲気たたえた女子がひとり、教室を覗き込んでいた。

「あ、誰かになんか用？」

間抜けな台詞しか出てこない。誰か。そう誰かはわかる。しかし、何しに来たのかが貴史にはつかめない。

「おはようございます羽飛先輩」

一本調子の感情のない言葉で、その女子は戸をあけたまま一礼をした。白いショールを羽織り、二つ分けの長い髪、確かに昨日見た女子に違いない。貴史の苗字を知っている。

「立村に用か？」

思わず口走ってしまった。その女子が誰かを把握したら、当然セットでくっついてくるのは奴しかない。

「いいえ、清坂先輩に会いに参りました。まだいらっしゃいませんか」

「美里はまだだけどな」

まだ美里が来るには早すぎる。そのあたりは把握していない女子とみた。

「わかりました。失礼しました」

また丁寧に礼をし、背を向けようとした。背中の中の白いショールとふたつ分けにした髪の毛が揺れている。貴史は机から降りた。呼び止めた。

「ちょっと、待てよ。杉本、だったか」

「私のことをご存知でしたか」

——ああ知ってるわな。学年トップの成績取っていながら、現生徒会長をいじめるだけいじめて、学校側では中学卒業後追い出す予定っていう札付きの奴だってことをな。

杉本梨南という名前まで知っていた。立村が、この上なくやさしい眼差しで見守る唯一の女子であるということも。美里が、杉本にだけはかなわないと唇を噛んで見つめているということも。貴史からしたら、なぜこんなマイナスだらけの女子に自分の親友がのめりこむのかが理解できない相手でもある。

杉本梨南は感情のまったく見えない顔のまま、貴史の目を一直線ににらみつけた。妙な部分に力が入っているようだ。違和感が正直ある。

「そうにらまないでもいいけどなあ。あのさ、昨日、立村と一緒に帰ったろ。あのあと、どこ行った？」

「お答えする義務はございません。あるとすれば清坂先輩のみでございます」

——ございます、ときたかよ。

立村も相当のゲテモノ好みなのだと思わざるを得ない。噂には聞いていたが、貴史の知る限りの女子において、こういう気持ち悪さを感じさせる相手はいなかった。もちろん性格がよくないとか、嫌いとか、そういう感情だけならいろいろいる。しかし杉本梨南にはそれ以外のなにか、近づくだけでもわっとしたバリアのようなものが存在している。言葉遣いが変わっているとか、目つきが鋭いとか、そういうもの以外のどこか、できれば一生付き合いたくないタイプの雰囲気と言えがいいのだろうか。本当だったら一切関わりたくないが、親友のためだ、しかたあるまい。さらに尋ねる。

「あんまり言いたくねえけどな。あいつの親友としてやっぱ心配なんだよなあ。せっかくクラスであいつのことを心配してるのに、なんで逃げちまうのかとか、いろいろ三年でもあるんだよ。そいで、俺なりに聞いてるんだけど、あいつ、ちゃんと家、帰ったのか？」

「たぶん帰ったはずですよ。品山までお付き合いしたわけではございませんので」

ふと、杉本が目線を揺らした。どことなく言葉を濁しているようにも見えた。

「で、別の噂もあるんだけどな、立村に何か付き合いかけられたとか、そういうのもあったのかよ。あ、これな、あんたを責めてるんじゃないかと、立村をクラスでこれ以上浮かさないようにするためなんだけどな。協力してもらえないか」

「そういうクラスだったのですね」

あきれたように杉本は言い放つ。貴史としてはこれこそ、なぜ杉本梨南が学校を追放予定とい

う判定を成されたのかがわかるような気がしてきた。先輩に対する言葉遣いになっていない、という意味ではなく、接する相手を一瞬のうちに嫌悪させてしまうといった言動が一番の理由じゃなからうか。美里やこずえは結構彼女を買っているらしいが、男子に関しては杉本をよく言う奴を聞いたことがない。

「その言い方、ねえんじゃねえの」

「立村先輩がお逃げになりたくなる気持ちが少しだけ理解できました」

まったく目を逸らさず、力も顔と唇、すべてに込めて杉本は言葉を次ぐ。

「私は下級生ですので三年の先輩方がどのようなことをなさってらっしゃるのかは存じませんでした。おそらく立村先輩に問題があるのではと感じておりました。そうでなければ清坂先輩があれだけ尽くしてらっしゃるにも関わらず、あんな行動をなさるわけがございませんので」

「おい、あんな行動ってなんだ？ あの、まさか立村やっぱり付き合いかけたのか」

「付き合いという下品なお言葉はおつつしみのほどを」

まったく口調も眼差しも変わることなく、杉本の罵倒は続く。

「ですが、今、羽飛先輩とお話させていただきましてよく理解いたしました。こういうクラスに三年間いらっしゃったのであれば、立村先輩が逃げ出したくなることも当然のことでございます。また清坂先輩がいらっしゃいましたらお伺いいたしますが、立村先輩がもう二度とこのクラスに戻ってこられなかったとしたらそれは仕方のないことかと存じます。ご承知くださいませ。それでは失礼いたします」

「おい、ちょっと待て、言い方にもほどがあるぞ！」

だめだ、これはもう完全に切れた。女子に手を出すのは最低だとわかっていても、この女子、杉本梨南に対してだけは「例外」マークをつけてぶん殴りたい。もちろんそんなことは許されないし耐えざるを得ないが、これだけ言いたい放題されたらクラスの連中が激昂するのもはや当たり前前にも思える。もしこの女子がクラスの一員だとしたら、杉浦加奈子レベルの問題ではなく、ためらうことなくクラスから追放するだろう。風の噂によると杉本梨南をかばう声はほとんどなく、一瞬のうちに二年男女問わず佐賀はるみ生徒会長の味方としてついたという。現在E組という離れ小島に流されても、誰一人人権侵害だとかそういう申し立てをせず、当人の親すらも甘んじて受け入れていると聞く。戦っているのはピエロのようなこの、杉本梨南ひとりだけとも。もったもだ。

「お前さ、立村からどんなこと聞かされているかわからねえがな、うちのクラスは必死にあいつのことを仲間にしたって思ってるんだ。クラスのありがたみを感じられないあんたなんかにはわからねえかもしれねえけどな、懸命に、立村は俺たちの仲間だと受け入れようとしてるんだ。美里だって、あんたとのくだらねえ噂を吹き込まれて落ち込んでてもいじめなんかに発展しないようになって一生懸命押さえてるんだ。普通だったらリンチされて吊るされてもおかしくないこと、あんたしてるって、理解してんのかよ」

「何をおっしゃってらっしゃるのやら」

馬鹿にしきった顔で杉本が答える。これこそ火に油を注ぐと言う。ショールを引っつかんで投げつけて踏みにじってやりたいが、そればかりは必死にこらえる。

「下劣な想像をなさってらっしゃるのでしたら、お答えするつもりはございません。ただこの件だけは申し上げておきます」

きっぱり、全身の力を振り絞るように杉本は言い放った。

「この中で立村先輩の求めているものをお持ちの方は、清坂先輩と古川先輩以外、どなたもいらっしゃらないということがよくわかりました。能力を認めず、くだらぬ『ありのままの自分』などを褒められて、喜ぶ人間がいますか。私は、決していないと思います。もしこのクラスに立村先輩をお戻しになりたいのであれば、先輩が求めているものを何か、お考えになることが先決なのではございませんか。時間が無駄でございますので、失礼いたします」

——この女、ちょっと甘くすればつけ上がりやがって！

新井林がぶちぎれ、佐賀がこてんぱんにやっつけたかった気持ちがよくよく分かる。美里にもこの言葉を突きつけてやりたい。いい加減この女をかばっている女子たちに目を覚ませとってやりたい。自信を持って死刑判決出してもいい女子がいれば、こいつしかいない。鬨聲承知で言おう。いじめられて当然といえるのはこの杉本梨南以外にいない。

「貴史、いい加減朝っぱらからエキサイトしてるんでないの！もう、何考えてるのよ」

いきなり後ろから両耳をぱしんとやられた。手袋の感触で柔らかい。

「おい、お前いつのまに來てたんだよ」

美里が毛糸の帽子をかぶったまま、えらくとんがった眼差しで貴史をにらみつけていた。

「あんたには関係ない話なの。下級生いじめるのやめなさいよ。あ、ごめんね杉本さん。來てくれてよかった。私から行くつもりだったんだ。ごめんね」

杉本梨南のにらみつける眼差しが美里に向かう。美里の口調も貴史にぶつけるものとは全く別の柔らかさが漂っている。

「清坂先輩、お見苦しいところを失礼いたしました」

「貴史も悪気ないんだけどね。立村くんのことので今、頭、かーってなっちゃってるの。ごめんね。それでね」

すばやく美里は杉本のショールをそっと押すようにして窓辺に連れて行き、ひそやかな会話を交わしていた。とつてもだが追いかけるつもりなんでなかった。あんな嫌悪感ばりばりのにおいを持って接してくる女子とは、金輪際付き合いたくない。人の気持ちを感じずに罵倒し、その上で人の思いやりを丸ごと否定する女子など、人間として決して認めたくない。

——けど、なんで立村はあんな女子のことを。

——美里もなんで、受け入れられるんだろうか。

むしゃくしゃする。さっさと自分の席について、貴史は机に教科書を全部詰込んだ。

「おっはよお、あれ、羽飛どうしたの、いつものさわやかさがいいわねえ、抜きたりなかつたりする？」

いつものさわやかな朝の女王登場。古川こずえがぐるっと教室を見渡し、他の女子たちにも手を振りながら席についた。貴史の下に駆け寄ってくる。いいタイミングだ。言ってやった。

「あのなあ、古川」

「はいはいなーに」

「あの、杉本って女子、なんでお前ら女子めんこがるんだ？」

廊下の窓辺を見やった。美里が杉本に手を振っていた。

「男子と女子のかわいいと言う概念、違うからね。あんたにはわからないか」

一人ごちたあと、古川はつぶやいた。

「自分とおんなじところがあって、絶対隠さなくちゃってことをあの子は丸出しにしてくるからね、男子は見たくないかもしれないけど、女子としてはそういう不器用さがかわいく思えちゃうんだよ」

「全然わからねえなあ。立村も、そういうところ気に入ってるのか」

「さあね、ただ」

大きくため息を吐いてこずえも答えた。

「お互いにどうしてほしいかがわかりあってるから、馬が合うのかもしれないね。杉本さんは立村が何をしてほしいかがわかるし、立村は杉本さんのしてほしいがっていることが奇跡的にわかってしまう、それは大きいよ」

「ぜーんぜん、あいどんととのー」

肩をすくめ、美里が教室に入ってくるのを待つ。まずは昨日の首尾を確認したい。

「美里、ちょっと来いよ」

「ごめん、あとで詳しく説明する」

つれなく自席に戻った美里は、他の女子たちに話しかけるでもなくかばんから荷物を取り出し始めた。朝自習のプリントをつまみ上げ、何も言わずに専念し始めた。

——明らかになんかあったな、あいつ。

貴史は立ち上がった。すぐに美里の席に駆け寄った。さらさら書いている朝自習プリントを取り上げた。

「なーにまじめぶりっこしてるんだか、ちょっと来いよ」

「何よ、もう」

それでも貴史の顔を見上げると、納得したように頷いた。

「わかった。ちょっとだけ説明しとくね。けど、このことはまだ誰にも言わないで」

教室の窓際で、外のきらきら光る雪の塊を見つめ、美里はゆっくり言葉を発した。

「立村くんのことだけど、今は杉本さんに任せておいたほうがいいのかもしいよ」

「はあ？ あのゲテモノ女にお前何言われた？」

「失礼なこと言うんじゃないの！ あんたもなにかっかしてるんだか。男子って変よね。あの子本当に性格のいいかわいい子なのに。とにかく、さっき杉本さんは立村くんの様子を心配して私に報告しに来てくれたの」

報告、たって、美里からしたら恋敵だろうに。よくわからない。

美里は首を振った。

「男子ってこのあたりほんっとによくわかんないみたいだけど、女子同士ではね、わかるもの

なの。もしかしたら立村くん、もうしばらく学校に来れないかもしれないくらい、参っちゃってるってことなのよ。だから、それだったら、どうしようかって

「来るまで待つしかねえってことか。んで、あの杉本とかいう女が」

「ちょっと貴史、その女、って言い方やめなさいよ！ とにかく、立村くんが来てから、一緒にとことん話そうよ。けど、今はまだ杉本さんしか話の出来る人がいないみたいなの。私だって話、いくらでも聞いてあげたいんだけど、どうしてもだめみたい」

「お前最初からあきらめててんのか？」

少し苛立つ。あの救いようのない札付き女に美里が負かされるのを見たくはない。

「あのな、よっく考えてみる。美里があつ女に立村取られたままだとずっとどうなる？ せつかくあと二ヶ月あるってのに、立村は女に狂ちまって結局最低野郎のまま卒業する羽目になつちまうと、そういうわけだ。せつかくあれだけ俺たちが大演説繰り広げたってのに、水の泡だ。ってことになるのととにかく捕まえて話、する機会何とか作らなくちゃなんねえってことじゃねえのか？」

「あんた、そうしたい？ 立村くんと、語りたい？」

「当たり前だろ？ お前はどうかんだ？」

貴史の問いに、美里は唇を噛みつつ、顔を上げた。

「うん、私も、言いたいことあるよ。とにかく機会、作ろうね」

美里がそこまで話した時だった。

前扉が開いた。

——立村？

たまたま目線が扉に向いていた。開いた時目が合った。

「立村！」

「立村くん！」

顔色が真っ白で、どこかしょぼくれた表情で、そこに立村は突っ立っていた。

斜め前で扉を開けたのは南雲だった。入りかけて、きょろきょろしている。まだ立村はひとりだけぽつんと立ち尽くしたまま、おびえた風はこちらを見ている。

言葉よりも身体が動いた。美里と一緒に駆け寄った。最初に何を声かければいだろう。最初にこいつにしなくてはいけないことはなんだったのだろう。いっぱい考えていたくせに、すべて忘れてしまっている。美里だけが駆け寄りながら叫んでいる。

「立村くん、どうしてそんなに馬鹿なのよ！」

横の南雲を押しやり、貴史もそのままの言葉をぶつけた。

「立村、なんで逃げたんだよ！ 俺だって」

——話し合えば、わかるってことあるだろ？ 何でお前、ひとりで逃げちまうんだよ！

目の前の立村が、一步、退いた。まずい、このままだと逃げられる。声をかける前に立村の声が細く聞こえた。

「ごめん、少し離れてくれるか」

——ちょっと待てよ。また逃げる気かよ。

踏み出した。立村のコート越しに、肩に手をかけた。冷えていた。美里が手を伸ばし、真正面から話しかける。

「言いたいことあれば、言ってくれればいいじゃない！ そんなわけわからないことしないで！」

何度も、何度も、この三年間声かけし続けてきた言葉、やはり届かない。無駄だと分かっているけど貴史は言い続けるしかない。美里と一緒に。目の前の立村がおびえたようにふたりをきょとよと見ている。大丈夫だ、受け入れられる、全力で貴史はどうしようもなく震えているこの親友を守るつもりでいる。美里 だって一緒だ。それだけをなんとしても伝えたかった。

「そうだ、お前、何も言わねえで行くんじゃねえよ！」

——いくらでも、仲間が待ってるんだ。あの札付き女よりも、誰よりもこのクラスの連中はお前のいいところみんな知ってる、お前のして欲しかったことじゃねえかもしれねえけど、でもお前がそのままでいいってこと、わかってる、だから、こっちに来いよ。

立村が貴史の手を静かに振り払った。下から見上げるようにして、貴史と美里を見た。

「りっちゃん、どうした」

側でぽかんとしている南雲のジャンパーを片手で握り締めるように「ごめん、出直してくる」と声をかけ、ゆっくりと貴史と美里を見つめた。硬直している。

「後で話す。ごめん、悪かった」

それだけ言い残し、立村はくるりと背を向けた。あの日と同じように全力で廊下を駆け抜けていった。追えなかった。南雲が冷ややかに貴史に目を向け言い放ったからだった。

「あちゃー、せっかくりっちゃん来てくれたのに、英語の予習ノートだけ残して帰っちゃったよ。どうすんの。クラスのまとめ役としてどんなもんなんですか。一方的過ぎるのって男も女も受けないと、思いますけどね」

その日はただ沈黙が続いていた。

——立村、あいつ結局どこ行きやがったんだ。

ちろちろと噂だけは流れてくる。

「さっき、ちらっと見たけど、E組のほら、あの杉本さんって子のところに座ってたよ」

「保健室登校って奴？ 情けないよね。結局びびって来られないんだね。アホじゃないの」

「あれだけ騒ぎ起こして、どの面上げて来いってのよね」

女子たちの噂話はかなりの部分において真実が多い。最近貴史が感じつつあることでもあった。南雲が他の男子連中に能天気な語りをし続けているのも、むかつくくらいはっきり聞こえる。

「ああ、りっちゃんからさっきノートもらったよ。お前らも、見る？」

「うわあ、感謝感謝。神様仏様立村様ってとこだよなあ。なんでこんなに分かりやすい訳なんだろうって、感動すら感じるぞ。なんとか早くクラスに戻ってきてもらわねえと俺の英語の三学期の成績、まじまずいんだがな」

——お前ら、立村を完全な自動翻訳機としか見てねえよな。

そんなわけがない、本能でそれも分かっているつもりだった。南雲の思惑も貴史は決して読み取れないわけではない。こうやって軽く語って、立村が戻ってきた時に入りやすくしてやろうという思いやりなのだろう。承知している、わかっている、でもだ。

——それは、俺と美里がやることだろ。

美里はおとなしかった。しばらく、こずえ相手にも何も話そうとしなかった。

「さってと。清坂、それと羽飛、悪いが今日は残ってもらえないか。話があるんだ」

もやもやしたまま時間が過ぎていく中、気がつけばまた放課後だ。菱本先生もいつも通りに帰りの会を終わらせた後、初めてふたりに声をかけてきた。

「先生、なんですか？」

他の連中がいわくありげにふたりを見つめて教室から出て行くのを待ち、菱本先生は首を振った。やはり、何かがあると見た。

「大切な話があるんだ。今日は生徒指導室を押さえてある。説教じゃないが、まあ似たようなもんだ。行くか」

貴史は美里を顔を見合わせた。美里の表情にはかっちかちの何かが浮かんでいる。

「行くか」

「うん。あ、先生、行きます」

理由は聞く必要がない。聞かねばならないのは、理由そのさらに向こうの話。

まっすぐ三階に向かい、すぐ生徒指導室へ促された。あのいざこざからそれほど日が経っていないはずなのに、はるか昔の出来事にも思える。あの日はひたすら泣き顔で立村の様子にはらはらしていたのに、今はすこぶる冷静に菱本先生の後ろをついて歩いている。

菱本先生はすぐふたりをソファに座らせた。部屋の温度も適度に暖かい。オレンジジュースを二本取り出して渡した。

「もう少し別の味もあればと思うんだが、まあありもんでがまんしろよな」

「贅沢言いませんから。それより、先生、今日のお話って」

美里がまだこわばった顔で問う。貴史も頷いて促す。

「まあ大体、誰のことか俺はわかってるけど。ただ状況がわからねえと」

「そうだ、お前らふたりにはこれから、力を借りないといけない状態になったんだ。清坂も、そのことは大体わかるな？」

いきなり美里に問いかける。頷く美里をつつき、貴史は改めてささやいた。

「なんだよ、なんかあったのかよ」

「これからわかるから黙ってて」

手元のジュースをテーブルに置いたまま、美里はがっちりと手を組み合わせたまま菱本先生を見つめていた。菱本先生も美里の正面に座り、自分の分のジュースを握った。プルトップをはずしておいた。一気に飲んだ。

「立村のことだがな」

「E組とかにいるんだろ」

すぐ遮った。女子たちの噂を再確認するためだ。

「さっきうちの女子たちがしゃべってたけど、あいつ今、あの教師研修室とかいうところにいるんだろ。今E組って言われている島流しのクラスに」

「羽飛、それは違う。島流しというよりも、ひとりでゆっくり勉強する必要のある生徒たちが集まる場所であって、差別の対象とは違う」

——あのむかつく女子がひとりで追っ払われている場所だろ。けどなんで。

杉本という女子と一緒に立村が仲良くおしゃべりしていたらしいとも聞く。正直、考えたくない。

「説明するとだ。立村は確かに教師研修室にいる。何かしたわけじゃない。ただ本人が自主的にそこに行って、しばらくひとりで落ち着きたいという意思表示をしたんだ」

「立村くんが、ですか？」

美里がからむ。唇を噛んでいる。泣いてはいない。

「清坂には辛い現実だろうが、そうなんだ。俺もすぐ教室に行ってじっくりあいつと話をした。三年D組の連中がみな待っていることを再度伝えたつもりだ。だが、やはり怖いんだろうな。がんとして首を振ろうとはしなかった」

「それなら、立村はこれからどうなるんだ？」

貴史が食い下がる。

「はっきり言って、出席日数足りるのかよ。あのままE組に籠ってたら」

「それは大丈夫だ。学校にいる以上出席には入る。授業もほとんど三年のカリキュラムは終わっているから補習プリントに徹していればそれでいい」

「それでいいのかよ、本当に？」

問い返すしかない。確かに立村は学校に戻ってきてくれた。菱本先生の説得に応じたのかどうかは知らないが戻ってきて、一度は三年D組の教室へ足を踏み入れようとした。だが、

——あいつ、俺たちを見て逃げただろ？

がっしりと爪が刺さったような痛み、どうしてくれよう？ 共感を求めたくても隣の美里はかたくなな表情を崩さない。

「清坂、どうする？ 羽飛に話すか？」

「はい。私の方から話します」

じっと、貴史の横顔を見つめるようにして、美里はきっぱり答えた。

「立村くんのことを守りたいという気持ちは私も、貴史も、一緒ですから」

その手で自分の分のジュースを貴史に渡した。

「私、立村くんをしばらく放っておこうとおもうんだ」

「はあ？ 今朝、お前そんなこと言ってたけどなんでだ？」

「だから、今朝、見たでしょ？」

いらただしげに美里は言い返してきた。

「立村くんはきっと、私たちのこと怖がってる。だから、菱本先生にもこれ協力してほしいんですけど、立村くんの気持ちが落ち着くまで、ずっとE組にいてもらったらいいんじゃないかなって、思ったんです」

「なんでだよ、お前なんかあったのかよ」

貴史の問いに、美里は大きく頷いた。貴史の腕を引っ張った。

「だから今から話すって言ってるじゃないの」

——その言い方ねえだろうが。

先生がいるから黙らざるを得ない。ふたりきりだったら思い切りどついているかもしれない。どこか美里の態度には違和感ばりばりなのだが、それはあのロングホームルームの時も同様だったから驚きはない。

「ええと菱本先生はどこまで知ってるんですか？」

「今朝、狩野先生から一通り伺ったんだ」

「すぐ連絡入らなかったんですか」

「ああ、狩野先生なりにいろいろ考えてくださったんだろうが」

ぴんときた。あれだ。今朝のことだ。貴史は割り込んだ。

「先生、もしかしてさ朝、狩野先生が先生に話しかけてただろ、あのことか？」

貴史の顔をまじまじと見つ、菱本先生は両腕を組んで頷いた。ため息をまた吐く。

「なんというか、お前ら二人はタイミングがよすぎるな。だから、名コンビなのかもしれないがな」

またジュースに口をつける。

「今から話すことは、お前らが立村の親友だからあえて打ち明けることなんだ。それと、清坂も偶然関わっていたことというのもある。このことを通じて、これからお前らがどういう判断をするかが、俺としては少し気になるんだが」

「安心して下さい、先生。私、そのこともちゃんと考えてます」

美里が何度も菱本先生をなだめるように声をかける。その上で貴史をもう一度覗き込んだ。

「昨日、私、近江さんの家に車に乗っていったじゃない？ その後のことなの」

痺れを切らしたのか、自分からべらべらしゃべり始めた。もう、黙って聞くしかなさそうだ。菱本先生も完全に美里へ舵を預けている。狩野先生の件で相当参ったと見える。

「近江さんのお姉さん、つまり狩野先生のうちなんだけどね。いろいろ近江さんと部屋で話をしたら、杉本さんから電話がかかってきたの」

「ああ？ あのむかつく二年の女子かよ」

「あんた先生の前なんだからやめなよ。近江さんところに遊びに行くってうちの親にも伝えておいたのがよかったんだね。最初杉本さんは私に連絡をしたかったらしくてうちに電話かけてきたの。そこでうちの親が近江さんの電話番号を教えて、そこからまたかけなおしてくれたらしいの」

「ああ？ 話全く読めねえんだけど」

「頭働かせなさいよ。昨日見たでしょ。立村くん、杉本さんと一緒に帰ったってこと」

——そういえば、手、引っ張ってたな。

冷ややかに貴史たちを無視して突っ走っていった姿が目には焼きついている。美里の語りは止まらない。

「あの後、立村くんはね、杉本さんを連れて汽車に乗ろうとしたんだって」

「汽車に乗る？ あいつ品山だろ？ 汽車、そりゃ乗るだろ？」

「ばか！ あんた本当にもう少し頭冷やしたらどうなのよ。いきなり下級生連れて家に帰ろうなんて普通思う？」

「わからねえ、もっと説明しろっての！」

埒の明かないふたりの会話にやっと大人の菱本先生が割り込んだ。

「漫才見ているほうが楽しいんだが、現実は厳しいんだ」

手付かずのまま並んでいるジュースを手に取り、今度はそれぞれに両手で手渡した。

「立村は、二年の杉本を連れて、家出しようとした。一言でいうとそういうことなんだ」

——家出かよ！

手で受け取ったジュースの缶が冷たい。美里はそっと膝に抱いている。貴史はただ握り締めている。

「家出って、あいつ、けど今日来たぞ？ 見たぞ？」

「だから、連れ戻されたの。ってか、厳密に言うと杉本さんに止められたの」

「なんでだよ」

美里は冷静を装うように、ジュースの缶をなでながら続けた。

「杉本さんの話でしかわからないけど、立村くんはもう杉本さん連れてどこか遠くに行くとか言い出してきかなかつたらしいの。杉本さんしっかりしているし最初からそんなの付き合うつもり

なかったけど、立村くんの話し方が普通じゃないってこと見て取って、まずなだめようと思ったみたいなの。それで、いったん立村くんの機嫌を取りながら駅まで行って、交通費用意するという言い訳してすぐ、私に電話をかけてきたの」

「なんでだよ」

「あんたその相槌やめなさいよ。杉本さんとしては家出に反対。でも、立村くんを押さえることはできそうにない。そこで頭を働かせて、いったん車で適当なところで往復して頭を冷やしてもらってさっさと立村くんを品山に帰そうと考えたみたい。立村くんも杉本さんとしゃべっている時ほっとしているからね、少し遅くなって帰った程度で済めばいいんじゃないかって思ったみたい」

「そっか、お前一応は公認の彼女だもんな」

「殴るよあとで。いったん三桜行きの鈍行に乗って往復するだけでなんとかなるから、帰ってきた時に私が駅のホームで待って、無理やり正気に戻させるという方法を考えたんだって。だから、青湊駅に三桜からの汽車が何時に到着するかを細かく調べて私に電話してきたの。私に、迎えに行っておいてほしいって」

「正気かよあの女」

全身で力を込めてにらみつけ、男子たちへの罵倒の嵐。それが女子の先輩に対してはなんと気遣い上手なことか。ある種の処世術を見背つけられたような気がした。

「いい加減にしないね。けど、私、そんなことして立村くんが反対にぶちぎれることのほうが怖いと思うのよ。あんたもそう思わない？ もしよ、もし私が駅で待っていて、むりやり立村くんを引っ張り出して、たぶんその時の勢いでひっぱたいたりなんかしたら、もう修羅場じゃない？ 立村くんもう何するかわからないよ。ただでさえ家出するつもりでかっか来ている時に、私なんか行ったらどうなるの」

「まあそりゃそうだ」

「でしょでしょ！ だから、私なりに考えて、杉本さんにすべて任せようと思ったの」

ここで美里は声を潜めた。もちろん貴史にも、菱本先生にも聞こえる静けさが漂っている。「杉本さんにはなんとかうまく立村くんをなだめてほしいって伝えたの。たぶん杉本さんにだけは立村くん、心許しているし杉本さんも賢いからなんとか無事にすむんじゃないかなって。もちろん本当に家出になっちゃったらどうしようとは思ったよ。でも杉本さんに限ってたぶん大丈夫かなって」

「大丈夫じゃねえだろ」

立村が家出するところまで追い詰められたのは分かる気もする。だがなぜ、あの嫌われ毒ガス発散娘の杉本梨南を連れていくことに拘ったのか、その意図が全く見えない。相手が美里なら分かる。少なくとも彼氏彼女の間柄なのだから、行き着き先がいわゆるそのあのなにかであってもショックはあるが受け入れられるものはある。だが、あんな性格の悪すぎる杉本を連れていって何か楽しいことでもあるのだろうか。ふたりきりでそれこそ不純異性交遊などの匂いが一切感じられない、それもまた情けない話ではある。

「そこまで私も何にも考えないで電話に出てたの。そしたら、私が気づかない間に近江さんのお

姉さんがその情報を学校にいた狩野先生に連絡して、狩野先生がすぐ戻ってきて、私を問い詰めて、それで」

「おい、狩野先生がかよ。あの、虫も殺せそうにないあの先生がかよ」

「そうなの。私もびっくりしたよ。狩野先生、すぐに時刻表調べてその汽車の到着時刻確認して、一目散にタクシーで先回りするため走っていったの！ もう、あの行動力に私と近江さんただ絶句。近江さん言ってたけど、狩野先生ってプライベートでもいざという時のつっぱしりっぷりが普通じゃないんだって。結婚する時も」

「ちょい待った。他の組の担任の結婚話なんか聞きたくねえよ。俺は菱本先生だけで十分腹いっぱいだ」

誰も笑えない内容だけに美里から露骨に無視された。

「とにかく！ それで足がついちゃって、杉本さんは途中の駅でタクシー乗せられて帰されたし、立村くんは三桜駅から特急で狩野先生に付き添われて戻されたってわけ。そこから先は私もわからないけど、学校側では内密に処理されたってことで、いいんですよね、先生？」

菱本先生はまたため息を吐いた。かなり、めちゃくちゃ、参っていると見た。

「そうなんだ。俺も実はこの話を聞いたのが今朝なんだ。狩野先生から片手間のような感じで事後報告を受けたが、あくまでもこれはたまたま狩野先生がふたりの乗っている汽車に乗り合わせて、大事をとって連れ帰っただけという展開なんだ。だから、補導したわけでもない。本当にたまたま、ということにはなっている。その後、立村の家まで送って行って、狩野先生はお茶をご馳走になり帰った。それだけのことになる」

「ってことは、家出っておおっぴらにはなっていないということなんですか」

「そうなんだ。どういう話を立村と狩野先生がしたのかはわからないが、あいつなりに考えるところがあって学校に戻ってきてくれたというのはあるんだろう。だが、まだ精神的に不安定な状態だということは見て取れた。あの二年の杉本も、こう言ったらなんだが、通常では考えられない行動を取ってくれたおかげで警察に見つからないように内密の処理ができた、そういうわけだ」

「杉本さん、ほんとすごいですよ！ 先生、あの子については褒めてあげてくださいね。どれだけ立村くんをなだめるのに苦労したのか、想像するだけでもかわいそうですもん」

初めて菱本先生は吹き出した。

「さっきちらっとE組であのふたりの会話を聞いたが、関係者でなければまじで笑える内容だどつくづく思った。ああいう会話が楽しいと思える奴は貴重だろうなあ」

「絶対ありえねえ！ あんな性格最低の女子が、なんで立村のお気に入り子なんだあ？」

「貴史、もういい加減にしないと」

次の台詞はなかった。美里が立ち上がり、思い切り貴史の足を蹴り上げたからだった。

「羽飛、悪いが、俺は止めないぞ。反省しろよ」

教師の顔していたはずの菱本先生も、笑いをこらえながら厳しいジャッジを下した。

——けど、まさかかよ？

三人がふと笑顔になった瞬間、さっと刺さる矢。

——立村の奴、そんなに、そこまで、俺たちから逃げたかったのかよ。

昨日のふたりの背がまた浮かび上がり、消えた。手のジュース缶を握り締めた。

——美里も、笑いながら話せることかよ。あいつ、お前よりも、あの最強最凶性格最低女子を選んで逃げたんだぞ。なぜ、なんで俺を蹴って遊んでられる？

「それでだ。羽飛。お前にこれから考えてもらいたいことがあるんだがな。あ、これは清坂も一緒なんだがな」

美里に叩かれた部分をさすりながらジュースを飲みつつ、貴史は菱本先生の話聞いた。

「まずだ。俺が思うに、立村がこのままD組でゆったり過ごすことはまだ難しいという意見が圧倒的なんだが、お前はクラスの様子みてどう思う？」

菱本先生の言葉は貴史のストライクゾーンをもろ突いていた。

「そうだな。俺もこのことはすっげえ考えてる」

両腕組んで本当に考えた。美里が胡散臭そうにこちらを見ている。

「あいつ、俺と美里見て全力で逃げたからな」

同時に美里も頷き、口を挟む。

「そうなんです。先生見てなかったと思いますけど、立村くん、私たちが近づいてきた時に顔色変えておびえていたんです。ねえ貴史、確かさ、南雲くんと一緒に教室までは来たよね。南雲くん立村くんから英語のリーダー予習ノート受けとってたし」

菱本先生もなぜか意味ありげに頷く。

「だからだな。やたらと英語科の先生方がお前ら珍しく完璧な訳文で答えてたとか言ってたが」

「とにかく、先生おちゃらけないでください！ 今、立村くんはE組にいるんですよ。杉本さんと漫才みたいなこと話してるんですよ。それだったら私思うんですけど、立村くんをこのまま放っておくことできませんか？ もちろん出席日数とかそのいろいろと難しいことはあるかもしれませんが、それなんとかなりませんか」

美里は両手を膝に乗せたまま菱本先生を見やった。しっかりと見据えた。それに答えようとはせず、菱本先生は貴史に向き直った。

「どう思う、羽飛？ 清坂は立村をしばらくそっとしておきたいという考えだ。俺個人としてはできれば立村に教室へ戻ってきて欲しい。いや、できれば首根っこひっ捕まえてでも連れてきたい。俺はお前たちの熱い気持ちを知っているからこそ、直接立村にその真実を伝えたい。そうすればあいつのかたくなな気持ちもたぶんほぐれるのではないかと思うんだ」

「そうだよなあ。そうしたいのはやまやまだけどなあ」

貴史も答えを迷う。実際その通りだとは思うのだ。美里のような悠長なやり方など本当はまっぴらごめん、そう言い切りたいのも山々ではある。ただ、そこから先、どうすればいいかと考えるたび悩まざるを得ない。立村の面倒くさい性格を承知しているからだ。いったん恨んだら絶対に許さない。かたくな過ぎるあの性格を扱える人間が、今青大附中にはせいぜい狩野先生しかいそうにないというのがなんとも言えずしんどいところだ。カムバック本条先輩と叫びたいところだ。

「先生、俺思うんだけどな」

とっくり考え、貴史は口を開いた。

「あいつ何言っても自分のやりたいことしかしない奴だし、菱本先生が全力で引きずり込んだとしてもたぶん全力で無視すると思う。俺も手、焼いてきたしそれはすっげえよく分かる。だから、正直なところ言うと、俺たちが何かできるってことねえんじゃねえのって気がするんだ」

美里がまた、信じられないものを見るような冷ややかな眼差しを投げる。

「もちろん先生だったらまだいろいろやることあるかもしれねえけど、生徒としての俺たちがやれることってのは本当にちょびつとしかねえよ。ほんとは俺も菱本先生と組んであいつを引っ張り出しているいろいろ聞き出したいことある。けど、それよか最優先で考えねばならねえことってのは、クラスを整えるってことじゃないかって気がしてきたんだ」

「クラスを、整える、ってどういうこと？」

美里が問い返す。胸張って答える。

「お前も知ってるだろ。女子連中が立村のことすっげえ嫌ってること。この前のことでだいぶ言いたいことは言い合えたけど、肝心要の立村とはまだ面と向かって話し合いしてねえってことだし、あの中に飛びこんだってしょうがねえだろ」

「まあね」

美里は短く答えた。

「そりゃロングホームルームではなんとなく分かり合ったような雰囲気にはなっちまったけど、本当のとは違う。それじゃどうすりゃいいか。とりあえずは立村がいつ戻ってきてもいい環境作るじゃねえかって気がするんだ」

「あんたできると思う？ 三年間ずーっと同じ状態できたんだよ。いくらあと一ヶ月あるたって雰囲気を丸ごと変えるのは難しいよ」

「わかってるって言うてるだろ！ けどあのまんまのクラスだと立村は意地でも戻ってこない。下手したら卒業までE組にもぐりこんでるかもしれねえし。それならいわゆる天照大神を引っ張り出すような雰囲気作るしかねえんじゃねえ、とか思うんだ」

「誰が腹出して踊るのよ」

「別にストリップしろとは言ってねえよ。けどな、俺なりにうちのクラスは居心地よくて、あいつが戻ってきても噛み付いたりなんかしねえよってことを証明できさえすれば、きっと覗き込みにくるんじゃねえかと正直期待はしてる」

「羽飛、お前の言いたいことは」よくわかるんだがな」

菱本先生が割り込んだ。

「あと二ヶ月とか言ってきた俺が言うのもなんだが、そりゃのんびり過ぎやしないか？ もう少し俺たちの方で働きかけたりすることもできるんじゃないかと思うんだが」

「そう出来たら俺だってそうするって。俺だって今朝あいつの面見るまではそう思ってたよ。けど、立村の奴、本気でびびってたんだ。俺の顔を見るだけでも恐ろしいとかいって逃げ出しちゃったんだ。あのまま俺がE組に乗りこんでいったら、きっと学校にも来ないんじゃねえかって気がどうしてもするんだ。今、やっところさところあいつ、学校に来てくれたわけなんだから、そこはしっかり押さえないよな。保健室ならぬE組登校でもいいってことだったら、しばらくその手で行くってのはどうかなって俺は思うんだ。先生、美里、どう思う？」

しばらく沈黙が続いた。美里だけがちろちろと貴史の様子を伺う。菱本先生は貴史と同じく両腕を組んで俯いていた。やがてゆっくり顔を上げた。

「クラスのことについては賛成だ。お前の言う通りクラスの連中も気持ちはまだついてないかもしれないしな。羽飛が本気でそのあたりを取りまとめるつもりならば、俺は任せる。ただ、俺は担任としてやるべき仕事はまだまだある。そのまま放置しておくわけにはやはりいかない。俺なりに立村にはなんらかの働きかけは続けていく」

「あまりへますんなよ」

小声でささやいたところを美里に思いっきり叩かれた。菱本先生は聞こえない振りをしてくれたかのようにだった。

話し合いを終えて、ふたりが生徒指導室を出た時、静まり返った廊下で貴史はもう一度振り返った。

「先生、どうもな。とりあえずはこんなところじゃねえの」

「お前みたいな生徒ばかりだったら俺も苦労しないんだがな」

「どうだか」

小声でつぶやく美里を軽くぶつ振りをしてやった。

「まあまあ清坂もあまり、羽飛をいじめるなよ。お前らの呼吸が合っていることはよっくわかっているが、やはりやりすぎは禁物だからな」

「先生わかってますって。それより、立村くんのことですけれども、よろしく願います」

「まるで親みたいな言い方だなあ。そうだ、そうなんだな」

菱本先生は、ふと気がついたかのように貴史と美里を見据えた。

「お前ら、立村の家族なんだな」

校門を出て、だいぶ暮れかけた空を眺めながら美里がしみじみとつぶやいた。

「なんか、すとーんって腑に落ちた」

「何がだよ」

ゆっくりと、さっぱりと、遠くへ視線を向けたまま、

「私たち、立村くんの、家族なんだよ。友だちっていうか、お兄さんとかお姉さんとか」

ひと呼吸置いて、やっと貴史の顔を見た。

「どうして早く、気づいてあげられなかったんだろうな。立村くんが望んでたのって、付き合うとか付き合わないとかそういうことじゃなくって、兄弟姉妹みたいな関係だったんだってこと。ほんと、ばっかみたい」

空から静かに雪が降り始めた。美里の言葉をそのまま受け止めていいのか貴史には判断できなかった。昨日の出来事をもっと細かく聞きだしたくとも、何かを悟ってしまった美里には無駄なような気がしてならなかった。今この瞬間、もっとも美里に意味のない言葉が「恋愛」だということだけは、なんとなくわかった。

——第二部 終——第三部へ続く

——今日で十人目？

貴史が三年D組の教室を出て待ち伏せしていた女子の人数だ。

最初は数えていなかったのだが、毎日こうも続けるとついカウントしてしまいたくなる。

「羽飛、ほらほらお客さん」

男子たちも最近面白がってわざわざその女子たちに「羽飛連れてこようか？」などと受付まがいのことまでしている。

「それにしてもお前ずいぶんモテモテだよなあ」

水口がにやにやして貴史に絡みつく。ついでに金沢も自分のスケッチブックを握り締めたまま

「一年？ それとも二年？」

わざわざ確認に来る。

「今の子は一年だけだな」

しかたないので貴史もあいまいに答えた。

「で、何通目のラブレター？」

「知るかよそんなの。それよかお前らももう少し自分でだな、明るい未来築けよな。ほら金沢、お前もだぞ。景色とか変な男の裸とか描いてるんじゃないで、超かわいい女子をモデルにさせてもらうとか」

「女子描いても面白くないし」

他の男子たちも遠巻きに眺めている。卒業式まであと一ヶ月とちょっととなれば、恋する女子たちの告白も増えてくるのは自然なことかもしれない。ただ青大 附中卒業生のほぼ九割は附属高校への進学なのだから、無理に今結果を出さなくてもいいんじゃないかと言う気はしている。かえって振られたら気詰まりなんじゃないだろうか。

「何言ってるのよねえ、羽飛も女心わかってないねえ」

古川こずえがまた様子を伺いつつからかいに来る。わざわざ隣に座り込む。

「気持ちの整理ってものをつけないじゃないの。考えてみなさいよ。うちの学校はそりゃ付属校だけど学校分かれてるってことは完全に縁が途切れてしまうってそういうことなの。校舎内ですれ違うチャンスがないということは、ほぼ、さよならなの。わかる？」

「わっからねえなあ」

「あんたらしいったらそれまでだけどさ。けどあんたも、もう少しあの子たちの気持ちを汲んでやりなさいよ。女子にとってねえ、告白ってのは、命を懸けた行動なんだからね」

「そんな大げさなもんかよ」

こずえに言われるというのがなんとも言えない。

「私の顔を見てそういうことやめなさいよ。まったくもうねえ、羽飛は女子に対してはクール気取っちゃってるからどうしようもないんだけどさ」

わざとらしく声を出して「あーあ」とため息を吐く。その上で、

「だからやめられないんだよね、まったく」

捨て台詞を残し、自分の席へ戻って行った。まったくまったく、貴史の方が「まったく！」だ。

クラスからひとり欠けた状態で過ごし二週間近く経とうとしている。

壮絶に物事が詰まりすぎた一週間を過ごした後は、完全傍観者として過ごしている貴史は、休み時間や放課後をほとんど過去三年間で起きたことの情報収集に徹して過ごしていた。今まで貴史が興味を持たなかった出来事。たとえば評議委員会とか生徒会とか、はたまた他クラスの連中との恋愛沙汰とか。美里からはよく聞かされていた内容ではあるけれども実際はよく把握できていない内容などが圧倒的に多い。

美里が休み時間、廊下の窓際に呼び出し、小声でささやく。

「あんたも小春ちゃんとゆいちゃんたちの事情、だいたいわかったでしょ」

「まあな。更科からいろいろとな」

主に評議関連の情報源は更科を活用するようにしていた。A組事変……いつのまにかそういう名称がつけられてしまっている……に関して一番詳しいのが更科である以上、そうせざるを得ない。美里も納得顔で、

「そうだよな。じゃあ他の事も知ってる？ 評議委員会のあのこと」

「ああ、お前なんかそれ言ってたよな」

青大附中入試が途中挟まったりして学校が休みとなり、その間にさまざまな情報を美里から仕入れることができた。あまりも多いので頭の整理が必要ではある。

「実はね、生徒会側から申し入れがあったんだって。天羽くんが言った」

「あいつが？」

すでに三年D組の評議代行として見られている貴史だが、肝心要の三年評議連中からはまだ直接詳しい話を聞かせてもらっていない。気にはなっているのだが、天羽がA組事変の張本人であること、脇役が難波であること、元評議の女子がほぼ関係していることなども考えるとなかなか声をかけづらい。できれば天羽の方から何か貴史に働きかけがほしいところなのだが。しかたないのですべて美里から聞き出すことになる。

「例の『大政奉還』のことよ。先生たちは生徒会の味方について、評議からの権力をすべて持つていこうとしてるってこと。でも、生徒会の人たちはそれがすべて先生たちのやってることだからしょうがないでしょって態度取ってるの。立村くんがやりたかったのは生徒会と評議委員会と一緒に仕事を分け合おうってことだったのに、いつのまにか話がどんどんそれてるの。分かるそれ？」

「わからねえなあ」

わからないのは当たり前だ。三年間もの歴史を一日か二日で叩き込むなんてそりゃ無茶だ。美里はあきれた風に口を尖らせ、それでも続けた。

「天羽くんは何度も生徒会の子たちに話をしてるんだけど、すべて『先生たちが決めたことだからそれに従うだけ』の一点張り。今までそんなんじゃないかってでしょ？ 評議が権利持ってた頃

って。本条先輩がすべてを切り盛りしてたでしょ？ 生徒会だってそのくらい自分たちの考えを訴えたっていいはずなのに成り行き任せっておかしくない？」

「わからねえよそんなの」

「とにかく！ それで天羽くんが一生懸命しがみついていたら、生徒会側から、先生たちをはずした席で教室かりてとことん話し合えようってどこまで進んでるの」

「お前なんでそんなこと知ってるんだ？」

「だって」

声を潜めて美里はつぶやいた。

「近江さんが教えてくれるんだもの」

「もう元気に戻ってるんだなあ」

「うん、あの事件前よりも元気かも」

美里は頷いた。窓辺の雪を見つめながら、

「今日もどっかのホールで落語会があるんだって。ひとりで行くってはりきってたわよ」

すでにA組事変の被害者である近江紡が学校に戻り、加害者ですでに青大附中から姿を消した西月小春のいないまま和やかい過ごしているとは聞いていた。美里の話を書く限り、実に元気一杯らしい。反対に西月小春のその後についてはほとんど情報が流れてこない。憶測ばかりが美里経由で届くだけだ。

廊下はまだ暖かい。貴史は美里に寄り添う形でさらに尋ねた。

「生徒会側はなんでそんなめんどくせえことしようとするんだ？」

「当たり前でしょ。私たち評議委員がごたごたしているのを利用して、自分たちのやりたいようにしたいってだけよ。私も、あと天羽くんも同じこと考えてるみたいなんだけどね、きっと生徒会の子たちは、先生たちに自分たち有利の形を作ってもらってすっきりしたいだけよ。自分たちが片をつけるのは面倒だし。あとは全部先生たちがやりました、私たちは知りませーんって顔したいだけなんじゃないかって。天羽くんもそれにおわせるようなことを生徒会の子たちに言ったら、『それなら先生たちのいらっしゃらないところでゆっくり生徒たちだけで話し合うほうがいいかもしれません』とか言い出したらしいのよ」

「それ、あの生徒会長か」

「ううん、副会長の、ほら、ゆいちゃんの弟よ」

霧島ゆいの弟で、やたらととんがった声で叫んでいる高飛車な奴。立会演説会で思い出した。

「先生たちも生徒会の人たちの意見に賛成してくれて、それだったらやりましようよって話になったみたい。どういう風に持ってたか知らないけどね」

「いつ頃やるんだよ」

「たぶん明日かあさって。それでね、ここだけの話だけど、今後の青大附中を支えたいと思っている下級生たちも含むって、生徒会の子たちが裏で呼びかけてるみたい」

美里はずいぶんと急なことを言う。

「なんでそんなめんどくせえことするんだよ」

「しょうがないでしょ。でもうちの学校の場合、表立って声かけて成功したことほとんどないってあんた知ってるじゃない。生徒会なりに考えて、将来立候補しそうな生徒たちを集めて、青大附中の生徒会を売り込みたいんだと思うけどね」

「それで明日、あさってかよ。うちのクラス誰参加するんだよ。お前か？」

「それとあんた」

きっぱり美里は答えた。

「あんた、まさか自分が関係ないなんて思ってなかったでしょうね。貴史、あんたが青大附中三年D組評議代行だって現実、忘れてないよね！」

——忘れてねえよ、そりゃ。

言葉を発するのも忘れ、貴史は俯いた。自分らしくない、そのポーズ。

——立村がいればな。そんなこと考えなくてもよかったんだ。

「とにかく！ 貴史、明日、あさってのどっちかで決まったら私のほうから連絡するから、放課後ちゃんとあけておいてよ！ まかりまちがっても鈴蘭優のテレビ出演を見逃したくないとかいって家に帰らないでよ！ そんなことしたら、思いっきりしばくからね！」

相変わらず美里らしい暴力的脅しでもって話は終わった。鐘が鳴り、貴史も一緒に教室に戻った。他クラスの連中が扉にそれぞれ吸い込まれていくのを眺めながら、もうひとり、誰かの影が混じってないかを確認した。

当然、混じっていなかった。

——立村の奴、本当に戻る気ねえんだか。

いろいろな出来事が起きているとはいえ、三年D組での事件はすでに一段落したも同様と受け止められている。当の本人が席を空けているという現実はあるにせよ、三年D組の日常はするすると流れていっている。あえて言えば、朝の出欠で菱本先生が、

「ええと立村、休みか」

最後の名前を呼ぶ時につぶやくのを聞く時、一瞬クラスの空気が冷える程度だろうか。

ひとりくらいクラスメイトが欠けても、実はたいしたことじゃない。

「羽飛くん、ちょっといいかな」

声をかけてくるのは奈良岡彰子だった。相変わらずのふっくらしたあんまん姫は、つやつやしたほっぺをゆるゆるさせて覗き込む。珍しく今日は英語の授業が自習だったこともあって、みな自分の与えられたプリントを適当に解いた後、好き勝手いおしゃべりに興じていた。

「ああ？」

「今日の放課後なんだけど、ちょこっとだけ時間もらっていいかな」

にこにこ、笑顔、満点。かつては貴史もこの笑顔こそ三年D組の宝だと信じていたことがあった。今はただ、ひたすら、恐ろしい。天使は一步間違えると戦士となる。

「なんか用か？」

適当にあしらう。嫌いになったわけではない。ただ、距離をおきたい。

「うん、羽飛くんとふたりだけでどうしても伝えておきたいことあるんだ」

「文集のことかよ」

貴史なりに愛想よく返事をした。二転三転した結果クラス文集の編集は、悪名高き「班ノート」利用を避ける代わりに、金沢のイラストをふんだんに使った作文集へと変わった。過去を引っ張り出すのではなく将来の夢に向かって、「書きたい奴」だけが書く、といった方向に。

「ううん、それもあるけどね。もっと別のことで羽飛くんに聞いてもらいたいことがあるんだ。私、もう、青大附属から出て行ってしまいうから、ちゃんといろいろお礼したいこともあるし。それにこの前のことで、私、羽飛くんに感謝したくてなんないの。どうかな、ちょこっとだけでいいの。お時間ほしいな」

——何でだ？ ねーさん何考えてる？

その「この前のこと」が原因で貴史は奈良岡彰子の得体の知れない不気味さに気づかされたわけだった。決して憎むべき相手ではない。ただ、貴史が好感を持って接することの出来る相手ではないということだけは確かだった。

「今日だったら別にいいけどな。明日、あさってだとちょっと予定ある」

「そうか、うん、わかった。ありがとうね」

小さく拍手をしながら、奈良岡はまた自分の席に戻っていった。相当満足したようだった。視線を背中を感じる。ひょいと振り向けば、奈良岡彰子の「公認恋人」たる南雲秋世が冷ややかな目で貴史を見つめている。いつものことだった。

——まあな。いい落としどころだったからな。文集も「書きたい奴が書く」ですんだから、結局嫌がる奴が無理に何かしなくてもいいってことだしな。書かない奴だって金沢ががんばって思いで場面集をどっさりイラスト描いてくれているし、それで参加してるってことにもなる。俺としてはベストじゃねえの。

無事まとまったクラス文集の編集もただいまラストスパート。貴史はもう一度前扉側の空席を見やった。

——ってことを、あいつは知らないでやんの。ったくなあ。いつまでE組もぐってやがるんだよ、ばっかやろう。

奈良岡彰子と約束した放課後は、すぐにやってきた。

「ねーさんねーさん、どこで待ってりゃあいいんだ？」

まだこずえと話をしている奈良岡に話しかけてみた。別に隠すような内容じゃないだろう。思った通り奈良岡はにこやかに答えた。こずえにも頷きながら、

「うん、それじゃ、そうだね。すぐ行くから待っててね」

——すぐ行っちゃったっておい、後ろにあいつがじろっと見てるぞ。

南雲の視線がやたらと痛いのが気になってならない。一応あいつの彼女である奈良岡がなぜ、貴史に楽しげに語りかけるのかわからないのだろう。

「あ、あきよくん、ごめんね、明日ね」

きわめてあっさりとして、それでもあったかく声かけする奈良岡に実は追っ払われている南雲。普段なら貴史も「ざまみろ」と笑いたいところだが、不本意ながら同情の念もある。どうせ先輩女子に手を出して二股かけている奴なのだから自業自得だろうが、ここまでさらっと流されるのも男子としては面白くないに違いない。

「それじゃあ、また、彰子さん、明日は俺と遊んでよ」

しかたなくといった風情で南雲が東堂と一緒に教室を出て行く。ここで眺める限り、未練ありありに見える。穏やかなつながりに見えるけれども、どこかひっかかるものがある。

——あのふたりなんかあったのかよ。なあ、立村？

こういう時、立村が側にいたらそれなりの分析を述べてくれるだろうに。単細胞を自認する貴史としてはこれ以上何もわからない。

「じゃあね。こずえちゃん。また明日ね！」

「あれれ、今日はなんで羽飛と？ えー、私も連れてってよお」

できれば今回に限りそれが望ましい。貴史が奈良岡の様子を伺うと、

「ごめんね。今日だけは羽飛くんをお願いしたいことがあるんだ。明日また、話すね」

ちっとも動じない。やはりこの女子は怖い。改めて思う。にっこにこのあんまん笑顔でありながら実は自分のやりたいことをとことん通す。文集事件の時もつくづく感じたが、このクラスで一番自分の意思を押し通しているのは奈良岡じゃないだろうか。

「あーあ、つまんないの。ねえ羽飛、彰子ちゃんのこと押し倒しちゃだめだよ。男は本能があるからね、彰子ちゃんも気をつけてね！」

「行ってきまーす！」

おどけるように答え、「さ、いこ！」と貴史の背中を押していく。つられるように足がひょこひょこ動く。廊下にはまだ帰りを急ぐ同学年の連中がうろついている。珍しい組み合わせなのかなんなのか謎だが、やたらと女子たちからの視線が突き刺さる感じありだった。

玄関を出て、奈良岡は空を見上げた。

「あと、もうちょっとなんだなあ」

「何いきなり」

「だって、青潟の景色をこうやって眺めていられるのって卒業式までだし。私とすいくんは青潟を出て行くことになってるから、つい切なくなっちゃう時あるんだ」

「ああ、そっか、お前らそうだな」

すでに医師養成進学専用高校に推薦入学が決まっている奈良岡の立場を思い出した。忘れていたわけではないのだが、奈良岡そのものに関心が湧かなかったというだけでもある。

「水口ともそれ話すのかよ」

「うん、話すよ。すいくんも合格したはいいけれど初めての寮生活で、ドキドキしているみたいなんだ。私ももちろんそうだけど、不安っていうよりどんな素敵な友だちが出来るのかなってそれが楽しみなんだ。私の行くところ、みーんないい人ばかりだから、きっと大丈夫だよってすいくんにも話してる。羽飛くんも、もしすいくんが元気なくしていたら励ましてくれるとうれしいなあ」

「そだな、そうしとく」

しばらくつられるように、奈良岡とぐだぐだ話を続けていた。奈良岡に従って歩いていくと、なぜか校舎裏の雑木林にたどり着く。青大附中の生徒にとって珍しい場所ではないのだが、意外と貴史は立ち寄ったことのないところでもあった。雪が浅く積もっているが、道がきっちり雪かきされているので歩くには苦労しない。一步横道それでも歩けないわけではない。

「ねーさん、んで、用って何だよ。すっげえ聞きたかったんだけど文集のことか」

「ううん、違うよ。でもそのことも伝えなくちゃね」

奈良岡は立ち止まった。くるくると辺りを見渡す。

「ふたりっきりでよかった」

——あ？

「私、どうしても卒業前に言わなくちゃいけないことがあるんだ」

「俺に、何？」

両手をがっしり肩に置かれた。笑顔の質が変わっていない。そのまんま、

「私、三年間、大好きだったのは、実は羽飛くんだったんだってこと、やっと気づいたんだ」

緊張も何もない、ただ目の前にあるのは笑顔満面のみ。

「ちょっと待て、お前さ、どうした、何かあったのかよ」

「ないよ。ただ卒業前にちゃーんと、羽飛くんに伝えておきたから今日お願いしたの。あー、すっきりした！ ありがとう、聞いてくれて！ 最高に幸せ！」

聞き間違いようのない辺りの静けさ。わさわさ上の方で木々の葉がすれるざわめきのみだった。奈良岡彰子の口から発せられた言葉の意味がまず、信じられない。

「あのさ、ちょい、ちょっと、俺がまだ展開についていけねえんだけど、ねーさん」

「びっくりさせちゃった？ ごめんね。そうだよ」

「そうだよっててか、俺の記憶間違っただけじゃ、お前、確か、彼氏って奴いただろ？」

「あきよくんのこと、言ってるの？」

全く持って動揺のかけらも見せず、奈良岡は頷きながら、それでも肩から手をはずさない。
「もちろんあきよくんのは大好きだよ。でもね、『好き』の意味が違うんだ。そう、『LOVE』と『LIKE』の違いって言ったほうがいいかな。でも、『LOVE』ってのも違うなああって感じる。私みんなのこと『LOVE』だから、そうすると、なんていえばいいのかなあ羽飛くんに対してって。日本語も英語も難しいね」

「そういう問題じゃねえと思うけど、まあいいや。あのなあねーさん、お前さんが今俺に言ったことってのは、世間一般じゃいわゆる『告白』って分類をなされちゃうと思うんだ。そうだろう？ そうだろう？」

「うんそうだよ」

あっさり認める。ようやく肩から手をはずしてもらえて少し貴史も楽になる。

「ってことは、普通彼氏って奴がいたら、そりゃまずいだろ？ これを『浮気』とか『二股』とか、まああんまいい言葉じゃ言われねえだろ。そうじゃねえの？」

「うーん、そうなんだろうなあ。私とあきよくんとはすっごくいい友だちだと思ってるよ。でも、付き合うとかそういうのは違うのかもしれないなあって最近思ったんだよ。みんな知ってると思うけど、あきよくんにはちゃんと本当に好きな人がいるしね」

「ああ？」

——みんな知ってると思うって、なんだそりゃ？ ってことは何か？ 南雲の奴、ねーさんに自分の本命がいること平気でしゃべっちゃまってるとか？

信じがたい新事実。貴史が知る限り確かに南雲は一学年上の先輩と結構すごい付き合いをしているとは聞いている。ただクラスの公認彼女である奈良岡彰子とはプラトニックな純情付き合いをしている。いわゆる「二股」だ。ただし、そのことを奈良岡は知らず、ひたすら一途に南雲のことを信じている、そういう展開ではなかったのか。さすがにそこまでしゃべることも出来ず、貴史が舌をあわあわ」させていると、

「修学旅行が終わってからかな。あきよくんがいろいろ考えるところあったみたいで別の先輩とその、お付き合いし出しているというのは知ってたよ。でも、ちゃんと私とも友だちでいてくれたし、本当に大切にしてくれたんだ。それはうれしかったな。でもね、私、あきよくんがその人とお付き合いしていて、全然腹が立たなかったんだ。なんでかな、わからないけど応援しようって素直に思えたの。だってあきよくん、家でいろいろ難しい問題があるらしくて悩んでいて、そういうことをしっかり受け止めてくれる人は東堂くんくらいしかいないし。女子で出来るのはたぶんその先輩だけなんじゃないかなって思えたし」

「何度も言うが、ちょっと待てねーさん」

貴史は頭を抱えて首を左右に動かした。

「ほんっとに申し訳ねえんだけど、今、俺、新たなる真実が溢れすぎていてどうしていいんだかわけわからねえんだよ。あの、それで、お前が俺をいい奴だと買ってくれたってとこまではわかった。それすげえうれしい。感謝感謝。だけど、それと南雲の二股とのつながりがよくつかめねえんだ。何か？ 南雲に二股されてそれで俺に乗り換えたくなったとかそういうわけじゃ、ねえよな？」

たぶんそういう女子ではないと思いたい。最初の印象と大幅にイメージがずれつつある奈良岡だが、根本の「まっすぐでいい奴」の部分だけは変わってほしくない。もしそうなら「嫌い」の分類をせざるを得ない。

奈良岡はこっくり頷いた。

「びっくりだよねえ。私もあまり、話すまくないから分かりづらいよね。羽飛くん、今ここで全部話していい？ 立ったままだとまずいよね」

「いや、いい、悪いけどな、俺も聞きたい」

頭が冷えると少しはすんなり今の状況も受け止められそうな気がする。貴史は何度も深呼吸し、少しずつ頭の中を整理するようつとめた。奈良岡彰子の笑顔は全く持って変わらない。日常の延長上で語っているに過ぎないような気がしてきた。

「私が羽飛くんを好きだったのは、中学入学式の時からだだったんだ。確か隣りになったよね。席が。その時いろいろおしゃべりして、なんかいいなって思ったのは覚えていたんだよ。その後クラス名簿もらって最初に覚えた男子の名前が羽飛くんだったんだ」

——そりゃ俺、目立ってたからな。

両腕組んで、まずは何度も頷く。ありがたいことではある。

「そのうち美里ちゃんやこずえちゃんたちと仲良くなって、そのつながりでクラスのみんなと仲良くなっていったんだけど、その頃の私はみんな出会う人みんないい人ばかりだったから、誰か特別な人が好きって気持ち、わからなかったんだ。たぶん、今思えばなんだけど、私の中では羽飛くんと美里ちゃんのコンビが素敵過ぎたから、なおさらだったのかなって思う。こずえちゃんには申し訳ないんだけどね。羽飛くんの恋人になって意識してなかったんだ」

「古川がなんで出てくるだかよくわからねえんだが、まあいっか」

「それでね、あきよくんが私のことを気に入ってくれて、小学校の頃の友だちも支えてくれたりして、なんとなくそういう付き合いっぽくなってっただのが二年の頃。あきよくんは素敵な友だちだったし、今でもその気持ち全然変わってないんだ。でもね。やはり本当のことというにあきよくんのことを私は素敵な友だちとしてしか認識できてなくて、恋してるって気持ちとは全く別だったんだなってことが、三年になってからわかったんだ」

「三年、ってのがいわゆる、修学旅行後ってことか」

「そう。覚えてる？ あの頃まではきっとあきよくんは私のことをそういう意識で見続けていたんだと思うんだ。でも、だんだんいろいろな話をしていくうちに、お互い違う価値観なんじゃないかな、本当にお付き合いしたいのは別の性格の人じゃないかなってことが、私も、あきよくんも感じてきたんじゃないかって気がなんとなくしたの。他の人には言わなかったけど、たぶんお互いにそれ分かっていたんだよ。だから、ある時期から、あきよくんは今高校にいる人とお付き合いし出したいんだよ」

「それ、あいつに気づいたこと言ったのかよ」

「言わないよ。見ていればわかるしね。でも、その時本当だったらすっごく涙が出てしまうんじゃないか、悲しくなっちゃうんじゃないかって思ってたけど違ってたんだ。すっごくほっとした

んだ。私もだけど、あきよくんが一時期いろいろと元気なくしていた時と重なっていて、その彼女さんと付き合い始めた頃からどんどん元気になっていったことがわかったんで。ああ、あきよくん、よかった、本当にこれで今までのあかるいあきよくんに戻って楽しく過ごせるなって。もちろんそんなこと言わないけど、これからもあきよくんの友だちとして応援していこうって思ったんだ」

——美里も似たようなこと、言ってたな。女子の流行かよ。

「私にはたくさん、素敵な男子の友だちがいるし、みんないい人ばかりなんだ。あ、今度青大附高に入学してくる名倉時也って子、私の小学校時代の同級生で不器用だけどすごくいい子だから羽飛くん仲良くしてあげてね。とにかくみな大好き。でもね、その中でひとりだけ、何か違う、私の中で特別な人がいるって、その頃やっと気づいたんだ」

「まさかそれが」

「そうだよ。それが羽飛くん」

奈良岡は片手を肩に乗せて力強く頷いた。

「三学期に入ってからいろいろなことがあって、改めて羽飛くんのことをいろいろ考えてみたんだけどね。私にとって羽飛くんの存在は本当に特別なものだったんだよ。いつも会うたび元気がもらえるし、おしゃべりしていると気持ちがすうっと楽になるし。クッキー食べてもらえるとすごくうれしいし。最近はすごく嫌われそうなこと言っちゃってその時は思い切り落ち込んだりしたし。でも、羽飛くんと話している時に私も他の女の子と同じようなときどきした気持ち味わえたところ見て、やっぱりそうなんだなって、わかったんだ」

「どきどき、かあ？」

まじまじと奈良岡の顔を見やる。確かに幸せ一杯の笑顔だが、その中に「どきどき」感は感じられない。そもそもその感情の中に「ときめき」が入っているのだろうか。

「そう。うまく言えないけど。でも、勘違いしちゃ困るんだけど」

突如、奈良岡はまじめな表情に戻った。笑いが消えた。にらんだように見えた。

「私、絶対に、美里ちゃんから取ろうなんて思ってないんだ」

「美里？」

「そう。今日このことを話そうと思ったのはそれもあるんだよね」

また笑顔に戻した。

「私、羽飛くんには美里ちゃんがいることわかっていたし、もしふたりが付き合ったらきっと全力で応援できたと思うんだ。ふたりがお似合いだからってわけじゃなくて、ふたりだからこそ、きっと私もめいっぱい幸せな気持ちになれたと思う。私美里ちゃんも大好きだしね」

「またいつもの誤解かもしれねえけど、俺と美里は」

「うん知ってる。でも私言いたいのはそれとはちょこっと違うんだ」

明らかに語るトーンが違う。このムードは確か、以前も感じたことがある。身構えた。

「立村くんと美里ちゃんが付き合い始めて、私も最初はよかったなって思ってたこともあるんだ。美里ちゃん立村くんのこと真剣に想って泣いてたこと知ってるから。でもね、美里ちゃんが立村くんに関わっていけばいくほど、すごく辛い思いをして元気なくしているのが、見ていて私、

悲しくなっていたんだ」

「おい、悪いが俺の親友を罵倒するのはやめろよな」

「わかってる。羽飛くんが今でも立村くんを親友だと思って心配してるのはわかってる。でも、これ、私が嫌われても言わなくちゃいけないことだから」

ぞわぞわ、今になって寒気が走る。

「この前のロングホームルームで羽飛くんは美里ちゃんと一生懸命がんばってたよね。テーマは立村くんのことだったけど、教壇から必死に美里ちゃんを守ろうとして一緒に並んでいた時、ああやっぱり、この二人が一緒にいると、私もうれしいんだって涙が出そうになったんだ。いろいろ大変なことがあってもあの二人が必死なら私もめいっばいついていこう、応援しようって心から思えたんだ。なんでだろうね。加奈子ちゃんとのこともいろいろあったけど、美里ちゃんが思い直して手を差し伸べてくれた時、私、本当は思いっきり泣きたかったんだ。立村くに縛り付けられていた気持ちが羽飛くんによって解かれて、やっと、あの、一年の頃の笑顔一杯の美里ちゃんに戻れたんだって。すごい魔法だって、私、本当に、本当に」

いきなりその瞳から涙がこぼれ始めた。ぎよっとする。

「私、本当に羽飛くんが男子の中で一番好きだったんだってやっと自覚できたんだよ。こんなすごい魔法使いがいて、大好きな美里ちゃんを救ってくれた。こんなすごい人を私は三年間ずっと好きでいたんだってこと、すごく誇りに思えたんだ」

肩を軽く揺さぶられた。かくんかくん揺れる。

「羽飛くん、お願い。これからも美里ちゃんのことを守ってあげてね。ふたりが笑顔で仲良くしてくれることが、私だけじゃない、他の人たちも幸せにしてくれるんだから」

目をこすり、「あ、お母さんに怒られる」とハンカチをすぐ取り出す。改めて拭きながら、「まだ、立村くんのこととかいろいろ問題が残ってることはわかってる。文集のことも私は納得してるよ。でもね、これ以上美里ちゃんが立村くに傷つけられないように、羽飛くん全力で守ってあげてね。羽飛くんにとって立村くんは親友なんだってことはこの前のことでよく理解しているけれども、もうとばかりが美里ちゃんに行かないようにしてほしいんだ。美里ちゃんが元気になると、私も、他のみんなもうれしいんだから。お願いね」

「あのさ、じゃあ、結局俺は何をすりゃいい？」

「美里ちゃんを守ること！」

どしっと肩に両手がかかった。貴史は天を見上げた。そこには白い太陽らしきものが雲にかかってきらきら光っていた。

——あのなあ、これまずくないか。

いくら卒業間際の雪崩告白現象が起きているとはいえ、まさかあの奈良岡彰子にかまされるとは思わなかった。本人は一切拘りもさそうだし、伝えただけで大満足してスキップして帰っていったが、貴史の後始末は誰一人担当してくれないありさまだった。

家に戻り、部屋にこもり、ぽかんと天井を見上げる。

鈴蘭優のポスターがはがれかけているのが見える。

——やっぱ、優ちゃんが一番だよなあ。

ありがたかったのは、他の女子たちと違い特別付き合いをかけられたわけではなかったことだった。もともと奈良岡は別の高校に進学することが決まっているし、文通とかキスとか求められたわけでもない。ただ伝えてすっきり水洗トイレ状態にしたかっただけなのかとは思う。

だがしかし。

——南雲になんて言うんだろうな。しかしあいつも別の女子と付き合っておいて、それでこの有様かよ。自業自得といやあそれまでだが、卒業前にこりゃどうするんだ？ 修羅場だぞこりゃ。ま、俺には関係ねえよって言いたくたって、関わらざるを得ないってか？ どうするんだよ俺。どうするんだよ。

ため息を吐きつつ、つぶやいてみる。

「どうすんだよこういう時。なあ立村」

返事もこだまも返ってくるわけがなかった。

「貴史、電話よ」

夕飯を平らげて部屋で漫画を読みふけっていると、母の声で呼び出された。

「誰だよ」

「知らない男の子、ええと、天羽くんとか言ってたよ」

「天羽？」

珍しい。天羽と付き合いがないわけではないが、電話をかけてきたのは初めてだ。母も知らなかったようだ。とりあえず急いで降りて受話器を握り締める。みなそれぞれの部屋に戻っているし、母も風呂にそのまま入りに行った。誰もいないのはありがたい。

——例の件かなあ。

明日かあさって行われるという、評議委員会と生徒会のあの話の可能性が大だろう。覚悟を決めて挨拶する。

「よお、おひさ」

——どうもどうもおっひさ。羽飛、ちょいと長話に付き合ってもらえるかなあ。

「なんだよ」

脳天気な天羽の声がびんびん響く。

——実は、明日のことなんだけどな。清坂ちゃんからも聞いているかもしれないんだが、羽飛

がD組の代行として来てくれちゃったりするって本当か？

「ほんともなにも俺が行かねば話にならねえだろが」

——よっしゃ。そういうこととなったら急ぎで、これまでの展開とお願いしたいことなんぞペラペラとしゃべってよいかな。

「しゃべらねえと話がはじまらねえだろ。ま、俺も美里からある程度聞いてるけど、例のあれ、ザ・生徒会との対決だろ」

——よござんす、お話するとしやすか。

何を言いたいんだかわからない口調で、それでも天羽はゆっくりと語り始めた。

——大まかに言うのだ。俺んちの騒ぎを聞きつけてまず動き出したのが教師一群。ここまでは知ってるよな。

詳しくは知らないがあわせておいた。

「美里から聞いてる」

——もともと本条先輩が卒業してから評議委員会の過剰な権力に対してはえらくいらついていたご様子でな。俺も正直、自分が評議委員長やるまでこんな面倒くせえことになってるとは思わなかったってことよ。

「お前まじかよ。一応お前立村から聞いてねえのかよ」

——だから、立村がへまやかす前はあいつひとりで押さえが利いてたんだよ。藤沖ともうまくいったしな。それがあんなことになっちまってから歯車狂いまくり。あの生徒会長とキリオの登場で生徒会の株上昇しまくり評議委員会信頼がた落ちどうすりゃいいのって奴よ。

そのあたりはだいたいわかっている。

「んで、なんだ、次の展開」

——それに輪をかけて三年評議委員会を巡る愛欲どろどろした昼メロ展開。先生方も自分がひとりでテレビドラマに燃えるならともかく、生徒方のくさいドラマは見たくなかったというわけで、さっそくいい子ちゃん生徒会の肩を持ったというわけ。

「生徒会の肩ったって、そんなもんあるのか」

——あるんだよそれが。立村が藤沖と仲良く話し合いしていた頃は、仲良く分担しようという流れだったんだが、生徒会役員が入れ替わっちまってはそういうわけにもいかねえ。あれだけ人間関係ぐちゃぐちゃしてた連中に任せるよりも、おとなしく言うこと聞いてくれる生徒会に任せようが見た目もいいだろ。

「まあそうだな。お前ら暴れすぎ」

——そう言ってくれるなよ羽飛ちゃん。とにかく過ぎてしまったことはしょうがねえ。けどな、俺たちにも言い分はあるわけだよ。学校側の意見としてはだ。うちのクラスの刃傷沙汰は評議委員会がすべて悪いという方向に持っていかうとしてるんだわ。評議委員会が特別な権限を握っちまって、それがごたごたの発端で、結局はじかれた元評議委員の女子たちが大暴れしたなれのはってな。まあ否定できねえったらそれまでなんだが、単なる私怨と評議委員会そのものの存在価値を議論するのってなんか間違ってるぞ。

「当事者に言えるのかと俺は問いたいぜ」

なんだか妙なことを言い出している天羽。貴史には把握できない内容だ。A組事変のことを言っているのなら、どう考えたって評議委員連中の内輪もめだろう。否定はできないだろう。悪いがここは先生方の判断が正しいと思う。

——ちゃうんだよ、わかってくれよ羽飛。

天羽はかみ締めるように繰り返した。

——そりゃ、俺は西月にひでえことしたと思う。俺が刺されるならしかたねえ。評議委員同士だったということが原因だったらしゃあねえ。けどな。よっく聞いてくれ。どうも周辺の話を知ると、西月が近江ちゃんに襲い掛かったのは評議委員がらみの話じゃねえみたいなんだよ。どういふことかわかるか。

全くわからない。わかれったって無理だ。

「じゃあ説明しろよ。俺からしたらどっちだっておんなじじゃんって思うけどな」

——オッケー。つまりだ。俺が言いたいのは、西月の行動は決して評議委員会のごたごたが原因じゃないんじゃないかねえかってことなんだ。俺も確認できてねえからわからねえけど、その前後にキリコの自殺未遂情報があったら。あの前後に生徒会のお姉ちゃんたちと西月とが一戦構えていたらしいという未確認情報がどこから流れてきたわけだ。

「それどこだよ」

——立村のお気に入りの、あの怖い女子。わかるだろ、お前も。

「あいつか」

不気味なほど胸のでかいあの女子が頭の中に浮かんだ。

——つまり杉本が事情を把握しているらしい。こういう時に現在溺愛中の立村が動いてくれりゃなんとかなるんだがな。

「一応、立村E組にいるぞ。あの女子とも毎日顔あわせてるだろ」

立村の話が出てきたのをよいことに、貴史もくらいついた。

「うちのクラスもめちゃくちゃやこしい事情あるから、あいつのこと放置してるけどな。けど、E組にいるならその事情全部聞き出せねえのか」

貴史を始めD組連中が様子を伺っている中、天羽が行動を起こしているとは思えない。だが確認する意味はある。天羽はすぐ答えた。

——あいつが戻ってきてから話はした。立村にその気はある。

「なんだと？」

むき出しで尋ねてしまう。天羽は自信ありげに断言した。

——立村なりに俺たち評議のことを考えてはいるみたいだ。トドさんとも話をしていたようだしな。ただ、あいつの精神状態でどこまで復活してくれるものやら。正直、期待はしてねえよ。

天羽の言葉は半分以上耳からすり抜けていった。

——立村に、その気はある。

貴史たち三年D組の奴らが何一つ出来ず手をこまねいている間に、すでに天羽が一步立村に踏

み込んでいます。そしてそれを受け止めているらしいとも。

——まじかよ。あいつ、E組でいじけてるんじゃないのかよ！

知らず知らずのうちに胃のあたりがよじれてくる。気持ち悪すぎる。

「おい天羽、それ、いつだ」

——あいつがE組に籠ってからすぐ。様子がおかしいという噂聞いてたが、俺たちも切羽詰ってたからな。直接E組に会いにいった。そいで、ちゃんと中庭で話し合いした。

まさか、菱本先生と美里の三人が真剣にあいつのことを見守るよう決断している裏で、天羽は勝手に動き、立村の心を動かしている。そんなこと絶対できないはずなのに、やり遂げている。手に汗がにじむ。冬なのに。

——言っとくがそれが最初で最後だ。俺もその後うちの担任から止められてあいつには近づかないようにしてる。だがあの時、立村ははっきり言ったぞ。俺たちを助けたいってな。だから、たぶん、何とかしたいとは思っているはずなんだ。

「あいつ俺の顔見て全力で逃げ出したがな」

悔しさがにじんでしまう。みっともないっつらない。天羽は電話の向こうで笑っている。

——まあ、うちの担任が立村のこと面倒みていたみたいだし、俺もそのA組の生徒だしそのあたりの差はあったのかもな。明日のことでもあるしそいで、ちょいと相談があるんだけどな。羽飛。

いきなり声音が変わった。貴史も用心する。

「なんだよ」

——お前の意見聞きたいんだよ。明日の最終決戦で、立村に声をかけたほうがいいかどうかってことなんだがな。担任およびD組の連中は立村に近づかないほうがいいという判断でいるし、本来なら俺もそれに従ったほうがいいと思う。けど、あいつは確かに俺とトドさんに言ってくれたんだよ。俺たちを助けたい。そうさせてほしいってな。

「本当に、そう言ったのか」

確認を何度もしなくては、信じられない。あの立村だ。

——神に誓って、そんな通り。

「んで、立村を引っ張り出してどうしたい」

——さっき言ったろ。俺は立村がなんかしてくれることを期待しちゃあいねえ。俺があいつに会いに行ったのは、立村が評議委員の盟友だってことだけだ。今は俺が評議委員長だし俺ひとりでなんとかしねばなんねえ。難波も更科もいる。立村がいなくてもなんとかなるっちゃん。いざとなったら生徒会相手に切った張った勝負かける覚悟はある。けどな、お前どう思う。立村の立場として、俺たちの評議委員会が崩壊しちゃうのを知らねえままでいるって。あいつがいくらめけてても、気づかぬうちに終わっちゃうのはやだろ。

「それだけかよ」

——ま、俺のセンチメンタルなハートから言っちゃうと、三年男子評議四人組が最後の最後にきっちり顔をあわせたいというただそんだけけどな。羽飛ががんばってくれるのはわかるしありがてえとは思。けどな、この三年間、俺たちは四人だったんだ。それだけは本当なんだよ

。わかってくれるか、羽飛。

何を言いたいのかわからない。何を目的としているのかがわからない。ただ天羽が立村のことを仲間だと思っている、それだけは伝わる。

「じゃあなんだ、天羽のご希望はどれなんだよ。俺が顔出すだけじゃだめなんだろ」

——そういうわけじゃねえって。三年D組のクラス代行がおまえなんだから出ないとうそだろ

。また矛盾したことを言い出す天羽に、貴史は畳みかけた。

「立村を、最後の決戦にひっぱりだしたいんだろ。つまりはそういうことだろ」

先ほどの饒舌とは打って変わって黙りこくる天羽に、さらに、

「あいつが戦力になるかどうかは別として、評議委員会が最後にとどめさされる所を、天羽としては立村と一緒に見届けたいと、そういうことだろが。じゃあなんでお前、自分で会いに行こうとしねえんだよ。現にお前、あいつとしっかり話したんだろ。いい返事もらったんならお前がいきゃあいいだろ。なんで俺に電話かけてくるんだよ。俺、部外者だろが」

——羽飛、ちゃうちゃう。

またのんびりした口調でやりかえす天羽。

——お前、まだ立村ときっちり話、してねえだろ。

「はあ？」

嫌味にも聞こえるその言葉。きっと尋ね返すと、

——明日、悪いけどなあ、難波とふたりでE組へ立村訪問して、連絡入れてもらえねえかな。俺が行くのはなんか違うんだ。たぶん立村、いろいろ気まずいことありすぎて引っ込んでしまってるだけなんだよ。俺が引きずり出しても、あいつは他の奴らが無視してると思い込んでまた籠っちまう。むしろお前と、それからホームズ難波の方が適任者だと思うんだけどなあ。

「なんで難波が？」

意外な名前に少し引く。

——難波も今、一番しんどい時なんだわ。ご存知の通りキリコ騒ぎでごたごたしているしな。それにこう言っちゃなんだが俺としちゃあ、難波にも立村とじきじき勝負するチャンスをやりたいんだよな。あのままだとなんだかお通じすっきりしない状態で卒業しちまいそうな気がしてな。んで、今回、ホームズにも話しとくから、昼休み、ちょいとE組に挨拶してもらえねえかな。

初めて天羽の狙いを知った。

——こいつ、すげえ、すごすぎる。

立村が繰り返し「天羽が本来は選ばれるべきだった」と繰り返していた意味がやっと把握できたような気がする。

——天羽、すべて把握してたってことかよ。E組にこもっちゃった立村を、俺たちD組がどうすりゃいいかわからねえって頭抱えてたことも、あいつが戻りたくても戻れなくてタイミングつかめねえってことも。みんなお見通しってことかよ。

ついでに言うなら、難波と立村との間の不協和音も、生徒会のやり口の裏も、すべて理解したうえで動いているということだ。

「天羽、お前なあ、まさか」

——言うは野暮野暮。あまり深く考えなさんな。ま、俺もこれで残念な評議委員長の烙印を押されちまう運命だと分かってるけどな。まだまだ表舞台はありますぜってところ。ほら、知ってるだろ。卒業式の一発芸もそろそろ仕込まないとならねえし、生徒会に権力ふんだくられたって評議委員会の仕事はまだまだあるってことよ。まあそんなときは羽飛にも協力お願いするんじゃないかかって思うんで、その時はよろしくってところで、じゃあな。

「んじゃ、おやすみダーリン」

——おやすみハニー。

最後は意味もないネタ挨拶で締め、受話器を置いた。握り締めた手が震えた。

——こんな奴が同期で、そいで立村はひとりで評議委員長だったわけかよ。気配りばりばり、計算もしっかり出来るあいつの上に立ってやらねばなんなかったんだ。立村はたったひとりで。

想いを馳せた。電話一本で貴史にも伝わるのなら、三年間一緒に過ごしてきた立村のことだ、天羽の力をいやというほど感じてきたに違いない。本来長になるべき相手が隣りにいて、なぜか自分が過剰評価されている立場。はるかに手際よく、賢い天羽を側に見ていた立村がなぜ、「大政奉還」を言い出したのか。

——なんでもっと早く、気づいてやれねかったんだろな。

一晩とっくり考えた後、貴史なりに結論を出した。

——やっぱし、ここは天羽の計画に乗っかるか。

普段なら天羽のやり方をすんなり受け入れようとは決して思わなかったはずだった。去年の修学旅行時も天羽や更科に無理やり引きずられてあちらこちら引っ張りまわされ、半分切れかけたこともあるにはあった。こちらだって立村の親友としてそれなりに気を遣っていたつもりだし、向こうの一方的な絶縁宣言のようなものもまあ時間が経てばなんとかなると高をくくっていたところが正直ある。

だがしかし。

朝一番で教室にたどり着き、中に入るも、やはり立村は来ていなかった。

仕方ないのでロビーに向かう。朝早すぎただけかもしれない。

——いや、立村は昔からやたらと朝が早い奴だったし。

もしかしたらE組にいるのかもしれないが余計なことを考えるのはやめた。

三年D組に戻ってこない限り、どうしようもない話なのだから。

——立村はいつも目の前で天羽の実力を見せ付けられていたんだなあ。

ロビーに腰かけ、手袋だけ脱いだ。ジャンパーはまだ着たままでいた。まだ始業まで二十分以上も間がある。そのうち美里も来るだろう。天羽も来るだろう。更科も来るだろう。それに、

「お前、早いな」

声をかけてきたのは難波だった。珍しい。こいつがやってくるのはいつもならもと遅いはずだった。学校推奨コートを羽織り、めがねを拭く。相変わらずきぎな振りをしてみせる。似合っていないのに青大附中のホームズは。

「よお、難波。お前もどうしたんだよ」

「早く来たら悪いか」

そう言いつつも向こうの方から貴史の隣りに座った。雪が肩にかかっていた。

「ところでだが、今日の放課後のこと聞いたか」

「聞いた聞いた。昨日天羽から電話もらった」

「やはりな」

膝をリズムカルに叩きながら、難波は呼吸をわざとらしく整えた。

「最終決戦という奴なんだがな」

「ずいぶん大げさじゃねえの。別に地球滅亡の危機を迎えたわけじゃあねえんだから」

「お前から見たらそうかもしれないが、俺たちからしたら似たようなもんだ」

きっぱり言い切ると。難波は俯き加減のままため息をひとつ吐いた。

「とりあえず今言えることは、天羽の計画を綿密に実行するとともに、風向きが生徒会側なのを出来る限り評議に戻すこと、それだけだ」

「できんの、それ」

ぼそっとつぶやいて見る。難波が怪訝な表情を浮かべる。

「俺も全然わからねえけど、今回生徒会の奴らが話を持って来たんだろ。それで決着付けろってことだとすると、向こうさんの勝利宣言みたいなことしたいんじゃないの」

「殴りたいとこだが当たっている」

意外にも難波は認めた。

「羽飛の言う通りなのが情けない話だが、その通りだ。もう生徒会側は教師サイドを味方につけている。俺たちどうしようもない評議委員連中をこの際まとめてそれぞれの学級の中に籠っていたきたいと、そういうことだ。せっかく結城先輩、本条先輩の力で奪い取った自由解放な委員会文化を、そのまま生徒会に譲って、俺たち評議はまた籠の鳥に戻れとな」

「けどもう卒業だろ？ んなこと拘らなくたっていいだろが」

「お前は何もわかつちやいない」

いらただしげに難波は首を振った。

「羽飛、お前は今まで帰宅部だったからわからないだろうが、想像してみろ。もし仮にお前がバスケット部にいたとする。バスケット部が弱すぎて来年からは中学での部活動がなくなり、代わりに高校バスケット部の二軍扱いにされたとしたら、どうする」

「んなあこと、ねえだろ。たとえるならモウちっと分かりやすくしろよな。例えば」

「黙れ。とにかく、俺が言いたいことはこんなくだらぬ説明じゃねえ」

無理やり話を持っていかれる。

「今日の委員会の前にだ。昼休み、あいつのところに行くというのは、もう聞いているか」

本題だった。貴史は頷いた。もっともその通りだ。

「ああ、それ、天羽に言われた。お前と行けってな」

——互いのわだかまり解消のため、なんてことは言ってねえんだろな。

短く答え相手の出方を待つことにした。

まだ十分近く時間がある。気がつけばどんどん登校する生徒も増えている。もしかしたら話をしている間に立村もこっそり生徒玄関からE組に向かったかもしれない。

「委員会そのものはまだ何度かあるかもしれないが、実際の活動は今日で最後だ。あとは卒業式の余興を考えたりなんなりする程度だ。お互い、修羅場の学級だとそっちの方で忙しいということもあるがな」

「轟がいるから楽だろ」

「それは言えてる」

あっさりみとめ、難波は続けた。

「菱本先生が何考えているのかは他クラスの俺が知ったことじゃない。だがこのまま、立村が評議委員に戻らなくてもかまわないという判断でもって、今回は羽飛に白羽の矢が立ったというわけだろ」

「最悪、そうだな」

事実なのだから認めざるを得ない。

「となると、立村のことだ。いろいろあってE組に隠れて、そのまま出てこない可能性もあるというわけだ」

「まあなあ、できればそろそろ戻してもらわねばなあ。卒業式どうするんだよって。一応あれだろ、卒業式で評議が先頭で入ってくるだろ。どう考えても俺が代理で出るってのは間違ってるだろ？」

「お前知らないのか。D組のくせに」

またむかつくことを聞いてくる。難波は振り返って答えた。

「立村は、今年の卒業式で英語答辞を読み上げることに決定しているはずだが」

「はあ？」

口がぽっかり開いたまま動かない。

——英語答辞？　なんだそりゃ？

もちろん卒業式で答辞を読む生徒はいる。去年は本条先輩だったが、評議委員長を前期後期しっかり勤めていて学年トップの成績という誰もが認めざるを得ない相手なのだからそれは当然のことだ。しかし、今年は選びようがない。少なくとも評議委員長がふたりいるなかで選択肢を出せと言われてもどう判断すればいいのか。

「てことはなんだ？　まさかバイリンガルバージョンの卒業式って奴か？　レディーあーんどジェントルマンとか言うのか？」

「羽飛、お前少し頭冷やせ。本当の答辞を読むのは藤沖だ。生徒会びいきの教師連中が決めそうなことだ」

元生徒会長の名を出した。

「だが、そうなると去年、おととしと評議委員長が承っていたポジションを取られたとか言って俺たち評議がいじけるかもしれん、そう考えた教師陣は、最初にまず天羽へ話を持っていった。ダブル答辞でいくかとな」

「天羽にかよ」

これは意外だった。べったりひつつき耳を傾けた。

「近づくな気持ち悪い。だが天羽なりに考えるところがあったらしくそれを断り、あいつはなんと立村を推した」

「あいつをかよ！」

——天羽、お前いったい、どこからどこまで。

昨夜絶句したことの続きが繰り広げられている。生徒玄関は嵐のように生徒たちが駆け込んできているが、知ったことじゃない。難波の言葉は続いた。

「立村が英語のみ学年トップを貫いていることは誰もが知っている。ついでに前期評議委員長だということもだ。現在非常にいじいじした状態だということも承知している。そのことを伝えたくて天羽は、立村に英語で答辞を読ませたらどうかと提案したというわけだ」

「まじかよこいつ」

「まじなんだそれが。教師連中もさすがにこのままだと立村がいじけたまま高校に進学してしまうし、そうしたら面倒なことになるのは目に見えている。そこでE組に籠るのを許す代わりに立村へ英語の答辞を暗誦させることを決定した。つい、四日くらい前のことだ」

「D組では聞いてねえぞ」

美里だって気づいていたら早く話をするはずだ。全く、もって、聞いてない。

「まだ公表されてないのかもしれないが立村はすでに承諾しているはずだ。もっともその答辞はオリジナルではなく、藤沖の書いたものをそのまま英訳する形にするらしい。立村に書かせておくのが一番いいはずなんだが、ここは英語答辞の内容を統一させることにして、少しでも藤沖の頭をひとつ高くしておきたいと、そういう計算もあるだろうな」

「ああ？ よくわからねえ」

「つまりだ。立村が読むのは藤沖の原稿の英語版だ。あいつのオリジナリティーばなし。単純に英文暗唱機としてのお披露目だ。まあ時間もないし、それが一番楽なんだろう」

——何かすげえことになっちまってるけど、いいのかよほんとに。

立村がいつのまにか卒業式で英語答辞……ただし人のものを英語で暗唱するだけ……といった大役を仰せ付かり、あっさり受け入れているとは思わなかった。しかも誰一人D組では話題にする奴もいなかったとは。相当極秘情報なのかもしれないが。

「俺が言いたいのはそこじゃない。立村が英語答辞に入るということは、評議委員の余興に無理に混じる必要はない。英語答辞という荷の重い仕事をやるんだったら、もうひとつのイベントたる評議委員の一発芸大会には代役を立てても全く不思議はない。そうだろう？」

「そうだろうって、言われたってそりゃむちゃだろ」

「無茶じゃない」

難波は立ち上がった。

「すべてはつながっている。学校側は立村の面子を立たせつつ、D組の評議代わりを羽飛にして差し支えないと言う展開で持っていこうとしているわけだ。英語に四苦八苦してないかもしないが準備で忙しいはずの立村をこれ以上負担かけずに、本来デビューすべき羽飛に仕事を任せたい。それはだいたい想像がつくだろう」

「いやそりゃお前推理先走り過ぎだぞ」

「悪いが、教室に戻る。昼休み、俺の方からD組に行く」

鐘が鳴った。これはまずい。走らねば。難波を追い抜き貴史は階段を駆け上がった。三年の教室で一番遠いD組。二段飛びデモしなければ間に合わない。

「あーら珍しく遅いねえ、羽飛」

「ああ、古川、ちょい聞きてえんだけどな」

まだがらがらしゃべりまくっている男女の面子。貴史はこずえの隣りに向かい、尋ねた。

「立村がなんでも英語の答辞をやるって話、聞いてたか」

「ちょこっとね」

あっさりこずえは答えた。何を今更といった顔だった。

「美里、それ知ってるのか」

「知らないかもね。私は図書館の司書の先生経由だから詳しいことわからないけどね。ただ、悪いけど今のうちのクラス、立村が何かやろうとも、もうどうだっていいと思ってるから興味持たないよ」

「どういう意味だよ」

声を潜め、それでも意地を込めて尋ねた。こずえが頭の上に手を組み、上を見上げながら、
「つまりね、立村のことなんてもうどうでもよくなってるんだよ。今、E組に行っちゃったけど、誰一人興味を持ってない。男子はわかんないけど女子はね、たぶん美里以外あいつのことを気遣う奴はいなくなってるの。三十人中二十九人だったとしても、それが普通だと感覚として感じちゃってるの。だから、興味なし」

「まじかよそれ」

腕を引つつかまれた。耳元にささやかれた。

「羽飛、よっく聞きな」

早口で、半分聞き取れなかった。

「今のうちのクラスは、あんたがトップで動いているから落ち着いちゃってるの。今までになく、一番のびのびしてるのよ。美里は認めたくないみたいだけど、それが現実なの。こんな中に立村が戻ってこれると思う？ いい、二十九人が三年D組百パーセントなの。百一パーセントにしたらまたバランス崩れるとみんな思ってるの」

「結論なんだよ」

いらいらする。はっきり言わせたい。こずえは即答した。

「立村にはもうE組に消えていてほしい。これが三年D組女子の総意なんだよ」

「お前は思うんだよ」

貴史の詰問にも即答した。

「何言ってるの。私にとっちゃ、今は九十九パーセントに決まってるでしょが。さっさ、早く席に着きなよ。一パーセント問題これから片付けるんだからね」

給食を食い終わり、貴史はすぐに教室を出た。

「羽飛、一緒に文集のページ張りやってくんないの？」

明るい声で玉城が呼びかける。一緒にいるのがこずえ、そして金沢、水口、もちろん美里もいる。

「悪い、あとで手伝うけど、ちいと今日は用事あるんだ」

「つままないの」

こずえがわざとらしくつぶやいた。美里に向かって、

「羽飛のレイアウトって独特で感動しちゃうんだけどなあ。昨日だってそうじゃん？ 金沢の書いた落書きみたいなのをページの角にぺたぺた張って、めくったその指のところに当たるように設定してるんだもん。おっと思うじゃん？ 編集の天才かもよあんだ」

どうも休み時間や授業の隙を狙っているいろいろ組み合わせている文集のレイアウトが思いのほか大好評らしい。この点は三年D組の芸術頭、金沢も同感らしく、

「そうだよ、さぼれないのかよ」

また頭の痛いことを言う。褒め褒めされるのは気持ちいいが、それどころじゃない。

貴史は美里に目でちらと合図を送った。わかっているかは期待しない。たぶんわかるだろう。

「また明日手伝うから、わりいな」

「え、今日の放課後はだめなの？」

つつこむ玉城に今度は美里がささやいた。

「今日の放課後は評議委員会と生徒会の集まりがあるの。貴史にも出てもらわないと困るから。明日ね、明日」

——やっぱりわかってるじゃねえの。

美里のフォローもあってとりあえずは三年D組の教室を出た。

——難波の奴、そうとうめげてるな。

詳しい色事ネタを確認したわけではない。ただ、今朝ロビーで語らった際の難波がいつになく気取りやホームズの仮面をはずしたように見えてならなかったただけだ。噂に聞く通り霧島ゆいへの気持ちもそれなりになくはないのだろう。それに。

——更科も言ってたけど、本気であいつ、自殺を止めに行ったのかよ。

想像がつかないが、本当なんだろう。そこまで本気で惚れられるか。しかも、アイドルつぐみちゃんではなく、アマゾネス美少女霧島ゆいに対してである。

——やっぱ、人間わからねえなあ。まあいっかあ。

最近自分の想像を覆す出来事が続きすぎて頭が痛い。評議連中の裏の裏を日々見せ付けられると、改めて立村の根性が自分の思っていた以上に座っていたことを思い知らされる。一年、二年、三年とこうも見た目以上のすさまじい連中とやり取りしてて、さらに本条先輩を代表とする先輩たちとも交流を深めていて、立村の中ではきっと大混乱をきたしていたのではないだろ

うか。ほんの少し触っただけの貴史も、いわゆる悪酔いしそうになるのだ。立村のような神経過敏野郎にとっては相当、きつかったと思う。

——やっぱなあ、立村は少し様子を見るのが一番いいのかもなあ。こんなきつ環境にぶち込まれて、『大政奉還』とかわけのわからんことやらかそうとしてど響盛買っちゃまって、それで頭ぐっちゃぐちゃになったとしても、あいつの気持ちとしちゃあ当然だよな。俺もやっぱ、あいつにひでえこと言っちゃったけど、こんな環境にいたらそりゃ、めげるよな。

とてもだが、あの気品溢れる生徒会長佐賀はるみ、アマゾネスの天才霧島キリオ、この二人に立村の歯が立つわけがない。立村にはかわいそうだが、そっとしておいたほうがいいと貴史なりには判断していた。もう何も言わず、静かに。ただ天羽の思いやり通りに、けじめをつける意味で今日の最終決戦には沈黙の形で参加させたほうがいいとも思う。

——天羽も言ったもんな。「あいつに期待しちゃいない」ってな。そりゃそうだよ。もう負け試合だもんな。ただ、評議の連中は最後の最後まで立村を評議の仲間として一緒に戦いたいと思ってるだけなんだもんな。もう、どうしようもねえよなあ。

貴史は一呼吸置いた。今ここでできるのは、難波と組んで天羽の友情からくる想いを伝えるだけだろう。その場にいてもらいたい、それだけなのだから。

難波がすでに給食準備室の前で腕を組んで待っていた。下げられた給食の鍋やステンレスの食器が山積みされている。まだ匂いが残っている。今日は豚汁だった。

「遅かったな、行くぞ」

「お前迎えにこねえし」

忘れていたのだろう。あまり突っ込まず貴史も歩き出した。ちょうど入れ違いに例のポニーテール娘が教室を出て行くのが見えた。貴史たちとは反対方向に歩き出したので気づいていない。運が良し。

「ということは、誰もいないってことだな。行くぞ」

細かいことは言わず、難波はすぐにE組、正式には「教師研修室」の扉を開いた。

「俺が先に入る」

貴史が返事をする間もなく、先に難波が足を踏み入れた。もちろん貴史もそれに続く。

立村は立ち上がってふたりを見ながら窓際に向かった。見た感じはあまり変わっていない。浮かんだ表情も最初は驚いていた様子だが、すぐにいつものポーカークフェイスを作り直している。背を向けたくても礼儀上できないといった風に、露骨に避けているのが見え見えだ。わかりきっているから傷つくわけがない。貴史が今度は先に、立村の立っている窓辺脇の机にそのまま座った。逃げ道をふさぐ。挨拶してみた。

「よ、元気」

「ああ」

戸惑う表情で、それでもかすかに笑みを浮かべて立村が答えた。後から難波も近づいてきて、貴史の前にある机の椅子を引っ張り出し腰掛けた。わざわざ膝を組んで謎の投げキスをしよう

としている。何をしたいんだかわからない。

沈黙を作る気、さらさらない。このまま一気に進むことにする。貴史は尋ねた。

「あのさあ、立村。いつ帰ってくる？」

「帰る？」

また一步引くような顔で、立村がかすれた声で問い返す。予想通りだ。怖がっているのが見え見えだ。そういえば立村が学校に戻ってきてからまともに話したことなどないに等しいのだから、よそよそしいのも無理はない。悪いがそれも読み込み済みだ。

「美里がうるせえのなんのってな。ああ、お前知らねえか。さっきな、天羽がしゃべってたけどな、今日臨時の評議委員会と生徒会役員との話し合いがあるんだとさ。で、お前休んでる間さ、美里が代わりに出るってうるせえからしかたなく受けちまったんだけどな。俺、評議のことなんか全然わからねえだろ？ なあ、難波」

若干、嘘が混じっている。実際話を持ってこられたのは昨夜の電話だ。だが立村がそのことを知ったら、たぶん傷つくだろう。できればたまたま、顔を合わせたから頼まれただけであって本当は立村に頼みたかった、っぽい雰囲気を出したかった。この辺も計算はしている。難波の顔を見ながら奴の相槌を待つ。

「わかっててもわからなくても話の核心がつかめればいいことだ」

難波はぶっきらぼうに答え、また投げキッスポーズを決めた。なんだこいつとつっこみたい。そういう趣味なのか。貴史は続けた。

「どうせたいしたことじゃあねえとは思うんだ。三年も最後だし、女王様集団の生徒会にまあ、最後のご挨拶ってことで集まるんじゃねえかって聞いているけどなあ。だろ、難波」

「なわけねえだろ」

難波がぴしゃりとはねつけた。そのまま立村をじっとにらみ付けている。窓辺で様子を伺っている立村も静かに見返した。ため息を小さくついて、

「何かあったのか、難波」

穏やかに尋ねてきた。

「天羽から聞いたんだったらわかるだろ」

「聞いたといってもどこまで本当かわからないしさ」

確か天羽は昨夜の電話で、立村が協力を申し出た旨の話をしていたような気がする。当てにしていけないという前提ではあるが。全く関心がないわけではないのだろう。ただ、天羽の目的が現状をなんとかしたいというよりも、立村を最後の最後に仲間として受け入れたいという、そこまでは気づいていないらしい。

難波は言葉を選んでいるようすで、舌で何度もちっちとリズムを取った。両手を机に置いて、立村に座ったまま向き直った。

「要するにだ。この前のとんでもねえ出来事がきっかけでだ。天羽がつるされてるってわけだ。立村、そのくらいは聞いてないのか」

「聞いてる。でも」

「女子評議はみんな使えない奴ばかり、男子連中もアホばかり、そんな評議委員会を誰もこれ

からは全校生徒、信じませんぜよ、とばかりに生徒会長および取り巻き連中が、天羽の過去を暴露しようとしてるわけなんだ。お前そのくらいは想像つくだろ」

「ああ、そうだな」

不意に立村が困った表情で貴史の顔を見やった。こいつが助けを求める時によくするしぐさだ。笑いかけてやった。少しだけほっとした。ここから少しだけ、立村のかつての評議委員長らしさが垣間見え始めた。つまり、リーダーシップともいう。

——こいつも、最後までこういう風にやってりゃいくらでもごまかせたんだろがなあ。運、ねえよな。全く。

たぶん評議委員会でも、難波たちに向かって情報収集していたのだろう。教室に入ってきた時のおどおどした態度とは打って変わり、立村の表情には凜としたものが浮かび上がり始めた。三年D組の教室ではめったに見られないもので、貴史も実はあまり感じたことがないものだった。

「例の事件と生徒会と、どういう関係があるんだ」

「つまり、天羽はな、今まで西月とのごたごたでもって男としての株を落としてるわけだ。俺は全くそう思わんが、女子連中の間では終わってるわけだ」

「でも、どうせ卒業なんだからそれまではさ」

「お前わかってるだろ。前期評議委員長やってるくせに、なに寝ぼけたこと言ってる」

難波はいらただしげに舌打ちした。

「つまり、西月の行動が天羽のせいだってことで、生徒会連中はたっぷりいやみを言いまくろうとしてるってわけだ。しかもな、今回はな、評議以外にもな、元生徒会の三年連中も登場する。もっとむかつくことに、希望者の一、二年も覗きにくる」

「希望者ってなんだ？」

「希望者とはつまり」

ここで難波は言葉を切った。親指で立村を指した。

「来年以降の生徒会参加希望者とも言う。すでに現在の生徒会は来年に向けて人材集めしてるってとこだ。まあ俺たちがやってきたことを、これから生徒会がお株奪ったってとこだ」

納得顔で立村が頷く。どんどんリーダー面していくのが見える。

「要するにだ。俺たちの恥さらしを全部、生徒会役員連中は他の連中にアピールしたいってわけだったの。まあ俺たちはかまわん。お前の言う通り、四月からはサヨナラだ。だがな、評議委員会ってのが今まで言われていたのと違っていかに使えねえところなのかってことがばればれになると、もう、今までのようなのりではやれねえよな」

「今までの乗りったって、それはしょうがないだろうし、でも新井林が」

「さあな。お前はもう投げた奴だからどうでもいいんだろな。しかも生徒会は女子連中ばかりだ。頭の悪いどっかのばか女子とは違って、あいつらは頭が働きすぎる。天羽もめいっぱい防戦してるがぎりぎりってとこだ」

「天羽もかなわないほどってことはないだろう」

難波の挑発に立村は間髪要れずに切り返す。貴史も難波の性格を知らないわけではない。投

げキッスを連発しているとはいえ、秀才ぞろいのB組在籍でそれなりに賢い奴だ。立村と比較しても成績にしろ頭の回転にしろはるかに超えている。しかしそれに冷静に問い返す立村も、貴史からしたら無理しているように見えなくもないけれども、ほぼイーブンの戦いのようにも伺える。

難波は指で机を叩いた。臨界点到達寸前。立村の目つきもいつもの穏やかさが消え、きりきりと引き絞られたような眼差しに変わってきた。

「どれだけ俺たちが正論を吐こうとも、あいつらは女子連中を味方につけてるわけだ。今までは評議委員会ががしっと真中押さえていたから多少ばたばたしようともなんとかあったがな。今は先生連中も、全校生徒のみなさまも、評議委員会がやってきたことの八十パーセントを取り上げて、全部生徒会の手柄にしよう決めてるわけだ。特に俺たち三年世代のばかっぷりをみりゃあ、誰もがそう思うよな」

「難波、お前、何が言いたい」

声を抑えて立村が問いかける。

これはまずい。かなり、ものすごく、えらく、きている。

——やべえ、ここでなんとか押さえねえとまずいだろ。俺の二の舞だぞこりゃ。

難波が何故喧嘩腰なのかを説明しないとまずい。

もちろん立村も分かっていないわけではないのだろう。

難波が霧島ゆいにまつわるさまざまな出来事に巻き込まれていることも貴史以上に理解しているに違いない。たぶん普段の穏やかな立村だったらそれなりの対応をしているだろう。だが今の立村は自分のことだけで精一杯の状態だ。かつての評議委員長としての振る舞いを取り戻しつつはあるけれども、まだ、難波のことを思いやるところまではたどり着けていないように見えた。難波だけではない、天羽がなぜ立村に話をしに行ったのかその意味すら勘違いしているように見える。

——あいつらはただ、こいつと一緒に最後の最後まで心中したいだけなのによ。

——こいつは自分の力が足りないからってだけでそれを無視しようとしてるってわけだ。

——そりゃあねえだろ。お前が無能のまんまでもいいって、難波だって、天羽だって、更科だってそう言ってるのにな。しゃあねえ、俺がここでこいつを引っ張り出すしかねえよ。

「立村、よくわからねえけどよ」

貴史は思いっきりゆっくりと言葉を挟んだ。難波がむっとした顔で貴史をにらんだが脳天気流した。

「とりあえず難波や美里が言うには、俺もそのなんだ、臨時の評議委員会に参加しなくてはならないんだとさ。冗談じゃねえよな。けど、しゃあないよな。お前が出ないんだからな。代行をださねばなんないってことだな」

——だから、お前にも出てこらわねと困ると、そういうわけなんだ。

言いかけたところで立村が遮った。感情の籠らない、冷ややかな口調だった。

「代行じゃないよ。俺が思うに、羽飛、お前が三年D組の評議にふさわしい」

——だからそういう問題じゃあねえだろがあ。

直接言えないもどかしさ。言葉を飲み込む間に立村は首を小さく振り続けた。

「秋から実際そうだろ。羽飛のおかげで、今、三年D組、まとまってるだろ」

「立村、何考えてるんだ？」

——なんだと、こいつ、おい。

さっきまで難波に向けていた光線が、今度は貴史に向けられた。

あの凍りついた眼差しが、あの時と一緒に凍った。

貴史は身構えた。立村は窓際から離れると、視線を合わせたまま教卓に向かった。そのままじっと見返した。きっぱり言い放った。

「だから、本来の役割として出ていくべきだと思う」

ひと呼吸、ふた呼吸、み呼吸。

ゆっくり心中で数えた。

——ここで切れちゃ、この前とおんなじだ。なんも変わらねえ！

自信がなくておどおどしているだけのこいつにとって、与えられたあまりにも重たい地位はきつとしんどかったことだろう。そのことに気づかなかった貴史は確かに悪い。

だが、それ以上にこの三年間一緒に過ごしてきた天羽たちの友情をあっさり無視していいのかとも思う。立村には脅したりぶん殴ったり怒鳴ったりしても全く効果がないことを、貴史自身三年間よく理解している。ただ、このどうしようもない馬鹿野郎でも一緒に語っているとほっとするまれなる人物だということも貴史は肌で感じている。こいつは自分が思っている以上に、いい奴なのだ。評議委員長だとか女子の趣味の悪さとかそういうところを差し置いても、貴史は立村とこれからもしゃべっていきたいと思う。天羽たちもきっと同じはずだ。その気持ちをないがしろにしてほしくはない。どう切り出せばいいものか。

ゆっくり、穏やかに、調子を狂わせないように。

できるだけやわらかく聞こえるよう、貴史は呼びかけた。

「それって逃げじゃねえのか？」

真正面から見据えて、それでもゆっくり、ふわふわ、やんわりと。

イメージは奈良岡彰子でいく。

「三年間、立村を評議として選んだのは、悪いけど俺たち三年D組一同だと思うんだよなあ」

立村は無表情のまま首を振った。かすかに笑みが浮かんでいる。

「羽飛が俺を推薦したからだろ。推薦されたら受けるしかないだろ。受けたら自動的に三年間持ち上がるのが、今までの評議委員会のシステムだったんだから、仕方ない」

そのまま今度は難波を見据えた。難波の血走った眼差しを立村は冷静に受け止めているようだった。

「だからだよ、難波。そういう間違いを正すために俺は評議委員会から生徒会への『大政奉還』をたくらんだ、って言ったら、怒るか？ 本来評議委員になるべき人間がなれなくて、なるべ

きじゃない俺が三年間いついてしまった。それが根本的な間違いだったと思うんだ。難波もそれは、そう思うだろ」

——やべえ、頷いちまうじゃねえかよ。

誰もが感じていた事実を、立村本人が目の前で言い切ってしまうている。

否定してほしがっているのは見え見えだ。だが難波の性格上どうであるか、はっきり言って危険極まりない。

貴史は息を呑み、ふたりの視線を交互に伺った。難波、しくじるな。感情におぼれるな。よくわからないがシャーロック・ホームズは沈着冷静だったはずだ。

「思わない」

しばらく沈黙が続いた後、難波がどすの利いた声で答えた。

立村がふっと戸惑った風に唇を開きかけた。

「立村がどう考えようが俺の知ったことじゃねえ。だがな」

難波は貴史をちらと見た。すぐに立村へと戻した。続けた。

「本来あるべき姿とか言ったって、そんなの知るか。俺が知ってるのは、この三年間の評議委員会だぞ。それ以上の何物でもない。同期の野郎面子は俺と天羽、更科、それと立村、お前だ。それ以上何か変わったこと、あるのか？ それ以外のバージョンなんて、想像する必要、いまさらあるか？」

——よっしゃ、難波、よく言った。パーフェクト、よくやった！

ガッツポーズしてやりたいがさすがにそれは控えた。何度も貴史は難波の背中で頷いた。また意味不明の投げキッスを見せ付けてもこれは許せる。難波は立ち上がり、立村をちらと見た後、貴史に向かい、

「じゃあ、そんなとこで」

あっさり声をかけ、最後に言い残し、扉から走り去った。

「とにかく、放課後、評議委員会と生徒会の臨時会議がある。場所は三Aだ。とにかく来い」

チャイムが同時に鳴った。戻らないとまずい。三年D組は一階からだとは果てしなく遠いのだ。貴史は立ち上がった。ふたりだけの空気がまだ重たかった。困り顔で難波の去った後を眺めやる立村に、貴史も何か言い残さなくてはならないような気がした。

「とりあえず、俺もあのなんだ、そのなんとかに出るから、お前も来い。難波言いたかったの要はそれだけみたいだぞ」

立村はじっと貴史を見据えた。

「お前もか」

——じゃあねえだろ。お前来るって言ってねえし。

そこまでは言えず、貴史は明るく頷いてみせた。

「まあそういうとこ、じゃな」

片手を挙げ、貴史は扉を開け放った。廊下に出るとまだ豚汁のあぶらっぽい匂いが漂ったま

まだだった。お代わりしたい気持ちに駆られた。腹が猛烈に空いた。廊下を駆け出した。幸い杉本梨南とはすれ違うことがなかった。

——あいつどうするつもりだろな。

すべて言うべきことは伝えた。天羽たちの心意気も、難波のぶきっちょながらも友を思う気持ちも。そして貴史も、

——お前がどんなにへましてめげてたとしても、選んだのは俺たちなんだ。お前を責めたりなんかしねえ。まあ全員じゃねえかもしれないけどな、少なくとも俺と美里は絶対にお前をぶちのめしたりしない。まあ、あと、古川とか、あの気障野郎とか、あと、たぶんまだたくさんいるぞ。なあ。

頭がぐちゃぐちゃになりかき回されているようだ。三階まで一気に駆け上り、貴史は教室の後ろ扉からこっそり戻った。やっぱり授業が始まっていた。にらむ国語の先生に向かい、

「すんませーん、ちょっと修羅場で」

へらへらしながら謝っておいた。本当は「ちょいとやぶ用で」と言いたかったのだが、舌が回らなかった。自分が正直すぎて困る。

「じゃあそろそろ行く？」

帰りの会が滞りなく終わり、みなばらばらに教室を出て行く中、美里がコートを腕にひっかけて、かばんを抱えて近づいてきた。

「ったくめんどくせえよなあ」

「しょうがないじゃないの。A組でやるからさっさと行こ」

まだこずえが教室に残っている。やはりまぜっかえしに来たいらしく近づいてくる。

「そっか、あんたら、これからまた委員会なんだもんねえ。羽飛も評議代行としてかあ」

「そういうことなんだけどなあ」

美里も頷いて、こずえに話しかけた。まだ時間があるということらしく、貴史の前席の椅子を引っ張り出し腰掛けた。こずえを「ちょっとこっち来て」と呼び寄せた。

「生徒会側からの提案なのよ。一緒に仲良くやってこうねって話だったのに、いつのまにか先生たちが生徒会の味方についちゃったもんだからもう大変。評議委員会にはもう余計な口出ししないでよって釘を刺したいみたいなの」

「いろいろあるからねえ。美里も大変だ」

「そうよ、ほんっと大変なんだから！ けど、まだ私たちはいいよ。どうせ卒業するんだから。けど四月からどうなるんだろ。もう知らないよ」

——気になってしかたねえくせに。

教室を出て行く男子たちが、「羽飛、両手に花か？ それともアマゾネスか？」とかからかう声も聞こえる。誰も甘いイメージを持たないところが我が三年D組なのだと思う。

「でさ、あいつは来るの？」

貴史の方を見やりつつ、こずえが尋ねる。言いたいことがこの三人だとよく伝わる。貴史は美里と顔を見合わせた。答えてもいい相手だ。

「わからねえ」

まず一言だけそう答えた。

「けど、来るようには言ってきた」

「昼休みでしょ」

すぐに美里が打ち返すように答えた。

「どうだったあの人」

「相変わらず、びびってたけど、話は聞いてみたいだな」

「そうか、相変わらずってとこね」

美里がため息を吐いた。言っちゃなんだが恋人の甘さはない。母ちゃんのため息だ。

「難波も説得してたけどなあ、ありゃ逆効果じゃねえのってとこ。もうちっとなだめるとか、持ち上げるとかだなあ」

「貴史、立村くんに会った時の様子なんだけどもうちょっと詳しく聞かせて」

美里に無理やり割り込まれた。貴史も腕時計で確認する。緑の文字盤が光っている。まだ十分

くらいは間がある。

「俺に対しては逃げたような顔してたけどな、難波とは評議の話で少しばっか盛り上がってたぞ。全く捨てたってわけじゃあねえんだろう。ま、結論は一緒だけどな。『委員長は天羽であって俺は結局役立たずなんだ』ってな。これ俺にも同じこと何度も言ってた。評議は俺がなるべきものであって、自分もどるもんじゃねえって。いつもの繰り返しだな」

「やっぱりそうか。立村くん頑固だもんね」

「けどやるべきことはやったぞ。天羽だって立村が伝説の元評議委員長として切った張ったするのを期待してるわけじゃなさそうだしな。それよか、やっぱ、評議四人組の形を取って終わらせたいっつう気持ちの方が強いだけなんじゃねえの」

「そうだよな。わかるよそれ。女子だと二度と叶わない夢だもん。男子だけでもそうしたいよね。天羽くんも辛いんだ」

しばらく黙って話を聞いていたこずえが、ふたりとちろちろ見ながら、思い切った風に口を開いた。

「ちょっと気になること聞いてたんだけどさ、小春ちゃんがぶっちぎれた理由って杉本さんのことがきっかけだったらいいんだけど、それほんと？」

「なんだそりゃ」

——古川も知ってるのかよ。

意外だった。美里が貴史の顔をじっと見やりながら、答えを待っている。

「まあ、一応、ちらとな。けど俺は生徒会の話全然聞いてねえから細かいことは知らねえよ」

「そうか。そこに賭けるしか、ないよね」

独り言をつぶやく風に、こずえは窓辺を眺めた。ふたりに語り掛けたいことではなかったらしい。美里も答えなかった。あいまいなのは好きじゃないので貴史なりに切り替えした。

「お前にしては似合わん口マンチックな雰囲気漂わせてどうするんだよ。さ、知ってること言っちゃえよ」

「いやね、思い出しただけだよ」

こずえは立ち上がり、自分のかばんを持った。

「修学旅行とか、宿泊研修とか、その他いろいろ。立村の性格上、大切にしている相手に対しては自分がどんなに馬鹿にされたって言うこというじゃん。美里だってそれ知ってると思うけどさ。もしかしたらって思っただけなんだよね。それじゃ私も、図書館で江戸時代の春画ではあはあしてくるよ」

——なんだそりゃ。

いつもの下ネタ女王にしては切れ味の悪い締め方に、少し戸惑った。見送る美里もいつものように、「なにエッチなことまた言ってるの、もうやだ！」などと突っ込んだりしなかった。ただ、

「そうだね、こずえは鋭いね」

小声でつぶやいただけだった。

「さ、行こ。どっちにしたってもう少しで始まるんだから」

促されて貴史も立ち上がった。廊下から眺めると雪は止んでいるようだった。

三年A組の教室ではすでに生徒会役員連中がみな、教壇周りの席に陣取っていた。早めに集まっていたのだろう。それにしても、

「A組のホームルームってこんなに早く終わるんかよ」

美里に聞いてみると、

「狩野先生あまり力入れてないみたいだしね。終わったらみんなさっさと帰るみたい。今日は特に、こういう予定があるってわかってたからさっさと離れたんじゃないのかな」

放課後だらだら組の多いD組とはカラーが異なるらしい。

「んで、天羽はまだかよ」

「天羽くんだけじゃないよ。評議で来てるの私くらいだよ」

見ると、窓際の一角はまるまる空いている。いかにも評議連中専用席ですといった風に。

「これってなあ、上座と言っていいのか？ 一応戸口からは離れてるけどな」

「ばっかじゃないの。そんなこと誰も考えてないわよ。第一、窓際だったら夏はともかく冬寒いじゃない」

「てことは、いつも扉のまん前で鎮座ましていた立村はいつも上座だったってことか」

「さあね」

あきれた風に美里は首を振り、窓際から四番目の席に着いた。貴史もその隣りに座った。美里の顔を見つけてすぐに挨拶してくる生徒会の奴らもいるのだが、貴史に対しては会釈程度。ずいぶん軽く見られたものである。

「清坂先輩、どうもです、かよ」

「なにいじけてるの。私だって三年間評議やってきたんだから知り合い多くたって不思議ないじゃない？」

別に文句があるわけではない。気になるのは、女子の生徒会連中が寄り付いてこないのに対し、男子の書記やら会計やらがにやにやしながら挨拶するところだけだ。少しずつ席も埋まってきた、今度は下級生の評議男子たちがばか丁寧に、

「清坂先輩、こんにちは」

とか挨拶し出し、うちひとりは何を考えたのか、

「これどうぞ」

などと薄荷飴を渡して去っていく。何なのだろう謎の一年生は。

「ありがと。でもみんな遅いね」

適当に笑顔で交わしていく美里。こうやってみると意外とこいつも男子には受けがいいのかもしれない。貴史としてはひとりひとりに鈴蘭優の写真集を渡して本来あるべき女子の姿を説教したいのだが、そんなことはどうでもいいわけだ。

「あ、美里早いね」

三年評議連中内で美里たちの次に現れたのは、B組評議の轟とC組評議の阿木だった。ふたりともよく顔を知らない。いや、轟に関しては非常にインパクトのある前歯で印象に残っているが

さほど付き合いがあるわけではない。

「羽飛くんが来てくれたんだね」

「しょうがないよ。だってこいつが代行なんだもん」

「そうか。じゃ、座ろうか」

それ以上会話を交わさずに轟は前から二番目の窓際席に座った。意外と轟に自分から挨拶をしにいく下級生はほとんどいない。美里とはその点、明らかに扱いが違う。阿木に対してはもちろん、霧島ゆいの穴埋めということもあるのでさほど印象が薄いのもかもしれないが、一応は轟も三年間B組評議を勤めてきたはずだ。ずいぶん軽んじられているものだ。

「野郎連中はまだかよ」

「まだみたい」

——立村を説得してるのかよ。

本当は聞いてみたかったが、なにせ美里のまん前にはC組評議の阿木がいる。余計なことを口走ってスパイじみたことされたらたまったものではない。

三年男子評議がまだ揃わないうちに現れたのは、佐賀はるみ生徒会長と、その騎士たる新井林健吾だった。このふたりの関係を知らない青大附中生はほとんどいないだろう。しっかり寄り添うようにぴたりと佐賀の背中に張り付いている。もっとも佐賀はあまり気にしていないようで、ためらうことなく教壇席に自分から椅子を用意して座った。自分の立ち位置は理解しているようだ。新井林もまん前の席に座ろうとし、ふと腰を浮かして美里のほうに振り返った。ジャンパーを机の前に置き、駆け足で来る。

「清坂先輩、今日は」

ここまで口にした後、つと貴史に気がついたかのように丁寧な礼をした。

「羽飛先輩お久しぶりです」

「まじ久しぶりだよな。んで、今日何やるんだよ」

美里が微笑むのに合わせて新井林が頭を掻く。どうも気になるこのタイミング。

「生徒会と評議委員会の最終の詰めです。いろいろと誤解が残っているようなのでここできっちりと話し合いをして、来期につなげようというのが目的です。喧嘩ではありません」

「誰もそんなこと言ってねえだろ。まあ俺は完全部外者だし、よくわからねえけど、手伝うことあったらなんかするよ」

「ほんとですか！ あの、ではあの、明日の放課後なんですけど、うちのバスケ部で」

「あ、わりい、そっちはパスな、俺完全に身体なまっちゃってるし着いてけねえよ」

妙に和む。やはり新井林の本質はバスケ部キャプテンであって、次期評議委員長として彼女の配下として縮こまるタイプではないんじゃないかと貴史は思う。

「新井林くんも大変だろうけど、私も手伝えることあったら言ってね。かえって邪魔かもしれないけど」

「いえ、そんなこと絶対ないです。あ、それでは」

これもまた妙な間だ。難波がちらりともらしていた美里とのいろいろな噂もこういうところか

ら漏れ出しているのかもしれない。もっとも美里の態度を見る限りまったく埃立ちそうもない。

「ゆいちゃんの弟、来たわよ」

美里に向かって阿木さんが振り返りささやいた。戸口を覗き込むとやたら顔がとんがった、きわめて霧島ゆいにそっくりな男子がつんと澄ましたまま教室に入ってきた。軽く教室の連中に会釈をするところが気障だ。その後すぐに教壇前の佐賀に駆け寄り、なにやらささやいている。気がついたのかぺこんと新井林に、教壇に立ったまま頭を下げるところがいかにもと言う感じではある。

「ゆいちゃんの弟くんは、佐賀さんのこと大好きだもんね」

「そうなの？」

忌々しげにつぶやく阿木さんと、知らなかった振りをしている美里との掛け合いに耳を済ませた。

「ゆいちゃんは、あの弟がいなかったら、学校辞めなくてすんだのに」

「そうなの、そうなんだ」

相槌に困り果てている美里が、貴史に救いを求める眼差しを投げかけてきた。

「霧島今どうしてるんだよ」

「学校になんて来てないよ。来れるわけないよ。あんな辛い思いしてたら」

阿木は貴史に目もくれず、美里にだけささやいた。露骨に声は聞こえる。ふんふん美里も頷いている。黙って聞け、とのお達しだ。

「小春ちゃんもかわいそうだよ。杉本さんが生徒会の子たちにひどいこと言われていて見るに見かねて抗議しにいったのに口利けないからってことでばかにされてあしらわれたんだから。

そりゃ、近江さんにしたことはやりすぎだと思うけど」

「そう思ってたんだ、阿木さんも」

「私たち、C組のみんなは、絶対許してないよ、生徒会のこと」

さすがに声を潜めている。しゃべり声が周辺でもかなり盛り上がっているのでうまくカーテンと化しているがそれでも貴史には聞こえる。

「小春ちゃんがちゃんと口利けてたらゆいちゃんがあんなに煮詰まるまで何もできないなんてことなかったもの。ゆいちゃんが追い詰められたのはあの弟のせいなんだもの。杉本さんがあんなにいじめられることになったのも、結局は生徒会のあの子のせいじゃない」

——よっくわからねえけど、C組の女子連中が霧島のことを恋しがってるってのはよくわかった。

その他にもわさわさに見知らぬ男女が現れ、適当に席についていた。

「今日はね、委員以外で二年以下の生徒会に興味ある子たちにも声かけてるみたいなんだ。天羽くんたちが話してたけど」

「そういえばそんなこと言ってたな」

適当に阿木の恨み節をあしらいつつ、今度は貴史に話しかけてきた。

「生徒会の子たちがそうしたみたいなんだ。味方を早めに増やすなんて敵ながら天晴れね」

「評議はやってねえのかよ」

「できるわけじゃないの」

美里は首をすくめて後ろ扉を眺めやった。

「それにしてもほんっと、男子遅い！ どこ行ったんだろう！」

同時に前扉が開いた。

「おまたせいったしやした！ でははじめまひよか」

評議三羽鳥登場。天羽が高らかに告げた。教室内が静まり返った。

「遅すぎます、みんな待ってたんですよ」

「いやいやちとらも準備がありましてなあ。三年生はいろいろいそがしいんでさあ」

どこかの政治家が選挙活動するかのよう天羽は手を振りながらにこやかに愛想を振りまいた。当然、反応する物好きはいない。反対側の扉から近江も忍び込んできたようだが誰も関心を持つ奴はいない。

難波と更科は無言でそそくさと貴史の前席、前々席に着いた。難波が険しい表情なのは別としても、更科はちらと阿木に向かって、

「結構いらついていた？ みんな？」

と問いかけている。阿木が首を振ると、

「そうか、意外だなあ」

とぼけた口調でつぶやき、次に貴史へ振り返った。

「立村来るって言ってた？」

「いや、わからねえ。話はしといた。難波から聞いてねえか」

「聞いたけど、羽飛はどうかかなと思っただけなんだ。あっそか。わかった」

あっさり流され、拍子抜けする。更科は次に難波へ、

「ホームズ、ホームズ、なんとかなるって」

ささやきながらノートを取り出した。メモは取るつもりらしい。意外と堅い。

「さあてと、じゃあよろしく。せっかくだいい機会なんだから、俺ら評議と腹かちわってとことん語りましょうってとこで」

満面の笑顔が周囲の固まった表情とは不釣合いに見えた。ちらと貴史に目を向け、にやりと笑い、次にA組席にいる近江に向かい、

「近江ちゃん、惚れ直しておくんないましょ」

わけのわからないことを声かけし、うるさく席に着いた。

「それでは、本日の生徒会・評議委員会合同会議を始めさせていただきます」

佐賀はるみが涼やかな声で宣言した。今まで脂ぎった雰囲気だったのがその声だけで一気にやわらいだような気が、貴史にはした。

「本日の議題ですが、前もって説明しておいた通りです」

ショートヘアでヘアバンドをした生徒会役員の一人在甲高い声を張り上げた。

「本日みなさんに集まっていたのは、昨年から話し合いが始まっていた、生徒会と評議委員会との間でどのように仕事を割り振っていくか、の最終的な結論を出すためです。今まで評議委員会が他の中学との交流業務を始めさまざまなイベントを取り仕切ってきたようですが、昨年の段階でそれだけでは広がり がなさ過ぎるということもあり生徒会に委任しようという動きが出てきました。ここまではよろしいですか」

隣の美里をつつき、貴史は尋ねた。

「誰だよあれ」

「ああ、あの子ね、生徒会書記の渋谷さん。去年副会長だったけどね」

こともなしに美里は答えた。

「噂けどゆいちゃんの弟君とは犬猿の仲みたいよ」

「面倒だなあ」

教壇に鎮座ましている佐賀はるみ生徒会長の脇で、説明を続けている渋谷という女子だが、その脇にてちんまり腰掛けている霧島副会長のつまらなそうな表情がすべてを物語っている。どうやら、生徒会も一枚板というわけではなさそうだ。

「今回なぜこんなにたくさんみなさんに声かけさせてもらったかっていうと、去年の十一月に行われた生徒会改選をきっかけにさまざまな状況が変わってきたことが挙げられます。最初の段階では評議委員会で行われていたさまざまな交流行事を生徒会も一緒に企画から参加してはどうか、ということだったんですけど、いろいろ調べたところそういうことって四年くらい前までは生徒会が中心になって行ってきたことってのがわかったんです。これ、先生たちに聞いたんですけど。私たちも入学してからそんな話ほとんど聞いたことなく、なんでうちの学校は生徒会が企画から参加できないんだろうって不思議に思っていたので」

ここで渋谷は額のヘアバンドを指で直した。

「今年の一月から私たち生徒会は、先生たちと話し合いを何度か持ちました。評議委員会の人たちにはお伝えしなかったのですが、冬休み中いろいろ呼び出されたりしたんです。そしたら、先生たちも本当は昔のやり方で生徒会主導の交流活動の方が自然だしやりやすいという話が出てきたんです」

——なんだそりゃ。

どうも、天羽や難波の話とだいぶ違ってきているような気がする。きわめて自然な流れ、全く持ってその通りだ。今までの話をつないで見る限り、評議委員会 が主導となったのはアイドルマニア委員長結城先輩の時代からであり、そこから天才・本条先輩の独断場となり最盛期を迎えたということか。しかしそこから先の凋落は何も言えない状況である。

「やっぱり他の学校同士と交流する場合、最初に案内されるのが評議委員会というのに、みな最初は戸惑われるそうです。もちろん説明はしますけれども、かみ合わないこともいっぱいあるそ

うなんです。無駄な時間がどうしても生まれてしまうと。それでも以前は評議委員会がしっかり活動してらしたようなので問題はさほどおきなかったんですが、最近の状況からして、やはり、これはまずいのではという方向に先生たちがなってきたみたいなんです」

——いやあ天羽どうするんだこりゃ。

言われたい放題だ。ちらと天羽の姿を見る。おちゃらけた顔して教室に入ってきた時とは大違いの、くそまじめな横顔にかなり切羽詰ったものを感じている。

「よく言うよね。そのきっかけ作ったのどっちなんだか」

美里が小声でぶつくさ呟いている。

「かつては本条委員長、結城委員長といったすごい手腕の持ち主もいたことですし、そのやり方で今までは問題がなかったんんでしょう。でも、それって何年前のことですか？ 昔ですよ？

今はもう、生徒たちの価値観も変わったし、このままでいいのかという疑問だってありますよね。去年の改選はまさにそのことを表していたと思います。えっと、というか、評議委員長選挙も」

ここまで言うのか。おぞましいったらない。天羽にさりげなく視線が集まる。すぐに天羽もにんまり表情をこしらえて頷く。

「仰せの通りでございます」

「そうですか、わかってればいいんです。それで、評議委員会のみなさんがかつての本条先輩体制と同じようなことができないというのであれば、現在それが可能な生徒会に持っていくべきものではないかっていうのが先生たちのご意見です」

「あの一、ちょっと待ったかけていいですか」

おちゃめな声で手を挙げた奴がいる。貴史の目の前。三年C組男子評議。更科基だ。

「えっと、俺もあまり評議委員としては陰薄かったんでなんですけど、現三年世代の評議委員会がなんも功績残してないってのはなんか、誤解かなあと思うんですが。俺たちも確かに褒められたことばかりじゃないですが、たとえば前期に絞っていうと水鳥中学との交流を活発化させたり、他の委員会に仕事をどんどん渡すようにしたり、それとほら、今まで評議で抱え込んできたイベントをどんどんクラスに落としこもうとしたりとか、俺たちなりにがんばってきたつもりなんですけど。それを認めてもらえないのは寂しいなって思います」

あっけらかんと、チワワな笑顔で更科は言い切った。拍手が評議委員の間から洩れる。もちろん貴史も椅子ごしに、

「さっすが生え抜き評議だよな」

称えるのを忘れない。親指立てて合図を返す更科はさらに続けた。

「それに、今回の評議委員会と生徒会と合同でこれからやろうって話は、前期評議委員長の立村が提案したことです。これ、すっごい有名な話だと思うんですが、知らない人いますか」

初めてここで立村の名前が登場した。教室内に不穏なざわめきが広がった。

「更科くんから切り出したんだ」

美里がまた独り言を言う。

「そりゃ言うだろうが。立村がやったことだろ」

「これが計画なの？」

更科に尋ねようとする美里だが一切無視された。更科の演説は続く。

「このことなんですけど、結構知らない人多いみたいなんで俺から言っちゃいますけど、評議委員会の中ではすっごく意見分かれたんですよ。だって馬鹿みたいでしょう。せっかく本条先輩の時代に俺たち楽しい思いしてきましたし、評議委員同士仲間同士での方がいろいろとやりやすいですからね。けど、当時委員長 やってた立村は俺たちが反対するのを押し切る形で前期の生徒会長だった藤沖に話を持ちかけたってことです。な、そうだよな、藤沖」

気づかなかったが、生徒会役員チームのすぐ後ろに藤沖が座っている。さすがに後輩たちが心配だったのだろう。仕方なさに頷いた。

「立村の目的はさっき渋谷さんが言ってくれた通りでして、評議で押さえ込んでいたイベントをもっとたくさんの人に生かしてもらおうきっかけを作りたい、そのために生徒会の力も借りたい。そうすればもっと幅広いつながりが生まれるんでないか、ってことです。けど、今回の集まりの内容を聞いてみると単純に、評議 委員会を単なる学級委員に押しやっとして、生徒会だけで独り占めしようとしている風にしか俺、見えないんですけど間違ってますか」

また拍手が評議委員会チームから溢れる。阿木が親指立てて更科に合図を送っている。おとなしそうだが結構阿木という女子も気合が漢だ。

「お言葉ですが更科先輩は間違ってるじゃないですか。今からその根拠を申し上げます」

いきなり立ち上がったのは、さっきからものを言いたそうにうずうずしていた霧島弟だった。狐に似た端正な顔を崩さず、これまた甲高い声で話を奪った。不満そうに席につくのは渋谷だった。隣り合う佐賀はるみになにやらささやきかけている。ここまで佐賀は開会の挨拶のみで、特に何も意味ある言葉を発していないのが謎だった。

美形の男子が立ち上がると女子たちの眼差しがどことなく輝くのは気のせいだろうか。貴史は美里の様子を伺った。別に特段なんでもない。三年女子たちの表情も対して変化はなし。やはりここは、霧島ゆいの方だろうと思う。他の二年以下女子たちの態度の変わり方といったら、傍観者の貴史からしてもぞっとするほどだ。なぜいきなり髪を直したりするのだろうか。乱れっぱなしだっていうのに。

「一点目ですが、確かに評議委員会の先輩方の功績は素晴らしいものがあります。もちろんそれを否定することはできません。水鳥中学生徒会の方々との交流会 を実現させたこと放送委員や図書局音楽委員などなどさまざまな委員会に権限を譲り渡すことで幅広い視野で活動ができるようになったこと。その他たくさんあります。僕も決して否定はいたしません。ですがこのことはほとんど前期に固まっていることであり、強調するならばそれは、卒業なさった本条先輩の遺産とも言えるのではないのでしょうか？」

また小声で美里が呟く。

「違うって。本条先輩立村くんのやり方に大反対してたはずだよ」

「そんなのどこでわかるんだよ」

「だってどう考えたって本条先輩が賛成するなんてわけじゃない！」

美里は力いっぱい言い切った。霧島は背をすっと伸ばし、女子たちのとろけるような眼差しと男子たちの聳盛こめた表情を受け止めつつさらに話を進めた。

「優れた委員長のもとで統括されていた評議委員会が数々の功績を挙げられたことについて僕は否定いたしません。ですがよくよくお考えください。その後、夏休み以降の流れですがあれはなんなんでしょうか。天羽先輩」

「別にそんな突っ込まれるようなことしてないと思いますが、なあ難波？」

悪意も何も感じない表情で天羽が受け流す。難波の表情は何えないが頷いているところだけは確認した。静かに隣の席で轟が様子を伺っている。

「前期評議委員長である立村先輩が本条先輩の方針を受け継いであれやこれや行われたことは存じ上げております。しかしそれはオリジナルにあらず、本条先輩だからこそ許されたことでしょう。先生方もおっしゃってました。あれは本条先輩のためにだけ存在した特別組織だったのだと言うことを語っておられました。さらに付け加えると、当時の評議委員会顧問が昨年定年退職なさった駒方先生というのも、影響していたのかもしれない」

——ええとなんだ、あの、歳の割りにはアバンギャルドな絵が好きな先生か。

確か金沢が美術の授業中認めてもらえないで泣いていたのを覚えている。美術の教師だった。評議委員会の顧問という話もどこかで聞いた記憶があるようなないような、そんな感じだ。貴史には関係ない。

「そのことを考えると、失礼ながら三年のみなさまが作り上げてきた評議委員会とは言い切れないところもあるのではと存じますがいかがですか？」

生徒会にも評議委員会にも直結しない生徒たちが廊下沿いに固まっていて、そいつらが派手に拍手している。生徒会よりの連中なのかもしれない。

「いやあ、まあ本条先輩は表裏ともに激しい人だからねえ」

のほほんと続ける天羽。いったいどこで反撃するのだろう。貴史が天羽の立場だったらここで一発ぶん殴りに立ち上がっているところだが、それすらしない。むしろ余裕ありげのようだ。更科も発言時ののんびり口調とは違い、どこことなくきょろきょろと落ち着かず、難波にいたっては肩の怒らせかたが通常とは違うの がありありと見て取れる。

「僕としては前期の評議委員会のみなさまの行動であれば多少は受け入れねばならないのではとも考えるところがあります。ですが、特に十月以降のみなさまの行動を見ていれば誰もがこのままだと危険なのではと感じるのも無理はないのではと思いますがどうでしょう。一区切りつけて、評議委員会の改選をきっかけに天羽先輩が選ばれ本格的に生徒会との合同作業を進めるべく動いてきたわけですが、お世辞にもスムーズに進んだとはいえませんが。僕たち生徒会ではできれば評議委員のみなさん全員の意思統一のもとで行えるものと思っておりましたが、他の学年の委員のみなさんは何が起きているのかすらほとんど分からない状態。僕たちがいろいろ質問しても無関心の状況。これをどうお考えになりますか」

——そういうことか！

「なにがそういうことなのよ」

隣の美里が貴史をつついた。もちろん声は潜めている。

「お前ら評議がどこ突っ込まれたかってことがわかったっての」

「何よそれ。言い方によっては殺すからね」

「気づけよ。あの狐野郎が言うのは、お前ら評議連中が自分らのことに集中してる間に、後輩連中が置いてきぼりになったってことを突っ込んでるわけだよ」

「そりゃしょうがないじゃないの。学年違うし全員に声かけるわけいかないし」

「ばーか、だからお前はアホなんだよ。お前らがやるべきことは、目だたねえ連中にも声かけして、それなりに話をして、立村たちの考えてることをだ、伝えて協力頼むことだったんじゃないか？」

美里は黙った。カンペンケースをはじいている。ざまあみろ。

「生徒会側からしたら評議委員会は上の連中ばっかで騒いでいるだけであって、後輩たちは無関心、こんな状態のチームに大切な行事なんてまかせられねえよ、じゃあ俺らにちょうだいな、そう言ってるてことだろ！」

「もう遅いじゃない！」

美里とやり取りしている間にも霧島の長い演説は続いている。

「まだ一年でありながら副会長を務めている僕からいたしますと歯がゆいものがあります。そしてそのことに気づいていたのは僕たちだけではありません。先生たちも同様に感じていたとのことでした」

「それ、正月にかい？」

また時代劇のどこかの遊び人風に天羽が尋ねる。笑いが起こった。

「さようです。生徒会も少しずつ団結し始めてきたこの頃、このままいい加減なやり方で進む評議委員会と一緒に進むべきなのか、それとも本来生徒たちと一緒に進むべき生徒会がすべてを統括すべきなのか、もう明らかでしょう。僕たちだけではなく、先生たちもその点については強く共感なさってます」

さらに、と霧島は力を込めた。

「あまり申し上げたくないことなのですが、評議委員の三年のみなさまのチームワークもかなり、がたがたに見えますがいかがでしょうか。前期評議委員長の前立村先輩は書記に退いてほとんど姿をお見せにならないと耳にしております。天羽委員長も難波先輩も更科先輩ももちろん力を尽くしておられるのは存じてますが、その一方で愚かな生徒たちにより人間関係のさまざまな破綻も起きていますとか。先生たちがもっとも心配なさっていらしたのはそこです。活動どうのこうのというものではなく、評議委員会という特権階級のようなグループが存在することによって、一般の生徒たちから乖離していき、それゆえにこの前の理科室で起きたような恐ろしい事件が連載して続いたと、そういうわけではありませんか？ あくまでも学校側は内密にしているようですしこれ以上のことは申しませんが、いかがでしょうか」

静まりかえった教室内。

誰もが霧島の言葉に聞き入っている。

「おぞましい事件」とはよく言ったもの。評議委員連中を巡る愛憎劇の連鎖を否定することは誰もできない。特に天羽評議委員長を巡る人間関係や、それにと もなう二人の女子の転校・停学騒動。ばれたらおそらく警察沙汰ともいえる例の事件。もしかしたら立村をぶん殴った貴史の履歴もしっかり残っているのかもしれない。

「どうでもいいけどよ、自分の姉ちゃんのことあそこまで叩いていいのかよ」

「よくない！」

美里がカンペンケースを握り締めたまま首を振った。

「貴史、どうすればいいと思う？ もうこのままだと、評議委員会のプライドはずたはずたじゃない！ 先生まで味方につけちゃって、評議委員会は常識ないチームだとか決め付けられちゃって、それだったら生徒会の方が何千倍もましとか言われてるようなものだもん」

「否定できねえだろが」

「できないけど、でも」

美里は答えられず、そのまま俯いた。にっちもさっちも行かない。袋小路。

——まあ、天羽だってこのあたりは予想してただろ。

前扉が勢いよく開いた。蹴飛ばしたような音がした。

——今頃誰だ？

ノックもなにもなかった。

「ノックしてください！」

甲高い声で叫びながら立ち上がる渋谷を無視するかのよう、扉の向こうの主は穏やかに微笑んでいる。その笑いがどこかその主には見たことのないものだと貴史はすぐに気づいた。息を呑んだ教室内が突如、まあるくざわめいた。

「立村くん！」

「あいつ、なんで」

「立村先輩がなぜ？」

——立村か、おい、本当に立村か？

蹴り飛ばした扉を右ひじで押さえるようにし、立村はゆっくりとギャラリー一連中を見渡した。遠慮気味で人の顔をおずおず見るようなそんなしぐさなどかばんのどこかにしまいこんだのか。張りのある声でまず一声を。

「遅くなりました。どこに座ればいいですか」

そのまま評議連中の顔を値踏みするように見据えていった。天羽、難波、更科、そして貴史。目が合った。ノックもなしに蹴飛ばして扉を開け、見慣れぬ笑顔でもって悠々とした態度、それは貴史の知る立村上総にないものだった。美里がささやいた。

「本条先輩の真似してるよ、立村くん」

——そうか？

美里と顔を見合わせ、貴史はただただ息を呑んだまま立村の様子を伺っていた。

しばらくざわついた教室が

「立村先輩、もう始まっておりますが」

涼やかな佐賀はるみの声でほんの少し落ち着いた。

といっても静まるわけではなく、ただひそひそ話に打ち興じるのみ。立村の名をあえて誰も口にせず、ただちろちろ様子を伺うのみ。その一方で三年評議連中の男子たちがそれぞれ顔を見合わせてこそこそしているのが見え見えだ。

——お前ら打ち合わせてたのかよ。まさかあいつを仕込んでたのか？」

見事なタイミングとしか言い様がない。

評議三羽鳥がなぜ遅く現れたのか妙だとは思っていたが、その理由が立村を口説き落とすことだったのか。いや、そんな暇ない。貴史はすぐに打ち消した。昼休み、冷ややかに拒絶していた立村の静かな表情を見た限り、性格を百八十度変換させてちゃらちゃら男の顔して現れるとは、まず思えない。

天羽たちの顔を見ていたら、完全サプライズとしか思えない表情で口をあわあわさせている。それでも天羽は無理やり落ち着こうとしているのか作った笑顔を振りまいている。やはりこれは、ガチンコだ。

「まあまあ、めでたいじゃねえの」と、天羽。

「けどさあ」と、更科。

「あの野郎」と、難波。

顔を見ずとも誰がしゃべっているかが一発でわかる。その間にも立村は扉を自然にまかせて閉めた後、片手をブレザーのポケットに突っ込んだまま、コートを抱え教壇に上がった。悠々と佐賀はるみに近づきその隣りからぐるりと教室一帯を見渡した。頭をからっぽにしたような脳天気な笑み……という表現を立村に思い浮かべることがあるとは貴史も思っていなかったが……で佐賀に話しかけたような顔をして様子を伺っている。何かやらかしそうな雰囲気はぷんぷんする。

耳元でささやく美里の声にひっばれる。

「貴史、止めようよ」

「ああ？」

「ほら、手伝って」

言うやいなや両手を風呂敷振り回すようなしぐさをする。両手で布にこびりついたごみを払うようなしぐさだった。貴史も真似した。何か止めないとまずいような気は確かにした。

「あいつ何しでかす気だよ」

「わかんない！だって立村くんがなりきってるの本条先輩だもん」

全く答えになっていない返事を美里はする。三年評議連中がばたついている間にも立村はしらすらしく佐賀に語りかけている。薄ら笑いを浮かべている。

「詳しい事情はよくわからないけど、一応俺も評議の端くれだから、後ろに座ってるけど、文句

ないでしょう？」

わざとらしい丁寧語を使うところは変わっていない、のだろうか。

——あいつ、いつもそうだったか？

貴史が知る立村は先輩は当然だが後輩に対しても腰が低かった。無礼なことを言われてもすべて飲み込んでしまうところがある。しかしこの大胆不敵な目つきはいったいなんなのか。薬でもやってるのか。とにかく三年D組で見せたことのない態度であることは確かだった。動揺しているのは目の前に座っている新井林も同じだろう。佐賀会長が答える前に割り込んだ。

「あんた今更何しに」

頭を何度も回し、先輩としての礼儀も忘れて怒鳴る。貴史だったらたぶんぶんなぐっている。しかし完全に頭が春になってしまった立村の返事は

「一応、年上を敬えてことを忘れるな」

ときた。

「伊達にお前を仕込んだわけじゃないだろう。最後の評議委員会、出たって問題ないだろう」

そこまで言い放ち、佐賀はるみの隣りで鼻で笑うようなしぐさをしてみせた。

——立村、やばい。極めて、変だぞ。

「変だよ立村くん、どうしちゃったんだろう！」

「美里、本条先輩っていつもああなのか？ あんなアホ面するのかよ」

「でも立村くんみたいなことはめったにしない！」

美里と早口でやり取りしている間にも、立村の目つきはだんだん怪しく変化していく。佐賀はるみの隣りで新井林をばかにしたような態度で見据えている。

「あとで新井林くんにおもいきり嫌われちゃうよ。どうするのよもう！」

美里のささやきなんか知ったことではない顔で、立村は

「悪いけど、そこ、どいて」<

新井林の肩を力込めて押しやった。様子をひそひそ声の中見守る女子たちがかすかに驚きの声を挙げる。鬼の先輩そのもの。なぜ新井林がぼかんとした顔でべったり座ったのかわからない。

そのままゆっくり立村は貴史と美里の並んで座っている席に近づいた。

——ここ、一番後ろだもんな。D組の定めだ。

隣りでむっつりにらんでいる美里の代わりに何かを言わなくてはならない。心臓がうねる。昼休みひくっとして貴史から逃げようとしていた、あの立村とは違うと確信した。どう出るか。どう行くか。様子見か、ジャブか。

貴史はじっと立村を見上げた。笑いはしない。まじめに尋ねた。

「お前、来たのか」

答えで貴史はどう動くかを判断するつもりだった。

まったくぶれることがない。ちゃらちゃらした態度で歌うように、

「なんとなく、来たくなったからきたってわけだけどさ」

きわめて南雲チックに答えてきた。

思わずかちんと来る。一発張ったおしてやりたい気持ちをこらえる。さすがに教室で本能に任せて張ったおすのはまずいだろう。奥歯をかみ締める。その隙間を縫ってもうひとり、明らかに抑えられない奴がひとり割り込んだ。美里しかいない。

「立村くん、何よいきなり！ あんたって今ごろ、どうして」

しかたない、やらせておく。

立村が正気に戻るのを期待したが甘かった。

美里の前ですら同じ「似非南雲」的態度だった。

「だってさ、羽飛が来いっていうからしょうがないしさ」

立村は美里を面白そうな顔で見下ろした。完全になめきった調子で。

「だから、悪いけど羽飛の隣に行くから、それでいいだろ。椅子だけでいい」

危うく貴史も腰を浮かして拳を振り上げかけたが、次の言葉でなんとか思いとどまった。

「どうせ清坂氏、自分でノート取ってるだろうし、俺が書いたもんなんて役立たないだろ」

——やっぱりこうかよ。

こうやって自己卑下する奴だ。根っこは変わっちゃいない。何か理由があるはずだ。貴史は自分に言い聞かせた。

——じゃあねえ、お前が何してえかわからねえけど、俺も容赦しねえ。

立村はゆっくりと貴史の隣りに座った。厳密に言うと斜め後ろ側なのだが、縦列が崩れているためほとんど隣に近い。顔をつらとした風に見やったのを合図に、まずは一発言葉で張った押してやることにした。

「立村お前、何考えてるんだ！」

やはり表情は変わらない。薄ら笑いも消えない。貴史が畳み描ける。

「委員会、みんなお前のこと待ってたのにな！」

立ち上がった。がっと見下ろした。しかし動じない。

——お前、美里がここまでどんなにお前のことを！

さらに言いたくなるのを押さえた。そのかわり手が出た。軽くだが叩いた。効果なんてなかった。さらに斜め前席から難波も立ち上がっている。加勢してくれ そうな気配がなみなみと溢れている。それを押さえたのが隣りの天羽だった。すぐに片手で制しつつ、また作ったお笑い笑顔で立村に近づき、ちょこなんとしゃがみこんだ。これで正気に戻るんじゃないか、その願いは砕かれた。

「悪いけどさ、俺も話終わったらさっさと帰るからさ」

へらへら笑いで足を組み、立村はまたあっけらかんと答えた。

「送らなくちゃなんない相手がいるからさ」

「はあ？」

評議連中全員で口をそろえて立村に問うた。立村は完全に壊れている。貴史の頭にひらめいたものはただそれだけだった。隣りの美里がはっと気づいた顔ですぐ表情を能面に戻したのを、貴史は確かに見ていた。

——お前、ほんとに、何様のつもりだよ。

場合によっては絶交も前提だ。まずはこの会が終わるまでは。

——だれがてめえを逃がすかよ！

立村の豹変した態度に戸惑うのは評議委員連中だけではないはずなのに、生徒会の面々はすぐ我に帰って話を着々と進めていた。手際がよい。

「時間が限られておりますので、先に進めさせていただきます」

先手を打とうとするのが見え見えだが、全く周囲の状況を把握していないのかわざと鈍感な振りをしているのか、立村は気の抜けた声で高らかに尋ねた。

「どこまで話進んでいるのか、聞いていいですか」

当然、ヘアバンド女子の渋谷はぶち切れた。

「他の方に確認されたらいかがですか」

甲高い声で

その間にも隣の美里が貴史の背中から手を回すように、立村へノートを手渡そうとしている。その手をあっさり振り払う立村。目をくれようとしなない。

「時間がないんでさっさと教えてくれたってかまわないでしょうに」

またわざとらしい丁寧口調でせせら笑い浮かべつつ打ち返す立村に、渋谷の表情はつりあがった。これは一戦ありそうだ。止めねばならない。これぞ貴史の直感だ。

——てめえこの馬鹿が！

美里の差し出したノートを引ったくり、即座に貴史は隣の立村の後ろに回り、ぼっこりぶん殴った。音が立つほど。小学校の頃と同じレベルだ。せめて怒るかと思いきや、立村は後頭部を軽く押さえるようにして振り返り、

「痛いな、まあいいよ、とにかく。やることやったらさっさと帰るから、そのつもりでな」

薄笑いは全く消えない。わざとなのか、何かねじが一本抜けているのか。ぽかんとした顔で答えてくる。普段なら「ごめん、俺が悪かった」と頭を下げるだろうに全くその気配すらない。貴史が次は頬を叩いてやろうと手を準備しようとする、

「帰るだと？ 立村！」

第二弾が待っていた。難波が振り返りつかつか踏み込もうとするのを、轟がそそくさと近づいてすぐに片手を押さえた。無理やりひっぱっていき元の席に着かせなだめている。

「時間がないんだから、早く早く」

不服そうな難波を尻目に、轟は真剣な目を立村に投げかけた。その眼差しを立村が受け止めた時、一瞬だけ素に戻ったように見えた。貴史の目にはそう映った。

——轟が一枚かんでるのか？

ちらと、そんな予感がした。口に出す間もなくすぐ消えた疑問だった。

無理やり話を戻そうとする渋谷が慌てている間に、今度は霧島ゆいの弟、キリオがさっそく甲高い声で返事をした。、

「今、天羽評議委員長に、今後の評議委員会に関する位置付けを確認していたところです」

立村は膝を組んだまま頷いた。自分の机にかばんと折りたたんだコートを載せたまま、
「そうか。つまり今後、評議委員会を生徒会のみなさん、どうしたいわけなのかな」
「立村くんいいかげんにしなさいよ！」

美里が止める。周囲もざわつく。貴史もにらむ。それでも立村は崩れない。

佐賀はるみがひとり、揺らぐそのまま答えた。

「立村先輩ならそのことをご存知のはずです。生徒会としてはこれから先、評議委員会のみなさんが中心となって開いてきた交流会を、今度は私たちの手で運営したいと考えてます」

「それで？ 天羽、お前なんて言った？」

ぎょっとしたのか天羽が立村に向き直った。後ろ向きに方向転換し、穏やかに説明した。「まああれだ。俺もそのことには異存がないんだが、ただ、俺たち評議委員会には経験つつう財産がてんこもりだろ？ だからなあ、ここんところで、協力しやしませんかとだな」

頷いてみせ、今度は教卓前の新井林に呼びかけた。

「新井林、お前は？」

「女子中心の生徒会では荷が重いつてというのが俺の考えです。経験のある評議委員会が今年一年手伝うのが自然だと、俺は思います」

さっきのやり取りで毒気抜かれたのか新井林の奴、丁寧語で答えている。

「じゃあなんで、それが議題になってるわけ？」

「あ、俺のもの何するんだ」

気がつけば貴史の机に置いてあったカンペンケースを立村は引き抜き、自分の机を叩いてリズムを取っている。立村以外の奴ならよくあることがが、こいつに限ってそれはありえないことだった。すぐ取り戻そうと手を伸ばした。

「こいつ、手癖悪すぎ」

「誤解招く表現するなよな」

あっさり返してくれた後、立村は足を組みなおした。膝に机の上のコートとかばんを両方重ね、前かがみに様子を伺うような振りをした

「新井林の言い分も、天羽の考えも俺は正しいと思うけど、生徒会のみなさんは何がご不満なわけ」

不敵な笑みを保ったまま、立村は教壇に固まる生徒会女子たちに向かい、語りかけた。

——こいつ、実は狙ってやってるんだろ？

最初は度肝を抜かれたけれども少し冷静になればわかることだった。貴史はすぐ美里のノートを開いた。メモを見せた。

——何が狙いなんだ？

美里もすぐ返事を書いてよこした。

——わからないけど、絶対、正気だと思う。

いや、正気なのはわかる。たった一時間でこんなに性格を転換することができたら、立村の三

年D組生活はもっとカラフルなものとなっていたはずだ。こういうへらへら野郎だったら貴史は最初から友だちになっていなかったかもしれないが、南雲グループにもぐりこんで一定の評価は得られていただろうに。

立村の挑発なのか天然なのかわからない口調。それに動揺していないのは、貴史の見る限り佐賀はるみだけだった。いらただしげにヘアバンド女子の渋谷が言い放つ。

「私が聞いたところによりますと、評議委員会がすべて行ってきたことを、四月以降はすべて私たち生徒会が引き継ぐということになっていたようですが。藤沖先輩、そうですね」

渋谷に対してではなく、佐賀に向かって藤沖が頷いた。決して立村のほうを見ようとはしなかった。

——藤沖も何も、あんなに怒るこたあねーだろうに。あれで立村いじけちまったんだぞ。人間暗い過去のひとつやふたつあるだろって流せねえのかよ。

後の祭りではあるけれども、ため息つかざるを得ない。立村は首をゆらゆらしたり首筋をもんだりといかにも退屈そうなポーズを取りつつ、わざわざ藤沖に対して、

「藤沖、悪いんだけど、俺そんな話したか？ 新井林と次の代で協力しあえばそれでいいって話はしたけどな」、

「こいつとしゃべることはない。話を続けろ」

かたくなな藤沖に、貴史は一発ハリセン作ってぶん殴りたい衝動に駆られた。

佐賀はるみは藤沖の言葉をすぐに引き取り「はい、わかりました」と答えた。

立村の顔を真正面から見つめながら、穏やかに。

「私も本当は、評議委員会のみなさんにお手伝いしていただきたいのですが、先生たちのご意見が」

少し余韻を持たせるような口ぶりで、ちらと霧島弟の方を見やる。すぐ言葉のリレーが始まるタイミングのよさ。霧島弟は承知の顔で続けた。

「先生たちは評議委員会よりも生徒会の方に、どんどん活動してもらいたいみたいなことを話してましたよ」

「それはどうして？」

即座に切り返す立村。今度は渋谷が受けて立つ。

「私たちもその辺はわかりませんが、ある先生が言ってましたよ。先生が言う以上は、それに逆らうことはできないと、私も思います」

見事な生徒会のチームプレイ。立村のかき回しぶりをあえて気にせず冷静に返す余裕がある。かすかに関係ない連中からは「さすがだよねえ」とのささやき声すら聞こえる。立村がまた口を開こうと足を組み替えようとした時だった。

藤沖が不意に立村へ振り返った。

「うるさすぎるぞ、立村、お前いったい何しに来た。真剣に話をしようとしているのになぜ茶

化す。まったくたまってんじゃないかねえのか？ いいかげんにしろ！」

元生徒会長の激昂も残念ながら立村には通じない。たぶん今の立村には正論は通じない。

貴史が思っていた通り、立村の答えは笑みを浮かべたままの楽しげなものだった。

「茶化してなんかいないけどな。あとでお前から答辞の原稿をもらうつもりではいるけど、もうできた？」

教室の面子から突然納得のため息が広がる。そうだったこいつは、

——立村の奴、卒業式、英語で答辞読むんだよな？

評議連中が顔を見合わせている。確か難波から聞いた話だ。藤沖が日本語の通常答辞を、その上で立村がおこぼれの英語答辞を披露するはずだった。となると、まだ原稿手に入れてなかったのか？ まさかとは思うが、もう卒業式まで一ヶ月もないはずなのだが。

——こいつ間に合うのかよ？

全く別の心配が湧き上がるが、立村のねじは完全に外れてしまっている。

「そうだ、藤沖悪いけど、俺は毎日、風呂場とベッドできっちりと抜くもの抜いてるよ。心配していただかなくても結構。あっちの欲求不満が原因じゃあないから、その点誤解なきように」

「馬鹿が！」

藤沖が吐き捨てるように罵倒した後、また席を元に戻して座り直すのを、立村は勝ち誇った表情で眺めていた。また足を何度も組みなおして落ち着くポーズを探っている。

ふと隣りの美里の顔をのぞき見ると、なぜか俯いている。

「どうしたよ」

「ありえないよ、絶対に」

「はあ？」

「だって、あんなの、立村くんじゃないよ、絶対」

貴史の顔を何か伝えたたげに見上げる美里だが、それ以上何も言わなかった。

——はあ？ 美里の奴何真っ赤になっちまってんだあ？

見ると女子連中の立村を見やる目つきが妙にとんがっている。かすかに、

「なにあのスケベ、最低」

「あそこまで救いようのない委員長とは思わなかったよね！」

とかささやきが聞こえる。あっそっかと、思い当たる。ばかばかしい。

——あんくらい普段からスケベに言い返せる奴だったら、もっとあいつの人生変わってたっの。俺ももっといろんなことしゃべってたっの。男なら誰だってあんくらい言い返すだろ？ ったく、女子連中なあに、立村の本能覗き込んであせってやんの。

男子連中の卑猥な共感にも反応せず、ただ斜め隣りの立村は不敵な微笑みを浮かべたまま、じっと生徒会連中を眺めやっている。むしろその態度が一切変わらないことの方が、脅威のはずなのに。貴史は肩越しにちらと立村の様子を伺った。両手を組んで膝のかばん上に置き、獲物を狙っている眼差しは、三年間一緒だった立村には見かけたことのないものだった。

立村が黙ったので、その間に渋谷が議事をどんどん進めていった。

この間、佐賀はるみはほとんど言葉を発していない。

「私たちが決めているわけではないので、事実だけお伝えしますが先生たちは、現在の生徒会にかなり期待してくださってますし、実際四月以降の行事に関しては私たちが担当することで決まりだとおっしゃってます。新入生を迎える会もそうです。去年までは評議委員会さんの方ですべて担当していただきましたが、まだメンバーが整っていない段階でそういう大きな行事を担当するのは無理があるのではないかということです」

天羽が大きな身振り手振りで相槌を打つ。

「いやあ、そんなことはなかったよなあ。なあ、難波、更科、そうだろ？」

すぐに更科が答える。子犬の笑顔は最大の武器。貴史も改めて思ったが、更科の愛想のよさは評議委員チームにとってかなりの武器だったのではないだろうか。霧島ゆいの手綱を引き締め、動揺するクラスメートを落ち着かせ、謎の大物女子評議の阿木を……貴史からしてひそかに評価しているだけだが……ためらうことなく後釜に乗せ、親友の難波の面倒も見る。もちろん立村のフォローもする。やはりこいつは只者ではない。

「そうそう。もともと評議委員会はみな気心しれてたから、細かいことはどんどん三月のうちに片付けてたし、かえて生徒会の方が大変なんじゃないかなって俺は思いますよ。俺たちは一年付き合ってるけど、生徒会のみなさん、半年しか」

姉は押さえられても弟は別か。霧島弟が立ち上がりぴしりと言い返した。

「それは去年たまたまでしょう。ま、去年の段階で、一人すごい騒ぎで入れ替わりがあったってことは聞いてますがね。その後は櫛の歯が抜けるがごとく、ばりばりと評議委員さんたちが入れ替わって行って、チームワークを取るのが大変だったんじゃないですか。それも、最後は委員長までも」

「私も同感です」

すぐに言葉を挟む渋谷。霧島弟とは犬猿の仲と聞いているがビジネスライクな関係としてはうまく行っているのかもしれない。ちらと「委員長」である立村を皮肉めいた目でにらみすぐ戻した。同時に教室内の視線がすべて立村に集まった。動じないのは立村のいつものこと。全く知らぬ存ぜぬでにやついている。何か不穏な予感がある。貴史は振り返った。ささやいた。止めた。

「立村、黙れよ」

不思議そうに立村が言い返す。

「何もしゃべっちゃいないのにな」

——しゃべるつもりだろうが！ 狙ってるだろうが！ お見通しだぞそんなこと！

とはいえ、立村もすぐに嘴を挟むつもりはないらしく、ふむふむ頷きながら様子を伺っている。時折、見慣れた生真面目な表情がよぎる。すぐにとってつけたようなへらへら笑いに切り替えている。

天羽が、これぞ「ザ・芸人」と言いたげなポーズで立ち上がり説明に入った。

「まあまあ、それはいいとして。生徒会のみなさん、まずは評議委員会の立場もわかってくれるとうれしいなあということでもいいですか？ 最近の評議がころころ入れ替わっているのは全くもってその通りで、お恥ずかしい限りなんですけどね。だけどもご存知っしょ。去年から俺たち評議委員会では、生徒会と委員会同士の風通しをよくするためにあえてそうやってるってことを、ですねえ」

無理やり割り込んだのは渋谷だった。

「あえて、ですか？」

すぐに奪い取ったのは霧島弟だった。

「そんなわけないでしょう。よほど人間関係でごたつかない限りは代わらないのが今までの評議委員会だったんじゃないですか」

主導権争い、天羽は冷静だった。落ち着いて切り返した。

「団結力が必要な集団ですから、ベストな人材を要所要所で入れていくってのも、またひとつの方法ではないかなということです。あ、それとですねえ、みなさん勘違いしてるようですが、評議委員長が代わった件については別になあ、個人のつるし上げなんかじゃないってどうして何度言ってもわかってもらえないのか、俺にはそこんところ、ちょいと、謎」

ふたたび立村に視線が集中した。前提条件としてここでへらへらしている野郎がすべての悪の根源であることを、誰もが認めている証拠だろう。天羽の長話は続く。

「たとえば前の年、本条先輩がしきっていた頃ならまた話は別なんですよねえ。ありゃあ、あの人にくっついていくのは普通の奴じゃあ絶対無理。もし今回みたく切り替えなんぞしたらああた、一発で終わっちゃいますよねえ。だから俺もそれはそれでいいと思いますがしかし。俺たちの代で言えば、もし前評議委員長のままで持って行って、そのまま終わっちゃった場合だと、残りの面子のやる事がなくなっちゃう可能性、出てきますわな。立村ともそのあたりきっちり話をしたんですがね。つまり俺たちの代で言えば、みな三年連中はそれぞれの個性ってかそういうものが豊富だったってことで、全員の個性を幅広くですね、生かすような形に持っていきたいってこと。それでまず前期は立村が基盤をこしらえて、評議委員会同士の外部交流会なんぞを行って盛り上げて、後期は俺こと天羽忠文がですね、ゆっくりと生徒会のみなさんと協力してさらにすばらしい青大附属の交流をおこなっていかうじゃありませんか、と、ま、そういったところですよ」

——あんな天羽、さいしょからそれ言えよ。

やっぱり、悔しいが天羽は見事だ。誰もが納得させられる話をきっちり並べ立てることができる。立村にこれができたかと考えると、どう考えても無理だ。それでもすぐに反撃に出るのがヘアバンド女子の渋谷だった。

「私が聞いた話とは全然違いますね。どこでそういう話になったのでしょうか。評議顧問の先生から聞いたところによりますと、ちっとも三年の評議委員がまとまらなくて大変だったので、あえて選挙を行っただけだということでしたが」

ああ言えばこう言う。イーブンの戦い。立村がひたすらじっと佐賀はるみに視線を向けているのだけが気にかかる。

突然、佐賀はるみが渋谷と霧島に向かいかすかに首をかしげ、何かを訴えるしぐさをした。すぐ気づいたのか渋谷も言葉も飲み込んだ。ゆっくり、生徒会長佐賀はるみは口を開いた。

「本日、評議委員会のみなさんにご同席いただいたのは、私たち生徒会に先生たちがこっそり教えてくれたことを、できるだけ早くお伝えしたかったからなんです。今渋谷さんと、霧島くんが話してくれましたように、実は私たちの間でもこれからどうすればいいのかと、困り果てていたところなんです」

霧島が何かを言おうと口を動かしたが、また制するようにかすかに首を振り微笑んだ。威圧感なし。霧島もおとなしくうなだれた。

「私たち、今まで、どういう風にすればいいのかと藤沖会長にお尋ねしたり、先生たちに相談したりしてはいたのですが、それがよくなかったのかもしれない。いつのまにか先生たちが先の予定を組まれてしまったんです今回あえてこのように、生徒だけの集まりを開くことを先生たちに許していただいたのは、そのあたりにも、理由があるんです」

まん丸の編みこみ髪に手を触れた。何度見てもあの髪形は貴史のハニーである鈴蘭優を思い起こさせるものがある。その一方天羽がシャープペンシルをくるくる指先で回し、難波がふくれつつらをし、更科が頬杖ついてあどけなく振舞うのだけが浮いている。

——こんな茶番劇終わったらさっさと帰って優ちゃんのLPエンドレスで聞きてえよ。

「本当だったらきちんと、先生たちが評議委員会のみなさんに説明を行って、今後は生徒会中心で持っていきましょうって話をしてくださる、そういうはずだったんです。でも、私」

くしゃみを押し殺すように、両手を口に当てる。やはりこういうところが鈴蘭優そっくりだ。どうしても鈴蘭優基準の目だと、佐賀はるみに甘くなってしまう。しょうがない。そういう趣味なのだ。

——これだけ頭よくてだぜ？ 顔も優ちゃん似だったら、あの巨乳最悪性格女子なんかかなうわけねえだろが。立村もなんであんな奴に惚れたんだか。

「ごめんなさい、私、うまく言えなくて。でも私、それって評議委員会のみなさんに対して、失礼なことじゃないかって思えてならなかったんです。だってそうしたら私たち、せっかくここまで私たちに協力してくださった評議委員会のみなさんを裏切ることになってしまいます。私、それだけは、どうしても、したくなかったんです。私、だから」

「よっくわかったでしょう？ 天羽先輩」

なぜかまた、渋谷が割り込んだ。なぜこいつは妙に目立とうとするのだろう。正直、あの杉本とかいう馬鹿女子の顔と重なるものがある。似たもの同士にも見える。

「いいですか、今回のこの会は、佐賀さんのおかげで成り立ってるんですよ。本当だったら評議委員会なんてさっさと終わってしまっただけで当然なんですよ。特に最近あんなごたごたがあった以上、先生たちの判断で本来の職務を全うする集団に戻ってもらってよかったんですよ。それを、佐賀さんがいくらなんでもそれはって言い張ったから、私たちもしかたなく、そうしてるんですよ。いいですか。私たちは、本当だったらこんなこと、しなくてよかったんですよ」

——なんだかこいつ、こけおどしみてえだわ。

美里にメモで伝える。

——なんなのあのヘアバンド。

すぐ返事が来る。

——あの子が泥かぶってるだけ！ 会長が全部仕組んでるの！

「ですから私たちとしては、みなさんにここではっきりと約束していただきたいんです。これから先、先生たちがいろいろなことをおっしゃるでしょうがそれを佐賀生徒会長の責任にしてぶつぶつ言うのはやめていただきたいということです。天羽先輩、先日からずっとお願いしてましたけれども、なぜ会長のやり方を責めようとするんですか？ 会長は観た通りおとなしい感じだし、どこかの誰かとは違って押しも強くありません。でも、青大附中のことを一生懸命考えて、それから私たち生徒会のこと、もちろん委員会関係の人たちのプライドも慮って、それで一生懸命うまくいくようにしてるんです。佐賀さんが生徒会長になってから、目立ったトラブルって、これまでありましたっけ？ 評議委員会は今まで特別な地位に置かれてましたけれども、話を聞けば内部でいろいろなごたごたが起こってしまい、先生たちの手を借りなくてはいけないほど困った事態に陥っているという話も、この前噂で耳にしました。そうですよね、霧島くん」

振られた霧島もふくれつつらで頷いた。すぐに狐顔を尖らせて甲高い声で言い放つ。

「僕はもっと詳しいことを知ってますが、あえて評議委員会の名誉のために控えます。現在青大附中において誰がリーダーになるべきか、それをここではっきりさせる必要があると私は思います。もちろん、今まで評議委員会が行ってこられたことを否定はしませんが、現状維持のままでは全く何も変わりません。先生たちの考えを最優先に考え、これからは生徒会長である佐賀さんを中心とした生徒会執行部をもっと盛りたてて頂きたいのです」

——あーあ、こりゃもう評議チーム全滅だなこりゃ。

他人事のようにだが、隣りでへらへらしている野郎のことが重しで頭がうまく働かない。

「やっぱりこれ、なんか言ったほうよくない？」

また美里が貴史にだけ小声でささやく。

「何をだよ。正論だろ。あとは他の奴らがどう出るかだろ」

「けどこのままだとまずいよ。せっかく、みんながんばってきたことを全部生徒会の人たちが奪い取っちゃうってことなんだもん！ もう、天羽くんたちどうするつもりなんだろ。貴史、あんた何か言ってやりたくなあい？」

「わからねえってんなこと言われたって」

「もういい、あんたどうせ関係ないんだもんね！」

美里もまたふくれつつらでそっぽを向き、そのついでに立村をのぞきこんだ。もちろんすぐ目を逸らした。語りかけることはない。

——天羽がどう出るか。だわな。あとは、あいつが。

立村が足をしょっちゅう組み替えてはにやつきつつ佐賀はるみを見つめている姿がどうしても

目障りでならない。ああ、とにかく一発正面からぶつたきたくてならない。廊下にひっぱりだして正面からさしの勝負をしたいところだが、はたせない。

天羽がのんびり口調で周囲をなだめつつ立ち上がった。

ほっとした。周囲の吐息が物語っている。

「まあまあまあまあそうそうかっかしなさんなって。ま、生徒会のみなさんが一生懸命やってくれてるってことは俺も感謝してますが。まあ評議委員会の連中ってのは、血の気が多いっていうか、生まれながらにドラマチックな奴が多いっていうか、とにかく個性派の集団なもので事件が多発するってのはしょうがないことなんですわな。なあ、更科？」

大きく頷く更科。わざと見えるように笑顔を振りまく。

「俺たち評議委員会、厳密に言うと今の三年世代がとんでもないキャラの持ち主だったことは認めるし、先生がたにあきれられたってのも、まあしょうがないかってことで、おっけとしますわな。ただ、それはあくまでも、俺たち三年の話であって二年とは関係ねえんじゃえかなあ、と、評議委員長として思うんだがどうですかねえ？ 会長？」

佐賀はるみは首をかしげ、戸惑った風に答えた。その声も甘い。

「ごめんなさい、私にはそれ以上、先生たちを止めること、できそうにないんです。だって私たち生徒会は、先生たちのいいなりなんです。むしろ、止めることをお願いしたいのは、私たちの方なんです、でも」

突然佐賀は目の前にいる新井林をじっと見つめた。横から見ている貴史にも分かるくらい露骨な色目だった。新井林が肩をひくっとさせているのが見て取れた。あいつら何年付き合っているんだろう。それでもまだときめいているということか。すごいったらない。

「どちらがよくてどちらが正しいとか、そういうのはうまく言えないんですけども、ただ私、今までずっと先生たちの言う通り、あと渋谷さんや霧島くんたちに手伝ってもらったりして生徒会長を務めてきましたが、一度も困ったことが起こってないのは本当なんです。もちろん、最初のお話通り生徒会と評議委員会が協力する形でのやり方で進めてもいいかと思ったのですけれども、そうするとやり方がそれぞれ違うのでまた、トラブルが起きてしまいそうな気、するんです。だから」

また言葉を切り、今度は同じ愛らしい瞳を天羽に投げかけた。

「だから、私、このままみんなが喜ぶ形で進めるのなら、先生がたの言う通り、そのまま生徒会が今まで評議委員会のしてきたことを預かる形にするのがいいかなって思ったんです。私、間違ってるでしょうか。それの方が誰もけんかしないですむし、誰も悪者にしなくてすむし、きらわれないですむし。傷つかないですむのではないのでしょうか」

——全くだわな。正論だろ。

申し訳ない話だが、佐賀はるみの発言に疵を見出すことはできなかった。

隣の美里に一言でも口を滑らせたなら半殺しに遭うだろうがしょうがない。貴史の本音だ。

「私、今までたくさんトラブルの経験をしてきました。それでいつも思っていたのですけれども、一番最初のきっかけが起こった時、誰かが我慢して問題を起こさなければ、大抵の場合もの

ごとしてそれだけで終わってたんです。だから私、いつも自分のところで問題が大きくならないようにすればいいって、思ってたんです。もちろんそればかりじゃいけないっていうのもわかってましたし、生徒会長になった以上それなりに覚悟はありました。問題が起こる以上は、ちゃんと対処しなくっちゃって、思っていました。でも、本当はみんな、仲良くしてたいんじゃないかなって思うんです。変なことなんて起こさないで、みんな仲良く楽しくしてたいんじゃないかなって」

——そうだよ、すっげえ単純な真理じゃねえか。

頷きそうになるのを美里に無理やり引き戻される。腕を引っ張られる。

佐賀はるみの言葉は凜と響く。

「今回は先生たちが、半ば強引に評議委員会の人たちに話をつけるからっておっしゃってくださったのですけれども、私あえてそれ、断りました。それって失礼だと思うんです。でも、よくよく考えるとそれの方がみんな仲良しでいられるはずなんです。生徒会が努力してみんなを率いるようにして、評議委員会のみなさんはクラスをまとめることに専念していただいて、それぞれがやるべきことをきっちりやるようにすれば、きっと、青大附属はいい学校になるんじゃないかってそういう気がするんです。私も評議委員だったことあるのでそれはわかります。だから、なおさら、私思うんです。評議委員として、クラスのみなを笑顔にすることが一番大切なことじゃないかって。そのことに集中してもらう方が、きっとみんな、幸せになるんじゃないかって思ったんです」

——そうだ、その通りだ！

何かがつとんと腑に落ちた。

——だよな、そうだよな？ 俺たち、やるべきことをちゃんとやってりゃよかったんだよな。俺たち、やるべきことやってれば、こんなぐっちゃぐちゃにならないですんだんだよな！

美里が「ねえねえ、あんたなにか言ってよ！」と騒いでいるのも聞き流すだけ。

前で難波と更科が「このままでいいのかよ！」「ちょっとまずいよ絶対」とかひたすら天羽に相談しているのも無視だ。

貴史の中にどくどく流れる熱いもの。身体から勢い欲溢れてくるもの。全身が炎のように燃える。隣の立村すらもうどうでもいい。

——なんで今の3Dが平和なのかってこと、やっとわかった。

立村が死に物狂いでがんばっていて、懸命に努力していて、ついにぼろぼろに果ててしまったのに、三年D組の空気は貴史がほんの少しちょいちょいじめるだけでどんどん楽しい方へ流れていく。はっきり言おう。笑顔が溢れている。教室に入るたびほっとする。今まで感じたことのない楽ちん感が流れている。立村が教室にいないにも関わらずだ。

——古川もんなこと言ってたな。

すでに立村抜きで百パーセントに満たされている三年D組。そのことに正直「わりいな」気分は残っている。菱本先生に褒められても、貴史の中ではまだ七十パーセントでしか満たされていなかった。違う。そうじゃない。今、クラスの連中がみな満タン気分を味わっているとすれば、

答えはひとつ。

——俺が、クラスで、やるべきことをしたからだ。

ほんのわずか、ひとしずくの時間。勢いよくながれる思惟を貴史は受け止めた。

——俺が今までずっと逃げ続けて、立村に押し付けてきたことを、今きっちりやってるから、うまく回っているんだ。あいつがやるべきじゃないことをしかたなくやりつづけて、壊れてしまうまで、俺はそのことに気づかなかったんだ。何度もあいつが、俺の方が評議に向いてるって訴えた時に流しちまったから、あいつはぎりぎりまで力を使い果たしておかしくなっちゃったんだ。俺が、やるべきことをやってれば、こんなことにはならなかったんだ。

「ねえ、貴史ってば！」

何度も呼びかける美里を貴史は返事代わりに見つめた。

「もう、あんたなんとか言ってよ」

「あのな、美里」

——美里もこんなに、ずたぼろにならないですんだんだ。俺が無理に立村とくっつけようとしなければ、こんなことには。

何かを発しようとしたとたん、佐賀の言葉が締めにかかった。

「ですから、私は」

突如、貴史の机にどんとコートがたたまれたまま載せられた。

——ああ？ これ、なんだ。

斜め後ろから押し付けるかっこうで載せたのは立村しかいなかった。立ち上がる。

「おい、いきなりびっくりさせるなや」

呼びかけて見るが無視された。

「立村くん！」

美里も叫んでいる。同じく知ったことじゃないとばかり立村は背を伸ばし、ずっと佐賀の座っている教卓へと大股に歩いていった。教室内のざわめきもなんのその、そのまま佐賀はるみの隣りに立ち、身をかがめて、

「悪いんだけど、いくつか訂正したいんだけど、いいかな」

にこやかに呼びかけた。

「立村先輩」

「立村、あの馬鹿が！」

「ホームズ、落ち着け、さっきも言っただろ様子見だよ」

「立村くんって一体何考えてるのよ！」

「あんた、礼儀ってもんを考えろってんだ！」

三年評議連中、および生徒会一同、みな騒ぎたけなわな中、佐賀はるみはきよとんとした顔でもって、他の生徒会連中に指先で何かを指示した。

「間違っていることがあればもちろん直します。立村先輩、お願いします」
立村の挑戦状を余裕の微笑みで受けて立った、そう見えた。

立村が教卓に片手を置いた。少し身体を斜にして、座っている佐賀はるみを見上げるようなポーズを取った。ちらと覗く表情にはどことなく不敵な笑みが残っていた。小声でいちゃもんつけている新井林を無視し、

「まず、一点目なんだけど」

切り出した。

「評議委員の入れ替わりが激しいとか、先生たちの言いがかりとかいろいろ話はあるようだけどこちらには全然流れて来ていないんだよな。なのになんで、生徒会がいきなり割って入ろうとしたのか、そのあたりが今ひとつぴんとこないんだけど、どうだろう」

とぼけたように佐賀に語りかける。言葉の裏に走る緊張感だけが伝わってくる。

すぐに渋谷が割って入った。佐賀の発言前に自分の役目とばかりに。

「今話したじゃないですか。今、私も会長もお話した通り、今後私たち生徒会が中心になっていく以上、あとあとと言った言わないのトラブルがないように」

「いやそういう意味じゃなくてさ」

立村はばかにしたように目を少し細め、渋谷を牽制した。

「悪いけど、俺は会長と話をしたいんだ。君は黙っていてくれるかな」

かなり頭にきたことが渋谷の顔つきでよくわかる。立村は再度佐賀の顔をしっかりと見つめて、「俺が知りたいのは、先生がたの言い分は正直どうでよくて、なんでそこまで強気で出られるのかってことなんだよな。だって、佐賀さん、半年前まで何も知らなかったのにいきなりどうして、って思わなかったのかな」

わざわざ「さん」付けで、それでいて崩れた口調でそのまま続けた。

——まじ、何様の言い方だわな。さて、会長どう出るか？

隣の美里も息を呑んでいるのが貴史にも伝わってくる。

佐賀の台詞は余裕だった。

「もちろんそう思っていました。でも、すぐに覚えられました。みんなが支えてくれましたから」

ちらりと生徒会の連中に目を向け微笑んだ。全くもって動じていない。

立村は納得したように頷き、質問を重ねた。

「そうか、ならなおさら不思議なんだけど、どうして評議委員会を利用しようとあえてしなかったのかな。もったいないだろ。今まで交流会は評議委員会がメインでやってきたわけだし、その他の行事だっていろいろとさ。でも、あえて天羽からそういう話を聞こうとしないで一方的に先生方の意見ばかり取り入れるのは、少しちがうんでないかって気がするんだけどな」

「お話は聞くようにしました。主に天羽先輩から教えていただきましたけど、でも、どうしても、それだとけんかになってしまいそうなことになりそうで」

佐賀はるみがすぐ真下に座っている新井林に目を向けた。首をかしげた。

「誰と」

「先生たちとです。どうしても意見が合わないというか、生徒たちばかりで進めると誰かが必ず暴走してしまうので大人たちがきちんと立ち会える場所でやるべきだとか。私もそう思うんです。そうしないと裏で何があっても、真面目にやっている人たちは太刀打ちできませんから。私、去年それ、本当に強く感じたんです」

「当時の評議委員長として詫びを入れておくよ。それはそうとして、佐賀さん、今の話だと評議委員会で得たことはあまり役立たなかったってことになるよな」

「そんなこと言ってません」

ぽかんとした顔で佐賀が受けた。同時に目の前の新井林が立ち上がろうとするのを、天羽が「動くな!」と厳しく制した。のほほんとしているくせにこんなところではずいぶん先輩面している。新井林もあっさり言うことを聞いて座りなおした。

佐賀は立村の目線をしっかり受け止め、微笑み称えたままで答え続けた。立村も頷きつつ、時折ふっと自分に返ったようなまじめな表情を浮かべた。意識しているのかそれを無理やり消そうとし不自然な笑みを浮かべる。どことなく奇妙だった。

「どうしたんだろ、立村くん」

美里が小声でささやきかけてくる。

「ああ？」

「立村くん、何かしようとしてるんだよね」

「そうとしか考えようねえじゃねえのか」

「ううん、違う。わかるんだけど、なんでってこと」

美里のわけわからない問いは無視し、貴史は立村と佐賀とのやり取りに集中した。いざとなったら奴を取り押さえる覚悟はとっくの昔についている。場合によってはぶん殴ってA組の教室からひっぱりだし、停学覚悟でとことんさし勝負する腹積もりもある。ただ立村の最終目的が何なのかがどうしても掴み切れない。

——天羽も、難波も、更科も、気づいてねえのか。

佐賀はるみは立村に語るのではなく、むしろ教室内のギャラリー一全員に聞こえるように物語っているように見えた。言葉も涼やかで整っている。

「私はただ、評議委員会のやり方でずっと続けていくと、またたくさんの犠牲者が出てしまうと思うんです。どんなに一生懸命やっても、ひとりの人が嫌ってしまったために追い出されてしまい、心に重たい傷を負ってしまう人だっているでしょうし、本当は二年からもっとやりたかったのに、結局くだらないことであきらめなくちゃいけなくなってしまうかもしれませんし」

隣りの美里がはっと口を押さえた。

「どうしたよ」

「ううん、なんでもない」

他の女子たちも何かを感じたかのように顔を見合わせているのが伺えた。
悔しいが貴史には全くわからない。

佐賀の言葉は一語一語教室内を満たしていく。

「それに、私、立村先輩が委員長の頃しか評議委員のお仕事できませんでしたが、本当だったらもっと、女子の先輩たちが活躍してもいいはずなのに、どうしてさせてあげられなかったのだろうっていつも思っていました。清坂先輩や近江先輩のような人がどうしていつも、立村先輩や天羽先輩の後ろに回ってしまうのか、それがかわいそうでなりませんでした」

うんうん頷く女子たちが増えていく。

男子連中は苦虫噛み潰したままだ。

——美里はそれなりに評価されてるってことか。

こずえや他の女子たちがわめくように、足をひっぱっていたのはやはり立村の存在だったのかもしれない。改めてちくちく痛いものを感じるのはなぜだろう。関係ないというのに。この場は貴史とは全くの異世界なのに。

「評議委員会と生徒会が一緒になって活動するというのはいいことだと思いましたが、私も協力するつもりでした。もちろん今でもその気持ちは変わってません。でも、立村先輩が最初の段階で持ち出した案のままだと、ただ評議委員会と生徒会が一緒になるだけで、生徒会ができることが何もありません。うまくいえないんですけど私たち、生徒会役員としてやれることをしたかった、という気持ちはあります。他のみんなもきっと同じだと思います」

まず、佐賀は「大政奉還」の意味を認める発言をした。その上で、

「でも、生徒会が評議委員会と同じことをするのだったら何にもならないし、それに先生たちをまた意味なくないがしろにしてしまうのも、なんだか申し訳ないなって気がするんです」

申し訳なさそうに口元をつぼめた。立村がぴんときたかのように前かがみになり、また佐賀の顔を見上げて問い詰めた。

「やたらと先生たちのこと持ち出すのはなんでかな？」

「私、評議委員のころは気付かなかったんですけど、先生たちは生徒会を通していつも私たちを見守ってくれていらしたみたいなんです。このまま評議委員会の人たちがつっぱして、取り返しのつかないことになってしまったら大変だということで、いつも陰で見守ってくれていたんだなってことが、生徒会に入ってからよくよくわかったんです」

少しだけざわめく。そういえば生徒会というのは教師たちからやたらと覚えがよく、評議委員会を否定的な目で見始めているとか何とか。生徒会連中もみな口にしていたし、立村も、天羽も、難波も似たようなこと言っていたような気がする。

「私は知らなかったんですけど、二年前の本条先輩が評議委員長だった頃からずっと先生たちはノータッチでいる方がいいという雰囲気になってしまい、そこで割り込むと本条先輩が不良

になってしまう可能性あったので遠目で見守ろうってことに決まったらしいんです」

「それは本条先輩に対して失礼じゃないかな」

珍しく立村の声トーンが荒いように聞こえた。

「だめだよ、立村くん、挑発乗っちゃ」

小声でまた美里がつぶやく。

「挑発かよ」

「あたりまえじゃない！ 立村くんの前で本条先輩の悪口言ったらどうなるかってみんなわかっている人わかってるじゃない！」

「だからそれわかってて、佐賀は言ってるんだろ？」

はっとまた口を押さえる美里に貴史は早口で説明した。

「立村が理性失うように持って行きたいのが生徒会だろが。俺だってそうするぞ」

美里がだんまりを決め込んだ。知ったことか。集中する。

「私もそれ、先生たちに教えていただくまで知らなかったんです。これ、ここで話しているのかわからないのですが、先生たちは本条先輩の力を買っていたというよりも、本条先輩がこれ以上道を踏みはずさないようにするために、評議委員会を利用したというだけだったらしいんです。同じことをずっとしていたけれども、それがだんだん別の方向に進んで来てしまい、このままではただのクラブになってしまいそうだから、きちんと誰かが守ってあげなくてはならないという 雰囲気になってきたようです」

「別に守ってもらわなくてもいいけどな。それで」

「つまり、私たちは本来すべきことに専念して、やらなくてもいいことはすべて先生たちにお任せしたほうがたくさんの人たちを喜ばせられるんじゃないかなって思ったんです。だって、この前も同じことになってしまいましたし。辛いことを生徒たちがやるのではなくて、先生たちに、たとえば、その」

しばらく佐賀は先生たちとの連携について穏やかに語っていた。立村のぎらついてきた眼差しを全く意に介することなく、冷静に交わしていた。貴史から見れば実にあっぱれだ。鈴蘭優のイメージを保った生徒会長を憎むところなどどこにもない。むしろそのまま先生たちのでしゃばりを生徒会なり評議委員会なりでうまくコントロールして、おいしいところだけもらっていくのがベストではないかとすら思う。無理に戦う必要なんてない。

佐賀がいったん言葉を切った。また唇を尖らせるようにして、

「E組を作るきっかけになってしまったことのように」

じっと立村を見返した。立村も思い当たる節があるのか即打ち返した。

「去年の段階で、俺が交流サークルをこしらえようとしたらあっさり学校側の方針で、E組作りを持っていかれてしまったって言う、あれだな」

「そうなんです。私、あの時、本当に申し訳なかったんです。梨南ちゃん、いえ、杉本さんに対して、クラスから追い出す形になってしまい、本当に心が痛かったんです」

——佐賀があの馬鹿女にそうとう迷惑かけられてたつてのは、よくわかるわな。立村もなんであんな女子に拘るんだか俺には理解できねえよ。なあ、立村、頼むから頭冷やせよ。さっさと雪に頭を突っ込んでフリージングして、3Dに戻って来いっての！

噂どまりではあるが、一度だけでも杉本梨南と接して感じた悪印象が消えることは全くない。一方隣の美里はさらにつぶやく。

「佐賀さん、立村くんを怒らせようとしてる」

「だからそれを挑発ってんだろ」

「そうだね、わかってるよそのくらい」

ぶっきらぼうに返事してくる美里。わかっているなら黙っているとやりたい。

佐賀はるみの落ち着いた返事が実にあざやかだ。

「もし、あの時、もっと別のやり方を評議委員会がしていたらまた話は変わったと思うんです。たとえば、直接先生たちと相談する形にすれば、もっとうまくいったと思うんです。これ以上誰も傷つけないでことがすんだはずなのに、自分たちだけで計画したがためにこういうことになってしまったというのが、私にはとても、辛くて、悲しかったんです。さっき私が言ったことと重なるんですけど、もしあの時、先生に告げ口する勇気があれば今のように梨南ちゃん、いえ、杉本さんを傷つけないですんだはずなのになって、今でも思います」

またがつんとくる。隣の美里には気づかれぬようにしたい。貴史はシャープをかちかち鳴らしてみた。

——俺たちが一年の時、もっと別のやり方してたら。

——こんなにぐっちゃぐちゃにならねえですんだのかもしれない。

ボタンの掛け違いとしかいいようのないD組の評議委員選出の展開を今更後悔してもしようがない。後ろなんか振り向く気などない。だがなぜ、あの時、貴史は立村の何度も出したSOSを受け止めてやれなかったのか。それだけがどうしても消えない。目の前で別人のように振舞う立村の張りぼてぶりがあまりにも情けない。

「勝ち目、ねえよな」

思わず口から洩れる。美里がこちらを見たが何も言わなかった。」

「佐賀さん、それなら聞くけど、どうしてそんなに人を傷つけないんだったら、評議委員会のごたごたをさらに引き起こすきっかけ、作ろうとしたのかな。俺が聞きたいのはそれだけなんだけど、どうなのかな」

指でこつこつ教卓を叩いていた立村が、不意に堅い声で佐賀に呼びかけた。

きわめて冷静に。

「ごたごた？ なんでしょう、それは」

「つまりさ、佐賀さんが言うには、生徒会と教師連中が固まってやれば、今まで評議委員会のし

でかしたような不始末を一切起こさないですんだってことになるよな。実際、俺が委員長だった頃にやらかしたことについては一切言い訳する気ない。少なくとも去年の十一月までのことについてはな」

自嘲するかのように、鼻で笑った。ぐいと顔を上げた。

「だけど、今回、こういう風な席を用意しなくてはならないくらいのことになったきっかけって、単刀直入に言うとあれか？」

一気に本丸へ突入した。」

「この前の騒ぎのことか？」

短い一言。三年連中がざわめき出した。天羽も、更科も、そして

「立村、やめろ」

難波が鋭い声で怒鳴った。立村も気づいて難波を見やったが、いかにも「止めるな」といったメッセージをこめて首を振っているのが見え見えだった。

「反応があったってことで進めるけど、はっきり言って三年同士でどろどろな出来事があり、そのあたりで先生連中が介入しようとしたってことだよな。確かにそれは納得するよ。子どもだけでは解決できない、大人が割り込むことでしか片付かないことも、確かになるよな。ただ、悪いんだけどそれは評議委員会と直接関係のない出来事だったともいえなくはないのかな？ 今まで佐賀さんが話してきた内容だけで判断すると、評議委員の三年連中は救いようのない間抜け連中だったと思われそうだけど、ひとつひとつ分析してみると、違うだろ？」

すっと顔を挙げた。今までは佐賀はるみにのみ話しかけていた口ぶりが、ふと教室全員への視線へと変わった。ぐるりと見渡し、素の表情で窓辺を眺めた。その目はいつも見る立村と全く変わらないもの。自信なさげに、おどおどしながらも必死に自分をしばいて発言しようとしている、いつものあれに。

正面切って、立村は仮面を挿げ替えた。ギャラリーをなめきったしたたかな顔をすぐに用意して続けた。

「ここで名前を出さないでおくけれど、きっかけは単に、佐賀さんと評議以外の女子とのいさかいがきっかけだろ？俺もそのあたりは裏を取ったけど、ずいぶん酷いことを言うよな。悪いけど、ありもしないことを言うのはどうかと思うけどな」

渋谷が立ち上がった。制止役はいつも彼女だ。立村を露骨に指差した。

「ちょっと待ってください。それは今回の話とは関係ありません」

また軽蔑しきった口調で跳ね返す立村。

「悪いけど、関係あるんだ。しつこいようだけど話を続けさせてもらえないかな。女子同士の口げんかに口を出す気はないよ。あとでしっぺがえしを食うからな。ただ、なぜそういうことを生徒会室の中でやらかしたのかってのがまずひとつ。悪いけどそれから一連の出来事は、そこから始まったわけだから生徒会のみなさんの責任は大きいわけだよな」

——ああ？ なんだそりゃ？

「そういうことなんだ。立村くん」

美里は立村を、背伸ばしたまままっすぐ見つめている。

「どういうことだよ」

「聞いてたらわかるよ」

美里の筆箱を手で押さえ、

「説明しろっての！」

「だから、聞いてなよ」

片方の端を押さえた。自然とふたりで同じ筆箱を持ち合っている格好となる。

「それは全く関係ないことではないのでしょうか？ おそらく立村先輩のおっしゃていることは、杉本さんに私がアドバイスをしたことだと思うのですが、おっしゃる通りそれは友だちとしてのことであって評議委員会関係のことではありません。それは渋谷さんの言う通りこの場では関係のないことだと思います」

「そうだな、本来なら関係ないよな」

立村は教卓を軽い音が出る程度に平手で叩いた。。

「関係ないんだけど、俺はそのこと、話したいんだ」

「わかりました、おっしゃってください」

佐賀も落ち着いた口調で、他の生徒会連中および新井林を、お手ふりポーズで制したのち立村を促した。立村がいつもの紳士に戻る気配は一切なし。へらへら口調でにやつきながら、刃を向けた。

「佐賀さんが杉本に話したことなんだけども、半分以上あれ、でたらめだよ」

負け戦のくせに勝ち誇った顔して、立村は高らかに言い放った。

「水鳥の奴のことなんだけども、俺の友だちだしこの前確認したらさ、青瀧東受けるらしいよ」

当然のことだが、貴史には全く意味のつかめない言葉が飛び交っている。

だが佐賀には即座に伝わったらしく、

「あの、ことですか」

不思議そうな顔で受け止めていた。

「それと、もし佐賀さんがあの場で杉本に変なことを話していなかったとしたら、たぶん元評議連中のトラブルは起こらなかったはずなんだ」

ようやく事情を把握しだしたのか、一、二年の参加者たちがひそひそ話をし始めた。本当は貴史も美里を引き寄せて事情説明をさせたいところだが、カンペンケースの端を熱を持ちそうなほど堅く握り締めている相手にそれは無理だ。集中するしかない。

「佐賀さんの言う通り、これはプライベートなことだしそれ以上は言わないけどさ。ただ、さ、これは、やっちゃあいけないことだと思うよ。少なくとも生徒会長の立場で、生徒会室の中で、関係ない生徒を脅すってのはどうかと思うな」

「私は脅してません。梨南ちゃんがそんなことを言ったのですか」

「言うわけないだろ。杉本は事実しか言わない。ただ杉本の話とその他いわゆる三年評議のどた

ばた劇の噂を重ね合わせた結果、もしあの時生徒会のみなさんが杉本に変なことを吹き込んだりしていなかったら、ひどい結果にはならなかったはずなんじゃないかな。そう思えてならないんだ。もし杉本が、まだ入学すると決まっていなかった奴に生徒会がらみで近づくなとか、脅されていたとしたらこれは人道的にやってはいけないことだと俺も思うんだ」

「ですからそれは私と梨南ちゃんとのプライベートな話であって」

「だったら、評議関連のいろいろな出来事も、思いっきりプライベートな話だろ？」

少し態勢が傾きかけている。立村のいいかげんな態度が壊れ、素でありながら厳しいものに切り替わりつつある。今までの無理に無理を重ねてきたのであろうことは予想がつく。

貴史はすばやく頭の中で過去の記憶をかき集めてみた。とにかく、展開についていかないことには話にならない。その間にも立村はその材料となる言葉を次から次へと述べ立てていく。全速力で追わないとどうしようもない。

「もともと評議委員会は裏でいろいろ後ろ暗いことしてきた集団だし、それを先生たちにつっこまれるのならそれはしょうがないと思ってるさ。認めるし、それなら来年以降のことは何もくちばしはさむ気なんてない。ただどう考えても、生徒会のみなさんがやってることは、ひとりの生徒を集団いじめしているようにしか見えないんだよな」

「ふつうに話をするのがなぜいけないのでしょうか。私にはわかりません。それに、こんなくだらないことで時間をつぶすのはもったいないことではないのでしょうか」

「ああ、俺もこんなことさっさと終わらせたいからな」

うまく話が飲み込めていないのか佐賀が穏やかに返している。立村も苛立ちつつも手を緩めない。誰もが二人の丁々発止を固唾呑んで見守っている。

「とにかく佐賀さん、あの時にもし佐賀さんが杉本に、関崎が青大附高に入学してきても絶対に近づけないとか言ってなかったら、それをかばおうとした元評議委員たちが暴走することもなかったわけだしさ」

未知の登場人物が多すぎる。ということは何か。杉本を佐賀が生徒会に呼び出し説教したことが、要するに西月や霧島、天羽たちを含む大問題に発展したということなのか。第一誰だ、その関崎とは。青大附高に入学してくるって奴は。いったいどう関係あるのか？

貴史が首をひねっている間にも立村の暴走は止まらない。誰も止めようとしない。

——こんなにそそり立ったかっこうで言い放っていいのかよ、お前、もしこれでまたへまやったらどうするんだ！

いざとなったら、いざとなったら、それだけが頭の中ぐるぐるする。

「あ、それともうひとつ言っておきたいんだけど、この一件で天羽のことが散々噂になっているようだけど、それ、全く持って大嘘だから」

天羽がぼかんとした顔で、自分を指差し立村に問う。

「俺……？」

自分の世界で佐賀を問い詰めている立村にはそれすら届かない。開き直ったように言い放っているのみ。教室内に響き渡る立村の声は本当に本人なのか。それともどこか天から降ってきた声

なのか、ばかばかしい想像すらしてしまいたくなった。

「なんかさ、噂によると天羽の色恋沙汰が原因でどたばたやってるって話になって、先生方もそれ本気で信じているようだけど、ほんとのところは違うだろ」

突然、立村は唇を引き締め、凄みのある眼差しとこしらえた笑みをそろえたまま、全員に言い放った。佐賀はるみ相手ではなかった。

「天羽の人間関係とは一切かかわりなし。単に、佐賀さんが生徒会室で杉本に、まだ来ることが決まってない奴に近づくなとかわけのわかんないことを話したのがきっかけだよ。もしそれさなければ、ここまで天羽をつるし上げることもなかっただろうしな。杉本に恨みがあるのはわからなくもないよ、けどな、佐賀さん、それは一人の人間として、今更やってはいけないことなんじゃないか？ そうだな、人間としてもそうだけど、少なくとも生徒会室の中でそれをすべきではなかったんじゃないのかな。悪いんだけどさ」

ぐるりと見渡し、また指差しをしようとする渋谷を鼻であしらい、立村は佐賀に何かをささやいた。貴史には聞こえなかった。佐賀はるみは相変わらず不思議そうな顔でもって立村の顔を見上げるだけだった。

美里の横顔に浮かぶもの。今にもなきそうな眼差しのみ。

「おい、美里」

「黙っててよ！」

「んと、なんだ、要するに西月連中の事件と評議委員会とは全く別の問題だと言いたいのかよ」

「そういうことよ」

「そりゃ無理過ぎだろ？ あいつの論理なんか崩壊しまくってるぞ」

「冷静に考えればわかるわよ！ けどしょうがないじゃない！」

「はあ？」

教壇の前で新井林が立ち上がった。二年男子たちが止めようとするが果たせない。

つかつか教壇の上の立むらをにらみすえている。

「どうしよう、ねえ、止めようよ」

「なんだ？」

美里が貴史の腕を引っ張る。

「あのままだと新井林くん、立村くん、殴りつけちゃうよ。あんたの時なんか比にならないくらい、叩きのめしちゃうよ。勝てないし、それに」

言葉を切って美里は首を振った。

「もう立村くん、死んでもいいって思ってるし」

美里の言葉は途中で途切れた。その新井林が仁王立ちで立村に立ち向かおうとしていたからだった。思わず貴史も立ち上がっていた。

——完璧やべえ！ あの馬鹿、とうとう、何を！

「あんた、評議委員長だったってのに、何考えてるんだよ。立村さん、あんたはさ、あの本条さ

んが認めた評議委員長だったんだろ？　なんでこんな最後の最後に恥さらしな真似しやがるんだよ。こんなわけのわからねえことしやがって、もうやめろってってるだろ！」

拳を握り締めている。美里の危惧通りだ。今にも殴りかかりそうなポーズだ。しかし教壇には上がらない。引き摺り下ろそうともしない。静かに見守っている佐賀と、その脇で立ち上がりはらはらしている様子の生徒会役員。「いかげんにしてください！」と叫ぶヘアバンド女子の渋谷。新井林の側で懸命に「新井林、落ち着けよ」「健吾、頼むやめろ」と説得する二年男子たちがいる。評議委員連中なのかはわからない。

新井林はひとりわめいている渋谷を一喝した。

「あんた、ちょっと黙れ。俺は立村さんと話してるんだ」

「評議委員会っていったい、何考えてるんですか。だから先生たちが早くつぶしたがってるんだわ。佐賀さん、いかげんこんなのやめましょう。霧島くんも手伝って」

いかにも優等生面した悪役が言い出しそうな台詞を言っただけの渋谷だが、今度はもひとり加わった。霧島弟がきつと言い返した。

「くん付けで呼ばないでください」

「そんなのどうでもいいでしょう」

渋谷と霧島弟との小競り合いをよそに、新井林はさらに立村をまっすぐ見つめたまま訴えている。なぜか、拳は上がらない。ただひたすら、教壇の下から、

「弱い者いじめ、とか言ってるけどさあんた、あんたが今してることだってそうじゃないか？　あんたがこんなまん前で、ひとりの女子をつるし上げてるのもいじめじゃねえのかよ。それって、正々堂々たる態度じゃねえよな。人間として、それは間違ってる。絶対に、どんな理由があろうとも、絶対に間違ってる。どんな理由があろうとも、あんたのやってることは間違ってる。そうだよ、立村さん」

「立村さん」と、決して「さん」をはずさないまま、新井林は続けた。

その言葉は立村にしか向けられていない。

側にいる誰も、その言葉を求めている。

「あんた、同じ事、俺に言ったこと、どうして忘れてるんだよ、なんでこんなこと、最後の最後に、なあ、あんたもうやめろよ」

涙声に聞こえたのは、気のせいだろうか。立村はそのまますっと静かにその表情を変えなかった。ばかにしきった目つきではない。じっと、よく貴史や美里を見据えて穏やかに頷いている時と変わらなかった。受け入れている、その感覚が残っている。今までの茶番劇はすべて「演技」だったのだ、それだけは理解した。

——立村、なんで、お前何も言わねえんだよ。言いたいことあるだろが。

佐賀にあれだけ言いたい放題わめいておいて、なぜ新井林に怖気づくのか。それとも、

——それともまさか、死んでもいいって？

美里の言葉がよぎった。その隣りで

「貴史、止めよう。あんた行かないなら私、行く」

美里が立ち上がろうと机に両手を突いたその時だった。

「立村」

厳しい声がよく通った。天羽が立ち上がった。それまで立村だけをまっすぐに見据えてきた新井林が天羽に向かい、

「あの、天羽さん」

我に帰ったようにつぶやいた。立村の表情は変わらない。天羽はまず、新井林の隣りに立ち、片手を肩に乗せた。

「お前も座れ。まだやることがある」

無理やり席につかせた。次に、教壇にいる佐賀はるみに向かい、
「まだ話は終わってないんで、これからまとめるといたしやしょうか」

腹の底から響く声で、丁寧に語りかけ、最後に立村へ目を向けた。

「もう、帰っていい」

「はっきり言えよ。俺にどうしろっていうんだよ」

無理して鼻で笑おうとししくじっている、そんな言い方で立村が問い返す。

「立村、もう、評議委員会、こなくていい。あとは俺がすべて片付ける」

天羽は、立村が入ってきた扉をそのまま指差し、そのまま動かずにいた。立村が出て行くまでその場を動かない、そう言いたげなどっしり感がある。

——天羽、なんでだ？

——これ、お前が仕込んだことじゃねえのか？

——あれだけ立村を中に呼びたいとか言っておきながら、こうやって追い出すのか？

わからない。もう貴史には評議委員連中が何をしたくて何をたくらんでいるのかが理解できない。隣の美里がそれを把握しているのかそのものが許せない気持ちだ。

——一発殴ってでもここにおいとくか、俺をつかって外に一緒に出すか、とにかくこのまま追っ払うってのはねえだろが！

喉まで出かかる言葉を飲み込む。美里は貴史の腕を押さえ無理やり席に座らせた。

その間。同時進行で佐賀と新井林が小競り合いしているのが聞こえたがそんなのどうでもよかった、しばらく言い合った後、佐賀はるみは新井林をなだめ、ずっと天羽を見下ろした。立村を背にするように立った。

「では、立村先輩がお帰りになったら、もう一度お話をまとめたいのですがよろしいですか？」

「かしこまりやした、じゃあまずは皆の衆、控えおろう！」

どっと笑いが起こった。とりあえず笑っておこうといった、投げやりな笑いだった。幕引きの合図と見た。合間に天羽が立村に向かいピースサイン、敬礼サインを二本指で送っているのだけが不可解だった。追い出したい相手だろ、そう問いたかった。

「わかった、それじゃ、あとはよろしく」

もうめっきのはげたへらへら野郎演技を無理に続けている立村を、誰も追ったり止めたりする奴はいなかった。教壇から降り、立村は天羽の肩を強く一度叩き、席に戻ってきた。貴史の机に

置きっぱなしのコートを黙って抱えた。貴史や美里の方を一切見ようとはしなかった。後ろの扉から静かに去っていった。

貴史は改めて美里に問いかけようとして、やめた。じっと、後ろ扉から目を離さずにいたからだった。

立村去りし後の三年A組教室はまさに混沌、カオスの極地だった。

——本当に天羽、これで片、付けられるのかよ。

本当は貴史もへらへらしながら去っていった立村を扉蹴飛ばして追いかけたかった。余裕で追いつくだろうし首根っこひっ捕まえて雪の中に突き飛ばしてやりたい気持ちで溢れている。それができずただぼかんと立ちすくむしかないのは、隣りの美里の思いつめた眼差しに引き止められたのと、目の前で、

「そいじゃ、しっきりなおしと行きましょ。近江ちゃん待っててな」

眦がつりあがっている生徒会の連中プラス難波をなだめるような口調で、天羽がいそいそと教壇近くに立つ。さすがにさっきまで立村がやらかしたように、佐賀の隣りには立たなかった。新井林が仕方なさげに座ったのが最後、会議は再開された。

「とりあえずうちの元評議委員長が言いたい放題やってのけましたのはお詫びします。あいつも最近いろいろストレス溜まっているようなんでその辺は想像にお任せするとして」

まず天羽は両手をもみもみしながら切り出した。

「現評議委員長である俺としても、ずっと生徒会のみなさんとわだかまりあるなかで活動するのはなんか、いやってのはありますねえ。さっき立村がいろいろ話していた通り、評議委員、およびOB・OGたちを含めて波乱万丈な出来事が相次いだのは確かです。立村は一生懸命俺たちのことをかばってくれてそれはありがたいことなんですが、冷静に考えりゃあそんなわけがないわけありません。特に問題の中心人物である俺、天羽のまあ、なんだ、人間性って奴ですか。そういうものに問題があるのではというのも、また事実です」

——天羽、認める作戦できたかあ。

腰を押し付けてじっくり聞き入る。立村が佐賀を相手にまくし立てていた時には勢いに飲まれてはらはらしていたが、天羽の言葉だとそれほど怒りも感じることはない。むしろ当たり前、と思えるものもある。

「ただですねえ、評議委員長として言わせていただくと、個人のプライバシーに関する話を混ぜ込んでしまうとどんどんわけが分からなくなっちゃうんでないかというのも正直あるんですわ。そうっすねえ、さっき、立村がいろいろ言ってましたけど、本来のテーマってのはどこにあるんですかってことです。俺は別に、生徒会室で何があったかを知りたいとか、それがきっかけでいろいろ面倒なことになっちゃったとか、それがきっかけで人間関係と先生方の信頼をパーにしちゃったというか、そういうことを愚痴りたいわけじゃありません。むしろ、俺としてはそういうややこしい問題を抜きにして改めて、なぜ評議委員会と生徒会 同士の融合がなめらかなシュークリーム感覚で行えないのかが謎なんでさあ」

——天羽、言いたいことは分かるがちっとも面白くねえぞ、そのギャグ。

奴なりにすべってしまうギャグを嘴ってしまうほど、必死なのだろうとは思う。

「お言葉ですが」

いきなり立ち上がったのは霧島弟だった。

「短く答えさせていただきます。先ほど僕たち生徒会の考えをお伝えしたはずですが、最終判断は先生方にあります。立村先輩はそれなりにいろいろお考えで元生徒会長である藤沖先輩に提案なされたのですが、その結果として評議委員会には半分の権限を与える価値もないと見切られてしまったゆえの展開だと、お考えにはならないのですか」

狐顔を尖らせて、ちらと三年評議連中を見返した。

「まあ、先生方が割り込んできたってのは俺も立村も誤算ではありましたがね」

「生徒会長もおっしゃったとおり、本来であればそのことは僕たちの判断ではなく先生たちの最終的な決断で、生徒たちが嘴を挟むものではありません。ですが、その一方で僕たちはこのまま評議委員会のみなさんに何も言わずさっさと欲しいものだけもらっていくのが申し訳ないから、このような会を開いただけのことです」

——どこが短いんだか。

何度見ても霧島ゆいとそっくりなその面を眺めつつ、貴史はひとつ前に腰掛けている難波の肩を眺めた。こわばっている。凝っている。思い切り揉んでやりたい。

「それに、付け加えますと」

割り込むように立ち上がったのはヘアバンド女子の渋谷だった。どうも霧島がしゃべるとどうしてもむずむずしてくるらしい。きんきんする声でわめきたてる。

「なぜ生徒会側に先生たちがお力添えしてくれるかということ、結局のところ評議委員会の培ってきた人間関係がややこしいからに他ならないのではないのでしょうか！ 天羽先輩の件が全く関係ない？ どういうことでしょうか？ 通常人間関係ってそんな促成栽培みたいに出来上がるものじゃないですよ？ ずっと同じメンバーだったのであれば、一年、二年、三年と積み重なってくるものではないでしょうか？ それでたまたま何人かが委員から離れたからといってその人間関係って崩れるものですか？ 関係なくなるものですか？ そういう人間関係が出来上がる場所に問題があった以上、どういうきっかけがあったにせよその場所に問題があると判断するのは、普通ではないのでしょうか？ ねえ、みなさん、そう思いませんか？」

——どうでもいいけどどうせえなああの書記も。

隣の美里も口を開きかけては飲み込んでいる。何かを言いたいのはわかった。

——なんか言っちゃえよ。

美里のノートに書きこんでやる。ちらと美里が貴史をにらみ、首を振る。

——できるわけない！

——うちのクラスで言ったことそのまま言っちゃえよ。

目を大きく見開き、美里が直接口で問いかけた。

「何よそれ」

「立村がなんで『大政奉還』したかったかその理由だ」

はっと気がついたように美里が口を押さえる。

「そっか、そうだよね」

「生徒会側は完全に権利を全部持つてくことしか考えてねえだろ。話、思いっきりずれてるだろ。ここで少し、立村がなんで藤沖相手に『大政奉還』させたかったのか、あいつの過去も含めていろいろあったってこと、しゃべったってばちあたりねえだろ」

部外者の貴史からしたら、この会議の存続意義事態よくわからない。大げさにわめきたてているけれども結局のところは、「船頭ひとりだけでいいから船から下りてくれないか」の一言につきる。ふたりで仲良く漕ぎましょ、という立村の提案もありかなと判断したのだろうが、実際その船頭の腕が危ういと判明した以上、出来る奴を別に挿げ替えて意思統一して懸命に漕ぐことを勧めたい、ただそれだけのことだ。観た限り天羽も腕力はあるし十分過ぎるものがあると客観的には思う。だが、生徒会からしたら全く価値観の異なるグループと一緒に漕ぎ漕ぎするのはいろいろとストレスが溜まるのだろう。だったら、せっかく先生がたのお勧めもあるし、潔く引き下がっていただけないかと頼みたい、そんなところだろう。

「生徒会だけで固まっちゃったら、立村の目指す、学校の連中みなやりたい奴が交じり合える環境じゃなくなっちゃうだろ。大本そこだろ？ 生徒会との権力争いなんじゃねえ、立村は評議や生徒会だけではなくて、もっと大きな視点から考えていたんだってこと伝える必要があるんじゃないかねえの」

「そう、そうだよ、貴史」

美里が手を挙げようとした時だった。

女子のひとつ前にいた席の女子が立ち上がった。

B組だった。

轟琴音だった。

隣の難波がぎょっとして轟を見上げている。教壇側の天羽もひょっとこづらしている。明らかに仕組まれたものではなさそうだった。

「琴音ちゃん？」

響きの美しい名前を美里はつぶやいた。

出目金出っ歯の代名詞、轟はぐいと背を伸ばしたままぐるりと教室内を見渡した。

「お言葉ですが話がだいぶそれているようなので、修正していただいてよろしいですか」

歯のすきまからしゅうしゅう音が聞こえるようだ。どことなく発音が異なっているような感じがする。

「今日の議題は本来であれば、評議委員会と生徒会の融合がテーマだったのではないですか。私はそう最初聞いてきましたが、蓋を開ければいつのまにか互いの罵倒し合いのみでなんの発展性もないように思えます」

片手を腰に当て、唇の端をくいと上げた顔がどことなく魚の真正面からみたものに似ている。周囲もがやつているのがまだ止まない。

「生徒会長のお言葉によりますと、青大附中評議委員会が先生方から鬻蹙を買っていてそこにす

べてを任せることを危惧しておられた、それゆえに常識をわきまえた生徒会に権限をすべて引き渡し、評議委員会はクラスまとめに徹していただきたい、そういうことかと認識しましたがそれは正しい認識ですか」

「その通りです」

誰よりも先に渋谷が答えた。

「その原因が評議委員会のメンバーが引き起こしたトラブルに起因するものと決め付けておられるようですが、それはもともとの委員会内の風土によるものという解釈でよろしいですか」

「はい」

力強く、いやみっぽく、言い切る渋谷。轟は動じずに続けた。

「生徒会長としては、そのトラブルが全く起こっていない生徒会が権限を一括して管理する方がすべて丸く収まるとお考えですか」

「当たり前でしょう」

すべてここまでは渋谷の返答だ。佐賀はるみは何も言わない。穏やかな表情でこっくり頷くのみだった。このあたり、立村とやりあった時とほとんど変わらない。みな動揺しているなかで唯一冷静なのがこの女子なのかもしれない。そんな気がする。

轟はひとつひとつ確認を続けていく。

「では最終目的としては、ここできっぱりと評議委員会と生徒会との線引きをきっちりと行い、今後は互いの範疇を守り領域を侵さないようにしていただきたいと、そんなわけですか」

「露骨な言い方ですがその通りです」

鮮やかだが、どうみても評議委員会を負けに持っていきたくてならない質問にしか聞こえない。轟はふむふむ頷きながら、渋谷ではなく佐賀生徒会長に向かい呼びかけた。

「それであれば話は短くすむはずです。生徒会のみなさまが仰るとおり結論は出ていますし先生方の判断も生徒会寄りであれば本来はこれで決着はついています。ですが私が理解できないのはそれと、評議委員会で起きたさまざまな人間関係のトラブルを無理やり結びつけて縁を切る方向へ持って行こうとしているかです」

朗々と言い放つ轟の声を、それでもまだ一年、二年の男女生徒たちは聞き流している。時折「なんだろうあのブス」「気持ち悪いよねあの歯並び」とか、轟の外見を正確に観察して語り合う声が聞こえる。

「本来そのような話題はこの場には必要ないのではありませんか？ 先生方が判断を行うに当たって確かにそれらの出来事は参考事象のひとつになりえます。しかし、生徒会と評議委員会とがこれから先ベストな形での関係を作り、権限の線引きを行うだけの話し合いであればプライベートに関連する話題で長々と引っ張り合うのはどんなものでしょうか」

「ですからお宅の元委員長がうちの会長にくだらない話を吹っかけてきたから私たちだって」

渋谷が噛み付く。否定できないと思いきや、轟は冷静に、

「うちの委員長が失礼を働いたのは認めます。その点は謝罪します。ですがあの場で明確になったものがあるのではありませんか。今まで評議委員会のみの問題として先生方の目から処理されてきた出来事が、実は生徒会側も一枚かんでいたという事実が証明されたのではないのでしょうか」

」

「誰が事実と言いましたか？ 生徒会室できっかけらしきものがあつたことは認めますが、それは一方的な評議委員会さん側の一方的な言い合いに過ぎません」

「そうでしょうか。私は現場にいませんので断言はいたしかねますが、先生たちの問題視した一件はどの方向から見ても評議委員会と生徒会それぞれの立場で深く関わりあって起きた出来事ではないでしょうか。私ひとりの判断で信用していただければ、この内容を今からしかるべき場所で、大人の目で分析していただく必要があります。生徒会長の仰るとおり私たちは中学生で、子どもです。子どもの認識で判断するのは危険ではありませんか？」

——こいつ、こうきたかよ！

隣の美里が目を見開きっぱなしのまま凍りついている。

自分の手元にあるカンペンケース」を思い切り叩こうとしてあえて止めた。余計な茶々入れるべきではない。轟琴音、こいつはただの出っ歯出目金じゃない。

——生徒会の奴らが「先生方の言い分」をやたらと押し出してきたから、轟は反対にすべてを大人の目の前にさらけ出して審判を求めてきたってことかよ！ けどまじいんじゃない？ それだと、評議委員会だって道連れだぞ。

立村や天羽が話していた内容がすべて事実とするならば、西月の傷害事件を含む展開の一コマに生徒会が噛んでいると判断せざるを得ない。評議委員会だけが問題視される言われもない。もちろん評議委員会も罪を逃れられるわけがないが、少なくとも天羽らのみつるし上げは避けられるはずだ。

轟は冷静に滔々と語り続ける。

「ただ、それを行うことで生徒会のみなさんにはどのようなメリットがありますか？ 私からすれば全く見当たりません。まず、ひとつとしてひとりの生徒を集団いじめと誤解されるような行動を、生徒会役員が取ったということ。青大附中はいじめ問題に対して厳しい措置を行う学校であることは痛いほど理解しておられると考えますがいかがですか」

「確かにその通りです」

静かに佐賀はるみが答えた。見た目冷静だが、目の前でおろおろしている新井林を困ったように眺めている。そのまま轟に視線を向けた。

「その後のみなさんご存知の事件は評議委員会の問題に切り替わります。先ほど委員会内の風土、という言葉が出てきましたがそれは認めざるを得ません。評議委員会がそのような閉鎖的な環境に置かれていて、一切外部との交流を拒絶していたところは認めます。ただし、追加して言わせていただければ、今回の『大政奉還』はその現状を打破するために行われたものです。ここは非常に重要な点ですが、お気づきですか？」

心なしか、轟の言葉に針金が入ったように聞こえた。

「ご存知でしょうが、今回評議委員会が自分らの抱えていた権利を生徒会と分け合うことを判断したのは前期評議委員長である立村くんの意見です。私たち評議委員すべての意見が一致したわけではありません。立村くんの目的はひとえに、閉鎖された委員会組織を開放して、携わる人材を流動化することにあります。つまり、立村くんは青大附中委員会がすべて部活動化していたこ

とを危惧し、それを打破するための一案として『大政奉還』を提案したということになります」

さすがに静まり返った教室内。美里の表情は固まったまま動かない。

轟の相棒、難波も同様に両腕を組んだままただ見つめている。

天羽は身動きしない。更科が小声で阿木とささやき合っているのが聞こえる。ひとりのんびり頬杖ついて外を眺めているのは近江ひとり。

——こいつも、あいつの本心を見抜いてたってことか。

——美里だけじゃねえのか。

「立村くんはこの提案を当時生徒会長だった藤沖くんに行った段階で、まさか生徒会が一まとめに持ち去ってしまおうなんてことは考えていなかったことでしょう。本来であれば佐賀生徒会長の言い分通り先生受けのよい生徒会に預けてしまえば一番楽ですから。それをあえて評議委員会も一枚噛むことに拘ったのは決して権力惜しさではありません」

拳を腰に当てて述べ立てる轟の口調が誰かに似ているようだが、ふと思い出した。いつか見た刑事ドラマの女検事だ。えらくおっかない姉ちゃんだった。

「六月に行われた水鳥中学との交流会を覚えていますか。あの時にも生徒会のみなさんにご参加いただいたかと思いますが、できるだけ多くの一般生徒を集めるようにというのが立村元委員長の指示でした。あの委員長の性格なので強引に、というわけではありませんが出来る限り委員会に携わったことのない人たちを積極的に参加させてくれ、というのが強い希望でした。本日もそうですね。今まで委員会に参加したことのない人たちがここにはたくさん集まっていますよね」

——確かにそうだわ。一、二年、そうだなこりゃ。あ、俺もか。

「同舟呉越とは言ったもので、本来であれば気心しれたメンバーのみでやりたいものでしょう。しかしそれだと組織が硬直化してしまい、後から参加したい人たちの入る隙間がなくなってしまう。同時にすべてを評議委員会が請け負ってしまえば、他の委員会の仕事がなくなってしまう。できるだけ手分けして仕事を分配し、その上で多くの派生した道筋をこしらえること、これが立村委員長の目的でした。決して、佐賀委員長をいじめるだけの能無しではありません」

——なんてかこの、すげえ言い方だな。

「残念ながら立村委員長の志は半ばにして潰えましたが、その代わり天羽委員長が残りの意思を背負い生徒会のみなさまと意見をすり合わせてきたわけですが、どうも話の内容からしますと、第二の悪しき評議委員会の道を歩もうとしているように見受けられます。それこそ、立村委員長が一番恐れていたことです。協力しあうことにより、組織をファミリー化させずに外部の生徒たちが積極的に出入りしやすい場所に育てていく、これが目的にも関わらず気がつけば生徒会ファミリーに戻ってしまう。それを恐れるゆえに私たち評議委員会はうざいと思われるくらいしくく、合同の行動に拘ってきました」

窓辺の雪が白くはりついてくる。どんどん、積もっていくのが見える。窓ガラスを揺らすような轟の声。いつもの自信なげな卑屈さはない。

「あえて申し上げれば、評議委員会を学級委員会に押し込めるような形でもある意味仕方がないのでと、個人的に考えています。あくまでも生徒会側のみなさまが外部に開かれた形でファ

ミリー化されないように心がけていただければの話ですが。ですがここで思い出していただきたいのですが、生徒会のみなさまは私たち評議委員会が今までどのようなノウハウを生かして行事を仕切ってきたか確認なされたことありますか？」

「いいえ。お噂だけは」

佐賀の返事を引き出し、満足したのか轟はにやりと笑った。

「同時に天羽くん、生徒会の役員のみなさんがこんなに団結力強いのはなぜかとか、確認したことがあります？ 私たち評議委員会とは違ってずいぶん鉄板だけど、確認しようとしたこと、あったかな」

いきなり振られて戸惑う役割の天羽が哀れなり。コミカルに頭を抱え、

「トドさん、ねえなあ」

へらっと答えた。

「そういうことです。私個人の認識ですが、生徒会のみなさまと接していて感じるのはどの世代にも共通する団結力です。つーといえばかーと答える鋭さ、私たち評議委員会の質問に対してどの役員の方も即答できる頭の回転の速さなど、さすがと感じる次第です。残念ながら今の三年世代にいる評議委員メンバーにそこまでの結束はありません。そこが評議委員会の弱点であると同時に先生方から見切りを付けられた原因でもあるでしょう。ですが、私たちはこれまで三年間、いえ、結城先輩、本条先輩の委員長時代を含めると五年分の経験とノウハウが蓄積されています。今までは一子相伝で委員長候補が一年かけて学びそれで動かしてきたわけです。つまり、本来であれば立村くんがその知識の塊です。それでも立村くんは天羽くんにそれらの情報を丸ごと譲り、ついでに生徒会の人たちにも公開して一緒に行動をしたいと提案しました。そういう情報すら、まだ得てないというのに一方的に権利だけもらって喜ぶのは、ずいぶんもったいないことではと感じざるを得ません」

「そなたかが、ノウハウなんて大げさな」

小声でつぶやく渋谷の声を無視して轟は続けた。

「評議委員会の経験と生徒会の団結力を利用してもっと素晴らしい行事を組み立てられると思ったから、立村委員長は『大政奉還』を提案したということをご理解いただけましたか。そのことよりも誰がいじめたとか誰が問題を起こしたかといった話に時間を割くよりは、これからどのように手を取り合っていくかが最大のテーマでしょう？ さらに申し上げれば、生徒会の皆さんだけが先生たちの援護射撃を受ける形で活動したとしても、今度はそこから追いされた評議委員会を始め他の委員会たちが孤立してしまう可能性もあります。生徒会ファミリー化のために家族になれなかった委員会の生徒たちが孤立し、そこからさらに外にいる生徒たちも同様に取り残されてしまいます。それは立村委員長が求めた理想像ではありません。同時に先生たちも決して、生徒会だけが仲良しグループとして凝り固まってしまうことは望んでおられないのではないのでしょうか」

轟は締めに入った。

「所詮私たちは義務教育期間の子どもです。先生たちの言い分を受け入れざるを得ない中学生です。それならば、私たち生徒が出来ることは、かつて評議委員会 が抱えてきた豊富な情報と体

験を提供し、それを参照しながら生徒会が互いの意見をかみ合わせつつベストな方法を探るのが一番よい方法ではありませんか。評議委員会には『教師は反抗する相手ではなくて利用するもの』という価値観があります。先生方が責任を取ってくれるのであればどんどんとことん利用しましょうよ。そのくらいのしたたかさを青大附中の評議委員会文化として持っています。どうですか、本来話し合うべき部分は、その点なのではありませんか」

——なんなのこいつ。半分以上言ってることわからねえけど、なんかすごいつてことはわかった。立村に惚れ抜いてるってこともわかった。けど、なんでお前らみな、轟の顔を菩薩眺めるみたいに眺めてるんだ？ 天羽、難波、更科？

窓ガラスを揺らす轟の発言がいったん止まり、かすかに三年男子評議三羽烏が指先でぱたぱた拍手をしたのを、貴史は見た。美里だけが唇をかみ締め俯いているのが露骨なコントラストとして残っていた。窓辺の雪幕で外は全く見えなかった。

轟の一方的な攻撃演説の間、貴史の隣りで美里が何度も腰を浮かせようとしたが、突然振り返った近江の不可思議な笑みに止められ、ふたたび落ち着いた。

「ちょっと言い過ぎっぽくない？」

「いやいいだろ」

「私も、あのくらい言ったっていいよね」

「いややめとけ」

貴史は美里のノートをひっぱり、あえて制止することにした。

「お前に今の轟を圧倒する力なんかねえよ。それにな」

素直に思ったことを第三者として言ってやった。

「まんざら、間違ってるねえだろが」

美里は黙った。ただ唇をかみ締めていた。

——負けたと思ってるんだろな。

貴史もあの出目金出っ歯の轟琴音があそこまで佐賀生徒会長を叩きのめしに行くとは思っていなかった。もちろん立村にほの字で、修学旅行にあえてデートを嘆願したくらいなのだから、それなりの気持ちはあるのだろう。しかしそこに繰り広げられている言動はその甘ったるい予想をはるかに超えていた。男子三年評議連中の表情がすべてを物語っている。

もう完全に貴史は傍観者としてしか関われそうにない。評議委員会と生徒会の合体が何をもたらすのか、どうしたいのかなど正直どうでもいい。美里たちが慌てている様子を伺うのも正直疲れた。ただこの結果をそのままひっかかえて、

——立村に、どう伝えるか。

——あいつに、なぜあんな超チンピラキャラを作ったのかを問いたです。

——そして最終的にはあいつと一対一でとことん勝負する。

このくらいの利用はさせてもらってもいいような気がする。

——あくまでも俺のたどり着く先は、立村との勝負なんだ。

無理に美里を泥沼に押し込んでどたばたする必要はない。轟が背負ってくれているならそれで任せておいたほうがいい。

「轟先輩のお言葉を返すようで心苦しいのですけれども」

佐賀が微笑みをそのまま崩さず、少し戸惑った風に答えを返した。

「今私と立村先輩との会話が誤解を招くような内容であれば申し訳ないのですけれども、私、決して生徒会でのいろいろな話し合いがその、あの、評議委員会のみなさまの問題につながったとは言いがたいところがあると思うんです。お友達同士の会話で少しとげとげしてしまうところはどうしてもあります。でも、そのことがもし先生たちに伝わったとしてもそれはあくまでも友達同士の話であって、轟先輩がおっしゃるようないじめではないと思うのですがいかがでしょう

か」

遠慮がちに、それでも明らかな反撃に。側の霧島も渋谷も、その他の生徒会役員たちも黙っている。

「それに、個人のお話になるのであえて控えてきたのですが、私たちがたまたまそのきっかけになったらしいとする人との会話は先生に知らされても別に問題ないと思います。先生たちにも、一年以上前からそのことは問題として認識していただいているようで、私が生徒会長に任命された時も、ある程度厳しいことになってしまっても状況によっては話し合いをしていただけるということでごまかしてあります」

轟が少し驚いた表情を見せた。それに合わせてか、佐賀もこっくり頷いた。

「もちろん私が誤解を招くようなことをついしてしまったことについては謝ります。でも、今のお話をそのまま先生方になさっても、おそらくですが評議委員会の方々には問題があるのではという結論には、どういう方向から見てもなってしまうのではとされます」

——まあ、そうだなこりゃ。

貴史もその辺は感じていた。轟の「生徒会室が火種で起きたA組傷害事件」も、教師連中からすれば生徒会イコール火種という認識はじゃやされない可能性が高い。全く別個のものとして処理することも可能だ。轟の奮闘も認めるが、すでに生徒会側では裏ルートで教師方との話し合いがすすんでいる以上、評議委員会ががんばっても無駄なのではと思わざるを得ない。むしろ、轟の論における後半の「評議委員会の経験を提供して今後の糧にする」ことの方がはるかにプラスになるような気がする。

「私、轟先輩のお言葉をすべて否定するわけではありません。評議委員会のみなさまがいろいろなさってこられた経験を受け入れたいしぜひ今後の参考にさせていただきたいとは思っています。でも、これも本当に失礼なんですけど」

また言葉を切り、大きく結った中国娘風の髪型に片手を当てて整えた。

「あえてこれも先生たちと相談させていただいたのですが、今までの経験に引きずられるあまり、どうしてもそれにとらわれてしまいそうな気がします。評議委員会で得た経験は貴重なのは分かっています。私も、評議委員してきましたから。でも、その経験を知っているために思い切った方法が取れないとか、その枠の中から飛び出せない、いわゆる『子どもの世界』の限界にとどまってしまいそうな気も、確かにするんです」

——まじかよ、きたかよ、もろ反撃じゃん！

どうやらやわらかい口調の佐賀は、轟の提案など最初から相手にする気がないらしい。

「私、それよりは、全く白紙の状態ですべてに当たってみたらどうなるかって考えてます。過去は過去、未来は未来、そうわりきれればいいですけどやはり私たち子どもですから、どうしても引きずられてしまいそうです。それであればあえて、知識豊かな大人のみなさまの意見や他の学校の人たちの意見など、青大附中のものとは別の情報をもっと仕入れて、その上で構成しなおしたほうが良いような気がします。これも先生たちと最近ご相談したことなのですから。他の生徒会の方々とは接することによって、井の中の蛙であることを最近、痛いほど気づいたので、なおのことと思うんです」

「そうですか。生徒会イコール井の中の蛙ではなくて、評議も含めてですか。ずいぶん幅広いですね」

「青大附中という楽園がありその中でのみ通じるものがあるのは感じてます。でも他の学校ではそれは異なるのは当然のことです。これから将来私たちも社会に出て行きますのでそのため出来るだけ早く、別世界を見ておきたいという気持ちはございます」

轟はしばらく首をかしげて目を吊り上げるようにして佐賀を見据えていた。何かを思案しているようだった。片手を腰に当てたまま、

「ということは、評議委員会からの過去の情報も要らない、必要ない、そういう解釈でよろしいですか」

「そういうわけではないのですが、おそらく先生たちがそれを求めてらっしゃらないのではという印象があります。そうですよね、霧島くん？」

いきなり振られた霧島が大きく頷いた。

「会長の仰るとおりです」

「そうですか。残念です。そこでひとつ気になる点が先ほどのお話でひとつございましたがよろしいですか」

いきなり口調が砕けた風が変わった。

「どうぞ」

「立村くんが言ったことがもし間違っていると断言できるのならば、ここではっきりと答えるべきでしょう。ここで聞いたことを百パーセント否定できるのならば、はっきりと証拠を持って返事をしておいた方が、明日以降くだらない噂に悩まされないですむんじゃないでしょうか」

轟の方向転換に誰もがついていけずにいる。

「今、会長は他の中学の生徒会や大人のみなさんとの接触を重視したいとおっしゃいましたが、私はひとつ、会長に関して気になる情報をとある筋からいただいております」

「それはなにか」

何も考えていないように素直に答える佐賀会長。

「佐賀会長は個人的な目的で特定の中学生徒会に接触しているのではという、あくまでも噂レベルのお話ではありますが、伺っております」

轟の矛先はなんだか思い切り話を逸らす方向に持っていつているようだ。

——なんだそりゃ？

「美里なんだありゃ」

「わかんない！ 琴音ちゃんしか知らないことだと思うよ」

美里も理解できていないらしい。貴史は言葉を追うしかない。

「先ほどの立村くんとのやり取りを伺っておりまして思い出した次第です。生徒会はいくまでも公共の立場で接しなくてはならないものと伺っておりましたが、佐賀会長は最近やたらと、特定の中学生徒会に接触しているのではという情報が入ってきております」

いきなり空気がどよんと変わった。今まではきわめて折り目正しい生徒会と評議委員会の今後について語り合ってきたのだが、突如、別の絵の具が投下されたような感覚だ。

「何のことかよくわかりませんが」

戸惑った表情でまた髪を直すしぐさをする佐賀を、轟は手を緩めずに続けた。

「一年前にさかのぼります。評議委員会主導で行われていた水鳥中学との交流セッションですが、その準備会の段階で佐賀会長がある男子生徒と接触してらしたという情報がございます」

「それが、どう関係あるんでしょう？ 意味が全くわかりません。それに私、その頃は生徒会にも評議委員会にも関わっておりませんでした」

「水鳥中学との交流会はご存知の通り当時評議委員長の指名を受けていた立村くんが主導で行っていたことです。交流そのものはみなさんご存知の通り六月半ばに行われてよい付き合いを続けることができるようになったわけです。ただその際、佐賀会長が評議委員に入り、そこで特定の男子生徒と交流を続けてさまざまな情報を仕入れていらしたという話を複数の方面から耳にしました」

「あのう、私も少し戸惑っているのですが、轟先輩、それ、私だけではなく他のみなさまも同じだったと思います。立村先輩も、水鳥中学で当時生徒会副会長だった関崎さんとお友だちでしたし」

「そうです。評議委員長と相手校の生徒会副会長が交流するのは自然でしょう。もちろん佐賀さんもその関係者となつながらにより得るものも多かったことでしょう。私がお伝えしたいのは個人でそのような活動をするのは間違いではないけれど、今は公人である以上、ある程度の制限はかかるのではありませんか。もし交流するのであれば生徒会全般でお話するとかそのような形にすべきではないのでしょうか。少なくともその男子生徒の自宅を訪ねてこっそりいろいろな情報を得たりとか、いかにも後ろ暗いことをするのは避けたほうがよろしいのではと思わざるを得ません」

「あの、でも立村先輩も評議委員長の時に関崎副会長といろいろリレーのコーチとか」

「そうですね。これも反省点でしょう。立村くんには前もってそのことははっきり言ってもらべきでした。彼も当時は公人でしたから。でも、そういうことがあったからご自身は許されるという論調は間違いです。少なくとも立村くんは関崎副会長と走る特訓をしてもらった時、評議委員会にそのことを持ち込もうとはしませんでした。評議委員長としてではなく一個人として、三年D組のリレー選手としての責任を果たすべく連絡を入れただけでしょう。しかし、佐賀さんのなさったことは、他の学校の生徒に青大附中の機密事項をすべて流し、その上で助言をもらい、こっそりそれを自分の手柄のように振舞っておられたのではないのでしょうか。何も後ろめたいことがなければ、それこそ生徒会のみなさんと相談すればいいことでしょうに。そういう過去がある以上、今仰られた他の学校との交流は佐賀さん本人の私益にしかつながらないのではありませんか？ 先生のご意見と言われればそれまでですが、単純に佐賀さんが自分自身の人間関係を深めるためというのは、間違いでしょうか？」

さっぱりわけがわからない。

「美里、わからん、なんだありゃ」

「私だってわかんないけど、でも、たぶん」

美里は耳元に口をくっつけてささやいた。

「佐賀さんもしかして、新井林くん以外の人と付き合ってたってことかも」

「ちょい待て、それ、めちゃくちゃ会議の話とずれてねえか？」

「ずれてるけど、でも、琴音ちゃんにとってはつながってるのよきっと」

みな、ざわめきが止まらない。それはそうだろう。轟の発言は非常識もいいとこだ。評議委員会の介入を佐賀生徒会長がうまく丸め込もうとしたところ、今度は本人の「浮気」に近い言動を証明しようとしているわけだ。これこそ「プライバシーの侵害」じゃないだろうか。貴史も佐賀の彼氏が新井林というのは知っていて、そいつが目の前にいる。いわゆる「浮気された旦那」状態だというのに、これはひどい。

「新井林くんかわいそう」

じっと新井林の頭を見つめて美里がつぶやく。

「琴音ちゃん、ほんとにどう着地させたいんだろう。わかんないよ」

「わからねえでいい、美里」

貴史は言い切った。伝えておかねばならないと思った。

「お前は、これから先、立村にどう伝えるかだけ考えてろ」

貴史からしたらこの茶番はどうでもよかった。頭の中でこねくり回した限り、評議委員会としては轟によって最後っ屁かませたいだけのような気がする。たとえここで言い負かしたとしても生徒会側が反省するとも思えないし、この場で言いたい放題したとしても結局四月になれば評議委員会の面子は代わる。その上でまた新しい展開があるかもしれないが、今激しい議論を戦わせているのがほとんど三年……生徒会側は除外……と考えると、もうどうしようもないのではないかな。のらりくらりと交わす佐賀会長としては、早く来い来い新学期と念じて、教師連中と生徒会のみで話をあわせ、あとでこっそり新井林のご機嫌とりでもしてやり過ごすつもりなのではないだろうか。貴史が佐賀の立場だったらたぶんそうしているような気もする。いや、天羽だって同じ状況だったら絶対そうしているはずだ。

そんな先の見えたつまらない結果よりも、まだ終わっていない卒業まであと一ヶ月の締め切り事項のほうに貴史は力を注ぎたい。まだE組に隠れたまま戻ってこない立村とどうやって語り合えばいいのか、なぜあんなわけわからないことをやらかしたのか、なぜ、貴史をあれだけ避けるのか。そして、

——俺が、お前にしてやれることはないのか。

それを面と向かって尋ねたい。

——どうせ俺は評議代行なだけであって、本業は三年D組のまとめ役ってとこだ。こんなわけわからねえことはちゃっちゃと置きちまってだ。あとはなんとか、立村をだな。

いきなり、教壇前の男子が立ち上がった。新井林であることは明白だった。

後姿の、スポーツ刈りが少しだけ伸びたような頭。身を轟に向けた。

「俺の顔を立てて、どうかこれ以上会長を責めるのはやめていただけませんか！」

問い詰め続けていた轟の顔をじっとにらみ付けている。ずっと佐賀会長を背にして立ちほだかり、

「もうこれ以上、佐賀会長を責めたてるのはやめて、もっと互い協力しあう方法について語り合いたいです。だから、もう、どっち側の攻撃をするのもやめにしてもらえませんか！」

怒鳴りはしない。深く、重たい、沈んだ声での提案だった。

「俺は来期の評議委員長として、これから何をすればいいかを理解しています。三年の先輩方がご苦労されてきたことはわかってますし、これから先、俺たちが生徒会と交流してもっともったいいものを作り上げていくことが必要だとも十分わかってます。俺だってずっと評議一筋だったし、それにバスケット部で上に立つしんどさもちよっとくらいは分かっているつもりです」

何度も「わかっている」を繰り返した。新井林は続けた。

「でも、先輩たちの持つ遺産みたいな奴を生徒会に押し付ける前に、まず俺たち二年生、いや、一年、それだけじゃなくってみんなにください。俺はまだ、先輩たちと腹を割ってとことん話したことなんて全くないし、天羽さんたちともこれから先の評議委員会についての展望も、それからさっき話を聞いた立村さんの本当の『大政奉還』の目的も、全く聞いてません。俺が聞いてないだけかもしれないです。けど、次期評議委員長としての俺が知らない以上は他の奴も、たぶんうちのクラスの奴も、他のクラスの奴も知らないと思います」

腹から力を込めて、新井林は切々と訴える。

「俺がしたいのは、まず、天羽さんたち三年評議のみなさんから、その綿々と引き継がれたものを受け取ることです。それから、俺たち後輩たちなりに噛み砕いて、それから生徒会の人たちと一番ベストな方法を探りたい、それだけです。先輩たちが俺たちのこと心配するのは当たり前だと思います。けど、ここはあえて、次期評議委員長としての俺と、ここにいる一、二年の連中を信じてもらえませんか」

「新井林くん、それとこれとは違うのよ」

厳しく言い放つ轟に、なおも新井林は食い下がる。

「互い、いろいろ間違ってたことは確かだし、人間誰でもやらかすことはあります。けどそんなこと、俺はどうでもいいと思ってます。少なくとも俺は、これ以上生徒会とけんかして権力争いなんてしたくない。権力よりも、互いに近づいてもっと何かができることないか、それをいろんなところから探りたい。できれば評議委員会だけでも何かできないか、他の委員会にも役立つことが見つけれないか、そういった方面からも探りたい。やりたいことは一杯あります。けど、それを今すぐ結論付けるのではなくて、どうか俺たち後輩たちを信じて、ぱあっと鳩を飛ばすみたいに放ってもらえませんか」

どこかから、拍手が聞こえた。

委員会にかかわりのないグループからだった。

次に聞こえたのは、一年、次に二年の評議委員男子チーム。そのうちに少しずつ拍手の音が大きく膨らみ、残りの三年評議グループを覗いてみなが激しく手を打っていた。

隣りの美里が、大きく頷き、新井林に向かってつぶやいた。

「新井林くん、かっこいいよ」

「ほお、立村ふっきって新井林に切り替えるつもりかよ」

「ばか！」

貴史の頭を思い切りはたき、とうとう美里が立ち上がった。ゆっくりと轟琴音の側に行き、

「これはもう、新井林くんに任せようよ。琴音ちゃん、座って」

そのまま真っすぐ今度は天羽の側に行き、

「三年がこれ以上邪魔するのは、時間の無駄だよ。もっと私たち、評議委員会を卒業してからすべきことがあると思うよ」

真正面から言い放ち、次に佐賀委員長を始めとする生徒会役員たちの前に立った。つまり、新井林の隣りだった。

「何があったかわからないけど、評議委員会として今までやるべきことはみな言い尽くしました。生徒会のみんなはもう、邪魔されたくないってことなんですよ。私たち評議委員がこれからできることはみんな伝えたとし、あとはもう、好きにやればいいと思います。それと」

美里は新井林の真正面に立った。一度ゆっくり頷いて、

「新井林くん、私は、新井林くんが次期評議委員長でよかったと思ってる。他の人たちはともかく、立村くんが高い評価を次期評議院長に指名意味がここで証明されてるもの。だから、あとはもう心配してないからね」

ふわりと微笑んだ。最近の美里が見せたことのない、どこかおっかさんめいた笑みだった。

「清坂先輩、俺は」

「ありがとう。外野が何言おうとも、新井林くんは自分の考えどおり評議委員会を運営してね。大丈夫。少なくとも私は、評議委員長を隣で見守ってきた観点から、新井林くんなら成功すると信じてるからね」

美里は貴史の目線を一切無視して席に戻った。残された新井林が気の利いた感謝の言葉ひとつ出ずに呆然としているのだけが目立った。しかしすぐにそれも打ち消された。天羽に続き難波、更科の三人が近づき、ただ黙って握手を求めた。それに重なるように二年男子たちが手を差し出そうとしはじめる中、新井林は評議連中を背にやり、佐賀会長の前に立った。

「こいつらはみな、俺たちの味方だ。敵じゃない。評議だって生徒会だって、対決なんてする必要ないからな」

そのまま教卓に手を突いてしゃがみこみ、

「だから、お前も怖がるな」

それだけつぶやいたのが聞こえた。それが何を意味するのか貴史にはわからない。ただ美里の言う「浮気発覚」とつながるのであれば、たぶん許したことになるのだろう。いやはや、結局何がどう片付いたのか分からないうちに、佐賀はるみが微笑みのなか、

「みなさん、ありがとうございます、本日はこれで、終了でよろしいですか？」

声を放つのを、貴史は席に着いたままだと呆然と眺めていた。

——結局、これ、なんなんだ？ いったい？ 美里もいったい何のためにあいつにあんなこと、言ったんだ？ なんだよこのぐだぐだぶり。

隣の美里に話しかけようとして気づいた。席はもぬけの殻だった。

会議が開きになった後も、しばらく三年評議四人組はA組の教室でへばりついていた。他の生徒たちも居心地があまりよくないのか生徒会役員たちを始めとしさっさと廊下へ飛び出していき、残るは男子のみとなった。もともと三Aの教室は天羽のホームタウンなのだから残っていても違和感はない。貴史もしばらくは付き合いでかばんを置いたまま様子を伺った。

「しかし、降ったわ降った、積もったわ」

窓辺をあけて外を眺め、天羽はわざとらしくおちゃらけてみせた。

「早く帰ってあったかい風呂に入ってってとこだなあ」

「のんきなこと言われるのかよ」

難波も口調はかりかりしているけれども、さほど怒っている風でもなくほおっと安堵のため息をついていた。側で更科が思い切り伸びをし、

「とりあえず、これで俺たちのお勤めは終わったってことだよなあ。長かった三年間だよな」

「残念ながら俺んところは全然終わっちゃいないんだがなあ」

貴史は口を突っ込んでおいた。評議連中がのびのびしているのに水を差すわけではないのだが、結局「評議VS生徒会」の非公式乱闘試合においていったい何が目的だったのかが全くよくわからない。ただ言いたい放題言っただけのようだが、それも外野の立場だからそう見えるだけなのか、単純に宙ぶらりんのままなのかすら理解できていない。

「ああ、立村な」

天羽は貴史を片手で来い来いと呼び寄せた。仕方ないので天羽の隣りに陣取る。

「全員面そろえて引退式やってのけたってのが天羽の目的ならそれは大成功だったのかも知らねえがなあ。問題はうちのクラス、明日からどうなるんだってことなんだよな。まったくあいつあれだけボケなことやらかしちまったら、明日以降またクラスに戻ってこれねくなっちゃうもんなあ。俺たちがそおっとそおっと様子見してたのが元の木阿弥じゃねえの。ったくなあ」

愚痴ってみてもしょうがない。いまだに貴史としては立村がなぜ、いかにもチンピラ風の口を利きながら生徒会長の佐賀をなぶりまくって最低男の烙印を押されたがって消えていったのかが謎なままだ。評議連中も立村登場の最初の頃は胡散臭げな顔をしていたはずなのだが。

「お前さんにはもうしばらくやっかいかけることになると思うが、堪忍な」

天羽は自分の席らしき机に腰掛けた。指をぽきぽき折った後、

「とりあえずはイーブンだ。俺としちゃ最終的には評議の惨敗で終わることも覚悟してたんだが、一応はトドさんの活躍もあって生徒会側の弱みも明らかになったことだし、新井林も生徒会長をあの手この手で手なづけるだろうから、まあハッピーエンドと考えていいんでないかねえ。どう思う、難波？」

「あとで男子評議一同から缶コーヒー三本渡しとこう」

「かなり早いけどホワイトデー用のクッキーもおまけでいいと思うよ」

更科もふくめ、轟への褒美の品を相談している。

「お前も轟がいきなりあんな演説やらかすの、予想してたのか」

「うんにゃ、してなかった。ただ、俺なりには不思議はなかった」

「以下同意」

「俺も」

三羽鳥との会話は全くかみ合わない。貴史としてはもう少しわかりやすく状況を説明してほしいのだが。なんで立村が酔っ払ったがごとく教室に乱入してきたのか、立村の言い分が結局正しいものだったのか、それからこれからどうするかということとか。轟が単なる出目金出っ歯でない証明よりもそちらを聞きたい。

「一応説明しとくとだ。俺としては今回の生徒会とのバトルにおいて、それなりに決着をつけておきたい問題があった」

貴史の要求をなんとなく感じ取ったのか、天羽はひとつずつ説明を開始した。

「昨日電話したこととも重なるんだが、一点目は立村を合わせて評議男子四人組、全員で参加したいっつうことだな。羽飛にも話したと思うけどなあ、俺は最初っから立村が戦力になるとは全く思ってなかった。これは事実なんだわ」

「よくわかる、それで」

「あいつがE組に籠ちまってから一度挨拶に行って最近の評議委員会の崩壊状況について伝えたら、協力したがってたし、このチャンスを逃したらたぶん立村を委員会に戻すことはできないだろうというのがあったんだわ。まずはそれな」

「それは聞いた、それで」

「ただあいつがなぜ、いきなり一本頭のねじをはずしてふらふら現れたのかは正直俺もよくわからねえ。たぶん、会長さんにつかかっていた内容からすると杉本のことがからんでいたんだろうなあ。あいつはいったん思い込んだら何するかわからないってのは、ほら、羽飛もよく理解してるだろ？ あんな、こんな、そんなで」

貴史より前に、難波と更科が頷いた。

「んで、さっきの話にもどるとだ。俺たちの自業自得な例の事件を生徒会側が槍玉に挙げて自分らに権利を丸呑みさせると主張するのも予想の範疇だった。さらに言うと他の生徒たちをかき集めて生徒会側がいかにな正当な話をしているかを訴えるのも、たぶんあちらさんの目的だろう。会長ひとりで考えたとは思えねえから、キリオの判断だろうがな」

霧島ゆいの弟を挙げた。

「あのギャラリー内に三年は混じってない。っつうことは卒業する奴は用なし。今回の会議の焦点は、今後、二年以下の連中に向かって委員会よりも生徒会の方が圧倒的に位が上であり、今までの無駄な委員会至上主義は俺たち三年が卒業した段階ではいさようなら、というところに落ち着かせたかったんだろ。ま、実際半分は成功してるわな」

天羽は自分で頷きつつ、改めて貴史に向き直った。

「ベビーフェイス正義の味方としての生徒会をアピールしといて、悪玉評議のイメージをたっぷり植えつけたかったんだろが、ありがたいことにそのバランスを立村がうまいやり方でぶち破ってくれた。立村がなんでああいうやり方をしたかったのか最初俺も頭抱えたけどな、奴にとっ

てはあれがベストな方法だったんだろう」

途中で難波が口を挟んだ。

「天羽、どういうことだ、あれがベストってのは」

「まあ聞きなされ。つまり立村は、ああいうやり方で勝負をかけるほうが向いてる性格だったっつうことよの。上に立ってえらそうに命令しまくってど響感買うよりも、ああいった飛び道具としてちょこまか動く立場の方がずっと性にあってたっつうことだよな」

「どういうことだあ？」

今度は貴史も叫んだ。

「あいつの一番いい使い方ってのは、つまり、泥かぶってピエロになってさいならっていうそれか」

「お前親友にそりゃねえだろ。ま、まんざら外れてねえけどな」

天羽は笑い、膝を打った。

「トドさんが援護射撃してくれたし、立村が評議委員長やってくれたってのはすべて悪いことばっかじゃねえ。ただ、本来は上に立つよか、裏でトップ連中が動いている中をこまめにチェックして面倒みるような裏方タイプの性格だったんだろうなあ」

「天羽の言いたいことはよくわかる」

難波はめがねを顔にぴたりと合わせ、貴史に向かった。

「俺も前からお前に言ってただろ。つまりそういうことだ。立村が本来いるべきポジションがいゆる縁の下の力持ち的ところだってとこをだ。憶測だがあいつはたぶん、評議委員会最後に、自分に一番ふさわしいやり方で会議を引っ掻き回し、最後は天羽と新井林に花を持たせるべく姿を消すよう演出していったんだ」

「そうだねホームズ。天羽に協力を求められた時から、立村はそのつもりで計画を練っていたのかもね。俺たちは全く聞かせてなかったから仰天したけど、結果としてはオーライだったしさ」

「ん？ ってことはなんだ。あいつ、もしかして、全部計算づくでってことかよ」

「素でやるわけねえだろ、立村の性格三年間見てたらお前さんだってわかるだろが」

天羽はにやにやしながら貴史になおも語りかけた。

「できれば俺たちに予告一言くれえほしかったけど、ま、そういうわけにもいかなかったんだろ。かわいそうなのは清坂ちゃんだが、その辺はあとお前の範疇なんで任せるぞ。うちのマイハニーも清坂ちゃんの悲しみは自分のものとばかりに嘆いているから、その辺よろしゅうに」

近江のことなど知ったことではないが、美里の面倒を見なくてはならないことくらいわかっている。貴史は立ち上がり、ジャンパーを羽織った。

「ん、もう行くのか？ これから学食でなんか食ってかねえ？」

天羽の誘いに首を振った。とてもだが胃が食い物受け付ける気分ではない。

「お前らの事情はよっくわかった。立村が評議委員としてあいつなりに花道を飾ったってのも、それをお前ら評議が全力で受け入れてるってのもわかった。けどなあ、俺は三年D組にあいつをどうやって引き戻して、どうやって卒業式一緒に参列させるかだけが一番の悩みなんだわ。さすがにクラスでトリックスターとしての場所、用意する余裕なんてねえもん、そいじゃな」

それ以上止められなかった。天羽が、
「それじゃ、また明日詳しい話聞かせろよな。清坂ちゃんによろしく」
声をかけてきて、残りのふたりが軽く手を挙げたのに答えただけだった。

とてもだが、評議連中の思考にはついていけなかった。

天羽は確かに賢いし、難波も更科も、また轟を始めとする女子陣も兵ばかりということだけはよくわかる。だが、貴史の居場所ではなかった。立村の意味不明な言動を素直に受け入れ満足している姿に、今はまだなじめそうになかった。

——俺はまだ、すべきことが山のようにあるわけなんだけどなあ。ったくのんきだぜ。それにしても美里の奴、どこ行っちゃったんだろう？ 先に帰ったのかよ。

天羽の言う通り、すっかり雪が積もり空も薄暗くなってきていた。

「貴史、みさっちゃんから電話よ」

家に帰り夕飯をかつくらい、部屋でごろついているところへ母から呼び出された。美里から電話が来るであろうことは予想していたので驚かない。お待ちかねという奴だ。

「おい、どうした、先に帰っちゃったのかよ」

——貴史、電話の側に誰がいる？

開口一番人払いを求められるときた。ぐるりと見渡して見る。母は洗物、姉は自分の部屋、とりあえず話を潜めることは出来る状態ではある。

「まあ、大丈夫だ。どうした」

——あのね、要点だけ言うね。

美里のほうは声がやたらと小さい。人払いできていないようすと伺えた。

「早く言えよ」

——明日、たぶん立村くん、D組に来るよ。

かすめるような小さな声だが、貴史の耳にははっきりと聞き取れた。

「おい、今なんて言った」

——あんたが聞いた通りよ。あの後、直接捕まえて、話すべきこと話して、それで結論出してもらったから。あの人が約束破らない人だから、来るよ、絶対。

信じがたい。いや信じられなかった。

どう考えても無理としか思えない話だろう。

美里があの後どうやって立村を捕まえたのか、チンピラ語で啖呵切られたりしなかったのか、どうやって説得したのか、全く想像がつかない。そもそも居場所をどうやって突き止めたのか、そこから謎だ。

「お前の話飛びすぎてるんで俺もついていけねえんだけどな、つまりあいつと話をつけて、E組からD組に戻るって言い出したのか？」

——詳しいことはまた明日の朝話すけど、取り急ぎあんたに頼みたいの。

「なんだよ、早く言っちゃまえ」

もごもごした口調からすると、おそらく美里も親か姉妹かに聞かれたくないのだろう。

——クラスの男子たちに伝えてくれる？ 明日もし立村くんが来ても、余計なこと何にも言わないで、そのままなんでもないって風に迎えてちょうだいって。私も女子たちに言っとくから。問い詰めないで、ただ存在しないかのように流して迎えてあげてほしいの。

「流すってつまりあれか、シカトしろってことか」

——そう。言い方露骨だけどその通り。

美里はあっさり認めた。そのまま声を潜めたまま、

——私たちが最初、全力で迎えようとしたじゃない？ あれがまずかったんだよ、きっと。いるかいないかわからないくらいにひっそりと、かえって無視するくらいの扱いでちょうどいいんだよ、あの人には。私、菱本先生にも電話かけておくけど、空気みたいに無視してあげるのが一番だと思うよ。それが、向こうの望んでいることなんだって、今日、よっくわかったから。それに。

「なんだよ」

口ごもるような気配あり、そのあとゆっくりと、

——今、それで十分いけちゃってるじゃない？ あんたがリーダーやってから、ほんっとクラスまとまってるし、あの人が無理に何かしなくてもいい雰囲気じゃない？ あんたが普通に評議のすることしてくれれば、誰も余計なちょっかいかけたりしないと思う。そうすればきっと、卒業式までなんとか持つと思う。たぶんだけど。

「美里、お前いったいあいつと何話した」

——いろいろとね。

短い答えのみ。

「それで説得できたのかよ」

——できた。なんでかわかんないけど。だからこちらも向こうのして欲しがってる状態にクラスを整えればいいのよ。あんたがふつうにしているようにね。あんたも今日の会議見ていてわかったでしょ。あの人はクラスの上に立つ人じゃない、むしろ陰で動く人なんだって。そのの方が私たちも楽だし、向こうもほっとするってこと。いやってほど今日思い知ったじゃないの。

「天羽も難波も似たようなこと言ってたな」

——それが今の評議委員会の共通認識なんだからしょうがないよ。もう、無駄なことはすることやめようよ。

美里はそこまで話したあと、「それじゃ、明日ね」と電話を切った。聞き耳立てられているから下手なこと言えないのだろう。会話の中で立村の名前を口にしたのは一回のみだった。

直接電話してやろうか、一瞬そんなことを思った。

しかし思いとどまった。

——美里が説得できたってことは、よっぼどのなんかがあるんだろな。

それがどんなものか確認するには、明日、できるだけ早く美里を捕まえて詳細を聞き出すし

かない。今日は少なくとも、いつぞやの評議委員長選の日のようなことはなく結論が出たらすぐ貴史に報告してきたのだから、その辺は褒めて遣わそう。

——けどなあ、おっぽっとくのか？ できるのか、それ？ それに本当にあいつ、D組に来るのか？ 美里の思い込みなんてこたあないのか？

少しだけ迷ったが、次の瞬間貴史は受話器を握り締め、クラス名簿の男子列電話番号をあ行から一気に回し始めた。考えている暇なんぞない。評議委員の連中が盛り上がっているのだから、あいつのお膝元である三年D組内でもそれなりの祭りがなくてはならない。貴史がクラスの代表である限り、あの会議を踏まえた状態で何もしないままというのだけは許されない。とにかく、美里の言う通りに動くことに決めた。

——立村は一回約束したことは、破らないか。

説得力は確かにある言葉だった。

本当は次の朝、美里を捕まえてじっくり話をした後学校に向かいたかったのだが、昨日の壮絶な生徒会VS評議委員会バトルを目の当たりにしたせいかわれがどっと出てしまい、思い切り寝坊してしまった。遅刻覚悟で自転車に乗ろうとしたらたまたま遅番だった父の車に乗せてもらえてなんとかいつもの時間通り学校に駆け込むことができた。

——まじあせったわな。最後の最後でやらかしちまうとこだったとはなあ。

それでもいつもの顔して教室に向かう。時間の余裕はあるのだが美里を探して捕まえて話をするだけのゆとりはない。

「貴史遅かったね」

「寝坊しちまった」

「全く肝心要の時にね」

嫌味をちくっと言われたが言い返せやしない。貴史は金沢をはじめとする男子連中に挨拶しながら席についた。ちょこちょこと水口が近づいてくる。

「どうした、すい」

「さっき清坂から聞いたけど、立村が来るかもってまじ？」

聞きつけた金沢も、たまたま通りがかった近衛も、国枝も、須崎も、その言葉にみな引き寄せられるように集まってきた。

「あいつ、んなこと言ってたか」

「女子たちにそう言ってたよ」

——ってことは、女子らにも言ってるつつうわけだな。

貴史がすやすや夢の国でうなされている間に、美里は女子たちへの手回しを終えていたということになる。ちらりと背後を確認してみると、確かに美里はあちらこちら女子ひとりひとりに向かいいろいろと説明をしている様子だ。声は聞こえない。さすがに潜めているようだ。いつ立村が現れるかわからないというリスクも頭にあるのだろう。

「どういうことかよくわかんねえんだけど」

背の高い近衛が腰をかがめて貴史に問う。

「昨日、生徒会と評議同士の公開会議があったって後輩連中から聞いたんだけどそれが関係してるのか？」

放送委員会出身の須崎がきりっとした発音で尋ねる。

「来てもらえれば、絵の手直しらくなんだけどなあ」

きわめて脳天気につぶやく金沢がいる。

——昨日のことをこいつらにすべて暴露すべきなんだろうかなあ。

貴史にとっても判断に悩む。昨夜はそんなこと考えたくなくてさっさと寝入ってしまったのだが、目の前でいろいろ問われるとすぐ判断を下さねばならない現実には頭が痛くなる。

——あの何様気取りの非常識野郎ぶりを暴露したら、ま、こいつらの立村を見る目は思いきし

悪い方に偏るだろうし、そんなことになっちゃったら卒業式はぼろぼろだしなあ。

迷う。可愛い生徒会長にチンピラ口調で文句をつけつつ、会議をひっくり返しておっぱらわれたあいつの姿が本当に演技なのか。貴史は百パーセント演技だと信じているが、あのキャラクターをこしらえたままで教室に来られたら怖い。免疫のない哀れな三年D組男子の卒倒振りを想像するのも恐ろしい。

——まったく、なんで今朝に限って寝坊しちゃったんだろ。美里もこっちで手伝えよ。

そんな都合のいい話があるわけもなく、貴史は腹を決めた。

——じゃあねえ、俺のやり方で押し通すとすっか！

「あのな、俺も正直わからねえ。ただ、立村なりにこのままではまずいということも考えてるらしい、とはちらと聞いている」

「教室に戻ってこないとまずいってことか」

「そうだ。やっぱ、あれだろ、あいつも出席日数とか、高校に進学してからの授業の問題とかいろいろあるだろ。そのこともあって現実問題、なんらかの形でD組の教室で過ごさねばならねえということは考えてるらしいんだ」

「けど、菱本先生は」

言いかけた水口を抑えた。だまらっしゃい。

「俺もまあ、昨日ちらっとあいつとしゃべったけど、なんとかしねばなんねえって気持ちがあることは確認した。あいつのことだから露骨に反省したとかなんとか言ったわけじゃねえけど、一応美里がそれなりに意思を確認したみたいだからたぶんほんとだろ。けどな」

ここで美里の話していたことを思い出す。

——放っておけっつうことか。

しょうがないやるしかない。貴史は平静を装った。ポーズとしては膝を組み替えて少しだけ前かがみになってみる。偉そうに見える。秘密話っぽく見える。

「やっぱし、この前みたくいきなり拍手で迎えようもんならまたあいつびびって逃げちまうじゃねえかと、美里は心配してるんだ。俺じゃねえよ。俺としたら首根っこ捕まえてなんであんなことしたんだとか聞いてえもんな。けどそういうわけいかねえんだったら、まずはあいつがしっかりD組の教室に根付くかどうかを見ようってのが目的なんだ」

「へえ、羽飛は清坂の意見にすべて同意じゃないんだ」

不思議そうにつぶやくのは近衛だった。

「あたりめえだろ。こんな様子見なんて俺の性格にあわねえもん。けど相手が相手だろ。じゃあねえだろ。ってことでだ。俺はしばらく怖い評議の女の言うことを聞くことにする。それはお前らも一緒。次の瞬間立村が現れても、ああいたの、で無視。それで終了。そうしろよ、てなわけ
で解説以上」

「解説になってねえよなあ」

国枝がさっさと立ち上がり、後ろの席でたむろっている南雲たちに話しかけている。今、貴史が話したことをすべて報告しているのだろう。みながそれぞれ席に戻って準備をしようとしてい

たところへ、前の扉が開いた。

一瞬静まり返ったのはたしかにある。

女子たちが背中を向け直したのだけはなんとなく感じた。

貴史だけが視線をちらと向けようとしたが、視界にいた美里に首を振られ、しかたなくノートをめくりなおした。誰かが廊下側の席についている。ずっと二週間以上空白だったその席を埋めている。教室のざわめきもいつもどうりにこね直し、いつのまにか普通のおしゃべりに埋め尽くされている。

いや、ひとりだけ例外がいた。

隣の席ですぐに話しかけている例外女子が。

「悪いけど、ちょっと私の英語のプリント、目、通してくれる？」

——やっぱりあいつかよ。

予想はしていた。こういう予定調和を破る奴の筆頭があいつだ。

立村の隣りに座った古川こずえが、他の連中の気遣いなんぞ無視して一方的に立村へ話しかけている。声をはっきり聞こえる。頭が痛い。

「一応今日提出しなくちゃなんないんだけどさ、英語科進級用の補習用なんだけど。立村が問題ないって言うんだったら、そのまんま出しちゃうつもりなんだけどね、ほら」

わざわざプリントを見せ付けている。いったい美里は自分の親友であるこずえにも口止めしたのだろうか。ここを確認すべきだったのがもうすべて遅し。あとは立村の反応を観察するしかないのだが、露骨に見やれば視線に気づかれてしまうので耳を膨らませて様子伺いするしかない。

貴史の脇をすり抜けていく別の男子あり。完全に指示無視ときた。

「りっちゃん、おはよ。俺も悪いけど、英語の訳、今日あてられてるんだ。見てくんないかなあ」

やはり南雲だった。何も考えていないさわやかな声で挨拶し、英語のノートらしきものを立村の机に開いて載せた。どうやら立村は二人分の英語課題をチェックする羽目に陥っているらしい。いつもなら決して珍しい光景ではない。

——あいつどう答えるんだ？

息を呑む。他の男子連中もちろちら貴史の動きを見守っている。立村にはあえて視線を送らないようにしているようだ。とりあえず貴史のボディランゲージとしては「黙れ」に留めることになる。

小声で立村の声が聞こえる。

「わかった。順番でやってく」

昨日の会議で見たチンピラ風のへらへら声ではない。聞きなれた遠慮がちで静かな声だった。

「いいよ、りっちゃん、ボールペン使って。それの方が俺、見やすいし」

「じゃあそうするよ」

南雲とこずえがしょうもないやり取りをしあって笑っている声も混じる。

「なんか、やらしいよね、まるでさ、ロストバージンの後のおふとんって感じだよねえ」

「俺たちも成長したっすねえ、姐さん。なんてったって、これが初めてのお赤飯ではないってところが、みそっすよねえ」

「実戦経験、ある奴はやっぱり、わかるよねえ、南雲はあんた、やっぱし大人よねえ。立村、あんたも少し見習いな」

立村の発する言葉が混じることはなかった。

まだ五分程度、始業の鐘が鳴るまでに時間がある。

迷いは消えない。

目の前で背中を丸めて南雲、およびこずえの課題チェックに余念のない立村の姿は、貴史が今までつきあってきた友だちとしてのフォームに違いはない。だったらいつものように、

「おい、やっと来たのかよ。ところで俺の分のチェックはねえの？」

くらいかましたい。本当ならそれが自然だ。他の連中も多かれ少なかれなんらかのアクションを起こしたくてならないそぶりが見受けられる。

——本当は俺が行くべきポジションだろうが！

南雲に先手を取られてしまったのが歯がゆいというか苛立つ。かといって昨日の今日だ、あの時の姿を見られた奴がそばにいることが、立村にとってどういうものなのか考えるのも難しい。美里は知らん振りを通してている。ならば貴史も同様に振舞うべきなのか。

——冗談じゃねえよな、悪いが俺は俺のやり方通すしかねえよ。

できるだけ奴を刺激しないように、静かに、そっと近づいてみる。立ち上がると周囲の男子どもが食い入るように貴史を見守るのがわかる。一步、また一步とその背中に近づいてみる。ちらと立村が振り向くようなそぶりを見せた。声をかけようと思った。

できなかった。

「貴史、あんたちょとこっち来なさい」

それまで全く何も言わなかった美里が、きついおっかさんみみたいな言い方で止めに来た。さっさと腕をひっぱり自分の席に貴史を連れて行こうとする。そういえばこいつとはまだ挨拶も交わしていない。むっとくる。歩きながら文句をひとつ。

「なんだよ、お前何もなあそんな腫れ物に」

「だまらっしゃいっての！」

左肩を思い切り叩かれた。仕方なく美里の隣りに座る。席はたまたま空いていた。

「わかったわあった。ったくなんだよなあ」

ちらっと立村の方を見やると、少し驚いたかのようにこちらを伺っているのが分かる。視界に入っていないわけではないということだけ確認が取れた。やれやれだ。天井を見上げた。ため息を天井に思いっきり吐く。

「貴史、あんたねえ、なんで今日に限って寝坊しちゃったのよ。ったくばか！」

「しゃあねえだろ昨日の今日だし」

「私だってあんたに頼みたいこといっぱいあったんだからね！」

美里はふくれっつらでいつものおかつ髪を振り回した。

「あのね、いい、あんたもさっき他の男子に話してくれたからいいんだけど、しばらく立村くんには一切話しかけないでほしいの。女子には昨日徹夜でいっぱい話したから多分大丈夫だと思うんだけど」

「大丈夫じゃあねえだろ、あいつなんなんだ」

こずえを見やる。相変わらず立村をからかっている声が聞こえる。

「なんかねえ、毎日、こうよね。英語科ってたかが英語の点数それなりに取れた奴がいくとこだと思ってたけど、こんな補習地獄に陥るなんてさ、私も思ってなかったよね」

こういったらなんだが、立村が学校から逃げ出す前からこずえの英語科に対する愚痴は全く変わってないような気がする。貴史は美里にこずえを指差し再度尋ねた。

「古川には何も言わなかったのかよ」

「こずえはしょうがないの。立村くんの扱い方一番よくわかってるのこずえだから。けどあんたと私はだめ、ぜーっただめなの。いい？ 昨日、すっかりはっちゃけちゃった立村くんを見た三年D組の生徒は、私たちふたりだけなんだからね」

「ああ、そういえば」

意識していなかったのだが、確かにあの場にいた三年D組関係者は幸か不幸か自分らのみだった。

「けど噂ではばれるだろ、とっくにばれてるんじゃないか？」

「リアルでは見てないんだってば。だからまだ大丈夫。今は少なくともね。とにかく今言えることは、立村くんこれ以上刺激を与えないようにしようってこと」

「美里、一番大事なこと確認してえんだが、いいか？」

「なんなりどうぞ」

一番刺激的な相手にはどういう案内をしたのだろうか。貴史が口を開きかけたところで美里は声を抑えてささやいた。

「菱本先生のこと言ってるんだったらとっくに対策済みよ。まあ見ててよ」

三年D組評議委員の誇りからか、自信たっぷりに美里は言い放った。

タイミングぴったり。同時に当の本人、菱本先生が元気よく扉を開け放って登場した。プリントの束を大量に抱え、相変わらず暑苦しく飛び込んできた。ばらばらに座っていた生徒たちおよび貴史もすぐマイホームポジションに戻りおとなしく待つ。

——ほんとに菱本先生に話したのかよ。ん？ まさか先生立村いること、気づいてねえの？

いつもなら、廊下の先頭席に人影がいることに気づかないわけがない。あの菱本先生のことだ、すぐに「おい？ 立村、もしかして来てたのか！ よかった、よくぞ決心してくれた！」とか騒ぎそうなものなのに、全くもって空気の状態で教壇に立っている。

——もしかしてまだ、菱本先生、寝ちまってる？

さすがにこの元気で寝ているとは思えないが、そうと考えるとあまりにも不自然だった。菱

本先生は急ぎばやに教壇に立ち、

「じゃあ、号令」

息を整えつつ促した。誰にかはもちろん、分かっている。すぐに貴史はいつもの通り号令を発した。

「起立、礼、着席」

立村は何事もないかのように立ち上がり一礼し、すぐに席についた。他の奴らのようにいいかげんではなく、折り目正しい礼の仕方だった。浮いているところはあるが、それも貴史は嫌いではなかった。

席につき、教室が静まった。菱本先生はちらりと立村を見た。確認した。出席を改めて取ろうとはせず、

「今日は全員揃ってるな。よし」

それだけを静かに口にした。

三年D組の教室に空白が消えた。

卒業式まで、一ヶ月を切っていた。

——第三部 完（第四部続く）

すでに立村の面倒を見るのはこずえと南雲に任せていた。立村が戻ってきてから一週間近く経つが、貴史も美里もまだ一度もまともに話をしていない。

「しょうがないよね」

貴史も何度かいいタイミングを狙っていたのだが、大抵美里に阻止された。

「あなたの気持ちもわかるけど、今のところは黙ってたほうがいいよ」

「けどなあ、あと二週間もねえだろ、卒業式どうするんだよ」

「だから、卒業式まであと二週間あるって考えなよ。あなたのお得意でしょうが」

放課後、菱本先生にまた呼び出しをくらい美里とふたり、生徒相談室で待ち受けていた。特段何も悪いことはしていないので、以前のように心臓跳ね上がる思いをしないですむ。ただ最近はおふたりとも常連になりつつあるのが気がかりではある。

「卒業式が終わってもどうせ私たち三人ともおんなじ高校に行くんだし、向こうは黙ってても英語科だし、保母さんとしてこずえもセットでついてくるし、何も心配することないのよ」

「保母さんって言い方するかよ。まあ古川ならあいつをうまく手のひらで転がせそうだなあ」

菱本先生の「あと二ヶ月」が「あと一ヶ月」に、そしてとうとう「あと二週間」。

最低ラインのミッションは果たせたとは思う。

「立村くんを教室に戻せただけでも御の字じゃないの。とりあえずはクラスのみんなも余計なこと言わずに様子見ですんでるし、立村くんは立村くんできひとり好き勝手に過ごしてるし、平和な生活が続いているんだから、贅沢言わないの」

「けど、卒業式のあとはどうするんだよ」

貴史はソファーにどっかり腰まで浸かり、手と足を思い切り伸ばした。本当だったら横になりたいところだが、いつ菱本先生が現れるか分からないのでさすがにそれは控える。

「わかんない。けどしょうがないじゃない」

投げやりな美里の言い方がひっかかる。コートを脇に置き、きっちりそろえたおかつ髪を指で整えている。

「今私たちに何できる？ またおんなじこと繰り返して露骨に逃げられるなんて絶対やじゃない。とりあえず委員会にはもう関わらなくてもよさそうだし、あと評議でやることったらせいぜい、あれじゃない？ 卒業式授与の時のイベントと、さよならパーティくらいでしょ。それなら私たちでできるじゃない」

「あっそっか。そろそろやんねばな」

頭を切り替えた。貴史としてもひとつ、イベントとして考えていることがあったのだ。

「美里、んで例のあれなんだがな、本当に、『あれ』で行くか？」

「ああ、『あれ』ね」

即、頷いた。

「いいよ。けど前もって練習させてもらえるよね。貴史の顔で『あれ』貸してもらえるんだよね。当日になってなしなんてやだからね」

「昨日、町会館行ってきてOKもらってきた。お前の方こそ、重たいからやだとか高所恐怖症だからやめるとかわけわからねえこと言うんじゃないぞ。どつくからな」

「まさか。私、高いところ好きだし絶叫系のもの得意だってあんた知ってるじゃないの」

「なんとかは高いところが好きというからな」

言い終わる前にかばんで後頭部を思い切りぶん殴られた。自業自得。仕返しはしない。嗚呼。

三月に入り、卒業式の練習がそろそろ始まる時期となる。

この時までには立村をE組から連れ戻したかったので、美里の言う通り最低ラインのミッションは果たしたことになる。菱本先生からも後からお褒めの言葉をいただいた。ついでにオレンジスカッシュもご褒美にもらえたのがかなりうれしかった。

実際立村引き戻しの決定打となったのは美里の裏廻りだったので、貴史も素直に「どーだ！」と威張れないところも正直ある。また美里も、立村と具体的にどんな会話を交わしたかまでは詳しく教えてくれなかった。曲りなりにもふたりは「元・彼氏と彼女」なのだからそれなりのいろいろな言葉が混じっているのだろう。あえてそのあたりを追求しようとは思わない。

「それにしても先生遅いね」

時計はそろそろ四時を回るところだった。まだ雪がたんまり積もった枝が覗いている。それでも陽の光が淡く射してくるのは春の気配だろうか。一ヶ月前と比較して部屋のぬくもりがなんとなく違う。

「少し時間かかるかも知れねえけど待ってろよって言ってただろ」

「そんなこと言ってたね。卒業式の準備でそろそろ忙しくなるのにね。式典の練習とか明日からだけ」

指を折って数えて見る。土日抜かすともうそれほど時間がない。

「けどさ、卒業式だってのに、ずいぶんあっさりしたもんだよな」

天井を見上げてまた伸びをする。美里に額を叩かれる。

「全然別れで涙涙るのがねえでやんの」

「当たり前よ。みな持ち上がりだし。あ、でも」

口ごもる美里を最後までしゃべらせたい。促した。

「言いかけたことあれば言えよな」

「もう会えない子もいることはいるんだよね」

たとえば、と続けた。

「小春ちゃんとか、ゆいちゃんとか、彰子ちゃんとか」

——確かに会えねえな。

その通りだと気づく。一応は青大附中の生徒はみな持ち上がりで高校進学を果たすはずなのだがさまざまな事件や学業成績のからみ、また将来の進路の影響もあって何人かの生徒は別の学校に進む。

「奈良岡はとにかくとして、あとのふたりはなあ」

「そうね。自分で望んでじゃないからね。特に小春ちゃんは、たぶん卒業式に来ないって言って

たし。向こうの中学に転校したような扱いするみたい」

「向こうって、あの」

「そう、片岡くんっているでしょ。あの子のつながりで転校先決まって、今はそっちに住んでるんだって」

詳しい事情は天羽から若干は聞いているが、あくまでも事件そのもののこと。西月小春の進路については美里から途切れ途切りに耳にするのみ。

「たぶん、高校進学は今年無理だから、受験するとしたら来年になるんだろうね。学校側としては警察沙汰にたくないからこういう形をとったらしいけどね。でも、小春ちゃんどうするんだろう」

「お前が心配したってしゃあねえだろが」

美里が心配すべき問題は他のクラスの連中のことではないような気がする。

「けど遅すぎるよね。ちょっと呼びに行ってみよっか」

立ち上がった美里に貴史も続いた。もう三十分近く経っているのだから当然だろう。もしかしたら疲れ果てた菱本先生が机の上でへばっているかもしれない。その際は思い切り手を耳元で打って起こしてやる必要がある。

「いるとしたら職員室かな」

「あとは体育館とかあのあたりだな。また変な事件起こってなければいいがな」

「あ、メモ、残しとく」

かばんからノートを取り出し、一枚破いた。ピンクの蛍光ペンで、

——すぐ戻ってきます。清坂 羽飛

と書き添えた。そのままぺたんとガラステーブルに置いた。

「あのな美里、俺の苗字はまっピンクで書くってのはどうよ」

「じゃああんた付け足す？ 悪いけど鉛筆貸さないよ」

「どけち女」

面倒なのであえてやめておき、廊下に出た。だいぶ人は少なくなったとはいえ、音楽室方面で吹奏楽の練習が聞こえたりしてくる。学校内はまだにぎやかだ。

視聴覚教室の前で立ち止まった。後ろ側の扉から覗き込もうとしている輩がひとり。

「おい、あれ」

「ほんとだ」

顔を見合わせる。誰とも聞かなくてもわかる。わかりやす過ぎる。ドアノブを握り入るべきかどうかを迷っているのが見え見えのその人物に近づき、声をかけた。

「先生、どうしたの」

ぎょっとした顔で先生……菱本先生がふたりに振り返った。ばつが悪そうな顔でドアノブをはずし、こくっと頭を下げた。

「悪いことはできないもんだな。わかった、待ってる、行くから」

——何が悪いんだかわからねえけど、まあいっか。

美里も不思議そうな顔をして貴史に共感を請うような目で見ると、わからないことばかりだ。まあどちらにせよ、生徒相談室にもぐりこめば詳しい話も聞くことができるだろう。

生徒相談室の扉を閉じて三人所定の席に座り、大きく息を吐いた。

「先生遅すぎるから迎えに行ったんだけど、まさかなあ、のぞきしてるとはなあ」

「人聞き悪いこと言うな。遅刻したのは俺が悪いが、大人に失礼だぞ、名誉毀損っていうんだそういうの」

本気で怒りそうな気配だったので慌てて黙る。美里にも肘でつつかれる。

「けど先生、なんかまたあったのかよ、いきなりここに呼び出すなんてさ。それも美里とふたりなんてなあ」

「また、クラスのことで確認したこととか、あるんですか」

美里とふたり、気持ちを切り替えて尋ねた。ここしばらく教室内で片づく内容の出来事ですが、生徒相談室に呼び出されるとなるとそれはいろいろ面倒な予感がする。菱本先生もいつものパターンで冷蔵庫から珈琲缶を三本取り出した。

「甘いもんがないが、お前ら珈琲味、いけるか」

「OKです！」

声をそろえてありがたくいただく。部屋が暖かいせいか喉が渴いてきた。タイミングよし。すぐにプルトップはがして一気に飲んだ。甘い珈琲だった。

「こうやってお前らとまじめなんだかアホなんだかわからないやり取りをするのも、あと二週間だよなあ」

しみじみ、缶コーヒーを飲みながら菱本先生もつぶやく。髪の毛がだいぶ伸びてきているせいで、前髪が目にかかって邪魔くさそうだ。何度もかき上げた。

「いい機会だし、ここでじっくり最終コーナー突入の相談をしたいと思ってな」

ほのぼのとした笑顔を浮かべ、菱本先生はふたりに語りかけ始めた。またいつものあったかいお説教の予感がするが、缶コーヒー一本くらいの愛想は振りまく余裕がある。

「個人個人には伝えたつもりだったんだが、ここで改めてだ。羽飛、清坂。立村の件では本当によくやってくれた。ありがとう。三年D組の担任として改めて礼を言う」

「いってことよ。ジュース一本もらったし十分礼はしてもらってるって」

貴史があしらうと、美里が目を吊り上げた。

「私もらってない！ ずるい貴史！」

「悪い悪い、清坂にもここでもう一本渡すからそう怒るな」

「本気で怒ってるわけじゃないですからいいですけど」

とか言いながら、冷蔵庫から紅茶缶を渡すと美里のご機嫌も少しは癒えたようだった。

「とにかくだ、お前ら幼馴染コンビの大活躍もあって、無事三年D組もラストの卒業式に向けて突っ走れそうなところまで来た。本当に立村の件ではよくぞ説得できたな」

美里の様子を伺う。もちろん詳しいことを話すつもりなんてないだろう。

「まあタイミングって奴。たまたま評議と生徒会との会議があったから、最後の最後だし出たらどうかって勧めたのが俺、クラスに戻って説得したのが美里の二段攻撃」

「見事な関係プレーだな」

「けど、あいつ相変わらずあのまんまだけど、さすがに昔みたいになじめっていうのは時間ねえよ。俺なりにそこらへんは白旗揚げとく。でも、クラス全員欠けることなく卒業式に参列できるのは、まあいいかなってとこじゃねえ？」

「そうだな、それがなによりだ」

菱本先生は何度も頷いた。両手をもみしだいた。

「私もそう思います。もちろん、まだしっくりこないところは正直ありますけど、立村くんについては古川さんとか南雲くんとかがフォローしてくれてますし、クラスのみんなもよけいなちょっかい出さないうですし。私たちがまんしてますし」

「お前らとしたら歯がゆいだろうがな」

——もちろんそうだけどな。

言葉を飲み込む。本当はすっきりしじゃない。

「ただ俺も、ひとり最後の最後まで教室から離脱した状態で卒業式を迎えるのは嫌だったんだ。三年間一緒にがんばってきた仲間じゃないか。誰が欠けてもD組じゃない。いろいろ出来ないことはたくさんあったけれども、少なくとも仲間でいられたことは誇りに思えるよな」

——あいつが仲間と思ってるかどうかは、別だけどな。

廊下がわやわやしてきた。菱本先生が戸口を見て立ち上がった。

「悪い、すぐ戻るから逃げるなよ」

あわただしく飛び出し廊下を走り出した。貴史も美里もすぐに外を覗いた。

「どうしたんだろ、落ち着かないね」

「いや、なんかあるんだろが」

さっきから気にかかる。菱本先生の性格上、用事があるのに後ろ側の扉の前で迷うなんてことはまずありえなかった。いつも正々堂々と覗き込みにいくはずなのだが、視聴覚教室前での言動がどうもらしくなかった。

「美里、ほら、あれ見ろ」

そのまま扉に張り付いたまま、貴史は美里に伝えた。美里も貴史の前から顔を覗かせてじっくり観察している。すぐに気づいたらしく、貴史の顔を見上げた。

「もしかして」

「そだな」

短くやり取りし、そのまま身動きせずにいた。

視聴覚教室の前後扉が開いたまま、大勢の先生方らしき人々が挨拶をしながら現れた。やたらと和やかな雰囲気だが青大附中の教室内では見かけない顔ぶればかりだった。たいてい中学の先生たちはみな顔を見知っているはずなのだが。

「ねえ、だれだろ、あれ」

「知らねえよ」

わかるわけがない。わかるのは菱本先生がその中の一人で、髪の毛が真っ白い男性を捕まえてひたすらぺこぺこ頭を下げているところだけだった。そのうち何名かの関係者らしき人が菱本先生にまた挨拶をし、男性のひとりが握手を求めている。

「なんか怪しい雰囲気だな。選挙活動してるみたいだぞ」

「あんたしたことあったっけ」

「ねえよ。けど、あんな感じだろ」

菱本先生がまた、別の男性を捕まえて頭をしきりに下げている。なんだかずいぶん腰が低い。ただ相手も遠めから見ると感じがよさそうで、ほとんどが笑顔だった。

「早く引っ込もうよ。さすがに近づいて聞き出すわけいけないじゃない」

「いい、ここで聞き出すだけだしな」

「たいしたことじゃないと思うよ。それにしても先生って大変な仕事なんだね。人に頭を下げて、親にも頭を下げて。私、先生にはなりたくないな」

「生徒には威張れるぞ」

「まさか、それはないよ」

しばらく軽口を叩いているうちに、当の本人、菱本先生がさっぱりした笑顔で戻ってきた。ふたりを見下ろし、

「どうせお前ら見てただろ」

いたずらっぽくつぶやいた。

「ごめんなさい、どうしても気になって」

美里がしおらしく謝ったのを無視して、貴史は切り出した。

「視聴覚教室で今、何かやってたんか」

「ああ、実はそれもお前らに伝えるつもりだったんだ」

座りなおし、自分の分の珈琲缶をもう一度口につけ、菱本先生は正面から答えた。

「さっきまで、立村の英語答辞のリハーサルが行われていたんだ」

あっけにとられて何も言えなかった。美里が震える声で、

「ということは、立村くん、さっきまで視聴覚教室にいたんですか？」

「ああ、たぶんいたはずだ。ただあいつが一通り披露した後で先に帰ったらしいから、今はもういないはずだ」

「先生、なんだよそのリハーサルつつうの」

「実はな」

菱本先生は額の汗をハンカチでぬぐった。

「卒業式で立村が英語答辞を読み上げるのは知っているな」

「知ってますけど」

「今回は学校の意向もあって、正式な答辞の英語バージョンをこしらえてそれを読み上げてもらう形にしたんだ。さすがに一から文章を書くのはあいつにも荷が重いだろうということだな。そ

れで今日、高校と大学の英文科の先生たちにご足労いただいて、一通りご指導いただくということになったんだ」

「それすごくねえ？ 先生、ってことは、立村ひとりのためにあれだけたくさんの先生方が集まって、あいつのぺらぺら英語をあーでもないこーでもないって追求しまくったって奴か？」

美里が呆然としたままでのいいことに、貴史は質問をぶちかました。

「大まかにいうとそういうことになる。卒業式となると大イベントだしたくさんの人たちに聴いてもらうことになるわけだから、それぞれ力も入る。立村も前から指導を受けている先生にいろいろ見てもらったようだが、やはり自分とつながりの薄い人たちの前で披露するのは緊張するだろう。いい機会だったと思う」

「あ、でも先生。立村くん先に帰っちゃったんですか？」

さらに美里が尋ねる。菱本先生は頷いた。

「俺も本当だったら、立村を捕まえたかったんだがな。先生たち同士でいろいろと議論を交わす時間の方が長かったらしい。立村本人は早いうちに発表を終えてもう下校したはずだ」

残念そうな顔でため息をつく菱本先生に、突然美里がとがった声で詰問した。

「先生、もしかして、この機会に立村くんを捕まえて、この部屋に連れ込むつもりだったんですか？」

「おい、連れ込むってのは外聞き悪いぞ」

あわてる菱本先生にさらに追求をする美里。目が釣りあがっている。さっきのジュースの件のレベルではない。危険だ。貴史はさりげなく座っている尻の位置をずらした。

「先生、あれだけ私、言ったでしょ！ 立村くんを卒業式までできるだけそおとしてあげてほしいって！ 今、私も貴史も、腫れ物に触るようにそおと扱っているからなんとか無事に過ごしていただけるんですよ。もしこんなところで三人顔を合わせて、また立村くんがいじけちゃったらどうするんですか！ もう、失敗してくれてほんっとよかった！」

「清坂、確かにお前が立村のことを心配しているのはわかるんだがな、だがこのままだとあと二週間しか」

言いかけた菱本先生に、ぴしゃりと言い返した。

「その二週間が大切なんだってことなんです！ 私たち生徒がどんなに神経使ってるかわかってないでしょ先生！ こんなだったら奥さんにも赤ちゃんにも嫌われますよ！」

菱本先生の結婚出産事情を知らないだろうに、美里の言葉はきつい一撃だったに違いない。菱本先生は必死に両手を合わせて、

「ごめん、怒るな清坂、俺の先走りだ。そう怒るな、な、羽飛、なだめてやってくれ！」

すぎるような眼差しを貴史に送ってきた。

こういう時は正統派で行くしかないというのを貴史はよく知っている。やんわり美里に告げた。

「美里、とりあえず立村いねえし、菱本先生が何したいか教えてもらうほうが優先じゃねえ？ 俺もお前の考え基本的に賛成だし、菱本先生も反省してるし、ま、先に行こうぜ先に」

——菱本先生、まだ、クラス一丸をあきらめてねえんだな。

美里がぶち切れるのも無理はない。立村がもどってきてからの二週間近くの間、どれだけふたりが様子见到徹してきたか、どれだけ気を遣ってきたか口では言い表せない。何よりも一切声をかけないと決めたこと自体がきついことだとわかっているのだろうか。

「なんかケーキか何か用意しとけばよかったなあ」

「そういう問題じゃありません！」

なんだか菱本先生も本当の意味で現状を理解していないような気がするが、貴史なりに話を進めていくことにした。

「今日こういう形で先生、立村を連れ込むつもりだったのはやはり、このまま卒業って形だとすっきりしねえよってのがあったんだろ？」

まだ沸騰した血の滾りが納まっていないらしい美里の様子を伺いつつ、貴史は尋ねた。

「そうだな。確かに今の段階では三Dに波風は立っていないしこのままでいいと言われればそれまでなんだ」

「そうですよ！ 私たちだって思うとこいっぱいありますけどそれでも黙ってるんですから！」

「美里黙れ。それでさ、とりあえずは立村がおとなしく教室で過ごしているだけだとまずいと思うのはなんでだろかな。俺も最初かなり頭抱えたけど、なんせ高校進学ってのもあるからそこから始めてもいいかなっつう気、するんだ」

貴史なりの考えを述べた。

「人間関係いろいろあるっちゃいろいろあるしなあ。それに俺もこの前評議と生徒会の激突会議に出たけど、やはりあの環境でやってくのって立村にとってはかなりしんどかったと思うなあ。やっぱり、完全に引退した以上自由に過ごさせてやるのもひとつかなと思いつつあるこの頃なんだよな」

美里も貴史をちらりと見て頷いた。あの会議の内容と三年間の年月を掛け算すると立村の性格上かなりの負担になっていたことは想像がつく。やはり早い段階で天羽に丸投げしたほうがよかったんじゃないだろうか。最後まで奴なりの努力はしていたけれども、結局自分にはプラスの形で戻ってこないまま終わっている。評議委員会側としては生徒会との戦いがイーブンに終わり満足なのかもしれないが、立村は「出来損ないの元評議委員長」の烙印を押されたまま地味に過ごさざるを得ない。

「お前ら大人だなあ」

「あたりまえじゃないですか。先生がこうなんだから、もう」

ふくれっつらの美里を無視し、貴史は続けた。

「じゃあなんで、このままだとまずいって思うわけなんだろ。俺知りたいのはそこなんだけど」

菱本先生は大きくため息をついた。

「お前らふたりが一生懸命立村のことを思って無事卒業式を迎えさせたいと考えているのはわか

った。一応決まったところから言っとくと、立村は英語答辞を担当することになるので卒業式において評議としての行動をしてもらう必要はなくなった。そのことがどういうことかわかるか」

「よっくわからねえ」

「もっとわかりやすく言ってください！」

いらただしげに美里がつついた。

「卒業式の準備のことですか？ 立村くんは確かに英語答辞担当ですから卒業証書授与の代表になる必要はないかもしれませんがそれは私たちも予想して準備してます」

「おい言うなよ」

美里を押さえる。せっかくこの件は内密に進めているのだから、できれば隠しておきたい。

「なんだ？ またふたりで怪しげな計画立ててるのか？」

「そんなわけじゃねえよ先生」

すぐにまぜっかえしごまかすことにした。

「ほら、去年の卒業式すごかったろ？ 本条先輩のオンステージ。今年は本条先輩みたいな華やかなことやらかす輩いねえし、それだったら受け取る代表同士で何か笑えることやろうかって話」

「ああ去年はすごかった。本条の持っている華ってのはそうそうないもんなあ」

貴史が覚えているのは、卒業式終了後本条先輩にべったりくっついて立村と、次の日貴史に向かって本条先輩のパフォーマンスの素晴らしさを……奴については珍しく……熱く語り続け称えていた姿である。あそこまで狂信的だとかえってまずいんじゃないかとか正直思ったが、立村に本条先輩を否定することは人間関係の崩壊に即つながらることも承知していたのであえて何も言わなかった。

「立村くんにはその担当の割り振り伝えてます？」

美里が尋ねた。

「私、先生がとっくの昔にそういうこと片付けていると思ってたんですけど、まさか知らないなんてことないでしょうね」

菱本先生は黙った。なんだかよくない予感がひしひしとする。

「まさかと思えますけど、今日ここに私たちを集めたのって、立村くんにそのことを伝えて納得させるためなんて言わないでしょうね？」

「清坂、悪い。その通りだ」

意外にもあっさり菱本先生はシャッポを脱いだ。

「今日の目的を簡潔にまとめるとだ。立村を含めてこれから先、卒業式に向けての俺の姿勢を伝えたかったんだ」

「なんだろその姿勢って」

貴史も口を挟む。

「そんなのクラスでやりゃあいいじゃねえの」

「いや、そんなにすぐに受け入れられるものではないだろうな」

菱本先生は缶コーヒーを飲み、心を落ち着けるような眼差しでふたりを見た。

「立村にとっては、この三年間評議委員としてやってきたことをすべて否定されるようなことになるだろうし、ただ俺はそれの方がこれからのために正しいと思うからなんだ」

全くわけがわからない。美里と顔を見合わせた。どちらにせよ面倒なことになりそうだということだけはよくわかった。質問攻め、OK、当然突き進む。

先頭は美里が口を切った。

「また立村くんの傷口に塩もみこむようなことするつもりなんですか？」

「結論としてはそういうことになるだろうな」

またもあっさり菱本先生は認めた。

「また揉めますよ。もういやです。私もあと二週間また面倒くさいことに巻き込まれるの大変です。高校行ってからどうしようかって本気で考えてるってのに！」

「清坂には申し訳ないんだが、もう一肌脱いでもらいたいんだ。いや、変な意味じゃなくてだな」

「わかっています。それより、具体的に何するつもりか教えてください」

——それをしゃべらせねえのがお前だろが。ったく。

つつこみたくなるのをこらえつつ、貴史も頷いた。

「結局、何したいわけ」

「つまり、正式にクラス運営の代表をだ」

言葉のまとまりを不自然に切りながら、菱本先生は答えた。

「羽飛にまかせたい、それを立村に正式に伝えたいんだ」

「あの俺とっくに、クラスの代行だったと思うんだけど」

「違う。まだ表向きは立村が評議委員だ。実際行動しているのが羽飛としてもだ」

菱本先生は両膝を押さえるようにしかがみこみ、貴史に再度伝えた。

「これはいびつな状態だよ。今の立村にはこのクラスの現状をしっかり伝え、これ以上陰に隠れるのであれば正式に羽飛に引導を渡すべきだと言いたいんだ」

「ちょっと待てよ先生、あと卒業まであと二週間しかないだろ？ それなんか違うんじゃないか？」

自分でもあわ食っているのが分かる。さすがにここまで言われたら何も言い返せない。隣りの美里もまた前かがみになり先生に食って掛かっている。当然だ。

「先生、今のことなんですけどつまり、完全に貴史が評議委員であるという前提を立村くんに認めさせろってことなんですか？ 貴史も言った通り、あと二週間ですよ？ 来年もクラスが続くんだったらそれもありかもしれないですけど、なんで卒業式を立村くん評議のまままで通せないんですか？」

「清坂、勘違いするな。俺は立村を評議から無理やり下ろしたいとは言っていない。そもそも無理だ。俺が言いたいのは、クラスの総意で現在羽飛がクラス代行をしているのにも関わらず、外では何もしていない立村が評議のトップ扱いされているという現状に不満を持っているクラスメ

ートがたくさんいるということなんだ」

「男子は別に、なあ？」

特に思い当たる節もない。みな、最初は立村の帰還に戸惑っていたけれども、南雲あたりが普通に接し出したこともあってそれなりに受け入れている。極端にちょっかい出したりする奴がないだけのことだ。となるとまさか、

「女子でまた変なこと言う人がいたんですか！」

また美里がつかかる。

「もしかして玉城さんとかそのあたりですか？ もういい加減にしてほしいんですけど。一度きちんとロングホームルーム二時間たっぷり使って言いたいこと言ったでしょうし、その後で他のクラスに内緒にするって約束したのにあっさり破ってますし。それでも立村くんが戻ってきたからまあいっかって思ってたけど、さらにいじめたがって何考えてるんですか！ほんと頭来る！」

目の前にいるのが担任とは思っていないような口調だった。

「私、この際はっきり言わせてもらいますけど、何でうちのクラスの女子たちは立村くんが目障りなのか全くわかりません。理由はだいたい理解してますけど、あと卒業式まで二週間しかないんですよ。そのくらい我慢して過ごしたっていいじゃないですか。私だってむかつくことないとは言いませんけど、高校行って新規撒き直しニューディール計画って感じで話をもっててもいいじゃないのって思います」

——ニューディール計画かよ。

突っ込みたくなる言葉だが、美里の剣幕に恐れをなして菱本先生も黙ったままだ。

「実質貴史がクラス代表だってことはみんな頭の中でよくわかってるんですからそれでいいじゃないですか。またクラスの評議が卒業式二週間前に代わりましたなんて報告する必要なんてないでしょ。それに、立村くん英語答辞を読むんだからその準備で忙しいし、代わりに貴史と私のふたりが卒業証書授与に行くって流れで問題ないと思います」

——まあそりゃあそうだ。

美里の言う通りだ。立村の英語答辞は、どこぞのおえらい大学の先生たちも集まってああだこうだと指導を入れているくらいなのだから、相当学校側でも力を入れている内容なのだろう。さすがにクラス評議だからといって掛け持ちは難しいという理由が通用するはずだ。そのラインで持っていったどこがいけないのだろうか。

「清坂、お前の言う通りだが、やはりここは感情ってものがあるんだ」

菱本先生はしばらく美里の抗議に聞き入っていたが、ゆっくりと答えた。

「お前の言う通り、立村が戻ってきて、あと二週間で無事卒業式を迎える手はずとなる。これは担任として本当にうれしいことなんだ。だが、三年三学期以降、立村が評議委員としてクラスをまとめたことは一度もない。厳密に言うところの三年間においても評議委員としての手腕は認められたにしてもクラスでは影が薄かった。これは正しいだろうか？」

「この前、よくわかりました」

美里が言い返す。菱本先生は頷いた。

「そうだろう。クラスみんなは立村を飛び越して羽飛をクラスのトップとしてみていた。いや清坂もそうなんだが話の都合上そうしとくな。それもこの前話し合ったことなんだがな。三年D組の全員がそれを納得して受け入れていればそれでもいいとは思う。だが」

缶コーヒーの缶を握り締めた。

「もちろんそれは正しいことなんだが、女子たちの中には『ここまでクラスに尽くしてくれた羽飛に対して何も報いてないのが納得いかない』という声も上がってきている」

「俺もそれなりにやることやったけど、結局三学期だけだろ」

貴史が言い返すと、菱本先生は再び首を振った。

「違う、一年からだ。ずっとだ」

菱本先生は何度か呼吸を整えるようにすーはーすーはーを繰り返した。

「見方はいろいろあるし立村ももちろんクラスに対して貢献しなかったわけではない。だがその一方で最後の最後まで立村はトップとしての仕事をまっとうできなかった。これも俺から見ると事実だ。特に最後の三学期についてはクラスを放棄してE組に逃げ込むといった、ある意味責任放棄のようなことをやらせたわけだからな」

「あいつにとってはそれも精一杯のことだったんじゃないかなと」

「わかっている。俺もそれは十分理解している。ただ、それはあいつをよく理解している羽飛なり清坂なりの思いであって、実際振りまわされたクラスメートたちからすると納得できないんだ。ただでさえクラスに貢献しなかった名目上評議委員が、卒業式にでかい顔してトップで出てきてほしくない。また外に対しても本当は羽飛がトップなのに一応かっこ付きで立村が一番と言わねばならない。そこの違和感が一部の生徒には耐えられないらしいんだよ」

「先生、名前言っちゃってください！ 私、直接話に行きますから！」

美里がまた鼻息荒くつかかる。止めはしないが貴史も話には割り込む。

「あのさ先生、俺もそこまですげえ扱いされてるとは思ってなかったし、そりゃいばりたい気もするけどなあ、けど、もう二週間しかないのにそんな無駄なエネルギー使いたくねえよ」

「お前が使いたくなくても女子の大多数は賛成しているんだ。それと、これはあまり他の人たちに広めないでほしいんだが」

またも余計なことを菱本先生は口走った。

「他の先生たちからも同様の意見を伝えられているんだ。ずっと羽飛が一生懸命活躍しているのになぜ、高い評価を出してやれないのかってな。ここで言う評価とは、いわゆるクラスのトップとしての扱いだ」

とうとう美里が立ち上がった。目は完全につりあがっている。

「先生たちもですか！ いったいなんでそんなに立村くんを嫌うんですか！」

「清坂落ち着け。たのむ聞いてくれ」

「もう十分聞きました！」

拳を握り締め、軽くはあと息をかけている。

「私、しつこいようですけどこいつがクラスのトップになるってことには文句言う気全くありません。周りの評価も否定しません。けどなんで今、なんですか？　こんな時に立村くんをまた落ち込ませていじけさせて高校に送り込んで何が楽しいんですか？　もう立村くんまたひとりでどっかに家出しても私もう二度と責任持ちませんから！」

「清坂、もうひとつだけ聞いてくれないか」

ある程度美里の反応を予想していたのか、菱本先生は静かに語りかけた。

「お前はずっと立村の辛さを一生懸命慮ろうとしている。それは偉い。自分と価値観が明らかに異なる立村を理解しようとするその気持ちは美しい。だがな、もうひとつ、お前の隣りで黙って座っている羽飛のことも、ちょこっとだけ考えてもらえないか。幼馴染だししゃべらなくても十分わかってると言いたいだろうが、お前らみたいに家族になっちまうと考えていることが違っていても、そんなはずないと思っ込んでしまいがちなんだ。わかるだろ、それは羽飛も同じだぞ」

あきれた風に美里は貴史を見下ろした。かまわずに菱本先生は続けた。

「今回クラスみんなが羽飛を正式なトップ扱いにしてほしいという申し入れをしたのは、彼女たちなりの羽飛への感謝の気持ちなんだ。誰とは言わないがみな、羽飛のおかげでクラスが穏やかになった、楽しくなったと口々に語るんだ。そして同時になぜ、それを早い段階で伝えなかったのかとみな後悔する。もちろんそこには立村への複雑な感情があるんだがあいつも精一杯やることはしていたししかたないと頭ではわかっている。でも、気持ちが治まらないんだ。なんとか、今までがんばってくれた羽飛にたった二週間だけでも正式なクラスの代表として振舞ってもらって、みな大満足の後に卒業式を迎えたい、そういう気持ちでいっぱいなんだ」

「立村くんはその中に入らないんですね」

「だから、立村はもう別口として考えたほうがいい。たぶん、あいつの様子を見る限り、クラスの中で静かに過ごすだけで十分満足だろう。トップとして振舞うつもりも今のところはなさそうだ。だったらここで正式に、立村と話し合っって、クラスの中および外でも一応評議の挿げ替えはできないにせよD組の代表が羽飛であることをおおっぴらにしたい。その上で納得して卒業に持っていきたいんだ。どうだろう」

——あのさ、肝心の俺のことは全く関係ないってことで話、進んでねえ？

美里が無然とした顔で再度席に座るのを待ち、貴史は指先を缶コーヒーに当てた。

——どう考えてもわからねえんだけど、俺がクラスの代表に入れ替わったとして、今更何か変わるか？　それがまず、わけわからねえ。

しばらく美里と菱本先生との言い合いが続いていた。もっとも優勢なのは菱本先生の言い分であり、美里もけたたましく言い返してはいるけれども決定打がない。貴史がぼっかんと口を開けているあいだ、菱本先生は同じことを飽きずに繰り返した。

「清坂はもしそんなことしたら立村が屋上から飛び降りるんじゃないかと思っているのかもしれないが、そこまで人間弱くないぞ。それに自分の違いを認められない程、立村は人間的に問題あるか？」

「その言い方すっごく失礼ですけど半分は当たってます。もし立村くんになんかそんなことしたら、本気でなにしでかすかわかりませんから、ほんっとうに！：」

「でもなあ、クラスのみんなは羽飛がトップに立つのを希望しているんだよなあ」

「先生の思い込みか一部の女子の抗議かわかりませんが私は納得行きません！」

「だったらこのままでいいと思うか？　ずっと立村が傀儡状態で卒業する形でいいのか？　羽飛が結局何もしない帰宅部扱いされて終わってもいいのか？　どちらもいい友達だろうし両方惨めな思いさせたくないだろう？」

「どうして惨めってことになるんですか！　もうわけ全然わかりません！」

美里のきれっぴりも観察する分には面白いがそろそろここで、展開の主役になるべき貴史として何か発言しなくてはいけないような気がした。貴史と立村との問題であって、外野である美里と菱本先生ふたりでこれ以上盛り上がりたがるのはなんだかわびしい。それに、

——まあ、菱本先生も、俺のことそれなりに買ってくれてるんじゃない。

ありがたいことと受け取っておきたい気持ちもなくはない。美里が勢いで口走ったことだが、「こいつがクラスのトップになるってことには文句言う気全くありません」

のなら、それもありなのかもしれない。美里は少なくとも、貴史の能力をしっかりと評価してくれているというわけだ。面と向かってはなかなか言ってもらえないのが面白くないのだが、美里の性格上それはしかたない。

問題の焦点を絞ったほうがいいんでないかという気がしてならない。」

挙手して話に割り込んだ。

「先生、質問」

口論中のふたりが貴史をげげんな目を見た。

「俺の意見つつうのはどうなったわけ？」

「あ、ごめん」

「そうだった、悪いな」

菱本先生は貴史に向かい、改めて膝を叩いた。

「それならお前は どう思う？　清坂は大反対なんだが、羽飛は」

「俺は条件つきならオッケー」

つり上がった目で美里が睨む。無視する。

「先生、先生がやりたいことってのは別に立村をお前無能だからさっさと消えろって言うんじゃない」

ねえだろ」

まず確認したいことを尋ねた。

「当たり前だろ」

「そんじゃ、もういっこ。俺がトップ扱いされたらどう考えても立村の奴いじけちまうと思うんだけど、それ避けるためにはどうしたらいいと思う？」

「どんな立場であってもお前たちが立村の友だちであることを証明すればいいじゃないかと俺は思う。真心は必ず通じるはずだ。ヒエラルキーがイコール友情を壊すものではない」

菱本先生も真剣に返す。貴史は頷いた。予想通りの言葉だ。

「それ、信じたいんだけどなかなか厳しいと思うんだ。俺の考えなんだけど」

貴史は美里をちらっと見た。明らかにぶちぎれ寸前。たぶん廊下に出たらカバンでぶん殴られることを覚悟しなくてはならなさそうだ。

「それ、卒業前の最後の一週間だけにしてもらえないかなあ」

「一週間？」

美里と菱本先生が同時に発した。貴史は缶コーヒーを片手に持ち、振って見せた。

「そういうこと。俺の考えをまとめたんで、美里、頼むからしばらく黙ってろ。それと菱本先生もししばらく口挟まねえでももらえると助かる。俺の頭にあること全部、言い切るまで黙ってほしいんだ」

「なによ、生意気」

「だから、話終わるまで黙れよ。あとからだっいたらいくらでも殴られてやるから」

美里はカバンをそっと抱えて、武器にする準備をしている。菱本先生は前かがみの上半身をさらに、ガラスのテーブルにぶつかりそうなくらいにして、

「わかった。言いたいこと吐き出してみろ。受けて立つ」

細い息を口から吹き出すようにして答えた。

——最後の最後、俺はやれる。

美里たちの言い合いを聞いているうちにいつの間にか勝手に頭の中でまとまった案がある。どうしてかはわからない。いつもだったら貴史も美里と同調して立村の名誉を守りたいと訴えただろう。しかし、菱本先生の言うことも一理あるし、何よりも貴史がまだ、やり遂げていないことを行うのならば、これしかない、そういう気がした。

——最後の最後、俺が責任をきっちり取るために、だ。

三年間、ずっと逃げ続けてきて傍観者でいたゆえの、決着だった。

貴史は切り出した。もちろん缶コーヒーはテーブルに置いた。

「俺の考えなんだけどな、立村が三学期以降やる気なくしちまっていることと、なんとかクラスに戻ってきたけど腫れ物扱いされていてなんとなく浮いていることとか、女子たちが不満まんまんだってことは、やっぱそうだろうって思う。俺も反対の立場だったらたぶん同じこと思うんじゃないかねえかって気がするしな」

まずは自分なりのまとめをば。

「けど美里の言う通り、立村にそのまんま事実突きつけてどうするよってのもある。あいつの性格だとまたいじけちゃうのは目に見えるし。いくらあいつが英語答辞やってくれるからってな、クラスの評議委員でありながら結局別の奴、まあ俺か、俺に役割全部ぶんどられちまって落ち込まねえわけないよ。先生も男だしそのあたりのプライドわかるだろ」

約束通り菱本先生は黙って頷くだけだった。

「だろだろ。その一方、あのなんだ、俺をめちゃくちゃ鼻糞してくれちゃってる女子連中は気持ち的に立村をおろしたくてなんねえんだろ。生理的に嫌いって例のあれで、な美里。あ、お前しゃべんなよ。頷くだけにしろ」

不満そうに美里もその通りにした。

「たぶん先生言いたいのは、そのまんまだと卒業式が壊れちゃうってことじゃねえの？俺もその点はあるかもなって思うし、先生の夢の、クラス一丸ハッピーでって雰囲気にはまずはならねえよな。わかる、わかる」

美里がまた口を開きそうになるので睨んでおき続ける。

「だから、どうすりゃいいのってことなんだがさ。今んとこ俺たちがやるべき仕事ってそう、あんまりねえよ。なんとか文集も印刷会社に持ってったし、せいぜいあれか。俺たちやることったら、卒業式の証書受け取りくらいだろ。それはさすがに俺と美里がやるってことで話進んであいつも文句言わねえけど、もうひとつ大きなもの忘れてた」

「何それ」

「だから黙ってろっての。あれだよ。あいつが一番嫌っている大イベントあるじゃねえか」

「まさか」

小声で美里がつぶやく。聞かなかったことにした。

「そう、卒業パーティーって奴」

菱本先生も手をぱしりと打った。

「だろ、だろ？俺、間違ったこと言ってねえだろ？立村の性格上、卒業式のあとみんなで盛り上がりパーティーやろうなんて気には絶対ならねえよな。先生、俺も中学卒業するの今回初めてなんでよくわからねえけど、去年の学年は確か、すげえ派手に店借り切ってパーティーやったんだろ？全クラス集めて」

立村からちらっと聞いた。本条先輩からの情報とも。

「ああそうだな。あの時は親御さんでレストラン経営している生徒がいて、そこでせっかくだしと快く店を貸してくださったんだ。あれは特殊パターンと考えたほうがいいぞ。それに、口をばさんで申し訳ないが、卒業パーティーというのは去年だけだ。本条の企画と一緒に駒方先生の定年退職慰労も兼ねたイベントだったから、特別だったんだ」

詳しいこと聞いていなかったなのでそのところは拾い損ねた。それなら同じ手は使えないということか。貴史は頭で仕切りなおした。

「そっか、わかった。ほんとはそれでさ、他の評議連中とも協力してイベントやろかって思ってたんだ。けど今からレストラン持ってる親を探すなんて無理だしなあ」

とぼけて時間稼ぎをする。何か良い手立てはないものか。

「けど、まあ俺としては卒業式のあとなんもしたくないってのはないんで、せめてみんなでさ、集まってさ、パーティーとまではいかななくてもどっかでお楽しみ会みたいなのやりてえなって思ってたわけなんだ」

「お楽しみ会かあ、それならできるんじゃない？」

美里が口をはさもうとするが、これは無視だ。約束破ったの気づいていないようだ。

「できるけど立村は絶対やりたがらねえってのもあるだろ。けど俺たちとしてはどうしてもけじめとしてやりたいのも事実なんだ。先生も、酒とタバコは入らねえけど混じりたくねえ？」

「酒とタバコがないからこそ混じりたいな」

「だろだろ？ 俺としてはそこんところも含めて切り盛りしたいってのは確かにあるんだ。立村がやりたくないことだけど俺はやりたい。それだったら、最後の一週間それを俺が全部背負うってのはどうだろ。それだったらあいつも無理やり自分のやるべき仕事取られたとは思わねえんじゃないか？」

「確かに」

美里がつぶやいた。見逃してよいレベルのつぶやきだった。

「それに、それ以外クラスをまとめねばなんないこと、ねえよ。だったら最後の一週間だけ俺にちょうだいて頼んでもあいつのことだから、まあいっかになるよ。先生としたら俺がこのまま裏方ってのも哀れだしてのもったんだらうけど、俺は別にそれでもいい。けど先生の立場として俺のことをもっと打ち出さねばなんねえってことであれば、そういう手、使ったらどうかって思うわけ。どうだろ、俺の発想なっかなかじゃねえ？」

黙りこくったままのふたりに、貴史は腰に両手を当てて反応を伺った。

自分でもまだやりきっていない感じはしていた。

確かに立村を教室に呼び戻しはした。できる限りのことはしたつもりだ。

何度も同じことを貴史は思う。

クラスの中が落ち着いた……まあ一時期の告白の嵐には閉口したが……のもそれはいい。女子連中がおとなしくなったのも、美里がため息をつかなくなったのも、まあよしとする。

菱本先生の理想の形ではないかもしれない。立村が最後まで心を開くとも思えないし、今はいるだけでいいと考えている。そのことだけであれば美里と同意見でつきるつもりだった。

ただ、ひとつひっかかっていた。

——まだ、俺は逃げてるのかもな。

入学してまもなく評議委員に立村を即座に推した時と同じように。

——俺はまだ、立村が評議だからやりたい放題させてもらってるだけなのかもな。

——だから、最後の締めはやらなくていいと思ってたのかもな。

最後はどうせ立村がひっぱるんだからという決めつけがどこかにあった。

結局、ひっぱりたくないという後ろ姿を貴史はずっと見ているわけであり、それで苛立ちも全くないわけではない。だったら、手を出したっていいんじゃないだろうか？ やりたいようにやら

せてもらっても、いいんじゃないだろうか。

自分でも気づかなかったぴくぴくした感覚が、ずっと美里と菱本先生とが会話しているあいだ胸のあたりをつついていた。

——やっぱり、このままじゃだめだ。俺にはまだやるものが残ってる。

しばらく菱本先生は両腕を組んでいた。美里も黙っていた。

「一番、立村も納得する形だな。確かにな」

「そうだろ。だからこの件、悪いけど今ここにいる三人の秘密にしてもらいたいんだ」

まだ美里は口を利かない。

「先生から言い出すのはやっぱまずいと思うんだ。あいつは菱本先生の言うことだったら正しいことでも絶対ノーだからな。けど、俺だったらある程度タイミング測って、クラスの奴らの前で納得させられるように持ってける。そのくらいは付き合い長いから読む自信ある。その上できっちり、一週間だけ俺にもらうよう頼む」

「立村がノーと言ったらどうするんだ」

腕を組んだまま菱本先生はねっとりした目で尋ねた。

「それならラッキーじゃん。一緒にやらせるさ。それはそれでいいだろ。クラス一丸になる別の一とのチャンスだし。けどまず、そうならねえと思う。あいつは自分がどう思っているもよっぽどのがない限り、この提案蹴るとは思えねえよ。その上で俺がやりたいようにやらせてもらえるんだったら、最後の一週間、先生が目指しているハッピーエンドに持って行く。できるかどうかはわからねえけど、たぶん、近いものにはできると思うんだ。立村だけは無理でも、他の奴らは満足できるように、もってけると思うんだ」

美里がようやく口を切った。

「わかったよ、貴史。あんたのやりたいようにやりな」

どこぞの映画の姉御のような口調だった。古川こずえ向けのものともいう。

「私、ずっと立村くんのことばかり考えて反対してたけど、そうだよ、あんたもまだ決着ついてないところもあるもんね。立村くんのごことは高校に入ってからでも私たちなんとかできるし、ここはあんたのやり残してること、ぜんぶやっちゃいなよ」

「美里？」

蓮っ葉な口調に思わず問い返す。古川だったらわからなくもない言い方なのだが。

「先生、そういうことでしょ。貴史のことを考えろってことって」

にこりともせず美里は菱本先生に語りかけた。

「この中で一番決着ついてないのって立村くんじゃあなくて、貴史だってこと。そのためにあえて、やらせたいんでしょ。わかりました。だったら私は、こいつの考えを尊重します。文句言いません。立村くんがまた変なことやらかしそうだったらその時は首根っこ捕まえて引きずり戻します。一発二発ひっぱたくかもしれませんが、傷害扱いしないでくださいね。せいぜい親呼び出しのみでお願いします」

菱本先生は美里に片手を差し出した。握手、だった。

「清坂、ありがとう。よくわかってくれた。それと羽飛」

もう片方の手を差し伸べた。貴史にだった。

「羽飛、お前の提案はそのまま任せる。お前ならできる。俺のためにもう一度ハッピーエンド作り、お前のやり方でとことん突き進んでくれ！」

握り締めた時の手の暖かさが伝わってくる。貴史は大きく頷いた。最後の一週間に向けてカウントダウンが腹の中で始まった。

卒業式証書授与に関する評議委員連帯によるイベントは、天羽から話を聞かされていた。もちろん美里もそれなりに考えていたらしいが、なにせ立村があのだ。去年のような華やかな展開は期待できそうにないと最初から割り切っていたようではある。

先生たちもそのあたりを汲んで、立村に英語答辞を任せようなきらいがあるのは納得できなくもない。立村の語学能力は大学の教授たちも高く評価するくらいなのだから、創業式という大イベントにおいて十分な見せ場になるであろうことは確かだ。

青潟大学附属中学の卒業式……まあ、中学に限らないが……は巷でも有名な個性あふれる催し物となっていて、昨年はなんといっても我らが本条先輩の独り舞台。生徒会長などさておいて卒業式答辞を任せられるのはもちろんのこと、十五分にわたる「トーク」……少なくとも語り口で居眠りする奴は貴史の見た限りいなかった……で盛り上げるだけ盛り上げ、最後は胸に飾ったコサージュをさっと生徒たちに向かって放ち、盛大なる拍手で送り出されたという伝説を生み出した。もちろん立村の目線は、一步間違えると「恋する少女」の眼差しとほぼ一緒に、式典終了後しっぽ振って飛んでいき、周囲が引いてしまうほどべったり張り付いていたことは言うまでもない。

しかしそれ以外の印象が実はない。

本条先輩の盛り上がり方が尋常じゃなさすぎて、おそらくさらに盛り上がったであろう卒業証書授与のひとり一言ギャグが滑りきってしまった。受けないならまだいい。覚えていないというのは最大の屈辱じゃなかろうかと貴史は思う。

「羽飛よ、ちょいと」

菱本先生と語り合った次の日、貴史は天羽に呼び止められた。最後の最後まで問題を引きずりそうな三年A組評議委員、かつ元評議委員長のへらへら笑顔にすぐ答えた。まあ放課後だし時間もあるわけだ。

「なんか用か」

「そんなつれないこと言うなよなあ。ちょっとくらい付き合ってくれたっていいじゃあねえの。今日は清坂ちゃんもいないことだしな」

美里はこれから奈良岡彰子の家でクッキーお茶会に参加するらしく姿が見えない。まあいつでも捕まえようと思えば捕まえられるわけでそんなのどうでもいい。

「んで、なんだ。卒業式のことか？」

「勘がいいねえ羽飛、じゃあちょっくら、学食あたりで食いながら話すか」

貴史も賛成した。昼三時半過ぎるとやはり腹が減るのは中三男子、仕方がないことでもある。まだ時折雪が降るけれどもさほど根雪という感じはなく、少しずつだが黒い土ものぞきつつある。ふらふら学食まで歩いていくと、高校生や大学生がノートを囲んで各テーブルでいろいろだべっているのが見えた。だいぶすいてはいる。コロッケ丼をふたり頼んで窓辺の席を押しえた。

「それにしても俺たちの中学時代は、あと一週間かそこらで終わるぞっと」

ひとりごちた天羽。受けを狙ったわけではなさそうなので貴史も黙っていた。

「なんだよ、羽飛、リアクション返してくれてもいいじゃねえの」

「どうせあと半月で俺たちの高校時代も始まるだろ」

「おもしろくねえなあ。まあいっかあ」

ふたり、サイダーをおとなしく飲み続けた。天羽はコロッケから一気にほおぼり、

「んでどうよ。お前来月からどうするつもりなん？」

「どうもしねえけど」

何を問われているのかが今ひとつ分からず、貴史もコロッケにかぶりついた。

「ああわりいわりい、部活、どうすんのってこと」

「別に、ずーっとこのまま帰宅部のつもりだけだなあ。俺興味ねえし」

「うわ、もったいねえ。羽飛それすげえ青春の九十%を無駄にしているって自覚ねえのかよ」

「ねえよ、それこそ天羽、お前は どうするんだ？」

問い返した。何が楽しくて高校進学後の部活について語らねばならないのか。まあ、全く想定していなかったわけではないので、コロッケ飲み込んでから答えてやる。

「周りのみなみなさまには、バスケやれとか運動部行ってしごかれろとかいろいろわいわい言われてるけどなあ。俺としてはそんなのかったるくてやってらんねえよってところ」

「菱本先生も騒いでるだろ」

「無視無視。今更入るなら、中学入学の段階でとっくに参加して先輩がたともめまくってやめてるのが目に見えるだろ」

いや、実は青大附中のバスケ部についての実情を知らないわけではない。後輩の新井林が何度も口説きに來るのをあしらうこと数知れずなのだが、どうも先輩後輩の上下関係が信じがたいほどゆるいらしい。中体連では一瞬のうちに敗退してしまうレベルではあるらしいが、貴史の上と同期の年代は非常に仲良しで、いわば本条先輩と立村を思わせるような関係でもあるという。それが根本の問題なのではと考え、スパルタ式に切り替えようと悪戦苦闘しているのが新井林のことだが、そんなのはどうでもいい。貴史にとってはどちらの形も肌に合わない、それだけだ。

「まあなあ、新井林見てたらやる気なくなるわな」

「そういうこと。んで天羽、お前どうするんだよ」

「ああ俺な。俺はとりあえず委員会一筋で行きますわ」

どんぶりのご飯をかきこんでから、天羽は答えた。サイダーをごくりと飲みむせている。炭酸をあおってどうするつもりなんだろう。

「俺としたら、まあなんてっかそのあれだ。お前さんとおんなじく運動系メンタリティーは持ってないんでな。それに、それなりに脛に傷のある身ですがな」

「けどな、クラス分けあるだろ。確実に評議になれるって確証あるのか」

「ねえなあ」

貴史の知る限り、高校においてはクラス分けが毎年行われるため、中学時代のように特定の生徒が三年間同じ委員を勤めることは極めて困難なはずだ。評議委員が三年持ち上がってどうたら

こうたらと騒ぎになることは、まず高校ではありえない。唯一例外なのが英語科あのクラスだけは三年間面子が変わらない。かといって英語科だけで委員を占めるということもありえないため、あまり影響がないのではという気もする。

「けどな、これも結城先輩から聞いた話なんだがな」

天羽はのんびり口調で続けた。

「高校だと、学校祭実行委員会とか文集委員会だとか選挙管理委員会だとか、臨時の委員会が結構細かく立つみたいで、いわゆる委員会系部活動が成り立つ環境ではあるようなんだわな。だったらそっちに潜り込んでジプシーのごとくふらつくのもありではないかと俺は思うんだがどうだろか」

「知らねえよそんなもん」

今のところ貴史の帰宅部命魂を変えるようなものはそこになかった。

「ところで羽飛、お前との相談ってのは別に高校行って部活どうするこうするじゃねえんだわな。忘れてたわ」

「お前が振ってきたんだろが。早く本題に入っただの」

前振りであることは承知の上、貴史は天羽に話を促した。天羽も髪の手を掻きながら、空の食器を前にへらへら笑った。

「来る卒業式に向けての準備の程はいかがかなつつうとこなんだけど、D組どうなん」

「どうなんと言われてもなあ」

手の内をばらしていいものか迷う。実を言うと今回卒業式証書授与に向けて美里と進めているものは、それ以外の誰にも話していない。どうせ当日衣装や小道具持ち込めば一発でばれるだろうしその時まで内緒にするつもりではいた。

「一応、進めてるぞ。俺と美里とふたりで、まあいわゆる、仮装っての」

「新郎新婦？」

「殴るぞお前」

軽くやりあい、さくっと答えた。

「なにせ卒業式はめでたいイベントだろ。仮装して入って行ってどうだろってのは考えてる。もっともその内容については今まだ内緒。以上でどうだ」

「どうだってなあ。けどまあ、うちのクラスも似たようなもんだわな」

とりあえずテーマとしての「仮装」は決定している。もともと天羽が出したテーマじゃないかと貴史は思うのだが、あとはクラスでそれぞれ決めていこうという流れのはずだ。

「んでだ。それ、お前と清坂のふたりだけで進めてるのか？」

「当たり前だろ。ご存知のとおり」

あえて何も言わない。天羽も頷き、ふと思いついたかのように尋ねる。

「立村はどうするんだ」

「あいつのことはもう大丈夫、先生たちが全部うまくやってる。お前も知ってのとおり、立村は英語答辞やるだろ。もう準備着々と進んでいるらしいし、なんでも大学英文科の偉い先生にも見

てもらってるらしいから、悪いが仮装パレードの手伝いする暇ねえよ、とそんなわけで俺たちにぶん投げられたわけ」

「体のいい言い訳だわな。まあいっか」

天羽はひとりごちた。

せっかく天羽とこうやって話す機会もあるのだから、めったに聞けない事情も確認しておきたかった。貴史はサイダーをちびちび舐めながら周囲を見渡した。入ってきた時と同じように大学生がほとんどで中学生はあまりうろついていない。盗み聞きされる心配はなさそうだった。

「ところで天羽、俺も聞きたいんだいいか」

「さあさきたきた、さあさちょいなちょいな」

「お前んとこ、今どうなんだよ」

純粹なる好奇心である。A組で起きた傷害事件により波紋が広がり、ひとり事実上の退学を申し渡されたというとんでもない展開。しかも被害者が担任の義妹というこれまた血縁が面倒くさそうな話。噂だけはひろまっているがなぜか外部には内密に処理されているらしい。青大附属で起きる事件はたいていこんなパターンで処理されてしまっているようだ。

「どうって、まあ、なあ、それなりに」

「なあにがそれなりなんだよ。うちのクラスもまあ、立村のことでばたついてたことも結構あったんだが、俺なりにちょちょいのちょいと魔法をかけてなんとか平和な日々を送りました、ジ・エンドでおさまりそうなんだが天羽、お前んとこどうなんだよ。どう考えたってハッピーじゃあねえだろ」

「一言も返せませんがな」

へらへら笑いを浮かべたまま、天羽は目つき鋭く問うた。

「結局、どうなったんだよ」

「羽飛くん、知りたい？」

今度は色っぽく迫ってくる。気色悪すぎる。手で払った。

「俺が悪かった、あっち行ってくれ」

「いやあん、せっかく教えてあげようと思ったのに」

即切り替えて、

「ま、結果は大団円。めっちゃ、惨めではありますがな」

明らかに作った表情で天羽は答えた。続けて小声で続きを述べた。

「結局、俺たちは被害者つつう立場に立ったわけよ。傘振り回した人間が加害者。となると被害者側が強くなるのは当然。ということでこれ以上事をでかくしたくねえと判断した加害者側が折れて、三日間のうちに話がついて、即転校。以上で終わり」

「それだけじゃあねえだろ」

「俺も正直、うちの担任があんなに自分の妹ちゃんを愛しているのが信じられねえしちょっぴりジェラシー気分でもあるんだが、やる時はやるんだなと。なんつうかあの人も、教師以前に人

間であり男なんだなあとただ実感。口には出さねえけどな」

「何度聞かされてもよくわからねえがそういうもんなのか」

「そ。今回の件についてうちの担任は手加減ゼロで全部済ませたらしい。加害者側とつながりのある、ほら、うちのクラスのお坊ちゃんいるだろ。『迷路道』の」

「ああ、下着ドロのあいつ」

「悪いが羽飛でもあいつのことを馬鹿にしたらはったおすんでそのつもりでな。とにかくあいつが加害者側を高く買っていて、ついでに言うとかあいつよりもその両親が加害者をえらく心配していて、事件が起きてから三時間後にすぐその話が来たらしいんだ。信じられねえくらいはええよ」

「早すぎるなあ」

ちょうど貴史と美里が学食で立村の問題について熱く語っていた時に起きていた事件なのだから。雪の深かったあの日を思い起こす。もう一ヶ月近く経ったのだと。

「んで、結局西月はどうなった？」

一番興味のあるところを確認したかった。今まで天羽が語った内容は、事件直後に教えてもらったことでもあるし、二度聞きした部分も少なくない。ただ、加害者である西月小春が青大附中から転校という名の退学をさせられた今、どうしているのかだけは確認したかった。これも単なる好奇心である。

「転校して、それきり。事が事だったんで一部の奴以外には詳細しらされてねえ。ただ片岡が言うには、学籍を移しただけだから学校そのものには通ってねえらしい。片岡の実家で蟄居つうのかなんつうのか、こもっちまってるようだと聞いた」

「学校行ってねえのか。ってことは卒業は青大附中なのかそれとも向こうさんの学校なのかどっちなんだ？」

天羽は黙った。しばらく空のどんぶりを見つめていた。

「神乃世だろうな」

あまり聞かない地名だった。

辛気臭い話になるのも正直なんなのだが、貴史の好奇心が止まらないのもまた事実。

天羽をいじめるとしか思えない話のネタを、貴史は次から次へと振っていった。

「天羽、悪いんだがもうひとつ教えてもらえねえかな」

「ああ、隠し事はしねえよ」

「結局、難波は霧島に惚れてたのか」

ちろりと、天羽は貴史をみやった。またにやりと笑った。

「やはり興味あるんだろ。男の子だねえ」

「お互いさん」

第三者の話題に切り替わったせいか、天羽も口が少し動かしやすくなったようだった。

「まああいつはだ。最初っからあれだったからなあ。だが、キリコがああの性格なもんで天敵扱いされちまっているけれども」

「人格変わっちゃまった今はどうなんだろうな」

「あいつは変わらねえよ。いったん惚れたアイドルも変えない性格なのは、お前さんといっしょ。鈴蘭優以外誰か追っかけてたい子いるか？」

「あのなあ、俺の優ちゃんと一緒にしないでくれよなあ」

思わず吹き出す。ふっとなごんだ。

「だがな、あいつはまだましって奴」

天羽は首を振り、指で軽くテーブルを叩いた。

「ちゃんと自分の惚れた子を曲がりなりにも救うことができたし、本人には恨まれたとしても長い目でみりゃあ、まあな、よかったと思う結果だわな」

「自殺未遂救ったって奴だもんなあ」

「そゆことそゆこと。キリコは今だに難波のことを嫌ってるだろうがそれは難波本人も承知済み。少なくともあいつはちっとも間違っただ事やらかしっちゃあいねえ」

「そうなのか」

気取り屋ホームズが卒業証書授与でどういう格好してくるかは大体想像がつく。イメージして吹き出した。

「間違っただことなあ」

「ひとの命を救った。まあキリコも退学同然とはいえきっちり卒業できるし、E組通いとはいえ学校には来てる。C組の女子たちにも別れを惜しんでもらえるし、さらに言っちゃまうなら更科がうまく面倒見ることできる。ほんとの、大団円だわな」

「ほんとの大団円ってのは、嘘のものもあるってのか？」

なんとなくわかるような気がする。貴史はゆっくり、声を潜めて尋ねた。

「お前さんの思う通りってことよ」

天羽の笑いが自嘲という意味合いだということに、ようやく貴史は気づいた。

「貴史、みさっちゃんが来てくれたわよ」

土曜の昼下がり、昼飯食ってベッドに転がっているところで母から呼び出された。

「今行く。車庫に行ってるって言っというて」

母が怪訝な顔をしているのをよそに、貴史は部屋の片隅にまとめておいた風呂敷包みを抱え、手提げに詰め込んだ工作道具一式を片手にぶら下げそのまま降りていった。

「車庫って何なの」

「工作とかやるから、うちの中汚したくねえってだけ。見たいなら見ればいいじゃねえの」

言い残し、素早く長靴を履く。スニーカーなんてかったるくてやってられない。ちょうど今は父も会社で車はおいてないし、うるさい姉も学校で遊んでいる。部屋の中だと母もちょこちょこ顔出しに来るが車庫ならそれほど邪魔もされない。最初からそのつもりで美里を呼びつけておいたのだった。

——さーてと、これで試すとすっか！

風呂敷包みにはこの二週間、貴史が全身全霊で作り上げた魂の品が収まっている。

美里に見せたら驚くに決まっている。

「寒いね」

顔を合わせるやいなや、第一声がそれだった。美里も私服で、真っ白い荒編みのセーターにジーンズ姿だった。ぷっくらしたダウンジャケットというめったに見ないボーイッシュスタイル。

今日のここでの目的をちゃんと理解しているとみた。えらいえらい

「だから厚着してこいって言っただろ」

「わかってるわよ。けど、そうだね。ここだったら安心していじれるね」

貴史は車庫内の電球に灯を入れた。蛍光灯ではないが十分光は取れる。

「とりあえずだ。まず見る。こういうもんだ」

「どーれどれ」

美里に命令しておいた以上自分もがっちり冬仕様の格好で降りてきた。手袋も持参した。ただ結び目を解くのだと素手でないとまずい。しゃがみこんでゆっくり開いた。

「うわあ、すごい、どうしたのこれ！ もう借りてきたの？」

「まあ、持ってみろや」

指差して促す。美里が恐る恐る持ち上げ、再び絶叫する。車庫の中なので響くことは響く。

「ちょっと、これなに！ 軽すぎる！」

「だろ。軽いだろ」

早めに貴史は種明かしをしてやった。目の前にある真っ赤な面の獅子頭を指差して、

「これな、実は全部発泡スチロールなんだ。冷蔵庫とかテレビとかに使う詰め物を組み合わせて作ったのがこれだぞ。全部俺ひとりでやったんだ。どうだ、まいったか！」

言い返すと思いきや、美里はにやにやしなながら親指を立てた。

「おみそれしました。あんたに一票あげる」

まずは美里と発泡スチロール製獅子頭との対面式を行う必要がある。美里はまじまじと手にとって眺めながら何度も貴史の顔を見た。立ち上がってさらに上に掲げ、

「かるーい！」

の連呼。

「気、つけろよ。壊れたらしゃれになんねえよ」

「わかってる！ けどすごい。ほんとこれ、遠くからみても、ううん、近くから見ても絶対本物だとみんな思っちゃうよ。私も気づかなかったもん」

「だろ。本物を知る俺の目に狂いはないのさ」

「どうだか、って言いたいけど今回に関しては脱帽ね」

次に美里は恐る恐る、

「かぶっていい？」

貴史にお伺いを立ててきた。もちろん、それが次の目的だ。

「かぶれよ。でなかったら話になんねえだろ」

「そうね」

両腕で抱えざるを得ない大きな獅子頭を美里は頭に載せた。少しぐらつくようで、首がふにふにしている。あまり見栄えがいい動きではない。

「うーん、いまいちだなこりゃ」

「どこがよどこが！」

「なんか、お前がかぶったとたんでも露骨なハリボテに見えちまうんだよなあ」

「なぜあんたそんなにこだわるのよ」

美里はかぶりものを外し、丁寧に風呂敷の上に載せた。

「あとはここで私があんたに肩車してもらってこれかぶってればいいいでしょ。あんたがその間なんかしゃがんだりたったりして」

「それが大変なんだというのがわからねえのかよ。いいか、お前の体重を俺の肩で支えてだ。それでどうやって動けてんだ。本番前までには五キロは痩せろよ」

「はあ？」

呆れたように美里がつぶやく。

「俺の腰がおかしくなったら慰謝料請求するぞ」

「冗談！ 獅子舞やろうって言い出したのあんたじゃない！」

「話に乗ったのはお前だろが！」

「けど痩せなくちゃいけないなんて今頃言われたって遅いじゃない！」

またヒステリーを起こされそうだ。すぐに方向転換し、貴史は話を逸らした。

「わあったわあった。それよかお前、このこと誰にも言ってないよな」

「当たり前よ。この前も言ったでしょ。こずえにも内緒にしてるって」

「それならいいけどな」

声のよく響く車庫の中で喚き散らしていると寒さも吹っ飛ぶ。少しガソリンくさいのも気にならない。貴史はしゃがみこみ、自分の肩を叩いて美里を促した。

「そいじゃ、軽くりハーサルやってみっか。お前、乗っかれ。まずなんも抱えないでそのままで行けるかやってみるからな」

「倒れても絶対ダイエットなんてしないからね」

「状況による」

軽口叩き合いながら美里はそのまますとんと貴史の背中にまたがった。両肩に足をかける格好で乗かった。

——まあこんなもんだろ。

小さな子どもを高い高いするのは勝手に違いにせよそれなりに歩くことはできそうだった。天井に美里の頭がつきそうなのであまり派手な動きはできないにせよ、ぎっくり腰になる心配はなさそうだ。

「どうだ美里、こんぐらいで動けるか」

「うん大丈夫。たぶん。けど本番は前が見えないとちょっと怖いかも。小さくていいからのぞき穴作ってほしいな」

「オッケー、その点は安心しろ。ただししっかりつかまってるよ。まじで落っことしたら大惨事だからなあ。卒業式だろ。中止になっちまったら悪い伝説になっちまうぞ」

「大丈夫。でも本番まで練習したほういいね。これから時間みつけてやろうよ」

「そうだそうだ」

いつものことだが美里とのコンビでしくじることはほとんどない。

中学卒業式のイベントだからといって、臨時評議として紛れ込むとしても。

——絶対、成功するに決まってるだろ。

三年D組卒業証書授与の際に何を行うか。

天羽たちの提案でクラス代表……ほとんどのクラスは評議委員男女の登壇となるが、D組だけは諸般の事情により貴史と美里のコンビで参加することになる。表向きは本来クラス評議である立村が勤めるべきところなのだが、

——今回立村は英語答辞を読み上げるという大任を仰せつかっている。

という理由からその座を譲ったことになっている。実際はクラスのほぼ大多数から羽飛貴史クラス代表待望論によって押し上げられたというのが本当のところではあるけれども。貴史も菱本先生から言われて受けざるを得なかった。覚悟もないわけではなかった。やるからには中途半端なことをしたくなかった。というわけで、二週間かけてこしらえたのが見た目獅子頭実は軽すぎるほど軽い発泡スチロールという代物というわけだった。

ただ、絶対に誰にも知られないように準備を進めたいという気持ちはあった。

——美里以外には。

青大附中卒業という節目、実際は高校へそのまま持ち上がるわけだしさほど気にする必要はな

いという気も最初はしていた。しかし、水口や奈良岡のように他の高校へそのまま進学する奴もいるし、他クラスではあるけれどもいろいろ事情があって姿を消す生徒もいないわけではない。それならば、曲がりなりにも無事にクラス全員が卒業できることをめでたく祝うイベントを考えてもいいのでは、と貴史なりに考えた結果だった。

「けど、あんたが獅子舞やっててほんとよかったよ。これ他のクラスの人たち絶対思いつかないよ。かぶらないよ」

「だろが。俺だって正月いつも暇してたわけじゃあねえんだ」

町内会のおじさんたちに誘われて小学校時代から毎年参加していた「獅子舞」。正月だけのイベントなのと実際獅子舞を踊るわけではなく、獅子の後ろにくっついて騒ぎながら歩くだけなので何か練習することは特にない。ただなんとなく、動き方などは頭に入っている。見ているうちになんとなく覚えているといえればいいのだろうか。

「頭は借りようかとも思ってたんだけどな。冷静に考えるとあんな巨大なものお前がかぶれるわけねえし、それ以前に女人禁制とか言われそうじゃねえの」

「重たそうだもんね。それこそ私、限界までダイエットしろってことになっちゃうよ」

今のところあと用意するものは身体を全身覆う布だけだ。これは緑色の無地布を用意して白い絵の具で適当に書いて行こうと思っている。さすがにそこまで用意することは難しいが手作りでごまかせないものではない。貴史と美里をすっぽり覆い被せられる布についてはすでに準備が整っている。こちらは美里に任せて、縫い物を担当してもらうことになる。

「そっちの方はどうなんだ？ 準備万端か？」

「もうちょっとかな。首を突っ込むところをゴムにしてるんだけど、今の頭をみた感じだともうちょっときつくしたほうがよさそうだよね。でも、大丈夫。絶対間に合わせる」

「姉ちゃんたちにはばれてねえだろうな」

念を押した。学校が違うとはいえ、母経由で学校にばれ、同時に菱本先生にばれ、などとなったらせっかくのびっくり企画、がっくりくる。

「当たり前！ 夜こっそり描いたりしてるんだから。安心しなさいよ」

しばらく美里と獅子頭の練習を繰り返した。さすがに何度も美里を担ぎ上げるとしんどくなるのも当然のことで、最後は車庫に転がっているダンボールの上にへたりこんだ。

「あーしんど。今日はこのくらいでいいだろ。なんか母ちゃんに食い物もらってくるか」

「ううん、いいよ。それより」

白い息を吐きながら、美里は天井の白電球を見上げた。

「あんた、この前菱本先生に言われたこと、準備してる？」

疲れた風に、つぶやくように。

「なんだよ」

「ほら、立村くんに」

言葉を選ぶように一旦黙った。続けて、

「あんたがクラスの代表として卒業まで仕切るってこと、ちゃんとあの人に言った？」

——あのことがよ。

貴史は肩をいからせて腕組みをした。そう、そうなのだ。

「あと一週間しかないよ」

「んだな」

「どうするの。このまま忘れてたってことで流すのもありだと思うけど、あんたとしてはあそこまで菱本先生にはっきり言っちゃった以上何もしないってことはなしだと思うんだよね。けど、立村くんと言える？」

「言えるに決まってるだろ。あとはタイミングだ」

そこなのだ。一週間、貴史もクラスの様子を鑑みながらいろいろと考えてはいた。美里にはまだ、菱本先生との対談以降特に相談もしていなかったのも何も考えていなかったように思われるかもしれないが、貴史なりにはそれなりの計算がある。

「タイミングかあ」

「そういうこと。俺としてはあと一週間つつう、月曜の朝を考えてるんだわな」

美里が黙って貴史を見据えた。

「月曜だとちょうど一週間後。俺なりにはちょうどいいタイミングだし、立村にとってもぎりぎり許せる期間かなと思ったんだ。一週間だと切りもいいしな。理由はねえよ。ただ中途半端な時期で言うよか、割り切れるだろ」

「言いたいことはだいたいわかるよ。そうだね。一週間だけちょうだいってのだったら立村くんも受け入れやすいかもしれない」

美里は自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「それでもしもめるようだったらそれもきっかけになるだろうし、それこそ一週間しかねえから我慢するってのもありだと思う」

「立村くん、拒否なんてしないと思う」

「わかってるそんぐらい。だがな、その一週間がこの獅子舞だってことが卒業式でわかれば、あいつもあとあと許してくれるんじゃないかねえのって気がするわけなんだわ」

「そっか。獅子舞だと、さすがに立村くんは思いつかないもんね」

「そういうこと。あいつが絶対思いつかないてか、やりたがらないことを俺たちふたりがやるのだったら、かえて引いたほうがあいつも得、そういうこと」

「あんたもちゃんと考える時は考えるんだね」

さりげなく失礼なことを美里はつぶやいた。

立村のプライドを傷つけずに卒業前最後の一週間をもらい、そこで立村の性格上絶対やりたがらない「獅子舞」のような派手な出し物を用意する。もしも立村が自然に思いつくようなことであれば、あいつのことだ、いじけるのは目に見えている。全くベクトルの違うことを貴史と美里が企画したと考えれば競合しあったりはしない。

「それにな、俺も一度はやってみたかったしな」

「何を？」

「そりゃあ、獅子舞だろ」

たぶん町内会でも古参にならないと無理だろう。中学坊主はまだまだ青二才。

せっかくこういう機会をもらったのだから、やりたい放題やるしかない。

「それに美里も今の体重でいつまでいられるかもわからねえしな」

「あんた、今なんて言った？」

「俺も腰が持たねえし。今やらねえと、もしお前と三年後の高校卒業式で組んだとしてもお前の巨大さに押しつぶされてお笑いになっちゃったら冗談じゃねえよ。お前んとこのおばさんと同じ体重だったと考えるよ」

無言で美里に頬をつねられてから、お互い黙って玄関から入りなおすことにした。このままだと身が持たない。ここで休戦、母に頼んでココアかコーヒーかまんじゅうか、何かお菓子を用意してもらって美里の機嫌をとってもらうに限る。

卒業まで最後の一週間ともなるとほとんどが卒業式の予行練習であったり、作文書きだったり、卒業生を送る会の全校集会だったりとか、結構行事が多い。

「やっぱし羽飛だと話が早いよね」

「おおさ、どんと来い！」

「面倒な説明しないでさ、あっさり話が進むからすっごい楽だよねえ」

「ほんとそうだね、怜巳ちゃん」

奈良岡と玉城が楽しげに語っている。卒業生も在校生たちにそれなりのプレゼントを用いせねばならないという慣例があり、クラスの女子たちがメインでオリジナルクッキーと造花をこしらえている。もちろんクッキー作成に当たっては奈良岡が担当で家庭科室を借り切って特訓を行っていたとかいないとか。クラスごとに内容が異なるとは聞いている。

「羽飛くんがちゃんと先生と話をつけてくれたから、家庭科室もすぐにみんなの都合いい時間に押さえることできたし、男子のみんなも力仕事手伝ってくれたし」

「ほんっと手際良すぎ」

いやあそれほどでも、と頭搔いて謙遜したいのだが実際あっさりまとまったのだからしょうがない。これが立村だと最初に菱本先生との余計なバトルがあり、そのあと話を持っていくにしても他クラスの連中との打ち合わせなどで時間を食い、結局自クラスが大損といったパターンが多い。遠慮深すぎるといえばそれまでだが、貴史のように特別面倒な事情を知らない場合はそんなの関係なくやりたい放題させてもらうだけですむ。

「まあ俺もなんかへまやってるかもなとは思うがなあ」

「やってないやってない！ 羽飛くんが全部切り盛りしてくれたおかげだよ」

「本当にそうだよ。いったいこの三年間私、怒りっぱなしだったけど羽飛が仕切るようになってからはもうおかめさん状態だもんなあ」

——まあそう見えないこともねえか。

正真正銘のおかめさんは奈良岡だとしても、あのボーイッシュショートできりぎり立村を罵倒していた玉城の性格が落ち着いてきたことには異存がない。

「なんかなあお前らと話してると、俺ってすげえいい男って気するんだけど、それ勘違いって奴か？」

「自分で言った段階で限定だったの！」

ぎゃあぎゃあ笑いつつ、貴史は決心した。

——今日の昼休みだな、行くか。

立村は三年D組の教室にいた。早退する気配は、ない。

——立村とどこで話を付けるか。

玉城と奈良岡との会話からしても、もう立村がクラスのリーダーとして振舞うことは許されていない状態だ。立村本人もおそらくそのつもりはないだろう。貴史が堂々としきっている状態

だが、正式なものではないのもわかっている。

菱本先生からも、特に急かされるわけではないにせよ視線を感じることはある。

なんらかの形で貴史も動かなくてはまずいと思っていた。

いくなら今日しかない。昼休みが終わればロングホームルームが行われる。ここでも仕切り役は貴史と美里になりそうだが、ここでなんとか全員の前で決着をつけないとならない。なあなあで流したのではなく、きちんとけじめを付けるべきだろう。

美里とも何度か話をし、貴史のよかれと思うタイミングで、とは言われている。

——やっぱ、これから行くしかないわな。給食食ったら、さあ行くか。

貴史は美里をみやった。打ち合わせしておきたいがまあいいだろう。気配ぐらいは感じてほしい。クラスメートが全員揃った、先生が戻ってくる直前あたりを狙おう。

昼休み終わりの一分前、立村が教室に戻ってきた。

いつものようにどこぞへ逃げて時間つぶししている。他の連中の情報からするとあのE組だろう。三年D組の教室にいることはあまりなく、貴史もなかなか立村を捕まえるのが骨ではある。

——やっぱりあの杉本っていう女子に張り付いてるのかよ。

事情はどうでもいいとしてもやはり面倒であることには変わらない。立村にとってあの杉本という女子が「特別」であることは理解したつもりだ。だがここまでおおっぴらに出かけるというのはどういうことなんだろうか。かつての自分なら問い詰めたいけれどもそれが果たせないのも事実。貴史は立ち上がった。立村のいる廊下側先頭の席に向かった。机の上には英語の手書きノートが広げられている。赤チェックがところどころ入っている。すべて立村特有の文字の形をしている。

「立村、いいか？ 今、話して、いいか」

久々に声をかけてみるとどうもきつい言い方になってしまうのがわかる。別に喧嘩をふっかけているわけではない。ただ、堅くなってしまう。

「いいよ」

立村は静かに答えた。友だちに対してというよりも、知り合いに向かってといった他人行儀の匂いがする。

——他の奴、見てるか。どうだろ。

クラスの連中の表情をざっと確認した。南雲と目が合い気まずい以外はさほどのものもない。思い切って言葉を放った。

「来週の卒業式の後なんだけどな、クラスの打ち上げ、やるだろ。本当だったらお前と美里が仕切って会場とかそういうところ押さえるんだろうが、立村、今、そっちまで手、回らないだろ」

問いかけてみる。立村は無言のままじっと貴史を見据えている。いやな予感がするが呼吸を整え、何事もないような顔で続けてみる。

「これ、菱本さんも言ってたんだけどな、もしお前がそっちの方しんどいようだったら、俺と美里であと一週間、評議関連の仕事、全部仕切ることにするけど、どうする？ 俺はかまわない

んだ」

一気に言い切った。立村の表情が変わるのを待つが、特段驚く様子もなかった。穏やかに、ただ感情は全く見せることなく、

「もうとっくに任せてるだろ」

あっさり答えた。そう来たか。開き直っていると見える。少し爆薬を詰めてやりたくなる。

「なりゆきでそう見えるかもしれねえけど、評議はお前だろ、三年間」

どう出るか、確認する前に立村は即答した。全く表情は変わらないままだった。

「いいよ、羽飛に任せる」

そこまで言い切った後、ふと周囲をぐるりと見渡した。そのあとゆっくりと貴史を見返した。いらだちとかそういったマイナスの感情は感じない。ふと貴史もクラスの連中がみな一言も発せずに様子を伺っていることに気がついた。

——みんな見てるか。やっぱそうか。

なんだかまずいような気もする。方向転換をすべきか迷った。気づいていたのかどうかかわからないが立村は、口元にかすかな笑みを浮かべ、貴史に残っていた迷いを断ち切ってくれた。

「これからの一週間は、羽飛がクラスを率いる方が必ずうまくいくはずだと俺は信じてる。それだけの力があることも、俺が一番よく理解している。だから、あとのことはすべて、羽飛、お前に任せる。俺はここで、黙って見ている」

——本当に？

息が止まる。本気で言っているのか、それとも建前なのか。今の貴史にはそれが見分けつかない。立村についてはまだ自信がない。

「本当に、俺で、いいのか」

立村はだめ押しをするように大きく頷いた。奴にしては芝居が買っているようにも見えたが、笑顔を見せた。

「俺は信頼してるから」

——本当に、信頼してるのか？

疑問が百パーセント消えたわけではない。立村が自分の本心を隠す性格だということは貴史もよく知っている。それでも、ただ湧き出すものには勝てなかった。やっぱりこいつは、心底いい奴なんだ。たぶん、

「立村、サンクス、あとは俺に任せる」

背中を二回叩き、肩に手をかけた。たぶんこいつは、自分が思っているよりもずっと、ずっといい奴なんだと。

菱本先生が入ってきて、美里もすぐに黒板のチョークを片手にスタンバイしている。目と目が合った。小声で貴史に囁きかける。

「終わったね」

「まだだろ」

息を合わせ、貴史は教壇の上から菱本先生に声をかけた。

「菱本先生、じゃあこれから、最後のロングホームルーム、行くけど、OK？」

「よし、任せたぞ！ 羽飛、清坂！」

すべて準備が整った。ここからは青大附中三年D組最後のロングホームルーム突入だ。

最初は軽く菱本先生と前座の駆け引きを試してみる。先生のそばに近づき、

「ええと、てなわけで、いきなり卒業式後の話となるんだけど、いいか、先生」

思い切りため口で話を切り出す。クラスの連中が乗りよく話を聞いてもらえるよう枕を置く。

「お前らそのことしか考えてないのかあ？」

「だってさあ、こういう全員揃っているところで決めねえと、また心配だろ？」

「なにがだ」

「俺たちがアルコール入ったところでどんちゃん騒ぎして、補導されて、『青大附中三年D組卒業式後のご乱行』なんて新聞一面に載っかっちゃったら、先生もやだろ」

「お前ら、想像力豊か過ぎるぞ」

途中美里も口を出してくる。

「だから、ここで決めるんです。先生、いいですよ」

「わかったわかった。最後だししっかりやれ。俺は口出さんぞ」

やりとりが一段落したところで貴史は教壇ど真ん中に戻った。話が脱線しないうちに戻ることにする。

「それじゃあ、まず卒業式後の打ち上げなんだけどな、どこでやるかってことなんだけど、今評議委員会の中でもいろいろ意見が出てるわけで、まず俺としてはさ、教室でクラスの連中だけとじわあっとやるのも悪くないけど、どうせ俺たち四月から別々のクラスになっちゃうわけだろ？」

それにこのクラス、三年間同じだったし顔もほとんど替わらなかったわけだろ？ だったらさ、そんなこじんまりとしたやり方よりも、他のクラス合同でなんかぱあっとやろうぜって話が出てるんだ」

美里とかねて打ち合わせていた案をここでどばっと出す。たぶん他の連中には知られていないはず。奈良岡が穏やかに問いかける。

「全クラスって、A B C Dクラス一まとめにして？ 百二十人くらい？」

ここは美里に任せる。

「そうそう、そういうことなんだけど、でも、そんなたくさん入らないのは私たちもわかってるので、せっかくだったら全クラス、それぞれの教室に誰でも入れるような形にして、三年生限定の学校祭みたいなのりにしたらどうかなって、今思ってます」

「それか、せっかくだったら教室を一部屋にしぼって、ぎゅうぎゅう詰めで作るってのも手だと俺は思うなあ。先生だったら、どっち選ぶ？」

菱本先生が口をもぞもぞさせているのでしゃべらせてやる。

「教室も悪くないがなあ。どうせなら借りる教室を家庭科室とか技術室とかそのあたりにしてだ。二クラスくらいを一部屋に入れて、あとはみんなで盛り上がるってのはどうだ？」

「二クラス、かあ」

不満そうな美里に、菱本先生は細かく説明を続ける。

「四クラスとなると、人の波で誰が誰だかわからんだろ。大学でも卒業式の後謝恩会ってのがあ
るんだが、あれが殆ど何がなんだかわからん状態で、盛り上がったという感じがつかめぬままお
開きになるのがいつものことなんだ。だが羽飛、清坂の言う通りクラスの連中三十人だけで盛り
上がるだけというのも、もったいないよな。それこそ他のクラスの奴と触れ合うのもよいし、ま
た教師の立場としてもこれから先、自分の生徒以外の奴と繋がりができるのも嬉しいことだ。
ということだ。俺としては大きい教室を借りてそこで、二クラスずつって形にした方がいい
んじゃないかと思っている」

「なるほどなあ、先生、サンクス」

——随分先生も話変わったなあ。

先日、生徒相談室で話を聞いた時とは方向性が変わってきているが、それぞれいろいろ考える
ところもあるのだろう。それほど貴史も自分の案にこだわりはないし、クラスの連中も楽しけれ
ばそれでいいと思っているだろうし、その点はあっさり流す。

「じゃあさ、先生、その教室ってさ、今から借りられるかなあ？」

肝心なところをまずは押さえておく。菱本先生の案も悪くはないのだが、部屋が借りられなけ
ればしゃれにならない。

「わかった、俺が話しとこう。ただなあ、他のクラスの兼ね合いもあるから、そこんとも相談
する時間をくれ。どうだ、そんなとこで」

——ラッキー！　じゃああとは任せるぜおとつあん。

ここで突っ込むつもりだったのだが一步遅く、こずえに割り込まれてしまった。無念である。
「ありがたやありがたや！　やっば菱本先生、やるじゃん、さっすが、一家のパパ！　羽飛、
じゃあこれで決まりってことで、よい？　次は食べ物調達だよな。この辺は女子の管轄だし、手
伝うよ」

——なんでこいつまた俺の予定をへしおるってんだらうな。

タイミングがどうもずれる。意地でもここは貴史の方針で進めようと思う。

「うんにゃ、その前にもうひとつやるべきことがある。その会に、何人くらい、出られるかって
ことだよなあ。あとただ食べ物食ってるだけじゃあわびしいから、なんかクイズ大会とかビン
ゴゲームとか、そんなことの準備もせねばならないしなあ。これから一週間、超特急でやらねば
ならないんだけど、誰か手伝ってくれる奴、いるか？　あんまりたくさんじゃなくていいん
でさ」

誰かかしらいるだろう。読みどおり奈良岡が手を挙げた。

「じゃあ、私が手伝うよ。たぶんこれで、私が青大附属と一緒に盛り上げられるの、最後だもん。
ぜひ手伝わせてほしいな。そうだ、私、クッキーとカップケーキくらいなら用意できるよ！」

——あと、もう一人か。

貴史が考える間もなく、即、こずえが続いた。なんでこのふたりこんなにわかりやすいんだら
うか。自分に超能力あるんでないかと思いたくなる。するする進む。

「美里、私も立候補！」

その後隣の立村にこそと話しかけている。立村が首を振っているところを見ると立候補を進めているのかもしれない。この辺りはさっさと無視して進めることにする。

「じゃあ、卒業式打ち上げの委員は俺、美里、そいで姐さんと古川、以上でオッケーか？」

無理やりこずえの手によって立村が引きずり込まれるのを避けたいというのもある。さっさとまとめ、すぐに放課後の集合をかけることにした。面倒なことはちゃっちゃと終わらせて次、また次！

「では緊急の集まりってことで今日の放課後、よろしくな」

今度は隣りの美里がリードして進めた。

「それともひとつ。一緒に組むクラスは先生の方から決めてもらうってことでいいかなあ。一番楽なのはいつも体育や家庭科が一緒なC組だけど、それだけだとつまらないって人もいるだろうし。だったらもう、ロシアルーレットって感じで決めちゃった方がいいと思うんだけど。どうですか？」

誰も何も言わない。貴史と違って美里相手の場合、どことなく空気がどんよりする。立村主導の時よりましといえそうだが、やはり美里はいまだに敵をこさえているのだろう。まあいい、これは一週間で片がつく。貴史は美里に小声で、

「早く決めちまえ」

促した。美里も頷き、すぐにまとめた。

「誰も反対意見出さないようなので、これで決めます。あと、ええっと、何決めるんだったっけ、貴史」

意見を問われると何か言いたくなる。少しだけ考える。ああそうだ、忘れていた。念には念を入れてみなさんのご予定伺いをしとかねば。貴史は美里をどやしつつも次の質問をクラス全員に放った。

「肝心なこと忘れてるっての、おいおい当日、なんか卒業式の後用事がある奴って、いねえよな？」

立村が逃げないことを祈るしかない。手を挙げないでほしい。それだけだ。ちらと様子を伺うが特に動きはない。しかし廊下側の先頭席ではなく、最後列でひらひら手を挙げる奴がいた。

南雲だった。

「あのさ、悪いんだけどさ、俺、この日、どうしても都合が悪くてなんないんだけど、それってまずいっすか」

「南雲くん？」

美里がびっくりしたように南雲を見つめた。てっきり予定の言い訳をするのは立村くらいだと見ていたのだろう。菱本先生が怪訝な顔をして尋ねている。

「どうした南雲、用事でもあるのか」

「いやあ、すんません。実は俺の家の難しい事情がいろいろありましてですね。どうしても家族丸の会議を開くことになっちゃってるんですよねえ。ほんと、うちの恥をさらすようで悪いん

ですが、人生においてかなりいろいろ恥ずかしい問題が起こってるもんで、詳しいこと、言えないんですよ。ほんっと、申し訳ないんだけど、この日はまず卒業式で幕ってことにしていただけないかなあと、思うわけっす」

——家族の事情かよ、しかも会議かよ？

南雲についてはあまり詳しい事情を聞きたいとも思わないが、まあ参加できないという正当な理由があるのならしかたない。あっさりそのままOKしようと口を開きかけた時、南雲はさらに畳みかけてきた。

「それと、もうひとつなんですが、これは規律委員長としてのお願いをばよろしく」

——何が規律委員長だ、てめえとっくに引退してるだろうが！ 元ってつけれよ！

「ほうほうなんだ」

ぶちぎれそうになる貴史を美里が教壇陰で足を踏みつけ制止した。その間に菱本先生が詳細を聞き出そうとしている。南雲は気味悪い笑みを浮かべ、貴史に視線を置いた。

「俺の場合はまだ口に出せたけど、人それぞれ家庭事情とか、その他いろいろ事情のある奴がたくさんいると思うんですよ。俺ももし、本当のことずらっと並べろって言われたら、ぎゃあとか言って逃げますし。たぶん、この中にはそんなこと言えないで悩んでいる奴もたくさんいると思うんですよ」

——こいつ、てめえ、お前、俺に公開ガン付けしてるってのかよ！

さすがにこれは受けて立つしかない。

「何言いたいんだ！」

「当日になっていろいろ事情のある奴も出てくると思うんで、この場で全員参加を前提にしちまうのはどうかと思うんだよなあ、俺としては。そうじゃないっすか？ むしろ、参加できると確信している奴の数だけまず確認して、人数分の食べ物なりカップケーキなりクッキーなりを用意してもらい、当日参加可能な奴を数人プラスする形でまとめたら、いかがっすか？ それの方があせらないでいいと思うんですがねえ、いかがっしょ」

——てめえ、何考えてるんだ！

事情があるんだったら別に不参加でもかまわない。本音は確かにそうだ。

南雲だってその「家庭の事情」がある以上身動き取れないのはわからなくもないから貴史もとりあえずは受け入れるつもりだった。しかしなんなのだ。南雲の言い分は。まるで貴史が無理やり全員参加を強要して嫌がらせをしているよう聞こえる。

——これは正真正銘、俺に対する挑戦状だろ！ そう取ってどこが悪いってやつだぞ！

貴史は正真正銘、ぶちぎれた。売られたけんかはロングホームルームにふさわしいやり方で受けるしかない。鉄拳なし、しょうがない。

「そりゃあそうだが、だが最後だろうが、全員出るのがほんとだろうが！」

立村が居心地悪そうに俯いているのが気になるが、それは無視だ、とことん無視だ。

「だから、いろいろ家庭事情で出られない奴のことも、考えてやったらどうっすかって言ってるの」

南雲のペースは変わらない。さらっと、おもしろがるような口調で貴史にぶつける。

「それでも都合つけるのが卒業生だろうが！」

——家庭の事情だからって大目に見てやろうと思ったらこんなやり方しやがって、もう容赦しねえぞ！

「あのさ、お前言える？ ちょっとやばいとこの病院で手術しねばならなくなったんで、俺、欠席しますとかさ。妹の近親相姦疑惑でもって裁判がありますのでいかねばなりません、ごめんって普通言えるか？ 言えないだろ？ まあこれはたとえ話にしても人にはそれぞれいろんな事情があるし、できたら言いたくねえこともあるんじゃないかかって俺は思うわけ。別に豪華なオートブル用意するとかそんなんでもないんだろ？ その辺でクッキーとかそんなもの用意する程度だろ？ だったらあとで飛び入りした奴にも土産にできるし、腐るものを用意するわけでもないんだし、なあ、俺そう思うんだけどみなの中、どうおもいまっか？」

美里が貴史の足を教壇の陰で蹴飛ばした。かなりきつく、足首にがつんとくるほどに。

すぐに割り込み、話の軌道修正を行っていた。貴史は美里の加減しない蹴り力に恐怖しつつ、気持ちを切り替えることにした。とりあえず立村は何も意思表示しなかった。それでよし。参加するかしないかは、あいつ次第。

「南雲くんの意見もそうだなって思うよ。貴史、とりあえず、当日確実に参加できる人の数だけ取ってみようよ」

「じゃあ、当日、確実に参加してオッケーって奴、どんぐらいいる？」

詳しく確認してみると、すべての生徒が参加できるわけではやはりなさそうだった。

「参加したいんだけどね、やっぱぎりぎりにならないとわからないし」

「そういうわけかあ。んじゃ、しゃあねえな」

「そうだね、じゃあ南雲くんの案通り確実に参加可能組と、当日大丈夫かも組に分けて、準備だけどんどん進めていこっか！ 私も他のクラスのみんなに声かけてみて、合同でできるかどうか相談してみるからね」

ふと見ると、奈良岡がそっと南雲の様子を見つめ、なにやら手紙を渡していた。

いったい本当にこいつらどういう付き合いだったんだろう。わけが分からない。

——やはり、俺に惚れてたってのは何かの勘違いだったんだろうなあ。奈良岡のねーさんよ。

別に残念な気持ちもないが、南雲に対しては最後まで天敵で終わりそうな気がする。あと一週間で変わるとも、変わりたいとも思わない。

貴史の仕切りと美里のフォローもうまくかみ合い、着々と卒業式打ち上げパーティーという名の三年D組お楽しみ会の準備は進んでいた。南雲の余計な一言も結局のところ奈良岡彰子がうまくとりなしてくれたようで最後はおとなしくなったようだ。

——振られた彼女になだめられるってのも情けねえよなあ。

お互い様、としか言い様がないのだが、不本意ながら一枚噛んでしまっている貴史にとっては知らんぷりを決め込むしかなく、美里にも同意された。

「彰子ちゃんなりに、南雲くんのは気にかけているみたいだし任せていいよ」

「けどなあ」

美里には奈良岡からの謎の告白について一言も伝えていなかった。口をつぐむ。

「卒業するとそれっきりになっちゃいそうだからって、心配してるんだよね」

「それでいいんじゃないの？」

別れ話はあるということだろう。過去を忘れて前に進んでどこがいけないのか。

美里は少し考え込むような素振りを見せたが、

「人によりけりじゃないの。私たちには関係ないし、それより例のあれ、今夜も練習しに行っている？」

すぐに獅子舞準備の話へ逸らした。やる気まんまん過ぎるのは美里の方だった。

立村の様子は変わらなかった。むしろ拍子抜けするくらいだった。

——あいつ、俺がどんなに気、遣って話したか全然考えてねえよなあ。

性格上さすがにそんなことはないと思いたいが、その行動を観察する限り全く変化がないのだからしょうがない。南雲や一部の男子たちとは静かに談笑していることもあるが、貴史には一切自分の方から話しかけようとはしない。休み時間はあつという間に姿を消しているし、放課後も脱兎の如く教室を飛び出していく。結局のところ立村にとって、三年D組はいること自体耐え難かったのかもしれない。ということは、

——俺たち、美里と一緒にしゃべるのもやっぱ、しんどいのかも。

そんな結論に達しそうになり、かなりがっくりくる。いったいなんだったんだろうこの数カ月。結局立村に振り回されっぱなしの卒業式になりそうだ。いやはや。

菱本先生からも、

「お前、さすがだな。よくクラス全員の前で立村をうんと言わせたな」

お褒めの言葉をいただいた。終わって見れば実はたいしたことなかったような気もするのだが、

「やっぱ、これが俺の実力ってところよ」

ひとりきり威張ってみせた。まあ、菱本先生ひとりしかいない場所だからこそできることでもある。できればあとは立村が素直に打ち上げ参加してくれればいいのだが、南雲発言もあるし他の連中もいろいろ事情持ちが多いだろうし無理は言えない。ここばかりは様子見に徹するしかな

いような気がする。

「羽飛、ちょいと」

卒業式三日前。ほとんどやることもなく午前上がりでみな教室から出ていこうとした時だった。古川こずえが貴史を呼び止めた。美里が何かの用事で先に出て行った後だった。

「なんだあ？」

「悪いんだけどさ。ちょいと今日、付き合ってもらえないかなあ。昼飯はおごるよ」

「いや別に飯を一緒に食う分にはいいけど、学食か」

コートを羽織ったこずえが、さっと時計を覗き込み、

「ちょっと取り込んでてねえ、学校の外でちょこっとだけ話をしたいんだけど」

「なんかまたクラスのことでも面倒な話、あるのかよ」

こずえは戸惑った風に目をきょろきょろさせた。

「そうとも言えないけどまあそうだよな。少し話しておきたいことがあるんだけど、ちょこっとだけ時間がほしいんだよね。えと、あと、このことは」

小声で耳元に囁きかけてきた。

「あまり、他の人に知られたくなくってさ。大丈夫、連れ込み宿にしけこんだりしないからさ」

「アホか。それだったらまあ、どっかそのへんで食うところ探すか」

こずえが持ち出す内容の多くはクラスの女子たちの裏事情だったり、弟分である立村の本心であったりとか、確かに貴重な情報が多い。美里ではうまく食い込めない女子たちの面倒くさい話もこずえだと比較的楽に聞き出すことのできる力もある。清濁併せ飲んでいるといえばいいのか。

——まあいいだろ。古川が見つけた情報ったらまためんどくせえもんかもしれねえしな。どうせ俺が今んところ三年D組代表になっちまったんだから、きっちり頭に入れとかねえとあとで足掬われるかもしれねえしなあ。

「ラッキー！ これから羽飛とデート、デート！」

「人聞き悪いこというなっつうの」

わざとらしくはしゃぐ古川こずえの横顔に、ふと、真面目なものが走ったように見えた。気のせいだろう。ありえない。

こずえは校門を出てそのあとまっすぐ青潟の商店街をくぐり抜け、しけた雰囲気のカフェに貴史を案内した。いわゆる昔の「純喫茶」といった雰囲気で中高生が立ち寄るような雰囲気ではない。夜になったらたぶん酒の入ったスナックに姿を変えるのだろう。学校の先生に見つかったら吊るし上げ食いそうな気はする。

「お前なあ、ここ、まじで大丈夫なのか」

「大丈夫よん。ここはうちの母さんの友だちがやってる店なんだ。たまにね、ここで遊んでくんだけど内緒だよ。美里にも言ってないんだからさ」

入り口は黒い扉で中がのぞき込めない。一応、ランチセットは用意されているようだがカレー

ライスと味噌汁セットしかない。

「カレーでいいよね」

「しかなさそうだよなあ」

「オムライスって手もあるよ。まあいいや、今日は私のおごりだもんね、贅沢しちやいな！」
——女子に奢られるってのも情けねえ。

もちろん払うつもりでいる。財布にはランチ代五百円分はちゃんとある。

中に入るとすぐに「いらっしゃーい」と明るい呼び声が聞こえる。同時に「あーらこずえちゃん、今日は彼氏と一緒に？」と、いかにも常連っぽい雰囲気でのやり取りが始まる。かなり派手目の化粧をした四十代以上は確実に知っているであろう女性がこずえと和やかに語らっている。

「彼氏にしようと、これから告白タイムなんだけど、協力してくれる？」

「いいわよ。じゃあオムライスがいい？」

「お願い！」

あっという間に注文が決まり、こずえは店の最奥へと誘った。どうでもいいがなぜトイレのど真ん前の席を選ぶのだろう。入口側に会社員らしき男性がひとりでもくもくとカレーを飲み込んでいる様子が見えるが、そこから離れたかったとしてもいくらなんでも。

「お前なあ、トイレのど真ん前ってのはデリカシーねえだろ」

「いいじゃん、それが臭い仲だってことで」

こずえは意に介さず、自分からお冷を二人分もらってきて、

「ここのオムライスは美味しいから楽しみにしててよ。とりあえずごはん来る前にいうこと先に言っちゃおうよ」

こくりと、お冷を一気に飲み干した。コートを脱ぎ、手袋をおいて、背を伸ばしてきっちり座り貴史と向かい合う。

「なんだよいきなり見合い話みたなかっこうしやがって」

「まあ、見合いだよね。そんなもんだよね」

自分に言い聞かせるようにこずえはつぶやき、

「中学卒業するにあたって最後の告白やらせてちょうだい。答えがどっちにせよ、ひとまず一通り話、させてもらっていいかなあ」

——また年中行事みたいなことやるのかよ。

年がら年中こずえには愛の告白をぶちかまされてきている。そのたび「俺の愛はすべて鈴蘭優ちゃんに捧げられているんだあ！」で逃げているが、その延長戦だろうか。こずえにはそこまで思ってもらえてありがたいと思うし、その上で貴史の友だち……美里であり立村でありクラスの連中であり……を面倒みてもらっていることには感謝しているが、鈴蘭優への愛を超えることはありえない。よって、「ごめんな」の一言で終わる。

「答えは一緒だぞ」

「わかってるよそんくらい。あんたの愛は鈴蘭優だもんね」

「じゃあわかってるなら別の話しようぜ」

「だから、今から話すこと、全部聞いてよ。それからだよ」

ケチャップと鶏肉の混じり合う甘い匂いが漂ってくる。腹の虫が鳴る。

——古川、なんつうか、何が目的なんだ？ それよか早く食いてえよ。

「噂になる前にはっきり伝えておきたかったんだ」

まだオムライスが出来上がらない。古川こずえだけがひとりでしゃべり出す。

「たぶんさ、これから先私に関していろんな、そうだね、めんどくさい話がいっぱい流出してくると思うんだ」

「下ネタ女王の名前だけでなくてか」

「それ悪口じゃないじゃん、褒め言葉だよ。んなことじゃなくってさ」

吹き出しつつもこずえはさらに続ける。

「羽飛は修学旅行四日目のこと、覚えてるかなあ」

「ん？」

忘れもしない、停学覚悟、入れ替わりの夜を。壁に耳あり。貴史は頷いた。

「あん時、私、言ったじゃん」

「何をだよ」

「うちの母さんのことをさ」

一瞬記憶をまさぐってみる。なんとなく聞いたような気もするが、

「悪い、俺には今頭に詰め込んでおかねばなんねえ知識がいっぱいで、どうでもいいことは忘れてるんだ。天才の定めなんだわな」

「あっそ。どうでもいいことねえ」

失礼な言い草かもしれないが事実でもある。こずえは仕方なさげに肩をすくめた。

「じゃあもう一度話してくよ。うちの母さん、いわゆる水商売だってこと、言わなかったっけ」

「そっか、思い出した、そんなこと言ってたなおめえさん」

実は忘れていたわけではなかったけれども、いくらなんでもクラスの男子からそんなこと言われたくなかっただろうと思って知らんぷりしてただけだった。

「なんだ覚えてたじゃん。ありがと。まあ単刀直入に言っちゃおうとホステス。けどすごいんだよ、ナンバーワンだったんだよ！ あんたたちが連想しているやらしいイメージと違って、うちの母さん超プロフェッショナルなんだよ。なんてったってうちの母さんが呼ばれた席で仕事の話が100%バンバン決まっちゃうんだからさ。これかっこいいじゃん？」

「仕事の話って、なんだそりゃ」

一般的な「ホステス」のイメージとなると、ご指名を受けたホステスさんが客、一般的には男性客のそばに張り付いてお酌したりいちやついたりのイメージが強い。中学生とは縁のない世界だし、美里が知ったら「やらしい！」くらい言いかねない。

「羽飛、いい加減接客業における先入観捨てなさいよね。人を楽しませたりさ、気分よくさせたりさ、話を聞いてあげたり合わせたりさ、すごく勉強が大切な業界なんだよ。職業に貴賤なしってことあんた学校で習ったじゃん？ それ忘れなさんなよ。それとホステスさんに限らず芸者

さんもその他接客関連い携わるすべての人たちに対しても、見下すなんて最低な態度とったらあんたのあそこぶちぎるからね。第二の阿部定になんかなりたくないよね」

「わかった、よくわからねえがお前の母ちゃんがプロフェッショナルだってことはわかった」

昼間、オムライスを待ちながら話す会話ではない。やっと出来上がったのかふっくらしたオムライスが目の前に届いた。しかしなぜ、ケチャップでハート型がでかでかを書いてあるのか、貴史にはよくわからない。すぐに崩して口に運んだ。まじでうまかった。

「ね、おいしいでしょ、私の言ったことに間違いのないのよね」

「食べ物についてはお前が正しい」

一気にかき込んだ後、頼んでないのにホットココアが運ばれてきた。

「おい、ココアって」

「子どもにはカフェイン良くないからってことじゃないの。さあ、腹いっぱいになったところでさっきの話の続き行くけど、いい？」

「わかった。お前の母ちゃんプロだってとこまで聞いた」

こずえは口を紙ナフキンで乱暴にぬぐい、小さく丸めた。

「私はそういう母さん見て育ってるから、どこがいけないのとか、どうして見下されるのかとか、謎でなんないわけよ。なんも恥じることはないじゃん。うちの学校も母さんの職業知ってて私合格させてくれたし、別に悪い仕事なんてしてないわけよ。そこんところわかるよね」

「そうだな。お前正しい」

「羽飛さっすが私のダーリンねえ。そうなんだけど、世の中ちっちゃいとこしか見てない奴が多すぎて最近頭痛いのよ。そいでね、実はこの前、私引越ししちゃったのよねえ」

「はあ？」

初耳だ。全然そんな素振りを見せなかった。

「今まで親子三人身を寄せ合ってちっちゃな家に住んでたんだけど、今回母さんがお店を卒業して専業主さんになっちゃったこともあって、学校の近くのマンションに引っ越したのよね」

——確かこいつ弟いたはずだな。

ということは父親は同居していない、というわけか。

「結構お嬢さまっぽいおうちなんだけどね。ただまあなんていうか私のキャラに合わないところに引っ越しちゃったもんだからさ。まだ学校の子には詳しい話してないけど、これからいろいろ情報が流れてきたらまあなんつうか、面倒なことになるかもしれないと、そういうことなんよ」

「なんだその面倒なことつうのは」

引越ししたのだったら卒業アルバムの住所だって書き換えねばならないだろう。いろいろと準備が必要なような気がするのだが、

「美里は知ってるのか」

「卒業の時に話すよ。引越しパーティー予定。羽飛もおいでよ。3Pはなし」

「あのなあ」

気の抜けるようなエロネタを飛ばされるの離れているのでさらりと流す。

「けど引越しただけでこんなオムレツ奢らねばならねえほどまずいことなのか？ まじうまいけどなあ」

「まあ、いろいろあるわけ」

突然こずえは首を激しく振った。

「ああもうめんどくさい、言っちゃうよもう。要するにうちの母さんは、お妾さんとか言われちゃってるわけ。あんた、さすがに『お妾』ってわかるよねえ。ちゃんと夏休み中昼のメロドラマ見て勉強してるよねえ」

「いや見てねえからわからねえ」

——だが、『妾』の意味はわかる。

初めてこずえの言葉の重さが伝わってきた。口の中であふれるケチャップのしょっぱさと、目の前で色気なしでぺらぺらしゃべるこずえの表情と、店のけだるい雰囲気。すべてがじっとりと肩にのしかかってきた。

「そう、言い忘れてたけど、これ美里をふくむ他の連中には絶対言わないもらいたいんだけど約束してもらえる？ 事後承諾で悪いんだけどさ。もし私のうちに来てくれるんだったらその時は『えー！なんでお前引越しなんて大切なこと言ってくれねえんだあ！』って大ボラこいてもらえるととっても嬉しいよ」

茶化すようなこずえの口調すら、今の貴史には息苦しすぎた。貴史の記憶する限り、「お妾さんの子ども」はテレビドラマの中でたいていいじめられるキャラクターとして描かれていたはずだった。こずえのような女子ではたぶんなかったはずだった。

こずえが「お妾さん」の子であることをなぜ貴史に言う必要があるのか。

それもこんなやたらとうまいオムライスを食べせた上で、だ。

「それで、なんでお前そんなこと言い出す？」

「あれ、羽飛馬鹿にしたりしないんだ」

「なんでするんだよ」

少なくとも見下したいとは思わない。青瀧大学附属中学ともなれば、それなりに人間関係の裏表や生まれの複雑な事情など、把握できてくるものだ。立村の家庭環境の理解不能な形もそうだし、最近だと霧島姉弟の殺伐とした関係、その他噂で小耳に挟んでいることであればありとあらゆる情報が飛び交っている。こずえもそのうちのひとりに過ぎない以上貴史も差別する必要が全くない。

「要するにお前の父ちゃんいないってだけだろ」

「いるよ、失礼な」

「違う、いることはいるけど一緒に住んでねえってだけだろ」

「そういうこと。わかってるじゃん。そんだけなのよ」

こずえもオムライスのスプーンを加えつつ、口に物が入っているまま話し続けた。

「お妾ってことはさ、要するに本妻さんがいるってこと。本妻さんがいるってことは要するに日陰の身ってことよ」

「お前には全然似合わねえなあ」

「嬉しいこと言ってくれるじゃん、さっすが羽飛！」

——空気に似合わないこというよなあ。

「まあね、あんたにうちのめんどくさい事情説明すると二十四時間拘束することになっちゃうプレーになっちゃうし、そっちの趣味私ないから置いとくとして」

下ネタなのか微妙な台詞を残した後、

「あんたみたいにあっさり納得してくれる奴ばかりなら世の中あっさり上手くいくもんだけど、ほら、人間凸凹いろいろあるじゃないの。あんたもいろいろわかってるんじゃない」

「凸凹はわかるがな」

「エッチだねえ。けどそういう話のわかる奴ばかりじゃないからさ、今日こうやってあんたに相談したいわけよ」

「何がだよ」

ようやくこずえも本題に入るようだ。貴史は皿の隅から隅まで綺麗に平らげた後、

「言ってみろよ」

誘って見た。

「実はね、このこと美里に内緒にしてるんだよね」

「お前それ言ってたじゃねえの」

こずえは少しだけ言いづらそうな口調で声を潜めた。

「けど父ちゃんがないってことは」

「だからいないんじゃないじゃなくて一緒に住んでないの。あ、厳密に言うとき、住んでる時もあるけど今は住んでない。来るだけってことよ」

「よっく話、わからねえ」

でも美里に話せない理由はわかるような気がする。もともと美里は過剰に潔癖なところがある。菱本先生の結婚にまつわるよしなに絡めてもそれは感じる。こずえに菱本先生の順番間違えた結婚の話の詳細説明していないのはそこに理由があるわけだ。結婚前は明らかに、というのが美里の思い込みだとも言える。

「美里にはね、面倒な説明全然してなくて、父さんがいろいろな事情あってなかなかうちで住んでられないってことだけ言ってる。もちろんお妾さんとか昼メロみたいなことは言ってないからね」

「じゃあ今まで通りじゃあなんでだめなんだ？」

「引越し絡んでるからねえ。今まで私もばらしてなかったけど、高校に入るとほら、クラスの住所録作り直すことになるしさ。できればぎりぎりまで隠しておきたいけどばれるのは時間の問題って気もするしね」

「ああ？　なんで隠せる？」

「一応、前の家はからだけど、名義はまだ残ってる」

ややこしい家である。貴史には理解不能の環境にこずえが育っているということだけはよくわかった。

「でも、美里も私んちに遊びに行きたがってるし、私も隠し事したくないし。どっちにしろ美里には引っ越したことだけは言うよ。けどね、そのマンションに住んでいる人がどんなだかを聞かされたらきっと、ショック受けるよね」

「有名人が住んでるのか？」

言葉に詰まったこずえは、しばらく考えて、

「まあそんなとこ。うちの母さんと同じような環境の人が多たってこともあるけど、もちろん私の方から説明なんてしないよ。けど、うちの学校、いろんな仕事についている親が多いからこれも時間の問題でばれてしまうと思うんだ」

「ばれちゃあ、まずいか。まさかそんなめんどくせえ事情持ちばかりじゃあねえだろ」

「ないけどね。ただ土地代とか建物の見た感じからして、いかにもお金持ちっぽく見えることは確かだろうね。お金持ちなのはうちの父さんであって、母さんじゃないんだけどさ」

——どっちもどっちだが。

やはり貴史には意味不明だ。父親が金持ちということは母親も子どもも一緒だと思うのだが。

こずえは面倒な説明を飛ばしどんどん話を進めていった。

「あのマンションに住んでいる人がどういう系統の人が多たってのは、わかる人にはある程度わかると思うんだよね。ある程度お金持ちだけど、いろいろ面倒な事情がある人とかさ。うちの

場合は親子三人私、弟、母さんだからさ。めったに父さんはうちに来ない」

「よくあるパターンじゃねえ？ 単身赴任ってのはどうなるんだ？」

「好意的にとってくれたらそうだろうけどね。とにかくさ、私がいろいろと面倒な立場に立っているってのは理解してもらえると助かるよ。美里に知られたらたぶん、不潔がられるかもしれないしね」

——不潔、か。

貴史はまじまじとこずえの顔を見据えた。

——美里が、いくらなんでも三年来の友だちをだぞ、不潔って言うか？

「違うよ、私は毎日身体を隅から隅までしゃーんと洗ってるよ。いつでもチャンスOKって風にさ。私が言いたいのはそういうことじゃない」

にやにやしなながらこずえは頬杖をついて続けた。

「美里の性格あんたよく知ってるよね。結婚する時はお互いチェリーとバージンで結ばれなくちゃ嘘だとか、赤ちゃんは愛の結晶だとか。決して下ろしそこねて仕方なくとか、お互い別の相手に捧げちゃってて実は経験者でしたとか、美里そういうの絶対認めない性格なんだよ。あんたもわかってるじゃん」

「そういえばそうだな」

いつだったか、聡子姉ちゃん相手にバトルやらかしていた時の美里の顔を思い出した。あれから成長したとは思えない。

「そういう純情さってのが美里のよさだとわかってはいるよ。けどさ、現実問題そんな綺麗事で男と女生きていけるってわけでもないじゃん？ 雰囲気流されたとか、悪いとこでしっぽりとか、いろいろあるわけよ。羽飛も大体わかるでしょ。おかずメイトたちにあんただってお世話になってるわけだし」

「古川、その言い方なんかかならねえの」

力なく突っ込む。

「男と女さらけ出しちゃえばいいじゃんよ。とにかく美里って子は夢見る乙女のまんまだからこそ美里なんだわ。けどその美里にまわりついている私がよ。いわゆる正規の結婚で生まれた子じゃなくて、しかもうちの弟とも父親違ってたりしててややこしい中、受け入れられると思う？ 私は無理だと思うなあ」

「お前、勝手にそう思い込んでるだけじゃねえの」

よくよく聞いてみるとこずえも結構自虐的だと思う。美里が極めて清らかな乙女……見た目はお世辞にそうは言えないが……であることは確かだが、いくらなんでも三年来の大親友をいわゆる太陽あたる場所で生まれたわけではないという理由でぶちぎることがあるだろうか。そういう判断をするということは美里に対する侮辱でもないかとすら思う。

「美里に聞いたらきっとおんなじこと言われるね」

こずえも同意した。わかってはいるようだった。

「美里はたぶん口ではわかったって言うてると思うんだ。そのくらいはわかってる」

嘸み締めるようにこずえは語る。

「でもね、女子の場合は理屈じゃあないわけ。これ、男子には何度説明してもわかんないことだと思うんだけど、それこそ生理的にだめってところがあるのよ。私もさ、昔はそのことでずいぶん泣かされたよ」

「どんくらい昔だよ」

「そうだね、五年くらい前って奴？」

つまり小学校時代か。小学四年くらいだとなかなか難しいかもしれない。こずえがどういう環境の小学校に通っていたかはあまり聞いたことがないが、貴史たちと同じような公立小学校だったとしたら否定できないこともない。

「やっぱり、小学生でもわかるもんよ。本人はわからなくても、親がね。それぞれ変なこと吹き込むのよ。あの子はお妾さんの子でふしだらな生まれだとかさ。色を売り物をしてるとかさ、弟とは父親が違うとかさ、まあひとつひとつは否定できないことだから言い返すのも難しいと。面倒なことも多いわけ。それでもさ、青大附属に入ってから」

言葉をはっきり切り替えた。

「みんななんだかんだ言って賢いよ。たぶん誰かかしらは私のめんどくさい家庭事情知ってると思うし、少なくとも菱本先生は全部知ってる。けど、誰も私のことをさ、妾の子だとかふしだらとか言う奴はいなかったよ。お互いすねに傷がある身なのかもしれないけどさ」

「いやあ普通言わねえだろ」

貴史がつぶやくとにっこり笑って肩に手をかける。すぐに話した。

「いやーん、羽飛やっぱ男前！ さっすが私の三年間命かけて惚れた男！ 男を見る目はうちの母さんから確実に受け継いだね」

「そういう話か」

「とにかくさ、美里はなんにも知らないわけ。これが一番大切なとこよ」

きっぱりと言い切った。

「美里は私の事情なんて全然知らない。父さんがいないのは死んだか単身赴任かのどちらかだと思ってる。うちの母さんがNO.1ホステスだってこともたぶん知らない。生活苦しくてアルバイトしてるって程度でごまかしてるからね。けど、これから先は美里も否応無しにいろいろなこと知ることになるよ。たぶんね」

「あのなあ、古川、お前にしてはずいぶんまどろっこしいよな」

貴史は首をひねった。

「お前さ、そんな俺に愚痴ってる暇があったら、さっさと美里とっ捕まえて今喋ったこと全部話したほうが早いんじゃないかねえの。そりゃさ、いろいろな家庭事情があるのはわかるし、お前さんも相当苦労したんだなあ同情はするぞ。あ、同情つつうのが嫌いなら別の言い方もするけどな。けど美里からしたら、どこぞの誰かさんから噂で聞くよかお前の方から全部聞かせてもらったほうが早いんじゃないかねえかって気がするぞ」

「あのねえ、さっき言ったことあんた耳からスルーしてない？」

こずえは呆れたようにため息をついて続けた。

「美里はきっと素直に受け入れてくれる。そういう子だよ。けど本心は不潔だと思うかもしれないよ。どういう事情があったにせよ。それでもし美里が冷たくなったりしたら、まあ私も傷つくよ。美里本人が一生懸命受け入れようとしてくれたにもかかわらずだめだったってことだったらさ、やっぱダメージでかいよ。ロストバージョン失敗した時以上かもね」

「経験ねえくせに」

ぼそっとつぶやいた。瞬間「隙あり！」と額を叩かれた。

「んで、お前が隠したい気持ちはわかったんだが、それと俺のすることってのは何か関係あるのかよ」

オムライス分の要求があるとは思うのだが見当が全くつかない。こずえは両手を組み、覚悟を決めたように口を切った。

「あるよ。あんたにしかできない」

「だからなんだよ」

「美里のフォローなんだけどね」

少し黙ってまた続けた。

「私も、少しずつ様子見ながら事情を話すつもりではいるよ。あんたの言う通りさ。やっぱり他人から聞くよか私から話を聞いた方が少しはましだからね。けど、もしそのことを知って美里がショックを受けたりしたら、そのときは頼りになるのがあんただけよ」

「俺がかよ」

まあ否定はしないが。こずえは大きく頷き両手を拳にして、

「本当だったら彼氏の立村だろうけど、どうなのよあいつ、あいつ美里と別れ話してるの」

「美里からは聞いてねえのか」

「全然、ただ立村の顔みたらたぶんそういうことなんじゃないのて思ったけどね」

意外だった。こずえに話していないことが。

「あいつとはクラス英語科だしたぶん三年間あの調子で付き合ってくことになるだろうね。けど、別れたら美里の慰め役頼めないしもともと話がきっと噛み合わないよ。立村はある意味私の事情を理解できると思うからさ、かえってね」

「はあ？」

なぜ立村がここで関わってくるのかがわからずまた問い返した。

「立村の場合、家の事情がうちと似たように入り組んでるみたいだし、いわゆる花街の事情についてもまっとうな理解はしてる。珍しい奴だよ。母さんがおっかないらしいけどね」

「ああそれはわかる」

二度程拝見した猛女を思い出す。

「芸者修行に出た花森さんともつながりがあるみたいだし、たぶん立村相手だったら私の事情べらべらしゃべってもすんなり話がつくよ。けど、あいつに話しても意味ないし、もう美里と別れたがっている以上は意味なし。私もこれからどうなるかわかんないけどもし、美里が私のこと

でずっとずたに傷ついていたら守ってやれるのって結局羽飛だけなのよ。変な意味じゃないよ。私とは友だちづきあいしなくたっていいけど、でも私の母さんの生き方は決して不潔でもなんでもない、ひとりの大人の生き方なんだってことだけ伝えてもらえるとすごい助かるんだ」

「まだ決まってない未知の世界だってのに、なに先回りしてるんだよ」

こずえらしくなかった。貴史には戸惑いだけが残る。

「そうだよ、先回り。けど今しか言えないよ」

こずえは繰り返した。

「まだ引越しのことがばれてなくて、噂も飛び交ってなくて、羽飛も私のうちのことを軽蔑しないで見てくれてる今でしか、約束してもらえないよ。あんただってこれから先考え方が大幅に変わるかもしれないじゃん？ 人間どういうふうになるかわかんないもんだからさ。けど、私は今のこの瞬間、自分がぶっこわれないうちに美里のことを頼んでおきたかったのよ。美里を罵倒して縁を切っちゃうかもしれないけど、せめてさ、あの子のことを守ってやれる奴から私の本心を伝えてほしいんだよ。わかるかな、あんた」

——わからねえよ。

そう言い返したかったが、残念ながら腹の中にオムライスが収まってしまった。

「どう、約束してくれる？」

「オムライス分は約束する。けどな古川、お前少しストレス溜まってるとじゃねえの」

「発散しようよ、たとえばファーストキスとか」

にやつきながら冗談っぽく誘うこずえに、貴史はお冷を突き返した。大丈夫だ。単純にこいつは貴史と中学最後のデートをしたかっただけだ。何も自分のしんどい事情を打ち明けて、重たい約束させようなんて思っていないはずだ。

こずえはその後も変わりなく貴史に接してきた。特に馴れ馴れしくするでもなく……いや、もちろん下ネタ攻撃は日常的だが……美里に対してもいつも通り仲良しの関係を保っていた。オムライスデート後に特段何かが起きたというわけでもなかった。

——まあ古川も大変だってことはよっくわかった。

貴史にとってはそれだけのことだった。口には出さないが高校進学してもこの関係はずっと変わらないものだろう。人間いろいろ事情ありなのはわかっているし、大事件でも勃発しない限りはこのままでいいんじゃないかと思っている。

——さってと、現実問題はこれからだ！

残り二日間、ひたすら卒業式の事前準備に明け暮れる日々。

天羽、難波、更科との三名とも、卒業証書授与時の仮装についてそれなりに打ち合わせはした。一応「仮装」という枠までは用意されているのだが、各クラスの評議コンビが何に化けるのかについては、現在のところ機密事項とされている。もちろん貴史も美里も決して口には出さない。放課後ダッシュで自宅に戻り、貴史宅の車庫で美里と組んで毎日獅子舞もどきの練習に取り組んでいるなんてことは、絶対に言えない。

「準備はどうだい皆の衆」

放課後、男子評議三人の中に迎え入れられ中庭で会議が行われた。天羽が鼻の下をこすって問いかける。

「万端だな」

「ほう、ホームズはやっぱりホームズかよ」

「と、言いたいところなんだが衣装がな」

あっさり手の内をばらした難波だが、これは仕方ない。難波イコールシャーロック・ホームズである以上、それ以外の仮装を期待することなぞ出来はしない。

「ホームズさ、衣装で悩んでるんだよ。ほら、シャーロック・ホームズの鳶のマントあるだろ。あれがなかなか手に入らないというか、あっても高すぎて買える金額じゃないんだよ」

更科が助け舟を出した。

「そうだなあ、あんなコート手に入れられるわけねえよ。難波、どうするんだよ」

「方法はひとつある」

両腕を組み、足踏みする難波は、貴史を見た。

「この学校内でただひとり、俺の理想とするコートを羽織った奴がいる」

その一言で何を言いたいかがわかる。

「ああ、立村な」

「あいつ今日も例のコートで来てたよな」

立村のファッションセンスは入学当時から少し青大附中の生徒とはずれているところがあった。決して奇抜な格好というわけではなく、過剰に礼儀正しすぎる といった方が正しい。校則に違

反するわけでもないのだが、あまりにもかっちりしすぎていて「中学生らしくない」と評価されてしまう。もっとも南雲率いる規律委員会からは立村の感性を評価されていて、評議委員長就任時記念号の「青大附中ファッションブック」ではわざわざ写真撮影までされていた。冷やかな笑いが多かったことは頷ける。

「あいつがいればすべてが丸く収まるんだが」

「てか、ホームズ最初から立村がいる前提でホームズ仮装考えてただろ？」

更科のけらけら笑いつつ問いかける姿に、少しむっとしたのか難波は黙った。

「けど、あいつ風邪ひいてないだろ。じゃあな、ちょっくら立村に頼んでコート借りるか」

「いやそれも避けたい」

矛盾したことを難波は答える。

「そうしたら俺がホームズ演じることがばれるだろ」

「いやとっくの昔にみなばればれだと思いがなあ」

貴史の言葉なぞ聞いていない。難波はぐるぐる回りながら、

「できれば卒業式の入場の時だけあいつのコートを借りることはできないか？」

「無断借用か？」

天羽も驚いた口調で問いかける。

「それしかないような気がする。俺は中途半端な格好で出るのは嫌だ。仮にもかのシャーロック・ホームズを演じる以上はな。そして立村のコートはまさに理想そのものだ。羽飛、『奇巖城』覚えているだろう、ビデオ演劇を。あの時の立村はまさに、ホームズのステレオタイプを体現したものだ。俺は今、改めてそれを」

——熱いぞ難波、悪いがこの場の雪が溶けるぞ。

結局話し合いの結果、貴史は難波のために一肌脱ぐことにした。

「わあった。俺が立村のコートこっそりお前のとこに持ってくからな。ただしあとであやまっとけよ。あいつにぶつり縁切られても知らねえぞ」

しばらく四人で打ち合わせという名の馬鹿話に興じたあと、さすがに身体も冷えてきたので中庭から脱出しようとした時だった。

「おい、あれ見ろよ」

難波が顎でしゃくって巨大な石の固まる一隅を指差した。

「南雲じゃねえ？」

「それはわかる、けどあの面子、いったいなんだ？」

声が届かない距離ではあるが、南雲を囲む二人の女子がなにか不穏な雰囲気醸し出している。体型のフォルムでひとり誰だかすぐにわかったが、もうひとりが解せない。

「ねーさんじゃねえの」

「ねーさんだっけのはわかる」

誰もが奈良岡彰子のことを「ねーさん」で済ませているところが怖い。

「じゃああとひとりは」

「さあ、近くで見るか」

天羽が含み笑いをしながらちらと貴史を見やった。

「ここは悪いが四人で高見の見物と行くか」

難波、更科も天羽に続いて大きく頷いた。

「そうだな、これはチェックしないとな」

「義務だよな」

三人が頷き合う理由がよくわからない。どうもこいつら三人は南雲を囲む泥沼三角関係に興味津々のようだった。南雲と奈良岡が学内一のラブラブカップルだったこと……あえて貴史は過去形で認識しているが……、しかし南雲は以前一年上の先輩とかなり高度な付き合いをしていたとのこと、さらに貴史しか知らない事実もあって奈良岡が現在想いを寄せているのが自分自信だということ。できれば関わりたくない内容だらけではある。

「羽飛、お前も来るだろ」

「盗み聞きするのか？ それちょっと趣味悪いだろ」

「いや、羽飛、これはお前の義務だ」

難波があっさり切り捨てた。

「今お前はD組の代表だろう。クラスの不穏な雰囲気を感じた段階で事実関係を確認する必要がある。あの二人はD組の生徒で、いろいろと噂も漂っているはずだ。本来なら評議委員の立村が担当すべきだがあえてそれは何も言わない。とにかく、こっちに来い」

「けどばれたらどうするんだよ」

さすがに貴史も人の恋路を邪魔する気はない。たとえ南雲が虫の好かない奴であってもだ。人間、それは終わってしまうような気がする。

「しつこいようだがこれは評議としての義務だ、行くぞ」

難波の強引さに負け、貴史は巨大石の三人組が語り合っている場から反対側の中庭出口で、上靴にくっついた雪を払った。天羽たちのあとをついて反対側の一年廊下までそそくさと歩いた。

——知らねえぞ。こんなのが評議の義務なのかよ。立村、まじで地獄だったのかもなあ。

評議三人が足を止めたのは、一年D組のあたりだった。窓がかすかに空いている。外の雪も外はだいぶ溶けかけているが、中庭はまだざっくり積もっている。特に座れる石の並んでいるあたりはすっかり黒く染み付いた雪が固まっている

「俺たちもしゃべってる振りしような」

「しゃべってるだろ」

不毛なつつこみを返しつつ、壁に持たれた。難波が小声で説明する。

「この場所は意外と声が聞こえるんだ。俺も今までは意識していなかったが、廊下で偶然たむろっているといろいろな情報が入ってくる。お前はD組だし気づいていたと思うが」

「いいや、まさか」

考えたこともない。難波は勝ち誇った顔で振り返った。

「この場所は俺たちもなんとなく集まりやすくよく秘密会議なぞしたものだが、実は筒抜けだ

ということも多いらしい。まあ意識してこのあたりに張り付く奴なんかよっぽどのことでもなければいけないがな」

しっ、と指をあて、難波は天羽と更科、ついでに貴史も輪に呼び寄せた。

「手帳を開け。それで指差しながら何か相談している振りしろ。ただ口は聞くな。そのままだぞ」

言われた通り旨ポケットから手帳を開き、意味もなくページをつついた。ちなみに貴史の生徒手帳は一度も中に書き込みをしたことがない。単なる身分証明書以外の何者でもない。

難波の言う通りだった。

とんでもないこれは筒抜けスポットだった。

——あきよくん、ありがとう。

どういう流れでこの三人が集っているのかがわからない。表情ももちろん伺えない。ただほっこり笑顔を保ったまま奈良岡が女好きミーハー野郎の南雲に語りかけているのだけは想像がついた。

——私ね、もうこの学校を卒業するけれど、どうしてもふたりに伝えたかったんだ。

「ふたりって誰だよ」

またしっと難波、天羽に制された。更科が囁いた。

「ほら、南雲の本当の彼女」

「ああそっか」

だいたい見当はついた。奈良岡はさらに語りづづけている。途中で、

——奈良岡さんも、なんで私なんか呼び出したのよ。

大人っぽい口調の、いかにも南雲の彼女としては完璧な女子の声がする。

——私、今まであきよくんといろいろ噂されていて、きっと水菜先輩には迷惑をかけていたと思うんです。確かに私は、あきよくんとよいお友だちだったし、今でも大切な人だと思っているんだけど、でも違うんですよ。

「あきよくん、かよ」

「ねーさんはそう呼ぶんだよ」

天羽と更科が言葉を交わす。

——あのさ、彰子さん、俺、決してその、あの。

——それで、あなた、何言いたいのか。

南雲の慌てっぷりが伝わってくる。あの狐っぽい髪型と一緒にきざなポーズをしながら、どうやって奈良岡に返事しているのだろう。貴史の記憶する限り、中学二年から三年修学旅行終了までの南雲は奈良岡べったりで愛に溢れていた。周囲の南雲ミーハーファンたちが激しく嫉妬するのと同様にだ。

水菜さんと呼ばれた女子の台詞がずいぶんと蓮っ葉だが、これはやはり三角関係のもつれだろうか。そうなる場合によっては貴史が割り込む必要が出てくるのかもしれない。まさかとは思

うがこの評議三人組、貴史にそこまでの可能性を読み取って連れてきたということか。それとも評議同士ではごく普通のことなんだろうか。

——私は、ふたりがこれからも楽しく過ごしてほしいって、だから変な誤解がこれ以上続かないようにって、それだけを伝えたかったんです。

奈良岡は聞かれていることを知ってか知らずか、さらに天使の言葉を放つ。

——だから、二人に仲良くしてほしいってこと、それだけをきちんと伝えたかったんです。周りの人たちは今だにあきよくんのことを誤解している人もいるけれど、本当は誰よりも水菜先輩のことを大切にしているってことを、私から伝えたいんです。

思わず四人で顔を見合わせた。

「なぜ、愛のキューピットしてるわけ？」

「さあ？」

「身辺整理？」

みな好き勝手なことをつぶやいているその時だった。

——奈良岡さん、ありがとうって言いたいところだけど。卒業する餞別としてアドバイスしとくわよ。

いかにも不良っぽく、テレビドラマの口調で水菜先輩と呼ばれた女子が答えるのが聞こえる。

——あなたが噂に違わぬ保健委員の天使だってことはよっくわかったわ。秋世もしつこいくらい私にそれ言ってたし。

——そんなことないんですが。

——水菜さんやめろよ。

いかにも三角関係の泥沼状態。隠れている貴史と評議三人組は手帳で自らの鼻を隠しさらに壁へ張り付く。

——あなたたちが二年間付き合ってきたってことはみんな知ってるしそれでどうしたというのはどうでもいいのよ。今はお互い秋世と付き合ってるのは私だし。

——水菜さん！

完全に南雲はかやの外。「しゅうせい」と南雲の名前を呼んでいるのがいかにもといった感じではある。

——私もそれ、知ってました。

——だったらもっと本音でぶつかってきたらどうなの？ 綺麗事ばかり言ってないで。最後なんだから私もきっちりと落とし前付ける気はあるわよ。

「まじかよこれ、修羅場だぞこりゃ」

天羽が肩を露骨にすくめて囁く。

「どう決着つけるんだ、あいつ」

たぶん南雲に対しての言葉だろう、台詞は難波だ。

「逃げられないよなあ。年貢の納め時かな」

のほほんとしたままの更科が貴史に囁く。

「知ったことかよ」

——南雲よかね一さんだ、こりゃどうする。泣かされるか。

これは場合によっては貴史がダッシュで中庭に駆け込む必要があるそうだ。評議三人組の判断は正しかった。とりあえずアキレス腱を伸ばす運動をする。

奈良岡の声は全くなだらかなまだった。

——ごめんなさい。あ、ごめんねあきよくん。私の、これが本音です。だって。

一旦黙った後、ゆっくりと、

——私の友だちはみんな、いい人ばかりなんです。あきよくんももちろんいい人。そんないい人が選んだ水菜先輩が、悪い人だなんて絶対に思いません。私、それは確信しているんです。

出た、奈良岡の十八番、「私の友だちはみーんないい人」攻撃。

密かにつぶやいているのは貴史のみ。

——彰子さん、俺、そんないい奴じゃないって！ 何度も言ってるだろ！

——あきよくんは気づいてないだけだよ。誰よりも友だちを大事にして、家族のみなさんを宝物のように守っていて、私だけじゃない、ナッキーや時也とも友だちでいてくれた、そんなあきよくんのどこが悪い人なの？ それ、水菜先輩もわかっていると思うんです。

「ナッキー？ 誰だそりゃ」

「さあ？」

天羽と難波が首を傾げる。

——私の友だちには幸せになってほしいし、できればその人につながる人たちにもみんな連鎖してほしい、それが私の願いなんです。水菜先輩、いやな思いさせてしまったらごめんなさい。でも、このままあきよくんと水菜先輩が誤解されたままお付き合いしていくのを見るのはどうしても私が我慢できなかつたんです。それと、あきよくん、ひとつだけお願いなんだけどいいかな。

——何？

寂しい答えの南雲に、明るい口調で奈良岡は答える。

——卒業式、最後の打ち上げ。きっとあきよくんは家族のみなさんのことがあって参加できないってことなのかもしれないけど、私はできればあきよくんと一緒に笑顔で卒業したいです！

ほんのちょっとだけでもいいから、顔を出してくれると嬉しいな。

——あ、そ、それだけ？

どもっている。情けない奴だ。

「ははん、そういうことかね一さんは」

小声で天羽が納得顔をしつつ解説する。

「どういうことだ」

「つまり目的は、ねーさんがだ、南雲をD組の打ち上げに参加させたいってことなんじゃねえの」

「はあ？」

貴史も意味がつかめず戸惑うが、即座に難波が引き継いだ。

「羽飛、言ってただろ。うちのクラスとD組とで卒業式のあと打ち上げやると」

「ああ、そうだな。B組だけなんだよなあ」

A組とC組は諸事情のため打ち上げの話に乗ってこれなかったという現実がある。天羽と更科がにやりと笑った。

「その時、南雲が参加できないらしいという話を本人からちらっと聞いたが」

「ああ、家族の裁判かなんかがあるらしいぞ」

詳しいことは覚えていないが、やたら面倒なことがあるらしい。

「もちろん家庭の事情ならしょうがないが、あいつが打ち上げ出ないとなるとしらけるだろうな」

「知ったことかよ」

「そっか、そういうことな」

更科がまとめた。

「つまり、ねーさんはほんのちょびっとでもいいから打ち上げに顔を出してほしくて、でも自分と付き合いがたことがひっかかりになってるんだったらそんなことがないって言いたくて、それで今わざわざ現在の彼女呼び出して取り持ってるってわけか」

——なんのためにんなことやる必要あるんだよ。

評議三人組の密かなる推理をよそに、中庭の三人組はまとめに入っていた。

——奈良岡さん、ありがとう。これからは堂々と付き合うわよ。ただ、しつこいようだけど。

水菜先輩の怖いお言葉が響いた。

——私はあなたの善意溢れる言葉に、ものすごく傷ついた。

——ごめんなさい。私。

——あなたには一生わからないと思う。あなたがものすごくいい子だということは理解しているし理屈ではわかるのよ。でも、あなたの善意は私も傷つけたし、たぶん、秋世も、またあなたが気づいていないたくさんの人も傷つけているはず。それだけは覚えておいてちょうだい。それじゃ、秋世、行くわよ。

これ以上ばれる可能性のある場所に居座る気はなかった。貴史は評議三人組と連れ立って素早くその場を離れた。生徒玄関まで戻り外靴を取り出したとき、身体がまだ震えていることに今更ながら気づいた。とりあえず美里には言わないでおこう、それだけは決めた。

——しっかしまあ、修羅場だわな。

美里にはもちろん話さなかった。評議連中の引きつった顔や暗黙の了解で地獄の底まで持っていく必要のある内容という判断からだ。怖すぎる。いけ好かない南雲といろいろ因縁のある奈良岡をめぐる恋愛劇の終焉、もうこんな恐ろしい展開が待ち受けているんだったら、女子と付き合うよりもずっと、

——鈴蘭優ちゃん一筋で行こう。

結局そこに行きつく。

何はともあれ卒業式およびお楽しみ会の準備は着々と進んでいる。

次の日も卒業式の予行練習や、ほとんど自習と化した授業の中で貴史は美里と組みつつ、

- ・卒業式後のパーティーはニクラス合同で行う。場所は三年D組。言いだしっぺが提供する。
- ・スナック菓子と飲み物程度が学校の許可した飲食物だが、場合によっては誰か手作りクッキーを用意してもらうのもいい。個人的には奈良岡印のホームメイドものを希望。
- ・ただ飲み食いするのもあれなので、何かかくし芸があってもいい。

こずえや水口、金沢、その他もろもろに声をかけてアイデアを集めていた。金沢はまだ記念クラス画集の最終チェックが終わっていないので話を右から左に流している様子だったが、他の連中はそれなりに考えているようで、

「かくし芸かあ、だれか『かっぽれ』とか『どじょうすくい』とかやれねえかな」

「手品とかヨーヨーとかはどうだ？」

「持ち込みできる楽器使える奴いないか？」

様々な案が出てきた。貴史もあまり気づかなかったのだが、三年D組の連中は自分で宣伝こそしないものの何気なく特技を隠し持っているらしい。フルートやギター、ハーモニカなどといった定番ものから始まって趣味のマジック、ヨーヨー使い。あまり学校の授業には役立たないし披露する機会もなかったのでだんまりしていたが、この機会にオンステージやってもらうのも悪くはないような気がする。

「ま、面子がしけてるけどな。ニクラスしかいねえし。うちとB組だけ」

「いいじゃんそれで。じゃあさ羽飛、芸人さんたちに声かけておこうか？ やっぱり楽器ものだと準備もいるだろうし。早めに話しくよ」

話のわかるこずえがすぐに胸を叩いた。

「よっしゃ。これで盛り上がるぞ！ んで、司会はどうする？」

「そうだよねえ」

隣の美里が首をかしげた。

「そこ、考えてたんだけど、ふつうだったら私と立村くんなんだろうけど」

すぐみな、理解したように俯く。そうなのだ。当然教室に立村の姿はない。あればこんな話できるわけがない。

「やっぱり、貴史と一緒にだよ」

「じゃあねえだろ。今更どうすんだ」

「わかってるんだけどね。あの人出る気あるんだろかって」

難しい問題ではある。今のところ立村にさりげなくこずえ経由で誘いをかけてもらってはいる。一度は貴史も「お前、来る気ねえの」と声をかけたこともある。しかし立村の態度は曖昧というよりも、否定に近い「考えておく」だった。まずこのままだと無理だろうと思う。

「じゃあ羽飛と組むってことで話、進めときなよ。それと彰子ちゃん、クッキーの準備はいいかが？」

昨日の修羅場主人公とは思えない笑顔で、ふっくらお嬢さまの奈良岡彰子はガッツポーズを試みせた。

「もちろん！ ニクラス分だったらたくさん粉と卵と、とにかくクッキーの材料必要だよ。今日帰りにまとめて用意してくよ。こずえちゃん、美里ちゃん、手伝いに来てね」

「もっちりーん！」

ふたりの女子が声を合わせて拳を振り上げた。

相変わらずのやり取りのあと、貴史と美里と一緒に帰り道を急いだ。

別にいちゃつくわけではなく細かな打ち合わせがとにかく多いのだ。

もちろん、獅子舞もどきの練習も含まれてはいるのだが。

——あと三日もねえのに大丈夫かよ、まあいっか。

空の景色はかすかに和らいでいて、冬の風もマフラーの隙間から迫ってくる気配はない。日も少しずつ伸びてきていて道端の雪も溶けつつある。砂利道の石はころころ足に転がってくる。

「貴史、あそこ見なよ」

美里が指を差す方向を貴史が見やると、木々に花らしきもののつぼみが見える。

「もう桜か？ はええなあ」

「違うよ。たぶんあれ、梅」

「区別つかねえ」

ピンク色の花であればすべてが梅と思い込むのも何かとは思っているのだが、男子ゆえに風雅には欠けている。責めるなど言いたい。

「けど、桜もね、ソメイヨシノはまだまだ先だけど早咲きの桜は少しずつ咲いてる。うちの学校でも見かけたよ。たぶん卒業式あたり、咲くんじゃないかな」

「ソメイヨシノが咲くのってテレビでやってたが大抵五月だろ」

青湯の春は遅い。

「そうだね。このあたりはね。でも、一本でも二本でも桜が咲いているならいいじゃない？ あんたには梅でも十分かもしれないしね」

「いわゆる桃の節句ってのもあるがどうなんだよ。もうとっくの昔にひな祭り終わってるがな」

あまり花に興味のない貴史としては、適当にうっちゃうしかない。美里は花咲きかけの幹に近づいて、じっと見上げると、

「早咲きの桜みたい。まさかこんな寒いのに桜なんて早すぎると思ったけど」

——わけわからねえ。

貴史のつぶやきなど意に介さず、うっとりつぶやいた。続けて、

「立村くんには、声かけたんだよね」

再度確認を求められた。もちろん答える。嘘ではない。

「曖昧に逃げられたからなあ。あいつ、多分その気ないだろう」

「そうだよ。わかってる」

手を伸ばし、桜……なのかなんなのかわからない枝に美里は手をかけた。つぼみに触れはしなかった。視線をその枝に向けたまま、

「じゃあ、卒業式まで三人で話すこと、できそうにないね」

「だろな。あれだけ避けられてちゃあしやあねえ」

貴史の本心を美里がどこまで見抜いているのかはわからないが、

「私たちがどれだけ立村くんのこと、心配してたかってことも、きっと気づいてくれないよね。私たちのこと、もしかしたら嫌っちゃったかもしれないよね」

「いやあ、嫌いはしねえだろうけど、うざいとは思ってるだろうなあ」

交ぜっ返すと美里はため息を付き、枝から手を話した。

——このままかもしれねえなあ。

あと三日で卒業式。いくら青潟大学系列の付属校といっても、高校に進学すれば少しずつ距離も広がる。ましてや立村は英語科だ。先輩たちの話を聞く限り、英語科に限り持ち上がりとなりクラス替えで同じになることはない。今は多少の寂しさがあるかもしれないが、自然と「中学時代の同級生」というスタンスで落ち着いていくのだろうとも思う。

それはそれで仕方ないことなのかもしれない。

三年間同じクラスで喜怒哀楽を経験し、時には停学すれすれの悪さもやらかしたり、殴り合いしでかしたり、いろいろあったけれど、立村にとっては貴史の思っている程の未練などないのだろう。遠くから様子を伺ってはいるけれども、立村はクラスを避けるようにしてE組に潜り込んだりしている。理由は明確で、英語答辞の練習とごまかしているけれどもできる限り同じクラスの奴らと顔を合わせたくないという意図が見え見えだ。

こちらは無視してやればそれですむのかもしれない。しかし。

——せめてな、きっちり話、付ける機会あればな。

「貴史、ひとつ提案していい？」

美里は桜の枝に背を向け、ちらと振り返りながら貴史と肩を並べた。

「なんだよ、いきなり。また妙なこと思いついたんじゃねえだろな」

「立村くん、手紙、書かない？」

思い切りずっこけそうになる。土が少しぬめっている。

「手紙かよ、誰がだよ」

「あんたと私」

「俺がか？」

自慢じゃないが手紙なんてものは年賀状をいやいや書かされるだけで勘弁してほしいものだった。美里は続けた。

「このままだとたぶん、私たちと立村くんとはこれっきりになっちゃうよね。友だちでもたぶん、いられなくなると思う。クラスのお楽しみ会にも顔を出さないとなると、たぶんクラスでも浮いちゃう。もともと立村くんは女子受け悪いし、菱本先生と顔を合わせるのも嫌がってるからしょうがないよ。でもね、高校があるじゃなあい？ 私たちはおんなじ高校に進学できるじゃあない？」

「まあそうだな」

「でしょでしょ？ 私ね、もう、いざこざかかえたまんま卒業しちゃうの嫌なの。うやむやで終わるかもしれないし、それっきりといえはそうかもしれないけど、もうおんなじことしたくないの」

「はあ？」

とぼけた答えをしてしまったが、「おんなじこと」にひっかかる。

「美里、卒業経験は俺の知る限り幼稚園と小学校しかねえと思うんだが、おんなじことお前してたか？」

言葉を飲み込むようにし、美里は立ち止まった。目を伏せ、手袋をはめた指を何度も折った。空を見上げ、

「あった、後悔してることある。あんたもよっく知ってること」

「なんだそりゃ」

周囲には誰もいなかった。声が大きくても聞かれない。聞いているのはつぼみの木々のみ。

「小学校のこと、覚えてるでしょ」

「そりゃまあ四年前のことだし。忘れてら別の意味でまじいだろ」

「ふざけないで聞いてよ。立村くんのことなんだから」

「小学校と立村とどう関係あるんだ？」

ぽんぽんと、テンポよく美里は貴史に語りかけた。口ほど怒ってはいないようだった。

「あんた、木村と連絡とってる？」

いきなり話が飛んだ。小学校時代同じクラスでサッカー部のエースストライカーとして大人気だった木村のことだろう。つい最近も一緒につるんでゲーセンに行った。頷いた。

「あっそか。じゃあ小学校時代の友だちがみんなどうしてるか知ってるよね」

「当たり前だろ。お前がどうだか知らんが」

「連絡なんて全然取ってないよ。あんなに仲良かった詩子ちゃんとだって、絶縁状態」

「あれま、おっとしだったかあいつの日舞の発表会行っただろが」

「あれで終わり。もう完全に私のほうから縁切ったの」

——やっぱりそんな面倒な展開になってたのかよ。

気づかない振りをしてはいたのだが、やはりそうかと得心する。木村もゲーセンで、「頼むから清坂と藤野を仲直りさせてくれよなあ」と他力本願な頼みごとをしてきたので気にはなっていた。もちろんシャットアウトしたことは言うまでもない。

「そんな気はしてたがな。そこまで言うなら理由も白状しろ」

「一緒にいて、楽しく思えなくなっちゃったから。何様って感じでしょ」

「まあそうだ」

「でも、私にとってはすごく大きいことだったんだ。小学校の頃はそりゃ、詩子ちゃん私の親友だと思ってた。あの、五年の時の、あのことが起きて、あんたに言われた通りのこととして、それで私が完全に笑いものにされた時」

「美里お前意外とねちっこいと違うか」

「黙って聞いてよ。あんたのこと恨んでないから安心しな」

さらっと美里は答えて続けた。

「詩子ちゃん、すごく私のこと心配して寄り添ってくれたよ。クラスの女子たちに私のこと、お馬鹿さんだとか赤ちゃんだとかいろいろせせら笑われたり同情する振りして陰口叩かれたりした時だって、一緒にいてくれた。感謝しきれないよね」

——ああそうか。そんなことあったな。

小学校五年の秋、美里がさまざまな事情が絡み合い教室でトイレに行きそびれてその、なにとなったことがあった。事情は貴史も始まりから終わりまですべて把握しているし、真実をクラスの連中に告白するよう促したのも自分だった。そのほうが、曖昧にごまかしているよりも美里や関係者のためにより方向に進むんじゃないかという、自分なりの判断だった。

「相当恨み真髓だとは思うんだが、俺が悪いならもっかい謝っとく。すまん」

「だから、貴史は悪くないよ。話そらさないでよ。本題ここなんだから」

美里はわざとらしく笑った。貴史を慰めるように。

「私があそこで、しちゃった時あんたがかばってくれたからばれなかった。けどあのままだとすっきりしないから本当のことを全部話した。それは間違っていないと思う。今でもあんたが言ったことは正しいと思うし私も、立村くんみたいに過去のことを引きずらなくてもすんだし。誰かにあのことを今の段階であてこすられたりばらされたりしても、今の私なら、あなたトイレ行けなくて大ピンチになったことないのって言って反撃できるしね」

「あのなあ、もう少しデリカシーってもんを」

「あんたに言われたくないよ。とにかく、あんたがクラスみんなに、私が教室で図工の時間中おもらしたってことを白状したことは後悔してない。ただ、あのあとのみんなの反応だけは、想像できなかつたし、その件だけはとっでもしんどかつたってことはあるの」

空気が冷えた。美里が同じようなことを口にした日のことを思い出す。確か去年の秋だった。評議委員長改選に伴うよしなにまつわる出来事だった。

「あんたもきっと予想できてなかったと思うししょうがないよそれって。それに貴史はそのあと

も私をかばってくれたもんね。詩子ちゃんも他の女子から軽蔑された私を全力で守ってくれた。本当に大好きだったんだよ、詩子ちゃんのこと。詩子ちゃんが私と一緒に青大附中受けると言い出した時も、最初は嬉しかったんだ。けどね」

美里は首を振った。

「青大附中の受験勉強のために塾行ったりいろんな友だちと話をしていくうちに、何かが違うって思うようになったんだ。どうしてだろうね。あんたとはそんなことなかったのに、詩子ちゃんの見ている視点と私の見ているところが全然変わっちゃったんだ。あんなに懸命に私のこと好きでいてくれる詩子ちゃんの世界とが違うって、思えちゃったんだよ。卒業式前にあの沢口の奴から、父母の人たちも並んでいる前で、『清坂、三時間も体育館にいるんだからトイレに行ってくい。また、五年五時間目の図工の時間みたいに椅子の下に水たまり作るぞ』とか大声で言われたりしてその時詩子ちゃんがすぐに『それ清坂さん以外の人も同じ立場ですよ。あやまってください』とか言ってかばってくれて。そんないい子なのに、どうしても離れてしまったのはなんでだろうね。私もわかんない」

ここまで一気に言い切って、貴史を見つめた。

「これは私のことだからね、立村くんの立場とは違うと思う。けど、もしあの頃に戻れるんだしたら私、詩子ちゃんときっちり話し合いをしたよ。違和感あった段階で、詩子ちゃんと一緒に私の部屋にこもって、こうこうこういうわけなんだけどどう思う？とか全部洗いざらい話したと思うんだ。詩子ちゃんも、仲良しだった小学時代だったらきっと本音でぶつかってきてくれたと思うし、お互い納得できればやり直せたと思う。卒業式までに、それ、なんでしないでなあなあにしちゃったんだろう」

「すぐ青大附中のオリエンテーション始まっちゃったからなあ」

「それあるね。すぐ青大附中の友だちたくさんできたし、こずえをはじめとするたくさんの友だちと遊んでるほうが楽しかったし。だからかもね。何が違うんだろうってことがだんだんわかってきたんだ。詩子ちゃんだと話していても物足りない理由ってのが、なんとなくわかってきたんだ」

「歯ごたえか」

思いついた言葉を貴史はぶつけてみた。美里も頷いた。

「ビンゴ！ そうだよ、それぞれ。小学校時代の友だちとたまに会って話をしても、やはり違うって感じちゃう。詩子ちゃんに日本舞踊の発表会で会って話しても、違うと思っちゃう。あんなに仲良しでいられた友だちなのに、環境変わっただけでこんなに離れちゃうなんて、思ってなかったんだ。今でも悲しいよそれ」

「率直な疑問なんだけどなあ、木村経由で藤野が美里と仲良くしたがつるって情報は上がってきてるぞ。あ、一応言っとくとあいつらはまだ付き合ってるねえが、木村自身は藤野をなんとしても射止めるべく狙ってる」

「そうなんだ、一途だね木村くん」

美里は笑い、貴史の隣りに寄り添い直した。

「私ね、もう詩子ちゃんと顔を合わせて語り合っても、たぶん戻れないと思うんだ。勘なんだけ

どね。学校が違うとかそういう問題じゃないの。もしもう一度友だちに戻ったとしても、小学校時代のように一途に親友にはなれない。なるとしたらいっぱい、本当に山盛り語り合わなくちゃいけないんじゃないかって思うし、そこまで語り合うだけのエネルギーも私にはなくなっちゃってる」

女子の見切りの早さなのか、とも思う。貴史からしたら美里の方から藤野詩子ともう一度友だちになろうと手を伸ばせば丸く収まるんじゃないかという気がしてならない。美里もそこまで引きずっているのならさっさと握手して終わらせろとも思う。ただ、そこまでしたいという気も本当はないんじゃないか。むしろそうしなかったからこそ、後悔のかさぶただけが残りひりひりしている状態にも見える。

「昔話はこれでおしまい。貴史、ここからが私の言いたいことだから早く頭切り替えな」

後頭部をぽこんと叩かれた。

「今のは私の失敗談。失敗は成功の父とかいうでしょ」

「なぜそういう方向に話が飛ぶ」

「今、私たちが置かれてるのって、三年前の私と同じなの。立村くんをめぐっていろいろごたごたあったけど、これから先卒業してあの頃と同じつながりを持ってられるかってこと」

ふうっと貴史は息を着いた。確かに、そうだ。

「けどまあ同じ学校だし大丈夫じゃねえ？」

「私も最初はそう思ったよ。でも、時間が経つにつれて私たち三人の間でも、熱みみたいなものがだんだん覚めてしまってなあなあになっちゃって、自然消滅になるような気、しなくない？」

「まあ、だがそれこそ自然な成り行き」

「貴史、さっき私が話したこと全然聞いてないでしょ！ 私が言いたいのは、それって嬉しい？

立村くんと縁が切れてラッキーと思う？ 立村くんと友だちでいられなくなって寂しくなあい？」

「まあ、面白くはないわな」

「そうだよね、貴史、あんたもそうだけど私もおんなじ。付き合う付き合わないは別として、廊下ですれ違っておしゃべりしたりたまにどこかの公園行って遊んだりとか、そういう普通の付き合いしたいよね」

言われてみればそうだ。

「私も卒業してから改めてさしで話そうかって、あんたの案に賛成してたんだけど、たぶんそのあとからだど互いに忙しくなって流されてしまって気がつけば終わってたっていう、私と詩子ちゃんと同じパターンになりそうな気がするの。わかるよね」

「ああ、確かに」

「だからこそ、今、できることを考えたら、一番いいのは手紙かなって」

美里がやっと結論にたどり着いた。

「立村くんは直接顔を合わせたがるだろうし、さしでの話はまだ逃げられると思う。私も無理強いしたくないし。でも手紙だったら、向こうの都合で読んでもらえるし、それでスルーされ

たらそれはそれで仕方ないよ。でも、最後の最後だし想いを詰め込んだ手紙一通くらい書いたっていいじゃない？ あとは立村くんがどう思うかに任せて」

「美里、お前さ」

ひとつ、尋ねた。美里の熱い想いを冷ますつもりではなく、

「藤野にもそうしとけばよかったって思ってるんか」

美里は答えず、三歩歩いたところで頷いた。

霜柱立つ日まで 100

家で手紙を書くのはなんだかめんどくさかった。ふたり、どちらともなく駅前に出て、ハンバーガーショップに入りそこでもう少し相談することにした。

「おねえちゃんがしつこいからね」

「聡子姉ちゃんそういえばどうしてる」

最近、美里からは聡子姉さんとの姉妹仲が悪化しているかどうか聞いていなかった。正月に顔を合わせたりくだらないネタ話はよくするけれども、大抵美里は間に挟まっていないことが多い。

「また新しい彼氏作って遊んでる。うちの父さん母さん気づいてないけど」

「なんでお前だけ知ってるんだよ」

「そりゃそうよ。毎日見てたらわかる」

それ以上美里は口に出さず、途中買ってきた便箋を鞆から引っ張り出し貴史に一枚手渡した。

「はい、下書き」

「ほいな」

やっぱり勢いで書くのは危険という判断だろう。宛先が立村なら至極当然だ。

「一気に書いてみて、それからにしようよ。お互い読み合わせたほうがいいかもしれないし」

「通信機密ってのはどうなるんだよ」

「知らないそんなの、さっさと書きなよ」

面倒くさそうに美里はフライドポテトを一本ずつつまみながら、便箋に向かい勢いよく書き始めた。溢れんばかりなんだろう。言いたいことが。そりゃわかる。

まだ春休み前の制服姿連中がたむろう店内で、ジュースと一緒にフライドポテトを一パックのみ……貴史が止めたのだ。あさっての卒業式で獅子頭役の美里を背負う貴史の立場をよく考えてダイエットに励めと説教済だ……注文し、頭を付き合わせている。おかつ髪的美里はそういえば青大附中に入学してからほとんど髪型を変えてないような気がして、改めて貴史はまじまじと美里を観察しのした。

——小学校のときは、やたらと手間かかる髪型してたもんなあ。

貴史も白い便箋をじっと見つめて、何を書くべきか考えるつもりだった。

なのに、気持ち別の方にふらふら動く。ついフライドポテトに手が伸びる。美里に注意された。

「だめ！ 私の分まで食べないで！」

「俺はお前を背負うのにエネルギーが人一倍必要なんだっつうの。早く書け！」

——美里の奴、まだ五年のあの事、引きずってたのかよ。

気がついていないわけではなかった。

何度かふたりきりの会話でその事が話題に上がることがなかったわけではない。もっと言うなら美里もある時期から自分で開き直ってクラスの前でしゃべってしまったこともある。女子にとってはもちろんこっ恥ずかしくて穴にでも入りたいことかもしれないが、貴史が男子のせいだろう、所詮最後はお笑いで終わると軽く見ていた。

——けど、もう四年も経ってるんだけどなあ。

小学五年の秋のこと。美里はたまたまクラスの女子がトイレにまつわる大失敗をしでかしてしまい、懸命にかばおうとした。女子特有の面倒くさいことがいろいろ関係していたらしいが、悪意ではなかったと信じている。しかし、それが回りまわって他の女子たちとぶつかり合う羽目になり、せっかくかばってくれた藤野詩子の配慮も虚しく美里はとんでもない勝負事を敵方と約束してしまう。

——人前で粗相をしでかしてしまう前になぜ、トイレにダッシュしなかったのか？ いくらでも選択肢があったはず。なのにしてしまうんだったらただ椅子に座ったまま誰かが世話してくれるのを待つのではなく、自分で片付けるべき。

美里が言い募った結果、そんなこと机上の空論……. 当時はそんな言葉知らなかったが……. と反論した女子グループに追い詰められ、美里は実際それができるかどうかを身でもって試すことを宣言した。すなわち、

——授業中小便たれてそのあと「私片付けます」とか先生に報告して、雑巾もってそのへん拭けてことだよな。

もし、前もって貴史が聞いていたらどんなことがあっても美里を止めただろう。たぶんぶん殴るかなにかしたかもしれない。トイレに閉じ込めて一日出さなかったかもしれない。五年生のガキが考えるレベルだからろくでもない内容かもしれないが、少なくとも五時間目の授業中、スカートと椅子の下を水浸しにして顔を真っ赤にして泣きじゃくるようなはめにはならなかったはずだ。

美里はそのあたり昔から、自分がなんでもできると勝手に思い込んでしまうところがあり、貴史はよくその後始末をさせられたものだった。当時の記憶を引っ張り出して思うのは、まず美里が最初にしでかした張本人だったとしても、理想とする行動ができたのかどうかと考えると100%無理、絶対その場で泣きじゃくっているという確信がある。

——美里がちびっちゃまった状態であのまま放っておいたら。

事が起きて美里が自分の作ってしまった水たまりにおののいていたのに気づいたのは、あの時貴史だけだった。あの時即、水をこぼしてごまかした貴史の技は我ながら賢いと思うし、あの一件だけでも今後美里からフライドポテトを一生分おごってもらっても不思議はない。実際は美里の泣き顔を見ただけでまあそれでいいやと納得したので要求はしていない。

だが、美里にはいくつか話していないことがある。

——実は、あの時の美里のやっちゃったことは、他の奴らや担任にもばれてたんだよな。

表向きは貴史が担任の沢口先生にぶん殴られることでうやむやになったような形だけでも、実際のところは、

「清坂が授業中トイレに行きたいと言いだせなくなって我慢できずもらした」

という単純な結論に達してしまっていた。男子も女子もそれは同様だった。美里ひとりがごまかせたと思っただけに過ぎない。だから貴史もすぐに男子連中を捕まえて箝口令を出したのと同時に、そのきっかけが実は別の要因だったのだという説明を行ったわけだ。実際美里は男子たちとうまく付き合っていたのでたまに喧嘩したとしても仲直りできるタイプだった。貴史の後ろ盾も効果があったのだろう、結局美里は卒業するまで、

「五時間め、図工の授業中におもらしたことは、ごまかせたはず」

そう信じていたし、もっといふなら今この瞬間もきっとそう思い込んでいるだろう。ばれたのは、自分がそれを、貴史の助言によりクラス全員の前で告白し、同時に別の問題を片付けようとした時が初めて、そう思っているはずだ。

——違うんだよ美里。足元に広がっていた水たまりは美里のたれた小便だったってことばれてるんだっての。お前ずっと自分が言わなければあんな辛い思いしなかったと思っ込んでるかもしれねえけど、きっかけは違うんだって。

決して、口に出したことの無い真実だった。

五年の秋に起きた女子同士のいざこざをめぐる問題は、表向き解決したかのように見えた。それぞれの価値感の違いで生まれたことだし誰を責めることもできない、これからは気をつけましょうという極めて優等生チックな結論に達した。

だが、その後置かれた美里の立場は、確かに地獄だったろう。

どちらにしてもやらかしてしまったことが、「トイレに行きたいと言えずにその場でもらした」ことには違いない。どういう理由であっても変わらない。小学五年にもなれば誰でも生理的要素や体調不良の報告はできるはず。それができなかったというのは非常に情けなくみっともないこと。美里の投げつけた言葉が跳ね返り、それまで美里を苦手としていた女子たちからの攻撃ポイントとなった。

——確かに自業自得だわなとは思うがな。

「清坂さんは、自分でできなくせに、つい失敗してしまった相手を責めるのが好き」

「実際は自己管理できなかつたくせに。証拠はあれ」

「清坂さんがあの場でやっちゃったって、本人が認めてるんだから」

「頭はいいかもしれないけどおもらしするような赤ちゃん相手にしたってしょうがないよ」

もちろん女子たちも高学年になると露骨に攻撃することはない。そのかわり陰でこそこそと噂話をふくらませる。聞こえよがしにささやく。男子たちが聞き耳立てているところでわざとらしくつぶやく。一方的にいじめられているのならば反撃しやすかつたろうが、この件ばかりは美里の分が悪かつた。結局、美里が選んだのは、家族から勧められていた青澗大学附属中学受験でもって逃げ出すことだつた。成績が良かつたからといふばそれまでだが、もし友だちにもう少し恵まれていたら絶対に公立中学へ進学していただろう。気がつけばこっそり塾に通い始め、必死に勉強し始めた美里の姿を貴史はどこことなく遠く眺めていた。

——五年生にもなつておしつこたれた清坂さんというレッテルから逃げ出したかつたんだ。

「あれ、貴史どうしたの、何考え込んでるのよ」

「まじで名文を研究してるんだ。黙って書いてる」

叱りつけて、目の前の便箋を何度もシャープの先でつつく。

——そういうことか！

はっと、目の前の美里を見る。気づいていない。随分細かく手紙を書いている。もう三枚くらいめくっている。えらい長文だ。

——美里が立村に惚れたように見えたのはそれか！

ずっと貴史は美里が立村にべた惚れだと信じきっていた。

実際美里も一目惚れに近い行動をしていたから、本人もそうだろう。

違う、答えはもっと深いところにあった。いや、貴史の目の前においてあった。

——美里も、立村も、同じ暗い過去があって逃げ出そうとしてただけなんだ。

温風が吹き抜ける店内でなぜか寒気が走る。風邪なんかひいてない。

美里がなぜ、自分を振った……と考えていいだろう……立村を今でも守ろうとするのか。家族だから、それだけじゃない。たったひとり、自分と同じ惨めな記憶をかかえてあがいているように見えたんじゃないだろうか。もちろん、惚れた晴れたの気持ちは嘘ではないにせよ、それ以上にみっともない自分を隠そうとしてあがいている立村を、自分がしてほしかったように手を差し伸べたかったんじゃないだろうか。

——美里は結果として、青大附中で大成功してるしな。

評議としてきっちり結果も出している。なによりも中学二年の宿泊研修時に美里は五年のおもらし事件をバスの中ではっきりとクラスメートに告白している。あの時も別のいざこざが絡んでいたこともあるけれども、D組の連中は誰もそのことをネタにして美里をいじめたりはしなかった。さりげなく過ぎた出来事だけど、もしかしたら美里はあれで少しだけ救われていたのかもしれない。

だが、立村は？

立村は過去が暴露された時に失ったものが多すぎた。結果論にはなるけれど後期評議委員長の座も、生徒会長藤沖との良好な関係も、先輩後輩からの敬意も、その他貴史には見えないところできっといろいろなものをなくしたに違いない。そんなもの気にしなくても貴史は立村を迎える準備はある。だが、それを伝える術が今はない。

——美里は、本当は、助けてほしかったんだ。今自分が立村にやってるように。

——やらかしたことを笑って話せるようになれるように、手助けしてほしかったんだ。

「美里、俺なりに歴史に残る名文をこれから書く予定なんだがな」

「はいはい」

美里に貴史は問いかけた。意地になってフライドポテトを半分消化している美里に、

「正直に言えよ。立村が別のあの、やたらと一部ばかりでっかい女子と付き合ったとしても、まじで友だちでいられる自信、あるのかよ」

「なによいきなり。すごい失礼な言い方だけどそれ杉本さんだよな」

「そうだ、それとだ」

付け加えた。

「もし三人で奇跡的にもっかいしゃべりあえる機会を掴んだ時、お前『実はあ、私、五年の時、トイレいけなくてえ、おしっこもらしちゃったんですう』とか言えるか」

瞬時に机の下から蹴りを入れられそうになったがもちろん交わした。慣れている。

「あんた、せっかくのフライドポテトがまずくなるようなこと言わないでよ」

「とっくに冷めてるから関係ねえよ。それよか俺の質問に答えろ。すっげえ重要なテーマなんだこれは」

顔をしかめた美里は、ふっと片手を広げ、じっと見据えた。

「あんたの下手な鈴蘭優のモノマネなんか見たくないけど、聞きたいことって私がやっちゃった時の話を立村くんに平気な顔でできるかってことを知りたいんだよね」

「その通り。ほら、お前、二年の宿泊研修で杉浦が小便がまんでできなくなっちゃって悶えている時、自分がしでかした過去のことクラスの奴らにしゃべったことあるだろ。あとで杉浦をいじめねえようにってかばったことあるだろ。あんな風にもし、立村に話せるんだったらきっとあいつの気持ちも軽くなるんじゃないかかって思ったんだ」

「なんでよ、全然、話通じないんだけど。なんで私がそんなこと言わなくちゃなんないの！ そんな恥も外聞もないこと言えるわけないってば！」

切れることは予想済み。貴史は畳みかけた。

「違う、俺が言いたいのはマゾっけ出せってんじゃないか。単純に、立村が今どん底にいるんだったら、美里だっておんなじ立場にいたし、現に今は平気でつらつと言えらるだろ？ 十分立ち直ってるだろ？ 小学校の時は逃げるしかねなかったけど、今は言い返せるってな。言っただろ自分で。それに、あいつがどんなへまやらかしたって俺たちは待ってるし、今じゃなくたってその後でも、またって」

美里はうつむいたまま、すでに書いた五枚の便箋をじっと見つめていた。丸っこい字で可愛らしく、立村への想いを綴っているかのようだ。貴史がさらに言葉を継ごうとした時、

「そんなじゃない！」

小声ではっきりとつぶやいた。

「貴史、あんた気づいてないよ。立ち直ってなんかない」

「だってなあお前、宿泊研修のバスの中で」

もう一度説明を繰り返そうとするのを美里は激しく首を振り遮った。書いた五枚の便箋を丸めて玉にした。でかかった。

「貴史、あんた私がああバスの中で、なんであんなことしゃべったかわかる？」

「だからなあ、杉浦がやっちゃった時のための保険だろ」

それしか考えられない。それ以外の発想なんてありえない。美里はまた首を弱く振った。

「私と、加奈子ちゃんがあの時どんな関係だったか、わかって言ってるよね」

「まあ最悪ではあったよな。けどやっぱ評議だし義務果たそうとしただろ」

「違うんだってば！ 貴史、あんた、ずっと私に騙されてたの！」

小声で、でも聞き取れる声で。幸い店内のBGMはロックがががががかかっているせいか他人に聞かれずにすみそうだ。

「騙すたってそんなマジックみたいなことできるかよ」

「ちやかさないで！ 私、そんな性格良くない、絶対良くないもん！」

「美里、おい」

息もつかせず、声を低めたまま、美里は丸めた便箋をぎゅうと両手で握り締めた。身体を震わせている。

「私、あの時ね、加奈子ちゃんを助けたいなんてこれっぽっちも思ってなかったの。私、私」

「けど結果的には」

「違うってば！ 私、本当は加奈子ちゃんをあこのバスの中で」

震えが止まらない美里に、貴史は手を伸ばしかけた。美里が振り払った。

「じゃあっと、させたかったの。五年の時の私みたいに」

——はあ？ 美里、それ嘘だろ？ てか、物理的にどうつながるんだ？ わっけわからねえ。

とんでもない告白に、貴史の手が止まった。まだ身体を震わせえている美里に、貴史はもう一度問いかけた。

「杉浦に小便たれさせたかったって、けど美里のやってたことはどう考えても杉浦かばってることだぞ。あんな真っ黒い過去をだぞ、俺を含む男子の前で言っちゃもうってのは」

「そうだよ、貴史も他の子もみんな私がかばったって思ってるよね」

美里はうつむいまま言葉を続けた。ぽたり、ぽたりと何も書かれていない便箋の上に雫が落ちている。

「そう見えること、計算してたんだもん。当然だよ。私、トイレ行きたい時にトイレの話されたり、トイレ行きたいってこと男子に知られたりしたら、きっとあせってやっちゃうんじゃないかってなんとなく思った。加奈子ちゃんがピンチだって聞いた時、評議私だけだったし、なんとかしなくちゃって思ったよ。けどあれがこずえとか別の子だったら私あんなこと絶対言わないで、こっそり励ますとかしてた。がまんしてるところばらすなんて絶対に、しなかった」

「美里、お前」

言葉が続かない。美里の口走る内容は、貴史の想像範疇をはるかに超えていた。すすり泣きながら、それでも美里は告白を続ける。

「一年の時立村くんの裏・班ノートのこと加奈子ちゃんと喧嘩になっちゃって、その後あまりにもひどいやり方で立村くんが誤解されちゃって、でもちゃんと反撃できてなくて、あの時の私、悔しかったんだ。立村くんが女子に嫌われて辛い思いひとりですしてるのに、加奈子ちゃんひとりがのうのうとしてて、いつか絶対やり返すって決めてた。あんなやり方じゃなくて、だけど」

忘れかけてた「裏・班ノート」を思い出す。すべてはあれが発端だった。

「だから、あの時、加奈子ちゃんがじたばたしてた時、私、本音言っちゃうとざまみろって思った。がまんする仕草とか見てて、本当にぎりぎり切羽詰まってるってことがわかったから、ほんとは評議として助けなくちゃいけないってのはわかっているけども」

美里は喉を詰まらせつつ、うつむいたまま語り続けた。

「もしあのバスの中で、加奈子ちゃんがおもらししちゃったら、立村くんの決闘の過去なんて関係ないくらいに噂になっちゃうよね？ そりゃ、評議だから絶対誰にも言わないでって口先では言ってたと思うけど、この前のロングホームルームの時みたいに必ず誰かから他のクラスにばれるよ。ばれたら私がおもらししちゃった時以上に、『あの子中学二年なのにバスに乗る前にトイレ行くの忘れててその場でやっちゃったんだよ。常識ないよね』って馬鹿にされちゃうよね、きっと、五年生なんてまだまだ子どもだよ、中学生だよって、きっと」

——そういうもんか？

貴史はただ黙って聞いた。

「けど、結局、加奈子ちゃんは女子のみんなが守ってくれた。そりゃ、ちょっと、あの場所にいるいろいろしたから恥ずかしいこともあったと思うけど、男子たちも加奈子ちゃんをそのことでいじめたりはしなかったよね。立村くんや、私みたいに、惨めな思いをして、笑われたり嫌われたりなんか、しなかったよね？」

「美里、それは」

「私、最低。加奈子ちゃん、今だに私があの時助けようとしてたってこと、疑ってないの。おもらししないですんだのは私のおかげだって、真顔で言うの。とんでもない大嘘なのに、私、今でも加奈子ちゃんに嫌われないですんでるの。小学校の時みたいに実はそうでしたって告白すればよかったかな、でもそんな勇気なんてない。私、下衆もいいとこだよ。嫌われて当然こんな私！」

丸めた紙を握り締めたまま、美里はうつむき顔を覆った。声を殺して泣いていた。

——そういうことだったんだ。

不意に浮かんだ、五時間目と六時間目を使い立村の今後について熱く語ったロングホームルームの光景。あの時、杉浦加奈子のいじめ問題を議論しつつ、当の杉浦に意見を求めた時、

——二年の、宿泊研修の時、私がバスの中で大変なことになった時、清坂さん、一生懸命私のこと、助けようとしてくれたんだもの。私のことなんか無視したってよかったのに、私のことかばってくれて、あんなことまでしてくれて。嫌いな子にもやさしくしようとしてくれる清坂さんのこと、私絶対に、絶対に、嫌いになんてなれないもの、

泣きながら訴えていた。その時なんとなく美里の対応が不自然だったような覚えがあり、貴史も少し疑問を感じていた。どう考えても杉浦加奈子に問題があり、美里は立村をかばう上で勝者であるべきだった。当然もっと責め立ててもよかったはずだ。それがためらうことなく杉浦の傍に寄り、手を握りしめて何度も頭を下げていた。なぜなのか、ずっと心にひっかかっていたが、今の言葉通りであればすべてパズルピースがはまる。

——だから美里はあんなに必死に、杉浦に謝ってたんだ。自分が本当は杉浦に大恥かかせようと思ってたってことわかったから、そのことを目に見えない形で必死に頭下げたんだ。美里は、ずっと、あのことを。

美里にとって五年の出来事は、終わっていなかったこと。今知った。

——終わらせてやりたい。

今だけは立村への手紙など後回しでよかった。ただ、美里だけに触れたかった。

貴史は手を伸ばした。美里の頭に手をやった。本能だった。ふっと真っ赤に頬を染めた美里が顔を上げた。涙で頬はぐっしょり濡れていた。

「もういいだろ。お前とっくに杉浦にあやまっただろ」

「そんなことない、だって事実知らないんだよ」

「馬鹿、知ってどうするよ」

今、美里が欲しがっている言葉だけはわかる。それが物心ついた時から傍にいた貴史の特権。「お前がどう思ってようが外野から見たら美里は十分杉浦かばってるし恥もかかせなかった。他のクラスにばれていじめネタにもならなかったし、杉浦もめっちゃ感謝してる。気持ちどろどろの状態でそこまでできたのは、美里が五年のじゃー事件でめげなかったからだろ。もし俺ならできねえなあ。絶対、バスの中大洪水にさせちまってる」

「貴史、私、そんな」

「よくがんばったな、美里」

貴史は何度も美里の頭をさすってやった。

霜柱立つ日まで 101

手紙は二日かけてしっかり書いた。

美里とも打ち合わせた。

「いいよ、貴史。これで行こう」

一通り目を通した後、美里は自分の用意してきた手紙を貴史の目の前で破り捨てた。やたらと女子っぽい花飾り付きの封筒だというのに。

「私ね、何度も書き直したけどやっぱりピンとこなかったんだ。いくら書いても、あんたの言った通りのこと書いてみても、全然なんだよね」

二つに破いた手紙はすぐに拾い上げて、ポケットにしまいこみ、

「けど、あんたの手紙読んで私の言いたいこと全部入ってるって思った。これでいいよ。余計なこと言わないで、貴史の手紙だけにしようよ。けど、ひとつだけお願いあるんだけど、この手紙、あんなぺらぺらなレポート用紙に書きなぐるなんてことはやめてよね」

「いや、もちろん俺なりに書き直すつもりだったがあ」

貴史なりの下書きのつもりでいたが。

「そう見えないよ。あんた、しっかり普通の便箋つかってちゃんと書いてよ。いい加減な手紙だったらいい加減に無視されて終わっちゃうかもしれないよ」

美里の言い分も納得できるものがある。この機会だ。しっかりと筆使って書いてやろう。

「母ちゃん、俺の書道の道具どこ行ったっけ」

「なにいきなり変なこと言い出すのよ。貴史、あんたの部屋のどこかに埋もれてるわよ」

美里と獅子舞の最終確認を終わらせた後、貴史は部屋に戻った。卒業式前日、羽飛家も清坂家もあたふたしている様子だが、今日はたまたま美里の母さんも揃い「母ちゃんず」同士の盛り上がりを見せている。今夜はかなり遅くまで居座るらしい。イベントが多い我が家、いつものことだ。

「じゃあおばさん、ちょっと美里と明日の卒業式の打ち合わせあるから、俺の部屋に連れてっていいかなあ」

小学校時代と違い一対一で美里とふたりきりになることを、互いの両親が気にしている嫌いがある。嫌がるわけではないけれども、何かとお茶を持ってきたり話に割り込んできたりといろいろうるさい。それが面倒で美里と話をする時はできるだけ外で打ち合わせるようにしてきた。だが今日はさすがに、部屋で最終確認しないとまずい内容だ。「母ちゃんず」にも割り込まれたくない。外で筆を使う根性はない。

「あら、おふたり仲良く何するの？」

からかうように美里の母が呼びかける。もちろん冗談めかしている。

「ちょっと、先生たちへの手紙を書いたりいろいろ準備があるんだ。な、美里？」

すぐに美里も頷いて、

「そうよ。母さんたち知ってるじゃない。卒業式が終わったら生徒たちだけで卒業パーティーやるんだって。その打ち合わせよ。内緒の仕込みもあるのよ。菱本先生をびっくりさせたいから」

「母ちゃんず」は面白そうに乗ってきた。貴史と美里のふたりがやらかすことは、中学時代において特段問題を起こしたことなどなく、唯一立村がらみの一件だけが「汚点」にはなっているもののきわめて優等生なさん年間を過ごしてきている。

「だからこればっかは、ふたりでの打ち合わせがどうしても必要ってわけ。もし心配だったら食い物の補給大歓迎だから、んじゃ、よろしく！」

「たあちゃんには負けるわねえ」

先手を打って余計なかんぐりを防いでおくことには成功した。

急な階段を昇ってふたり貴史の部屋にもぐりこんだ。相変わらずの散らかった部屋ではあるけれども、美里はいつものように足を伸ばして、たたんであるミニテーブルを引っ張り出した。

「とりあえずはこれよね。それと書道セットはどこよ」

「ああここにあった」

本棚の上に挟まっていた黒い書道セットバックをとりだした。書道の授業はしばらくなく、最近使ったのも年賀状や書初めの時くらいのもの。墨汁も手紙を書く程度の分は残っていた。文鎮など習字に必要な道具は美里も手伝って並べ、半紙を取り出したが、

「やっぱり、半紙じゃないよね。ぺらぺら過ぎるし」

との意見によりシンプルな和紙の便箋を用意することにした。美里もその辺りは手抜きなく準備済みだった。

「てなわけで、清書だな」

「あんた細い筆、これでいいの」

美里が墨で真っ黒けの細筆を取り出して手渡した。

「俺はこれでも習字で余裕の花丸だったんだぞ。なめんなよ」

嘘ではない証拠だ。美里と向かい合い、レポート用紙の手紙を持たせてそれを見ながら綴ることにした。ただ写し取るだけなんだから余裕ではある。

墨をほんの少し付け、呼吸を整える。一気書きだ。



立村へ

お前がこの手紙を読むのはたぶん、家でだと思ふ。だから捨てたかったら捨てていいし、文句言いたかったら電話かけてきていい。どうでもよかったら忘れてもらっていい。こんなこっぴどかしい手紙を書くのは俺も、人生においてたぶん最後じゃないかと思うので、とにかく読んでもらうだけ読んでもらえればそれでいい。お前もこういうべたべたしたのりが嫌いなのはよく承知しているけれども、どうせ卒業するんだし、一回くらいはあっていいだろってことで、こう書い

ている。少し我慢して読んでくれ。

まず最初に、俺は立村と友だちになれて、よかったと感謝している。

こうやって書くとは照れくさいけれども、本当だ。

入学式の時、出席番号が続いただけだといえばそれまでだけでも、本当に立村と話が出来て、お前と一緒にD組にいられて、よかったと思っている。

何よりも、俺はお前から、信じられないほどたくさんのことを教わった。

口で言っても嘘くさくなるだけなので、全部書く。



目の前で美里が頷いている。ちろちろ貴史の綴る文字を覗き込み、

「あんたさ、高校の芸術科目選択絶対書道やりなよ」

つぶやいている。返事はしないが答えはNOだ。すでに美術を選ぶと決めている。



去年の秋から今日までの間、俺は美里と一緒に三年D組を仕切ることになった。

最初は、立村が立ち直るまでの間だと思っていたわけなんだが、結局今日までこういうこととなってしまった。もちろん、予想もしてなかったことだったし、いったい何をやればいいのか自分でもわけがわからなかったというのが本音だ。

といっても、何をやったわけでもない。既に天羽はどんどん準備を進めていたし、生徒会との兼ね合いなど面倒なことはみんな片付けてくれた。俺はただD組のことだけ考えていればよかった。天羽や難波、更科には押し付けてしまって悪かったと思うが、しょうがないだろう。ただ、その分D組を見直すことはできたんじゃないかと思う。俺なりに毎日、このクラスに足りないものはなんだったのか、立村はこのポジションで何をしたかったのか、真面目に考えた。時には金沢や水口、その他いろいろな連中と話をし、確かめた。

そこで得た結論なんだが、俺は今まで、立村に面倒なことを押し付けて、本来すべきことを放棄していたんじゃないかってことだ。

立村、お前はよく言っていた。俺が一番評議にふさわしい人間なのではないかとか、しょっちゅう話していたのを覚えている。そのたびにいつも、俺は腹を立てていた。なんで自分の力に自信が持てないんだろうかと、何度かぶん殴ってやろうと思ったものだった。結局俺がお前をぶん殴ったのは二回くらいで、それで考え方を換えさせることができたかというところとわからない。それはどうでもいい。



「実際ぶんなくっちゃったもんね」

「黙れ、集中させろっての。お前修学旅行の時、写経やらねかったのかよ」

すぐに黙った。ここから先は美里もあまり読みたくない内容だろう。



まず俺が最初に手をつけたのは、女子連中の分裂状態をなんとかすることだった。

このあたりは菱本先生もかなり頭を悩ませていたらしい。

ちょうど菱本先生に子どもが出来て結婚するとかなんとか話が出ていた時期だ。

俺も時々、美里から話を聞かされていたけれども、そういうのは女子だけで片をつける問題だと思って無視してきた。美里も助けてほしいとは言わなかったし、もし助太刀するのならそれは彼氏であるお前しかいないと思っていた。

しかし、よく考えるとこれは、見殺しにするのと同じ行為ではないかと思う。

美里が言うには、お前がしょっちゅう気遣っているいろいろと手を回してくれてたらしい。

もちろん、お前にはそれが精一杯だったというのもわからなくはない。

ただ、この問題に関しては、立村よりも俺の方が適任だったということも、関わってみてよくわかった。

言っておくが、それはお前がだめだからではない。俺がただ、美里と幼稚園の頃からのつきあいであって、詳しい事情をよく知っているからというそれだけだ。

詳しいことは省く。とりあえず問題は俺が間に入ってすぐ解決した。表向きは美里も女子たちとうまくいっている様子だし、これ以上は過保護なんで放置しておくつもりだ。

この一件で理解したのは、今まで俺が見て見ぬふりをして、立村にすべて押し付けてきたつけが全部まわってきたという事実だった。しつこく書くが、決してお前が評議委員として適任でなかったというわけではない。ただ、サポートする相手を美里にまかせてしまい、俺ひとりのほとんどD組で温泉気分でいたのは、間違っていたということだ。

俺はもっと、お前が口に出す前に、たくさんの手助けをするべきだった。

一番後悔しているのはそこだ。

せめて毎年、二回、評議委員なり規律委員なりなんなり、俺が代わってやるとか、そういう風にしてお前の負担を軽くしてやればよかったと思う。青大附中の委員会制度が特殊だから言うわけではないが、もう少し俺は友だちの立場ではなく、委員として積極的に参加すべきだったと反省している。

俺が今まで部活にも委員会にも登録しなかったのは、とにかく面倒なことに巻き込まれたいかなかったからだ。まず先輩ぶっている奴らに頭を下げるのが面倒だし、また小学校の友だちと遊ぶ暇がなくなるのも我慢できなかった。その他いろいろあるけれども、そのことについても今は、間違っていたのかもしれないと思っている。

要するに、わずらわしいことをしたくなかっただけなんだなということだ。逃げてたということだ。だから、入学してすぐにお前を評議委員に推薦したわけだ。

でも、今思えば、俺が最初の段階で美里と組んで、評議委員になって、それからお前にバトタッチというやり方をしてもよかったと思う。いきなり俺から美里を押し付けられるような形になって、さぞ驚いたと思う。本当にあの時は、俺なりにうまくいったと思っていたが、こういう結末になってみて初めて気付いた。俺が自分なりにやってきたことは、すべて「逃げ」であって、それ以外の何者でもないってことだった。



——ほんとに美里、これでいいと思ってるのかよ。

貴史なりに立村を評議に推薦した言い訳を綴ったわけだが、美里に読ませることを前提ではなく書いているわけだからむかついてもしょうがないんじゃないかとは思う。しかし美里はあっさりこの手紙を丸ごと使うように許可を出している。

目の前の美里をちらと見ると、やはりそっぽを向いている。読みたくないところなんだろう。このままひたすら写し続けるのも正直しんどいので、ここから先は自分なりに勢いで書いてみようかと決めた。

改めて美里の顔を見つめ直し、

「悪い、お前ちょっとあっち向いてろ」

「何よ」

「即興で書くからな。お前に文句言われたかねえんだよ」

「即興ってなによ！ せっかく書いたのにまた書きなおすの？」

「お前の悪口なんて書かねえよ。安心しろ。書いた後にお前の許可もらえばそれでいいだろ。俺はやっぱ写経よりも美術を選ぶ人間なんだ」

「全く言ってる意味、わかんない」

美里は持っていたレポート用紙を床に置いた。

「じゃあ、口出さないから私もあんたの書くの見てていいよね」

「それが邪魔だったの」

「いいじゃない、どうせ私があとで読み返すんだし。それにあんたもできたもの手写しするタイプじゃないよね」

座る場所を貴史の隣りに切り替え、ぺたんと正座して覗き込もうとする。観念した。もうこうなったら思う存分書くしかなさそうだ。



面倒なことをすべてお前に押し付けたせいで、美里もかなり神経が参ってしまったようだ。たぶん美里は表に出さないと思うし、聞いても絶対にそんなことないというに決まっている。だけど、美里の状態はかなりやばい。修学旅行のあたりから俺も変だとは思っていたが、このところだんだんエスカレートしている。もちろん、霧島や西月やその他いろいろなこともあって大変なのだろうとは傍目からも思っていたが、実際お前のスタンスに立ってみて初めて見えてきた。

お前なりに、一生懸命努力してきたんだと思う。しつこすぎるようだが、責めてはいない。ただ、美里がしてほしいこととは違っていただけだ。

俺が勝手にその様子を伺うのをやめて、お前に美里の面倒を見るようにさせたつけど。

評議委員に無理やりお前を推薦したのも俺だったし、いろいろ小細工して美里と付き合うようにさせたのも俺の仕業だ。美里もそう望んでいたし、俺もそれの方がお互いいんじゃないかと考えていたのだが、肝心なお前の意志を考えていなかった。

本当に悪かった。ごめん。

俺は来月高校に進んだ段階で、まず部活動を始めるつもりだ。

委員会活動というのはちょっとだけ首を突っ込んでみたけれども、俺にはやはり性に合わない。立村がきちんと最後までお膳立てしてくれたからなんとかやっていけたようなものだが、俺はむしろイベントがあればひっぱっていったりする方が向いているようだ。陰でこそこそと手回ししたりするのは、やっぱり苦手だ。

かといって、今までのようにのりくらりと帰宅部でいる気もない。

先輩後輩のしち面倒くさい付き合いを考えると気が重いけど、そろそろ俺もそのあたりを克服するチャレンジをする時期かと思っている。

とりあえずはバスケ部と、あとは美術部に入ろうかと考えている。



「ちょっと待って、貴史、あんた本気で美術部入るつもりなの？」

しばらく唇をかみ締めるようにして見下ろしていた美里が、すっとなきょうな声で叫んだ。

「私、そんなの聞いてないよ、それに、バスケもやるの？ 新井林くんの先輩？」

「あのなあ邪魔すんな。これから理由も全部書く。美里も俺が美術部かバスケ部かどこかに入ってわめいてただろが」

「まあね、それは認める。じゃあ理由書いてよ。ちゃんと」



お前には今まで話したことがなかった。正面切って話すのも面倒なので、ここで書いておく。

修学旅行の時だ。金沢が有名な画家のお坊さんと会いたがっていたことがあっただろう。あの時に俺も一口乗せてもらってなんとか金沢の思いを遂げさせたんだが、あの頃から俺は、いわゆる画家とか美術とかそういうものに関心を持つようになった。

夏休み以降、俺は金沢と一緒にいろんな美術館に通い、自分なりに勉強していた。つくづく、この時ほど、エレベーター式の附属中学に通っていてよかったと思ったものだ。受験のことなんて考えないで、好きなことに没頭できるのは幸せなんだなと感じていた。菱本先生にも修学旅行の時に言われたが、本当にやりたいものを見つけるというのは、楽しい。

お前に話さなかったのは、単にもともと立村が美術関係に興味がないと思い込んでいたからであって、隠したわけではない。美里にもそのあたりはきちんと話してある。だが、そのあたりからお前と話がかみ合わなくなったのも事実だ。もっとこのあたりで、そういう話をしておけば、また違った展開になったのではとも思う。

とにかく、俺は今までやるべきことから逃げていたということに気付いたわけだ。



「そっか、貴史、金沢くんをやたらと懐かれているから気が合うのかなとか思ってたけど、やっぱりそうだったんだ。夏休みも金沢くんに出かけてたって言ってたもんね」

「いい加減気づけ」

「悪かったわね」

貴史は隣りでひとり納得している美里を横目で見やった。筆を走らせている間、途中墨に筆の先を浸している間、わけのわからないものに突き上げられているような気がしてならない。脇においてあるレポート用紙の下書きには書いていないけれどもこのままだととんでもないことを綴ってしまいそうだ。

「美里、悪い、お前少し離れろ」

「なによ、どうせ私も読ませてもらうんだから」

「離れろったら離れろ！ その辺でひっくり返ってろ」

「わかったわよ。何よひとりでわめいてるんじゃないわよね」

それでも目的はひとつだとわかっているのか、美里は貴史のベットに昇って文字通りひっくり返った。少なくとも中学三年の卒業式控えた女子がする行動ではない。

——もうひとつは美里のことだ。

これだけはどんなことがあっても書かねばならない。

できれば美里には読まれたくないのだが。



こればかりは女子のことなので、俺もよくわからない。ただ美里は俺にとってかけがえのない親友だ。この辺は以前からいろんな奴に話しているので照れる気はない。

言い訳をさせてもらえば、俺が青大附中に入学した時、このままだと男子と女子同士でふつうの友だちとして付き合っていくのには無理があるのではという不安を持っていたというのがある。少しお前に話したこともあるが、小学校時代、俺と美里は担任やクラスメートの連中としょっちゅうバトルを繰り返し、そのたびにいろいろとトラブルに巻き込まれていた。面倒なことが多かったのと、これからふつうに話をしていくためには、告白して付き合うかなにかしないとかだめなんじゃないかという雰囲気があったからだ。

そんな面倒なことをしたら、お互いにまた別に好きな奴ができた時、つまらない別れ方をし

てせっかくの友情がなくなってしまう。俺はそれが何よりもいやだった。それは美里も同じ考えだったようだ。誰と誰が付き合うとか、ねちねちした話とか、そういうのから離れたかったようだ。あいつも根本的には俺と同じ価値観を持っている。

たまたま美里は立村のことを気に入ったようだし、俺もお前がすごくいい奴だとわかっていたので、三人で一緒につるんで遊べればそれでいいだろうと思っていた。そして最初はそのつもりでいた。たぶん、あのままの関係が一番俺たちには向いていたのだろう。

このことは、美里から何度も相談を受けていた。また俺もそれなりに考えた。結局のところ、俺も美里も、周囲の「付き合う」という面倒な話に巻き込まれないようにしたあげく、お前ひとりを振り回していたのではないかという結論に達した。

本当だったら、俺もお前も美里も、ちゃんと独立した付き合いができるはずだったにも関わらず、むりやり癒着させようとしていた。美里に関しては女子なんでよくわからないところもある。だが俺が仕組んだことによって、結局お前が苦しむはめになったのは、悪かったと思っている。もっと早い段階でどうして俺は気付かなかったのだろうか、本当に悔やんでいる。悔やんでいるが、そんなこと振り返っていても、どうしようもない。そういうのは俺の流儀ではない。



レポート用紙にはそこまで書かなかった。

こっぴどかしい内容すぎたのと、理性がやはり邪魔していた。

ボールペンだとそこまで入り込めなかった。

貴史はもう一度筆先を硯の平らなところに載せた。

——ここまで書かないと、たぶんあいつには分からないだろうな。けど、結局これ美里に見せるんだぞ。ほんとにいいのかよ。

自分に問いかけて見る。後ろのベットで面倒くさそうに漫画本を読みながら転がっている美里に面と向かって言う言葉では決してない。

——けど、立村には、そこまで伝えねえとだめなんだ。

——あいつは、普通のやり方じゃ、わかりあえねえんだ。

——だから。

レポート用紙にまとめた結論を、思いついた言葉ですべて綴った。即興だ。



そこで、ひとつ提案がある。

一度、俺たち三人の関係を中学入学式当時に戻したらどうだろうか。

美里から、お前の本心は聞かせてもらっている。いろいろぐちゃぐちゃ言っていたようだが、今ではあいつも、お前の気持ちを尊重したいと言っている。彼氏彼女の面倒な付き合いをしたくないならそれでいいと言っている。俺も、無理やり親友づきあいしたくないというお前の気持ち

を尊重したい。これも本当の気持ちだ。

だが、立村が俺や美里にとって友だちになりたい奴であることも、否定できない。

お前は、お前自身が思っているよりも、心底いい奴だと思っている。

評議委員だとか、三年D組のクラスメイトだとか、美里の元彼氏だとか、そういう面倒くさい繋がりをいったん断ち切って、その上でもう一度、やり直したい。

そうする時期にきているのではないかと、俺は思っている。

最後に、三年間、お前を責め続けてしまい悪かった。

俺はいつもお前に、本音を話さないなどと責めたてていたが、本当のところを言うと、俺の方が何もしゃべっていただけなのだと気付いた。

もう一度、きちんと、立村と向きあいたい。

お前が考えていることをもう一度まっすぐ受け止めたい。

もう一度、チャンスを与えてくれ。



背中に両手が掛かった。誰かは言わずもがなだが、それでも驚く。

「やめろ、季節外れの幽霊みたいなことすんな。それとその手で首も絞めるな」

「ばか、何言ってるの」

ゆっくり、肩を押すようにして美里が貴史の背中にしゃがみこむ。覗き込まれているのがわかる。

「貴史、好きなように書いていいよ。あんたに任せる」

——結局読まれてるのかよ。

どうせふたりとも分かり合っていることしか書いていない。もう読まれているのならかまわない。貴史は締め部分を一気に綴った。



この手紙を書いているのは卒業式前夜で、美里にも一通り目を通してもらっている。誤字脱字はかなり混じっていると思うが、どうせ答辞でもないのだからその辺は大目に見ろ。

それと、クラスの打ち上げのことだが、お前が出たくないことはよくよく承知している。

美里とふたりで、そのあたりについては菱本先生に話をつけてある。

俺は、三年D組から卒業したその後、あらためてお前と会いたい。

もちろん美里も連れて行く。

その上で、もう一度、本当の友だちとして、三人で付き合っていきたい。

その時にはもちろん、面倒なこと抜きにしてだ。

美里の方はまだひっかかるところがあるかもしれないが、もしそれが苦手なようだったら俺がうまく調節していく。あいつもお前のことを、人間として好きだと今は言っている。お前がうざったくならないような繋がりを、もう一度構築できるはずだ。

あいつはそういう女子だ。俺が保証する。安心しろ。

以上、俺の言いたいことはこれで終わる。

羽飛 貴史



「どうした美里」

背中に頭が押し当てられる気配がする。

「なんでもない」

何度か震える気配がする。かすかなうめくような声もする。それが何を意味しているかわからないほど、貴史と美里の過ごした時間は短くなかった。手紙を乾かし、見えるように一度立てた。細い筆で書いたものだからすぐにたためるだろう。

「明日、あいつのコートのポケットに突っ込んどく」

「どういうこと」

かすれた声で美里がつぶやいた。

「卒業証書授与でB組の難波が立村のコートを使いたがってるんだ。ここで無断借用を決め込むと」

「それ、ばれたら立村さんに縁切られるよ」

「大丈夫だろ。評議同士の付き合いなんだからなあ。んで、そんな時に俺が持ち出す予定だから、そこでポケットに押し込む。難波が返す時に俺もあいつのポケットに入っているかどうか確認してロッカーに戻しとく。ま、ばれたらばれたでその時に直接渡してもいいだろ」

要は成り行きだ。貴史は振り向かぬまま、封筒に改めて「立村へ」と表書きを記した。

卒業式当日は雪もなんとか降り止んだ。真夜中にどか雪が降り積もりどうなることかと思っていたのだがなんとか歩くには問題なさそうだ。貴史は少し早めに学校へ向かうことにした。父に頼んで車に獅子頭セットを積んでもらい、早めに仕込んでおくことにする。体育館用具室に隠しておいてそこで変装することになっている。他の評議連中も同じようなものだが、どういうことをするかまでは美里しか知らないはずだ。

美里は家族と一緒に車で来ると言っていた。まあそれほど時間がかかるわけではないし、昨夜も丹念に打ち合わせしたのでなんとかなるだろう。あとは美里を肩車するだけの貴史の体力が問題なだけだ。ちゃんとダイエットしているとか言っていたが本当だろうか。

風呂敷に獅子頭およびラジカセ、その他一式をくるみ、背負って学校に駆け込んだ。まだ朝早いうちに隠しておきた。急いで事務室から鍵を借り、体育準備室に荷物をまとめた後、なんともなしに体育館へ足を運んだ。卒業式会場はそこだ。流れだけ確認しておきたい。椅子もすでに在校生のみなさまが用意してくれているし卒業生たちのすることは実をいうとほとんどない。

——あとで難波と例のコートのこと打ち合わせとくか。

まだ八時を過ぎたばかり、もう少し全員集合にはかかるだろう。

戸が空いたままの体育館に向かい、貴史は一步覗き込んでみた。まだ暖房が効いていないせいか寒々としている。右に男子左に女子、それぞれ両翼となる形で席が分かれていて、壇上から降りた場合は真ん中の赤絨毯を渡り席に着く流れとなる。

卒業式予行練習でその流れは確認していた。幅も問題なさそうだ。多少貴史が美里の全体重にふらついて尻餅ついても笑いを取るだけですみそうだ。けが人だけは出したくない。

卒業式に参加できるのは場所のスペース上当事者の三年と二年のみ。一年は不参加と定められている。そのためわりと通路はゆったりとこしらえられている。真上を見上げるとそこには父母席で上から見下ろせる仕様となっている。それだったらなぜ一年を参加させないのかが貴史には謎だった。確かに父母席には大量に人が溢れるのでしかたないのかもしれないが。

ふと、目を留めた。

——立村？

立村が、二年と一年の境となる通路の十字路で立ち止まったまま、壇上を見つめていた。貴史がすぐ側にいるのも気づかずにただ、じっと身動きせずにいる。

そのまま今度は鞆から封筒らしきものを取り出しぐるりと周囲を見渡した。貴史の姿は視界にないらしく、気づかぬまま鞆にしまい直した。

——ああそっか、英語答辞か。

あいつも自分なりにリハーサルをしているのだろう。予行演習では壇上に上がり降りるまでの流れのみであり実際の読み上げは一切行わなかった。大学の教授たちに指導を受けて自分なりに練習をしているようではあるが細かい事情は知らない。

一度だけ、体育の更衣室でさりげなく、

「英語答辞どうよ」

と声をかけたのだがその時にはなんとか、

「余計な掛け声かけるなよ」

と返事が返ってきた。あれからほとんどなかった立村との会話でなんとか自然にできたやり取りだった。

——去年がすごすぎたからなあ。本条先輩の卒業答辞めっちゃかっこよかったし、あれと同じ状況を避けたいってことなのかもなあ。

まずそれはありえないけれども。心配ご無用と言ってやりたかったが、やはりあの立村だから言葉も遠慮がちになる。

貴史はしばらく十字路の立村を見つめていた。今なら普通に話せるかもしれない。近づいた。体温が伝わりそうな距離まで来た。

「立村、おはよ」

さりげなく声をかけた。

立村は少し驚いたように貴史を見つめたが、ぎこちなく笑顔を見せた。返事は戻って来ないが予想通りなので気にしなかった。

「お前、今日終わったら、打ち上げ出るだろ」

やはり予想通り、笑顔のまま首を振った。無理だとはわかっていても最後のお誘いくらいさせてもらいたい。

「いいだろ、三年D組これで最後だろ、三年連続評議のお前が出ないとしまらねえよ」

「両親が来るからそちらに付き合うことになってるんだ」

「お前なあ、なんでそんなに意地張るわけ？」

「そういうわけじゃないよ」

最初からどうせそう言われるもんだと貴史は割り切ったつもりだった。でも実際そう返されるとむっとくるのもある。やはり気持ちは変わらないままなのだろう。春休みにこの氷の気持ちを溶かすしかなさそうだ。あっさり切り替えた後、貴史は続けた。」

「あーあ、けどさ、これで卒業かよ。まじかよ、すっげえおもしろかったよなあ。最高のクラスだったぜって、そう思わねえか？」

「どうせ校舎が変わるだけだろ」

ごくごく当然の真理を立村は答える。

「まあなあ。あっそだ、立村、お前、英語で答辞読むんだろ。どうだ、自信の程は」

「準備はしてきた」

「お前さ、うちのクラスふくめてみな注目されてるぞ。目立つしなあ」

「羽飛の方が目立つだろう」

ちらと立村は貴史を見やった。からかい口調が混じっている。かつての気兼ねなく語ることできた頃に似た言い方だった。貴史は自分の顎を撫でた。

「せっかくだ、これはとことん、やることやらねばな。最後だし、目立つしかねえしな」

「お前、何やるつもり」

食いついてくる。だいぶ良好な関係に戻れそうな気配がある。思わず笑った。

「去年がなあ、いわゆる受け狙いの一発ギャグばっかだろ。同じことやっちゃったら結局は二番煎じだし、このあたりは美里を始め、他の卒業証書授与チームの連中と相談中。今のところ、正統派、青年の主張でいくかってのが濃厚」

「好きだな、みな」

「天羽にギャグ勝とうって根性が、まず間違ってるだろが」

「いえなくもないな」

本来であればクラス評議の立村が担当すべきイベントだが、英語答辞を担当するという表向きの理由およびクラスの総意が貴史を選んでいるという裏理由それぞれがからみ、獅子頭の準備へとつながる。立村も受け入れてくれているのはわかっている。気にはなっているのかもしれないが、このことはもう少し時間が経ってから立村にじっくりと説明したい。その機会がまずはほしい。この卒業式が終わってからであっても、いや高校校舎に移動したあとであっても。できれば美里も含めて。今貴史が願っているのはその点のみだった。

「羽飛、どうしてここ来たんだ」

しばらく軽い話を続けた後、立村は不思議そうに貴史を見つめた。

「立村、ここにいるんじゃないかかってな」

——厳密に言うと偶然だけどな。

理由は言わなかった。たぶん、自分のどっかしらない部分が、立村に話しかけやすい場所を覚えてくれたんだと思うことにした。貴史はそのまま立村をおいて体育館を出た。

背中にこれから背負う美里の体重もここで立村のもとで下ろせたような気がした。

——軽い、軽い。

体育館を出てすぐ、すれ違いざまに新井林と顔を合わせた。

「羽飛先輩、卒業おめでとうございます」

「ああ、どうもな。お前も次期評議委員長とあと」

「今年こそバスケ部の地区大会突破を目指します！」

——悪い、そっちか。

新井林はすっかり男前に髪型を整えている。気合が入っている。

「バスケ部たって評議委員長との両立大変だろ。えらいぞお前」

褒めてやると新井林はすっかり照れたように頭をかいた。こいつは次期評議委員長の肩書き以上に青大附中のバスケ部たるプライドの方が高いらしい。

「羽飛先輩は高校以降、バスケ部には」

「さあな」

あえてこの件には触れなかった。まだ美里にしか話していないことだ。

「先輩、どうか俺が附高に進学する前にあの軟弱バスケ部を復活させてください！俺はもちろん進学したらそれなりの勝負をするつもりですが、やはり羽飛先輩がいないと」

「新井林もずいぶんバスケ部スカウトに燃えてるよなあ」

貴史の持つ運動能力にべた惚れされているのはありがたいことなのだが、三年間飽きもせずラブコールを送る新井林の思い込みの激しさにも呆れる。そのエネルギーを別のところに費やせ、と言いたいところなのだが実際評議委員会なり自分の公認彼女への愛も相当なものなのだから何も言えないところがある。

「お前も下見か？」

尋ねてみると、

「はい。会場確認したいんで。念のために」

「立村がいるけど、いいのか」

あまりよい関係とはいえないことを貴史は知っている。注意しておいた。

「立村さんですか？」

「ああ、あいつ、英語答辞読むだろ。そのリハーサルしてるんだよきっと」

「そうですか。ありがとうございます。それでは」

新井林はためらわず、一礼した後すぐに体育館へと向かっていった。また余計などんぱち起こさないでほしいと願うのみだが、そこまで面倒見るほど貴史も過保護ではない。

教室に戻り、幾人かの早朝到着組と挨拶をした後、貴史は急いでB組の教室へと向かった。これは立村に気づかれないように打ち合わせするしかない。それにすぐ報告すべきことがある。

思った通り難波が机に座り他の男子たちとだべっていた。すぐにクラス女子の轟が、

「羽飛くん、おはよ、難波くんほら」

声をかけてくれたのですぐ近づいてきた。

「羽飛、悪いな。例のぶつだが」

「ああ、さっき体育館で立村と会った。例のコート着てた」

「でかしたぞ」

万が一とんびのマント以外のものを立村が着てきた場合には茶色いシンプルなコートでごまかす予定だったが、とりあえずは難波のホームズ美学を崩さないようにして組めそうだ。

「なら打ち合わせだがどうする」

難波は両腕を組み、また指先でパイプを加える真似をした。

「そうだな。立村には事後承諾で行くとしてだ。まず俺たちが卒業証書授与の前にいったん教室に出るだろ。そうしたらダッシュで三年D組に戻ってあいつのコートを抱えてくる。その上で俺が体育器具室で着替えると、そういうわけだ」

「立村怒るかもな」

「大丈夫だ。俺たち評議の絆はそんなちゃちなもんじゃない」

難波が断言した。その根拠なし自信とはなんなのだろう。貴史からしたらD組の大混乱状態を知るに、そのきっかけをつくったのがもしかしたら評議委員会なんじゃないかとすら思える。

「羽飛には協力頼むことになるがいいか」

「結局俺かよ」

「そういうことだ」

一歩間違ったら窃盗扱いされそうだが、貴史も立村のとんびのコートを利用してやりたいことがひとつある。しかたない共犯だ。

「難波、ひとつ注意してもらいたいんだがいいか」

貴史は念を押した。

「ちょこっと俺もあいつのコートに仕掛けをしておきたいんだ」

「仕掛けとはなんだ。花でも飛び出すようにしたいのか」

「いや手品じゃないがポケットに仕込みたいもんがあるんだ。あとであいつを驚かせるためにな」

難波は首をひねった。

「どちらにせよどっきりだな」

「そうなんだが、その仕込みの品をどちらにせよ入れておきたいんで、いったんあのコートを美里に渡してもらえないか？」

「清坂も共犯か」

貴史は頷いた。

「お前らやっぱり何か企んでいると思ったが」

「お互い様よってことで」

にやりと笑ってごまかした。たぶん青大附中のシャーロック・ホームズにもわからない秘密を仕込んでいるはずだ。難波はふっと廊下をみやりつつ、

「ちょっと、更科のここに行く。悪いな、羽飛」

無理やり話を中断して、廊下へと飛び出していった。仕事が忙しいんだろうきっと。

D組に戻り、今度はサイン帳攻めに遭ってしまった。

小学校の卒業式でも同様だったのだが、大抵の場合女子中心でサイン帳というものを用意して、カラーペンでいろいろ書き込みあう。仲よし同士で行うことが多い。どうやら青大附中も例外ではないようで、奈良岡彰子、古川こずえ、そしていつのまにか教室に到着していた美里もあちらこちらにサインを求めて走っていた。

「羽飛、どうもね」

玉城がめいっぱいの笑顔でノートを差し出す。

「ほんっと、羽飛がいてくれたおかげで最高の卒業クラスになったよ。ありがとう！」

「お前もよくやったよ」

正直に答えると玉城はまた明るい声で続けた。

「私、羽飛のおかげで本当にやりたいことを見つけられたんだ。それがどんなすごいことかってこと、気づいてないよね」

「気づいてねえけど、そのあれか、外部のいじめ撲滅運動かなんかの」

「かなり誤解してるかもしれないけどさ、私、中学卒業したら部活よかそっちの活動でがんばろうと思うんだ。そのきっかけくれたのが羽飛だよ」

「よっくわからねえけど、俺が役立ったんだったらそれはそれで嬉しいよな」

「じゃ、今度鈴蘭優のサイン色紙プレゼントしてあげるね」

「おおまじか！」

冗談とわかっていてもつい真に受けてしまう。玉城とよい関係を築けるようになったのも、思えば三学期の嵐に伴うプラス事項なのかもしれない。美里との関係は今ひとつ変わったようには見えないにしても、自分なりのことはできたんじゃないかと思う。

いつの間にか菱本先生が来ている。最後の号令だ。全員自席についた。

「起立・礼・着席」

貴史が声を張り上げ、ふと気づく。椅子がない。

「お前らとりあえず机に座ってろ。それはともかく」

まさに男前、完全フォーマルファッション。女子にきゃあきゃあ言われそうなルックス。中学教師という職業間違えたんじゃないかと突っ込みたくなる格好。ひげも綺麗にそっている。奥さんにきつと全部整えられたのだろう。

「菱本先生、男前！」

やはり声をかけるのはこずえだった。男子連中一同よりひゅうひゅうのお見舞いを受ける。

「お前らの卒業式だぞ、礼儀尽くすのは当たり前だろ？」

「先生、これこそ規律委員会の『青大附中ファッションブック』特別号のグラビアに載せたいですよ」

南雲が脳天気な声をかける。

「そう褒めるな。俺の言いたいことをまずは聞け！」

菱本先生は机をばんと叩き、怒鳴った。

「お前ら、全員、卒業、おめでとう！ ひとりも欠けることなく卒業できた、それが俺は、もうたまらなく、嬉しいんだ！」

ちょびっとだけ目が潤んでいるように見えたが、武士の情け、見逃してやることにした。まだまだ卒業式始まってないんだから、こんなところで号泣されても困る。まだまだ、仕掛けはたっぷりなのだから。

卒業生入場の際は名前順に並んで席に着くが、校長、教育委員長、その他来賓のみなさまの長たらしい挨拶の後、一旦休憩に入る。第一部完了、では第二部突入といった流れが組まれており、各クラス代表が男女それぞれ入場してきてそれぞれに卒業証書を受け取り、その後在校生送辞、卒業生答辞、英語答辞と進む。あっという間に終わりそうな気もするのだが、昨年本条先輩が卒業生答辞でやりたい放題のことをやらかしてしまい体育館内のムードはロックコンサートの乗りと変わってしまったという前歴がある。恐らく立村の英語答辞締めはその空気を凍らせるためのものなのではと、巷では噂だった。

「あーあ、長い、長すぎるぞ」

勢いよく体育館脇の体育準備室に駆け込んできた天羽があたふたしながら制服を脱ぎだした。空いた棚に押し込んでいた大きなトランクを開き、若草色の和服らしきものを引っ張り出した。まだ先客は貴史しかいなかったし女子は女子更衣室で着替えているようなので安心して素っ裸になれるというわけだ。

「着物着れるのかよ」

「大丈夫だ。学校祭の茶会手伝いで慣れてる」

ああそうだった。評議委員会はどのようなつながりなのかわからないがなぜか和風のイベントにしょっちゅう駆り出されていた。立村もそういえば袴姿で走り回っていたのを見かけたことがある。

天羽は手馴れた風にランニング一枚の上から二枚仕立てになった和服を素早く羽織った。紐で縛るのかと思いきや、すでに腰あたりに紐がくっついているようで脇に通してさっさと縛った。その上に帯を巻きつけるのだが、縛っていない。マジックテープ風にべたっと止めるのみだった。簡単だ。その上から同色の羽織をすっぽり羽織り、紐を帯前で結び準備完了。その間五分もない。

「すげえなあ」

「なあに、本式じゃあない。規律委員のみなさまが工夫凝らしてこしらえてくれたってのがこれってことよ。さすが隠れ手芸部、半端じゃあねえ」

貴史は自分の分の風呂敷包みを開いた。獅子頭の真っ赤な顔が貴史を睨みつけてくる。一抱えもある獅子の面に、天羽が襟を直しながら覗き込んだ。

「なんだこりゃあ」

「見りゃわかるだろ。獅子頭だつての」

首からは地が濃い緑、直接白いうずまきをあしらったどでかい布が広がっている。美里が貴史に肩車してかぶるわけだから中途半端な長さではない。

「ははん、D組コンビいろいろ何か隠してやがると思っていたが、そういうことですかい」

「まあな。一応俺も正月は町内会のイベント手伝ってりしてるし、そのあたりの知識は多少はあるんだ」

「季節感がどうよってのは正直あるけどなあ。結構受けるぞ」

面白そうに天羽が頷く。貴史としては、「受ける」ための仕込みをいくつか用意しているのだが、こればかりはやってみないとわからない。本来正月の風物詩を卒業時期の三月にやらかすのだから返って白ける可能性だってないわけじゃない。貴史はカセットテープがきちんと巻き戻されているかを確認しつつ、ミニカセットデッキをジャケットのポケットに仕込んだ。

「他の奴らはまだかよ」

「難波と更科は自分らのクラスで着替えるんだと」

「んで、なんだこれ、天羽は何やるんだ？」

「そうさな、別に芸をやるわけじゃあねえ。見て楽しんでもらっていかがつすかってとこすな」
——しかしど派手な着物だよなあ。

お堅いイメージの規律委員会がなぜこんな受け狙いの企画に協力するのか理解しかねるところもあるが、まあ南雲が委員長だったのだしそのくらいは考えられなくもない。

「で、あとのふたりもそれなりに考えてるんだろ」

「お互いシークレットだよん。もっとも難波が何をやるかについては誰も疑いないと思うんだがなあ」

——その通り。

愚問だった。貴史は獅子頭の色がはげてないかを確認した。とりあえずはそろそろ美里たち女子チームが揃う頃だ。待つことにする。

予定では十分間の休憩となっているが実際は準備のことも考えて二十分くらいの余裕がある。天羽はすでにその前に何か理由をつけて抜け出してきたようだし他の準備が必要な評議委員もそうしてきたようだった。貴史と美里はとりあえず制服のまま獅子をかぶればいいだけなので休憩時間のタイミングで出てきたのだが。

「お待たせ！」

さりげなくノックの後、美里が体育準備室から顔をのぞかせた。幸い天羽は身支度整えた後なので女子が乱入しても問題ない。貴史は美里を呼んだ。

「ほらこれかぶれ。最後の練習だ」

「はい」

美里はしゃがみこんだ貴史の肩にしっかり乗っかり、獅子頭をゆっくりかぶった。隣りの数人女子が息を呑んでいる。そんなけつたいなことをしたわけでもないのだが。そんなに獅子頭の迫力がすごいものか。

「清坂さん、本当にこんなことするの」

C組の阿木がぼかんとしてつぶやいている。どぶりぶりの白っぽいワンピースに日傘を持ち、極めつけが競馬場でしかかぶりそうにない羽根だらけの防止をかぶっている。この格好で言われても説得力がない。

「羽飛くん、獅子頭？」

「見りゃわかるだろ」

もう布をかぶると前が見えない。腰に力を入れて一気に立ち上がる。たぶん今聞いて来たのはB組の轟だろう。美里がちゃんとダイエットしてくれたかどうかはわからないにしても、なんとか背負えるししゃがみこんだりもできる。バランス崩さないように気をつければたぶんなんとかなりそうだ。

「美里、動く時は俺がいったん止まった時だけにしろよ。でねえとおっことすかもしれねえし」
「わかった。あんたが息止めてる時に思い切り首振るから。動く前に声かけて。そうしたらあんたの肩押さえてふらつかないようにするから。歩いている時は動かないが原則だよ」

「それだけわかってりゃいい。まあこの格好だと、普通に歩いてたって十分だろが」

練習でだいたいのタイミングは確認している。予想以上に美里が重かった場合はそのまま背負って首を振ってもらうだけでいいやとは思っていたが、もう少し遊べそうな気がする。貴史はしゃがみこみ美里を下ろした。布を剥ぎ取りひょいと周囲を見やると、目の前には青大附中の各クラス代表たちの気合入った姿が一同に会していた。

天羽の隣りで近江が洗面器ほどある大きな太鼓を首からぶら下げている。叩く棒を握り締め美里のほうに近寄り、

「清坂さんは制服が一番よ」

とわけのわからないことを囁いている。

一方やたらと派手派手しい格好で済ましていた阿木の相手はと探すと、いかにも作り物っぽいシルクハットに自前のタキシードを身にまとっていた。なんの格好なのかよくわからないが、一瞬「チャップリンのモダンタイムズ」という言葉が頭の中をよぎった。

「なんだありゃ」

「『マイフェアレディ』を知らんのか」

呆れたようにいつの間にか隣りにいる難波がつぶやく。正直こいつには何も言われたくない。体育準備室に入る前に渡した立村のシャーロック・ホームズコートをしかりまとい、いかにも作り物のパイプと帽子をかぶり気取っているこいつには。

「でもさ、こういうのっていいね。カメラで撮る？」

「いいねえトドさん」

「私、持ってきてるからさ早く」

そういう轟は、だぼだぼの男性用スーツにベレー帽をかぶっている。相手がホームズ難波とするならば、行きつく先は当然。

「時間がないぞ、早く撮っちまえ、ワトスンくん」

——ああ、そういうことな。

準備が整い、様子を伺いに来た実行委員にOKを出し、A・B・C・D組それぞれ体育館入口前で整列した。一瞬ぎょっとした顔をした実行委員男子にはご愁傷様としか言えないが。

「それでは、A組から入って行ってください。ある程度進んだらどんどん先に行きます。ポーズや見得を切ったあとで、ということでもいいですか」

「よろしく！」

轟がすぐに答えた。

「卒業証書、授与、三年A組」

同時にアナウンスが流れ実行委員が勢いよく扉を開いた。天羽たちが入場した瞬間館内大爆笑が沸き起こったことだけは扉の影からうかがい知れた。

「たぶん受けたね」

「だって天羽くん派手過ぎるもん」

美里が女子たちに話しかけているのが聞こえる。貴史もしゃがみこみいつでも美里がのっかれる準備を整えている。B組が出て行ったところで背負うつもりだった。

「規律委員会の最後の大事な仕事ってとこよね」

「阿木さんも、すごいね。『マイフェアレディ』」

改めて美里が見とれているうちにB組の出番となった。難波と轟、ベーカー街からいきなり飛ばされてきた感のあるふたりは、戸惑い気味の実行委員に見送られまた仲良く体育館へと入っていった。

「『マイフェアレディ』いいよね。俺もこんなことなかったらきちんとしたフォーマル着ることなかったし。阿木さんには協力ありがとうだよ」

「でも、本当はこれ」

C組の順番となる直前に、阿木が言い残した。

「ゆいちゃんが着ればずっと引き立ったよね」

残るはD組のみ。実行委員の男子も送り出した三組の突拍子ない仮装姿に複雑なものを感じていたようだが、唯一ふたりとも制服姿のD組コンビを眺めやりしみじみと、

「卒業の時、評議は必ずこれやるんですか」

問いかけてきた。

「いや、俺評議じゃねえし」

「え、そうでしたか」

「いろいろあるの。でもやりたい人がやればいいことであって、やりたくなければ普通に制服でいいと思うな」

美里が優しく語りかけていた。去年は本条先輩ひとりがスターただただであって、しょせん一発芸を制服姿でやらかしたのみ。今回のような仮装入場で受けをとらなくてはならない義務などない。

「あ、すいません、次です」

慌てて実行委員が貴史に囁いた。すでに美里は貴史の肩に座り込んで獅子頭をかぶっている。

「よっしゃ、行くぞ！」

「任せとき」

美里の気合入った声を耳に、貴史は一気に立ち上がった。頬のところに美里の両足が当たる格好になるがそんなの今更慣れている。妙な想像してびびりまくる連中なんか勝手にしろ。これが

羽飛貴史の、正真正銘卒業式演戯だ。しかと、見るがよい！

三歩歩いて膝ついてしゃがみ、合図してはまた歩いてしゃがみ、それだけをひたすら繰り返す。周囲の喝采が最高潮に達しているのは先に出て行ったA・B・C組の連中が盛り立ててくれたおかげ。トリを担う我が身としては前がほとんど見えない状態でも絶対こけるわけにはいかない。

もともと獅子頭には紐をつけてあり。顎のところえ結ぶことに寄って頭をゆらすだけでいいようにしてある。美里には絶対動いている間貴史の肩から手を動かすなと伝えてあるう。実は結構注意深く貴史も歩いているつもりではいる。

——しかしやっぱ重たいぞ。どこがダイエットだったの。

あとで一言嫌味言ってやろう。かなり肩が重たくなる。視界が勘でしか把握できていないからなおさらなのかもしれない。だいたい歩数計算で、ここで曲がれば前に進むとかそのあたりは見当つけていたのだが、用心しつつ先に進む。

「美里、いったん回れ右するからな。落ちるなよ」

「大丈夫。落ちるわけない！」

ただ歩いているだけでは芸がないので注意深く反対側を向き、もう一度片膝つきしゃがみこんだ。そこで美里も身体を派手に揺らして頭を動かす。

「美里、そろそろだ、ここで一旦走るぞ。絶対、手話すな」

「了解」

足元が赤絨毯だということは確認した。ここで一気に壇上前まで突っ走ろう。予定通り貴史は腹に力を込め、美里を背負ったまま走り抜けた。いったん止まったところで、

「美里、ここで挨拶かなんかしろ」

「上に父さん母さんいるもんね。じゃあちょっとぺこっとするね」

挨拶をさせた後、貴史はしゃがみこんだ。さすがにこれ以上は息が切れる。限界だ。貴史はゆっくりしゃがみこみ、両膝をついた。さすがに堪える。歳だろうか。天井から激しい拍手の嵐が響き渡っているところみると、すべりはしなかったようだ。

「受けたみたいね」

「当たり前だろが。美里降りろ、俺に獅子頭渡せ」

「待ってよ。紐解くから」

すっと肩から美里が降り立った。そのまま獅子頭を布ごと抱えて手渡してくる。貴史はすぐに受け取り、肩を軽くもんだ。さすがに重かった。大爆笑吹き荒れた。

場が落ち着くと同時に卒業証書授与のアナウンスが流れた。

きちんと三年D組全員の卒業証書を受け取り、A組からD組までそれぞれ壇上に整列した。ここから先は後期評議委員長の天羽の役割だが、すでに貴史は協力を頼まれている。こればかりは美里にも話していない。男子評議のみ知っている。

——なんせあの天羽だから、一発芸だと思ってるだろ？ 違うんだよなあこれが。

一番端にいる若草色の羽織姿野郎が貴史に首で合図してきた。今だ。真ん中に進み出た。

「では、みなの中」

天羽が呼びかけた。ふっと空気が静まった。

「まずは卒業を記念して、三本締めと参りますか。ではみな起立！」

先生方も苦笑しつつ、特に注意もなく素直に立ち上がっている。文句言うならきつと仮装の段階でダメ出しされているはずだから気にはしない。天羽が煽るのを横目に貴史も呼びかけた。主に二階席に向かい、

「先生たちも、お父さん、お母さんも、どうぞ一緒に！」

まだ座ったままの奴らがあちらこちらに点在している。これはまずい。声音切り分けて呼びかけなおした。

「ほらほらほらほら、みんな立てよな！」

三年D組の奴らがまだ座っていたのが目についたから、とは言わない。とりあえず全員立ち上がったところまでは確認した後、天羽の音頭取りを待った。

「では、お手を拝借、いよーおっ！ ちゃちゃちゃんちゃちゃちゃんちゃちゃちゃんちゃん！」

合いの手を一緒にかける。

「いよっ！ ちゃちゃちゃんちゃちゃちゃん、ちゃちゃちゃんんちゃん！」

「いよっ！ ちゃちゃちゃんちゃちゃちゃん、ちゃちゃちゃんちゃん！」

他のクラス代表連中が取り囲み、手拍子を打っているのが聞こえる。目の前にシルクハットが飛んでいったのを見たのは幻だろうか。ひょいに見やるとすでに更科の頭には帽子がなかった。今年の本条先輩リスペクトは更科だったのかと思いつつ、天羽と目で合図し、一気にふたりに締めた。。

「ありがとうございましたっ！」

「在校生代表送辞。二年B組。新井林健吾」

一瞬ざわめいた。二階父母席ではプログラムをぺらぺらめくる音もする。貴史もポケットからプログラムを取り出して確認してみた。ちゃんと「佐賀はるみ」と印刷されている。見間違いではない。

側で南雲が立村にささやきかけている。

「りっちゃん、知ってた？」

「一応な」

なんらかの理由で佐賀生徒会長予定の送辞が新井林にバトンタッチされる羽目となったのだろう。貴史には伺い知れぬ部分もあるがそう考えれば、朝一番に体育館へ向かい下見をしていたのも納得はいく。下級生もいろいろあるんだろう。

——やっぱ、バスケ部やることになったら、あいつともしゃべることが多くなるんだろうなあ。

さっきまで派手に騒いでいたこともあって貴史はすでに体力を消耗している。あとはひたすら座ってぼんやりしていればいい。式典とは通常そういうものだし、卒業式だからといって何かかしこまらねばならないこともない。むしろ問題はこれからだ。

——菱本先生びっくりするかなあ。

仕込みは十分。そしてもうひとつ。

——あの手紙、ちゃんと届けばいいがな。

隣りに座りまっすぐ新井林の男っぷりを見上げている立村に視線を寄せ、貴史は軽く目を閉じた。もちろん寝ない。一瞬だけだ。

「本来ならば、ここで青潟大学附属中学生徒会長である佐賀さんからお預かりした原稿を読み上げるところであります。本日は予定を変更し、あえて僕なりの言葉で卒業生のみなさんへのメッセージを伝えさせていただきます」

どうも最初は佐賀から預かってきた答辞をそのまま代読する予定だったらしいが、やっぱり男子としてそれは許せなかったのだろう。気持ちはわかる。持ってきた答辞の封筒をひっくり返してとうとうと述べ立てる新井林の言葉はほとんど聞いていなかったが、その情熱だけは伝わってくる。

「三年生の先輩たちに、僕はまだまだ学びきっていないことが山のようにあります。ですからこのまま拍手で見送るようなことは決してしません。かといって青大附中に戻って来てほしいとも思いません。僕たち下級生たちはこれから、青大附中をよりよくするために盛り上げていこうと心に決めています。先輩たちからもっと聞きたかった話、学びたかったところを僕たちの方から押しかけていって、とことん腹を割って話をさせていただきたいと思ってます。この学校が附属でよかったと、僕は心から思ってます。今、気がついたことは遅すぎるといえば遅すぎますが、でも、あえて僕は先輩たちにこれから、たくさんのことを学び合いたい、そう思っています」

隣の立村が身動きせずに聴き入る。内容からするといたってありきたりな、「先輩たちもっとしゃべろうぜ」に集約されると思うのだが、中に挟まれた評議委員会絡みのエピソードなども立村には身につまされることだったのだろう。あれだけの修羅場を乗り越えてきたのだから……貴史も一度だけその様子を垣間見したが……胸につまるものがあるのだろう。もっとも貴史からしたら、

——高校の校舎分かれてるって徒歩で行けるだろうが。

結構クールに終わってしまう。まあいい、あれだけバスケット部に命賭けている新井林とは、卒業式終わってからもじっくり話してみようと決めた。自分がこれからバスケット部と美術部を兼部しようと考えているとはまだ美里以外に話していないのだから。

「ご卒業おめでとうございます、そしてこれからも、どうか僕たちと一対一で向かい合い、正々堂々と本音をぶつけ合える関係でいてください。僕達下級生たちも遠慮はしません。これからも、よろしくお願いします。在校生代表、二年B組、新井林、健吾」

拍手喝采。深々とお辞儀をした新井林。大役を見事果たした。先ほどの卒業証書授与式と同様の盛り上がり再現中だった。立村が黙って手を打ち鳴らし、小さく頷いている。これで次期の評議委員会は安泰だとでも思っているのだろうか。

「おい羽飛、どうするよ次、藤沖どう返すよ」

「さあなあ。わからねえなあ、ただ即興これだけやられちゃったら卒業生の答辞も中途半端にできねえよなあ」

後ろに振り返ってきたC組の男子に問われて貴史もそのまま答えた。さすが二年次期評議委員長あっぱれ、と言えはそれまでだが問題は次である。予定では卒業生代表答辞……日本語版……を藤沖が読み上げるのだが噂に聞く限りお世辞にもアドリブが得意そうには見えない。つくづく去年の卒業式において、本条先輩の立場が逆ではなくてよかったと思う。あの本条先輩のことだ。もし在校生送辞を派手にかましてしまったら卒業生答辞を読む生徒の立場はなさすぎる。

新井林が壇正面の階段から降り、絨毯に降り立った。そのまままっすぐ歩いた。壇上で用がすんだ生徒たちの退出方法はほぼ一緒だった。数歩歩き、三年D組男子列の脇でふと立ち止まった。じっと貴史の方を見つめている。

——俺になんか用か？

うっかり寝そうになっていたのを見咎められたのだろうか。すぐ背を伸ばした。新井林はそのまま敬礼をし、かちりと形を決め、そのままずっと二年男子列へと戻っていった。隣りで何か動く気配がして横を見ると、立村が唇をうっすら開いたまま凍りついていた。

——そっか、あいつ、そういうことか。

勘違いにも程がある。当たり前だ。新井林の目的は立村だった。アホすぎる自分につっこみを入れたくなるがここは立村をねぎらうほうが先だ。第一、三年A組列には立ち止まらなかったことを考えれば。

——天羽がいるってのに、だぞ。素直に喜んどけ。

「立村、ずいぶん、やるじゃねえか。苦労したかい、あったじゃねえか」

「そんな、違うだろ」

はっと気がついたのか立村は慌てて否定しようとする。ほんとは嬉しいくせに。畳み掛けてやろう。

「あの新井林をだぞ。敬語遣わせてな、『さん』で呼ばせてな、最後はきっちりこうやって礼させたんだぞ。こりゃあ上出来だと思っただけだなあ」

「違うよ、ただ評議委員会の先輩だったから」

「だったらなんで天羽に挨拶しなかったんだ？」

「天羽はA組の先頭だから」

「だからお前は最後までガキのまんまだっていうんだよ。ったく、先が思いやられるぜ。古川じゃねえけどお前、お坊ちゃまのまんまだなあ」

立村は貴史にもう一度首を振り、改めて壇上を見上げた。順番からすると次の次が立村の英語答辞の出番となるはずだ。まだ人がざわめいている状態の中何も答えず席を立った。そのまま左端の待機席に移動していった。隣には藤沖がハードル高すぎる環境での卒業生答辞に備えている様子だった。

——まさか、新井林に釣られてまたまたアドリブなんてこと、ねえよなあ。

その、まさかだった。

「在校生のみなさん、先生、および父母のみなさん！」

やはりやりやがった。藤沖も壇上に立ち、答辞原稿には目もくれずマイクを片手に持ち、がらがらしたハウリングの音を響かせていきなり語り始めた。

「先ほどの在校生代表、新井林くんの熱く激しい言葉に、僕は本来自分がすべきことに気がつきました。今日話すつもりでいた答辞の原稿は、本日ここに納めて帰ります。今日は僕なりに、新井林くんを含めたくさんの人たちの前で、本当の意味での答辞を述べたいと思います。諸先生には、ご迷惑をおかけします。申し訳ございません！」

——ほんと大丈夫かよ。

あまり藤沖という生徒とは付き合いがないし、せいぜい立村や難波経由でちらと噂を聞いているに過ぎない。もともとは応援団設立を熱望していたがたまたまクラスで目立ってしまったため否応無しに生徒会へ引きずり込まれてしまったという経緯があるという。もちろんそつなく仕事はしたけれども本条先輩のようなカリスマ性はない。貴史も藤沖が立村といざこざを起こしたことから、だいぶまっすぐすぎる性格なんだろうと想像はしていたがそれ以上の興味は特になかった。

藤沖なりにアドリブ答辞を頑張っているのは伝わってくるのだが、やはり前の新井林と比較すると寂しいものがあるのも事実で、話が飛んだりよくわけのわからない生徒会裏事情話が出てきたりと、正直貴史の頭に残るものではなかった。どちらにせよ正式な答辞は立村が英訳したものを限りなくネイティブな発音で読み上げることでちゃらになるだろう。

それでも全員聴き入っているところを見ると不器用なりに生徒たち、父母、および教師、来賓のみなさまに伝わるものはあったし貴史もその気合だけは受け止めた。

——新井林と勝負するんだもんな。苦労するな、わかる、わかる。

「さきほど、新井林くんは僕たち三年生に向かい、『もっと腹を割って話をしたかった』という強烈なメッセージを残してくれました。自分自身を振り返ると、出来る限りのことをしたとはいえ、下級生のみなさんにそこまで真っ直ぐ向いていたかどうかは疑問です。おそらく、新井林くんもそのことを訴えたかったのでしょう。どうだよな、新井林？」

いきなり藤沖は新井林の座っている二年席に目を向けた。指差した。

「今、この場で僕、藤沖勲は、この場にいる全校生徒、および父母のみなさん、および先生たちに誓います。そして新井林、お前も聞け！」

次に拳を振り上げ、何を考えたか「選手宣誓」のポーズを取った。

「この三年間で語りきれないことがあるのなら、俺は正々堂々、受けて立つ！ いつでも追いかけて来い。そして、その時は俺たち卒業生一同も、さらにパワーアップして後輩たちを迎え入れ、とことん腹の底まで語り合うことを、誓います。三月十五日、卒業生代表、藤沖、勲」

在校生送辞VS卒業生答辞アドリブ対決、お見事。イーブンだ。まさに大騒ぎ。目の前でいきなり三年B組の列で難波が立ち上がり掛け声をかけているのが見えた。後ろの二年生席でも喝采は鳴り止まず、二階父母石ではわけのわからぬ「ブラボー」なる声までかかる。極めつけは青潟の教育委員会をはじめとする来賓のみなさままで立ち上がり拍手を送っている。完全に式典というよりコンサートののりだろう。相当去年の本条先輩答辞で関係者は鍛えられたと見える。

——立村はどうしてる？

立村は席についたまま拍手をしているだけだった。次が自分の本番なんだから、かまっちゃいられないということか、それもまあ、事実ではある。

三年B組列の席に戻り迎え入れられた藤沖が座り余韻が残る中、アナウンスが流れた。

「英語答辞、卒業生代表、三年D組、立村上総」

瞬時に、高揚した空気が萎えたような感じがした。どことなく野菜がしんなりしたような、さっきまでしゃきっとしていたサラダがすっかり干からびてしまったような、そんな雰囲気だった。

——うわあ、立村こりゃ拷問だ。あいつまたこれでいじけちまったらどうするんだあ？

三年D組の男子連中もひそひそと、

「あちゃあ、こりゃ悲惨だわ」

「あいつさすがに英語でアドリブはねえだろ」

「いやあわからんぞ。立村の語学力ならやろうと思えばできるがな」

「第一やるかあいつ？ 技術とやる気とは違うぞ」

みな好き勝手なことを言っておる。

どちらにしても立村にとっては息苦しいことは確かだ。三年D組のばたばたぶりや杉本梨南をめぐる株価の下落っぷり、その他E組に逃げ込んだりなんなりという立村の悲惨な状況を知るにあたって、最後に名誉回復の意味もあり与えられたチャンス。それが今回特別に任じられた「英語答辞」というわけだ。本来なら立村の語学能力でさらりとなせる内容だろうし、意外なことだがこいつは舞台上でしどろもどろになったり硬直してしまったりということが全くない。舞台

度胸は実をいうと結構ある方に見える。

だが、この状況、これ以上空気を盛り上げろと言われても立村には無理なような気がする。そもそも立村は卒業式を敬愛する本条先輩と同様に盛り上げようなんて気持ち、さらさらはないはずだ。さっさと終わらせてさっさとひっこみたい、それだけだろう。

——まあ、空気が白くなるのはあいつも覚悟の上だろ。ま、がんばれよ。

何事も起こらないことを確信した上で、貴史は立村が壇上に立つのを見上げた。

立村は英語答辞原稿を開かず、ずっと正面を見据え、そのままずりりと暗唱し始めた。緊張感も気張りもない、いつもの英語の授業でリーダーの教科書を読み上げるのと同じ調子だった。はっきりした発音で聞き取りやすいが、やはり途中ややこしい単語も混じっているようで貴史にはうまく理解できないところもあることはあった。

「やっぱ立村すげえわ。さすが三D自動語学翻訳機」

「英語科行くのも当然だわな」

D組だけではない、C組からも感嘆の言葉が漏れている。男子たちはみなあっけにとられつつもただ立村の日常たる発音に圧倒されている。ただ内容は、

「けど、藤沖が本当にしゃべるべき内容だったんだろ」

「すげえ単純な話だってことはわかるんだがなあ。けど、どっかな」

「え、何が」

「どっか、変わった作文かなって気がするんだが」

全くわけがわからないことをしゃべっている男子も一部いる。貴史がヒアリングした限りだと、中学時代の懐かしき思い出や友情への感謝と高校に向けての抱負をあっさり述べたものであり、

——あんなに偉い先生どっさり読んで特訓するレベルのもんかよ。

そうつつこみたくなるところもある。まあ、それはそれで意味があるんだろう。無事に終わればそれでいい。一緒に女子席で聴いているであろう美里の様子を伺うと、遠目から見た限り真剣に見上げている。そりゃそうだ。

流れ出るような言葉をいったん溜め、立村が一瞬黙った時だった。

いきなり左側の教師席から立ち上がる気配がした。それまではポーカーフェイスで通していた立村が、はっとした表情でそちらを向いた。同時に二階父母席がざわめき、生徒たちもひそひそし出した。

——何があった？

貴史も中腰になり様子を伺った。まさかとは思うが、そのまさかだった。

——なにやっつてんだよ、菱本先生、おーい、守くーん。

南雲が東堂としゃべり合っているのも聞こえる。

「あらら、どうしたんだろ。菱本先生も最後に仕込みしようとしたのかな」

「俺たち全然聴いてませんぜ」

——聞いてるわけねえだろが！ このあほたんが！

立村にとっても予想外の出来事であることは確かのように、言葉を失っている。あの舞台度胸満点の立村ですらも動揺させていることに、菱本先生は気づいていないだろうか。菱本先生は放送委員に声をかけると、すぐにマイクを受け取った。

「今、会場にいらっしゃるみなさんに、どうしてもお伝えしたいことがあります」

体育館内に響き渡る声。菱本先生の正装は男前、みな黙るしかない。

「会場のみなさんの中には、今、立村くんが暗誦した英語答辞の言葉遣いに一部、疑問を感じた方もいらっしゃるかと思います。実は今回、英語答辞を作成するにあたり、青潟大学文学部教授でいらっしゃる大嶋先生のご教授を仰ぎ、現代英語とは若干異なる、十八世紀初頭の古い言葉遣いを用いることにいたしました」

みな息を吞んでいる……はずなのだがひとりうるさい奴がA組にいた。何か囁いている。

「そっか、やはり変だと思ってたけどそれなんだ」

——だからなんなんだよそれ。

二階父母席からも、ふみふむ顔きまじりにささやきが聞こえてくる。

「なんなのあれ。英語アウトの俺には理解全然できないんだけど、教えてちょうだ東堂大先生」
南雲が確認している。東堂が答えている。

「なぐっち、要するにだ。立村は俺たちが習ってる現代英語ではなくて、源氏物語とか平家物語とかみみたいな古文でもって答辞をこしらえたと。そういうわけ」

「んなものあるのかなあ。俺考えたことなかったけど」

「そりゃあるだろ。昔からある言語なんだしな。菱本さんの熱く語りたポイントってのは、それを考えたのが立村本人であって、まあ大学の偉い先生の助けは借りたかもしれないけど単なる藤沖の答辞を英訳してしゃべるだけじゃない、オリジナリティってのか？ それをくつつけていたってこと。それを褒めてやってほしいってこと」

「けど俺たちにはわからないよな。特に俺みたいな」

「なぐっちや俺たちみたいな語学どうでもいい人間にはともかくとして、語学命とか、英語にこだわる人にとってはすげえことなんだと思うよ。けどまあ、菱本さん言わない限りは誰も気づかねかったろうけどなあ」

「とにかくりっちゃん、がんばったってことだけは理解した」

ここまですごいスピードで囁いていた。菱本先生はまだエキサイトして語っている。

「そのため、現在の英語教育では学ぶ機会のない古い単語なども混じっております。このアイデアは、読み上げた立村くんの発案です。教師として、また、担任として、非常に、嬉しく思うことのひとつであります。父母のみなさまおよびご来賓のみなさまからも、なぜ今回、英語答辞を、というお声をたくさん頂戴しましたが、三年担任たる私といたしましては、青潟大学附属中学において、素晴らしい語学能力を持つ立村くん到最后をきちんと締めてもらふことにより、ひとつの学びの集大成をみなさまにご覧いただきたかった、その思いがあります」

ひたすら酔っている。とにかく立村がこっそり仕掛けたことだけは貴史も理解した。あいつらしいやり方だとは思ふ。が、しかし。今気にすべきことは事実だけではない。

壇上の立村を改めてみやった。

じっと無表情で菱本先生の様子を睨みつけている。先ほど暗唱していた時のような穏やかな雰囲気はなく、今にも飛びかかりそうな目つきをしている。ポーカーフェイスだけはかろうじて保っているのが気づく奴しか気づかないだろう。おそらく貴史以外だと、たぶん美里しか。

——立村、耐えろ。ここは菱本先生に花、持たせてやれ。

決して菱本先生は罵倒しているわけではない。褒めているのだ。三年間あいつなりに苦しんできたことを理解しつつ、なんとかこいつの努力を全校生徒に認めさせたいとがんばっているだけなのだ。もし貴史が立村の貴史だったら涙ちょちょぎらせていたかもしれないし、マイクから「先生ありがと！」くらい叫んだかもしれない。しかしあの立村が、蛇蝎のごとく菱本先生を嫌っているあいつが、ここで冷静さを保てるとは到底思えない。

アドリブ対決の続く青大附中卒業式、どう締めるか。ここは頼むから立村に大人の対応をしてほしいと切に願う。

貴史の見守る中、立村は壇上のマイクを両手で外し、そっと口元に当てた。

「菱本先生、まだ終わっていないのですが、続けさせていただいてよろしいですか」
まかりまちがっても「地球が滅亡するその日までてめえなんかに誰が感謝するか！」なんて叫ばないでほしい。祈った。たぶん美里も一緒だと思う。立村の凜とした声を日本語で耳にするのは本当に久しぶりだったことを思い出した。

「今、菱本先生にご紹介いただきました通り、僕が今、読み上げた英文答辞は、大嶋先生のご指導のもと、書き上げたものです。大嶋先生には僕のわがままを受け入れていただくことができ、大変感謝しております。ありがとうございます」

人並みの礼儀は保っているようだ。胸を撫で下ろす。立村の感謝の言葉は続いた。

「ただ、これだけは付け加えておきます。国語における古文のような文体で答辞を作成してはどうか、と提案してくれたのは、二年B組の杉本さんです」

完全に凍りついた。周囲の空気が、ではない。

——あいつ、いったい、何、言ってるんだ。

祈っていた手がぼろりと離れた。身体が一気に冷えていく。立村が続けた。

「僕自身はただ与えられた英文を読むだけでは満足できないという感情しか持っておりませんが、具体的な形として提案してくれたのは、杉本さんのお蔭です。誰よりも、この場で杉本さんに感謝を述べたいと思います。ありがとうございます」

菱本先生の涙ぐんでいる顔など一切無視し、立村は三年席を通り越した先に視線をおいたまま、最後に締めた。

「三年D組、立村上総。以上」

マイクを両手で丁寧に戻し一礼した後、立村は一通分の答辞原稿を片手に持った。本当であれば答辞は盆に置いて退出すべきはずなのだが血が逆流しすぎて忘れたのだろうか。拍手と喝采は相変わらずだが、温度差が明らかに感じられたのは教師、来賓、二階席父母たちと比較した生徒

席でだった。菱本先生の言う英語答辞のオリジナリティに感服しているような褒め言葉や、やはり意味不明のブラボーが飛び交う一方で生徒たちの席に漂う重たい空気。拍手もおざなり。こいつの前に見事なアドリブ答辞をぶつけた藤沖を迎えるような三年D組の気配はない。立ち上がろうともしない。ただ様子をひたすら見守るだけ。

教師来賓席に一礼した後、立村が壇上前方階段を降りてくる。絨毯を踏みしめたまままっすぐ歩いてくる。あっさりした拍手の中立村は二年の女子列近くまでまっすぐ歩き、止まった。貴史を含む三年連中が全員振り返った。二年A組を乗り越える形で立村はB組の女子ひとりに声をかけていた。隣りは空席だった。やはりあの女子だった。

「杉本、立って」

立村が声をかけた。すっとあの女子が立ち上がった。立村は片手に持ったままの答辞原稿を、二年A組の女子頭越しに差し出した。

「ありがとう。感謝する」

優しい声だった。棒読みの返事だけだったが。

「ありがとうございます」

一応義務といった風に両手で受け止め、胸に押し当てるような仕草をした。静まり、ふたたび二階父母席から温かい拍手が降り注いできている。それでもまだ生徒席の温度は暖まらない。立村が貴史の隣に戻ってきた時、誰もがねぎらいの言葉を口に出さなかったのがその答えだった。

——立村、お前さあ、なんであんな目立つことやった？ よりによってあれだけパーフェクトに英語答辞やってのけてだぞ。お前があの女子にベタ惚れなのはよくわかった。俺も邪魔しねえ。美里も理解してるってわかってる。けどな、こんな公開処刑みたいなことしてお前、平気かよ。もうどうするんだよ立村、高校行ってもこのままだと引きずるぞ。まったく、あれだけ俺らがお膳立てしたってのに、まったくお前って奴は。

そのくらい罵倒してやりたかった。口を開きかけた。立村と目が合った。微かに頭を下げたように見えた。それ以上何も言えなかった。

「蛍の光」の歌声に送られて教室に戻った。席についてから菱本先生より一枚ずつ卒業証書を受け取っていく。といっても先生自身がそれぞれの机の上に配っていくものなのでテストの答案返却の延長上としか思えないところもある。趣はいまひとつだ。その他卒業生に渡されるさまざまな記念品やお菓子、卒業証書入れなどを受け取り鞆にしまい、菱本先生の三年D組最後の演説を聴く。いや、厳密には最後ではないのだが。

「と、いうことでだ。三年間、みんな、ありがとう！ 語りたいたくさんあるし、かといってしゃべっているとたぶん延々と続くだろうしなあ。ほんと、このクラス、いろいろあった。個性が強すぎる連中ばかりで、最初はどうなるかと思ったが、本当にみな、よくまとまってくれた。ありがとう、ありがとう」

「ありがとう」を繰り返し、目を真っ赤にしたまま語り続ける菱本先生。卒業式の立村英語答辞で爆発してしまった後遺症だろうか。まだまだこれからだっていうのに暴発しちゃっていいのかと貴史は思う。どうするんだ、これからすでに仕込み済みのネタがたんまりあるんだが。生徒は誰ひとり泣いていない。

「みんな、本当に、いろいろあつただろう？ 勉強もそうだし、部活もそうだし、委員会もそうだしな。時には暴走しちゃうこともあつただろう。俺も若かったから感情ぶちまけて怒鳴ることもあつた。手を出してしまうこともあつた。けど、一瞬たりとて俺はお前たちのことを忘れたことはなかった。これは本当だぞ。三年間、一瞬一秒たりとも、三年D組の連中の顔を忘れたことはなかった」

——このまま放置しといたら、いつまでもしゃべり続けるぞ菱本先生。

そろそろ時が来た、ということで貴史は周囲をぐるりと見渡した。

口笛が合図だ。打ち合わせ済み。「起立」の代わりだ。全員……一名除いて……立ち上がった。立村が少しタイミングずらして続いた。立村には伝えてなかったことを思い出した。とりあえず全員起立はいいことだ。

「菱本先生、てなわけで、お説教は次回に続くってことで」

これも美里と打ち合わせ通り、目で合図をする。すでに美里は机の下に仕込み品を準備しているはずだ。聞かれたら獅子舞道具の一部とか言っとけと話しておいたが特につっこまれなかった様子だ。できればサプライズにしたかった。美里は抱き上げると教壇の前に立ち、菱本先生に差し出した。

「これ、おちびちゃんに、プレゼントです。三年D組一同から！」

白い包装紙に真っ赤なリボンが貼り付けられている。経費削減対策で美里が思いついたもの。菱本先生は戸惑ったように一言尋ねた。

「なに？」

——そりゃ決まってるだろうよ。

つっこみたいのだけど、おそらく菱本先生の精神状態は舞い上がりまくりで「プレゼント」という認識すら難しいのかもしれないと思うと黙るしかない。こずえが助け舟を出した。

「先生、開けてみなよ」

周囲でみな、うんうん頷いている。立村を覗くすべての生徒がこの企みに参加している。菱本先生に生徒から最初で最後のびっくりプレゼントを用意したい、その気持ちだけは本物だ。みな頭をひねった割にはありがちなものだが、まあいい。

菱本先生が教壇から降りた。恐る恐る両手を伸ばしそおっと受け取った。

「ありがとうな、ありがとうな」

奈良岡がハンカチを片手に立ち上がりそっと教卓の上においた。これも貴史の考えた仕込みのひとつ。

「じゃあ、開けるな」

そのまま菱本先生はゆっくりと教卓にプレゼント包みを置き、丁寧にセロハンテープ部分を探りつつはがし始めた。決して破きたくないという意志がありありと伝わる。息を呑む。プレゼントそのものは女子に選択を任せたので実を言うと男子連中は具体的な内容を知らずにいる。

ものが現れた。菱本先生よりも前に南雲がつぶやき、指を鳴らした。気持ちいい音が響いた。

「カンガルーか！ ナイスアイデア！ 一本取られた！」

小声で立村に何か聞かれている。説明も南雲が請け負っている。

「ほら、カンガルーのポケット見てみろって」

「ポケット……？」

まじまじと立村がぬいぐるみを覗き込む。他の連中もみな、ぬいぐるみの周りに集まり、「すげえこれ、俺がガキならサンドバックにしてるわな」

「センスいいよね。けど私たちの集めた分で間に合ったの？」

買い物は美里とこずえ、および奈良岡に任せていた。たぶんこずえが値切ったか見切り品見つけて安く手に入れたのではないだろうか。あとで詳しく美里から聞いてみよう。なにせここ数日は別のことにかまけてしまいめでたい話は後回しだったのだ。

「物入れにも使えるよなあ」

カンガルーの巨大なぬいぐるみには、大きなポケットが用意されている。その中に水口と金沢が代わる代わる手を入れている。

菱本先生はじっと見つめ、そっと撫でた。涙をほとばしらせるようにして皆を見た。

「うちの子が喜ぶなあ。ありがとう、ありがとよ」

——やべえ、このままだとまた演説始まるぞ！

時間は限られている。美里に目配せしてすぐに切り上げるよう指示した。美里もいったん様子見で席についていたがすぐ立ち上がり、

「じゃあさ、先生、みんなで記念撮影しましょ！」

ぬいぐるみと菱本先生の間で割って入った。早い段階で卒業記念写真……極めてカジュアルタイプ……を撮ってしまい、あとは一気にお楽しみパーティーへとなだれ込む。そうすればはしゃぐ時間も増えるし、今日全時間参加できない奴も最初の五分か十分くらいはその場にいられるかもしれない。もうこの流れは立村を省いた全員に伝えてあるので誰も「なんでそんなことするのか、もう写真取ったよね」と野暮なことを言う奴はいなかった。ちゃんと撮影時の順番も決めてお

いた。あっという間に菱本先生とカンガルーを囲む形で整列した。美里は前列の中央に、貴史はその隣りに、さらにこずえが背後霊のように覗き込んでいる。

「おいお前すげえ不気味」

「生霊だもんね」

立村も入っているかを確認した。後ろに回って陰に隠れようとしている様子だった。

「で、誰かにシャッター切ってもらいましょうか。外のお父さんお母さんの誰か」

「さっさと廊下に出て誰か捕まえて来いよ」

美里を促してすぐに行かせようとする菱本先生が貴史の隣りで口をはさんだ。

「そうだな、おい、立村、お前のご両親にお願いできないかな。さっきお会いしたぞ」

——おい先生、ちょっと待てよ！

菱本先生はおそらく卒業式後の立村に対するクラスメートたち……主に女子たち……の冷やかな視線に気がついていない。貴史もなんとなく妙だとは思ったが、あんな英語答辞やりたい放題やらかしてしまったのだから、多少の風当たりは仕方ないと思っている。あとで直接「お前、このボケナス！」くらいどやしたい気分だが今はまずい。父母のみなさまだって連なっているのだからここは無難に済ませなくてはなるまい。貴史もそれなりに計算は出来るのだ。

——いくらなんでもだ、立村をまた前に出して何かさせるってまずいだろ！ それにあいつ、母ちゃんとバトル寸前じゃねえの。まああのべっぴんさんならたぶん撮ってくれるかもしれないけど、立村が切れるのは覚悟しろって。

美里が貴史の顔をちらりと見た。すっと振り返り、

「立村くん」

呼びかけた。仏頂面していた立村の表情がふっとほぐれた。

「悪いけど、シャッター押してくれないかな？」

他の連中が戸惑った風に見合わせ、立村の様子を伺う。

「二枚撮って、それで終わりにしようよ。ね」

——おい美里、立村入れねえぞ写真に。どうするんだおい。

貴史も美里に問いただしたかった。公式な卒業記念写真ではないがそれでも中学最後の記念写真であることには変わらない。ため息やうんざりムードが立村のせいで若干漂っていることは確かだが、それでも三年D組のメンバーとして「はずし」に近いことは避けるべきじゃないのか。いやまさか、

——美里、まさかとは思いますが立村にそこまで恨みあったりしたのか？

さっきの英語答辞で立村が杉本梨南に対してやらかしたことを、ここで美里がやり返そうとしているのだろうか。気持ちはわからなくもないが今ここで美里がそういうことを考えるととは思えない。

一瞬立村はひるんだように一歩足を引いた。そのあとすぐに美里へ手を伸ばしカメラを受け取った。

「そうする、貸して」

段から下りた。思わず貴史も、

「おい立村、別の奴にも頼めよ。お前入らないと」

奴を止めようとしたが全く持って無視。菱本先生も、
「清坂、やはりここは親御さんに頼んだほうがいいぞ」

小声で制している。美里は引かなかった。

「いいんです。立村くん、写真嫌いだから」

美里だけではない、貴史もそのことは知っていた。立村の感情を抜きにした呼びかけ、
「それでは、二枚、連続で撮ります、いいですか」

素直に従った。シャッター音が二回響いた。

最後の締めは貴史の役割だった。打ち合わせ通り進む。イレギュラーだったのは写真撮影で立村が入らなかったことくらい。スムーズに進んでいる。

「そいじゃ、みなさん、三年間、どうもありがとうございました！ 菱本先生も、がんばって子育てアンド子作りパート2に励んでくださいってことで！」

さあここで全員声を揃えるよう右手で合図。腹から叫んで一礼した。

「どうもありがとうございました！」

さてここからはてきぱき動かねばならない。ここの動線も美里や古川、奈良岡たちと打ち合わせしておいた。食べ物飲み物はそれぞれのロッカーに隠してあるので出すこと自体はあっというまに完了する。ただ生徒が教室でうろうろしていたり、他クラスの生徒たちと合流した場合はその手はずが若干狂う。少しでも長い時間パーティーで盛り上がるためには準備に時間を割かないようにしたいというのが貴史の目的だ。

「そいじゃ、悪いが予定通り食物と紙皿出すぞ。それと飲み物はどこしまった」

「ああ、大丈夫、家庭室に預けてあるから取りに行くね！」

玉城と杉浦他数人が駆け出していく。

「美里、お前席片付けて、それからB組の連中の様子見に行ってきた」

「私も行こうと思ってたんだ、ちょっと待っててね」

南雲が奈良岡と一緒にテーブルシートを準備している。なんだか気まずそうな雰囲気かと思ったがそうでもない。これもまた打ち合わせ通りなのだが貴史は南雲に近づいた。

「ああ、なんか用っすか」

「南雲、悪いんだがたのみたいことあるんだ。ちょっと来い」

「なんでやんしょう」

機嫌はそう悪くなかった。奈良岡とも上手くやっているようであれば、貴史なりの頼みごとをひとつしようと思った。

「ねーさん、ちょっと南雲借りてくがいいか」

「どうぞどうぞ！」

相変わらずのふっくらした笑顔で見送られ、貴史は南雲を教室の隅に呼び出した。

「これからの打ち上げなんだがな」

貴史は切り出した。南雲も天敵・羽飛貴史の前ということもあって用心している感じはありありとする。コサージュを胸につけたまま、片手をポケットに入れて、

「頼みごととは？」

気障っぽく問いかけた。

「一応クラス全員に話した通りの流れでやるんだが、お前、どのくらいでパーティー抜ける予定だ？」

家族のしちめんどうくさい事情があるとかで参加できないとかわけのわからないことを口走っていた。結局参加する方向になったと奈良岡からは聞いていたが本当なのかをまず確認したかった。

「ああ、大丈夫っすよ。今日は丸一日OK」

「それならひとつ、頼みがあるんだ」

悔しいが、こいつでないと場を持たせられないのもまた事実。貴史は切り出した。

「今日、打ち上げやった後他の連中が二次会やりたがるかもしれねえ」

「ありえますがな」

「だが、俺は今日はたぶん無理だ」

「それまたなんで」

迷ったが言うしかない。

「立村とさしで話すため、急いで連絡入れたいんだ」

「あれ、りっちゃんあそこでうろうろしてるけど」

見ると立村は一生懸命何かを探している。後ろでコート掛けを触りながらあちらこちら右往左往している。だいたい理由はわかる。

「今は無理だがこれから俺なりにあいつを捕まえるつもりでいるんだ。んで、そうなるとたぶん俺が抜ける。そこで悪いが南雲、俺が抜けた後の打ち上げ盛り上げを担当してもらえねえか」

「はああ？」

立村の英語答辞が終わり、隣りで残りの時間を無言で潰していた時にひとりで決めた。

——あいつはたぶん、打ち上げパーティー来ないだろう。

何度確認しても同じだったし、最初のうちは貴史もそれでいいと思っていた。後で片付けるべきことはなんとかすればいいとたかをくくっていた。しかし今は違う。

——一刻も早く、あいつと話し合うべきだ。

手紙をコートに滑り込ませておいたけれど、そんな悠長なことなど言っていられない。

なぜ、美里の前であえてあんなことをしたのか。

自分が三年D組でど鞆買うことを覚悟でなぜ、やらかしたのか。

卒業式後では遅い、一刻も早く確認しなくてはならない、そう思った。

だから打ち上げパーティーが終わった段階ですぐに教室を飛び出し、立村の家に向かうなり電話かけるなりしてなんとしても顔を合わせたい、そう決めていた。

たぶん二次会は非公式にせよ行われるだろうし、菱本先生もあの調子だと参加する可能性が高い。となると貴史の穴を埋めるには。

——認めたくねえが、南雲が一番だ。

南雲はほんの少し考えこんでいたが、

「わかった、いいす。やりますよ」

あっさり答えた。同時にこちらを見ていた立村が申し訳なさそうに貴史へ声をかけてきた。タイミングが微妙に良すぎる。南雲が「そいじゃ」とすぐに離れた。

「あのさ、羽飛」

だめもとで貴史も問いかけた。

「今日、これから来るだろ」

「いや。さっきの俺のコート、どこやった？」

「ああ、あれな」

やはり探していたのは立村のコートだった。たぶんそうじゃないかと思っていたのだが。美里に難波から取り返してくるよう頼んでおいたのだが忘れていたんだろうか。もう一度美里を呼びつけた。

「おおい、美里、立村のコート返してやれよ」

女子たちと何やら話していた美里がこちらを見た。やっぱり忘れていたようだ。これだから全く。美里はすぐに頷いて立村に呼びかけた。

「立村くん、ちょっと待ってて。今取ってくるから」

「今取ってくるって」

不思議そうに立村が答える。

「難波くんに預けっぱなしなんだ。ごめんね」

——美里、わかったな。ちゃんと例のあれをポケット仕込むんだぞ！ 忘れるなよ！

このタイミングで美里に手紙をポケットに入れてもらい、そのまま立村にコートを渡してもらう。その場で気づいたらどうするかはその時考えるとして貴史は立村に告げた。

「じゃ、あとでな」

「うん、わかった」

本当はもう少し何か言いたいのだが、仕切り担当としてはしょうがない、まだいろいろとやるべきことがあるわけだ。三年D組クラス臨時代表としては、まだまだパーティーの仕込みが必要なのだから。

「立村くん、はい、これ！」

美里がすぐに戻ってきてコートを立村に手渡した。礼を言ってそのまま後ろ扉から去る立村を見送らず、美里はそのまま貴史の側に駆け寄り、

「やっといたからね」

握りこぶし作り、任務完了を告げた。

美里との打ち合わせ通りに三年D組およびB組合同の卒業おめでとうお楽しみ会が始まった。だいたい時間は一時間程度とし、その後はみな適度に二次会へ進むよう手はずを整えておいた。二次会以降の流れは南雲に話しておいたのでたぶん問題ないだろう。面白くない相手ではあるが、統一力のそれなりにある規律委員長なのだからそのへんの手腕は認めざるを得ない。

——あとは、美里を巻き込むか否か。

美里にも声をかけて立村に連絡を入れさせるべきか少し迷ったのだが、あえてしないことにした。何も美里だってすべてが立村につながっているわけでもないし、古川や奈良岡ともそれなりに話をしたいことだってあるだろう。特に奈良岡はこの卒業式が終わったら間を挟まずにすぐ高校の寮に引っ越すと聞いている。名残惜しいところもあるだろう。

「さすが羽飛、見事にまとめたなあ。驚いたぞ」

卒業生の父母たちに挨拶をして親向けの謝恩会会場へ誘導を終えた菱本先生が戻ってきた。今回はパーティーというよりも「お楽しみ会」要素が強いので教室内で行なうということ、またその場合は教室が手狭なのでご家族様にはご遠慮願いたいという形を取っている。ゆえに邪魔はされそうにない。何よりだ。

すでに教室内の机と椅子もちゃんとセッティングされている。ビニールクロスもかかっているので多少ジュースをこぼしても大丈夫そうだ。みな、胸のコサージュは外していないので見た目やはり華やかだ。美里と奈良岡が紙皿に「奈良岡お手製手作りクッキー」を盛り付ければ準備完了だ。

「まあ、あんなところかあな。先生、まだ食うなよ」

「失礼だなあ。お前のほうだろ。さっきからちろちろクッキー見てたぞ」

「奈良岡のねーさん作るクッキーまじうめえからなあ」

南雲がちらとこちらを見た。もちろん無視した。気づいたのか菱本先生が小声でささやきかけた。

「お前、南雲も説得してくれたんだってな」

「説得なんかしてねえけど。ねーさんじゃねえの」

「いや、どうもお前らしいぞ。いろいろと動いてくれて、ありがとな」

「けどなあ」

本当は一番、教室に残しておきたかった奴がない、この現実。

「どうした」

「立村だけはやっぱだめだった」

菱本先生は目を伏せたがすぐに、

「どうせ高校でなんとかするつもりだろ」

にやりと笑った。まあそれは貴史なりに決めていたことでもある。

「そのつもりだけど、先、なげえよ」

D組の他にもB組の連中がちょろちょろしている。目立つのは女子評議で今回ワトスン君を演じた轟の姿だった。いつもの出目金出っ歯の顔でもって、

「悪いんだけどそこにあるダンボール教壇に持ってってもらえる？ あれ、D組のものだから」

男子たちにてきぱき指示を出していた。貴史も正直驚いたのだが男子連中はみな嫌な顔ひとつせずに、

「ああ、トドさんあと持ってくもんねえか？」

などと楽しげに協力を申し出ている。あまりB組の状況は知らないのだがなんだかんだいってよくまとまっていたのだろう。男子評議が難波、生徒会長の藤沖を擁するだけではなく非公式の情報ながら、「中学入試結果が上位だった連中」の集まりでもある。D組とは少し異なる雰囲気の流れているようだ。

「羽飛くん、このダンボールなんだけど教卓の奥に隠しとく？」

轟に問われて貴史も箱を開いて確認した。そうだった。いろいろ取り沙汰されたクラス文集の到着が遅れて今日になってしまったという体たらく。今日参加できなかった奴にはあとで郵便送付しなくてはならない。

「いや、とりあえずうちのクラスの連中にのみ配るもんだから、すぐ片付ける」

「じゃあ置いとくね。あのそれで」

轟は声を潜めて貴史に尋ねた。

「立村くんは今日来るの」

「いや、来ない」

即答した。修学旅行でこっそり立村とのデート権限を勝ち取った轟にとって、やはり気になることではあったらしい。

「貴史、もうそろそろいい？ はじめようよ」

美里が轟との間に割って入った。もちろん準備が整えば即、開始だ。

「じゃあ、みなのもの、定位置、定位置！」

呼びかけた。もう三年D組連中に貴史の指示は浸透していてそれぞれが決められたもち場所に立った。美里は貴史の隣りに寄り添う格好で、B組生徒たちにも、

「じゃあ始めますので、B組のみんなももっと前に来て！」

手を何度も振りながら、D組連中と混ぜ合わせていた。それぞれのクラス担任もみな前に来て、微笑みながら全生徒を見守っている。

「そいじゃ、飲み物注いだ注いだ！ で、乾杯いくぜ！」

みな、きっちり声が揃った。

「かんぱーい！」

ひときわ高い声が響き渡った。誰だか一発でわかる。B組男子の中にいつのまにか混じっている古川こずえだった。

本来はクラス担任たちに一席ぶってもらうのが約束だが、冗談じゃない時間が無駄だし菱本先

生にしゃべらせたら一時間があつという間に経ってしまうに決まっている。そういうこともあって最初、B組在籍の一芸持ちにそれぞれ間を持たせてもらうことにした。難波に協力をしてもらいリコーダー、ハーモニカなどの荷物になりにくい楽器でそれなりの演奏を頼んだ。音楽の授業では今ひとつぴんとこない楽器だが、アンサンブルでまとめたりすると結構行ける。みな、拍手喝采沸き起こった。

「食いながら勧めてくぞ。次はヨーヨー遣い、いでよ！」

今度はD組のヨーヨーマニア野郎にご協力いただくことにした。手が器用な奴というのはどこもいるものでそいつには両手でそれぞれ操ってもらい、「よくわからないがすごくうまい」と思わせるところまで技を見せてもらった。だが貴史からするとどうもいまひとつピンと来ない。たぶんヨーヨーは好きなんだろうが、見ていて退屈だった。早めに切り上げさせたほうがよしと判断し、技が一段落するところで終了させた。

「さってと、次はB組、誰か一芸いないか！」

「ほいさ！」

次から次へと逸材を提供してくれるB組。難波ともう少し相談しておけばよかったとも思うのだが相棒の轟がすぐさまそれなりに、

「それじゃ、次！ 今度はブレイクダンス！」

「では次！ 難波くんプロデュースのあれ行くよ！」

なぜか日本少女宮の男子版振り付け踊りつきなんてものも出てきてしまい、今回のかくし芸勝負に関してはB組の圧勝に終わってしまった。

——が、しかしだ。

確かにD組には音楽の素養に乏しい奴ばかりかもしれない。しかし、我がクラスには隠し兵器があり。

——さてと、あいつどこにいる？

仕込み道具たる一名を探す。いたいた、ちゃんといた。目立たないところできっちり仕事をしてくれている。B組が音楽班とするならD組は……。

宴たけなわ、盛り上がり最高潮に達したところで貴史は指令を出した。

「んてとこで次、金沢、前に出ろ！」

「はーい！」

この辺の打ち合わせは美里と金沢としか行っていない。理解してくれている美里は金沢の側に駆け寄り、ぽんと背中をたたいて送り出した。

「ではでは、まずみなさん、突然ですがD組よりみなさまにプレゼントでございます！」

みながざわめく。クッキーにかぶりついている担任たちも同様に、スケッチブックを抱えて現れた金沢に視線を集中させた。

くると教壇の前でスケッチブックを開き、ぴろりと頭の上で吊り下げた金沢は満面の笑みを浮かべた。そのままぐるりと教室いっぱい見渡して、

「ご紹介いただきました、金沢です。どうもです」

まずは堂々と挨拶をした。一部より「知ってるよ」のやじが飛ぶ。

「本日は、ご卒業おめでとうございます」

「だからお前もだろ！」

またつつこまれるが金沢は動じない。小柄な身体ですくと立ち、

「実は只今、このスケッチブックに、今やってたこと全部、ラフでスケッチしちゃいました」

堂々と言い放った。みな、何を意味しているのかよくわからないように顔を見合わせている。貴史もこれは手伝う必要があるそうだ。金沢の隣りに立ちスケッチブックをひったくった。

「つまりなんだけどな、金沢に今回最初からスケッチブックと2Bの鉛筆支給して、お楽しみ会真っ只中の光景を全部メモってもらおうってことにしてたんだ」

「えー？ ちょい待ち羽飛！ 金沢ってあんたたちだけの秘密？ 超やらしいじゃん！」

内緒にした格好となるこずえがすっとなきょうな声を挙げてなじった。もちろん冗談めかしているのだから賑やかでしかない。険悪な雰囲気にもならず笑い声が沸く。

「そう怒るなよ。とにかくだ、さっきのヨーヨーショーとかいろんなことやってたのは全部このスケッチブックの中に収まってる、そういうわけだな、金沢？」

確認すると金沢は自信たっぷりに頷いた。菱本先生も近づいてきて興味深そうにスケッチブックを覗き込んだ。

「そういえばまだ文集、配ってなかったな。画伯の傑作集どうする、羽飛？」

「そうだなあ、じゃ先生、今配っちゃうか」

実はタイミングを測っていたところだった。すぐに声かけて配ってもよかったのだが、D組連中だけのものなのでB組生徒たちが少し手持ち無沙汰になりそうな気がしたからだ。しかし、すでに仕込み済みのことを金沢にやらせれば丸く収まりそうな気もする。

「じゃあ金沢、予定通り、行くぞ！」

親指を立てて金沢は貴史に合図をした後、改めて予定通りの提案を行った。

「で、残りの時間で俺、B組のここにいる人たちの似顔絵スケッチをサービスします。D組分は今ここに積んである文集に全部ぶち込んでるんですが、せっかくなんで今日は他クラスの希望者も、鉛筆描きでよければ似顔絵サービスします。希望者いますかあ？」

後ろから突如拍手が起こった。生徒会長の藤沖がまず先に、続いて難波が、さらに他の連中も男女問わずB組連中から歓声が沸き起こった。

「こうきたかD組！ 余興全部B組に振りやがってと思っていたが最後に持ってくってことか！」

「羽飛も金沢もナイス！」

「けどさ、時間ある？ あと二十分くらいかなさそうだよ」

不安げな声も金沢は自信満々に打ち消した。

「お楽しみ会が終わっても希望者がいる限り、どっか別の教室借りるか場所変えて描くよ。どうせ今日は授業もないし、とことん付き合うよ！」

再び、今度はD組連中のあっぱれたる声も混じり金沢をねぎらうコールが起こった。

——よし、これで金沢も安泰だ。

貴史は後ろでにこにこしながらこずえたちと語らっている美里に目を向けた。すぐに貴史の視線に気づいたのか、親指で「GOOD！」の合図を送ってきた。

前から考えてきたことではあった。

——金沢の奴、単なる天才画伯で終わっちまいそうだよなあ。

入学当初から金沢は「絵が上手な男子生徒」としか認識されず、同じくらいの背丈という理由で水口とつるんで遊ぶ、そんな目立たない生徒だった。貴史も金沢を嫌ってこそいなかったものの、それほど親しくしゃべる仲ではなかった。しかし、たまたま貴史の中で目覚めた美術への興味が少しずつ金沢へとつながっていき、今では美術の師匠として……もちろんネタだが……教えを乞うようにもなった。同時に、ただの天才少年画家扱いされるだけで他クラスの奴との交流なく終わってしまうのがもったいないような気もしていた。

——ここは俺が一肌脱いだっていいだろ。そんなくらいは。

きゃあきゃあ取り囲まれている金沢を見つめていると、後ろから菱本先生が笑顔で語りかけてきた。

「よくやったな、羽飛」

貴史は頷くだけだった。

しばらく金沢画伯の記念似顔絵タイムが続いている間に三年D組連中にはクラス文集が手渡された。作文などほとんどなく、ある意味金沢画伯作品集とも言えなくもない。みな自分の描かれたイラストや顔などを眺めながら、

「畜生俺、似てねえー！」

「どこがよ。何言ってるの。あんたリアルじゃん。それとも何？ あんたもっとな男前だと思ってたわけ？」

「ここまで俺鼻の穴でかくねえー！」

画伯の腕前に疑問符を付けるような恐ろしい発言をする奴もいないわけではなかったが、おおよそは「似ている」と納得して口々に、

「金沢くん、ありがとう、一生の記念になるね！」

「きっとこれ五十年後、高く売れるだろうなあ」

金沢への感謝をみな示した。その画伯は聞いているのかいないのか、一心不乱で2Bの鉛筆を握り締めスケッチを続けていた。

まだ若干時間もある。ずっとしきり続けていて貴史もほとんど何も食べていなかった。たぶん中学時代最後の奈良岡印ホームメイドクッキーとなるであろう。噛み締めるとさっくりというよりもケーキに近い歯ごたえの卵色クッキー。まだ皿に残っているテーブルはどこか。美里が食いまくっている皿にはまだたっぷり積んである。

「美里、全部食うなよ！ 俺にもよこせ」

「ちょっとちょっと、私だってまだ食べてないんだから！」

「嘘つけ、お前ずっとこっちにいただろが！」

「おしゃべりしてたから食べる暇なかったの。金沢くんがスケッチしている間にやっと食べれると思ってたのになんであんたが！」

食べ物のことについては男女関係なく争うこととなる。貴史と美里、ともに舌戦している間にも手を皿の上に差し出し、急いで口に押し込んでいる。あっという間にクッキーの山は崩れていく。やはりうまい。奈良岡にはやはり言いたい。医者目指すより菓子職人選んだ方が絶対幸せになれると思う。

めいっぱい口に含み、烏龍茶で喉に流し込んだ時だった。

「立村くん！」

奈良岡の声が奥から教室内に響き渡った。

静まり返った中、開いたままの後ろ扉に振り返った。

立村がコートを来たまま伏せ目がちに立ち尽くしていた。

——立村？

隣の美里も貴史の腕をひっぱりながらそっと後ろずさった。逃げているわけではなく、近づいたら即逃げられるのではと思ったのだろう。見方は正しい。

一方的に奈良岡がまくし立てているのが聞こえる。逆効果だろうに。わざわざクッキーと手のついてないジュースを紙コップに用意して近づいている。

「どうしてさっさと帰ったの？ 先生が心配してたよ。早く入ったほうが」

——だから逆効果だったの。

貴史も割り込むかどうするか迷っていた。

言葉が出ずに躊躇している立村の様子は何かもの言いたげだった。よっぽどのことがない限り意思表示をしようとししないのも立村の性格だとわかっている。つい先ほどの卒業式英語答辞のように追い詰められたら何をしでかすかわからないというのもわかりきっていること。さて、どう出るか。一歩前に出ようとするすると美里に腕をまた引っ張られた。その前にこずえがそそくさと立村に近づき思い切り額を叩いていた。ベストな展開だ。

「あんた、さっさと入って、食うもの食いなさいよ。どうせ朝ろくに食べてこなかったんでしょが！」

さすが立村の扱い方をよくわきまえている。さすがである。こちらもその間に時間稼ぎができる。立村はふっと素顔に戻った風に言い返している。

「余計なお世話だ」

「まあよかったよね、これで全員揃ったし。せっかくだしね」

「あれ、南雲は？」

あっさりこずえとの会話でふだんの乗りに戻っている。何かもの言いたげに奈良岡が立ちん坊なのを誰か引っ張りだせと言いたい。そう、立村からご指名いただいた南雲、なんとかしろ。その南雲はというと、クッキーとミニケーキに東堂と一緒にかぶりついている。奈良岡を制御するつもりは一切ないらしい。古川が丁寧に説明している。

「彰子ちゃんがね、愛の力で説得したのよ。愛よねやっぱし」

「羽飛はどこにいるかな」

「羽飛？ 呼ぼうか？」

呼ばれたら出ようと思ったが、さすがこずえにかなうものはない。即座に却下しやがった。

「そんな過保護なこと、誰がやるってのよ！ ほらさっさと行きな！」

背中と頭をどんと突き飛ばし、立村を教室の中に押し込んだ。

「古川すげえわ」

「こずえ、偉い。立村くんが頭上がらないわけよね」

美里が貴史に寄り添いつつ囁いた。あとはタイミング待ちだ。ご指名がかかった以上こちらからも話をしたいと思う。

「ちょっくら行くわな」

「うん」

美里と頷きあった時、また一步先に出た奴がいた。

「立村、戻って来てくれたか！」

カンガルーの巨大ぬいぐるみを抱えている我が担任・菱本先生だった。

——おいおい、また目うるうるさせてるぞ、先生どうすんだ！

立村の表情が即座にきつとんがったのが遠目でもわかる。

「せっかくこずえが機嫌とったのに、もう！」

美里の言葉ももっともだった。

「立村くんが帰って来て嬉しいのわかるけど今じゃないよ、言うのは！」

卒業式からまだ二時間も経っていない。D組の女子たちからは総鬘蹙を買っているし、B組の連中だってすべてが立村に好感を持っているとは考えづらい。特に因縁のある藤沖はどう思うのか。見れば知らん顔でポテトチップスを口に押し込んでいる。立村登場で視線集中させているのはどうやらB組の中でも評議ふたりくらいのようにだった。あとはさすがにD組連中。男子の顔を見ればみな、来い来いと誘いたいし女子はおととい帰れと言いきり冷ややかな眼差しだった。

ふたりで急いで前扉から抜け出した。誰かに聞かれてはまずい。あいつが逃げ出したらすぐ追いかけるべきだ。後扉で待ち伏せしようと思った。

「貴史、どうする？ 立村くんこのままだと帰っちゃうよ」

「そこを追いかけるかだな。あいつだって教室で語り合いたくはねえだろ」

「そうだね、けど、外に出たらまた逃げちゃうよ」

もっともだ。ずっと立村は貴史から逃げ続けている。貴史もいきなりここから了解なく消えるわけにはいかない。美里も一緒だ。これはやはり、きっちり先生やD組の連中に話を付けていくしかない。時間の猶予もない。

——行くしかねえな。

即断した。美里と組んだことでしくじったことなんてほんとにない。

「美里、行くぞ。お前も来い」

もう一度美里と目で合図した。了解、物言わないでもわかる。もう一度前扉から入り、呼びかけた。立村が背を向けようとしている時だった。

「先生、悪いけどさ」

カンガルーを抱いたまま感極まっている菱本先生の前に、ふたりで立ちはだかった。立村を背中にかばうような格好になる。

「俺と美里、これから立村と三人で、打ち上げやりに行くんだ。ということで、お先に抜けさせてもらうわな。あとでそのあたり、よろしく」

目の前で菱本先生と奈良岡がぽかんとした顔をしている。奈良岡がつぶやく。

「あれ、でもそれは」

「姐さん、本当に申し訳ないのだがさ、残りの司会は予定通り、南雲とふたりで組んでくれねえかな。よろしくたのむわ」

美里が両手を合わせてお願いポーズを取っている。戸惑っていた奈良岡も後ろで食うのをやめ近づいてきた南雲の微笑みに納得したのか笑顔で頷いた。南雲もそれなりに仕事をする気はあるということだろう。あとは用がない。菱本先生が首を振っているがこちらはすでに東堂が回り込んでいて、

「まあ、先生、野郎とふたり食いましょうや」

おじさんくさい誘いをかけている。今のうちに抜け出すしかない。貴史は美里と一緒に振り向いた。まだ立村は逃げていなかった。目を伏せるようにして、唇をかんでいる。そっと顔をあげ、怯えたようにこちらを見ている。

呼びかけた。

「立村、行くぞ」

美里もじっと見つめている。完全に凍りついている奴を溶かすには肩でも組むしかなさそうだった。そのとおりにし、そのまま後ろ扉から押し出した。美里が後ろに付き添ってくれている。ざわめきはB組経由のもののみ。たぶんD組連中はみな、貴史たちを見送ってくれているだろう。菱本先生もあえて何も言わなかった。それだけがありがたかった。「りっちゃん、あとで電話するよ」

司会者引き継ぎ済みの南雲が脳天気な声で呼びかけているのが聞こえる。いったん立村が立ち止まり、振り返らずに頷いた。

廊下にはもう人気もほとんどなく、後片付けの下級生たちがちょろちょろしている程度。三人が歩いていく姿を追う奴もいなかった。

何度か立村が顔を伏せたまま、

「羽飛、あのさ」

言葉を絞り出そうとする。何かを伝えたいのはわかっている。しかしここでしゃべらせたらすぐに逃げられるのも経験上理解している。あえて何も言わせたくなかった。どこか座ってからにしようと思っていた。

「もういい、わかってる」

言い訳をしたいのかもしれない。英語答辞についてのよしなについても奴なりに伝えたいのかもしれない。もしかしたら美里に決別を伝えたいのかもしれない。いろいろな可能性が考えられるけれども、廊下であっさり済ませる内容ではないし、そんな軽い間柄でもないはずだ。立村の発する言葉を制しながら貴史はいったん生徒玄関で靴を履き替え上靴をしまおうとし、改めて鞆に入れ直した。もう靴箱に入れる必要はない。立村は迷うことなくスーパーのビニール袋に自分の靴を押し込んでいた。

——さて、どうするか。

立村と三人で水入らず語り合いたい。となると学生食堂がベストだろう。雪のはさまった砂利道を歩きつつ、貴史は美里に相談もちかけた。

「学生食堂に行くか」

立村の真後ろにくっついている美里もあっさり答えた。

「そうだね、それがいいね」

そのまま、青空の射すもと学食へ向かう坂道を昇っていった。途中、季節の早い花が咲いている道にたどり着いた。確かあれは梅だとか言ってなかっただろうか。ずいぶん満開に見えるのだが、他の桜の枝は一切花を咲かせていない。美里が目ざとく見つけ、駆け寄った。

「うわあ、桜、桜咲いてる。梅じゃないよ。早いよね」

小声でつぶやいている。立村がはっとした表情でその枝を見上げている。

「貴史、ここ、少し花、咲いてるね」

「あんれま、雪降ってるのに、ごくろうなこった」

「あれ、知らないの？ この色の濃い桜ね、毎年咲くのが早いんだよ」

「俺たちが入学した時もそうだったか？」

「そんなの見てないよ、知らないよ」

判明したのは、咲いている花が梅ではなく早咲きの桜だということだ。何はともあれめでたい。とりあえず今は染井吉野でなくてもいい。美里が少しでも機嫌よくなればそれでいい。早咲きのやったら色の濃い桜に感謝しとく。

足元の雑草にはかすかに雪が積もっている。踏んでみた。かしゃりと音がした。まだまだ霜も残っているようだった。春にはまだまだ遠いということだろう。

まあいい、風流なことなんかどうだっていい。美里がはしゃいでいる。喜んでいる。それでいい。

しばらく濃い目の桜を見上げて歓声を挙げていた美里が、ふと立村に笑いかけた。何かを思いついたようだった。

「立村くん、さっきのカメラ、持ってる？ ちょっと貸して」

「カメラ……？」

戸惑っているのか、問い返す立村に美里が畳み掛ける。

「ほら、さっき教室で記念撮影したじゃないの。その時に私、渡したよね」

「ああ、あれか」

かばんから取り出し、すぐに手渡した。返すのを忘れていたのか、それとも美里の仕掛けだったのか、その辺は問わない。

「ありがと。じゃあさ、貴史、ちょっとあんたときな」

次に美里は貴史に対しえらく失礼な言い方で、手で押しやった。文句のひとつくらい言っただけいいだろう。

「すげえ言い方だなあ。まったくお前もぜんっぜん、女っぽくなんねえなあ。優ちゃんの方がずっと」

「それ以上言ったら、即座に雪の中に蹴り飛ばすからね。立村くん、そこの木のところに立って

」

「なんで？」

「撮ったげるんだから」

貴史が幹から離れたところで、美里は無理やり立村を桜の真正面に立たせた。少しでもずれたら許さない。動くな、きちんと立てとなかなかに鬼指導だった。

「ほら、さっき立村くん、写真の中、入らなかったでしょ」

「別にそれはそれで」

「うん、クラス写真は無理に入らなくていいよ。立村くん入りたくないこと、わかってるからね。ただ、なんとなく」

ちらと貴史を見た。美里の意図するものは言わずともわかる。誰が止めるか。美里は微笑みを浮かべながらカメラを構え、そのまま真正面から伝えた。

「立村くんは、こういうとこで、ひとりで、撮ったほうがいいなって、私が思ったの。私も、そうしてほしいんだ」

——そういうことな。

——これが立村への、美里なりの餞別なんだ。

あの卒業式英語答辞ではっきりと、立村の気持ちは美里にはないという証明がなされてしまった。三年間曲りなりにも美里は立村の恋人であったわけだし、公開失恋と思われてもしかたない。立村も、美里も、それなりに覚悟するものはあっただろう。

——けど美里はくだらねえ失恋扱いされたくねえわな。

他人がどう思うかは別として、自分がずっと思い続けてきた気持ちだけは嘘じゃない、それだけは否定したくない。中学時代は立村への想いと共にあった、それだけはしっかり見据えてここから先に進みたいのだ、きっと。

「今私が撮ったら、今度は立村くんが撮って。で、貴史は私が撮ってやるから」

余計なお世話だ。別にそんなお義理でとってもらわなくてもいい。思い切り嘴挟んでやった。

「なんで俺だけ『撮ってやる』なんだ？　すげえ差別」

「うるさいわね。あんたはどっちにしても写真に写りたがり野郎だから」

「人のこと言えるかよ。美里こそ規律委員会の『青大附中ファッションブック』に載れねかったこといまだに根に持ってるだろ！　確かあん時は霧島に取られたんだか」

「違う！　あの時はゆいちゃんじゃないよ。ほら、生徒会長のあの子よ！」

「まあなあ、どっちにせよお前のモデルデビューの道ははるかなるかなたってことだなあ。ご愁傷さん」

「貴史！　あんた言いたいこと言わせておけば何言うんだか……！　わかった。あんたの死ぬほどださい背番号つき野球ユニホームファッションの写真を今度あんたのファンに配ってやるからね。あーあ、これから先の明るい男女交際希望持てませんわね、どうぞご愁傷様！」

辛気臭い空気がすっかり壊れた。とりあえず過去のあまりにもださすぎる服装の写真は家に戻

ったらアルバムから抜いておいたほうがよさそうだ。いや、美里と一緒に映っているのなら向この家からも奪っておかねばならない。女っけのない寂しい高校生活はもちろん避けたいがまあいいかとも思う。

——いいんだ、俺には鈴蘭優ちゃんがいる。

あっけに取られて身動きとれず立ちすくんでいる立村にようやく美里は我に返ったのか、「じゃあ、立村くん、そのままでね」

指示を出した。貴史に美里の側へ来るよう手招きし、じっと見据えてシャッターを切った。明るい空に溶け込むような真っ白い光が飛んだ。ここは外だというのにフラッシュ付けっぱなしにして撮ったらしい。アホである。

——おい、もう一度撮ったほういいんじゃないねえの。

美里からカメラをひったくろうとした時、立村の表情がどこか頼りない風に貴史を見据えていた。カメラのレンズではない。お天気さんさんにも関わらずとんだフラッシュでもない。貴史を呼んでいた。

「羽飛」

ふたりで記念写真撮ろうという気にもなったのか。まあいい。よい心がけだ。

桜の木の下に近づき、声をかけようとした。顔を覗き込んだ時自分の目に何が映ったのか分からず、思わず目をしばたかせた。

「立村？」

もう一度覗き込む。信じられないものが目の前に展開されていた。

じっと見つめる立村の瞳から、光るものがとめどもなく流れ落ちていた。それが涙だということ把握できぬうちに、立村はそのまま貴史の左肩に手を置いた。足元で何かが落ちる音がした。横目で見るとそれがかばんだと気づいた。そのまま立村は貴史の反対側の方に顔を押し付けるようにし、何かをつぶやいていた。最初は聞き取れなかった。

「立村、お前……」

「羽飛、ありがとう」

何度も繰り返され、やっと意味を掴んだ。

「ありがとう、ありがとう、ありがとう」

肩がぬれているのがなんとなくわかる。貴史はじっと立村のしたいようにさせていた。いつのまにか美里が貴史の後ろにいてじっと立村の髪の毛を見つめているのも、その目がやはり同じようにぬれているのも気づいていないようだった。ちらと貴史は振り向き、美里にしばらく黙るよう目で合図を送った。今は、余計なこと言う必要なんてなかった。

「まったく、何だよお前、もっと早く言えっての、なあ」

ささやきかけ、改めて花の色を眺めた。花の枝の向こうには雲ひとつない青空が広がっていた。ひとかけら、花びらが落ちてきた。まだ裾根に霜柱は張っているけれど、もう少しで春が来る

しばらくそのままだった。美里がそっと立村の隣りに回った。すなわち貴史のすぐ脇だ。潤みがちの目でやさしく見つめたまま、

「立村くん、行こう」

呼びかけた。立村が顔を上げ、美里が側にいたことに驚いたのか慌てて目をこすっている。気づかなかったのか、アホかと突っ込みたいがここは我慢する。そのまま美里がやさしく語りかけた。

「私たち、もっかい、友だちとしていっしょにられるよね？ 立村くん？」

しゃくり上げながら、やはり涙目でいっぱいになりながら立村も答えた。貴史の肩に手をかけたまま、震えていた。

「清坂氏が、それで、よければ」

「よくないわけ、ないじゃない！ もう、ばかなこと言わないでよ！ 付き合うとか付き合わないとか、そんなのどうでもいいよ！」

頬にえくぼを作り何度も首を振り、美里はまくし立てた。

「そんなことより、こうやって三人でくだらないことやって遊んでいるだけで、私いいもの。貴史、あんたと同じだよ、そうだよね」

ここで頷くのは男としてのセンスに反する。お約束の一言を述べることにする。

「俺は優ちゃんと……」

言い終わる前に思い切り美里が貴史の後頭部をぶん殴った。泣いているから手加減するかと甘くみていたのが敗因だった。まじで痛い。

「一生やってなさい！ もう、こういうお馬鹿は置いといて、さあ、早く行こうよ！」

「行く？」

「生協の食堂に行こうよ。ほら、三年前と同じく！ そこで、仕切りなおそうよ！」

——生協の食堂か！

あの手紙を読んだのかと野暮なことを聞く気もない、美里ともう一度より戻すつもりなのかと今の段階で問うつもりもない。菱本先生を許せるかとか、杉本梨南とべったりするつもりあるのかとか、もうどうでもいいことだった。

それよりも立村と一対一で語りたいたことが、この三年間でどっさり溜まっている。遠慮して口に出せなかった話題が、それこそ山のように堆積している。今こそとことんばかげたことを語ろう。くだらなすぎる話題を語ろう。お互い気取った顔で出会ったあの中学入学式のあの段階まで巻き戻したい。

三年前の入学式は三人三様に過去をすべて隠し合って友達の縁を紡いだけれど、もうそんなベールなんぞ必要ない。三年間で見べきものは見た、受け入れられるもの受け入れられないものすべて感じつくした。だからこそ、

——俺に出来るのは、今の俺をとことん語ることだけだ。あいつの言葉と美里の言葉と、すべて丸ごと聞きまくるだけだ。今の俺なら、絶対にできる！

目の前に見える生協の建物をじっと見すえ。貴史は美里を促した。

「ああ、なるほどな。てなわけで、卒業式二次会開始だ！ さあ立村、今日はとことん語ろうぜ。付き合えよ」

貴史はもう一度立村の肩に腕を回した。こんな暴力女なんてさっさと置いてまずは生協に逃げ出そう。こんなことを入学式の時もしゃべっていたような気がした。

隣りで立村がはにかむように俯いた。

まだつぼみのかけらも見られない染井吉野やまだ花盛りの梅の香りに包まれながら三人ゆっくりと道を昇ってゆくと高校校舎がかすかに覗いていた。響く春風がどことなく何かを巻き戻しているように聞こえた。同時に立村も立ち止まり、美里をじっと見つめた。口を切った。どことなく緊張しているようだった。

「清坂氏、言い忘れてた」

「なあに？」

「三年間、ありがとう」

タイミングがどこかずれているがまあいいか。見守る貴史をよそに美里はつらつと言い切った。

「違うでしょ、これからもよろしく、でしょ」

にこっと笑い、もう一度はっきりと、

「立村くんがこれから誰を好きになっても、つきあったとしても私と貴史は、絶対に嫌いになんてならないからね。立村くん、大好きだよ」

めいっぱいの笑顔を向けて語りかけた。空の青さに溶けるようなまっすぐな声だった。そのままさっと走り抜けていく美里に向かい、貴史は労いの口笛を吹いてやった。

——もう大丈夫だな、美里。

「さ、いくぞいくぞ、辛気くさいことは抜き抜き、立村、ほらほら」

ふたたび硬直したまま動けずにいる立村の背中を思い切り押してやり、貴史はそのまま美里の後姿を追いかけていった。